

青空よりアイドルへ

桐型梓

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

空の世界に生まれ、しかし、青空を一度として見ることなく生を終えた少年は、二度目の生を得て渴望した「自由」へ手を伸ばした。

しかし、はて。あれほど求めていたはずなんだけど。「自由」って、いったいなんなんだろう？

——ところで、何でアイドルすることになってんの？

※ グランブルーファンタジー世界のモブ錬金術師がシンデレラガールズ世界に転生。ちよつぴりのチートはするかもしれませんが、基本的にはコメディとほのぼのが主です。

また、時系列はアニメシンデレラガールズの本編後（捏造）となります。ご注意ください。

8／6 タイトル微修正

2019／3／26 本編完結しました。

目次

0 : 空より現在(いま)へ	1
1 : 外堀を埋められる	13
2 : アウエーに向かう	25
3 : 星々を見た	42
4 : ちよつと無理をする	57
5 : 先輩に会う	70
6 : 敬語をやめる	86
7 : ユニットを組む	99
8 : ブリユンヒルデ討滅戦	115
9 : 勧誘! グラツシー帝国	137
10 : これが俺の遊び心だ	156
11 : Ph a s e S h i f t	179
12 : まだまだこれから	202
13 : 言うなれば運命共同体	214
14 : 今日もどこかで眼鏡が割れる	233
15 : シェフ白河	264
16 : 自縛と呪縛	283
17 : おにおこ	302
18 : 夢いっぱい	320
19 : 失踪のワケ	337
幕間 : P の空回り	352
20 : お弁当の日	373
21 : ふたつのプレゼント	395
22 : 魔法少女アルケミ☆ひょうか?	408

23	：談合でドン	428
24	：いっしょにのろうよ	452
25	：にせもの美術展	468
26	：はろーわーるど	489
27	：わかいちから	503
28	：遠くて高くて	520
EX1	：ヘレティカル・アルケミスト	540
EX2	：キミとボクの自由	565
EX3	：ピニャコラタZ	585
EX4	：Never Ending Sky	609
29	：ヤマノボレ	634
30	：臨海合宿スペシャル	653
31	：二正面作戦	672
32	：昼空の花火	690
33	：合宿の夏、ツツコミの夏	705
34	：サマーギフト	721
35	：夜食部隊	737
36	：どうありたいか	756
37	：一番星の下で	775
番外	：ろく☆ちちゃんねる抜粋(1)	796
番外	：ろく☆ちちゃんねる抜粋(2)	823
番外	：ろく☆ちちゃんねる抜粋(3)	849
38	：沼は怖い	876
39	：ラビット&アイス	893
40	：愛なら仕方ない	908

番外：ろく☆ちやんねる抜粋（4・フルボッコちゃん編）

41：アイアンシエフ

42：王冠の日

43：お客様の中にファッションに詳しい方は

44：空の日

45：クチナシの花

番外：ろく☆ちやんねる抜粋（5）

46：自信のほど

47：紅葉の下で

48：覆水盆に返さず

番外：ろく☆ちやんねる抜粋（6）

番外：ろく☆ちやんねる抜粋（7）

49：トリック・オア……

50：ぴこぴこレトロ

オムニバス：その①

オムニバス：その②

51：お祭りは準備が一番楽しい

52：作り上げること

53：小さな一歩

番外：ろく☆ちやんねる抜粋（8）

54：プレゼント for U

55：空気（からけ）

オムニバス：その③

56：年々歳々花相似

番外：ろく☆ちやんねる抜粋（9）

後：禁断の果实（春）	1625
後：ボク自身が——になることだ	1616
後：デートis何	1606
1586	
終：From blue sky, Dear to idol.	1570
61：ボクのミチシルベ	1543
番外：ろく☆ちちゃんねる抜粋（10）	1522
60：一年目と二年目の境界	1503
59：ノルウエー奇行録	1485
58：黒くて甘くてほろ苦い	1470
57：雪の中で春を待つ	

0：空より現在（いま）へ

自由が欲しい、という切なる叫びを聞いたことがある。

それが誰の口から発せられた言葉だったのかは知らない。どこで聞いたのかも、分からない。けれどなんとなく、ずっとそれが心の中に残っていた。

今になって、強く思い出す。ああ、あの人はこんな気持ちだったのかな——と。

——自由が欲しい。

今になってやっとその時の気持ちがあった。

空の青さも、雲の白さも、風の優しさも何も知らず、ただ無意味に死にたくない。

望んだことがあったのか無かったのかも既に曖昧になりつつあるけれど、今はただ、死にたくない。

錬金術だか、ヘルメス派だか、真理だか、開祖の領域が何だか知らないけど、そんなワケのわからないもののために、死にたくなんてない。

全ての行動は、母の掲げる「真理の探求」とやらのために徹底的に管理されてきた。そして今は、母の言うままに命さえも捧げさせられている。

胸に刺さった短刀が、全てを奪っていく。血も、肉も、命も。

「……嫌だ」

嫌だ。嫌だ——そんなのは、嫌だ。

もう、体中の感覚が薄れてて、着実に死の気配は迫っているけれど、それでもまだ生きていたい。

まだ行きたい場所があるんだ。まだ見たいものがあるんだ。知りたいことも、やりたいことも……。

だから、僕も継^{すが}るように、振り絞るようにして叫んだ。

——自由が欲しい、と。

@ —— @

——とまあ、そんな過去ぜんせもあつたねと。意外にも、祈つてみれば届くものらしい。

次に目を開いた時、ボクの意識はどこも知れぬ世界の、誰とも知れぬ赤ん坊の中に宿っていた。

はて。これはいわゆる転生というものであろうか。あるいは、もしかするとボク自身は自分に前世の記憶が宿っていると思ひ込んでいるだけの異常者と言う可能性もある。まあ、何でもいいのだけれど。

今、最も重要なのは、ボクが「二度目の生」を手にしたということだ。

今度こそ——自由になれる。

水銀を飲まされたりあらぬ場所に針を刺されたり、真理の探究のためと言つて五感を潰されたり死ぬ必要も無いんだ！ 万歳！！ サンキュー神様！！

前の親が人並み外れたロクデナシの破綻者だつたつてこともあるけど、今度は流石に普通に普通の人間の自由を謳歌できるはずだ。ああ、普通。普通に暮らして普通に過ごし、普通に「自由」であることができる！ なんとという幸福！

前の世界とはかなり違うみたいだけど、見たところ社会基盤も技術もすっかりしてるみたいだし、もう実験台とか生贄になる必要は無い

んですよね！ やったー!!

ボクの自由はここより始まるのだ！ ふはははははアーツ!!

そうして意識をはつきりさせた数日後、ボクの身体はどういうわけかロッカーに詰め込まれていた。

一転してお先真っ暗じゃないですかヤダー！ 物理的にも真っ暗じゃないですかヤダーツ!!

起きているうちに聞こえてきた話の限り、どうも今生のボクの母親は、まだ大学生の上一人暮らしだから育てきれないとか何とか。外国人の父親が逃げたというか勝手に帰ったのが悪いとか何とか。頭どうにかしてるのでは？

その日のうちにロッカーの中の確認に来た、係の人に見つけてもなかったからいいものの。

ともあれ、そんな境遇の子供がどこに行くかとなれば、児童養護施設である。

施設自体の質は悪くない。いや、むしろ良い。のだろうと思う。

ニュースでは、時々児童養護施設の職員が子供を虐待したとか何とかいう話も聞こえてくるけど、幸いこの施設はそんなことは無く、どの職員さんも心優しい方たちばかりだ。

それに、考えようによつては前よりよっぽど良いじゃないか。何せ生き死にの心配をすることも、何かと言つて行動を強制されることも無い。

親もいないんだから、それこそ何をするのも自由なわけだ。

そう、これこそ自由……！ 何者にも束縛されない環境！ (法の範囲内なら)何をしても許される！ これだよ！ ボクは今こそ自由になる！

……と、息まいてはみたものの、問題が全くないわけじゃないのが現実である。

例えば、ボクの身体は以前男のはずだったんだけど、今生では女の子だとか。

名前は「白河氷菓」^{しらかわひょうか}。外国人らしい父親譲りのアイスブルーの髪と瞳を見た時にティンと来て名付けたのだとか。気持ちは分かるけど落ち着いて欲しい。アイスクリームじゃねーか。名前の響き自体は綺麗なもんだけど、だからってこれはどうなのだろうと思わないでもない。

まあ、その辺は今となっては大した問題でもないんだから置いといて。良くないけど置いといて。

あとは——施設の経営がよろしくないとか。

その辺、慈善事業な関係もあってよくあることらしい。こういうことが頻繁にあるのもどうなのさとは思うけど、余計なことは考えずにおくのが多分健全なんだろうね。

ともかくそれはそれとして、この施設が潰れたら他の施設に行かないやいけなくなる。そうなったらここほど良い職員さんに当たるかどうかって問題も出てくる。そんなことで一喜一憂して、っていうのはよろしくない。

まあ、でも、もしかしたらボクの杞憂で、そんなことは無いのかもしれない。

そう思って、三歳の時に一つ職員さんに聞いてみたことがある。

「習い事とか、できないんですか？」

「ごめんね。ちよつとね。難しいの」

だいたいそんな感じの答えが返ってくるだろうなあとは思ってたけど、直接聞くと思つたよりも衝撃と精神ダメージが大きかった。

なんでも、近頃の児童養護施設というのは、基本が資金難なのだろう。面倒を見るべき子供の数が減ったなら、コスト削減のために取り潰しということもありうるらしい。

うん、でも、これはよくない。これは良くないぞ。

お金があった方がボクの心の自由が生まれるってところもそうだけど、やつぱり何より心優しい職員さんにこんな哀しそうな表情をさせてしまったのがよろしくない。

——でも、たかだか三歳の幼女に何ができるだろう？

——考えるだけじゃ何もできないけど、社会的な立場も無い以上他に何ができるってワケでもない。お金を稼ぐにしてもどうやって？

心の中の冷静な部分が語り掛けてきたのを感じた。実際、何ができるってわけでもない。少なくとも今は。

でも、一縷いちるの望みに賭けることはできる。

それはすなわち、かつてのボクを死に追いやった学問——「錬金術」だ。

錬金術は本来、非金属を金に変えることを目指した学問だ。そこから永遠の命だとかホムンクルスだとかに派生していったわけだけど……ともかく、「金」があれば「金かね」になる。今生だと錬金術は「化学」へと変化し、とうの昔に廃れてしまった学問みただけ……問題ない。ボクが前の世界で持ってた知識が使えるのなら。

事実上、ボクはそのために生まれた存在ものだったと言っても過言じゃない。

それに、廃れたとはいえその考え方の中には化学と相通ずるものがある。今後、何を学ぶにしても無駄にはならないはずだ！

ボクはこの施設を守ってみせる！

@ —— @

娯楽には勝てなかったよ……。

いや違う。勝ったんだよ。勝った。ちゃんと勝ったんだよ。

ちよつぱり紆余曲折もあつたし、こう、ちよつと金きんの出所とか聞か

れたり、未成年がこういう取引するのに身分証が必要になったりとか。あと、もしかしたら金きんそのものの相場を崩しちゃう危険性もあったわけだけど、そこも含めてアドリブをきかせてなんとか乗り切った。手を変え品を変え……詐欺に近いようなこともしてないかなボク、とか思ってたけどそこはもう気にしちゃいけない。全部本物なんだから。ちよつと元が違うだけ。

結論から言うと、ボクはかつての世界の「錬金術」をこちらの世界で行使することができるようになった。

正直言つて、何で今までボクはこんな真理ことも分かってなかったんだろう、つてくらいだ。いや、むしろボクの場合、一回「それ」が原因で死んだ——真理を探究するための「材料」の一つだったから、つて部分があると思うのだけど。あとは環境か。前と比べて本当にのびのびとやりたいことができたもんだからつていうのは、多分にある。

ともかくこのおかげで危機は去った。ありがとう錬金術！ ありがとう開祖！ 親にだけは感謝してやらないけどな!!

でもさ、こう。人間つてのは、こう。毎日が安定し始めるとそこに甘んじちゃうものらしい。

これでも前世では、(そうなるべくして育てられたから)真面目いっぺんどう一辺倒だったんだけど、今となつてはお布団に甘えてだらだらとゲームしながら漫画読んでアイス食べてるだけの毎日である。

一応義務だし学校には行くけど、それはそれとして止める人がいないと楽しいことを優先したくなるもの。でも思うに日本の娯楽とそこにかける熱意が凄まじいのが悪いと思うの。

我ながら不健全だなあとと思うんだけど、やめられない止まらない。でもいいんだ、自由だから。自由つてこんな感じだろ？ え？ 違う？ ごめんなさい。

まあ、それはそれとして重要なのは今の生活だ。

施設は「匿名の募金」によって何とか持ち直し、安定した生活を送ることができるようになっている。ボクたちも念願だったゲーム機を買ってもらったし(娯楽室に置いて皆で共用だけど)、

日々のお小遣いも増えた。一人部屋でゆつくりすることもできるし、養護施設という観点からするとかなり破格なんじゃないかなって思う。

そんな風に日々が安定してきてるからこそ、ボクも色々考えることが出来る時間が増えたっていうのは間違いない。

そのおかげで、初めて分かったことがある。

——自由って、何なんだろう。

根本的な問題だった。

いや、でもこれ、考えてみたら当たり前だ。ボクが——結局前世で自由というものの一切を知らずに死んだ人間が、「自由」とは何かという事を理解しているはずがない。

自由って何だ。

言葉そのものの意味は、分かる。「何にも縛られず、自分のあるがままに振る舞えること」だ。

でも、ボクの「あるがまま」って、何なんだろう？ それが分からない。悩みすぎて夜しか眠れなくらいだ。

もう、こっちの世界で生まれ変わってから、もうちよつとで14年。そろそろ前世のそれよりも長い人生になってきているけど、ボクは未だに前世から続く「僕」と、現在に至って形成された「ボク」という人間というものが、分からずにいた。

「……………」

ブーツとして、窓から見える風景を眺める。

朝日の差し込むこの部屋は、他の部屋と比べると随分と立地条件が良い。嫌いってわけじゃないんだけど、正直に言って目が痛いから、朝日が差し込むのは好きじゃない。

多分、色素が薄いせいだろう。

「氷菓ちゃん、おはよう！」

不意に、部屋の扉を開いてこの施設の職員のお姉さんが顔を出す。低血圧気味なボクにとつて、その澆刺とした声はちよつと辛い。ボク何に対してもきついとか辛いとか言つてんな。

「おはよーござーまー……」

「もうご飯出来てるわよ。そろそろ降りて来たら？ 学校に遅れちゃうよっ。」

「休みまー……」

「もう、ダメよそんなんじゃ」

起こした体をもう一度寝かせようとすると、お姉さんがボクの背中を持って無理やり起こしにかかった。

どうも、生まれ変わって以来他人に対して甘え癖のようなものが付いてるような気がする。前の人生じゃ人に甘えるつてことすらできなかったから、しようがないんだろうけど。

あと、体に引つ張られてるような部分もありそうだ。

人間の魂というものは不変のものではなく、肉体の状態によってはその形を変えることがある。心が病めば体も病むという話もあるが、その逆と言えるだろうか。

「ん……いい……」

気怠い声を上げつつ、薄ぼんやりした視界を補正するために枕元の眼鏡を手にする。

はつきりと見えたお姉さんの表情は、やっぱりと言うべきか微笑みほほえながらも困り顔のようだった。

「あと二年……」

「卒業しちゃうでしょ」

中学一年、三学期の期末。当然ながら、お姉さんは拒否するのであった。

「里親見つかったら学校行きまーす」

「それは難しいかなあ」

なんでや。美少女やぞ。

小学生並みの身長だけど。

中身はこんなだけど。

いや理解できるんだけどね。普通、こういう養護施設に里親になりに来るような人って、子供ができない夫婦とかが殆どだし。

育っちゃったボクなんかより、赤ん坊の方選ぶに決まってるよね。

「しよーがないなあ……」

なんだかんだ、こんな変なことでもいちいち職員の人に大きな迷惑をかけるわけにもいかないし、元々断る気も無かった。

近くに脱ぎ散らかしていた上着を手に、お姉さんに言われるままに階下の食堂へと向かった。

ボクの通う中学校は、はつきり言ってどこにでもあるようなごく普通の公立中学校だ。

というか施設の負担になるから公立校以外行けないんだけど。

だから制服も、昔施設にいた人たちのお古だ。丈も袖も余ってたから、今のボクに合うよう錬成しなおしているけど。

教室に足を踏み入れると、生徒たちは皆先日「シンデレラの舞踏会」……だっけ。その話ばかりしていた。

もうあれからだいぶ経つのに、未だに話題になるほどの訴求力があるのだろうけど、正直ボクにはよく分からない。

確か、346プロダクションという事務所のシン……真女神転生

……じゃない。シンデレラプロジェクトだ。そのグループと、所属アイドルたちが素晴らしいステージを見せてくれたのだとか。

そういえば最近は今々施設の方にシスターさんが来るけど、あの人も346プロダクションがどうか言っていたような気がする。

今度うちに来た時に聞いてみよう。

「おはよう、白河さん」

「おはよう」

あまりやる気の無い返事が口から漏れた。

普段はだいたいいつでもこんなものである。浅いわけでもなく深いわけでもない、ゆるーい感じのぬるま湯のような付き合い。特別に仲の良い相手も特別に仲の悪い相手もない感じの、ほんわりとした人付き合い。

非日常的なことは……いやボク自身が非日常的というか非現実的な存在だけど、それはそれとして、大きな上下の無い実に平穏な日々だ。

これはこれで素晴らしいものだと思う。前世じゃあそもそも人付き合いどころじゃなかったし。

今日は期末テストで昼までだ。来週の頭が登校日で、それ以降は春休み。

正直、中学校の勉強というのはボクにとっては易しいものと言える。錬金術の深奥しんおうに達したことで、ある程度の問題ならば脳が勝手に答えを導き出してしまふのだ。

そして今、目の前のこの問題も例外ではない。

「……………この時の作者の気持ちを答えよ」

国語のテストじゃよくある問題だ。

使い古されているとすら言ってもいい。

「……………^{しめきり}×切延びろ、つと」

完璧だ。

作家というものは、×切を最大の敵としている。

名文は得てして苦悩の中から生まれ出てくるもの。しかし、それが生じてくるまでには相応の時間が必要となる。作家は蛇蝎^{だかつ}の如く×切というものを嫌うはずだ。

他の回答も概ね問題ないだろう。問題無い。はずだ。

何故か前回百点じゃなかったけど。

何でさ。

と、まあそんなこんなで放課後である。

付き合いの深い友達もいないしお金のかかることもできないし、今日も帰ってゲームでもしようかな。

そう考えてスキップ気味に校門を出た頃、不意に視線を感じた。

「……………？」

……あれ。もしかしてスカートでも捲^まり上がったのかな。

いや、そんなことは無い。今日も我が絶対領域（誤用）は健在である。

はて、じゃあ何だろう。そんなことを思いながら視線を感じた方を見ると、そこにはスーツを着用した一人の男が佇んでいた。

好青年風の優男、とでも表現するべきだろうか。何だか、目を皿のようにしてこちらを見つめている。

こわ。近寄らんとこ。

「あの」

ヒエツ……あつちから近づいてきやがった！

ちよつと待ってちよつと待って！ 何この人!? すげえ勢いだぞ

!?

「I can't speak Japanese」

咄嗟に嘘をついた。

このクソ親譲りの外国人風の外見に発音だけはネイティブ風の英語。これなら普通、敬遠して遠ざかって……。

「Sorry, I can speak English. Do you have a minute?」
「フアッ!」

え……英語で返してきた……だと……。

思わずクソ汚い鳴き声が漏れちゃったけど、この人なんて言っちゃ。どう、どう……??

「へるぷみー」

「えッ!」

分かんないよ英会話。何なんだよ英会話。

このリスニング能力がゴミクズだから畜生!!

「……何です?」

観念して普通に日本語で返答して向き直る。

改めて見ても、好青年風……一般的に言うイケメンというやつだ。

ボクが普通に日本語を話したことにやや驚きつつも、男性は気を取り直して、ボクの眼をしっかりと見つめて一言を放った。

「——君、アイドルに興味ないかな?」

1：外堀を埋められる

「ないです」

「えッ!? ちよ、ちよちよちよ、お話だけでも!」

「お断りします」

そう言つて、ボクは小躍りしながら校門から遠ざかっていった。

胡散臭くてたまらねエ。

いくらなんでもそりやないよ。流石にタイミングがドンピシャすぎるもの。

シンデレラの舞踏会だつて、あの時の熱気がまだ冷めやらない中でこの勧誘。絶対詐欺だ。

この前プリントで不審者情報配られてたもの。それだよ絶対。

「待つ……待つて待つて!!」

スイーツと、半ば物理法則を無視してそのまま横滑りしていくボクに、当然のようについていく男性。

自転車と同じくらいの速度を出した錬金術ムーブだということについて来るあたり、やけに気合の入った変質者だなこいつ。

「しつこいな……警察呼びますよ」

「いや、俺は怪しい者じゃなくなつて……そうだ、確か先輩がこんな感じにすぎない返答をされた時に……確かその時は……」

何をぶつぶつ呟いているんだか分からないが、速度を上げてても全く顔色を変えずについて来るあたり只者ただものじゃない。

この男性の評価がボクの中で「気合の入った変質者」から「アスリート並みの身体能力を持った超人の変態」に格上げされた。

格上げかなこれ?

「せめて名刺だけでも！」

すげえ。こいつ走りながら名刺差し出ししてる。
姿勢もやたら正しい。それ逆に疲れないかな。
現代の日本人どういう身体構造してんだ。

「い……いえ……結構です……」

ボクのことスカウトするより、アナタがオリンピックク出たりした方がいいと思います。

「そこを何とか！」

「いえ、困るんですけど……」

困った。この人本気っぽい。

自分のことをアイドルスカウトだと錯覚しているだけの異常者……というわけじゃないのかな。

名刺をちやんと見てみると、「346プロダクション」と「スターライトプロジェクト担当」という文字と、立派な社章が刻まれていた。電話番号や会社の住所まで……なんとも作りが精巧せいこうだな。

まるで本物だ。

いやもしかして本物なんじゃないかなこれ。

「ちょっと待ってください」

一言呼びかけてから、徐々にスピードを落としていく。
急停止するとコケてしまいそうだし、そうなると思し訳ない。

「もしかして、本物ですか」

「本物だよ!?!」

「てつきり詐欺かと」

「いや詐欺なんて……詐欺……詐欺狙いの偽物はあるかも……」

世はまさにアイドル戦国時代。一時代を築き上げ現在でも「レジエ
ンド」と称される765プロや、圧倒的な個性の爆発と先日の「シン
デレラの舞踏会」によって、業界内で確固たる立ち位置を確立してい
る346プロは、名が知られているだけあって詐欺師に名前を騙かたられ
ることが多い。

本物のスカウトたちからすると知ったこつちやない上に迷惑はなは甚だ
しいところだけど、それもこれも一般人の自衛のためだ。許してくれ
るだろうか許してくれるねありがとうグッドスカウト。

「……346プロダクションアイドル事業部の根津ねづたけし猛といます。俺
は本物だから、会社の方に確認取ってもらっても大丈夫だよ」

「はあ」

じゃあ遠慮なく、とネットで調べた会社の電話番号にかけてみる
と、確かにすんなりと照会が取れた。個人情報とかいいのかな……と
も思ったけど、社員の名前くらいなら問題ないだろう。多分。

構造解析してみても、名刺には特に不審なところは見られないし
……信用してみてもいいのだろうか。

「確認は取れた？」

「はい。まあ、本物らしいですね。すみません」

「はは、いや、大丈夫だよ。俺も配慮が足りなかったな、ごめんね」

「いえ、どうもすみません。じゃあボク、こつちなので」

「うん、それじゃ——じゃないよ!?! ちよつと待って!?!」

チツ。流れに乗ってそのまま逃げられると思ったけど、ダメか。

「ええ——……?」

「す、すさまじく嫌な顔を……」

「いや、だって、アイドル……？ やらうと思わないですもん」

もちろん、これはボク的心情だけじゃなくって、境遇のこともある。
アイドルなんて水物のみずもの商売、本気で取り組もうと思ったら周囲の協力は必要不可欠だ。

契約には保護者の許可がいるだろうし、準備のためにはお金が——
作れるけど——多分、必要になる。

ボクには……というか、事実上のボクの保護者である施設にとつては、かなりの負担だろう。

こんなタイミングで変に献金するのもそれはそれで問題だし……
だいいち、ボクの中身、元は男だぞ？

無理無理。

「キミにはアイドルの才能があると思うんだ。一目見てティンと来た
！」

「もしもしポリスメン？」

「そういうアレじゃないよ!!」

どう考えてもアレな台詞ではなからうか。
股間にティンと来たのだとしか思えねえ。

「本当でござるかあ？」

「本当でござるよ!! アイムリアルスカウトマン、OK!？」

「ばーどうん？」

「……………!!!」

今ちよつとイラツと来たなこの人。

「何にしても他の人当たってくださいよ。もっと綺麗な人も可愛い人
もいるでしよらう。」

「違う、そうじゃない！ キミじゃないとダメなんだ!!」

「おいここ往來だぞそういう勘違いされそうなこと言うのやめろ」
「ごめん」

思わず素が出た。

でも、言わざるを得ないじゃないか。こんな告白めいたこと言われたら。

通りすがりの同級生に勘違いでもされちゃたまらない。

ホモか本物の女性ならぐらつと来たかもしれないけど、流石に今のボクじゃ無理だ。

一つ、溜息をつく。

「……そこまでおっしゃるなら、名刺だけ受け取っておきます。けど、期待とかしないでください。本当に興味ないので」

半ばもぎ取るように名刺を受け取ると、根津さんの表情がぱつと華やいだ。

この人、興味ないって言ったの聞こえてなかったのか？

「いや、でもありがとう！ もし興味が湧いたら、その連絡先に電話してくれると嬉しいな！」

「……はあ」

大丈夫かなこの人……なんてボクの気持ちを他所に、根津さんは笑みを浮かべながら手を振って走り去っていく。

……まあ。明日はもう週末だし、そろそろ帰ってチビたちとゲームでもするか。

今日のこととはとっと忘れて適当に過ごすに限る。

どうせ興味も無いんだし。

「なー何で姉ちゃんは胸まっ平なクセにゲームのキャラみんなデカチチにしてんだ？」

「ゲームの設定上小さくできないだからだよ。つーかまっ平じゃねーよほんのりあるわこのマセガキが」

「憧れてんの？」

「憧れてねーよこれ以上言うとお前の机の引き出しに隠してるブツチくるぞ」

「強がりだー」

「強がりだー」

「やかましいぞ貴様ら!!」

施設の遊戯室、そこに設置されたテレビの前で、ボクと施設の子供たちは、一緒にゲームに興じていた。

ボクの趣味で色々取り揃えてはみてるけど、やっぱり人気なのはハンティングゲームだ。みんなと一緒に協力して……というあたりが人気の秘訣なのだろうか。

それに次いで格闘ゲームも人気ではあるけど……正直に言うと、ボクはあまりしていない。

構造解析と高次未来予測によって対NPCなら無敵に近い実力を持つボクだが、対人となると他人の意思が介在してしまうので未来予測が全く意味をなさなくなってしまう。

つまるところ、負けるから嫌だ。

その点ハンティングゲームはいいね。わざわざ争う必要が無いから。世の中ラブアンドピースだよ

プレイスタイルで争うこともあるけど、そこは趣味の範囲内だから大して問題無い。と思う。

時々効率厨とエンジョイ勢で殴り合いになってるけど。

ボク個人はどっちとでも合わせられるし、いいんだけどね。

でも対戦ゲーは勘弁な!!

「そういえば姉ちゃんさあ、テレビもう二台くらい無いのかなあ」

「無いよ。というかボクに言っただけでまず園長先生に言えよ」

「言っただけでダメじゃん」

「じゃあ諦めたら？」

「姉ちゃんの部屋にテレビあるじゃんあれくれよ」

「あれはボクんだから」

「ケチ」

「ケチー」

「ペチャパイー」

「分解すぞクソガキ」

元々男なんだし自分の胸に執着する理由なんてこれっぽちも無いけどさあ。

それはそれとして馬鹿にされるのは我慢ならんしムカつく。

幼年期の栄養不足だよこれは。

「姉ちゃんガリガリだし。もつとメシ食ったら？」

「お前らがまず食ってから言えって。ボクは別にいいから。おに……」

お姉ちゃんだぞ」

「おれらより背え低いのにアネキぶんなよな」

「じゃあ姉ちゃんって呼び方もやめとけよ。っーか背のこと言うなよ

削るぞ」

「何を!？」

削り取ってボクの背丈に足してもいいんだぞ。

しないけど。

「……何かシラけた。コージ、代わっていいぞ」

「え、いいの？」

「いいよ。ボクもう寝るから」

「やったー！」

「寝る子は育つって言うけど」

「余計なコト言うな」

近くにいた男の子に S ● i t c h のコントローラーを手渡して交代する。

とりあえずやるだけはやったし、もういいだろう。正直、ボク自身はまた別のゲームやりたいし。

あの子たちが言ってたけど、ボクは自室にテレビとゲームを取り揃えている。あくまでボクの「お小遣いで」買ったということになっているが、実際にはまあ、色々ズルいことしてるのだけだ。

でもしかし——もう、頭の先までこっちの娯楽に染まつてるなあと思う。

自分でお金を稼ぐというか、まあ、錬金術というズルができる以上、日々の生活そのものは別段問題無いのだけど……今まであったハングリー精神？　とも言うべきものがまるで無くなってるなあ、とは思

「なんだかなあ」

何だろう。ゲームしてるのは楽しいし、漫画見てるのも好きだし、チビたちとアニメ見てたりするのも騒がしくて嫌いじゃないんだけど……なんかこう、どこかしつくりこない部分がある。

自由……では、あるんだろうと思う。けど、何だろう。こう、ボク自身が自由の意味を理解しきれてない点もあって、ちよくちよく疑問が湧いてくる。

自由って、こんな感じだったっけ。これ、ただの怠惰じゃないんだろうか。

「……………」

その辺に上着を投げ捨てて、自分の部屋のベッドに寝転んだ。

暇な時間が多いせいとか、こんな意味も無いことを考えてしまう。今後も時間は腐るほど……スパアボディ作るくらいはできそうだし、魂が腐るまでは時間あるんだけど、今後こんな感じで考えるとなると意外に辛い。

自由を満喫するよりも先に、「自由」について探究しすぎて自由を失いそうだと。

と、そろそろ眠くなってきた頃、ふと昼頃に貰った根津さんの名刺が目についた。

「……アイドル、ねえ」

無理。

ボク、肉体はともかく中身はまだ男だよ。確かにもうそろそろ男だった頃より女として生きてきた時間の方が長くなりそうだけど、元男には違くないよボクは。

どうせその内、破綻して目に見えて失敗するさ。

……その内、断りの電話でも入れておこう。

そう考えて、ボクは深く布団を被った。

@——@

「氷菓ちゃん、氷菓ちゃん、起きて」

「……んえ——？」

どれくらい経ったんだろう。突然、お姉さんに揺り起こされるのを感じた。

なんだかいつもより荒っぽい。というかテンションが高い。

随分寝てたし……何だろう。朝食にお姉さんの好物でも出たのだろうか。

「ふあい」

寝惚^{ネボ}け眼を擦りながら応じると、お姉さんがニコニコ笑顔でボクの方に名刺を掲げて見せていて——名刺？

名刺？

「へあっ!？」

あ、ああ、ああああああっ!？」

「うわあああああお姉ちゃんそれダメっ!!」

「んー？ 何がダメなのかなー?」

すっごいエエ笑顔をしておられる!

何とか名刺を奪い返そうとするも、お姉さんの身長はボクより20cm以上も高い。頭の上でひらひらされたらどうやっても取り返せない!

っよい。勝てない。

「すごいじゃない、アイドルのスカウトなんて! スゴいなー憧れちゃうなー」

「いいだろ別に……:というかボクはこういうのやる気無いし」

「そうよねえ。でもそうやって逃げるの、あんまり良くないと思うわよ。」

「いや……:やらないってボクは、そういうの」

チャレンジ精神が大事なのは分かるけど、人間には「分」というものがあると思う。

それを超えたら大抵の場合は失敗するものだ。そこんとこ理解してるのかこのお姉ちゃんは。

「うん、そう言うと思ってもう園長先生に相談してOKのお返事したから!」

「……………!?!」

ん? 今何か言ったか? (現実逃避)

「何やっちゃってんの!?!」

「だって氷菓ちゃん可愛いじゃない。はいポーズ」

「え、え、ポーズ? え、えーつと……………最力ワっ★」

顔から火が出そうだ!

やめて! 写真撮らないで!!

「ダメだよ……………無理だよ……………」

「大丈夫、カワイイカワイイ」

他ならぬ園長先生やお姉さんが言うならボクも無碍むげにはできないけどさあ……………。

「お姉ちゃんね、氷菓ちゃんはもうちよつと外に目を向けた方がいいと思うの」

突然に真剣な表情になって、お姉さんはボクに改めて向き直った。

「……………見てるよ、割と」

「表面的にはね?」

耳の痛いところを突いて来る。

「休みの日も閉じこもってばかりで、外に出もしないじゃない」「うぐぐ」

「正論だけに全く反論ができない！」

「で、でもボクには時間なんて有り余ってるものだし……体を錬成しなおせばウン百年くらいは軽いし……。」

「いい機会だと思うのよ。どう？」

困った。あの目、本気でボクのことを心配してくれてる目だ。

今までボクのこと、そこまでちゃんと想おもってくれるような人なんていなかったし、どうもこういうのに弱い。

「……………分かったよう」

たっぷりと間を置いて返答すると、お姉さんの顔がパツと輝いた。

「そう、それは良かったわ！ 実はもうみんなにもそういう風に伝えててね！」

「外堀埋めてんじやないよ!!」

何やってんだこのバカ姉!!

これじゃあ辞めるって選択肢まで無くなっちゃうじやないか!!

「ぬああああああああ!!」

思わず叫びが漏れた。

何事かと思つて集まってきた人たちも、どうやらボクが何かするということとは聞いていたらしく、それから二、三時間は質問攻めに遭う羽目になったのだった。

2：アウエーに向かう

「ここがああの男の本社ね」ハウス

施設から電車でおよそ三十分弱。都心にほど近い高級オフィス街の中心地に、その会社はあった。

346プロダクション——今をときめく個性派アイドルたちが多数所属する、伏魔殿バンデイモニウムとすら呼べるほどの威圧感を放つ超巨大企業だ。

アウエー感半端ない。冗談めかしてふざけたことでも言っていないと潰れてしまいそうだ。

「よ……よし」

意を決して建物に踏み込む——と。そこは、煌びやかな舞踏会の会場……あ、違う。綺麗で豪華な玄関ホールだ。

「……お、おおう」

あ、ダメだ。圧倒されすぎて意識が薄れそうだ。

ナニココしゅごい。ここがイスタルシアか。違うか。

目につく人たち、みんな活気にあふれてて、煌びやかで輝かしい。多分光属性だ。闇属性のボクにWEAKでCRITICALで44万ダメージ。ボクは死ぬ。

「おうえっぶ」

ダメだこれ吐きそう。

雰囲気は圧倒されすぎて圧殺されそうだ。

「……大丈夫？」

「ひゃいっ!?!」

そんなボクの姿を見て心配したのか、不意に、誰かが後ろから背中を叩いた。

「だ、だだだ、だ、大丈夫……なん、でしょうか……?」

顔を上げて声の主を見ると、そこにいたのはドエライ美人さんであった。

白磁のような肌に、端正な顔立ち。よく見ればその瞳は宝石のようなオッドアイで、ふわりとしたボブカットも、どこか神秘的な雰囲気
が漂っている。

しかし、何だろう。この人見たことあるな。テレビとか、CMとか、雑誌とか、街頭広告とか………。

「あれ?」

「どうしたの?」

「あの、失礼ですけど、貴女はもしかして、アイドルの高垣楓たかがきかえでさん、ですか……?」

「ええ、そうよ?」

優しく微笑みかけられるのと同時に、ふっと意識が消し飛びそうになった。

風属性で減衰入って44万ダメージ。ボクは死ぬ。

オイオイオイアイドル活動とか始める前に死んだわボク。

「もしかして人気アイドルは時間があいとるとは思ってたかしら?」

「は、はい……はい?」

「?」

何か今変な駄洒落ダジャレ言っ
てなかったか。
いや流石に言っ
てないな。ボク
の気のせいだ。

「ゆ、有名な方なので、流石に今はいないかと……」
「ふふ、そうね。今日は偶然社内で打ち合わせがあるから、ちよつと特別なの」
「そ、そうなんですか……」

高垣楓さんと言えば、押しも押されぬ346プロのトップアイドルだ。
ボクですら知ってるくらいなんだから、世間での知名度は言わずもがな。彼女から発せられる芸能人オーラも、そのせいで生じる緊張も半端なものではない。

「すごい汗だけど、大丈夫？」
「あ、だ、大丈夫です」
「そう、良かった」

言いつつ、楓さんはハンカチを取り出してボクの額の汗を軽く拭ぬぐつてくれた。

「え、え、えええ!？」
「汗だくじゃあ気持ち悪いでしょう。せつかく可愛いんだから、あせらないで見た目にも気を遣わないとね。……はい」

なんやこの人。天使か。

「あ、ありがとうございます……あ、でも、ごめんなさい、その、ハンカチ汚しちゃって……」
「ハンカチは汚れるものよ?」

何やこのお方。女神か。

「あ、でも申し訳ありませんし！　これ、あ、今日一回も使っていないです！　こちら、洗濯してお返ししますから、使ってくださいっ!!」

「……大丈夫？」

「大丈夫れふ」

めっちゃ噛んだ。

「フフ。それじゃあ、ありがたく使わせてもらうわ」

「はい、どうぞ!!」

楓さんの………これ何だろう。このキモ……かわ……？　な緑色の——ぴにやこら太だったけ——が描かれているハンカチを受け取り、代わりに青と茶の縞模様のハンカチを手渡す。

さらばチョコミント柄。しばらく頑張ってくれ。そしてようこそぴにやこら太。申し訳ありませんこのような一般人で。

「ところであなたは、今度うちのアイドルになる子……でいいのかしら」

「あ、はい。白河氷菓と申します」

「氷菓ちゃんね。……アイスクリーム？」

「え。あ、はい」

「………ふふっ」

一体、何を考えられているんだろう。何も言わずに微笑みかけられてしまったぞう。

「それじゃあ、私はもう行くわ。頑張ってね」

「ひゃい!?　が、ガンバリマス！　あとハンカチは早めにお返しします!」

優雅な立ち居振る舞いで去っていく楓さんに、ボクはその姿が見えなくなるまで手を振り続けていた。

やがて熱狂から醒め、我に返ってから自分がやたらと周囲の人の目を集めていたことに気付く。

「う、う……うわっ」

改めて、さつきまでのボクを見返してみたらこれ、とんでもないことしてないかな。

いやしてるよね。はたから見たらこれ、ただの気持ち悪いファンだわ。

よく見たら、周りの人もこらえきれないという風にくすくすと笑っている。

今のボク、見た目が見た目だけにまだ微笑ましくらいなんだろうけど……うわあ。うわあ……。

「帰りたい……」

けど、今帰ったら不義理もいところだろう。

仕方なしに、ボクは受付のお姉さんに集合場所を伺い、駆け足でエレベーターに乗って向かって行った。

@——@

この会社、徹底してボクに対してアウエーすぎる。それが部屋に到着したボクの感想だった。

到着したのは、地上三十階に位置する”スターライトプロジェクト”とやらのプロジェクトルームである。

埃一つ見えない、手入れの行き届いた美しい部屋だ。

調度品も高級なものらしい。ボクが徹底して貧乏な環境にいるだ

けとも言うが、ソファも机も全く知らないような質感に感じる。すごいぞ。ボクにとって全くと言っていいほど馴染みのあるものが存在しない。徹底したアウェーだ。帰りたくて帰りたくて震える。

「……根津さんは……」

あの野郎いないぞ！

こんな場所に一人で置いておくのはやめろ！

本当にやめろ！ 吐いちゃうぞ！ ボクみたいな欠食児童の胃は弱いんだからな！

「にや？」

パニックの最中にあるボクの耳に、ふとそんな呑気な声が届いた。

「フンフン……クンクン……ふーん？」

「!？」

直後、ボクの背後から何か値踏みをするような声が聞こえた。

同時に、背中に何か埋うずもれるような感触がある。え。何これ。誰これ。何だこれ。

もしかしてこれ、ボク何か臭いでも嗅がれてる!？」

「ふえ!？」

「ん、キョーミをソッソッこの感じ……。遠い場所の……。外国かにやー?」

「え、何!?! 何!?!」

「や、どくも〜」

と、ボクの背後から覗き込むようにして少女が顔を出した。

ゆるくウェーブのかかった小豆色あずきいろの髪と、猫を思わせるような悪

戯っぽい釣り目、着崩した高校制服。否応なく人目を惹くような端麗な容姿は、思わずボクもどきつとするほどだ。

そのまま部屋の中へと連れ込まれ、ソファに座らされる。

「ど……どちら様ですか……？」

「いちのせしき一ノ瀬志希ちゃんです。ヨロシク♪」

「よ、よろしく……お願いします……？」

「キミはだあれ？」

「あえ、ぼ、ボク？ し、白河水菓、と申します……」

「ヒョーカちゃんだね、よろよろー♪」

「よ、よろしくです……」

……す……すごく軽そうな人だ……。

いや、軽い風に見えるというか、気安いというか……別にまんまその通りの人じゃないんだろうけど。

「ん……クンクン」

「ほわあっ!？」

……気のせいじゃねえ!! この人ボクのおい嗅いでる!!

何この状況怖っ!! 何で!! ナンデ!!

「うん、やっぱりちよつと変なおい」

「へ、変な……って……」

「ああ、ううん、そういうのじゃないよー? こう、なんて言うんだろ。

『遠い』って言うの? 外国みたいな、非日常みたいな?」

非日常……で遠い……って。

それ、ボクの素性に関わることで……?

いや、流石にその可能性は低い。今のボクの外見からそう思っただけだろう。多分。

……!?
万が一そうだったらこの志希さんって人、凄まじい勘カンをしてるぞ

「ん〜……分かんないや〜い♪」

「は、はあ……はは……」

本当に何者なんだ、志希さん。

出会って数秒で底知れない感が凄まじいぞ……。

「氷菓ちゃんもアイドルの子〜?」

「まあ、一応。そのような感じで」

「ふ〜ん。何で?」

「スカウトされて……本当は断る気だったんですけど、保護者が勝手にOK出しちゃって……今日、集合かけられて」

「あははは、何ソレ〜♪」

本当に何ソレだよ。

「志希さんもアイドルですか?」

「アタシはキョーミ深い実験材料を発見したから、かな? なんだか

イイ匂いがして、面白そうだったしね〜♪」

お……。「面白そう」で人生の進路決めちゃうのか。すごいな志希さん。

後先考えてないのか何なのか。いや、流石に自分のことはある程度考えてる……と思うけど……。

思いたいなあ。

「——ここか! プロジェクトルームというのは!」

「んにゃ?」

「へ?」

そんな話をしていたボクらの思考の隙を突くように、扉が開いて何者かが姿を現した。

栗色のツインテールの、ボクより多少……身長の高い女の子。気の強そうな目と桃色のアンダーリムの眼鏡がどこことなく特徴的だ。

「にやつ」

瞬時に、先程と同じようにとんでもない身のこなしで志希さんが女の子の背後へと回り込む。

成程、あんな感じでボクの後ろに回り込んだのか。

「何だあ!？」

「ん〜……ククククン……ンーこれは……鉄とオイルのにおい？ に花のフレグランスが混じってる感じ？ にゃは★ これはこれでイイね♪」

「いやいいんですかそれ」

そこまで行くと最早何でもいいレベルなんじゃないかなソレ。

「ええい失礼なヤツだな!？ 何者だ!？」

「にやつははは!？ よくぞ聞いてくれた! 我が名は大暗黒大帝・一ノ瀬志希! さあハスハスさせるのだあ!」

『大』が被ってますよ」

「そもそも何なんだその肩書は」

「ノリと勢いでテキストに言ってみただけ♪」
「でしようね」

あんたさっきまでそんなこと言ってなかったじゃないか。

あ、そうか。匂いにおで相手に合わせてるのか。

……いや匂いで合わせるって何だそれ。ボクの時はその対応が一

番だと思ったのか？

緊張ほぐすには確かに良かったかもしれないけど。

「そちらの志希とやらのことはだいたい分かった。君は？」

「白河水菓です。すみません、こんな感じで」

「氷菓だな。私は池袋いけぶくろあきは晶葉——天才だ！」

「……あ、はい」

頭の中で、不意に「俺は天才だ!!」とわめく黒髪の筋肉男が浮かんできた。

いかん。どうしよう。この人たち超濃ゆい。

ボクなんてこの二人に比べたらちよつと見た目が外国人風なだけだ。内面的な特徴……はあるけど、その程度のことじゃボクの個性程度はすぐに霞んでしまいそうだ。

……でもないか。改めて考えると何だよボク。前世の記憶があつて錬金術師でハーフで孤児って。盛りすぎだろ。前半部分はわざわざ人に明かすことは無いけどさ。

「天才だ！」

「いや聞こえています」

「にゃっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!」

「爆笑してんじゃないですよ」

「知っているか、爆笑という言葉は『大勢が一斉に笑っている様子』を指す！ つまり誤用だ！」

「いや国語辞典に載ってるから別に誤用ってほどじゃないですよ」

「え。本当か？」

「調べたらすぐ出ますけど」

他のものに関してもそうだけど、誤用の意味がそのまま本来の意味と混同こんどうされて辞典に載っちゃうってことすらあるらしい。

もうそういうもんということになっちゃったので問題らしい問題

は無いと言えるだろう。世の中は流転するものだ。

「うん、だがこれで一つ学ぶことができたぞ。ありがとう氷菓」
「あ、はい」

晶葉さんは素直な子だった。

いい笑顔してんなおい。こっちが気後れしそうだよ。

「……………ここにいるってことは、晶葉さんもアイドルするんですよね。何でアイドルを？」

「ん？ 知りたいか？ 知りたいのか？」

「うん」

「聞かせてほしいにやー♪」

「いいだろう!! 私はロボット工学を専攻しているのだが、なにぶんこの分野はある種『閉じた』文化をしているのだ」

「ああ知ってる知ってるー。あの辺結構閉鎖的な部分あるよねえ」

何で知ってんだこの人。

「ロボット大会だのなんだのという、自分たちの成果を披露する場はあるが——それだけではダメだと私は常々思っている」

「ダメなんですか？」

「ダメなんです、だ。この界限はな、やはり金が要る!!」

「汚い話だよねえー♪」

朗らかに言うなそんな台詞。

いや分かるけどさ。研究には金がかかる。理系は常に金が無い……………つていう話も。

「研究には膨大な金が必要だ。政府から金が降りればそれが一番いいが、それが案外難しい」

「何ですか？」

「うむ、一言で言うると、『研究成果が何の役に立ってるか分からない』からだな！」

「何の研究でもそうだよねえー。志希ちゃんも知ってる知ってる」

だから何で知ってるんだよ。

でも、理屈自体は理解できないわけじゃない。

一口に研究と言ってもそれが何に應用されてるかなんて、一般人にはよく分からない。例えば台所に現れる黒いアレを研究してるなんて言われても、それが何の役に立ってるのかなんてまるで分からない。

実際にはそれは、どれだけ効率的に駆除できるか、防除ぼうじょのためにはどうするかを研究しているのだけだ。

まあそれはそれとして、そこまでよく考えてみないと分からない程度には、研究系の学問っていうものは分かりづらい事柄が多いわけだ。

「故に私はこのアイドル活動を、研究成果を、この私の才能を世に知らしめる絶好のチャンスと捉えている！　そして私を通して世の中の研究者たちの研究を示し、政府からの資金援助を得られる環境つくりを創り出す！　それがスカウトを受けた理由だな！」

「おおー」

「……立派ですね」

なんとなく破天荒な感のある人なのに、ここまでちゃんと考えてるのか。晶葉さんは。

研究職を志す者としてのプライドの発露、とでも言うべきだろうか。自分のことだけじゃなくって他の研究者たちのことも一緒に考えるなんて、立派だと思う。

同時にボクが途轍もなく卑小な存在に思えてきた。ボク、結局流れるまま流れてるだけじゃないか。

志希さんも軽い感じがあるけど、そこは下衆ゲスの勘繰りになりそうだし何か言うべきでもないな。うん。

「氷菓は何でアイドルになろうと思ったんだ？」

「保護者に勝手にOKされたのでそのまま流されて」

「あはははははは!!」

二人して笑いおった。

ちくせう。

いや笑うけどねこんなん。ボクだって同じこと聞いたら笑うわ。でも志希さんこれ聞くの二回目じゃん。笑わないでよう。

「別にいいじゃん……」

「いやいやいいよーアタシそういうのも大好き！ 見てて面白いしね♪」

「見世物ですか」

「これから存分に見世物になるんだよ？」

「確かに、アイドルとは言うなれば見世物商売だ」

変なところでドライだなこの二人。

頭の良い人ってそんなところがあるみたいだし、正直ボクとしてはそのくらいの対応を受ける方が気も楽だ。

「……で、その見世物商売の元締めがやってきましたよと」

「あ」

「おはおはー」

「むっ」

と、談笑しているボクたちに入口の扉の方から声がかかる。見ると、そこには先日の優男——根津さんが立っていた。

先日と相変わらずの伊達男っぷりだが、その口元の笑みはどことな

く硬い。さつきまでのボクたちの話を聞いていたんだろう。見世物商売、という言葉が胸に刺さったみたいだ。

「いや気にしてないよ?」

「何も言ってますせんが」

「君は何を言っているんだ」

どう見ても気にしまくってるじゃないか。

「おはようございます、根津プロデューサー」

「おはよう、だ助手」

「おはよう、三人とも。白河さんも来てくれたんだね。嬉しいよ」

「……そこまで、期待しないでくださいよ」

「いや、そこは期待させてくれるともっと嬉しいんだけどな……」

本気でやろうと思って来てるわけじゃないし、ボク自身アイドルに対するモチベーションはかなり低い。目的意識も無いし。

「まあ、ともかく! これで……全員集合ってわけじゃないんだけど」

「じゃないの? 飽きちゃったら志希ちゃん逃げちゃうよ?」

「いや逃げないでくれよ!」

「志希ちゃんはー、三分しか興味が続かない子なのです!」

「短え」

「短っ」

「にやははは!」

ってことは、今は興味が続いてる奇跡的な状況ってことなのかな。それもそれですごいなこの状況。どの辺が琴線きんせんに触れたんだろう。

「ともかく、これからみんなにはこのプロジェクトルームの一番奥のオフィスに行ってもらいたいんだ。そっちで、詳しい説明をしてもら

うから」

「根津さんがするんじゃないんです？」

「いや、俺は下っ端だから……あんまりその辺の上下関係とか手続き
適当にしてると専務が厳しいんだ」

「はあ」

「ふーん。何か面倒そうだねえ」

「会社とはそういうものだからな。致し方ない」

「俺は皆が説明を受けてる間に、遅れてきてる子たちを迎えに行つた
り、今レッスン受けてる子たちを呼んでくるから」

「分かりました」

「よし、それじゃあ行くぞ、志希、氷菓」

「あいじゃー」

「はい」

場を取り仕切る晶葉さんについていくため、ソファから気だるげに
体を起こした志希さんの背を押していく。

軽い……けど、もうちよつと自分の力で歩いてくれないかな。本当
に。

「さて、ここだな。失礼する！」

先陣を切つて室内に飛び込んでいく晶葉さんに続いて、志希さんと
共に入室する。しかし直後、二人の表情が青ざめた。

何でこんなタイミングでそんなに顔を青くする必要があるんだろ
う。そう思つて顔を上げると――。

「お待ちしておりました」

——そこにいたのは、熊と見紛うほどの巨体を持った強面コワモテの男
であった。

背高い。体格すごい。威圧感やばい。一分いちぶたりとも隙が無い。

眼光は鋭いし見た目はいかついし、なんかもう人ひとり軽く殺してきたんじゃないかと思うくらいの外見だ。

正直ボクもかなり怖い。

「「ぎゃあああああああああつ!!」」

「……………」

思わず上げた悲鳴に、男性は冷や汗をかきながらもこの反応は想定内だったとでも言いたげに、軽く首筋に手を当てた。

「……………落ち着いてください」

「す、すみません!」

「くっ! わ、私としたことが…………」

「にやははははっ、まさかこの志希ちゃんがビビツちゃうなんて思わなかったよ!」

低いバリトンボイスに導かれるように姿勢を正すボクたち。

しかし、ボクと晶葉さんはともかく、志希さんは慌てたような様子が何も無い。

感性の問題なのか、そもそも彼女自身はかなり大物なのか…………。

「…………お初にお目にかかります。私は、当プロジェクト統括プロデューサーの武内たけうちと申します。こちら、名刺をどうぞ」

「あ、どうも…………白河氷菓です」

「池袋晶葉だ」

「一ノ瀬志希でーっす♪」

「皆さん、よろしくお願いします」

一人一人に名刺を手渡しつつ、自己紹介代わりに名前を告げていく。

すごく丁寧な挙措ぎよそだ。一つ一つの動作に、こちらに対する気遣いが

感じられる。

さつき、ボクたちを怖がらせたことも本意じゃないのだろう。なんというか、悲鳴まで上げてしまったのが本当に申し訳ない。

「根津君からも聞いているかと思いますが、これから当プロジェクトについての概略を説明させていただきます。質問などがあれば、その都度聞いてください」

「はい」

「分かった」

「んー」

……あ、説明って聞いて志希さんが眠がつてる。

この人ほんともう……ほんつとさあ……。

「まず……これは、諸事情により説明することができていなかったのですが」

「？」

「スターライトプロジェクトとは——『第二期シンデレラプロジェクト』の別名、なのです」

「……………?!？」

「は??」

「説明が遅れてしまって申し訳ありません」

……シンデレラプロジェクト？

346プロの？

例の、あのプロジェクトの……直系プロジェクト？

は??

3：星々を見た

「ええええええええええつ!?!」

思わず、晶葉さんと声が重なった。

シンデレラプロジェクト——もう何も言えることは無いというほどに知名度と人気を獲得した、346プロの超人気アイドルグループ。

346プロなんておっそろしいバケモノ企業にアイドルとしてスカウトされただけじゃ飽き足らず、挙句にそんなトンデモプロジェクトに？ ボクが？

マジで？

「げふっ」

「氷菓が倒れた!?!」

「にやはははははははははははっ!」

「ど……どうか落ち着いてください……」

胃が超痛あい。

最初からこのこと知ってたら、もっと先手を打って丁重にお断りもしに行けたのに!

呪ってやるぞ! あのバカ姉に呪いあれ!!

「……説明を、続けてもよろしいでしょうか」

「どくぞく♪」

明るい表情で、志希さんがボクらの代わりに返答する。しかし、あの明るい表情……あれ、興味をそそられた顔だな、絶対。シンデレラプロジェクトの一言で眠気が全部ブツ飛んでる。

「……と、というか……何でそんな大事なことを黙っていらつしやつたんですか……」

「申し訳ありません。常……いえ、専務の意向です。『シンデレラプロジェクト』の二期生を集めていることが大々的に知られれば、他社は必ず対策を打ってくる。名前は隠しておきなさい』と……」

「経営戦略か。ならば仕方ないな」

「……加えて、私の意向もあります」

「武内^{プロデューサー} P さんの……ですか？」

申し訳なさそうに頷きながら、武内Pは自分の首の後ろに手をやった。

「第一期生——現『シンデレラガールズ』の皆さんは、笑顔の素敵で、素晴らしいアイドルたちでした。シンデレラの舞踏会が成功した今、シンデレラプロジェクトのユニットやそのメンバーは勿論、シンデレラプロジェクトという大枠そのものの知名度も高まっているのです」「ふんふん。あ、つまり……そーゆーコトかな？」

「……そうですね。このままシンデレラプロジェクトの二期生としてアイドルデビューすれば、ごく短い間に人気を獲得することも可能でしょう。ですがそれはあくまで『シンデレラプロジェクト二期生』としての人気なのです」

「私たち個々人が見られているわけではないと」

「その通りです。頭で理解してはいても、心のどこかで一期生のアイドルたちと『同じもの』を求めてしまう人は大勢いるでしょう。そのようなギャップがある中では、アイドルの皆さんも観客の方々も、本当の意味で笑顔になることはできません」

なるほど、一理ある。

ゲームで言えば、続編が出た時にあんまりにも前作とシステム周りが違いすぎて、変に黒歴史扱いされるようなものだろうか。そのゲーム自体には独自の魅力がちゃんとあるのに、「前作と違うから」という

一点のみで受け入れられない、みたいなの。

ならいつそのことタイトルを変えて販売した方が、独自の路線として独自の人気を得ることが出来る……ってところかな。この喩え、分かる人がどれだけいるか分かんないけど。

「二期生に選ばれた皆さんも、個性豊かで魅力的な方々です。その魅力を正しく伝えるためには、シンデレラプロジェクトという名前を出すことができなかったのです。重ね重ね、申し訳ありません」

「あ、いえ、そんな、頭を下げていただくほどじゃ……」

それにしてもこの会社、アイドルのことをちゃんと考えているんだな。

武内Pのプロデュース方針が特別にそういう傾向が強いのかも知れないけど、曲りなりにもここに籍を置こうという以上、なんだか安心する。

「では、改めて説明を」

その後、しばらくは武内Pの作成した資料をもとに、第二期シンデレラプロジェクト改めスターライトプロジェクトに関する説明を受けた。

曰く、選抜メンバーたちにはしばらくの間レッスンを受けてもらい、その成果に応じて順次、ユニットとしてCDデビューしてもらおうとのこと。本格的な出番は夏の定期フェスとなるが、それまでの間に小イベントやライブなどを通して経験を積んでいくそうだな。

メンバーとして選ばれたのは、ボクら三人を含めて十七人。多すぎねえかこりゃ。

……ともかく、この十七人の中から何人かを選定してユニットを組む、という話だが、なんでも、ユニットの編成は可変式なのだそうだな。

例えば、ボクと晶葉さんが普段組んでいると仮定して、時と場合に依じては晶葉さんの代わりに志希さんと組む……みたいなの。

さつきからちよくちよく話題に上る専務さんと、武内Pとの協議の結果らしい。一つのユニットやグループに固執しては、アイドル個々の可能性を広げることができない。それはアイドル本人のみならず、会社にとっての損失である……と。

だから、プロジェクトの内外を問わず積極的にアイドルの可能性を試す場を設けるため、ユニットそのものに高度な柔軟性を持たせておく、という。

アイドルグループの賞味期限はそんなに長くない。しかし、使い捨てなど論外中の論外。長く芸能活動を続けてもらい、積極的に商機を掴むため、今のうちにソロ活動も見据えておきましょうよ……というのが趣旨らしい。

また、武内Pはあくまで統括。一期生は舞踏会以降ソロ活動も増えてきたそうだが、彼女ら十四人のプロデュースに関しては未だ武内Pが受け持っている。流星にこの上二期生のプロデュースをしていくのは負担が大きいらしく、ボクら十七人の直接のプロデューサーは根津さんだという話だった。

そりゃ一期生十四人と二期生十七人、合計三十一人も同時にプロデュースなんて無理に決まってる。

……なんかやれそうな雰囲気はあるけど。まあ流星に無理だろう。無理だよな？

「では、最後に質問などありましたらどうぞ」

「……はい」

「どうぞ、白河さん」

「選考理由って、聞かせてもらっても大丈夫ですか？」

「——笑顔です」

きっぱりとした一言の後、晶葉さんと志希さんの視線が一斉にボクの方に向かう。

当たり前だろう。何せボク、ここに来てからっていうもの困惑顔と仏頂面ばかりで笑顔なんて一度も見せてないんだから。

「……と、言えるといいのですが、皆さんは根津君のスカウトで選ばれたので、私は選考にはそれほど関わっていないのです」

あ、そこはやっぱりそうなのか。

「しかし、彼の選んだ方々です。きっと、素晴らしい笑顔を見せてくれると、私は信じています」

「……………すみません。ありがとうございました」

全幅の信頼だった。

いや、でも——仮にも仕事を任せている以上、それは当然か。

まあ、詳しいことは後で根津さんに聞いてみよう。

「他にありますか？」

武内Pの問いかけに答える者はいない。

数秒ほど間を置いて、彼は一つうなず頷きを見せた。

「……………無いようですね。それでは、これから別室で写真撮影と他のメンバーとの顔合わせを行います。根津君の指示に従って、移動してください」

「はい」

「うん」

「りょーかーい♪」

三者三様の反応を見せてオフィスを出ると、仕事を終えてきたらしい根津さんが待っていた。

しかし息一つ乱れてないあたり、やっぱりこの人どこかおかしくないか……………？

「みんな、お疲れ様。先輩から聞いていると思うけど、場所を移すからついてきてくれるかな」

そう告げてボクらを先導する根津P。足取りは軽快だけど、ついていけないことはないだけ幸いか。

エレベーターに乗って下の階へ。社内の別室に辿り着き、彼は扉を開いてボクたちを招き入れる。

「じゃ、入って入って」

導かれるままに部屋に入ると、そこには一般的に想像できる「撮影スタジオ」そのままの光景が広がっていた。

真つ白の反射板と、白い傘を利用した……レフ版、のようなもの。強い光を放つライトと多数の機材、機材……。

嫌でも346プロの資金力というものを実感させられる。ボク、これからここに所属してられるのか……？

そんなスタジオの片隅、待機用の部屋と思しき場所に、何人かの姿が見える。

あれが他のメンバー……なんだろう……と、思う、ん、だけど……何だろう。すごく、異質と言うか、異様というか……フリーダムというか。

ふわふわウェーブの金髪の女の子と、眼鏡のクールビューティー二人、それから黒髪のお姉さんは、一旦置いておこう。みんな美人だし、可愛い方々だけど、あえて今は置いておく。

問題は他の七人だ。清楚な服に着替えている、どこかで見たことのあるシスターさんに、なんか羽根生えているパステルカラーの意匠に身を包んだスタイル抜群の美人のお姉さん（ツインテール）。さつきからフゴフゴ言って虚空を見つめながらパン食ってる女の子に、その隣に座ってメザシだかニボシだかをポリポリポリ口に運び続けている子。果ては巨大なトナカイらしき生物を連れた白髪の女性まで、まあなんとというかバリエーション豊かと言っても程がある。

加えて残る二人、眠たげに目を細める、妖精のように可愛らしい小さい子と、和服に身を包んだ栗色の髪の子……あの二人は何者なのだろう。神気というか、覇気というか。謎のオーラすら感じるほどのたずまいだ。

え、何？ 星晶獣か何かなの？ いや流石にそれは無い。けど何だあのボクみたいな小物程度なら一瞬で消し飛びそうな雰囲気は。

「コフツ」

「しつかりしろ氷菓!？」

こ……怖いよお……一体なんだってんだよこの光景はよお……。

根津Pはいつたいどういう人材集めてきてんだよお……。

「おーい、みんな！ ちょっと来てくれ!」

精神的動揺によるダメージを受けているボクを他所に、根津Pは皆を手招きしていた。

しかし……ボクと違って志希さんも晶葉さんもダメージ受けてる様子は無い。ちよつと豪胆過ぎない？

「そちらの方々は?」

「よくぞ聞いてくれました、古澤さん! この三人は、今日このプロジェクトに加わってくれた新メンバーだ! はいみんな拍手!」

根津Pの号令に応じて、やや静かに……しかし、確かにボクらに聞こえる程度に拍手が巻き起こった。

……なんだか気恥ずかしいけど、そういうこと考えてる場合でもないか。志希さんと晶葉さんに向かって、自己紹介をしておこうと目配せする。まず最初に一步を踏み出したのは、志希さんからだった。

「一ノ瀬志希です♪ 好きなことはハスハスすること。ま、よろ

しくねー♪」

「池袋晶葉、天才だ。趣味はロボット作りだな。よろしく頼む！」

「……白河水菓です。ゲームとか、アイス食べるのが好き……です。よろしくお願ひします……」

……改めて考えると、ボクの自己紹介インパクトゼロだな。

いや、前の二人がちよつと爪跡残しすぎてるんだけど。

ハスハスとはどういう意味なのか。第一声が天才はいかなものなのか。様々な意味で強すぎる。

「実は、あともう三人来ることになってるんだけど……先に自己紹介してもらおうかな。じゃあ、古澤さんから」

「あ、私……ですか？ そうですね。古澤頼子ふるさわよりこと申します。好きなこととは、美術館へ行くことですね。どうぞ、よろしくお願ひします」

とりあえず、まずは一人ひとり名前と外見を一致させていくことから始めよう。

一人目は古澤頼子さん、か。全体的に清楚な雰囲気せいふきの漂っている女性だ。

雰囲気や口調とは裏腹にやや背が高い方に見えるが、声音は穏やかで威圧感に乏しく、どことなく和やかな印象を受ける。

「次は私かしら。八神マキノやがみ。好きなコト……って、これ、言わなきゃいけないの？」

「どうでしょう。私は流れで言いましたけど、構わないのでは……？」

「そう。まあ、よろしく」

二人目、八神マキノさん。

この人も古澤さんと同じく眼鏡をかけているが、彼女とは異なり冷然とした印象を受ける。

クールビューティー、というやつだろうか。時折やっている眼鏡の

つるを押し上げる動作がやけに堂に入っている。

「聖、どうぞ」

「はい……その、望月聖……です。歌が好き、です。……よろしく、お願いします」

望月聖さん。彼女はどうかやら物静かで大人しめな子のようにだ。柔らかな笑顔と、儚さすら感じるような淡い雰囲気纏っている。

ボクや晶葉さんよりも背が高い辺り、「子」と表現していいのかは分からないけど。

なんというか、守ってあげたくなる子、というような印象を受けた。

「藤原肇、十六歳……普段は陶芸などをしています。皆さん、よろしくお願いしますね」

こちらもやや大人しそう……というか、穏やかそうな女性だった。言葉の一つ一つがしつかりとしていて、穏やかな中にも芯の強さを感じがわせる。

なんというのだろう。こう……チームリーダー向きの性格、というか。人を纏めることに向いていそうだ。

……さて、ここからか。

続いて、金髪の女性が出た。

「クラリスと申します。シスターとして神に奉仕する傍ら、こうしてアイドル活動に従事させていたことになりました。池袋さんと、一ノ瀬さん……と、フフ。氷菓さんも、よろしくお願いしますね」

「……？ 何だ、氷菓。知り合いなのか？」

「まあ、少し……」

シスター・クラリス。彼女については、知らないわけがない。ボクが暮らしてる施設にたまに訪問する、外国人らしきシスターさん。

同じく海外の血が入っていることもあってか——あるいは、ボクが施設の皆と距離を取っている場面が多いこともあってか、何かと世話を焼いてくれる優しいお姉さんではある。

ただ、外でこうして会うと気恥ずかしい。名前呼ばないでよう。……で、だ。

「おつつスウィーティー☆」

「!?」

「!?」

「はぁーい！ アナタのハートをシュガシュガスウィート☆ミ さと
うしんことしゅがーはあとだよ☆」

うわキツ。

「あれえ〜？ 反応が聞こえないゾ〜☆」

「……さ、佐藤さん」

「しゅがーはあとって呼んでね☆」

「え、でも」

「呼べ☆」

……シン？ しん……あ、「心」!?

で、佐藤↓砂糖!?! 佐藤^{さとう}心！ だからシュガーハートなのか!!

というか何なのこの人!?! 急に絡んできたよコワイ!!

何なのだこれは！ どうすればよいのだ!!

「ハイ次の人自己紹介行ってみよう」

「オイコラ☆」

根津P、すげえ。ここに割り込んで強引に進行させた。

敏腕司会者かよあんだ。

「はい！ 浅利七海あさりななみれす〜！ 世界初のおさかな系アイドルになるべく頑張ってるのれ、どうかよろしくお願いします〜♪」

心なしか、晶葉さんがホツとした表情をしている。

うん……しゅがーはあとさんに比べると、七海さんの方が薄味だね。

けどそれ、天●一品食べた直後に背脂マシマシな醤油ラーメン食べて「そこまで濃くないな」って思うのと似てると思うの。濃いことは濃いよ、彼女も。

それはそれとして、彼女の腕に抱かれたぬいぐるみも、彼女自身の自己紹介もあって魚が好きなのがよく分かるいい言葉だったと思う。

なんとなく人懐っこそうで、舌足らずなあたりがその印象を助長する。可愛らしい子だと思う。

……で、次は。

「大原さん、自己紹介」

「フゴツ？」

——何でまだパン食ってんの!?

あ、あれ二つ……いや三つ目!?

「フゴツ！ モゴモゴ……んぐつ、ごめんなさい！ 食べることに集中しすぎていました！ 大原おおはらみちるです！ 好きなものはパン&パン、最近のマイブームは焼きそば。パンをおかずにバゲットを食べるこトですね。よろしくお願いします！」

……す……すごい乙女おとめだ……。

一目見た時から分かってたけど、ボク程度の個性なんざ一足飛びに凌駕していきやがる。

へ……へへ……これが346のアイドルか……オラなんだか胃が

キリキリしてきたぞ……。

……でも、まあ。澆刺としてて元気が良い、可愛い子ではある。

吸い込まれそうなくらい純粹そうな瞳に、ふわふわの——もしやク
ロワツサンでも意識していらっしやる？——おさげ髪が良く似合っ
ている。

「それじゃあ、イヴさん」

「はあい。イヴ・サンタクロースです」

「……!?!」

「!?!」

ん!? 何だって!?!

いやちよつと待って!?!

「グリーンランドからプレゼントを届けに来たんですがあゝ……
ちよつとした事情もあつて帰るに帰れなくなつてしまいました……
でも、根津さんに拾つていただいた上に暖かい家とお仕事までいただ
けました! 来年もちゃんとプレゼントを配ることができるよう
頑張りますので、これから一緒によろしくお願いしますうゝ♪」

あれ? 大きな星がついたり消えたりしている……あつははは

……大きいや。彗星かなあ?

いや、違う。違うな。彗星はもつとこう……バアーツで動くもんな

……それにしても暑っ苦しいなあ、ここ。

うーん……出られないのかな? おーい、出して下さいよ。ねえ!

「わけがわからないよ……」

「安心してくれ。俺も当事者だけど何がなんだかさっぱりだ」

「いいんですか当事者」

サンタさんやぞ。

多分本物だぞ。

いいのか。そんなことでいいのか。

「……そ、そちらのトナカイは？」

「ブリッツェンと言います〜♪」

ブリッツェン。

「……な、なあ。確かブリッツェンと言えば、サンタクロースのソリを引くトナカイの一匹では……」

「……え、ええ」

……実によく懐いている。

もふもふだ。彼女にとってはアイデンティティに近い存在なのかもしれないが、しかし何故撮影所に連れて来たのか、これが分からない。

宣材と一緒に写る気だろうか……。

「で……そのブリッツェンの背中であんなに眠ってる子なんだけど……彼女は遊佐こずえちゃんと言うんだが」

「キミはチャイドルまでプロデュースしているのか？」

「違うよ!? こずえちゃん十一歳だよ!」

「えっ」

嘘やん。

「どこで拾ってきた!？」

「高知に出張に行った時に……」

「本当に拾ったのか!？」

「なんだか突然近くに来て……」

「ホラーか!」

ホントに個性派ばかりスカウトしてんなこのPは!!

「よし、最後に芳乃さん!!」

アツこいつ強引に話を切り上げやがった!!

「わたくし、よりた依田のよしの芳乃と申しましてー。失せもの探しならばお任せをー」

——と、自己紹介の直後、スツと芳乃さんの視線がこちらに向けられた。

どこか、値踏みするような眼だ。何だか、心の中まで見透かされるような……。

「……ふむー。多少遠い場所であつても、特に問題はないゆえー。気兼ねなく頼ってくれてもよいでしょー」

……何だ!? ボク何を見られた!?

どういう意図の発言!?! 何も分からなくてコワイ!!

「さて、そろそろ残りの三人も来る頃だと思っただけ……」

どうやら、ボクが戦慄してる間に遅れてた三人も到着したらしい。根津さんが扉を開けて三人の少女を招き入れる。遅れたのを取り戻そうとしてか、勢いよく入ろうとしすぎて転びそうにもなっていたが、なんとか持ち直したようだ。

「おつとつと……す、すみません! むらまつ村松さくら、ただ今到着しまし

たっ!」

「おおいしひずみ大石泉です。すみません、電車が遅れてしまつて……」

「土屋亜子つちやあこや。いやあ、でも本当、遅れはしたけど到着はできてラツキーだったよもおー」

「どうやら、同じ電車に乗ってきた……三人の……友達同士、だろうか。」

「小さなおさげ髪を二つ頭の後ろに作っている可愛らしい女の子と、黒髪ロングの落ち着いた雰囲気の子。それと、ボブカットで、眼鏡をかけた……関西の子なのかな？ 言葉のイントネーションにそんな雰囲気がある。」

「……よし、全員揃ったみたいだね！ それじゃあ、改めて自己紹介と行こうか！」

「見れば、三人もブリッツェンやしゆがはさんたちを見て、驚きに目を剥いているようだ。」

「これからもつと驚くことになるのは………多分、語るまでも無いだろう。」

4…ちよつと無理をする

「……はい！　そこでちよつとくるつと回ってみて！」

「……こうですか？」

撮影スタジオの中央付近で、カメラを向けられながらくるりと一回転。スカートが舞い上がらないように注意を払いながら、綺麗にその場でするつと着地する。

制服の上にパーカー羽織っただけで来たもんだから、ちよつと足元が心許ない。

……しかし、動作そのものは綺麗だったとは思うけど、カメラマンさんも根津Pも表情がよろしくないな。

「表情が堅いねえ。もうちよつとこう、ニコツつてできる？」

「こ、こうですか……？」

ニッゴォ……。

「う、ううん……もうちよつと自然に笑ってごらん？」

「が……頑張ります……」

悲しいかな、どうやらボクにとって笑顔というのは苦手科目らしい。

前世で、「喜びの感情は魂を濁らせる」なんてオサレなクソ理論でずーっと笑うことすら許されてなかったからだと思う。

……しかし、何でそんなことを強いられなきゃいけなかったのか。今考えるとムカつくな。

「え、笑顔……笑顔……」

ボクの後には、さくらさんと泉さん、亜子さんの撮影が控えている。

あんまり長く撮影を続けるのもまずい。

……仕方ない。ちよつとズルしよう。

ボクの前に、もう晶葉さんも志希さんも撮影が終わってる。その時の笑顔を構造解析した上で転写てんしゃ。そのままくるつと回って……！

「なんか違和感すごいな」

「プロデューサーさんもそう思いますか」

ちくしょうボクの何がダメだっていうんだ。

ど、どど、どうすればいいんだ。ここまでやってダメなら、他に方法が分からないぞ……!?!

まずい。まずいまずい、想定外だ。ぶたれるようなことは無いと思いたいけど、そうじゃなくてもこんなボクなんていらないうって言われてもおかしくは……。。

「氷菓ちゃーん。一緒に撮ーろーうー」

「……ひえ!?!」

と。

唐突に、そんな軽いことを言いながら、志希さんがボクの隣に躍りおど出た。

「え……え?」

「ふむ、良い趣向だな。さくらたちも一緒にどうだ!」

「えっ、いいの!?!」

「どーぞどーぞー♪」

「それじゃ一緒にさせてもらおうで——!」

「え、ちよ、ちよ……」

見る見るうちに晶葉さん、さくらさん、亜子さんが続いてボクの近くにまで来る。

泉さんはどこか呆れてるような顔してるけど、こういうノリは苦手なんだろうか。

……つて、そんなことより!

「な、なにしてるんです……? いいんですか、プロデューサー!?!」

「いいんじゃない?」

「いいよ」

「いいの!?!」

「よーしじゃあみんな変なポーズ! はい氷菓ちゃんもー♪」

「えひゃい!?!」

志希さんの号令に合わせ、みんなが各々思う通りの変なポーズを披露する。

その瞬間に、カメラのシャッターが切られた。

「うん!?!」

「よおし、次はカツコイイポーズだ! フウーハハハー!」

「にゃーっはっはっはー!」

「キメッ!」

「え、ええ、え、え!?! あ、えこ、こう!?!」

晶葉さんがどっかの狂気のムアツドサイエンティスト(二重表現)のポーズを再現するの continuing、ボクラら四人も思い思いのかっこいいポーズを取った。

こちらも、再びファインダーに収められる。いやいいのか!?

「あははは! よっしや、じゃあ次はコレやろ、コレ!」

言って亜子さんがスマホの画面を見せつける。

ギニュー特戦隊であった。

「いや流石にこれは」

「とおう！」

「!?」

の、ノリノリでやってやがる……! !

ち、ちくしょう、こうなったらボクも乗るしかねえ、乗ってやる。乗ってやるぞ!

「いいよいいよー」

よくねえよ撮るな!!

うう……何なんだろう、この新春かくし芸大会というか新年会で無茶ぶりされる新人めいたノリ。

順応できてるさくらさんと亜子さん、すごいな……。

「じゃーあ、可愛いポーズ！」

次に、当然のようにさくらさんの指示が出された。

これ、やっぱりボクもだよ。か、可愛いポーズって……ええと。

「えっと、えっと……あー！」

さ、最カワツ☆ ポーズ!!

——その瞬間、かしやりとシャッターが切られるのに合わせて、周りの四人がみんな揃ってスツと立ち去って行った。

あとに残るのは、当然ボクだけ。可愛いポーズを取って、カメラをパシヤリ。

結果、恥ずかしい写真と死ぬほど赤い顔のボクだけが残るのでしたとき。

「ぬああああああああああ!!」

「にやつははははは! ドッキリ大成功!」

「……ツ! ……ツツ! ……くツ!」

「笑うなあああ!!」

声も出せないほど面白かったと申すか根津P! 誰もいなけりや
ここで分解してたぞ根津P!

ごめんそこまでやる度胸は無いわ! でも毛根くらいは死滅させてた!

「あつ、でもいい写真だよ!」

カメラマンさんからカメラを受け取って、そこに表示されている写真を見せてくるさくらさん。

まあ……確かに、その。さっきの、仏頂面よりはよっぽどいいと思うけど……。

「緊張もほぐれたやろ?」

「……まあ」

大声と素をちよつとだけ出して、さつきよりはいくらか表情もマシンになった、と思う。

さつきよりも自然な風に薄く笑みを作ると、驚くほどすんなりと撮影は終わった。

なお、さくらさんや泉さん、亜子さんはもつと早く撮影が終わった。

泉さんはちよつと苦戦してたけど、それにしたってたかが知れる程度の時間だった。

少し泣く。

@———@

そんなこんなで数十分ほどして、ボクらは社内のトレーニングに訪れていた。

どうやらここではダンスレッスンが行われるらしく、それぞれ持って来た運動着に着替えて、これからレッスンをすることだった。

ボクや晶葉さん、志希さんは今日が初めてなので軽く、と念押しはされたけど……ちよつと不安だな。

保育園なんかには入らなかつた、というか入れなかつたから運動会なんかは無かつたし、小、中学校の授業の体育は……小学校に上がる前に錬金術を習得して運動している「らしく」見せる方法を編み出して以来、ずっとサボつてたようなものだ。

「よし、それでは、ダンスレッスンを行う！ ビシバシ行くから、覚悟するように！」

「はー！」

前に立つてボクらに指導しているのは、この業界でもベテランのトレーナーさんらしい、青木聖あおきせいさんだ。

26歳という若い年齢でベテラン、と表現することにはちよつと違和感があつたけど、そういうものなんだろう。芸能界だし。

「特に村松、大石、土屋は長く候補生としてレッスンしていたからな、心しておけ！」

さくらさんたちの方から、ひええ、と小さく悲鳴が上がつた。トレーナーさんのレッスンを受けたことがあるのかもしれない。となると、かなり——こう、厳しいレッスンなんだろうか。

だとすると、今後のことを考えるとちよつと怖い。自分の体力の限界がどこにあるのかもいまいち分からないし。

正直に白状すると、実際に体を動かしてるのは、それこそ登下校で数百メートル歩く程度のものだ。ボクはこの先生きのこれるのだろうか。

ちなみに、この場にいるのはボクたち六人だけだ。他の人たちは、それぞれボーカルレッスンや演技レッスンなどに向かっている。

「よし、整列！ まずは基本ステップからだ。手本を見せるので後に続くように。ハイ！ 1、2、3、4、5、6、7、8……」

……と、トレーナーさんの指示に合わせて、いわゆるボックスステップというステップを踏む。

足先だけの小技というか、本当の意味で「基本的な」ステップという印象だ。話によると、ここに上半身の動きや動作の緩急といった振り付けを加えることでちゃんとしたダンスになるらしい。

基本だけあってステップそのものは簡単だ。志希さんなんて、ものの数秒でマスターしていた。ボクはいつも通りの解析・模倣のコンボである。

さくらさんたち三人は、経験者だけあって楽々とステップを踏んでいた。一方、晶葉さんはと言うと――。

「1、2、3、4――動きが硬いぞ池袋！ 7、8……」
「わ、分かった！」

あの動き、ロボットか何かかと思うほどだ。

正確なんじゃなくて、極めて硬い。ロボットダンスを彷彿ほうふつとさせる。

運動は苦手なんだろうか。単にダンスやリズムを取るのが苦手なのかもしれない。

「2、3――ふむ？ 6、7、8――」

トレーナーさんが、値踏みするようにボクと志希さんに視線を向けた。

未経験者にしては上手いな、と思われたのかもしれない。

「よし、一旦やめ！ 五分間休憩。各自水分を取るように！」
「はー！」

その後、数分ほどこんな調子でステップを踏み続けていると、トレーナーさんから休憩の指示が入る。

……それにしても、ほんの数分間程度の運動だっていうのに、もう息が乱れてる。

それも、軽く運動をしたという程度のそれじゃない。フルマラソンでもしたんじゃないかってくらいの息切れだ。

ボクこんなに体力無かったのか。他の五人……晶葉さんですら、ほんのちよつとランニングして来た程度にしか見えないぞ。

いや、実際軽い運動程度なんだろうけど。
アカン。

「……げほっ」

「どうした、大丈夫か？」

「だ、大丈夫……大丈夫です」

嘘です。ゲロ吐きそう。

「ああ、そうだ。村松！」

「はいっ!？」

「お前たち三人は確か、全体曲の『お願い！シンデレラ』は踊れたな？」

「はい！ 大丈夫ですっ！」

「よし。ならば休憩が終わったら三人に見せてやれ」

「はい!!」

その後、トレーナーさんが持って来たラジカセから流れる音楽に乗せて、三人のダンスが始まった。

よくまとまった、綺麗な動きだ。それ相応に長く練習してきたのだ

ろう。

それだけじゃない。ダンスの間も、全く笑顔を絶やしていない。本当に楽しそうな雰囲気、見ているボクも思わず笑顔になりそう。やがて曲が終わった頃、誰からともなく、三人に向けて拍手を贈^{おく}っていた。

「これは……すごいな！」

「楽しそー。アタシも早くやりたいな〜♪」

「やるか？」

「いいの？」

あ、これ志希さんかなり興味惹^ひかれた顔してる。

「白河もどうだ」

「……やってみます」

ボクと志希さんにだけまず言ってみたということは、まだ晶葉さんは基礎固めをしないといけないという判断なのだろう。想像通り……というアレだけど、やっぱり晶葉さんは悔しそうにしている。ただ、振り付けを真似ている時足がもつれて転びそうになっているあたり、彼女自身声をかけられないことには納得はしているようだった。

「よし、それじゃあやってみよう。初めてなのだから、あまり気負わなくてもいいぞー！」

「はい」

「ほーい♪」

合図に合わせて、音楽が流れ始める。

志希さんのステップと振り付けはやや粗削りな風ではあるが、殆ど完璧と言ってもいいと思う。たった一回見ただけであれだけのこと

ができるなんて、本当にこの人は天才なのではなからうか。

それが天性のものなのかは分からないけど、体力もすごい。さっきの三人と同じように笑顔を絶やしてないし、顔色一つ変えてない。トレーナーさんや他の四人も目を剥いている。

……みんなが驚いているのは、ボクもそれに負けず劣らずのダンスを披露しているからっていうのもあるかもしれないけど。あまりに正確無比なそれは、たった一度だけ手本を見ただけの人間がやるものとは思えないはずだ。

しかし、あれだね。辛いね。ダンス。

全身運動で有酸素運動だ。さっきのステップと比べても運動量は段違い。一分を過ぎたあたりで、ボクの体力は底を尽きていた。

「ん……？ 白河の顔が青くなってないか……？」

しかしここまで来てやめるわけにもいかないし、そもそも模倣をどこで止めたらいいいのか分からない。

息が吸えない。吐くこともできない。酸欠で頭がクラクラして、でも呪いのように体は半ば自動的に動き続ける。

やがて本当の意味で限界に達したボクの問題と肉体は連動し、喉の奥からこみ上げる酸っぱいものがそのまま外へと――。

【自主規制】

「よし、これで掃除は完了だ。よくやったぞお掃除ロボダイソニング2号くん」

「消臭もオツケーだよ」

数分後。体力の限界を超えた結果マジで吐いてブツ倒れたボクは介抱されながら部屋の隅でうんうん唸っていた。

晶葉さんと志希さんはその技術を有効活用しながら事後処理をすぐに終えている。ブツを処理したのは晶葉さんが発明したという口ボで、志希さんはパツとおいを処理してしまっていた。

「しかし、なんだな。ここまで体力が無いとは」

「本当にね……。大丈夫、氷菓？」

「コーホー……」

「まだちよい辛いて」

「何で今ので分かるのよ」

当の本人であるボクなのだけど、硬い床に寝かせるのは良くないとこのことで泉さんに膝枕されていた。口元には酸素缶。

下心？ なんもん持つてる暇も余裕もないわ。

しかし何だこのナメクジと同レベルのクソみたいな体力は。自分のことながら驚きだよ。

さっきの体力の消耗具合でなんとなく察せられてたけどさ……体力づくりとか、全くしてなかったからこうなるのも当然かもしれない。

ずーっと研究研究また研究、休みはゲームばかりで閉じこもって、あとは寝るかアイス食ってるかという出不精アンド引きこもり……社会不適合者もいいところじゃん……。

「大丈夫？ 救急車とか呼ぶ？」

「……いえ……」

「水あげよか？ まだ無理？」

「むりれす……」

七海さんみたいな口ぶりになってしまった。

「仕方ないな、白河は少し休め。他は練習再開。大石、白河はこっちに寝かせておけ」

「あ、はい」

と、冷たい感触の上に載せられる。これは……氷枕、だろうか。心地よいし、あのままだと泉さんの練習の邪魔になってただろうか、こつちの方がいいか。

「一ノ瀬もそうだが、何でこう同時期にこずえくんと同レベルのことができる人間が何人も出てくるのか……」

……えつちよつと待つてこずえちゃんつてあの子そんなことできたの？

驚きなようなそうでもないような不思議な気分だ。やつてもおかしくないかも……という気持ちもあり、その一方でそういう方向性の子なのかという驚きもあり……。

何にしても色んな意味ですげえアイドルばかりだ……。

「だが、ここまで体力が無いのも前代未聞ぜんだいみもんだな。流石に体力をつけないとまずい。分かるな？」

「……………」

頷く。

流石にこれはまずい。というかひどい。ボク自身ですらその程度わかるわ。

「これは、特別メニューを組む必要があるな」

それは——多分、その方がいいのは間違いない。

もう一度頷いて、同意を示した。

——その後、レッスンは昼まで続いた。

志希さんは最初から上手いという規格外だからともかくとしても、

晶葉さんの技術の伸びには目を見張るものがあつた。

元々努力家であつて、努力を「もの」にするのが上手いのかもしれない。

晶葉さんだけじゃない。さくらさんたちもそうだ。努力の結晶というものを目の前で見せられたんじゃないや、負けてられないな、と。そう思わされるレッスンだつたと思う。

5：先輩に会う

最初に行われる基礎レッスンがひととおり終わってからだいたい数十分後、ボクは数人のメンバーと一緒に346プロダクションの女子寮へと向かっていた。

簡単な手続きをした後、みんなの準備を待って、本社ビルから根津Pの運転する社用車で数分。

実際に見てみるとその光景は壮観なもの、と聞いている。

346プロ自体東京の一等地に社屋を構えてるだけあって、資金力は相当なものだ。その346プロが直営している女子寮だっていうんだから、推して知るべしというところである。

まず、かなり豪華な食堂がある。一人当たり一室が割り当てられている上に、冷暖房も完備。トイレ風呂別。大浴場あり。

基本的に学生が住むことになるためか、家賃もかなり安い。基本的にお給料から天引きだそうで、所属アイドルとしてはほぼその辺の心配はいらないとか。

あくまで、既に入寮の手続きを済ませて下見を終えている肇^{はじめ}さんたちの評だから、ボクはまだ見てないんだけど。

実に至れり尽くせりな寮なんだけど、ここに辿り着くまでにはちよつとした問題があった。

「何で佐藤さんまで？」

「悪いかよ☆」

しゅがーはあと（佐藤心・26歳独身）である。

ボクは東京出身（という事になってる）だけど、元々が施設の出だからこれに関しては特殊なケースとして置いておく。

二度目になるけど、346プロ女子寮はあくまで地方から出てきた「学生向けの」女子寮だ。だから、この場にいるのは関東圏以外の出身の人が殆どになる。

鹿児島出身の芳乃さん、福井出身のみちるさん、岡山出身の肇さん、

青森出身の七海さんに、岐阜出身のマキノさん。それから、住所不定元サンタクロースのイヴさん……と、名前を上げていけば納得のいく面々だと思ふ。なおブリッツェンは後で軽トラで運ぶとのこと。

そこに割り込んでくるのが、長野県出身の佐藤さん（26）。

なおツツコミを入れた当の根津Pは肩パンを受けて沈黙していた。やめろ佐藤。運転中にそれはマジでヤバイ。

「……あ、そうだ！ 白河さんは何で寮に入ろうと思ったんだい？」

話をこつちに逸らしやがったなこの野郎。

「今話すことでもないですよね」

「でも気になるじゃないか。通勤に不便は無いよね？」

「そうなんですか？」

「……単に家を出たかっただけです。部屋を空けなきゃいけないし」

「ご兄弟でも？」

「まあ……そのようなものです」

何でだろう、予想外に肇さんが食いついてきた。

その後ろでマキノさんが眼鏡を光らせている。そんなにもボクのことになるのだろうかこの人たち。

ボクなんて木っ端だよ木っ端。吹けば飛ぶ程度の存在だよ気にしないでおくれよ。

「し——」

「……………」

「？」

「ん、んッごめん何でもない」

根津Pが「施設のこととは言わなくてもいいの」とでも言いたげに口を開いたのでバックミラー越しに睨み付けると、すぐに沈黙した。

……わざわざ言わなくてもいいんだよ、そんなこと。変に気を遣われても困るし。」

「甘えるべき時に甘えることもー、子供としての務めでしてー」
「必要ならそうします」

……芳乃さんはどこまで見抜いてるんだろう。

意味深なこと言ってるだけにしても、いくらなんでも核心を突きすぎだ。

「お部屋はどこになるんですか？」

「ちようど空いてる部屋らしくって……この部屋です」

「モゴツ……あつ。あたしのお向かいさんですね」

「七海のお隣れすね〜♪」

「よろしくお願いします。こつちのお隣さんは……？」

「そこは早坂美玲はやさかみれいさんの部屋ね」

「あ……ご存じなんですな」

「フフ。リサーチは完璧だから」

やたら堂に入いった動作で、マキノさんが眼鏡をクイツとした。

この人この動作好きだな。

「でも、貴女のこととは分からなかった。なぜかしら？」

「ことさら、隠してるつもりは無いんですけど」

「隠してるつもりじゃないのに調べられない、って。私のこと、挑発してるっ。」

「そんなつもりじゃ……」

「ふっ、冗談よ」

心臓に悪い冗談を言ってくるなあ……。

「じゃあ質問！ 氷菓ちゃんの好きなパンは何ですか!？」

「え。か、カレーパン……?」

「好きなおさかなはなんれすか?」

「……カツウオ……カツオ……が」

「好きなスイーツ☆ は何かなく?」

「アイスクリーム」

「名前まんまじゃねえか☆」

「……じゃあ葛湯で」

「渋いなオイ☆」

市販品の抹茶葛湯とか美味しいし仕方ないね。

自分で葛粉買って作ればそれほどお金も要らないし。

うん、しかしねマキノさん。こんな些細なことをメモしなくていいんですよ。

「じゃあ、今度お湯のみ差し上げますね」

「え。いいんですか……?」

「はい。いつも作っていますから、お近づきのしるしに」

「あ、ありがとうございます」

そういえば肇さん、陶芸が趣味だと言ってたっけ。

……根津Pも肇さん作の湯飲み持ってると言ってたな。いつも作ってるって、どのくらいの頻度で作ってるんだろう……?」

「何か欲しいものってありますか?」

「え、欲しいもの……?」

「はい」

自由という言葉の意味と定義とその概念について教えてください。
いやいや。流石にそれはダメだろ。

自分でちゃんと考えてちゃんと結論を出さなきゃ。聞いて駄目

だったとなったらイヴさんにも失礼だ。

「ハーゲンダッツとか……」

「ううっ!？」

「えっ、ぼ、ボク変なコト言いました!？」

「は、はーげんだっつ……」

「単にお金が足りないだけだと思ひましてー」
「……………」

オチがひどいよイヴさん。

ダッツ買えないほどお金に困ってるのイヴさん。

「む……無理はされない方がいいですよ……」

「ごめんなさい……力不足です……」

「い、いえ……大丈夫ですから……」

もしかして世の中のサンタクロースという存在は皆自腹を切つて子供たちに夢を与えているんだろうか。

だとすると尊敬はするけど今回のように色々いたたまれなくなるのは本当に勘弁していただきたい。

世界サンタクロース協会的なものから支援金降りたりしないのかな……。

「お。そろそろ到着するよ。みんな準備してくれ」

「「はーい」」

と、ちょうどいいタイミングで寮に到着したようだ。

それぞれ、自分の荷物を準備——と言ってもみんな手荷物程度だけで——して、ボクたちは停車を待った。

@——@

話には聞いていたけど、こうして到着して改めて見てみるとすごい建物だ。

学生向けの寮と言う割に内装は綺麗で、談話室なんてなんというか、モダンでシック……？ な雰囲気は漂う空間になっている。

個人の部屋も一室一室がちゃんとワンルームマンションのようだが、少なくとも前のボクの部屋よりだいぶ広い。

部屋に辿り着くと、施設の方から送っていた段ボール箱が目についた。

中身は、ゲーム機やテレビなどの大型家電と家財道具、それとボクの私物の本。中身は漫画本や小説、それと、色々あって以前集めていた錬金術関連の稀覯本^{きこうほん}。本棚は適当に材木でも買って錬成すればいいやと思つて買ってない。後々この辺は何とかする予定だ。

「やっ、と」

壁に軽く手をつくすと、次の瞬間には殺風景^{さつふうけい}な部屋にボクの持つて来た荷物が全て適切に配置されていた。錬金術のちよつとした応用である。

これでいくらでも生活はできるから、ここはこれでいいとして、問題は——やっぱり、近所関係かな。

お向かいのみちるさんとお隣の七海さんにも改めて挨拶に行くとして……問題は、もう一人のお隣さんの早坂美玲さんか。

一応、部屋に来るまでの間に一通り彼女のことには調べてみた。

今年結成されたユニット、「インディヴィジュアルズ^{インディヴィジュアルズ}」のメンバーで、服飾ブランド「Girls & Monsters^{ガールズ&モンスターズ}」とのタイアップも積極的に行っているらしい子。

この前の「とどきら学園^{まえかわ}」では前川みくさん、安部菜々^{あべなな}さん、市原^{いちばら}仁奈^{にな}ちゃんと言った面々と一緒に「どうぶつさんチーム」としての出場を果たしているとのこと。CMでも時々姿を見ることができ、売れっ子と言つても差し支えないんじゃないだろうか。

ネット等では「かつこいい」「かわいい」という意見が半々で見られ、そこに混ざって「妹にしたい」という意見も見られる。最後のそれはどう見てもただの過激派だけど、人物像を掴むのに役に……立つんだろうか。

「……まあ……いいか」

どれだけ考えてもなるようにしかないだろう。ここまでやって分かった。

ここまでほとんどイレギュラーしか無いんだ。ボクもういちいち考えるの疲れたよ。

気が合わなかったらその時はその時ってことにしよう。

「早坂」と表札の掲げられた扉の前に立って、インターフォンを押し込む。

ぱたぱたという小さな足音が聞こえて、すぐにインターフォンから声が飛んで来た。

『誰だッ!』

「ひぐっ!?!」

——警戒心丸出しの声が聞こえてきた瞬間、ボクの心は半ばぼっきりと折れてしまった。

引きこもりにとつて、この声はひどく辛かった。

いやもう無理。辛い。拒絶されてると思うとどうしても心にクッ。穴でも掘って埋まっていたい……。

「お……お隣に入居した者です……」

『何の用だッ!』

もうやだ帰りたい。

こんな露骨に警戒心剥き出しにされるともう心が砕けそうだ。

こういう反応の方が普通なんだよと言われるとそうかももしれない。スターライトプロジェクトのみんながとっつきやすい雰囲気の人ばかりだから忘れてた。こういう反応の方が普通なんだよ。

……普通の反応なのは分かっているんだけど、もうとっくにボクのグラスハートはボドボドだ。

「ど……どした……？」

うなだれたまま半ば氣力を失いつつあるボクに、背後から声がかかった。

小さい声、だけど確かにこちらを心配している声だ。

「あ、す、すみません……邪魔だったらどきます……」

「いや……邪魔とか思っていない……フヒ……」

フヒ？

「それより、美玲ちゃんに用事でもある、のか……？」

「今日、ここに来たので、挨拶をと思って……」

……あれ？

振り向いてみたから分かったんだけど、この人……さつき調べた「individuals」のシングルのジャケットに写ってた一人じゃないか？

特徴的な灰色の髪や身長から察するに、星輝ほししょうこ子さん。YOUスターライトプロジェクトに参加しちやいなYOと言いたくなるような名前だけど、既にデビュー済みなのでそういうわけにもいかない、んだけど。

この人、ジャケット写真と雰囲気が違うな……？

「入れてもらえなかった……？」

「……なんだか、拒絶されてるみたいで……」
「あ……美玲ちゃん、知らない人が来たからびっくりしてるんだな……」

言うと、輝子さんはボクに代わって美玲さんの部屋のインターフォンを押した。

「美玲ちゃん。私だ。輝子。お客さんもいるから、開けてほしい……」
『シヨーク? お客ツ!? ちよ、ちよつと待ってるッ!』

慌ただしく部屋の中を駆けまわる音がしたと思ったら、しばらくして部屋の中から美玲さんが姿を現す。

恐らくはいつも通りなのだろう、Girls & Monstersの特徴的なファッションがまず目につく。部屋の中からフェルトの爪とフードの耳、それとハートがあしらわれた眼帯だけが覗いていて、表情はよく見えない。

しかし輝子さんはまるで意に介した様子もなく、ごく普通に話しかけていた。

「き、来たよ……」

「うん……それで、そっちのヤツは誰なんだ?」

「知らない人だ……」

「そのくらい知ってるよッ!」

「……あの」

「な、なんだよッ! ひっかくぞッ!」

「すみませんでした……出直します……」

「えッ!? ち、違ッ……ウチそんなつもりじゃ……」

「フヒ……だ、大丈夫だぞ。美玲ちゃんは、怖くない。美玲ちゃんトモダチ」

——言って、二人は立ち去ろうとするボクをその場に押し留める。

「わ、悪かったよッ！ 知らないやつがいると思って、びっくりしたんだ……」

「美玲ちゃん……実は、けっこう怖がりだからな……それに、346プロの人は、結構、押しが強い……美玲ちゃんが引いても突っ込んでくる人が多い……」

「ウチにもイメージがあるんだから、そういうこと言うのやめろよなッ」

「で、でも事実……フヒ。それで、その。どちら様だ……？」

「あ、と……ごめんなさい。白河氷菓、と言います。今日から346プロの所属アイドルになったので、挨拶に参りました。よろしくお願います」

「ん、早坂美玲だ。よろしくな」

「星輝子。コンゴトモヨロシク……」

改めての自己紹介になってしまったが、今度は難なく受け入れてもらえたようだ。

手土産も受け取ってもらえたし、これで解決かな——なんて思っていると、美玲さんは「そうだ」と一言切り出した。

「改めて、さつきは悪かったな。立ち話もなんだから、ちよつと上がっていくか？」

「いいんですか？」

「うん、別にいいぞ。な、シヨーコ」

「そ、そうだな。トモダチが増えたらいい、しな」

「じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて」

促されるまま部屋に上がると、そこは想像通りと言うべきか、Girls & Monsters やその関連商品に埋め尽くされた鮮やかな色の溢れた空間だった。

黒と桃と紫。美玲さんのパーソナルカラーとも呼ぶべきそれを部

屋中に敷き詰めた光景は、この部屋が「早坂美玲のものである」、ということを、雄弁に物語っている。

「お茶でも淹れてきてやるよ。ちよつと待ってて」

「い、いや。私がやるぞ……」

「えっ」

……何故美玲さんの部屋で輝子さんがお茶を？

そう思つて見ていると、数分ほどもせずに輝子さんが台所から戻つてきた。

「しいたけ茶だ。フヒ……う、美味しいぞ」

「し、しいたけ茶？」

「……い、いただきます」

すごい、なんとというか……一言では表現できない感じの見た目だ。名前のごとく小さなシイタケが浮いているし、普通の、いわゆる日本茶とは違つて色も茶色い。烏龍茶かほうじ茶の系統だろうか？匂いは悪くない。むしろ良い方。だと思う。

「ウチもいただくぞ……んぐ」

「……ごく」

「……ど、どうだ？」

「お、美味しいです」

「うん、美味いなッ。でも、これ……」

「………はい」

美味しいスープだコレ!!

美味しい……美味しいんだけど、お茶のそれじゃない。椎茸で取つたダシのスープだ。

濃厚な旨味の中に淡い塩味がキュツときいてきて、かなり美味しい

んだけど、やっぱりスープだよこれ。

「いいだろ……私のおすすめだ」

グツとサムズアップされた。

この反応狙ってたんかい。

「そういえばこの前、紅茶キノコっていうのを見たんだけど、シヨーコはあれ、興味ないのか？」

「あれは菌糸類だけど、キノコじゃない……もつと別の菌で作った、発酵飲料だな……」

「知ってることは知ってるんだな？」

「き、キノコだからな。調べたんだ。けどキノコじゃなかった……紅茶キノコとはトモダチになれない……」

……な、なんとというか、キノコに対してすごい拘りのある人なんだな輝子さんは。

すごい情熱を感じる。しかし、友達ってどういうことだろう。キノコが友達……？

ボールは友達みたいなニュアンスのそれかな？

「でも、氷菓ちゃんはトモダチになれそうだ……」

「えっ、と。ありがとう、ございます。でも、何でそこまで？」

「臆病なところとか、驚き方とか、変に消極的なところとか、乃々^のちやんに似てる気がした、からだな……」

「ああ、言われてみれば」

「え、ええ……？」

それは……良い評価なんだろうか……？

臆病で変に消極的で……って、あんまり良い方向じゃない気がする。でも事実だからこれ、何も言い返せないんだよなあ……。

ボクの問題はずっとボドボドだ。

……でも、友達になれそうっていう点は、いいかな、と思う。

思えばボク、友達そんなに多くないし。学校のユルい付き合いっていうのも、基本的にこう、付き合いとしてひどく浅いものだったし……。

うん。そこは素直に嬉しい。

「思えばノノも最初はこんな感じだったな、妙に距離があって、近づいたら縮こまってすぐ逃げそうなカンジで」

「フヒ……ずっと威嚇してた美玲ちゃんがそれ、言うのか……」

「う、ウチはいいんだッ！　ということにしてくれ……」

「……ふふ」

「や、やっと笑った、な……」

「……あ、ご、ごめんなさい」

「別に怒ってないだろッ」

「アイドルだからな。笑うの、大事だ……」

と、輝子さんもニヤツと軽く笑みを見せた。

この人、人たらしとか言われないうか。今日出会ったばかりのボクでさえ結構コロッといっちゃいそうなんだ。仲の良い人、結構多いんじゃないかな。

「わ。私もそんなに、笑ったり、得意じゃなかったけど……。本当にぼっちだった時、親友に話しかけてもらって、アイドルになってから、もうちよつと自然に……だな」

「親友、というの？」

「担当プロデューサーのことだよ」

「は、初めてのトモダチだからな。大親友だ……」

……なるほど。晶葉さんが根津Pのことを助手と言っているようなものか。

346プロのアイドル全体に言えることだけど、基本的にプロデューサーとアイドルは距離感がやや近い。

親密な方が精神面でのケアもしやすいだろうし、良いことなんだろうけど……これ、標準的なのかな。

別に不健全な関係になってるような人がいるわけじゃないし、いいか。

「親友に声をかけてもらったことで、私も、ぼっちから抜け出せたから、な……ほ、他の人が困ってたら、同じように声をかけることにしてるんだ……」

「……立派ですね」

「そうだなッ、シヨークは立派だ！」

ああ……なんだろう。この二人、いいなあ。

友達のことを褒められたら嬉しいなっちゃん、みたいな。そういう友達がいるっただけでも、羨ましい。

ボクもこういう友人ができるだろうか。

できるといいなあ、と、思う——思うんだけど。

……どうしよう。スターライトプロジェクトの面々がまず頭に浮かんで来てそれどころじゃない……！

まずボクはそもそも強烈な個性を持つ彼女たちに自分から近づいていけるのか？

気後れしまくって結局最後まで距離を取ったままかもしれない。それはマズい。それはマズいぞ……！

……とりあえず、隣の部屋の七海さんと仲良くしていくことを当面の目標にしよう。

そこから、まあ、なんとか、頑張つていけると、いいなあ。

「ヒョーカも、何か困ったことがあったら言えよッ！ お隣で、先輩なんだからなッ！」

「分かりました。困ったことがあったら、相談しに来ます」

「……………うん。うん？ まあ、そうなるけど、ケドなあ」
「？」

「先輩後輩って関係だと……すごい距離を感じる」

「確かに……ずっと、溝が、ある、感じ……フヒ……」

「それ自体は普通のことでは……？ 後輩は、こう、先輩を立てるものですし……」

芸能界は上下関係に厳しいと聞く。

先輩を少し蔑ろないがしにするだけで芸能人生が終わってしまう——という話も、噂には聞くことだ。

「ん〜……やっぱ先輩後輩ってのヤメツ！ なんか、聞いててすつごいムズムズするッ！」

「そ、そうですか……？」

「あと、距離がすごいあるのもイヤだなッ！ 上手く言えないけど……嫌われてるみたいだ」

「え、いや、そんなことは……」

「い、いいじゃないか……氷菓ちゃんもトモダチ。……私も嬉しい」

「お隣さんの友達って方がウチも楽なんだ。ついでその敬語、やめろよなッ！」

すごい勢いでビシッ、とフェルトの爪を突き付けられた。

そうやって言われて……なんだろう。悪い気は、しない。

いや、やっぱ嬉しい。うん。嬉しい。

拒絶されてなくって、こっちからも拒絶しなくていいっていうのは、やっぱり、嬉しい。

今は、ボクの交友関係に口出しして縛り付けてくるような人は、いないんだ。

誰とどんな付き合いを持ってても、構わないんだ。

「……………ありがとう」

「い、いいってことよ……」

「へへ。同じアイドルなんだ、仲良くした方がいいに決まってるしなッ！」

その後はしばらく、輝子さんと美玲さんと話して過ごした。

こんな風に女子と仲良く会話をしたことも、考えてみたら無かったかもしれない。

やがて、他の部屋に挨拶に行かなくやいけないことを思い出して話は切り上げたけど、それが無かったら、あのまま数時間ぶっ通しで話し続けていたかもしれない。

恐るべし、ガールズトーク。

なお内容の五割はキノコのことだった。

6：敬語をやめる

爽やかな朝の陽射しが差し込む346プロのトレーニングルーム。アイドルの先輩方や職員の方々が体力維持や体型の調整などにいそむ姿が見られる。

その中に一人、ボクは酸欠で死にかけていた。

「氷菓ちゃん!?!」

トレーナー四姉妹の一番下の妹さん、見習い^{ルーキー}トレーナーの青木^{あおきけい}慶さんが、そんなボクを見て悲鳴を上げた。

予想外だったんだろう。まさかルームランナーで500メートルぼっち走っただけで限界を迎え、挙句の果てに操作パネルに誤って手を突いた結果最速モードになって阿修羅火玉弾か何かの如くに射出されていくなんて。そもそも阿修羅火玉弾がどの程度通じるか分からないけど。

「だ、だ、大丈夫!?!」

「さ……酸素を……」

床に突っ伏した状態から何とか腕だけ伸ばして、慶さんが持ってきた酸素缶を受け取る。

口に当てて、深呼吸。ほんの少しだけ楽になったのを見計らって、こてんと仰向けに転がった。

「どうかな、楽になった?」

「ラクに……なりそうです……」

一瞬「召される」なんて言葉が浮かびそうなくらいには。

「500メートル、つと……うーん……流石にこれじゃあね」
「ハイ……」

二人して、思わずため息をつく。

どうやらボクの体力の無さは想定の数割増しで深刻なようだ。

ボクの体力が尋常じゃないほどアレだということに気付かされたその翌日、つまり今日。ボクはトレーナーの聖せいさんに「特別メニュー」についての話を伺った。

そこで言い渡されたのが、基礎「体力」トレーニングの徹底。ボールも、ダンスも、演技も今は全部置いておいて、体力をやることだけに注力すること、だ。

ボク自身、それは望むところだ。流石に昨日みたいな醜態、そう何度も何度も見せられてたまらなくなって話だよ。

——とか思ってたらご覧の有様だけだな！ この心身クソザコ錬金術師!!

働かない動かないを公言してはばからない先輩アイドル、という一行で矛盾を引き起こしている存在であるところの双葉杏ふたばあんずさんだつて、ここまで体力が無いなんてありえない。もうホントボクはさあ……!

「息が整ったら、もう一回行ってみようか」

「……はい」

慶さんは大学生で他のお姉さんたちみたいくレッスン專業つてわけじゃない。だから実は、今回のこれが初めての専属レッスンだったりするらしい。

本当に申し訳ない。始めから難易度EXTREMEとかそんなんだ。本当にどうかしてるぜ。誰か助けてあげてください。

「ふう……」

座っていたら徐々に息も整ってきた。

疲れはあるけど、泣き言も言ってられない。せめて難易度がもう少しよつと落ちるように、ボクが頑張らなきゃいけないんだ。

「……じゃあ、もう一回行きます。慶さん」

「うん、頑張つて！」

——その後、限界ギリギリまで走っては体力が尽き、走っては体力が尽きを繰り返して、数時間ほど。

お昼の鐘が鳴った頃、ようやく体力トレーニングはひと段落ということになった。

昼食休憩が終わつたらまた改めて再開だ。ウッフ、キツイなんてレベルじゃありやしねえ。

「あ……あ、りがど……ごまじだ……」

「う、うん。ゆつくり休んで……」

もうへロへロというかヨレヨレというか、もう完全にボロボロって感じだ。

汗はダクダク、眼鏡は曇つて前が見えないし足もガクガク。喉の奥からあふれ出しそうになるゲロを気合で押し留めつつ、更衣室で運動着から着替える。

昨日と同じ、制服にパーカーを羽織つただけの格好。しかし、これ以外にあんまり服持っていないし、どんな場面でも使えるから問題は無い、と思う。臭いも錬金術のちよつとした応用ですぐ消せるし。

ふらふらした足取りで、軽めの昼食を摂るべく346カフェへと向かって行く。

こういう時に会社に併設されてるカフェがあるっていいね。移動に労力を使わずに済む。

そもそも移動に対して労力だの何だのなんて言い出す時点で色々

とどうかと思うけど、今のボクには仕方ない。

「……………あう」

今日は吐くことは無かった。慶さんがある調整してくれてたものもあるけど、ボク自身あの件で「やりすぎると逆に周りに迷惑をかける」ってことを理解したのも大きいかもしれない。

それでもこの有様だ。果たして胃が食べ物を受け付けてくれるかどうか……………。

「お、来たな。おーい、氷菓ー!」

と。

俯きながらそんな心配をするボクへ、不意に声が届けられる。

顔を上げると、346カフェの店内から外に向かって手を振っている子の姿が見えた。晶葉さんと七海さん、それにみちるさんだ。店内に入ると、すぐに三人から手招きされて席に座らされた。

「お疲れ様れす〜♪」

「お、お疲れ様です……………どうしたんですか、三人とも……………?」

「氷菓ちゃん一人でごはんじゃ寂しいかなって、待ってました!」

「え、そ、そんな。そこまで気を遣っていたただかなくても……………」

言ってもこれ、ボクの問題だし、このくらいのこととは仕方ないって
いうか……………それで皆を付き合わせるのも非常に申し訳ない。

「気にするな、その分長めにレッスンの時間を取ってきた! 助手と
トレーナーにも許可は取ったしな」

「それに、仲間なんだからそういうの言いつこなしれすよ〜♪」

「はい、じゃあ座って座ってー!」

——と、気付けば何やかやでボクは皆の座っている四人掛けの席に座らされていた。

別に抵抗する気は一切無いんだけど、何の抵抗もできない間の出来事だった。

やがて、呆然としている間にも料理が運ばれてくる。ボクのところにはパンとスープ、みちるさんのところにはパンケーキ、晶葉さんにはパスタ、七海さんにはパエリアという具合……パエリアなんて手間のかかる料理が何でカフェに……？ いやもう考えるの面倒くさいや。

「しかし、はぐ。一人だけ別の特訓メニューとは、穏やかじゃないな」
「……ボクだけ体力がありませんし、仕方ないです」

「でも……むぐ。ダンスも歌もすつごく上手だったんですよ！」
「七海はちよっぴりダンスが苦手だから羨ましいれす」

七海さん、ダンスが苦手なのか。

こんな風に言うつてことは、さつきまではダンスレッスンがあつたんだろう。ボクもみんなと一緒に参加したかったところだ。

……それはそれとして、それでよくこんな普通に食べられるな。ボクが特別体力に乏しいだけだけとはいえ……。

「氷菓さん、何かコツとか……あれ？ 食べないんれすか？」

「あ、ええと……レッスン直後だからその、食欲が……」

「む、それはいけないな。こういう時にこそ食べなければ体にも脳にも悪いというのに」

「モゴ……その通りです！ 炭水化物を摂らないと！ さき、フゴツと」

この人自分の行動を自分でネタにしにきおつたな。

そういうバイタリテイの強さは嫌いじゃないわ。

それはそれとしてもつと良い表現あつたら。

「それに、氷菓は細い……………というかむしろそれを通り越して『薄い』と感じるくらいだからな。もつと食べる」

「お風呂で見たとき、アバラが浮いてたくらいいれすからね」

七海さんのその発言に、思わずと言った様子で晶葉さんとみちるさんの視線がボクに注がれた。

食の溢れる現代日本、アバラが浮くほど痩せているような人間はそうはいない。

反応としては、考えてみると確かに妥当ではあった。

「……………そんなこと無いデスヨ?」

「七海、押さえろ」

「あいれす」

「な、なにをするきさまらーッ!」

追求されると面倒くさい。はぐらかすために適当なことを言ってしまう———と思ったその直後、ボクは椅子を挟んで七海さんに羽交い絞めにされてしまった。

そして、晶葉さんに上着を半分ほどめくられる。店内でかつ角度的に見える位置じゃなかったから良かったものの、突然何をしでかしてるのこの子は!?

「や、やめっ」

「よし終了、解散! ……本当に七海の言う通りだな」

……………拒絶の声を上げたその瞬間にやめやがった。タイミングの良いお方やでえ……………。

「確かにこれはヤバいな」

「氷菓ちゃん、炭水化物です。炭水化物を食べましょう!」

「む、むうーりいー……」

しまった、昨日教えてもらった森久保乃々さん風の拒否の仕方を出してしまった。

……しかしながら、ボク自身も自分が痩せてるって自覚はある。こずえちゃん……には流石に及ばないまでも、結構な痩せ型というか、もうペラツペラだ。だから体力無いのもあるだろうけど……。

「身長と体重はいかがですか？」

「140cmで30kg……」

「ちっさ」

「かつる」

わあ。二人が可哀想なもの見るような眼でこっち見てるぞう。

で、でもボクとほぼ同じ身長体重の人もいるし！ 双葉杏さんとか

！

比較対象にするには不適切だね!!

「道理であの時あんなことになったわけだ。もしかして氷菓、君は普段食べていないのか？」

「そ、そんなこと無いデスヨ」

「嘘だな。この嘘発見器トジロジツパー君4号が反応している」

何そのどっかのギャングの幹部みたいな名前は。

「嘘をついているな？」

「そんなことは」

「眼が泳いでるれす」

い——いや、流石にハツタリだ。フツ。そんなことも分からないボクじゃないさ。プログラミングのことはまあ、よく分からないけど、

内部構造を解析するに特別珍しい素材は使われてない。

普通の嘘発見器つてものは、汗や脈拍、目の動きなどからそれと判断するものだ。触れてすらいらない状態で分かるわけないだろ！

ブザー音が鳴った。

「嘘をついているな」

嘘だろ承太郎。

「……か、『家族』が多いから、下の子にはお腹いっぱい食べさせたいんです」

「でも氷菓ちゃんが食べる分まで渡さなきゃいけないほど……なんでですか？」

「貧乏ですから」

嘘は言っていない。嘘はね。

本当のこと言ってもまた変に気を遣われても、それはそれで困る。ボクの方が気後れするし、色々辛い。

施設出身者は偏見に晒されるものなのだ。

「それでも、今は食べるべきだぞ。何せ体が資本なのだからな」

「はあ……」

「昨日の歓迎会の時は食べてたように見たんれすけろね」

「あ、言われてみれば」

「いや、それは……無料だったから……」

「いたたまれなくなるからやめるんだ！」

聞かれたから答えただけじゃん！

「そういえば歓迎会の時、氷菓さんもつと砕けた口調で喋ってませんでしたか？」

「むっ。そうなのか？」

「そういえばそうでしたね。輝子ちゃんや美玲ちゃんと話してる時はもっと……」

「ほほう」

くっ！ 何でいちいち食いついてくるんだ！

そりや昨日ちよつとは自分から近づいていかなきゃ……って思ったけど、そつちから来るのは想定外だよ！

たすけて美玲さん！ あ、美玲さん敬語やめろって言った第一人者だわ。ごめん何でもない。

「なら私たちに対しても敬語をやめたらどうだ？ というかやめた方がいいぞ、うん」

「え、いやでも……」

「ニブいな。とっつきにくいと言っているんだ！」

はつきり言われちゃった!!

「七海やみちる、肇のように体に染みついたようなものじゃないだろう、それは。私の見立てでは、あくまで礼儀としてやっているだけだ」
「れ、礼儀は大切ですよ……」

「無理してる感結構ありますよ？」

「む、無理なんて」

ブザーが鳴った。

ちくしょう高性能だなあの嘘発見器!!

「……ああもう！ 敬語やめればいいんだろ、やめれば！」

「なんだやればできるじゃないか。その方がよっぽど自然だぞ」

「そんなこと言ったって……こんな風に、なんていうか、親密に話せるような友達っていうのも、その、昨日までいなくって……」

……す……すごく優しい笑顔で見られている……。
聞いた張本人の晶葉さんだけじゃない。みちるさんや七海さん
で。

「いいんだぞ」

「何が!？」

「意地を張らなくとも」

「張ってないよ!」

ああ、もう調子狂うなあ!!

ボクのこと心配してくれてるのは嬉しいけど、なんていうか違うん
だよそういうのは!

君たちはボクのお母さんか!?

「というわけで、改めてどうぞ〜♪」

「……まあ、いただきます」

言われて、パンを口に含む。

いわゆるバゲットというやつで、少々硬く、食べづらい。特に味付
けなどはされていないため、小麦の特有の味わいが感じられる。

次いで、スープを口に運んだ。こちらは……ブイヤベースというや
つだろうか。海鮮の旨味が濃縮され、トマトの酸味と調和した深い味
わりを感じる。

……試しにパンをスープに浸してから食べてみると、結構美味し
い。この組み合わせが不味いってことはそうは無いんだけど、堅かつ
たパンがスープの水分でほぐれ、より一層美味しくなっている。

「……美味しい」

「良かったじゃないか。七海とみちるの見立てが当たったな」

「勿論れす〜!」

「ふっふっふ。ご存知ですか？ バゲットを作る時は他のパンと違って油が少なくて済むんですよ。消化に良い、ということですね！」
「そしてブイヤベースはたくさんのおさかななどが入ってますのれ、とっても栄養豊富！ さあもつとずずいっつと！」

「な、何でそんなテンション高いのさ……」

「人間、好きなことにはテンションが上がるものだろう」

そりやあもう、この二人の好きなものと言えばパンと魚なんだろうけど……あれだな。好きこそもの上手なれ。

得意分野に関してだけは上手く行く、というだけじゃなくて、他の人も合わせられるあたり、やっぱりみちるさんも七海さんも協調性高い方みたいだ。

その上こんな気遣いまでできる。超人かよ。

しかしほんと、こんな善い人たちにあんな失礼なこと考えてたとか、ボクはどうしようもないな。

いつそ消え去りたい……。

「たしか、氷菓はゲームが好きだと言っていた覚えがあるが」

「よく覚えてたねそんなこと……」

「私はいわゆるてえんさいだからな!!」

そう……。

「おい今すごい勢いで流さなかったか」

「気のせいだよ」

「そうか、ならいい」

晶葉さんはもうちよつと人を疑おう？

ボクの言えた義理じゃないけど。

「それなんだけど——よく分かんないんだよね。本当に好きなのか、

ただ、暇つぶしの言い訳なのか」

「うん？」

「ボクは自分の意思でそうしてる。楽しいし、好きか嫌いかって言われたら、好きだと思う。けどなんて言うんだろう、惰性でやってるだけって気もして……」

「ず、随分哲学的なことを言い出したな。いったいどうした？」

「いや……その……ボクにはみんなほど熱意が無いから、つい」

我ながら、こんなことで気にするのも器が小さいなあと思わないではない。

そもそも器の大きさを育むだけの時間など無かったのでは？ と
思わなくも無い。

「好きなものっていうのは、別に理由はいらないと思うんれすよ」

「……余計分からなくなってきた」

「面倒くさいやつだな……」

「あまりそういうことを言わない方がいいよ。ボクに対しては特に」

「すまない、怒らせてしまったか」

「いや、下手すると泣く」

「泣くのか」

「割とギャン泣きする」

自分で自分の情緒をコントロールできなかつたのは、割とショックなことだったのでよく覚えている。

結局、自分で自分のことが情けなくなつて余計にギャンギャン泣いちゃつたんだっけ。

思ったよりもボクは罵倒を浴びることに慣れていないらしい。

「涼しげな顔をしておいて、メンタルが弱いのか……」

「それ色だけ見て言ってるじゃない？」

「否定できない」

名付けた名前がアイスクリームだったり、勝手に人からきつと冷静な人格なんだろうと思われたり、ボクの髪色っていったい何なんだ。

しょうがないけどさ……。

なお、この後午後五時まで体力トレーニングを続けた結果、涼しげな顔もクソも無くなったことを付記しておく。

7：ユニットを組む

「——つと！」

地獄の（基礎体力）トレーニングの開始から数日。世間はすっかり春休みに突入している。珍しいことに今日は、ボクと慶さんの二人でレッスナルームにいた。

連日にわたつてのトレーニングの結果、ボクは毎日のように筋肉痛と向き合いながらもなんとか心肺機能をアップさせることに成功していた。その成果を試す場として、まず一度全体曲——「お願い！シンデレラ」をもう一度踊ってみよう、という話になったのだ。

リベンジ、というと何だか変な話だけど、一度失敗したのは確かだ。前回とは違い、慶さんと二人きり。手本は無いけど、前回見たそれは既に記憶に焼き付いている。

息が切れ、視界が霞み始める。動きのキレが無くなり、やがて汗で滑つて眼鏡が吹き飛びそうになったところで——曲が、終わった。

「やつ……たああああ!!」

「や……っ……!!」

「む、無理に喋らないで氷菓ちゃん！」

その場に倒れ込みながら、喜びに片腕を上げる。ほとんどプルプルしながらだったが、どうにかこうにか手が上がった。手首から上だけ。

だいたい四分間、必死になって踊り続けたんだ。ボクじゃあ当然、こうなる。動けないとかいうレベルじゃない。全身ズタボロだ。

と、そんな中、ふと部屋の入口の方から控えめな拍手が聞こえてきた。

誰だと思つてそちらに視線をやると——あ、眼鏡が無いから見えねえや。

ええと、うん。多分気配から察するに根津Pだ。

わあクツソ恥ずかしい。貴様いつから見えていたッ！

「あ、おはようございます。プロデューサーさん」

「おはようございます。白河さんは、ええと……大丈夫？」

「ご覧の通りです……」

「は、はは……」

そうだよご覧の有様だよ!!

やめて！ こんな無様なボクを見ないで！

「じゃあ、とりあえず通達だけしておくよ。11時からプロジェクト

ルームに集合、そこでユニットのことについて話すから」

「……………い」

「はいつて言ってます」

「お、おう」

声も出ねえ。

憎まれ口を叩く余裕も無い。

オ・ノーレエエエ！

「とりあえず、まだしばらく時間はあるからゆっくり休んで」

「……………あ」

「分かりましたって言ってます」

「慶さん通訳か何か？」

この数日間ずっとこんな感じだったので、ボクの言いたいことが何となく分かるようになったらしい。

訓練の賜物だね！ こんな技能必要無いだろうけど。

「……………お、俺の方は、他の子たちにも連絡に行ってくるから。それじゃあ」

と。そんなボクの体調を考慮して——というか、単純にいたたまれなくなったのだろう。根津Pは速足で退散していった。

けど、そうか。そろそろプロジェクトが動くのか。

ユニットの話って言ってたけど……どうなんだろう。ボクと誰が組むことになるのだろう。

……何だか不安でたまらなくなってきた。本当に大丈夫かな……。

と、そんなこんなで、十分に休憩を取って、11時。ボクたちは、改めてプロジェクトルームに集合していた。

ホワイトボードの前に根津Pが立ち、背の低い人からソファに着席。他の面々は立った状態で——という形式だ。

「集まってくれてありがとう。それじゃあ、暫定的にだけど、今のところ決定しているユニットについて発表していくよ」

「プロデューサー。暫定なの？ 決定なの？」

「殆ど本決まりに近い仮決定って感じかな。変更は、もしかしたらある、かも、って程度」

「ふうん……」

マキノさんの質問もつともだ。「暫定的に決定」って言われると、どっちがどうなのかいまいち分からない。暫定って、あくまで一時的な決定、って感じだし。

「まあ、ともかくー」

あ、面倒くさくなったなプロデューサー……。

「半分くらいは決定事項と思ってほしい。それじゃあ一組目だけど……古澤さんと、八神さん」

「はい」

「ええ」

頼子さんとマキノさん……成程、傾向が似てる二人だ。

クールで知的、とても言おうか。この二人、見た目の印象とは異なり、頼子さんの方が身長が高かったりする。頼子さんが猫背気味で、一見同じくらいに見える……という理由もあるけど。

売り出し方も、やっぱりクールなビジュアルを魅^みせる方向性になってくるだろう。やや自信に欠ける頼子さんにとっては、良い相方だと思おう。

……流石に眼鏡が決め手じゃあない、とは思いたい。

「次に、イヴさんとクラリスさん」

「はい」

「はい——」

次は、イヴさんとクラリスさん……外国人二人か。

サンタとシスターという前職、それに金髪と銀髪——本当は白髪だけど——もそえて外見バランスもいい。

問題は、イヴさんがやや日本の文化に疎いという辺りだけど……クラリスさんは日本に住んで長いらしいし、そこはフォローしてくれるだろう。

「それから、こずえちゃん、聖ちゃん、芳乃さん」

「はい……」

「はい……」

「承りましたー」

なるほど、次は年少組トリオ……うん？ うんん？

いやそこまで年少というわけじゃない。芳乃さん、あれで16歳だし。

いや。うん。でも、多分、問題は無い。外見的バランスも内面的バ

ランスも、パーフェクトと言えばパーフェクトだ。

ただ一点問題がある。あの三人、やや浮世離れた性格だったはずだ。素質も最初から備えている能力も全部が一級品だと思うんだけど、それはそれとして多少の不安が残る。

大丈夫か根津P。きつちり引率できるんだな根津P……？

「それと……村松さん、大石さん、土屋さん」

「はいっ！」

「はい」

「はいな！」

次はいつもの仲良し三人組か。

見てて安心感すら覚える人たちだ。この三人は、売り出しの方向性からちよつと異なってる……というか、傾向が違う気がするけど、あれかな。シンデレラプロジェクト一期生のユニット、ニュージェネレーションズを意識してるのかな。

仮にそうだとしたら、売り出し方については気を遣うところだろうな……当のシンデレラプロジェクトの担当プロデューサーである武内Pが統括としている以上、そういうことは無いと思うけれど。

「……五つ目に、一ノ瀬さん、池袋さん、白河さん」

「あ、はくい♪」

「うむ」

「……はい」

そして、ボクのユニットもまた、決定した。

あの日の三人——ボクと、志希さんと、晶葉さん。

それぞれに何らかの特異な知識を備えた、知能派……というより、技能派の面々。それぞれがそれぞれ得意とすることは違うけど、正直言って、何となく気が合うように感じた三人。

思わず、笑みがこぼれかけた。けど、まだまだボクの体力じゃ二人

いやまあ、まともな考え方でできるような職業じゃないかもだけど。

「……しゅがはさんはソロユニットの方が輝くんじゃないの？」

「それも含めて考えたんだけどね、トレーナーさんたちと一緒に考えて、こうするのがいいんじゃないかっていう結論になったんだ」

どんな判断だ。

「はあともソロの方がいいと思うゾ☆」

「悪いけどこれ決定事項なのよね。あとそれ単に自分が目立ちたいだけじゃないか。プロデューサーそういうの分かっちゃう」

確かに、しゅがはさんはだいぶこう、目立ちたがりだ。

グイグイ自分から前に出ていく肉食系……というかなんというか。だからホント、他の人と食い合わせがものすごく悪い。

他ならぬ、ボクたちを目の前でずっと見てきたトレーナーさんたちとの話し合いの結果だとはいえ、ボクたちとしてはやはり、難色なんしやくを示さざるを得ない。

勿論、これはしゅがはさんが何か悪いってわけじゃなく、全体との兼ね合いとして、って話なんだけど……。

「肇さんたちは何か言いたいこと、無いの？」

「フゴッ？」

「みちるさんはいいです」

「フゴッ!？」

見たところ、自分がどう、というあたりについては特に何も思うところは無いようだし、それで追及して困らせるのも悪いし。

というかこの空気の中で何で平然とパン食つとるんだ。食つとる場合か。一応これ業務連絡のはずなんだけど。

「七海はプロデューサーがそうした方がいいっていうなら大丈夫ですよ〜?」

「そう……ですね。私も、異論はありません」

肇さんは……そうは言ってる割に、表情はどこか納得していないものがあるようだ。

一方の七海さんは、彼女自身が言う通り特に気にしたような様子は見られない。それは能天気さゆえのものではなく、むしろ冷静に状況を俯瞰した結果、この結論を出しているような気さえする。

いや、あるいは——しゅがはさんがユニットを組むことに何らかの意味がある、ということか?

だとすると、それは……。

「デビュー時期に関しては、四月の下旬から順次、という風に考えてる。ユニット名は、みんなで考える方向で行こう。今日は休日。あと個別に質問があれば後で言ってくれ。できる限りは答えるから」

そう言っただけで部屋を出る根津Pを見送り、ボクは肇さんの背中を軽く叩いた。

彼女もそれで察したのか、あとからプロデューサーを静かに追いかけていく。

人間、変化しない者はいない。たとえ大人でもそれは同じだ。

しゅがはさんのグイグイ前に出るその性質はテレビ向きだろうけど、同時にやや自分本位なところがあって、自分「だけ」が前に出ようとする。

今後仕事をしていく上でそれに問題が無いとは言えない。プロジェクトと346プロの性質上、他のアイドルとユニットを組んだら、一緒にお仕事をする機会が多いはずだ。そこに馴染めないとすれば、孤立したり疎まれたりということもありうる。事前に予防するため、もつと協調性を持ってもらうのが重要、という話……の、はず。

だからこそ、ソロユニットではなくてグループ活動、という結論に至ったんだと思う。

ただ、精神的な成長って難しいんだよな。人に言われてやるんじや本質的には何も変わってない。いずれ忘れてまた同じことを繰り返すようになる。言われて本当の意味で改善できるのは、自分の問題点を問題点だと正しく認識できた人だけだ。

だから一番望ましいのは、しゅがはさん自身がそれに気付くことだ。皆の前ではそのことが言えなかったから、後で個別に……という話をしたんだろう。

……前途多難だなあ。

「むう。色々と言いたいことはあるが仕方がない。今はユニットのことだけを考えるか」

しゅがはさんについての話自体はさっきのことで一応の決着を見たためか、他の皆は自分たちのユニットメンバーとの話し合いに移っていた。

自然と、ボクラら三人も一か所に寄り集まっていく。

「よし。改めて、よろしく頼むぞ、二人とも」

「うん。こちらこそよろしく」

「よろしくね。ま、なんとなくこうなる気はしてたけど♪」

もしかするとあの日、ボクたちがあの部屋に集められたことは、必然だったのかもしれない。

……いや、運命とかそういうんじやなくって。スカウトした時点でこういう方向性のユニットを組もうとしていたっていう意味で。

根津Pも意外にしたたかな部分があるしなあ。そういうのは多分、有り得る。

「でき、急にお休みになっちゃったけどどうする？ プロデュー

サーは多分、ユニットの名前とか考えるための時間ってことにしてるんだらうけどー」

「いや。まだ時期尚早だろう。実のところ、私たちは互いのことについてよく知らない部分がある」

「そうだね。プライベートにまで踏み込むのはちよつと良くないけど、この3人にどういう共通点があるのかとか、どういう方向に進みたいのかとか、そういうところを把握してからにしないと……」

志希さんは独り暮らし、晶葉さんは都内の一軒家に住んでて、ボクは寮生活。そして残念なことに、三人ともに生活圏が一致していない。

電車に乗れば、会おうと思えばすぐ会えるけど……ボクがあの有様だったもんで、会おうにも会えなかつたんだよな……。

「ふんふん。じゃあ、氷菓ちゃんのお部屋に行くのはどうかな？」

「ボクの部屋？ 別にいいけど……面白いものなんて、あんまり無いと思うよ？」

少なくとも、年頃の女の子が見て楽しいものもあんまり無いんじゃないかな……とも思ったけど、この二人、割と「普通」の範疇からは外れてたっけ。

なら大丈夫か。

大丈夫か？

大丈夫だつて思いたいなあ。

@ ——— @

それから十分ほどして、寮のボクの部屋に辿り着く。

寮なんだから当然と言えば当然なんだけど、他の部屋と比べても特に差異は無い。しいて言うなら他の部屋と比べてかざりつけが殆ど無いことくらいだろうか。部屋にあるのは、ゲーム機とテレビ、パソ

コン、本棚、こたつ……あと、小さな鉢植えくらいのものだ。どれも安物だし、色合いもモノトーンで派手さは無い。

「男の部屋か何かか」

思わず口を衝いて出た晶葉さんのツツコミが心に響いた。

いや、まあ実際中身は元々男だったんだけど。

「わあ冷凍庫の中身アイスばかり〜」

「何勝手に見てるのさ」

「人の家の冷蔵庫って気になるでしょ？ あ、ビバオールだ。もらっ

ていいー?」

「いやまあいいけど……適当に座ってくつろいでよ。お茶淹れてくるから」

そういえば志希さん岩手の方出身だったっけ。

もしかすると懐かしい味だったりするのかもしれない。またこんどアンテナショップか通販で仕入れとこうかな。

適当にお湯を沸かして、ほうじ茶を淹れる。お盆に載せて部屋の中に戻ると、何故か晶葉さんはボクのP●4のM●●:Wを勝手に起動してプレイしていた。志希さんは漫画本片手にビバオール食べつつその様子眺めてる。

いや待てや。

「おいコラ」

「いやくつろいでと云われたからつい」

「くつろぎすぎだよ」

「いや、ほら。人がプレイしているデータというのも気になるだろう?」

「気持ち分かるけどさ」

何でそこでノータイムで実行に移しちゃうのかな！

……でも、データ消されてるわけじゃないし、まいつか。そういうことにしとかなないと話も進まないし。

「マンガのラインナップもちよつと独特だよね。いわゆるジャツパーンのマンガ！ みたいなのが無いような感じ？」

「あるよ。『シグルイ』」

「和風だけどころいうのじゃなくって」

……まあ、マニアックなことは否めない。『虚無戦記』とか『衛府の七忍』とか。でも『サイボーグクロちゃん』なんかは普通に普通の人に勧められると思うんだけどどうだろう？

「で、あの鉢植えは何なんだ？」

「あれは輝子さんから貰ったんだよ。『トモダチの輪』って。マイタケらしいよ」

貰ってからは丁寧に育てている。时期的には秋ごろに収穫できるらしい。

トモダチを食べるってのはどうなんだろうと思わなくもないけど、曰く「食べて栄養にするのが一番の供養。腐らせるのが一番良くない」だそう。キノコ料理にも割と造詣ぞうけいが深いらしい。

「……なんというか、異質な空間だな！」

「うん、まあ。そうだね」

否定する材料が欠片もねえ。

「ずっとこういうの？」

「小学校に入ってくらいから、かなあ。それまでだったら、そもそも自分のものが無かったから」

「いやなんなんだその子供は」

「色々あったんだよ。勉強ばっかりしてたから」

「どんなく？」

「こんな」

取り出したのは、一冊の写本だ。

収納の奥に隠していた稀観本きこうぼんの写本。かつてボクが錬金術の秘奥に辿り着くために読みふけた書物の写し。

エメラルド・タブレットの原文……なんて、言ったところで理解できるか分からないけど。これを手に入れるために色々苦労したものだ。それも含めて語りたいところだけど残念ながらそれを記すには余白が足りない。

「見せてー♪」

「はい」

これはかつてボクが真理に到達するための最後の一助となったものだ。これが無くとも金を錬成することくらいはできるが、これを見ているといたないとは精度がまるで違う。

しかしながら普通の人がこれを読んだところで、オカルトかつスピリチュアルな眉唾物としか思えないことだろう。数種類の暗号が並びめられているため、読み方にも色々工夫が必要なのだ。

それに。

「これ何語？」

「アラビア語」

元々、エメラルド・タブレットというものはギザの大ピラミッドから発掘されたものだという。

なら当然、そこに記されているのは現地の言葉なわけで。

加えて暗号も含んでいるともなれば、読み解けないのが普通のこと

でもあるのだった。

「何コレ」

「錬金術の書物」

「錬金術って、あの錬金術？」

「あの錬金術」

「へー。ほーん。なるほどにやー♪ 化学として体系化する前のれっきとした『学問』としての錬金術の書物ってことか！」

「ま、まあそういうこと」

「いいよいよ、面白いよ！ うん、氷菓ちゃん面白い！ それでそれで、もしかしてこれを学んだことで、あんなカンペキにダンスが踊れるようになったりしたこと？」

「うん。そうなるかな」

「ソフ。いいねいいね♪ オカルティックであからさまなくらい胡散臭くって不可思議で、でもそれができちゃってるんだから信じるほかに無い！」

いつになく、志希さんの眼が爛々と輝いている。これは——あからさまに興味をそそられた顔だ！

「いやホント、氷菓ちゃんは興味深いね♪ 古い知識で最新の技術に勝るとも劣らない能力を発揮できるなんて、まず無いよ？」

「……いかん、目が痛い。氷菓、本当にこれを読めたのか？」

「解説に二、三年かかったけど、なんとか」

「小学校に入る前だよな？」

「うん、まあ」

「ってことは……氷菓ちゃんもいわゆるギフトテッド？」

「ギフトテッド……かな？」

ええと、意味合いとしては……「神様の贈り物」だっけ？ 特殊な才能を持つてる人のことを、そう呼んでたはず。

ボクの場合はギフトテッドとは若干意味合いが異なると思うんだけど……いや、でもよく考えると、前世の記憶を持つてゐるってこともある種のギフトテッドなのか？

確かにその事実を知らずにボクのことを見たら、そんな感じには写るだろう。我ながらおかしなことだ。

「それでー、晶葉ちゃんもギフトテッド♪」

「うむ、私も天才だからな」

「……まあ天才だよな」

何をどうすればあんな高度な嘘発見器が作れるのか、それが分からない。

発想力技術力ともに異次元のものだ。少なくともボクに想定できるそれではない。下手すると自立稼働可能なロボットくらい平気で作りかねないってくらいだ。

「もちろんアタシもギフトテッド♪」

「そうだな、とんでもないと思う」

ボクと違って、志希さんのそれは彼女自身の才能の賜物だ。

化学分野についての知識も異常なまでに豊富で、特に「におい」に関わることに关してはその辺の科学者を圧倒してしまえるほどの知識を持っていると言って過言でない。

また、体の動かし方、ビジュアルの魅せ方、あらゆる部分で新人としては規格外のものを持っている。言わずもがな彼女も天才だろう。

「つまり三人ともギフトテッドってことー。これ、名前になりませんか？ よろしくお願いします」

「それ何年前の番組だ……？」

「ボクの記憶が確かなら十年以上」

「そんなに」

楽しい番組だったな、トリビ●。また特番やらないかな。

……流石に無理か。うん。

「でも、言われてみるとこれは確かに、一つの傾向……方向性だな」

「うん。名前にしようと思えば、何かできると思う」

「そのままギフトेटドとか……」

「流石にそれはいかなものかと思うよボク」

そこはもつとちゃんとした意味込めないと。

しかし、そんなこんなで話し合っても、結局案はそこまでまとまらなかつた。

いかに神様というものに祝福を受けて生まれてこようとも、常に何事に関しても上手く行く——というわけじゃないらしい。

やがてどうしようもないくらい行き詰まった結果、今日のところはおひらき、というはこびになるのだった。

8・ブリュンヒルデ討滅戦

ことわざに、「船頭多くして船山に登る」というものがある。

リーダーが複数名いると逆に統率が取れず、思いもよらぬ、それこそ意に反した行動を引き起こしてしまう——というような意味合いの言葉である。

それとは異なり、「三人寄れば文殊もんじゆの知恵」という言葉もある。

特別に頭の良い者がいなくとも、三人もいればその中の誰かが妙案を思い浮かぶ——そんな意味合いの言葉だ。

——では、果たしてボクたちにはどっちの言葉が当てはまるのか？

「インテリジェンス・クォーシエント……知能指数IQの正式名称じゃないか。これは流石に違うんじゃないの？」

「だからって天才あいどるくんもどうかと思うぞ私は」

多分前者だ。

あれから三日ほど経ってからというものの、ボクたちは晶葉の家に رفتたり志希さんのマンションに行ったりしながら、ずっと名前を考え続けている。

しかしながら意見はまとまらず、結局現在になっても良い成果が得られていない。

有力な候補としては、そのもの「ギフト」か、あるいは「ファイン・ライン」が挙げられた。ファイン・ラインとは、「紙一重」の意味だ。要するに、天才と何とかは紙一重……みたいな。

しかしボクが思うに天才はなんとかはむしろ完全に向こう岸じゃないかなと思う。これを採用した場合晶葉が登場するたびエレキギターをかき鳴らしてみたり、ギターケース型ロケットランチャーを超スタイリッシュな格好でぶっ放したりドリルだらけの巨大ロボを作ったりしかねない。

余談だけど、そんな感じですつと一緒にいたせいか、当人から『さ

ん』付けは他人行儀で嫌だ」と言われたため、晶葉のことはすっかり呼び捨てになっちゃっている。

「じゃあ、偉大なる先輩ニュージエネレーションにあやかっつて、ニューホライズンなどどうだ！ 『新たな地平』……どうだ、カツコイイだろう！」

「英語の教科書じゃん……」

「でも語感がかっこいいよね。あ、そうだ。何か似てるし、ポイズンってどう？ こっちもカツコ」

「アイドルなんだから毒はボツ」

「言いたいことも言わせてくれない……」

そんなことを話しながら、三人でスタジオに向かっていく。

今日はボーカルレッスンの予定が入っている。何もしくともそれなりに歌ったり踊ったりできるボクだけど、その能力だけで他人のダンスや歌に合わせるといふことはできない。ユニットでの歌や踊りというのは、一人だけが突出してはいけけない。大事なのは調和だ。パーフェクトハーモニーだ。

だから、ユニット全員で行うダンスレッスンやボーカルレッスンと
いうのは、最重要事項と言っても過言じゃない。

「おはようございます」

「あら。おはようございます」

「おはようございますう」

「おはようございますー！」

「ん」

軽く挨拶をしてスタジオ内に入ると、そこには既に四人の女性がいた。

クラリスさんと、イヴさん。トレーナーの青木明あおきめいさんに……あと、何故か美玲さん。

あれ、と軽く首を傾げる。いや、美玲さんも346プロのアイドルなんだし、別にいてもおかしくはないんだけど……。

「美玲さん、今日は一人なんだ」

『一人なんだ』って何だよ。ウチだって一人でレッスンに来ることくらいあるよッ」

「ご、ごめんなさい。なんか、だいたい輝子さんか乃々さんと一緒に気がして」

「んー……それは、そうだけど。ショーコは『カワイイボクと142's』の打ち合わせ、ノノは『ワンステップス』で収録があるんだよ。ウチも明日はイベントでトークとミニライブだし、少し練習しとかないと思ってます」

「そうだったんだ……なんだかキツイね」

インディヴィジュアルズ自体が元々、高い人気を誇る三人を集めて作ったユニットとも言えるのだとか。

輝子さんも乃々さんも元々ソロ活動や別のユニットなどで名前が売っていた。インディヴィジュアルズは最近結成されたユニットだから、できるだけ一緒にいて連帯感を深めようという思いが強いらしいが、元々の活動をやめるといっわけにはいかないのだろう。

一人での練習ともなるとちよっとキツイものがある……と思ったのだけだ。

「何が？」

「えっ。いや、お仕事。インディヴィジュアルズのお仕事もあるのに、ミニライブとかトークショーとか……」

「ああ、それか。ウチは別に辛いとか思ったこと無いぞッ」
「ええ？」

「確かにちよっと大変だし疲れるけど、楽しいからなッ！」

うおっまぶしっ。

……そうか、やってて楽しいから、辛いとかキツイとか感じない、のか。

ボクは……やりたいからやってるんじゃないやなくて、人に言われたからやってる、って部分が強いんだよな。

求められた役割である以上は、全力でやり遂げる。そのつもり、なんだけど……。

楽しんでるかどうか、か。

ボクは——楽しめているのだろうか？

「あの〜ところでなんですけ」

「はい、そろそろレッスンを始めましょう！　まずはボイトレから。みんな位置について！」

「あつ」

「あつ」

と、ふとボクに話しかけてきたイヴさんだけど、トレーナーさんの号令によって話どころじゃなくなってしまうた。

また後でお願いします、と一言伝えると、イヴさんは軽く頷いて返した。

何だったんだろう——と思うけど、今はレッスンに集中しないと……。

そんなこんなで、発声練習や早口言葉の後に、時々休憩を挟みながら、お昼になるまでボーカルレッスンを行った。

もう既に疲労困憊な状態だ。他の人はまるでそんな感じも無いけど。いやでも、腹式呼吸ふくしきできっちり声出すと疲れるものだよな。

……疲れるよね!?

「ううーむ……やはり私がネックになるか……」

一方、割とびんびんしてる方の晶葉は、どうやらボクたちとの技量差について悩んでいる風だった。

普段から割と快活で澆刺とした声をしているから、聞き取りやすいしよく通るんだけど……無調整のボーカロイドか何かと思うくらい抑揚が無い。

声自体はいいんだけど、技量が足りない。そんな感じだ。

アイドルもギフトテッドな志希さんや、元の職業柄、聖歌をよく歌っていたことでボーカル技術の高いクラリスさん、あと、技能コピーのおかげでどんな歌でも平均以上に歌えるボクも一緒に歌っているんだ。どうしてもこう、差が如実に表れる。

「こればっかりはねく。志希ちゃんも氷菓ちゃんも色々と規格外だからく♪ らららく♪」

「ええい見せつけるように歌うな！ 見ていろ、すぐに私も追いつくからな！」

しかし、それで腐ることなく、めげずに努力をして追いつこうとすることができるのは、間違いなく晶葉の良いところだ。尊いとすら思う。

そして多分、志希さんにコツを聞くのは何となくプライドが許さないだろうし、何より聞いたところで分からないだろうから、多分後でボクの方に相談に来るんじゃないかな。

それでもって、できるまでやると言い張って……本当にやってのける。

ボクたちみたく最初から何でもできるわけじゃないけど、その分伸びしろと吸収力がすごい。

「あのお、ところで氷菓ちゃん、ちよつといいですかあ？」

「あ、うん。どうしたの、イヴさん？」

そういえばレッスンが始まる前、イヴさんに呼び止められてたんだった。何かあったんだろうか？

「氷菓ちゃんの着てるそのお洋服なんですけど。昨日も、おとといも、もつと言えばその前も前も着てませんでしたか〜……?」

その瞬間、周囲の空気が凍り付いた。

エターナルフォースブリザード。空気は死ぬ。

みんなの視線を独り占め★なんて言うのアレだけど、要は単なる針の筵である。皆の視線が痛い。特にクラリスさんからのものが痛い。

「確かに言われてみれば……」

「でも、全然悪い臭いしないんだけど〜」

「うひっ!?!」

やっぱり当然のように嗅ぎにくるけど、そりや臭いはしないよ。だってにおい成分は毎日分解（錬金）してるんだから。

「確かにそれ、昨日もおとといも見たな……」

美玲さんはお隣さんだけあって、よく分かっているようだ。

「そうだよ。朝はしょっちゅう会うもんね。分かるに決まってるよ。ね。」

「氷菓さん」

「はい」

……そして案の定と言うべきだろうか。この事実が一番反応を示したのは、他ならぬクラリスさんだった。

「悲しいことです。やはり他の服を持っていなかったのですね……」

「あ、う。いや、ほら、その、『家』に迷惑がかかっちゃうし!」

「儉約や清貧は結構なことですが、度が過ぎれば意味はありません。」

それにあなたはまだ子供なのですから、もつと我儘を言ってもいいのですよ？ 園……『お父様』も常々そのようにおっしゃっていますでしょう？」

弱った。

クラリスさんは、ボクの事情についてよく知っている。だからつてみだりにこの「事情」について吹聴することは無いんだけど……だからこそつて言うべきなのか、妙にボクに対して世話を焼きたがる。

子供というのは自分の欲求に素直な生き物だけど、ボクはだいたい他の子よりも一歩か二歩ほど退いたところにおいて、しかも我儘をあまり言わないわ他の子ばかり優先させるわ、と見ていて不安になるくらい、だという話を聞いた。

手間がかからないんだからいいじゃんとも思うんだけど、やっぱり異常なことは異常らしい。でも仕方ないじゃん。やりたいこと、つていうのもそんなに無いんだから……。

「氷菓、参考までに聞きたいんだが、服は何着持っているんだ……？」

晶葉が恐る恐る、と言った様子で聞いてくるけど……何着、つて言われてもな。

制服と、学校指定のジャージと、寝間着で……。

「三着」

その時、みんながドン引きしたのがよく分かった。

……でも、だからつてどうしようもないじゃん。お金無いんだから。

「それは……女としてつてよりも、人間としてヤバイぞ……」

「そ、そうかな……？」 に、臭いとか、ほつれとかには、気を遣つてるし……」

「いいや、駄目だね」

「!?」

「!?」

と、不意にスタジオの入り口付近から、声が聞こえた。

そこにいたのは、一人の少女だ。壁際にもたれかかって腕を組み、涼しげな表情でこちらを見つめている。

しかしあの特徴的なエクステ、346プロの中で一度見たことがあるような……。

「お、お前らはッ！」

ややげんなりした様子で、美玲さんが顔を歪めた。

やがて、先にこちらに姿を見せていた一人の後ろから、妙にスタイリッシュなポーズで片目を隠した子が姿を現してくる。

知ってるぞ。少なくともこっちは確実に知っている。あの銀髪ツインテールに、やけに自信満々な立ち居振る舞いは……!」

「闇に飲まれよ!!」

【お疲れ様でーす!】

シンデレラプロジェクトの先輩、かんざきらんこ神崎蘭子さんである。

つまり、その隣にいるのは蘭子さんとデュオユニットを組んでい
る、にのみやあすか二宮飛鳥さんか!

……ナンデ!?

「な、何しに来たんだよッ」

「我らが轍わだちを踏む者たちとの邂逅の時ぞ……!」

【後輩の子たちに挨拶にきちやいました!】

「ああ、そう……」

え、今なんて？

「ボクたちも、ダークイルミネイトのライブが控えていてね、午後からレッスンスタジオを使う予定だったのさ」

……あ、そこは普通なんですね。

良かった。流石にこう何度も解析不能の言語を使われるとボクの心もたない。

「改めて、ボクは二宮飛鳥。好きなように呼んでくれ。この出会いが、新たな『ナニカ』のきっかけになるかもね……」

——
んん!?

「我が真名は神崎蘭子！ 今こそ創世の時！」

【神崎蘭子です！ これからよろしくね♪】

げんごの ほうそくが みだれる !!

何なのだこれは！ どうすればよいのだ!?

解析……でき、できない!! 既存の言語体系のそれじゃあない！

理解不能！ 理解不能！ 理解不能！

「けふっ」

「氷菓しっかりしろ！」

こ……こ……ここはどこ……？ ファータ・グランデ……？ 古戦場……？

い、いったい何がどういうことなんだ……？ 誰か説明してくれ
よお！

「ん？」

そんな混乱の真ただ中、ふとした拍子に蘭子らんがボクの方を見た。その表情には驚きが含まれていて――。

「あ、蒼の少女!？」

「る、ルリアちゃ……!？」

「は？」

「あつ違つ……わ、我を惑わすとは小癪なことよ……ふふ、アハハハ……」

【ご、ごめんなさい。間違えちゃった〜!】

誰か、知り合いと似ている人がいるんだらうか。

蒼……って言うのと渋谷凜さん？

てんで違うと思うんだけどな、見た目。

「で、結局何しにウチらの方に話しかけてきたんだ？」

「堕天使の翼を彩る花弁は、盛大であるほどに美しい……」

「アイドルなんだから、お洋服はもつと持っておいた方が良いと思つて!」

まるで意味がわからんぞ!!

「多分、服はもつと持つといた方が良いつて言ってるな」

「そんな意味なの!？」

「ちなみにそれはウチもそう思うぞツ」

美玲さんの言葉が正しいことを示すように、蘭子さんはむふーっと鼻息を荒くしながら何度も頷いていた。

しかし、服かあ……お金も無いし、まだお給料がもらえる身分じゃないし、別に今は必要な――

「ともあれ、良い機会ですし」

「ここはひとつ」

「んん？」

と。唐突に、イヴさんとクラリスさんに腕を掴まれる。

あれれ〜？ おかしいぞ。これ、拘束されてない？

「いぎ、飛翔の時！」

【外に行っちゃいませよー！】

「え、え、え!? どこへ!？」

「外、街、何でも好きに呼ぶといい。煌びやかなセカイに行こう」

「ちよ、ちよちよ、ちよつと待って！ レッスンは!? お昼ご飯は!？」

「トレーナーさんの許可は取ってきたぞツ！ ランコとアスカは二時間延期だつてさ」

「嘘だ！ ボクを騙そうとしている!!」

「プロデューサーも『構わん、やれ』だそうだ」

「ぬあああああああ!!」

「さ、れんこー♪」

必死の抵抗もむなしく、ボクのクソザコ腕力では一切勝ることができない。

結局ボクは、街にある衣料品店へと連行されていくのであった……。

何故トレーナーさんとプロデューサーが許可を出したのか、これが分からない。

@ —— @

一時間後の、スターライトプロジェクトのプロジェクトルーム。ここでは、悪夢の饗宴（蘭子さんの影響）が行われていた。

それ即ち——疑似ファッションショーである。

皆の選んだ服をボクに着せ、その出来栄えについて語っていく。趣旨としてはそんなところだ。

ちくしよう、いったいボクが何をしたっていうんだ。服買っていないだけじゃないか。

……ダメか。ダメだな。うん。客観的に、かつ率直に言つてダメダメだ。ズボラにしたって程がある。

「うう……」

……うう。制服でもないのにスカートを穿くことになるなんて。

普段ならスパッツでも穿いて誤魔化してるんだけど、みんな許してくれないんだもんなあ……。

足元が心許ないよう。

「まだかー」

「ちよ、ちよつと待つてー!」

うう、晶葉が呼びに来てしまった。

流石にこれ以上時間稼ぎも無理か……。

そりや当然、これから先ヒラヒラしたアイドル衣装くらい着なきやいけないんだよなあと漠然とした覚悟くらいはあったけど、だからってプライベートでもだなんてボク聞いてない。

「よ、よし」

これは仕事。これは仕事。これは仕事。

自己暗示で無理やり心を奮い立たせて立ち上がる。そして、皆が待つ方へと向かってカーテンを開いて——!

「どうだ、これが私のコーデインートだ!!」

「普通だにゃー」

「普通だなッ」

「普通に可愛い印象かと」

「何故だッ!!」

——そして、割と微妙な評価をいただいた。

いや、でも、うん。正直、妥当なところだと思う。

「そりゃ、ねえ。殆ど晶葉の格好だもん」

「いいだろう、由緒ある科学者スタイルだ」

……と言つても、晶葉の着てるのとだいたい似てるし。

しいて違うところを挙げるなら、暖色系じゃなくって寒色系にしてるってところくらいか。白衣を除けばごく普通の「女の子」な格好である。だからボクもちよつと恥ずかしいんだけど。

制服ばかり着てたボクだから新鮮味はあるだろうけど、やっぱりちよつとなあ。晶葉ので見慣れすぎたとも言う。

「はいはい、じゃあ次は志希ちゃんセレークトだよー♪　ハイカモンカモン」
「う、うん」

続いて、恥ずかしいながらも表に姿を見せると、小さく「おっ」という声が聞こえた。

今回は、白のワンピースにジャケットを羽織ったような格好だ。ややアンバランスではあるけど、時々志希さんがこんな感じの格好で出歩いているのを見かけることがある。

なんでも、「パツと着られてパツと脱げる」から、だそうだ。それでいて似合ってるんだからまたスゴい。本人のスペックというものを思い知らされる。私生活はボクよりズボラな感じだけど。

「清纯と野趣やしゆのアンビバレンツ——と言ったところかな。こういうのも悪くはない」

「でも、なんだかお兄さんのジャケットを借りた妹さん、みたいな感じもしますね〜」

「にやはっ、そういう解釈もアリだね！ んふふふー♪」

ボクで変な妄想するのやめてくれない？

確かにちよつと袖が余り気味だけどさ。

……いつもやや脱ぎ気味な志希さんと同じような感じになってるけどさー！

「では、次は私が選んだ服になります。氷菓さん、どうぞ」

「はいはい……」

次は、クラリスさんの選んだ清楚な服だ。かなりこう、ヒラヒラしていて落ち着かない。

けど、まだロングスカートなだけあって、足元が心許ないってことが無いだけマシかな……。

……と、思っていたら。

「にやつはっはっはっは！ お嬢様みたーい！」

「くふふ……ふ、い、いや、笑っては失礼だろう。いや、似合っているぞ氷菓……ふふふ」

「喧嘩売ってんのか」

不評である。

いや、分からんでもない。ボクの印象とはまるで逆だ。貧乏だし。お嬢様って風じゃない。

「薔薇はどのような色に染まろうとも、薔薇であることを変えないもの……よ」

【雰囲気は違うけど、似合ってるよ♪】

「フフ。ボクも同意見さ。何も人間の示す可能性、カタチというのは一つだけじゃなくっていい。新しいセカイを構築することもまた、偶像にとって必要と言えるものだからね……」

「よーするに、見た感じ似合ってるって言ってるぞッ」

サンキュー美玲さん。でもベタ褒めされてもそれはそれで気恥ずかしい。

というかこの服の何があこの二人の琴線に触れたんだろう。それが分からない。

「次は私ですよ。それじゃあ氷菓ちゃん、お願いしますう！」

「はーい」

合図に合わせて出て行く、と——思った通り、と言っているんだろうか。皆の反応はなんとというか、ごく普通、というか。

ボク自身もそれほど抵抗なく出ていけたのもあるけど……なんとというか、一言で言う。

「普通だ」

「普通でいいじゃないですかあー！」

「普通でいいよ!!」

君らは人のファッションに対して何を期待してるんだ!!

ネタ性はいらないから普通の服にしてよせめて!!

……ちなみに、イヴさんが選んだのは、シヨートパンツと暖かそうな白いもふもふの上着——である。春先にこの格好もどうだと思うけど、暖かいし、着やすいし、スカートじゃないし。これ、結構好き

だ。

「こうやって見ると、君たちは姉妹っぽくもあるな」

「……そう……?」

「ですかあ?」

思わず、イヴさんと顔を見合わせた。

確かにボクもイヴさんもストレートな髪質だし北欧系の顔立ちだけど、姉妹じゃあないだろう。髪色も違うし。眼の色も違うし。ちよつと似てるかもつてとこは否めない。

「プレゼントでもなんでも、普通なのが一番ですう。特に氷菓ちゃんは、普通の服を持っていませんから」

「うん。ボクも今のところこれが一番好き」

「やりましたー!」

「そうだぞアキハ。本人が喜ぶのが一番だぞツ」

「私のも別に悪いものじゃないだろう」

「白衣は普段使いしにくいけどね」

「馬鹿な!」

……いや、白衣は普段使うものじゃないでしょ。

「さて、次はボクのコーディネートを見てもらおうかな」

真打登場——とは言わないけど、次はこの企画の事実上の主催者である飛鳥さんの選んだ服だ。

彼女自身はその、正直……あんな感じだし。どうしたものかなあと、正直ちよつと思つてはいたんだけど——。

「ん、やや派手で退廃的な印象もありますが、これはなかなか……」
「うーん、確かにこれは、悪くないかにや?」

「なるほど、これもいいなアスカ！」

「ふふふ、そうまで言うことも無いよ。ボクはココロが向くまま、ただ氷菓というキャンバスに載せてカタチにしたらただだからね」

飛鳥さんが選んだのは、ほぼ黒一色でまとめた——パンクファツション、と言うのだろうか。ダメージ加工されていたり、着崩した格好のやや派手めな格好だった。

一見した限りでの印象がかなり強いんだけど、実際のところ作りもしっかりしていてそこまでやたらめったと肌を露出してるわけでもない。

それから、考えようによつては、ボク自身の元々の見た目というのが派手めで、むしろこれを着ていた方が街の中じゃ目立たない、とすら思うくらいだ。

「むふー！」

蘭子さんは、友人の手腕が褒められたからか、妙に嬉しそうだ。

「お気に召したかな？」

「あ、はい。いいと、思います」

「なら良かったよ。でも、キミのセカイは何度でも再構築する余地があるね」

ありがたい……ありがたいし、すごくいい人たちなんだって分かるんだけど、やっぱり何言ってるのか分かんねえ……！

この世界においておよそ万能の力を持つ錬金術師だなんてのぼせ上ってるなボクは。実のところ全然全くこれっぽっちも力が及ばないところがあるというのに……！

……そもそも理解するべき領域なのかどうかは知らない。

「さあて、ウチの番だな。ヒョウカー、準備はいいかッ!?」
「うん、大丈夫」

さて、次は美玲さんだな。

元々美玲さんはファツション自体は分かりやすい人なんだ。
「Girls & Monsters」^{ガールズモンスターズ}で徹底的に固めてるし。

ボクの服装に対してもそんな感じだろうなーとは思ってたけど、
やっぱりそうみたいだ。

「ウチが選んだのはコレだ！」

実のところ、傾向自体は先の飛鳥さんのそれと似ていると言えは似ている。同じパンクファツションに近いものだからだろう。

ただ、飛鳥さんのものがクールにまとめてあるのと比べて、美玲さんのものはややカワイイさがある。

空色のネコミミフードパーカーに、黒と朱色で彩られたアンダー。
下はゆるいフリルのスカートだけど、今回はスパッツを穿くのを許してもらってる。

ツメは、あつたり無かつたり、というか着脱式だつたりする。そこは配慮がなんとなく見え隠れしていた。

「クール系の氷菓ちゃんにはどうかなと思いましたが、意外とこれはこれでカワイイですね〜」

「かわっ……」

「そうだな、カワイイぞー！」

「カワイイカワイイ」

「カワイイ！」

「カワイイ！」

「カワイイ!!」

「う、うお……おう、あう」

そんなにカワイイ連呼しないでよ！

ボクの中身を知らないからそんなこと言えるんじゃないか！
知ったらそんなこと言ってられないよ！！

ふぎいいいいいいいい！！

なお、「カワイイ」の単語を聞きつけて興水幸子こしみずさちこさんが一度顔を出してきたんだけど、それはまったくの余談として置いておく。

「フフフ——真打、来たり!!」

【最後は私だね!】

と——最後の最後に、大トリを務めるのは、誰であろう蘭子さん。

彼女の普段のゴスロリ風ファッションを思うと、やや気が重かったけど……買って来たのを見た時、割と普通っぽい見た目の服だから驚いて、安心した。

——今は、驚きの方がまだ勝っている。

徐々に徐々にではあるけど、彼女の購入した服について、分かってきた。

外からはボクを呼ぶ声が聞こえてくるけれど、今は頭に入らない。だって、この服は。

この服は。

——ヘルメス派の錬金術師に支給される制式の衣服と、よく似ていて。

「う、ぐ」

こみ上げるものを必死で抑え込む。胃の内容物を「分解」し、吐いてしまわないようにギリギリのところまで踏みとどまる。

大丈夫。大丈夫。似ているだけだ。蘭子さんは、独自の世界観を持った人。ファンタジー風の世界を夢見て、それに近しい外見のボク

がいたから、ふとそういう衣装を着せたがっていたとしても、問題無い。

ただの過剰反応だ。ボクは戻ってきてなんていない。ボクは依然、「白河水菓」のままだ――。

「魂が……ヴァルハラへと旅立ったよう、ね？」

【あのく、起きてますか？】

「あ――ご、めんなさい。今行きます」

カーテンを開き、姿を晒す。と同時に、皆の視線がボクに集中するのが感じられた。

「おおっ!?! これはまたなかなか……ん？ どうしたんだ氷菓？」

「う、ううん。何でもないよ」

務めて、何でもない風を装う。

そう、何でもない。何でもないんだ。皆にとっては何も関係ない。

こんなのは結局ボクだけの問題なんだ。気取られちゃいけない。

「見た目がなんか元々ファンタジーって感じだから、ファンタジーな服も似合ってるよね〜♪」

「これも悪くないな！ 普段使いはできないだろうけど。ウチ、もうちよつとゴツスゴスな感じで来るかと思ってたぞッ！」

「フフフ、これもまた先導者の務めよ。我らが翼は決して折れぬ！」

【先輩として、張り切って選んじやった！ いつでも着てくれるようにと思っ♪】

皆からは意外と好感触だ。けど、ボクの心には軽く影が落ちていた。

ダメだっけ分かってるんだけど、なあ。

思った以上に、昔のことはボクにとってトラウマらしい。錬金術に

対してじゃなくて、「あの人」を思い起こさせるものに対して——か。
……思ったより、深刻だな。

「……あの、でもボク、こんなに払えませんよ」

「心配しないでいいさ。これは先輩から後輩への贈り物だからね」
「え？」

「禁断の扉の先へ踏み込むためには、渾沌の外套がいでうが必要なのよ……」

【アイドルの世界は、お洋服が無いと困っちゃうから！】

「先に行く者は後に続く者のために動くものなのさ。元々ボクはファッションの勉強もしてただけど、そうして得た技能が後輩のためになるなら、惜しむことの方が罪だよ。きつとね。いずれはキミたちも——とは思うけど、まあ、強要はしないさ」

言って、飛鳥さんは軽く目を伏せた。

「あと、流石に同情するからね……」

……そういえばこの人たち、話聞いてたんだったな。

同情されて、しかも服まで貰った。

この人たちは天使か何かか。いや墮天使だ。本人がそういう風に喩えたんだからそういうことにした方がきつと喜ぶだろう。

……ボクも後輩ができたら、彼女たちみたいによくしてあげよう。

その頃には流石にもっとお金もあるだろうし。きつと。

「良かったなッ」

「……うん」

美玲さんに軽く肩を叩かれる。

うん。本当に——いい先輩を持ったと思う。

……それはそれとして、あの服は流石にしばらく封印しておかない

と、ボクの心がもちそうにないや。

9：勧誘！グラツシー帝国

寮の朝というのは、思ったよりも早い。

レッスンや収録、その他の事情もあるから当然と言えば当然なんだけど、実のところボクにとっては結構辛い。元々低血圧気味なこともあるだろうけど。

「ふわ……」

食堂まで向かう間に、あくびを一つ。

ここんどこ毎日筋肉痛だ。体力が増してるような実感はあるけど……それはそれとしてキツイことはキツイ。

こうなってること自体は自分のせいだし、文句は言えないけどさ……。

「お。おはよう、氷菓ちゃん……」

「ん。おはよう輝子さん……」

そんなこんなでやや憂鬱な朝を過ごしている最中、輝子さんに挨拶をされた。

どうやら輝子さんはいつもの調子のようだ。まあ、元々ローテンションなこともあるけど……。

と、ふとその視線がやけにボクの身体を上から下へと行ったり来たりしていることに気付く。

「どうかした？」

「い、いや。それは私の方が聞きたい……どうしたんだ、氷菓ちゃん……？」

「どう、って……？」

「その、服……いつも制服か、ジャージなのに……何で今日は、そのー

「……………ぴにやこら太のパーカーなんだ……………」

「……………ああ、これ？ 穂乃香さんに貰ったんだ」

「ほ、穂乃香ちゃんにか……………」

その一言でだいたい察したらしい。

綾瀬穂乃香さん。346プロのフリルドスクエアというユニットに所属しているアイドルの先輩だ。

ぴにやこら太に対して強い愛着を持っており、以前ボクが楓さんに借りたぴにやこら太のハンカチを見て、強い興味を示したのが穂乃香さんだった。

その時は洗濯しようと思ってただけだったんだけど、なんだかどうもボクのものと思われちゃったらしく、何故か気に入られてしまったようだ。

いや。ボクとしても、正直その、ぴにやこら太は嫌いじゃない。みんなはブサイクなんだって言ってるけど、ボクはそこまでじゃないと思うんだよね……………割と愛嬌もあるし。

「それに……………そのTシャツは……………」

「ボクが買ったんだ」

「……………『虚弱体質』って書いてあるぞ……………」

「うん。あと『意思薄弱』っていうのもあるよ」

「そ、そうか……………」

虚弱体質のボクにはピッタリじゃないかな。

ちなみに二枚セットで千円だった。

「い、いいの？……………」

「うん？」

「いや……………あ、うん……………氷菓ちゃんがいいなら、いいんだ……………うん」

ど、どうしたって言うんだろう。おかしいな輝子さんだな。

普段使いする分には質も良いし、申し分ないもののはずなんだけど……。
と、悩んでいるうちに、後ろからとてとて歩いて来る音が二つ迫ってきた。

「おはようございませす〜……ええ……?」

「おはようございませすっ……!?!」

七海さんとみちるさんだ。ただ、いずれもボクの姿を見るなり言葉を失っている。

みちるさんなんか手に持ったバゲットを取り落とさんばかりだ。危ないな!?!

「氷菓ちゃん……あの、きゅ、急に服装が変わってますけど、どうしたんですか!?!」

「みんなに制服とジャージばかりじゃダメって言われたから……」

「な、七海はもうちよつと、カクレクマノミさんみたいな方が氷菓さんに合ってると思うんですけど……」

「く、クマノミ? ちよつと派手じゃないかな?」

「今のも派手と言えば派手だぞ、氷菓ちゃん……」

派手かな? 緑色に青色なんだから、目には優しいと思うんだけど。……目に優しい系アイドルか。いや。ちよつと思っただけだけ

ね。流石にその路線は無謀が過ぎる。そもそもどうという方向性だよ、それ。

その後も食堂に行くまでに何人かの寮生に会ったけど、そのいずれに關してもなかなか芳しい反応は得られなかった。

解せぬ。

「今日は何がいいれすかね〜」

「アンチヨビサンド！ は昨日も食べましたしー……ここはフレンチトーストか卵サンドという手も……」

「じゃあ七海がアンチヨビサンドれす！ 輝子さんと氷菓ちゃんはどいうするんれすか？」

「あ、き、キノコあんかけうどんだな……フヒ」

「おにぎりセット」

「氷菓ちゃん！ もうちよつとグレード上げましょう！」

「お、おいしいから大丈夫だよ」

「おいしさと腹持ちは関係ないと思うんれすけど……」

ちなみにこのおにぎりセットとは、おにぎり二つと味噌汁のセットのことである。

ボクは見た目通りの少食のため、正直に言っただけでもそれなりに満足感を得られていた。

まあ……そりゃ満腹にはちよつと足りないかもしれないけど。腹八分目って言うじゃないか。

「お給料が出たら改善されますかねえ……」

「どうだろ。やりたいこともあるし、あんまり余裕無いかも」

仕送りもしたいし、部屋に色々揃えたいし、遊びたいし。食事自体は今のままでもボク個人は特に問題ないし。

栄養面で問題あるなら何か適当に錬成すればいいし。

問題はない。うん。たぶん。

「フヒ……アイドルは、体が資本だからな。自分のことも考えなくちや、ダメだぞ……」

「う、うん、まあ……努力するよ」

と言っても何を食べたらいいんだろう。やっぱり肉か。お肉なのか。

あるいは魚か？ 魚だったら七海さんに聞けばいいんだろうけど。炭水化物ならみちるさんだな。多分パンのことばかりになっちゃうだろうけど。

……それまでにどれだけ胃が慣らせるかなあ。

それぞれ注文の品を受け取って席に着く。やはりボクの方が一番少ないようだ。分かっちゃいるけど、それこそみちるさんと比べると半分以下だな……。

「んぐ」

でも、ボク自身一口が小さいからな。これはこれで適正なのかもしれない。

人間の脳というものは不思議なもので、咀嚼するだけで満腹中枢が刺激されて満足感を得られる。

だから量が少ない時ほどよく噛むべきだ。また、よく噛んで食物を細かくすることで、栄養の吸収も良くなる。ダイエットにも有効だ。

……なんて考えていると、ふと三人から視線が寄せられていることに気付いた。

「何？」

「なんででしょう、こう、ハムスターみたいだなあって」

「何それ」

「あゝ。両手で持って、もくもくもくもく食べてるの、言われてみればそんな感じれす」

「ええ……？」

は、ハムスターか……そういう愛玩動物って感じじゃないんだけどなボク。

多分ボク、ビーバーとかオオアリクイとかその辺の何かだよ。実は凶暴だったりするんだよ。主人が殺されて一年過ぎましたってタイプだよ。

……凶暴なんだからな！

「ところで、氷菓ちゃんたちはもうユニットの名前、決まったんですか？」

「ううん。みちるさんたちは？」

「あたしたちもまだですねー。ほら、色々ありますから……」

「……まあ、難しいよね」

「何か、あつたのか……？」

「うん、まあ、色々と、ちよつと」

「はあとさんも含めて全員が納得する名前って、難しいんれすよ……」

それ以前にあの人どうやってたら納得するんだろう。

ハート★スウィーティーみたいなのじゃないと納得しないんじゃないかなろうか。

いくらなんでもそこまでじゃないと思うけど。流石に。26歳だし。

「氷菓ちゃん、何かありませんか!？」

「そこでボクに振らないでくれない!? というか、ボクが決めちゃダメでしょ!？」

「いいのれす。実際芳乃さんたちはプロデューサーが決めてるんれす」

「決めちゃつ……あ、はい」

なんとなく納得した。あの三人が自分から率先して意見を出していくような光景は、ちよつと想像できない。

「……ええと、あくまで参考にするだけにしてね」

「大丈夫です！ 本採用までのルートは拓けています！」

「よ、余計に意見を出しづらくなるんじゃないか……」

本当に出しづらいよ。

何でだれもかれもボクの外堀を埋めにかかるんだよ。

「……ミラ・ケーティーとか。ええと、たしか……『不思議なくじら座』って意味なんだけど」

「おおっ、クジラさんれすか!」

正確な意味はよく分からないけど、確かそんな感じの意味だったよ
うな覚えがある。

しかし、クジラって哺乳類のはずなんだけど、七海さんはいいんだ
ろうか。

いいんだろうな。海の生き物だし。ボクももうそれでいいや。

「よ、よくそんな意味、知ってるな……」

「偶然頭の中に入ってただけだよ」

星の名前にはアラビア語が使われていることが多い。だから、錬金
術の本を読むときになんとなく聞いた名前があるなー、なんて思っ
ていたら、それが星の名前だった……ということが頻発していた。

ミラ、って言葉自体は、綴りを変えて二種類ほどある。意味はそれ
ぞれ「不思議な」と、「運命」だ。特に「ミラ・ケーティー」と呼ぶ場
合はボクの言った通りのものになると思うんだけど……まあ、そこは
余談か。

「モゴ……ゴ……フゴツ。ゴク……うん! ちょうど肇さんとはあと
さんがいるから、ちよつと提案してみます!」

「七海も行ってくるれす!」

「え、あ、ちよ」

「……行っちゃった、な……」

「……行っちゃった」

ちくしょうどうにかしてるぜ。

何もボクが言ったこと真に受けなくたっていいじゃないか！

もつところ……もうちよつところ……あるだろう！

「た、大変だな？」

「うん……」

……いいんだけどね。多少振り回されたって。迷惑ってわけじゃないんだし。

@ —— @

それから朝食を終えて、ボクたちはダンスレッスンのために、揃ってトレーニングルームに来ていた。

今日はボクたち三人の他に、五人——さくらさんたち三人と、頼子さんとマキノさんの二人、合計8人でのレッスンになる。

今日も相変わらず晶葉はちよつと不器用で、志希さんは天才的なセンスを覗かせながらも、休み時間になると失踪したり遁走とんそうしたり。休み時間じゃなくても逃げ出したり。

なお、昼を過ぎる頃になるとボクは死ぬ。ボクの体力は一曲分ダンスを踊るだけで尽き果ててしまうのだ。

「今日も芸術的なまでの倒れっぷりだね」

「まあ、あん時よりはマシみたいやけどな」

「フ……フフフ……そりゃあ、ね……フフ……」

「いや無理して喋らんでええて」

あかん。筋肉が引き攣って変な笑い声みたくなってる。

ダンスはもうホントにキツイ。割とすぐに氷菓だったものと化してしまう。ボーカルもキツイことはキツイけど、あつちはまだ全身運

動じゃないだけマシだ。

それでも当初のそれよりはよっぽどいい。特訓の成果は確実に出ている。

「話には聞いていたけど、本当に体力が無いのね……頼子も、まあ氷菓ほどじゃあないけれど」

「す……すみません」

見ると、頼子さんもボクほどではないにせよ、だいぶ疲労しているようだった。

元々そこまで活発な人ではないし、運動もそこまで得意ではなかったのかもしれない。

「ダンスも歌もプロ顔負けなのに、体力がその全てを帳消しにしている……喜ばしいことではないけど、興味深いわね」

「た……単なる運動不足だから、興味とか、持たなくても、いいから……」

口ぶりはともかく、マキノさん根はかなり真面目だから要らないことまで書き留めようとして困る。

いや本当に困る。ちよつと勘弁してほしい。

「そういえば、今日って……」

「どうしたの、さくら？」

「ううん、なんだか似てる傾向の人が多くなって思っちゃってえ」

「あ、ああ……」

ふとした拍子に思い立ったのか、さくらさんが周りを見回しながらそんなことを口にした。

ああ。うん。似た傾向というか。うん。分かるよ。プログラミン
グが得意らしい泉さんを含めて技術系が四人。クール系もいて、その

上……その。眼鏡が五人。

八人中の五人だ。何らかの作為を感じる。いや流石に無いか。

「眼鏡ですね」

「!!?!」

「どうもおはようございます。皆さんとは初めましてですね」

唐突に、トレーニングルームに誰かが入ってきた。

もうレッスンは一応終わってるからいいものの、何者だ!? ……と口にするような元気もないんだけど。

確か、彼女は……。

「おはようございます。確か、ブルーナポレオンの——」

「はい、かみじょうはるな上条春菜です。どうもはじめまして」

「あ、あのっ! そんな方がまたどうして!」

「眼鏡の波動を感じて!」

「えっ」

「えっ」

「アツハイ」

……何言っちゃってんのこの人!?

クソツ、なんて事務所だ! どうしてこう毎日毎日先輩アイドルに圧倒されなきゃならないんだ!

「まあまあ、眼鏡どうぞ。ああそちらの皆さんも。どうぞ。はいどうぞ」

「センキュー!」

「えっあっはいありがとうございます……っ?」

「ど、どうも……」

促されるままに眼鏡をかける泉さんとさくらさん。志希さんはノ

リノリで応じている。何にでも対応できるとかあの人ちよつと無敵すぎないか。

しかもこれがまた誰もかれも似合っている。泉さんなんてもう貫禄すら感じるほどだ。普段眼鏡かけてないのにね。やっぱりキヤラクター性だろうか。

……これ、似合う眼鏡を選んだ春菜さんもすごいんじゃないか？

「それであるの、どういった御用ですか……？」

「ああ、そうそう。みなさんにこれを」

そう言って春菜さんが手渡してきたのは……チラシ？

「何ですかこれ」

「346プロダクションメガネ会勧誘のチラシです」

「メガネ会」

何その……その……何!?

いくらなんでもその会合ニツチすぎねえ!?

「参加はご自由にどうぞ。私たちメガネ会はいかなるメガネも拒みません」

「えっ、いや、あの」

「今日の会合は19時からだるめし屋ですので、是非とも参加を！
それでは！」

ツツコミをする間も無く、春菜さんは嵐のようにこの場を去って行った。

あとにはよく分からない謎の静寂と、気まずいというか微妙としか言いようのない空気感だけが残るのであった。

誰かこの状況について説明してくれよお!!

それから数時間ほどして、結局一切の説明がないままに時間が来てしまった。

マキノさんは「別に危害を加えようという意図は無いだろうから、大丈夫でしょう」なんて言っていたけど、ボクとしては問題はそこじゃないと思うんだ。

で、結局ボクら五人も行くことになったんだけど……。

「……随分様変わりしたわね、格好が」

「うん、まあ……あの服はやめておけてっぺ晶葉に言われたし」

ボクの服装は、昼の時とは変わって飛鳥さんに貰った服だ。

正装を求められているなら制服で行くべきだけど、どうやら居酒屋……みたいなお店のようだし。一応は先輩方への挨拶も兼ねているわけだから、一番それらしい服にしておいた。

……別にぴにやでもいいとは思っただけど、他ならぬ晶葉の忠告だしなあ。聞いておかないと後で何を言われるか……。

「もしかして、言われてなかったらあの服装のままでしたか……？」

「え、それが何か問題？」

「問題だから着替えろと言っただらろう!？」

「もしかしてウケ狙いとかそういうのなん？」

「違うよ!？」

「なおのこと悪いわ!？」

売ってるってことは普段着にしてもいいってことだろ!？」

ってことは普通に着て行ってもいいってことじゃん！

穂乃果さんなんて昨日ぴにやTシャツ着てたし！

「ところでだるめし屋？ ってどういうお店？」

「随分と強引に話を変えにきたな……私もよくは分からないが」

「リサーチはしてきたけど、居酒屋と小料理屋の中間……と言ったところね」

「私はあまりそういうお店には行かないのですが……皆さんはどうですか？」

「節約もしたいし、アタシはあんまり行かんなあ」

「外食に出るくらいなら研究していたい」

「外食に出たことがほとんど無い」

「居酒屋のようなお店はあまり無いわ」

すごい。見事に誰も行ったこと無いぞ。亜子さんはもしかすると行ったことあるかもしれないけど、その回数もたかが知れてる程度だろうし……。

ちよつといたたまれない雰囲気すら漂っている。

「……ま、まあ。その、行ってみれば、分かると思います。はい」

「それはまあ、うん、確かに」

まあ、言っても食事会や懇親会なんだから、特に気負うことも無いだろう。

前世を含めて外食なんてほとんどしたことない——というか346カフェくらいしか行かない——ことを鑑みると不安にはなるけど。

五人で談笑しながら歩いていくと、街並みの中に一軒、指定された店があることに気付く。店舗の前では春菜さんが店から出て、ボクたちのことを出迎えていた。

「……あれかな」

「あれだろうな」

よく見れば、春菜さん以外にももう一人……同じブルーナポレオンの荒木比奈あらかひなさんもいた。

前にブルーナポレオンの写真を見せてもらった時、比奈さんは眼鏡

をかけてなかったと思うんだけど……あれかな。眼鏡どうぞされたとか。

……いや、まあ。普通に考えると、普段は眼鏡で、ライブの時はコンタクト……とかそういうことなんだろうけど。

しかし私服だとまたアイドルオーラが薄いなあの人……その方が都合は良いんだろうけど。

「時間通り、皆さん来ていただいてありがとうございます！」

「わあ本当に来ちゃったんスね……しかも全員ちゃんと揃って」

「いいことじゃあないですか。有望な新人の眼鏡アイドルの方々ですね……！」

「わあまた新しい造語が……」

——あの人とは、ちよつと気が合いそうだ。

なぜか直感的にそう思った。

「……どうも、あの、こんばんは？ おはようございます？」

「どちらでも結構ですよ。それじゃあ皆さんお揃いのようなので、そろそろお店に入りましょうか」

「え、ええ。それじゃあ」

「うむ」

春菜さんと比奈さんに連れられて、店内の廊下を歩いていく。どうやら個室……というか、店内の一角に設けられた大部屋を借りているらしい。

果たしてどういう規模の会なのか、ちよつと今から想像がつかない。想像できてもそれはそれで困る。

「お待ちせしましたー」

春菜さんの言葉と共に部屋にぞろぞろと入っていくと、そこには既

に数名の女性が座っていた。

ええと、確か記憶している限りだと……あつちの人は相川千夏あいかわちなつさん、あの人は北川真尋きたがわまひろさん。浅野風香あさのふうかさん。と……あまり眼鏡の印象が無い岡崎泰葉おかざきやすはさんや高峯たかみねのあさん、速水奏はやみかなでさんの姿も見られる。今ここにおいて眼鏡をかけているところを見るに、プライベートでは眼鏡をかけている人たち、なのだろう。

「まずはみなさんご注目を。こちらスターライトプロジェクトの眼鏡アイドルの方々です！」

おい事実とはいえその紹介の仕方いいのか。

「そしてこちら、私を含めた八人が既に346プロに在籍しているメガネアイドルの方々です」

だからその紹介の仕方はそれでいいのか!?

「それでは自己紹介から参りましょう。まずはスターライトプロジェクトの八神さんから……」

……で、そんなこんなで結局自己紹介が始められてしまった。

なんのことはない、ごく普通の自己紹介だ。それぞれ、自分の名前とアイドルになった動機とかを述べていく。ごくありふれた光景だ。346プロダクション所属アイドルメガネ会なる奇怪な団体のそれでさえなければ。

ちよつと質問してみたけど、やっぱりのあさんや泰葉さん、奏さんはプライベートで、例えば外出しない時に眼鏡をかけているようだった。外に出る必要がある日はコンタクトらしい。

「それで——その、この団体の設立目的は？ 私たち、結局詳しいことも聞かされないままに来ただけけれど」

「眼鏡をかけているアイドル同士、仲良くするために女子会……ということなのでしょうか……？」

「フッフ、勿論それだけじゃありません。アイドル活動についての情報交換や眼鏡を購入する時のアドバイス、レンズの汚れ拭きや変装用の伊達眼鏡のことまで密に話し合っています。そしてゆくゆくは全アイドルメガネっ娘計画も着実に進行し——」

「後半は聞かなくていいツスよ。でもだいたいそんな感じツス」

「そ……そう、分かったわ」

すごい、あの冷静沈着で他人を自分のペースに引き込むのが上手いはずのマキノさんが押されている。

特定の一芸に特化しているおかげだろうか。色んな意味でこう、春菜さん、強い。

でもまあ、途中で止めてくれた比奈さんのおかげで、概要はなんとなく分かった。ような気がする。

「芸能界は文字通りスポットライトの当たるお仕事です。だから、どうしても視力の悪くなる方は多くて」

と、泰葉さんが補足を入れた。

なるほど、考えてみればアイドルに限らず、例えば舞台などの仕事でも常に照明は当たり続けるものだ。注視していなくとも光は勝手に目に入り、長年強い光にさらされることで視力も勝手に落ちていく。芸能人に眼鏡やコンタクトの人が多くいことも頷ける。

「変な話だけれど、そういう人たちの受け皿にもなれたら……なんてね」

「それこそ、視力は上がることは殆ど無いですからっ」

千夏さんや風香さんに言われると瞬時に説得力が増してくる。それに実際、そういう理念も含んでいるのだろう。名前こそおかしなも

のだけど、内情はかなりマトモかつ普通の会だ。涙が出るね。戦々恐々として疑いの眼差しを向けていたボク自身に対しても。

「……ただ……貴女はあまり、この会合に顔を見せなかったはずだけれど」

「それもそうね。ただ、やっぱりクローネにとってようやくできた後輩だし、会う機会があればと思って見に来たの。変かしら？」

「いいえ。それが良い変化をもたらすのならば、好ましいと言えるわ」

話が聞こえてきたけど、どうやら奏さんはこの会にはあまり来ていなかったようだ。

彼女の所属しているプロジェクト・クローネも大人気だし、忙しくて顔を出す余裕も無かったのかもしれない。

逆に言うとのあさんはしゅっちゅう来てるのかメガネ会。それでいいんですかアナタ。ミステリアスなキャラクターが売りなんじゃないんですか。

「まあともかく今日はいったん無礼講！ みんなじゃんじゃん食べて盛り上がりつつ仲良くなつてこー！」

「その通りです！ 今日コース料理を頼みましたが、皆さん欲しいものがあつたら何でも頼んでくださいね。じゃあまずはドリンクから注文していきましょう！」

「おー！」

「おーッス」

と、思っている間にも、真尋さんの言葉を契機に、本格的に女子会……？ というか、飲み会が始まった。

これも一種の宴会……というか、パーティというか、そういったものと言えるだろうか。今まで施設のお誕生日会くらいしか参加したことのないボクにとっては凄い刺激になって——何より先輩アイドルの皆と交流ができたのは、良い経験になったと思う。

食事は寮の門限ギリギリまで続き、ボクたちも濃厚かつ有意義な交流ができた。

特に仕事で使うコンタクトを買う時の注意点なんて、今後絶対に役に立つ情報だ。

最初のインパクトに負けて折れず、ちゃんとお誘いを受けて良かった、本当にそう思う一日だった――。

が、ただ一つだけ、問題があった。

それは――。

「おーいヒョーカ、大丈夫かー」

「むうーりいー……」

――良いもの食べすぎてお腹壊しちゃったことだ。

唐突なグレードアップと脂ものの過剰摂取に、ボクのこのクソザコストマックが耐えきれなかったのだ。結果、一日中トイレから出られない羽目になっている。

美玲さんも心配して見に来てくれたが、対応の一つすらできやしない。

チクシヨウめえええええええ!!

「はうっ!?!」

「……今日、お休みの連絡入れとくぞッ」

「お、お願い……ひぎい……」

いきなり何とかランクの高級ステーキなんてものを勧められるままに食べるべきじゃなかった……!!

……お肉は鶏肉から徐々にグレードアップして慣らしていこう。でもなければまた元の木阿弥になってしまう。

しかしまた、ゲロドルかと思いきやゲ……いやよそう。汚い話はするべきじゃない。

……もつと体が強くなりたーい。

10：これが俺の遊び心だ

「それでは本日のぴにやこら太普及委員会を始めます」

「ちよつと待ってください」

「はい氷菓ちゃん」

「ボクこの会合に参加した覚え無いんですけど」

「えっ?」

「えっ」

——その日、レッスンを終えて帰宅したボクを待っていたのは、ぴにやこら太普及委員会なる謎組織の看板を掲げてボクの部屋に押しかけて来た穂乃香さんだった。

言っている意味がよく分からない。いや分かるけど、わからないわ。

あと何故よりによってボクの部屋なのか。そこでやるとしたら穂乃香さんの部屋じゃないのか。

「それは勿論、今日から始めたので当然だと思いますよ」

「今日からですか」

「同好の士が今までいなかったので……」

いなかったのか。いや周囲の反応を見るにそうなっておかしくないけど。

「あとボク、レッスン直後なんですけど……」

「? 何か問題が?」

あつダメだ穂乃香さん体力ある人だ。

ボクは死ぬほど疲れてるから寝かせてほしいんだけど、その辺がいまいちよく分かられてない系の反応だコレ。

いやボクの体力なんて分からなくて当然だけど。

「それであるの、普及委員会って何なんです……?」

「私が思うに、皆さんどうもぴにゃこら太に対してあまり興味を持っていないようで」

「まあ、そうですね」

その辺りは見てたらまあ、分かる。

嫌いとかじゃなくて、他に見るものがあるというような感じというか。

でも、好きの反対は無関心だとも言う。興味が無いっていうのもまた微妙な話だ。

「この前、遊園地に行った時にはフリルドスクエアのみんなでぴにゃこら太の帽子でお揃いにしてみたりしたんですけど」

「はあ」

「その時はみんな、私に気を遣ってやってくれてるようで……ですがやっぱり、気を遣われてのことじゃなくなって、ちゃんとみんなにぴにゃこら太のことを好きになってほしいんです」

「なるほど、自分の好きなものだからこそ他の人にも好きになってもらいたいと」

イイハナシダナー。

なるほど、自分だけじゃなくて友達も一緒に楽しむためにも、好きになってほしいと。ボクがそういう立場にいたなら嬉しくて涙が出るようになる。

それはそれとして、何でそれがフリルドスクエア以外に伝播してるのか、これがわからない。

「……ぐ、具体的な方法は?」

「例えば、忍ちゃんのお部屋のぬいぐるみゾーンにこつそり一匹忍ば

せたり……」

テロでは？

「もうちよつと穏便な方法にしませんか」

「穏便ですよ？」

「いえそういうわけじゃなく。まず地道に良さを説いていくことから始めた方がいいと思います」

「だけど、今まで言ってもあまり効果が……」

「部屋の中に自分の知らないものがあるって怖いと思います」

「た、確かにあずきちゃんも『返却大作戦っ！』って言って返しに来た時に、同時に『怖いよっ!?!』とも言っていたような気が……」

「もうやってたんですか」

「はい……」

……いや……その……もつところ……あるだろう!?

何で極端な方向にふれちゃってるんですかあなたは!?

「穏便に行きましょう」

「穏便にですね」

「何事に関しても大事なものは草の根活動だと思っんです。バーツと一気に駆け上がっていくのもアリですけど、もうびにゃこら太は地上波に出ていますし……やっぱり、良さを説いていく方向が一番いいかと……」

「なるほど……確かにその考えも一理あります」

フツホホ一理と来たか。百理くらい欲しいんだけど無理か。ホハハハ。

「あまり急ぎすぎて、プッシュしすぎるとそれはそれで逆に嫌われちゃうかもしれせんし」

「それは……イヤですね」

「ですよ。なので緩やかに行きましょう。少しずつ行けばきっと流ります」

流石に流行らないし流行らせないなんて言い出す人はいないと思うけど。

いないかな。

いるかもしれん。

あてこの手の話は基本ボクの気のせいってことが多いんだけど、
フアー^あタ・グラン^ちデにいる原生生物にびにやこら太が似ている気がする。

……まあ、何かの思い違いだろう。たぶん。

@ —— @

そんなこんなで、始業式が目前に迫ってきたある日の朝。ボクたち
三人と芳乃さんたち三人の2ユニットは、プロジェクトルーム横のオ
フィスに呼び出されていた。

呼び出された理由は……なんとなく分かるような、分からないよう
な。想像が当たっていなかったらいなかったで自意識過剰な感じが
するから、断言はしないでおく。

……呼び出されていたんだけど、かれこれ30分。プロデューサー
が指定した時間は20分ほど前なんだけど、あの人はまだ来ていな
い。

「ふわあ……」

「うにゅ〜」

もうこずえちゃんはおねむになっているし、志希さんは今にも疾走
を始めそう。いや違う。失踪だ。別にStart upしてRe
adyしてTime outはしない。

芳乃さんがいるからその気になればすぐ見つかりはするだろうけど……。

「根津さん……遅い……ね……」

「うん……」

おかしい。これは何かがおかしいぞ。

346のプロデューサーは大変に優秀で、本来は連絡から五分以内にはアイドルのもとへ駆けつけていると言われている。

何かがあったに……違う……！

……まあ多分仕事だろうけど。

「許容するのもし、人としての度量でしてー」

「とは言っても……やっぱり遅刻は良くないよ」

「それもまた一つの真理でしてー」

芳乃さんは相変わらず無敵だ。何をしたらこの人が怒ったりするのか、正直ボクには皆目見当もつかない。

と、待ちぼうけている中、ふと、晶葉が何か作業している手を止めた。

「よし、できたぞ」

「んんくなになに？ 何か作ってたの？」

「うむ、助手の身体に痺れを起こすスイッチだ」

「ナンデ!？」

暇を持て余したからって何でそんな超技術なブツ作ってるの!?

「どうか材料どこから持って来たんだよ!？」

「実は常々この白衣に部品やらなにやらを仕込んでな」

「……え、えええ……」

道理でなんだか重そうだったわけだ。何かあるとは思ってたけど、いつでもどこでも何か作れるようにとは。作らなくてもいいと思うけど。

しかし、もしかしてこのおかげで体力がついてたりするんじゃないだろうな。

「な……何でそんなものを……？」

「5分前集合と言った張本人が遅刻してきているのだから当然の報いだと言っておこう。年少者への示しもつかないしな。さてぱちつとな」

「……………」

「……………」

……何も起こらない。

いや当然だけどね。この場にプロデューサーいないし。お仕置き用に作られたものなんだから、これでいいんだけど。

「あきはー。これ、おしていいー……？」

「ああいぞ、どんどん押せ……」

「わーい……」

なかなかヒドいことを平然と言つてのける晶葉に、それに乗ってポチポチポチスイッチを押し続けるこずえちゃん。

今頃プロデューサーはどうなっているのだろう。電気信号を飛ばして単に痺れさせるだけのスイッチではあると思うんだけど。

「これ連打してもいいものなの？」

「うーむ、まあ死にはしないだろう」

その段階の話!?

「せいぜい長時間正座した後の痺れが全身に回るくらいだろう」

「マジでヤバイやつじゃないか」

『はああああああん!?!』

「あつ」

「あ……」

などと思っていると、部屋の外から大の大人が出していいようなものじゃない悲鳴が聞こえてきた。

見に行ってみると、プロデューサーが倒れ込んでうずくまっている。

おおぶろでゅーさーよ しんでしまうとは なさけない。

「これセーフなやつ?」

「(社会的に)アウトなやつかもしれん」

「……まいつか」

まあ、プロデューサーだし、十分もしないうちに復活するだろう。

——そして大方の予想通り、プロデューサーは数分で元の調子を取り戻した。

「い、いくらなんでもあんまりだ……あああんまりだああ……」

「遅刻してきたのが悪い」

「5分や10分くらいならまだしもね」

「うむ、社会人なら時間はキッチリ守らなければな」

ボロクソな言われようである。しかし事実には違いないんだから甘んじて受け入れてもらおう。

やがて大きな溜息をついて、プロデューサーは改めてこちらの方に向き直った。

「遅刻の理由を申しませー?」

「ああ、うん、そのことなんだけど、みんなのデビューライブまでの日程を調整してたんだ」

「ライブまでの……日程……ですか?」

「ああ。その日はライブだけじゃなくって、CDも同時発売の予定だからね。レコーディングやデビューシングルのCM撮影も必要だし、宣伝もしてもらわないといけないし……」

「なんだかややこしいねえ」

「ややこしいんだ、こういう部分はね。というわけで許してくれるだろうか許してくれるね?」

「絶対に許さない。絶対にだ」

「ハハハ、私たち相手ならともかくその手の言い訳がクライアントや上司に通じると思うのか?」

「ちくしょう」

まあ、上司でもクライアントでもないボクたちだからギリギリ許さないこともないけども。

いや晶葉は割とキレてそうだな。

……まあ、それはそれとして置いて。

「で、どういう風に決まったわけ?」

「そ、そうだな! ええと、まず十日後に社内スタジオでレコーディング。それから日程を調整してM ミュージックビデオ Vを撮影することになる。系列局で流してもらおうCMはこのMVの映像から出す予定だから、真剣に臨んでほしい」

「……なんだか……いきなり、大袈裟にも……」

「最初の宣伝だからね、大袈裟なくらいじゃないと」

ボクも聖ちゃんに少し同意するけど、やっぱりそこは商業的に見て「やって当然」くらいのもんだろう。

と、そこでふと、プロデューサーがボクの方を見た。

「で……広報に言つて宣伝をしてもらわなきゃいけないんだけど」
「分かってるよ。ボクたちのユニット名の話だよね」

「ああ。うちの会社だけの問題じゃないからね、早めに決めてほしい」
「広告代理店なんかの問題もあるしなあ。確かに、早く決めておかないと問題があるのだろう。」

「助手、作詞作曲のために提示した資料に仮の名前なんかは書いていないのか?」

「すまない、そこはユニットEって書いてる」

6つユニットがあるからそれぞれにA～Fのアルファベットを振って、その内の五番目に決まったユニットだからユニットEね。わかりやすいけど無機質なな。まあ仮の名前なんてそんなもんだけど。

「はい、じゃあEから始まる単語」

思っていると、志希さんが手を挙げてボクらに問題を提示してきた。Eから始まる単語……ああ、成程。そういう意図か。

「エサクタ!」

「エレキテル」

「エリクシール」

「なんか最後のがティンと来たからエリクシールでどうかなく?」

「ちよつと待てよ!」

「何です?」

「そんな雑に決めてしまってもいいのか!? もうちよつと真剣に悩んだ方がいいんじゃないか!」

「もう悩むところは散々通り過ぎたんだよ」

「あとはもう閃きに身を任せるしか無かったのだよ助手」

「そ、そうなのか……？」

雑であることは否定しない。だってこれ、前世にあった万能薬の名前だし。

そもそもを言うと、エリクシールとは錬金術の世界では不老不死の妙薬として語られている代物だ。商品やブランドの名前なんかにも用いられたりもする。別名エリクサー。もったいなくて日本人が使いたがらないアイテム第一位。

「でもまあプロデューサーもこう言ってることだし、何か言い換えとかあるかなあ、氷菓ちゃん？」

「ん……と。エリクサー、エリクシル、イリクサ、エリクシア、エリクシャー……」

『『エリクシア』が語感としてもいいな、それにしよう』

「雑ウー！」

「けど悪い名前でもないんじゃない？」

「う……まあそりゃそうだけど」

ボクたち個々人の特性を考えると、これがまあ悪くない名前じゃないかなと思う。

科学や化学は錬金術から生まれ、派生していったものなわけだし。そういう意味で言うなら最適とすら言える。

「……分かった、エリクシア、だね。せめて英語表記とかにさせてもらうけど、いいかな」

「りよーかーい♪」

「問題無い」

あとはプロデューサーのセンスの問題になるから、そこは任せるとしよう。

「ともかく、みんなはスターライトプロジェクトのデビュー第一陣になる。これまで以上にレッスンに励んで、最高のステージにしてほしい」

「はいー」でしてー」

何にしても、これからはプロデューサーの言う通りにどんどん忙しくなっていくことだろう。

仕事が忙しくなれば、その体力が必要になるだろうし……うん……色々不安だけど、まあ、死ななきや安いさ。

……あ。

「そうだ、プロデューサー。やっぱりデビューシングルなんだから、あんまり巧く歌わない方がいいのかな」

「ん？ まあ、一般的にはそうかもね」

これはよく言われることだけど、アイドルのデビュー曲というのは、少し下手なくらいの方がいい、という話がある。

デビューしたばかりの新人なのだから、上手い下手よりもフレッシュユさを前面に押し出していく方がファンが増える。変に上手いよりは、ちよつと下手な部分があった方が、「新人として」味がある。今後に期待する人もいるだろうし、こういうデビューしたばかりのアイドルを好んで追っかけるファンもつく、ということだった。

商業的に見てもまあ、そうなるのは当然だろうし、ボクとしても用意はある。こういう時のために様々な新人アイドルのデビュー時の映像を見てトレースしておいた。

「でも、それでみんなの個性を殺してしまうようじゃあ本末転倒だ。スターライトプロジェクトは、みんなの可能性を育てて伸ばしていくための企画なんだから、みんなには自分たちの思うまま、自由にライブを楽しんでほしい」

その言葉に、聖ちゃんの顔がぱつと綻んだ。彼女は歌うことが好きだと言っていたから、余計な縛りを入れられずに済んでほつとしていくんだろう。また、そんな様子を見てか、芳乃さんの顔にも笑みが浮かぶ。

——けれど、対照的にボクの表情は困惑に染まっていた。

ここか。ここで「自由」と来るか。

理念自体は素晴らしいものなんだろうけど、今のボクにとっては最悪だ。自由にやっていいと一口に言われても、どうすればいいのかが全く分らない。

技術を披露するべきなのか？ 周りとの調和を優先した演出をするべきなのか？ それともさっき言った通りちよつと下手めにするべきなのか——？

「だいたいウチのプロダクションの看板アイドルの高垣さんだってデビュー当初から『圧倒的な歌唱力！』って売り出していったんだ。何も問題はな……白河さん、どうかした？」

「え……あ、いや。何でもないです」

「です？」

「な、何でもないよ！」

「氷菓、少し調子がおかしいぞ。何かあったなら言うといい」

「うう……ん」

肝心なところで鋭いなこのプロデューサーと友達は。でないところの大プロダクションのプロデューサーなんて務まらないんだろうけどさ……。

しょうがないか。聞かれた以上は答えなきや。

「……自由って言われても、どうしたらいいのか……分からないし……」

そこまで言うと、プロデューサーは何かに気付いたらしく、沈痛な

面持ちでボクと他のメンバーとを見比べた。

はつきり言って、今日までボクは人に言われたことしかやっていない。

アイドルになったことだってそう。レッスンだってそう。一応、体力をつけるためにランニングなんかはしてるけど、それだって「そうした方が良い」と言われたからに過ぎない。

例外があるとしたら休み時間の暇つぶしくらいのもので、自発的に「これをやろう」と思って行動したことは、数えるほどしかないように思える。

個性を伸ばして自由な表現を約束する、という煌めくような理念も、今のボクでは目が潰れてしまいそう。

「一ノ瀬さん、ちよつと」

「ん〜?」

志希さんを手招きし、何かしら内緒話を始めるプロデューサー。少
しだけ不安げだった志希さんの表情もなんだか明るくなっていく。

一体何を目論んでいるんだ。ボクに関係あることだろうけど、だからって目の前でこんな風に話をされると不安になるんですけど!

ほどなくして話を終えたプロデューサーたちは、こちらに向き直って口を開いた。

「依田さんたちは今日、午後からは特に何も無いよね?」

「はい。れっすんは明日でしてー」

「分かった。じゃあ今日はお休みで頼むよ。もし自主練習をしたいならトレーナーさんたちに聞いてみてくれ。緊急事態があったら俺の携帯か、先輩に直接言ってくれるかな」

「はい……だけど、根津さんは……?」

「ちよつと白河さんの成長のために必要なことをしにね。一ノ瀬さんと池袋さんも今日は外に行こう」

「あいあい♪」

「助手よ、これはいったいどういう趣向だ？」
「いいからいいから。それじゃあ後は任せたまよ！」

芳乃さんたちに見送られながら、四人で街の方へと向かって行く。
それにしてもプロデューサーのあの不敵な笑み……いったい何を
考え付いたというのだろう。
不安しかないぞ、この状況。

——で、そんなこんなあつて十数分ほどして。
ボクたちは何故か都内某所のゲームセンターを訪れていた。
いや、おい。

「ちよつと待てよ!?!」

「どうしたんだい?」

「ボクの成長がどうのこうのって言ってなかった!? 何で遊びに来て
んだよ!?! というかプロデューサー仕事中じゃないの!?!」

「いいかい白河さん。社会人にはね——有給というものがあるんだ」
「そういう意味じゃないよ!?!」

ぬああああああああ!!
内心でも実際にも頭を抱え込む。

何だつてここでゲーセンなんだよ! 普通合同レッスンとか見学
とかそういうちゃんとした方向性のアレでしょ!? まるで意味がわ
からんぞ!!

「よおし、今日は俺のおごりだ! みんな、存分に遊んでいいぞ!」
「にやつほう!」

「フフフ……そういうことなら存分にやらせてもらおう! 行くぞ志
希、氷菓!」

「え、ちよ、ちよつ……力強いな!?!」

「氷菓ちゃんが弱いだけ♪」

「ぬあああああああ！」

事実なだけに否定できない！

ずるずると引きずられながら、UFOキャッチャーなどが設置されている、入口にほど近いプライズゲームのコーナーへと向かって行く。

馴染みの無い光量と音量に目と耳がやられてしまいそうだ。

「さて、どれがいい？」

「いや、別にボク、欲しいものっていうのは……それにそもそもゲームセンター初めて来たし……」

「あー……」

「今時の中学生にしては珍しいな……いや、そういう意味だと全員そんなものだが」

志希さんもゲームセンターなんかにはあまり馴染みはないだろうし、晶葉も基本家で機械いじりしてる方が多いだろう。

それでもボクほどじゃあないらしく、ゲームセンターって場所そのものへの抵抗感みたいなものは見られない。

……ここまで来ちゃうとしようがないか。

「……じゃあ、あれ」

「またぴにゃこら太か」

「またなのか」

「まただ。何が氷菓の琴線に触れたのか……」

「別にいいだろ……」

好きなものは好きでいいじゃないか。

ボク自身、何で好きなのかって言われると、まあ、説明はしづらいけど。

「よっし。じゃあこのくらいなら俺が取ってあげよう！」

「プロデューサーが？」

「無理しない方がいいよ〜？」

「何が無理なもんかって。これでも俺、学生時代はプライズコーナーの主^{ぬし}なんて言われてたんだぞ？」

「ホントかよ……」

「まあ見てなって」

言つて、プロデューサーは500円玉を突っ込んだ。

どうやら500円を投入すると一回分サービスしてくれる形式らしい。残り回数が「6」と表示されたのを確認すると、プロデューサーは慣れた手つきで操作を始める。

「よつと……と……あれ？」

しかし、アームがぬいぐるみを持ち上げることが叶わず、そのままぼとりと落ちて行った。

二度、三度と続けても上手く行かない。これは……。

「……あのさ、プロデューサー。それってもしかして、取れないから延々居座ってるせいで付けられた異名なんじゃ……」

「うううっ!？」

凶星かよ。

「む、昔はこれでも結構な数取ってたんだけどなあ……」

「累計何万使ったんだ？」

「ごめん、覚えてない」

「そうだろうねえ」

だから敬遠していたんだ、ゲームセンター。

湯水のようにお金が消えていくから、金銭感覚が麻痺してきそうで怖いんだよ。

「白河さん、やってみるかい？」

「ボクが？ やったことないけど」

「ああ。折角だし、どうかな？」

「……じゃあ」

「操作方法だけど……言わなくても大丈夫かな」

「うん。見てたら分かった」

ごく単純なゲームだ。ボタンを動かしてクレーンを操作して、二度目の操作が終わった時点でアームが降りていく。

この程度なら――。

「――計算完了」

「うん？」

内部構造、伝達系を解析してパターンを掌握。脳内で物理的挙動を模倣^{エミュレート}。落下時の力の作用と現在の筐体の内部の圧力やその他諸々の構成要素を元に計算を重ねれば……。

「うん。取れた」

「うえええ!!」

「おー、すつごーい！」

「一発で取ってしまうとは……やるな氷菓！」

「まあ、このくらいはね」

「お、俺の苦労は……い、いや。ビギナーズラックというやつだろうな、うん」

「……ふーん」

……どうやらプロデューサーはあくまで初心者だからこそその幸運

だと思いたいらしい。

「残り二回分あるよね。これ、やってもいい?」

「ん? あ、ああ、勿論いいぞ」

「ふーん。それじゃあ……晶葉、どれか欲しいものある?」

「あのうさぎがいい」

あのピンク色のうさぎ………杏さんのと同じデザインのやつじゃねーか。

そうか、そういえば正式名称からしてアレ、「うさぎ」だわ。ま、でも問題ないか。今度も構造解析して……と。

「取れたよ」

「おお、流石だ!」

「何イ!」

「じゃああたしはー、それ!」

「……えっ」

「え?」

「えっ」

「いや……え?」

何あのキワモノ臭のするぬいぐるみは。

いや、ぬいぐるみなのか、あのよくわからない物体。チューリップ

……? ……木? ……うえき……?

「……は、はい」

「わーい! ありがとー氷菓ちゃん!」

「ど、どういたしまして……」

あの造形のインパクトに全てが霞んでしまった。

……いや、もう気にするまい。気にしちやダメだ。志希さんが喜ん

でる、それでいいじゃないか。

「お、おかしい……こんなことは許されない……」

プロデューサーはというと、なんだかやけにショックを受けている。

流石にここまでやれば認めざるを得ないだろう。

「晶葉、次はどうする。次は何をやればいい？」

「どこかの火星人みたいなことを言いだすんじゃない」

「次はねく……あ、マリ○カート！ あれやろ！」

「レース……？ ま、まあいいけど」

レースゲーム……対人ゲームかあ。苦手なんだけど、まあ仕方ないか。

プロデューサーも交えて乗り込んでそれぞれ100円を投入する。

それにしてもこのゲーム、写真撮られるのか。別にいいけど、珍しいパターンだな……流石に保存はされないよね。

「よーい……スタートっ！」

マリ○なら家庭用のもので何度かやったことがある。ボクはいつも使ってるキノコ王国人を選んだ。プロデューサーは赤いヒゲ、志希さんはでっかい、晶葉は………何でパツクマンがいるんだろう。まあいいか。

「よおし……」

対人戦になるとクソザコなメクジと化すボクだけど、こういう系統のゲームならまだ勝機はある！ ……はず。

勝てなくとも最低限この中で最下位にならないければ、個人的には満

足だ。

——と思っていたら、熾烈なデッドヒートが繰り広げられることとなった。

「おのれこの裏切り者が！」

「にやはははー！ 騙して悪いけどゲームだからね！ 落ちてもらおうー！」

「じよ、冗談じゃ……」

「貴様らには水底がお似合いだーっ！」

「ついに俺の番か……！」

……マ○カーにありがちな光景である。

単なるレースゲームじゃなくって、アイテムを使って他のプレイヤーを妨害でき、かつ順位の低いプレイヤーに良いアイテムが配分されるという関係上、それはもう醜い争いになるのは避けられない。身体が闘争を求める。

ちなみにボクの定位置はプレイヤー中最下位である。

「あ、抜いちやった」

「うおおおおお！」

その後、晶葉と志希のデッドヒートの巻き添えを食らったプロデューサーを抜き去り、なんとか当初の目標を達成することには成功したのだった。

なお、プロデューサーはバナナを踏んだりCPUの甲羅の直撃を受けたりして最下位に転落した。

さつきから散々だなプロデューサー。

——その後も、様々なゲームをして遊んだ。

エアホッケーは物理演算による先制攻撃が猛威を振るった。対戦格闘ゲームはおよそボクの読み負けで9割がた負けてた。リズム

ゲームは特に盛り上がって、店内の新記録に挑戦してみたりしていた。でもダンスゲームは勘弁な！

……あと、プリクラなるものを撮ったりしたんだけど。あれはあれで色々ど気恥ずかしい。でもまあ、みんな楽しそうだし、いいか。

そんなこんなで遊び倒して数時間ほど。気付けば、日もだいぶ傾いていた。

流石にやりすぎて目がちかちかするし、肉体的にも疲れた。そろそろ時間的にも良いころだ、と思ったところで、自然と皆の足も出口に向かっていた。

「今日は楽しかったかな？」

ふと、プロデューサーがそんなことを問いかけてくる。

晶葉と志希さんの視線も、その問いかけに合わせて合わせるようにしてボクの方に向けられていた。

ふと気恥ずかしくなつて顔を背けるけど、何も言わないわけにはいかないか。

「……まあ。楽しかったよ」

「そうか。良かった」

「でも、何でこんなことを突然……？」

「うーん……なんて言うのかな。俺なりの回答だよ」

「はっ？」

何の？ 回答？

「どういう風に『自由に』したらいいのか分からないって言ってたよね。俺は『楽しいこと』が自由なことだと思ってる」

「楽しいこと……」

「あくまで俺個人の考えだけどね。やっぱり、楽しいっていうのは一つの前提になると思う」

自由なことは、楽しいこと——か。

どこことなく引つ掛かる部分はあるけれど、なるほど、それも一つの解釈だと思おうと腑に落ちないでもない。

けど……。

「……それならそうと、言葉で伝えればよかったのに」

「ん、氷菓ちゃんって、口で言っただけ分かるタイプ？」

「納得できるなら、まあ」

「でも世の中には、経験して初めて分かることもあると思うんだ。白河さんは特に、自分で体感しないと理解できないタイプだと思ってるからね」

……ぐうの音も出ない。確かにボクは、体感して初めて本質を理解するタイプだ。錬金術の真理にしても、それ以外のことにしても。

ん——いや待てよ？ でも、それって……。

「……しゅがはさんと同じ扱い？」

「……まあ」

「そういう部分はあるだろうな」

……ボクそういう分類なのね。

いや、改めて考えると確かにそうだ。しゅがはさんも、自分で体感しないと考え方が改善されないだろうな、と見ていて思った。

ボクも、どういう風に「自由にする」かを人に聞いてみても、多分体感してみないとどれも釈然としない反応を返すハメになったことだろう。で、最終的にわけがわからなくなってくるんだ。

「まあまあ、手のかかる子ほどかわいって言うし？ 甘んじて受け入れたまへー♪」

「手のかかる子扱いはそれはそれでやだよ……」

施設じゃむしろ手のかからない子扱いで通っていたっていうのに。でも、まあ。こういうのも、嫌いじゃない。

ボクの中で明確な答えになったわけじゃないけれど、これはこれで一つの解釈だ。その上で、一つの方針が出来上がったのは喜ばしいことでもある。

「手のかかる子の面倒を見るのもプロデューサーの役目さ」

「……………」

「そ、そんなに睨まないでくれよ。その——思うにさ、お客さんが楽しむためにはアイドルが楽しんでる姿を見せるのが一番大事だと思うんだ」

「ああ、もう分かったよ！」

こう何度も言われると、それはそれで出来の悪い子のようにでちよつと気に障る。

ボクのがままだつてことは分かるんだけど。

感謝も、そりゃあ、してるんだけど。

「……………楽しむよ。楽しめるだけ」

「ああ。そうしてくれ」

どうしても憎まれ口を叩いてしまうのが、からだ肉体にこころ精神が引つ張られてるようでちよつと辛い。

ホント、ありがたいのはありがたいんだけど、ね。

11:Phase Shift

ボクたちのデビューライブまで、日にちが迫っている。

四月の下旬を目標に続けられていたレッスンも激しさを増し、これまで以上に高い技術と、何よりもライブ全体を通して体力をもたせることを求められていた。

ボクはと言うと、先月の終業式の頃と比較して比べ物にならないほどの体力をつけつつある。

まあ、現状だと2、3曲分歌って踊っている最中笑顔を維持し続ける、までが限界だけど……。

「よし、そこでやめ！ いい感じじゃないか！」

「はーいー！」

「あ、ありがとう……ごじや……まず……ごほっ」

「白河もよく頑張ったな。よく休憩しろ」

「はい……おうお……」

限界に達する頃には動きを止めるということもできるようになってたし、そもそもの限界値が底上げされた今、休みを取りさえすればなんとかなるはずだ。

問題は、ライブ本番での緊張感だろうか。過度なストレスは体力の消耗を招く。消耗しないで済むならそれで御おんの字だけど、そうじゃない時は……。

……いや、そうならないためにもトレーニングするんだ。まだ日数はある。頑張ろう。

「……はあ」

と、気持ちを奮い立たせている一方で、ふと晶葉が重たげな息をついた。

「……どうしたの、晶葉？ 酸素缶いる？」

「いや、そういうのじゃない」

「そう……？」

話しながらゆっくり酸素を取り込むと、徐々に息も落ち着いてきた。

改めて晶葉の表情を見ると、やっぱり、普段とは違ってやや曇り気味だ。快活な晶葉にしては珍しい。

……いや、でも、思い返してみると、最近はこんな表情もよくしていたような？

「そのな。正直、志希と氷菓は、私との技術の差についてどう思う？」

「あたしは特に考えてないけどー。氷菓ちゃんは？」

「……正直に言ったほうがいい？」

「ああ」

「差は、あるよ。ステップから何から、問題点を洗い出したらかなり出ると思う。けど……」

「いやいい。みなまで言うな。それが聞けただけでも十分だ」

……けど、それは当たり前のことなんだよ。

ボクはある種のずる^{チート}。志希さんは天性のセンスという最大の武器があるけれど、晶葉にはそれが無い。

エリクシアの三人の中で、肉体的に一番「普通」に近いのは、紛れもなく晶葉なんだから。

けど、ボク自身はそれが悪いことだとは思わない。晶葉は大事なことを置き忘れることなく、一步一步前に進んでいくような歩き方をしているのだから。

……でも、それを言うことはできない。

当然だけど、晶葉はその事実を気にしてボクらにそんなことを言うてきたんだから。ここでフォローを入れるのは嫌味に取られかねな

い。
それに――。

「その問題点、聞かせてもらえるか？ ライブまで日が無いから、できるだけ早く修正しておきたい」

「うん、分かった」

晶葉はすぐ立ち直りが早くて、何よりも努力家だ。

めげずに立ち上がって問題点をすぐに直そうとするその姿勢は、まばゆいほどに輝いている。ボクにとっても、憧れだ。

思わず、志希さんと笑いあった。

こんな風だから、志希さんも晶葉に対して興味を無くすことなくユニットとして活動できるんだと思う。面白い、というよりは興味深い。見守りたい。一緒に歩いていきたい。そんな感じ。

なんかこんなこと言っちゃうと恋してるみたいだな。人間性に惚れたっていう意味だと間違ってるないし、ボクの元の性別も考えると尚更だけど。

「例えばサビ前なんだけど、晶葉の場合ここでステップを踏む回数が多くって……こんな感じ」
「ふむふむ……」

エリクシアに提供された曲は、ややテクノポップ風の……と言つていいのかは分からないけど、電子音を多用していて、ダンスも激しいものだった。

体力的にボクにはやや厳しいものがあるけど、それこそ鍛えて身につけたこの体力なら、一曲だけはもつ。いや、もたせてみせるとも。まあ晶葉や志希さんは割とフツツに踊ってみせちゃってるんだけど。疲労もそんなに見られないんだけど。

……これでもあの……あの…………3kgのダンベルくらいは簡単に上げられるようになったんだからな！

とまあそれはともかく、曲自体の難易度としては割と高い方だと思う。

求められる基準も高いし、デビュー曲として考えるとかなり挑戦的だ。

「くるっと回ってターン、この時は軸足を意識しすぎて自然なターンができてないから、できるだけ流れてやった方がいいかな」

「流れて」

「こんな感じかなー」

たたんたん、と華麗にステップを踏んで手本を見せる志希さん。晶葉も見よう見まねでやってみてるけど、上手く行かないようだ。

「足をひねりそうだ」

「ほらがんばれ♥ がんばれ♥」

「煽ってるのか応援してるのかどっちだ」

「え。比奈さんが人の応援するときこんな風にした方がいいって」

「そんなわけあるか。騙されているぞ」

「えっ!?!」

騙されてたのかボクは!?:

いやでも、言葉としては間違っていないよね!?! 頑張れって言ってる

じゃんツ!?!

「でもその言い方なんかヘンタイっぽくて好きかも」

「やめてよそういうつもり無いよボク!?! ひやあ!?!」

「シーハスハス。ちよつと汗混じり? でもない? 何で何で?」

「何でも何も……って服に顔突っ込むのやめてよ!」

「ペロペロー」

「にやあああああああああああ!?!」

「何をやっとするんだ君たちは……」

ボクの方が聞きたいよ、それ!?

志希さんの突飛な行動も今に始まったことじゃないけど、何だってこんな突然背中の方から服の中に頭突っ込まれて舐められなきやいけないんだよ!?

腰砕けになった体を強引に起こす。まったく、何でこんな変なことを……。

「力を入れすぎるから柔軟性が失われるんだよね。人間の関節つてもつともつと可動域が広いんだよ? イケるイケるー♪」

ぐにやりぐにやりと体を曲げて見せる志希さん。ホントこの人何でもできるな。

「……まあでも、力を入れすぎるから、っていうのは間違ってるよ。晶葉なら分かると思うけど、関節の周りを囲んでる筋肉を固めちゃうから、それに連動して関節もロックされちゃうんだ」

「なるほど、溶接してしまっているようなものか」
「そーそー!」

ロボット工学に長けているということは、それに通ずる人体工学に長けているということでもある。

関節をどこからどこまで動かすことができ、どこからどこまで動かすことができないか、物理的に可能なかどうか——そういうところが瞬時に分かるということだ。

そもそも正確性を求めすぎるんだよね、晶葉は。下手すると1mm単位を求めちゃうくらいに。

だからダンスする時もロボットダンスみたくなくなっちゃうし、歌を歌う時も無調整のボ○口みたくなくてたつてところはあ。

うまくそこがハマりさえすれば、それこそ発明する時と同じように天才的な能力を発揮できるはずなんだけどね。

「よし、なら続けて……」

「いや、やめといた方がいいよ」

「何故だ？ もうライブまで時間が——」

「いや。時間」

「時間!? 時間なら」

「トレーニングルームの使用時間」

「……あ」

当然だけど、トレーニングルームはボクたちだけが使ってるわけじゃない。

部屋の外を見ると、芳乃さんたちが軽く手を振っていた。同じ日にライブをする彼女たちも、集中的にレッスンするために三人だけでのレッスンということになっている。

「どこか適当なところで練習続けよう?」

「う、うむ。分かっている」

公園……だと人目が多いだろうし、もっと別の場所かな。

そんな感じでこの日も可能な限りの自主練習をした。

終わる頃にはボクだけじゃなく晶葉も志希さんもみんなバテバテになるほどだったけど、そうするだけの価値と収穫があったのは確かだと思う。

@ —— @

そんなこんなで数日ほど。レッスンレッスンまたレッスン、という日々を送り続け——ライブ当日。

ボクたち6人とプロデューサーは、とある大型ショッピングモールの一角に訪れていた。

一年前、シンデレラプロジェクトのニュージエネレーションとラブ

ライカがライブを行ったのと同じ会場だ。アイドルのデビューライブの会場としては破格と言えるだろう。

体調を整えるためにも、昨日はレッスン自体が完全にお休みだった。

とは言っても、ボクはボクで既に日課となっているランニングは継続してるけど。

「みんな、体調はどうかかな」

「大丈夫……」

「問題ありませんでしてー」

「うん」

「うむ、全く問題ない」

「どうやら、昨日休みを取ったおかげでみんな体調は万全なようだ。」

志希さんところずえちゃん相変わらず眠そうだけど、多分これは移動時間のせいだろう。まさかこの二人が昨日の晩興奮して眠れなかった、とかそういうことは無いはずだ。

「んーねむねむ。あと何時間〜?」

「本番はもつと後だけど、これから打ち合わせして一時間後にはリハやるよ」

「衣装はー?」

「もう搬入は済んでるよ。本番開始一時間前からメイクを始めるから、その時に一緒に衣装も着てもらうからね」

「ん〜りよーかい」

しかし、メイクに衣装か……。

そうすることになるだろうってのは分かってたけど、いざ目の前にしてみると緊張、というか不安があるんだよなあ。

元々の性別が性別だし、化粧も一度だつてしたことが無い。ヒラヒラの服を着るのも実質こないだの疑似ファッションショー以来だし、

本当に大丈夫なのかな。ちゃんと振る舞えるかな、ボク。

「大丈夫か、氷菓。不安そうだが」

「まあ……不安だけど、やるしかないし」

求められてるしね、そうすることを。

求められている以上は、やるしかない。

「観客も結構いそうだしね……」

「んく意識してこっち見るひとつってそんなにいないんじゃないかな？」

「いやあ。そうでもないぞ」

「そうなの？」

「どういうこと、プロデューサー？」

「ここで去年、ニュージエネレーションズとラブライカがライブをしたって言っただろう？ 同じ場所で346プロのアイドルグループがライブをやる、って聞いて期待して見に来るお客さんもいるんだよ」

「うへえ」

青田買いたいなもんか。デビュー直後の新人だからこそみたいな。

そうなる観客も多いだろうなあ。ちゃんといつも通りのパフォーマンスができるだろうか。

根本的に緊張というのは大敵だ。普段なら十割の力を発揮できるはずが、ほんの僅かな精神の乱れのせいで、発揮できる力は八割にも七割にも落ち込む。

ボクだってもしかすると緊張のせいで普段ならしでかさなような失敗もするかもしれない。歌詞や振り付けを間違えることも、万に一つはあるかもしれない。

想像するだけでも怖いけど、入念なりハーサルと綿密な打ち合わせ

でその可能性は減らすことができるはずだ。備えよう。赤いニンジャが現れて「備えていれば無事に済むとでも？」とか言い出しでもしない限りはきつと大丈夫だ。

「けど、みんななら大丈夫さ！」

「何を根拠に言ってるんだか」

「いやいや。俺だってみんなのことずっと見てて、その上で言ってるんだよ。大丈夫！」

「絶妙に信用ならない物言いだな……」

「何でだよ!？」

「言い方の軽さ」

「うぐっ……」

自覚はあるのか。

「リハと打ち合わせ、ちゃんとやっところ」

「そうだな。自分たちのやってきたことを信じよう」

「あの一。プロデューサーのことも信じて……」

「はいはい信じてる信じてる」

「雑ウ！」

だってボクにとつちやアイドル活動を始めることになった原因だぞ。

根津プロデューサーに目エつけられさえしなかったら苦勞もしなかったんだっての。雑にくらいなるよ。

……志希さんや晶葉たちと出会わせてくれたことには、感謝してもいいけど。

「出演順は芳乃さんたちの方が先だよね」

「はいー。まずはわたくしたちがみなに恵みをー」

「うん。私たちの歌を……みなさんに届ける……」

「がんばるよー……」

気合十分、という感じだ。こずえちゃんも今日はすっかり目が開いている。

変に気負った感じも無い。いや……この三人が緊張してる様子っていうのも、あんまり想像できないけど。

聖ちゃんは時々ちよつと頑張りすぎるけど、芳乃さんがよく見てるからそこは大丈夫かな。

「私たちも私たちで調整をするぞ、氷菓」

「うん……でも大丈夫なのかな？」

「自由にやっていいともう言質は取っているからな、言わせた者勝ちだ」

「うんうん、自由に楽しくやらないとね」

「……しようがないなあ」

「……あの、なんか不穏な話が聞こえてきてるんだけど、どうする気なんだい三人とも」

「ん？　そうか、助手はまだ見ていなかったか。フッフッフ……こいつだ！」

言って晶葉が旅行カバンから取り出したのは……数体のロボットだ。

通称、ダンシングウサちゃんロボ。デザイン、設計他ほぼ晶葉。材料提供及び構造解析による監修ボク。プログラミング泉さん。外装微調整及び着色と香料に志希さん。

盛大な技術の無駄遣いによりこのウサちゃんロボは人間のそれと遜色ないほどの踊りを見せつけるのだ！

……改めて考えるとマジで技術の無駄遣いだな!?

「ナニコレ」

「バックダンサーだ」

「バックダンサー!? ロボでしょ!？」

「ロボだよ?」

「助手は私を何だと思っっているんだ? てえんさい! ロボ少女である池袋晶葉に不可能は無い!」

「え、ええー……」

「いいか、助手よ。これは我々の技術を世に知らしめる最初の機会なんだー!」

「いやアイドルとしての魅力を見せつけてくれよ」

「もっともである。」

「そこも含めて私の魅力だろう。なあに、心配するな。動作には何も問題ない!」

「……その辺は、晶葉の言う通りだと思うよ。ロボも含めて晶葉の魅力だし……ロボもちゃんと動くことは確かめたし」

「まあ、白河さんが言うなら……」

「おい助手何だその信用度の違いは」

「普段の言動の差かな」

「うーむ……それは確かに……」

そこで納得しちゃうのかよ。

ボクの普段の言動って……あれ。ツツコミしたり困惑したり疲れててはっかりだな。我ながらいいのかそれで。

「……緊張してないかなって心配してたんだけどな」

「あたしはそういうのとは無縁かなー♪」

「志希さんはそうかもね……」

「白河さんはそうじゃないのかい?」

「今のやりとりで気が抜けたよ」

「そっか」

346プロに来た最初の日と同じことだった。なんかこう、わちゃわちゃやってるうちに緊張の糸も解けて、みたいな。

意図的にやってたっぽいあの時とは違って今回は流れの中で自然に、だけど。

……まあ、今からまだ数時間は暇があるんだけどさ。

@ —— @

とか言ったらあつという間に時間が経っていた。

な、何を（ry

ホント、ライブ前忙しすぎる。ちよつと嘘だろってくらい。

しかしライブ前のリハーサルの段階で既にグロッキーだなんて、流石にボクも想定外だった。

いや、想定しておくべきだったのかもしれないけど。……想定しなくなかったのかもしれない。

……ただ、それだけじゃなくて、他にも色々やってたせいなんだろうな、多分。

なんとなく気になったことがあると、ものごとが手につかない性分なのも良くなかった。

例えば老朽化した壁面や吊り下げ広告。346の備品とはいえ長い間使ってきたものは傷んでいるものもある。どうもそういうものを見るたび気になって仕方ない——ので、全部修復しておいた。

新品同然である。内部構造まで含めてしっかり錬成しなおしたので多分あと十年はもつぞ。やったね！

機材もいくつか不具合が出そうなものがあつたので、晶葉も交えて全部修理しておいた。

デビューライブで機材トラブルとか環境トラブルとか絶対に許さないよ。

そんなことをしていたせいで既に半分くらい体力を使ってしまった。

ハハッ何やってんだボクは。

……しかし……。

「……これが衣装か……」

「うん。悪くないな。ちよつと露出は多いかもしれないが」

「にゅふふー。いいね、この戦闘用白衣ってカンジ？」

「戦闘用って……」

戦闘用……って解釈にしておこう。

しかし、まあ……晶葉も言ってるけど、露出度は低くない。

へソ出し肩出し。上着を羽織るかたちにはなってるけど、その上着が、白衣をモチーフにしたノースリーブ。機能性？ ねえよんなも

ん。
それぞれにややデザインに違いはあるけど、一番露出度が高いっばいのは志希さんかな。胸元まで出てる。

晶葉が一番露出度が低いかもしれない。コルセットのおかげでへそ出しは免れてるし。どちらかと言うと可愛い系統でまとまっている。

ボクは……その中間、かな。胸元が出てないだけいい……というかさこ開くとすとんと落ちちゃうし。動きやすいことは動きやすいんだらうけど、これは……恥ずかしい。

色合いは、晶葉がピンクで志希さんが紅色、ボクが空色。志希さんを真ん中にして並ぶとちようどグラデーションっぽくなる、かもしれない。

「で、これからメイクしてもらって一時待機……と」

「いいか志希、逃げるんじゃないぞ。絶対にだぞ。フリじゃないからなー！」

「うずうず」

「逃げるなよ!？」

こりやどつかで逃げ出しそうだ。

こっそり発信機でも仕掛けておいた方がいいよ。そんな視線を向けると、晶葉は無言で頷いた。

その後、メイクも受けたけど……正直、よく分からないというのが感想だ。

ふぁんでーしょん……？ とか水がどうかという話を受けたけど、普段全くのノーメイクということだけを伝えてお任せした。

その一方、意外なことに晶葉や志希さんはそれなりにお化粧については知っているらしいことが分かった。

二人ともやつぱり女の子なんやなって。

ボクが女の子してなさすぎるだけとも言おう。

で、衣装にも着替えて準備は万端。あとは待機しておくだけ。

ボクたちも舞台袖から芳乃さんたちのライブを見学して……って運びなんだけど。

「志希の馬鹿はどこだ!!」

案の定である。

知ってた。と言えはいいのか、まさか本気でやるとは思わなかったと言えはいいのか。

気付いた時、志希さんは楽屋から姿を消してしまっていた。

「無敵の超技術でなんとかしてくださいよオーツ！」

「OK! 発信機! ……よし見つけた」

「……あっさりしてるなあ」

超技術持ちが二人もいればあるいは必然的だとはいえ、最初から失踪するだろうと見越して発信機を付けておいたのが功を奏した。

見ると、志希さんがいるのは……観客席？

「……何で観客席の方に？」

「わからん。全然わからん……」

備えておいて良かった。

いや、備えていても何も起こらない方がよかつたつてのが本音だけど、観客席にいるなら話は早い。

「まさかステージ衣装じゃないだろうな」

「流石にそれは無いでしょ。ボクちよつと行つて来るよ」

「いや、こんな時こそ電話を……ああダメだ！ 志希め、置いて行つている……」

でしょうね。

普段着じゃないんだし、わざわざスマホをステージ衣装に突っ込まないよ。

「いいよ、行つて来る。すぐ戻るから」

「その格好のままですか？」

「プロデューサーに言つてスタッフ用のジャンパーでも借りるよ。ボクらの出番まで何分？」

「10分だ。急げよ」

「うん」

プロデューサーに事情を伝えると、彼は頭を抱えながらも快くジャンパーを貸してくれた。

流石に今日は全力を出さざるを得ない。錬金術も含めてフルに、だ。

床を錬成及び再錬成しながら人混みを掻き分け、ボク自身は、足元を動く歩道の要領で動かし続けることで高速で前に進んでいく。

一分も経たないうちに、ボクと同じようにスタッフ用のジャンパーを羽織った志希さんのもとへとたどり着いた。

「志希さん、志希さん！」

「んにゃ？ 見つかつちやつたー♪」

「見つかつちやつたじゃないよ！ 早く戻らないと、次ボクたちの番だよ!？」

「んーでも、先にこつちからの光景見ておきたくつてねー」

「こつち……つて、お客さんの側からの……？」

「思わない？ アイドルってどんな風に見えてるんだろうなーとか」

そりやまあ……思わないわけではないけれど。何も本番直前にそれをやらなくつたっていいじゃないか。

「芳乃ちゃんたち、綺麗だよねー♪」

「……うん」

ステージの上では、芳乃さんたち——「PurelyTale」の三人が自分たちの曲を歌い、踊っていた。

三人ともすごく綺麗で、可愛くて、楽しそうで……この光景を見られただけでも、確かにそうするだけの価値はあったのかもしれない、と思わせてくれるほどだ。

けど。

「それをボクたちが次やんなきゃいけないんだからね……!？」

「にゃはは、怒られちゃった♪」

「怒られてるのにニコニコしてるんじゃないよ、まったくもうー!」

——と。ふと志希さんの顔を見上げると、何でか分からないけど、どことなく何かを捜さがしているように見回しているようにも感じられた。

捜してる……この会場で、誰を？

時々ボクもそうしていることはあるけれど……それは……。

「つてこんなこと話してる場合じゃないっ！ 早く戻らないと！」
「あ、待って待ってー」

いつもとは逆に、ボクの方が志希さんを引つ張って楽屋の方に駆けていく。その間、ずっと志希さんが満面の笑みだったのは……ちよつと癪だけど、ステージを見る側の光景を先に見ることができたこともあるし、容赦しておく。

……途中から手を引く側が完全に入れ替わってしまったのは秘密だ。

「晶葉ア！ あと何分!?!」

「ジャスト1分だ！ すぐ準備しろ！」

「一ノ瀬さん戻ったのかい!?!」

「連れ戻したよプロデューサー！ 開演延ばさなくっていい！」

「OK、よくやってくれた！」

万が一のことも考えてプロデューサーに後のことを任せていたんだけど、準備が無駄になったようで一安心だ。

死ぬほど慌ただしいことにはなってるけど、これで準備は万端。いつでも行ける！

「さ、二人とも行こ——」

「いや、その前に少し気合を入れてからにしないか？」

「ええ?。」

いきなり精神論なんて、晶葉にしては珍しいな……と思っているのと、不意に、わずかに震えている彼女の目が入った。

そういえば、プロデューサーに緊張しているかどうか聞かれたとき、結局晶葉は一言も発していなかった。あるいは、緊張していることを知られると他の面々も緊張させてしまうんじゃないかとも

思ったのかもしれない。

彼女自身のプライドもあるだろう。それと口にするのは、はばかられたはずだ。

「——うん、分かった。やろう」

「ンーなんか青春って感じ？　こういうの嫌いじゃない♪」

急ぐのは間違いないけど、だからってそれで晶葉のことは置いといて、ってやっていいわけじゃない。

ボクたちは三人で一つのユニットなんだから。

「円陣でも組む？」

「体育会系っぽくって私たちらしくはないな……」

「じゃあこうやって手を乗せてくー？」

前に向かって志希さんが手を差し出した。その手の甲の上にボクも手を乗せていく。最後に、晶葉も少しだけ震えた手を載せた。手を重ねるごとに互いの体温が伝わってくる。それだけのことなのに妙に気が軽くなってくるあたり、ボクも緊張してたらしい。

「……プロデューサーは入らないの？」

「えっ……俺？」

「助手なんだから当たり前だろう」

「それに、エリクシアの立役者なんだから気にしな〜い♪」

「……分かった。それじゃあ、せんえつ僭越ながら」

苦笑しながらも、ボクらの重ねた手の上に大きな手が重なった。

これに関しては……ま、役得ってやつだろう。それに、志希さんの言う通り、ボクたち三人を集めたのはプロデューサーだ。むしろ妥当なところでもあると思える。

「号令、頼むよ」

「そ、それも？ ……それじゃあ、そうだな。みんな、このライブ、楽しんできてくれ！」

「「おーっ!!」」

押し込んだ掌を、天高く掲げて弾けさせる。

それだけのことなのに、不思議と笑顔が溢れ、やる気も満ち溢れてきた。

「お、あつちの三人も終わったみたいだ！」

プロデューサーの声につられて舞台の方に目をやると、芳乃さんたちが舞台袖に向かって駆けてくるのが見えた。

「お疲れ！」

「うん……！」

「良いステージだったよ〜♪」

「ありがとう……！」

「心穏やかに臨のそまれませー」

「勿論だ！」

思い思いの言葉を掛け合い、掲げた手でハイタッチ。ごくごく単純な動作なのに、たったこれだけのことで活力と勇気が湧いて来るんだから、人間って不思議なものだ。

「それじゃあ」

「ああ！」

「——行こう！」

エリクシアのみなさん、どうぞ——そんなアナウンスに導かれて、ボクたち三人はステージへと駆けていく。

その中で、様々なものが見えた。

トレーニングルームとはまるで違う、煌めくようなステージとスポットライト。プロデューサーが言っていた通り、デビューライブとしては多い方なのだろう数の観客。ライブを見学に来たらしいスターライトプロジェクトのみんなの姿。それと、施設の子たちや職員のお姉さん、園長先生——あのバカ姉と先生は今度ツラ貸してもらう——の姿まで。

いつの間にか、緊張感が高揚感へと昇華されていた。

ああ——うん。大丈夫だ。気持ちは昂ついても冷静で、体は淀みなく動かせる。一切の能力を損なうことなく——やれる。

「こーんにーちはー♪」

この場に来て、第一声を放ったのは志希さんだった。

元気のよい挨拶のおかげで、ここにいる「以外の」聴衆——遠巻きに見ていた野次馬へと向けた一言。それだけで、男というのはコロツと「見てみようかな？」なんて気になってくる。綺麗な女の子から声をかけられて嫌な気分になる男なんてのはそうそういないのだ。

「ボクたちは、このたび346プロダクションのスターライトプロジェクトからデビューさせていただくことになりました、『E_エL_リI_クC_クI_シA_ア』です！ 今日のご来場いただき、ありがとうございます！
ますっ！」

性格上、二人に堅い挨拶は難しい。こういうときはボクの出番だろう。

元々体格がアレなボクなのだから、それこそ「小さい子が頑張ってるな」という感が溢れ出る。結果、そのスジの人をこの場に留めることができるのだ。

我ながら悲しくなる特徴だね!!

「今日私たちが歌うのは、『お願い！シンデレラ』、『とどけ！アイドル』、そして私たちのデビュー曲だ！ 短い時間だが、どうか楽しんでいってほしい！」

「あたしたちのライブでみんな酔わせてあげるー♪ で、これから歌うデビュー曲の曲名はー？」

「——『PH@SE⇄SHIFT』！」

合図と共に、ここ一か月の間に聞き慣れた、ギターと電子音の入り混じったテンポの良いイントロが流れ始める。

「Phase shift」——直訳すると、「位相転移」。科学者と化学者、そして錬金術師というボクら三人にとっては、馴染みの無い言葉というわけじゃない。

そこに込められた意味はつまり、学者からアイドルへ、その位相を変えてなお活躍していくということ。

ボクにとっては、ある意味世界の位相を——というところも含んでいるけれど。何にしても、全員にとつての共通項にハマった曲名かな、と思う。

二曲目の中盤に差し掛かると、事前にセットしておいた晶葉謹製のダンシングウサちゃんロボの出番だ。

やがて、サビに差し掛かる頃には、ライブ自体の盛り上がりも最高潮に達していた。

——正直に言ってしまうと、ボクはこのライブに対して、強い期待を持っていた。

もしかすると、これを通じて自由というものの意味が、分かるんじゃないかって。

けれど、そんなうまい話は無いみたいだ。まだ答えは明確にはなっていない。

それもそうだよな。それが分からなくなっつてずっと迷って悩んでいくことなのに、唐突に答えが降って湧いて来るなんて、都合が良さすぎる。

けど、分かったことはある。

このライブは、すごく——楽しいんだ。

晶葉と志希さんと一緒に歌って、踊って、観客と一緒になって盛り上がって……この感覚が、たまらなく心地よい。一人じゃないんだってことを、実感できる。

寒くて薄暗い場所じゃない。ここは暖かくて、光が溢れてる。

何におびえることもなく、縛られることもなく、悲しむこともなく、ボクは「一人の人間」として、生きてここに立っていると、実感できる。そのことが何よりも嬉しい。

プロデューサーは、自由っていうのは「楽しいこと」だって言っていた。

正直に言うと、それ自体はちよつと釈然としないところがあった。ボクの求めている方向性とは違うような気がしたから。

けど違うに決まってるんだ。ボクとプロデューサーは違う人間で、求めている先も全く違う。

それでいいじゃないか。

ボクにとつての答えは未だ見えてこない。この道の先にあるのかすらも分からない。

だからそれ「も」正しい。自由なことは楽しいこと。それも「自由」に対する回答の一つ——自由という言葉を表す側面の一つなんだ。それ「だけ」じゃないからこそ、追及する意味がある。

アイドル生活と同じこと。自由に対する探究も、このライブから始まっていくんだ。

——この時間が終わらないでほしい、なんて思ったのはどのくらいぶりのことだろう。

もしかすると、二度の人生の中でそんなことは初めて想ったかもし

れない。

友達と一緒に一つの目標に向かって、他の人たちもどんどんさん巻き込んで盛り上がりすぎて——そんなこと、ただの一度だって経験したことがなかったのだから。

悪魔と取引をした男の話がある。その男は、無情の時間が永遠に終わらないよう願っていた。

けれど、自然の流れとして、時は進んでいく。いつまでも留めてはおけない。

「みんな、ありがとうー♪」

締めを飾る志希さんのその一言によって、ボクたちにとって初めてとなるこの公演は、終わりを迎えた。

この楽しさと熱が名残惜しくって、いつまでも続いていてほしくて——多分、ボクがこの場にいる誰よりも未練がましく手を振り続けていたんじゃないかなって思う。

でも、改めて考えると——これからなんだ。

これから、ボクたちの活動は続いていく。これが最初。まだ、「これから」がある。

そう思うと、なんだか嬉しくなった。

……で、当然に言うべきだろうか。

ボクの身体は三曲もたせるくらいが精いっぱい。

ここに至るまでに色々やりすぎたせいで体力がほぼ尽きてて。

結果、舞台袖に引っ込むと同時にブツ倒れた。

またこのオチか!!

12：まだまだこれから

眼を覚ますと、そこはさつきまでボクたちがみんなで詰めていた楽屋の一室だった。

体力の限界が来て、舞台袖で倒れちゃったことは覚えてるんだけど……状況を考えると、誰かが運び込んでくれたのかな。

「ん、起きたのか」

「ん……」

と、思っていると、晶葉が数本のドリンクを抱えて部屋に入ってきた。

あのパッケージ、見覚えがあるぞ。確かプロデューサーがたまに飲んでる……エナドリだっけ。

あれ飲んだ後のプロデューサー、無駄に元気になっちゃうもんだから、面倒くさかったことをよく覚えてる。

どんな薬効があるのか知らないしボクですら解析もできない謎液だけど、とにかく効果があることは確かだ。

「晶葉が運んだの？」

「いいや助手だ。ものすごく焦っていたぞ。救急車を呼ばないと、なんてな」

「いつものことなのに……」

「そうだな。いつものことだ……いやいつものことのように慣れ切っ
てしまうのも問題じゃないか……?」

……まあそれは確かに。

オオカミ少年じゃないけど、どうもボクは体力が尽きてしよつちゅう倒れてるもんだから、もう皆が「そういうものだ」と認識してるフ

シがある。

本当に危険な時に「何だいつものか」となる可能性が無いではないし、できるだけ頻度も減らしていきたいところなんだけど。

……まあ、本当に危険ならスピアボディに退避すればいいし、別にいいか。

プロデューサーはあんまりボクが倒れてるのを見たこと無いし、そういう意味だとこれが普通の反応になるんだろうか。

……そういえば、ボクってどのくらい……。

「っ、あ、握手会!! あ、あ、晶葉! ボクどのくらい寝てた!」

「安心しろ、ほんの10分程度だ。新記録だな」

「そ、そっか。良かった……」

普段、一度倒れちゃったら軽く一時間はブツ倒れっぱなしだし、晶葉の言う通り10分ってのは新記録だ。

もつとも、これに関しては普段が長すぎるとも言うんだけど……。

「私は助手たちを呼んでくるから、しばらくエナドリでも飲んで待つておくといい」

「うん。ありがと」

差し出されたエナドリを一本受け取り、開封して中身を口に運ぶ。

どうやらゼリーエナドリチャージの方らしい。ボク個人は、小腹がすいたときにちようどよさげなこつちの方が好みかも。

流石の効能と言うべきか、ほんのちよつととはいえ元気が出てきた。アイドルインエナドリチャージ。ブラア!

「……………ふう」

晶葉がプロデューサーに報告に行っちゃったので、部屋にはボク一人が残されたことになる。

こんなに日の高いうちから一人きりっていうのも、なんだか久しぶりなような気がする。ここのところずっとユニットのレッスンでみんなと一緒にだったし、それ以外の場所でも何かと他の人がいたし。ライブの時の熱は、今もまだ胸の奥で燻くすぶっている。この一人きりの状況ってのも、一度鎮火して冷静になるには好都合かもしれない。起こした体をもう一度横たえる。

眠りはしないけど、せめて今はもう少し寝転んでいたい。もし眠ってしまったとしてもそのうち誰かが部屋に入ってくるだろうし、その時には起こしてくれるだろう。そう思っただけでぼーっとしていると、外から慌ただしい足音が聞こえてきた。

この音……重量から考えると、プロデューサーかな。ちよつと尋常じゃなくらい慌ててたみたいだし、そうなんても仕方ないかな……と思っっていると、勢いよく扉が開けられた。

「白河さん!!」

「……んえ?」

駆け込んでくるプロデューサーの勢いは想定よりももつとすさまじく、まさに周りが見えていない暴走列車というような雰囲気すら漂う。

え、え、これってこの勢いだとボクの方に突っ込んでくるんじゃないの?」

汝を抱擁せん、とばかりに勢いよく腕を広げるプロデューサー。感極まったのか、その目にはうつつすらと涙すら浮かんでいる。

非常にみつともないんだけど、それはボクが心配かけたせいだよなあと思うとちよつとばかり申し訳なさが浮かんでくる。と同時に——これ、もしかしてこのまま抱き着かれたらボクの棒きれみたいな身体はヘシ折れるんじゃないかという疑念が浮かんだ。

いや、折れるわこれ。ベアハッグそのままの勢いでドギャンと行くわ。根津ブリーカー! 死ねえ!! とかそういう威力だわ。

「アルス・マグナ（物理）ア!!」
「ぐえーっ!!」

生き残りしたい。体は反撃を求めろ。

勢いよく放った拳は、狙いを違たがえることなくプロデューサーの腹部に突き刺さった。

「お、お（ご）ご……な、何を……」

「何をほごつちのセリフだよ！　いくらなんでもいきなり抱き着きにくるヤツが普通いるか!？」

「あ、ご、ごめん！　つい感極まっちゃって……」

だからって抱き着きにくるなよ、はた迷惑な。

そもそも頭の中身はともかく今のボクは女子ではあるんだぞ。セクハラだぞ。

「本当に心配してさ……保護者の人たちになんて言ったら、とか、白河さん自身にも申し訳が無いし……」

「見ての通り、もう大丈夫だからそういうのはいいよ。それより、他のみんなは?」

「あ、ああ……ごめん、俺だけ先に急いで……」

「万が一だけど、ボクが着替えてたりしたらどうするんだよ」

「面目ない……」

こんな感じで他のアイドルが着替えてるところに突っ込んでいて、下着姿の相手にハグでもしようものなら問答無用で逮捕だよ逮捕。

今までにどれだけのラッキースケベを起こしてきたのやら。身体が勝手に！　とかどこかで言っただけでもある。

その後、戻ってきたみんなにも同じようなことを説教されていた。

まあ、これに関しては自業自得だろう。先のことを考えずに行動し

たプロデューサーが悪い。

ほんと、実務に関しては有能な割に、それ以外がいちいち迂闊で残念なんだよなあ。

……で、そんなこんなあつて握手会とCDの手売りの時間である。やっぱり、一番人気は志希さんだった。快活で明るいキャラとスタイルの良さ、あとエロに対して寛容な性格もあるだろう。一番直接的に男性の心を刺激してくるタイプだ。つよい。

改めてそれぞれの列を見ると、色々傾向がうかがえる。芳乃さんはショツピングモールに来店していたご年配の方々の心をがっちり掴んだようだ。聖ちゃんは同年代から少し上くらいの男子が多いかな。綺麗な歌声と守りたくなるようなはかなげな外見のおかげだろう。こずえちゃんも、少し上の世代の女性に人気なようだ。庇護欲とか母性とか父性とかくすぐられそうだしね。

……しかし、何で晶葉はごく当たり前のよう握手に来た人と技術トークを始めてるんだ。趣旨変わってるぞ。

その一方、ボクの方はというと。

「デュフフ……ど、どうも」

妙に濃い人が集まってるなあつて。

「こんにちは。今日は来てくれてありがとうございますー！」

いや、別にうろたえるほどじゃないんだけどね。正直、もう濃ゆい人には慣れた。僕を狼狽ろうぱいさせたきやしゆがはさんレベルのインパクトの三倍は持つてこいというのだ。フハハハン。

しかしまあ、握手の相手っていうのは、男性の方が圧倒的に多い。時々学生らしきもいるし、中には女性の姿も見られるけど。

必然的にボクの手よりも遥かに大きな手と握手することになるわ

けでもあるのだけど、握手するたびに「ちっちゃい……」とか「儂い……」とか「薄い……」だとか呆然と呟いていくのは何でだ。まだステージ衣装だから当然お腹も露出してるんだけど、さっきのお兄さんなんてボクのお腹を見るなり哀しげな表情でコンビニおにぎり置いてっつたし、ヒゲ面のおじさんは「守護らねば……」とか呟きながらどこかへ消えて行った。

誰かこの状況についてどういうことだか説明してくれ。

やがて列が消化されていく中で、必然的に会うべくして会う相手が訪れる。施設のみんなである。

「お疲れ氷菓ちゃん！ いいステージだったよー！」

「ありがとうございます♥ お帰りはあちらになります♥」

「ええーッ!？」

予想外の返答だったらしい。握手もしないまま帰れと言われるとは思わなかったようだ。

でもとつととお帰りいただきたい。今になってようやくあの時のことが何だかイラツとしてきたんだ。

「お、お姉ちゃんですよー」

「存じております♥ いいから帰れ」

「辛辣……!! え、園長先生、氷菓ちゃんが反抗期です!」

「わ、ワシに振るのか?」

理由なく青春の衝動に身を任せてなんとなく反抗しちゃう時期と一緒にしないでください。

ボクには一応こうなるだけの理由があります。主にあなた方のせいで。

つーか上司せんせいに泣きつくくんじやないよこのバカ姉。

「……ほ、ほーら。パパだよー」

「パパきもい」

「ゴハツ!!」

「園長先生が死んだ!」

鋭く放たれた言葉の刃が、二人の精神をノックアウトした。

うん、ちよつとはスツとしたかな。まだ許さんけど。

そりや、園長先生は身寄りのないボクにとっては父親代わりみたいなものだけどき。だからって許すとは言わないよ。絶対にだ。

「姉ちゃん、キレてる?」

「まあまあ」

うなだれている二人を押し退け、施設の子がこっちの方にぞろぞろと近づいてきた。

いったい何人連れてきてしまったのか。後でみんなに誤魔化すのが面倒くさくなりそうだな……。

「わたしすごいと思う! かわいい! かつこいい!」

「それに、楽しそうだったぜー?」

「ありがと。けどそれとこれとは話が別だよ」

「えく?」

「あの時はボクの意味を無視して勝手にOK出してたからね。みんながそういうことにならないように、今ボクが怒つとかないと」

世の中結果オーライばかりじゃないのだ。

確かに今ボクは晶葉や志希さん、スターライトプロジェクトの仲間や、同僚アイドルのみんなに囲まれていい日々を送ってるけど、これが悪い方向に向かう未来だってありえたわけだ。

だからボクが怒って次またこんなことをさせないよう、冬のナマズみたいに大人しくさせておかないと。それも年長者の義務、のはずだ。

「で、お前ら握手すんの？　しないの？」

「別に姉ちゃんのだしいいよ」

「プレミアム感ゼロ」

「おむねもゼロ」

「しんちようもゼロ」

はっ倒すぞクソガキ共……！

「次いつ帰るんだか聞きたんだよ。あと上姉ちゃんがCD買おうって」

「経営苦しいってのに買わなくなっちゃっていいよ。ボクが帰るかどうかなんてのも電話で聞けっての……」

「……だって姉ちゃん、アイドルになって忙しそうじゃん。ユニット？　のひとたちにもメーワクかもしんねーし」

「……へえ。気遣いできるようになったじゃん。偉いぞ」

「バツ、そんなんじゃないし！　姉ちゃん以外の人にメーワクだって話だし!!」

そこを気遣えるようになっただけ充分充分。

家族であるボクに対してならともかく、他の人に迷惑がかかっちゃいけないなって気付くことができただけでも素晴らしい成長だ。

ケンジはいつかモテるようになるぞ。うん。

「その内戻るよ。その時はこっちから電話するから」

「おう、じゃな！」

「はーみがけよー」

「めしくえよー」

「よくねろよー」

やかましいッ！　うつおとしいぜッ!!

ちくしょうこの場で反論できないからって好き勝手言ってから逃

げて行きやがって。

次帰ったらあいつら覚えてろよ……！

……ちなみに、このタイミングでCDは5枚売れた。

先生用、職員用、姉用、子供たち用、布教用……だそうだ。

経営が苦しくない時は無いってのに、何で買っちゃってんだか。ほんと、バカばっか。

「何をニヤついているんだ？」

「はー？ ニヤついてなどおりませぬがー？」

「明らかに口調がおかしいぞ」

「うっさい」

「で、さっきのあれは家族か？」

クソツ、案の定追及してきやがった！

「……家族だよ」

「家族か」

「うん」

髪色も違えば瞳の色も違う。その上父親と思しき相手に「先生」ときた。家族かどうかを聞いてくるのはごく自然なことだろう。

同じ立場ならボクだって同じこと聞くだろうし。

「随分複雑な事情があるんだな？」

「まあね」

どういう風に解釈したのか、晶葉はそれだけ言ってそれ以上は追及しなかった。

いつかは言わなきゃいけないことだけど、まだ踏ん切りがついてないんだよね。正直、追及してくれないのは非常にありがたい。

それまではまあ、ボクの複雑な事情に関しては黙ったままでいよ

う。

なんだか噂に背びれと尾びれと胸びれまでついて音速で泳いでいきそうな嫌な予感がしてならないけど。多分大丈夫だろう。

……実際、家族であることには間違いないんだし。

ボクにとつては、二度の人生の中で得られた、たった一つの家族だ。

そうこうしているうち、終了の時刻が迫ってくるのに伴って人の流れも落ち着いてくる。

これで本当の意味で、ボクたちのファーストライブが終わりを迎えることとなった。

……しかしその後、礼儀の上では重要だしと思つて片付けを申し出たところ、プロデューサーが青い顔をして止めてきた。

なんでも、「アイドルの仕事じゃない」「ステージを撤収するのは俺たちとイベント会社の仕事だから」「最悪死に至る」だそうだ。

ただちに命に影響はないんじゃないのかとも思うけど、よく考えるとボクの体力はアイドル界最弱（推定）だった。腕相撲したらこずえちゃんに負けたし。ダメか。うん……。

ともあれ、帰路である。

来た時と同じ社用車に乗り込み、時折穏やかに揺れるシートに体を預ける。

……流石にあれだけのことがあったせいも、眠気が来た。10分程度の気絶じや睡魔には勝てないか。

そう思いつつうつらうつらしていると、隣の席に座っていた芳乃さんが、穏やかな表情でこちらに問いかけた。

「道は、見えましてー?」

……この人、ボクの事情についてどこまで見えてたんだろう。

類稀な洞察力から来る推測か、それともプロデューサーから聞かされて既に知っていたか……摩訶不思議な能力で理解したとか?

まあ、どれにしても特に問題は無い。芳乃さん、思った以上に人と

の距離感の取り方が上手いし。ボクが聞いてほしくないところは適当にボカしてくれるし、踏み込んでほしくないところは踏み込まない。ちよつと心を許したら、許容範囲にだけ足を踏み入れてくる。正直すごくありがたい。

「うん。少しだけ」

「それはよきかな、よきかなー」

うんうん、と頷きながら、芳乃さんは微笑みを向けた。

「もしも何か相談があるようならばー、わたくしはいつでも請け負いますゆえー」

「……うん。その時は、お願いします」

「はいー」

ボクの中で、女神楓さんと並ぶ国津神芳乃さんという立ち位置が爆誕した瞬間であった。

いずれボクの事情についてみんなに語る時が来るなら、そのタイミングについて相談させてもらおう。いや、いただく。

ほんとなんていうか……アイドルになってからっていうもの、人間関係にすごく恵まれてるな、ボク。

すごく喜ばしいことなんだけど、こんな幸せでもいいのかな、なんて思うことがちよいちよいある。

本当はありえない、二度目の人生。^{チャンス}多分やろうと思えば数百年くらいは体を取り換えて軽く生きられる。だからこそ、自分が今恵まれていていいのか、と。

ボクなんかより本当はもつと幸せになるべき人がいて、ボクはそれを蹴落としているだけだったり——あるいは、そもそもこれが^{うたかた}泡沫の夢なんじゃないかって、時々怖くなる。

きつと、そんなことを言ったら「何を馬鹿なことを」って、きつと笑い飛ばされるんだろうけれど。

——少しだけ曇ったように感じる芳乃さんの表情を横目で見ながら、ボクはゆつくりと眠気に任せて目を閉じた。

なお、この後催された打ち上げパーティーにおいて、やっぱり慣れないものを食べる食べると寄越されたおかげで無事お腹を下した。

我ながらデリケートすぎない？

13：言うなれば運命共同体

「なん……っじゃあ……こりゃあ……!?!」

ボクたちのファーストライブから数日後。思わず、ボクは数十年前のドラマの名台詞を呟かざるを得ない状態に陥っていた。

姐さん、事件です。いやバカ姉おまえじゃない座ってる。

ボクの手の中にあるのは、一枚の紙きれだ。その名を——「給与明細」と言う。

お給料の明細。そう、初任給というやつが出たのだ。

税金と福利厚生、共済費や寮の家賃、設備維持と食費等々の経費を差っ引いても余裕で6ケタ残るといふ、驚異的な給与明細である。

お金そのものについては、別に全く馴染みの無いものでもない。施設を立て直すためにずっと大金が必要で集めていたし。今もまだその一部はもしもの時のために隠している。

しかしやっぱり、それはあくまで「もしもの時」に使うものだ。その上に出所自体が綺麗とは言いがたいし、あまり手を付けたくないのが本音だ。

そんな中で降って湧いた、それこそ出所もはつきりしている綺麗なお金。そりゃあもう喜びで胸がいっぱいだ。

これで堂々と仕送りできる!!

「みんなはまだ若いんだから、使い道はよく考えるように!」

プロデューサーの忠告に、みんなが「はい!」と元気よく応じた。志希さんは、特許を持つてるとかでお金には全く困っていないようだからお給料に対してはあまり関心が無いようだし、こずえちゃんもまずはお父さんやお母さんに渡してからになるから今はまだ関心が薄いようだけど……まあそれはそれとして置いておく。

「あ、そうだ。白河さん！」

「はい。あ、え、ボク？」

あれ？　　ここ^こで名指し？

「ご家族の方から伝言。『絶対に家に仕送りするな。送っても突き返すから』だってさ」

「……………」

……………。

……………んん？

「全額自分のために使えつて……あれ、どうかした？」

「いや、ちよつと待つ……ちよつと待つて。え？　いや……あの、ごめんプロデューサー、ちよつと電話貸して」

「え。あ、ああ。ちひろさんに言えば貸してくれるぞ」

「ありがとう」

事務室にいたちひろさんに言つて電話を貸してもらう。

流石に施設で共用してた携帯はもう手元に無いけど、近くに固定電話があるつて便利だ。

……………まあそれはそれとして。

『はいもしもし。あおぞら園成海^{なるみ}です』

「ボクだけど」

『あつ!?　あつあつあつ氷菓ちゃん!?　せんせーい！　氷菓ちゃんが
お電話を!!』

「いや先生はいいから。ボクのお給料のことに口出したよね？」

『え？　う、うん。そうね。園長先生と一緒に決めたよ?』

やってくれた喃^{のう}。

やってくれおった喃……！

「何でさ」

『何でも何も……氷菓ちゃん、放っておいたら殆どのお給料仕送りしちゃうでしょ？』

「何が悪いのさ」

『年頃の女の子がそれじゃあ、やっぱりいけないと思うの。今までもずーっと下の子たちにご飯あげたり服あげたりお部屋あげたりお遊具あげたりしてたんだから、自分のために使ってほしいのよ』

「ボクの自己満足なんだからボクのためだよ」

『じゃあ一万円までなら許可します』

「月の食費にぜんっぜん足りないじゃん!? 経営苦しいのだから別に昔っから変わってないんでしょ?」

『でも、なぜか毎月謎のお金が施設の口座に振り込まれるものだから、あんまり困ってないのよ』

……ははーん、もしかしてこれ、ボクが自分で招いた事態だな?

いや……いやいや……でも流石にこれは……その……。

えーッ。

『というわけで、お金は受け付けません。ちゃんと自分のために使うこと。それじゃあね〜』

「えっ、ちよ、待っ……!?!」

……二の句を告げる間も無く、電話を切られてしまった。

いや。いやいやいや……。

「……どうするんだよこれ……」

「な、何だか大変? なおね?」

「ううー……はい……」

横から話をちよつとだけ聞いてたらしいちひろさんが、困惑したような表情で問いかけてくるけど、答えられる元気が無い。

お給料の使い道が、突然宙に浮いてしまった。使わなきゃいけないってワケは無い、んだけど……。

「どうしよう……」

じゃあ使わないで置いておこう——ってなったら、また晶葉やプロデューサーに何か言われそうだし。
どうしたらいいんだろう、これ。

で、場所を戻してプロジェクトルーム。すっかりこの場所のインテリアと化してしまった犬のぬいぐるみを抱きかかえながら、給料の使い道について思いを巡らせる。

欲しいもの——は、特にない。やらなきゃならないこと——は、あるけど、そこまで切羽詰まってるわけじゃないし。

……こういう時は、人に聞くのが一番、かなあ。

今プロジェクトルームにいるのは、ボクの他には晶葉と聖ちゃんの二人だ。志希さんは銀行に行つてて、こずえちゃんのご両親にお金のことを報告しに行った。芳乃さんはいつの間にか見失っていた。プロデューサーによると巣鴨に行ったらしいということだった。どうやらおせんべいを買に行きたかったらしい。

「あきはー。お給料何に使うー?」

「アキバにジャンクパーツを買いに行く予定だ!」

「だろーねー」

流石の晶葉でも何も無いところからものを創り出すことはできない。となったら当然そうだったものが必要になるはずだし、予想はしてた。

「一緒に行くかー?」

「んー……いや、いや。ごめん」

「だろうなー」

ボクもボクでそういうことにはあまり強い関心があるわけじゃない。
いい。

機械いじりはできるけどどうしてもやりたいてってわけじゃないし。

「聖ちゃんは?」

「お洋服とか……CDを買ったり……かな……」

「なるほどー……」

服か……あつダメだ関心が湧いてこない。

服なら服で内心「着られるなら何でもいいんじゃない?」ってなってる。

CDは……おお、なるほどCD。それならボクも欲しいものがある。

「それ、一緒に行ってもいいかな。CD見てみたい」

「!?」

「どうしたの……?」

「何でそんな反応するのか」

「いや……氷菓がそういうことを言い出すなんて、ゲリラ豪雨でも降るのか……?」

「すごい……珍しい……」

ひでえ言われようだ。

「ちゃんとした欲求があつたんだな……」

「いやあるよ。いくらなんでもそこまでじゃないよ」

「どんな曲が……いいの……?」

「楓さんのアルバムと、インディヴィジュアルズ、フリルドスクエア、

ブルーナポレオンとクローネとシンデレラプロジェクトと……」
「仕事関係ばかりじゃないか」

盛大な溜息と共に呆れられてしまった。

でも欲しいものであることには変わりない。親しくなった相手にはできるだけ義理を尽くしたいという思いもあるし、みんながどんな歌を歌ってるのかってことも知っておきたいのだけど……。

そう考えていると、何を思ったのか知らないが晶葉は何やら無言で聖ちゃんと頷きあつた。

「……まあ、とりあえず行くとしよう」

「あれ？ 晶葉も行くの？」

「うむ。時間はあるからな。ついていこう」

「うん……一緒に……」

……聖ちゃんが乗り気だし、別にボクも問題は無いと思うけど、何だろ。この変な予感ほ。

何かある……っていうか、何かやる気だよなあ、多分。

だからってここで拒むのも変な話だし、友達を疑うのも良くないことだ。多少世話を焼かれてもそれはそれ。大した問題にはならないだろう。

@ ————— @

「よくもだましたアアア!! だましてくれたなアアア!!」

「ソムフハハハハハハ、騙して悪いとは思っているが発想がとてもスウィイイトだぞ氷菓ア! 練乳を一气飲みたくらいになあ!」

「……1〇9まで、あともうちよつと……」

くそっ! やられた!!

聖ちゃんは大人しい子だし晶葉もそんなにファッションへの興味

が強い方じゃないと思ひ込んでいたのが良くなかった！

CDショップに行くぞと言われて素直についていった結果がご覧の有様だよ！

「また着せ替えする気なんですよ！ 前の時みたいにしよ！」

「着せ替え以前にあの時の服以外殆ど持っていない女が何を言う」

「も……持ってるし……一応……買ったし……」

「あの変なTシャツ……？」

「え、変……？」

杏さんも普段着にしてる由緒正しいTシャツのはず……。

それが変……!?

「客観的に自分を見て変だと思わないのか!？」

「え……で、でもこのくらいの服くらい着てる人いるし」

「……まあ、いるな」

軽く街を見渡してみたら、このくらいの服装でいる人なんていくらでも見つかる。あっちの人は「無職」。あの人は「冷奴」、杏さんと同じ「働いたら負け」も見当たるな。あっちの人は……

「DIARRHOEA」と「PAN」。

「だが仮にもアイドルがそれはマズいぞ色々」と

「そうかな？ ……そうかも」

流石に客観的に見てボクが目立ちやすい容姿をしていることくらいは分かる。

アイドルの何某なにがしが変な格好で街を練り歩いていた——とか噂になったら、もしかするとユニットの仲間も一緒に変な目で見られることがあるかもしれない。

……なるほど、なんとなく分かったような気がする。

「……つまり、変装すればいいってわけだよな？」
「は？」

要はボクが「白河水菓」だと気付かれなければ良いというわけだ。なるほど、そういうことなら理解は容易い。ボクが、じゃなくてみんなが、という風に思えば、それも必要とされていることだと理解できる。

「そういうことなら分かった。行こう」

「いや分かってないだろう。おい氷菓……おーい」

「あ……行っちゃった」

となれば方針は決まった。あとは目当てのものがあるかどうかを確かめるだけだ。

——で、それから少しして。

「戻ったよ」

「ん、早……誰だ!？」

「……も、もしかして……氷菓ちゃん……?」

「うん」

帽子を上げて二人に顔を晒すと、途端に警戒心が消えて失せた。なるほど、変装というのも悪くないものだ。こうして堂々と二人の前に現れても、ボクがボクだってことを気付かれてない。

と言っても、特別なことをしているわけじゃない。ボクにとつての普通——つまり、「男の子の」格好を試みただけだ。

スカートじゃなくデニムのパンツ。上着として、体のラインを隠すために厚手のパーカーを羽織って前を閉じ、キャスケット帽を目深に被った上で後ろ髪をその中に収納。元々ボクの髪自体はギリギリ肩

に届くかどうかというくらいだけど、見た目の印象を変えるには充分だ。

「……確かに、見た目をどうにかすることは成功してる……けど……」
「ほぼ男の子だな……鈍感な少年と出会って『お前女だったのか!』と
というようなイベントが起きそうなくらいだ」

それってむしろ女と気付かない方がありえないとか言われるパ
ターンでなくて?」

「だが氷菓、よく考えろ」

「何さ?」

「例えば私たちと一緒に遊びに出かけたとして、どう見ても男の子、と
いうような者がいるとだな」

「うん」

「多分スキャンダルとして取り上げられるぞ」

「……………あつ」

言われてみればその通りである。

事実無根の、いわゆる飛ばし記事になることは疑いようがないけ
ど、それでも「男といえるんじゃないか?」と疑われた時点で危ないけ
当人たちが事実を知っていたとしても、世間は基本として信じたい
方を信じる傾向にある。となれば人気ガタ落ちに、ということもあ
りえなくはない。

こういうものは可能性を生み出した時点でアウトなのだ。

「…………でもボク、可愛いのか、スカートとか、苦手だし」

「それでこの前も嫌がっていたのか……」

「でも、どうして……?」

それには深い深い事情がある。

のだが、流石にそれを口にするのはマズい。実はボクは前世は男でしかもその記憶があるんだ！とか、前世の母親がやたらと少女趣味な服を好んでいたからボクは嫌いになった——だなんて言おうものなら、即病院送りだ。誰だってそーする。ボクだってそーする。

結果的にフオーマルな場でも通用する制服か、だぼつとしてだらつとした部屋着のような服を好むようになったのだった。

……無難な言い訳って、何がいいかな。

「な……慣れてないから」

「そうか。そうだろうな。そんな氷菓に講師を用意したぞ」
「は？」

講師？

「どうぞ……」

「心だ」

「しゅがーはあとって言ってるだろ☆」

「……は!？」

心!! このバカヤロウ!!

お前はレッスン中のはずだろう!! いけないじゃあないかこんなところにいちゃあ!!

「いきなりラスボス連れてくるやつがあるか！」

「ラスボス呼ばわりとかスウィーティーじゃないゾ☆」

「なあに最初から強烈なのに慣らしていけばかえって耐性がつく」

それ逆にトラウマになるやつじゃねえかなあ!?

「というわけで心、これが前払い報酬の低周波マッサージ器だ」

「あんまりスウィーティーじゃないから大っぴらに言うなよ☆ でも

サンキュー☆」

「それじゃあ……行こう……」

「ぬううううううううー!」

ダメだ、体格で勝ることのできる相手が誰一人いない!

気分はさながら連行される宇宙人だ。プランD。いわゆるピンチというヤツだな。

誰かタスケテ。

……やがて、ボクは諦めの境地に達したままパステルカラーの溢れる衣料品店の試着室に押し込まれていた。

次々に投げ込まれてくる服、服、服。ははは、どうしよう。物量に殺されそうだ。

なんとか試着しては着替えて次々と披露していく。もうほぼ無心でこなしていつてるけど、出て行きたびにかわいいかわいい言うのはやめてほしい。お店の人もこっち見てるし、死ぬほど恥ずかしい。

「いやーあいすちゃんいいわー。何着せても似合うなチクシヨウ☆」

「あ、アイス?」

「氷菓^{あいす}ちゃん」

いや間違っでないけどさ。

「しかし、思ったよりも普通のチョイスだな」

「いやボクとしてはこれも結構キツいんだけど……」

「普通だよ……?」

「そそフツーフツー。『普段着を選んでくれ』って事前に言われてっからね☆」

……驚いた。しゅがはさんのことだから、もっとハートとか羽根とか意匠に入れた服にするかと思ってたんだけど。

「これもスウィーティー女子力ってヤツよ☆」

「はあ、女子力」

「うむ」

女子力^{ちから}。ボクにとって最も縁遠い言葉だ。

ガールズロードが拓かれたり着てる服が巨大化^{ハイパー}したりするのだから。極めたらするかもしれない。

「女の子はドレスアップしてナンボよ☆ 特にあいすちゃんは普段が普段だから映えるねーいいねーお肌ぶにぶにーあゝーこの若さ欲しい」

「……素が……」

「おっといけね☆」

……変な話、若さが欲しいなら手伝うのは簡単なんだよね、ボク。肌だろうが腰だろうが目だろうがどこだろうと瞬時に作り直せるから。

そんなことするとかかなりの問題になるけども。今のところは黙ってよう。

「でもハタチ過ぎたら老化が始まるかな☆ 油断するなよ☆」

「フッフ、そこは問題無いぞ。何故ならいずれ私が老化抑制マシンを発明するからな！ まあまだ無理だが」

本当にやりそうで怖いよ。

「私でなくとももしかしたら志希が何か作ってるかもしれない。化粧品とか」

「マジかそれマジか」

「うわめっちゃ食い気味に来た」

「……………可愛い」

「またまたいけね☆」

いずれ石仮面でも見つけて永遠の若さを求めるようになるのではなからうか。ボクは訝しんだ。

「やっぱねー、いろーんな意味で後には退けないわけよ☆ というわけ
でえ、はあとお姉ちゃんに出番譲つとけ、な☆」

「それは無理だな」

「うん無理」

「無理……………」

「ええーいいだろおーみんな若くつてチャンスがあるんだからさ☆」

わあ。ここまでか。

いや、理解はできるんだ。芸能界は、周囲を見渡せばだいたい皆仕事を奪い合うライバルという考え方もあると。

ただ、それを同じ事務所どころか同じプロジェクトのメンバーに対しても言っちゃうのは……………仲間と思ってる身としては、辛いものがあるなあ。

と言つても、しゅがはさんだつて本気も本気だ。年齢のこともあるし、それこそ、その気になったら他人を蹴落としてでもという漆黒の意志を標準搭載している。

ここで頭ごなしに否定するのは、口論になる可能性を思うと避けた
いところだし……………。

「……………じゃあ、どうしても言うなら、次のボクのソロ仕事、しゅが
はさんにあげる」

「氷菓ちゃん……………!!」

「おい氷菓、何を!!」

「えっホントに!?!」

「ええ、ホントに」

口元に指を立て、二人の言葉を制する。

今話しているのはボクだ。二人にはもうしばらく黙っていてもらいたい。

隠した手元にボイスレコーダーを創り出して……準備完了。

「プロデューサーに許可を取らなきゃいけないけど、ゴリ押せば話は聞いてくれると思う。だから、プロジェクトの他の皆には、同じようなこと言ったりしないでほしいんだけど」

「え、あ、ああ、え？」

「一つ足掛かりがあればしゅがはさんは確実にステップアップしてけると思うんだ。ね、お願い」

「いやでも一発じゃ……」

まだ押しが足りないか。

……しようがない。ここまで来て手を尽くさないってわけにもいかないね。

「ねえ、お願い——お姉ちゃん」

「はうぐっ!?!」

できることならやらないに越したことは無かったけど、今日は大盤振る舞いだ!

身長140cm&30キロを割りそうな低体重に、外国の血を引いてるおかげで無駄に儂げな雰囲気醸し出しているこの外見。使わない手は無い。

その上しゅがはさん自身が選んだ服によって、無駄にドレスアップされているんだ。これで上目遣いしておねだりしようものなら、ボクの経験上、しゅがはさんくらいの歳の人なら大抵陥落する。

「どうしてもダメ……?」

「い、いいぞ☆　そこまで言うなら、もうしようがないなあ☆」

陥おちたな（確信）。

「絶対だよ？」

「おおそりやもうしゅがーはあとの名に懸けても☆」

「ありがとっ」

下半身にぎゅーつと抱き着いていくと、しゅがはさんがどこか恍惚とした表情をしたのが分かった。

同時に晶葉が微妙な顔でドン引いているのが分かった。普段の様子から打って変わってこれなんだから、そうもなろう。

ボクだってやってて自分で違和感の塊なんだから我慢してほしい。

「おほっふ……☆」

その後、これからも仲良くしてほしい旨を伝えて、レッスンへ戻っていくしゅがはさんを見送った。

……なんだか本来の目的から二転も三転もしてる気がするけど、まあいいとおこう。

別の意味で収穫はあった。

「いいのか、氷菓。あんなことを言ってしまった……」

「うん。言質げんちは取れたから」

心配しているようなので、晶葉にボイスレコーダーを見せつける。今まで持っていたような素振りを見せなかったからギョツとしているけど、状況は把握できたらしい。同時に大きなため息をついてもみせたけど。

「これで少なくとも他の人に同じことは言わないだろうし、余計な衝

突も回避できるでしょ」

「それは……そうかもしれないが。それでいいのか？」

「そもそもさ晶葉。この時期にいきなりソロでの活動なんて、普通無いでしょ」

「……あつ……」

「謀ったな氷菓」

「謀ってるよ」

まだエリクシアは結成したばかりだし、ボクもデビューしたばかりのド新人だ。基本的には3人での活動が主体になってくるだろう。

当然、ソロ活動が見えてくるのは本格的な活躍の場となる夏フェス以降。約束を反故ほごにする気は無いけど、それまではどうしても約束を履行できないわけだ。

騙してるわけじゃないよ？ 解釈の違いがあるだけ。

「もし仮にあつたとしても、それはしゅがはさんたち四人がデビューした後の話になるだろうね」

「だからと言ってなあ……」

「……他にも、なにか狙いがあるの……？」

「鋭いね聖ちゃん。ボク個人としては、しゅがはさんにはちよつと罪悪感を覚えてほしいんだ」

ボクが思うに、しゅがはさんが「仕事を寄越せ」と言ったのは、彼女の中にある焦燥感が原因だ。

26歳という年齢に、ボクらに先にデビューされたという事実、そしてソロユニットでなく複数人のユニットでの活動。しゅがはさんの中にある焦りを煽り立てるには充分な要素が揃っている。

言動から受ける印象とは真逆……ってほどじゃないけど、本来、佐藤心っていう女性はもっと常識的な人だと思うんだよね。今日のことでなんとなく分かった。必要とあれば空気を読むこともできるし、相手を立てることもできる。ただ、アイドル活動となると、焦りが生

じることです。その辺のブレーキがぶっ壊れてしまっただ。

だからこそ、外付けの良心回路としての罪悪感ブレーキをちよつと取り付けたい。

「でも……難しいかも……」

「そうでもないよ。しゅがはさんもボクも寮生だから、生活の時間は合わせられるし。これからしばらくしゅがはさんに引っ付いて、できるだけ『いい子』なボクを演じることで『何でこんな子の仕事を奪ってるんだろう……』って思ってもらおう」

「すさまじく冷徹に人の心を弄ぶな!」

「弄んでるつもりは無いよ失礼な」

「……そのつもりが無いほうが……よっほどなんじゃ……」

「……うん、まあ。うん」

自分のことを悪だと思っていない悪が最もドロドロい悪なのだ
というヤツか。

まさしくその通りだった。

「でもさ、もしこれが成功したら、しゅがはさんもと周りを見てくれると思うんだ」

「成功したら、か。まあそうかもしれんが……」

「……ボクは、アイドルやってて楽しいって思ったから。スターライ
トプロジェクトのみんなでもっと仲良く、楽しく、誰も欠けることな
くやっていきたい。そう思っただけ行動するのは、いけないことかな?」

「……もうちよつと、手段を選んだ方が……いいと思う……」

「うん。ごめんささい」

「それに時と場合によつては開き直る可能性だつてあるんだ。軽々し
く自分を売るんじゃない」

「うん。ホントごめん」

今回は全面的にボクが悪うございしました。

正直もつと手段は選んだ方が良かったね。うん。

「さて、説教はこのくらいにするか！」

「そうだね……」

「うん、ごめんね時間取らせて」

「いや、構わん。それよりも——」

「うん……それよりも——」

「……うん？」

あれ、そういえば何かを忘れてる気がするぞ？

そもそも今日何でここに来たんだっけ？

……まず、給料の使い道をどうするかって話をして。CDショップに行こうって話をして。その後騙されて。

……ああ!!

「自由への疾走!!」

「体中に正座直後の痺れが走るスイッチ」

「ぬうううううううううう!!」

ぬあああああああ全身が痺れる!!

晶葉キサマ!! この前プロデューサー用に使ったものを改良してプロデューサー以外の人に向けられるようにしたなッ!

その技術は認めるがそれをボクに向けるとは、おのれえええええええ!!

「それじゃあ……いこ……」

「はっはっはっは、次は携帯の契約と化粧品と財布とお菓子だ！」

「その後はお昼ご飯……」

「そして最終的には私とアキバじごくまで付き合ってもらおうぞ、フハハハハハ!

「ぬわ——っつ!!」

らめえええええ浪費を覚えさせられちやうちやうちやうちやうちやうちやうちやうちやうちやうち!!

14：今日もどこかで眼鏡が割れる

「……ってことがあったんだけど」

「……ううん……そうか……」

「……………」

その日、プロデューサーはここ一週間で一番の渋い顔を作っていた。

夕日の差し込むプロジェクトルーム横のプロデューサー用オフィス。今ここにいるのは、ボクと根津プロデューサー、それと武内プロデューサーの三人だけだ。

武内Pがいることは珍しいけど、都合は良い。あの時のことを報告して、ボクの行動が間違っていたかどうかを判断するには、良いタイミングだろう。

「……約束しちやったかあ……」

「うん。ごめんプロデューサー。迷惑だったよね」

「いや迷惑っていうか……………ぬう」

「白河さん。根津君の言いたいことは……つまり、『貴女に向けて取ってきた仕事』を佐藤さんがすることに問題がある、ということではないでしょうか」

「そうですか？ ……プロデューサー？」

「……先輩の言う通りだ。ちよつとその辺は問題かな」

言うのと、根津Pは額に指を当てて、考え込むような仕草を取った。

「白河さんの読み通り、少なくとも夏フェスまではソロ活動の予定は無い。その後からは多少は出てくるだろうけど……あくまでその仕事は『白河さんのために』取ってきた仕事なんだ。はあとさんがやるうとなるかどうかしても無理が出る」

「……例えば、モデルです。体型がまるで違う以上、クライアントの要

求を満たすことができない可能性があります」

あ……そうか。その辺の可能性を考慮に入れてなかった。

あの時はとにかくしゅがはさんの行動へのカウンターを入れることに終始しすぎてそこまで考えが回ってなかったか……。

「そうですよね……ごめんなさい、勝手な真似をして」

「いえ、プロジェクト全体を考えての行動だったのでしよう。その気持ち責めることはできません。加えて、それと理解さえしていれば対処を打つこともできます。根津君」

「はいー」

と、武内Pの号令に合わせ、根津Pがいくつかの資料を机の上に持ち上げる。

「俺だって346のプロデューサーだからね、フォロークらいはできるはずさ」

「おお……」

今日はなんだかいつもと違って頼りがいがあるぞ、プロデューサー。

折角のイケメンなんだから、もつと普段からキリツとして威厳を出しておけばいいのに。

……いや、それもそれで違和感がすごいか。プロデューサーはダメなところがあるからプロデューサーな感じがあるし。そもそもあの性格じや威厳出すのはムリだな。諦めよう。

「今すぐどうこうはできないけど、はあとさんのデビューライブが終わりさえすれば白河さんと比較しての仕事の傾向も見えてくるはずだ。そこから共通点を導き出して、それとなく白河さんの仕事をはあとさんに差し替えれば……」

「その間に、佐藤さんへの説得も並行して進めてください」

「勿論です。……白河さんは普段通りに過ごしてくれ。いいね？」

「りょーかい」

まあ、もし根津Pがしくじっても、彼の周囲にはちひろさんや武内Pがいる。あの人たちのサポートを受ければ少々の失敗でもなんとかなるだろう。

もしかすると、根津Pが結構思い切った行動をするのは、そういった背景があるからなのかもしれない。

というわけで信じるぞ根津P。ここんどこ色んな人に色んな理由で裏切られっぱなしなんだ。

「あ、そうだ」

「何、唐突に」

「ピュアリーテイルとエリクシアのみんなのドラマ出演決まったから」

「……は!？」

ちよつと待て。いきなりこの場でそんな爆弾発言する!？」

「今ここでそれ言うの!？」 ていうかボクたち、演技経験皆無だよ!？」

「そこは問題無いよ。みんなの性格に合わせた役柄にしてもらってるから。普段通りにやれば特に問題なくできるはずさ」

そういうことなら少し安心する。

晶葉は演技がそこまで上手くないというか、完全に「コレ晶葉だ!!」つてなるような演技しか（今のところは）できないし、志希さんは全ての役柄を「一ノ瀬志希」で上塗りする、ある意味稀有な才能の持ち主だ。ハマればこの上無く強いけど、とにかく徹底的に演じきることが必要になるような役柄は向いていないと思うし。

「……で？ 何で急にここで、ボクだけにそれ伝えたの？」

「その件は先輩から説明してもらおうよ」

「はい。それに関しては、白河さん一人の負担が増える可能性があるからです」

「ボク一人の負担、ですか？ でも、なぜ？」

「白河さんの役は、本来アナスタシアさんが演じる予定のもの、だったからです」

「……あー……そういうことですか」

なるほど、だいたい分かった。

アナスタシアさん——アーニヤさんと言えば、シンデレラプロジェクトとクローネ、その二足の草鞋わらじを履いて活躍していた人気アイドルだ。

現在はソロ活動を精力的に続けており、今でもシンデレラガールズの一人として、あるいはクローネとしてもちよくちよくステージに立っている。

武内Pから聞いたけれど、次期のドラマに出演が決まっており、バラエティ番組にもレギュラー持ち。更に、来週末には生放送の歌番組への出演が控え、映画撮影も……と、少々忙しすぎる日々を送っているようだ。

当然、スケジュールなんかぎっちぎちだろうし……そうになると、同じくハーフである程度の暇があり、北歐風の容姿を持っているボクにお鉢が回ってくるということも……ありえなくはないのかもしれない。

「時間的な拘束も長くなり、要求される演技の質なども自ずと高くなってきます。仮に強い負担を感じるようであれば、今回の話は辞退ということも——」

「問題無いです。やれます」

武内Pが言い終えるよりも先に、ボクはそう断言した。

「重圧とか、結構なものだと思うよ？ 本当に大丈夫？」

「でも、だからやらない、なんて選択肢は最初から無いでしょ、プロデューサー」

「そりゃあ……まあ、そうだけど……」

「そういう役割を求められているんなら、やり遂げるよ」
「……………」

根津Pへの返答を耳にしたその時、ふと武内Pの肩がわずかに揺れた……ような気がした。

何かボクは気に障ったことを言ってしまっただろうか。武内P、優しい人なのは分かるんだけどやっぱりコワモテだから威圧感すごいんだよな……。

「根津君、少し話が」

「あ、はい。じゃあ、そういうわけだから白河さんには先に台本渡ししておくよ。どうしても出番は多くなるし、台詞の量も多いからね。日付と場所も表紙に書いてるから、後で確認しといてくれるかな」

「りょーかい」

受け取ったのは、思ったよりも分厚い台本だった。早いうちに数話分くらい撮っておくのだろうか。だとすると、ちよつとばかり体力的には厳しい部分があるかもしれない。

けれど、まあ——ドラマとなればあくまで撮影だ。ライブの時みたくぶっ続けでずつと、ということは無いだろうし、適宜休憩を入れることもできるはず。

ま、何にしてもそこまでひどいことにはならないはずだ。やや楽観的な感情を抱きながらも、ボクはオフィスを後にした。

@ ——— @

それから少しして、撮影の日が訪れる。

天候は晴れ。絶好の撮影日和である。まあ今日は屋内のスタジオで克蘭クインだけだ。

「うーむ……」

緊張のせいかな、あるいは単に待ちくたびれたのか、隣で待機していた晶葉が唸り声を上げた。

「どうかした？」

「ん？ うむ、どうやら少し緊張しているらしい。情けない話だが」

「仕方ないんじゃない？ ライブとはまた違う緊張感があるし」

「そーそー。それにメインってワケじゃないんだから、気にしないナーイ♪」

「気にしなすぎるのもどうかと思うけどね……」

今回のドラマはいわゆる学園伝奇SFもの……と言うのだろうか。ともかく現代ファンタジーというような雰囲気の商品になっている。

主演を務めるのは渋谷凛しぐやりんさん、神谷奈緒かみやなほさん、北条加蓮ほつじょうかれんさん——プロジェクトクローネ、トライアドプリムスの三人。彼女らを中心にストーリーが展開していく。

伝奇モノと言っても超能力を駆使するバトルものではなく、三人の少女とその周囲を取り巻く環境を描写した成長物語、と言うべきだろうか。

地上波での放送は無く、衛星放送かネットでのみの配信だけど、注目度は高い方みたいだ。まあ、凛さんが出るなら当然と言えば当然なんだろうけど。

他の出演者としては、凛さんの姉妹役として同じくクローネたちばなの橘ありすさん、鷺沢文香さぎさわふみかさんがキャスティングされている。

と、ここまで列挙すれば分かるだろうけど、基本的に今回のドラマはメインキャストがプロジェクトクローネの面々で固められている。

ボクたち六人は、そこにお邪魔させてもらう形式になるわけだ。

正直、申し訳ないと言えはいいのやら、しめたと言えはいいのやら。

「しかし、そういう意味だと氷菓があまり緊張していないのは何故だ？」

「緊張しすぎるのも良くないしね。それに、その……芳乃さんたち、全く緊張してない風だし。なんか緊張しても仕方ないかなーって」

「うんうん、確かに芳乃ちゃんたちはキンチョーしてるってカンジ無いよねー♪」

人のこと言ってる場合じゃないぞ志希さん。

身近なところにいる人が緊張しなすぎないと、いつそもう緊張するのが馬鹿らしくなってくるんだぞ志希さん。

「……一応、氷菓は今回のメインだろう？」

「まあ、そうだね」

とする一方で、実はボクもメインキャストの一人に数えられていたりする。

元々はクローネのためのドラマという感じなのだけれど、そのクローネの一員であるところのアーニヤさんがスケジュール多忙のため出演を辞退したことで、ひとつ枠が空いてしまったのだ。で、ボクはそこに滑り込んだ形になる。

当然、責任は重大だ。とは言ってもあまり気負いすぎてもいけないんだけどね。

「なんとか頑張るよ。晶葉たちも……凜さんの同級生って設定だった？」

「うん！　今回はあたしが助手で〜」

「そして私がつえんさあい物理学者!!　の科学部部长という役回りだ！」

なんか赤と青のライダーに変身しそうな肩書だな。

……ともかく、このドラマ、伝奇ものを謳うだけあって様々な超常現象や怪異やふしぎなことが凧さんたちの前に現れる。

凧さんには妖精（こずえちゃん）が、奈緒さんには座敷童（芳乃さん）が、加蓮さんには天使（聖ちゃん）がそれぞれ現れるところから物語が始まっており、3人の主人公はこの出会いをきっかけとしてそれぞれの持つ問題と向き合い、一人の人間として成長していく……というのが基本的な筋書きだ。

で、晶葉と志希さんはその超常現象に対して科学的なアプローチを行っていくコメディリリーフ二人組。時に事件を起こし、時に主人公たちに助言し、最終的にちよっぴり役に立つ。そんな役柄だ。

一方、この物語のメインキャストに数えられる、ボクの役柄なんだけど……。

「それにしても晶葉は『雪女』の格好が板についているじゃないか」「ありがと。あつついけどねコレ」

元はアーニヤさんがやるはずだっただけあって重要な登場人物——「雪女」。

この物語の舞台となっている街に流れる「雪女」の噂の正体であり、凧さんの妹を昏睡状態に陥れたり、街のインフラをストップさせてしまふなどのはた迷惑な現象を引き起こしたりする役柄になる。

雪女は本当は優しい心を持っているのだけど、その身には触れるものを皆凍らせてしまう能力が備わっている。本当は人と触れ合うことでぬくもりを得られたらと思っっているのだけど、それは 雪女が雪女である限り永遠に叶わない——という設定がある。最終的には人のぬくもりを得ることができた後、消滅するというラストらしいけれど、そのことについてはどうやら他のキャストには伏せられているようだ。監督に言わせてみると、その方が生の感情を引き出しやすいのかなんとか。

しかし何はともあれこの格好、ファツキンホットクソ暑い。

現代劇で雪女、なもんだから、和服の上にダウンジャケットを羽織ってマフラーを巻く……なんて格好をせざるを得ないのだ。

しかもこのドラマ、撮影は7月半ばまで続く。野外ロケもあるようだし、果たしてボクはそんな炎天下の中で大丈夫なのだろうか。この先生きのこる事ができるのだろうか。

まだリハの前でクローネの面々も到着していないので和服だけにさせてもらっているが、この段階でもちよっと汗ばむくらいだ。

「クローネさん、入りまーす！」

と、そんなことを思っていると、スタッフさんからクローネのスタジオ入りが告げられる。

やっと来てくれたようだ。ボクたちも入口の方に向かって挨拶に行こう。

「「おはようございます！」」

揃って挨拶をすると、クローネのメンバーのうち4人はどうも慣れていない風に控えめな挨拶を返した。

確か、前に会った奏さんが、「クローネの子たちは後輩ができたことが無かった」って言ってたっけ。なるほど、初めての「後輩」を前にして少し緊張しているらしい。

「おはよう」

そんな中でも凧さんは泰然自若としてごく普通に挨拶を返してくる。元々クローネはシンデレラプロジェクトの後輩にあたるわけだし、シンデレラプロジェクトとクローネを掛け持ちして多くの後輩を見てきた凧さんとしては、別段気にするようなことでもないのだろう。

「……!？」

と、楽屋に向かおうとして凜さんの視線がボクの方に向いた時、彼女はぎよつとした表情でボクの顔を見つめた。

何だろ。もしかして挨拶が聞こえなかったのかな。だったら悪いことしたな。

「おはようございます……?」

「お……おはよう」

いや待て。前もこんなことがあったような気がするぞ。具体的には蘭子さんの時。

シンデレラプロジェクトの先輩は何でこんなパターンが多いんだ……?」

「池袋さん、一ノ瀬さん、リハお願いしまーす!」

考え込んだところでスタッフさんから声がかかった。これ以上考えなくても仕方ないか。

「よ、よし、行くぞ、志希」

「おけー。じゃ、また後でー♪」

克蘭クインは教室のシーンからだ。ボク、芳乃さん、こずえちゃん、聖ちやんの出番はまた後からになる。

とりあえず、聖ちやんたちのところに行って台詞合わせでもしようかな……と思いつながら二人を見送っていると、ふと肩を叩かれたことに気付いた。

「すみません、少しよろしいですか」

「あ、はい——」

振り返ってみると、そこにいたのは黒髪ロングの二人組、プロジェクトクローネのデュオユニットとして活動している橘ありすさんと、鷺沢文香さんだった。

驚いた。急にこっちに来るとは。

「は、はい。大丈夫です」

「良かったです。どうもはじめまして、スターライトプロジェクトの方ですよね」

「はい。はじめまして。白河氷菓と申します」

「橘ありすと申します。橘と呼んでください」

「鷺沢文香です。よろしくお願ひしますね……」

……あ、そうか。そういえば、ボクの最初の撮影シーンは橘さんと一緒にのシーンだった。

そういうことなら、最初に挨拶に来てもおかしくはない、か。しまったな、こっちから出向くべきだった……。

「御足労いただいてしまつてすみません。本当はこちらからお伺いすればよかつたんですが……」

「気にしないでください。それよりも、今日はよろしくお願ひします」

「あ——はい、そうですね。よろしくお願ひします、橘さん」

そう言うと、橘さんはそれはそれは満足げに頷いて見せた。

これって——もしかして、彼女の言う通りに「橘さん」って言ったからなんだろうか。

わざわざ自分で「橘と呼んでください」なんて言うくらいだし。なかなか気難しい子なのだろうか。

でも、こっちに挨拶に来るくらいだし、礼儀正しいのも間違いない。気難しくも礼儀正しい……ううむ、なんとも形容しがたい性格だ

な。間違いなくいい子だけだ。

「すみません、本当なら勝手もご存じなアナスタシアさんが出るはずだったのに」

「スケジュールが合わなかったもので、仕方ないです。それよりも、アーニヤさんの役がこれだけ似合う方がいたというのは、驚きました」

「そうですね……その髪は、ウィッグですか……？」

「いえ、地毛です。ボクもハーフなので」

「なるほど、アーニヤさんと同じくハーフだから違和感なく役にはまることができたんですね。論理的ロジカルです」

物珍しげに髪を見られたり、瞳を覗き込まれる。

最近こういうことがめつきり少なくなってたから、逆に新鮮だ。晶葉や志希さんは最初からボクの髪色とか興味なかったみたいだし、他のみんなの個性に押し流されてどうでもよくなった感があつたしなあ……。

「お二人は、演技は今までもされてるんですか？」

「いいえ……私は、これが初めてです。普段の……ライブの時が、『アイドルである私』を演じているようなものと言われると……頷く他無いのですが」

「私は少し前に、撮影で剣と魔法のファンタジーや森の住人を経験しています」

ふふん、と胸を張る橘さん。そうか、そうなるとこの三人の中では一番経験値が多いわけだ。

「なので、この中では一番の経験者です」

「なるほど。それじゃあ、頼りにさせてもらいますね、橘ダイヤーナザンさん」

「ちよつと待ってください今ちよつと発音おかしくなかつたですか」

「……？」

「ちよ、ちよつともう一回お願いします」

「橘さん」

「……はい。いえ、もう一回」

ダテイヤーナザン
「橘さん」

「ほらあ!?! 何でなんですかその発音!?!」

「どうしても舌が回らなくて、四回に一回くらいこうなっちゃって……」

「光さんといい比奈さんといい何でこう名前に『ひ』がつく人は私の苗字の発音がおかしくなるんです!?! 人をおちよくってるんですか!?!」
「そういうつもりは無いんですけど……」

「ありすちゃん……どうしてもなってしまいうものらしいので、その辺で……」

ボクだって舌が回らなくなる事態は避けたいんだけど、何でかどうしてでもどこかで噛んじゃうんだよなあ。

怒らせるつもりもおちよくってるつもりも無いんだけど……。

「ま、まあいいです。許します。私の方がお姉さんですからね」

「ありがとうございます……え?」

「えっ?」

「……ありすちゃん。白河さんは……今年で14歳になると……資料に」

「……ええっ!?!」

橘さんの身長は、公称141cm。これが去年のことだったそうだから、多分もうちよつと成長しているだろうし142cmはあってもおかしくないと思う。

対してボクは140cm弱。ボクの方が橘さんよりも若干小さいことになる。なるほど、年下と思われても仕方ないかもしれない。

……年下と思われちゃったのかあ。

「と、年上だったんですか……」

「年上なんです。なんだかすみません」

「い、いえ。いいんです。私の方が先輩ですから。許します」

ちよつと失礼なこと言っちゃっても許してくれるなんて、やっぱり橘さんは一流アイドルだなあ。

その後はしばらく鷺沢さんと橘さんの二人と世間話に興じることになった。

二人とも仲の良い人たちで、同じ黒髪ロングで涼やかな雰囲気もあり、本当の姉妹のようにすら見えるほどだ。

ボクもそれなりに打ち解けることができるようになった頃、スタツフさんがこちらに近づいて来るのが見えた。

「白河さん、橘さん、リハーサルお願いしまーす！」

「あ、はい！」

「分かりました。行きましょう、白河さん」

「はい」

「あ——すみません白河さん。撮影前になんなんですけど、眼鏡外していただけますか？」

「眼鏡を？」

「はい。監督の指示で。雪女が眼鏡してたら格好つかないだろう、と」

道理である。ボクのことを知っている人が見る分には特に違和感を覚えるほどではないだろうけど、撮影となるとまた別だ。

妖怪の視力が悪いなんて、普通に考えたら違和感の塊だろう。キャラクター性を考えると致し方ない。

「うーん……はい。了解です」

「こちらで預かっておくので、後でまた取りに来てください」

「……分かりました」

これ、大事なものなんだけどな。

……まあ、状況を考えれば自分でも外した方がいっていうのは分かっている。だから、少しばかり思い悩みつつも、ボクはスタッフさんへと眼鏡を手渡した。

いやおい弦つるはいいけどレンズには触るんじやない分解バラすぞ非イ眼鏡族!!

ちくしょうこれだから人に渡すのも嫌なんだ!!

「大丈夫ですか？ 不安そうですが」

「あ……はい。平気です」

「そうは見えませんが。前に文香さんが倒れた時と、似たような顔色をしていらつしやいます」

「た、倒れるほどじやないですよ。これは……ただ、ちよつと、あの眼鏡、大事なもので……」

「そうなんですか……じゃあ、早くリハを終わらせて受け取りに行きましょう」

「……はい」

気遣いのできるいい子だな、と思うのと同時、ボクは心中穏やかでいることができずにいた。

そりやまあ、寝る時くらいは外してるけど。それはそれとして大事なものが手元に無いっていうのは不安だ。

あれは……ええと、どこのブランドだっけ。少なくとも日本じゃないはず。そもそもあの人がいない今、その辺の確認もできそうにないしなあ……。

「……よっっ」

軽く頬を叩いて気合を入れなおした。橘さんの言う通り、一切のミスを出さなければリハーサルはすぐに終わる。

今日までやってきたことを全部やりきれば、きつとなんとかなるは

ずだ。

そう思っていた時期がボクにもありました。

とは言っても、何もヘマをしたわけじゃない。橘さんは純真な少女役をちゃんとこなしていたし、ボクはボクで大人しくクールで、しかし心優しい……という雪女役をちゃんとこなした。

指示と要求さえあれば、ボクはその内容をちゃんとこなすことができるのだ。ぶっちゃけると、自由にやれと言われた時の方が色々厳しい。

しかし、リハーサルというのは、何も演者が完璧にこなささえすればすぐ終わるってわけじゃない。

カメラ位置や大道具小道具の配置、美術スタッフによる各種道具の手入れ、演技のために動かしたものの再配置やカメラ写りの確認など、それはそれはやることが多い。

その間にオフショットを撮られることもあるし……衣装を着たままでの写真撮影もある。

これに関しては橘さんに限った話じゃなく、ボクも見通しが甘かったのは間違いない。しょんぼりしながら謝る橘さんをなだめながら、ボクたちはリハーサルを終えてみんなの待機している楽屋の方へと向かっていた。

「それにしても、氷菓さんは思ったよりも演技が上手でしたね。本当に初めてなんですか？」

「初めてですよ。でも、知識があれば後付けで技術も備えることができます。ちゃんとした指示もありましたから、初めてでもなんとかなりました」

「なるほど、知識があれば……ですか」

まあ、これはボクに限った話だろうけど。

錬金術の知識のおかげであらゆる過程をすっ飛ばして、直接技術を

習得できるといふのは本当に便利だ。

「眼鏡、無くても動けるんですね」

「何も見えないほどじゃないですから」

確かに眼鏡が無いとちよつと辛いけど、言つても精々乱視があるくらいのものだ。

全体的に輪郭がぼんやりするけどその程度のもので、周辺的狀況を把握はできる。

ダディヤーナザン
「橘さんも、流石の演技でした」

「……ありすでいいです。もうツツコむのも疲れました」

「え……と、じゃあアリスさんで」

「……!」

「どうしました?」

「いえ、気にしないでください」

なんだか「これはこれで」みたいな表情をしている。

空せの世界せだと英名が多かったから、同じありすならこつちの方が呼びやすいと思つただけけど、正解だつたんだろうか。

「でも、少し複雑です。歌を褒められるよりも先に演技を褒められるって」

「演技は、嫌いなんですか?」

「いいえ。そうじゃなくって……私、歌や音楽を主にお仕事にしたいつて思つてるので……褒められて悪い気はしないんですけど」

「ああ、なるほど」

どちらかと言うとアーティスト志望なのか。そういうことなら、歌より先に演技を褒められるというのはそりゃあ、まあ複雑な気分だろう。

「けれど、目標に向かって一歩ずつ前に進んでいると思えば、嬉しいです」

「そうですね……」

「氷菓さんは、どんな目標があるんですか？」

「え？ ええと……まあ……」

無い。

……うん、無いな。目標。無い。

みんな楽しくアイドルできたらいいなーとは漠然と考えてるけど、それメインで他が特にならない。

いや、でも、人生の目標みたいなものはあるっちゃあるけど……。

「自由なことってどんなことなのか、知りたい、かな」

「自由、ですか？」

「……変ですよ。すみません、忘れてください」

「え、あ、いや、そんなことは」

いや変だ。絶対変だ。こんなこと言って、またこれ「あ、こいつ心の病気なんだな……」みたいに見られるに決まってる。恥ずかしい。

「すみません。忘れてください。いやホントに」

「大丈夫です、大丈夫です！ いや本当に！ そういうのじゃないことは分かりますから！」

ああ、もう。本当に恥ずかしい。

赤面する顔を隠しきれなくて、自然に速足になっていく。

そんな中、不意に楽屋の方から、がしやん、という大きな音が聞こえてきた。

「？」

「何かあったんでしょようか……?」

「さあ……あ、そういえば、ロケ弁が出るんでしたよね」

「じゃあ、運搬車が転倒してしまっただんでしょようか?」

「かもしれないです」

たまにいらっしゃるんだよね、大きな台車だと。曲がり角でコケちゃうとうかコカしちゃうような人。

前もそんな感じでコケて大目玉食らってる似たような人見かけたし。もしかして346の関係者って割とそそっかしい人多いんだらうか。

……多いかも。

「行ってみますか?」

「んー……散らかってて危ないかもしれないですし、一旦楽屋に行つて指示を仰いだ方がいいかも——」

構造解析してみると、どうやら楽屋前の会議机が崩れたらしいということが分かった。

そそっかしい人が手をついたか何かして、机崩しちゃったのだろうか。いや、でも弁当の残骸が散らばってもいるな。台車もあるみたいだ。

あの手の組み立て式の机って脚の強度低いし、曲がり角で脚にぶつめちゃって、そのまま……ってことだろうか。

そう、思っていると。

「……あ、れ?」

崩れた机の荷物の中に、それがある。

まさか、まさかと心が逸る。いや、まさか、そんなこと……。

「え? 氷菓さん?」

アリスさんを置いて、走り出す。
いや、でも、そんなこと。そんなこと――。

「あつ！ し、白河さん!?!」

そして、楽屋の前に辿り着いて、それを見た。

――ぐしゃぐしゃに壊れてしまった、ボクの眼鏡を。

「……あ」

「マジか……おい、この馬鹿！ 何やってんだ!!」

「す、すみませんツ!! 本当にすみません!!」

「どうするんだよ！ ったく、俺のカメラも……あ、ああ……白河さん、本当に申し訳ない！ ……白河さん?」

状況を、見るに。

多分、ロケ弁を運ぶために、急いで台車を操作していたのだろう。そこで、スタッフさんたちが荷物を置いている机に台車を引っ掛けてしまったことで崩してしまい、そこに載せている荷物が全部落ちて行った。

その中には、ボクがスタッフさんに預けていた眼鏡が混じってて。

そのまま、台車で轆^ひき潰してしまった。

はは。ピタゴラスイッチかよ。ありえん。

ピンポイントに、つてわけじゃない。スタッフさんの私物もいくつか巻き込まれている。

けど――ボクの眼鏡も、とてもじゃないけど、普通にやる分には修理しようが無いくらい無残に壊れてて。

気付けば、涙が溢れ出していた。

「あ……う……」

「!?」

「う、うわ、わああああああ……!!」

駄目だ。止まらない。止められない！

涙があふれて、感情がとめどなく湧き上がってくる。体中の力が抜けてその場にへたり込んでしまう。

くそっ、ダメだ！ どうしても涙が止められない。泣き叫ぶのをやめられない！

直せるんだ。ボク的能力ならすぐに直せるんだ！ けど、この状況でそんなことはできない。何も知らない人たちの前で錬金術を使うなんてこと、できるわけがない！

一番いいのは、この場で眼鏡を奪い取って、楽屋に戻ってこっそり直して「予備があるから大丈夫です！」って言い張ることなんだ。でも、人前でこんなに泣き叫んでしまったら、予備なんて無いってことがバレてしまう。そうなったらもうダメだ。直しようが無い。

——でも、あの眼鏡はずつと前の思い出の品で、仮にここで直したとしても、それは「同じもの」と言えるのか？

心の中で、冷たい声が語り掛けた。そうだ。組成が違う以上、仮に錬成しなおしてもそれは「同じもの」とは言えない。錬成の過程でどうしても不純物べっのものが混ざってしまう。

それに、アリスさんにはもうとつくにあれが大事なものだってことは言ってしまった。それが壊れてしまつて平然としてるなんてこと、不自然にも程がある……！

だいいち、どうやったら泣き止めるんだよ！

何でボクは自分の感情をコントロールもできないんだよ！

「あああ、あああ……！ うあ……！ うわあああああ……！」

ボクの泣き声を聞きつけてか、楽屋の中から他のみんなが顔を覗か

せた。

トライアドプリムスの皆さんは、それほど交流が無かったせいかこちらに近づき難いようだ。対して晶葉と志希さんはどこかに電話をかけている。しばらくして電話を終えた晶葉が、慌てた様子でボクの方に近づいてきた。

「おい氷菓、大丈夫か？」

「うぐっ……ひぐっ……あ、ぐ……うえ……うええ……」

「プロデューサーすぐ来るって！」

「ああ、ありがとう志希」

「この眼鏡は……ううん、ちょっと……あたしでも直しきれないね……」

「ここまでフレームもレンズも損壊しているようではな……」

ボクをなだめるためにだろう。志希さんがボクをゆっくり抱き寄せた。

それでもなお涙は止まらない。

……どうしたらいいんだよ……くそう……！

「白河さん!!」

「早っ!？」

……と、一分もしないうちにプロデューサーが姿を現した。

ちよつと待て。どうやって来たんだあんな。

「早くて当たり前だ!! 俺がプロデューサーしてるアイドルだぞ!! それよりも状況は!？」

「あ、ああ。スタッフのミスでその荷物が崩れてな……氷菓の眼鏡が」

「……こりゃひどい」

「うちの若いもんがすみません、プロデューサーさん……とりあえず、

一旦撮影は中断して……」

——その瞬間、ボクは溢れ出す涙を拭いながらスタッフさんへと向き直っていた。

「……ひっ、ぐ……や、やります……!」

「!?」

「え、だ、大丈夫なのかい……?」

「だい、だいじょうぶ……です……」

それを求められているのなら。

必要とされているということは、ボクがここにいってもいい証のようなものだ。

だから、やらないと。

眼鏡が壊れたことは辛い。けれど、それで人に迷惑をかけちゃいけない。それじゃあ、またボクは元通りだ。何もできなくて、真理に至るための素材として「以外」を不要と言われた頃と何も変わらなくなってしまう。何も……!!

「いや、ダメだ。スタッフさん、申し訳ありませんが、しばらく白河は席を外させます」

「了解です。ホントすみません……賠償の話もすぐに」

「そちらは担当の者に任せます」

「だ、だめだよ、プロデューサー……! ボクは、できるから、やれるから……!」

「それこそダメだ。ちよつと別室に行くよ」

と、プロデューサーは壊れた眼鏡を受け取り、ボクの手を取って空き部屋に向かった。

照明を入れ、机を挟んで互いに向かい合う。ボクは相変わらず涙を止めることができず、プロデューサーは沈痛な面持ちのままボクを

見つめている。

やがて嗚咽おえつが収まった頃、プロデューサーはごく優しい口調でボクに語り掛けた。

「……落ち着いたかい？」

「少し、は……」

「居合わせられなくてごめんな。もしかしたら、事前に防げたかもしれないのに」

「いや……プロデューサーのせいじゃないよ……ボクが、眼鏡ケースでも持ってたなら、こうならなかったんだから……」

十七人を一度にプロデュースするという驚異の手腕を持つが、だからこそ根津Pの業務は常日頃から多忙を極めている。

アイドルたちに相応しい仕事を探し、必要でない仕事は弾き、その際に発生する各種書類を処理しながら、まだデビューしていないアイドルたちに、相応しい舞台を整える……。

そもそも今回、こんな短時間でここに来ることができたこと自体がちょっとおかしいというか……この人の運動能力どうなってんだよ本当に。

「……プロデューサーは悪くないよ。それより、仕事なんだから……ちやんと、やらなきゃ」

「そんな精神状態でできると思っているのかい？」

「できないじゃないじゃなくて、やらなきゃ……」

「ダメだ。プロデューサーとして許さない」

「でも……」

「ようやく先輩の言ってたことが分かったよ。君は、『役割を果たす』ことに対して固執しすぎている」

「……何を」

「……そんなの、別に誰だって……」

「それはもしかして、そうしないと誰かに必要とされないと感じているから、なんじゃないのか？」

「……………考えすぎだよ。ボクの考えを勝手に決めつけるの、やめてくれる…………？」

「そうかもしれない。だったらごめん。もつとはつきり否定して、俺のこと殴りつけてくれたって構わない」

——できなかつた。

そういう気持ちが無いとは、決して言えなかつた。

むしろ、ボクの中の大半を占めていたかもしれない。

「…………でも、もしもそうだとしたら、俺は君にいくつか言わなきゃいけないことがある」

「…………何さ」

「俺は、役割とか関係なく、君のことが必要だ」

「…………は？（ドン引き）」

…………いや、そのセリフ。自分で言っていてどうかと思わないのか、プロデューサー。

「ごめん、告白とかそういうアレじゃなくって」

「…………そりゃそうだよ」

「俺はさ、人生の目標があるんだ」

「…………はあ？」

『「笑顔じゃない人を笑顔にする」こと』

「何さ、それ…………」

…………無茶な目標だ。

事情があつて笑顔になれない人もいるだろう。でも、難しいからこそ目標に据えるのにいいのかもしれないけれど。

「そういう意味で言うなら、白河さんはまさしく、だったわけさ」
「……………」

否定はしない。

考えてみればボク自身、ちゃんと笑顔を作ったことはほとんど無かったのだから。

仏頂面デフオというか、つまんなさそうというか……それがだいたい、ボクの標準デフオだった。

別に笑うことが無いわけじゃないんだけど、やっぱり笑顔が増えたのは、みんなと過ごすようになってからだと思う。

「でも、それってさ……ボクに『笑う』って役割を課してることにならない？」

「そういうつもりは無いよ。笑えないなら、笑わなくていい」

「……自分で自分の言ってること覆してどうすんの」

「どうしようもない部分があるなら仕方ないさ。けど、できる限り俺は自分の力を尽くす。役割とかそんなじゃなく、俺は君の自由な意思で笑っていてほしいんだ」

「……何で」

「綺麗な子には綺麗な笑顔でいてほしいだろ？」

……この人は。

この人は——たぶん、極めつけの馬鹿なんだろう。

……自由な意思で笑ってほしい、って。そもそもボクにはその「自由」が解らないんだっつーの。

そもそもナチュラルに口説くようなこと言ってるんじゃないよ。ぶざけてんのかこの人は。いや、真面目に言ってるのかこれ。

だから天然ジゴロか何かかよと。ボクじゃなきやぐらつと来る人くらいいるかもしれないだぞ。自重しろよ本当に。

「ともかく、役割とかなんとか、そういうのはナシ！ 白河さんのコン
デーションがベストじゃないと仕事はさせないからな！」
「……分かったよ」

ホント、頑固っていうか熱血っていうか、馬鹿だなプロデューサー
は。

そういうところは、嫌いじゃないけどさ。

「で、そのさ。眼鏡なんだけど……それ、どういうものなんだい？ 何
か分ければ、少しでも手助けできるかもしれない。修理は難しいかも
だけどさ……」

「……ボクにとつては、初めての贈りものなんだ。六年くらい前に
貰って、それからずっと使ってる」

重い、と言いたげにプロデューサーが苦々しげな顔をした。

「貰ったのは……色々恩のある人で、ボクにとつてはおじいちゃんみ
たいな人。海外を飛び回ってるから、連絡もいつつか分かんない。
確か、フランスのメーカーの品だったと思う」

「おっふ……」

「……オーダーメイドとか言ってたから、多分もう二度と手に入らな
いんじゃないかな」

「と、とんでもない人が知り合いにいるんだな……」

「……ちよつとね」

施設を守ろうとしてた時、必要に駆られて外国を飛び回らなきゃい
けなくなつた時期がある。そんな折に出会つたある人がくれたのが、
この眼鏡だ。

当時錬金術のことを必死に学んで、その弊害として視力が低下し
てきてた。それを見かねてプレゼントしてくれた……というのが経
緯だ。

その人に命も救ってもらったし、その人の命を救ったこともある。その時に経た事件の流れの中でその人は錬金術のことを知ってしまっただけ……だからこそ、ボクがこの世界で一番信頼している相手だと言えるだろう。結果的に、その人がいなければ施設を救うことはできなかったんだから。ちよつとあくどいこともしてるけど、そこは愛嬌ということだ。

「……大事だったんだ。だから、どうしよう、って。申し訳ないし、辛いし……って」

「やはりそういうことですか」

「!?」

「……アリスさん!?」

と、説明を続けるその中で、不意に部屋の扉が開いた。

中に入ってきたのは、アリスさんと………春菜さんだ。

いやちよつと待て。一気に空気が変わったぞ。おい。どこから湧いて出たこの人。

「いや、やはりそういうことって……話聞いてたのかい橘さん!?」

「最後の方だけ少し聞こえてしまいました。申し訳ありません」

「それは……構わないんですけど……」

「それよりも何で上条さんがここにいるんだ!?」

「眼鏡愛好会会長として、晶葉ちゃんに呼ばれて参りました!」

「アツハイ」

「こ、ここで春菜さんか……!」

晶葉め、面倒なことを……いや、眼鏡関係の話ならアホほど頼りになる人だけだ。

「そこまで大事なものということであれば、こちらの箱に収めてください。どうぞ」

「え、あ、はい……桐箱!」

眼鏡ケースとかじゃなくって桐箱か。ははは、見たことねえぞこんな丁重すぎる扱い。

ちよつと頭がついていかない事態すぎて逆に冷静になつてきたぞお……!

というか春菜さん、拝んでない?

明らかに念仏唱えてない? これ供養してない? ちよつと待つて?

「流石にここまで壊れてしまつては、修理も難しいと思います。なので、新しいものが必要になるんじゃないかと思ひまして」

「は、はあ……」

「まあまあ、引いていないで眼鏡どうぞ」

「え、いやでも度が……あ、あれ。度が合つてる」

「勿論です。元の眼鏡の度を考え、眼鏡をかけていた年数から来る劣化や日々のストレスなどの視力が低下する要因を計算に入ればこの程度のことは充分に予測できます!」

ねえこの人、眼鏡限定とはいえ一般人の身で錬金術の真理に達した人じゃないとできないようなことをやってのけてるんだけど。どういうことなの……?

「……で、でもその、申し訳ないというか」

「遠慮せずに。これは私のみならず、氷菓ちゃんのお友達みんなからのプレゼントですから!」

「え……」

よく見れば、それは……なんだろう、確かに、どこかみんなの気持ちが届められているようにも思う。

晶葉はよく「アンダーリムは科学者としてのポリシー」だとか言つ

てた。それと同じくアンダーリム。フレームは志希さんの衣装と同じ紅色で、弦にはスターライトプロジェクトのロゴマークに似た星型の印刷が施されている。

「贈り物として受け取ってください。そちらの、大事な眼鏡には及ばないかもしれませんが」

「……いえ。いいえ。嬉しい、です」

これはこれで、涙が出そうなほど嬉しいことには変わりない。

仲良くなった人たちに贈り物をされたんだから、嬉しくないわけがない。

少しだけ、こぼれそうになった涙を拭った。

「ありがとうございます、春菜さん。すみません、わざわざ来ていただいて」

「いいですよ。私は全ての眼鏡アイドルの味方です。それでは……」

と、そそくさと去っていく春菜さん。私服ではあつたけど、もしかすると別のスタジオで収録でもあったのかもしれない。

……のはいいんだけどあの人、毎回毎回ちよつと出てくるタイミンが唐突すぎるんじゃないかと思う。

もしかして眼鏡のこととなると即座に聞き付けてやってくる系の妖精さんか眼鏡の神とかそういう類の超常存在だったりしないかな。しないよね？

……この八百万の神がいる日本、眼鏡の神くらいはありえるかもしれないので拝んでおこう。

「近くのスタジオに春菜さんがいて良かったですね」

「……はい。そうですね」

「気分は、少しは落ち着いたかな？」

「……まあまあ、かな」

「あの、スターライトプロジェクトのプロデューサーさん」

「根津でいいよ。何だい、橘さん」

「はい。収録までもうしばらく時間はあるんですよ」

「そうだね。延ばしてもらって……今は他の人たちの収録の番だから、もうしばらく時間はあると思うよ」

「分かりました。じゃあ、私は文香さんと呼んで、氷菓さんとはしばらくおしゃべりしています」

「そうしていてくれるかい？」

「もちろんです」

そこまでしてもらうなんて流石に……と思いかけるけど、やめておく。

実質的に、大丈夫とか問題無いか何ともないとか言いすぎたせいで、こんなことになってる側面もあるんだ。大人しく受け入れて、ちゃんと精神的に安定させよう。

大丈夫。きつと、大丈夫。

元の眼鏡は春菜さんに貰ったケース……もとい桐箱に収納されて、大切に保管されてる。今度の眼鏡も、一緒にケースを貰ったから、それに収納すればそう簡単には壊れない。

大切な思い出は大事に保管しておいて、今の友達とこれから新しい思い出を作っていくことを、考えよう。

その後、これ食べてもいいですかと言うアリスさんにお弁当のイチゴをあげたり、文香さんの読んでる本を基にした他愛ない話をしたりして精神的に回復したボクは、改めて臨んだ撮影をちゃんと終えることができた。

……ほんと、良い人たちに囲まれてるな、って。改めて実感する。

15：シェフ白河

夕方ごろに差し掛かって、ようやく撮影も終わった。

ドラマの撮影ということでそれぞれの撮影時間以外は休憩にあてられていること、加えてボクの役柄自体が激しいアクションを必要としないこともあり、今日のボクは珍しくあまり体力を消耗していない。その辺の椅子に座って、他のみんなとお喋りできるほどだ。

もつとも、ずっと衣装で過ごさなきやいけない関係上汗はすごいけど。

「「お疲れ様でした！」」

みんなでスタッフさんたちに挨拶して、スタジオを後にする。

今日は初日の収録ってことで、親睦を兼ねてレストランで打ち上げを行う予定になっている。

……あんまり重いものじゃないといいんだけど。

「これもまた可愛いことでしたー」

「うん……こっちも似合ってる……」

「や、やめてよ二人とも……撫でないでよ」

「よしよし……」

「こ、こずえちゃんまで……」

こんな往来で三人の女の子——しかもその内二人は年下——に、頭を撫でられるなんて、恥ずかしいったらありやしない。

問題はその年下の女の子に頭を撫でられるほどのボクの身長なんだけど。そこはもうどうしようもないが。

「しかしますます氷菓のことが分からなくなってしまうたな。何だそ

のわけのわからん眼鏡の出自は」

「そんなこと言われたって……」

「おフランスに行ったことあるってことだよー。でもそれ以外にも行ったんじゃない？ エジプトとか」

「まあ、あるけど」

「やはりエジプトか」

アラビア語を学んだって言ったくらいなんだから、そのくらいは想定できるだろう。

もつとも、何でそこに行ったか、というところまで考えるのは難しいかもしれないけど。

「まさか吸血鬼がいたとか言わないだろうな」

「いるわけないでしょ、ファンタジーやメルヘンじゃあないんだから」

まあもつとも、ファンタジーやメルヘンの塊みたいなことをやらかしてるボクが言える話でもないんだけど。

いや、でもいるのかなそういうのも。ボクがこんなだし、いてもおかしくないような気も……。

……よそう。こんなこと考えても仕方ない。

「みんな、お疲れ様」

そんな与太話をしていると、ふと横から声がかかる。声をかけてきたのは……凜さんだ。

「ん……ニュージエネレーションズの渋谷凜か」

「お疲れ様です、凜さん。どうしたんですか？」

「うん、ちよつとね」

言いながら、凜さんはボクたちの方を見た。

いや、ボク「たち」、つてよりはこれ……ボク個人を？

「氷菓だっけ。少し話したいんだけど、いいかな？」

「え……と、ボクですか？ でも、何で……？」

ここでこんな話されるなんて、とんでもなく怖い。

もしかして撮影中何か不手際を起こしてしまっただろうか。

いや、不手際も不手際……というか、ボクのせいで色々順序が狂ったんだから怒ったりしてもおかしくないかも……。

「あ、だ、大丈夫だよ。怒るとかそういうのじゃないから」

「ホントかにやーん？」

「ホントだよ。ちよつと個人的なお話だけ」

「……わ、分かりました。大丈夫です」

「うん、ありがとう」

と、打ち上げ会場に向かっているみんなとはやや離れた——ぎりぎりで声の聞こえないような場所へと移動する。

あんまり人に聞かれたくない話なんだろうか。だったらそれはそれで怖いぞう。

「ごめんね、呼びつけるようなことして」

「い、いえ。大丈夫ですけど……どうしたんですか……？」

「……あのさ」

「はい」

「眼鏡、外してもらってもいい？」

「……はい？」

……眼鏡を？

ちよつと意味が分からない。けど、とりあえず言われたままに眼鏡を取る……と、凜さんがずいところらに近寄ってきて、そのまま――

「ボクの前髪を真ん中から左右に分けた。

「……はい!？」

「……うん、ごめん、変なことして」

「い、いえ……大丈夫、ですけど……」

「どうということだろう。実は凛さんは非眼鏡派で、人の髪型に対して一言あるとか……？」

「……流石にそういうことは無い、と、思うけど……」。

眼鏡をかけ直しながら凛さんを見上げると、少し困ったような表情でこちらに笑いかけてきた。

「どうということなんですか……？」

「……うん、実はさ。氷菓は、私の友達に似てるんだ。だから、もしかして、って」

「は、はあ。外国の方ですか……？」

「そうだね、遠いところ。氷菓もハーフだって聞いたけど、親はアメリカの人？ ロシアの人？」

「北欧って聞いてます」

「正確なところは知らないし、知ろうと思ってもその方法はないんだけど。」

「……まあ、多分北欧の方だろう。ノルウェーとかスウェーデンとかあの辺。」

「そのお友達ってどういう方なんですか？」

「優しい子、かな。純粋で、天真爛漫で……綺麗な蒼い髪の色、してた。氷菓みたいに」

「まさかあのクソ親はいたるところで種を蒔いてたりしないだろうな。」

今ものすごい嫌な予感が押し掛かってきたぞ……！

「ルリア、って名前なんだけど。知ってる？」

「……すみません、知らないです」

みりあさんなら知ってるんだけどね。赤城の。

流石にルリアさんという名前の人は知らない。できるならなんとかお手伝いもしたいとは思うけど……そこは本人に言われないと、流石に踏み込みすぎだしな。

「もしもさ」

「……はい？」

「……もしも、ルリアに会うようなことがあったら、さ。私は……私たちは元気だって伝えてくれるかな？」

「あ、はい。会えたら、ですけど……」

「そっか。うん——安心した」

凜さん、なんだか「そう」なることを前提に話してるようなフシがあるけど……あ、もしかしてそのルリアさんって人、海外でアイドルやってたりするのかな。

もしかすると今の凜さんとはランクが違ってて、ボクたちのランクなら会う可能性が高いから……とか、そういう話なのかも。

そういうことなら、もしもボクの方が先に会ったら伝えておこう。凜さんの方が先に会うって可能性も否認ないけれど。

それから、トライアドプリムスの皆さんやクローネの人たちも交えて、交流も兼ねておしゃべりしながら打ち上げの会場へと向かった。

……なお、今回はお肉を食べなかつたためお腹は下さなかつた。

@ ————— @

「……疲れた……」

それから少ししたある日のこと。ボクは食堂の閉まった午後九時前に寮の自室に帰り着いていた。

ドラマ撮影はおおむね順調だ。NG（ニュージェネレーションではない）はそこまで出ないし、むしろ当初の予定よりもずっと撮影の進行は早いくらいだと思う。

けど今日はまた難儀な撮影で、「雪女が夜の街を歩く」というシーンのために、足が棒になるまでひたすら練り歩くハメになってしまったのだ。

結局、終わったのはちよつと前のこと。疲労感いっぱいすぎて思考が上手く回らないくらいだ。

「アイス食って寝よ……」

どうせ食堂は閉まつてる。ボクも別に空腹にならないわけじゃないが、正直そのくらいしか食べられそうにない。アイス食ってお風呂入ってアイス食って歯あ磨いて寝よう。あ○すまんじゅうとBLA CKRXモンブラン。ドがつくほど甘いけど、アイスに限っては大丈夫なんだよねボク。このくらいならぺろりといける。逆に言うところれしか無理。ちなみに箱入りのちっちゃいやつだ。

——ピンポーン。

と、そんなことを思っていると、不意に呼び鈴が鳴った。

こんな時間に誰だろう。こないだ美玲さんに漫画貸したからその返却かな。

「はーい」

そんなことを思いながら鍵を開ける——と。

「吶喊れすー!!」

「GO AHEAD☆」

「ぐえー!!」

——扉が開く勢いそのままに、ボクはそのまま扉と壁との間に挟み込まれてしまった。

「う……ウボアー」

「氷菓ちゃーん!?!」

「あ……やっべ、挟まっちゃまった☆」

白河水菓、再起不能——。

——とは流石にならないけどさ。

「……せめてひとこと言ってから入ってきてくれないかな……」

「ホントにごめんなさい……」

「申し訳ないのれす……」

扉を開けて入ってきたのは、みちるさんと七海ちゃん、肇さんとしゅがはさん——「ミラ・ケーティー」の四人であった。

……結局あの後あの名前が正式決定したらしいけど、まあその辺はいったん置いておこう。

彼女たちはメンバー全員が寮生で交流もかなり増えたおかげか、ユニットの結成直後よりも遥かに仲は良くなり、近日中にデビューライブの実施も決まっている。

そんな状況下で、普通ならボクのところに来る理由なんて無いはずなんだけど……?」

「どうしたのさ、こんな時間に」

「食堂が閉まってから帰ってきたので、何かお料理作ってないかなっ

て思ってた！」

「……はえ？」

「ええと、順序立てて説明しますね。実は……」

——肇さんの説明によると、どうやらミラ・ケーティの四人はデビューライブの直後に仕事が入ることが決まったそうだ。

その名も「呐喊^{とっかん}！ アイドルの手作りごはん」。自社制作のバラエティ番組におけるコーナーだ。初めての番組出演に加えて初めてのレギュラー、ということになる。プロデューサーもまたいい仕事を見つけてきたものだ。

みちるさんはパンに限らず「食べること」全般が好きだし、七海ちゃんはおさかな筆頭に海産物ならだいたい好んでいる。しゅがはさんは……甘いもの好きじゃなきゃしゅがーはあとを自称することは無いだろう。肇さんは川釣りが趣味のようでもあるし、ある意味で「食」はこの四人に関わる共通点と呼べるだろう。

「それで、リポートや食レポの練習にと思って、今日帰ってくるのが遅かった氷菓ちゃんのところに来てみたんです……けど」

「もしかして、それが晩ごはんのつもりなんですか……？」

「……う……」

……その通り!!

なんて言わなくても通じるよね、この状況だったら。うん。このBLACKRXモンブランが今日のボクの晩ごはんだ。

「アイス一本って」

「に、二本食べるつもりだし……」

「ある意味、氷菓さんのところに来たのは正解ですね……いくらなんでもこれはひどいれす」

「やっぱり氷菓ちゃんは食生活を改善しなきゃだめですよっ！」

くっ！ 新企画にかこつけてダメ出しにくるとは……。
いや、まあ……。それを言う理由自体は分からんでもないんだけど、
そこまで言うほどかな……。

「ていうかさ……。むしろあいすちゃんってごはん作れないんじゃない？
☆」

「いや、作れるけど」

「作れるんですか!？」

「な、なんだかそういうイメージは薄いような……」

「作れるんですー。……。実家じゃボクが料理当番とかしてたしね」

料理も化学も錬金術も、基本は正確な分量と正確な時間だ。

レシピ通りにやればまず、食べられないものを作ることも無いし。

……。それはそれとして、なんだかこう、料理できないって思われっ
ばなしなのも癪しやくだなあ。

「……そういうことなら、今から買ってきてさっさと作るよ」

「そんな無理しなくていいぞ☆ いや死ぬって」

「道半ばで倒れたりしないですか……!？」

「……するかも。ごめん、誰か荷物持ち手伝ってくれる?」

「あ、それじゃあ私が……」

「ありがとう、肇さん」

と、手を挙げてくれる肇さん。ありがたい話だ。

買うものを買うものだけに、ちよつと人の手を借りないと疲労し
きった今のボクじゃ途中で死ぬかもしれない。

暴漢が出た——とか言うのならなんとでもなるんだけどね。全身
の毛根を死滅させたり指パッチンで火を出してみたり軟骨筆ったり。

「大丈夫なんれすかね?」

「大丈夫だよ。今日のボクはシェフ白河だから。ちゃんとボクの実力

をみんなの胃におみまいしてやるとも」

「氷菓ちゃん！ 逆に怖いです！」

「……そろそろうるさい。」

……で、十分ほどして、近くのスーパーで目当てのものを購入して戻ってきたボクは、早速キッチンに立って——正確にはキッチンに置かれた踏み台に立って——いた。

下ごしらえは順調、なんだけど、みんなどういうわけか……いや、どういうわけもクソもボクがあんまりにも頼りないからなんだろうけど、凄まじく不安そうにボクを見ている。

だがもう遅いッ！ 脱出不可能よッ！ 貴様らはこのピストル……じゃなくって、ビストロシラカワの射程範囲に入ったのだ！
クッククク……はーっはっはっはっは！！

「はははは……アゴっ!？」

「いや何してんだよあいすちゃん」

「だ……大根擦ってたら重さと重労働に負けて手が攣って……」

「貧弱すぎれす……」

「あーもうちよつと貸しな☆」

「うう……すみません」

……「しよーがねーなー☆」と言いながら、しゅがはさんの手により大根おろしが量産されていく。

もりもり摩り下ろされていくその光景は、頼もしくもあり力強くもあり……これがある意味で女子力の発露というやつなのだろうか。

ともかく、これで一品目はできた。

「……お待たせ。まず簡単なのからね。おろしポン酢とごま油であえた、タコのカルパッチョ風サラダ」

「!? 思ってたよりもまともそうなのが……!?」

「ヒドくない?」

「氷菓さん、あんまり料理が得意な印象無いれすから」

でしようね。

「で、二品目はこれ。卵の白身だけで作った、簡単きのこチーズオムレツ」

「何で白身だけなんですか?」

「黄身を別に使う用事があつて余つたから」

「余つたからで作つちやうあたり手際は良さそうだな☆」

「じゃあ、いただきまーす!」

「……うん、タコさんの下処理もちゃんとしてるれす!」

「絡めた調味料も酸っぱすぎず主張しすぎず……うん、美味しい」

サラダに使つた調味料は、ポン酢と大根おろし、それからごま油……なわけだけど、これだけだと酸味が強くなるため、少しだけ出汁と合わせている。

これでまるやかに……とまでは言わないけど、酸っぱいのが苦手だつて人も大丈夫なはずだ。

「こつちのオムレツ、包み込み方がスウィーティー☆」

「フライパンをトントントンしたり?」

「重いからできないかな。基本的には、フライ返して頑張つたよ」

精度はミクロン単位だけどね。

外側はほぼ真っ白なオムレツだけど、割つてみると中から刻んで味付けしたキノコがチーズと一緒にとろりと溶け出す。卵とチーズの相性が抜群なだけあつて、これも鉄板と言えば鉄板と言えるかもしれない。

さて、と。じゃあ三、四品目を……と。

「で、次ね。大根餅の揚げだし風」

「だいこんもち？」

「うん、大根おろしに片栗粉を混ぜて焼いたものなんだ。お餅みたいな食感になるよ」

それなりに量を作ることができて安上がりなため、あおぞら園でも割と作っててみんなに好評だった。

そもそものお餅がそんなに安くはないからね……代用品でも決して悪くはない。栄養面は、まあそこそこだけど。

味は大根＋片栗粉の域を出ないとはいえ、割と淡泊なところもあるから味付け次第でどのようにも化ける一品だ。

「はむっ！ ん〜……おダシがいいね〜……これ、アゴれすか？」

「うん、そうだよ」

「AGO？」

「トビウオのことだよ。九州の方だとよく使ってるんだって」

「へえー……珍しい出汁ですね！」

東京の方じゃあんまり見ないか、見てもそこまで気に留めないかもしれない。基本、ポピュラーなのはカツウオ出汁だからね。

でも今回はあえて使ってみた。食事は多少のサプライズがあった方がいいものなのだ。

「あ。あいすちゃん、おろし大量にくれ☆」

「た、大量に？ いいけど……お出汁に混ぜてるよね？」

一応、トロみのついたお出汁に大根おろしを混ぜた上で出してるんだけど……。

「大根の身体にいい酵素ってのは……熱を加えると無くなっちゃうんだゾ☆」

「ああ、そういう……はい、どうぞ」

「テンキュー☆」

アミラーゼとかプロテアーゼとかリパーゼとかバークゼラルドとかそんな名前だっけ。

確か60度に達すると効果が消えちゃうんだったような。そういうことなら、まあいいか。

「で、こっちはアカエイの煮つけ」

「おおっ！」

「ええ〜？ アカエイって……」

と、もう一品持ち出すと、七海ちゃんがハツスルするのと同時にしゅがはさんが目に見えてゲンナリしだした。

「アカエイ？ ……あれ？ どうしたんですか、はあとさん？」

「いやー……アカエイって、アンモニア臭？ がするとかで臭くって食べられないとか聞いて」

「いやそれは」

「違うのれす……間違っているのれすよはあとさん……!!」
「えっ」

と、ボクが割り込もうとしたその瞬間、七海ちゃんがゆらりと立ち上がった。

「エイさんもサメさんもいわゆる軟骨魚類と呼ばれてて身にアンモニアが溜まりやすい構造をしているのれす。釣り上げた直後じゃないとアンモニアが回って食べられないという俗説もあります……が！

このアンモニアは水溶性なのれす！ なのでちゃんとぬめりを下処理して煮物にすれば、コラーゲンたっぷりのぷるぷるの身を美味しくいただけるのれす！」

「な、なるほど……？☆」

言いたいこと言われちゃったよ。でも、七海ちゃんの言うことはだいたい事実だ。

刺身にするのは流石に無理だけど、スープに並んでるようなものであれば煮物にすれば十分食べられる。割と安いし。

コラーゲンたっぷりの身で骨からの身離れが良く、小骨もほとんどないからお子様でも美味しくいただける。加えて「副産物」も取れるので、あおぞら園でもボクが料理当番の時は時々買ってもらった。

難点はそれこそしゆがはさんみたく「エイ」って聞いた瞬間に拒否反応を起こす人が多いことと、やっぱり煮つけだから子供人気があるまりないことかな……。

「なるほど……うん、美味しいです！」

「こういう時みちるさんはフツに食べちゃうね……」

「コラーゲン……コラーゲン……はむっ。ん、意外とイケるな☆」

「小骨も無くって食べやすい……うん、美味しいです、氷菓ちゃん」

「ありがと、肇さん。で、次がシメなんだけど……」

「……まさか、アレれすか？」

「うん、アレ」

言って、ボクは四つの茶碗と白ごはんをみんなの前に置いた。

そして、そこに――。

「コラーゲンの多い魚って、煮込んだらコラーゲンが煮汁に溶け出して、冷やすと固まっちゃうんだ。これがいわゆる『煮凝り』ってやつ」「あ、知ってます！ 料亭とかに行くとき出て来たりするんですよ！」「美味しいですよね、煮凝り。鳥の皮や牛筋を使う方法もあると聞いています……」

「今回はアカエイを煮た煮汁を使うよ。これを切り分けて、ご飯の上に置いて……」

ほかほかご飯の上に置くと、勿論ゼラチン質の部分は溶けてしま
う。そして、溶けたものはご飯に染み込んでいくわけだけど……。

「更にその上に鯛の刺身（半額）をのせるね」

「!?」

「で、その上からだし汁をだばあ」

「!!?」

そうしてだし汁を注ぐと、淡い黄金色をしたつゆの中に煮凝りの濃
い茶色が混ざっていく。

一番上にあつた鯛の刺身は白くなり、独特の色合いが茶碗の中に広
がった。

ごく、と唾を呑む音が、周りから聞こえてきた。

「美味しそう……」

「ははーん。氷菓さん、七海をころころする気れすね?」

軽くサムズアップすると、それに続くようにみんなは無言で茶碗の
中身を口に運んでいった。

美味しそうに——下手するとかっこんでるんじゃないかって勢い
で食べ進めていくその姿を見ると、なんとなく嬉しくなってい
く。なんというか、ライブで笑顔になつてる人を見た時の感覚に似て
るのかな。幸せそうで、その顔を生み出すことができたことが嬉し
いっていうか。

やがて一番先に食べ終えた七海ちゃんが、ふとボクの方を見つめ
た。

「……おかわりもいいぞ……」

「ホントれすか……!?」

「いいぞ……遠慮せずに食べなよ……」

「じゃあはあとも☆」

「あたしもいいですか!? あ、肇さんはどうします?」

「いえ、私は遠慮しておきます」

柔らかな笑顔で自分の茶碗を指し示す肇さん。まだそこには半分ほどお茶漬が残っている。

でもみんな満足そうで良かった。作った甲斐があるってもんだ。

——さて。

「いやあ、満足れす……氷菓さんがお嫁に欲しくなるくらい満足れす……」

「ウチの妹はやらねーぞ☆」

「いつ妹になったんですか!?!」

お腹八分目ってところかな。七海さんは特にご満悦そうだ。

ところでボクはしゅがはさんの妹になったような覚えは無いんですがそれは。

……まあいいや。

「ただ今よりデザート配給を開始する!!」

「!?!」

「あ、やっぱり……」

驚愕する三人とは対照的に、肇さんはそれを想定していたと言うように涼しげだ。

……ま、三人驚かせることができたからいいか。

「というわけで。パイ食わねえか」

「パイですか!?! 食べますとも!」

「え、ちよ、今? マジ?」

「というか、パイって……確かに冷凍のパイシートを買っているのは

見かけましたけど、どうやって作ったんですか？」
「これ」

と、ボクはあいす○んじゅうを掲げて見せた。

「え？」

「……いや、あいすちゃん。アイスでどうやって作んのよ？☆」

「これ、外側はバニラアイスで、中はアンコなんだ。バニラアイスって、牛乳とバニラとお砂糖で作られてるよね。だから、この外側の部分をこそぎ落として鍋に入れて……卵黄を入れて、薄力粉で固めるとカスタードクリームができる」

「……あ」

「で、このカスタードクリームに粉末抹茶を混ぜて抹茶カスタードにして、取っておいたあんこと一緒にパイ生地に入れて焼けば……和風抹茶あんこパイの出来上がり」

「なるほど！……食べていいですか？」

「どうぞどうぞ」

「ふ〜ふ〜……んー！甘くて美味しい！」

「私もいただきます……うん、作り方が簡単なのに美味しい」

と、みちるさんと肇さんが食べ進めている一方で、しゅがはさんと七海ちゃんは少し渋い顔をしていた。

ああ——うん、この人たち、さっきのでお腹いっぱいになったな。多分。

「……タツパ持ってくるから、つめて☆」

「七海もお願いするれす……」

「あいよー」

ま、今日中に食べなきや腐るってものでもないし、冷蔵庫に入れておけば問題無いだろう。

明日のおやつ時にでも食べてもらえればそれでいいかな、ボクとしては。

「はー食った食った☆ ……どっこいしょ」

「はあとさん、どこかに行くんれすか?」

「いや……お腹いっぱい辛いからちよつと立つとこつて……言わすなよ☆」

いやそこはもうちよつと誤魔化してよしゆがはさん。

「いやあ、しかしこんなに氷菓ちゃんがお料理できるなんて、驚きました!」

「そんなに?」

「氷菓ちゃん、いつもあまり食べないですから……それこそ、少し心配になるくらいには」

うぐう。また自業自得か。

確かに食に興味ないって思われても仕方ないかもなあ……決してゼロってわけじゃないんだけど。

「あつ。そういうえば氷菓さん何も食べてないれす」

「……あつ!?!」

「い、いや、いいよボク、味見してたからそれでお腹いっぱいだし……」

「嘘こけ☆」

「いや、別に嘘ってほどでもなくつて……明日の朝胸焼けしちゃうかもだし……」

どうせもう深夜に差し掛かるくらいだから、そこまで食べなくても大丈夫なくらいには思ってるのは間違いないんですけど……。

「連行な☆」

「まつ……ヤメロー！ ヤメロー！」

「流石にそろそろ観念するれす」

「慣れれば胸焼けも起きずに済みますから！ 大丈夫です！」

それが慣れるのはいつになるんですか！

というか、胃の容積が大きくなるほど食べたらまた吐いちやうと思
うんですけど!!

……そんな訴えは勿論聞き入れられず、ボクは今日もファミレスに
連れ出されたのだった。

16：自縛と呪縛

「すき焼きだあああああああ！」

「YEAHHHHHHHHHH!!」

「ピヤツハーツ!!」

——20XX年！ あおぞら園は国産牛の歓喜に包まれた!!

海は枯れ（枯れてない）！ 地は裂け（裂けてない）！ あらゆる空腹は根絶されたかに見えた！

しかし、（肉にありつくことのできない）人類は絶滅していなかった!!

そう、ボクだ。

……ことの発端はほんの少し前。ボクは月に一万円以下の仕送りしか認められなくなって以来、他の方法を考えていた。

ある時、ふとよく考えてみたら「もの」に関しての制限は何も無いことに気付き、だったらちよつといいものを食べさせてあげるのはどうだろう、という考えに至ったのだった。

そして現在。どうせなら今までやったことが無いであろう、国産牛のすき焼きという贅沢を試してみた結果……ご覧の有様である。

もしかしたらボクはとんでもないことしちゃったんじゃないだろうか。飢えた獣にエサを与えてしまったというか。

すき焼きするぞと言って帰ってきたら大喜び。実物を目の前にすると狂喜乱舞。そして鍋の中身は見る間に消えてなくなった。

見る限り、子供たちはみんな満足そうだし……まあ、いいか。

そう思った時、はたと気が付いた。

——そういえばボク、結局何も食べてねえ。

残さず食べよお。お前も食べるよお。なんて言いながら配膳してたらもうそっちばかり優先していたせいだろう。我ながら間抜けな話だけど、もうしようがない。

手元にあるのは……しらすたきとねぎ、あと卵か。持って帰って、中華だしでも使って適当にビーフン風にでもすればいいか……。

後片付けを終えて、みんながのんびりとし始めているところで、ボクはお姉ちゃんに一言告げた。

「じゃ、ボク帰るから」

「ええっ!?! もう!?!」

「もう……っつて、ごはん作りに来ただけなんだから当たり前でしょ」

「もうちよっつといっても……っつていうか、ほとんど食べてないんだから

……あ、そうだ。おうどんくらい」

「いいよ、そんな手間かけなくつて。自分でなんとかするから」

「もつと甘えてくれていいのよ!」

「遠慮します」

「ええー!?!」

ここで甘えるのも悔しいし。

このままここにいとそれはそれで世話焼いてくるだろうし。

ボクなんかよりもちっちゃい子たちの面倒見てろつての。

「それじゃ、また」

「うう……またね……」

「ボクを外に放り出した張本人が何ダダこねてんの」

「だってえ……」

まあ、こうなってるのはあくまでこれ、ボクに嫌われたと思ってるからだろうな。

ここでお世話を焼いて挽回……っつていうのがこのバカ姉の目論見だろうけど、それは紛れもなく悪手だ。人間、過干渉されると逆に遠ざかりたくなるものだから。

名残惜し気に手を振る姉を横目に外に出ると、不意に庭に淡く輝くものがあることに気付く。

どうやら、園長先生が煙草を吸っているらしい。ボクが出てきたことに気付くと、先生は慌てて火を消した。

「別にいいのに」

「いやあ、アイドルさんの前で煙草を吸うのはどうかと思ってるなあ」

「……アイドルにさせた張本人が言えること？」

「……そういうかこれ、ボクさつきと同じこと言ってるじゃない？」

「ええい、この件に関しちや元凶が二人いるからちくしょう！」

「ははは……すまないね。だが、やっぱり親代わりとしては……もつと外の世界を見てほしかった、という思いがあるわけだよ」

「……だからってほとんど強制みたいにするなってるの」

ショック療法もいいところだ。場合によっては逆効果で、ボクだからギリギリ効いた、かもしれないくらいの調子だったのにさ。

「古宮コミヤのやつに海外に連れて行ってくれ、なんて言った時は、こりやすごい子になるぞと思っただもんだがなあ」

「十とおで神童、十五で才子、二十はたち過ぎれば只の人——だよ」

「十五にもなつてない子供が言うことじゃあないねえ」

「似たようなもんでしょ」

「……まあ、似たようなものかもしれないなあ。あの時を最後に、自発的にあれがしたいこれがしたい、って言わなくなったんだから」

「……そりゃあ、まあ。やりたいこと、無かったし。」

「どこの高校にいききたい、とか、何になりたい、とか……何にも言わんで、下の子の世話ばかりしているからねえ。助かるけど、だからって気持ちの良いものじゃあないんだよ」

「……そうかな？」

「そうさ。結局、古宮のやつも引き取ってはくれなかったしねえ」

「あれは……まあ、そうだけど」

古宮——昔、ボクが錬金術を修めるため世界を巡る中で、眼鏡を貰ったり命を救ったり救われたりした恩人。園長先生の友人で、その昔先生がボクを引き取ってもらおうよう交渉していたこともある。

が、古宮の爺様曰く、「海外を飛び回るのに付き合わせるわけにはいかない」とのことと結局断られた。ボク自身、あおぞら園にいたいから、という理由もあるけれども。

交流自体は今もあるけどね。日本にいる間だけは。

「もうちよつと子供らしいこともしてほしいと思うわけだよ、保護者としてはね」

「いや、アイドルは子供らしくないでしょ」

「そ、そうかあ？ ほら、キラキラしてて……よく子供たちがゲームセンターなんかでこう……」

「……あのさあ」

ダメだ、分かってない。

だいたい、先生の言ってるそれ、幼児向けのゲームじゃん。何故かやたら男性客の多いやつ。

そもそも芸能界なんて最も闇の深い業界と言っても過言じゃないんだ。346プロが偶然にも優良企業だっただけで、一歩間違えれば枕だのなんだのが横行してるんだから、もつと気を付けてほしかったよ……いや、言われるまま行っちゃったボクにも責任はあるんだけど。

「見通しが甘すぎるよ」

「そうかあ。いやーすまないすまない」

そうは言うけど、悪びれる様子は無い。今は成功してるからいいじゃないかと思ってるんだろうか。流石にそれは無いと信じたいけど。

「ただね、いつも思うんだよ。氷菓はいつも自分で自分のことを縛っている、って」

「はあ？」

いくらなんでもそんなDMじゃないぞ。

「自分で自分のことを、『こうあらないと』と強引に定めて、『こうしないといけない』なんて無理やりに考えてねえ。自縄自縛というやつだよ」

「そうかな」

「そうだとも。だから、殻を破る手助けをしてあげたかったのだけどねえ」

「他の子には絶対やるなよ」

「ははは、流石にやらないとも」

本当かよ……と思いつつも、まあ、他の子にはしないだろうな、とも少しだけ思う。

今回のことで懲りただろうし、何されても基本ぼんやりして曖昧な反応ばかり返してるボク相手でもないし、こんな強引なこととはできないだろうし。

「もし辛いことでもあれば、いつでも帰っておいで」

「……大丈夫だよ。みんな優しいから」

優しく頭に手が載せられるのを、今回は振りほどかずにおいた。

気が済むまでさせておこう——そう思っていると、不意に園の方からかしやり、という音が聞こえてきた。

よもやあのバカ姉、こんな恥ずかしいシーンを撮ったんじゃないだろうな。

やりかねん。後で……というか、後日苦情を突っ込もう。できるだ

け冷たい口調で。

「……それじゃ、ボクもう戻るから」

「ああ、そうかい。気を付けてな」

「うん」

手を振って見送る先生に手を振り返す。

相変わらずのみんなだけど、それがなんというか……まあ、安心する、というのかな。

……変わらなすぎて逆に少し心配にもなるけども。

@ —— @

翌日、ボクたちエリクシアの三人は別個にプロデューサーに呼び出されていた。

なんでも、今後の活動について詳しく話したいとのことだ。他のみんながいるといけなくてわけじゃあないと思うけど、個別に話しておかないとちゃんと理解を得られるか不安な話もあるし、三人の意見をちゃんとまとめておかないといけない部分もある——とのことだ。

「——ということ、だいたい三週間後くらいに500人程度の規模のミニライブとトークのイベントを開催する予定なんだけど、みんな、どうかな」

「どう、っていうか」

「そこは何も異論はないぞ、助手」

「ん、そうかい？　あまり時間的な猶予も無いと思ったんだが……流石だな、みんな。それじゃあその方向で調整しよう」

「あいあいさー♪」

三週間ちよつと……だけど、ボクたちも先のライブが終わってからというもの、レッスンは欠かしていない。三人で歌える共通曲の数も

増えている。

ボクの体力もそれなりについていきいているし、ミニライブの間くらいなら十分、もたせることはできるだろう。

「セットリストはもう出てるの?」

「暫定的にはね。編成は6曲で……曲の途中で一度は休憩を入れる。全曲終わったらトーク。その後は物販で手売り……って流れになるかな。白河さん、大丈夫かい?」

「休憩入るなら問題無いよ」

「そっか、オーケー。セットリストだけど、一曲目に『輝く世界の魔法』、五曲目に『PフューH@SズE⇄SシHフIトFトT』、6曲目に『お願い!シンデレラ』を予定してる。みんなに決めてもらいたいの、この2曲目から4曲目までになるんだけど……どうしたい?」

なるほど、そういう趣向ね。

ちようど三曲分の空きがあるってことは、一人一曲意見を出し合えばいい、ってことではあるけど……。

「あたしはー……『Near to You』とかどうかな?」

「オーケー、『Near to You』だね。白河さんと池袋さんはどうしたい?」

「ボクは『Frost』で。ドラマの主題歌だし」

「ん、『Frost』……は、許可が要るかもしれないな。ちよつと聞いてみよう。万一ダメならどうする?」

「その時は『Take me☆Take you』……かなあ」

……Youとyouでユーが被っちゃったな。いや別にいいけど。許可取れてFrostが歌えるようなら被りは無くなるし。

「晶葉は何がいい?」

「『ツインテールの風』だ。そして無論——氷菓もツインテールにして

もらうー!」

「!?」

「お、いいね。それ採用」

「え、ちよ、ちよつと待った! ツインテ!? ボクが!?」

「にやはは! ほーらツインテール♪」

「うなああああ!」

後ろでボクの髪を握ってぐりぐり動かしている志希さん。やめろ
とは言いい辛い、だからって全部許容できるほどボクの器も大きくな
い。

というか、ツインテールにするならボクだけじゃなくて志希さんも
——と思っただけ、そういや志希さんライブの時はツーサイドアップ
じゃん! 広義じゃツインテールじゃん! ここで髪型変えるのボ
クだけじゃん!!

「何か嫌なのか?」

「嫌っていうか……ずっとストレートで通してきたのに急にツイン
テールになると……子供っぽい感じがして……」

「おい私のことを馬鹿にしているのか」

「いや晶葉はずっとツインテールじゃん。急に髪型変えると、って話
だよ」

「だいじょーぶだいじょーぶ似合ってる似合ってるー♪」

「うぐぐぐぐ」

か、仮にやるとしてもまずはポニーテールからとか……無理か。曲
の主題的に考えて。

「……おさげじゃダメかな」

「おさげか……まあ、それも広義にはツインテールだな」

「3人それぞれ違うタイプのツインテールっていうのも面白いかもしれ
ないね。じゃあ、池袋さんをセンターに、バックに2人を置かた

ちで行こうか？」

「……………」

「……………」

その瞬間、ボクと志希さんの視線が交錯した。

そして、どちらからともなく手が差し出される。ボクは握りこぶしを、志希さんは――。

「勝ったー！」

「くっ……………」

……………パー。つまり、ボクの負けだ。

「いや、何してんの」

「じゃんけんだよ。どっちが信長パート歌うか」

「信長……………？ ……あ、ああ……………」

晶葉の提案した「ツインテールの風」の中では、特に理由なく何故か唐突に織田信長が登場する。

歌詞通りにこの信長は眼鏡をかけさせられているのだけど、あんまりにもこのインパクトが強すぎるおかげで、そのパートを歌う人の印象が薄れてしまうわけだ。

全体曲として最初に歌っていたのは、小日向美穂こひなたみほさんと城ヶ崎美嘉じょうがさきみかさんと奏さんだ。資料映像を見た時、この三人のうち奏さんがこのパートだったのだけど――見事に印象が信長で上書きされてしまっていた。

決して奏さんが悪いわけじゃない。曲自体は見事に歌い切っていたし、パフォーマンスも綺麗だった。ただあの戦国フリー素材こと織田のノツブが強すぎるんだ。これが困る。ボクでは薄すぎて勝負にならない。

「ま、まあ、そういうことなら、それで構成を考えてみよう」

「うむ、任せたぞ助手」

「ああ。こうなると、曲順も修正しないといけないかもしれないな……」

セットリストと曲の構成はプロデューサーに任せておけば大丈夫だろう。なんだかんだ、あれで結構な敏腕だし。

あとはボクたち三人のパフォーマンスの問題だ。と言っても、前回のライブからレッスンも重ねてきたし、そこまで不安は無いのだけど。

「ああ、そうだ。ところで、ライブに向けて……というより、今後のことも考えてなんだけど、いいかな」

「何さ藪から「ステイック」に」

唐突にルー語を差し挟んだ志希はんにんさんを見る。

即座に目を逸らされた。

「みんな、Twitterってやってるかい？」

「やってない」

「キョーミなっしーん」

「私はやっているぞ」

「え、そうなの？ 見てもいい？」

「ああ、いいぞ。これだ」

と、差し出されたスマホには、「天才ロボ少女」なるアカウントが表示されていた。

……事実上ほぼ実名では？

「……これ大丈夫なやつ？」

「大丈夫だろう。多分」

「あんまりにもわかりやすいから会社の方で一度点検したけど、問題は特に無かったよ」

「……だそうだ」

バレバレってことじゃないですかやだー。

でもまあ、問題発言なんかが無かったんなら、それでもいいか。

「実は、プロジェクトメンバー全員分のアカウントを作って広報活動に役立てたいと思ってるね。どうかな？」

「全員は難しいんじゃないかにやーん？」

「こずえちゃんとか、芳乃さんとか……」

「そ、それはまあ……そうだけど」

芳乃さんはそもそもスマホを持ってるかも怪しいし、こずえちゃんはずもがな。イヴさんもちよつと怪しいかもしれない。なんだから、あれよあれよと変なことに巻き込まれてそうだな。

「志希ちゃん飽きたら放置プレー決め込むだろーしなー」

「その時は俺の方で告知だけ流すようにするから、それはそれで特に問題は無いよ」

本人の眩きが無くて告知とイベント案内ばかりのアカウントか……それはそれで、連携してしまったサイトの広告を延々吐き出し続ける放置アカウントみたいでなんだかなと思わんでもない。

「公式アカウントってだけで定期的にチェックする人もいるだろうしね。単にホームページなんかに掲載するよりは、よりネットユーザーに近いSNSの方が効果は高いと思うんだ。どうかな？」

「うーん……ボクはちよつと。あんまり賛成はできないかな」

「あたしはどっちでもー」

「反対1中立1、か。池袋さんは？」

「私はやってもいいと思うのだが」

「見事にバラけたな……」

そりやインターネットに対する見解がそれぞれで別れてるんだから、賛成も反対も分かれるだろう。

しゅがはさんなら賛成するだろうし、頼子さんやクラリスさんと中立の立場に立つ。泉さんとマキノさんは情報に対する意識が強いけど、それはそれで賛成と反対で意見が分かれそうだ。

「まあ、会社の方針なら従うけど……それならそれで、リテラシーとかネットマナーとか、それなりに管理してくれるんだよね？」

「ああ。システム部で作ったフィルタリングや検閲ソフトがあるし、返信は先にこつちで確認してからみんなが見ることができる形式にする予定だ」

「ん」

基本、こういうツールは即効性がウリなんだけど、その一方でその即効性の高さが災いして問題が起きてるって部分もある。

思ったことを即座に発信できるわけだから、変なことを言っちゃったらそれがそのまま全世界に広がることになる。本当にちよつとしたことで大炎上が起きかねないのがSNSの怖いところだ。

それに、いくら使う本人が気を付けていても、失言を引き出そうしたり、恣意的しいてきに発言を歪めるような輩も中にはいる。

もちろん、色々な人と交流できるいいツールではあるんだけど……やっぱり、はたから見てる分には悪い面が目立っちゃうからなあ。

「とりあえず、まず三人で試験運用ってことにしてくれるかな」

「人柱ってわけだな」

「いえーいヒューマンサクリファイ」

「人聞きの悪いことを言わないでくれるか!？」

「でも事実じゃん」

「くっ……」

でもこういう人柱がいるからこそ後に続く人たちが便利に使え
るって部分もあるからね。仕方ないね。

あえて言うならどっかの窓社みたいなものだ。より直接的に言う
なら窓10。

「……まあ、そういうわけだからしばらく使ってみてくれ」

「あいよー」

——ということで、ボクと志希さんは今回Twitterデビュー
することになった。

……わけなんだけど。

「これって何すりゃいいの？」

「さあ？」

「全然わからん。私たちは雰囲気ですイッターをしている……!」

まず前提として、ボクはこういうサービスを利用したことがほとん
どない。

晶葉は経験者と言えるだろうけど、いざ「アイドルの池袋晶葉」と
して呟こうと思ったら、また勝手が違ってくる。志希さんは言わずも
がな。なので現状、ボクたちの中の誰も勝手がわかってないという状
態に置かれてしまっていた。

「とりあえず、最初は挨拶かな……」

何にせよ、何事にかけても挨拶が重要だという話もある。

とりあえず……文面としてはこうかな。「はじめまして。本日より
Twitterを始めました、新人アイドルの白河氷菓です。よろし

くお願いします」……かな。

「なんだこのクソお堅い文面は」

「えっ」

「つまんにゃー」

「ええー……」

二人してひどくね？

「この界限、面白いことを言わないと訴求力が低くて見向きもされなくなるのだぞ。私にも覚えがある」

「なんて嫌な実感のこもった言葉だ……」

「一応は我々も女子中学生なんだぞ？ ここはもっとハートマークを入れたり感嘆符『！』を入れたりだな……」

「逆に聞くけど、晶葉はそれができるの……？」

「……無理だな、すまん」

「だろうね」

ボクと晶葉に女子中学生らしさを求める方が間違っている。

そんなことはお互い分かっているはずだろうに。

……いやそこで分かっているからってやらない方もそれはそれでどうかと思うけど。

「どうせプロデューサーに言ったら『自分らしく』って言うんだ。これでいいよもう」

「うーん……まあ言われてみればそうだな」

「でもにゃー。なんかこれ飽きた」

「いくらなんでも早いよ!?!」

「だってそんなに頻繁にツイートすること思いつかないしー。あ、そうだ。パシヤー」

「ん?」

『氷菓ちゃんと晶葉ちゃんです♪』つと

「え、ええ……」

勝手に撮られた上に勝手にネットに上げられちゃったよボクたち。
いや、そもそもアイドルなんだからこのくらいアップされてもいい
けど……。

「ふんふん、これで反応が来るかどうかってトコかにやー」

「来ないんじゃない、流石に……ただのオフショットでしょ」

「んーでもないねー。あ、来た来た。すっごい勢いでRTリツイートされてる
ねーにやははー」

「にやははじゃないって……ん？」

「どうした？」

「いや、なんかスマホがすごい勢いで鳴っ……ふおっ!？」

「ど、どうし……うおう!？」

……え、エライ勢いで通知を受信し続けている。

これは……フォロワーの通知、だろうか。リプライとリツイート、
それから「いいね」が凄まじい勢いで……。

「あ、そ、そうだ。通知消しとけば……」

「う、うむ。しかしこの勢いは……」

通知を消したことでスマホがいちいち鳴動することは無くなった
けど、それでも見る間にどんどんフォロワーが増えていくのが分か
る。

シンデレラプロジェクトの先輩たちにはまるで及ばないながらも、
それはそれとしてかなりのものだ。ちよつと増えるペースが劇的過
ぎたせいか恐怖すら感じる。

「な、なんだか眩かなきやいけないような強迫観念に駆られるんだけ

ど……」

「う、うむ。何だろうなこの感じは……」

「ところでー『なんで氷菓ちゃんそんなクソダサTシャツなの？ 罰ゲームなの？』だってー。にやはははー」

「——あ、そうだ。いつものことすぎて忘れていた。氷菓、そのTシャツダサいぞ」

「ついでのように罵倒ぶっこんでくるのやめてくれる？」

「いや、いくらなんでも筆文字で『失樂園』はダサいだろう」

バんなそ力な。

「うーむ、しかしこうなると、俄然何を呟けばいいのか分からなくなってくるぞ……！」

「晶葉は発明品のことでも呟けばいいんじゃないの……？」

「むっ、それがあったか！ なるほど、それならネタはいくらでもあるな……！」

思いついてなかったんかい。

……でも、まあ、灯台下暗しとも言えるか。気付いてなかったんならそれ以上指摘するまい。

「氷菓と志希はどうするんだ？」

「あたしはねー。今みたいにテキストに面白いことがあったらツイートする感じかな♪」

「じゃあボクは……どうしたものかな」

適当に先輩たちのツイッターを開いてみるけど、そう簡単に参考にしたりするようなものは見当たらない。中にはそれこそ告知以外ほぼ放置しているものもあるし。

憧れの……って意味だと、楓さん、だけど……どこそこの居酒屋に行ったら、誰と一緒に酒飲んだ、今日はワインです、今日は焼酎です、

芋もいいですけど米もいいですよね……。

お酒のことばかりやんけ。

他の人だとうだろう。

春菜さん……は、自分の眼鏡のこと、眼鏡ショップに行ったこと、この人にはあの眼鏡が似合いますよね……。

比奈さんはこれアイドルのTwitterじゃないな。同人作家だなこれ。メ切近い日になるとちよつと頭のネジが飛んでる眩きが見られる。

輝子さんなんかは、ほぼきのこの観察日記だ。あなた本職か何かですか。普通にタメになるツイートが結構あるぞ。

他にも色々いるけど、やっぱり流石の346プロ。見事なほどに個性的な眩きばかりだ……。

「極端なことを言えば、その日食べたものでもいいと思うが」

「ああ……なんか、いるよね、そういう人」

今日の朝ご飯はスムージーです、とか、今日の晩御飯はどこそこに行っちゃいました、とか……インスタ映えだっけ？ そんな感じのものを食べてSNSに載せるっていうのはよく聞く。

ただ、ボクの食事なんて見て面白いと思う人なんていないだろうって問題はあある。

「ちなみに、今朝は何を食べたんだ」

「おにぎりセット」

「それ前も言っただけだったか!？」

「いや、だって別に困らないし……」

活動に必要な最低限の栄養は摂取できる。なら、最適解が一番安いものを選ぶことだと思う。

資本主義のこの日本、生きていく上でお金があるに越したことは無い。最低限が足りてるなら問題無い……というのがボクの見解なん

だけど。

「お昼はー?」

「たまごサンド」

「……なあ氷菓。もしかして君は拒食症か何かなんじゃないのか?」

「いや、違うよ!」

いや、流石にそれは……それ、は……?」

……うん?」

「いや、あるかも」

「あるのか!」

「ちよつと理由が違うけど」

「あるんだ……」

一種の呪縛だ。良いものを食べ過ぎた人間は精神に贅肉がつくだとか、そんな理由で食事を制限するために精神と肉体を縛るためのマジックアイテムが使われた覚えがある。許容量以上を食べると戻したり気分が悪くなったり下したりするみたいだ。

一度死んだとはいえ、ボクの精神はその時の「僕」から継続しているわけで、未だにその効力が続いてたとしてもおかしくはない!

く、くくく……クハハハハハハハ!! やつてくれやがったなああの毒親めがあああ!!」

「晶葉、志希さんも。今すぐマツク行こう」

「は!?! 何でそんないきなり藪から棒に!」

「んーなんか掴んだの? じゃあオツケー♪」

「ええっ!?! な、何でだ!?!」

そもそも明らかにおかしいのはおかしいんだ。みんなから食べたらどうかと言われる中でも遠慮したり下の子がいるわけでもないの

に必要最小限でいいと考えてみたり。レツスンがあるんだからカロリー的にもそれはありえないだろうに。

霊的領域に接続^{アクトセス}、前世から続く呪いや祝福と言った類のこちらの世界の法則と異なる摂理をオールカット。

瞬時に脳が空腹を理解し、次第にお腹が鳴り始める。胃の運動も抑制されていたのかもしれない。

何はともあれ――。

「――答えは得た。今ならビッグ○ツクにポテトのLサイズでもいける気がする」

「いや何でそんないきなりだ!？」

「拒食症って精神的な問題なんだよね。晶葉ちゃんの一言で何か吹っ切れたってことでしょー♪」

「私は別に特別なこと言っていないよな!?! なあ!?!」

おーい、と叫ぶ晶葉を他所に、今度こそ吹っ切れたボクは二人と一緒に近所のマックへ向かうのだった。

なお、枷が外れたところでそんなすぐにもりもり食べられるほど胃の容積は大きくなかったことを記しておく。

17：おにおこ

「ふう……」

朝の346カフェは人が少ない。

カフェに面した道の往来も多くはなく、ゆったり、のんびりとした時間を過ごすことができるいい場所だ。騒がしいことは嫌いじゃないけど、たまにはそこから離れたくなることもある。

ああ、それにしてもカフェオレが美味い。前世のクソ親の呪縛を断つてメシウマ状態である。文字通りの意味で。

今日は奮発してBLTサンドとか頼んじゃうぞーあつはつはつはつは!!

「ふうふう……」

おつと声に出してしまった。

でも、何にせよ嬉しいことには変わらないからね。

今までは他の人が美味しそうにしてるのを見ると嬉しい、だけだった。これからは、ボクも一緒に美味しいものを食べることができて嬉しい、が加わる。嬉しさ二倍どころじゃない。二乗だよ二乗。

相変わらず胃の容積が小さいおかげでぶつちやけこのBLTサンド食べたらお腹いっぱいだけ。

……まあそこはそれ、いざとなったら胃の内容物を分解すれば入るしね。うん、一定以上のものを文字通り口に入れることができなかつた今までと比べると上々だ。

と、内心でほくそ笑んでいると、ふと店内に入ってくる影が二つある。あれは……。

「……ん？ あれ、珍しいツスね」

「あ、ほんとだじえ。おーい、氷菓ちゃん」

比奈さんと……大西由里子おおにしゆりこさんだ。

「同じ年ということもあつてたまに見かける二人組。似た趣味のおかげで仲が良い……うれしい。」

「おはようございます比奈さん、由里子さん」

「おはよう。どうしたんツスカ？ カフェで軽食なんて……」

「色々ありまして、最近ようやく食事が入るようになってたんですよ」

「お、おおう……？ それ、結構重い話だじえ……？」

「……ん？ あ、いや、すみません。違うんです。そういう意味じゃなくって！」

しまった、本来の意味での拒食症と思われてしまったかもしれない。い。

顔の前で軽く手を振って否定すると、二人はほっとしたように軽く息を吐いた。

「お腹の調子が悪かったのが治ったんですよ。そんなわけで、これからはどんどん食べられそうで」

「へえ、良かったじゃないツスカ！ それじゃあ快気祝いにお姉さんが何かおごつてあげるツス！」

「あ、いや、そこまでしていただくほどじゃ……というかこれでお腹いっぱいなので」

「それでも少食は少食だじえ……」

「胃の容積は変わらないですから……」

「まあ、氷菓ちゃんちっちゃいツスカからねえ」

「でもこれからは食べられるように頑張ります！」

「いや食事なんだから頑張るってほど頑張らなくていいツスよ……」

でも口は小さいし胃も小さいし、食事の時はちよつぷり頑張らないといけないのは確かだ。

白河水菓、頑張ります。なんつって。

「お二人も食事ですか？」

「アタシは比奈ちゃん見つけてついてきただけだけど」

「まあおおむねそんなとこッス。外に出て頭休めないと……」

ああ、そういえばT w i t t e rの方で比奈さん原稿ヤバいみたいなこと呟いてたな……けど、5月って何か大きなイベントやってたっけ？

いや、ボクが知らないだけで多分何かあるんだろうな。多分。もしくは番組収録とかそういう類。

「ペン入れとかならボク、手伝えますけど」

「そりゃ助かるツスけど、氷菓ちゃん絵描けたんツスか？」

「比奈さんの絵柄コピーすればいいんですね。それなら多分1ペー
ジあたり30分くらいで……」

「は？」

「え？」

「は？」

「えと……え？」

「……描いてみてもらっていいツスか？」

「え、あ、はい」

差し出されたスケッチブックを受け取り、そこに適当に漫画のキャラクターを描いていく。

ものの数分で元の漫画のそれとほとんど変わらないタッチの絵が描かれた。

「これだけ出すんでアシやんないツスか？」

「比奈ちゃん!!」

「ぬあつ……ぶない！ 冗談ツス！ 本気にしないで！」

「え。あ、はい」

「いやでも割り増し入稿のこと考えたらこれでも安……うう……」

比奈さんがすごい勢いで自分の中の何かと葛藤している。

別にお金いただかなくて……とは言えない雰囲気だな……。

「ところでこの漫画の同人本って頼んだら描いてくれたりする？

ネームはユリユリが出すから」

「由里子ちゃん!!」

「うおおおおお!! あ、危なかったじえ……ほ、本気にしないで、氷菓ちゃん?」

「え、あ、はい」

「でもやればできるってんなら夢のカラミが見たかったじえ……ああ遥かなるソドミー」

何だ。何を描かせようとしたんだ。

どういう方面の沼だ。ボクは何を描かされかけたんだ……!?

コワイ!!

「そ、そういうえば最近氷菓ちゃんツイッター始めたらしいツスけど、どうツスか? 困ってることとかないツスか?」

露骨に話題変えに来たな!

いや、別にいいけどさあ……いいけどさあ!

「ツイートする話題が無いってことですかね」

「ああ、初心者にありがちな話だじえ……」

「別にその辺は何でもいいツスよ。氷菓ちゃんはちよつと堅苦しく考えすぎツス」

「そうですか?」

「うんうん。そういう時はちよつとアンテナ広げてトレンド見てみた

り、先輩と絡んだりしてみるのもいいじゃない？」

「アタシは絵描いたりして上げてるツスけど……それは特殊な事例ツスカねえ」

「あと、他の人のツイートツイートRTして、それを題材に話を膨らませるのもアリかも！」

なるほど。メモメモ。

流石ツイート数10万越えの二人だ。タメになるなあ。

由里子さんは鍵かけてるから内容は見えないけど。

「あとは……ソシヤゲツスカね」

「ソシヤゲですか？」

「話題性はやっぱり拔群ツスから」

「ただ、あれは……マジモノの沼だじえ」

「沼」

「死ぬじえ……甘く見てたらみんな死んじまうぞお……」

た……確かに、ソーシャルゲームの集金構造は危険だみたいな話は聞いたことがあるけれども。

百戦錬磨の比奈さんと由里子さんがそう言うつてことは相当なものなのは間違いないんだろう。

「自制心が強いなら面白いゲームとしてプレイできるツスけど、課金が我慢できないと……」

「が、我慢できないと……?」

「闇に飲まれるツス」

「やみのま……」

「やみのま」

「預金と、人生が」

こわっ……。近寄らんとこ。

と、戦慄する最中、不意にスマホが鳴動した。

「……ん？ あ、ちよつとすみません」

「どうしたんツスカ？」

「いえ、何か通知が。プロデューサーからだ」

どうやらプロデューサーからのメールのようだ。

文面は……「これ、どういうことだかわかる？」

同時に添付されている、Twitterのものらしきスクリーンショットを開くと、そこにはボクのアカウンドに向けてのリプライが表示されていた。

……「週刊誌の噂は本当ですか？」……？

首を半ひねり。週刊誌に載るようなこと、ボク何かしたっけ？

多分これ、ボクへのリプライを点検している時に見つけたのだろうけど……プロデューサーにも心当たりがないようだし、ボクにも心当たりはない。そうなる、はて困ったぞ。とりあえず、近くにいる人に知恵を借りるべきか。

「比奈さん、これ、どういう意味だろ？」

「……ちよつと待ってほしいツス」

言つて、比奈さんは小走りですぐ近くのコンビニに向かつて行つた。

数分ほどして一冊のゴシップ誌を片手にこちらに駆けてくる。思わず、由里子さんと一緒に首をかしげた。

「氷菓ちゃん、スツパ抜かれてるツス」

「え」

「ちよちよ、ちよつと見せ……マジだじえ……」

え。何すつぱ抜かれ……どういう意味だっけ。

あ、そうだ思い出した。スキャンダルをスクープされたってことだったな――。

「んなバカな」

「いや、これ……多分、違うとは思うツスけど……」

眼を皿のようにして、差し出された雑誌のページを見る。と、そこには大きな写真と共に「346プロ新人アイドル、深夜の密会か!？」と書かれていた。

そこに使われている写真は、こないだ帰ってすき焼きを御馳走したその晩、こつちに帰ってくる時に先生と話していて、頭を撫でられていた時のもので……。

ははは。

ははははは。

ふはははははははは。

「はははははははははは」

「あ、あははははは……だ、大丈夫ツスか? 氷菓ちゃん」

「大丈夫ですよ。これ、ボクの保護者です」

「まあそりやそうだろうじえ……」

「こつちの建物は……?」

「実家です」

「ツスよね……」

「いわゆる飛ばし記事ですね。意外と……こういうのに釣られる人、いるんですね」

「……あの、大丈夫ツスか、氷菓ちゃん。目がなんていうか、道バタに落ちてるガムの吐きカスでも見るみてーな冷たい目になってるツスけど」

「そりやあ、なるでしょう。普通」

……だいたい裏は読めてきたけど、まずはちゃんとプロデューサー

に連絡して……あとは、クラリスさんがいれば話は通じるか。
ふふふ、面白くねえのに笑いが出るってこともあるんだね。

サンドイッチを口に放り込んで………大きくて放り込めないや。

ちまちま食べて、カフェオレで流し込………あっつい!!

……氷で冷ましてパンを流し込む。

比奈さんと由里子さんがものすごくはらはらしてこっちを見ていたのが分かった。

「ちよつとプロデューサーと今後の対応についてお話してきます。ありがとうございます」

「あ、はいッス……」

「が、頑張つてね……」

……最後の最後までしままないボク。

そして、数分ほどして、プロデューサーオフィス。

クラリスさん呼び出した上で例の雑誌を机に広げ、プロデューサーに検分してもらったわけだけど……。

「つてワケなんだけど」

「……マジかー」

当然のように、プロデューサーは頭を抱えていた。

そりやそうなる。誰だつてそうなる。普通、こんな始動直後に厄ネタ抱えるなんてねーよ。

クラリスさんも神妙な顔で話を聞いていた。

「……どう思う、プロデューサー? 明らかに飛ばし記事だけど」

「このクラスの週刊誌ならそう簡単に信じる人はいないだろうけど……有名なアフィリエイトブログにでも載つたらことだしなあ……」

Twitterもそうだけど、ネット上の有名人が発信した情報というのはかなりの力を持つ。

拡散されれば公式が否定したとしても疵きずは残るし、噂が消えるまでにはそれ相応の時間も必要になるだろう。

そもそも、そういう噂を発信した側がそれ以降一切の声明を発表しないということもありうる。腹立たしいことに、基本、こういうのは加害側が一方的に得をする構造になっているのだ。

「記者は……ヒルカワか。まったく、やってくれるよ」

「知り合いなのですか？」

「いいや。ただちよつと346プロの中で有名つてだけ。フェイクニュースと偏向報道の専門家だよ。イエロー・ジャーナリストっていうかネガティブキャンペーンの最大手つていうか……だからこんな三流誌にしか……つと。ごめん」

「いいえ。それで、根津様はこれからいかなさるのですか？」

「こういう事例が無いわけじゃない。まずは法務部と相談して具体的な対応を検討する。けど……法的措置は難しいだろうね」

他にもよくある話だけど、こういうネガキャンつてのは、断定を避けることであらかじめ逃げ道を作っていることが多い。

それだけじゃなくて、法的措置を取るとなると事態が長期化して、裁判のための費用などで結果的に損害を被る、ということもある。だから被害者側が泣き寝入りする他なくなる、というのも現実の問題としてあるのだけど……。

「これさ、ウチのプロジェクト潰しに来たんじゃないの？」

「可能性はあるね」

「……そのような可能性が？」

「ああ。346プロはここ二年の間にシンデレラプロジェクトやクローネが次々とプロジェクト単位で成功を収めている。次はスター

ライトプロジェクトがそれに続くよう！……つてところで、出鼻を挫くようにこんな記事を載せたんだ。実際、この記者も同業他社との関係が噂されててね……」

その会社からお金を貰ってこういう記事を書いてたとしても、違和感は無いか。

「……と言っても憶測だけだね。確証がないっていうのも事実さ」

うんざりしたように、プロデューサーは天を仰いだ。

「とりあえず、当面はこの件は俺……というか、346プロに任せてほしい」

「……ま、他に手も無いしね」

「しかし……もしかして氷菓さん、今回私を呼んだのは……」

「うん。流石に隠しきれられるものじゃないし、そろそろ施設のこと、みんなに話した方がいいのかと思って」

「……なるよなあ、そういう話に」

「ここまで写ってちゃ流石にね。もしかすると読者の中には施設のことを特定する人もいるかもしれないし、公表することも視野に入れなれないといけないかも」

「確か、住所や家族といった情報は公開していらっしやらない……という話でしたか」

「白河さんの意向もあるけど、ミステリアス系としても売り出す方針だからね。ただ、こうなると流石に少し……」

「撮られてごめん、プロデューサー」

「いや、こればかりは気を付けてなんとかなる話でもないから……この手の連中は何しても悪い方に書くから」

そしてこちらからどうのこうのすること自体が非常に難しいと。

しかも肩書としてはフリーのジャーナリストだから会社が潰れた

ところでそんなに痛くないという。

ハハッ、クソゲー。

「施設のことに関しては、私はそれでも良いかとは思いますが……」
「俺は……ちよつと安易に賛成はしがたいかな。仮にやるとしても、プロジェクトの仲間内にだけにしといた方がいと思う」
「ん……」

となると、プロデューサー案が一番現実的かな。

とりあえずは晶葉と志希さんあたりに言ってみて反応を見て……つていうのがいいかもしれない。

「この件に関しては公式に声明を出してきつちり否定する。この段階ならまだ沈静化が見込めるはずだ」

「うん。ボクの方でもT w i t t e rか何かで否定入れといった方がいい？」

「リプライで聞かれたら否定しておく、くらいに留めておいてくれ。ここで変に長文で喋ったらそこから付け込まれる可能性がある」

「分かった。ところでプロデューサー。この件、手引きしてるとしたらどの会社になるかな」

「ん……？ ……何か企んでない？」

「ううん、別に。今後の参考のために聞いておきたくて」

「氷菓さん、目が据わっておりますわ」

「気のせいだよクラリスさん」

「……リストアップすると、こんなところかな」

言つて、パソコンの画面をこちらに向けてくるプロデューサー。

一つ一つメモを取るのは流石に面倒だな。写真でいいや。

流石にプロデューサーの言うことだし、的外れつてことは無いだろう。あとは一社一社調査してしまえばいい話か。

「確認なんだけど、346プロを警戒してる他の会社が、プロジェクトを潰すために手を打ったってことでもいいんだよね？」

「うん……でもね」

「いいんだよね？」

「はい」

「根津様、もう少しお強く……」

「か、確証がないのに動くのはどうかと思うな？」

「動くとは一言も言っていないし確証なんて見つけりゃいいだけでしょ」

「はい」

「根津様」

貧弱貧弱ウ。

往々にして男性というものはキレた女性に弱いものである。

「氷菓さん、少し落ち着きましたよう？」

「ボクは冷静だよクラリスさん。そもそも、ただの女子中学生がこれ、どうにかできると思う？」

ボクは冷静だ。

少なくともこの場合はプロデューサーに対応を任せるべきという判断もできているし、それに——そう。この状況で下手な動き方をすればこの件の仕掛け人のみならず、それ以外の人にまで被害を与えかねないということも理解している。
分かっていても。

「……冷静だよ、ボクは」

「明らかに目が死んでるんですがそれは」

「冷静だよ」

困惑する二人を置いて、部屋を出る。少し乱暴に扉を閉めてしまっ

ただろうか。すこし、申し訳ない。

けど、スイッチが入ってしまった。数年前、施設のためにお金を集めると決意したその時に一度入ったきりのスイッチ——こうなると、もうボクは止まらない。二度の人生で、二回目の我儘^{わがまま}だ。

ボクだけを狙うのならともかく、先生を巻き込んだこと、それだけは必ず後悔させてやる。

@ —— @

それから、数日が経った。

例の件はプロデューサーと346プロの迅速な対応が功を奏したのか、少なくとも目に見える範囲においてはすっかり沈静化しているようだ。

美城専務が毅然と「法的措置を取る」と宣言したことも良かったのだろう。その記事が事実無根、真つ赤な嘘だと世間に認知されてしまえば、関心も失われる。

それ以外にも主だった原因はあるけれど、それは今は横に置いておく。

今、語るべきことは——。

「……………」

「……………」

やけにいたたまれない雰囲気醸し出している晶葉と志希さんの二人について、だろう。

この発端は数分前、例の雑誌を手に件のスキャンダル——とかここに載っている写真について志希さんが聞きに来たところまでさかのぼる。

前日までに、芳乃さんへ家庭のことをバラすタイミングについて相談していたボクは、「聞かれた時に答えるとよいでしょー」という助言に従って、じゃあもうこの際だから全体像まで言っちゃおう、となっ

て真相を喋ったところ、志希さんは聞いたその姿勢で固まり、晶葉は苦虫を噛み潰したような渋い表情で、眉間に皺をよせていた。

たっぷり、二分ほど経っただろうか。前世で鉛を飲まされた時のことを思い起こすような重苦しさで、晶葉が口を開いた。

「そういうことはもっと早く言ってくれないか……!」

「メンゴ★」

努めて明るく返答して見ると、晶葉の額に青筋が浮いた。

「……おこ?」

「おこ♥」

「ごめん」

マジギレ手前っすね。

うん。ホントごめん。

「いや、うん……ごめんって」

「ふんっ」

っーんと顔を背けられてしまった。

へソ曲げられちゃったな……。

「でもさ、何でそれで海外行けたのん? ていうか何で?」

「当時は若くお金が必要でした」

「茶化すな」

「ハイ」

「で、何でだ」

「いや、施設の存続のためにも、お金が必要だったんだよ。だから先生の友達に頼んで海外に行つてさ」

「うむ」

「その時に錬金術を修めて」

「少し待とうか」

「何さ」

「ちよつと話が飛躍しすぎていて追いつかないぞ!」

「この突飛な発想……やはり天才か……」

何で志希さんは急に満足げにニンジャポーズをし始めたのだろうか。

「で、それでどうやってお金を集めていたんだ」

「その先生の友達っていうのが古物商なんだよ。美術品の目利きしたり修復したり……贋作作ったりして儲けを出してたわけ」

「それ法に触れないやつだよな?」

「たぶん?」

「多分って」

「にやははは! だいぶキてたね!」

確かに当時のボクはだいぶ脳味噌にキてたと思う。

でなきやピラミッドの中を探検したり、インディ某^{なにがし}めいた大冒険とか、盗掘団との大激闘とかしないはずだ。

「はい、この話はこれでおしまい。やめやめ。ともかく、これはそれだけのお話だから」

「そうか、まあ……そうだな」

「ところで氷菓ちゃんはさあ、この週刊誌発行してる会社の編集長がギルティされてタイホされたの知ってる?」

「さあ?」

あれれ? 突然晶葉の視線が鋭くなったぞう。

おかしいな。バレるはずないんだけど。

焦りを隠して落ち着くためにも、一度水を口に含む。うん、美味しい。

「ところで氷菓ちゃんの飲んでるそのお水、ちよつとした自白剤を入れてみたんだよねー♪」
「ぶほっ」

待てや!!

サラッと言ってるけどそれヤバイやつでなくて!?

い、いや落ち着け。自白剤の何のと言ってるけど、そんなのが当たり前に存在してるなんてことは……ことは……。

ダメだ。志希さんが言うとなんでも可能な気がする……!!

「で、で、何したの〜?」

「海外で児童買春に関わってる証拠を掴んだから同業他社のゴシップ誌と新聞社にタレ込みました……」

「晶葉ちゃんこれマジなやつ」

いつになく志希さんの顔が焦りに満ちているようだ。

いや、そりやそうだろうけど。こんなこと聞かされて普通の心境でいられる人間なんてそんなにいないって。

「というかそもそもそんな情報をどこで掴んだんだ……」

「外から社屋を見て構造を解析して怪しいところ調べてたら偶然見つけて……あ、これももしポリスメン案件だなーって……」

「外から構造……って、いや、もういちいちツツコむのも疲れるからもういいが……」

そこに関してはそうしてくれると助かる。

この技能に関しちやボクも色々説明し辛い。言ってみたところで理解されるかもちよつと怪しくはあるけど、それはそれとしてなんかちよろつと教えたらできそうな人もいるのでここは割愛としたいところだ。世界と自分が一つであることを認識することで知覚範囲を増大——とか改めて考えると色々イカれてるんだから。

「……ネットニュースを見ると、フリーライターの方は海外に出ているようだが……」

「お金握らせてメジャーリーガーのスキャンダルがあるって吹き込んで……」

「氷菓……キミ意外と陰湿なのか？」

「氷菓は水分でできてるし冷暗所にあるものでしょ。そりや陰湿だよ」

「誰がうまいこと言えと言った。ドヤ顔もやめろ」

志希さんは……爆笑してそのまま動けなくなっている。

この分だと、その「メジャーリーガーの不祥事」が真つ赤な嘘だつてことも分かつてるんだらうなあ。

少なく見積もっても一年は帰ってこないだろうし、その間はボクらもまあまあ安泰、と思つていいのかもしれないけど。

「というか、大丈夫なのか？ もし氷菓が関わっていると知れたら酷い目に遭わされるかも……」

「大丈夫だよ。ボクにたどり着くなんてこと、絶対はないから」

適当な素材を使って肉体を錬成、遠隔で操作して、更に仲介業者を経由することで、ボクが操作した肉スベアボディ体にたどり着く可能性も可能な限り潰している。

ボク自身はその間みんなとレッスンしていたし、アリバイも十分だろう。

「……このこと、プロデューサーには内緒にしといてね。心配かけたくないし」

「私たちには心配かけてもいいのか……」

「信頼してるから」

「都合のいい言葉だよね」

「いやまったく。というか強引に喋らせた人の言葉じゃなくない？」
「いやまったく。にやはは！」

ある意味で、お互い様っていうかなんていうか。

あんまりよろしくない「お互い様」なのは間違いなくそうだけどね
……。

「しかし、その約束は守れそうもないかもしれん」

「何でさ」

「いや、そこにいるだろう。助手が」

「……ん？」

言われて、背後を振り返る。

——と。そこには、わなわなと肩を震わせてこちらを見据える
プロデューサーの姿が……。

「やっべ」

「白河さん。ちょっと話をしようか？」

「……そういえばボク、カラテの稽古があるの」

「今日は休め」

ハハッ。今日は厄日だ！

ずるずるとオフィス方面へと引きずられていくボクを見送り、晶葉
たちはそのまま部屋を出て行ってしまった。

その後は勿論、みっちりと説教を受けるハメになったのだけれど、
ボクは悪くねえと嘯うそぶいた結果激しさが増した。解せぬ。

しかし、家族とプロジェクトのみんなのためだった、と説明すると
プロデューサーも割とあっさりと解放してくれた。

……まあ、今回は割と我儘が過ぎたことは自覚してるし、これから
は自重するようにしよう。

18：夢いっぱい

ライブを目前に控えながらも、仕事は入るものである。

というか、ライブを目前にしているからこそと言えるだろうか。宣伝のためにも、仕事を入れて知名度アップを狙わなきゃいけないという側面があるのは事実だろう。

しかしながら、今日の仕事はそれとはまた趣が異なっていた。

先輩のアイドルグループ、「セクシーギルティ」のライブの物販、そのお手伝い——だ。

場所としては、千葉某所の市民会館。キャパはおよそ1000人。規模としてはそれなりのものと言えるだろう。

セクシーギルティと言えば、片桐早苗さんかたぎりさなえと及川雫さんおいかわしずく、堀裕子さんほりゆうこの三人で構成された、様々な意味ではちきれんばかりのパッションのおかげで人気を博しているアイドルユニットである。

ユニットのコンセプトは「アイドル界の治安を守るためにパトロールする3人組！」なのだが、あの際どい衣装と今にも弾け出してしまうようなお山で治安を守るとか各方面に失礼だよねと思わなくもない。

さて、それはともかく、問題は目の前の物販だ。

今回のボクらの役割は、ライブ前後に手売りで商品を渡すこと。

……なのだけけれど。

「「効率悪くない？」」

三人揃って率直な感想を告げた瞬間、プロデューサーが頭を抱えた。

「……詳しく聞こうか」

「うん。まず会計だけど、ボクが計算してお釣りも出した方が明らかに早いと思うんだ」

「それはまあそうかもしれないね。次は？」
「グッズを自動的にこっちに持つてくる仕組みを作るべきだろう。ウサちゃんロボを連結して倉庫に繋げるべきだ」
「わ、分からんでもないけどちよつと飛躍してるかな……一ノ瀬さんは？」
「これ飲んだら脳が三倍速で動いてスツゴいよ〜♪」
「アウト」

えー、と三人揃って軽く抗議の声を上げると、プロデューサーは思い切り頭を抱え込んだ。

「止めてくれないか白河さん……！」
「……別に副作用無いでしょ？」
「あんな毒々しい色なのか!？」
「前に自白剤飲んだけど何ともなかったし」
「実証済みなのか。というかモノが違うんじゃないのか!？」

まあ、死にはしないでしょ。たぶん。
万が一本当にヤバいようならボクが治せばいいし。

「それに私と氷菓がいれば一時間程度でウサちゃんロボ(輸送用)は完成するー！」
「何で当然のように一時間でロボットが作れるようになってんの？」
「前からだよ」
「嘘だろ氷菓郎」

誰だよ氷菓郎。
でも前から大概とんでもないスピードでものづくりしてたよ。主に謎スイーツを。

しかも30分程度で作ったそれで情けない悲鳴を上げさせられるじゃないか、プロデューサー。

まあ情けない記憶だから消し去っても仕方ないけど。

「……ダメだ！ 今日には普通に物販すること！」

「えー」

「えー」

「『えー』じゃない！ これも経験だよ。ライブ目前になって気が昂つてるかもしれないけど……」

「そもそもこのお仕事取ってきたのもどんどん高揚させてくのが狙いだもんねープロデューサー♪」

「えーうんっッ！」

さて、ともあれ——単に経験を積ませるためにということなら、この仕事を選ぶよりかはもつと良い選択肢くらいはある。

例えば先輩アイドルのバックダンサー、例えば小イベントの司会、などなど……スターライトプロジェクトのコネを使えば、そうした仕事を取ることは容易い。となると、あえて物販の売り子をするだけの理由があるはずだ。

プロデューサーは何の意図を持ってこの仕事を選んだのだろうか……とまで考えると、想像するのはそう難しいことじゃない。

エリクシアに限った話でもないけれど、スターライトプロジェクトは前身がシンデレラプロジェクトということもあって非常に恵まれた環境を持っている。ノウハウも蓄積されているし、幅広いコネもある。そのおかげでライブやドラマ撮影、ラジオ収録と言った華やかな仕事ができるわけだけど……だからこそ、ボクたちには今のところ「下積み」の経験がそれほどない。

だからこそ、この仕事でもってその辺の経験を補おうというのがプロデューサーの考えだろう。加えて言うなら、志希さんが指摘した通り「高揚させる」こと——ライブに向けて、より気持ちを高く保ち続け、熱意を持ってもらおうというのがあるのだと思う。

一応、スタッフさんの計らいによってライブ中の見学は（交代交代ではいえ）許可されている。先輩たちのライブを生で見ることにな

れば当然刺激になる。

これだけの規模となれば物販も死ぬほど忙しくなるだろうし、そういった人気のバロメーターとも呼ぶべきものを実際に見ることで、ボクたちも「これくらい人気になろう!」というような気持ちも持つだろう。

プロデューサーの反応を見る限り、凶星であることは間違いないらしい。

「……というか、今回はセクシーギルティの三人が主役なんだから、でしゃばるわけにはいかないだよ」

「しかし助手、ライブが終わったらそれこそセクシーギルティの三人はこっちに降りてくるんだろう?」

「まあ、そうだね。物販の手渡しなんかもあるし……」

「だったら物販の方の効率を上げてファンとの交流の時間を持たせる方がいいのではないか?」

「そうだよ。楓さんも『ファンとの交流の時間が大事』って言ってたつて凜さんが言ってたよ」

「いやまた聞きつて……でも、理屈としてはまあ、そうだね……」

「そういうことならホーイ☆」

「お(ぎ)ぎ(ぎ)ぎ(ぎ)!!」

プロデューサーが「そうだね」と言ったその瞬間、志希さんがプロデューサーの喉奥にフラスコの中の薬液を投入した。

言質は取れた。そういうことだろう。しかし抵抗すらできないうちには、巧みすぎやしないかね。

「ちよつと待ってこれさつき言ってたヤツ!?!」

「ライブが始まる頃に効果が出始めるからー♪」

「いやちよつと……」

これどうにかならない? とプロデューサーが弱々しく視線を向

けてきた。

即座に晶葉と共に首を横に振った。

「どうなるか見てみたい」

「薄情者ーッ！」

錬金術とは元来世界の真理を紐解かんとする学問である。当然錬金術師はあらゆる摂理を分解し解体し崩壊くずすることを至上の命題としている。要するに、錬金術師はボク含め好奇心の塊なのだ。

つまり、まあ。錬金術師と狂気のマッドサイエンティストの倫理観を侮ったのが悪い。そういうことだ。

悪いがこのままにさせてもらおう。死にはしないし。

プロデューサーは犠牲になったのだ。

「よし氷菓、私たちは目立たないようにベルトコンベアでも作ってこよう！」

「オツケー。その壁に仕込む？」

「施設を改造すると体裁が悪いから外付けにするぞ。そうだな、くま寿司のレーンのように注文したらスツとやってくるような仕組みにして……」

「ちよつとオー!!」

「ハイハイハイ、プロデューサーは志希ちゃんの研究ノートの犠牲になるのだー♪ とところで今どんな気分？」

「超怖いよー！」

「ふんふん、未知の薬品を入れられたことによる恐怖以外特に問題無し」

「問題しかないからね!？」

そんなこんなあって一時間ほど、それぞれの構築したシステムを設置し終わったその頃になると、もうプロデューサーはなんだか動きがおかしかった。

どうやら薬が回り切って脳が三倍の速度で動くようになったらしい。周りがスローモーションに見えていることだろう。

「お、おとおおっ、遅っ、遅すぎる！ 周りがみんなスロウリイだ！ フオオオオオオッ！」

「お〜いいね〜♪ あ、氷菓ちゃん、どうどう〜？」

「へ〜。やっぱ周りがスローに見えてるもんなんだ」

「でもそれ制御できるのか？」

ひよいと晶葉がタオルを投げ渡すと、プロデューサーは目にも止まらぬ速さでそれを受け取ったのけた。

おお、と思わず声上がる。しかしこれ——。

「実用化は厳しいねえ」

「ん〜確かにこれはプロデューサー限定だ♪」

それな。

元々プロデューサーは驚異的な身体能力を誇る超人である。超人強度で言うと25万くらいはあるかもしれない。だいたいティーパークマンと同じくらい。こう言うと強いんだか弱いんだか分かんねえな。

でもまあそんな感じなので純粋な能力だけで脳の加速についてつてるけど、普通の人にやったら即日筋肉痛で動けなくなるだろう。ちなみにボクがやったら2秒以内に暴走して死ぬ。

「身体能力強化する？」

「ん〜それやるとスタドリやエナドリの配合に踏み切ることになっちゃうし〜」

「構造解析の精度を高めればイケるかな……」

「やめておいた方がいいぞ。調査しようとした人が闇の組織に連れていかれたとか……」

「何それこわい」

「ねえところでこれッいつまで続くのかなッ!？」

「あと三時間くらい?」

「プロデューサーの体感で9時間ってことかな」

「長っ!？」

だいじょーぶだいじょーぶ死にやしないからへーキへーキ。

まあちよつと長く感じるだろうけど、些細なことだよな。多分。プロデューサーいつも時間が足りねえって嘆いてたし。

やったねプロデューサー! 仕事が捗るよ!

なお精神的疲労については考慮されておりませんのであしからず。物理的疲労に関しても本人次第となります。

「あ、そろそろ入場だね。それじゃあ頑張ろうー!」

「おー!」

「ねえちよつと俺は」

「頑張れ」

「ひでえ」

プロデューサーにはしばらく裏の方で頑張ってもらおう。

ボクたちはスタッフさんに確認を取り、これまでに構築した手順をそのまま使うことを決めた。そうと決まればあとは入場者を待ち構えるだけだ。

——ただし、この数はちよつと想定外だけだな!

……およそ、千と数百人への対応を終えたあと、ボクは無様に控室でブツ倒れていた。

物販、すげえ。

何がすごいつて、これ、ライブのチケットを購入したわけじゃない人ですら、購入することだけはできるのだ。

その辺も見越してグッズはかなり余分に作ってあるらしいのだけ

れど、それでも完売。ライブが終わるまでに一度会社の方に戻ってもう一度グッズを搬入することらしい。その間、ボクらは自由時間となる。

「氷菓ー、行くぞー」

「うい……」

まずライブ見学に行くことになっているのはボクと晶葉だ。志希さんはボクたちと入れ替わりに行くそう。

気怠い体に鞭打って、なんとか体を起こす。スタッフ用のジャンパーをハンガーにかけて、手近な場所に置いておいたパーカーを手に取って、一緒に会場へと向かった。

セクシーギルティのライブの客層は、主に三十代以降の男性が多い。

女性の姿も見られるが、こちらもやはり三十代以降の方が多かったりする。それは多分、セクシーギルティに特有の、80年代というか……バブリーと言うか……ともかくそんな雰囲気「そういう」世代を惹き付けてやまないのだろう。観客と一緒に踊るその姿は言うまでも無くバブリー。まさしく当時のダンスホールさながらである。見たこと無いけど。

ちなみに彼女らは「セクシーギルティの世直しギルティ」という冠番組を持つほどの人気ユニットである。いや正確にはもう番組終わってんだけど。人気ユニットには違いない。

ともかく、そのためか割と若年層の姿も見られるが……誤差と言ってもいいかもしれない。

……しかし、やっぱり男性が多い理由は、早苗さんと雫さんのあの見事なお山だろう。

ダンスに連動して躍動する105cm。飛んだり跳ねたりすると暴れる92cm。ムムムーン！ とするたびに揺れ動く……髪の毛の房。

Dという数値は一般的に見ればまあまあ平均以上なんだろうけど、残念ながらこの中では見劣りしてしまう。彼女のバストは豊満で

あつたが、彼女らのバストは豊満すぎた。

これがいわゆる相対性貧乳理論である。

なおボクのバストサイズはAAである。

そのバストは平坦であつた。

更なる余談だが晶葉はCで志希さんはD。いずれも本人談。ス
ターライトプロジェクトにおける最大バストは亜子さんとマキノさ
んのツートップ。カップサイズ的には亜子さんがナンバーワンだつ
たりする。

ただ、公表してないだけで多分本来はしゅがはさんがワントップの
はずだ。というかあの人スタイル良すぎるんだよ。自分で「B：ぼ
んっ」「W：きゅっ」「H：ぼんっ♪」とか書くだけのことはある。

あとこれは何気に知られてない話だけど、聖ちゃんはバスト82c
mで単独5位である。その上にいるのが志希さんと泉さんで83c
m。何気に聖ちゃんはかなりの恵体なのだ。歌が得意なだけはある。

「圧巻だな」

「うん」

パフォーマンスもさることながら、やっぱり一部がすごい。ゆさゆ
さぼよんぼよんぼるんぼるんムムムーン。一部ノイズが入った。

セクシーギルティのライブでは流血が絶えないという噂を聞いた
ことがあるが、納得である。特に前列席がひどいことになっている。
あれはもはや暴力だ。視覚の暴力だ。

万が一にもこれが、ユツコさんでなく、例えば海老原菜帆さんや
向井巧……じゃなかった。拓海さん、赤西瑛梨華さんのような346
プロにおけるバスト上位勢であつた場合、確実に死人が出る。

そう考えるとユツコさんの存在は一種の清涼剤であり、むしろこの
三人の構成こそがベストのものなのでは？ とすら思えてくるほど
だ。

このバランス感覚、三人での活動を決めたプロデューサーは相当な
傑物なのではなからうか。色んな意味で。色んな意味で。

「んに」

と、ふとした拍子に胸に何か当たったような感触があった。隣を見ると、哀しげな表情で晶葉が指先を押さえているのが見て取れた。

「……虚無を感じる」

「ケンカ売ってんのか」

施設の子たちと同じこと言いやがって。

ネオエクステスか虚空怪獣か何かかよボクは。

「バストサイズを上げる機械でも作ってやろうか?」

「いらないよ。その気になればなんともなる」

そう。なんともなる。なるのだ。

人のおっぱいもいで自分のものにするこただつてできる。考えうる物理現象においておよそボクは万能だぜというやつなのだ。何を嫉妬することがあろうか。

……いやでもバカにされるのはそれはそれで腹立つな。
S. h. i. t. .

4月から同じクラスになった女子の中には、「あんなちんちくりんのまな板がアイドルとか」なんて陰口叩いてる人もいるっぼいし。あえて関わる理由も無いし放置してるけど、今度その胸と背え削り取つてやろうかくらいには若干イラ立ってる。我ながら大人げない。反省。

「キレてるか?」

「キレてないよ」

「……青筋立ってるぞ?」

「立ってないよ」

あとこれ晶葉に対してじゃなくてただの思い出し怒りだ。違う。怒ってない。思い出し……………イライラとか多分そういうやつなんだ。その程度のなんでもないものだ。だから胸を突くのをやめるんだ晶葉。流石にそろそろ痛い。

「えいえい」

「……………」

「怒っ…………死んでる」

胸を突かれたそのままの勢いで、肋骨がゴリツと行ってそのまま座り込んだ。

晶葉はもしかしてボクの耐久力ナメてない？　ほんの些細なことで死ぬぞ？　こんな風にな!!

ちなみにそこは一番肉の薄い部分だ。当然ボクも痛いが突いてて自分が痛いんじゃないだろうか。

「…………だ、大丈夫か？」

「我魂魄百万回生まれ変わっても恨み晴らすからな…………」
「すまん」

許すよ。だってわたしたち仲間だもんげ。

とまあそんな感じで二十分ほど見学して、志希さんと交代。志希さんの見学が終わって戻ってきた頃には、もうそろそろライブも終わろうという頃合いだった。

——再び地獄が始まる。

来場の際はまだ物販に飛びつく人は多くなかったけど、帰りともなればまたすさまじいことになる。

何せ、ほぼ満席だったこの1000人は入れるはずのハコに詰める人、ほぼ全員がドワオと出てくるんだから。

その中の何割が買っていくかは分からないけど……もうここまで来ると誤差だ誤差。

どうせなら早く来い。ボクはちよつとやそつとで死ぬぞオー!!

@ —— @

死んだ。

「氷菓が死んだぞ」

「この人でなしー!」

「俺に言うのか!」

流石にあの人間の濁流には耐えきれなかった。

スタツフさん、すごいね。効率化してあれつてことは、本当はもっとひどいことになってるんだよね。

尊敬します。いつもありがとうございます。

できれば早く環境が良くなるよう働きかけていきます。

「もー、何で打ち上げの席で倒れちゃってるの! ほら、ジョッキ持って持って!」

「早苗さーん。これ、ジョッキじゃなくてグラスですよー?」

「え、そう? まあどっちでもいいわ! ほら根津君も後田君も!」

「あ、は、はい」

「はは……」

何となく気まずそうに、プロデューサーと……早苗さんたちのプロデューサーである後田さんが苦笑いをした。

……打ち上げ。そう、この場所は打ち上げ会場である焼き肉屋、である。

例の地獄の物販が終わってしばらく。ボクたちは、セクシーギルティの御三方と、その担当Pである後田さんと一緒に焼肉屋に来てい

ただ。

ちなみにボクが突っ伏しているのはギリギリで網に当たらない場所ではある。流石にそのくらいは分かってやってる。

「それじゃあ今回のライブの成功を祝して、カンパニー！」

「カンパニー!!」

「ワーツハツハツハ！」

みんなでガチンとグラスをぶつけ合って今回のライブの成功と物販の無事の終了を労い合う。

早苗さんは……まあ、いつも通りなんだろうけど、後田さんと根津Pはどこことなくヤケクソな感の漂う笑いを漏らしていた。

ユツコさんも雫さんも早苗さんも、みんな勢いよくぐいっと一本グラスを空けていく。すごいなあの人たち。あのライブの後でこんなに飲み食いできるのか。

……という一方、プロデューサーたちの方はどういうわけか顔色を変えていた。

「麦茶割りだコレ!!」

「え」

「ええ……?」

なんと。

どうやら麦茶でなく、ウイスキーか何かの麦茶割りを注文してしまっただけらしい。

「何やってんのプロデューサー……」

「助手……流石にこれで『まったくもう仕方ないな』は無理だぞ……」

「ご、ごめん! ……ていうか頼んだの早苗さんですよね!」

「え? あ、ごつめーん! 間違えちゃったわ!」

「早苗さん……」

なんだか後田Pがすごく諦観したような表情をしていらっしやる。
……見たところ、こんなこともしよつちゆうなんだろう。まさかボクたちの方も、と思っただけど、どうやらこつちは安全なようだった。今回の食事、ボクたちは四人掛けの席を分割して使っている。ボクがいる方は晶葉とユッコさん、雫さんとの四人掛けだ。注文したのは雫さんだったから、そういうミスも無かったのだろう。見たところ、志希さんはちゃんと自分で注文していたようだからこつちも問題は無い、と。

それにしたってこの有様は……勘弁してほしいなあ。

「ねープロデューサー？　志希ちゃんたちどうやって帰るのかな」
♪

「うっ……そこは……うん……」

この場所は、千葉である。

当然だけど346プロのある都心とは遠く離れている。電車を使えば一時間ほどで到着しはするが、じゃあ車を置いていくか？　とか、運賃は？　とか、様々な問題が湧いて来る。

代行を使えばいいじゃないかと言いはするが、あの厳しい専務が果たしてこんな間抜けなことに経費を出すことを許すだろうか。アイドルの電車賃くらいはいいかもしれないが、少なくともプロデューサー二人はダメだろう。

「父に送ってもらおう。志希、氷菓、乗っていくか？」

「それじゃあありがた〜お邪魔しま〜す♪」

「ユッコさんと雫さんはどうされるんですか？」

「電車で帰れるので大丈夫ですよー」

ゆさっ。

アピールすると同時に、揺れた。

この人何が詰まってんだろう、これ。

「む、ムムツ。そうですね……ここは！ サイキック・テレポーテーション!!」

むむんっ。

アピールすると同時に、盛大に何も起きなかった。

この人何が詰まってんだろう。

「ダメでした。くっ……」

「安心するといい。ファミリーカーだから七人は乗れるぞ」

「ああ、晶葉ちゃん。あたしはいいわ。二次会行くからっ!」

「え」

「え」

「勿論後田君と根津君も行くわよね?」

「……お供します……」

プロデューサーたちは犠牲になったのだ。

犠牲の犠牲にな……。

「そういうえば、今度ミニライブがあるらしいですねー」

「急激に話を変えにきましたね」

「まあまあ、いいじゃないですかっ! で、どうですか?」

「うむ、悪くない。準備は万端だ」

「それなら良かったですー。あ、でもそういうことなら、そろそろ個人曲も収録するかもしれないですねー」

「個人曲、ですか」

……それって例えば、島村卯月しまむらうづつきさんの「S(mile)ING!」なんかのことだろうか。

確かにそういうことなら、順序としてはそろそろあるかもしれないな

い。
けど――。

「ボクは、まだまだかな」

「何でだ？ ……私たちの中で一番巧いのは氷菓だろう？」

「なんていうか、違う、っていうか」

何だろう。「ボクのための曲」ってのをやるとなると――すごい躊躇いが胸に浮かんでくる。

志希さんの曲。晶葉の曲。それはいい。けど、ボクの曲、それだけは……だめだ、分からない。浮かばない。

「……まあ、そのうち……です」

「こういう面倒くさい女なんだ」

「ムムツ、だったら……サイキック・ヒーリング！ ムムムーン！」

「……あの。ユツコさん？」

「疲れてるからそういうこと考えてるのかと思ったんですけど……」

そういう意味だとボクは常時疲れてることになるんですが。

疲れてるのも面倒くさいのもあんまり否定しきれないけど。

「こういう時は美味しいものを食べるのが一番ですよー」

「そう……そうですね」

雫さんに促されてお肉を口に運ぶ。

うん。美味しい。確かに、美味しいものは人に幸せな気持ちを与えるものだ。

変にマイナスなことを考えても、プラスにできる特異な力を持っている。

……同時に、脂っこいこと脂っこいこと。

あつ今胃が鳴ったきゆるって。ぎゆるって。あ、これまた死ぬか

も。

19：失踪のワケ

「また志希が失踪したぞ」

「晶葉、プロデューサーが死ぬからあんまり率直に言いすぎない方がいいよ」

「む、そうか……すまない、助手……志希の失踪を許してしまった……！」

「重苦しく言っても別に変わらないからな!？」

——ミニライブの日が訪れた。

そしてやはりと言うべきか、当然のように志希さんはりハーサルを終えた直後に失踪を遂げていた。

「ははは！ まったく毎度毎度やってくれるぜ!!」

「笑つとる場合かーッ!!」

「もう笑うくらいしかできないんだよ……はは……はあ……」

流石のプロデューサーも精神的にかなりキている。

ライブまでの間にだいぶ仕事が溜まっていたようだし、仕事を処理するのにもだいぶ消耗したんだろう。ボクらもボクらで何で落ち着いてんだよと言いたくなるどころだろうが、そもそもボクらの場合はレッスンの時だとかにしよっちゅう志希さんが失踪しているのを見ている。耐性がついた……っっていうと、またちよつと違うけれども。今回の会場は、500人程度が入ることのできるライブハウスだ。嬉しいことに全席完売で、ライブまで時間はあるというのに外で待っている人も出始めているほどだ。

ただ、やっぱり見る人の多くはやたら濃い人ばかりだった。どっかの学術書に写真が載ってるような先生とかいるぞ。どうなってるんだ。目当ては晶葉か。それとも志希さんか……？

「晶葉、発信機」

「すまない、外された」

「……またあの人はほんとにもー……」

想定内だけどさ。

服に発信機を仕込んだところで志希さんはすぐに見つけちゃうだろうし、多分控室の机かどこかに置いてちやっってるんだろう。

しかし、何が嫌なんだろうね……ほんと。

唯一幸いなのは、開演までまだだいたい時間があるってことだろうか。

これならまだ待って……ってというのは流石に無理だけど、捜しに行っても問題無い程度の時間はあるはずだ。

「プロデューサー、捜しに行こう」

「ああ。けど、どうする？」

「プロデューサーはこのライブハウスの中を見てほしい。ボクは外に出て捜してくるから」

「そこは普通逆じゃないか？」

「多分、プロデューサーよりはボクの方が志希さんの考えに近いから。時間配分も、ボクの方ができるしね」

非難するような視線を向けると、プロデューサーはその長身を委縮させた。

やっぱり前のことを言われるとそれはそれで堪えるんだろう。ボクからも結構言いたい放題言ったし、やりたい放題にやったし……まあ、自業自得みたいなもんだけど。

「私はどうしたらいい？」

「もしも志希さんが戻ってきた時のために待機してくれるかな。連絡役も必要だし」

「うむ、分かった」

万が一だけど、トイレにでも行つてた——なんてことになったら骨折損もいいところだ。

……まあ、その可能性は極端に低いけど。やっぱり、いつもの失踪だろう。

プロデューサーにああは言つてみたけど、ボクに志希さんの考えは分からない。あくまでちよつぴりものごとの考え方が近い、ってだけだ。

でも、こればかりはどうしようもない。やっぱり志希さんは本物の天才なんだから。余人にその考えを理解できないからこそその天才、とも言おう。

まあそれでもプロデューサーよりはマシだろうと思う。ボクだつてそれなりに才覚はある、はずだし。

それに——。

「……いた」

周辺を解析すると、すぐにその姿が見つかった。

ライブハウスの近くの喫茶店のテラス席だ。呑気に茶アシバいてやがる。

……でも……まただ。また、何か見てる。

人間観察が趣味、みたいなことを言ってるのを聞いたことはあるけど、それって通行人にも適用されるんだろうか。

しかし、その様子は……見てる、というより、捜してる。相変わらずよく分からないことだ。

真意にせよ何にせよ、今は行つてみなきや分かんないか。

じゃあ、サ店に行くぜ！

今回は前ほど時間的猶予が無いわけじゃない。悠々と店内に入ると、にこやかに手を振ってボクを出迎える志希さんと向き合うようにして、席に着いた。

「見つけてくれるのが早いね〜♪」

「だいぶ慣れたからね」

「いらっしやいませ！ 本日のおすすめはエスプレッソとダブルショコラのセットです！」

「抹茶オレとプレーンシユガー、どっちもSサイズで」

注文を店員さんに告げて、改めて志希さんの表情を見る。

普段と全く変わらない明るいまるい笑顔だ。こっちは心配してるってのにねまったく。

ややあつて店員さんがボクの注文した商品を持って来……あれ、デカくない？

ボクSサイズだつったよね？ Lサイズじゃね、それ？ え、え、ちよつと待つて聞き違えてるよねこれお腹ちやぼんちやぼんになつちやう。

見ると、志希さんはボクが焦り出したのを見てにまにまと笑みを浮かべていた。こんちくしょう。

「あの、ボクSサイズ頼んだんですが」

「お連れ様が『遠慮するだろうけどLサイズでいい』と……」

だからこんなまにまにしたのかこんちきしよう！ イイ性格してやがるぜ……！

だがいいのか？ ボクのお腹は、ちよつとしたことでユルユルになるぞ……？

「ま、いつか」

「割り切り早いね〜」

「いちいち気にしてちややってけないでしょ」

鈍感力、つてやつだ。いや違うか。何にしろこの程度のイタズラで

目くじら立てることはない。ほんのちよつと前に夕チの悪いパ
ラッチに引つ掛かったばかりだけど、それと比べれば可愛いもの
だよ。

元々個性豊かすぎる人たちに囲まれて過ごしているのだし、いち
ち驚いたりしすぎるともう流石に身がもたないというのもあるが。

何より友達のやったこと。怒るのも大人げない。

「ともかく、食べたら行く」

「そうだねー……え、食べられる？」

「ムリじゃないかな。はいあーん」

「あーん♪」

ドーナツを差し出すと、志希さんはすぐにかじりついて三分の一
ほどをかつさらっていった。理解が早くて実に助かる。

さて、と思いつつ、ドーナツをもつきゆもつきゆと食べながら志
希さんの方を見る。微笑ましそうにこつちを見てるもんだから、自然と
向き合っつて見つめ合うかたちになつちやうけど……まあそれは置い
といて。

「志希さん」

「んー？」

「ボクは、何も言うつもり無いから」

そう告げて、抹茶オレを流し込む……ちくしょう甘味が少ないやつ
だ。

……そんなボクを見て、志希さんはにまつ、と笑みを向けてくれた。
こう告げたのにも、いくつかの意味がある。

ボクは志希さんの考えはよく分からない。けれど、彼女とボクには
いくつかの共通項がある。

そこに踏み込んでいくのは、志希さんが望んでいない以上はダメ
だ。追い立てて、追いかけて、むしろ失踪することを助長しかねない。

まあ、でも、このくらい言っても許されるだろう。実際、志希さんが気にした様子は無い。

色々と、複雑な思いがあるはずだ。

志希さんが失踪するパターンは主に三つ。単純につまらない時。晶葉とボク、プロデューサー以外に何人かの人がある時。それと、ライブのように、大勢の人が集まってる時。

つまらない時はともかくとして、残り二つの理由に関わっているのは主に……他人が関わっている時だ。

一見不規則なように見える失踪のパターンに、もしも明確な法則があるとするのなら。何らかの理由があるとするとするなら。

……それを暴き立てるのは、きつと誰にとつても良くないことだろう。

プロデューサーと晶葉へ志希さんを確保したと連絡を入れる。あとは予定時刻に間に合うようにすれば大丈夫だ。

抹茶オレにもうふたさじほど砂糖を投入。これでボクの舌にも合う。

ぐいっと……飲み干せるほど一口が大きくないし、ちびちび飲んでいく。適当に話しながら飲めば、もうちょうどいい時間だ。

「よし、行く」

「ん〜♪」

「……何でそんな上機嫌なのさ」

「かわいいもの見れたからかな〜♪」

「何さ、それ」

「ハムスターみたいにもつくもくもくもく」

「……………」

「にやはは」

やめてよそういうの。

というかメイクさんにやってもらおう前に髪弄るのもやめてよ。

とういか何だこの髪型は。トリプルテールってやつか。
……ま、別に少々やられたっていいけど。

@ —— @

「——さあ、それじゃあ行ってみようか！」

「あたしたちの化学反応、ちゃんど見てってね♪」

「一曲目は——『ツインテールの風』！」

宣言と共に、ライブの幕が開かれる。

今日の演目は、先日プロデューサーから発表のあった三曲と、ボクたちの希望した三曲だ。要望通りとなりはしたけど、髪型を変えなきゃいけない関係上、一曲目から三曲目までをツインテールで演ることになっていた。

問題……は、特に無い。いつもこういうタイミングで問題が発覚するからアレだけど、実のところライブとお仕事の最中はそんなでもない。割と順風満帆だ。

なんかやたらと濃ゆい人たちのコールが何故か無駄に完璧なこととか、視線がやたらとボクのお腹に向かうことを除きさえすれば。

いったい前回のライブが終わった後から何が起きたんだ。ファンの統制が完璧になりすぎている。とういかむしろ先鋭化してない？

あと視線がやけに生暖かいとういか、何だこれ。熱視線とかそういうのじゃなくても……辛いものを見るような、悲しいものを見るような、何だこれ。

何が彼らをそうさせるんだ。

「「うおおおおおおお!!」「」

今日、この会場に来たファンの人たちの人数はそう多くはない。しかし、この熱気はただの数では計れないほどに、凄まじい。

腕を振り上げると歓声が、音を奏できれば熱声が。一挙手一投足に連動して感情が揺れ動くのがよく分かる。

同時に、よく分かることがある。

やっぱり、志希さんは誰かを捜している。ライブの最中に観客席に視線を送ること自体はよくあるけど、その視線を解析すれば、やっぱり観客席に誰かいるのを捜しているようにしか見えない。

それが分かったのは、ボクもそうだからなのだろう。

多分ベクトルはだいぶ違うとはいえ、観客席の中から特定の人を捜していることには違いない。

理由は——やっぱり、分からないけど。

@ —— @

——前回以上の手ごたえを胸にライブを終えてついでに死亡してしばらくして、ボクは346プロダクション社屋のある一室に訪れていた。

いつものトレーニングルーム……なんだけど、今回の目的はトレーニングじゃない。身体測定だ。

346プロの社風自体は自由を尊重するものだし、割と体重や身長、時にはバストに関してもサバを読んでHPに載せる……ということがあるのだけれど、それでも産業医などの健康管理をしなければならぬような人、プロデューサーをはじめとした今後の活動方針を考えるべき人たちには正確な情報を渡す必要がある。そのため、時々こんな風に健康診断と身体測定が行われるわけだ。

しかし、346プロのアイドルの総数と言ったら100人超の大所帯。時間はかかる。そりやもうかかる。

待ち時間数十分は当たり前。体重を計りに行く時なんて、誰も彼も絶望的な表情をしながら並んでいた。

年頃の女性なのだから、むべなるかな。日頃自信満々にしてる晶葉ですらどこか不安そうにそわそわしてるのだからこれはもう、そういうものだろう。

「次、白河氷菓さん、どうぞー」

「はい」

看護師の人に促されるままに体重計に乗ると、数秒とせず画面の上に結果が表示された。

前に計った時から随分経ってるし、最近は色々なものを食べるようにもしてるから、流石に前よりは体重も増えてるだろう。

大事なのは適度な食事と適度な運動！らしいし。

——そう思っていると。

「28kgですねー……んん？」

「うん？」

あれ？ 何かおかしいな言葉が聞こえたぞ。

にじゅうはち？ うん？

……前より痩せてね？

「ホントでござるかあ？」

「本当ですねえ……」

おちやらけてはみたけどこれマズいのでは？ 看護師さん、目がマジだ。

いや……え、何で!?

「何で!?!」

「と、言われましても……」

け——計算外だ。流石にこんな状態想像もしてなかった。

28kgって……これ、こずえちゃんと同レベルだぞ。どうなったんだボク。今までぎりぎりで杏さんレベルに留まってたからまだな

んとか言い訳がつくものの、ここまできたら流石にアレだ。

あ……でも、そうか。だからライブの時、あれだけお腹見られてたのか！

なんかうつすらと線が出てきて、鍛えた甲斐があつたなーなんて思ってたけど、あれ単純に脂肪が薄くなりすぎて筋肉浮いてただけってことね！

あはははは！ やつと分かったよ！ そういうことか！

……やべえ!!

「ということなんだけど」

「パンですね」

「おさかなれすね」

やれやれ。ボクはアンチヨビサンドを食べた。

しよっぺえ。

後日、ボクは頃合いを見計らって、プロジェクトルームで二人へと相談を持ち掛けていた。

まあ、要するにどうやって体重を増やすか、というところなんだけど……この二人に相談したのが間違っていたかもしれない。

……いや、だからって晶葉や志希さんに相談を持ち掛けてもそれはそれで斜め上の方向で問題を解決しに来るだろうし、他の人に相談するのがいいだろう。

薬で体重増量とか、機械でも埋めるとか、多分そっち方面に行ってしまうそうだ。流石にそれはダメだろう。

というわけで食通……まあ特定分野に限られるけど、ともかく食べ物について詳しい二人に相談しにきた、というわけだ。

「……まあ、改善する気があるならそれに越したことは無いわね」

さて。そうやって二人に相談しに来たとは言っても、別に二人だけ

に話したわけじゃなく、偶然ここに居合わせたマキノさんにも話を聞かれることになったのだった。

「何でも痩せすぎは痩せすぎで糖尿病のリスクがあるそうよ」

「そうなのれすか〜?」

「ええ。境界型糖尿病とも呼ばれているわ。疲れやすかったり、喉が渴きやすかったりしない?」

「しよっちゆうですが」

「危険かもしれないわね」

「なら余計に食べましょう! パン!」

「今食べてるし……んく。ああ、お腹いっぱい……」

「早いれす……」

生まれ(変わっ)てこのかた、胃が小さいせいで基本、ボクはひどく少食だ。

空腹も特に苦に感じることは無いし、何も考えずにいたら一日何も食べてないということもままある。まあそれはそれとして。

「ボクが痩せたの、多分消費とカロリー摂取のバランスが取れてなかったせいだと思うんだよね」

「見れば分かるわ」

「すぐくカロリー使いますからね。あたしもパンを食べる手が止まりません!」

「いつものことれすよね〜?」

「七海ちゃんもあたしのこと言ってられないくらい食べてますけどね、あはは」

みちるさんが食べる勢いは、そりやもうすごい。対して七海ちゃん は楽しくおしゃべりしながら食べてるからそうでもないように見えるけど、その実手は止まってないので結構な勢いで食べている。それなのに二人とも殆ど体型も体重も変わらないというのだからすごい

話だ。

「それに氷菓、あなた6chにこんなスレッドまで立てられてるわよ」

「ん？ 何？」

マキノさんがこちらに向けてきたタブレットを覗き込むと、そこには——「白河氷菓ちゃんを見守るスレ」なるものが表示されていた。よもやの単独スレである。

しかし何だ「見守る」って——と思いつつ、下へ下へとスクロールを進めていく。

曰く。『今にも消え去りそうで不安になる』『Twitterから闇を感じる』『抱き締めたら文字通り折れそう』『明日死にそう』『体重30kgとかこま？』『年齢に対して体格が貧弱すぎるだろ』『エトセトラエトセトラ……勢いはそこまででもないが、内容がやたら濃ゆい。』とか色々おかしい。

どうもこのスレの人たちの多くは例のドラマを見てファンになってくれた人のようだ。やっぱりテレビ出演というのは相当の宣伝効果があったらしい。

「……もうちょっと太ろう」

「世の中の女性が聞いたら怨念が飛んできそうな発言ね」

「元々そっちに人気ないし」

ボクの人気は、主に男性に集中している。同じ女性の立場からすると、弱々しく、男に対して媚こびを売っているように見えて好きになれない——のだとか。

そりゃ悲しく思いはするけど、それはそれ、売り出し方からするとしょうがないんじゃないかな。世の中の女性というのは基本として「強い女性」が好きなものだ。男性に負けることなく、むしろ男性を弄もよほび圧倒するくらいの人とか。それを考えると今のボクは正反対で、あ

んまり好かれないのも理解できる。メディアに露出してるときは基本、「礼儀正しく物静か」を装ってる部分があるし。

女性に人気がある、っていうと……財前時子さいぜんときこさん……通称、時子様とかが挙げられるだろうか。346プロ最恐の噂もある女王様。やっぱり、強い人は人気だ。

「やっぱり高カロリーなものなのかな」

「……これ、とかどうでしょう」

と。珍しく、恐る恐ると言った様子でみちるさんが取り出したものがあつた。

だいたいティッシュ箱と同じくらいの大きさのパン——メロンパンだろうか。

裏面を見る、と——そのカロリーは……1400超!?

「えっ何コレ怖……でか……」

「あたしもあんまり人には勧められないパンです」

「……自分が食べちゃうからというわけではなく?」

「あたしが食べるからっていうのもあるけど、あんまりにもカロリー爆弾すぎて勧めたら嫌な顔されるんですよ」

まあ……そうなるな。

ボクだから「こんなのがあるんだ」で済んでるだけで、平均的な成人女性一人分のカロリーを全部賄ってしまえるこのパン、人に勧めるには重すぎる。

「七海からはおさかなさんのからあげ、くらいいれすかね……」

「あんまりお魚でカロリー、って感じのものってないもんね」

「いえ、あることにはあるんれす」

「あるんだ」

「ああ……アレね……」

どうやらマキノさんは訳知りらしい。

再びタブレットを操作して、それを向けてくる。そこに表示されていたのは……あつ。

「……バラムツか」

「油だらけで消化すらできないいわゆる外道。味はおいしいけど食べたら即日お腹を壊す、というか油が垂れ流しになるいわくつきの魚ね」

「まあそもそも消化がれきないんれすから議論の余地も無いんれすが」

「だよね」

これに関してはお話になりやしねえ。

「あとは、アンキモとか大トロれすね」

「アンキモと大トロかあ」

アンキモ……なら、食べられる、かな。多分。大トロは脂が強くてお腹壊しちゃうし。

「なのれ、こういうのはどうれしょ？」

言いつつ、七海ちゃんが表示したのはあるレシピ。マグロあんきも丼……って。なんとという贅沢な。

でも、どっちも一応スーパーに売ってはいるかな……。

「……うん、これなら作れるかも」

「ほんとれすか？」

「……七海ちゃん、目えキラキラさせて何を期待しているのかな？」

これ自分が食べたいだけじゃないのかな？

「……ま、いいか。今回のお礼に今度ごちそうするよ」

「ふふふ、嬉しいれす！ 一緒にたべましょ〜」

何だかんだ、ボクもみんなと一緒に食事するのは好きだ。

特に七海ちゃんのみちるさんは、見てるこっちが気持ちよくなるくらい食べるというのもあるし。

……ん？ いや待てよ。そういえば、そういうシーン見てるだけでお腹いっぱいになってきた、とか言つて、あまり食べなかつたこともあつた覚えが……。

「……一緒に、はちよつと考えさせて？」

「ええ〜!？」

ボクの死活問題なんだからそこは勘弁してくれないだろうか。

——なお、体重増量週間の甲斐あり、ボクの体重は無事以前の30kgまで持ち直したのだった。

……うん？ もっと増やさなきやそれもそれでマズくないか……？

幕間：Pの空回り

プロデューサー道は、死狂いなり。

今になってふと、かつて同僚がそんなことを言っていたことを思い出す。あ、いや、修羅道だっけ。どちらでもいいか。

当時新人のペーパーだった俺にはその時何を馬鹿なことを、と思っただけけど、今になってみるとその言葉の意味がよく分かる。

プロデューサー道は、修羅道にして死狂いなり。

根津猛、24歳独身。俺は今、そのように言われる理由を身をもって体感していた。

「はい……はい、ではその件はそのようお願いします。はい！ 大丈夫です、ええ……はい、それでは！」

電話、電話、また電話。電話電話電話時々書類、電話電話にわかスケジュールチェック、電話企画書……。

心が折れそうだ。

営業がお断りされるなんてのはもういつものこと。慣れきってしまつて何の感情も湧かない。口汚いお便りメルなんかも許容しよう。もはやそんなものはシステマチックに対処するだけのことだ。枕を提案しに来るような輩は専務の手により社会的に葬られた。346の企業力あつてこそそのものだろうが、何にせよ頼りになる上司である。一時的にとはいえこの人と敵対して立ち回ることのできた武内先輩の凄まじさもまたよく分かる。

さて、それはともかく。

俺が担当しているスターライトプロジェクトは、総勢17人のアイドルを擁する大所帯だ。サポートにその武内先輩や事務の千川さんがついてくれてはいるが、その仕事量は膨大にすぎ、また、方向性も多岐にわたる。

自然と、以前同僚が言っていた言葉の意味が分かるようになってしまったのだ。プロデューサーの道は険しい。

けれども、この仕事には確かなやりがある。

アイドルのみんなを輝かせるためのステージを形作り、観客もアイドルもみんな笑顔になる、その姿を見ているとたまらなく嬉しい。

それだけは唯一にして、不変の事実だ。

それはそれとして
閑話休題。

スターライトプロジェクトにはその性質上、様々な人材が集まってくる。ロボットのみならず機械技術全般に精通していたり、医学薬学何でもアリな頭脳をしていたり、特定の食品についてやたら詳しくかったり、これまでに俺が想像していた個性の最高値をブチ抜いていったり……だ。

だから、少しばかり手のかかる子と言えるような子もいて——今、このオフィスにいる彼女はその筆頭とも言えるだろうか。

「電話、終わった？」

——白河水菓さん。

氷を思わせるような蒼い髪と瞳を持った子だ。作り物めいて整った容姿と、触れただけで折れてしまいそうなほどに細く小さな体は……人形、というような印象よりも先に弱々しさを感じる。

趣味は錬金術（自己申告）。プロフィールにもそのように載せはしたが、正直意味はよく分からない。

ただ、そのやたらと明晰な頭脳と万能に発揮される才覚は、恐らくその錬金術——に由来するものなのだろうということは何となくわかる。

彼女は見た目こそクールそのものと言った雰囲気だが、人当たりは良い方で、言動も、少しばかりエキセントリックだが根は真面目。初対面の相手への礼儀もちゃんとしてて、びつくりするほどマトモなように見える。

しかし、ひとたび内面に踏み込むと、これがまた、ひどく、こう……歪んでいる。

他人思いで家族思いな一方で自分の価値を低く置きすぎ、自由を重んじながらも自縄自縛に陥っていて、自発的にやることの大抵は惰性。人とは適度な距離を取りたがるくせに、人から与えられる役割を果たすことに執着する。その上根が真面目なのにやけにふざけた言動だ。意図的なのかはよくわからないが、何にせよ単に施設で育ったというだけじゃない何かを、彼女からは感じたものだ。

普通、施設で育ったんならもっと食べるものとか遊ぶこととか、もつと言えば金に執着して自分で独り占め！ とかしてもいいくらいなのにな……。

……その辺は、以前に施設の方に聞いた彼女が拾われるまでの経緯に起因することなのかもしれないが、下手に口を出してもいいことは無い。

「ああ、終わったよ。それで、話は？」

「ん……これ、判押してくれない？」

「うん？ ああ、外泊証明書か。いいぞ。一度施設にでも？」

「似たようなもんかな。眼鏡くれた人の話したよね。今、日本にいるみたいだから」

「そういうことか。分かったよ」

「ありがと」

そう言うと、判を押す俺を尻目に白河さんは手に持ったボトルの中身を飲み下した。中身は……何だろうか、灰色のオートミール……？
そういえば、さつきからちよくちよくストローで吸いこんでは苦虫を嘔み潰したような表情でボトルの中身を見つめているが……。

「ところで白河さん、それは……？」

「志希さんと一緒に作った栄養ドリンク」

「……ドリンク？」

「……スムージー」

「……味は？」

「……………泥抜きしてないカエルの卵」

何でそんな味を知っているのか、これが分からない。
食感だろう。食感だよな。頼むから食感の問題であってくれ。

「味の話だよ」

「その言葉、今一番聞きたくなかったよ……………」

何でこの子はそんなものの味を知ってるんだ！

よもや昔食べたとか食べさせられたとか言うまいな！

こんなだから会社に「氷菓ちゃんはちやんとご飯を食べているんですか!？」なんて苦情が寄せられるんだよ!!
俺がむしろ聞きたいんだよそんなこと！

「ちなみに、食感は？」

「ゲロ」

「直接的に言うんじゃない！」

最悪だ。もう最悪だ。何でそんなもの飲んでるんだ！

「辛くないか、それ飲むの!？」

「やっぱ辛えわ」

「そりゃ辛いだろうよ……………」

「飲む？ プロデューサー」

「それを聞いて飲むと思ってるんなら大したもんだよ」

もしやさつきからちよくちよくココアパウダーやガムシロップらしきものを入れているのはそのせいだろうか？

それでも到底緩和できるような味じゃないようにも思うが……………。

「何でそんなものを？」

「プロデューサーはボクの体重、知ってるよね」

「あ、ああ。28kgだったっけ」

「良くないよね」

「……まあ、良くないな」

似たような体形の子は他にもいるが、明確に栄養失調状態だったことが見て取れるほどとなると白河さんくらいのものだ。一部とはいえ、苦情が来るくらいなんだから当然と言えば当然だ。

ぺったんどころじゃない。すとんだ。オマケにアバラが浮いているのが見える。人それぞれに体質の違いがあるとはいえ、これは流石にマズい。

「だから体重増やそうと思って」

「いや、そんなもの飲むくらいならもっという方法あるんじゃないか……？」

「普段の食事を維持したまま、できるだけ体格を良くするならこのくらいしか無いんだよ」

「そりやまた何で？」

「……普段の食事ですらお腹いっぱいになってもう入らないってことがあるから」

食が細いってレベルじゃねえぞ。

貧乏がこの子の身に沁みつきすぎている……。

「……もしかして、打ち上げで焼肉行くの渋ってたのも」

「脂でお腹壊すし……っっていうかプロデューサー、曲がりなりにもボクは女子なんだけど。焼肉は無いと思うよ普通」

無いのか……焼肉。

無いか……マジかー……。

というか珍しいな、白河さんが自分の性別について何か言ってくる

なんて。

わざわざひけらかすようなことをしないだけで、やっぱり女の子なんだなあ。

「ちなみに打ち上げ、どういう場所がいいんだ？」

「いやボクに聞かれても……ファミレスとかでいいんじゃないのかな」

「ファミレスかあ……でもそれ、労をねぎらってる感が薄くないか？」

「じゃあイタリアンとかフレンチとか……お寿司とか？ 食べられる量は調整できる方がいいと思うけど」

「そっか、成程ね。だいたい分かった」

「ホントに……？」

イタリアンにフレンチ——先輩に聞けば多少は情報を得られるだろう。

寿司屋ならば、今西部長たちと行ったことがある。そこまで高価な場所でもなくてもいいが、七海ちゃんは喜ぶだろうから候補に入れてもいいはずだ。

「……ともかくそういうことだから。それじゃ」

「ああ、気を付けて」

ぶつきらぼうに告げて部屋を出る彼女からは、やはり本来の育ちとは少々異なる礼儀正しさが滲み出していた。

おかしな話と言えばおかしな話だが……恐らくは、施設出身ということ偏見に晒されなかったために身に着けたのだろう。

「……さて、続き続き、つと」

何はともあれ、仕事の続きを始めよう。

ある程度とはいえ仕事のためにも、白河さんはあんな不味そうなど

リンクを飲んで頑張っているんだ。ここで俺が頑張らないでどうすると言う。

今日の仕事も、ここからが踏ん張りどころだ――。

@ —— @

いくら仕事が忙しいと言っても、346は福利厚生もしっかりしている企業だ。時にはノー残業デーというものもある。今日の仕事が終わってからしばらくして、俺は自宅に戻るために電車に乗った。

たまの定時帰宅だ。今日くらいはスーパー銭湯なんかに行って体の疲れを癒すのも悪くない。そう思いつつ満員電車に揺られている中、ふとある人物と眼が合った。

(……八神さん?)

どうやらレッスン終わりらしい。普段身に着けている学校制服ではなく私服。その目線は俺――ではなく、満員電車の端にいる別の人物の方へと向けられていた。

あれは……誰だ?

少年だろうか。背は高くない。目深にキャスケット帽を被っていて、表情や容姿はうかがえないが……。

「……………」

と、そんな折に八神さんが俺の存在を認めた。軽く口元に手を当てているのは、「静かにしろ」というジェスチャーだろう。

八神さんの知り合いだろうか。それにしても随分幼いようだが……。

やがて電車が止まると、こっそりと少年を追いかけるようにして八神さんが降りていった。手の動きで俺を招き寄せているのを見かけ、

慌ててそれについていく。

人混みが途切れた頃になって、それとない風を装って八神さんが俺のすぐ近くまでやってきた。

「……どうしたの？ こんなところで」

「退社中だよ。八神さんは？」

「尾行中よ。あれ、分かるかしら？」

「……八神さんの弟さん？」

「いいえ。氷菓よ」

「……嘘だろ!？」

あれが白川さんだと!？」

……いや、よく見れば面影がある。髪も帽子の中にしまっているのだろう。よく見れば……本当によく見ないと分からないが、確かに。あれは白河さんだ。

男装もできるのか。よくできてるな……。

「しかし、何でここに?？」

「普段とは違う方向に帰るものだから気になったの」

「好奇心、猫を殺すって知ってるかい?？」

「ええ、無様な猫ね」

私はそうはならないわ——と、言外に自信を滲ませている。

俺としては本人が望まない以上あまり首を突っ込むのはどうかと思うが……。

「プロデューサー、言っておくけれど、氷菓の事情は調べて知っているわ」

「……そうなのかい?？」

「ああまで露骨に写真が載ったのよ。すこし調べればわかるわ」

まあ、そうなるか。

「別に本人から聞いているわけじゃあないのだから、構わないでしょう？」

「あまり褒められたことでもないぞ」

「ふふ……そうね」

それを理解してなおやるか。

まったく——なんとも言い難いな。

「恩人の家らしいから、あんまり邪魔してあげるんじゃないぞ」

「そう？ ……恩人の家と言うにはおかしくないかしら。こっちは、港よ」

「……そういえば」

船で海外を回っている人……にしては妙だな。この辺には倉庫くらいしか無いはずだぞ。

それも……言っただけ、暴の付くそっちの方面の人が多い。

確かに、そう考えてみると気になるな……。

「何事も無ければそれに越したことは無いでしょう。見届けたら、それで終わり。どう？」

「……乗った」

「好奇心は猫をも殺すんじゃないか？」

「俺は会社の犬だよ」

「あの三人のモルモットじゃあなくって？」

そうとも言う。

いや言っただけじゃない。実験台にはされてるが。

「行きましょう」

出会った当初は何だかよく分からないが妙に速足だった白河さんだが、基本的に今の彼女の歩行速度は大したものじゃない。

駅を出てすぐ、彼女の姿は見つかった。気配に気づかれないように適度に距離を取りながら、港まで進んでいく。

既に日は傾いていて、倉庫ともなるとあちらこちらに影がある。その間に隠れながら白河さんを追って行くと……なんとも、怪しげな船舶の前までたどり着いた。

「……あれ？」

「……あれ、なんだろうか」

……何で船？

いや、船から出てくるのを待っている、というのなら分かるんだが……どうもそんな感じじゃない。船の中に入ろうとしているのか？

「変ね。何かおかしい」

「……船の中に住み込みで働いているのかもしれないぞ？」

「今時そんな職業があるの？ 仮にそうだとしても、ホテルに泊まるなり実家に帰るなりするものと思うけれど」

「……どうなんだろうな」

怪しげな雰囲気だ。タラップの前には二人……体格の良い黒服の男がいる。外見だけで判断すると、他のプロデューサーが担当している村上巴むらかみともえさんの実家のそれを彷彿とさせるが……。

「！」

「お、おいおい……!？」

疑念を抱いたその瞬間、不意にあり得ない光景が目飛び込んできた。

男たちが、白河さんの腕を掴んで船の中へと引きずっていく。

白河さんはそうした中であって焦りと不快感を露にしており、この状況が彼女の意図したものでないことを言外に告げている。

間違いない。誘拐だ……！

「穏やかじゃないぞこれは……」

「——プロデューサー。駄目よ」

「しかし……！」

「こちらの存在に気付かれたらどうなるか分からない。それよりも……」

「……警察に連絡か？」

「ええ。でも、船なのだから出港してしまう可能性もあるわ」

「……となると、黒服の男たちの隙について救出に向かう——しか無い。」

今までずっと無駄に高い身体能力を持て余していたが、使いどころがようやくわかった。

俺の担当するアイドルに危機が訪れた時……その時こそ、本気の出し時だろう。

……いや改めて考えると現代日本で何言ってるんだ俺。

「出港するような様子があったらすぐに助けに行く。それでいいか？」

「ええ。けれど、その時はタラップが上がると思うのだけど——」

「ああ、その通りだ。今上がった！」

話している間にも、他の黒服の男たちが船の中へと戻って、それに合わせてタラップも上がっていくのが見えた。このままじゃ危ない！

「八神さんはここで警察に連絡を……」

「もう終わっているわ。私も乗る」

「……危ないかもしれないんだぞ？」

「危険は承知よ」

……いや、どう見ても危険は承知というよりスリルは楽しむもの、みたいな表情だが。

ええい、こうなると聞きやしないか。一ノ瀬さんや池袋さんが発明品を思いついた時と同じような目をしているし……。

「けれど、どうやって船に——」

「無理やりさ」

そう告げると、俺は船体の凹凸部分に手をかけ足をかけ、勢いよく駆け上る！

幸い、音はそれほど響いていない。ぽかんとした表情で見上げる八神さんを引き上げるため、近くに置いてあった網を降ろした。

「プロデューサー……あなた、何者？」

「プロデューサーさ。パルクールとボルダリングが趣味のね」

以前そう言ったら信じられないものを見るような眼で白河さんから見られたなあ。

彼女は基本ジト目だけど、その時ばかりは視線がいつもの比じゃないくらいキツかった。

「やて……」

船が出港するような様子はまだない。エンジン音がしないから、そこは理解できる。

ここでタラップを上げたのは、外からの侵入を防ぐためか、内側から逃がさないようにするためか……それともその両方か。何にせよまっとうな理由とは思えない。

「変ね」

「変？ ……確かに変、というか変態っぽい感じもするが」

「そっちじゃないわ。この積み荷よ」

「積み荷？ ……何があるんだ？」

促されるまま視線をやると、コンテナの中にはいくつもの美術品があるようだった。

美術館に滅多に行かないような俺ですら分かるような名画に、彫刻……しかもどれも見た目は殆ど均一だ。

ただならぬものを感じてならない。この船では一体何が行われているんだ？

「……行きましょう。音を立てないように」

「ああ」

「おおっと、待ちな、兄ちゃん姉ちゃん」

「!？」

声が聞こえたその瞬間に、俺は八神さんを抱えてその場を飛び退いた。

直後——船を揺らすような轟音と共に、拳が船体を叩いた。

「くっ……だ、誰だ!？」

「誰、たあご挨拶だなあ。お前ら、そこでこそそそしてた連中だろう」

「いや、こっちにも事情があつて……」

「悪イが押し問答してるほど暇じゃねえんでよう」

……そこにいたのは、黒服の大男だ。メリケンサックをはめ、敵意

を剥き出しにしてきている。

彼にとつて俺たちは紛れもなく不法侵入者だ。なるほど、許してなんておけないな。

けど、俺だってそうも言っていられない。

「このまま出ていきやあそれでよし。そうじゃねえなら……」

「何度も言わせないでくれ、こっちにも事情がある」

「そうかい」

——もはや、問答は無用か。

「プロデューサー」

「大丈夫だ。俺はこれでも柔道の黒帯を持っている」

「本当に何者？」

何度も言うことでもない。

——ただのプロデューサーだとも。

「恐ろしい強敵だった……」

週間少年誌に換算して単行本2、3巻ほどの濃密な内容の格闘を終えた俺は、動けなくなった男を横において船の中にまで侵入していた。

その中にあっても、いるわいるわ。ガタイの良い男に怪しげながら妙な身体能力を誇るヤツ……本気で戦わなければやられるところだった……！

「……私たち、アベンジャーズか何かだったかしら……？」

「今更だよ」

スパイアクション顔負けの大立ち回りを披露しておいて、まともな感性で言葉を口になどできるわけがない。

俺だって途中から何してんだろう俺、なんて思ってたくらいだ。それ以上のツツコミはやめてくれ。

「それよりも、白河さんだ。きつとこの部屋にいるはず……!」

「他の部屋は風潰しにしていったからそうでしょうね……」

心なしか八神さんもだいぶ疲れた表情をしている。

おのれ悪漢どもめ……俺の担当アイドルにこんな顔をさせるとは

……!

「今ものすごいお前が言うな感を覚えたわ……」

「ええ?」

失敬な。

ともかく白河さんを救出しなければ。

扉を開けると、そこには――。

「う、わっ……」

「うん?」

「は?」

――無数の白河氷菓グッズに埋め尽くされた部屋があった。

その中央、応接用と思われる机を挟んで、中年男性と白河さんが……カードゲームに興じている。

……あ。あれえ?

「……………は?」

「白河さんの目つきが、いつも以上に鋭い。見るだけで分かる。あれは完全にキレてる目だ。」

状況を考える。船に連れ込まれた白河さん。俺たちが入ってくるまで楽しい様子だったらしい白河さんとこの中年男性。ナイスミドル白河さんの今日の外泊の目的……。

なるほど、これがバッドコミュニケーションというものか。

「はっ？」

あ、分かる。あれはそう、殺意というやつだ。

これ下手なことを言ったら殺されるなど、頭ではなく心で理解できる。そのくらい怒っている。

だが、当たり前も当たり前だ。敬愛しているであろう恩人との憩いの時間を邪魔されたとなれば、当然に、キレる。

「は、はは……は、その……助けに来たぞー……なーんつつて……」

「誰だお前さん方」

「……あの、その子の……プロデューサー……です」

その中年男性は、一言で言うなら……強面こわもてだった。

切創か何かと思われる頬や額の傷跡、ビシツと着こんだブランドもののスーツが余計にその恐ろしさを際立たせる。ありていに言っ、イタリアンマフィアのボスのようだ。

恐ろしいなんてもんじゃない。殺気に向けられてなお立ち続けることができる今が奇跡的なくらいだ。

「プロデューサーだあ？」

「……ま、一応ね」

はなは甚だ不本意という風に、しかめっ面をしながら答える白河さん。

そんな顔して言わなくてもいいじゃあないか、事実なんだから！

「ほお。じゃああいつらから報告の上がつてた馬鹿つてなああんだか」

「え、ええ……」

「何しに来たのさ」

「……氷菓が妙な場所に行くから後をつけていったら、屈強な男たちに連れて行かれるのを見ていてもたってもいられなくなったのよ」

助かった！ 八神さんからの説明ならまだ白河さんも聞く耳を持つてくれる！

「……ふーん」

ダメだ！ 全く殺意が消えない！！

そんな間にも男性はこちらに詰め寄るようにして距離を詰めてくる。

「ウチのモンが世話んなつたみたいだが」

「も……申し訳ありません。白河さんが攫われたかもしれないと思うと、無我夢中になつて……」

「ほう」

話せ、と男性に促されるまま、今日の出来事について説明を重ねていく。男性の方はやや表情が軟化していくのに対し、白河さんの表情はどんどん能面の如く無表情になっていった。

殺意は一切衰えることを知らない。

こちらからの説明を終えると、逆に男性の方から彼らの事情について語られることとなった。

曰く、あれは自分のグツズが山のようにあると聞かされて、気恥ずかしさのせいで白河さんが嫌がったのだということ。

曰く、この男性は古宮さんと言い、白河さんの後見人にも近い立場

にあること。

曰く、船に積んである荷物の多くは、贋作商という生業のため。

曰く、世界中を巡って品物を売るために船上で生活を送っている……。

聞けば聞くほど俺の浅慮さが知れてくる。勘違いから来たものとはいえ、なんてことしちまったんだ俺は……！

「……ま、事情は分かった。うちのもんにも責任の一部くらいはあるな」

「本当にすみません、そのようなことは露知らず……」

「ホントだよ。大人なんだから対話の一つもしたらいいのに」

「うぐ……で、でもさ、先制攻撃なんてされたら、さ？」

「言い訳はいい。見損なったよ」

「ゴフツ」

一息に血を吐くようなストレスが俺の胃を襲った。

見損なつ……見損なつた……よもや担当アイドルにここまで言われるとは……。

九割俺のせいとはいえ、ひどく落ち込む。

「今回は私も責任の一端があるわ。ごめんなさい」

「……別にいいよ」

「……あ、あれ？俺と八神さんへの対応違くない？」

「高校生に責任能力問う方が間違ってるない？」

仰るとおりである。

「ボクは大丈夫だから、今日はもう帰ってよ」

「わ……分かった。そうするよ」

「警察に説明もしないといけないしね……」

そうだ、それもあつた。全部勘違いでしたと言っておかないといけないな。

こんなことで出勤させてしまつて本当に申し訳ないことをしてしまつたものだ……。

「……プロデューサーさんよ。ちよいと、いいかい？」

「あ、はい。何でしょう」

うなだれていると、ふと古宮さんから声がかかった。部屋の隅に来るよう手招きしている。

「ま、今回のことは、あんたがあの子のことを強く心配してくれたからこそ、起きちまつたことだ。あんまり気にしなさんな」

「も、勿体ないお言葉です」

「……ちつと方法は間違つてるかもしれないがな、まだお前さんは若造だ。これから学んでいきやあいい」

「恐縮です」

だからつてそれに甘んじていいってわけでもないんだよな……今回のことでひどく痛感した。

あんなことを二度と言われないようにしないと……。

「……何にせよ、こんな心配してくれるような人がプロデューサーつてえのは、俺としちやあ安心だがね」

「そうですか？」

「あの子は色々危ういからなア。ずっと前からそうだった」

昔を懐かしむように、古宮さんは軽く目を閉じる。

「感情がねえつてんじやないかつてくらの頃と比べりや、今は随分魅力的だ。けど、相変わらずの部分もあんだなア」

「相変わらず……数年前から、ということですか？」

「ああ。『自由が欲しい』って割にやあ『自由』って概念を理解してなかったり……自分のことを捨てて人のこと優先したりなあ」

それは、俺も思っていたことだ。

昔から見ている人には、もう分かっているのか。分からないわけがないかもしれない。たった二か月半くらい過ごした仲の俺でさえ、それが分かっているんだ。近しい人が分からないわけがない。

「それに、あの子は人の求めることをやりたがる。時々変なこと言い出したりするだろ」

「え、ええ、まあ」

「うちの若いのでオタク文化に詳しいヤツがいてな、昔っからずーつとあの子に色んなこと教えてんのよ。あの子もそこから学んだことを言えばウケが良いつつつて学んだみたいでな……あんまり良くない癖だよ」

——確かに、少しだけ違和感を覚えてはいた。

白河さんはあれで14歳だ。まだ13歳だったか？ まあ、どっちでもいい。

施設暮らしともなれば普通、そこまでそういう文化に触れて過ごすことは無い。どこからそんな知識を得られたのか、ということもそうだし……必要以上にネタに走りがちだ。

そうすると、ウケがいいからやる、か。

分からないでもないが、そうか……確かに、あまり良いものとは言えないかもしれない。

ウケ狙い自体は悪くない。けど、彼女自身のスタイルというものが確立できていないまま真似ばかりを続けていけば、「白河水菓」という人間の個性が失われる危険性もある。

自由を求めているのに自縄自縛に陥ったりと言った矛盾を内包した彼女の性質は、もしかするとそういう部分からも来ているんじゃないやあ

……。

「……俺ア日本にはあまりいられない。だから、プロデューサーさん。あの子を見てやってくれ。他に見る子もいるだろうから無理は言えないが、な」

「いえ。見守ります。それが俺の仕事ですから」

「そうかい。なら、頼むぜ、プロデューサーさんよ」

「はい」

俺は彼女のプロデューサーだ。それを名乗るなら、俺は古宮さんから受けたこの信頼に報いなければならぬ。

勿論、みんなを見る必要もある。その上で一人一人に目を向けるなんていうのは至難の業と言ってもいい。

それでもやらなければならないのだ。

プロデューサーの道は修羅の道。無理、無茶、無謀が何だ。押し通るしか無いだろう。

俺は一つ、決意を固めた。

「話終わったんならはよ帰れ」

「え、ひどくない……?」

「うるっさいな、『ひどくない』はボクの台詞だよ！　人の楽しみ邪魔してどう思うのさ!?!」

「ごめんなさい!!」

これ以上ここにいても、無暗に怒らせてしまうだけだ。俺は八神さんを連れて、即座に船から降りた。

途中途中、倒していった人たちも助け起こしながら誤解を解き、外に出た頃にはもう警察も到着していて――。

……またも説明に苦慮することになったのは、言わずとも知れることだろう。

20：お弁当の日

「おい氷菓、そろそろ機嫌を直したらどうだ？」

「機嫌？ 何がだよ」

「自分を客観視できていないのか君は。明らかに普段より口調が荒れてるぞ」

「……………」

——例の事件の翌日、ボクはいつも通り、晶葉と志希さんと一緒にプロジェクトルームに訪れていた。

いや。いつも通りかどうかと言うと、かなり微妙なところだけだ。ボクは未だに昨日のことを引きずりっぱなしだ。

胸の奥がひどくイガイガする。疼くように、肚はらの底から痛みを感じる。ありていに言って最悪の気分だ。

「まったく、氷菓らしくないな……………」

「いつもなら『ま、いいか』って言って終わるのにねー」

「ボクらしいとからしくないと何だよ……………」

ホントは適当なこと言ってるだけなんじゃないのか？ ボク自身が自分のこと全然分かってないのに、外から見て「らしい」とか「らしくない」って、決めつけられたってどうしようもない。

…………と、そんなことを考えていると、唐突に志希さんがボクの方に急激に距離を詰めてきた。

「…………な、なに——ひあつ!？」

「!？」

「んん〜これはこれは…………ほうほう♪」

危機感を覚えたその瞬間、志希さんの手がボクの全身をまさぐり倒

す!

オマケに全身をハスハスされていく。

いかん! それはマジでヤバい! 色々とマズい!

「うん、なるほどー」

危機感を覚えたその直後、志希さんは絶妙なタイミングで全身をまさぐるのをやめ……それに伴って、ボクの肩を抱き寄せてくる。

そのまま一緒に部屋を出るはこびになってしまう。何だよもうーなんて反論をする間も無い。ボクの筋力では一切逆らうこともできず、そのまま……トイレまで引つ張り出されることとなった。

———トイレ?

★ 台詞のみでお楽しみください ★

「ウワアアアア何脱がしてんのさ!?!」

「まあまあまあ」

「えっ何コレひっやだやだやだやだなになにこれひやああああ」

「にやははははオンナノコは誰でもこうなるんだよ♪」

「誰でもお!?! 嘘だよそんなだってこんなういいいい」

「お腹痛いし頭痛いしイライラしたよね〜」

「うわっうわっうわつまさかこんなあばばばばばば」

「ついでにつーん♪」

「きゃんっ!?!?!」

「うわ珍しいもの聞いちやったー」

「あつ、ひんっ!?! ちよ、ちよ、やめっ……んっ!?!」

—————……。

……そんなこんなで十数分後。

「晶葉ちゃーん、お赤はーん♪」

「なにっ!?! ……なんだそういうことか」

真つ赤な顔しながらプロジェクトルームに戻ると、晶葉がどこなく安心した風にそんなことを呟いた。

わけもわからず何故か不機嫌、というボクの状態を不思議に思っていたのだろう。改めて理由が分かりさえすれば変に怖がる必要も無いってところか……。

「はじめてじゃそりやあ分らないよねー♪」

「私も最初は焦ったものだなあ」

「……うう」

……うー、恥ずかしい。初めての経験だとはいえ、自分で自分の身体のが分かってなかったなんて……。

元々男だったんだから、生理の時の感覚だとかホルモンバランスの乱れ、そこから生じる精神的な不調が分からなくてもしょうがないかも——と思いはするけれど……何にしたって不覚だ。もつとよく理解してさえいれば当たり前散らすことだって無かったのに。

「しかし急だったな……まあ、あれだな」

「最近よく食べるようになったからだろうねー♪」

「ん、うん……まあ……うん」

その辺はあるだろうな、うん……絶対ある。

けど、それにしたって醜態だ。最悪だ。何してたんだよボクは。自分が今女性なんだってことを割と痛烈に実感させられる……。

「晶葉も志希さんも、毎月こんなん……?」

「私は軽い方だぞ」

「痛み止めとか飲んでるから問題なっしーん♪」

……「とか」？

いやよそう。これ以上追及するとまずそうだ。

何にしてもこれは、今回初めてだったからっていうのもある、か……。

「はい、あーん」

「……あーん」

志希さんに差し出された錠剤をそのまま飲み込む……と、ほどなくして全身の諸症状が消えて失せた。

即効過ぎて怖いんだけど、まあ、効き目があるんならいいか……。

その後は二人と一緒に生理用品を買ってプロジェクトルームに戻ったのだけど——落ち着いてくると、今度はさっきまでの自分の言動に対して血の気が引いてきた。

ヤバい。何がヤバいつて——いや、もうまずい。いつものボクだったら言ってるか、あんなこと？

……ちよつとくらいは言ってるかもしれないけど、何にしたってイライラしすぎだ。無いわあれは。

人生経験と……もしかしたら女性経験の豊富さのおかげで何となく察してた古宮の爺さんや船員の連中はともかく、善意でやってきたプロデューサーに当たったのは良くない。あれこそ「ま、いつか」で済ませべき案件だった。それができる状態でもなかったのだけだ。

真理に達したの何のと言っておきながら、なんて醜態だ。身体の機能の一つや二つでああまで精神的に乱れ切ってしまうとは……。

「はあー……」

「志希、これはあれか？ 生理の時特有の揺り戻し」

「というか冷静になって自分の言動を振り返っただけじゃない?」

「志希さん正解」

「イエー」

「いえー」

ぱちーんいえーい。

幸い、痛みや胸のむかつきなんかは志希さん調合の薬のおかげでだいぶ薄らいでいる。

自分の身体を改めて解析してみても、ホルモンバランスにもそれほど異常は見られない。

……あくまで「それほど」だ。皆無ってわけじゃないけど、このくらいなら平静を保てばなんとかなる範囲……だと思う。気を付けるに越したことは無いけど。

「ちよつとプロデューサーに昨日のこと謝ってくる……」

「助手なら気にしてないだろう」

「ボクが気にするの」

そりゃプロデューサーは気にしないだろう。おおらかな人だし。じゃあ、だからって何も言わずにいていいわけじゃない。はじめとしてそこはちゃんとしとかなないと。

オフィスに入ると、プロデューサーはボクを見るなりぎよつとした表情を向けた。

そりゃそうだ。まだ怒ってると思ってるんだろうし。

「今大丈夫?」

「え、あ、ああ。……どうしたんだ?」

「……もう怒ってないってことと、それと、ごめん、って」

「ああ、いや、別に……え、マジで? 怒ってないの?」

「マジだよ。その——色々あって」

「色々って?」

「ああ。初潮がね？」

「オーケー分かったそれ以上は男の俺が聞いちやマズ」

「あのドリンク飲んでるせいでお腹の調子が悪かったりムカムカするのかもしれないからさつき血がべえーって」

「やめろオー！」

何をそんなに焦ってるんだろう。ボクの中身なんて元男なんだから気にしなくっていいのに。

「えーつと……あー……つまり、あれかい。昨日は、えー……生理痛で？」

「ん……だいぶ怒りっぽくなってたみたい。いくら古宮の爺さんと一緒にいる時だつて言つても、心配して来てくれたのにあの態度は無かったよ。……ごめんなさい」

「あ、いや……仕方ないさ。女性は特にその、うん。知ってる」

「前にも似たようなことが？」

「高校時代に、部活の友達と少しね……」

頬を押さえているあたり、デリカシーの無い発言をしてしまった結果ビンタされた……つてところだろうか。

プロデューサー、変なところで大雑把なことするからな……あり得るかもしれない。

「ともかく、そういうことなら気にしなくていいよ。あと、えー……ちひろさんに報告してくれるか？」

「ちひろさんに？ ……ああ、そういうこと？」

「そういうこと」

そっか、周期によっては仕事に差し支えることもあるのか。ライブ然りイベント然り、あるいはグラビアだったり……まあ、ボクの場合グラビアとか無いだろうけど。

志希さんの薬の力である程度までは緩和もできるだろうけど、痛み以外の諸々がやっぱり問題だ。万が一のことがあったら目も当てられない。

「分かった。伝えと……？」

「ん？」

「ううん、何でもない」

ふとプロデューサーの足元のゴミ箱を見ると、お昼に食べたらしいカップ麺の残骸が見えた。

前のコンビニにあったな、あれ……えーっと……「背脂増量中！濃厚肉マシ醤油ラーメン」……。

めつためたに体に悪そうだ。おまけにサラダの一つも食べてないのか。いいのかプロデューサー。体が資本じゃないのか。

「ん……あ、そうだ、プロデューサー」

となると……と、ふと思いつく。これならまあ、いいだろう。

「ん？」

「震えて待て」

「……俺何されんの!？」

さて、どうせだし今度の志希さんの誕生日の準備と並行して進めましょう。

後ろで「誰か説明してくれよお!」とおののくプロデューサーを置いて――まずはちひろさんへ報告に向かった。

@ —— @

「はいこれ」

「ナニコレ」

翌日、ボクはプロデューサーへとあるものを手渡していた。
あるもの——と言っても、そんな大層なものじゃない。

「お弁当」

「……お弁当」

ただのお弁当だ。百均のプラスチック容器に料理と白ご飯と漬物を詰め込んだ程度のもの。

一見すると出来あいにも見えなくはないけど、一応、これでも手作りだ。

プロデューサーは目を白黒させている。どういう状況なのか、いまいち分かってないのだろう。

「……え？」

「だから、お弁当」

「ああ、先輩に渡しとけばいいのかな？」

「違うよ。そっちは多分先約とか入ってるでしょ。プロデューサーにだよ」

「そっか、俺か。……俺エ!？」

「うわっ」

あまりの勢いに思わず後退してしまった。

「……ええ……いや、何この勢い……?」

「お、俺？」

「あ、ああ、うん……この前のお詫びに」

「えっ、マジで!? それで……買ってきてくれたのか?」

「え、いや……作ったんだけど……」

「嘘だろ!？」

「こんなことで嘘つかないよ」

弁当箱なんて持ってないから、素っ気ない外見にはなっちゃったけど。
ど。

手作りなのは、まあ、手作りだ。

「う、うお……うおお……」

「……えっ」

見ると、プロデューサーは何か感極まったのか、弁当を天高く掲げて打ち震えていた。

……えっ、なにこれこわい。

「担当アイドルからの弁当の差し入れ……！ しかも料理とイメージの程遠い白河さんからだなんて……！」

「おい」

肇さんやしゆがはさんからも言われたから知ってるけど、プロデューサー本人が言うなよ。割とシヨックだよ、そのイメージ。

「そんなに嬉しいわけ？」

「プロデューサー冥利に尽きるとも！」

「そ、そう……」

……ま、まあ……喜んでくれてるならいいか……。喜びすぎで若干引くけど……。

「……でも、弁当にしてはだいぶ温かくないか？ 今作ったみたいなの……」

「細工したからね。理屈は企業秘密。それとも冷たい方が好きだった？」

「いや、俺は風呂と食事は温かい方が……げっ」
「げっ」

見ると、プロデューサーはある食材——ブロッコリーを見て微妙な表情をしていた。

「……苦手なの？ ブロッコリー」

「まあ……青臭いし、食感ももそもそだし……凝縮された森だろあれ」

どういう喩えだ。

でもまあ、理解できなくはない。実際のところ青臭いことは青臭いし、食感も嫌いな人は嫌いだろう。苦手な人は多そうだ。

「苦手なら食べなくてもいいよ。他に好きな人がいれば渡すし、なんならボクが自分で」

「いや！ いやいや、その程度のことでは食べないなんてそんな勿体ない！ 今すぐ食べるよー！」

「え。まだお昼には早いんじゃない？」

「いや、実は今日遅刻しそうになって朝抜いてきたんだよ。どんどこいさ」

こっちを気遣ったって風じゃないが……それもそれでどうなんだろう。

体が資本、つてやつじゃないのか、こういう仕事の場合。

「よし、いただきまー……うおっ!？」

「え、な、何？」

「……いや、すげえいい匂いが」

「ああ、そう……」

それで驚かれるのも困る。「いい匂い」という評価は、まあありがた

く受け取つとくけど。

鼻と口が直接的に繋がっているだけあって、嗅覚と味覚はそれなりに関連性を持っている。片方の機能が損なわれている場合にはもう片方にも不調が出るのがまある。

だからここで「変な臭い」と言われてしまうと、そもそもプロデューサーの口に合わないという可能性もあるので、色々マズいわけだ。文字通り。

流石にお詫びに口に合わないものを渡すってわけにはいかないしね。……ブロッコリーのことは置いといて。

「……ちなみに、白河さんのおすすめは？」

「ブロッコリー」

「う……っ、ええい、男は度胸！」

勢いよくブロッコリーを口に含むプロデューサー。次の瞬間、プロデューサーの目がカツと見開かれ——あれ？ と、首を傾げた。

「……あんまり青臭くない？ うん……割と食えるぞ、これ……あれ？」

「そりや良かった」

「これ、どうしたんだ？」

「丁寧の下処理して、適切に調理しただけだよ」

茹でるにしても茹でる時間、炒める場合には油の量や火力……調味料や香辛料によっても、味やおいは変わってくる。

その辺を上手く調理しさえすれば、野菜でも肉でも魚でも、臭みを取ることは充分可能だ。この手法でボクは園の好き嫌いを半分まで減らした。

「これだけできるってことは、白河さんは好き嫌いって無いのかい？」
「水銀とか」

「……実質無いってことだな！」

こっちは医学が発達してて良かった。あの喉がただれるような感覚とか胃が物理的に重くなる感覚はおよそ人生で何度も味わいたいものじゃない。

「この分だと料理系の仕事も入れていいかもな……これは？」

「ブロッコリーをつなぎにしたハンバーグ。テレビでみかけたからちょうどいいかなって」

「ふむふむ。これは？」

「ただの出汁巻き卵だよ。こっちは鮭の西京焼き」

「随分珍しいもん作れるんだな……」

「あとは見ての通りのもの。まあ、適当に食べてよ」

別に珍しくはないと思うけど。えのきとアスパラのベーコン巻き、煮しめと煮凝りと……まあ、そのくらいかな。

栄養バランスは適当。まあ、見ての通りってくらい。プロデューサーの普段の食生活を考えると、これで妥当……だと思う。多分肉が無いとあんまり食いが出ないだろうし。

こういう場合、「正確な栄養バランス」よりも消費と「食べやすい」方が重要になると思う。そもそも食べる気が失せると量を食べられないし。この数日間によく分かった。まあ、それを捨て置いてでもやらなきゃならないことも無きにしもあらずというか……うん。

ともあれ。プロデューサーは当初の躊躇いなど無かったかのように、ものすごい勢いで弁当を食べ進めていった。

ほどなくして、全部食べ終えたプロデューサーは、弁当ガラを優しく机に置き、ボクの方に向き直った。

「ご馳走様！　ありがとう、美味かったよ！」

「お粗末様。容器は捨てていいから」

「そうかい？」

どうせ百均でウン枚百円のやつだし。

「この分なら将来はいいお嫁さんにでもなりそうだね」

「結婚相手はロリコンの誹りを免れられないだろうけどね」

残念ながら、今のところボクの身長が伸びる気配は無い。成長期なんだからとも思うけど、いいところあと何センチか伸びるかどうかってところだろう。適性体重を保ったとしても大きく体型が変わることも無いだろうし。

まあ作り変えようと思えばできるけど。

「そもそも結婚する気無いし」

「そうか？ 何年か後に女優や歌手に転向を考えるようになったら、別に問題無いと思うんだが……勿体ないな」

「プロデューサーがそういうのに寛容なのはいいと思うんだけどね。少なくとも今は考えられないよ」

そもそもボク、男だった部分を完璧に捨てたわけじゃないし。

……まあ、そもそも前世で男だったってことを有効に使ったことなんて無いんだけど。

よっほど鮮烈な出会いをして、よっほど付き合いが良くて、よっほど興味の惹かれる相手でもないと、まずそういうことにはならないだろう。要するにホモになれてのと似たようなもんだし。厳密にはだいぶ違うけど。

もつとも、精神は肉体の影響を多分に受ける。実際に昨日までにそれを経験していたし、その辺はよく分かってるんだけど……まあ無いな。

「プロデューサーこそお嫁さん探したら？」

「今は仕事が伴侶だよ」

……実にやりがいがあるようで。

そもそもプロデューサーの場合はその気になったらすぐに結婚相手手くらい見つけられるって余裕もあるだろうな。

文武両道で、性格も決して悪くない。高給取りな上にルックスもイケメンだ。むしろスペックの高さのせいで一歩引いた位置から見られる可能性もあるけど、これで結婚相手を見つけれないって方が嘘だろう。逆に金目当ての悪女が近づいてこないか心配になるくらいか。

「ところでさ、こんな感じの弁当とか……また作ったりは、流石にして、くれない……か？」

「今回ののはお詫びだから特別。材料代くれるなら作ってもいいよ」

言うなればそう、詫び弁当。

無課金ではここまでが限界だ。

「いや、普通にもっとお金取っていいんじゃないか……？」

「？ 何で？」

「あー……いや、うん。いいんだ。白河さんはそのままできてくれ」

変なプロデューサーだな。

ボクにそんなこと頼むってことは少なくとも知り合い以上の関係性なはずだよな。材料代以上のお金を取って何になるんだ……？

と、そう思っていると、プロデューサーは財布から諭吉さんを取り出してボクに深々と頭を下げて見せた。

「……え。え？」

「……一週間分ほど……」

「マジに取っちゃったんだ……いや、いいけど……あ、あのさ、プロ

デューサー。一応プロデューサーも高給取りなんだから、外食とかの方がいいんじゃない？」

「いや、俺に選択権があるとカレー、ラーメン、丼もの……の繰り返しになりそうで……」

「……半分でいいよ。一万円じゃ多いから」

何とも、独身男性にありがちな食生活をしているようだ。

昨日も思ったけど、せめてサラダでも食べればいいのに……。

そんなこんなあって、夕方。今日のレッスンが終わる頃になって、ふと、何の前触れもなく何故かしゅがはさんがボクのもとを訪ね、一万円を差し出してきた。

何を言っているか分からねえと思うがボク自身も何が起きたか分からなかった。

何故一万円。何故このタイミング。そして何が目的なのか。何一つ分からない。

「……え？ 何コレ」

「おべんと、作ってくれないかな☆」

「え」

……ああ!?

「え、あの、もしかしてプロデューサーにでも聞いたの？」

「そゆこと☆ で、大丈夫？」

「いや、まあ……大丈夫だけど……」

「何だ氷菓、いつの間にキミは弁当屋になったんだ？」

「そういうつもりは無いよ」

晶葉にツッコまれたけど、流石に心外だ。別に好き好んで……いや嫌いではないけど。

ともかく、別にそういう理由があって作ったんじゃないというのに。

「変に当たり散らしたことのお詫びだったんだよ。で、材料代くらい出してくれたら作るよ、って」

「なるほどな。私も頼む」

「あたしもー♪」

「そこでノってこられるとまた困るんだけど」

「おーいお姉さんはどうしたー☆」

「あ、ごめん。いいよ。どんなの？」

「へるしーだいえつとふーど☆」

「……うん」

言うと思った。

というかいつもダイエットしてんなこの人。

しかし、まあ、そういうことなら確かに一万円は欲しい。ダイエット食ってやけに高いし。

「でもそれならトレーナー姉妹に言えばメニューくらい貰えるのではないか？」

「いやあ、あれそんな美味しくないし？」

「本来ダイエット食ってそんなものだと思うけど……」

「そこで美味しいって評判で実際美味しかったあいすちゃんに頼みた
いってワケ☆」

「……そこまで評価してくれるのは嬉しいけど」

「氷菓だけに」

誰が上手いことを言えと言ったんだ晶葉。

「あと、七海もお願いするれす……」

「え。七海ちゃんも？」

「はい。これを——ぜひ！」

と。

ズシ……とした重みと共に手渡されたのは、びちびちと活きのいい
——鯛である。

ナンデ!? 鯛ナンデ!?

「鯛……!?!」

「鯛れす」

「鯛……」

これで弁当を作ってくれと?

……マジで?

@ —— @

それから翌日、ボクは二人に頼まれた通りの弁当を持って来てい
た。

しゅがはさんの分は、カロリーその他を抑えめにしたダイエット用
の弁当。正直言うとう味を調えるのにだいぶ苦労したけど、これはこれ
でダイエット食としては悪くない程度には仕上がったと思う。

七海ちゃんのは……うん。鯛。とにかく鯛をふんだんに使った弁
当だ。

頭や尻尾の方はお鍋で炊いて、いわゆるアラ炊きに。半身は鯛めし
にして、残りはから揚げにしたり水筒に入れてお吸い物にしたり、ト
マト煮込みやクリーム煮込みにしてみたり……と、とにかく思いつく
限りの料理を詰め込んでみた。我ながらちよつとやりすぎな気もす
るけど、よくできたようにも思う。

さて、あとはこれを渡せばいい——というところに来て、今度はま
た別の人の姿がレッスルームの前に見えた。

「おはようございます、氷菓ちゃん！」

「え。法子さん？」

椎名法子さんしいなのりこ。先輩アイドルの一人で、ドーナツに対して強い愛情を持つ人だ。

みちるさんと話しているところはたまに見かけるが、実のところボクはあまり話したことは無い。何でここに、と思うんだけど……本当に何でだろ。

「どうしたんですか？ みちるさんに何か？」

「いえ、今日は氷菓ちゃんに。そのみちるちゃんから噂を聞いて……」
「噂？」

「うん、材料を持ってきたらドーナツ作ってくれるって♪」

どうしよう。弁当作るって話に尾ひれがついてる。

「……えーっと……材料代いただけたら、お弁当作るってお話だったんですけど……」

「え、そうなの？」

「まあ……ドーナツくらいなら、大丈夫だと思います」

作り方自体はそんなに珍しいものでもない。要はやりようだ。最悪どうにか創ればいい。こういうフリを受けた時に錬金術は便利だ。

「それじゃあこれと、これと、あとこれ……で、お願いしていい？」

「はい。明日持ってきてますね」

「やった♪ ありがと、氷菓ちゃん！」

……釈然としない部分はあるけど、喜んでくれてるならまあ、いいか。

この分だけ法子さんと仲良くなれると思えば、それもまた得と言え

るし。

「よっ、氷菓」

「？ おはようございます、奈緒さん」

と、法子さんを見送ると、今度は奈緒さんが顔を出してきた。

……もしかして、このパターンは……。

「じ、実はさー！ ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいか？」

「……まあ、何なりと」

「なんか噂で聞いたんだけど、最近色んな人に弁当配り歩いてるって」

どうしよう。 尾びれだけじゃなくて背びれまで生えてきた。

「そ、それでだっ！ 例えばこういう……キャラ弁ってあるだろ？」

どうやって作るのか教えてくれないかなーって……」

「え、ええ……大丈夫ですよ。キャラ弁、ですよね……」

これはまあ、やり方次第だ。モノによつてはよっほど難しいものもあるけど、単純なものなら朝のあいた時間でもなんとか作れる。

あとは色彩感覚とセンスの問題だからそこは任せるとして、奈緒さんの求めている系統となると、アニメ系だから……ちよūdい食材は探さないといけないかもしれない。

そういった内容を伝えると、奈緒さんはメモを取って熱心に聞いているようだった。自分のためなのか人のためなのかはわからないが、なんとなく微笑ましい。

「よっし、分かった！ ありがとな、氷菓！」

「どういたしまして。分からないことがあったら、ラインでもメールでもまた聞いてください」

奈緒さんを見送ってそのままレッスルームへと入る。と、今度は更に早苗さんがそこに居座っていて――。

「おはよう氷菓ちゃん！ お弁当売ってるって聞いたんだけど買ってもいい？」

「色々と待ってください」

今度は胸びれまで生えてきた。

どうしよう。どこまで行くんだこの噂。

とりあえず早苗さんには「販売しているわけじゃない」旨を伝えて、丁重にお断りを申し上げておいた。

こういう時に「安請け合いはダメよ」と心配してくれるあたり、普段かなり豪快でいてもやっぱり優しい大人の女性なんだと分かって良かった。

……で、話は飛んでそれから一時間ほど後。

「白河。君が体を売っているという噂が社内にあつたが事実か？」

「事実無根です」

ボクは専務の部屋に呼び出されて色んな意味で頭を抱えるハメになつてた。

噂についたヒレがジェットエンジンに換装されて大気圏外までブツ飛んで行ってしまった。

弁当作るよ↓弁当売るよ↓売るよ↓（体）売るよ……という連想ゲームだろうが、どうしてこうなつた。

「そうか……いや。そうだろうと思つてはいたが、確認せざるを得なかつた。キミの……出自のこともある」

「いえ、大丈夫です……ちなみにその噂の出所はどこから」

「男性職員だ。不快な思いをさせたのなら申し訳ない」

「いえ……」

……まあ、ちよつとは思つても仕方ないかもしれない。連想ゲームつてそういうものだし。ただこれをまあいいかで済ませていいものかとも思うが……専務さんに任せるのが一番だろう。前の週刊誌の件もこの人に一任して事態を収束してもらつたようなものだし……。

「一応聞いておきたいのだが、何が発端か分かるかね？」

多分弁当の件だろう——と弁明すると、専務さんは少し考えるように顎に手を当てた。

「今回は社内のみ噂が留まつたから問題は無かつたが……特定個人への贈り物というのは、やはり好意を示す一般的な行動だ。キミにその気は無いだろうが、万が一彼との関係が『そういう』ものだ……週刊誌にでも煽られた場合、また面倒なことになる。やるなどは言わんが充分に気を付けたまえ」

「分かりました。すみません、専務」

「理解したならよろしい。下がりました。ああ、それと」

「はい？」

「……何か問題や相談があるようなら気兼ねなく言いなさい。この会社に所属している以上、上司たる我々が君の保護者代わりなのだから」

——背を向けられながら、そんなことを告げられる。

こういうことを真正面から告げると体裁が悪いだろうか。一個人に肩入れするようなもの、というのもあまり良くないのかもしれない。ただ、専務さんとしてはボクの背景事情を理解していることであつて、やや同情的、なのだろうか。

風の噂では、ちよつと家庭環境的に親の手の届きにくい市原仁奈いちハラニナちゃんも、時々専務室にいるというような話を聞く。

表面的には鉄の女と言われるような人でも、内面的には優しい人なのかもしれない。

なんとなく、今まであまり関わったことの無かった人の意外な一面を知ることができたようで嬉しい誤算かも。

……しかし、それでもまああいう噂はホント勘弁してほしいなあ。そんなことを思いながら、ボクは専務室を後にした。

「おい氷菓、クビとか言われてないか!? 大丈夫か!?!」

「専務に対してどういう印象持つてるのさ」

——あと、社内の専務への印象もちよつと整えた方がいいかもしれない。

21：ふたつのプレゼント

「さて、それでは——」

「誕生日、おめでとー!」

「おめでとー!」

「いえーありがとー♪」

——5月30日。

ボクたちは、プロデューサーを含めた四人で揃ってファミレスにやって来ていた。

目的は、志希さんの誕生日会——その二次会である。

スターライトプロジェクト全体、及び他のアイドルたちを含めた一次会は既に終わらせているため、今はあくまで……まあ、エリクシアだけの集まりだ。

本当なら誰かの家で手料理を食べようという話だったのだけど、流石に夜遅くということもあってやめておいた。女性陣の部屋にプロデューサーを上げることが、あるいは逆に女性陣がプロデューサーの家に行くことも望ましくはない。何日目だ週刊誌ということにでもなったら流石に笑えない。

「というわけで、早速プレゼントだ! 俺からはこれ。じゃーん、どうだ!」

「ネットワークス?」

「……いや、助手。流石にいくらなんでもそれはどうだ……?」

「アクセサリーはちよつと……重いと思うけど……」

「え、マジで……?」

プロデューサーが取り出したのは、ルビー……に似た色合いのイミテーションが輝く、小さなネットワークスだ。

似合うかどうかで言えばそりや似合うだろうけど……アクセサ

リーを贈るのは、誕生日だからと言っても流石にちよつと重力を感じる。

プロデューサー、誕生日だからって重く考えすぎてはいないだろうか。

「あたしは嬉しいけどー♪」

「ああ、うん、嬉しいならいいけどさ……」

プロデューサーの給料から考えたらアレ絶対高価だよ。

……志希さん、お金には頓着しなさそうだし、そういう意味じゃあんまり気にはしないだろうけど。だからって形に残るものとなると贈るのが躊躇われる、っていうのが一般的な考えだと思っただが……まあ、いいか。喜んでるし。

「そ、そんなこと言うなら二人はどうなんだ？」

「フツ。私はこれだ！ お掃除ロボRX！」

「……充分重くないか!? 物理的にも！」

——ごめんプロデューサー。これもこれで結構なもんだった。

手作りの上に形に残るものだ。家電で、消耗品だけにまだマシと思わなくもないけど。

「というか、お掃除ロボって言ったら普通ああいう……あの、ルンバみたいな」

「何故私がそんな当たり前なものを造らなければならん。お掃除ロボだと言うからには完璧なものを、だろう？ というわけで、自立稼働しかつアームを使って部屋の整理までするようなものを造ってみたわけだ！ そしてこのお掃除ロボの一番の特徴はメンテナンスフリー！ 自分である程度まで修理すらできるという優れものだぞ！」

「いくらなんでもオーバースペックじゃないか!?!」

「そんなことは……なくも……なくもない」

どっちやねん。

いや見る限り明確にオーバースペックだけど。

「じゃあ、氷菓ちゃんのは何かにヤー？」

「……なんか、二人の前だと霞むけど、これ」

言っただけでボクが取り出したのは、二本の瓶だ。中には数多くの種が詰め込まれている。

怪訝そうにそれを受け取って眺める志希さんに、ボクは続けて言った。

「どんな使い方してもいいよ。実験するもよし、咲かせてみるもよし、インテリアにするもよし」

「ふんふん？　ほうほう。ははーん、なるほど。へえへえ。そういうこと？」

「……まあ、そんなところ」

「いや何を二人で通じ合ってるんだ。俺にも分かるように説明してくれないか」

「色々ね」

「うんうん色々ねー」

「忘れたか助手、私たちのような人種は基本、過程をすっ飛ばして結論に入るのだ」

「なんてはた迷惑な」

ボクも別に何事に関してでも聡い方じゃないけど、こと志希さんとの間に関してはまた別だ。これがあればこれができるよ、この手法でこれができるんじゃない、よし、実験しよう対象はプロデューサーな……と、分かりやすいところなら本当にちよつと言葉を交わすだけではないかな、という程度にはまあ、通じ合えるようになった。

とりわけ今回は「これで実験してみたら？」とほぼ直接的に言っ

いるようなものだ。

今回ボクが渡したのはラクリモサとクガンノハナという花の種だ。どっちも珍しい……というか少なくともこっちの世界じゃ見たことはない。

遺伝子改良（物理）って感じの代物と言えるだろうか。いやまあちよつと頭の茹だったことしてるなとは思うけど、これ自体は別に大したものじゃないよ。ホントに。繁殖力弱いし、適当にその辺に植えてみたところで簡単に生えてくるようなものでもないし。

これで何かになればそれでいいし、インテリアになるならそれもそれ。とにかく——なんていうか、志希さんのため、というかもういっそ何かの足しになればそれでいい。

というわけで使い道は志希さんにお任せ。何になるかはまだ分からないけど、多分「何か」にはなるだろうし。

「いやーほんと改めてありがとねー♪」

「友達だからな、当たり前前だ。ちなみに私の誕生日は11日後なのだが」

「うんうん、用意しとく♪」

「ゲンキんな友達だなあ」

ちなみに、ついでに言うならトレーナーの明さんが同日。肇さんがその5日後で6月15日。……あと楓さんが14日。

亜子さんと頼子さんは、実を言うと今月既に誕生日会を催している。あの時点だとどっちもまだデビュー前だったから大々的にやるってほどではしなかったけど。

再来月になると3日に芳乃さんと22日にしゅがはさん。割とプロジェクトメンバーのみんな、誕生日はバラけてるような印象だ。

「氷菓はいつが誕生日なんだ？」

「ボク？ ……たぶん、9月20日」

「多分ってなん……いや、すまん、そうか」

当時は赤ん坊の未熟な耳だったから詳しくは分からないけど……施設に引き取られたのが退院の翌日で、だいたい一週間ほど過ごしてたはずだから……うん、逆算したらそんなところかな。

多分クリスマスの際に、勢いで、つてことなんだろう。その辺が透けて見えてしまうとなんともこう、いたたまれない気持ちになる。何だろうねこの気持ち。仮にも実の親だからだろうか。

「確か……わきやまたまみながよしすばる脇山珠美さんも同じ誕生日だったかな。765プロの永吉昴さんも」

「全員ミニマムだな」

「やめてよ同じ誕生日の人への風評被害」

それに確か765の永吉さんは頭一つ抜けて一番高いよ。

ちひろさんと同じくらいじゃなかったかな。もつと言えはあのくらの身長の人結構多いし。多分問題無いよ。きつと。

……でもどつかの腹ペコな騎士王も同じ身長で背が低いみたいなの言われ方してたし、やっぱり背は低い方なんだろうか。

まあいいか。

「なんとなく氷菓はクリスマスあたりが誕生日のような印象があったのだから」

「よく言われるよ。別にそんなことないんだけど」

「見た目氷属性っぽいからね」

「名前も氷属性だよな」

「だというのに氷菓ときたら……」

「何が悪いんだよ!?!」

ボク何気にヒドいこと言われてない？

勝手なイメージを押し付けないで、つて言ってもいいよねこれ？

志希さんの誕生日会から数日が過ぎた。

6月10日の晶葉の誕生日までは、まだもう少し時間はあるけど……6日は輝子さんの誕生日だ。そっちの準備も並行して行う必要がある。それが終わったら肇さんの誕生日も目と鼻の先だ。ちよつと急ごう。

今日は偶然にも、仕事もイベントも無い。プレゼントを買ってきて加工するにはちょうどいいだろう。

というわけで、ボクはいつも来るはずもない街の方まで足を運んでいたのだった。

「二人つきりでお買い物なんて珍しいですね〜！」

「……ソウデスネ」

——イヴさんと二人きりで。

いや別にそれが悪いことってわけじゃないんだ。けど、色々と待つて欲しい部分がある。

例えば今日は本当はクラリスさんと頼子さん、マキノさんを交えた5人で行くはずだったとか。クラリスさんが急用で兵庫の教会の方に顔を出さなきゃいけなくなったので席を外したとか、マキノさんと頼子さんが他のアイドルが急病で出演できなくなったところの穴埋めのために急に来られなくなったとか。志希さん呼んでたけどそもそも実験のために来られないとか色んな条件が重なった結果、二人きりという状況になってしまったのだった。

付き合い無いわけじゃないし、普段、寮で何気なく二人きりになったりすることもあるしそういう時は普通に喋るのだけど、他の人たちが急用で結果的に、というのはなかなか気まずい。

……いや気まずく感じてるのはボクだけか。イヴさんは特に気にした様子は無いし、問題は、無いんだろう。

普段からこういうパターンがあると「もしかしてボクがいるからあ

んまり来たくないのかな……」なんて心のどこかで考えてしまうから、どうしても申し訳なく感じてしまう。

今はそういう考えは取り除いて考えよう。そうしよう。しかしイヴさん、普段と服装がまるで変わらないな。

道行く人たちからやたらと視線が向けられている。ボクはまだ帽子被ったり普段と違う格好をしたりしてるけど、もうイヴさんだってバレバレだ。

そして結果的にボクが白河水菓ってこともバレつつある。この状況、あんまりよろしくないぞ。

「なんだか、注目浴びててあんまり良くないし……早めに済ませよ、イヴさん」

「? そうですかあ?」

「そうですよ。アイドルなんだから」

そりやステージ上で注目を浴びるならいいけど、ここはステージの外だし。

変に注目を浴びるよりは、ひっそりと目的を遂げたいと思う。

「氷菓ちゃんはどんなプレゼントを贈ろうと思うんですか?」

「輝子さんには、キノコソースを作って贈ろうかなって。晶葉にはプログラムミンクの教本で、肇さんには……釣りの何か、かな」

古今東西に珍しいキノコはあれど、輝子さんも食べたことの無いキノコというのはそれこそ珍しいことだろう。

というわけで品種改良(物理)して「あちら」のキノコであるウツトリユフとアマツタケという、芳醇な香りと強い旨味が特徴のキノコを利用したソースを作って贈るつもりだ。

晶葉はこの前泉さんに「プログラムミンクの技術はまだまだ子供ね」と言われたのを気にしていたようだから、プログラムミンクの教本。

肇さんは……陶芸の何かしら、と思っただけど、そもそもそういった

ものは既に自分で揃えているだろうし、あくまで趣味として楽しんで
いるらしい釣りに関するものを贈ることにした。なぜか一瞬麵棒で
も、と思っただけど、何でボクはそんなものを贈ろうとしていたのか、今
になってもよく分からない。別にうどん作ってるわけじゃないのに。

「イヴさんは？」

「そうですね。本当に欲しいものは、クリスマスプレゼントで贈る
つもりですので、今回は貰って楽しいものを贈りたいですっ！」

そっか、イヴさんにとってみるとプレゼントの本番はあくまでクリ
スマスなのか。

「ボクは感覚だと逆だけど、サンタ的には何かあるんだろうな……た
ぶん。」

……いやサンタであることはもうツッコまないぞ。

「じゃあ……食べ物とかがいいのかな」

「スイーツとかですか？」

「そうそう」

そうなると、一般的な百貨店よりは若干変なものを売ってるよう
な店の方がいいかもしれない。ヴィレ○アンとかその系列店とか。

サブカル臭がすごいとかにわかが行く店とか言われてある意味風
評被害があるけれども、ボク個人としては面白いもの売ってるから嫌
いではないんだよね……。

「こういうの、どうかな。青いジャムとか、可愛い見た目のティーパッ
クとか」

「あ、ふふっ。確かにいいですね〜！」

……しかし女子みたいな会話してんなボクたち。いや女子ではあ
るが！

その事実は事実としてこう、改めて認識すると恥ずかしいというか……自分のことながら、改めてまだまだ不安定なんだなあというのがよく分かる。

その後は、二人で目的のものを探したりして過ごした。

これも一種のデートと呼べるのだろうか。違うか。そんな色気のあるものじゃない。

ともあれ目的のものを買い終えたボクたちは、準備のためにも早めに帰路についたのだった。

「今日はアドバイスありがとうございました〜！」

「ううん、こっちこそ。付き合ってくれてありがとう、イヴさん」

何はどうあれ、ボクもイヴさんもちやんと目的を遂げられたのだからそれでよし。

お互いの趣味嗜好なんかもある程度知れたし、今後のためになったことは間違いないと言えるだろう。

「そういえば、氷菓ちゃんのお誕生日はいつになるんですか〜？」

「9月の20日。あんまり気にしないでいいよ」

「お友達なんだからそういうわけにもいきませんよっ」

お友達——友達か。5つも年上の人と友達っていうのも、なんだか不思議な気分だ。

でも、友達ってそういうものなのかもしれない。なんとなく。

「お誕生日だけじゃなくって、クリスマスもお祝いしないといけないですね〜。何か欲しいもの、ありますか？」

「ん……………」

何か、あったっけ。

いや、そもそもボクにとって「欲しいもの」って、何があるんだ？

まずい、前提からしてわけがわからなくなってきている。
ボクは……ボクが、欲しいものは——。

「……イヴさんは、自由ってどういうことだと思う？」

「……え？ ん？」

意味が分からないと言いたげに、イヴさんは首を傾げた。

「ごめん、わけわかんないよね。忘れて」

「いえ……でも、真剣に言ってるのは、分かりますよ？」

「それは、まあ、嬉しいけど……」

……根本的な問題、ボクの言ってることは普通の人にとっては「よく分からない」ものだ。

何せ普通の人にとって、自由という概念は当然に理解していて然るべきものだから。

それでも、イヴさんにはつこりと笑って、ボクに告げる。

「分からないことは恥ずかしいことじゃないですよ。私も結構色々……うう」

「……ええと」

「あつ、話がそれちゃいました。ええつとですね、これは私の意見なんですけど、最初にそう思った時のことを考えてみるのも、いいですよ？」

「最初にそれを……思った時の……？」

それは——覚えている。

というよりも、そうだ。忘れるはずもない。ボクが自由というものを渴望するようになった出来事。

死んだこと。家に、親に、縛り付けられたままに殺されたこと。

いや、そこじゃない。問題はそこじゃない。ボクにとっての自由は

「……何となく、分かったような」

「本当ですか？ ……あ!？」

「え、ど、どうしたの……!？」

「く、クリスマスプレゼントになってなかったですく……」

「……今まで貰えなかった分、今貰ったってことで」

そう言つて、ボクの方もイヴさんへと笑いかけた。

対照的に、イヴさんの表情が更に曇った。

……あれえ!？」

「も、貰えなかったんですかあ〜!？」

「ごめん今のナシ。そういうつもりで言ったんじゃないの」

「で、でもっ、クリスマスプレゼントを貰えなかった子供がいるなんて、サンタクロースとして由々しき事態ですよ〜!」

あー……うん、なるほど、本物のサンタ的にはそうなるのか……。

一応、日本の風習的には両親がサンタ役として枕元にプレゼントを置くようなことがあったりするのだけれど、ボクの家っていうのがまた養護施設だし、そもそも子供の人数分買うお金も無いしで、基本、プレゼントは無かったんだよね。ボクはそれでも毎年のクリスマス会でお菓子を貰うくらいで満足してたけど。

でもやつぱり、サンタさんからの贈り物、っていうのは子供の情操教育には良いことではあるよね。「一年間いい子にしていればサンタさんがプレゼントを持って来てくれる」……って。

まあそういう意味で言うならボクが「良い子」だったことってのはあんまりないんだけど。あっちへフラフラこっちへフラフラして子供らしく過ごしても無かったし。だから無いということでも別に問題は無い、かな。

「もしかして、氷菓ちゃんの施設……」

「あー、えー……うん、まあ、そう、かな……？」

でも今年からはボクのポケットマネーから出してみんなの欲しいもの買ってあげられるし、そこは問題なくなると思うけど……。

「だ、大丈夫だよイヴさん、今年からは改善していくから！」

『『今まで貰えてなかった』ってことが問題なんですよ〜！』

そう言って、イヴさんは胸元でぐつと力いっぱい手を握った。

「今年は色々、特別にしちやいます〜！」

「え、いや、そんな気を遣わなくっても」

「ダメですよっ！ 私の気が済まないんです〜！」

「えええ……」

「……こういうのは、黙って受け入れておくのが礼儀、なのだろうか……。」

わからん……ぜんぜんわからん……。

……それと、まだクリスマスまで半年以上あるのに今からこの気合の入れようだと、クリスマス当日に燃え尽きかねないのではないだろうか？

いや、よそう。ボクの勝手な推測でイヴさんを混乱させたくない……。

でも、まあ、何にしても。

ここであんまり拒否するのも、イヴさんに悪いってことだけは、間違いないわけ。

「……ええと……その。ありがとう、イヴさん」

「！ うふふ。どういたしまして〜」

「……でも、無理しちやダメだよ？ お金とか、持ち歩ける量とか、ブ

リッツエンの体力とか……」

「き、気を付けますねえ」

……ど、どうしよう。凄まじく不安だ。

気合入れすぎて倒れちゃったり、倒れはしないまでもプレゼントの山に埋もれてしまったり、逆にボクの方がプレゼントの山に埋められてしまったりしないよな……？

そんな、小さな……不安と呼ぶにもささやかな、ある意味贅沢な不安を抱えながら、ボクとイヴさんは寮への道を歩いていった。

——それから一時間後、寮の前で重い荷物を持ったまま体力を使い果たして潰れているボクの姿が見られたという。

またこういうオチか!!

22：魔法少女アルケミ☆ひょうか？

346プロの社屋はほぼ全面がガラス張りということもあって、非常にこう、鳥が激突しやすい。

なんでも、ガラスが日光を反射することで鏡面効果ミラーリングと呼ばれる現象が発生することで、ガラス張りの一面を「何も無い空間である」と誤認することでそのまま衝突してしまうのだとか。

そんなわけで、実は出社する時に地面に落ちている鳥を見かけることが、時々ある。ほとんどは高高度からの落下で命を落としているけど、時たま気絶で済んでるものもいたりして。

「……………」

そして、今日もそんな日であった。

この前はカラス。その前はスズメ。確かその前はセキレイだとか、だったっけか——今日はヒヨドリというやつだ。

翼でも折れてしまったのか、羽ばたこうとしてもがいている姿が見られる。

——誰も見てないよな。

周囲を見回し、確認。うん、大丈夫。誰もこっちは見ていない。

駆け足で小鳥の方に近づいて、その身を両手で優しく持ち上げる。

ちよつと暴れられるが、抵抗は弱々しかつた。

あんまり同情するのは良くないんだけど……見捨てるのもそれはそれで後味のよくねえものを残すぜというやつだ。

「ちよつとくすぐりたいぞ」

適当なことを語り掛けながら、折れた翼の部分を錬成して治療する。ほんの小さな燐光が瞬くと、やがて何事も無かったかのように、小鳥はぱたぱたと翼を開く。

ぴよ、と一声ボクに語り掛けるように鳴くと、そのままヒヨドリは空へ飛び立った。

「よし」

……とりあえず、プロジェクトルームに行く前にトイレで手、洗ってこよう。野生動物の身体は雑菌でいっぱいだし。

そんなことを思いながら振り返る——と。

「……………」

「……………」

——めっちゃ見られてる。

よ……よもや治療の間について駆け寄ってくるとは。しかも、よりよってそれが千佳ちゃんにだなんて、なんとという不覚……！

横山千佳ちゃん。346プロ所属のジュニアアイドル。

アニメのヒロインのような服を着ることができるといふことからアイドルになった子で、魔法少女もののアニメなどが好きで、自ら「ラブリーチカ」や「マジカル☆プリティーハート」を名乗るほどの筋金入り。シンデレラの舞踏会では南条光さんなんじょうひかるや小関麗奈さんこせきれいなと一緒に「幽体離脱フルボッコちゃん」の公演を勤め上げた。

しかしマズい。この子に見られるのはちよつとマズい！

何故なら——。

「ま……魔法少女だ……！」

……こういう勘違いをしちゃうんだもんなあ!!

「ち……違うよ、千佳ちゃん。気絶しちゃった小鳥をね、大丈夫かな？
って思っただけだよ……」

「でも、今手元がピカッってしたよ!? 絶対今の魔法だよね! ね!」

う、うおお、すごい勢いで詰め寄ってくる……!」

マズい。本当にマズい! 説明なんてそもそもできるものじゃないし、変にはぐらかしたりしたら千佳ちゃんの夢を壊しかねない! ははは、詰んでるわこれ!

どうしよう。何て言おう。なんて言えば納得してくれる——
?

「ぶ………」

「ぶっ…」

「……プロダクションのみんなには、ナイショだよ!」

「!!」

そう言っただけは、千佳ちゃんに背を向けてそそくさとプロジェクトルームへと向かった。

……後になって気付いたけどこれ、相当な悪手を打ってる気がする……!
……!

で、それからほどなくして。

「白河さん、『幽体離脱フルボッコちゃん』のスタッフの方から新キャラのオフアアが来てるんだけ……どうした!?!」

「自分のしでかしたことを噛み締めてる………」

「そ、ソファごと後ろにぶっ倒れてか……? とうか大丈夫なのか……?」

よ、よもやこんな形で自分の行動が返ってこようとは……。

とうかこの業界、噂が回るのどれだけ早いんだよ!?!

「い、一応聞いとくけど、何で?」

「横山千佳ちゃんからの強い要望だよ。……白河さん、彼女と仲良

「かっつけたっけ？」

「ふ、普通だけど……」

「これ絶対例の件だ……!!」

何でこのプロダクションの人たちはこう、いちいち行動力がものすごいのだろう。いや、そうじゃないとこの業界生き残れないのはその通りだけど。活かす方面が迷子になってない？ 大丈夫？

……しかし、幽体離脱フルボッコちゃんか。

既に第三期を迎えた大人気特撮番組だ。キャッチコピーは「正義じゃなくって悪が裁く！」……笑いあり、涙……涙？ ……ありの、物語。ライトな作風からか様々な層に広く人気があり、ボクたちの周囲でもファンだという人は割と多い。

麗奈さんはこの番組の主人公であるフルボッコちゃんを演じており、光さんと千佳ちゃんはそれぞれフルボッコちゃんと意見を異にするスーパーヒロインと魔法少女を演じている。

この番組は、法律や規範に則り模範的な正義を為す光さんや千佳ちゃんといったヒーローたち、その裏側で暗躍する法律で裁けない極悪人……そうした人間をあの手この手で出し抜いて、ごく個人的な基準のもと叩きのめして裁きを下すフルボッコちゃん……という構図が基本となっている。一種のダークヒーローとも言えるだろうか。特にダークな感じは無いけれど。

魔法少女モノとして考えると、かなりの異端と言える。とはいえ人気を博していることには違いないし、園の子たちもよく見ている番組だ。出演できるならそれも悪くない……とは思う。

「ところで氷菓には例の約束があるのではないか？」

「大丈夫。エリクシアの仕事として他の役ももぎ取ってきたから」

流石である。

こういうところで抜かりが無いな、プロデューサー。

「まず池袋さんだけど、南条さん演じるヒカルの支援者。強化スーツを作った科学者、って設定のキャラクターだね」

「ふむ、まあ妥当だな」

「一ノ瀬さんは、フルボッコちゃんのアイテムを制作してる協力者」

「ウン、まあ順当かにやー」

「白河さんはフルボッコちゃんの新ライバル、癒しの聖女と呼ばれる正義の魔法少女」

「ほあッ!？」

「ぶほっつ!!」

その言葉を聞いた瞬間、晶葉と志希さんが嘔き出した。

ああ、成程……そういうパターンね、はいはい……アレがああなっ
てそうだったわけね、はいはい……。

この企画を通したのは誰だあっ!!

「聖女て」

「俺も正直この役だとクラリスさんの方が向いてると思う」

「だよね」

「でもクラリスさん自身が『私はあくまで神に仕える身、聖女などと畏れ多いですわウフフ』って」

「これフィクションだし本業関係ないじゃん!」

あと明らかにボクのことからかうような意図があるよね!?

それに、まあ恥ずかしいといえば恥ずかしいけれども、オフア―受けたからにはまあ、やるよボクも!

「フッフフ、フフ……こ、今度は聖女と来たか、クク、クククツ」

「聖女サマー! とか言った方がいい? にやはは」

「マジやめて」

雪女から順調に人類に戻って来てるんだからここで神格化させる

のはやめてほしい。

「あ、そうだみんな。『FROST』第二期決まったから」
「嘘お!?!」

あのスタッフが撮りたくて撮った系のドラマが!?

「FROST」——ってまあ、要するにボクが雪女役をやったアレだ。元ネタが楽曲だからか、楽曲の名前をそのままタイトルに使っている。

一応撮影の全日程は終了し、あとは来月末までの放送になるな………と思っただけけど、ここでこれも来るのか。

「というかまだ六月になったばかりだよ。この時期からそんなことあるの?..」

「珍しいけど全くないわけじゃないよ。まあ、今回は人気が出たから急遽、っていうのもあるけどね……」

「ふーん、やっぱりトラプリ?」

「いや、白河さんの演じてるコオリちゃんが大人気で」

マジかよ。

スミマセンその子最終回で死ぬんすよ。

「脚本の方も二期では是非復活させたいと」

「見事に黒歴史になる予感しかないんだけど」

「一期の終わり方がまあ綺麗な方なだけに余計にな……」

キャラ人気が先行し、前作キャラの復活がウリになる続編……ダメだ、いい画が浮かばない。

「そ、そこまでアレにはならないと思うぞ……」

「そうだといいけどね……」

そうやって楽観視して、今までいくつのアニメやゲームが犠牲になったことか。奈緒さんや比奈さんに言えば、血涙を流しながら同意してくれるに違いない。

聖剣でアレな4とか。スターで海な5とか。テイルズ寓話でZなアレとか。……ちよつと邪念が湧いてきたからここまでにしておこう。

「……まあそつちのことは今は置いて。すぐすぐって話じゃないんだから。で、フルボツコちゃんの収録はいつ？」

「今週末」

「急すぎらあ」

何で346のドラマ班はいつもこんななんだよ！ 東映のライダー班かよ！ こんな直前にオフアーしてんじゃないよ！

こんなだからスケジュールくっそキツイ楓さんが自社制作のドラマにロクに出られてないなんて事態になってんだろ！ いい加減しろ！ アイドル以前に一人のファンとしてそこは言わせてもらおうぞ！ だからシン撰組ガールズでも見られな——

@ —— @

……それから少し経って、撮影の日が訪れた。

346プロの関係会社のあるスタジオ。今日は役柄の関係で、晶葉や志希さんとは別撮りだ。

「おはようございます。本日からよろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくお願いします……ふふっ」

「おはようございますっ！」

「フッフッフ……雁首揃えてのこのことよくやってきたわね新入り二人!! ヨロシクしてあげるから感謝しなさい! アーツハツハツハッゲツホゲホエツホン！」

「ほらレイナ、水」

「ゴホゴホッ！ さ、流石気が利くわね……んぐんぐ」

……今日、撮影を共にするのはボクを含め四人。アリスさんと千佳ちゃん、そして「フルボッコちゃん」主人公である麗奈さんである。ちなみに今水を渡したのは麗奈さんのプロデューサーさんだ。

新入り二人、というのはボクとアリスさんのことだろう。どうも今期はどんどん新キャラを追加投入していくスタイルのようだ。新しい期を迎えてキャラを追加したら薄味になったとか、場合によっては面白くなかったとかいう声も他の番組ではあるが、果たして吉と出るか凶と出るか……。

「こちらでも一緒ですね、氷菓さん」

「うん。改めてよろしく、アリスさん」

さて、ともあれ一か月近く一緒に撮影をしていれば自然と仲も深まるというのが実際のところ。

あの時の眼鏡破損事件や撮影中は近くにいたことが多いってこともあり、実を言えばボクはアリスさんともうちよつと仲良くなれていった。知らない人ばかりでなくて安心、という思いも、正直に言ううちよつとだけある。

と、その一方で、満面の笑みで駆けよってくる影が一つ。千佳ちゃんである。

「氷菓ちゃん！ 今日からよろしくねっ！」

「あ、うん、よろしく……」

「あ、大丈夫だよ？ あのことは言っていないから！」

ちよつと不安に思う部分が違うのだけれど、ともあれ口外しないでくれるというならそれでいいとしておこう。

いやいいのか？ 何かの拍子にポツとバラされてしまいそうだけ

ど。

……先にちよつとバレた時のアフターフォローのために言い訳を
考えておこう。どうしたつてバレないつてのが難しそうだし。幸い、
周りにいる人たちは良識ある大人が多いから、千佳ちゃんがあのこと
を言ったとしても適切に対応してくれるだろうけれど……。

さて、それはそれとして。

「よいしょ」

「!?」

ボクは頭上から吊り下げられた、精巧なカエルのおもちやを掴み
取った。

このタイミング、この手口。よくよく考えてみなくても犯人は分か
る。

「何してるんですか、麗奈さん」

「ふ……フンツ！ 綺麗な顔しといてなかなかやるじゃないの氷菓
……！ 本物そっくりにしすぎて触った時このレイナサマですら
ちよつとキモいと思つちやうそのカエル君4号をわしづかみとはね
……」

何してんのマジで。

「ボクに悪戯を仕掛けたいなら、意識の外からこの30倍は持つて来
てくれないと」

「チツ！ 清良きよらや亜里沙ありさと同じムテキ梓とはね……！ 覚えているが
いいわ！ いずれこの借りは必ず返すからツ！ アーツハツハツ
ハツハ！」

言つて、そそくさと楽屋の方へ——スタイリストさんが待つている
方へと歩いていく麗奈さん。

彼女は主役なだけに非常に出演が多い。今回の挨拶も時間の合間を縫って来てくれたんだろうし、ありがたい限りだ。

こういう気遣いができるんだよなあ、麗奈さん……普段のキャラからはちよつと想像が難しいけど。

「あたしたちも行くっ、ありすちゃん、氷菓ちゃん！ 衣装合わせしなきゃー！」

「あ、うん……」

「どうかしたんですか、氷菓さん？」

「ううん。少し気になること……っっていうか、それだけ」

通例——と言うべきなのかどうか迷うけど、ともかくこういう魔法少女モノというのは、なんとというか衣装の露出度がエグいことになってたりする。

オマケに安定の自社制作。とときら学園の例を見るに、こここのスナップは現場判断で色々と暴走する傾向にある。

暴走の結果良い結果になったからまだいいが……果たして、どんな服を用意しているのやら。

ともかく、衣装部屋へは到着。アリスさんを先頭に、それぞれが部屋の中へと入っていく。

「なるほど、あれが私の衣装のようですね。悪くないです」

アリスさんの衣装は、青色を基調にした魔女風の衣装だ。カッコよさと可愛さが上手く同居した——やや可愛さ優先の——絶妙なバランスを保っている衣装で、アリスさんによく似合うだろうことが見ただけで分かる。つくりや細工も精巧で、細かすぎるほどの刺繍や小物類は、これを作ったスタッフの……いつそ妄執めいた信念を感じる。何がスタッフさんをここまで駆り立てるのだろうか……。

「アリスさんは、どんな役？」

「聞きたいですか？ そうですね、私の役は千佳さんの」

「ラブリーチカ！ の先輩の魔法少女なの！ すっごい強くて、カッコいい役だよ！」

「説明を取らないでください。それに、魔法少女ではなく大魔導士です。アークウイザードタチバナ……いえ、賢者。ワイズマンタチバナと呼んでください」

自称「すごく強いクールな女」になるのか、それとも主人公を執拗な膝蹴りと執拗な爆発魔法で完封するラスボス系になるのか。
いずれにせよアリスさんの立ち位置が分からなくなってくる。

「氷菓さんの衣装はあれのようですよ」

「あれ？ ……っしや!!」
「!？」

言われて視線をやると、そこにあつたのは——スタンダードな修道服だ！

聖女だもんね！ そうだよね!! 露出も超少ないぞ！ ちよつと体のラインは出るかもしれないけどそこはそれ大した問題じゃない。装飾多めなのは、あくまで魔法少女モノだからだろう。

はははは、これなら何にも問題はな——。

「でね、でね！ あっちがバトルコスチューム！」

「えっ」

と。

そう言つて千佳ちゃんが指し示したのは——機能性という言葉を投稿捨てた、それはそれは露出度高めな衣装であつたとき。

上半身は半ば水着みたいなもんだし、下半身も装飾過多で、所々肌が覗いてる部分が逆にフェチっぽい。頭のベールがそのままあたりは、まあそういう属性を象徴しているからということかな……。

えっアレボクが着るん？ 正気？
こんなん聖女じゃなくて性女やんけ。

「ぬあああああああああああああ!!」

「氷菓さんが現実を認めきれずに衣装の山に頭から突っ込んだ!?!」
「氷菓ちゃん!?!」

お……おのれ……おのれスタッフ……。

よくもやつてくれた喃……やつてくれおつた喃……。

オファーを受けた以上はやるけどさあ。それにしたってボクの体型でこれを選ぶのはどうなんだ!?!

……何度でも思うが正気か!?!

「……マジか……」

衣装の山の中から頭だけ出すと、アリスさんは目を覆ってしまった。が、時々指の隙間からちらちら衣装を見ている。耳年増なんだろうな。

千佳ちゃんは本当に何がなんやら分かってないような様子だ。こっちは本当に年齢相応の知識しかないんだろう。

というか下手したら魔法少女モノって、このくらい露出あるようなコスチュームになること、稀にあるからね……気にしてないのかもしれない。

「え、えつとね。聖女のブランちゃんはね、いつもは魔法で色んなひとの病気やケガを治してるの! でも、悪人が現れたら変身してやつつけちやうっていう子なの!」

ブラン……って、ああ、白か。千佳ちゃんやアリスさんと同じように名前をそのままキャラ名に、つてわけにはいかなかったから、名字をもじったのか。

しかし、アレか。ヒーラーが一番強いとかそういうパターンのアレ。多分治療とかそういう魔法の消費魔力が上げつないとかそういう設定があるぞコレ。

「でも、大丈夫なんですか？」

「見た目と体力とどっち？」

「両方です。氷菓さん私が想像してたより痩せてますし、その……あれを見てください」

「あれ？」

言われて見ると、そこにあつたのは——鎖付き棘鉄球。モリニンググスター

……こんな武器使う魔法少女がどこにいるんだよ！

これ絶対R18な世界か深夜アニメから設定持ってきたやつだろ
!!

「振り回せますか、それ……？」

「……………」

無言で鎖を掴む。流石に撮影用だけあつてそこまで重くはない。あくまで本物と比べてだが。

二人から離れて軽く振ってみると、意外にもそれなりに振ることができた。思わず二人の口から「おおっ」、と感嘆の声が漏れる。

これならいけるだろうか。もう一回、もう一回——と振り回してみる。

五回目で限界が訪れた。

「フーツ、フーツ、フーツ、ぜはっ、はあはあ」

「なんて脆い……」

「だ、大丈夫氷菓ちゃん!？」

「だ、だ、だいじょ……だい……いや無理かも……」

必死こいて余裕の表情を作りながら演技することはできるだろうけど、多分そうしたら3分ともたずに吐く。詰みである。

「もつとこう……聖女なんだからさあ……もつとこう、剣とか杖とかそういうので、ぜえ、いいんじゃないの……？」

「カントクさんがね、せっかくだからインパクトがドーン！ ってくる方がいいんじゃないかって」

いいのか。それがために死人が出るぞ。いいのか。すぐ生き返るけど。

「なるほど……では。陳情、ですね」

「陳情……？」

……え。

いや、監督の判断で決まったことなんだけど、これ、口出ししていいことなの……？

で、数分後。

「ん？ ああ、いいよいいよ。そういうことならグローブ嵌めて格闘戦主体にしよう！ こつちもこつちでインパクトあるぞお！」

そういうことになった。

……いや。……いや。

「素手喧嘩する聖女がどこにいるんだよ……!!」

「魔法少女ならいっぱい格闘技で戦う子いるよ？」

そうかな……そうかも……。

確かに現代で一番有名なプリティでキュアつとしてるアレもそういう方針だしなあ……別にいいのかも……。

「それにゲームやアニメには素手で戦う聖女もいるそうですよ」

マジかよ未来に生きてんな。

「……まあ、でもまだマシか……」

体術である程度ごまかしはきくし、後からCGでエフェクトを突っ込めばそれっぽくもなる。

撮影後は一日動けなくなりそうだし、力強さを表現できるかっていう問題もあるけど……そこは、まあ、なんとかやれるか。さっきのよりはよっぽどいい。

「氷菓さん、できるんですか？ 格闘技」

「なんでできないことが前提なのさ。一応それっぽいことはできるよ」

「できるの!?! すっごーい!」

できるよ? 威力なんて全くないけど。

初ライブの時にプロデューサーに対して威力があったのは、あくまでプロデューサーの方から突っ込んできたからだ。ボクから動かない相手に対して能動的にやってみたところで、せいぜいゴムボールがぶつかった時くらいの衝撃しか無い。

……鍛えた今だからそのくらいにはなってるけど、3月以前だったら突き出した手の方が折れてたかもしれない。

「それっぽくやれば、こんな感じで……」

すぱん、とそれっぽく拳で空を切ると、二人からまたも「おおっ」と

声が上がった。

技術自体は、ダンスや他のアイドルの人たちの体捌きの模倣と応用だ。

例えば元警察官である早苗さんもそうだし、空手家の中野有香さん、軍オタで軍隊格闘についても造詣の深い大和亜季さん、ニンジャの浜口あやめさんなんかの動きも参考にしている。動きそれ自体にもあまり無駄が無く、体力消費も少なくていい。

なお同じような威力は絶対に出せない。

「それより、そろそろ行かないと。今日は氷菓さんの登場シーンからですよ」

「あ、うん」

「頑張ろうね！」

その後、監督やアクション担当の助監督さんなどに詳しい動きを教わる間に、撮影の時間が訪れる。

ボクの役は、フルボッコちゃんの新ライバル役ってこともあつてかなり派手な登場になるのだけれど――。

@ —— @

「――大いなる罪を抱く者へ、神罰を代行致します」

新たな敵を前に、フルボッコちゃんと魔法少女の2人が傷だらけで倒れ伏す戦場へ、緩やかに歩いていく。

その歩みは穏やかに、しかしあらゆる存在をもともしないほどに力強い。笑みを絶やさずに、ただ前だけを見て歩むその姿は、見る者にほんの僅かな恐怖を与えかねないほどに絶対的だ。

『暴食』『色欲』『激情』『墮落』『傲慢』『嫉妬』。あなた方六名へ裁定を下します――」

りする人。

あとは、多いのは以前の役と比較して語る人。これは一般人にも多い。

新しい役の印象で塗り替えられればそれが一番いいのだけど、そういうわけにもいかないっていうのだろうか。何とも歯がゆい話だ。

「で、この後の話ってどうなるのか聞いてる？」

「何でさ」

「いや、俺も実はこのシリーズのファンで……」

「うわあ」

「うわあ」

「やめろよ引かないでくれよ」

まあ、一応幽体離脱フルボッコちゃんのターゲット層には入っているけれども。

それでも大の大人が魔法少女モノのファンです！　なんて言おうものなら、普通はヒかれるぞプロデューサー。

「まあ、一応聞いてるけど……守秘義務とかあるんじゃないの？」

「いや俺関係者だし」

「そこで都合よく関係者を持ち出すとか……」

口調まで少年のようになってる。大人だからってその辺は変わらないとすべきなのか、もうちょっと大人らしくしてくれと言うべきなのか……。

まあ、前世と合わせてそろそろ30年生きてるボクが言える話じゃないか。

……いやでも、子供としての経験しかしていないのに30年生きてるのなんのなんて言っても説得力は皆無だろうか？

「……ま、撮影には関わらなきゃいけないだろうし、いいか」

「っし！ ……あ、ごめん。続けて」

「助手……」

「意外と言えば意外そうじゃないと言えばそうじゃない面だねえ」

実際なんとも言い難いところだ。

もしかしくなくとも、根津プロデューサーは割とオタクな面が強いのかもしれない。

「この後アリスさんが大魔導士として参戦。三連爆破魔法エクスプロージョンで実力を見せつける」

「ほうほう」

「で、この後クールくらい使ってボクプランとアリスの掘り下げとフルボッコちゃんたちとの心の交流を描くんだって」

「まあ、普通だな」

「あるよねー」

「で、それが終わったら清廉潔白なボクプランの欲望を敵である『大罪』が刺激して悪堕ちさせるんだって」

「……んん!？」

「七つの大罪の一席を埋める幹部『強欲』として、最高戦力がフルボッコちゃんの敵に回り、さあどうなる……ってところまで脚本できてるってさ」

「ちよつと待てよ!？ ちよ……ちよつと待つ……ぐわああああその先が気になる!!」

「ちなみに体形は心配要らないって。何なら今後も今の食べ方継続して、作中で欲望が生まれるのに連動させるとか言ってる」

「それもそれですげえな!!」

プロデューサー、素が出てる素が。

「悪役になってしまったが氷菓はいいのか？」

「ボクは別に……ってというかFROSTも実質悪役みたいなもので

しよ?。」

「それもそつかー」

それに、悪役とはいえ「強い」って印象を持ってもらえるだけ個人的には嬉しいところだ。

みんなからは弱々しいとか薄いとか虚無とかいろいろ言われてるし、ちよつとでもそういう印象が薄らげば……いや、無いかも。

「個人的には、何なら悪役の方がいつもと違う面が出せてちよつと楽しいかも」

「そうか? いや、そうかもしれん」

この辺は人によるんだけどね。

光さんみたくヒーロー役がどうしても好きだって人もいるし。ボクはどっちでもいい、というか、演じていて楽しければそれが一番、というかなんというか。

……ま、このスタンスもプロデューサーあつてのものなんだけどね。

——それから少しして、奈緒さんや杏さんや安部菜々あべななさんにフルボッコちゃん収録の件について根掘り葉掘り聞かれたり。

あるいは実際の放送後に、某掲示板の個人スレとフルボッコちゃんスレが阿鼻叫喚の地獄絵図になったりするのとはまた別の話である。

23：談合でドン

この日、プロデューサーが志希さんの実験モルモットになることが半ば確定した。

前からそうでは？　と言いたい気持ちもあるだろうが少し待ってほしい。今日この日のそれは、ちよつと……少し……いや……うん、それほど普段とは変わらないけど。

違うのだ。なんというか違うのだ。

今回の件は何というか——あえて言うならプロデューサーのミス。それに尽きる。

「……身内での潰し合いとか最悪だよプロデューサー……」

「ホントごめん……」

……「筋肉でドン！　Muscle キャッ Castle!!」という番組がある。

筋肉がどう、というよりもどちらかと言うとアイドルが出演する総合バラエティ、という趣おもむきの方が強いが、まあそれはそれとして。

この番組、基本的に複数組のアイドルグループが様々な競技に挑む形式を取っている。

元は「頭脳でドン！　Brainz キャッ Castle!!」という番組だったのだが、諸事情により番組名をこちらに変更。体力勝負が主な内容となった。

はつきり言ってしまうとこの時点でもうエリクシアにとっては不向きなのだが、地上波で流れる以上知名度アップには繋がるし、勝負に勝てば宣伝タイムも得られる。負けても一応テロップで出る。特にこれと言つて問題の無い番組出演——の、はずだった。

——出演者がエリクシアとニューウェーブの二組でさえなければ。

ボクらは今度出る新キャラとしてフルボッコちゃんの番宣。ニューウェーブは1stシングルの宣伝。比較的ボクらの方が優先

度は低いものの、それでもフルボッコちゃんのスタッフ他様々な関係者が絡んでくる以上できれば番宣はしときたい。結果互いの利益が正面衝突を起こした。仲間なのに。

前からなんとなーくプロデューサーが疲れてきてるな、というのは感じていた。

一応、言葉としてみんなからプロデューサーへ伝えてはいたし、体を壊すといけないのは本人が一番分かっているだろうから適当なところで休んではくれるだろうと高をくくっていたというのもあるけれど、社会人なんだし。自分の面倒くらいは自分で見られるだろうと、そう思っていた。

だがヤツは弾けた。

気付けば何連動になったやら。プロジェクトルームに顔を出したらだいたいいる、という状況に違和感を覚え始めた頃にこの仕事のことを聞かされた。

その時は何の気なしに話を聞いていたわけだけど話を聞いていくと何かがおかしい。

奇妙な違和感を抱えたまま、どこか釈然としないまま楽屋に入ると——そこにはニューウェーブの三人がいた、という流れである。

流石にヤバイ。そう判断したボクたちは、全員で領きあつてプロデューサーを囲むことにしたのだった。

「プロデューサーはさあ……寝てない人？」

「と……当時三徹目の人です……」

「はあー」

ガタガタガタガタガタツ。

全員座った。

「長時間コースだコレ……」

「当たり前やろ」

「そうならない理由を教えてほしいわ」

早めに楽屋入りしたおかげで、幸いにも時間はある。

説教——という表現はあまり好みじゃないけれど。それはそれとして言うべきことは言っておかないとダメだこれ。

で、まあ数分ほど色々言ってから、ボクたちは改めて直近の問題に向き直った。

「……もう過ぎたことはしょうがないとして、今日の収録をどう乗り切るかを考えよう」

「うん。けど、もう引き分け一択だよねえ……」

「せやな。他に考えられんもん」

「しかしどうやってだ？ この番組、審査員の独断と偏見による採点が多すぎて予防もできんぞ」

「去年の番組再編の時、採点と勝負の方式にメスが入ったみたいだから、そこは多少改善されてるみたいよ」

「ふーん？」

泉さん……が調べたネット情報曰く。

五つの種目で競う、という点については変わらず。トークバトルはよく見なくともマイクパフォーマンスであって勝負とは言い辛い。点数を付けるようなものとはいえないし、勝負にしくとも番組内容として入れ込めばいい——ということで、別競技に変更。フアツションバトルは観客も含めた投票形式に。滑り台クイズは芸能、歴史、化学、スポーツ、アニメ、スペシャル……と、他に新設されたいくつかの項目ごとに、10ポイント、20ポイント、30ポイントがそれぞれ割り振られ、どちらかのチーム全員が滑り台から落下した時点での獲得点数が、調整の上両チームに加算される。回答は早押し。ルール上、わざと落ちることはできないようにはなっている。

なお各勝負の罰ゲームは据え置きである。

最悪ボクは死ぬ。

「……視聽者的には、本気でやってる姿の方が見たいはずだよね」

「だよねえ……」

「となると——うむ、決まったな」

「最後のクイズまで本気でやってー」

「最後の最後、クイズで調整って寸法やな！」

「それしかないでしょうね」

全員の気持ちは固まった。あとは——と、ボクは泉さんと晶葉へ視線をやる。

二人も同じ気持ちだったようだ。同じように、どこか固い視線をこちらに向けてくる。

……問題はこの勝負、ちゃんとクイズを盛り上げながら同点に持ち込めるか？ という部分と、果たして志希さんが空気を読んでくれるか？ というところにかかっている。

泉さんは亜子さんとさくらさんに演技らしくせずつきにクイズをきつちりこなしてもらう必要がある、ボクたち二人は志希さんの手綱を握る必要がある。

できるだろうか。

いや。できるかなじゃねえんだよ。やるんだよ。

「プロデューサー……今はダメだな」

項垂れたまま、顔色が青通り越して緑色になってる。よつぽどシヨックだったんだろう。あるいはこれ寝不足か？

……そつとしておこう。多分死ぬほど疲れてるだろうし。

「号令誰がする？」

「じゃあ、はあーいっ！」

「それじゃあさくらさん、お願い」

「うん！ みんな、今日も笑顔で頑張ろー！ えい、えい……」

「「おーっ!!」」

大丈夫。きつとなんとかなる——そんな根拠の無い自信をみんな
で共有しながら、ボクたちは今日の収録へと向かって行った——
。

@ ————— @

「皆さーん、退屈してますかー!」

「「してるー!!」」

「そんな退屈は!」

「対決で解決!」

「ミズキとアイリのきゅんきゅんぱわーでハートを刺激しちゃうわよ
♥」

「「FOOOOOOO!!」」

初回放送と比べて非常に安定してきた瑞樹さんと愛梨さんの前説
を聞きながら、ボクたちは出番が今か今かと待っていた。

どことなく、瑞樹さんの言葉からしゅがはさんっぽいにおいがする
がそれは置いといて。

バラエティ番組の収録というのはボくらにとっては初めての経験
となる。なんとなく、処刑台に向かう死刑囚の気持ちだ。

大袈裟か。大袈裟だな。でも怖いもんは怖いのだ。そもそも今ま
では演技してればよかったわけだし。演技じゃない素の自分を受け
入れられるか——というところで、少し緊張する。

でも、まあ、緊張感自体はライブとそう変わらない……と思うこと
にしよう。

「「それでは今夜も始まります! 筋肉でドン! Muscle
a s t l e ! ! !」」

「「わあああああああああ!」」

客席から大歓声が上が——うん？ 部分的に聞き覚えのある声があるぞ。

これは……ああ、いや、今は言うまい。後にしよう。色々面倒だ。まずは目の前のことから！

二人の前振りと共に客席から笑いが起こる。やがて前振りが終わ——り。

「さあ、アピールタイムをかけて対決するアイドルの登場です！」

「まずは初出場の三人です！ スターライトプロジェクトの頭脳派三人でーす♪」

「ほーい」

「うむ！」

「……………」

歓声の中飛び出していくと、そこに盛大な拍手が加わった。

ボクが何も喋ることができていないのは……緊張、というよりはこれはキャラ作りだ。

うん。キャラ作りなんだ。物静かなのを演じてるんだ。緊張してるわけじゃないんだ。

じゃないんだから晶葉め生暖かい視線を向けるんじゃない!!

「では、チーム名をどうぞ！」

「ほーい♪ セーのっ」

「二チーム『エリクシア』です！」

「はい、なんだか初回放送の時を思い出しちゃうフレッシュさを感じますね〜♪」

多分これはキャンディアイランド三人のことを言っているんだろう。
う。

カワイイボクと野球どすえ

K B Y Dチームは最早熟練と化していたから明らかに違う。

「それでは、続いて……あら？　こちらもスターライトプロジェクトから！　仲良し三人組の登場です、どうぞー！」

「はあい♪」

「うん………」

「行くでー！」

続いてカーテンが開いて三人が姿を現す。意気軒高いきけんこうとしたその様子に、ほっと胸を撫でおろす。ここで演技っぽく出られてもそれはそれで困ってただけ。

「はい、いらつしやーい♪　それではチーム名をどうぞー！」

「『私たちが、チーム『ニューウエーブ』です！』」

「はい、続いてまでもフレッシュな自己紹介をありがとうございます！　ましたー！」

当たり前である。

「それにしても、どちらも同じプロジェクトから来てるのね。エリクシアのみんな、何か思ってることとか、あるかしら？」

「こうやって競うことになったからには、全力でいくかにやーん♪」

「うむ、仲間と言えど手加減は無礼に当たるからな」

「そういうわけなので、頑張ります……」

ダブルピース。

何故か客席が沸いた。

ボクに似つかわしくないことをしたからだろうか。卯月さんと同じことをするわりに表情が無表情でジト目だったからかもしれない。まあウケただけいいか。

……いいのか？

「もつともウチには体力最底辺のモヤシっ子がいるからな！ 手加減などしていたらそこで負けるからな!!」
「やめてよ地上波で暴露するの」

客席から笑いが起きる。元々、ライブの時のトークでそれなりに周知してたことではあるし、驚きよりも笑いの色の方が強いようだ。
「というか晶葉だってボクほどじゃないけど体力そこまでじゃないだろ。」

「うふふ。チームニューウェーブの方も、いかがですか?」

「氷菓には勝てると思うわ」

「氷菓ちゃんには勝てますよお」

「氷菓には勝てるなあ」

「言われているぞ」

「勝てる相手にだけ挑むのは良くないと思います!!」

ボクを基準にするんじゃないよ!!

「せめて晶葉にしなよ! 志希さんはちよつとどうなるか分かんないけど。あの人大概何でもやれる系の人だし。スポーツも大得意だ。苦手なのは人に合わせることに手加減くらいだ。」

「両チームともやる気満々ね! この勢いで早速行ってみましょう、最初の勝負は!」

「「ボルダリング対決く!!」」

そう言って、背後の壁を指し示す二人。そこにあったのは——確か以前、菜々さんやアスタリスクのお二人が挑戦したあの……かなり完全に配慮された壁だ。

本来のボルダリングのそれとは異なって傾斜はほとんどかかっていないが、それでもボクらにとってはそれなりにキツイ。というか高い。

「ルールは簡単、この壁を登っていくだけ！」

「途中で落ちた場合は、壁に書いてある数字分のポイントをゲット！」

「そして、登り切ることができたら30ポイント。見事、チームメンバ―全員が登り切れたらなんと、100ポイント！」

「みなさん、頑張ってくださいね〜♪」

「それでは一人目の選手、どうぞ！」

「はい」

「ん……ごめん晶葉、眼鏡持ってた」

「うむ」

まず一人目——ボクと泉さんだ。

勝手知ったる、という言い方も変だけれど、知らない相手ではないことは確かだ。ボクの方が明らかに身体能力は低いんだし、ここは胸を借りるつもりで全力で挑んでみよう。

「お願いしますね」

「ええ」

壁から突き出したでっぱり——名前は確か、「ホールド」だったか。構造解析により最短距離、最適ルートを算出。全力と言うからには全力だ。ここで打てる手は全て打っておく——！

「では、よーい……スタート！」

「ぐえー!!」

「氷菓ー!?!」

「アチャー」

——次の瞬間、ボクの身体は思いっきりマットに叩き付けられていた。

踏み外したとかそういうのでもない。ちゃんと掴んでいたしちや

んと足場も確保していた。

なんのこたあない。ただの握力不足である。

「ひよ、氷菓ちゃん0ポイントー!」

「氷菓つてあんなに弱かったのか?」

「アタシ、こないだの身体測定一緒だったから知ってるんだけど……
晶葉ちゃんは氷菓ちゃんの握力知ってる?」

「いや。そういえばそういう話はしたことが無かったな」

「13kgや」

「なん……だと……」

すいません、あれ(若干)嘘言うてます。

言うたほど強く握れません。緊張で。

スタジオ中から笑いが起こった。

「ちよ、ちよつと氷菓! 何でそんな……ふふつ、お、おかし……あつ
!」

「泉ちゃん20ポイントー!」

「え、ちよ、ちよつとおー!」

ボクの様子を見ていたらしい泉さんが嘔き出し、結果腕の力が抜け
ていいところで落ちてしまった。

……け、計画通りなんだからねっ!!

「氷菓、キミの握力小学生以下だったのか……」

「腕力と脚力も小学生以下だよ」

「何となく見れば分かるけどねー♪」

そして視力も弱い。唯一いいのは聴力くらいのものだ。

……そんなこんなあってボクは0ポイント。泉さんは20ポイン
ト。

晶葉は10ポイントで、他の皆は登り切って30ポイント。結果、こちらは40ポイント、ニューウェーブは80ポイント……と、この時点で大差がついた。

元々の予定通りと言えば予定通りだけど。

「とうわけで、負けたエリクシアの皆さんは罰ゲームで〜す♪」

「三人にはこちらの健康茶を飲んでもらうわね」

「うぐっ」

罰ゲームで有名なアレか。容器は小さいけれど、晶葉も志希さんもかなり微妙な顔をしている。

あの志希さんを困らせるって相当だぞ……と思いつながら口に含むと。

「…………お〃お〃お〃お…………!!」

「うにいいいい…………んっぎいい…………!!」

「…………うん? うん」

…………二人は悶絶してる。けど、ボクはそんなでもない。

確かに苦いしマズい。が、テレビ向けとはいえ、その…………かなりオーバーなりアクションだな…………? と思わなくもないけど…………これそんなに苦いかな?

空の世界で食べさせられたハーブやら何やらの中には舌の感覚が消えさせるほどヒドいものもあつたし、これに関してはそこまで…………かなあ。

「氷菓…………これで特に何も感じないってどうなっているんだキミは…………」

「え…………そんな言うほどかな?」

「言うほどだよっ!」

悲鳴を上げていた晶葉が言うとなんだかものすごく説得力がある。あるけどそこは許容量という言葉で納得してほしい。ボクだつて別に何でもかんでも許容できるわけじゃないんだよ。硫酸とか王水は流石に飲めないし。

それから少し休憩を挟んで、第二競技の時間がやってきた。

「それでは次の勝負は！」

「エアホッケー対決〜！」

続いて、二つ目の勝負——エアホッケー対決。

ホッケー台の前にはボクと志希さんの二人が立っていた。台本通りならこの後は、ボクと晶葉でマシユマロキヤッチ対決。ファツション対決には志希さんが出て……という流れになる。

ニューウェーブはさくらさんと泉さん。この二人のどっちかがファツション対決に出るのだろうか。

現時点での点差は40点。なんとかこのままの調子でうまくやれるよう頑張ろう。

「この勝負では勝ったチームに50点が加算されま〜す♪」

「勿論、この勝負でも罰ゲームはあるからみんな、頑張つてね！ それじゃあ、さつき負けたチームエリクシアから先攻で、ゲーム——スタート——」

「それっ」

「あっ」

ヒュカンッ、と僅かな音が響き、その瞬間、照明が瞬いてこちらの得点が告げられた。

「……ええっ!?!」

「え、エリクシアに得点〜！ い、今何が起きたんですか？」

「わ……わからないわ。氷菓ちゃん、今何したの？」

「射角と回転を調整して打って普通の曲がり方をしないようにしたんです」

「わからないわ……」

「……あ、そういえばゲームセンターの時氷菓はエアホッケー大得意だったな……」

物理演算を脳内で組み立てて、確実にゴールに入るよう調整していることもあり、先攻でさえあればボクは9割がたゴールに入れることができる。防がれたのは志希さんが本気を出した時くらいのものだ。それでも8割がた入る。

しかし、問題は――。

「先制の速攻以外できんのが欠点だが」

続けて晶葉が言った通り、次に泉さんが放ったものは数回のやり取りの中でごく普通にゴールに飛び込んでいった。

うん。

先制はできるんだけど、こう、ラリーができないんだよね、ボク。

有体に言ってしまうえば分からん殺し専門というか。分からない間に攻めきれればいいんだけど、こういう2対2の状況だと、サーブ権はそれぞれ一回ごとに変わってくるわけで……。

「あれっ?」

「……勝っちゃった」

……結論から言うと、そういうことになる。

「こ、今度もニューウェーブの勝利〜!」

「氷菓ちゃん、途中からもう倒れそうだったわね……というか今倒れてるわね……」

「ひゅー……ひゅー……」

「大丈夫ー?」

「……な、なんとか……こっふっ」

動けば動く分だけ体力は削れ、その内動くことすらままならなくなり、やがて先制すらできなくなり……ご覧の有様である。

いくら天才の志希さんとはいえ、一人で二人を相手取るのは難しかったようだ。

「……まあ、前よりはマシ……なのかな……」

「氷菓ちゃん、大丈夫う?」

「えー、なんだか過去に何かあったようですが、それはそうと負けたエリクシアのお二人と氷菓ちゃんには罰ゲームで健康ジュースを飲んでもらいますねえ〜♪」

そうして送り届けられる三つの小さな容器。あれ。さつきよりも遥かに小さいし少ない。

ほんの10mLにも満たないくらいじゃないか……と思いつつながら、三人揃って口に含む。と――。

「ヌ。ツ!!?」

「ヴオオオオオオオオオオオオオオ!」

「……?」

汚い悲鳴を上げながら二人が瞬時に老化していた。

ちよつと何が起きているのかよく分からない……いや、確かにこのジュースがマズいつてのは分かるんだけど。

……あ、舌がちよつとシビれてきた。確かに……マズいはマズいね、これ。

「ひよ、氷菓ちゃん? あんまりリアクションが無いけど、どうですか?」

「控えめに言つて甘いドブですネ」

「だったらそれらしいリアクション取つてくれないかしら!？」

「はいカットー!」

……こんな感じで、第二勝負も終了した。

これで点数は130対40。90点の差だ。

なお、一時休憩の際に水をがぶ飲みする二人に恨めし気な目で見られたが、これは仕方がないと思つて諦めてほしい。いわゆるコラテラルダメージというものだ。

……何? 一番ダメージを食らうべきボクが何一つダメージを受けてない?

疲労というダメージを一切鑑みなければその通りである。
本当に申し訳ない。

「さて、第三勝負は?」

「マシユマロキャッチ対決〜!」

さて、恒例のマシユマロキャッチである。

出場するのはボクと晶葉、そして亜子さんとさくらさんだ。志希さんと泉さんは裏で私服ファッションショーの準備になる。

キャッチ側は晶葉とさくらさん。亜子さんとボクがマシユマロを放つ側だ。

「は〜い、それじゃあ行つてみましょう! 一回目、どうぞ〜♪」

「よーし、さくら! キャッチしてよー!」

「うん、ちゃんとキャッチするからねえ!」

ぽふん、という音と共に、マシユマロが一つ放たれる。

追いかけるようにしてさくらさんが走り、あるいは口を大きく広げて対応する。

が――。

「あー！ ダメやった！」

「うー、ごめんねえ……」

流石に一回目じゃどうしようもなかったらしい。口元からやや離れた場所にぶつかって、マシユマロはそのまま床に落ちて行った。

「残念！ それじゃあ、エリクシアのお二人、お願いしま〜す！」

「うむ。氷菓、頼むぞ」

「うん」

ま、気楽に構えててよ——と言って、ボクは軽くマシユマロガンを構えた。

「ん、あれ？ 晶葉ちゃん、動く準備せんでいいん？」

「ああ、構わんとも」

と、晶葉は立ったまま口だけ開けて目を閉じた。

あんまり信用されすぎてもなあ——と思いつつも、その期待に応えるべく脳内で計算を行う。

さっき見たマシユマロ銃の威力、射角、マシユマロそのものの質量その他——頭の中で全てを計測……解析終了。

「それ」

「あむ」

「え、ええええええええっ!？」

「い、一歩も動かずにキャッチしちゃいました〜！」

わっ、とスタジオ中から歓声上がる。あまりに現実離れた光景に脳が追いついていない人もいるようだ。

「これそういう競技じゃないはずなんだけど……」

瑞樹さんが困ったように笑みを浮かべている。そりやそうだ。ボクもそう思う。でもできちゃう以上やらない理由は無い。

この際だし、ボクもできることはやって見せたいしね。

「こんなんチートやん！」

「い、一回くらいはミスしてくれるかもしれないからっ！」

「せやったら他全部取ればイケるなあ……つてできるかい!？」

——そして至極順当にパーフェクトを取得。今回はボクらの勝ちということで、30点追加。点数は130対70となった。

なお、番組史上初のパーフェクト達成である。瑞樹さんは元より愛梨さんの笑顔もやや引き攣っていたが、こればかりは勘弁してほしい。

その後行われた私服ファッションショーは、これと言った波乱も無く。

泉さんはちよつと大人っぽい——休日に時々見かけるような、青色を基調にした服装。

志希さんはちよつと色っぽい——しよつちゆう見る着崩しファッションを披露。

会場のオーデイエンスがやや女性が多めだったことも手伝って、泉さんの方が得票数が多く、最終的に190対110という点になっていた。

これで点差は80点。実にいい具合の点差だ。

やがてセッティングが終わり、それぞれヘルメットやサポーターを付けた状態で滑り台の上に座ることになる。

……ああ、緊張してきた。ちゃんと答えられる程度のものならいいけど。

「それではいっちゃいましょう！ 最後の対決は？」

「筋肉と頭脳の融合！」
「滑り台クイズ〜！」

今のところ傾斜はゼロ。ほぼ平地だ。摩擦もあるし落ちることは無いだろう。

紳士協定……というか淑女協定って言うべきかな？ 何にしても、「大量得点差があるからすぐに落ちてゲームを終わらせる」ようなこととはしないよう事前に言い含められているし、ボクたちもそうする気はない。

目指すは——引き分けのみ!!

……引き分け狙っちゃダメとは聞いてないし。

「最後まで一人でも残っていた方の勝利です！ 負けてしまっても大丈夫。その時点まで獲得していた点数の半分が加算されま〜す！」

「そして勝ったチームはそのままの点数をゲット！」

「問題に正解すると相手チームの角度を上昇させられま〜す♪」

「一発逆転もありうるこの大勝負、みんな、頑張ってね！ それでは一問目、芸能の10から！」

瑞樹さんの号令に合わせ、モニタに幸子さんと友紀さん、紗枝さんの三人が表示される。

やがてナレーション音声の流れ……。

——この番組の記念すべき第一回に登場したこのチームの名前は？

「はいっ〜！」

「はい〜！」

「はい」

いち早くボタンを押したのは泉さん。即座に滑り台の上の方に明かりが灯った。

「はい、泉ちゃん！」

「カワイイボクと野球どすえチーム！」

「正解！ ニューウェーブに10ポイント！」

「同時に、エリクシアの滑り台が上がりまくす♪」

「む」

「う……」

僅かにボクらの方の滑り台の角度が上がる。

晶葉が驚いたようにこつちを向いているが、ボクもちよつと驚いた。このくらいの角度でコレか。ははは。マズいなコレ。

「次のパネルの指定をどうぞー♪」

「スポーツの10を」

次いで映像に表示されたのは……これは、メジャーリーグの映像、かな？

見たことがあるような気はするけど……ええと。

——今年からメジャーリーグに挑戦したこの二刀流投手のフルネームをお答えください。

「はいッ！」

「亜子ちゃん！」

「おおやまこうへい大山耕平！」

「正解！ 続いてニューウェーブに10ポイント！」

「……うっ……」

「まだ落ちないでくださいね〜♪」

更に滑り台の角度が上がり、ボクの身体がわずかにズリ落ちかける。

……あれ!? ボクってこんなにバランス感覚悪かったっけ!?

さつきまでの競技の疲労か!?

「次をどうぞ!」

「じゃあ、美術の10!」

続いて映像にとある絵画の写真が表示された。「最後の晩餐」だ。多分、これ……作者の名前を答えろ、とかそういうタイプだな。

——この絵画の作

「はい」

「え、ひよ、氷菓ちゃん!」

「レオナルド・デイ・セル・ピエーロ・ダ・ヴィンチ」

「せ、正解!」

「意外だな。知っていたのか?」

「うん」

泉さんやさくらさんが悔しそうにしているのを見るに、どうもこの絵の題名は分かっても作者名をド忘れしてたっていうパターンのようだ。

「……ちなみにこの問題は、『この絵画の作者を答えなさい』でした。それじゃあ次の問題を選んでね」

「美術の20を」

次に、映像に映し出されたのは……自由の女神像か。

まあ、これも一種の美術品……と言えなくもない、のかな。文化遺産だし。

——この像のモデルは何でしょう?

「はい」

「はい、氷菓ちゃん!」

「フランスの象徴とされる女性、マリアンヌ」

「正解！」

「わわっ！ ……あれ、アメリカなのにフランスなのお？」

「みたいね……」

元々のモデルが、という話だ。そもそも自由の女神自体はフランスからアメリカに贈られたものでもある。

そういう出自があるため、結局帰結するのはフランスのマリアンヌ——ということらしい。

ふっ、と僅かにほくそ笑む。

そもそもボクにとって芸術は得意分野だ。何故なら古宮の爺さんは贋作商。ボクは模倣と解析によってその商品を作る手伝いを山ほどしているのだから！

……レプリカ品を作るの、美術展とかで割と重宝されるんだからな！

「次は美術の30で」

「び、美術の30！ 大きく出ました！」

次に表示されたのは——絵画の一部、か。ほんの僅かに映して徐々に下げていく……というところかな。

——徐々にフェードアウトしていきます。この絵画の名前を答えてください。

「はい」

「最初から!? ひよ、氷菓ちゃん！」

「ムーラン・ド・ラ・ギャレット」

「せ、せせ、正解！」

「ひゃあっ!？」

「お、おお……スゴいな」

驚きと共に、客席から歓声が上がる。

ニューウエーブ三人の滑り台も上がる。流石にそろそろキツそう
だ。

……ここでトドメと行くか。

「次、科学の30」

「ちよっ!? ど、どうぞー!」

こっちは二人に任せとこう。ボクばかり前に出てもアレだし。
……いや、今更ではあるが。

次に表示されたのは……なるほど、分子モデル。

「はい!!」

「ちよっと待つて!! せめてナレーションだけさせて!」

「待たん! マイトトキシン!」

「もしくはC164H256O68S2Na2」

「せ……正解!」

「何で分か……ひゃあああああ!」

「せめて問題聞かんかーい! わああああ!」

「う、ぐ……む、無理! きゃああ!」

……そして、予定調和の如く——事実、予定調和として——急な傾
斜のついてしまった滑り台から三人が滑り落ちていった。

マイトトキシン。あるいはC164H256O68S2Na2。
現在判明している中で最も大きな構造式を持つ化合物である。科学
者的には割と有名な存在ではあるだろう。

「我々にとっては一般常識同然だからな」

「最も長いからこそ覚えやすいんだよね」

まあ正直アレが何に作用するかって話でもあるけど。

フグ毒の200倍の強さの毒素だっけ。解毒作用を探すのには役立つかもしれないけど、使えらしたらそのくらいだろうか。

何にしても——ボクたちの獲得点数は90点。対してニューウェーブは200点の半分で10点。

合計点数は……200対200!!

「結果発表ー!」

やがて、粉を落とした三人を迎え、会場で発表が行われる。背後のモニタに表示されるのは……200と、200!

「あらら、同点ですね〜!」

「では、仲良くアピールタイムは半分こ!」

「罰ゲームも仲良く、でね!」

「はーい!」

思わずみんなで顔を見合わせ、ハイタッチ。当初の目論見通り、ボクたちはアピールタイムを折半することに成功したのだった。

観客もなんとなくこっちの考えが分かったのか、ところどころ笑いが漏れている。

もうこれ出来レースみたいなものだけど、まあ客受けがいいならそれでよし。ということにしておきたい。

「ちなみに罰ゲームですが、こちら!」

「日本一怖いと言われるお化け屋敷とジェットコースターを体験してもらいま〜す♪」

「え」

「え」

「……んえ?」

「嘘お!?」

で、表示されてるのは……………FUJIQハイランドじゃね、これ？

亜子さんも泉さんもさくらさんも、晶葉もどうやらアトラクションのことは知っているらしい。顔を引き攣らせてどことなくヒいている様子が見受けられる。

……え、マジで？ そんなに怖いのか……？ ちよつと待つて。それボク耐えられるの？ あと身長制限大丈夫なやつ？

……あ、でも遊園地とか行ったこと無いしちよつと楽しみかも。

「んく……ちよつと楽しみだね？」

「うん、ちよつと楽しみ」

「これ罰ゲームですよ？」

「ボク遊園地行ったこと無いんです」

「えっ」

「い、今はそれはいいじゃない。ともかく、来週はお化け屋敷体験とジェットコースター体験特番をお送りします！」

「エリクシアの皆さんとニューウェーブの皆さん、ありがとうございます
ました〜♪」

——そんなこんなで、ボクたちの初めてのバラエティ収録は終了の時間を迎えた。

翌日、どういう事情かやけに何か心配した表情で瑞樹さんと愛梨さんが訪ねてくるのだけど、それはまた別の話。

とりあえず、何か察されることはもう慣れたのでどこから何を察したのかだけ最初に言ってほしい所存である。

24：いっしょにのろうよ

遊園地と言えば。

多くの人にとつてはやっぱり、現実を忘れて夢に浸ることのできる場所、なんだろう。

少なくとも、一般論としてはボクもそのように認知しているが、出自が自だけに行つたことは一度も無い。

小学校の頃の修学旅行だと社会見学という意図が強く、そういった施設の近くに行くわけでもないし、遊びに行くような暇も無かつたし……正直なところ、生徒の中での評判は最悪だった。

それはともかく
閑話休題。

そんなわけで、罰ゲームとはいえ初めての遊園地だ。

今日ができることもそう多くないけど、できる限りは楽しもう——いや、罰ゲームだから楽しんでもそのそれはそれで問題だろうか。

……表現はともかく、とりあえず、満喫させてもらおう。そう思つて現場に到着したのだけけれど。

「みんな、お待たせ！　とりあえず何も言わずに受け取ってくれ！」

そんな感じで、直前にボクたちはプロデューサーからあるものを手渡されていた。

それは——。

「ちよお!?　これ、フリーパスチケットやん!？」

「……本当だ」

「どうしたのお、プロデューサー?」

亜子さんたちが口々に追求するのでちよつと見てみると、確かにそれは当日限り有効のフリーパスチケット……のようだった。

これ、高いものじゃないっけ?　と視線を向けると、プロデュー

サーは至極申し訳なきように頭を下げる。

「この前は俺の不手際で迷惑をかけて本当にすまなかった！ 今日ほら、こんな機会だし……せめて精一杯楽しんでほしいと思ってさ」

お詫び、つてことか。成程、納得だ。

行動が唐突すぎてびっくりしたけど。

「そういうことなら遠慮なく貰おう。ところで助手、自分の分はどうした？」

「俺は寝る」

「アツハイ」

賢明な判断だった。

これで「俺も遊び倒す」とか言おうものならボクは流石にもう寝なさいと言つて強硬手段に出る他無かった。具体的なこと言うと即効性の睡眠薬をこの場で錬成するなりなんなりして。

「それよりも」

「先に撮影を終えないとな。お楽しみはそれからだ」

やや緊張した面持ちで晶葉が言う。

もしかしたら怖いんだろうか。それが果たしてジェットコースターに対してなのかそれともオバケ屋敷に対してなのかはよく分からないけど。

「氷菓は初めてなんだよね、その……遊園地」

「うん。泉さんたちはここ、来たことあるんだよね？」

「そうね。でも——」

「あんときはオバケ屋敷も行っていないしなあ」

ちらとさくらさんに視線をやる亜子さん。確かに、そういうのはあんまり得意じゃなさそうだ。

なんというか、印象としてもメリーゴーランドにでも笑顔で乗ってそうって感じ。悪い意味じゃなく。ほわほわしてるといふか。

「うー、怖いよお……一人で入ることになったりしないよね？」

「お互いのチーム一人ずつ、二人で入るんだって♪」

「よ、良かったあ」

そこまで怖いって言うならなんだか色んな意味で心配だけど、大丈夫かな……。

ここのオバケ屋敷、リタイア者続出つてのがウリなんだけど。

「ジェットコースターはどうだったんだ？」

「日本の……以外は、乗ったかしら」

「以外か」

「以外や」

「……ジェットコースターってどうなの？」

「どうって……ああ、そっか。ええと、なんて言うんやろ。グイー……って上がって、ズバーツ！ と降りて……？」

まるで意味が分からんぞ！

「落ちたり、事故が起きたりする『かもしれない』スリルと、普段味わえないスピード感を楽しむもの、って言ったらいいのかな」

「思わず大声が出そうになる、だから『絶叫マシン』って呼ばれてるっていう側面もあるな」

……り、りろんはわかった。

「ま、あれだな！ 経験すれば分かるさ！」

「投げたな晶葉」

「氷菓ちゃんも科学者の端くれなんだし、実証で確かめるのはどう？」

「それもそっか」

「オバケ屋敷もな……しかし、まずは小さいところで慣らした方がよかったのではないか？」

「もうそんな時間無いよお」

「ここが基準になっちゃうっていうのもそれはそれで……変な話よね……」

そんなにスゴいんだろうか、アレ。

……確かに、園外からも悲鳴と轟音が聞こえてくるけど。

@ —— @

『それでは発進しまーす』

呑気な声と共に、マシンがゆっくりと進んでいく。

さつきまで色々ところ、想定より痩せたボクのシートの固定が甘くて途中で吹っ飛ばされるんじゃないかとか、その他にも番組スタッフと遊園地のスタッフとのやり取りが少しだけあったが、予定通りにジェットコースターは発進した。

みんなの顔がやや不安気味なのは……まあそれとこれとは関係なく普通にこういうのが怖いってことだろうか。志希さんは例外として。

……しかし、あれ……？ このシート、やけに揺れるというか、自由だな。

かなりこう、回転するとか、上下にぐるぐるすると。逆に向いてない？ ……いいのこれ？

そんなことを思っていると、もうジェットコースターの頂上に差し掛かっていた。周りを見ればみんな顔が強張っている。志希さん以

外。

——そして。

「……!?!」

「きや—— ツ!!」

「びやああああああああああああああ!!」

「イヤツツホオオオオオオウ!!」

勢いよく、体が「落ちる」。

凄まじいスピードで体が振られ、上から下からくるくるくるくるくるくる……景色が揺れる! うオオンボクはまるで人間風車だ、いや違う!

でもすごい。このジェットコースターつてやつはすごい! スリルと、スピード感……怖いのも少しはある。レールの装飾にぶつかりそうなこの感じ、どんな声を上げたらいいのかさえ分からないこの緊張感、そして——。

……やがて、コースが終わり、元の場所に戻ってくる。

そんな中でもボクの心の中はさっきまでの興奮で煮えたぎっていた。他のみんなはなんとなくゲツソリした様子だけど、ボクと志希さんに限ってはそんなでもなかった。

「ど、どうだった氷……何でそんなに真顔なの!?!」

「こ……これは、アレだな……怖いと言えればいいのか楽しいと言えればいいのかわからんがとにかく興奮してきてて、でも普段そんな表情作ったことも無いからどうという表情にするべきなのか迷ってる、そんな感じの表情だ……」

「よく学んだるな。まるで氷菓博士や」

「学んださ、地雷探知のためにな……」

地雷って何さ。

「つて言われても……」

作り物だつて分かり切っているのに、怖がるのはちよつと。

行程は1km近くあるという話だったし、時間がかかって体力が尽きてしまわないかどうかという点は間違いなく懸念事項と言えるだろうけど……走らなきゃなんとななるか。うん。

それはそうと、入る前から震えた手でボクの肩を掴んで離さないさくらさんをなんとかしてほしい。

この体勢、体重かかって結構辛いんだよね……。

「で……最初は誰だ？」

「名前順でお願いします」

スタッフさんの指示に従ってそれぞれ名前順にペアを組む。

トップバッターに晶葉と泉さん、次に志希さんと亜子さん、で、最後にボクとさくらさんだ。

……と、そのことに気付いた晶葉の額に汗が流れた。

「ちよ、ちよちよつと待ってくれ。トップバッターは私かあ!？」

「うん」

「こ、ここは名字順ではなく名前をだな!」

「変わらないよ?」

「……そうだった!？」

たとえば名前順にしたとしても、「あ」きはと「し」きさん、それと「ひ」ようかだから順番は今と何も変わらない。

「……もう覚悟を決めよう。行こう、晶葉!」

「う、うむ……」

と、決心した二人は至極ゆつくりとオバケ屋敷の中に入って言っ

た。

そして、しばらくして。

「うゝわゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!」

「やっと出られた! やっと終わった! うわあああんよがっただあゝあああ!!」

——すごい声とすごい顔で、二人がオバケ屋敷の中から出てきた。

いつものクールさはどこへやら。普段涼し気な顔をしているあの二人がこんな表情で出てきただけあって、色んな意味で現場は大盛況だ。

番組的にも最高にオイシイシチュエーションだろう。ボクとしてもあの二人の珍しい表情が見られてちよつと驚いている。

「あのイズミンがああまでなるとは……」

「ひええええええ……」

「さくらさん、あんまり力入れないで絞まる絞まるしまグエツ」

「わあああああごめんねえ!?!」

そんな二人を見て服の裾に手をかけていたさくらさんだが、あんまり力を入れすぎてボクの首元が絞まってしまった。

流石にここで死ぬのは看過できない。

そんなやり取りをしながら次の二人を見送ると、今度も中から悲鳴が——亜子さんのものだけ——聞こえてきた。

志希さんの声も時々聞こえては来るが、だいたい笑い声か解説だ。それを聞いて更に亜子さんが悲鳴を上げる。どういうループだ。

ともあれ、出てきた二人は至極対照的。叫び疲れて汗だくな亜子さんと比べ、いつもと同じ笑顔のままの志希さんが印象的だった。

「にやははー楽しかった♪」

「わ、わからん……全然わからん……何が楽しいことあるんやこれ……」

……憔悴しきった亜子さんのことはいったん泉さんと晶葉に任せるとして、次はボクらの番だ。

「さくらさん、そろそろ」

「う、うん……」

体勢は相変わらずだ。でも他にやりようもないし、このまま行こう。

スタッフの人に告げてオバケ屋敷の中に入れてもらおうと、まずはビデオを見ることになった。どうやらこれで施設のバックボーンを説明しようということらしい。

映像でも様々な恐怖シーン、怪奇シーンが流れている、その度にさくらさんが小さく悲鳴を上げる。

しかし、医者が自分の立場を利用して違法な人体実験を繰り返していた……か。なんとなく身につまされる話だ。

人体実験を受けた側に全くメリットが無くて、その上全くの無駄死についてところまで同じだ。そのせいで無念を抱えた魂がこの廃病院の中に漂っている……とか。

うんうん。あんな意味無いことにつき合わされて死ぬなんて勿論無念だよ。分かるってばよ。

その後、アトラクションの中に入っていくと、更なる怪奇現象——まあ、作り物だけど——に見舞われた。

恨み言を呟く少年の声。背後から襲い掛かってくる怪物。そんな中でもなかなか開かない扉——。

「キヤアアアアアアアア!! ひゃああああああああ!! うわああああああああん!!」

「大丈夫? さくらさん」

「何で氷菓ちゃんは平気なお!？」

「うーん……ボクが同じ立場になったら同じことするかもって思うからかな?」

「えっなにそれこわい」

ドン引きされた。

心なしか周囲から僅かに感じていた視線さえ熱が引いている気がする。

いや……でも普通の考えだよな? 悪霊ってことにはなってるけど、自分を殺した人に怨みを抱くのは当然だし、生きてる人に嫉妬するのも当たり前だ。羨ましいと思ってるのかもしれない。ボクだってあつちで母親と再会でもしたらまず顔面に一発叩き込む。

それと似たようなものだろう。ボクはこうして別世界とはいえ、二度目の生を得られたんだからまだ良い方だ。死んだままとなれば怨恨も当然、恐ろしいことになっていくはずだ。分かるってばよ。

しかし後ろから襲ってきた怪物役の人、ボクのこと見るなり身震いしてそのまま立ち去っていったな……もうちよつと本気でやっつくれないだろうか。目の前まで近づいてきてくれたら流星にちよつと怖かったかもしれないのに。

♪

「そ、それ何の鼻歌……?」

『DIE SET DOWN』ってやつ

モツっぽいものがそこら中に転がってるし、なんかそれっぽい感じがする。

例の人体実験を施した医者も明らかにサイコすぎて生まれるべきじゃなかったし。

「怖くないのおお……!?!」

「別に本物があるわけじゃないしねえ」

「ほ、本物見たことがあるのお……?」

「流石に幽霊は無いよ」

「……『は』!?」

純粋な霊的エネルギー体である幽霊という存在を目にするのは極めて難しい。あつちの世界ではそもそもそれを認識するための受容器が整っていないかったのだから余計にそうだ。

でもゾンビは見たことある。ゾンビパウダーみたいなものも普通に作れたし、作らされたし……あつちじゃ麻薬とかそういう類のそれじゃなくて本当にゾンビ作るものなんだよね。とんでもないことに。

「氷菓ちゃんが度々分らないよお……」

「人間、他人のことなんてよく分からないものだよ」

「年下なのに年上みたいなこと時々言ってくるよお……」

これはさくらさんがちよつと幼さを残しているだけじゃないだろうか。それ自体は悪いことじゃないし、そういうところは残してた方が良いとも思うけど。

本人が気にしているなら言うべきでもないか。

そうこうしている内に、アトラクションも終わる。結果、出てきたのは清々しい表情のボクと色んな感情を含んだドン引きのさくらさんだった。

放心しているようで、目の前で手を振っても反応が無い。大丈夫かな？

「二人とも、どう……元氣そうだな氷菓は」

「さくらは……ダメそうね……」

「どうだったー?」

「色々勉強になったかな」

「何言ってる……? いやホント何言ってる……?」

いや勉強になったよ。こういうアトラクションの作り方とか。他の人はどういうシチュエーションで怖がるかとか。

ボクの常識、割とズレてるからその辺の補正にはちょうどいい。普段は別に普通というか、常識も備わっていると自分では思ってるんだけど、いざ普通と違う状況に置かれるとギャップが出てくるし。

「怖いとかは……」

「作り物でしょ？」

「作り物だよね？」

「……うん二人はそうなるよね……」

晶葉が怖がるのが不思議という人もいるだろうけど、晶葉は晶葉でかなり常識を弁えているし、感性もそうだ。ただロボットのすることとなると自分からそれを突き抜けることがあるだけで。

と、そんな話をしていると、スタッフさんがこちらにやってきた。

「皆さん、本日はお疲れ様です。今日の行程はここまでになりますので、あとは自由時間にしてください。我々は撤収しますので」

「はい、お疲れ様でした」

「お疲れでしたー！」

「お疲れ様です」

「あ、すみません白河さん、ディレクターからちよつと伝言が」

「はい？」

「ちよつと白河さんの顔抜いても使えない部分が多いので、出演時間が短くなりますが……という話で」

「あ……すみません、表情、普通すぎましたか……？」

「いえ、そういうわけではなく……視聴者が不安になるとか……」

「視聴者が？ 不安に？ ……何で？」

「何でも、怖がらなすぎで怖い、あと目が淀んでるとか何とか……後半はこっちの機材トラブルですね。すみません」

「いえ、お気になさらず。他は使えるんですよね」

「はい」

「良かったです。なら、その分他の人を映してください。あと、ボクの一存だとも言いえない部分もありますので、最終的な調整は担当Pの方とお願いします」

「ありがとうございます。それでは」

ちよつと残念だけど、明確な理由があるなら仕方ない。潔く諦めよう。

幸い、FROSTやフルボッコちゃんメインクラスに抜擢されただけあって、今はボクの方がメディアに露出する機会が多い。今回は二人の方が多く取り上げられると言うのならそれに越したこともないだろう。

さて。

「それじゃあ今度こそ遊びに——」

「ちよ、ちよつと待ってえ……今遊びに行くのキツイよお……」

「……それは確かにな」

「ちよつと休憩してから行かない？」

……そういうことになった。

その後休憩のために向かった食事コーナーで軽食を摂ったのだけど、こういう施設の食事というのはいやに高いなと思って結局それほど食べられなかった。

もしかして何か特別な味付けでもしてあるのかと思っただらそういうわけでもないし。

マズくはないけれど、だからってここで食べるほどでもないな……

と思っているとやっぱり他のみんなから変な目で見られてしまった。

解せぬ。

そんなこんなで休憩して十数分。
ボクはまたもう一度ジェットコースターにやってきていた。

「ん〜好きだねー氷菓ちゃんも♪」

「うん。なんか好き、これ」

スピード感、回転感、それに——そうだ。それだけじゃない。それが何なのかはよく分からないが、それでも何か、求めているものが見えるような気がする。

だから好きだ。この感じを味わうのが。

「ひゃー♪」

「……っ！」

二度目の感覚。この浮遊感。こんな感覚をなんだかずつと求めた気がする。

もしかしてこれが、イヴさんの言ってた「最初」なんだろうか。いや、それそのものじゃないとも思える。

でも、間違いなくこれも手掛かりの一つではあるようにも……。

「も一回」

「え」

三度目、四度目、五度目……何となく掴めてきそうな気がする。

スピード……いや違う。回転？ というのも違う気がする。いや、もしかすると完全なる自然の美、黄金長方形の回転が関係してくるのか？ 黄金比それ自体も錬金術に大いに関係してくる事象だ。ボクにとつての何か、というあたりが関係してくる可能性は大いにある。

だけど、それも違う気がするんだよな……じゃあ何だろう。でも確実に何かが……。

「ごめんあたしギブアップ……」
「えっ」

六回目に差し掛かった頃、唐突に志希さんがそんなことを言い始めた。

……えっ？

「え、無理？」

「流石に疲れたよ……ぶっ続けは疲れない？」

「ご、ごめん。ずっと物思いにふけてて」

……こうなると流石にどうこうできないな。頭を下げ謝りながら、二人でジェットコースターを降りる。

降りてみると、別のアトラクションに行っていたみんなが待っていて、呆れたような表情でボクラ、というかボクの方を見ていた。

「よくそこまでやれる体力があるな……というか大丈夫なのか？ 吐きそうになったり」

「ボクは別に」

「あたしはちよつときつくなくてきた……」

「ごめんって」

「何でモヤシの氷菓の方がピンピンしているんだ……」

三半規管う……ですかねえ……。

あと単に研究・探求が目的になってきてそういうのを度外視する段階に入ってきたから、のような気もする。

「それより、他のにも乗ったら？ ほら、あっちの方ならまだみんな乗れそうだから……」

「ん、そう？」

「うんっ、あっちは大丈夫だよお！」

「せやな。というかあつちは前も乗ったしな」

「ふうん……あ、志希さんどうする？」

「休みゆく……」

置いてくつてのもちよつと忍びないけど……比較検討も大事か。

一つだけを見て判断するっていうのも、考えてみたらあまり良くないことだろうしね。

「うん、次あつち行ってみる」

「よし、じゃあ行くか。その次は——」

「？ 十回くらい乗らないの？」

「「無理!!」」

全力で拒否されてしまった。

……普段ボクのこと散々虚弱貧弱脆弱って言ってるじゃないか、と思わなくもないけど、変に強行するのもそれはそれでみんなに悪い。探求はいずれ、一日休みができた日に一人でやるとしよう。

でもなあ。できたらみんなで乗って楽しみたいって思いがあるのも……確かなんだけど。

……みんな、一緒に十回くらい乗ってくれないかな。

25：にせもの美術展

フルボッコちゃんの収録が始まって、少しばかりの時間が経った。追加キャストであるボクら三人やアリスさんも、元から連携が取れるようになってきたのだけど、そんなある日、ボクらは更なる追加キャスト——より正確にはゲストだけ——の存在を知らされた。

また急な話ではあるが、それ自体はこの会社じゃあ割と普通のことだ。別に拒む理由があるでもなし、ボクたちは皆、ごく普通にその日を迎えることとなった。

……のだけどそれはそれとして。ゲストを迎えるその日、ボクたちはそれまでの時間つぶしのために、楽屋でレイナさん、光さん、アリスさん、千佳ちゃんとボク……それから晶葉を含めた6人で楽器を弄っていた。なお志希さんは別室でお昼寝中である。

「じゃあ行くよ。1、2、3、4……」

ボクの演奏するギターに合わせ、レイナさんと千佳ちゃん、アリスさんがそれぞれの持っている楽器を演奏する。

……が、うん。見事なまでにバラバラだ。唯一リズムが合ってるのはレイナさんくらい。光さんはボーカルに入り辛そうにそれを見ている。

この状態でも意味無いな——と、ボクはギターを演奏する手を止めた。

「うーん、難しいよ……」

「学校の音楽会ならすぐにできてたんですが……」

「それとこれとは少し勝手が違うだろうに」

リトルマーチングバンドガールズ
L・M・B・Gというユニットがある。恐らく346プロダク

シヨン史上最大の人数を誇るユニットで、その総数はスターライトプロジェクトに匹敵するほどだ。

その名の通り、小さい女の子を主にして構成されるマーチングバンドのユニットだ。そのため人数の融通は利きやすく、増員も随時図られており、ボクや晶葉、こずえちゃんや聖ちゃんなんかも以前打診を受けたことがある。ただボクを入れようとした意図はよく分からない。ボクが歌う「ハイファイ☆デイズ」とかドコ向けの需要だよ。

さて、それはともかくアリスさんと千佳ちゃん、光さんとレイナさんの四人はこのユニットの一員だ。が……やっぱりあれだけの人数のアイドルを集めた弊害か、とにかく全員の時間がなかなか合わない。一人一人のアイドル活動があるのだから当然と言えば当然と言える。

で、まあそんなわけで、ボクはどんな楽器でもある程度こなせているから、こういう風に四人の手伝いをしている……というわけだ。

「それにしても氷菓ちゃん、ギターもできるんだな！」

「うん。楽器でさえあればだいたい演奏できるよ」

「これで体力さえ備わっていれば完璧だったかもしれないね……」

「内面がな……」

「しれつとデイスってんじゃないよ」

でも積極的に否定ができないのが悲しい。

「うーん……しかし……なあ千佳ちゃん」

「うん。レイナちゃん、上手くなってるない？」

「ハアアーン？ 上手に？ そんなの当たり前じゃないのァーッハッハッハゲホッ！」

「はい」

「くっ、か、感謝しておくわ……ゲホゲホ」

「まあ、練習したもんね」

「は、はあー!? 何言っちゃってるの氷菓!? このレイナサマが隠れ

てこつそり練習なんてそのヒーローバカみたいな真似するワケないでしょオ!？」

ツンデレ乙。

……実を言えば、ボクとレイナさんは同じ学校に通っている。

寮に入ったことで校区が変わり、他の公立校に通う寮生のアイドルと一緒に学校に通うことになったのだけど、その中に偶然にもレイナさんがいて——という話だ。この学校には他に七海ちゃんや法子さん、村上巴さんなども通っている。仕事や学年、組なんかの兼ね合いもあるから、同じ学校とはいえ七海ちゃん以外の面子と顔を合わせることは少ないのだけでも。

レイナさんは時々時間を見つけては練習を重ねている。実際にボクもそれに立ち会ったし、今のように楽器で合わせたりもしてみた。その成果がこれに出ているのだろう。

「クツ……ちよ、調子狂ったわ。外の空気吸ってくる!」

「あつ、レイナ!」

見事なまでの照れ隠しムーブを發揮し、レイナさんが部屋の外に飛び出した。

別にそんなひた隠しにすることもでもないと思うんだけどなあ……やっぱりキャラの問題だろうか。

でもレイナさんみたいな人が努力を重ねてるって、ギャップがあつていいと思うんだけど……。

ともあれ、そんなこんながあつてゲストの到着だ。

ボクたちも揃ってセット裏でその人が来るのを待ち構えていた。

「皆さん、おはようございます。本日はよろしくお願いします!」

澆刺とした挨拶と共に、ボクたちへ笑顔を向けるのは、一人の女性

——シンデレラプロジェクトのメンバーにしてボクたちの直接の先輩の一人である、にったみなみ新田美波さんである。

そう、今日からこの撮影を共にするゲストとは、美波さんのことだ。

この前発売したシングル、「生存本能ヴァルキュリア」の宣伝も兼ねての抜擢である。その役柄は、文字通りの「戦乙女」ヴァルキリー。聞いたボクも正直意味が分からなかった。けど十中八九ただスタッフが撮りたいだけだろう。

ともあれ毎度のこととは一旦置いて。

美波さんの役は、魔法少女たちに魔法という奇跡を授けた「神」の代行者。敵対勢力である「大罪」の復活に呼応して地上に顕現したという設定で、最終的には悪に堕したブランポクに討ち取られるものの、チカやフルボッコちゃんの新フォーム覚醒の一助になるという重要な役だ。

……まあ、ちよつと不憫なようなオイシイような、そんな感じはあるけど。重要には違いない。

余談だが、脚本のト書きを見ると「ここで装甲をページ」とか「ここで服が破れる」とかやたらと多いんだけど、大丈夫なのか脚本。大丈夫なのか監督。

「おっはよー♪」

「志希さん、もうちよつと挨拶ちゃんと……おはようございます」

「あはは。大丈夫ですよ。よろしくお願いしますね」

活発、かつこんなにも鷹揚で清楚なのに、何故スタッフはあんなにもお色気を推すのだろう。甚だ不思議だ。

「新田さん、一ノ瀬さん、準備お願いしまーす！」

「あ、はーいー！」

「はーい♪」

「ん？ 二人は何かあったか？」

「特殊メイクだっけさ」

役の性質上、美波さんは元より、今回は志希さんも戦闘パートに出
てくるのでちよつとした特殊メイクが必要になる。

なんでも、遺伝子工学によつていわゆるラミアみたいに足を蛇に変
えることで戦闘力を上げる——という設定なのだとか。他の回でも
ハーピーみたいにしてみたりアルラウネみたいにしてみたり……と
予定されて………今改めて考えるとなんとというか、その、スタッフ
の趣味がモロに現れてる気がする。

公共放送に流すものだとは自覚はあるんだろうか。

「ボクらはそれまで一旦待機だつて」

「そうか。なら着替えておくか？」

「だね」

もうちよつと練習するのもアリかもしれない。それはそれで着替
えた後でやってもいいかもしれないけど………そうしたらなんとも幻
想的な絵面の音楽練習会になつちゃうな。

それはそれでオフショット的にTwitterに上げてみても面
白いかもしれない。プロデューサーに載せてもいいかの確認取らな
きゃいけないけど。

……そんなこんなで二時間ほどが過ぎた。

いくらなんでも遅い。遅すぎる。

ボクの記憶が確かなら、ハリウッドのある有名な映画の顔、首、手
………なんかの露出部に特殊メイクを施すのに一時間半ほどかかった
という話を聞いたことがある。

美波さんはそれほどでもないにしても、今回一番特殊メイクしな
きゃいけない志希さんでも足元だけ。それも殆ど足が見えてたりス
カートで隠したり、こう、有体に言ってしまうと多少適当でも隠しき
れる程度のものだ。

オマケにCGとSFXも重なるので、余計にこれ以上時間を重ねる

必要を感じられない。ハリウッドや映画とは環境も違うとはいえ……。

「……どうしたんだろ」

「見に行くか？」

「でも万が一メイク途中だったりしたらなあ」

「今更気になることか」

……いや、女同士何だから別にいいのか、それは。

まあ気まずいと言えば気まずいけど。それはそれとして、もし寝てたら問題だ。確認に行っておこう。

「ちよつと行ってくるね」

「あ、はい、お願いします」

アリスさんに一言付けて、二人で楽屋に向かう。

二人の待機している楽屋にたどり着くと、特に抵抗も無くすんなりと扉は開いた。

「……うわ、二人とも眠っちゃってるよ」

「本当だな。やれやれ、世話の焼ける……」

それに何だか妙なおいもする。

ははあ。さては志希さん、変なアロマ使って眠らせちゃった挙句自分も寝ちやっとな。

「志希さーん、起きてー」

「……んにゃ？」

身体を揺さぶると、少しだけ身じろぎしてから志希さんが目を覚ました。

ふるふると軽く頭を振り、少しの間周囲を見渡した後にこちらを見てから、一言。

「おっはよー♪」

「おっはよーじゃないよもう二時間経ってるよ」

「早く準備してから来い。それとそっちの美波も——」

「あ、美波ちゃんはいいいよーあたしが起こしとく♪」

「……？　じゃあ、お願い」

「あいあいさー」

いや、手間は変わらない……よな？

でも本人がいつて言ってるし、いい……のかな。

なんとも不可解なものを感じながらも頷いて、ボクは晶葉と一緒に楽屋を出た。

——その日は一日、柑橘系の匂いが現場に漂っていたけど、やっぱりあれはそういう種類のアロマだったんだろうか。

@ —— @

「……ということで、審美眼を養いたいです」

「何がということでのなのか分からないんだけど」

それから少し経って、ある日のこと。ボクは唐突に自室にやってきた頼子さん……とマキノさんに、そんな言葉を投げ掛けられていた。何がどうしてそうなったのか。以前から割とみんな、ボクに対して無茶ぶりを投げすぎじゃないだろうか。

「この前の収録、見てたわよ」

「はあ。うん、ありがとう」

「その時氷菓ちゃん、芸術分野の問題を全問正解していて……」

「あ、あー……あれ？」

確かにあの時、二人を含め何人かあの場にいたなどは思ったけど……それか。

いや、しかしだけれども。

「……でも何で？」

「その、今度私たちナイトシーカーズで地上波の『トンデモ鑑定団』のナビゲーターに選出されたんです」

「それは、おめでとう。けど何でボクに？」

「やっぱり、そういう番組のナビゲーターをするからには真贋を見極める目が必要です、って頼子が言い出したの。そういうことよ」

「え、ええ……」

た、確かにあの時は色々言い当ててはいたけど、それでボクか。

別に駄目だとは言わないし言えないけど……。

「ぼ、ボクに聞いてもあんまりアテにはならないと思うよ……？」 詳

しいって言うなら、頼子さんの方がよっぽど詳しいと思うけど」

「だとしても、氷菓の知識は一般的なそれとはまた異なるもの……それと頼子の知識を合わせれば更に、とは思わない？」

「ん、うん……？ う、うん」

それもそうか……それもそうか？

なんだか、そうでもあるようなそうでもないような……マキノさん、もしかして前の時みたく、ちよっぴり自分が楽しもうって思いも混ざってない？

まあいいか……。

「……トンデモ鑑定団ってあんまり見たこと無いんだよね」

「あら、そうなの？」

「うん。まあちよっと」

大した事情でも無いのだけど、やっぱり贋作を作って売っている側としてはちよつと身につまされるといふか……前に見た時に偶然ボクの作ったものが出てきて、実際ちよつと自分のやっつてることに対して罪悪感を覚えたというか……。まあそれは置いておこう。

「でもその筋には詳しいのよね？　ほら——あんなお知り合いがいるのだし」

「そこは、まあ」

「お願いします……折角の出演ですので、できるだけ完璧に仕上げておきたいんです……！」

「う、うん……けどこういうのになると、どうしたらいいのかあんまり……」

流石にこの熱意を裏切ることにはボクにはできない。

しかし、ボクの場合はやや裏技めいた技術を使っているからこそその知識量と鑑定眼なんだ。頼子さんが求める正しい鑑定の知識とはまた違う。

弱ったな。こうなると、他にどうしたらいいか——。

「あ」

「何か思いついた？」

「……うん、一応……。その、頼子さん」

「はい」

「怖い人って、会っても平気？」

「……はい？」

……そんなわけで、そういう方針にした。

ボクの美術品に対する知識は、基本的に必要に応じて身につけたものだ。

だからどうしたってどこかに偏りは出るし、そもそも興味の有無という点で言うなら「高く売れるならいいんじゃない？」程度のもので、本気で興味を持って調べていたりするような人と比べればどうしても知識量は少なくなる。

じゃあ誰が一番美術品に対する知識を持っているのか、という話だけど、鑑定士という職業以外で言うなら……やっぱり、美術品を取引している人間だろうと、ボクは思う。

まあ、あれだ。はつきり言ってしまうえば、古宮の爺さんに頼ろうという話である。

贋作商というのは「本物」の価値をよく知っているからこそなれるものだ。昔そんな話をしてもらった覚えがある。ということとはつまり、あの爺さんは美術品の価値を人より遙かに知っているということになる。

何が偽物で何が本物か——まあ、考えてもみれば古宮の爺さん以上に詳しい者もないだろう。

というわけで、ボクたちは三人で連れ戻って再び例の船着き場に戻ってきたのだった。

ちなみに今回はプロデューサーに報告済みである。

「そういう事情ねエ……」

と、自室にやってきたボクらを見て、軽く頬を搔きながらおじじはそんなことを呟いた。

「なんとかならない?」

「何ともならんこたあないが……まあお嬢さんたち、コーヒーでも飲みなさい」

「すみません。いただきます」

「い、いただきます……」

委縮した頼子さんとは対照的に、まるつきり平静なマキノさん。一

度ここに来たことがあるからとはいえ、おじじのあの強面こわもてを目にして
まるで気にした様子が無いというのも驚きだ。サングラスに切り傷、
黒スーツ……と、カタギじゃないのが見え見えなくらいなんだけど。

「まあ、氷菓のお友達のアイドルさんたちの頼み事とあっちゃあこつ
ちとしても無碍にはできねエ。うちで保管してるものなら何でも見
て行きなさい……って言いたいところだが」

「何かあったの？」

「いや……ウチにあんのは贋作ばかりだろ？ それで勉強になるか
はなア」

「その贋作を見るのも、鑑定の勉強にはなるかなって思って」

「そうだなア……」

そう言つて、二人……というより、頼子さんを値踏みするように見
据えるおじじ。

果たしてお眼鏡に合うか——と一瞬心配してしまつたが、杞憂だつ
たらしい。一つ頷くと、おじじはボクに一言「見せてやれ」と言付け
て、自分は携帯でどこかへ連絡を始めた。

「じゃあ、行こっか」

「どこへかしら？」

「ここ、贋作がコンテナに積んであるんだけど、いくつか顧客用に展示
スペースを作ってるんだ。とりあえず一番近いところにあるの開けて
もらうから、そこまで」

船室の外に出て、コンテナのある場所へ向かう。

この船自体、ボクにとつては庭のようなものだ。すすいとコンテ
ナのある方へと歩いていく——と。

「姫ッ!!」

「姫!?!」

「姫……!?!」

……しまった、とボクは閉口した。

あんまりにもこの船から離れすぎて忘れていたが、そういえばこんな呼ばれ方してたこともあったっけ……。

大声を出してこちらを呼んだ船員の一人が、にこやかな笑みでこちらに向かってくるのが見える。対照的に、頼子さんとマキノさんは理解できないものを見た時のような表情をしていた。

「やめろオ!!」

「? 姫は姫じゃん? ここに友達連れてくるなんて未だかつてない快拳を成し遂げたってボスから聞いてさ!」

「やめろオオオオオ!!」

「ンフツ」

「ひ、姫……」

ちくしょうやつぱり普段とのギャップで笑われてる!

でも笑うよねそりゃ……ボクみたいなのがあんな呼ばれ方してたら普通笑う。かなり大爆笑。それはそれとしてつらい。かなりつらい。

「それじゃあお二人さん、うちの姫のことを今後ともヨロシク! あ、これ鍵ね」

「頼むから姫とか呼ばないで……あともうどっか行ってよ……」

「氷菓ちゃんのこんな姿初めて見ました……」

「私は前に少し見たわ」

地に伏して打ち震えるボクに更に姫、姫と投げ掛けられる。ここ最近で最悪とすら言ってもいいかもしれないくらいの気分だ。生理の時に匹敵する。

よもやこんなところでボクの珍妙な呼び名を晒すことになろうと

は……最悪だ……。

「……このことはどうか内密に……」

「え、ええ」

「も、勿論です」

床に突っ伏しながら言ったことで、もう何とも有無を言わせない雰囲気だ。二人とも半笑いだったものの、なんとか承諾は得られた。

しかし果たして本当にバラさずいてくれるのだろうか。頼子さんは元からそういう性格じゃないけど……マキノさんは割と愉快犯的な行動を取ることもあるしな……。

……まあ、情報倫理についてはよく理解しているだろうし、信じておくとしよう。

さて、それはともかく見学だ。

コンテナの中に通した線を辿って電気を点けると、その中はまさに美術館さながらの様相だった。

絵画、彫刻、壺に刀剣。あるいは掛け軸だったり陶器だったり……。兎にも角にも、数々の品物が二人を出迎える。

思わずと言った様子の2人の口から、ため息が漏れるのを聞いた。流石にこれだけの品数、圧倒くらいされるだろう。

「……改めて言っておくけど、これ、贋作だからね」

「あつ……そ、そうでした。ええと……」

「それで、何をどうすれば学べるの？」

「世の中の鑑定士はどうやって真贋を見極める目を養うの？ って話にもなるんだけど、やっぱりとにかく場数を踏むことが重要だと思うんだ。というわけで、ここにある贋作、何がどう本物と違うのかを鑑定してみよう、って話」

「ふうん、成程ね。けれど氷菓はこれがどう違うのか、知っているのかしら？」

「うん。ここにあるものボクが作ったやつだから」

「……え？」

「え？」

二人が目を見開いた。

実際に描いただとか、錬金術で作っただとか、そういう違いはあるけど——少なくとも、この場所でボクが作ってない贋作つても殆ど無い。

本来はもつと精巧かつ緻密に……でも、贋作であることがすぐに分かるように、どこかに「H・S」のサインを施している。

一応、この部屋に入った時点でそれぞれの美術品にある程度の「綻び」を作って贋作であると分かりやすいようにはしているけれど。

「これ……全部？」

「全部」

「全部!? あの……全部なんですか!？」

「全部」

全部だ。

一つや二つではない……全部だ。

全部だ!

「すごいでしょ」

「すごいけど……」

「……氷菓ちゃんがこんなこと言ったりドヤ顔したりするの、初めて見ました……」

「それは私も」

調査不足だったわ……とやや気落ちした様子でマキノさんが眼鏡に手をやった。

そもそも言えばそれを他人に明かしたことが無いわけだし、知ら

なくたってしょうがないくらいだと思うんだけど……マキノさんからしたらそれが許せないってことなのかなあ。

……なんだかちよつと優位に立てた気分。

「……拝見させていただきます」

すつと真剣な表情に移り変わった頼子さんが、周りの美術品へ目を向ける。

本物はここには無いけど、勤勉な頼子さんのことだ。有名どころはまず間違いないく押さえているだろうし、この場所にある美術品くらいなら見てある程度の見分けはつくはずだ。

「それで、実際どういう違いがあるの？」

「うん。例えばあのモネの絵だけ」

「……どれ？」

「あの道の絵」

「ああ、あれ」

……まあ、予備知識が無ければあれ、単なる綺麗な光景の絵にしか見えないよね。

以前写真に撮っておいたいくつかの画像を引っ張り出し、マキノさんに見えるように掲げて見せる。

「あれ、本当はもつと道の曲がり方がなだらかなんだ。で、葉っぱはもつと影がかかって立体的になってる。これ本物の画像ね」

「……………え、ええ」

「分かった？」

「わからないわ」

「そっかー」

まあそうだろうね。正直ボクも、構造解析すれば分かるけど……程

度しか分からない。

ボクの場合、確かに知識はあるけどこれ、ただ本当に知識を蓄えているだけだし。知識は使わなければ無意味とはよく言ったものだ。

「じゃあこの刀だけど」

「刀!? ……本物にしか見えないけれど」

「これ、大兼光っていう文化財のレプリカなんだけど、実際のものより刃文はもんの幅が短かったり打ち方が甘かったりして……」

「わからないわ」

「瑞樹さんみたいなこと言わないでよ」

これに関しては割と本気で作ったりしたのでもうちょっと説明を聞いてほしいんだけど——無理か。

こういう刀剣とか、見ててちょっと楽しいし……作ってても楽しいし……こう、分からないかな。

分からないか。分からないだろうな。仕方ないか。もう本人に言われてるしこれ以上はやめとこう。

それから二、三時間ほど、頼子さんは黙々と美術品の鑑定を進めていた。

ボクとマキノさんと言うと、早々にギブアップしてコーヒー片手に仕事の話に移っていた。

「おうい」

「あ。ちよつと待つてて」

そんな中、ふとおじじがコンテナの扉を開いた。

駆け寄ってみると、何やら額縁に収められた絵画、らしきものを片手で抱えているが……もしかしてそれが、さっきの電話の内容に関わるものだろうか。

「待たせたなア。ちよいと取り寄せるモンがあつてな」

「何だったの？」

「あーちいっとな。絵を買う約束を早めてもらった」

「……絵？ 何の？」

「確かえー……ああビュツフエだ。ビュツフエ」

「ふうん。これ、本物？」

「ああ本物だ。ギャラリーで直接買い付けてきた」

フットワークが軽いなおじじも。

「偽物だらけよりは本物が一つでもある方がいいだろう」

「まあそうだけど、高くなかったの？ 大丈夫？」

「しばらく遊んで暮らせる程度にやあ稼がせてもらったし、そろそろ陸おかに上がろうと思つてなア。インテリアにやあちようどいいだろう」

「え。これ辞めるの？」

「応よ。まあ、心配なさんな。今度は堅気仕事だ。ツテも作ったし、隠居後の道楽だと思つて気楽にやるとも」

「そうなんだ……じゃあ、どこ行くにしても連絡してよ？ ボクだけ

じゃなくて先生も知りたがってるんだから」

「おうおう。それよりいいのか、友達ほつといてよオ」

「あ、ごめん。それ借りていい？」

「おう持つてけ持つてけ」

ボクへ絵画を手渡すと、かつか、と笑つておじじは船内へと戻つていった。

それじゃあ、次は——この絵の複製と、贋作だと分かる程度の差異を作らないと。

ベルナール・ビュツフエは比較的現代まで生きていた画家だ。ボクらのよく知るいわゆる「絵画」の作者、ピカソやゴッホといった著名人に並ぶほどの知名度は無いかもしれないが、それでも天才として名を馳せた大画家である。何せ静岡に彼の作品を展示する専門の美術館があるほどだ。

だがやっぱり他の絵画と比べると、贋作はそれほど売れない。何せおじじがやったように、普通にアートギャラリーなんかで購入できる程度の金額に抑えられているからだ。物好きの金持ちが道楽に買う、程度で購入できるわけだし、わざわざ贋作を買う必要もそれほど無い。

というわけで、今ここにビュツフェの絵画の贋作は無い。とりあえず、コンテナの建材を一部変換して贋作をその辺に新しく創り出して——と。

「頼子さん、これ。おじじ……爺さんが持って来てくれたけど、真作の絵画だって」

「本当ですか!？」

「……氷菓、あなたあの方のことおじじって呼んで」

「やめて」

「可愛いからいいんじゃない?」

「やめて」

次いでケースの下、ボールで隠していた机の下から(さっき創った)贋作を引っ張り出して並べてみる。そうすると、二つの違いが目に見えて知れた。

「確かに、こうして比べてみると違いが際立って見えて、分かります」

「……どう違うの?」

「線の力強さや色彩感覚……それ以外にも色々ですが——本物の方がどれも明確に優れています」

「そうなの?」

「そうだね」

たぶん。

今チラッと見て劣化複製したものだから間違っていないはず。流石にここで某格付け番組みたいなことは頼子さんならならないはずだ

し、実際今頼子さんは本物を見て「優れている」とはつきり言っている。大丈夫だ。

「それに……」

「それに？」

「……いえ、やっぱりいいです。論理的とは言い難いので」

「そうかしら。言葉にしてみるのも時には必要なことかもしれないわ」

「そうでしょうか？」

「うん、そういうこともあると思う」

少々論理的じゃないからって何だ。ボクなんか非論理的の塊みたいなものだ。

「……作者の魂、熱意、と言うのでしょうか。真作には、そういうったものが宿っているように感じます」

「魂、熱意——ね。ふふ。確かにそういう考え方もあるかもしれない」

「マキノさん、そういう不確かなものってあんまり好きじゃなさそうだと思っただけ……」

「事務所に所属する前なら、そうだったかもしれないわね。けれど今は——ふふ。論理的じゃないことも独自の論理があるということも知ってるから。そう目くじらを立てるほどのことでもないわ」

一見論理的じゃないことにも、独自の論理が——か。確かにそれはそうだ。よく分からないものであっても、独自の論理で動いているということなど世の中にはままある。

ものごとは画一的に語られるべきじゃない、ということの典型と言えるだろうか。理屈と論理よりも直感と感覚が優先されることもある、というか。

どんなに綺麗にコピーしたとしても、描いていたその時に感じていたもの、思い描いていた理想、胸の奥に沈めた感情なんかまでをもト

レスはできない。画家の感情が乗った筆というのは、時として一般的な常識や理屈を超えたものを生み出していく。結果的に、それを感じ取るからこそが「真」と「贗」を見分ける最大の因子となることも、往々にしてあるだろう。

「あと、これはもつと突っ込んだ話になるんだけど……例えば絵なら絵の具だったりの画材、陶芸品なら釉薬ゆうやくや土……材質まで考えると全く同じものはありえないから、そこで判断するのもありかもしれないよ」

「それで判断できる人間なんていませんよ。あはは」

「あはは、そうだよね」

あはは。

あはは。

どうしようボクできるんだけど。

お前人間じゃねえ判定を食らったんだけど。

哀しい。

「……今日は本当にありがとうございました、氷菓ちゃん。こんな貴重な機会を設けていただいた……」

「ううん、同じプロジェクトの仲間だから。力になれて良かった」

「これで安心して本番を迎えられます……」

「私も安心ね。隣の部屋からずっと『大丈夫かな』『失敗しないかな』って聞こえてきてたもの」

「ま、マキノちゃん……!」

……何はともあれ、安心といえれば安心だ。

その後しばらく経って行われた番組収録では、マキノさんも頼子さんも目立ったミスは無く、完璧な仕事でもって無事、収録を終えることができたのだった。

少し手助けしたことが二人の自信になってくれたのなら、誇らしいこと……かな。

それはそれとして他のプロジェクトメンバーに「姫」の件教えたことは許さないよ。

26：はろーわーるど

「そんなわけで次の企画は『星空にほえろ!』っていう刑事ドラマで」
「誰だよこんな企画通したの」

「いつものスタッフだよ」

「またあのスタッフか」

「また馬鹿映画か」

——その日、プロデューサーからボクたちに告げられたのは、
バカ映画出演の要請だった。

……何? いつものこと?

その通りだ。そしてそれが仕事である以上応じなきゃいけないの
もまたいつも通りのことだ。

いつものことすぎてなんも言えねえ。

「おいおいみんな、そう嫌そうな顔しないでくれよ。なんと! 今回
はスターライトプロジェクト全員参加、それも連続ドラマだぞ!」

「うわあ」

「みんな! 一斉にドン引きするのはやめよう! な!?!」

ははーん、これ紛れもなくバカドラマだな?

みんなの気持ちの一つになるのがよく分かった。

「ちなみに主演は?」

「あ、ごめん、主演そっちは実はうちじゃなくなってるセクシーギルティの三人な
んだ」

「なーんだ」

ややしらっとした空気が周囲に流れた。そりやそうだ。おらがお
らが、つてわけじゃないけど、こんな語り口から告げられた衝撃の真
実なんだし、みんなもつとこう——この17人の中から選ばれると思

わざるを得なかったのだ。こればかりは、プロデューサーの伝え方もちよつと良くなかったんじゃないかなあ、と思う。

でも当然っちゃ当然だ。刑事ドラマなのにあの3人がいなくってどうする。3人が、っていうか正確には早苗さんが、か。

「というか助手、最近そういう仕事ばかりで私たちが本当にアイドルだか分からなくなってきたぞ」

「そっちに関しては任せておいてくれ。今月中に合同ライブイベントに単独ライブ&トークなんかも目白押しで入れてあるからな！」

「ホント変なところで有能よね……」

「それも良いところですよ♪」

有能……なんだけどなあ。何で毎度毎度変な企画を持つてくるのかなあ……。

もう変人っぷりはアピールしなくていいからもつとちゃんとした有能っぷりをアピールしてほしいんだけどなあ……。

ただ、晶葉の言うことにも一理ある。ここんどこエリクシアの三人はドラマ撮影が多くて、アイドルっぽいかと言われるとそれもちよつと違うような気がしてきたところだ。これむしろ女優とかそっちの方面だろうし。いや、プロジェクトの本義としてはそれも間違っちゃいない。色んな方面に幅広く対応できるように、っていうのがあるんだから。

「で、どういう感じの役なんですかあ？」

「ん？ タイトル聞いてもらったらなんとなく分かると思うけど……」

「あれ？ みんな知らないの？ ☆ いや、マジっ？」

しゅがはさんを除き、みんな揃って周りの人と眼を見合わせた。

いや——そりゃあ、名前くらいは知ってる。けど、実際に中身まで知ってるって人はこの中にはいないんじゃないかな……。

これもジェネレーションギャップってやつだろうか。プロデューサーとしゆがはさんが一斉に慌てたのがよく分かった。

「えーつと……つまり何人かは死ぬってことだよね？」

「ざつくりしすぎよ」

「えっ、み、みんなもしかしてその印象しかない……？」

「すみません根津様。はつきり言ってしまうと……」

「マジかよ……再放送とかやってなかったっけ……」

いや、下手したら再放送してもその印象が強い気がするんだけどどうだろう。

それにそもそも全……700回超だっけ？ そんな長寿番組、気軽に目を通せる長さじゃないよ。

「と、とりあえずあれだ。概略としては、『体当たりで必死に難事件に向き合っていく若手刑事たちの物語』って感じだから！ で、この話はそれぞれの刑事にコードネーム……っていうか、まあ、それぞれにあだ名がつけられていくんだ」

「あだ名……そういえばそういう話を聞いたことがあります」
「有名な話やからな」

ジーパンとかゴリさんとか、そんな感じだったっけ。

で……346のバカ映画、もといドラマときたら通例なのは役名実名か。何だか今から色んな意味でハラハラしてきたぞう……。

「じゃあ一人ずつ名前とあだ名呼んでいくから、順番に台本取りに来てくれ。村松さん、ピンク」

「はぁーい」

「大石さん、マイコン」

「……プロデューサー、それ原作そのまんまじゃ」

「いいんだよ、リメイクみたいなもんなんだから！ 土屋さん、銭ゲ

「バ」

「待たんかい」

ひでえ。

よりもよって年頃の女子に銭ゲバ呼ばわりは流石にひでえ。

「お、俺が決めたわけじゃないし……」

「許可出したんPちゃんとちゃうんかい!? いくら温厚なアタシでもキレるで!?!」

「さ、早苗さんに言われたら俺も流石に逆らえないんだよ……」

「せやかてPちゃん!」

「と、とりあえずこの話は後にしよう! 白河さん、シロちゃん!」

「……うん」

まともだ。

とてもまともだ。今までの役は何だったのかってくらいまともだ。ようやく普通の人間に戻ってきたぞボク。

これはこれで今までのことを思うとこれでいいのかと拍子抜けする部分はあるけど、これでいいのだ。きつと。ただいま人類。そしてさらば非人類役。多分その内また演^やることにはなるといなかボクのキャラクター性鑑みるとそうなるのは規定事項だろうが、とにかくまたいづれ会う、というか遭う日まで。

「池袋さん、ロボコン」

「うむ」

「一ノ瀬さん、ケミカル」

「もつと際どいところ来ると思ったけどマトモだったにやー」

「そりやマトモだよ。クラリスさん、腹ペコ」

「ま、まあまあ……何故そのような……?」

「何ででしょうね。イヴさん、サンタ」

「はあい!」

……だいたい裏事情が明け透けだけどいいのかこのあだ名？
本当にプロデューサー関わってない？ 大丈夫？
それから次々呼ばれていく面々。マキノさんは007から取って
ボンド。頼子さんはアルセーヌ。芳乃さんはウラナイで聖ちゃん
モツチー。こずえちゃんが妖精。肇さん、みちるさん、七海ちゃんは
それぞれ陶芸、パン、お魚のあだ名が与えられたことが分かった。
やっぱりこれプロデューサー関わってるよね？

「オイプロデューサー☆ はあととはまだ？」

「分かってるよ。最後にはあとさん、甘党」

「待てや☆」

「……………」

「こつち見ろよオラ☆」

「お……俺は反対したんだよ？」

「結果通つちやってるじゃねえか☆」

「はあとちゃん！」

「おうよ☆ プロデューサー後で別室な☆」

「……………べ、弁護を……………」

ちらりとプロデューサーが助けを求めるようにこちらに視線を
やったが、自業自得ということにしておこう。

止める権限はあったのだし、ボクから見てもこれはひどいと言うし
かないのだから。

「……普通にはあとでいいんじゃないかなあ……………」

「お前が自己弁護するんだよオラツ☆」

「……普通にはあとでいいんじゃないかなあ……………」

「お前が自己弁護するんだよオラツ☆」

「黙秘は許さんで……………」

「た、助けっ」

「無理」

「無茶だよお」

「無理れす」

もはやここまでだ。諦メロン。そんな思いでプロデューサーを見ると、絶望顔のまま別室へと引きずられていった。

……南無。

@ ————— @

衝撃の発表から二時間ほどして、ボクはクラリスさんと肇さんと一緒に近所にあるうどん屋へ来店していた。

このうどんは、やや細めだがコシのある麺と、関西風の淡い見た目ながらもパンチのある美味しい出汁が特徴だ。その出汁から作る親子丼やカレーもまた美味しくて、本来の主演であるうどんを差し置いてそちらばかり頼むという人も見られる。

ということでボクは親子丼(小)を。肇さんはきつねうどんを。クラリスさんは月見うどん(大)とカレーをそれぞれ目の前に置いて、机に向かい合って座っていた。

さて。このパターンとなるとあのパターンかな。それともあっちのパターンかな。どっちかな。そう思いながら、ボクは恐る恐るクラリスさんへ切り出した。

「……ドラマの話?」

「さようございませす」

あーそういうことね完全に理解した。

うん理解した。まあこれ以外に無いわな……。

「演技が……ってことだよね」

「……そうなんです」

さつきの話の直後、二人にこうして連れ出されて来たんだけど……色々ストイックな二人のことだ。何かしらあるとは予感していたし、実際その通りであった。けど……。

「傾向的に今回のドラマ、殆ど素の状態がいいと思うよ……？」

「そうなのですか？」

「うん……台本に書いてあるスタッフ構成見たんだけど、ボクがドラマ撮る時にいる助監督さんや脚本の人もいるんだよね。だから、多分そうだろうって」

この手のクソドラマ・クソ映画のお約束として、基本的にそれぞれのキャラクターは、演者の素の状態に近い。一部^ボ例外を除く。

だから晶葉や志希さんも演技経験が少なくてもごく自然にやれた……って側面もある。時々、素の自分と違う方が演技しやすいという人もいるけど、今はそれは置いといて……他の人もある程度それは同じだと思うけど。

「氷菓ちゃん、それはいいんですけど……」

「棒読みになってしまわないか、というところどころが心配で……」

「あ、あー……」

棒読み。役者にとっては致命的な欠点だ。

どんなに優れた脚本やアクションであろうと、演者が棒読みであるという一点のみで評価が下がるというのも昨今珍しくはない。

洋画の吹き替えで、話題性狙いで芸能人が起用されるのが敬遠される理由も、その辺にあると言っても過言じゃない。ハマリ役ならともかく、そうじゃなければ失笑とブーイングを浴びることになるだろう。時にはそれがクセになるという人もいるが……割と希少な例だろうし今はそこは置いておく。

ともあれ、これから先何をするにしてもこういう経験が無駄になるってことは無いだろう。今のうちに修正しておくに越したことは無いはずだ。

「じゃあ、本格的なところはトレーナーさんたちのレッスンでやっていくとして……ごく初歩的なところから始めていいっか」

言いつつ、親子丼を口に運ぶ。小さめに切つてある鶏肉は、一口の小さなボクにとつてはちょうどいいくらいだ。肉の一つ一つが小さい分、量は普通の親子丼のそれと遜色ないため、がつつり食べたいという人にも嬉しいんじゃないだろうか。

「初歩的なところですか？」
「うん」

そう聞いた肇さんがお揚げを口に運ぶと、染み込んでいた甘めの出汁がうどんのつゆの中に滴っていく。

クラリスさんは2杯目のうどんを店員さんへ注文する中、ボクは指を2本立てた。

「とりあえず2つかな。1つ目に今の自分の実力を知ること。2つ目に、もし演技力が足りなかったらどうなるかを考えること」

今日のレッスンは……確か夕方からだったな。それまでは自主練習ということで、肇さんとクラリスさんの練習に付き合うことにしよう。

……そんなわけで、クラリスさんが3杯目のうどん（大）を完食するのを見届けた後、三人で寮に向かうことになったのだった。

346プロの寮はその特性上、歌や楽器の練習をするために防音が整っている。今はレッスンルームが使えないこともある。DVDや

BDを再生する環境もあるし、練習にはうってつけと言えるだろう。

「じゃあ、まずは声だけでやってみよっか」

「声だけですか？」

「うん。それだけでも、未経験だったらまだ難しいと思うから」

予め用意しておいたボイスレコーダーの電源を入れて台詞を待つ。こほん、という小さな咳払いをした後、肇さんが口を開いた。

「ぼ……『ボス、彼らのアジトと思われる場所を張っていたら、新しい事実が、ぼん、はん、めい………しました』」

「カット」

「うう」

早くも、目に見えて分かりやすいミスだ。ボイスレコーダーの録音を一旦取りやめる。

これに関しては、肇さんもよく分かるだろう。

『判明』って文字が二行にまたがったから読みづらかったのかな。でも、脚本ってこういう部分結構あるから、そこを気を付けてね」

「はい」

「それから、演技に入る前から結構照れがあったけど、あれはやっぱり良くないよ。一人照れると他の人も巻き込んだじゃうから」

「分かりました」

「トレーナーさんのようですね、氷菓さん」

「それなりに場数は踏んだから多少はね。監督さんたちの指導も見てるし、それなりくらいには言えるよ」

と言っても、やっぱり本格的なところに入ると本職に任せの方がいいのは違くない。こちらから教えられるのは基本中の基本くらいなものだ。

ボクの演じ方は決して一般的なものじゃないし、変な癖がついてもそれはそれで申し訳ない。

続いて、肇さんに教えた注意点をもとにクラリスさんが自分の台詞を読んだ。

その後、二人の前にボイスレコーダーを置いて再生する——と。

『私、七曲署の、クラリスと、申します。少し、お話、よろしい、でしようか』

「ま、まあ……まあ、まあ、つ、拙いものをお聞かせしてしまって、申し訳ありません……」

「初めてなんだからしょうがないよ」

棒読み気味な、しかしそれでも本人からすると精一杯に抑揚と感情を乗せた台詞だ。初めてと考えると、これも悪くないと思う。

そもそも初めてでできる方がおかしいんだ。志希さんとか、ボクとか。

哀しいことに流石にここはおかしいことを否定しきれない。

とはいえクラリスさんは——本人曰く拙い——自分の演技の声を聞かれてしまって恥ずかしくなったらしい。赤くなった顔をクツションで隠してしまった。

「自分の声なんてなかなか聞く機会無いし……こんな感じでやれば自分の悪いところも客観的に見る、っていうか、聞くことができるから、ここから修正していける、と、思う」

「成程、勉強になります」

勿論人によってやり方が違うから一概に言えることじゃないけど。それに、あくまでこれも一人でやる時の方法であって、他に見てくれる人がいるなら見てもらって調整してもいい。

小難しいこと言ってるようだけど、要するに練習を欠かさないと、という話だ。

「じゃあ、二つ目。これは……反面教師にしてほしいものがあるんだけど」

「何ですか？」

「これ」

肇さんと、未だクッションで顔を隠しているクラリスさんへ一つ、取り出したDVDのケースを見せる。

その名は——映像化された拷問具。

@ —— @

二時間後。ボクの部屋に三つの死体が転がった。

およそこの世のものとは思えない稚拙な映像美！ 原作を知る人も知らない人も皆一様に葬り去る、スピーディーかつ大胆すぎるカットを多用した徒労感しか生まないストーリー！ そして何よりも主役を筆頭とした演技力の欠如！ あらゆる要素が観る人間の精神を殺すために作られたとしか思えない映画だった。

……奏さんに演技力の低い映画って知ってる？ という話をした時にこれが挙げられていた。あの人、映画鑑賞が趣味というだけあって雑食だし、どんな映画も実際に観なければ批評する権利は無いという意見を持っているあたりある種高潔な精神の持ち主とも言えるのだけど……これ、有名だから試しに観てみたら……ってことなんだろうなあ、多分……。

「棒読みと演技力の有無がどれだけ映像に影響を与えるか、これで分かってくれたと思う……」

「嫌と言うほど分かりました……」

「神よ、憤怒を抱いたわが身をお許しください……」

肇さんは目が死んでいるし、クラリスさんなんか神に許しを乞うて

いる。何て惨状だ。くそつ、デビルマソ絶対許せねえ！

まあこの映画選んで持って来たのボクだけだ。

「もう何本かあるけど、反面教師として観ておく……？ テラフオー
マーズとシベリア超」
「勘弁してください」

賢明な判断だ。ボクとしてもできるだけ観たくない。奏さんと同じく、観ずに批評することはしたくないが、そもそも批評する以前にまず観たくない。

別にボクだって二人の精神面を攻撃しようと思っただけでこんな映画を選んではいけないんだ。そもそも一緒に観てるボクだってひどくダメージを食らってるし。

「ま、まあ……これだけ色んなことが分ければ、初歩的などころはすぐできると思うよ」

「そ、そうですね。ありがとうございました、氷菓ちゃん」

「ううん。むしろこっちが謝らないといけないかも……」

「あはは……」

まさかここまでひどいとは思わなかった。他もヒドさのベクトルは違えど、非常にアレという評判を聞く。

確かにボクは色んな意味でこう、346の中でもクソ映画部だとかクソドラマ部だとか言われるような部門のお世話になることが多い。しかしFROSTは真面目かつ二期が決定してようようなドラマだしフルボッコちゃんも人気特撮。どっちもストーリー自体は決して悪くない。しいて問題を言えば、スタッフの趣味が前面に出すぎて、何でこれで人気が出るんだ……？ と、スタッフを含めて本気で首を傾げなければいけないところだろうか。視聴者に受け入れられている分にはもうスルーするしかないのかもしれない。

ともあれ、そんなこんなで本格的なレッスンの前に一応の練習を終

えたわけだけど。

「……あの、何でボクここに呼ばれたんです?」

「まあまあ」

「まあまあ」

「まあまあ」

——それから一時間ほどして、何故かボクは寮の娯楽室にお呼ばれしていた。

まるで意図が読めないし意味が分からない。人選も……奏さんに小梅さんに小松伊吹こまついぶきさんに松永涼まつながりょうさんに……何だかまいち共通点が見えない人たちなんだけど……?

「少し前、私のところに映画を借りに来たでしよう?」

「う、うん」

「そ、それで……ね? 折角だから……オススメの映画を見せてあげたいな、って」

………ああ!?! もしかしてここにいるの、みんな映画好きな人たちか!!

確かホームページの趣味欄を見たことがある。奏さんは元より、小梅さんと涼さんはホラー映画が好きだし、伊吹さんは恋愛映画が好きみたいに書いてあったはず……。

「というわけでさっ! 何か気に入った映画とかあったらいつそそっちの道に引きずり込むのもアリかなーって♪」

「引きずり込むって言い方もどうかと思うけどな……でも、興味持ってもらったら嬉しいような気持ちはあるよ」

「お、おおう……」

なんだか眠れる虎を起こしてしまったような、それとも藪をつつい

て蛇を出してしまったような……そんな気持ち少しある。

いや決して悪いことじゃないんだよ。ただちよつと——うん。ちよつと、いや、かなり唐突かつ行動が早すぎるってだけで。ボクが映画観たいって言ったのを聞きつけてから全員集合するまでにどのくらいの間があった……？

「……あの、でも今から観ようと思ったら、できても二本がいいところじゃない？ もう夕方だし、夕食食べてあと一本くらいで……」

「ん？ 氷菓って明日休みでしょ？」

「うん………うん？」

「たまの休みなんだ。いつそ、さ。夜通し鑑賞会と行こうよ！」

「えっ」

「ふふ……今夜は寝かせないわよ。なんてね」

「えっ」

「こ、怖い……大丈夫？ ふふふ」

「えっ」

えっ。

……えっ。

「……えっ」

その日、ボクは徹夜の際の深夜テンションに陥った他人というのを初めて目にし、自分は自分で割と疲労困憊に陥ってしまうのだった。

しかしながら、恋愛映画もホラー映画もいずれも奥深く、楽しんで観ることができたのはいい収穫だったと思う。この件で四人との仲もそれなりに深まったと思うし、こういう経験もきつと後のためになるのだろう。

それはそれとして、途中で乱入して「マトンゴ」と「恐怖！ キノコ男」を置いていった輝子さんのことに触れていいものかどうか。

27：わかいちから

この日、ボクたちエリクシアの三人は、単独のライブイベントということでロケバスに乗ってライブ会場へと向かっていた。

およそ一か月ぶりのライブイベントだ。今月は合同ライブ含めあと二回ほどが予定されているが……来月になると、ボクたちスターライトプロジェクトにとってのある種の「本番」である夏フェスが控えている。各自の仕事は勿論として、プロデューサー的にはここでひとつ、ライブ経験値を稼いでおこう……という考えもあるだろう。

何にしても、ボクとしては楽しいライブができるならそれが一番だ
けど。

「しかし君はまーたそのパーカーか」

「いいでしょ別に」

今日のボクの服装はいつも通りのぴにゃこら太パーカーに「松茸」と筆文字で刻んである文字Tシャツだ。

毎度毎度のことすぎてもう言われ慣れてしまったが、ボクとしてはこのスタイルが一番楽しいのだけど……。

「……………」

「……………」

このやり取りの中、ボクと晶葉はただ窓の外を眺めている志希さんへとそっと視線を向けた。

先日の撮影以来、どうも志希さんはちよっぴりボクら、というかボクから距離を置き気味だ。

仲は、今まで通りだと思う。けども何か思うところがあるようで、特にぴにゃパーカーを着ている時は何だか近づいてきてくれない。これが結構調子の狂う話で、今までは普段一日三回はボクが晶葉のところに来てハスハスしてるところだったのに、今はこうだ。飽きられ

たとかそういうわけじゃない……と思いたいけど、果たして何を考えるの行動なのか……。

「……氷菓、もしや何かしてしまったのか？」

「何にもしてないよ……この前から突然だし……」

「前触れも無く、だものな……うーむ」

正直言つて、よく分からない。

志希さん自身よく分からないところはあるが、今回はそこに輪をかけて分からない。考え込んでいるようにも見え、遠くを見ているような気もする。

「っと」

と、そんな折、不意に前方車両の急停止にあおられて、プロデューサーがブレーキを踏んだ。

車が揺れるのに合わせ、パークアのフードが頭に覆いかぶさる。

危ない人もいるもんだな。もしかして運転しながらスマホでも使っていたのだろうか。

「みんな、大丈夫かい？」

「ん。晶葉と志希さんは？」

「私は問題無い。志希、大丈夫か？」

「志希さん？」

確か、さつきからずっと窓の外見てたはず。もしかしたら今ブレーキかけたせいで頭とか打ったりしてるかもしれない。そう思って顔を覗き込む。

「……………」

「志希さん？」

特に額が赤くなってるような感じも無い、けど、直後に目が見開かれた。

もしかして何かあったのか、とそう思った瞬間、志希さんはその手を懐に突っ込んで、香水らしきものを撮り出し——即座に、ボクの鼻に向かって噴霧した。

「エーンツツツ!!」

「氷菓ーっ!」

「え……? あ!」

眼鼻の奥に強烈な柑橘系の刺激が突き刺さる!

粘膜が焼けるように熱いし痛い! なにこれ!? 何で今ボクこんなことされた!?

眼が! 鼻が!

「ど、どうしたんだ!? 何かあったのか!」

「助手は運転に集中しろ! 今何をしたんだ志希!」

「ち、違っ……あたしそんなつもりじゃ……」

不意打ちにもほどがある……! 柑橘系のいい匂いがするようではあるのに、過剰に過ぎてもう暴力的なまでの痛みになってしまってる。

涙まで出てきた。うおおおお……!

「うぐうう……」

「ご、ごめーん……えーつと、えーつと……こういう時は……こう……」

いつもならこういう時何事も笑って済ませる志希さんも、自分が加害者になってしまったせいか色々と精彩を欠いてしまっている。あ

んまり頭が回ってないみたいだ……。

「どうしたんだ志希、ちよつといつにもましておかしいぞ」
「ん、ん〜……ちよつとねー……」

シートに転がって悶えるボクを、あやすようにして軽く背中を叩くと、志希さんはそのままボクの頭に被さっていたフードを降ろした。そしてそのまま、パーカーごと脱がせようとしてくる。

……いやちよつと待て。

「何、さ!?!」

「にやつ!?!」

「え、うっ! ……ごめ、ん晶、葉、ティツジユ取っで……」

「あ、ああ……」

取ってもらったティツシユで涙と鼻水を拭いて、改めて志希さんの方を見る。何だか……何だろう。おかしい。こんなことはありえない。

いくらなんでもこう……こう……もつとこう、前のボクが言われたことじゃないけど、志希さんらしくなさすぎる。

変なこととふぎけたことはしよつちゆうやってるけど、安易に他人を傷つけるような真似はしないはずだ。理由があれば実験の名もとやるけど、それだってアフターフォローは完璧にこなすし可能な限り遺恨も残さない。今のこれはどう見ても衝動的にやつちやつたやつだ。

確かに、志希さんだつてたまには衝動的な行動に出たいと思う時もあるだろうけど……あんまりにもあんまりだ。

ボク自身がやられたからっていう感情面の問題は……まあ多少あるけど。それにしたつて、やってしまった後でオロオロするなんてそれこそありえない。

……もしくは、そうまでなるようなよつぽどのがあったのか

……？

「……いや、だから上着脱がそうとしないですよ!」

「んー……!」

「いや、やめてって……やめ……力強いな!」

何で唐突にボクの上着を奪おうとしてるんだ!?

東京は死んでないしボクも人修羅じゃないぞ!?

「ぴにやは……マズい……!」

「ぴにやこら太の何がそこまで突き動かすのさ!」

何でこんないきなり穂乃香さんが嘆きそうなことを言われなきやいけないのか、これが分からない。

そんなにぴにやこら太嫌いだっけ……と思うけど、だったら何で今? という思いもある。割とボクこの服着てきてるよね?

「志希、脱がすなら下のダサTだけにしておけ」

「何晶葉は誘導してるんだよ」

それでもってまだパーカーを狙ってるのはそれはそれですさまじい。

ぴにやこら太だけを殺す機械かよ!

……結局、志希さんは会場に着いて着替えるまでずっとこんな調子だった。

@ ————— @

今日のライブは、発表からそれほど間が無かったというのに、チケットが即日完売するほどの盛況だった。

会場そのもののキャパがそれほど大きくなかったのもあるけど、そ

れにしたって思った以上の反響の大きさにプロデューサーも大喜びだ。

勿論ボクたちもそんな状況なのだから大いにやる気が刺激される。されるが。

「……なあ氷菓、あの黒スーツ集団」

「言わないで」

「いやしかし」

「……………」

「…………う、うむ」

ライブの合間の衣装替えの時間、楽屋に引っ込んだボクは、先程の戦慄の光景を晶葉に追求されていた。

……施設の子たちが来るのはいい。そっちは来たいという子にボクから贈っておいた。だからこっちは問題無い。

ただ、おじじのトコの社員が来るのは想定外……いや、それ自体はいい。何だか船室にボクのポスターやらグッズやらが大量に購入してあったし、ありえなくも無いと思っていた。

しかしだ。いくら何でもあの強面こわもての、ともするとマフィアのようなだとすら言われるあの連中が集団かつ最前列を陣取っていると、それはそれは威圧感が凄まじい。晶葉が心配してくるのも己む無きことではある。

「んにやーでも人気ってことだからイイと思うけど〜♪」

「……………」

「……………」

志希さんはすっかり元の調子を取り戻しているようだ。思わず晶葉と顔を見合わせる。

さつきまでのあの不調、やっぱりぴにゃパーカーのせいだったんだろうか。だとしたら今後ボクはアレ、着ちやマズいのか？

もう六月も中盤。衣替えには丁度いいといえはいんだけど……
なんだかなあ。

「……晶葉、ボク明日から衣替えでもした方がいい？」

「とりあえずあのTシャツはやめておけ」

「えー……」

いいじゃん松茸。輝子さんは喜んでたし……。

そこまで言うなら英字Tシャツでも着てきた方がいいかな。確か
当たり障りないところだと、Xenoと書いてあるだけのTシャツが
あったはずだ。流星にそれなら晶葉も文句は言わないだろう。それ
でも何か言ってくるようならユニシロで無地のTシャツでも買って
こないといけないだろうか……。

ともあれ、話している間にも衣装替えは終わった。スタッフさんを
呼んで、準備が完了したことを伝える。

後半のセットリストは、先輩たちの個人曲のカバー曲が主体だ。志
希さんが前川みくさんの「おねだり Shal l We く?」、晶葉
が本田未央さんの「ミツボシ☆☆★」、ボクが美波さんの「ヴィーナ
ス シンドローム」……と、それぞれメインボーカルがローテーションす
る予定になっている。最終的には三人で何曲か歌ってメ、といういつ
もの流れだ。

で、今回はいつもの衣装は一旦置いておくことになっている。後半
からの衣装はそれぞれ少しばかりデザインを変えて、曲の本来の歌い
手……つまるところ、みくさんや未央さん、美波さんのイメージを取り
入れてもらったもの——らしい、とプロデューサーからは聞いている。
る。

実際、見てみると何となくそんな風な印象がうかがえる。その一方
で、元のデザインを損なわずに新鮮なデザインに落とし込んでいるあ
たり、デザイナーのセンスが良いってことなんだろうと思う。

「それじゃ、そろそろ行こっか♪」

「ああ、衣装をデザインした助手も浮かべられることだろう」

「いやプロデューサー死んでな……待つて今なんて？」

「これをデザインした助手も浮かべられるだろうと」

「これプロデューサーのデザイン!」

うっそ……嘘だろ!?

割と何でもできる人だと思ってはいたけど、そっち方面の素養もあつたの!?

会場に出ていく直前になって明らかにされたその事実には驚愕している、もう二人は会場に出て行くこうとしていた。

ああ、もう……! せめてもうちょっとこう……こう……あるだろ、何か! というか直前になって言うんじゃない!

「志希さん知ってた?」

「んにゃ? 初耳だよ?」

そういうことなら安心し……あんし——安心していいのか……!?

さっぱりわからん……!!

ともあれその程度の困惑がライブに影響することというのもそうそうない。ステージが見えてきたところで全部頭の外に追いやった。

このライブでこの白河水菓に精神的動揺によるミスは決してないと思っただけだ!

実際無かった。

そしてボクを一番削るのは、例の黒服どもの姫コールだった。

顔真っ赤になるし、後で志希さんと晶葉にからかわれるしプロデューサーには笑われるしで実に精神的によろしくない。

なお一番ウケが良かったのはライブ後のトーク中、楽器演奏を披露したところである。

……歌の方に食いついてくれないかなあ。

@ ————— @

さて。

ところでボクだって一応花の(?)女子(?)中学生なのだから、仕事が無い日は学校に行かなきゃいけない。

入寮してから転校することにはなったものの、元からそれほど親しい相手もいなかったので割と転校自体はスムーズだったわけだが、問題はその後だ。

ボクと七海ちゃんは、転校するに際して仕事がいやいや、当初から「この春にデビューするアイドル」だということを校内に向けて報せている。

最初の頃はデビュー前だし、メディアへの露出も無かったから当然だけど注目度はそこまででもなかった。

しかし、それなりの舞台でのデビューや346プロという大組織のバックアップを得てのドラマ出演や地上波放送への出演、ラジオ、ライブ……といった活動のおかげもあり、今となっては良く悪くも注目の的となってしまうのだった。

その辺は、同じ学校に通う他のアイドルの人たちも同じと言えば同じなのだけ……やっぱり大きなプロジェクトに属していると、注目度も否応なしに高まってくるわけで。

靴箱を開けると、ガサツと音を立てて大量の便箋が落ちた。

「……………」

「モテモテれすね〜」

「あんまり嬉しくない……」

結論から言おう。

自分で言うのもなんだけど——今のボクは、かなりモテていた。当然だけど男に。

最近忘れかけてる部分もあるけど、ボクは元々男だったわけ。

とはいえそもそも男として生きることができた過程というのがま
るでないから、そつちの意識もかなり薄いんだけど、それはそれとし
てやっぱり直接的に男性にそういった欲を向けられるのは今は勘弁
してほしい気持ちがある。

アイドルなんてそういう職業じゃないかという意見もあると思う
けど、それを正しく許容できるような生まれも育ちもしていないし。
正直なところ、割とこう、困惑が先に立ってくる。

更には言えば、かなり嫌なモテ方だ。

アイドルという立場「だからこそ」モテる。外見が良い「からこそ」
モテる。

ボクの性格や性質といった内面的な部分は一切触れられないのだ。
それもアイドルとしては必要な素養だとは思うけど。だからって
辛くないわけじゃない。

「また断って回らないと……」

「大変れすよね……」

ややアクの強い性格はしてるけど、七海ちゃんもボクと境遇として
は殆ど同じだ。告白だって何度されたか知れない。

ただその度、「さかなクンさんと同じくらいの知識が無いと恋愛対
象として見られないれす」ときっぱり断っているのだから流石だと思
う。

しかしそれ、つまりさかなクンさんならOKなのか？ と思わなく
もないけど、深く追求はしないことにした。ただの基準だろう。そこ
まで深い知識を持つてる人がどれだけいるのかは置いて。

「それにしてもラブレターって、今時珍しいれすね〜」

「前のライブで『ラブレター』歌ったからじゃないかな」

卯月さんたちP.^{ピンクチェックスクール}C.Sの楽曲、「ラブレター」。三人ユニットだ

けあつてボクたちにとつても歌いやすく、今回のライブのように歌わせてもらうことが時々ある。

多分それを聞いてた学校の男子が「じゃあラブレター送ろうぜー」みたいな話になって、靴箱に詰め込むという昭和の漫画もかくやという暴挙に出たのだろう。安直にも程がある。

そして残念ながらボクの心臓がバクバクするとしたらそれは疲労による動悸で、「ラブレター」はラブレターを送る側の女の子の心情を歌った曲だ。

前提からして間違えてるじゃないか。

「普段はLINE教えて攻撃がすごいんだけどね」

ごくプライベートなところまでは流石にプロデューサーも追及はしてこない。が、それはそれとしてイメージ戦略という以上にそもそもボクはあまり知らない相手に個人的な連絡先を教える気は無い。怖いし。下心丸出しの猛獣にエサを与えるようなものだ。

そもそも大多数はボク自身に興味があるんじゃないやなく、ボクを経由して知り合うことができる可能性のある他のアイドルの人たちに興味があるだけだ。

きわめて一握り、割と本気で告白して来た人もいるが……そっちはそっちで丁重にお断りしておいた。アイドルどうこうという事情もあるけど、それ以上にやっぱほとんど話したことも無いような人たちだ。嬉しいよりも先に恐怖が湧く。お前ら外見だけ見てるのかと。別に一目惚れって現象を否定までする気はないけど……ボク個人としては、もしそんな関係になるとするなら相手の内面も知っておいてはじめてそういう段階に行くべきものだと思っている。

「氷菓さんのお眼鏡に適う人はいるんれすかね〜？」

「それ七海ちゃんもでしょ」

「そもそも氷菓さんの理想はどんな人なんれすか？」

「ボク？ ……あんまり考えたことないけど……常識と倫理観が備

わかって、実直で、あんまり騒がしくない優しい人……とか？」

「高い理想れす」

「ホントにね」

この現代、大和撫子が絶滅危惧種（346プロに生存を確認）なのと同じように、寡黙で硬派な男性というのもまた絶滅危惧種（346プロに生存を確認）と言っている。

欲を言えば、更にそれプラス施設出身者に偏見や差別感情が無くて、精神的・肉体的に強い人がベストじゃないかなと思ってる。

先日、みんな徹夜の映画鑑賞を敢行した際、伊吹さんおすすめの恋愛映画をみんなで観るタイミングがあった。

そんな時にみんなの好みの男性は、という話題になったので、ある程度ボカしながらそんな風な話をしたのだけど……そんなボカに、奏さんは無言でキャプテン・アメリカのBDを差し出してきたのだった。

見事にハマった。

「まあ、今そういうこと考えても仕方ないけどね……」
「れす」

そもそも言えばボクたちアイドルだし、まず恋愛って時点で御法度みたいなものだ。

思考実験としては面白いかもしれないけど、あんまり本気になって考えるべきことでもない。

「おはようございます」

「おはようございますれすー」

言いながら教室に入ると、そこはいつもよりも遥かに静かな空間と化していた。

おかしい。普段だったらもつと男子連中が騒いでいるはず……と

思っていると、遠くからクラスメイトの男子が渾身のドヤ顔でこちらを見るのが見えた。

成程、会話だけ聞いておいて、言葉の表面だけを捉えてマネをするっていう典型例か。

クラスの男子全員でやってるあたり、コイツら驚異的なまでに連帯感があるのかただのアホ揃いなのか分からないな……。

さて、それは置いておこう。

六月という時期は、正直なところ学校行事という面から見るとかなり不思議な時期だと思う。

世間一般には梅雨という印象が強いだろう。曇り空を見ることも少なくないし、雨なら尚更。だというのに体育祭を催すのだ。外で。

中止、順延も普通にありうるし、効率はあまり良くないと思うんだけど……何だっけ。行事が秋に集中することを避ける措置なんだけ。

ともあれそこは一旦置こう。ここで重要なのは、体育祭となるとボクはこの……いつそ、やや振り切つてるとすら言える体力の無さが露呈することにある。

同じ組の仲間はと言うと、氷菓はダンスやってるからな——と言つて基本、取り合ってもらえてない。早くも詰みである。

「体育祭の日都合よく仕事入らないかな……」

「なあーに弱気になってんのよッ!」

「そんな通りじゃ氷菓。気持ちで負けてどうする!」

「……………」

今回、ボクと同じ組になったのは、巴さんとレイナさんの二人。こっちは紅組。光さんと七海ちゃん、それからこの学校に同じく在籍中の三好紗南^{みよしさな}さんと法子さん、くるみさんは白組で敵同士になってしまった。

元々巴さんはかなり熱くなりやすい部分があるが、レイナさんは

……光さんが相手チームにいるからだろうということとは分かる。逆にボクのモチベーションは、正直に言ってそれほど高くなかった。紗南さんはゲーム貸し借りする仲だし、光さんとは娯楽室でニチアサ見る時に一緒になる。七海ちゃんは同じクラス・同じプロジェクトだし……と、本気で競い辛い。

あと何より運動というところがキツイ。

「当日は叔父貴も来るんじゃない？　良いトコ見せてやろうとか思わんのか」

「ボクの運動ダメっぷりは知ってるからいいよ」

「ハンツ、始めっから諦めてどうすんのよ！　……紗南かくるみにぶつければ勝機はあるでしょッ！」

「逃げとらんか？」

「逃げてないわよ」

でも適切な考え方ではある。

ボクの体力は、全力疾走した場合は多分50m前後で尽きる。そして今回のトラックは200mだ。4倍ある。

くるみさんは体力にあまり自信が無いらしいし、そこまで……うん。まあ……どっこいどっこの勝負ができるんじゃないかな……。

しかし紗南さんはあれで出不精ってことは無い。ゲームセンターにもしよっちゅう行ってるし、ダンスゲーム、音ゲーなんかも網羅する程度には体力もある。勝ち目が無い。

「こういう時は作戦を練るのよッ！　……悠貴が別の学校でホント助かったわ」

「陸上部じゃからな。光以外誰も勝てん」

「その光が敵だから色々考えなきゃいけないのよッ！　氷菓も賢いんだから何か案出しなさいよー！」

「え、ええ……？」

と言つても、頭脳が活かせるような案なんて……。
……いや、あるかも？

「いくつかできることはあるかも」

「本当か？」

「うん。頭脳プレーって感じじゃないけど……玉入れとか」

「ハアアン？ 玉入れ？ それで何ができるのよ」

「そこらへんにある玉持つて来てくれたら全部かごに入れるよ」

「アンタ人間じゃねえわ!？」

「いや、けどスゴいぞ！ こりゃあ行けるじやろ!？」

しかし他に競技は山ほどある。ボクたちが出ないのもあるし……
できるだけ頭を動かしてリードできる方法……。

「大玉ころがしの最適ルートの算出とか」

「できるの氷菓だけでしょ!？」

「複数人数でやるってことを忘れんでもらえるか」

と言つても、あとは騎馬戦に組体操、障害物競走、綱引き……体育祭でポピュラーな競技だけあつて、体力以外に使いどころがないようなものも多い。

こういう場面はそれこそ体力に勝る人たちが主役と言つていいよ
うな場面なんだし、ボクみたいなモヤシが出しゃばるようなものじゃない気がするんだけどな……。

「……………あ」

「どうしたのよ巴」

「……二人とも。ちいっと……紅組の女子呼んでこいや」

「何か思いついたの？」

「応……と言つてええんか分からんがな。ちいっと……うちらが割食

うが、ええんじやな？」

「早く言いなさいよッ！」

「……わあーった。したらな——」

……………えっ。

@ —— @

そうして訪れた体育祭の当日。ボクたち三人は体育館の裏手で悶えていた。

紅組の女子を総動員して実行する計画、それは、ボクたち三人を前面に押し出している応援合戦——それを、チアリーダーの格好でやる、というものであった。

「ぬ ううううう う う う う う う う う う う ーん ー!!」

「おう覚悟決めえよ氷菓、レイナア！ うちも恥ずかしいんじや!!」

「じゃあ何でこんな露出度高いの選んだのよおッ!？」

「クラスん女子が選んだんじやコイツを!!」

「自分で選（びなさい／んで）よ!!」

揉める。そりやあ揉める。

事前に覚悟していたとはいえ当然揉める。

何せ今日のこれは仕事じゃない。舞台でもない。だというのにあんな露出度高いチアリーダーコースで応援合戦に出ると言うのだ。揉めるし悶えるしもだえ苦しみもする。

「最悪だ……!」

「じゃけどもうこれ以外無いぞ！ 白組は確かに正統派に学ラン応援じゃけど、インパクトっちゆうところだと若干薄い！」

「……………氷菓!!」

「ぬ ううううう う う う う ー!!」

たつぷり葛藤した様子を見せつつも、決心した様子でボクを呼びつけるレイナさん。

確かに！　確かにそれは分かるんだ！

しかしこれは！　見世物にされるし今後の学校生活で後を引くことは確実！

明日にはまた外面だけ見て告白しに来る連中が増えるだろう、けどインパクトを重点に置いて得点を目指すならここでこれを着て応援合戦に出るのが……!!

レイナさんも巴さんも早生まれでもう三年生……今年が最後の一年……!!

………ここまで来て今更友達を裏切れるかッ!!

——その後、意を決して三人で赴いた応援合戦は、当初の巴さんの目論見通り、後出し+凄まじいインパクトのおかげで前半の白組の印象をぶつちぎり、見事に得点差をつけるのに成功。

もういつそ突き抜けようということまで髪ポニテにしてみたり思いつきり動いてみたりして、顔も真っ赤になったり凄まじい勢いで身しせつ内おじじのとことか身プロデューサー内とか身内から写真撮られたりした甲斐があったというものだ。

ここ最近で忘れたい出来事ナンバーワンに躍り出たけど。

しかし直後に行われたリレーでは、走り辛そうに腰回りを叩いたり、走るのに適していない前かがみな体勢で走り出す男子が続出。

白組紅組に関係なく行われた無差別テロなどと称されたり、光さんに「あれはやりすぎ」と窘たしなめられたりしたりはしたが……ボクたちが心に大きな傷()を負った以外には大きな怪我人も出ず、なんとか無事に体育祭を終えることができたのだった。

なお、チアガール作戦の成果はプライマイゼロで、むしろボクの玉入れの方が点数的には遥かに猛威を振るっていた。

結果的には勝てたけど解せぬ。

28：遠くて高くて

ファーストシングルというのは、アイドルにとって大きな意味を持つものだと思う。

アイドル活動についての一定の方向性を明確に示し、どういった客層にウケるのかを分析できる——初動段階では今後の戦略を練るのに有効な手段の一つだ。

勿論、セカンドシングル以降が重要じゃないなんてことはない。その時点での人気のバロメータを計り、一曲目の時とはまた別の客層を開拓してみたり……と、こちらもまた超がつくほど重要なものだ。

「近日中に、スターライトプロジェクトの各ユニットのセカンドシングルの発売を発表しようと思う」

——そんな重要な話をまずボクたちデビュー第一陣に言ってくるあたり、もしやプロデューサーはボクらの反応次第でこれ以降の発表の仕方変えようと思ってる？ と感じるフシがある。

まあ、そもそもを言えばボクら六人が偶然プロジェクトルームに集まっていたから、とりあえず話してみるのにちやうどよかった、って部分はあるだろうけども。それはそれとして人選として適してるかと言えば……無いよなあ、とも思う。

「おー……」

「ふむ、そうか」

「……お、驚かないなみんな……」

こずえちゃんや志希さん、芳乃さんは言わずもがな。ボクや晶葉、聖ちゃんもこのくらいで驚くのはちよつと難しい。

何せ時期が時期だ。最初のシングル発売から一か月超。普通のシ

ングルの発売ペースは、早くて数週間おきという風にも言われている。そろそろ二か月目に入る頃だし、何よりボクらは新人だ。知名度向上のことを考えれば、発売のペースが早いに越したことは無い。想定はできる内容だ。驚きを演出するには力不足かな、と思う。

「むしろ楽しみ……だね」

「うん。モチベーション上がる」

カバー曲や全体曲もいいけど、やっぱり自分たちのオリジナルとなると格別だ。会場の盛り上がりもそうだし、何より自分たちが歌って一番楽しい。

時期も時期だし、そろそろ来るかな、と想定していたのは確か。しかしそれも含めてかなり高揚する報せであるのは間違いない。

「俺としてはもっとみんなに驚いてほしかったんだが……」

「万事は流転するのみでしてー」

「てー……」

「でも今それ言われなかったら今日のあたしは失踪してたかもね」
♪

「あつぶねえ!？」

別にそういう気分じゃないけど、変な嘘つくなあ志希さん。

プロデューサーの反応が面白いからやってるんだろうけど、ケラケラ笑つてると看破されちゃうぞ。

「ま、まだサプライズはあるぞ。実は今度のサマーフェス、スターライトプロジェクト全体で一曲歌うことになった!」

「シンデレラプロジェクトの『GOIN!!』みたいな?」

「そうー!」

「へー」

「ほー」

「もつと驚いてくれよ」

と言われても、既に既定路線みたいなものじゃないか。

このプロジェクトの現実的な前身がシンデレラプロジェクトなんだから、スターライトプロジェクトが同じようにやってもそこまで不思議はない。みんなでライブができることは嬉しいけど、驚きという意味ではまた……。

「というか助手、驚きという意味では私たちほど不適切な人選も無いだろう」

「分かってたけどさあ……でももし驚いてくれたら用意してきた俺としても嬉しいなって思ってたさあ……結構ルンルン気分で来たんだけど……」

大の大人が何やってんだよ。

……いや、プロデューサーも結構子供っぽいところがあるのは知ってるけどさ。

「2曲……ダンス、できるかな……」

「みんなで練習すればすぐだよ」

「氷菓ちゃんは……できるからいいけど……」

そう言つて非難を向けるようにふくれっ面を見せる聖ちゃん。いつもと違う可愛らしい表情に思わず吹き出してしまいそうになるけど、何とか堪えた。

こればかりは適性の問題だ。ボクだって苦手なことくらいある。運動とか運動とか運動とか。ちよつとできることは多いかもしれないけど、でもそれだけ。こういう時は、それぞれの適性に応じてそれぞれが助け合えばいいのだ。うん。

「——まだまだ、まだ終わってない!!」

「うわっ」

「どこの液体だ助手よ」

この期に及んでまだサプライズがあると言うのか。サプライズなのはドライブとフューチャーだけで十分だよ。

「サマーフェスが終わったら、みんなのための個人曲を作ることになった！ それに合わせて、かねてから言っていたユニットの組み換えやソロ活動の強化なんかも同時に行っていく！」

「はあ」

「ひー」

「ふーん」

「へえ」

「ほー」

「連携してまで流された……!!」

やっぱり人選が悪いよ人選が。

「それだって既定事項でしょプロデューサー。最初の発表を最後に持って来た方が多分もうちよつと驚くよ」

「う、うーん……俺なりに頑張って考えたんだが……インパクト強いトコから最初に持つてくるのは失敗か」

「考えればすぐに分かるコトだからね♪」

「他の面子に話すときはそうするといいいんじゃないか？」

……ボクたち何のアドバイスしてんの？

というかプロデューサーも馬鹿正直にメモ取ってんじゃないよ。

「いっぱい……うたえる……？」

「ん？ ああ、勿論さ！ そのためのサマーフェスなんだ。きつと……いや、絶対、最高のステージで歌えるとも！」

「わーい……」

その強い思いが込められた言葉に当てられたのか、こずえちゃんの顔に笑みが浮かんだ。

ボクも……きつとそうなるだろう、と思うことができるだけの熱意を、その言葉から感じ取ることができた。

うん、大丈夫。プロデューサーもボクらも、強い熱意は持ってる。確かに今のやり取りの中では何でもないことのように流してみただけど……実際にどうかって言ったら、やっぱり高揚感でいっぱいだ。

「よし、じゃあ俺は他のみんなのところに行ってくるよ」

「行ってらっしゃーい」

「しーい……」

そう言っつてプロデューサーを見送った数分後、レッスンスルームの方からみんなの悲鳴じみた驚きの声が上がったのが分かった。

ここまで聞こえてくるほどの大声だ。よっぱどの驚きだったのだろう。驚かし方にアドバイスしたボクたちも鼻が高……くはないな。しまった。やりすぎた。

あそこまで驚かないのはあくまでボクらだからだ。他のみんなにあんな発表の仕方なんてしたら驚くに決まってる。普通の感性の人に「今から覚える曲が三曲分増えるぞー」なんて言ってみたら、そりやあもう……。

「大変だな」

「大変だよね」

個人曲に関しては今は置いとけるとしても、他の二曲だ。

ユニット曲は一曲目とはまた違う傾向の曲になるだろうし、プロジェクトメンバー全員で歌う曲に関しては何より連帯感が重要になってくる。どっちも覚えるとなると、みんなの負担は大きいだろう

な……。

「いや、他人事のように言っているが君のことを言っているんだぞ氷菓」

「え。ボク？」

んな馬鹿な。楽譜さえあれば大抵の曲は歌えるし、何なら演奏だってしてみせる。

ダンスも、振り付けを一回見ればだいたい覚えられるだろうし……なんなら今回、ボクに関しての懸念はちゃんと連携ができるか、体力がもつかという2点に集約されていると言っても過言じゃない。

「氷菓ちゃん……すぐ、覚えられるよね……？」

「う、うん。まあ」

「一番最初にマスターするよね……？」

「……たぶん」

こずえちゃんと志希さんもいるから何とも言えないけど、この二人と比べても遜色ない程度の速度で習得できると思う。

けど、それって別に悪いことじゃないよね……？

「他のパートも覚えるな？」

「うん、勿論」

単に立ち位置だけの問題じゃない。ステージ直前になって振り付けのアレンジが入ったり、場合によっては誰かがミスをしたり、ということだってあり得る。それを未然に防ぎ、あるいはミスをミスとしてお客さんに認識させないためにも、他のメンバーの振り付けやパートの曲調を覚えるのは当然と言えるだろう。

「だから普段晶葉ちゃんと一緒に自主練してるんだもんね〜♪」

「わざわざ言うな！ いや、だがな氷菓……この自主練、今は私だけだからいいかもしれんが……これが全員になるんだぞ」
「うん。……うん？ 今なんて？」

全員？ 何が？ 自主練が？

……うん？

「道を見失うのは容易き事です」

「みんな自分の振り付けがマスターできなければ焦るだろう。となる
とより高い精度で完成させている相手に聞きに行く。しかしトレー
ナー姉妹も多忙だ。となると、プロジェクト内で一番それができるの
は——」

そう、ボクだ。

……じゃないよ!!

いやマジで!? マジか!? うわ、マジだ!! よく考えたらそういう
流れになってもおかしくないじゃんツ!! だから晶葉も休みの日の
自主練、ボクにトレーナー役任せてるんだし!

「こずえと志希はそもそも教えるのに向いた性格と辛いからな
……そこで予先が向くのが、まあまず氷菓だという話だ」

「うわあ……」

ボクとこずえちゃんと志希さん除いて14人……仕事の関係やそ
の他個人的な用事なんかでフルメンバーが来ることはそうそう無い
にしても、5、6人から7、8人は確実……。

実際晶葉とやってる自主練は上手く行ってるし、実績もあると言え
なくはないけど……それが、全員？

焦りに驚いて、思わず眼鏡を取った。

「てがふるふる……」

「どこの総統閣下だ君は」

「うるさいよ」

断るようなつもりは……元から無い。

けど、もつのか、ボクの体力！ 大丈夫なのか、ボクの筋肉！ 明

日は筋肉痛まっしぐらだ!!

流石にベッドから起き上がれなくなるほどは勘弁してほしいぞ！

いつそ本気でズルしてしまおうか。筋肉痛は筋繊維の断裂によって起きる現象。ならそもそも断裂しなければ……あるいは断裂した端から治せば……。

そんな葛藤を抱えていると、プロジェクトルームの外から会話する複数人の声と慌ただし気な足音が迫ってきているのに気付いた。

「そら来たぞ」

「もうどうにでもなーれ☆」

みんなのためだ。労苦を惜しむ必要もない。さあ来い！

だが……だが分かっているだろうな！ ボクはちよつとやそつと
のことで死ぬぞ!!

そうはならないための作戦をまずは持つてくるんだなア！ フハ
ハハハハハハハア!!

……ちよつと毎日のランニングの量増やして栄養ドリンク買つと
こ。

@ — @

まあ、とは言つても別にすぐにレッスンに入るってわけでもない。
何せ、今後三曲分のレッスンをしていくというような話を聞いたのが
今日のこと。曲は完成しているとのこと、もうデータを受け取っ
ているのだけど、振り付けや何やといった部分がまだ完全ではないら
しい。なので新曲に関しての本格的なレッスン開始はもうちよつと

先、となった。

寮への道を歩きながら、晶葉にイヤホンの片方を預けてサンプルを聞いていく。

テンポが早めなおかげで一瞬前と同じ路線かなと錯覚しかけたけど、よくよく聞けばポップで可愛らしい曲だ。印象だけは、キャンディアイランドの三人と幸子さんの歌った「Heart Voice」に近いだろうか。作曲者が同じだったりするのかもしれない。

「今回のリードボーカル晶葉だよ。大丈夫？」

「うむ。問題ない——と言いたいところだがどうだろうな。まあすぐには無理だろう。やはり練習はしておきたいな」

「だろうね。じゃあなんとかするよ」

漠然と練習をしても意味がないのは勿論そうだけど、やっぱり、レッスンにかけた時間が長いほどそれだけ自信も実力もつくし、結果的にライブのパフォーマンスの質も上がる。

今渡されてるのはサンプルだけだけど、サンプルさえあれば歌だけは練習できる。これでやらないなんて手は無いだろう。

「耳コピで充分かな。少し時間かかるけど打ち込むから待つてね。音程はボクの方でチェックするけど」

「毎度思うが絶対音感でもあるのか君は」

「似たようなものかなあ」

呆れたように溜息をつかれた。

構造を見聞きすればそれがすぐに分かる——というのが結果的に絶対音感のようになってるのはそうだ。

けど変に能力ばかり備わってても本当に欲しいものが手に入るわけじゃないのがまた面倒な話でもある。

部屋へ戻って、パソコンのソフトを立ち上げる。少しすると打ち込みも終わり、ボーカル無しの曲が出来上がった。

ちよつと粗はあるけど、練習用なんだしこれでいいだろう。その内正式なものがプロデューサーから渡されるはずだし。

今日は晶葉のご両親の許可も取ってあるので、寮に泊まって練習だ。

明日は休みだし、寮は基本防音。今の時点で満足いく程度までやれるだろう。

「よし、できた。それじゃちよつとそこの机寄せてくれる?」

「こつちか?」

「ベッドの方でお願い」

「うむ」

晶葉の準備ができたところで再生ボタンをクリック。同時に旋律が部屋に流れ始めた。

うん、ちゃんと音になってる。これなら練習するのに問題はないな。

「じゃあ行くよ——」

その声を契機に、今日の自主練習が始まった。

……で、練習を始めて一時間ほど。そろそろ疲れが見え始めたかな、というところで音楽を止める。

「ちよつと休もつか。うん、だいぶ良くなってると思うよ」

「そうか? だといいいんだが」

……正確には最初が悪すぎたとも言えるんだが、そこまで言う必要は無いだろう。

機械音声の読み上げめいた歌から、ちゃんとした歌い方になってるわけだし。急成長ですよ! 急成長!

「はい」

「ん……すまん」

空いた時間で淹れておいたハーブティーを机の上に置くと、晶葉はよく喉に染み渡らせるようにして飲み込んでいく。

季節が季節だし、加湿器は必要ないだろうけど……まあ、セツティングだけはしとこう。酸素吸入器も。

「問題点は？」

「ん。サビに入る前のところ、ブレスが強すぎるかな。その後、ビブラートが変になってた。2番に入るとこもちよつと気を付けて。その後から音程とテンポちよつとおかしくなってたから。目立ったところはそのくらいかな？」

「分かった。細かいところは？」

「そつちは終わったらテキストで渡すよ」

「……むう。やはり多いか」

「始めたばかりなんだからそりやそうだよ」

喉を休ませるついでに息抜きにしようかなと思いつつ、テレビの電源を入れる……と、幸子さんが映っていた。どうやらバラエティ番組らしいけど……罰ゲームかな、これ……。

いわゆるシャーケージダイビングというやつに挑戦しているところだった。沈めた檻の中からサメを見るというアレだ。

幸子さん、あんまりびくびくしてる感じは無いな。なんかもう熟練って感じだ。本当に熟練なんじゃないかな。幸子さん、しよつちゆうこういう無茶ぶりめいたことさせられてるし……あれ？ あの檻、ちよつと欠けてない？ 解析してみる限り、あの部分だけ壊れやすそう……あ、サメが激突して壊れた。

「うわあ」

『フギヤー!! し、死ぬかと思いましたよ!?!』

ザバアと音を立てて幸子さんが檻の中から引つ張り出される。うん、まあ、正直見てるこっちも今一瞬死んだと思った。

でもよく見れば折の鉄柱の一本だけが折れたっただけだから、サメが入れるほどのスペースが作られてないんだよね。

というかもしやあれ、そういう仕込みかな? スタッフさん笑ってるし。幸子さんだから「この画オイシいぞ!!」で済ませてる可能性もあるけど。

何にせよ後で苦情来るな……局にか事務所にかは分かんないけど。

「ボクたちもああいうことしないといけないのかな……」

「いや、氷菓はあまりバラエティ向きではないからな」

「褒めてんのか貶けなしてんのかそれどっち?」

「ウチでは珍しいアーティスト方面特化という意味では比較的褒めてるぞ。体力的にそういうことに耐えられると思えんという意味では貶けなしてるが」

よく分かってらっしゃる。

なかなかはっちゃけられないキャラということでもあるけど、まあこれは致し方なし。売り出し方もだし。

幸子さんのコーナーが終わったようだし、チャンネルを変える。と、何かの歌番組だろう。「こいかぜ——紺碧——」を歌っている楓さんが映し出された。

「あ」

「ん? ああ」

やっぱりこうして歌ってる楓さんを見ると、まずドえらい美人だなという印象が出てくる。

綺麗だっというのもあるけど、会場を巻き込む——というか、呑み

込む？　つていう表現の方が良いのかな。

とにかく、パフォーマンスが抜群に上手い。会場全体を自分一色に染め上げている。

流石、一流アイドルとしての風格を感じるなあ……。

「高垣楓を見る時は目の色が変わるな」

「まあ、そうだね。ボク自身ファンみたいなもんだし」

346プロに訪れて初めて会ったアイドルで……ある意味、ボクにとってはアイドルになってもいいと思った切っ掛け、みたいなものなのかな。

楓さんに優しくしてもらったことで、アイドルという職業に対しての印象が格段に良くなったのは間違いない。それがあつてなお頑なだった面があるんだ。無かったら尚更のことだろう。

忙しい人だからなかなか会えないけど、なんとか時間を見てあの時のハンカチも返せやし、これで安心してファンをやれるというものだ。

……うん？　お前もアイドルだろ？　いいんだよアイドルがファンやっても。

「楓さんいいよね」

「まあ歌は上手いし美人だな。ただあのダジャレ癖は……」

「……？」

「あれ……？」

……ダジャレ……？　楓さんが？

ははは、御冗談を。楓さんは心優しく美しくパーフェクトなアイドルだ。ダジャレ。まあ人間なんだから言うこともあるだろう。けれどきつと会場は大爆笑で腹筋は大崩壊な激ウマギャグのはずだ。ウフフ。

「あつダメだこれただの盲目なファンになっている……」

「眼はぼつちり見えてるよ」

「一点しか見えてなければ同じことだぞ」

くっ、いつになく辛辣な……。

というかそれはボクを馬鹿にしてるのか？ 楓さんを馬鹿にしてるのか？ 後者なら晶葉と言えども許さんからな！

「それ」

「あつ」

と、歌が終わった途端、チャンネルを変えられてしまう。

「何するんだよう。まだトーク終わってないじゃん」

「いや……あまり幻想に傷を付けるのもどうかと……」

ファイナルな方はとつくに傷だらけだけど。

いやそれ以前にボクは幻想なんて見てないぞ。まあ剣と魔法の世界の住人——外に出たことは無い——だったけど。

恨みがましい視線を向けるも、晶葉に堪えたような様子は無い。本当にボクの扱い手慣れてるな……。

次に映ったのは、315プロの男性アイドルたちが主演を務めるドラマだった。確か、ボディガードを題材にしたドラマだっけ。普段あんまりドラマとか見ないからよく分からないけど……。

今回の護衛対象は財閥の令嬢役——役？——を務める西園寺琴歌さいおんじことかさんのようだ。周りの人たちにまるでお姫様のような扱いを受けている。

……と、そこで何かに気付いたのか、にやにやしなから晶葉がボクの方に視線を送ってきた。

あー……これしばらくイジられるパターンだな……。

「ああいうのを見てどう思う、お姫様？」

「その話蒸し返すのやめてよ」

あーもう聞きたくない聞きたくない。

逃げるようにしてキッチン冷蔵庫の方に向かう。と、好機と見たか続いて晶葉は更なる一言を投げてきた。

「^{アイヌ}自分の国に逃げるなよー」

「国民投げつけるぞ」

「怖い怖い。……ブラックモンブランくれないか？」

「ん」

自分の分と晶葉の分を取り出して適当に投げ渡す。しかし、どうも受け取り損ねてしまったようだ。「ひゃんっ」という小さい悲鳴が聞こえた。どうやら包装がそのまま素肌に触れてしまったらしい。ざまあ。

「本当に投げつけるやつがあるか！ ……で、何で姫なんだ？」

「ボクに聞かれても……ホントいつの間にかなんだから」

直接のきっかけは……何だろう。みんなが罨にかかったの助けてからだから……エメラルド・タブレットの探索でギザのピラミッドに行った時だったっけ？ いや、ユカタン半島だったかな？

どっちでもいいか。ともかくそういうことを経て以降そんな呼ばれ方をするのは確かだけど、ボク自身はそれを認めた覚えが無い。本当に自然発生的な呼び方と言えるだろう。やめてほしい。

「わかった、この話はやめよう。ハイやめやめ！ それより今度の合宿の話しよう！」

「露骨に話題を変えに来たな」

「変えるでしょそりゃ」

これ以上言われるとボクの精神の方が先に参ってしまいそうだ。

「やっぱり、シンデレラプロジェクトの前例からすると合宿はあるよね多分」

「だろうな。しない理由もない」

「……お泊りってどうすればいいの?」

「マジでか氷菓」

「マジだ」

残念ながらボクに外泊の経験はそれほど無い。

いや無くもないか。海外とか。でもあの時は寝泊まりしてるのはずっとおじじの船だったし、その船にしたって殆ど自分の家と同じようなものでもある。変な話だけど、あれはもう第二の実家だ。あおぞら園のことを実家と前提に置いた場合の話だけど。

しかしこう、集団で一つの宿泊施設に泊まり込みという経験はそれほど無い。小学校の修学旅行以来だろうか。あの時だと準備は園の方でしてくれてたけど……今はボクが自分で準備しなくちゃいけないんだよ。そこるところどうすればいいのかが正直よく分からない。

まあ大抵のものは錬成すればどうにでもなるけど。

「まったく仕方ないな氷菓は。で、何でそんな分からないんだ?」

「お泊り会とか経験無いし……」

「……まったく仕方ないな氷菓は……」

「何で今すごい渋い顔した?」

いや、いるよね? お泊り会とかしたこと無いって人。

……いるよね?」

結局この日、練習はそこそこに、今度行われるであろう合宿に持っていくもののリストアップとボクの私物に関しての説教が主になっ

てしまった。

主に化粧品とか。制汗剤とか。

今知ったのに必須だろうと言われても。その……困る。

@ ——— @

「そもそもいくら女所帯で周りに助手しかいない環境になるとは言っても、アイドルなのだからせめてファンデーションくらいはだな！」
「分かった、分かったから」

それから少しして、ボクたちはフルボッコちゃんの収録のためスタジオに訪れていた。

しかし晶葉は撮影用にスタッフさんにメイクをお願いしてからずっと、というか、もっと言えば合宿の話になって化粧品殆ど持ってませんという話になった時から、ずっとこんな調子だ。

いや、まあ。言う理由は分からなくてもないが。ただその、正直化粧って苦手なので勘弁してほしい。

「いいや分かってない。そう言って結局買わなかっただろう。前もその前もその前も……」

「高いし……今月は厳しいし……」

「給料があるだろう!？」

「……園の子にあの、例の遊園地のチケットをさあ」

「……う、うーむ……」

よし、これで晶葉はしばらく追及してこない。

追求し辛いことを出任せに言って追及を逃れた！ 卑怯だ！ なんて思うなかれ。全て事実だ。

流星にやめとけと先生や姉さんには言われたが、こればかりは強行させてもらった。初めての遊園地は確かに楽しかった。だからこそ早いうちからそれを経験しておいた方がいいと思うんだ。明るい

思い出があると今後どれだけでも頑張れるものだから。

「まあこれ以上は言うまい……」

「ごめんね。その内買うから」

「うむ。よし月末が楽しみだな！」

「お、おう」

……結局問題先送りにしただけじゃねえかなと思えてきた。

「さて、今日の収録はどこからだったか？」

「えーっと、確か教会のシーンだったはず。後からCG合成して焼け落ちてる感じにするって」

「昔は実際のセットを焼かないといけなかったらしいという話を光から聞いたが」

「今はいい時代だよね」

まあCGとか合成にしたって経費はかかるけどね。ガタキリバとか。分身にはお金がかかるものなのだ。

ちなみに今回のボクの技は複数分身である。346プロは金の使い方を中心に間違ってている気がする。いつものことか。

そんなこんなでスタジオが見えてくる。今日は大掛かりなセット、かつ暖房を回して汗だくになっているシーンを撮影するという話もあって——多分これもスタッフの趣味な気がする——いつもと違って扉は閉じていた。

「おはようー」

「おはよう(ぎ)ばいませーす」

晶葉がスタジオの扉を開けると同時に、中の光がこちらに漏れだした。

同時に暖房のものと思いき、ちよつと暑さを感じるくらいの風がこ

ちらに吹き込む。

——そして、光が溢れた。

「……うん？」

——風？ いや、温風が吹き込むくらいのは良くある話だ。

しかし、けれど——そこに、草と土のおいが混じることがあるのか？

そう思い、一步を踏み出す。

その瞬間に、ボクは周囲の風景がおかしいことに気が付いた。

辺り一面に広がる野原。周囲にはまばらに樹木が生えていて、上を見れば遙か遠くまで、延々と青空が広がる。

そこに一つ、黒い染みのようなものが見えた。

いや、それは……「船」だ。木材と、機械と、そして魔力によってその身を空に浮かべる、船。

——騎空艇。

「……は？」

その存在を、ボクは知っている。

しかし、けれど、ボクのいる世界にソレは存在しない。ソレはかつてボクがいた世界に在るものだ。

何で、あんなものが——？

そんな混乱が頭を占めるその最中、ボクは視界の中に「それ」を捉える。

白亜の外壁。黒い屋根。精巧な造りの石像。大きな邸宅故に、一目見ただけでその外観を全て捉えることは非常に難しい。

けれどボクは——いいや。僕は知っている。今でも、鮮明に思い出すことができる。

内部の作り、地下室への扉。庭に隠された秘密倉庫。気化した薬液の臭いと、壁紙に付着した血液の色。そして、そこで行われていた狂った実験。

「……僕の、家だ」

ここは。

ここは——。

「空の、世界だ」

——どうやらボクは今、空の世界にいるらしい。

EX1：ヘレティカル・アルケミスト

ふらりと。

無意識のうちに、足が邸宅の方へ向く。

頭の中は真っ白で、喉もひどく乾いている。本能がこの場所を拒絶するも、理性によって縛り付けて前を見た。

間違いなく、この場所はボク——白河水菓になる以前の「僕」が生まれ育ち、そして死んだ家だ。

人の気配は……感じない。よく見れば、外壁には蔦が絡みつき、経年のためにか石像もだいぶ劣化している。庭の草木も伸び放題……およそ人間の手が入っているものとは思えない。

かつての姿は見る影もない。住人がいてこの有様……よっぽどのが無ければありえないだろう。

つまるところ、この家はかなり長いこと放棄されたままになっているわけだ。

心がざらついているのが自分で分かる。いったい、どれだけこの家は放置されてきたんだ？ それ以前に何でボクはここに？ 誰が？

何で？ どうやって？ 一緒にいたはずの晶葉はどこに行ったんだ？

疑問が溢れて止まらない。思考が止まる。しかし、そんな中にあるてなお、ボクの脳は正確に動き、この家の構造を解析——疑問を一部を解消するに至った。

(五年……)

放置されていたと思しき年数は、五年。柱や像に刃物をぶつけたような痕跡がいくつも見られるあたり、最後にこの家を出た人間はよほど狂乱していたらしい。

それがかつての「母」なのかは、分からないけれど……比較的高い

確率で、そうなんじゃないだろうかとも思う。

「……………」

父は、母の傀儡だった。

もしかしたら魔術でも使って意思を奪っていたっていう可能性もあるけれど、ボクが様々な実験を受けている最中、抗議の言葉の一つも発しなかった。

何にしてももう過ぎたことである以上、何も言う気は無い。母も父もこの家にはいない。あの頃の自分を苦しめていた元凶は、いないんだ。

「……………」

——そうだと分かっているけど、身震いが止まらない。

この家を見るたびにかつての記憶がフラッシュバックする。毒を飲まされたこと。身体を切り刻まれたこと。自分自身の最期の悔恨。あらゆる痛苦の記憶が一瞬にして体中を駆け巡り、体を動かすことすらままならない状態にまで陥っていた。

どうやら、あの時のことはボクにとってよっぽどトラウマになっているらしい。

当たり前と言えば、当たり前前だけだ。

……………けど、これじゃダメだ。

「……………っうー！」

ぱしん、と両手で自分の頬を叩く。少しだけ、体の震えが治まってきた。

一つ深呼吸をすると、ようやく改めてかつての自分の家をしっかりと見据えるだけの精神力が湧いてきた。

ここで起きたことはボクにとってのトラウマだ。それは認めよう。

けれど、今はそんなことを言っている場合じゃない。

ここに来るに至った原因の一つは、あの時——扉を開いた時に辺りに広がった光、だと思う。

魔術的な要因があつてか、あるいはもつと超常的な原因があるのか……それは分からないが、あの時、ボクは晶葉と一緒にいた。

ならもしかすると、ボクだけじゃなくて晶葉も一緒にこちらの世界に来ていたっておかしくないはずだ。

じゃあ何でここにいないのか？ となると、ボクも何でかは分からないけど……何にしたって一人にしておくわけにはいかない。この世界は色々と危険だ。何の力も持っていない女子中学生が一人で生きていくには過酷すぎる。

「……急がないと」

こちらに来ていないというならそれはそれで一向に構わない。けれどその可能性は低い以上、何もせずに手をこまねいているわけにはいかない。

この家の中にいるという可能性もある。遠くの島にいる可能性もある。場合によっては空の底に落ちた可能性も……。

状況を把握するためにも、今ここで怯えて立ち止まっているわけにはいかない。小型艇、空を飛ぶための魔術、通信手段……何でもいい。とにかく晶葉と合流して、あっちの世界に戻るための方法を探しに動かないと！

意を決して一步を踏み出す。この家で過ごした記憶が一瞬フラッシュバックしていったが、全て振り払った。今こんなことで感傷に浸ってるわけにはいかない。

錬金術で鍵を作り出し、扉を開く——と、五年分、つもりにも積もった埃が舞い散った。

「邪魔だ……！」

このまま放置してたら、歩きにくいし臭いし視界は悪いしで最悪の環境に置かれることになりかねない。大気を錬成することで視界に入るところにある埃全てをかき集め、圧縮してそのまま消し飛ばす。これで動きやすくなった。

「まずは――」

どこを探るか……と考えて、ふと誰かの手記でも残っている可能性があるかもしれないと思に至る。

誰かの――特に、この家に連なる人間の意思が絡んだ結果ボクがここに飛ばされてきたのだとしたら、何か手がかりが残ってる可能性があるかもしれない。そんな一縷の望みをもとに、記憶を掘り起こして書庫へ向かう。

「……カビ臭」

……しかし案の定、書庫はまたも死ぬほどカビ臭く埃っぽい、不快指数100%な空間と成り果てていたのだった。

さつきと同じように埃と不純物をかき集めて圧縮、そのまま消し飛ばす。ああ、もう、毎度毎度面倒だな……！

それに、一々資料を見ていくっていうのもまた効率が悪い。壁に手をつき、錬成を行う。狙いは部屋の書物全てを視界に収められるようにすることだ。

ミシミシと音を立て、部屋の構造が変化する。と同時に、全ての資料が視界に収まった。それを確認するが早いか、ボクはその全てに構造解析をかけていく。

「く……」

負担は大きい。流石に、傍流とはいえ連綿と続いていた錬金術師の家系ともなれば蔵書量はすさまじいものだ。地下の禁書庫の本を除

いても、これだけの数か。

でもこんな程度で泣き言なんて言つてられるか……！

資料の中に隠されていたそれらしい手記だけを抜き出しておき、他は置いておく。部屋の構造も元通りだ。

「……………っ」

この手記を見れば、思い出さなくても思い出してしまうかもしれない。いや、確実に思い出すだろう。

けれど、それでも……………！

意を決し、手記を開いてその内容を読み取る。

——■■■■年■■■日

ニ■■ラに水銀を投与。体内での反応を促す。実験は成■■、■■経過観察——。

「ッ!!」

思わず、手記をそのまま床に叩き付けてしまった。ガン、という鈍い音が書庫に響き、手記が転がっていく。

……………くそつたれ。当時の「僕」の実験記録じゃないか。

どつと冷や汗が噴き出した。後で燃やしてしまおう。

「はあ……………」

ため息を漏らしながら他の手記も読み込んでいくが、どれも似たり寄つたりの内容だ。一部そうでもないものもあつたが、そちらは文字とも絵ともつかない、狂乱して書きなぐつたらしい跡だった。

どうやらボクが死ぬことになったあの実験が最終的に失敗したらしい。ざまあみろ。

……………けど。

「……収穫無し、か」

結局、手がかりらしいものは無し。分かったのはどうやら実験が失敗したらしいということと、柱や像についた傷はあの母がやったらしいということだけだ。今更こんなことで留飲を下げる気は無いし、精神がすり減るだけに終わったと言ってもいいかもしれない。

とはいえ、このくらいは想定内だ。ここに何も無いとなると、次は禁書。その次は実験室。他の部屋……と順に探していくことにしよう。

順番にどんどん心がささくれ立っていくことになるが、今は言うまい。

さて、行こうか——と重い腰を上げようとしたその瞬間、不意に階下から扉が開く音が聞こえた。

（——来客？）

……いや、そんなわけない。何年も放棄され、放置されてきた家だ。今更人が来るなんて不自然に過ぎる。それに、もしそうなら呼び鈴を鳴らすだろう。

もしかすると、何か調査しに来たか……盗賊、山賊という線もある。音を発することなく、壁に手をつき錬成を開始。この書庫に通じる通路と隠し部屋や地下に繋がる扉を埋めて封鎖。重要な場所を見られないよう細工を施す。

あくまで間に合わせの策だけど、時間を稼ぐことくらいはできるはずだ。今のうちに他の部屋も調べて——。

『はん、この程度の偽装でオレ様の目を誤魔化せるとかってんのかあ？』

——階下から声が聞こえたその瞬間、屋敷に施していた隠蔽が

全て取り払われるのを知覚した。

若い……少女とも、童女とも言えるような声だ。あの声から分かる程度の年齢でここまでできるなんて、只者じゃない！

錬金術師、それも開祖の血筋に連なる名家の教えを受けた人間か……何にせよ、錬金術師がここに来たことは確実！

まさか、この空の世界の錬金術に関わる事柄の殆どを取り仕切っている、ヘルメス錬金術学会の手の者か……？ 彼らだとしたらマズい。知識に関して貪欲すぎるあの学会の手にかかってしまうと、手がかりが全部持つて行かれてしまう！

解析にかける限り、入ってきたのは四人。

四人……か。

(無力化できるか……？)

いや、できるかどうかじゃなく、やるしかない。

幸いボクはある種の真理に到達した錬金術師だ。ある程度までの実力の錬金術師相手なら目を瞑っても勝てる自信がある。

書庫には身を隠す場所には事欠かない。机の下に隠れ、様子をうかがう……と、書庫の扉が開き、先程屋敷に入ってきたらしい四人の男女が、部屋に入ってきた。

——その瞬間を見計らい、空気を錬成しガスに変換する。

割と強めの神経ガスだ。後遺症は残らないように調整しているが、少なくとも一時間は動けなくなるはず。

こういう知識、志希さんに教えてもらっておいて良かった。

「小細工だな」

そう思った矢先、瞬時にガスは分解され、元の無害な空気に戻っていった。

嘘だろ、と内心で舌を巻く。確かにこのくらいのこと、ボクにとっては小細工みたいなものだ。けれど、一般的な錬金術師にとってみれ

ば、そうではない。この規模でガスを充満させた場合、必ずそれ相應の準備を必要とする。それを「小細工」の一言で……!?

……そんなことが、できるのは――。

(……真理に至った人間だけ)

ヘルメス錬金術学会が、公式に「真理に到達した」と示したのは、錬金術という学問の開祖、カリオストロその人だけだ。

非公式にはボクみたいなのもいるが、ボクはそもそも例外中の例外なので一旦置いておく。

けれど、そんなことがあり得るのか？ 開祖・カリオストロと言えば数百年……いや、下手をすると千年以上前の人間だ――と、そこまですべてハツとなる。

ボクもやろうと思えばそのくらいイケるじゃん、と。

魂が腐り果ててしまわない限り、極端な話、半ば不滅だ。殺しても死なないし、老化してもその端から新しい細胞に差し替えれば歳も取らない。

ありえなくはない。むしろ、他の誰かが開祖を騙っていると考えるよりはまだ現実味がある。

同時に、それはボクに一片の勝機も無いということの意味していた。千年以上の長きに渡り生き続けている開祖と、錬金術師として生まれたわけでもなく、ただの実験体――それも異世界に生まれ変わって初めて真理に触れたボク。経験の差は明らかだ。

加えてあちらは四人。数の差でも優位を取られている。

……死にはしない。いや――同じく真理に至った相手だ。魂をも消し飛ばすような決め手がない限りは、どうあっても千日手になるのは避けられない。命だけは、なんとかなるだろう。

そう思いながら、ボクは両手を上に掲げて四人の前に自分の姿を晒した。

「……………」

「ああ?」

「ん!」

「何だあ!」

「え……!」

四者四様、いや、正確には、五者五様。それぞれがそれぞれの驚きの反応を——約一名を除き——見せてくる。

ボクがいることなど気付きもしなかった……というより、これは、想定外の相手が現れた、というような反応か。

「お、女の子……!」

「ほおーう、見た目通りじゃあねえな。おいグラン、クラリス、気を抜くなよ」

「え、ちよちよ、ちよつと待ってよししよー! 手上げてるよ!? 戦う気無いんじゃないの!」

「ククク、そうやってこつちの油断を誘う作戦かもしれないぜ?」
「でもよう、なんか弱々しくねえか?」

相手は四人。一人は、身長180cm前後の、グラン、と呼ばびかけられていた少年……青年に差し掛かったくらいの年齢だろうか。髪は茶。露出した腕を見ればその肉体の強靱さが分かるほどに鍛え抜かれているが、どうも着痩せするタイプらしい。服の上からは分かりづらい。

一人は、その青年に寄り添う少女。栗色の髪を持ったポニーテールの子だ。17、8歳くらいだろうか。比較的高い露出度の服を着用している。あれは……ヘルメス錬金術学会の正式な衣装によく似ている。アレンジ品だろうか。「弟子」と呼ばれていることを鑑みるに彼女は開祖ではないようだ。

一人は、金の髪の童女。彼女が先程声を上げていた張本人だろう。となると、恐らくは彼女が開祖・カリオストロ……!

……あんな姿だったの開祖!? それでいいのか開祖!? ボクの中

のイメージが崩壊していくんですけど!?

……それと、もう一人は……いや、正確なことを言えば、一人と、一匹、だろうか。後ろからこちらを見ているのは、赤い……仔竜？ そして、その目前に立っているのは。

「……………」

「…………!？」

蒼い髪の毛の、少女。

——優しい子、かな。純粹で、天真爛漫で……綺麗な蒼い髪の毛、してた。

不意に、凜さんの言葉が思い返される。

優しい子。優しそうな子。純粹そう。綺麗な、蒼い、髪。

「ルリア……さん……?？」

「…………ヒョーカさん……?？」

脳に電流が走った。

その瞬間に様々な事象が繋がる。蘭子さんのあの反応。凜さんの言葉。シンデレラプロジェクトの人たちに会った時のあの微妙な表情と「蒼い髪」、そして今の一言!

まさか、まさか、まさか——!!

「ぐ、グランっ! ビイさん!」

「う、うん、まさか、この人……」

「だよなあ……?？」

「ああ? おいグラン、分かるように話せ」

「こちらとあちら——特にルリアさん、と思しき少女とを見比べ、や

や混乱した様子の青年——グランさん。

偶然の一致とは思えない。きつと、凜さんはこうなることを見越していた……。

直感……うん、これに関しては直感以上のことは無いだろう。何せこうなるに至った前提条件が何も分からない。

自分以外の誰かがこの世界に来る可能性がある。そしてボクの髪がルリアさんのそれと似ている……だから、とりあえず言ってみただけ、なのだと思う。

けれど、何でルリアさんがボクの名前を？　そこからまるで分からない。まるで、ボクのことを知っている人がこの世界に来たことがあるみたいなの……。

「……すみません。ボクに敵意はありません。お話をさせていただけませんか？」

「はあ？　信用できると思ってたんのか？」

「……確かにカリオストロの言うことももつともだと思う。けど、ちよつとだけ判断を待ってくれないかな？　もしかすると彼女、僕らが知ってる人の知り合いつて可能性があるんだ」

「ああ？」

互いを見比べながら一歩前に出て、開祖を手で制するグランさん。どうやら彼がこの集団のリーダーのようだ。

騎空士……もつと言えば騎空団のリーダー、と言ったところだろうか。見た目は年若いながらも様々な修羅場を潜り抜けてきたかのような貫禄を感じられる。

「そうだぜえ！　だって、こいつシキが言ってたヒョーカつてやつみたいだしな！」

「だから誰だよそいつらは！」

「ししよー、それを説明するんだよ!？」

「チツ……」

……開祖の怒りももつともだ。突然現れたこんな怪しいヤツ、警戒して当然とすら言える。

けれど、今の……あの仔竜の言っていた言葉が真実なら、志希さんがこつちに来たことがあるようだ。

なら、この人たちに話を聞けば、何らかの手がかりが得られるかもしれない！

浅ましいことは承知の上だ。けれど、何としてでも情報を得なければ……！

「とりあえず、一度玄関口に集まってから話そう。ここだと……話すのに、少し適してない、かもしれないし」

そう告げたグランさんの言葉に頷き、ボクを含めた5人と1匹で玄関ホールまで下る。

開祖が錬成したふかふかの椅子にそれぞれが座り、ボクが錬成した机を挟んで、ボクと他の4人＋1匹が向き合うようなかたちになった。

「で、何なんだお前は」

「……白河水菓、と言います。多分……こことは違う世界から来ました」

「シラカワ……ヒョーカ……あ、やっぱり！ シキさんの言ってた人ですよね！」

「シキ……」ノ瀬志希さん、ですか？」

「うん、そのイチノセシキさん、には会ったことがあるよ。少し前……ある島で依頼を請けた時だったかな。そこで騒動に巻き込まれてあの人と出会ったんだ」

「ミナミってやつも一緒だったぜえ！」

志希さんと、美波さん……ってことは、もしかしてあの時……！

そうか、その時にボクの話を……………悪いようには言われたりしてないよね……………?

「違う世界ねえ」

「そういえば、前もあつたっけ。みくちゃん元気かな、ね、団長☆」

「たくさん来たからね……………リンさんにウヅキさんにランコさん、それに……………」

…………あれ、違う世界から来ましたー、って、結構すんなりと受け入れられてるな。

というか多いな、こつちに来た人。凜さんに卯月さんに蘭子さんに未央さんに美嘉さんに？ 莉嘉さんや小梅さん、みくさんみりあさんにアーニヤさんまで……………シンデレラプロジェクトのメンバーなんかは殆どじゃないか!!

いや、だからこそ、こういう超常現象を受け入れる下地が整ってるのか……………この人たちも何だかそういう人たちをその度に拾ってるみたいだし、もう対応がベテランじみてるな……………。

「…………あの、違う世界から、って部分、驚かないんですか……………?」

「しよつちゆうだからね。もう慣れちゃったよ」

すげえな外の世界。もしかしてこれが標準なのか、騎空士。

昔のボクが聞いたら卒倒しそうな内容の話だ……………。

「それと、改めて自己紹介させてほしい。僕はグラン。一応、騎空団の団長してる」

「私はルリアと言いますー!」

「オイラはビイだぜ! よろしくなあ!」

「美少女錬金術師のクラリスちゃんだよ! よろしくね☆いえいつ☆」

「クラ……………!?!」

「え、どうかした？」

「いや、その、お世話になった人に同じ名前の人がいて……」

「そーなの!？」

クラリスさん（シスター）とクラリスさん（錬金術師）か……。

うわあややこしい！ 流石に本人を目の前にしてたらどつちのこ
と言ってるかは分かるかもだけど、どっちもない時にクラリスさ
ん、って名前を出したら絶対混乱する！

どうしよう、元の世界に戻ったとき、ボクはクラリスさんとどう接
すればいいんだ!？」

「はあーい☆ 世界で一番カワイイカリオストロちゃんだよおー☆
まあ短い間だろうがよろしく頼むぜ?」

「あ、はい」

「んだよノリ悪いな」

……開祖様ってこんな人だったのか。

ちよつとシヨックだ。

「ところでヒョーカさん、ヒョーカさんはシスターさんなんですか？」

「え? ……あ」

「そ、それにしても少し、刺激的……だけど」

「え、あ、あ、あ、ち、違うんです！ 違うんです!! 仕事なんです!」

「お、おう……?」

「……え、えーつと、お、お花売り……みたいな……?」

「違います!! 演劇です!!」

「必死過ぎて引くぞ」

「で、でもそつか☆ 演劇ならまあ、まだ納得だね☆」

「そ、それに、そのくらいの格好をしてる人なら結構いるよ。エルーン
の人とか……」

「シルヴァさんとか?」

「いやエルーンを例に出すのはどうだよ。というかそのカテゴリに入っちまったかアイツは……」

と、あわただしきせいので半ば忘れかけていたことを、ルリアさんに指摘されて改めて思い出す。そういえばボク、仕事の衣装のままこつちに來ちやつてたんだ……！

どういう仕事だと言われるとこういう仕事だ、と答えるしかないけれど、とにかく仕事は仕事だ。衣装を着てることには変わりないけど、このままじゃただの痴女と思われてしまう！

何は無くとも外見を取り繕う必要はある。その場で外套を作り出し、衣装の上に羽織った。

「す、すみません。お見苦しいものを」

「い、いや……」

「だんちよー？☆」

「んー……で、話の続きだ。お前……何をしてた？」

「……どの話でしょうか」

「全部だ。全部話せ。事細かにな。まずお前がここにいた理由だ」

「と言われても……いつの間にかここにいたんです」

「……異世界からこの世界に來た人は、何でここに來たのか分からない状態で來るからね。不自然な話じゃないと思うよ」

「そうか」

団長さんの言葉に頷く開祖様。どうやらその点は納得してくれたらしい。

ただ、問題はそれ以外か……。

「次に聞きたいことがある。お前の錬金術は一体何なんだ？」

「な、何って……ただ、普通に」

「普通ってのはこういうことだろうか」

と、開祖様はその場で実演をして見せた。
その場に作っていた机が隆起し、木製の武器を形作る。……ごく普通の錬金術だ。

「この机の材質を『理解』し、『分解』し、『再構築』することで錬成を行う。それが錬金術の基本的な術理だ。まあこの不出来な弟子はちよつとばかり足りねえ部分があるが……」

「もう、いちいち引き合いに出さなくていいじゃんししょー！」

「ククツ。まあともかくだ。基本的な大原則として、これは『科学』なんだ。無から有を生み出すような魔法めいた術じゃあねえ。だつてのにお前は当然のように、他の場所から質量を動かさずに壁を作つたりガスを錬成したりしてやがる」

……言われてみると、覚えが無いわけじゃあ、ない。

晶葉が材料が足りないと言うから金属を作つて持つて行つたり、志希さんの薬の材料が足りないからと持つて行つたり……果てはこちらの世界にしか存在しないものを、あちらの世界のものを基にしてはいえ作り上げている。

おかしくないわけがない。確かに、それは質量やエネルギー保存の法則に反している、とも思える。けどちゃんとした理屈はあるんだ。

「……いえ、ボクは単に原子の配列を組み換えてるだけです」

「はあ？」

「大気中には無数の分子が存在します。それらの配列を一度崩して『再構成』してるんです。確かにその場に存在しないものは一時的に『変換』して、例えば水素を金H^{Au}に言うように、というようなことはしています……」

「ま、待て待て!! お前今なんつった?」

「配列を崩して」

「その後だ!」

「変換して」

「それだ！ ……どうなってんだ!? 錬金術の常識から外れてんだよ！ まあオレ様ならそのくらいはちよちよいのちよいだが……」

「……そーなの?」

「……そうなんですか?」

「そうなんだよ！ いやお前が分かってないようなツラしてんじやねえ馬鹿弟子!」

「痛い!」

……知らなかった。

この領域がどの領域の話なのか、正直言って比較対象がない状況では見当もつかなかった。

ただ漠然となんかすごいことできてるな、普通の錬金術師じゃあここまでできないだろうな、くらいのことは思ってたけど……。

「??」

「なんか難しい話でオイラたちは分かんねーぜ……」

「なんだかすごいことをしてるってことだけ分かったらいいよ。それよりカリオストロ、それって、ヒョーカさんも真理に達してるってことでもいいのかい?」

「としか言えねえ。けどオレ様の知るそれとはだいぶ……つーか何で異世界の人間がこんなこと……!?!」

開祖様はどうやら混乱のさ中に叩き落されてしまったようだ。なんだか申し訳ないが、事実なので仕方ない。

でもこれ、説明していいもののかな。いやでも説明しなきゃ分からないしな……うん、様々な意味で一番事情を分かっている人たちだ。言ってしまうおう。

「そのことで少しお話が」

「……詳しく話せ」

——それからボクは、自分の出生にまつわる話を始めた。

最初はこの世界で生まれ、実験体として育ち、死んだこと。開祖様の要望に応じ、その実験の内容も含めて全部。

それから、なぜかあちら側の世界で生まれ変わったこと。捨てられたり、施設のために何かできないことは無いかと探して錬金術を頼るようになったり、果てはアイドルになったり……そんなことまで。

話は長くなってしまったが、開祖様もクラリスさんも……団長さんもルリアさんもビイさんも、みんな真剣に聞いてくれていた。

ルリアさんやクラリスさんなんかは話の最中にどういう訳か涙ぐんですらいた。でもこのくらいの境遇、こつちの世界じゃよくあることだと思っただけだ。

グランさんは難しい表情で口元に手を当てている。開祖様は……文字通り、頭を抱えていた。

どうすりゃいいんだこれ。そんな眩きが聞こえてきそうなくらいだ。というか聞こえてきた。

「異世界に転生だあ……？ いやそれ自体はある程度隣接しあってる世界同士ならありえなくもねえ、ただでさえリンやミオたちみたいにホイホイこつちに来るやつがいる状況だ、そういう例があっても不思議じゃあねえ……だとしたら真理に触れたつてのは……アストラル体に……毒……水銀……殺された……心臓……」

……長考に入ってしまった。こうなると、呼びかけたところで邪魔をしてしまうだけだろう。

そう思っただけだと、クラリスさんがおずおずと手を挙げた。

「つてことは、ヒョーカちゃんって……うちの親戚のおばさん？」

「おじさんが正しいかも……」

「はわっ!？」

「……まあカリオストロの例もあるけどね……」

「……つてことは元々男だったってことかあ!？」

「まあ……生まれ変わってからは、ずっと女ですけど……」

……あ、そういえばその話してなかったわ。

まあ性別なんて小さい話だし、意図的に言わなかったっていうか、言うだけの余裕が無かったっていうのもあるけど……。

と思っていると、開祖様が手を叩いた。

「そういうことかっ!!」

「どういふことなんだカリオストロ!？」

「賢者の石を覚えているか？」

「なんだっけ」

「仮にもオレ様の弟子名乗るんならそのくらいのこと覚えてる馬鹿弟子ー!」

「あいたあー!」

……この人たち、漫才師だっけ？

「変態オヤジの使ってやがったヘルメスの門——ニグレドとアルフェパラケルススウスの素材だ馬鹿弟子。あいつはな、白化、黒化、翠化、黄化、赤化アルベド、ニグレド、ウイリディタス、キトリニタス、ルベドの工程を経て黄金錬成アルス・マグナに至るって代物なんだよ」

「錬金術の到達目標の一つ、だったよね」

「よく覚えてるじゃねえかグラン。賢い生徒は好きだよっ☆」

と、言いつつもその顔は僅かに苦み走っている。

賢者の石……等価交換の法則に唯一当てはまることの無い特異物質。

その製造工程は開祖様の言った通り。五つの工程を挟むことで初めて、あらゆる法則を無視した錬成法、「黄金錬成」が可能となる。

もっとも、ボクや開祖様のように真理に至った錬金術師であれば、ある程度それに類することは可能なだけど……。

「凡庸なザコ錬金術師だろうとこのオレ様を追い詰めそうになる程度にはとんでもない物質なんだ。もう一回頭に叩き込んどけ馬鹿弟子」
「ああああああういたいってばあー!」

「しかし、あれは……現存しないというお話だったのでは?」

「白化の段階に到達する程度のモンなら、学会の連中が握ってるだろうさ。材料さえあれば作ることも……まあ今その話はいい。続けるぜ。ヒョーカの話聞く限り、この家の連中の目的も賢者の石による黄金錬成だ。ま、錬金術師なら喉から手が出るほど欲しいモンだ。狙ってたって不思議はねえ」

「でも、それがヒョーカさんとどんな関係が?」

「そのためにな、コイツの……前世の身体を利用してたんだよ」

そうやって、開祖様は机の上にピーカーを錬成した。

そして次々に、様々な金属を錬成し、そこに投入していく。中には劇物なども存在していた。

「これが肉体と思え。ここに水銀やマグネシウム、金や王水……そういった触媒を突っ込んでいく」

「それってヤバいんじゃないの!? っていうかヤバいことになってるよ!」

「ああ、ヤバいさ。普通の人間なら体の中から腐って死ぬ程度にはな」

びしり、と音を立ててピーカーがひび割れそうになる……のを、開祖様は続けて錬成し、修復と同時にコーティングを行った。

これでしばらく壊れることはなく、内部で反応が……反応、が……。

「そこを、魔法の加護や治癒魔法で強引に体裁を整える。『器』が壊れちゃあ意味ねえからな。そのおかげで、この間も生命活動は続いている、代謝や排泄でこの触媒も循環されていく……そして長い時間をかけて体内で化合し、反応し……やがて一つの物質を形作る、ってな。

要はコイツの元母親ってヤツは、息子の肉体をビーカー代わりにしたんだよ」

ルリアさんの顔が青ざめ、クラリスさんが沈痛な面持ちになる。格蘭さんは……少し憤りを覚えているようだが、それを態度に出すことまではしない。流星は、騎空士と言ったところだろうか。

「でも、何でそんなこと……自分の子供なんだよ!？」

「義憤を抱いたっていいがなクラリス。どんなに綺麗ごと言ったってそういうことやるヤツはやるんだよ。血縁だろうが何だろうがお構いなしにな」

「ひどい……」

「まあ、この家の様子を見る限り、失敗してるみたいですけどね。ざまあみろ」

「クククツ、だろうな! 因果応報ってやつだ。まさしくざまあみろ、ってなもんだぜ」

くくく、とボクと開祖様の声が重なった。

「でも、カリオストロ。何がどう男性だったことが作用するんだい?」「そうだぜ! オイラにはなんにも関係ないようにしか聞こえないぞ?」

「格蘭は魔法の心得があんだろ? 男女の差、知ってんな」

「男性は陽の気を持つ。女性は陰の気を持つ、だったっけ?」

「それだ」

その内容自体は……確か、あちらにも中国の思想であったはず。

そうか、こつちにも似たようなものがあつたのか。しかしそれがどういう風に作用するのかと言われると、ボクには分からないけど……。

『陽』、ものごとをプラスに進める……こいつは『温める』ことにも通ずる。ま、こいつは魔法の気質には何ら関係ねえがな。女にも火の魔法、どころか日の魔法が大得意な奴が大勢いるんだしな」

「それが、何を？」

「その気質を炉心にして、反応を促したのさ。人間一人の命を使った反応炉だ。それなりの温度と反応速度になるだろうさ」

「……………」

「あ、そうそう。お前アレ削ぎ落されたりしてたろ。棒の方」

「あ、はい」

「だろうな。それで陽の気の放出を防いでたつもりだったんだろう。徹底してやがるなあ」

その言葉自体は母を評価しているようにも聞こえるけど、実際にはかなり嘲りのニュアンスが混じっている。確かに徹底しているが、それが結果意味をなさないと理解しているからだろう。

一方、団長さんは青い顔で自らの股間を押さえていた。

「そのせいで魂が陽の気を失って、次生まれ変わったら女だったってことにも繋がるって話でもある」

「そうなんだ……………」

「だが…………ククツ、誤算だったろうなあ、そこまで徹底した実験は失敗だ。賢者の石は溶けやすい代物だ。コイツの体内で醸成された賢者の石は、コイツの魂そのものと結びついちまったんだよ！ 15年だったか？ それだけ経ったんだ。黄^{キトリニタス}化^{ニタス}くらいには達してると踏んで、殺して抽出しちまおうって算段だったんだろうが…………結果もぬけの殻！ ま、残り滓^{カス}くらいはあったかもしれないけどな。それを武器に加工するくらいのはしたかもしれないねえ。んで、死んだせいで肉体とのリンクが切れた魂の方は、魂^{アストラル界}の領域に触れて真理に到達した……………」

そしてあちらの世界で改めて錬金術を学んだことで、それらの全て

が結実した。

母のやったことは全て無駄に終わり、結果的にボクにとっての「実」になった――。

そう締めくくって、開祖様はこらえきれないという風に笑い声を漏らす。

「流石のオレ様もちよつとばかし困惑したが、そう考えるとおおよそ全てに納得がいく。アプローチの方法はだいぶ違うが、それも真理にたどり着くための方法の一つだろうってな」

言って、やり遂げたような顔をして開祖様はソファに深く腰掛けた。

「……それが判明したのは喜ぶべきことだけど、何か忘れてないかい、カリオストロ?」

「ああ? あー安心しろ。ヒョーカの友達を探して元の世界に戻すつー話だろ?」

「いやそつちじゃなくって、シエロさんの依頼だよ。魔物は倒したけど、この家を調査しないと終わらないだろう?」

「あつ」

「おいおい、しつかりしろよなあ!」

「うるせえぞビィ!」

どうやらボクにかかりきりになってしまったせいか、開祖様は当初の目的を忘れかけてしまっていたらしい。

なんとというかたいへん申し訳ない。

「……もしよければ、ボクが案内しましょうか?」

「えっ? いいんですか?」

「はい。乗り掛かった舟ですから。それと、厚かましいことをお願いするようなんです……友達を探すこと、元の世界に戻ることの二つ

を、お願いしたくて。見返りとしては劣ってしまおうんですが……」

「お安い御用だぜ！ な、グラン！」

「うん。困った時はお互い様だよ。みんなもそれでいいかな？」

「はい！ 困った人は見過ごせませんから！」

「うちもオツケー！ ししよーも手伝うよね？」

「あ？ ああ」

「……うゝえっ!？」

「あん？ 何驚いてんだよ」

「い、いやししよー、何でオレ様がそんなこと手伝わなきゃいけないんだあ？』って言って渋りそうだったから」

「傍流とはいえオレ様と同じく真理を目の当たりにした同士なんだぜ？ ちよつと不安定なのが珠たまに瑕きずだが、素直すぢで出来も良い。オレ様だつてちよつとかわいがつてやろうつて気にもなるさ。それはそうとお前後で正座な」

「そんなあー!？」

「開祖様……」

——感激だ。傍若無人として恐れられたあの開祖様に、そこまで評価してもらえるだなんて。

本当なら、傍流の家系のボクみたいな木っ端錬金術師が話すなんてできるはずもないのに……！

「……ねえだんちよー、これししよー絶対面白がつてるよね……？」

「うん、多分……」

目の前で行われた内緒話は、喜びにゆで上がっているボクの耳には、残念ながら入って来なかった。

——それに。

「うん？」

「うわっ」

EX2：キミとボクの自由

何だ……アレは!?

幻術なのか!? イヤ……幻術じゃない……イヤ……幻術か?

……何だアレは!!?

「何ですかアレは!?

カイジユウ

「壊獣だ! 知らねえのか!?

「存じ上げません!!」

かい……かいじゅう……!? 怪獣じゃないのか……!?

いやそもそもあの見た目、どう考えてもぴにや……いや、でも無駄な装飾が多いし表情の配置も違う……穂乃香さんが見たらキレそうだけど、あれはあれで受け入れる可能性も否定できないような何だあのビジュアルは……。

また幻術なのか……!?

「壊獣……古代に繁殖していたらしい特殊な魔物なんだ。僕たちは……いや、全空は今、ヤツらの脅威に晒されると言っている……!」
「……アレに!?

あのパワードぴにやこら太というかアーマードぴにやこら太というか、たぬこら太というか……ともかくあの異形のぴにやこら太が全空を脅かす!?

絵面の間抜けさもさることながら、どういう悪質な冗談だよ!?! ぶざけてんのかファータ・グランデ!!

「見た目こそブサイクな緑色だが実際は結構な強敵だぜ。アイツは胸からビームを撃つし、他の個体は自爆したり頭で食いちぎりにきたり……」

「何それこわ……」

「だから調査に来たんだ。もしかするとここが発生源なんじゃないかって……でもそうじゃないみたいだ。カリオストロ、クラリス、ヒョーカさんを頼むよ」

「うん、分かった!」

「行ってこい!」

「グラン! バハムートの力を!」

「ああ、ありがとうルリア!」

引き留める間も無く、団長さんはルリアさんの掌から発せられた魔力を剣に乗せ、窓を突き破って外へと駆け出した。

早い。いや、身体能力もそうだけど……判断が早い。アレが既に敵だと確定しているから、というのものもあるだろうけど……戦闘に関してあまり頼りにできないであろうボクを二人に任せ、自分はルリアさんの……魔法? を剣にエンチャントして、即座に自分が囷になるべく飛び出した。相当場数を踏んでないとできなさそうな動きだ。

「だ、大丈夫なんですか……!?!」

「ああ、安心して見てろ。うちの団長はそりゃあ強えぞ」

「はい、グランは負けません……絶対!」

開祖様もルリアさんも、団長さんに絶対の信頼を置いているようだ。

いざと言う時に飛び出せる準備だけは欠かすことなく、窓から外を見る。そこでは想像していたよりも遥かに熾烈で——しかし、一方的な戦闘が繰り広げられていた。

ぴにや壊獣の発する光線が地面を焼き焦がす。光速の一閃だというのに、団長さんに慌てたような様子は無い。

どうやら冷静に攻撃直前の予備動作を見て、相手の向きや行動の前兆から、光線が発せられる方向と速度を予測して動いているようだ。

瞬時に肉薄し、一つ、二つと剣戟を重ねていく。その度にぴにや壊獣にダメージが加わっていった。

「びいいいにやあああ あ!!」
「!」

怒りに任せて放った極太のレーザー……しかし、それも、地を蹴つて身を躲すことでその範囲から逃れ出る。

先程と全く同じ展開で、剣戟……今度は三度だ。ほんの一瞬ほどの隙があるように感じられないのに、彼は凄まじい技量とクソ度胸でそれを成し遂げている……。

やがて、自らの攻撃が当たらないことに焦れ始めたぴにや壊獣の胸元の水晶が輝き出す。

その輝きは周囲一帯をも照らすほどの光量になり――。

「あぶねえー!」

「ひゃっ!」

食い入るように見つめていたボクを開祖様が押し倒す。その上をレーザーが通過していくのが、倒れ込む最中に見えた。

……全方位レーザー!?

「ヤバいんじゃない!」

「黙って見てろクラリス!」

戦闘に介入するべきか迷いだすクラリスさんを手で制す。直後、開祖様は壁面を錬成して補修した。相手がこちらに注意を向けられないようにするためだろう。

次いでボクがその上から鏡面コーティングを施す。あれが熱線であれば無効化はできないが、仮にレーザーだとすれば、これで反射できるとは……ではない。

「団長さん!」

「あそこです！」

見れば、団長さんはぴにや壊獣の背後に立っていた。あの一瞬であそこまで……一体どんな踏み込みを!?

愕然とする間にも戦闘は進む——いや、終わる。

上段に構えた剣は、ルリアさんから貫った輝きを増幅し、熱へと変えて——。

「レギンレイヴツ!!」

気合の叫びと共に打ち放ち、瞬時にぴにや壊獣を消し飛ばした!

ほんの数合の打ち合い……いや、打ち合いですらない。最早演武か何かではないかと思うほどに洗練された行動だった。

……これが、本物の騎空士……!

「どうやらここも安全じゃないみたいだ。みんな、どうする?」

「どうもこうもねえよ。とつとと資料さらって逃げた方がいいぜこいつは。幸い内部の構造に詳しいヤツもいるしな。最終的な精査はグランサイファーに戻ってやりやあいい」

「おいおい、危ないんじゃないのかあ?」

「団長も守ってくれるよね☆」

「勿論。仲間だからね」

あれだけ強い人が護衛についてくれるのか……それに開祖様まで。忌々しい記憶ではあるけど、ボクの記憶が頼りにされてるってことも嬉しい話だ。

「それじゃあヒョーカさん、お願いします」

「分かりました。地下に案内します。ついてきてください」

またさつきのぴにや壊獣が来るとしたらたまらない。できるだけ

時間をかけず、早めに……でも、決して焦らず、慌てず行こう。怪我をしたら元も子もないんだから。

ボクは屋敷に施した隠蔽を解除しつつ、団長さんたちをまず地下へと案内した。

入った途端に昔の光景がフラッシュバックして、思いっきり吐いたことは余談としておく。

@ ————— @

……それから数十分ほどかけて資料の回収を終えたボクたちは、屋敷を後にして団長さんたちの騎空艇に向かっていった。

なお、ボクは部屋に入るごとに思いっきり吐きまくって体力を消耗。動けるようになるまでは、開祖様の錬金術によって生み出された大蛇、ウロボロスの背に乗せられて移動中である。

思った以上に根が深い。多分これ、一生付き合って行かなきゃいけないタイプのそれだ。

こうなると、時間が解決してくれるのを待つしかないな——と、ぼやけた思考の中で漠然と考える。

「まさかオレ様が気を遣うほど吐くとはな……」

「ご、ごめんなさい……」

よりもよって開祖様に気を遣ってもらえるなんて……嬉しいけど、不甲斐ないところを見せてしまったと内心で死ぬほど反省する。

確かに、ボクがこんなことになっちゃったのは大元の元を辿れば開祖様のせい……と言えなくもないけど、あつちの世界で錬金術の恩恵に与ることができたのもまた、錬金術を世に広めた開祖様のおかげと言える。

錬金術に対してやや複雑な感情があるのは確か。母を恨む気持ちが消えないのも確か。だけどそれはそれとして、開祖様は尊敬に値する人だ。人柄もフランクで面倒見がいいし、理知的で……そんな人に

手間をかけさせてしまったのがとても！　とても申し訳ない……………！

「うおっ……………!?　なんだか今凄まじくムズ痒い感覚が……………!?」

「風邪かい？」

「そんなはずは……………」

言いつつ外套を用意しておくあたり、団長さんも団長さんで気配りの達人だな。

そんな様子を横目でちらとうかがっていると、ふとルリアさんがこちらに近づいて来るのが見えた。

体調がどうかを確かめに来たのだろう。平気だと示すために片手を挙げて応えると、ルリアさんは安心したように一つ息を吐いた。

「大丈夫そうで良かったです。お水飲みますか？」

「すみません、いただきます」

水を受け渡したルリアさんは、そのままボクの隣に座るため、ウロボロスの背甲に腰掛けた。嫌な顔一つせず声も上げないあたり、思ったよりルリアさんに慣れていているらしい。

……………しかし。

「……………少し、気になったことを聞いても構いませんか？」

「?　はい、いいですよ」

「ルリアさんは戦う人には見えませんが……………何であの場に？」

確かにあの付与魔法エンチャントのようなものは強力だ、とは思った。けれど、じゃああの局面でそれをする必要があるかと言うと、そうでもない。団長さんの技量なら、それこそ詰将棋をするかのように着実に追い詰め、勝利していたことだろう。

錬金術に関してもそれほど造詣が深いわけではないようにも思うし、あの場にいる必要が無いようにも思うのだけ……………?

そんなことを聞いてみると、ルリアさんはどこか困ったような表情をして見せた。

「それには少し特殊な事情があつて……グランと私は、あまり遠くに離れられないんです」

「……物理的に、ですか？」

「物理的です。あんまり離れちゃうと、グランが死んじゃうので……」

「えっ」

なにその物騒な話は。

「そうですね——」

……そうして、ルリアさんは過去の自分の話を始めた。

星晶獣。この世界に存在する、人間を遥かに超えた自然現象の化身、のような存在だ。

彼らは時に災害や、ないしは神とも目され、時に崇拜され、時に畏怖される。また時にはその力を利用され、人間の道具に墮することもあるという存在だ。

普段は星晶と呼ばれる宝石に封印され——あるいは休眠しているのだが、ルリアさんはこの星晶を通じて星晶獣と心を交わし、力を借りることができるといふ能力の持ち主なのだという。

それは、この世界に存在していた星の民と呼ばれる種族の持つ能力に近いとも言われているが……詳細は定かではない。

ともあれ、そんなルリアさんの持つ力に目を付けた者たちがいる。それが、エルステ帝国と呼ばれる巨大国家……その軍部の人間たちだ。星晶を操る力を兵器転用しようともくろんでいた彼らは、ルリアさんを監禁・拘束し、その力の研究に日夜没頭していた。

しかし、その非人道的な実験を見かねたカタリナさんという女性が、ある日ルリアさんを連れて帝国軍から脱走。団長さんの故郷であ

るザンクティンゼルという島で彼と出会った。

……しかし、団長さんはルリアさんを守るためにその身を挺し、一度死んでしまったのだという。

命の恩人を見捨てることなんて、できるわけがない。そこでルリアさんが行ったのが——「命のリンク」だ。

互いの命を繋ぎ、疑似的に「一つの命」とすることで死者を蘇らせる……というものらしい。これが「技術」なのか、あるいは「異能」と呼ぶべきものなのか、それとも「生態」なのかは分からない。けれどもそれで団長さんは助かった。

しかし、それで全部解決とはいかない。

まず、命が繋がってしまったことで、ルリアさんか団長さんが死ぬばもう一方も死ぬという、文字通り一蓮托生の関係になる。ルリアさんから一定以上の距離が離れると、また死体に逆戻り……などなど、様々な問題を抱えた上で蘇ったのだ。ルリアさんはそんな状況に陥らせてしまったことを、深く後悔した。

「だから私たちは、『星の島』イスタルシアを目指しているんです」

「でもあれはおとぎ話じゃ……？」

「いいえ、グランのお父さんが、イスタルシアを見つけて……自分はイスタルシアにいる、お前も来い、つてグランに手紙を送ってきたんです！　そこでならきつと……！」

団長さんもちやんと蘇ることができるとか。

そういうことか、と一つ納得した。

星の島には星の民が住んでいると言われている。伝承によれば星の民は、ルリアさんの力と似た能力を持つともされる。そんな彼らに手を借りることができれば、仮に命のリンクを切ったとしても団長さんが生きていられるような方法が見つかるかもしれない。

じゃなくても、旅の中で完全に蘇生する方法が見つかる可能性もある。ともあれ、団長さん自身は父親と再会できるし、きつとこれが最良の案なのだろう。

錬金術の分野においては命のリンク、だなんて聞いたことは無いし……珍しく開祖様が手を出せない案件でもあるのか。

万能を謳う開祖様としては業腹だろう。だから一緒に行動してるのかもしれないけど。

それから、ザンクティンゼルを出た後の冒険の話聞いた。

空を駆け、島を歩き、人と出会い……そんな冒険譚。

団長さんのことを語るルリアさんの表情はずっと誇らしげで、見ているだけでも二人の信頼の強さが分かるほどだった。

「でも、だから少しだけ……さつき、ヒョーカさんのお話を聞いた時に、シンパシーを感じたのかもしれない」

「……確かに」

性別こそ違えど、自由を奪われ、人間としての扱いを受けず、道具として扱われていた……という過去があること。そしてそこから抜け出して、良い出会いを通じてかけがえのない大切な人たちと出会うことができた……というところでは同じだ。

「ボクはこっちだと死んだんですけどね」

「はわっ?! すみません!?!」

「冗談です。でも、お互い素敵な出会いに恵まれましたよね。——凜さんとも」

「あつ、そうだ！ リンさんたち、元気にしていますか?」

「はい。凜さんも、ルリアさんによく伝えておいてほしい、と」

「わあっ……! ふふふ!」

ルリアさんも、元の境遇が境遇なせいか、新しくできた友達というのを人一番大事にしているらしい。

叶うなら、ボクもその輪に——なんて思うけど、そこまで行くと高望み、かな。

「……あ、そうだ」

「？」

そっちは高望みだけど……こっちを聞くことくらいはいいか。

「ルリアさんにとっての『自由』って、何？」

ボクにとって、ルリアさんはある意味で先輩とも言うべき存在だ。まあ、なんというか、監禁されて自由になつて自由というものを知っている先輩、というかなり物騒な先輩だけだ。

ルリアさんは、困つたような顔をしている。まあそうだろう。人によつて解釈が違うものだから、教えても……というのがあるのかもしれない。

けどこれは、ボクにとっては死活問題だ。じつと目を見つめていると、ルリアさんは納得したように一度頷いた。

不意に、風が駆け抜ける。

団長さんたちが、騎空艇が見えてきた、と声を発した。

そして——島の岬、その縁が見えてくる。

その時、ルリアさんはウロボロスの背から降り、岬を背にボクへこう告げた。

「——グランや、カタリナや、ビイさん、みんなと一緒にこの空で旅をすることが、私にとっての『自由』ですっ！」

ふと、ルリアさんの後を追うように、ボクの身体が勝手に動いた。ただひたすらに、前へ進む。

大丈夫なのか、と問いかけてくる開祖様や団長さんの言葉も、今は耳に入ってこなかった。

——風を、感じてみたい。

そうだ。かつてボクはそう思っていたことがある。
屋敷の外に出たことが無かった。だから、当然そんなものは知らなかった。

——空を、見てみたい。

だからこそ、空を見たことも無かった。

窓越しに見るその色は煤にまみれてくすんでいて、本当の色を知ることが一度も無かった。

見たい。知りたい。

そうだ、ボクの「最初」は、そこだ。

いつからか、忘れていた。生まれ変わったという衝撃、親に捨てられた驚愕、そして施設を守ろうとただひたすら頑張っているうち……最初の思いを、忘れてしまっていた。

……もしかすると、イヴさんの言っていたのはこういうことなのか、と思う。

うん。そうかもしれない。

だからこそ——目の前に広がる雄大な蒼に、ボクは自然と心囚われていた。

目の前に広がる、抜けるような青空。

遮るものも無く、阻むものも無く……ただ蒼い空だけが、そこには在る。

かちり、と歯車がかみ合うような音が聞こえたような気がした。

求めていたのはこれだと、欲していたのはこれだと、ボクにとつての自由の象徴とは、コレなんだと……心が訴えかけているような。

けれども、そうかと思えば途端に腑に落ちる。ボクは生前、一度でいいから、何物にも遮られることの無い青い空を見てみたかった。

┌

そうだ。

そうだ、これが——空。

「ひよ、ヒョーカさん？」

「……え、あ、は、はい？」

「な、何か、悲しいことでもあったんですか？」

「何がですか……？」

「その……涙が」

「あ……あ、と、す、すみません、そういうのじゃなくって」

うん、違う。違うんだ。

追いかけてきた開祖様たちも、怪訝な顔でこちらを見てくる。けれど悲しいんじゃない、ただ——絶対に見られるはずのないものを、こうして見ることができたのが、嬉しくて、ひどく心動かされて……。

「……そういえば、今までちゃんと空を見たこと無かったなって思ってたんです。それで……」

「マジかお前」

「マジですよ」

開祖様の顔が曇った。

いや、こっちの世界じゃ別に珍しいことでもないような……って思ってたけど、そうでもない？

あの……ほら。生贄とか、死病とか……文献を軽く漁るだけでもかなりの量出てくるし、そうだとばかり思ってたんだけど。

もしかして賢者の石作るのもあれがポピュラーな方法ってわけでもない？

うわ……なんだかすごい恥かいた気分。先に言ってくださいよ開祖様。

「ああそうだ……そういうことだったわ……うわ……確かこいつあつちでも孤児とかになってやがる……」

「孤児じゃなくなつて捨て子ですよ」

「冷静に指摘しなくていいよお！」

でもその違いは割と重要と言えば重要だ。親に愛情があつたか無かつたかという違いがあるんだから。

まあ、どっちの世界でも似たようなものだったと思えばそんなもんだと割り切ることもできる。それに、あっちだと実質的に自由そのものだ。虐待を受けたりするよりはよっぽどいいと思う。

「……ありがとうございます、ルリアさん。色々——うん。色々、吹っ切れました」

「い、いいえ。私は何も……普通のことを答えただけですよ？」

「その『普通のこと』が、ボク、ずっと分からなかつたんです」

同じような境遇に立って、同じような経験をして——そういうルリアさんだからこそ、強いシンパシーが得られたんだろう。

多分……ボク一人じゃあ今もなお、何も分からなかつたし気付けもしなかつたと思う。

あの場所に来て、団長さんや開祖様と出会って、こうしてルリアさんとお話をして……そして、あの屋敷から近いこの場所で、この眼で空を見ることができたからこそ、ボクは自分にとっての「自由」を知ることができた。

ボクは、笑顔で皆さんに向き直った。

めっちゃ沈んでいた。

何故だ。

「お前……サラかよお……」

「どなたですか？」

「サブル島つてところに住んでた巫女の子で、星晶獣を鎮める儀式のために生贄にされかけてた子……」

「酷い話ですね……」

世の中は残酷だ。平気でそんなむごいことがまかり通る。

でもされ「かけてた」ってことは、助かったんだらうか。こうして話してくれるってことは、きつと団長さんたちが助けたんだらう。話の流れから察するに、その後は団長さんたちの騎空団で暮らしているのかもしれない。だとしたら喜ばしい話だ。

……つまり彼女と一緒に、悪い環境から抜け出せた繋がりがりって話なのかな？

「いや、他人事のように言ってるなよ」

「？」

「わぁお」

……なんだか急激に空気が弛緩して来た気がする。

いや、実際弛緩して来てるんだらう。原因は分からないけど。多分ボクだ。全員が揃って「なにいつてだこいつ」みたいな顔してるし……。

「……すみません、お時間取らせました。騎空艇の方に向かいますよ」

「あ、ああ……」

そうして、改めて騎空艇の方へと向かって歩き出す。先程とは異なり、ボクの足取りはもう少し軽やかだ。

対照的に、開祖様や団長さんたちの足取りはやや重い。……そこまですぐのこと気にしなくなっていたいいのに。

……いや、もしかするともつと別の要因があるのかもしれない。この先にあのぴにや壊獣がいるとか。

開けた場所だからこそ警戒を怠らないということか。流石、本職の騎空士は違うなあ。

「見えてきたよ。あれだ」

「……あ。あれですか！」

「う、うん。あれが僕らの騎空艇——グランサイファーだ」

そう言つて団長さんが指し示したのは、全長200m前後の騎空艇。

近づけば近づくほどに理解できるその巨大さに、思わず圧倒される。雄大なという名が示す通りの圧倒的な存在感。何か、ほんの僅かに覚えた違和感は……星の力、というやつだろうか。魔力でもない、錬金術に関わるものでもない……となると、多分、そうなのだろう。

「よお、グラン！ デートは楽しかったか？」

そんなことを考察していると、グランサイファーから、軽く顎髭をたくわえた男性が降りてくる。

口ぶりはやや軽薄そうに見えるけど、その物腰はどちらかと言うと、弟分を兄貴分がからかっている……というようでもある。

「そういうのじゃないよ、ラカム。ちゃんとした依頼だつて」

「ははっ、分かつてるよ。それで？ 一人知らねえ顔が混じってるが」

「依頼先で出会ったんだ。困ってるみたいだったから」

「白河水菓と申します。申し訳ありませんが、少しの間お世話になります」

「へえ……よろしくな、お嬢ちゃん。俺はラカムの操舵士だ」

「操舵士……！」

団長、騎空艇、それに操舵士と来た。本格的な騎空団のそれだ。開祖様やクラリスさんが所属していることもあるし、かなり大きな団なんだろう。

なんだか興奮してきた。物語でしか見たことの無い存在が、今日の

前にいる……！

「……なあグラン。このお嬢ちゃん、随分興奮してるみたいだが」

「初めて見るので！」

「そ、そうかあ？」

「ちよつと事情があるんだ。前みたいな。ほら、リンさんたちのこと、覚えてる？」

「ああ。あー……そういう事情か」

「だいたい「凛さんのこと」で伝わるあたり、もうこの人たちにとっては慣れっこなのだろう。」

「異世界人が慣れっこって何なんだと思うけれども、そういうものだと思うことにする。ボク自身も割と奇怪な存在だし。」

「の、割にやあ……何だ。ルリアに似てねえか？」

「そうかな？」

「そうですか？」

「そうです？」

「そうかあ？」

「四人でいっぺんに言い出すなお前ら」

いや、でも……似ては、いないと思うけど。

確かに髪色はそうだし、輪郭だつたり境遇だつたりはちよつと似てなくもないかもしれないけど……ボクの方が釣り目気味だし、身長も低い。あと髪型も違う。雰囲気だつて、やわらかで純真なルリアさんと比べると、ボクの方はやや棘があり、素っ気ないと言えるだろう。まあ、姉妹か何かと言うと、他の人は信じるかもしれないけれど。

でもその辺、団長さんはよく分かってくれているようだ。元々ルリアさんとよく心が通じ合っているからというのもあるだろう。

「……………」

ボクたちがそう考える一方、開祖様は何やら難しい表情で考えに耽っていた。

「どうやら、何か思うところがあるらしい。ルリアさんとボク……と、ビイさんを見比べて何やら考えごとをしているようだ。」

「ところで、団長さん。これからどこへ向かうんですか？」

「実は知り合いに壊獣の専門家がいるんだ。その人たちに資料を渡しに行くつもりなんだけど」

「もう何か分かってるかもしれないですね！」

「だといいんだけどね……」

「壊獣の専門家……場所はどこに？」

「——羅生門研究艇、だよ」

@ —— @

道中、補給や買い物、団員の方たちとの合流のために島に立ち寄りながら、空に行く。

羅生門研究艇まで、騎空艇で合計四日ほど。その間、ボクはグランサイファーに常駐しているという方たちとも交流を行っていた。

例えば、ある島の巫女さんをやっていたというディアンサさん。巫女……と言うよりも、ボクらの認識では、その在り方はどちらかと言うとアイドルのそれだけでも。

巫女だった当時は、ある星晶獣を鎮めるために歌と踊りを用いていたという話だ。年齢制限のため去年あたりから巫女を辞めたそうだけど、今はその巫女さんたちを統括する立場である祭司——ボクたちで言えばプロデューサーみたいなもの——になるため、見聞を広めようとしているのだとか。団長さんたちと一緒に旅をしているのも、そのためらしい。

例えば、先に話に出ていたサラさん。かつては辛い目に遭っていたようだけれど、団長さんに助け出されて以降はグランサイファーでみ

んなと一緒に暮らしているのだとか。

彼女にとって、姉のような存在とも言えるボレミアさんや、おじ的な存在のジンさんとも関係は良好で、今は性格もだいぶ明るくなったらしい。だからってわけじゃないけれど、彼女と話すときは特に話が弾んだ。

例えば、星晶獣であり、天司と呼ばれる特別な存在であるサンダルフォンさん。

その存在の特異性にも驚かされたけど、もっと驚かされたのは、彼と団長さんが経験したある戦いが、ボクがこちらの世界に来るきっかけになったのではないか——という話だった。

なんでも、ルリアさんがよく力を借りているある星晶獣——バハムートと、ある怪物との攻撃が激突したことで、時空に裂け目が生じた可能性があるのだとか。

どちらも規格外の存在であるからこそ、そのような現象が起きてしまった。かもしれないとのこと。この世界の「進化」を司り、人々の営みを見守る「天司長」という役目を持つサンダルフォンさんとしては、ボクのような異物はあまり歓迎できない存在だと言っていたけど……だからこそ、ボクらの帰還に関しては積極的に手伝う、とも言ってくれた。

言葉自体は刺々しいけれど、優しい人らしい。きつと、ちよつとばかり不器用なんだろう。

それから、アイドルを目指しているという、ハーヴィン族のリルルさん。曰く、本物のアイドルに出会ったのは何人目かだけど、どの人もキラキラしていて綺麗で可愛い、ヒョーカさんもアイドルだというなら私にとって憧れです……とのこと。

憧れられるというのはちよつと初めての経験だったから狼狽えてしまったけれど、それでも良い関係が築けたらいいなと思った。ダンスと歌もできる限り教えたし、これから先飛躍していつてくれたら嬉しいことだ。

それから——拳によって語り合うことを至上の目的とするフェザーさん。アイルさんとジェシカさんの姉弟や、元帝国兵だったとい

うアラさんとユーリさん。フォレストレンジャーのウエルダーさん。エルーンの中でも王家の血統を継ぐというユエルさんとソシエさん。ラーメンの道を究めんとするイツパツさんに、ある亡国の元王家ご一行、酔いどれシスターさんやトレジャーハンター、元アルビオンの領主だとか、妙にこちらを構つてくる……ちよつぴりあの姉を思い出させるような人、由里子^ルさん^ナの御同輩^先、ちよつぴりチャライように見えて真面目で気が回って料理が美味しい三人組、果ては星晶獣軍団……など、などなど……。

……ちよつとこの騎空団、人多すぎない？

四日間程度ではみんなと交流できた、なんてことは口が裂けても言えそうにない。まだ会ったことのない人もいるし、すれ違っただけで会話はしてない、という人もいる。

そもそもボクはボクで、客人だからと言って甘えててよしとは思えない。団長さんに頼んで仕事を割り振ってもらっていたし、その間は開祖様やクラリスさんと一緒に部屋で過ごしていたから、出会っていない人も数多くいるだろう。それに多分グランサイファーに常駐していないだけで、外部にもつと団員がいるはずだ。

これだけの人数をどうやって管理しているのか、甚だ謎である。

まあ、そこに関しては団長さんの人望、ということにしておこう。どうも王族らしい人たちや元騎士団長、とかとか……人を纏めるのに適した人材は数多くいる。団長さんもその技能を学んでいるらしいし、そこを疑問に思っても仕方ない部分もあるし。

ともあれ、一度死んで以来の空の世界。少し動けば色々な発見があり、少し話せば様々なことを学ぶことができた。

これだけの大所帯をまとめ上げている団長に感謝だ。おかげで、ずっと昔から憧れていた騎空艇を目にすることができ、オマケに乗って旅をすることさえできたのだし。

ともあれ、楽しんでばかりもいられない。ボクにとって重要なのは、晶葉の行方を探ることだ。

停泊の度に情報収集に努めるものの、成果は上がらない。自然と焦燥に駆られるも、無情に時間は過ぎていく。

そして、四日が過ぎ――羅生門研究艇へ、到着する日が訪れた。

EX3：ピニヤコラタZ

——羅生門研究艇。

この空において有数の科学力を有する機関だ。壊獣への対処や対策も主にこの研究所が行っているらしく、ファータ・グランデ空域の中でも相当に重要な立ち位置にあると言っている。

また、他にもアンドロイドをはじめとする人型ロボット、パワーダスーツや有機テクノロジーに関して詳しいとのこと。最近はこの技術を基に医療機器などを開発しているとの噂もあり、全空で見ても非常に稀有な立ち位置にある研究所だと言えるだろう。

通常の数倍を誇る船体は、グランサイファー以上の積載可能量を誇る。本来この艇は地質調査のためのものだったという。いつからか機械技術の研究が主になったのだとか。

災害救助や救難救急と言った面でも非常に優れたノウハウを持っているらしく、ファータ・グランデ空域の救命救急最前線の現場と言っても過言ではないかもしれない。

ただそれはそれとして、研究艇の外観を目にしたボクの最初の感想は、「神にも悪魔にもなれる魔神がいそう」だった。

あんなところにプールがあるのが悪いと思う。

ともかく、この研究所は全空で見ても飛び抜けた科学技術を持った施設だ。

晶葉に見せたら、きっと喜んだだろうな……そんなことを思いながら、グランサイファーを降りて研究所の方へ向かう。

「フハハハハハハハハハ!! いいか、機械技術において最も重要なのは大きいことでも強いことでも速いことでもない! 利便性、そして汎用性だ!! 少し操作方法を学びさえすれば大人でも子供でも男でも女でもそしておじいちゃんでもおばあちゃんでも誰であろう

と構わず！ 問題無く同じように操作できることだ！ 確かに特定個人しか扱えないという要素はロマンだし私もそれを解しはするが、これだけの技術力があつてなおこれ『だけ』しか造らないというのはあまりに理不尽！ あまりに不合理！ んナンセンスだ！！ そしてだからこそこれを見るろ！ これが、これこそが！ この世紀の天才ロボ少女池袋晶葉の技術を存分に注いだ究極完全体！ 超鋼巨人・ゴツドギガンテス ^{ゼエエエー} Z (ノット羅生門研究艇変形版)！！ だ！（全長10m弱）！」

「うっはあく！ 超クレージー&ラブリー！ サイツコーだなあアキハ！」

「そうだろう、そうだろうとも！ この狂気のマアツドサイエンティストもとい天才ロボ少女たるこの私に不可能は無い！」

「その調子でボクの壊天刃ももつとラブリーにクレ〜ジ〜にしてくれよッ！」

「残念ながらその壊天刃は既に行き付くところまで行き付いていて私の手を加えるべきではない……だが安心しろ、ならば他のものを造つてしまえばいいのだ！」

「おおっ！」

「そうだな、片手に一本ずつ持って、炎と氷が噴き出すというような機構はどうだ！ 温度変化による強度の劣化と破断……果てはメドロアのようなことも……どうだハレゼナ！」

「イイねイイね最ツ高にクレ〜ジ〜！ じゃあ早速――あれエ？ 団長たちが帰ってきたみたいだあ！」

「団長？ 誰だ？ まあいいハレゼナの知己というのなら私も挨拶に向かうのが筋だ、ろ……う……」

……。
……。
……。
……。
……。いるじゃねーか晶葉。

「……というか余裕そうだなしかし。で、何だつて？ ゴツドギガンテス？ Z？ ガンダム気取りか。何やってんだアキハア!! つて叫び

たくすらある。

「というかマジで何やってんの？」

目と目が合ったその瞬間、自分の視線がやけに冷たくなっていったことが分かる。心配したんだからね！　とも、ずっと探してた、会いたかった！　なんて感動的な台詞も出てこない。何やってんだアキハア！　が一番適してるな。

ボクが心配したんだから晶葉も心配しててよ……なんて言うのは流石に理不尽極まりないか。でも思うよねそのくらい、思うことだつてあるよねこのくらい。

「団長さんすみません。探してた子が見つかりました」

「え、えー……お、おめでどう……？」

「ありがとうございます」

またかと言いたげな団長さんを置いて晶葉たちの方に向かって歩いていく。

多分、こんなことが前にもあったんだろう。志希さんの時だろうか。他の人の時だろうか。まあ何でもいいか。

あと嫌でも視界に入ってくるお台場のアレに匹敵する巨大ロボは一旦置いておく。

……ともかくだ。

「かなり心配したんだけど、随分馴染んでるみたいで」

「わ、悪かったな！　十日もいれば多少馴染みくらいするだろう！」

「……は？　十日？　五日とか四日じゃなくって？」

「十日だぞ？」

……うん？

あれ、もしかしてボクがこっちに来た時と時差が出てるのか？

異世界に移動するなんて異常事態が起きたんだから仕方ないかもしれないけど……何て面倒くさい。

けれど、そういうことならこの馴染みようも分からないではない。十日間もずっと心配し続けるのも疲れるだろうし。精神的に参ってしまうよりはまだマシといえればマシか。

「ボクがこつち来たの、四日前なんだけど」

「なにっ？ ……時間差でこちらに来ることになってしまったのか」

「……ごめん、だったら認識に差があつて当然だよね」

「いや、私も軽率だった」

……さて、じゃあお互いに謝つたから、この話はこれでお終いというこで。

ここから変に引きずつたつて空気が悪くなるだけだ。今は再会できたことを喜ぼう。

「何にしても無事でよかったよ。晶葉はどうしてここに？」

「私はこちらに来た時から何故かここにいたんだ。そこで……」

「ボクと会つたつてワケだぜエ〜！」

「で、意気投合してな。私のことも気にかけてくれたんだ」

「そうだったんですね。ありがとうございます。えつと……」

「ケケケツ。ボクはハレゼナ！ ヨロシクなく、ヒョーカ！」

「よろしく願います」

晶葉が既に彼女にボクのことを教えていたんだろう。すんなりと挨拶は済んだ。

ギパツと——いや、うん、他に適してそうな表現もあるだろうけど、ボク個人はそんな風に捉えられた——人懐こい感じの笑みを見せるハレゼナさんと、握手を交わす。

ドラフ特有の小さな手……だけど、キルデスソー壊天刃、だっけ？ あんな巨大な獲物を振り回しているだけあつて、節々に豆ができているようでもある。

それでも女の子らしい柔らかい感触には違いない。アイドル生活

始めたおかげでなんとなく分かるけど、これはよく手入れしている手だ。そういうところは女の子らしいと言えようか。

二人してロボに夢中になってるのは女の子らしいと言えるか微妙なところだけだ。

「氷菓はどこに行っていたんだ？」

「えーっと……位置関係的にはどこだっけ……確か、ポート・ブリーズ群島の近く」

あその後で本島の方に行ってみただけど、その賑わいに圧倒された。

商業が盛んということもあって、ポート・ブリーズは非常に人の往来が激しい。東京と比べると流石にアレだけど、それでもあの街は特に結構なものだ。

種族も職業も問わず様々な人が溢れかえり、商談や情報のやり取り、あるいは喧嘩、交渉……と言った、人間としての営みがあちこちで見られた。

また、あの島はティアマトという星晶獣を守護神として祀っているらしい。島民の方々はみんな心の中にティアマトへの敬意と、いつも優しい風をおこしてくれている感謝を持っている、という話もラカムさんから伺った。

と、不意にハレゼナさんが一つ手を打った。

「もしかして、団長たちの仕事中に会ったのかあ？」

「はい、そこで助けてもらったんです」

「ケヒヒツ、そうか！ 団長たち優しいだろ？」

「ええ。すごく、助かりました」

「ボクたちのあんぜんあんしんだからなっ！」

その笑顔からは、団長さんたちに対する強い信頼が見て取れる。

ホントこう……何だろ。人たらしだな、あの人……元々は敵だったっていう人もいるって話だし。

あと何だかやけにモテてる気もする。具体的に誰、っていうのは言い辛いけど……アンスリアさんって人はまあ、見れば分かるくらいには確実だろう。

「……でも、つてことは、アイツと会ったのかあ……？」

「……そうですね」

お互いに色々察した。

あのぴにや壊獣、どうやらかなり厄介な存在のようだ。

いや、理解してなかったわけじゃないんだけどさ。少なくとも、あの屋敷の壁を貫くような光線を撃ってくるような相手なのだし、普通の人では対応も難しいだろう。

団長さんたちの話では、自爆したり噛み付いて来たり……なんてヤツもいると聞く。前者はまあ理解できる。けど、後者は……噛み付きそれ自体が特徴になっているほどだ。よっぽど顎の力が強いのだろう。

「クレ〜ジ〜……だけどラブリーじゃない……オマケにヌメヌメでサイアクウ……」

「ヌメヌメしてるんですね……」

何だそれ気持ち悪っ！ あの時触らなくて良かった……!!

「オマケに武器の効きも悪い。本来の壊獣に通じるはずの武器もな……」

「と、いうことで、アキハと一緒にアイツらに通用するゴッドギガンテスの改良してたつてワケだあ〜！」

……うん、成程。だいたいわかった。それであの早口に繋がるのか。

いや十日でホイホイ改造しちゃうのもそれはそれでとんでもない

な改めて。

しかし、それはそれとしてだ。

「でも団長さん、すごい普通のことみたいに倒してたけど」「ケケケツ、団長ちよく強いからなあ!」

それ「強いから」で解決することなんだ……。

まあ確かに、「効きが悪い」としか言っていないし、つまりやろうと思えば倒せるってことだろうけど。

ごり押しでいいんだ、あれ……。

「でも、そういうことなら……これだけのものができたなら、倒しきるのも時間の問題じゃ?」

「それがな、10mを超すような巨大ぴにや壊獣が多数いるんだ」

「じゅう……って」

「しかもうじやうじやく……」

量産型ぴにや壊獣(10m超)とか何だその地獄絵図。

「ま、だからこいつを量産するために色々と手を貸しているわけだ」

「そうそう! アキハのおかげで色々捗るウ〜!」

うわあ。なんだかすごいことになっちゃったぞお。

下手したら晶葉のせいでの世界でスーパードロボットのな大戦が繰り広げられかねない気がする……。

……気にするまい。というか、気にしても仕方あるまい。そういうことにしておこう。

「さて、そういうことだから氷菓にも手伝いを……」

と——そんな時、不意に研究艇に警報が鳴り響いた。

「おおっと、話の途中だが……来やがったぜええ〜！」

遠くの空に、いくつかの小さな黒点が飛んでいるのが見える。

……いや、あれは——ぴにや壊獣だ。

いや、え？ いや待て。待て！ おいこら、待て！ 何で当然のよ
うに飛んでんだあいつら!?

全空の脅威って言うあたり、そうなくてもある意味当然と言えば当然
なのかもしれないけれども！ ……けれども！ ちよつと待て！

あの見た目で飛ぶ!? どうやって飛んでんだ!?

わ、分からない……もしかしてあんなナリで星晶獣なのか……!?

いや、待て。自爆……? 光線……? 爆発で飛び上がったか、背面
に向かってビームを放射して飛んでいく……? ありえなくはない
のか……? しかしそうなるかエネルギーの総量が……あるいは
バッテリー代わりに使い捨て……? 一度この眼で見ればメカニズ
ムは分かるか……?

「……………」

「ど、どうするハレゼナ！ 氷菓が混乱している！」

「二人は研究所の中に！ あいつらは通さねえぜえ……！」

「わ、分かった！」

だがそもそもレーザーとは光だ。光で飛べるのか？ 当然だが光
に質量は無い。いや、大気中のチリを燃焼することで……ダメだ、単
に燃えるだけ。となるとあれは何らかの粒子砲のようなもの……?
魔力を用いればあるいはとも思うが、あのぴにや顔のゲテモノが魔
法を扱うなんて思えない。というか思いたくない。けれど現実には直
視する必要がある……やはり一番有り得るのは爆発の衝撃で跳躍、と
いうか吹っ飛んできてる……。

「氷菓！ 今は考え事はいいから！」

「けど晶葉！ あんなのが空を飛んでる事実をどう認識すればいいのさ!?!」

「……異世界に来てるのだから細かいことを気にするな!!」

「……分かった!」

OK、そういうことにしておこう。異世界とは言うけど、一応この世界ボクの出身……みたいなものだし、理論も理屈も頭の中に入ってるんだけど……。世界と世界を隔てる壁を越えてきてると考えると、多少の理不尽くらいあつても当然だよな!

ボク、昨日サンダルフォンさんからボクらがこっちの世界に来ることになった理由と理屈聞いているけど。

もう一々このことを考えてると頭が割れそう——。

「アキハ!」

と、そんなことを考えていたせいだろうか。

ボクも晶葉もそいつが上から降ってくることに——ハレゼナさんの声が飛んでくるその瞬間まで気付くことができなかった。

3 m近くはあるであろう巨大な体躯。ムカデの如く伸びた下半身に……顎のように変容した頭頂部。

団長さんから聞かされていた、「ムカデ型」の壊獣……を基にしたであろう、びにや壊獣。

ヤツらがあからさまなほどに真正面からやってきた時点で何かおかしいと思うべきだった。あれは陽動——間違いない、こっちが本命だ。

研究施設の中に逃げ込もうとする人間……つまり、非戦闘員を確実に殺すために打った一手。人的被害を発生させるための……戦略的行動……!

「あ……」

がばりと開いたその顎が、先行する晶葉に向けられる。

——そして、ぶちりと頭の中で何かが切れるような音が聞こえたような音がした。

こいつは。

こいつは何をしようとしている？

いや——見れば分かる。晶葉を害しようとしているんだ。どうやって？ 殺そうとして？

……コイツが？

「……………」

「びっ!?!」

「んなっ!?!」

——その瞬間、壊獣の身体に無数の黒い剣が突き刺さった。

一切の身動きの取れないその肉体が、局地的に発生した空間の爆縮に巻き込まれ——弾かれて、遙か彼方へと吹き飛んでいく。

やってしまった。

完全に、やってしまった。

命までは、と思うけれど、怒りに身を任せてやれるだけやってしまったことは疑いようがない。宙に手を掲げている今のボクの姿を見れば、何をしたのか分からずとも「何か」したことは理解できるだろう。それを、今日の前で起きた現象と結びつけることは決して難しくない。

何か言いたげな晶葉が、腰を抜かしたままこちらを見上げる。その瞳からは強い困惑と——恐怖の色が、窺えた。

「……………」

助け起こそうとして差し出した手を引っ込める。

今のは、この世界に来たことで得た能力だとか、そういうものじゃ

ない。ボク自身があちらの世界にいた頃から持っていた——ずっと慣れ親しんでいた能力だ。

そうするしかなかったとはいえ、咄嗟にやってしまった。咄嗟に——できてしまった。

それはつまり、そういうことができるだけの知識と経験があると暗に示しているようなものだ。

こんなことができるだけの。こんな——容易に敵を打倒しうるだけの「力」を持っていると、示しているようなものだ。それは、あちらの世界で暮らしてきた人間にとっては異質なものに映るに違いない。

怖がられたとしても、嫌われたとしても、それは……仕方のないことだ。

「……………」

一瞬の静寂を裂くように、異変を解決するべくグランサイファーから団員の方たちが飛び出した。

それに伴って我に返った晶葉は——直後、引っ込めたボクの手を追いかけて握り締めた。

「え……」

「あ、あまり見くびるなよ、氷菓。命を救ってくれた親友を怖がったり拒絶したりするほど、私は薄情でも愚かでもない……!」

「あき、は……」

頼もしくも優しい言葉に、思わず目頭が熱くなる。

あまりに常識から外れた異質な人間は、本来、排斥されて然るべきものだ。オマケにボクはこのことをずっと隠していた。何を言われなくても、返す言葉なんて無かったはずだ。

けれど、そうはならず……あまつさえ、本当はちよつと怖いと思っているのを押し殺して、ボクのことを親友だなんて、言ってくれるな

んで。

思わず抱き着きそうになるのを、必死に押し殺す。

……この後あることを思うと、セクハラになりかねないことはできるだけやるべきじゃない。けど、うう、感情の行き場が……。

「おい何やってるんだ！ 百合の花咲かせてないでとつと中に入ってるー！」

「すみません開祖様！」

「開祖？」

と、怒声が飛んでくると共に改めてこの場が戦場になっていることに気付く。

ぴにや壊獣の群れへと向かって行く開祖様や団員の皆さん、団長さんを横目で見送りながら、ボクは晶葉を連れて施設内へと逃げ込んだ。

なお、戦闘自体は3分で終了した。

@ — @

戦闘が終わって少しして、ボクは開祖様とクラリスさんとを交えて晶葉にこれまでの経緯についてを説明していた。

同じ錬金術師、かつこちらの世界で生きてきた二人が——正確にはほぼ開祖様がだけど——説明してくれば、これ以上ない説得力になる。

あまりに荒唐無稽な事実を人に聞かせようという場合には、権威というものが必要だ。

「——ま、そんなわけだ」

説明の最中、晶葉は基本的には神妙な表情で——時折、個人的な質問を交えながら——静かに話を聞いてくれていた。

いつもみたいにな化したりはせず、しつかりと。

「ふむ、確かに前々から何かおかしいとは思っていたが、まさかこんなことだったとはな」

「ほう、怖がりもビビりもしねえんだなあ。そういうの嫌いじゃないよっ☆」

「わけのわからないことをしてるなと思ってたところにちゃんとした理屈がついただけだ。無意味に悪用するような人間でないこともよく知っているからな」

あ、わけのわからないこととは思ってたんすね。

「ちよーつと衝撃的な真実もあつたけど、そこは？」

「大したことでもあるまい。たかが前世だ。そも転生という理論から考えると、前世が男だの女だのというのは些細なことに過ぎる。というかそもそも前世がちゃんと人間という者がどれだけいるというのだ？ 例えばそのキミ」

「え、うち？」

「もしかしたらキミの前世はダンゴムシとかだったりするかもしれない」

「うえええ!?!」

「そしてそれと同じように私の前世はアメリカシロヒトリだったりするかもしれない」

「何だそりゃ」

「ミドリムシかもしれない」

晶葉のやつ、今の例えが適切じゃないと察して咄嗟に言い換えたな……。

「ともかく転生だの何だのなんてのは得てしてそんなものだ。もし友人の前世が羽虫やプランクトンだったとして、その程度で軽蔑するも

のじゃあないだろう」

「それもそつか☆」

それもそれでやや極端な話には違いないかもしれないけど、納得してくれるならそれもい——いやちよつと待て。晶葉のあの表情、明らかになんか企んでるといふか面白がつてるときのそれじゃないか？

い——いや、そうだ。絶対そうだ。これ後でネタにしようとか思ってる。絶対思ってる！

例えばそう、こつちの世界に一回来たつぽい志希さんにバラして——とかそういう方向性だ。間違いない……！

やめろよそういうの！ 短くとも一週間はネタにされ続けるパターンじゃないか!!

「まあそれはいい。それで、ヒョーカ？ 何か聞きたい事ってのは何だ？」

「あ、はい。少し気になって……壊獣というのは、組織だった行動や戦略的行動を用いるんですか？」

「あん？ んなわけ……いや、待てよ……」

「ししよー、デスロウがいた時はどう？」

「ああ、そういやそれがあったな……クツソ、ダイモンの時も似たようなもんか……？ まあ言いたいことは分かった。つまりヤツらにブレインがいる可能性があるっつーことだろ」

「もしかしたら……ですけど」

しかし、やっぱり壊獣はあくまで獣、そういうことをすることは無い——か。

組織的行動や戦術を駆使できない魔物などなら、ある程度までは「駆除」で済む。しかし、もし人間が害意を持って操っているとすれば……それは最早、戦争と言うしか無いだろう。

……けど操れるのかアレ……？ というか、命令を聞く知能があるのか……？

ぴにやこら太そのものならともかくとしても、あの壊獣が混ざった姿じゃちゃんとした知能があると思えないぞ……！」

「問題が二つあるな。まず命令者が何者か。もう一つは……」

「コイツらがそれ聞くだけの知能があるかって話だろお？　ならあるぜ」

「壊獣細胞っていうのがあってね、これのせいで色々あったんだけど……」

と、クラリスさんは以前の事件のことを話してくれた。

なんでも、この壊獣細胞というヤツのせいで団長さんたちが一時的に壊人——壊獣の姿でありながら、人間としての意識を残した存在——にされてしまったり、敵に操られてしまったり、という話だ。また、その話の中では命令を送受信するための機能を備えた壊獣細胞というものがあり、それを利用すればあるいは、という話だ。

……ただ、その細胞を破壊すれば、元の自我を取り戻す可能性があるという話でもある。となると、ピンチだったとはいえあのぴにや壊獣には酷いことをしてしまっただけかもしれない。

「けど、それが分かっててもさあ……もつと厄介になっちゃったよー！」

「……いえ、そうとは限らないと思います」

「フツ、まあ、確かにそうなるなあ？　おいクラリス、団長に言ってアルマイルにこのこと話してもらってこい。あいつなら何か策を立てられんだろ」

「そっか！　うん、わかった！」

「アキハはゴッドギガンテスの小型量産化だっけか？　そっちに注力した方がいいだろうな」

「うむ」

「ヒョーカ、お前はオレ様とヤツらの分析だ。まさかできないとは言わねえよなあ？」

「はい、大丈夫です開祖様！」

ボクの得意分野は解析と模倣と複製。それだけは他の誰にも負けないと自負している。

既に開祖様には伝えていたとはいえ、そのことを覚えていてくれるというのは……やっぱり、僅かでも自分のことを意識してくれているという証のようで、感激する。

「うおっ、またムズ痒い感じが……」

「大丈夫ですか開祖様、何か持つてきますか？」

「いや、別にいい……近い！」

「……そういえば高垣楓に対してもあんな感じだったな……ふむ、氷菓は憧れの相手には仔犬系……と」

「本当に大丈夫ですか！」

「近い!!」

お役立ちです！

@ ——— @

それから2、3日ほどは大きな進展のない日が続いた。

というのも、あのぴにや壊獣……それと本来言うところの壊獣、そしてぴにやこら太——こちらの世界で言う「緑色の生物」——のサンプルが無いと、いまいち動くことができないからだ。

壊獣の細胞組織に関してはこの研究艇に残っていたからいいとして、問題は他の二つだ。

まあ、ぴにや壊獣に関してはちよいちよい外で被害が出ているのだから、それを追って行けばすぐに見つかるけど……あんまり強烈な傷でもついているとサンプルとして適さないこともある。ちよつと注意してとは言っておいたけど、果たしてどこまで損傷を抑えて捕獲してくれることか。

ぴにやこら太に関しては、以前団長さんたちが会ったことがあると

「……分布図などが無いため、実質手探りでの搜索となる。」

「ともかくそんな事情もあってしばらくは待ちの一手だ。」

「とはいえ手持無沙汰にしているのもなんなので、手の空いた時間は晶葉たちと一緒にゴッドギガンテスの改良や量産計画に手を貸しているのだけど……。」

「しかし何故ロボットに変形させた騎空艇を更に変形させて砲塔にさせる必要が？」

「なんだアてめえ……？」

——晶葉、キレた！

「この日、羅生門研究艇の格納庫では、いつもよりやや剣呑な雰囲気での話し合いが行われていた。」

「理由自体はマヌケと言えばマヌケだけど……話してるボクらは真剣そのものだ。」

「そもそも『現実で人型ロボットを使って戦争など、まったくもってナンセンスだな！』なんてドヤ顔で言ってたの晶葉じゃないか」

「確かにそうだ、しかしだな……」

「作業用ならともかく戦闘用でこれは非現実的だしもつと効率良いのがあるでしょ」

「そこに魔導炉の概念が加わればまた違うだろう!? 常に一つの側面からばかりものごとを見ていては既成概念のブレイクスルーは起これない……それを分かるんだよ、氷菓！」

「いやそれ踏まえても三変形させる必要無いし、船首に砲口くっつけた方が戦略的にも戦術的にも有用じゃないの？ 単独でキャノンモード？ ブレイザーモード？ に変形させてもそれただの筒じゃん」

「扱える者が……」

「いないこともないが……」

「……いないこともないなら問題無いだろ！」

「ちなみにそれは何者でしょうか？」

「ダイモン博士っていう……ちよつと前まで敵だった」

「もうこの変形機構オミットしよう？」

「わからんやつだなッ!!」

「しつかりしろシロウーッ！」

この艇の責任者である羅生門博士——その義息であるところのシロウさんに対し、ちよいちよ言葉の刃の流れ弾が飛んでいつて的確にダメージを与えていくのは、一旦置いておく。

先日、あのぴにや壊獣の行動に、何か人間の意思が介在しているのでは、ということを経長さんたちへ伝えたのだけど、それによってこの団に所属している軍師——アルマイルさんが対応を開始。ぴにや壊獣たちにブレインがいるということ、調査のもと断定した。

彼曰く、「人間であれば自分の命を守るために戦力を割くはず」とのこと。その考えをもとに、強力な個体が徘徊する空域を調べてみたところ……という話らしい。このおかげで、文字通り敵の中核になる存在を特定できた。これを倒しさえすれば、ぴにや壊獣の殲滅も可能だろう。

もつとも、良い話ばかりじゃない。

不運だったのは、そいつが見つかった座標だ。開祖様やサンダルフォンさん曰く、ボクたちがあちらの世界に帰るためには、星読みや風読み、予知などの魔術的な計測を用いて割り出した、ある特定の座標に向かう必要があるとのこと。これを誤ると、別の世界に行くことになってしまうのだとか。

そして今回、ボクたちが帰るために必要な座標が……件くだんのぴにや壊獣、その中核的存在がいる空域だった……という話だ。

偶然にせよ必然にせよ、喜ばしい事態だとは到底言えないだろう。かと言って、帰るためには彼らから背を向けられない。戦力増強はそのために必要なプロセスだ。否応なしに、真剣になろうというものだった。

「10mどころか100mクラスがうじゃうじゃいるって話なのに、そんな趣味的なことを言われても……」

「いや、しかし志希がだな、いや違う。士気がだな」

「というかその程度の相手なら何とかなるヤツは割といるがな」

「そうなんですか、開祖様？」

思わず、耳を疑う。けれど開祖様が言うってことは事実なのだろう。

「おいおい、オレ様を誰だと思ってる？ 錬金術の開祖にして超

絶美少女天才錬金術師カリオストロ様だぜ？ あのくらい軽いモン

だつての！」

「流石です開祖様！」

「いつから氷菓は無双系深夜アニメのモブになったんだ……」

「それだけじゃねえぞ。団長にクラリス、あとサンダルフォンの野郎もなんとかすることが出来る。あとはメドウーサにゾーイにルリアに……ま、時間はかかるだろうがああ程度の連中を殲滅するなんざわけねえな」

「ははーん、そういうフラグだな？」

「いくら晶葉でも開祖様を侮辱するのは許さないぞ！」

「おい今度は三下の悪役みたくなってるぞ」

「落ち着けヒョーカ」

「は、はい」

「……うーむ、なんだかこう、しゅんと項垂れたイヌミミが幻視できる……」

一体晶葉が何を言ってるのかよく分からないが、開祖様の手を煩わせたとあつてはボク個人としては非常に落ち込む。

しかし、どうやら晶葉と開祖様……さっきの気兼ねない言葉を鑑みるに、どうも仲良くなったらしい。お互いに天才を自認するだけあり、なにかシンパシーでも覚えたのだろうか。今も何かひそひそ話を

している……。

「……おい、あいつ前からあんななのか？」

「……いや……流石にああまでは……いやしかし、尊敬する相手に対しては、だな……」

「……尊敬つて、そういうことかよ……うわあ、なんかムズ痒いわけだ……」

「……苦手なのか？」

「……いや、純粹な尊敬を向けてくるヤツがすぐエ珍しいし団にいねえ……」

話の内容は、よく聞こえない。聞いちゃってもマズいだろうし……うう、でもちよつと聞きたい……。

「なあヒョーカ……やつぱり今のままじゃダメか……？」

「うーん……」

こちらの顔色を窺ってくるハレゼナさん。そう言われると、現状のままでも特に問題はないのでは、という思いもある。

既にあのびにや壊獣たちを倒しきれただけの戦力は揃っているんだ。こうなると、少々趣味的でも大した差は無いかもしれない……。

「でもできれば万全を期したいというか……」

もうここまで来ると勘でしかないけど、何か嫌な予感がするんだよね……こう、横合いから殴りつけてくるみたいな衝撃を伴って、もつと強いやつが突然現れるとか……根拠らしい根拠は、まあ、無いんだけど。映画の観すぎかな。

「それなら、こういうのはどうだい？」

と、さっきのダメージから回復したらしいシロウさんが近くの図面を手に取ってこちらに見せてきた。

これは……量産型ゴツドギガンテスの図面、かな？

「アキハちゃんの引いた図面なんだが、かなりよくできてるんだ。何も無い時は羅生門研究艇の外付け増設装甲に変形するのさ！」

変形はするのか……。

「モジュールは量産型ギガンテスのままだから、居住スペースや余剰スペースがそのまま使えるんだ。だから倉庫や民間人を収容するための場所にもできるって寸法さ！」

「なるほど……」

「それに緊急時は変形して量産型ギガンテスを発進させることもできる！ アキハちゃんの改良のおかげで、量産型ロボミでも操縦できるはずだからね」

「ふむ……」

このサイズだと、羅生門研究艇にはチョバムアーマーみたいにしてくつつくようだ。

内部電源も備えているし、外付けのバッテリーとしての運用も可能。スラスタを用いて艇自体の速力も上げられ、緊急時は分離してタコ殴りに……か。

「なあなあヒョーカ、今のままでも大丈夫だろオク？」

「……そうですね、下手に弄るよりいいと思います」

そう言うと、ハレゼナさんとシロウさんは露骨にほっとしたように息をついた。

「何か緊張でも……？」

「いやあ、ヒョーカちゃんの口ぶりが、前に研究艇に来た軍人さんみたいだね。驚いたというか、つい威圧されてしまつて……」

「え……す、すみません。そういうつもりは……えつと。焦つてたら、ちよつとはあつたかも……」

「氷菓は無駄に生真面目なところがあるからな」

否定したいところだけど、否定……しづらいなあ。実際そんな感じに接しちやつたし。

ちよつとした居心地の悪さを感じ、別の整備作業に取り掛かるべく、別の机に近づく……と。

「あ、ヒョーカちゃん、そこにある機械は触らないでくれるかい？」

「あ、はい。何かあるんですか？」

「少し前にあつたスカイグランデ・ファイトに出場してた選手が身に付けてた装置があるんだ。身に着ければ武道の素人でも十天衆を驚かせるほどの身体能力を発揮できるんだけど、鍛えてない人が身に着けてしまうと、全身の筋肉が断裂しかねない」

「物騒な代物だな!? ……というかじゅつてんしゅう？ とは何なんだ？」

「ふぎけた戦闘力持つてる全空のやべー奴らだ」

そんなにヤベー人たちなのか。

ボクが聞いたことないつてことは、この十四、五年くらいで結成された人たちつてことかな。

しかし、開祖様がそんな認定出すほどの人たちつていったい……。

「ちなみにヒョーカがグランサイファーでちよいちよい話してたエツセルとソーンがそれだ」

「えつ」

……えつ。

……えっ、い、いや、そんなまさか。普通に話してる分には二人とも優しいお姉さんという感じで、ヤバいつて感じはまるで見られなかったんだけど……。

「ま、とにかく強いやつらなんだよ。そんなのを一瞬とはいえ驚かせたってんだからとんでもねえ代物ではあるな」

「でも、何故そんなものがここに？」

「医療方面への転用を目指して研究しているんだ。外部刺激で体を動かす装置だから、半身不随の人が動けるようになるかもしれない、つてね！」

「おお……」

相当な大発明だ。見ると、晶葉がちよつと悔しそうにしている。そんなに先を越されたのが悔しいか。

何にしても、これのおかげで今後の医療分野の発展が見込めるかもしれないというのは喜ばしいことではある。変に触らなくて良かった……と、少し安心する。

「おっと」

と、そんな折、近くの通話機が音を立てた。

艇内限定の電話らしい。こちらの世界では電子的な通信手段が確立されてないけど、閉鎖空間内ならある程度は融通がきくようだ。

まあ、羅生門研究艇という特殊な環境だからこそ取れる手段かもしれない。人工衛星を飛ばして……なんて技術は流石に無いだろうし、電話線を他の島に繋ぐのも非常に難しい。

……しかし、前に誰かが携帯電話のようなものを持っているのを見た気がしたんだけど……あれは流石に気のせいかな。

そんなことを考えているうちに、通話が終わった。

振り返ったシロウさんの表情からは、何か喜ばしいことが会ったことが見て取れる。

「どうしたんだ？」

「ああ、どうやらサンプルが届いたらしい。みんな、これで分析が進むぞー！」

「やっと来やがったか……」

——と、どうやら、やっとボクたちの方の仕事が始められるらしい。

さて、あのぴにや壊獣や緑色の怪生物を診て、一体どんなデータが得られるのか……。

……楽しみ、ではないな、うん……。

EX4: Never Ending Sky

この日、団長さんの指示のもと羅生門研究艇のモニタールームに、数名の団員が集められていた。

ボクと晶葉、開祖様やシロウさんといった技術分野の人材は当然として、団長さん、ルリアさん、ビイさんといった主要メンバー、それと他の団員への通達役に数名……といった構成だ。

下手すると百人を超える人数が在籍する騎空団。いくら報告連絡相談が大事だとは言っても、その全員に対して、適切な説明ができるとは言い難い。専門的な知識もばんばん出さないとイケないし……だいいち部屋も広くないし。

いわゆる伝言ゲームのようになってしまう可能性は否定できないが、それでも全員に通達するためには、噛み砕いて要点だけを皆さんに説明できる人をお願いするしかない……というのが実際のところだ。

「本日はお集まりいただきありがとうございます。僭越ながら、今回判明した事実について説明させていただきます。白河水菓です」

「いや知ってるぜえ？」

「ビイ、形式的なものだから」

「あ、あはは……すみませんヒョーカさん、続きをお願いします」

「はい。まず、こちらをご覧ください」

そうやって、三枚の画像をモニタに表示する。

一枚目は、ぴにやこら太の種類を映したものだ。通常のもの、黒と桃と金。それから……人魂と地蔵と仏像。

……一体何がどういうことなんだと言いたくなるが、実際いたと言うし資料も残っているのだから何とも言えない。一体何が何なんだ。

二枚目は、壊獣の種類を映したもの。タヌキ型とボール型、ムカデ型と、巨大タヌキ型……覇壊獣ゾゴラと呼ばれる巨大壊獣に、シロウ

さんに擬態したという壊人デスロウ。そのデスロウが周囲の壊獣の死骸と融合合体して生まれた覇壊大帝デスロウ……大門博士が変身した覇壊神ダイモンやそのダイモンが使役するメカゾゴラ、四天王……と。こっちはまあ、正統派と言えば正統派ではある。見た目だけ。中身はどうか知らない。

そして三枚目は、今回現れたぴにや壊獣だ。その姿は一見すると緑色のオーソドックスなぴにやこら太が、先に挙げた各種の壊獣——人型除く——に変貌してしまっているようにも見える。

「今回発生した壊獣の亜種は、基本的にはこの緑色の生物……便宜的にぴにやこら太、と呼称させていただきます。彼らが壊獣細胞を植え付けられることで壊獣化したものと思われれます」

「となると、前の事件の時みたいに受信側の細胞を破壊することができれば自我を取り戻す?」

「はい。元々このぴにやこら太は悪戯好きでやや迷惑な生物ではありますが、人間の言葉を理解して言うことを聞くだけの知能があるようです。余裕があれば助けてあげてください」

みんなが頷いたのを確認し、次の話に移る。

「ただ、ここからが少し問題です。今回の調査の結果、ぴにやこら太と壊獣に共通するものがあるということも、判明しています」

「共通するもの……ですか?」

「一つに、こちら……融合能力です」

「デスロウがやっていた……」

「はい。それと同じものを備えていると解釈しています。その能力を基に——この、人魂と地蔵、仏像という姿になったのではないかとボクは考えています」

「どういふこと!?!」

それはボクの方が聞きたい。でも、調べていけばいくほどそれ以外

に説明のしようがない……。

「まずこの人魂。一見三匹のぴにやこら太の人魂、のように見えますが、よく見れば炎の端々が連結しています」

「本当だ……」

「これは、強い力を得ようとしたぴにやこら太たちが自らの肉体を分解し、プラズマ化した上で連結……という工程を経て生まれたものなのではないかと考えています」

「うわあ」

「続いて地蔵。こちらは……実際に触ったわけではありませんが、相当硬質なもののようです。よって外敵から身を守るため、複数のぴにやこら太が寄り集まって外皮を硬質化させたものがこれ、という風に考えられます」

「氷菓、少しこじつけめいてないか」

「でもそうとしか言えないし……」

「……まあ、うむ……」

ぴにやこら太は不思議な生き物だ。壊獣も同じだけど、彼らに関してはもういつそ考えることが馬鹿らしくなるようなことを平然とやってのける。

推論してもしても答えが出ないどころか出した答えをそのまますり抜けていくような……そんな理不尽さがある生き物だ。果たしてどこまで現象に当てはめていいのか、今のボクには分からない。

「そしてこの仏像。目を遮るほどに巨大だったという話をお聞きしました」

「う、うん……巨大と言えば巨大だったよ」

「……デスロウと同じ融合能力で周囲の仲間と融合してこの形態になったとしたらいかがでしょう?」

「!!?」

「い、いや! でもその後で桃色の生物がその仏像を被っていたんだ

けど……！」

「融合を解除したことでその場に残った抜け殻、という解釈はいかがでしょうか。先程申し上げた地蔵の外皮、そういった類のものがその場に残っていたというような……」

「う、うおお……頭が痛くなってきた」

頭が痛いのは正直言えばボクも同じなので、団長さんも耐えてほしい。他の皆さんもかなり苦虫を噛み潰したような表情をしている。その表情をしたいのはボクも同じだが、説明するためにはそういうわけにもいかない。

本当にさあ……ぴにやこら太って一体何なんだよ……。

とりあえず、次の話に移ろう。

「そして——このピンクのぴにやこら太。覚えておいででしょうか」

「おお……」

「わあ」

「お、覚えてるよ……」

この反応を鑑みるに、相当なインパクトを皆さんに叩き込んでくれたらしい。

当たり前だ。人間に次々と感染するウイルスにより、ぴにやビ——ぴにやこら太ゾンビとも呼ぶべき凶悪な存在を生み出した張本人（張本ぴにや？）とも呼ぶべき存在なのだから。

ぴにやビの恐ろしいところは、死者じゃなく生者に感染していくということだ。正常な意思を奪い、その知能指数及び思考と顔をぴにやこら太にどんどん近づけていく……恐ろしいことに、美波さんがこれに感染してしまったという話も団長さんから聞いた。

ピンクのぴにやこら太本人にその意図は無かったというが、ぴにやビの存在は色々と脅威だ。陣営に一人ぴにやビを出せば、戦闘員非戦闘員関係なく感染し、どんどんぴにやビを増やしていく。志希さんが

特效薬である「AMI^アBO^ミ」を調薬していなければ今頃どうなっていたことか……。

話を戻そう。

「この時、ピンクのぴにゃこら太が放っていたという人間をぴにゃビにする桃色の霧^{もや}……調査の結果、怪獣細胞と同質のものだと判明しました」

「まさか!!」

「嘘だろオ!?!」

「い、いや……確かにそう言われてみれば……人を操り、外見や存在を自分たちに近づけて……」

痛くなってきたを通り越してとうとうこの話を聞いている人たちの間で本格的な頭痛が頻発している。

ボクだってもう痛い。しかし、この話の中でもう何か気付いたらしい人が結構いるらしい。いつそ気付きたくなかったというような表情すらしてしまっている。

「つまり何が言いたいんだ?」

「はい——」

頭を抱えたままラカムさんが問いかけてきた。それに応じるように、ボクは今日、最も言いたかったことを言い放った。

「ぴにゃこら太と壊獣は……同種の生物だったんだよ!!」

「!!」
「!!」
「!!」

「いったいこれはどういうことだ氷菓さん!!」

「ではその辺りを詳しく説明させていただきます」

「あ、はい」

総立ちしていた皆さんがそのまま席に座った。

ノリ良いなこの人たち。

「この二種の塩基配列が酷似していました。もつとも、正確なことを言えば、共通の祖先を持つ存在であると推測しますが……生物学的な見地になるので今はそれは置いておきます」

例えばヒトと猿は共通の祖先を持っているが、それと似たようなことが言える。もつとも、学的には重要なことであっても今は置いておく。そつちは学者が考えることだ。

優先するべきは、それを知ることでは何が得られたか、という話だ。

「同時にボクは、ピンクのぴにゃこら太がああのピンクの靄を発生させることができたのは、一種の先祖返りであると考察します。それによつて壊獣細胞を発生する術を得た、しかし制御する術を持たなかった……」

結果、それで大迷惑をかけてしまったわけだが——それを解決したものがある。

「ならば、同種の侵蝕性壊獣細胞は『AMIIBO』によつて抑制できる……!」

「……!」

「それは本当か氷菓!」

「事実、先日送っていただいたサンプルをもとにこの効果は実証しています。実際に、命令の受信細胞の機能停止を確認しました。ただの壊獣であれば殲滅する他ありませんが、AMIIBOを使うことでぴにゃ壊獣は自我を取り戻させることが可能です。問題は量産ですが、これは開祖様とボクで既に済ませています」

「すごいですー!」

「突入に際してはこれで充分な量があると思われます。あとは正直なところ、皆さん次第となる部分が大いのですが……」

「いや、ここからは僕たちの仕事だ。戦うのは任せてほしい」
「……お願いします」

適材適所、ということだろう。実に頼もしい言葉だ。
ボクにとつてみれば戦闘なんて殆ど経験の無いことだし、下手に手を出しても邪魔になってしまうだけだろう。

「万が一の時のために、AMIBOは服用しておいてください。もしものことがあるといけませんので……」

「OKだ。まあ、お嬢ちゃんたちはゆっくり見てな」

見たところ、ラカムさんは余裕^{しやくしゃく}々なようだ。

これまでも普通に戦っていた相手だったからだろう。なんだか逆に不安を覚えてしまうが、騎空士ですらないボクの不安なんていうのは、一考に値するようなものでもないだろう。

今はボクにできることを尽くすだけだ。

「突入作戦に際してはエリクシールを用意できます」

「ああ、ありが——『でき』ます?」

「はい。その場で作るとなると劣化複製品が精々ですので効果は半減^{ハーフ}程度ですが」

「ぐ、グラン? どうしたんですか? すごい顔になってますよ?」

「最低なことを考えてしまつてつい自己嫌悪を……」

……最低なことって何だろう? もしかして下ネタな作り方とも思われちゃったんだろうか。

団長さんも男性つてことかなあ。まあでも、そういうこと全く考えないよりは人間らしいか。ふふふ。

「と、ともかく分かったよ。突入作戦の開始は僕たちの方で指示させてもらうから」

「了解しました。よろしく願います、団長さん」

これでボクの今日一番の仕事は終わり。あとは作戦開始を待つだけだ。

ボクと晶葉は退室して、この後の皆さんの会議の結果を待つことになる。

しかしその後、議論も色々紛糾したようで、最終的な結論が出たのは夕方になってから。三日後に突入するということでまとまったらしい。

なんでも、もつと準備を——ひと月くらい——した方がいいという意見と、早いところボクたちを帰した方がいいという意見で対立。開祖様がマジギレして結論としては三日後、ということになったようだ。

あとで話を聞いてみたところ、「そのノー天気さ具合が妹を思い出す」「オレ様と同じくらいの能力を持った存在となると欲の皮突っ張った連中に狙われない理由が無い」「とつとと帰って今の家族に顔を見せてやれ」だそう。なんだか心配していただいてしまったってひどく申し訳なく思うのと同時に、とてもありがたい気持ちになった。

その日の晩、団長さんから頼まれていたことを終えたボクを、不意に晶葉が訪ねてきた。

その様子は、いつもより遥かに真剣だ。下手するとどこことなく思いつめた印象すら受ける表情だ。下手をすると、先日ボクが自分のことを話した時と同じか、それ以上に。

数分ほどの沈黙。いつもの晶葉ならこんなまどろっこしいことをせずに、単刀直入に言ってくると思うんだが……そう思っていると、意を決したように晶葉は一言、ボクに対してこう告げた。

「この世界に残る気は無いのか？」

「……は？」

寝耳に水——というか、完全に、予想だにしない発言だった。

ボクが？ 残る？ この世界に？

HHHHH寝言は寝てから言いなよ——なんて茶化してみようとするが、晶葉の表情はやっぱり真剣だ。

そうまでなると、いくらボクでもそれが本気の発言だということは分かる。ふざけることはせずに、しっかりとした表情で、ボクは晶葉に返した。

「無いよ」

「し、しかしだな。多分、この世界は最も氷菓の能力を活かせる世界だろう？」

「……晶葉さあ。もしかしてこないだあれだけきっぱりしたこと言っておいて、まだ気にしてたの？」

「うっ……いい、いやしかしだな！ 気にくらいするだろう！ 私がどう思っているかという以上に、大事なのは氷菓の意思だ。それに……言っていたじゃないか。キミにとっての自由の象徴とは、この世界の空なのだろう？ 騎空士になって自由に空を行くことが、夢だったんじゃないのか？」

確かにそれは、かつてのボクが心に抱いていたものだ。そこを否定はすまい。しかし——。

「今のボクはこの世界で生きてきた錬金術師じゃなくって、あつちの世界でずっと生きてきた、白河水菓って一人の人間なんだよ。あちら側で生きてきたボクには、白河水菓として歩んできた全部がある。それを捨ててここに残るのは、単に全部放り出してるだけでしかない」

それに。

「何より、みんなと離れたくない。志希さん止められる人もいないだろうし、プロデューサーや施設の人も心配するだろうし……クラリス

さんは泣くかも。おじじは多分キレるだろうし、プロジェクトのみんなに申し訳が立たないよ。晶葉とだって、今生の別れになるなんて……そんなの、嫌だ」

ボクにとつて一番大事なのは、多分そこだった。

友達と二度と会えなくなるなんて嫌だ。家族と二度と会えなくなるなんて嫌だ。それが正直なところだ。

「……この空は二度と見られんかもしれないぞ?」

「だから、ずっと記憶に焼き付けて思い出として持って行く」

二度と見られないかもしれない——けど、それでもいい。

空に貴賤は無い。あちらの世界の空はこちらよりも窮屈で色あせているように見えるかもしれないけれど、それでも、そこには特有の魅力がある。

だからこそボクは、空を感じられるものに強い魅力を感じた。その代表格が、ジェットコースターだったと言えるだろう。

……と、そこであることに気付いた。

「……もしかしてボク晶葉に嫌われた!?!」

「何でそうなる!?!」

「いや、だって、こっちの世界に残れってことは……」

「そんなわけないだろう!?! 仮にそうだったら私はもつと口汚く罵って私のことを嫌わせて——とするぞ!?!」

「……そ、それもそうか」

それもそうだ。合理的に考えるならそうした方が確実だ。

ちよつと悪い方に考えすぎたな……。

「ま、そういうことならいいんだ。邪魔をしてしまったな」

「別にいいよ。気になっても仕方ないし。おやすみ晶葉」

「ああ、おやすみ。あ、そうそう」

「？」

「三日後を楽しみにしているといいー！」

「……？ ……ちよ、待っ……!?!？」

「フツハハハハ、ハハハハハハ！」

と、呼び止める間もなく晶葉は帰っていった。

三日後。楽しみにしているといい……その言葉の意味するところはよくわからない、いや、分かりたくないが、何だか嫌な予感がする。いや、命の危険とかそういう予感じゃなくて、これ絶対晶葉が好き放題やらかすパターンだ！ ボク知ってるぞ!!

どういう方向性で来るかは分からないけど、絶対何か仕込んでる！

この世界の技術力がブレイクスルー起こす程度ならまだいいが、もし大事おおいごとになったらと思うと……ふ、不安だ……!!

どうかまつとうな方向性でありますように……!!

せめてあの空域一帯が無事ならいいんだけど……。

@ ————— @

そして、三日後。ついにその時が訪れた。

————— ぴにや壊獣の巣窟への突入作戦だ。

作戦内容はごく単純。ぴにや壊獣の接近と同時にAMIBOを空中に散布しながら羅生門研究艇とグランサイファーで巣窟となっている島に突撃——以上。あとは臨機応変に。

曰く、個々の戦力が高すぎていちいち指示を出しながら戦うチームプレーより、個々人の突出した戦闘能力と卓越した状況判断能力によつて結果的に生じるチームワークの方が強い、ということらしい。要は全盛期のイチロー9人で野球してると思えばいいのだろうか。ともあれ、そんな事情もあってか、戦端が開くと同時にもうほぼ勝ったも同然とすら言える状況にまで至っていた。

……やはり、ぴにや壊獣の殆どがその機能を停止していることが大

きな要因だろう。志希さんの発明あってこそこの展開とも言えるが、正直なところここまで上手くいくとは……。

そんな様子を、ボクたちは格納庫でお菓子片手にモニター越しに眺めていた。

戦闘に参加？ 無茶なことには言わないでほしい。晶葉は技術者だし、ボクはモヤシ以下だ。下手に外に出ようものなら死ぬ。

「……うむ、なんとも普通に終わりそうだな」

「うん……晶葉？ 面白くないなとか思ってる？」

「そんなこと思ってるわけないだろう」

「こっち見ろ」

「ちよつと思ってる」

あまりに平坦な展開……とも言えるが、いいのだ。平坦で。

このまま安全に倒して安全に全部終わるのが一番……。

「つと?！」

と、そんなことを思ったと同時に、急に艇が揺れる。

クソツ、やっぱりフラグか!! ちくしょう!

「くつ、何なんだ……!? 氷菓、A M I B O^{アミビーボ}は機能してるんじゃないかっ

たのか!？」

「A M I B O^{アミビーボ}! いや、機能はしてるはずなんだよ! まさかとは思
うけど……」

モニタに映った映像を拡大する——と、そこには100m以上にまで肥大化したぴにや壊獣の姿が映っていた。

どうやら周囲の同族と融合してあれだけの巨体に変貌したらしい。しかし、こうなると面倒だ……。

「……あれだけの巨体……どうも、内部に受信用の壊獣細胞を隠したらしいね。AMIBOが浸透しきれてない」

「くっ……面倒なことになったな」

「大きければ大きいほど薬の効きが悪いからね……ああなると直接叩き込むしかないかも」

傷口に塩、じゃないけど……粘膜と思しき部位から、内部まで染み渡らせるようにすれば比較的効きが良い、かな……？

いや、それよりはこうなつてくると多分倒した方があの人たちは早い。無理してこちらがやられたら元も子も無いんだ。

それよりも脅威なのは……あの巨体で、更にビームを吐いてくることだろう。あれだけの質量から吐き出すビームともなると、当然だけでも相当の威力になる。果たしてそれまで騎空艇は無事でいられるのか……。

「……悪い予感はこちらか……？」

「ん？ 何だ？ どうした？」

「ううん、ちよつとだけ——……ッ!？」

と。

不意にモニタに映り込んだ、一つの影。その存在が、ボクの目を奪う。

小さな島に座り込んだ、超巨大びにや壊獣……他と比べても明らかにほどに肥大化した肉体を持つそいつを、ボクの目は自然と解析してしまっていた。

全長、全高、材質、この状況下で現れたことの意味、そして……その中心から発せられている信号。

あいつがこの騒動の中心だと思ふと同時に、本能的に、マズい、と確信を抱いた。

あれがボクの「嫌な予感」の正体だ。下手をすると……団長さんたちは、アレを攻略できない。

「……晶葉、ごめん。ちよつと行つてくる……!」

「は? 行くつてどこへ……いや待て! それは触るなど言われた装置だろう!」

「説明してる時間が惜しい! グランサイファーがアレと接触するまで一分前後……!」

首筋に装置を装着すると、これで体が文字通り「思い通りに」動くという確信にも似た予感を得られた。同時に、格納庫の扉を錬成してこじ開ける。

流れ込む外気に逆らつて外に出て、再び扉を閉じる。そのまま空中の——大気を錬成。作り出した気流に乗つて、遙か遠方に座す超巨大ぴにや壊獣へと迫る。

筋肉の断裂する感覚で、体中に熱が生じる。しかし、止まるわけにはいかない。常に体の状態を一秒前に戻し続ける。

途中、団の人のぎよつとした顔が見えたり、どうもラカムさんが何らかの被害を受けたらしい「ラカムウウ!」という叫びも聞こえてきたが、今は気にしている余裕は無い。

目前に迫るその姿を捕らえたその瞬間、ボクは先程の、半ば無意識にやつてしまった解析とはまた異なる、本格的な解析を始める。

……やつぱりだ。下手な破壊力ではこいつには勝てない。こいつには——錬金術の技術が用いられている。

こいつは半ば、自己修復するナノマシンの集合体のようなものだ。ほんの端が欠けたとしても、それを上回る再生力で瞬時にそれを埋めていく。

対抗できるのは……いや、それよりも、その力の元を断つ方が早い。

「ヒョーカさん!」

「え? はあ!」

「何やってんの!」

「い、一体何をしているんだ!」

小型艇で接舷しようとしていた団長さんとルリアさん、クラリスさんとシロウさんの仰天した声が聞こえた。ちらと視線を向けて応じ、直後に超巨大びにや壊獣の腹部にぐく小さなトンネルを開いてその内部へと滑り込む。みんなの悲鳴が聞こえたが、今は置いておく。内部は、ひとことでは言えば……文字通りの内臓のよう、とも言えるだろうか。

壊獣細胞とびにやこら太の顔がそこら中に広が……キモッ!?

い、いや、気持ち悪いとか言ってる場合じゃない。ボクはボクにできることを果たすだけだ。

外からは、恐らくクラリスさんが存在崩壊を放つたらしい轟音が聞こえる。それも有効な手段だが、相手はあまりに巨大すぎる。全力で放つたとしても、半分削り切れるかどうか……。

更に速度を上げる。弾丸の如き勢いで中心部まで突っ込み――やがて、「それ」が安置してある空間へとたどり着いた。

……空間。そう呼ぶ他に無い、奇怪な場所だ。

生物の体内だというのに、石造りの……ともすると、牢獄のような造りの部屋。

そこは、かつてボクが見たことのある……。

「……屋敷の……」

……実験室。その中心部に、あるひと振りの刃物が見えた。

先端に宝石が埋め込まれているような……刃渡りのごく短いナイフ。そこに強力な力が込められていることは分かる。賢者の石……その翠化にほど近い程度のもの、だろうか？

こみ上げてくる吐き気を抑え込む。この状況で行動不能になるわけにはいかない。確かにこの部屋はボクにとってのトラウマだ。ちやうど、ボクが死んだ時の心臓の位置に突き立っているのもまた、何かの暗示のようにも思える。

けれど、だからどうした。そう思いながら、ボクはその柄に手をか

け――。

「やめなさい」

「ふんっ!!」

「ちよっ!?!」

――制止の声に応じることなく、思い切り引き抜いた。

と同時に、周囲の空間が歪む。目の前に現れたその姿も……。

「やあ、お母さん」

「貴女……いえ、二――」

「もうボクは貴女の人形じゃあない。その名前で語らないでくれないか」

母の、幻影。紛れもなくそれは、こちらの世界におけるボクの母の姿だった。

ボクが死ぬ直前よりもやや歳を取っただけのはずのその姿はかつてのそれよりも更に老けて見える。目は狂気に落ちくぼみ、頬はこけ、髪には白いものが混じる。

ああ――事情はだいたい読めた。多分、そういうことなんだろう。

あの後、母は多分ボクの身体から賢者の石の残骸を抽出したはずだ。多分、開祖様の言っていた通り……それは残滓と言うべきものしか残っていないかっただろうけど。

けれど、それで諦めきれなかった母はなんとかしてその残骸から力を得ようとした。やがて力を得ることには成功したが、それは誰かの犠牲を伴うものだっただろう。それ以外の方法なんて知らないだろうから。

父を殺し、使用人を殺し、やがて自分自身をも犠牲にし……賢者の石のための贄としながら、やがて翠化までにはたどり着いた。しかし、その頃には既に人の姿を失っていた。

多分、その頃には魔物として討伐依頼でも出されていて……それが今から五、六年前の話。

結果、ナイフにその執念が染みつくことになり、その後はその場に残されていたナイフを手にとった魔物だか人だかに取り付いて……この空のどこかにいたびにやこら太の能力に目を付け、その肉体を得るためにこうしてある種の「コア」になった。

……そんなような念が、このナイフから解^わ析^かてきた。

「いいえ、アナタは私の人ぎよ」

「いやそういう御託はいいから。ボクらが帰るのに邪魔なんだ。消えてくれ」

「い、嫌。嫌！ 待つ——！！」

手に握るナイフを砕き折る——その瞬間、母の幻影は跡形もなく消え去った。

さようなら、とは思わない。元から、もう会うはずもない人だ。

ボクのトラウマから構築された幻影だとする方が、よっぽど信憑性がある。

だから、残すとしたらこの一言だけを。

「ごまあみろ」

そのまま、ボクは外へ通じる穴を錬成した。

今度は……塞がる様子は無い。

勢いよく外に出ると、激怒した様子の開祖様が視界に入った。

……しまった。どうやら団長さんとは別にこちらに来ようとしていたらしい。何バカやってんだこのバカ、とか馬鹿弟子以上の大馬鹿、とか色んな罵声が聞こえてくる。本当に申し訳ない。

「ヒョーカさん!? 何してたんだ!?!」

「コアを破壊してきました。これでヤツは二度と再生しません」

「どうやっ……!? ヒョーカちゃん! その装置は……!」

「すみません、勝手にお借りしました。後で返します。けど今は!」

「っ、そ、そうだよ団長! アイツ倒せば他も元に戻るし、全部終わらせられるよ!」

「そ、そうだ! よし……!」

そうと決まった瞬間に、四人の身体から力が迸る。

その力は他と交わり干渉し合い、あるいは高め合って奔流と化す――。

「オリオンラダー・フォンス!」

「リミッター解除! 食らえ必殺! ハイパーメガトンキイイイツク!!」

「うちに壊せないものなんて無いっ! ジャガーノート・スフィアーツ!」

「始原の竜、闇の炎の子。汝の名は――バハムート!」

団長さんの手に持つ光の剣が揺らめくその刀身を無限に広げて呑み込んでいく。勢いよく飛び出したシロウさんの島をも砕くのではないかという威力の一撃が突き刺さり、クラリスさんの放つ存在崩壊の一撃が敵をその中心から消し飛ばした。

――アセンション!!

続いて発せられたその一声を契機に、ルリアさんの喚んだバハムートがその拘束具を引き千切る。

見る間に強烈な光のエネルギーが集約し――降り注いだ。

「やったか……!」

『氷菓のアホー! それはフラグだぞ!!』

「あっ」

いつの間にか近づいてきていたらしい羅生門研究艇から、晶葉の声

が発せられた。と同時に、超巨大壊獣の下半身が泡立ち、ぴにやこら太を融合から解き放って異形の姿へと転ずる。

覇壊獣ゾゴラ——いや、その姿は、本来のそれよりも更に大きい。元の質量がケタ違いだったのだから当然だ。そして、ヤツは攻撃を放ったこちらを敵と定めている。

「っ……………！」

「く、マズいつ……………！」

団長さんたちは…………ダメだ、あれだけの攻撃を放った直後で動くに動けない！

こうなると、今は逃げるしか……………!?

「フツ——」

「…………シロウさん……………!?!」

『シロウ君、どうやら我々の出番がやってきたようだな』

「ふふっ、そうですね博士。それに晶葉ちゃん」

『フフフハハハハハハ！ まったくもってその通り！ お膳立てにしろ…………まで整いすぎていると寒気すら覚えるほどだな！』

『晶葉君、冷房が強すぎるだけじゃないかね？』

『おっとそれもそうだすまない羅生門博士』

何漫才やってんだアキハア!!

「な、何をする気なんですか!?!」

「それは——こうだ！ 羅生門研究艇！ カムヒイイアアアツ!!」

「——説明しよう!!」

「かつて世を脅かした壊獣。その中でひとときわ強大だった覇壊獣・ゾゴラ——」

「シロウたちはゾゴラとの戦いを想定し決戦兵器を開発していたの

だった！」

「ギガント・オオオオン!!」

「これぞ羅生門研究艇、戦闘形態！」

「その名も超鋼巨人・ゴツドギガンテス!!」

……今の何!?

と、ともかく、シロウさんの掛け声と共に羅生門研究艇が変形し、その姿を鋼の巨人——超鋼巨人・ゴツドギガンテスへと変じさせる。だけど、これでなんとかなるのか……? あのゾゴラは、資料で観たかつての大門博士のそれよりも遥かに大きい。

確かに強力な力を持つてるし、強力な必殺技、「ハイパーギガトン・スマツシャー」を持っているけど……それが通じるのか……?」

『そして、博士!』

『うむ、晶葉君!』

『こんなこともあるのかと!!』』

あの二人ノリノリだな!

『新たに開発していたのだ。とくと御覧じろ! 量産型・ゴツドギガンテス! フォームチェンジ! グレエートフラーツシュ!』

「あきつ……晶葉!! 馬鹿! あの馬鹿!! 何やってんだ!!」
「ど、どうしたんだ氷菓さん!」

ゴツドギガンテスに変形した羅生門研究艇から更に分離した量産型ゴツドギガンテスが変形し、更にその姿をゴツドギガンテスが装着するための装備へと変形していく。

これ……あの馬鹿! 天才だけど馬鹿!! 大馬鹿! 超馬鹿!!

——あの量産型、最初っからグレート合体させるために造ってたな

あの馬鹿!!

『超・合・体！ 超天鋼巨人・グレート・ゴッドギガンテスツ!!』

「……あの時の不安はこれかツ!!」

「ヒョーカさん!? ヒョーカさん!? 何で地面を叩いてるんですか!?」

『うおおおおおお行くぞツ！ 超・電磁加速抜剣！ オール・ブレエーイク!!』

……そして、肩部にマウントした剣をレールガンの要領で加速して放った、凄まじい威力の一閃が超巨大ゾゴラを切り裂いた。

数瞬ほど経って——大爆発が巻き起こる。

あれほどの爆発で何故この小島が無事なのか、あとボクらも無事なのか。色々と聞きたいところだが多分聞いても無駄だろう。だいたいそんなもんだからだ。

悪は去った。それでいいのだ。

だが何だこの釈然としない感覚は。もうちよつと、こう……もつとちゃんと締まる結末は無いのかよ!!

@ —— @

更にそれから二日ほどして、全ての準備が整った。

今日は、ボクらが元の世界に戻る日だ。

例の決戦のことは……まあ、置いておこう。この件は解決した。それでいいじゃないか。

団長さんたちはシエロカルテさんという方からの依頼が解決してよし。ボクたちは帰ることができてよし。それでいいじゃないか。

もう手法とかそういう細かいこといちいち考えない方が健全だろう、きつと……。

「すみません、短い間でしたが、お世話になりました」

「ううん、こちらこそ。今回は助かったよ」

「フフフフ、この天才のおかげだな。な！」

「あ、うん」

「あ、はい」

「おいもつと良い反応を寄越せ」

実際晶葉の助力があったおかげで量産型ギガンテスを辺りに展開して余計なびにやこら太の犠牲が出なかったのはあるし、あの最後のアレも晶葉が無駄に凝ったグレート合体とかやらかしてなかったらどうにもこうにもならなかったかもしれない。

「おい漫才してないでとつととこつち来い」

「あ、すみません開祖様」

今回、元の世界に戻す方法は……言ってみれば力技だ。

クラリスさんの存在崩壊によつて空間そのものを砕いて、異世界——つまりボクらの世界に繋がる通路を開く。

その後、開祖様の錬金術とゾーイさんという星晶獣の方の能力を使って空間を調律、元の状態に戻して穴を塞ぐ。

これまでに何回か試行してみたが、こういう力技がなんだかんだ一番安定しているのだそうだ。

「最後の最後にとんでもねえ無茶苦茶をカマしていきやがったなお前は……」

「そ、その節は申し訳なく……」

「ふん、いいんだよ。アレが無きやあ面倒だったことには違いないからな」

「開祖様……」

「湿っぽい別れ方はだめだぞ☆ つーわけでこいつは餞別だ」

「……これ……ナイフ？」

これ……このナイフ、あの時のあのぴにや壊獣のコアじゃ……。
……いや、でも……あの時開祖様はいなかった……はず、だけど……。

「オレ様謹製の逸品だ。どう使うかはお前次第だな」

「あ、ありがとうございます！ 大切にします！」

「ほう？ 良かったじゃないか」

「うん！」

「今までで一番の笑顔、いいねっ☆ あ、ねえねえヒョーカちゃん、いっせーのーせーでこう、ねっ。最力ワツ☆」

「イエイツ☆」

「あははっ、いえーい！☆」

写真をぱしやりとして、ぱしん、とクラリスさんとハイタッチ。

多分……今後会うのはきつと途方もなく難しいことだ。二度と会うことは無いかもしれない。

けれど、こうして思い出は持って行ける。あの空の光景と同じように。

出会いと別れて、そういうものだと思う。

「それじゃあ……改めて、お別れだな」

「うん。皆さん、本当にありがとうございます」

「二人とも、元気で！」

「あちらに戻っても、忘れないでくださいね！」

「じゃあねー！」

「……達者でな、傍流の馬鹿弟子」

そうして言葉を交わして——空間が割れる。

「帰ろう、晶葉。ボクたちの世界に」

「……ああ、そうだな！」

今度は、絶対にはぐれたりしないように手をしっかりと握って。

——ボクたちは、空間の回廊へと一步を踏み出した。

@ —— @

「……帰ってきたな」

「帰ってきたね」

数秒もせずに、ボクたちは元の場所——局のスタジオに戻って来ていた。

あまりにあっけなく、あまりに何でも無かったかのように。

スマホを取り出してみると、時間は元の日付の……本来の数分後を指し示していた。

開祖様が言ってたっけ。確か、世界の修正力だとか何とか……できるだけその人の消失したその直後に戻して、齟齬を生じさせないようにしてる、とか。

まあ、何でもいい。

「ちゃんと氷菓だよな?」

「そういう晶葉こそ」

互いに頬をつねりあってみるも、夢じゃない。

……安心した。実はちよつと、今わの際に見る夢とかだったらどうしよう、って思ってたんだ。

「……夢じゃないよな、あれは」

「うん。間違いないよ」

その証拠にボクは今も衣装の上に外套を羽織った状態だし、その外套にはさつき貫ったばかりのナイフが隠れている。

スマホにはあの空の写真も、クラリスさんたちの写真も……全部が証拠として残っている。

……ナイフは日本の銃刀法的にちょっと問題があるし、できるだけすぐに隠しておこう。

「白河さーん、池袋さーん、スタジオ入りまだですかー！」

「あ、すみません！」

「すぐに向かう！」

ボクたちを呼ぶスタッフさんの声が聞こえた。それと同時に、あ、日常に戻ってきたんだな——という思いが湧く。

そうだ——戻ってきたんだ。こっちの世界に。

「後悔はしていないよな」

「まさか。晶葉こそ後悔してないよね？」

「それこそまさか、だ」

くっく、と、お互いにかみ殺した笑いを相手に向ける。

後悔なんて無い。今もあの空の思い出はボクの中にある。

それと同時に、あの空でボクがやるべきことは全部終わらせた。未練はあるが——だからこそ、後悔は無い。

「それじゃ、行こう！」

「ああ！」

再び、ボクたちはお互いに一步を踏み出す。

今度は——あの輝く舞台へと。

29：ヤマノボレ

初夏の陽光が、アスファルトを照り付けている。

熱を伴う強い日差し。外に出るのも億劫になる程度に、この季節の太陽は厳しい。

それでも、この梅雨時には珍しい晴天だ。湿気も、暑さも気にならなくなってしまうくらい——その蒼は、綺麗な色を放っている。

「そらきれい」

「おはようございまー……氷菓ちゃんが性的暴行を受けた被害者みたいになってるう!？」

「何があつたん!？」

その一方でボクの目は淀んでいた。

ただ無気力にソファに寝転び、全てを諦観したかのようにただただ虚空を見つめる。

「にやははー♪」

「あつ」

「あー……」

部屋に入ってきたさくらさんが驚愕に目を見開き、志希さんの笑い声を聞いて亜子さんと泉さんが全てを悟った。

つまりとこ志希さんの仕業である。あとはもう察してもらいたい。いや無理か。

「なあ、何があつたん……?」

「んー? えつとねー。女の子でも男の子と同じような興奮したりするのかなーって実験ー♪」

「わからないわ」

「瑞樹さんのお株奪うのやめようよお」

だがしかし、由々しきことに全て事実なのだ。

何でこんなことになったのか。一言で言えば晶葉のせいである。帰って来てからすぐ、晶葉によって志希さんに例の件の説明が行われ——結果、ボクの前世のことが志希さんにも知れることになってしまったのだ。

そしてご覧の有様である。

目の前でエロい格好されたり激しいスキンシップをしにきたり、場合によってはかなり際どいボディタッチをしてきたり……今のボクが女じゃなければ襲われてるところだろう。

というか下手したら同性でも襲われるぞ……。

「んふふふー、じゃあ次はちゃんとした女性的なコーフンってやつを〜♪」

「うおおおおおおお!!」

その瞬間、ボクは思いっきりソファから転がり降りてその下に転がり込んだ。

このままではマズい。主に貞操とか尊厳とかが！ なんだかすぐ手をわきわきさせてる！ メスにする気だ！

「ちよつとおヨメさんに行けなくなるかもしれないだけだから大丈夫〜♪」

「大丈夫な要素がどこにもないわ!!」

「あ、逆におヨメさんに行けるようになるのかな?」

「何言ってるん!?!」

つまり性別を女性であると自認しているなら女性らしくした方が今後生きるのにも将来的に結婚するにも都合がいいよ、という話である。

そしてそのついでに自分も楽しむ。乗ってきてても楽しむし乗って

こなくてももからかって楽しめる。完璧な布陣だ。ボクが被害に遭っているのでなければ。

「氷菓ちゃん、出てきてえー。わたしは何もしないよお」

「ほんとうかーほんとうにさくらさんなにもしないかー」

「本当だよお」

「ほんとうならおっぱいさわろうとしないはずです」

「しないよお!?!」

でもね。されるんだよ、何故か。

遠慮なしにわしわしわしわし。流石に痛い。

結局志希さんはどっちがしたいんだよ。どっちもか。どっちもだな。楽しければどっちでもいいパターンだ。

「でもね、氷菓ちゃんちょっと成長してるんだよ〜♪」

「嘘……!?!」

何でそこで未だかつてないほどの衝撃を受けるのか、これが分からない。
努力はしてたじゃないか、ボク。

「前まではあえて言う『すとん』だったのが『ぺたん』になるくらいには?」

「あんま変わってないやん……」

「身長とか体重は?」

「……3mm伸びた」

「誤差や……」

誤差とは何だ誤差とは。いつからか殆どと言っていいほど身長伸びなくなったのに、このひと月で3mmは快挙と言っていいほどなんだぞ。四捨五入すれば141cmになるんだぞ。この調子ならうま

くすれば高校に入る頃には150cm手前も夢じゃない……はずだ。それ以前にやれば錬金術で伸ばせるけど。ただ、こつちの方法はあんまりにも不自然だからやる気はない。今は自然に成長する時だ。

「じゃあ体重は？」

「……32kgまで増えたよ」

「おっ、増えたや……あれ……それでも低くない……？」

「いや4kg増えたから」

「待って。前30kgじゃなかった？」

「28kgまで落ちてたんだよ。そこから持ち直して32kg」

「軽^かつる……」

前後関係がやや複雑な感はあるけど、最終的にはそうなる。

しかしだ、ここまで持ち直すのにかなり苦労したのだからあまり言わないでほしいというのが個人的な本音だ。一か月ちよつとでこの成果、これならもう少し長く続ければきつと体型も持ち直せるはずだ。

「……でも少し気になるなあ」

「!?」

「亜子、そう言わないの」

「そう言ってるイズミンこそちよつとウズウズしとるやん」

「?!?!」

……こんなところで敵が二人増えた!? しかもよりによって泉さ
んだと!?

ふ、二人も屈してしまった……違うだろ泉さん! あなたそういう
キャラじゃないだろ!! そこで屈しニヤいでよ!! この裏切り
者オオオオオ!!

「こんな部屋にいられるか! ボクはレッスルームに戻らせてもら

う！」

「それ死亡フラグやで」

「ほら、年上は妹分の成長を確認する義務が」

「じゃあ二人も志希さんに確認されてよ」

「にやはは☆」

「うっ!？」

「うおっ!？」

よし注意が逸れた！ 今だ！

「秘儀・畳返し！」

「何やて!？」

「ええ……? ど、どういうことお……いない!？」

「嘘!？」

「このガサゴソ聞こえる音……それに畳返して……まさか、
エアダクト
空気供給管にーッ!？」

「に、忍者か何か……?？」

ふはははは、脱出成功！

亜子さんの推測の通り、今のボクはエアダクトに潜んでいる。ただし、忍者のそのように扉を仕込んでいたりという手法じゃなく、その場で穴を作って下に滑り落ちてもう一回塞いだけだけどな！

構造解析は既に済んでいる。この場に人がいないことは証明済み。というか業者でもなければエアダクトに入り込むような人はまずいないだろう。 勝ったッ！ 第一部完！

あとはこのままレッスルームに行けばいい。今日のレッスンはクラリスさん（シスター）とイヴさんとの合同。だったら流石の志希さんも自重……は無理だとしても、クラリスさんに注意されればそこまで強硬な手段には出ないはず！

さて。

結局のところ——とすべきかは分からないけど、あれからボクらの関係性は何一つ変わってない。

というかそうやすやすと変わるものでもないというか。変なことが起きればツッコむし、時と場合によっては自らボケることもあるし、必要が無ければ静かに過ごすし……で、前と特に変わったところはない。精々、ちよつとみんなに対して遠慮しなくなったくらいだろうか。……まあ、そのくらいしか無いし、そのくらいでいい。人間、急に変わることなんてそうそう無いのだし。

そもそも言えば、今のボクはボク自身の中にある定義の中では紛れもなく「自由」だ。自分で物事を判断して、自分のやりたいようにする。考えてみれば、ボクはこちらの世界ではずっとそうすることができた。自由な環境に身を置くことができていた——まあ稀に例外的に他人に行動を誘導されたり強制されたりというのもあるけど——わけだ。

強制的に、ということにしたって、辞める選択肢はあった。辞めるだけの理由が無かったのもあるけど、何よりボク自身がみんなでアイドルすることに強い魅力を感じているからこそ、辞めずに続けている——という事情の方が大きいか。

だから、無理に変わる必要が無い。だって、何のかんの言ったって、これまで生きてきた中で今が一番幸せなのだから。

あと、特筆するべきところは特にない。錬金術が使えることは……志希さんには話したけど、あれは基本的にボクたち三人……と、おじじ連中だけの秘密だ。

というかはつきり言って秘密にせざるを得ない。果たしてこの能力の存在だけでどれだけ厄介事が舞い込んでくることか。権力者に狙われ実験体となったりあるいは拘束されたり監禁されたり……どれもやられたところで三秒もあればどうにでもなるし、殺されたところで死にはしないけど、気分は良くないし今後ずっと逃亡生活を続けなきゃいけないかもしれない。何よりボクだけならまだしも周りに被害が出る可能性がある。それはもう、到底看過できることじゃない。

というわけで、使う使わないはともかく基本的には他言無用だ。

「……しかしなあ」

そうこうしている内に、新しい欲が出てきてしまったのは……もしかすると、あっちに行つたことの唯一の失敗かもしれない。

正直、今ちよつと開祖様やクラリスさん（最カワツ☆）と会いたいなあと思つてる。

遠くに離れた友達や知り合いにふとした拍子に会いたくなるあれだ。郷愁と言ひ換えてもいいかもしれない。

けど、まだ四日も五日も経つてないんだよな……ホント、ボクの心つてあんまり強くないんだな。

（……まあ、考えても仕方ないか）

とは言つてもおいそれと会えるものじゃない。方法はあるけど。あつちからもう一回こつちに戻るためにはそれなりの準備が必要になるし、迷惑もかかるだろう。

何度も言うようだけど、思い出があれば今はそれでいいのだ。

……思い出？

待てよ。何かちよつと引つ掛かるものが……ううん、あとちよつと……何だろう。奥歯に挟まって取れないようなこの感じ、何だっけ……。あのナイフについて何かこう……。

まあ、今はいいか。

そろそろ降りて更衣室に行つて着替えてこよう。時間も時間だし、レッスンも待つてるだろうし……。

「よっよっよ」

言いつつ、誰もいない更衣室に降り立つ。流石に何度も千佳ちゃんの時のような真似はしない。ボクだって成長しているのだ。ふふん。

「氷菓ちゃん！ お山登らせて!!」
「だめです」

まさかそういう方面で来るとは思ってたよボクは。
レッスン終了後の夕方、一人で更衣室に向かったところ、ボクはそこで待ち受けていたある人物の襲撃を受けていた。

即ち、346のやべーやつ筆頭こと女性の山々を等しく神々の山嶺と崇め奉るマウンテンソムリエ、通称・師匠こと棟方愛海むなかたあつみその人である。

死は結果だと言わんばかりの無謀さと無鉄砲さ、そしてもつと違う方向に活かすべきではないのかと感じるほどによく回る頭脳と口により、様々なお山に登頂したという実績を持つ麒麟児。拓海さんのお山に挑戦したところ、実際死にかけたとするほどには失敗も経験しているが、そのバイタリティと精神力は驚嘆そこにシビれるアコガれるウに値すると言っているらしいだろう。

「ええーッ!?!」
「だめです」

だめです。
いやマジやめてください。

「不許可です」
「どうしても?」
「どうしてもです」

ボクに対して愛らしい表情を見せてもそれほど意味が無いというのはリサーチ済みではないのだろう。

いや、だとしてもだ。

「だいたいやりがいが無いでしょう、ボクとか」

問題はそこだ。見た目からしてまず間違っている。ひとこと言えば絶壁、あえて一文字で言うなら「無」だぞ。いや今は「貧」でもいいか。経済的にも貧だけどな！ ハハッ！

自分で考えてて虚しくなってきたわ。

ともかくそんな事情もあるし、断ると言うよりもむしろ忠告という趣の方が近い。が――。

「あのね。大ききじやないんだよ」

い――言い切った……ッ!!

ごく真面目な表情で愛海さんはそう言い切って見せた。一点の曇りなき瞳だ。自分は何もやましいことはありませんよ、と、そんなことを訴えかけているようでもある……!

やましいことだらけな上に明らかに邪念しか存在していないが、多分きつとそこには崇高な目的があるんだろう。多分。哲学的な意味で。

「というわけで、氷菓山登らせてください!」

「はあ。まあ、どうぞ」

「えっ!? 本当に!? いいんだよね!」

「……はあ」

「やったあー!! うひひひい♪」

なんというか、真正面から頼みにきてるのに無碍にするのも本人に悪い。

目の前で落ち込まれるとそれはそれでボクとしても気にするし……どうせ「なんかちよつと成長したらしい」って噂を聞いて来ただ

けだろう。触ってみれば特に得られるものも無い虚無そのもの。すぐに諦めて去っていくはずだ。

「でも、見ての通りですよ？」

「いやいやいやいやいや、これはこれでいいよー♪ じゃあいっただつきまーす！」

と、瞬時に愛海さんの掌がボクの胸にひゅん、と突き出され――

「あいだっ」

「おぐっ」

「……………ごめん」

「……………っ、っっ」

……アバラがゴリツと音を立てた。

なんだってボクの身体はこんなどうでもいいところで軟弱さを発揮するんだ……………！

というか何なんだこの誰一人得をしない状況は。地獄か何かか。

「そ、それじゃあ改めてー！」

と、再び――今度はややゆっくり――胸に掌が触れる。

服の上から触れるだけなのだから、特に感触らしい感触は無い。正直ただくすぐったいだけだ。

愛海さんもその辺自分でよく分かっているのか、どこか釈然としなような表情をしている。

「直はダメかな？」

「ダメです」

女性同士だろうとセクハラで訴えることができるということはどう存じだろうか。

そこは流石にちよつと一線を引いて欲しい。

「ちえー。んー、でもこの感じ……一見ツンドラ気候のように凍り付いているようにも感じられるけど、よくよく感じ取ってみれば奥底に肥沃な大地を感じさせる……」

……どこから出てきた語彙なのだろう。

「芯は固くって、でも……花の茎かな……？ この感じ、もしや……ただ何も無いだけじゃない……これは……！」

すごい、何やらとんでもなく興奮して早口になっている。

わけがわからないので誰か何とかボクが分かるように言い換えてくれないだろうか。

やがて山登りを堪能し終わったのか愛海さんはどこかやり遂げた顔でボクに告げた。

「あたし……確信したよ。氷菓ちゃんはまだまだ伸びるって……！」

「はあ」

「縦に伸びるね！ 体形はスレンダーだろうけどお山も結構ナイスなくらいには育つはず！ 具体的にはCからDくらいに！」

「はあ」

「きつと楓さんとかのあさんみたいなミステリアス系美人になるはずだよー」

「ホントですか!!」

「うえっ!? うん、うん、いきなりすごい食いつき……」

当たり前だ。楓さんみたいに、と言われてボクが喜ばないわけがない。

勿論、のあさんみたいにミスティアス、と言われればそれも嬉しい。のあさんもかなり均整の取れた体形をしていたし、普段の立ち居振る舞いも涼やかで美麗だ。ああいう人たちみたいになれればカッコいいなあ、という思いもある。

「あたしの予測はもはや予言……何十人と登頂に成功してきたからこそ言えることがあるんだよ。うひひっ♪」

「凄まじい説得力」

「というわけで氷菓ちゃん、将来育ったら再登頂させてねっ♪」

「まあ、もし事実だったらすけど……」

「約束したよ約束だからね！」

な、なんだかすごい安請け合いをしてしまったように思えるけど……いや、流石にそれは……無い、よな？

女性の成長は早いって言うし、流石にもうこれ以上伸びるってことは……高校、入るくらいで止まる、よな……？

「はーまんぞくまんぞく☆ それじゃあ氷菓ちゃん、お礼に何か食べに行こっか！」

「え、いいんですか？」

「うんっ。だってお山に登らせてもらえばなしじゃあ悪いでしょ？」

だからお礼☆

「あ、ありがとうございます」

「敬語もいいよお。学年ひとつ違うくらいでしょっ。」

……と、そんなこんなで今日は愛海さんとも打ち解け合い、この後は346プロ近辺のスイーツバイキングに赴くのだった。

なお、後日この件が愛海さんのお目付け役も担当しているナース系アイドル、柳清良やなぎきよよしさんにバレてそれはこっぴどく叱られたらしい。

余罪も数件。どうやらスターライトプロジェクトの方に行ってみ

ては辻登山していたそうなの。

仲良くなつた身としてはやや複雑ではあるけれど、これはこれで仕方ないことでもあるような気もしないではない。

@ ——— @

その日の晩、ボクは自室に戻って自分自身に構造解析をかけていた。

理由は単純。愛海さんの言葉が正しいかどうかを証明するためだ。別に愛海さんにお山を登らせたいというわけではなく、純粹に単なる興味からだけど……まあ、何でもいいか。

ともあれ、今重要なのは、本当にこのまま育てば将来楓さんみたくなれるのかどうかという話だ。

「よいせ」

自分自身の胸元に手を当て錬成、だいたい20歳前後を目安として、解析した上で想定される肉体として再構築する。

——と。

「……うわ、マジだ」

鏡を見れば、確かに愛海さんの言った通りの外見の美女がそこにいた。

だいたい170手前くらいの身長に、すらつと伸びた手足。人形めいて均整の取れた体形……と、あと育つたお山。でもそれはそれとして、確かに育てばこうもなるかな、とは思わなくもない。

外国人の血が入っているせいもあるだろう。成程、ミステリアス美人。自分だと分かっているもなんだか落ち着かない。声も、成長に合わせてか心なしか低くなってる。

うわあ、なんだか自分じゃないみたいだ。これ、大学に入る頃には

こうなってるってことだよな？

でも何で今これが出てない……って、答えは分かり切ってるか。栄養不足だな。

たん、たん、と軽くステップを踏んでみると、今の状態でのスペースの高低が分かる。相変わらず体力は微妙なようだけど、瞬発的な筋力は相当ついているようだ。

「♪」

歌声自体は、それほど変わりないか。いや、でも、変わってる方が自然になるのかな？

何にしても歌い方を変える必要も無いだろうし、こうなると将来的な問題は出ないと思ってもいいか。

……いや、まあ、こうなったらお山に登られるだろうけど。必要経費だと思って諦める他無いか……。

「……あ、そうだ」

そうだ、そうだ。錬金術と構造解析で思い出した。開祖様に貰ったあのナイフ、日本人的には結局銃刀法はどうなんだと考えてしまつて、結局触れようにも触れられなかったんだ。

刃物だから扱いを間違えるとコトだし。しかし、折角開祖様に貰ったものだ。何に使うかは自由——と言われても、ちよつと畏れ多い。しかし、それでも何か気になることは気になるし——と思いつつ構造を解析する、と。

「ん？」

やっぱり何かおかしい。このナイフ、もしかしてただのナイフじゃないのでは……？

いや間違いなくただのナイフじゃない。この宝石を叩いた際に発

せられる振動周波数、それに材質……この感じ、まさか……！

その事実気付いた瞬間、ボクはナイフを錬成してその形を別のものに——スマホに近い形状の板に変化させた。

そこに秘められているのは強い魔力だ。ボクはそもそも魔力の存在しないこちらの世界で過ごしてきたから、錬金術においても魔力を交えた手法はそれほど得意じゃない。けれど開祖様が作ったこれなら……。

宝石に指で触れ、特定の周波数を発する。瞬間、その場の空間に小さな——本当に小さな、それこそ原子サイズと言ってもいいほどのひずみが生じた。

「……き、聞こえますか？」

……ボクの前想が正しいなら、きっと——これは、通信機の種類。

世界と世界とを限定的に繋ぎ、意思疎通を可能とするためのアイテムの一種だ。

そして、声が——届く。

『おう、聞こえてるぜえ。ようやく気付いたみたいだな——』

「開祖様！」

『誰だお前』

「えっ」

……えっ。

いや——え？

ちよつと待ってくれ。誰だ、つて、え。もしかしてボク忘れられて……？

『おい、ヒョーカはそんな声じゃねえだろ。誰だつて聞いてるんだ』
「あ、すみません」

……そういうことか！

さつき体を弄ったままだった。痛恨のミスだ。声がやや低くなっていたことを完全に忘れていた！

肉体を再錬成して元の身体に戻る。これであの身体とは数年後までお別れだ。

「少し体を弄っていて、声が変わっていました。申し訳ありません」

『あ？ あー、そうかよ。ま、人違いじゃなくて良かったぜ。数日ぶりだなあ、ヒョーカ？』

「はい、開祖様……！」

『お前は創造性に乏しい代わりに複製や模倣に長けてるからなあ。ちゃんと解析さえすりゃあ気付くとは見込んでたぜ。もつとも、半分以上くらい賭けだったが——ま、こうして話せてるってことは気付けたってことだな？』

「なんとか気付くことができました。ご慧眼、お見事です！」

『流石オレ様だろお？』

「流石です開祖様！」

確かに、正直言つてボク、開祖様に貰ったものだからってことで畏れ多く感じてしまつて、無意識的に解析することを封じていたフシはあった。

しかしながら、錬金術師は何事にかけても何でも知りたがる生き物だ。たとえそれがどんなに神聖なものであろうと、術理や構造を解き明かしてみないと気が済まないタチをしている。いずれボクが我慢できなくなつて解析するだろうということ想定していたことも含め、流石だという思いを抱いた。

『ま、そういうワケだから寂しくなつたら世界一カワイイオレ様の声でも聞くといいぜ。ついでにあの馬鹿弟子やルリア、サラなんかと話してもいいかもなあ』

「ありがとうございます！」

『ふん、そもそもコレはオレ様の実験の一環だ。ま、当然成功すると踏んではいたが……』

とは言うけどもこの技術、失敗したらただじゃ済まないはずだ。

何せ、手法としてはあの時と同じ——限定された範囲の空間を一度「開く」ことで世界と世界を繋いでいる、ということだからだ。

クラリスさん（ドツカーン☆）の存在崩壊よりも精密に、極めて微小な——電波のやり取りができる程度の穴を開き、会話が終わったら再び閉じる。ただ単に穴を開いただけじゃ全く違う世界に声が行ってしまう可能性もあるので、宝石を増幅器や発信機・受信機として用いてお互いの世界を示す標とする。

ボクらがこちらに戻るまでの間にこれだけのものを創り上げるなんて、すげえよ開祖様は……。

『この世界間通信、この技術が確立すりやあ二つの世界を行き来することも今後決して不可能じゃなくなるかもしれねえ。まずはその礎となれたことを感謝しとけよお?』

「はい、開祖様！」

『ハハハハハ！ 素直に尊敬されてると知ったらなんか楽しくなってきたなア!』

……もしかして前、ボクに尊敬されてるのがムズ痒いって言ったこと気にしてたんだろうか。

ちゃんと尊敬してるだけなのを知ってもらえている今は、そうでもないけど……どっちも嬉しい話ではあるけど。

『ま、何だ。ちよつとこつちが恋しくなったら、気軽にコイツを起動すりゃあいい。誰も団員がいなくてこたあねえだろ。誰かが応対してくれるはずだぜ』

「嬉しいです……本当にありがとうございます、開祖様！」

『ねーねーししよー、さつきから何話してんの?』

『あ? ああちようどいいなクラリス。ちよつとコイツに声飛ばしてみろ』

『? 何? えーつと、最カワツ☆』

『こんばんはクラリスさん』

『うわゝっヒョーカちゃん!? あれ!? 帰ったんじや!?』

『残念でしたね。トリックですよ』

『うっそー!?!』

『嘘ですちゃんと帰ってます』

……まさかの展開だけど、ボク個人としてはかなり嬉しい話だ。多分二度と会えないな、次会うとしたら時間も経ってるだろうし、開祖様や星晶獣のみんななくらいかな、なんて思ってたくらいだから、こうして話すことができるだけでとても嬉しい。

それに、ボクだけじゃない。凜さんや他の……一度あちらの世界に行つたことのある人たちも、仲良くなれた人たちともう一度話すことができるはずだ。

本当に——楽しみだ。

そんなことを思いながら、ボクはそれからずっと二人と——時にはそこに混ざつてきた人たちとの会話を楽しんだ。

——そして翌日。

『おい氷菓、その目の下のクマどうした……?』

『……寝不足で……』

『キミがか? いつになく珍しいな……何かあったのか?』

『うん、まあ、ちよつと』

案の定と言うべきか、寝不足である。

……うん。いや、ほら——こう。楽しすぎるのが良くない。うん。なんとなく、つい長電話をしてしまう人たちの気持ちが分かった今

日ごのごろだった。

30：臨海合宿スペシャル

——夏。

夏である。梅雨が明け（特に明けてない）、（暦上はきちんと）夏が訪れ、フェスの日も迫ってきたこの日。ボクたちスターライトプロジェクトのメンバーは、346プロの所有する合宿所にやってきていた。

海にほど近い、合宿所——と言うよりは、どちらかと言うと旅館に近い風情の豪華な宿だ。この日のために準備してきたのだということも相まって、正直言ってテンション上がりっぱなしである。ちよつと楽しみにしすぎじゃないかと晶葉に言われたけど、そりやもう楽しみだ。

みんな海。みんな合宿。みんなバーベキュー、カレー、焼きそば！ 友達と一緒にっていうだけでも気分が高揚するのに、そこに加えて初めての経験がたくさんだ。否応なしに期待は高まってくる。午前はみんなで交流を深め、午後は今度の全体曲のための集中レッスンという運びで数日ほどの日程になっている。

これから先、同じように海水浴に行ったりみんなでバーベキューしたりということはあるだろうけど、何もかもが初めてというのは今回が最初で最後だ。存分に楽しんで、思い出を作ろう——。

「ガバゴボボガボツ」

「また氷菓が溺れているぞーっ！」

「うおおおああッ!？」

——そう考えていたボクは、危うくみんなの思い出になる手前でなんとか救出されたのだった。

拜啓、開祖様。窒息って、かなり辛いんですね。

まあそっちはともかく。

今日ボクが溺れたのは、通算三回目だ。三回目ともなるとみんななんとなく対応が上手くなってきているのを感じられる。最初は全員

でわたわたししてたのに、今となっては役割分担を完璧にこなしている。浮き輪を投げ入れたり直接救出しに行ったりと、それぞれの動作も淀みなくなっているように感じられた。

みんな！ これだけ経験したんだからライフセーバーになれるぞ！（なれない）

「ま……まさか白河さんがこんなにカナヅチだったとは……」

「ホントにね。ボクもびつくりだ」

「他人事のように言っているがキミのことだからな!？」

あはは、とのんきな声を出すボクと対照的に、いつになく焦ったような表情で詰め寄る晶葉。いつもと態度が真逆で、なんとなく新鮮だ。

プロデューサーも顔を青くしているが、正直初めてのことだらけでテンション上がりまくってるから、頭の中Paパッションで溢れてたって仕方ないと思う。仕方がないはずだ。仕方がないよね？

みんなの顔見るとそうでもないらしい。

解せぬ。

「珍しいこともあるものねすね」

「うむ、普段体力がまるで無いくせに、運動神経だけは抜群だったはずなのにな……」

うん、自分で言うのもなんだけど、実際抜群なんだ。運動神経は。色んな人の色んな運動の動作をトレスできるから、やろうと思えばバク宙とかでもできると思う。

ただ、晶葉の言う通り体力は皆無どころか絶無ってくらい無いけど。

ともあれ、その辺も原因と言えば原因だが、実際はもう少し違うところに根本的な問題がある。

具体的には、体脂肪率だ。ボクは元々体重30kg。この時点でか

なりの低体重だったことは確かなのだけど、レッスンのおかげで更に体重は落ちて28kg。そして今は何とか持ち直して32kg。体重が増える間もレッスンや体力トレーニング、筋トレなんかも欠かさず行ってきたことで、体脂肪率は以前のものを維持したまま、筋肉量だけ増えるという結果になっている。

脂肪というのは言ってみれば油。水より軽い物質であって、人間にとってそれは「浮き」の役割を果たすものでもある。それが多くないということになれば……まあ沈むだろう。としてもがくような泳ぎ方になってしまい——10mや20mくらい進んだところで溺れる。水泳を生業にするような人でも、体脂肪率は10%や13%あたりを維持しているとも聞く。体脂肪率を落とすと泳ぐのには向いていないという証左と言えよう。

体脂肪率の低い人の泳ぎ方、みたいな映像資料も見えないし。結局のところ、今回ボクが溺れたのはある意味必然と言えた。

……早急に体重を標準にまで押し上げないとなあ。

でも、その前に。

「もう一回行ってくる」

「待て待て待て!!」

「止めないでよ晶葉! もう少しで何か掴める気がするんだ……ッ!」

「多分その掴みかけたもの死神の肩とかそういうものだろうからよせ! 助手、氷菓を止めろーっ! 七海ーッ! 浮き輪持ってこーい!」

くっ! 折角の機会なんだ! こう、いつもなら大抵のことは解析と模倣のコンボでなんとかなってるボクとしては、試行錯誤して色々な事を試してみるっていうこと自体が楽しくってたまらないんだ!

今回はまさに絶好の機会……! 今、この瞬間を逃すわけには——

——!!

「止めてくれるなーっ!!」

「誰か止めろおーっ!!」

そして三分後、ボクは大量の浮き輪によって簀巻きにされていた。余は不満である。

苦手分野を克服しようっていう話なのに、いったい何が不満なのか。その気になりさえすれば自力でなんとかできるし、変に迷惑をかけるつもりもないというのに。むしろ迷惑をかける頻度を減らすために特訓しようとしているはずなんだが……。

こうなると区民プールで練習する、とかしかないだろうか。

「氷菓さーん、釣りしましよ〜♪」

「はーい!」

キャストオフ

脱出!

七海さんの声に反応し、そのまま滑り出すようにしてその場から脱出する。

簀巻き状態にされはしたがそれはそれ。今のつるんすとなんかボクの体形なら抜け出すのは造作も無いことだ。

ああしていたのはみんながあそこまで言うから、自戒の意味を込めてというところが強い。別のことに誘われればそっちを優先しもある。

ということ、整備されたごく小さな埠頭に向かうと、既に肇さんと頼子さんの二人が釣りに興じているのが見えた。長時間待つことを覚悟してか、パラソルも立てて陽射しへの対策は万全だ。

「肇さん、釣れるー?」

「あら、氷菓ちゃん。思ったよりも釣れますよ」

「はい……初心者私でも、それなりに……」

そう言つて、頼子さんはこちらにクーラーボックスを見せてくる。

見れば、確かに色々な種類の魚が数多く入っていた。

346の私有地だから、それほどここには人が来ない。魚にとつても避難所のような場所になっているせいも、警戒心が薄いのもかもしれない。

なるほど、初心者でも釣れる、と言うわけだ。ボクでも一匹二匹くらいは釣れるかもしれない。

……しかし、スターライトプロジェクトの常識人二人が本陣から離れて行動か……大丈夫だろうか。

いや、大丈夫か。クラリスさん（心眼）とかプロデューサーがいるし。ツツコミ疲れてしまうことくらいはあるかもしれないけど。

「氷菓ちゃんは、釣りの経験は？」

「ほとんどない、と思う」

糸を海に投げ入れたことはある、くらいかな。

おじじと一緒に船乗ってる時、ちよつとだけやらせてもらった。釣り上げるのは結局おじじや船員たちで、釣り上げる時は基本ボクにやらせてくれなかったから、実質経験は無いも同じだろう。

「やり方は分かりますか？」

「そのくらいなら大丈夫。餌は何を使うの？」

「私は、こちらを使っていますが……」

と、頼子さんが見せてきたのはソフトルアー……ミミズなんかを模した、いわゆるワームというやつだ。

比較的安価で使いまわしもきくし、生餌が苦手な人には重宝されることだろう。

頼子さん、そこまで虫が得意そうな印象は無いし……うん、納得。

「七海たちはこっちれすねー」

そう言つて七海ちゃんが見せてきたのは——イソメ、という生餌である。

外見は、なんというか……ヌメリのついたムカデというか、足のついたミミズというか……ともかくそんな風なグロテスクなもの。頼子さんなんて思わず目を逸らしてしまっているくらいだ。

その一方で、釣りを趣味としている二人は特に気にした様子もない。頼子さんの反応を見て苦笑いしているくらいだろう。

「じゃあボクこつちで」

「えっ」

「えっ」

「れすよねー」

そして、ボクが選択したのは——生餌の方。

肇さんたちはちよつと驚いているが、ボク自身は別段生理的嫌悪感には特に抱かない。というか、下手するとあつちの世界のムカデ型ぴにや壊獣の方がデッサン狂つたみたいで怖かった。超巨大ぴにや壊獣の体内も、もうそれはそれは言葉で言い表せないような惨状になっていたし……今更この程度で怯むことは無い。

「ひよ、氷菓ちゃんは強いですね……?」

「いや、自分で言うのもなんだけど、ニブいだけだよ」

あれだけのものを見ればニブくもなる。

ということ、肇さんから受けとつた竿に餌を付け、いざ釣り開始である。

なお、近年は漁業権が問題となるけれど、こういったレジャー目的の魚釣りは、「遊漁」として原則的に許可されている。海に潜つて貝を獲つたり、あるいはタコやイセエビのような法律で保護されているような生き物を獲る場合には、許可が必要になるけれど。

適当に狙いをつけ、勢いよく仕掛けを投げる。寸分狂わず、狙つた

場所へと沈んでいった。

「上手ですね。まるで何年もやってきたみたい……」

「身内に何年もやってる人がいるから……その人の真似だよ」

なお、おじじのことである。あのマフィアのようなコワモテでありながら、その趣味は魚釣り料理だ。

時々、暇な時間ができるとそれとなく釣りに興じて、適当な数が釣れたら園長先生とダベるためにあおぞら園にやつてくる。そこで色々な料理を振る舞ってくれる……という、意外な一面もあったりするのだ。ちなみに、そのおかげで下の子たちはおじじのことを漁師か板前だと勘違いしていたりもする。

とまあ、そんなこんなでキャストイング自体は苦手じゃないボクだけど、釣り全体が得意ってわけじゃない。ボク自体は単なる初心者だ。

「釣れないなあ……」

キリキリとリールを回してみるが、何もかかってはいなかった。

「どこに投げたらいいのかな」

「川魚なら、分かるんですが……」

「ふふふ、七海の出番れすね!!」

「あ、そっか」

そうだ、そうだ。よく考えたらここには一番の専門家がいるじゃないか。七海ちゃんは魚類にて最強だ。

「一般的に投げ釣りの場合は遠くまで飛ばす方がいいのれす。その分リールを引く距離が長くなるから、動く獲物を追いかける習性を持つ魚が寄ってきやすくなるのれす！」

「なるほど……」

「対して、沖釣りの場合は一般的に『海鳥の群れている場所を目指せ』とよく言われているのれすが、近年はもっぱらソナーや魚群探知機の方が主れます」

「まあ、そうだよね」

流石の七海ちゃんである。しかしこれ以上聞くと話がだんだん斜め上の方向に逸れるので一旦切り上げさせてもらう。

しかし、遠投か。ボクにはやや苦手分野だけど……。

「でも何より大事なのは待つことね。焦らず、ゆっくりが一番なれす」

言われてみると、なんだかこの場にいる三人とも、待つことについてはあまり抵抗感が無いというか……なんだろう、こう……全体的にのんびりした雰囲気醸し出しているように思う。

穏やかな気質というか……いつその空間にいただけで少し癒されるとすら感じる。

「よおし」

そういうことなら、と気合を入れて糸を放った。

てんで飛ばなかった。

……うん、まあ。そりゃあそうなるよね。気合入れただけでモヤシがパワーアップなんてするわけないし。

「むう」

やっぱり、技術は大事だとは言っても、そもそも土台となる筋力が無いと意味無いよね。ボクわかった。

七海ちゃんや肇さんはひよいひよいやってるけど、あれは経験者だ

からこそと言えるだろう。頼子さんはプロジェクトの中でもしゅがはさんとクラリスさんに次いで身長が高いし、地力があるのだと思う。この中ではボクだけが純然たるモヤシだ。どうでもいいけどなんだか十傑集っぽいな。純然たるモヤシ。

しかし、だ。足りないものがあるというなら、まずはそれを補ってしまえばよいのではないだろうか。ボクは考えた。

そこで思いついたのが、恒例の構造解析である。魚群探知機、なるほどそういうことなら簡単だ。周囲の海の様子を解析してしまえばいい。

要は人力ソナーだ。どこに魚がいるか分かれば、そこに投げ入れるだけで入れ食いになる。まあ真実入れ食いになるかどうかは別として。

思考がやや無機質なきらいがあるとはいえ、魚も生物だ。残念なことに、どうしても未来予測は難しくなる。けど、現在の状況を常に把握できるというのなら有益には違いない。

「もう一回！」

もう一度——ヘナヘナした軌道で——目的の場所に投げ入れる。

ぽちやりと小さな音を立てて重りは海の底に沈んだ。

そして二分後。

「あつ」

「氷菓ちゃん!?!」

「それっ！」

ボクは竿を握ったそのままの姿勢で、海に投げ出された。

幸いなことに——というか七海ちゃんが先読みして——着水地点に浮き輪を投げ入れていなければ危ないところだった。

とんでもないピタゴラスイッチもあつたものだ。小さめのボラか何かの群れを狙って投げたはずが、もつと小さな魚が引つ掛かり、そ

れを釣り上げようとリールを引けば、その魚が生餌のようになってしまつて、更に大きな1m近いシイラが食いつき、引つ張られてそのまま海へ……である。実にヤベーイ状況だが、冷静に考えながら状況に対処する。

まず投げ込まれた浮き輪にしがみつki、リールを回していた手を放す。魚が暴れるままにしておき、ボク自身は泳いで岸边へ。釣り竿は七海ちゃんたちに任せる。

……ライフジャケットつて大事だね、うん。

「こ、これ……」

「は、はいっ!」

「大丈夫ですか!?!」

「……み……みんながボクに釣り上げさせてくれない理由が分かった気がする……」

釣りは……過酷だ。

なるほど、おじじたちがやらせてくれないわけである。沖釣りになんて出かけた日には、一日に二度も三度も海に引きずり込まれることになるだろう。

「ああいうときは、竿を手放さないといけませんよ」

二人で魚との格闘を始めた七海さんと頼子さんを一旦置いて、肇さんがボクの方にやってきた。

うん、今回のことでよく分かった。けれど……。

「でも、あの釣り竿借り物だし……無くしたり、壊したりしちゃったらマズいよ」

「氷菓ちゃんが怪我をすることの方がよっぽどまずいですよ」

「う……ごめんなさい」

「は」

ぴしやりと断言されてしまった。こういう時、肇さんはひどく厳格だ。何せ心が次第で防ぐことのできた事故だ。まあ事故と言っているのか分からないところだけ——ともかく、そういう状況でまず自分の身を顧みなかったことは怒られても仕方ない。素直に謝ると、肇さんは柔らかな笑顔を見せた。

「お母さんみたいれす……おつとと！」

「な、七海ちゃん、こつちへ……！」

「お、お母さんつて……せめてお姉さんくらいにしてくれると……！」

「I, m your daughter……！」

「氷菓ちゃんも悪乗りをしないでください……！」

流石に更に乗っかってはくれなかった。

いや、でもボクからしたら、ただ産んだ以上のことはしてくれなかった親よりも肇さんの方がよっぽど親みたいだと思える。時には厳しく、時には優しく、穏やかだけどストイックで……もしかして、割と非の打ち所がないくらいじゃなからうか？

ちなみにクラリスさん（兵庫県出身）に間違えて「お母さん」と言ってしまった時、ものすごく複雑な表情をしていたのをボクは覚えていいる。その時と比べると肇さんはあまり動揺しないタイプのようだ。

「うーん……釣り上げるのができないんじゃ、仕方ないか……じゃあ、ボク料理の方に行ってくるよ。クーラーボックスの魚、貰ってもいい？」

「いいですけど、重たいですよ？」

「……んぐつ!! ん! ……うん、無理だね。プロデューサー呼んでくる」

くつ! わんりよく が たりない!

というこどで、仕方ないのでプロデューサーを呼んできて運んでも

らうことにした。

申し訳ないが仕方ない。ボクにできるだけ美味しい料理を作るから許してほしいところだ。

というわけで、今度はバーベキューの準備組である。

「まあボクバーベキューの準備は手伝えないんだけどさ」

「そうだな！ ケガするかもしれないから手伝わない方がむしろいいかな！」

一瞬で利害が一致した。

ということ、ここからはピストルシラカワ……もといピストロシラカワ……いや、なんだかしくりこないな。魚を扱って和風なんだから……よし、割烹白河ということにしよう。なんだか字面もそれっぽい。

「よいしょ」

と、ボクは荷物の中から、このために準備しておいたもの——魚用の包丁一式を取り出した。

「うおっ!? なんかすげえの出てきたな☆」

「あら……お借りして来たのですか？」

「ううん、自前だよ」

同じ学校の同じクラスに通ってる上に隣の部屋で共同生活している七海ちゃんという超級の魚好きのため、時々料理を作っていたら逆にボクの方が凝るようになってしまった。その結果がこの魚包丁である。

そんな話を聞いたしゆがはさんとクラリスさん（身長166cm）は、どうリアクションを取っていいのか分からず絶妙な顔をした。

ちなみにこの魚包丁、普通に市販品である。あんまりお金がない時期ならまだしも、今のボクは……というかボクたちは、働いてお金を稼いでいる身だ。おかげで複製品を作る必要は無い。というか後々のことを考えると普通に購入する方がよっぽど良いだろう。複製したものではありませんや小売りにお金が入らないのだから。

……まあ、例外的に手入れと修理は自分でやってるけど。

「それで、何を作るおつもりですか？」

「骨があると食べづらいだろうし面倒だから、三枚におろして……バーベキューに使う用とあとお刺身——」

「OSASHIMI!!☆」

「——は、寄生虫が付いてる可能性もあるから検査しないと」

一気にしゆがはさんとプロデューサーの顔が曇った。ノットスウィーティーな時の顔である。

そんなに楽しみだったのかお刺身。と言うよりこの場合の狙いはお酒とかの方か。

しかし、危惧していたように寄生虫が付いているようなことは無かった。先に手早く七海ちゃんが処理していたらしい。流石の手際だった。

「うん、これなら大丈夫かな」

「ツシャアツツ!!」

「いよっし☆ おっさけお酒お酒っけー☆」

「ん？ あ、ちよつと待ってくれメールだ……うん？ ちひろさん……？」 『お酒は夜まで禁止です』……？』

再び二人の顔が曇りに曇った。

考えてみれば当たり前前のことではある。昼からはレッスンだ。

というか逆に許可を出すようなことがあればそれはそれで問題だ

ろう。

「冷凍して置いとくね……」

「神かよ……」

「崇めてもいいぞ☆」

「やめてよそういうの」

クラリスさん（一神教）に怒られる。

「さて、他のレパートリーどうしようかな。カルパッチョとかサラダとか……あ、でもアラでダシを取って「カレー」にするのもいい

……か、も……」

「……違うのです」

「……クラリスさん？」

「違うのです」

「作ろっか」

「うう……」

それは多分、ふと思ったことがそのまま口を衝いて出ちゃっただけなんだろうけど。

ボソツと一言呟いてしまったのがとんでもなくオイシイタイミングだったので、この後全ての方針が決まってしまった感があった。

なお呟いてしまった張本人であるところのクラリスさん（食いしん坊）は真っ赤にした顔を手で覆ってしまっていた。

クラリスさん（20）は可愛いなあ。

「野菜とか追加で買って来たほうがいいかい？」

「ううん、今あるので十分」

バーベキューでよく使われる食材ばかりだけど、充分だろう。

カボチャ、トウモロコシ、ピーマン、玉ねぎ、ナス、キャベツ、ニ

ンニク。それからシイタケにエリンギ、マッシュルームにヒラタケ——キノコが多いのは輝子さんの影響——と、種類は揃ってる。傾向も分かりやすい。季節も季節だし、ここは夏野菜カレーで行こう。

「お肉☆」

「……は、バーベキューで焼いたものそのまま使おうかなって思ってるんだけど、どう?」

「焼いて、そのまま?」

「カレーにプットオン」

「最高かよ」

出来上がった後のことを想像してか、プロデューサーの喉がごくりと鳴った。

とはいえそれはそれでも問題はある。一緒に煮込んでないから味の染み込みが悪いんだ。まあそこは工夫でなんとでもなる範囲だけだ。

肉を盛り盛りに盛るもよし、逆に全く入れないもよし。好みに合わせて自由にできるのがこういう時の利点だ。

「……あ、出汁取りに使ったアラを炊くのもアリかな。ナスも素揚げにして……」

「ちよつとストップ☆ いやホント待ってヤバい呑みたい欲が出ちゃうやめて」

「えっ。あ、ごめん」

思えばナスの素揚げとかアラ炊きとかって、先生やおじじがお酒のツマミによく食べてたっけ……。

プロデューサーもギリギリと歯噛みしてるし、意見を求めるためとはいえ口に出すのはやめておこう。

「でも、ダシを取ろうと思ったら時間がかかるんじゃないか?」

「圧力鍋使えばある程度時短できるよ」

「そんなのどこに——」

「よいしょ」

「荷物の中に……?!? や、やけに重いと思ったらー!」

ちなみに他にも調理器具を用意している。折角の機会だし、ちようどいいと思うんだ。

なお、圧力鍋にも限界はあるので錬金術も併用する予定でもある。運んでもらうプロデューサーには悪いけど、ここは料理を報酬代わりに我慢してもらおう。

「何かお手伝いしましょうか?」

「お姉ちゃんにも仕事よこせ☆」

「じゃあクラリスさんは野菜切るのお願いしていい? しゅがはさんはお肉の下処理してほしいんだけど」

「はい」

「おっけー☆」

バーベキューセットは立て終わり、あとは火をおこすだけ……となったところで手持無沙汰になったらしい。

とりあえず、今ボクは魚の方に取り掛かりたいので仕事を適当に割り振る。しかしこの疑似姉妹的關係……みたいなもの、まだ続いたのか……。

しかししゅがはさんは手際がいい。早いとかじゃなくて巧い。長く自炊してき……いや、この話題を考えるのはよそう。家庭的だね。その一言で充分だ。

ともかく魚だ。手早く三枚におろし、アラを鍋に放り込む。本当ならもつと緻密に繊細にやるところだけど、今日はいいや。手元にあるものを手当たり次第に突っ込んでいく。

こういう機会だ。むしろ適当にやるくらいの方が味が味としても楽しいだろう。たぶん。

一通り捌き終わり、あとは鍋を火にかけるだけ……となった頃、ふと、遠くの方から声が聞こえた。

「――納得いかなあぁ〜いい!!」

ボクより小さな何人か。あと、プロデューサーと同じくらい大きな人と、とても女性的な体形の人が一人。あとぴにやこら太(プレーン)……。

……あれは、確か……。

「……あれ、とときら学園じゃない?」

「え? ……ああ、本当だな」

仁奈ちゃんもいるし、間違いない。

あっちの背の高い人は諸星もろほしきらりさんだし、その隣隣にいるのは愛梨さん。今叫んだのは……シンデレラプロジェクトの城ヶ崎じょうがさき莉嘉りかさんかな?

ジュニアアイドルのみんなはどうやら着ぐるみを着ているようだ。仁奈ちゃんの発案だろうか。今日も暑いし、水分補給は忘れないでほしいものだ。

「でも、何でここ?」

「346の私有地だからね。撮影に都合が良かったんじゃないかな」

「我々がここにいてもよろしいのでしょうか?」

「大丈夫じゃないか? もし問題があればあっちのスタッフが何か言ってくるはずだしね」

見れば、気にしないでくれと言いたげにスタッフさんがこちらに向かって手で大きく丸を作っていた。どうやらそういうことではないらしい。

「プロデューサー☆ うちもああいうの作ろう☆」

「いや、あれは偶然に偶然が重なって現場判断とか他にも色々あったから出来上がったもので……色々難しいんじゃないかな……」

「ちえー☆」

「でもプロジェクトのみんなで番組とか、気になるかも……」
「う……」

「確かに、それはわたくしも思いますわ」

「け……検討させてもらうよ……」

何事も言ってみるものである。実現した時が楽しそうだ。

「——少しよろしいでしてー？」

「ん？」

そんな折、ふと遠くの方から芳乃さんたちが駆けてくるのが見えた。

そういえばあの三人、さつき見当たらなかったけど……。

「どうしたんだい？」

「あれー……」

と、こずえちゃんが指差したのは、このプライベートビーチと地続きの、やや離れた一般客向けの海岸。

野外フェスか何かの会場だ。どうやら、何かイベントを催す予定らしい。今やってないということは、昼からの予定なのかな。

「あれがどうしたんだい？」

「あの……トラブルって……聞いて……」

「何で聖ちゃんたちがそれを？」

「心の赴くままに歩んだ折にー、迷える声が聞こえましてー」

思い返せば、芳乃さんの趣味のひとつは悩み事解決とかだったな……元々勘も良いし、何か感じ取った結果あちらに向かい、トラブルが発生したことを知ったのだろう。

さてそれを聞いてどうしたものかと思えば……プロデューサーは何だか思案顔。ああ、こりや首を突っ込みに行く気だな……と思ったところ、プロデューサーは社用の携帯電話を取り出してどこかへと電話をかけ始めた。

他方、何やらとときら学園のスタッフさんがこちらに近づいて来るような気配も感じる。

……そろそろこの夏！ あいつらが！ 的なナレーション突っ込んだ方がいい？

31：二正面作戦

それから十数分ほど。プロデューサーととときら学園側のスタッフとの話し合いと、何処かへの電話連絡が全部終わった頃、とときら学園の出演者とスターライトプロジェクトのメンバー全員が一か所に集められることになった。

状況はいまいちつかめな……くもないが、何だか少し厄介なことになっっていることは間違いない。

「少し時間を取って申し訳ない。それと、とときら学園の出演者のみんなも集まってくれてありがとう。さつきまとまった話を通達させてもらうよ」

プロデューサーの表情も、ライブ前のように真剣だ。

さて、どういう話になることか……。

「まず、スターライトプロジェクトのみんなの方。さつきとときら学園のスタッフの方から、この夏に放送される臨海学校スペシャルへの出演依頼があった」

「嬉しいけど、それって大丈夫なのかなあ？」

「確認は取ったしその辺の契約関係もはつきりさせておいたから大丈夫だ。とりあえずこれに関してはみんなでなんとかしようと思う。台本は後で渡すから、そつちに目を通してくれ」

と、プロデューサーの話が終わると共に、とときら学園のスタッフさんからみんなに台本が手渡される。

どうも今回の臨海学校スペシャルは海そのものや海の生き物にまつわるお話になるらしい、と聞いた。みんなが着ぐるみを着ているのもその一環だとか。

「さて、次にあつちの話だ。どうも今回このビーチでのサマーライブ

という名目で企画されたものだったらしいんだが、先日の261^{ッライ}プロの倒産の影響で出演予定だったユニットがキャンセルを入れてきたそうなんだ」

「……あのプロダクションね。確かに経営状態は芳しくなかったし、そういう話もありえなくはないのかしら……」

「で、出演を取りやめたのが四組。ということ、その埋め合わせとして四組ほど募りたい。誰か出演したい人は」

「「「「はい!!」」」」

「……ほぼ全員か……」

そりやそうなる。やりたい分にはやっておきたい。特に、この夏フェス前の大事な時期だ。今の自分がどれだけやれるかを確かめる機会を、と思うのは自然といえば自然なことではあるだろう。

「流石に四組の不足に対して全員は難しいな。にじゅう……今何人だ……?」

「ぴにや含めて29人」

「ぴにやは含めなくていい」

「五人ユニット体制で行くにしても半分は残らなきゃいけないくなるな……仮に一曲限定でやるにしてもレッスンの時間が……」

「えーでもみりあもやりたーい!」

「かおるもー!」

「ちよ、ちよつと待ってくれるかい。少し考えるから」

流石にプロデューサーもジュニアアイドルのみんなの意見を無碍にするわけにもいかないらしい。割と本気で悩んでいるようだ。

そりや悩むだろうな。プロデューサーとしてはできるだけ全員に活躍の機会を設けてあげたいところだろうし。まずは、とりあえず全員出演させられる方法を考えているのだろう。

リトルマーチングバンドガールズ

例えばとときら学園出演の、L・M・B・Gのメンバー。あの面子に、例えばボクとこずえちゃんや晶葉あたりを加えたとしても10

人。では、残り19人をどう割り振ればいいのか……。

……現実的に考えるとだいたい難しい。流石に取捨選択はしないとダメだと思う。

「参加ユニットを増やすのは難しいのですか？」

「二組一曲ずつの予定なんだ。流石にこう急となるとな……」

顎に手を当てて考え込むように俯くプロデューサー。

普段辣腕を発揮しているプロデューサーでも、これは難しいか。

「よし、じゃあ今回出演できなかつた子は、俺の権限でできる範囲で埋め合わせはさせてもらおうよ」

「それ、大丈夫なの？」

「プロデューサーとしての意地だよ……ともかく、バランスを考えるのと今すぐ全員を、ってわけにはいかないんだ。申し訳ない。ただ、とときら学園出演者の方は全員ライブの方にも出てもらおうとは思う」

そこは、先輩に花を持たせるのが後輩としての務めと言ったところか。スターライトプロジェクト外のメンバーに埋め合わせ用の仕事を持つてくるとなると、調整が難しくなるから……という事情もあるかもしれない。

何にせよ、流石にそれはボクたちも理解している。全員が納得したように頷きを返した。

「それじゃあ……一組目はL・M・B・Gの子たちで『ハイファイ☆デイズ』をお願いしたい」

「はい！」

「承りましてよ」

「頑張ろうね！」

人数比としては妥当と言えば妥当なところか。しかし、みりあちや

んがこつちに編入となると今回は凸^{デコ}レーションはお預けになる可能性が高いけど……まあ、大丈夫か。莉嘉ちゃんもきりりさんも、元々のポテンシャルが高い人たちだから、どこに組み込むにしても問題無く動けるだろう。

「で、二組目だけど……莉嘉ちゃんと諸星さん、いいかな？」

「オツケー☆ ライブで今度こそオトナなアタシを見せちゃうんだからっ☆」

「大丈夫だにいい☆ けどけど、凸^{デコ}レーションとしてじゃなくってこれとお？」

「いや……少し考えてることがあるんだ。今回は5人ユニットで行ってもらいたい」

「5人？」

「ああ。土屋さん、イヴさん、はあとさん！」

「はあい！」

「おっ？」

「来たっ☆」

「この5人で『Orange Sapphire』を歌ってほしい。いけるかな？」

「勿論！」

「大丈夫ですう！」

なるほど、そういう手で来たか。

元々スターライトプロジェクトは最初に組んだそれぞれのユニットに拘らず、組み換えて運用することも視野に入れて活動するプロジェクトだ。本来ならその特性を活かして活動するのは夏フェス以降の予定ではあったけど、先取りして運用してみよう、という魂胆か。

確かに、亜子さんとイヴさんとしゅがはさんなら、曲の雰囲気としても合致しているはずだ。問題は、先輩アイドル二人に囲まれて委縮してしまわないかが……まあ、心配は要らないだろう。

「次に三組目。八神さん、大石さん、七海ちゃん！」

「あら」

「はい」

「はーい！」

「この三人で『夏恋 — NATSU KOI —』だ。元々、別の機会でお披露目するつもりだったけど……」

「問題無いわ。その件は調査済みよ」

「ええ。だから、少し練習はしていたの」

「やれますよ〜！」

既に知っていたということに対してややプロデューサーとしては不満があるのか——あるいは、自分の情報管理がもしかして杜撰だったのではないかと不安に陥っているのか、その表情はやや苦笑い気味だった。

しかしプロデューサーは気付いた方がいい。半ば技術者集団になっっているスターライトプロジェクトのメンバーにとって、情報管理はあんまり意味をなさないということ。

「じゃあ最後に……十時さん、こずえちゃん、白河さん！」

「あ、はーい♪」

「はあい……」

「え、あ、はい」

つと、と、完全に意識から外れてた。確かに手は挙げていたとはいえ、まさかこの流れで呼ばれるとは。

でも、愛梨さんとこずえちゃんとボクって、どういう取り合わせなんだろう……？

「三人で『銀のイルカと熱い風』をお願いしたい。十時さんは先輩として二人をリードする形で頼むよ」

「分かりましたっ。よろしくね、氷菓ちゃん、こずえちゃん！」

「よ、よろしくお願いします！」

「よろしくうー……」

となると、「ハイファイ☆デイズ」以外は全体的にサマーソングという風に行くのか。

方針としては……うん、海岸でのライブなのだし、適してるんじゃないかと思う。「ハイファイ☆デイズ」自体もアップテンポな曲だし、全体的な雰囲気も統一されていると言っている。

ただ——現状、ボクの精神的負担がやや大きい気はする。いや、愛梨さんがどうというわけじゃなく、これは単に随分前から愛梨さんが活躍しているのを知っているからこそ、ボクが勝手にプレッシャーを感じているだけなのだけれども……。

その点に関して言うなら、こずえちゃんはあまりプレッシャーを感じていないようで、ちよつと羨ましい。

「他のみんなはまたすぐに埋め合わせをさせてもらおうよ。それと……」

「それと？」

「……機材のトラブルもあるみたいだから、池袋さん、大石さん、白河さんの三人でなんとかしてきてくれるとありがたいんだが……」

「呪われてでもいるのかあの会場は」

出演者のドタキャンに機材トラブルと来た。これでスタッフの不祥事でも発覚すれば役満か。

もしかしたらドタキャンにしてもスタッフとの痴情のもつれが原因つてこともあり得る。万が一本当にそうだったら笑いごとじゃないけど。

……呪いの浜か。小梅さんの好きそうな話だ。惜しむらくは今回の件のおおよそがヒューマンエラーで起きた事態だという点だろうか。

「一応聞いておきたいのですが」

「はいクラリスさん」

「! ……」

「氷菓さん、何か?」

「いや何でも」

「は、はあ。いえ。今回の件、困っていらつしやる方を手助けするとうことでわたくしは個人的にも賛成なのですが……会社としては何かしらの営利的目的がおりなのですか? そうでなければ動けないのではないかと考えたのですが……」

「ああ、うん。なんていうのかな……今回のことで手助けすることで、相手方からの印象を良くしたいんだ。このビーチでイベントを催しているってことはそれなりな規模のイベントーってことでもある。今後仕事をすることがあるかもしれないし……」あの時の346プロの!』って思ってくれたら、仕事の話も円滑に進むだろうし……だいたいそんな感じ」

そういえば、こういう業界は横のつながりを大事にするという話を聞いたことがある。中にはそりゃあ恩知らずな人もいるだろうけど、現場単位で見ればだいたいの人がいわゆる「普通の人」なわけで……そういう人の多くは、良いことをしてもらえれば気分も良くなるし、もし今後会うことがあれば義理を返そう、という気持ちにもなるだろう。

ぶつちやけてしまうと、要はコネ作りだ。その辺の事情もあるからこそ、上もちゃんと許可を出したのだろう。今回の件がプロデューサーのみならず、会社そのものの評判を上げる結果になることもあるし。

「というわけで申し訳ないけど、みんな、頼んだよ」

「あいさー」

「そういうことなら仕方ないわね」

「そうだな。さっさと終わらせてしまおう」

そういう話ならボクらもすつきり仕事ができるというものだ。
なお、会場の機材トラブルはきっかり三分で解決した。
下手すると移動時間の方が長いくらいだった。

@ ——— @

「それじゃあ最初のお便りです！ 『お魚には寄生虫がついていると聞きました。よく船の上ですぐにさばいてお刺身になっている人がいますが、大丈夫なんですか？』 だそうです」

「ああ、よくある疑問ですね。これははれすねー……」

——— ということで、最初はととくら学園の撮影からだ。

日程的にやや厳しいものにはなってしまうが、状況が状況だ。こちらは午前中に一通り終え、午後3時からのライブに備えるという話運びになっている。

それはそれでともかくとして。

「釣ったその場で処理をすればアニサキスのような寄生虫は基本的に胃から身に移ることは無いのれす。勿論注意は必要れすし、最善は冷凍したり一度火を通すことで———」

……今回は、割と真面目に七海ちゃんの独壇場のようだ。

ととくら学園の番組としてのジャンルは、「お助けバラエティ」。視聴者から寄せられたお悩みをもとに、出演者がそれらを解決していくという方針を取っている。

まあ、実際のところはその枠組みからもだいぶ外れつつあるのだけれど。どこかの謎解き冒険バラエティだとかバラエティと銘打っておいて下手な教育番組顔負けの濃い内容を放送するだとかそういうものと似たようなものだ。長期化するところいうことはよくある。気にしてはいけない。

ともかく、そういう内情もあるとときら学園だけど、今回は臨海学校スペシャルということで、視聴者から寄せられるお便りもそれに準じたものになってくる。海、となれば当然魚や海そのものにまつわる疑問や悩みも増えていく。そこへ七海ちゃんをドンだ。呆れるほど有効な戦術だぜ。

トークだってそりやあもう進む進む。いったいいつから喋っていつまで喋るのかよく分からないってくらい話す。そしてスタッフさんは編集点を見出すのに苦労することになるのだ。

対して、七海ちゃんの表情は輝かんばかり。これはもう当分止まらないだろう。仕方ねえんだ。

「すみませーん！ 白河さんと大原さん、スタンバイお願いしますー！」

「あ、はい」

「分かりましたー！」

そうこうしている間に、スタッフさんもこのまま放っておけばいつまでも次の撮影に移れそうにないと察したようだ。声で応じると、スタッフさんと共に仁奈ちゃんとみりあちゃん、龍崎りゅうぎきかおる薫ちゃんの三人がこちらの野外キッチンにやってくるのが見えた。

「氷菓おねーさんとみちるおねーさん、よろしくおねがいするでござーますよー！」

「よろしくおねがいしまーっすー！」

「しまー！」

「はい、三人ともよろしくお願ひします」

「よろしくお願ひしますっ！」

澆刺とした三人の挨拶に、思わず元気づけられる。

ちなみに三人の服装は相変わらずの着ぐるみだ。仁奈ちゃんは水着の上に大きなサメ、みりあちゃんはイカ。薫ちゃんは……タツノオトシゴだろうか？ 色合いもそれぞれ華やかだ。

大して、ボクらの方は普通の水着であった。みちるさんは撮影用のピンクのビキニ。ボクは……お腹を出すことをまずプロデューサーに禁じられたので、競泳水着風のすらっとした印象のものだ。いずれもエプロンを着用している。正面から見るといかがわしい格好に見えるてしまうが、どうせまたスタッフの趣味だろうってことは容易に予想できた。

とはいえ場所が場所だけに仕方ないんだけど。それに、油が跳ねた時のために、多少でも体を隠せるものがあるに越したことは無い。はずだ。

ともかく。

「それじゃあ本番行きまーす！　さん、に……」

スタッフさんの指示と共に撮影が始まった。

今の今まで談笑していたというのに、三人の気持ちの切り替えも早い。流石にボクらより芸歴が長いだけはある……。

「それじゃあ次のおたよりだよ！　宮城県の『赤いリボン』さんから！」

「えーつとねー。『私には今気になっている人がいるのですが、最近の暑さで夏バテしてしまって体調が心配です。何か、夏バテを解消しながら男の人に喜んでもらえる料理なんてありますか？』だって！」

「うひゃあ……オトナのレンアイってやつでござえますか!？」

「うわあ、カツコいいよねー！　いつかかおるもこんなふうになりたいなあ」

「でもでもっ、お料理ってみりあたちだけだと難しいよ?」

「大丈夫でござえます！　だって今日は仁奈たちを手伝ってくれるお友達がいるんだー！」

「おおー！」

……と、そんな寸劇の流れの中で、そのままこちらにカメラがエン

トリーしてくる。

同時に、カメラの移動に合わせて三人もまた一緒にフレームインしてくる。これで準備オツケーかな。

「ということで、今回のゲストは！」

「皆さん、こんにちは。『エリクシア』の白河水菓と——」

『ミラ・ケーティ』の大原みちるです！　今回はよろしくお願ひしますね！」

———というところで、ボクたちの出番は……料理、である。

本当なら本職と言っても過言じゃないしめとうあおい首藤葵さんや、家庭料理のみならず家事そのものをマスターしているいがらしきようこ五十嵐響子さんの方が適任だったかもなあと思わなくもない。正直、視聴者の期待していた人とは違う人間が現れたら落胆するだろうとも思う。オフアーを受けた以上は全力だけど、人の心まではどうもこうもやりようが無いから、ここはまたどうしようもない。

ちなみにどうでもいい話だけど、ここで使う食材は局からの提供になる。元々ボクたちが使ってた食材には手を付けなくていいのとのだ。

「それじゃあ、夏バテによく効いて、男の人に喜んでもらえそうな料理を作っていくみましょう」

「「はい！」」

「ところでその前に、皆さんは夏バテに効くと言われている食材って何だと思えますか？」

「ウナギー！」

「はい、薫ちゃん正解です。昔からウナギに関してはよく言われていました。他には何かご存じですか？」

「豚肉ってきいたことがあるよー！」

「レバーもでござえますー！」

「パンです!!」

「みちるさん少し待とうか」

あまりの突拍子の無さに他の三人の目が点になっている。しかしみちるさんにとっては間違いなく真実だろう。みちるさんくらいじゃないと無理ということは置いていて。

下手するとイースト菌か小麦粉から生命力を摂取している可能性が……流石に無いか。

無いよね？

「みちるさん以外は正解です」

「わ、わーい……」

「えー!？」

「まあ、パンも食べ合わせ次第ですが……」

再びみちるさんの顔がぱっと明るくなった。

「一般的にはこの中で一番夏バテに効くとされているのはウナギですね」

「美味しいですよねウナギ！ 一度パンに挟んだりして食べ」

「ですが今年は類を見ないほどウナギが不漁だと言われています。絶滅危惧種にも指定されていることは既にご存知とも思われますので、今回は別の栄養豊富な食材を使いましょう」

「がーんですね……出鼻をくじかれました……」

しかし、ウナギパイの存在はボクも知っているけども、ウナギパンというのが果たしてあるのだろうか……？

……あるんだろうな、多分。ボク程度でもそのくらいの発想ができるくらいだ。そんな貧相な発想なんてとつくにブチ抜いて斜め上の方向に進化しているだろう。多分……。

「それに、折角の海なので、ある程度お手頃な海にまつわるものを料理

していきましよう。こちらです」

と言って取り出したのは、凍り付いた赤い塊。

あまりピンときていないのか、三人はこの正体をはかりかねている風首をかしげている。明らかに聞こえていないはずなのに、遠くでは七海ちゃんの目がギラリと光った。何で察知されたんだ。海に来てから絶好調だな七海ちゃん。

「お肉でござえますか？」

「冷凍マグロです」

「マグロ！ かおるマグロ好きー！」

「みりあもー！」

「そして予め解凍の済んだものがこちらですっ！」

「ありがとうございます。では、調理していきましよう。調味料はご覧の通りです」

ダシ醤油、みりん、酒、ごま油、砂糖。わさびやししようがは好みで。酒とみりんは一度沸騰させてアルコールを飛ばしたものを使う。

「この調味料を全部混ぜましよう。それと、今回使うマグロ以外の食材は、アボカド、サーモン、ブリ、オオバ、ネギ……となっています」
「栄養が豊富そうな食材ですね！」

「実際豊富です。ではまず、マグロとアボカド、サーモン、ブリを1cm角くらいに切つていきます」

手際よくそれぞれの食材を切つていくと、なんだか三人の目がキラキラしていることに気付いた。おおー、なんて感嘆の声も聞こえる。……あ、すごいなこれ。褒められるのすごい嬉しい。もつとホメてくれ、みたいになつて体がフルフル震えそう。抑えなければ。

「オオバとネギはみじん切りに」

「わっ、すごーい！ 氷菓ちゃんみじん切りできるんだ！ 私と身長同じくらいなのー！」

「で、できますよ。練習すれば誰でも」

何でや!! 身長関係ないやろ!!

そこはせめて年齢で見てくれないかみりあちゃん!!

「へえー。今度おしえてっ！」

「はい、勿論。……では次にこの切った食材を先程の調味料とあえます。この時、食感を残したいのでアボカドはあまり潰さないようにします」

もつとも、少々崩れてもいいという場合にはこの限りではない。あくまで彩りと画面映りを気にしてのことでもあるし、むしろぐちゃぐちゃなくらいの方が好みという人はその方がいいだろう。

「でもかおるネギ苦手だなー」

「ごま油とあえてるから、青臭いにおいと味はちよつと軽減されてると思いますよ」

「へえー。ひようかちゃんは物知りだね！」

「あはは……あと、ネギは魚のにおいを取ってくれます。魚は好きだけど、生魚はにおいが苦手……という方は、これにしょうがを少し加えてもいいでしょう。におい消しにもなりますし、体を温める効果もあるので、冷房で体が冷え切ってしまうって夏バテ……ということを防いでくれます」

もつとも、しょうがも割と好みが分かれるものだけど。ジンジャーエールやしょうが焼きは好きだけど、しょうがそのものは苦手という話も割と聞く。

まあ、あくまで薬味だしそういうこともあるだろう。結構強烈に鼻に抜ける感じがあるし、辛いし。

「あとはぐいはんをよそつて、今作ったものをそこに乗せれば……はい、これで海鮮丼の完成です。味が足りなければお好みでわさびやタレなどを追加してくださいね」

「わあ、すっごーい！ おいしそー！」

「さて、それじゃあついでにみちるさんのご要望に伝えてもう一品作ってしましましょう」

「パンですか!？」

「パンです」

「やったー！」

い、いい反応してるなあ、みちるさん。

確かにちよつと焦らしたみたいにはなってしまったけど、そうまで喜ばれるとボクの方もちよつと困惑するんだが……。

「じゃあ手早くやっついていきましよう。さつき残ったマグロを使ってツナを作っついていきます。マグロが浸かる程度に鍋にオリーブオイルを投入。あとは弱火にしてしばらく待つだけです」

「何分くらいですか？」

「20分です」

「20分」

「しかしあんまり待つのもあれなので、仕込みの段階で既に準備を終えて20分経ったものがこちらになります」

「おおっ！」

案の定、ジュニアアイドル三人の方は「いつ仕込んだんだ」とでも言いたげな苦笑いを浮かべていた。

そこは言ってみればテレビのお約束であるので追求しないでいてもらいたいところだ。

さて、これだけでも食べられるけど、ただこれだけだと味気ない。ここはもう一つ加えるのだが……。

「ここでさっきの余りのアボカドを使います。ボウルに入れて潰し、ここにツナと、ツナを作るのに使った油を大きじ1くらい投入。醤油、マヨネーズで軽く味を調えれば……手作りツナのアボカドクリームが完成です。あとはこれをパンで挟むだけ」

「わあ。わあ。わあ!! 食べていいですよねいただきまフゴ!!」

「言い終わる前に食べないでくださいー」

「おいしいですよ氷菓ちゃん!!」

「それは良かったですけどもうちよつと落ち着いてくださいー」

分かってた。分かってたんだよ。でももうちよつと待つてくれな
いかな？

いや分かってる。待ちきれないことは百も承知だ。でも待つてほ
しかった。ある意味テレビ的にオイシいかもしれないけど。

「と、ともかくですね。今回のお便りの内容は、『気になる人に食べて
ほしい』です。というわけで、男性に食べていただいて感想を聞いて
みたいと思います。どうぞ」

と言って手渡す相手はプロデューサー……なんだけど、基本、うち
のプロデューサーはあくまで「自分はアイドルを立てる人間」という
ことで画面に入ることにはまず無い。もつと言えば声すら出さず、必要
になった場合には画面外からのジェスチャーと見切れ芸だけで意思
表示をする……ということを徹底している。

そういう姿勢は立派だ。ボクたちとしてもありがたく思う。けど
同時に面倒くさいなとも思わなくもない。普段ぺらぺら喋ってるし
な……。

小さなお茶碗一杯分くらいの量を手渡すと、プロデューサーはすご
い勢いでかつこんでいった。お昼も近いしお腹すいてたんだらう。

少しの間味わうようにして目を瞑ったその直後、プロデューサーは
満面の笑みで（手元だけ画面に入り込むように）サムズアップして見

せた。どうやら合格のようだ。

「……ということ、いかがだったでしょうか。この料理が赤いリボ
ンさんの参考になれば幸いです。今回のゲストは白河氷菓と」

「大原みちるでお送りしました！ 氷菓ちゃん、もう一つ！」

「はいはい」

パンを手渡しながら笑顔でカメラに向けてみんなの手を振ってい
ると、やがてスタッフさんからカットの指示がかかる。

これで撮影はOKらしい。ほっと一息ついて、挨拶と共にみんなに
頭を下げる。

「お疲れ様でした」

「ごちそうさまでしたー……じゃなかった！ お疲れ様でした！」

「あはは、みちるちゃん食べるだけだったねー」

「むっ、あたしちゃんとアシスタントもしましたよ！」

「でも殆ど食べるのがメインだったよね……？」

「お、美味しそうに食べることで美味しいと分かるからいいんですよ
！」

「そうでござえますね！ みちるおねーさんが食べてるところ見ると、
幸せになってきやがりますー！」

「ですよね！ というわけでもうちよつと……」

「後でカレーパン作るけど」

「それはそれ、これはこれで！」

どっちも満足するまで食べる気だなこれ。

そして知ってるぞ。これは死守しなければ食材が消えていくパ
ターン……！！

……プロデューサーに新しい鍋買ってきてもらえるかなあ。
と、そうだ。

「ところでみんなはお昼どうするの？」

「ロケ弁が出てるでござーますよ！」

「ご飯は白飯かな？ こっちの方でカレー作ってるんだけど、よければ食べる？」

「えっ、いいのー!？」

「おかわりもいい……よ」

「？」

「ごめん、こっちの話」

危ねえ！ 年少者相手におかわりもいいぞ！ って言っちゃうのは色々マズい!!

いや、字面自体は別に問題無いけど、その流れで会話を続けるのが一番ヤバイ。直前で踏みとどまれて良かった……!

その後、こちらに合流して来た七海ちゃんに海鮮丼を振る舞った。食べきれなくなった分はスタッフさんの方に提供したが……海鮮の具を目の前に殴り合いを始めたのは一体どういうワケだったのだろう。よっぽど腹に据えかねたことがあったのだろうか？ 心配だ。どうも殴り合いが終わった後は爽やかに分け合っていたから、遺恨は残していないようだけど……もしかしてもうちよつと量を作っておいた方が良かったのだろうか。少し心配になった。

……ともあれ、次は臨時ライブだ。

愛梨さんと一緒に歌うとなると緊張するけれど、精一杯頑張って、勉強させてもらおう。

32：昼空の花火

刻一刻と、ライブの時間は近づきつつある。

今回のライブは本当に臨時も臨時……誰一人想定していなかった事態ということもあり、曲もユニットも……衣装すらもその場で用意した急造品ばかりだ。

準備不足は否めない。実際、ボクらの衣装もだいたいがさつき買ってきたばかりだったり持参品だったりの水着だし。ただ——それでも気分は悪くない。いつものライブ前の心地よい高揚と、ほんのちよつとの自信が胸に満ちている。

「氷菓ちゃん、調子はどうですかあ？」

「あ、はい。問題無いです」

横から愛梨さんに声をかけられる。状況が状況だ。緊張していないと言うと嘘になるけれど、でも調子そのものは悪くない。緊張感がいい塩梅で精神を冷やして研ぎ澄ましてくれる。

うん——万全だ。今すぐ行こうと言われても対応はすぐにできる。

「こずえちゃんは？」

「だいじょうぶ……ひょうかはふあんー？」

「ううん。不安は無いよ。でも……」

ただ、ちよつと懸念はある。

プロデューサーはボクらを信頼して愛梨さんと一緒のライブに出した。そのことは分かるし、その期待に沿えるように頑張りたい。

それでも、愛梨さんとボくらとの間には確かな差がある。愛梨さんは346プロのアイドル事業部の立ち上げ当時からいた。芸歴もそれなりに積み重ねてきているし——流石に芸歴という点で言えばおかざきやすは岡崎泰葉先輩には敵わないけれども——それに比例して高い実力を

備えている。

自分の魅せ方、観客のノセ方、映り方……そういったものを既に熟知していると言い換えてもいい。当然、単に模倣ができるというだけのボクでは到底太刀打ちできるはずもない。

「愛梨さんの足を引つ張らないかは、少しだけ」

「大丈夫ですよ。もっと気楽に行きましょう♪」

「そうは言いますけれども」

当の愛梨さんにそう言われると余計にプレッシャーを感じる。

……いや、本人にそんなつもりは全くないのは分かっているんだけど。それを理解しているからこそ余計にプレッシャーというか。

むう……身内以外とライブするのってこんな感じなのか……これは結構気を遣う案件になるぞ……。

「ひようかはめんどくさいー……」

「ちよつと面倒さんですね〜」

どうしてボクはこんなところで心を抉られなければならないのか。これが分からない。

確かにボクはちよつと面倒な人格してるって自覚はあるけど、前と比べればむしろ改善されてる！……はずだ！……多分。

……あ、ちよつと待てよ。不安なこと、あつたぞ。

今日、結局晶葉と志希さん、何も変なことしてない。

いや、変なことしてないならそれでそれに越したことは無いんだけど、あの二人が静かにしているってだけで何か言い知れぬ不安を感じる。

単に海を満喫しているだけなのか……いやそもそも、海に行った経験に乏しいボクだから満喫してるだけっていう発想が出ることを否定できないけど……。

いや、考えすぎか。考えすぎだろう。考えすぎのはずだ。

……だつたらいいなあ。

「……ちよつと立ち位置とかの確認しよ。愛梨さん、センターでいいよね?」

「それはいいんですけど……氷菓ちゃんとかずえちゃんは、歌と、ダンスと、大丈夫なんですか?」

「大丈夫ですよ。やろうと思えば今すぐでも」

「みててー……」

その場でこずえちゃんがすたん、すたたん、とステップを踏む。砂浜という場所柄、少しやりにくそうにはしているが……それでも振り付けは完璧だ。流石である。

これには愛梨さんも驚いた様子だった。ボクも同じようにやってみせると、余計に目を丸くしていた。

外側から見るとやっぱりこれはちよつと異常といえれば異常かもしれない。志希さんも似たようなことはできるけど、あれはなんとというか、脳の出来が一般人のそれとかけ離れてるっていうか……パソコンに喩えると、CPUとメモリが他の人よりランク高すぎて結果的に記憶「できている」っていうか……それも分かりにくいかな……。

……まあ何でもいいや。

「すごいですね〜! それじゃあ、私も——」

「いや、何を踊るんですか」

『アツプルパイ・プリンセス』を?」

「持ち歌じゃないですか」

「こずえもやるー……」

「やらなくていいから」

持ち歌やつても、もうとつくにマスターしてるんだからそれ意味無いのでは?」

というかこずえちゃんみりあちゃんからちよつと影響受けてない

?

積極性を持つのはいいことだと思うけど、こずえちゃんやんがやるーしたらそれはそれで色んな意味で破壊力が凄いと思う。色んな意味で。文字通り何でもこなしてしまいうさだ。

「し、白河さん、少しいいか!」

「ん?」

と、そんな話をしている間に、プロデューサーがこちらに駆けてくる。どうも慌てたような様子だ。何かあったのだろうか。

「どうしたの?」

「一ノ瀬さん見てないか!? さっきから姿が見えなくって……」

「あつ」

「今何を察したんだ!」

ああ、これ何かやらかすな……十中八九。

プロデューサーが来たってことはだいたいそういう意味だ。ボク知ってる。

「……多分今なにか実験してるか、しようとしてるから外だと思うよ」
「そ、そうか……困ったな。一ノ瀬さんが見つからないと何をしでかすか分からないし……」

そこでチラチラとボクを見るあたり、どうも志希さんのことならボクに聞けばだいたい大丈夫……とでも思ってるのかもしれない。

というか、実際ボクならだいたい分かるといえば分かる。けど……。

「今後の方針だと、ボクも晶葉もない状態で、志希さんのソロ活動をすすめてこともあるんだろうし……その時対応しなきゃいけないの

はプロデューサーなんだから、今のうちに慣れとかないと」
「それは……そ、そうだな……」

つつい楽な方に流れちゃう、か。分からなくもない。

分からなくもないがそれはそれとして、志希さんの場合は飽きたら失踪もするんだし、もうちよつと志希さんについて詳しくなっていてもらいたいところだ。下手しなくとも多分週一ペースで実験台にされるだろうし。

「それと……なんだが。少し、外を見てくれるか？」

「外？」

言われるまま外を見る——と。

「……うおっ!？」

未だかつて見たことがないくらいの人数が、会場に詰め掛けているのが見える……!」

「な、何でこんないきなり!? さっきはまだだいぶ少なかったはずだぞ!？」

「……ぶ、プロデューサー……これ何?」

「二時間か前くらいに、プログラムの変更を通知したんだ。そしたら『あの346プロの十時愛梨や凸レーションがいる!』ってことがSNSや口コミで広まってしまって……ほんの二時間だったのに、大勢押しかけてきて……」

「当日券売ったら売れて……?」

「……ご覧の有様」

……いや、まあ。その、分からんでもない。

愛梨さんは一回の公演で万越えの観客動員数を叩き出すこともあ

るほどの人気アイドル。それが唐突にこんなところに現れてライブするなんてことになったら嫌でも人は集まってくるだろう。

ボクたちなんて今まで千人超えるような会場（ハコ）でなんてライブしたこと無いんだ。当然——圧倒される。

うわああ、ヤバイ！ 緊張してきた！ お腹冷える！

「ひょうか、あたまぜんぶまつさおー……」

「ホントですねえ。うふふ、爽やかな感じ♪」

「爽やかて」

その言葉聞いて逆に緊張消えたよ。

髪も青いし瞳も青いし顔も青くってブルーハワイってか。笑えない。い。

「……逆に考えよう。この先、特に夏フェスだと今よりもっと人数が増えるんだ。今回ののは他の出演者のおかげもあるとはいえ、突発的な事態……今後のことを思えば、精神を鍛える訓練になるはずだよ」

「そ、そっか……うん、分かった」

うん……確かに、これも良い経験だ。そう思えばなんてことは……なくもないけど、少なくとも精神的な負担は大きくはならないはず。

……まあ、ボクの場合そもそも精神状態がパフォーマンスに影響することは無いんだけど。真理に達した模倣というのはそういうことである。

とはいえ、ライブ以外の模倣を必要としない状況を想定するならば、こういう訓練も非常に有効だ。必要、と言い換えてもいい。

「とりあえず、伝えなきゃいけないことは伝えたいし、俺は他の子たちと一緒に瀬さんの行方を聞いたりしてくるよ。それじゃー！」

「あ、ちよっ……」

と、引き留める間も無く、プロデューサーはそのまま別の場所へと走り出した。

いや、まあ……このライブでの目的を達成しておくのは決して悪いことじゃないし、それでいいと思うけど。

それはそれとして、プロデューサーに代わるようにして愛梨さんがこちらに近づいてくる。

……すごい迫力だ。具体的に言うと、ちやうど真正面。ボクが目線のすぐ先……雫さんのそれをこんな間近で見るとは無かったし、正直言うとボクは今、ものすごくこう、圧倒されている。

相対的に見るとそれなりってだけで、絶対数値で見るとモノスゲーインだよな……愛梨さんのお山……。

「ところで氷菓ちゃん、ちよつといいですか？」

「あ、はい。何ですか？」

「ええつとですねえ。例の、『あの』お話なんですけど……」

例の、あの——ああ、そうか、分かった。そういうことか。アレね。

確かに、よく考えたら愛梨さんもだし凸レーシヨンの三人も同じようにあつちの世界に行ったことがある人だ。志希さんたちが伝えるよりも先に何とかしてあつちの世界に行ったことのある誰かに伝えとかなきゃ、と思って、撮影で一緒になる機会の多い美波さんと凜さんには既に伝えてある。愛梨さんにもそつちの方向からちゃんと伝わってればいいんだけど……。

「えつと……愛梨さん、悪いんですけど、周りに人が多いとちよつと話じづらいことですし、人がいないところで……つていうのじゃダメですか？」

「あつ、それもそうですね。それじゃあ……えつと……どうしましよっ？」

「愛梨さん、いつも忙しいでしょうから時間が空いた時に携帯の方に

連絡ください」

例の件について話したいのはやまやまだけど、その話をするためには少し……どころじゃなく、環境がよろしくない。

愛梨さんはあまりゲームやアニメに詳しい風でもないし、誤魔化すのも難しい。ここじゃ嫌でも注目を受けてしまうし、せめてこの会場以外の場所なら、応じてもいいかなとは思っただけ……。

「スマホ……は今無いか。えっと、うちのプロデューサー経由で愛梨さんの担当プロデューサーさんに電話番号を伝えてもらいますから、それで」

「はい、分かりました。それじゃあまた今度、お話ししようね♪」

ぎゅつと手を握りに、愛梨さんがこちらに近づいてくる。お山も近づいてくる。

結構な圧迫感だ。何せ正面を見ればそのままお山がそこにあるという状況でもある。ぽよぽよふにふにゆさゆさどたぶん。すごい。愛海さんが熱中するわけだ。凄まじい母性の象徴がそこにある。いつそ顔をうずめてこのまま眠りたいような衝動に――。

「うわあああああつ!!」

「氷菓ちゃん!?!」

―― 駆られる前に、腕を用いずブリッジのような格好をしてそのまま頭を砂浜に突っ込んだ。

あ……危なかった……! 危うくお山ダークサイドに墮ちるところだった……!!

お山の道は修羅の道。セクハラで訴えられることを頭に入れて、なお行動を起こせる人間のみが突き進むことができるものだ。ボクには覚悟が足りない。ここで止まらなければ危なかった。

その点愛海さんのブレなさはいつそ清々しいほどだ。ボクには到

底真似できることではない。ボクは止まるからよ……愛海さんは止まるんじゃないか。いやどうせ止まらないか。

「だ、大丈夫ですか……?」

「い、一応……」

このくらいなら死にはしない……はず。痛いことは痛いけど。

「髪……砂だらけだけど、洗ってあげましょうか?」

「……い、いえ、自分でやります」

「ほんとにできる……?」

そーいや人に髪洗ってもらったことってそんなに無いな……とか思ってしまったけど、海のシャワーでやることでもないだろう。せめてお風呂……いやお風呂もマズいか。もういちいち考えずにおこう。

なんか最近ボクの頭もちよつとゆだつてきてるな……夏だからかな……?」

「……と、ともかく! 雑事は一旦置いておいて、まずライブのこと考えよう!」

「あんまりしんぱい……ないよ……?」

……うん、こずえちゃんに言われちゃ心配すること何にもないんだろーな……なんて、確信めいたものが湧いて来るけどさ。

それに、いつまでも緊張してなんていられない。

これはチャンスだ。愛梨さんのネームバリユーのおかげで多くの人がこの会場を訪れている。それに伴って、ボクらのパフォーマンスも見てくれる可能性は高まるはずだ。それどころか、愛梨さんのパフォーマンスのそれに匹敵するものを披露できれば尚のこと……ファンが増えてくれるってこともあるかもしれない。

なら、俄然頑張らないと。ボクの知名度が上がれば、晶葉と志希さんの知名度だつて一緒に上がっていくんだ。ここでやらなきや嘘つてもものだろう。

「あ、いたあ☆」

「あれ、きらりさん？」

「おつすおつす☆ 折角だから、みんなで円陣とかどーお？」

「あ、いいですね〜♪」

「……円陣かあ」

……身長的に大丈夫かなあ。

いや、大丈夫か、流石に。愛梨さんとも更に違って、きらりさん相手だと胸元より更に下あたりにボクの頭があることになるんだけど……。そこは合わせてくれるだろう。きらりさん、かなり気遣いの達人だし。もつとも、それはそれでやや心苦しいんだけど……。

「掛け声、どうするの?」

「いつもどおりいこーよ! 346プロファイター! で!」

「それじゃあ、愛梨ちゃん、お願い☆」

「はあい! それじゃあみんな、346プロ、ファイター!」

「二「おーっ!!」」

みんなで一致団結——やっぱりいいなあ、こういうの。

みんなと気持ちが一つになっているみたいで、楽しい……とか、嬉しい。ちゃんとボクもプロダクションの一人なんだなあって実感できる。

なんだか、心がほんわりするというか……どうなんだろう、これはこの表現でいいのかな?

ともかく、あとは野となれ山となれ。今日の前にあることを全力でやり遂げていくとしよう。

そして十数分ほどして、公演が始まった。

この公演自体は346プロの主催じゃない。ボクたちはあくまでピンチヒッターで、メインになるのは他のアーティストの皆さんだ。当然、ボクらの出番までにはまだ少し間がある。

……と思っていたけれども、その時と言うのは思ったよりも早く訪れた。配分が一人当たり一曲ということもあって、どうも回転率が良いようだ。

ボクらの一組目は、L.^{リトル}M.^{マーチング}B.^{バンド}G.^{ガールズ}。観客としてもあの唐突な演目の変更は半ば半信半疑だったようだ……が、一瞬のざわめきの後、みんなは大歓声をもつて迎えられた。

熱狂……うん、まあ、熱狂だ。というかちよつと熱狂しすぎな気もするけど、これもある意味では仕方のないことだろうか。

とときら学園は地上波で放送している番組だ。その知名度も相応に高く、出演者であるジュニアアイドルのみんなも同様。もういつそのこと彼女ら目当てで見ているような人も大勢いるくらいだ。

そのみんながこんな風に出演しているとすれば、当然こんな風に熱狂もする……ということだろう。それにしてもいささか異様に籠った熱気を発しているような気がしないでもないけど。

次いで、二組目はOrange Sapphire。きらりさんと莉嘉ちゃんにスターライトプロジェクトメンバーが混ざっているという状況は観客にほんのちよつと違和感を与えているようだ。オリジナルメンバーがいる、というのが影響しているのだろう。やや不安を感じている人もいるようだ。

しかし、そんな不安も実際に演目が始まれば消えて失せる。確かにまだきらりさんや莉嘉ちゃんには及ばない、が——それでも重ねてきたレッスンは裏切らない。二人に負けないくらいに、しかし、ちゃんと二人を主役として立てて——しゅがはさんは前へ前へ出ようとしてたけど——五人の息の合ったパフォーマンスで見事に不安を捻じ伏せていた。

そして——三組目。ボクたち三人の出番だ。

五人と入れ替わりで、勢いよく飛び出していく。同時に、およそこれまで感じたことの無いほどの大きな歓声が胸を打った。

「それじゃあ、次もどんどん盛り上げていきますよ〜！」

「夏だからこそそのハイテンポなナンバー、お届けします〜！」

「いくよー……！」

こういった、出演者が入れ代わり立ち代わりしていくからこそそのアドリブと口上。うん、やっぱりこういうのはテンションが上がる。

ところで愛梨さんが出てきた瞬間に体育座りをし始める男性客が増えたんだけど、あれは何でなんだろう？ ステージ、だいたい見えづらはずなのに。

まあ何でもいいか。

しかし、当然とはいえやっぱり愛梨さんはすごい。ボクとこずえちゃんは確かに完璧に振り付けも歌もこなせているし、そこから発展させることもできる。けれど愛梨さんは当然にその上を行く。

それは例えば、お客さんの目を惹き、一切視線を切らされることなく最高のパフォーマンスを披露する技術。場合によっては小悪魔的とすら言えるほどの絶妙なタイミングで視線を送り、あえて振り付けや歌の一節を崩す大胆さ。記憶力や成長性はややボクの方が上かもしれないが、それだけではたどり着けない領域の技術や心構えをこれでもかと言うほどに見せてくれる……！

敗北感……を感じるというのは、いささか以上におこがましい。ボクはまだ一年目の木っ端アイドル。経験も発想も、ましてや精神性も何一つとしてその背には届かない。

だから、この技術をここで少しでも吸収するんだ。いずれ自分が披露するという時のため。今後できるであろう後輩に伝えていくためにも……！

このライブは、とにかく「学ぶため」のものだと自ら位置づけていたためだろうか。必死になって愛梨さんに食らいついていくと、あつという間に時間は過ぎていった。

名残惜しくも、清々しい……得るものの多い時間だった。それは

きつと、こずえちゃんも同じだろう。

ステージから退出するまでの間、愛梨さんは、優しげな笑みでボクらに視線を送っていた。それはきつと、先達としてボクらに贈るエールだったのだろうと信じたい。

舞台袖にはけていくと共に、七海ちゃんたち三人のユニット——今回が初めての運用となる、「ファタ・モルガーナ」が駆けていく。

イタリア語で言う「蜃気楼」。あるいはアーサー王物語に登場する湖の精霊「モルガン・ル・フェイ」。あるいは三位一体の女神を意味する言葉だ。

水に関わる名前と、マキノさんの名字の「神」をかけた命名だろう。プロデューサーのセンスはこんな感じで時々蘭子さんに近づいていく。

魔女、と思うとなんだか違和感があるけれど、水辺の妖精だという風に考えると、なるほどと頷ける。

本人たちが練習していたと豪語するだけあり、そのパフォーマンスは非常に優れたものだった。クールな印象のある「夏恋 — NATS U KOI —」だが、その印象を損なうことなくしっかりと自分たちの色を出して表現できている。元々マキノさんと泉さんが比較的クールな性格をしているというのもあるだろうけど、そこにややほんわかした雰囲気の中七海ちゃんが入っていくのがある意味で功を奏した。どうしても鋭い印象になりがちなのユニットに優しい雰囲気組み込まれたのだから。

……さて、とりあえずこれでボクらの出番はちゃんとやり切ったと言えるだろう。あとはファイナーレとして、出演者で一曲歌って終了——となるわけだけだ。

(それにしてもあの二人、結局何もしなかったな)

その懸念があったのだけど、まあ流石にライブを台無しにはするまいか。

……いや、台無しにしないだけでその気になったら何でもするだろ

うけど。ともあれ今はこの状態が喜ばしい。

ボクら三人を含む複数のユニットが、司会の方の紹介に合わせてステージに飛び出していく。やがてボクたち346プロのメンバーも呼ばれ、同じように駆けだして行った。

ファイナーレを飾る歌が終わり、ステージの幕が降りる。心地よい疲労感と達成感が満ちて、自然と笑顔がこぼれた。

——そして次の瞬間、背後で轟音と共に謎の色彩が宙を舞った。

「!!!??」

「氷菓ちゃん、あれ何ですかあ?」

「……さあ」

空高く打ちあがる極彩色はその直後、花火にも似た——というよりそのものの——爆音を発し、周囲に赤や青や緑や黄色の火花を撒き散らす。

昼の空、だというのにその色合いは空の青にも負けず、むしろそれらを彩る存在として存在感に満ち満ちている。観客は思わぬサプライズに大喜びだ。

同時に、ボクはこの状況の犯人について大まかに目星は付いていた。昼の花火でこんなことなど普通、ありえない。ありえない、んだけど……。

「……でも、思ったより綺麗にできてるね」

「そうですね〜」

まあ多分あの二人だろう。どこかから大袈裟なくらいの笑い声が聞こえてくる。後でクラリスさん（カレー好き）からのお説教は避けられまい。

流星に、ボクも監督不行き届きになる……ということは無いだらう

けど、今は巻き込まれないようにそ知らぬふりをしているとしよう。実際知らないし。

「どうでしたか？ 氷菓ちゃん。今日一緒にやってみて」

と、ふと隣の愛梨さんがそんなことを聞いてくる。

聞いてはくるが……ボクの答えとしてはもう決まっている。

「楽しかった。また、いつか愛梨さんと一緒にやれたらな、って思います」

「うふふ♪ じゃあ、また一緒にライブしましょうね♪」

「こずえもやるー……」

まだそれやってたんかい。

……いや、でもこの組み合わせでも、他にやる機会あったらやってみたいな。

今回のことは良い経験になったし、愛梨さんとも仲良くなれた……と思う。こういう副次効果を狙って編成したのだとしたら、プロデューサー、結構したたかでちゃっかりしてるのかもしれない。元々、仕事のことではかなり有能だけどね。

……全くの余談だけど、あの後戻ったらやっぱり志希さんと晶葉は砂浜に正座させられていた。

どうやら水中から発射して爆発する色付き花火なるものを試してみても、実際成功だったとのこと。今まで静かにしていたのはこの準備のためだったのだという。

全く懲りない悪びれない。

33：合宿の夏、ツツコミの夏

晶葉は激怒した。必ずやかの常識にとらわれたままのプロデューサーを説き伏せねばならぬと決意した。

晶葉は社内政治がわからぬ。晶葉はアイドルであり天才ロボ少女である。けれども己の研究成果を発揮する場を奪われることには人一倍敏感であった。

「いや普通にアレはダメでしょ」

「納得いかん!!」

……というようなことがあったか無かったかは定かではないにしろ、ライブが終わってから晶葉はちよつとおかんむりだった。

まあ、別に本気で怒ってるわけでもなく、不満で頬を膨らませているだけだからかわいいものだけだ。

ライブが終わったのがだいたい5時前。流石にそれから本格的なレッスンというわけにもいかず、その後は軽い合同レッスンをして今日のところは終了。あとは自由時間ということになる。

まあ自由時間とは言っても、お風呂に入ったり食事を摂ったり、あとは寝る前にみんなでお喋りしたりというくらいだけだ。流石に今日は疲れたので、明日のためにも早めに寝ておきたいところだ。

「だいたいアレは花火の『ようなもの』であって花火じゃないから火は使っていないしいわゆる昼花火のように色の付いた煙という風でもないから見た目にも優れているぞ！ それを何故こうも注意されねば……」

「いや本物の花火に勘違いされた時点でマズいからね？」

本物じゃなくなつてそれに「類するもの」であっても割と罰せられ

るのが法律だ。今回は悪気も無かったしお客さんも沸かせられたし、初めてだったということもあつてちよつと注意を受けるだけで済んだものの、じゃなかったら今頃まだまだお説教を受けていることだろう。

次やるときはせめてプロデューサーに確認を取ってほしいものだ。多分許可の一つくらいホイホイ取って来てくれるだろう。その辺本気で有能だし。

「世の中は窮屈だな氷菓……そうは思わないか？」

「ボクに同意求めるのやめてくれる？」

「窮屈だろう？」

「いや別に」

渋い顔をされた。

何故だ。

「公にできない才能があるというのは窮屈じゃないか？」

「あー……そういう」

言われてピンと来た。そういう意味か。つまり、できること＝錬金術について隠していくのは窮屈じゃないか、と。

……つて。

「何その魔王が勇者を勧誘するみたいな語り口」

「むう。こういう言い方ならノリで同意してくれるかと思つたのだが」

「疲れてなければしたかもね」

流石に今日は疲れた。レッスンは、ライブがあったからそんなでもなかったけど……海ではしやぎすぎたのもあるし、何より愛梨さんとのライブだ。精神と肉体の両面で疲労がかなり蓄積してるのは

間違いないだろう。実際、ライブ終わりにはもうフラフラもフラフラだった。

ともあれ、そんな状態でさえなければボクだってノっていたかもしれない。

「早くお風呂入って寝たい……」

「私は少し不完全燃焼なのだな」

「とときら学園の方で散々語ったんじゃないの？」

「だからこそと言うべきだな……語るだけ語ったからこそ他にもこう……ロボを作りたい……!!」

「……そこはアイドル活動の方にしようよ」

ともあれ、そんなことを話していると、気付けばもう大浴場だ。

もう何人かは先にお風呂に入っているらしく、いくつかの籠の中に既に服が収まっているのが見えた。

じゃあボクも……と服を脱ぐと、晶葉がこちらに視線を寄越していることに気付く。

やたらと悲哀に満ちた瞳だった。

「何さ」

「いや……相変わらずだと思ってな……」

「どーせボクは貧相で貧弱でちんちくりんだよ」

晶葉だつて知らないわけじゃなからうに。

確かに直に見る機会はそんなに多くないから、改めて見ればそんな風に思うだろうけどさ……。

つい、と晶葉が端の体重計を指差した。

「……ちようどいいところに体重計がある。ちよつと乗ってみたらどうだ」

「……まあ」

まあ、改善はしてるんだ。問題は無い……はず。

そう思いつつ、渋々体重計に足を乗せる。

31kgだった。

減つとる。

「減ってるじゃないか!!」

「きよ……今日は調子が悪いだけだし……」

「キミはいつもそうだ!! 呪われてでもいるのか……!?!」

「前はそうだったけど今はそうでもないよ!」

「ならい……いや待て今何て?」

「前はそうだったけど」

「マジか」

「マジだ」

意図せずして突いてしまった核心に晶葉はドン引きし、ボクは他の原因を探るべく記憶を思い返す。

食事は前よりちよつとは増えたし、筋肉量も言わずもがな。最近
はちよくちよく間食も……そう考えたところで原因の一つに思い当
たり、近くの冷蔵庫に入っていたコーヒー牛乳を引つ掴んで一気に飲
み干す。32kgと表示された。

「よし!」

「よしじゃないが」

そのままビンをひったくられるが、記名はボクのものなので特に問
題はない。そういう問題じゃあないと言いたげな目をしているけど、
実際これで解決なんだから問題無いつたらないのだ。

「もしや前計った時もお腹に水分を入れていたとでも!?!」

「いや違うよ! 今日さ、結局ずっと泳いだり動き回ったりライブし

たり」

「溺れたり」

「してたでしょ？」

「訂正しないのか」

そこは事実なのでどうでもいい。

「ともかくそんなだったから今日は消費した水分と摂取した水分が釣り合い取れなくなっちゃってたんだよ！ 多分」

「つまり脱水症状……それってヤバイやつじゃないのか？」

「あのまま寝てたら多少は？ でも今水分摂ったからOK」

「いやそんな簡単に体に回るものじゃ……なんてキミに言っても仕方なかったな」

「まあね」

当然である。ボクの錬金術に常識は通用しねえ。

基になるものがあって適切に錬成さえすれば、体内状況を操作するくらいなんてことはないのである。

ともかく問題は解決したんだし——と浴室に足を踏み入れると、まず、ボクは合宿所にあるまじき広さに圧倒された。

右を見ればサウナ。左を見ればしゅがはさん in ジャクジー。正面には巨大浴槽。温泉宿でもないっていうのにこの充実っぷり。何かがおかしいと思わないでもないが毎度のことなのでツツコむ気も無い。346プロだしな。しゅがはさんだしな。そういうことにした。

サウナの中を見れば、クラリスさん（B80）が涼しい顔をしている。興味本位で入ってしまったのか、聖ちゃん（B82）は目を回してしまっていた。こずえちゃんは平然としている。いつものことだな。

「あつ、お疲れー」

「お疲れ様」

「ん、お疲れ様」

「うむ」

浴槽の方には、既に亜子さんとマキノさんがいた。珍しい取り合わせだな、と思いつつ、ぬるめのお湯で体を流してお風呂に浸かる。泉質のせいかボクの肌の弱さのせいか、あるいは温度のせいか……ほんの少し肌がひりりと痛んだ。いつものことである。

しかし、ああ、それにしても。

「アイス食べたーい」

「食べたらええやん」

お湯の熱さに額に汗が浮く。

「あら、知らなかったの？ 今の氷菓は禁止令が出されているのよ」

「え、何なん禁止令って……？」

『エンチャントアイス氷雪属性付与』とか言いながら一時間に一つくらいのペースでアイスを食べてな……。私は心底シビれたよ。まあお腹は下したのだが……」

「……だって暑いし」

言外に「それだけ食べるならもつと普段から食べ」と告げられているようでもあった。実際そういう意図もあるだろうけど。

ただ、こう……ボクにとっては燃料みたいなものなだけに、いざ食べないとなると、それはそれで変に不具合がとなったりならなかったりなったり……何にせよ体が求めているのは確かだ。

体が求める。アイスクリームと言う快樂を。

「もしかして氷菓ちゃんアホなん？」

「今頃気付いたのか」

「あんまり人のこと貶すの良くないと思うんですけどー」
「だったら貶されないような生活習慣にするべきだろう……」

むう、何も言い返せない。

確かに客観的に見ればボクの生活習慣は良くないだろうしその自覚もある。だからって直す気も無いけど。アイスはボクの燃料みたいなものだ。

「暑いのは分かるけどね。何にしても節度つてやつよ、節度」
「節度ね」

節度。節度——ボクの場合、守ろうと考えなくても勝手に守られてるといふか、節度を守る守らないという問題に達する以前といふか。たまにタガが外れることもあるけど、それこそ夏場のアイスくらいのものか。

「……そういえ……」

「どうした？」

「何か言いかけてやめたわね」

「……何でもない。やっぱりいや怖いし」

「何がだ……？」

……「そういえばここにいるの全員ライブの時も眼鏡かけてる人ばかりだね」、なんて思ったけど、口に出すと春菜さんが突然現れるかもしれないと思ってやめた。

常識的に考えるとありえない、ん、だが……その常識を超越したことを時折やり遂げる人だし、色々怖い。今はお風呂入ってるから全員眼鏡外してるし。

もしかしたら春菜さんはお風呂に入る時用の眼鏡とか持ってるかもしれないけど……。

ともあれそんな感じで今日のお風呂は終わった。

部屋に戻ったら春菜さんからメールが来て戦慄したのはまた別の話である。

@ ————— @

「ふう、さっぱりした」

「いい湯だったな」

それから少しして、晶葉とボクは揃って部屋に戻ってきていた。

この合宿所、元は旅館なんかの宿泊施設だったようで、基本的に部屋の割り振りは二人、ないしは三人程度がセット、ということになっている。ボクと晶葉が相部屋だ。

なお、晶葉とボクと志希さんをセットにした場合、ボクがブレーキ役をせずにそのままアクセルぶちぎって「ハードラック不運」と「ダンス踊る可能性が高いため、志希さんは監視目的でクラリスさんと相部屋になっている。今頃プラスチックが溜まっている可能性もあるが、その辺は何とか明日以降発散してもらおう。ちよつとボクかプロデューサーの負担は増えるけど仕方ない。いつものことだ。」

「さて」

まだ九時前くらいだし、時間的にも余裕があるな——なんて思っていると、晶葉がふと、カバンの中から何かを取り出した。

……何か、というか、プラモの箱だけだ。

「……それ」

「ん？ ああ、いわゆるガンプラというやつだぞ！ 知っているか？ いや知っているはずだよな。私も人型ロボットを作るのに際してマジンガーやら何やらを見て参考にもしてあああああーっ!」

晶葉がそんなことを語りながら箱を開く——と、既にランナーから

全てのパーツを切り離されているのが見て取れた。

というか、ボクが外から錬成して切り離したんだけど。

「何をするんだ氷菓!?　　というか今の『それ』って掛け声か!?　　そうだったんだな!?!」

「近くではちばちばされると寝らんないし」

「お、おのれ氷菓……切り離すところも含めてプラモの楽しみ……いやそうでもないか……?」

「そこは言い切りなよ」

「いや……そのな、組み立てる時はいいんだが、実際ニツパーでちばちば切ってる時は結構面倒だな……と……と……」

正直ボクはプラモを作ったことが無いし、言ってることはよく分からないが……そういう葛藤が生じるだけの面倒くさはあるんだろう、多分。

「何もしてないのにバリもゲート跡も無いし……正直プラモを作るのには途轍もなく便利だぞ……」

「そ、そう……そんな言うほど?」

「……塗装もできるだろう、多分」

「まあできるけど」

「おのれこともなげに……」

やろうと思えば今すぐでもパツとできるけども。

……というか晶葉、塗装までする人だったんだ……。

「モデラー……いや私はモデラーじゃあないが……が、本気で取り組んだら一日や二日で済まないものを一瞬で済ませるのは反則だろう本当に……」

「そう言われても」

「オマケにフルスクラッチだってできるとか……あー……でも塗装は

自分でやりたい……うう……この何というかこのうううううん」
「なんかごめん」

どうでもいいけどこういう時の晶葉ってなんか妙に早口だよね。
人間、好きなことに対してはだいたいそうなるもんなんだろうか。
そうかもしれない。その辺ボクにも覚えはある。具体的には開祖様
との話の時とか……。

まあ、いいか。ともあれだ。

「さて」

「おい」

次いで、ゲーム機^{Switch}を引っ張り出したボクの手を晶葉が止めた。

……何か問題が？

「今パチパチ音がすると寝られないみたいなの繊細なこと言っただけ
たか」

「言ったよ？」

「それ持ち出したということはまだ寝ないだろう!？」

「に……二、三十分やるだけだし」

「テレビに繋げる準備をしておいて二、三十分で済むか!」

むう。またも一切否定できない。

事実として、ボクは堪え性は無い方だし、その気になったら日付が
変わるまでやり続けるくらいはする。というか十中八九やる。自分
のことだからよく分かる。

「で……何をやるつもりなのかだけ一応聞かせてもらおうか」

「ゼノ剣」

「RPGとかがつりやる気満々じゃないか」

「じゃあマリカーで我慢しとく」

「ああ、そうし……我慢……？」

「晶葉もやる？」

「やらいでか」

普通に食いついて来た。結局やるんじゃないか。

「いい機会だし、他に誰か呼ぶのはどうだ？」

「聖ちゃんとか？」

「まだノビているだろう。七海とみちるでどうだ」

「いつものメンバーだ……」

「む？ ああそうか。それもそうだな……」

ぶつちやけた話、四人プレイできるゲームなら、寮にいる時は晶葉の代わりに輝子さんか美玲さん、ないしは紗南さんが入ったの四人というのがだいたいデフォである。

そして決まってボクが最下位になる。みんな適応力高すぎる。多少は勝ちの目があると思っただけだなあ。いや、そういう浅はかな考えがあるのが良くないのか。

「マリオにしよう。カートじゃない方」

「なるほど、そっちもアリ……いやちよつと待て。キミいくつソフト持って来てるんだ？」

「思いつく限りだいたい……」

「もうちよつと準備しろと言った手前注意し辛いがキミちよつとエンジョイしすぎじゃないか？」

「エンジョイする分には問題無いでしょ」

「一応仕事のための合宿だから……？」

「そこはホラ、プロデューサーも『仕事は楽しんでやろう』って言うてるし」

無論、詭弁である。でも自由時間ではあるんだから遊んだって別に

問題ないよね。

うん、ゲームやってたからって言い訳がきかないくらいに実力を見せればいいんだ。毎日のレッスンをエンジョイしながら完璧にこなして、その上で今までよりもワンランク高いパフォーマンスを見せる、それだけのこと。

向上心を失ったわけじゃない。むしろ逆。何事に関しても全力で——本気で楽しんで取り組もうと思っているからこそ、だ。

……まあ、結局遊んでるじゃないかと言われると、それこそそうだねと言うしかないんだけど。

………遊びだって全力！

「うむ……まあ、そういうことなら構わないか」

「構わないでしょ。それじゃやろー」

「うむ」

——その後、結局熱中しすぎたボクたちだけど、ちゃんと布団に入ったのはそれから数時間後。一時を回るかどうかという時間だった。

……た、楽しいから問題無い……。

@ —— @

さて、ともあれ翌日だ。

半ば寝落ちのような形で寝ることになってしまったり、寝惚けてたのかあるいは寝相のせいかな、朝目が覚めると晶葉の布団の方に潜り込んでしまったりしたわけだけど、ともあれちゃんと予定した時刻に起きることのできたので、一旦よしとする。

ともあれ——朝食を摂った後は、レッスンのための事前ミーティングが始まることになる。

「さて、みんな集まってくれてありがとう。まず、全体練習に入る前

に、このプロジェクト全体のリーダーを決めていこうと思う」

「リーダーですかあ？」

「そう、リーダー。みんなそれぞれ独自の個性を持って活動してるだろう？ それ自体はアイドルとして大事なものだけど、いざこのプロジェクト全体で一つの目標に向かって……つてなると、やっぱりみんなを纏める人が一人はいた方がいいと思うんだ。自薦他薦問わない。この人がいい、というのがあれば存分に——」

「はい☆」

「——挙手してくれ」

「おい無視するな☆」

「申し訳ない、はあとさん。流石に『まとめる』って趣旨じゃちよつと……」

「キレそ」

しかし妥当な判断ではある。

しゅがはさん、どう考えても自薦で自分をリーダーに、つて感じだろうし……その上で自分を前に前に出そうとするもんだから、流石にちよつとリーダーには向いていないと思う。

「それじゃあ、はくい！」

「はい、イヴさん」

「クラリスさんがいいと思うんですが、どうですかあ？」

「クラリスさんか……そうだね、確かに性格面では問題なさそうだ。どうか、クラリスさん？」

「まあ……そういうことでしたら、恐縮ですが……喜んでお受けいたしますわ」

「うん、ありがとう。それと——」

「まだあるの？」

「ああ。もう一つ。クラリスさんの負担を軽減するため、サブリーダーを決めようと思う」

サブリーダー……つまり、クラリスさん（ニューリーダー）の補佐ってことか。

確か、前に収録の時に美波さんに聞いたことがある。美波さんもシンデレラプロジェクトのリーダーを務めていたのだけど、無理がたつて夏フェスの時に熱を出して倒れてしまった、とか。

サブリーダーの選出は、その時の反省を活かした形になるかな。うん、いいこと——のはずだ。下剋上を起こそうって人も流石にいないだろうし。いやいるかもだけど。監視下でそれをしようとは思わないはず。

「それでは、そのサブリーダー……マキノさんを推薦したいのですが……」

「八神さんかい？ うん——みんなはどう思う？」

一も二も無く、頷いて返す。マキノさんは時々面白がってちよつとトラブルを起こすけど、そうじゃない時はいたって真面目だ。プロデューサーが今ちよつと言い淀んだのは、以前のことを思い出したからだろう。情報戦略にも長けているし、判断能力も優れている。クラリスさん、優しすぎて時々なあなあにしてしまうようなこともあるけど、それを引き締めるという意味では最適かもしれない。

同じように思う人も多くいたのか、特に否定意見も無くそのままマキノさんがサブリーダーということで決定された。

「よし、それじゃあクラリスさんがリーダー、八神さんがサブリーダーってことで決定だな。二人とも、何か挨拶があれば頼むよ」

「では——僭越ながら、今回リーダーを務めさせていただくことになりました、クラリスでございます。皆様におかれましては平時より大変お世話になっております、このような立場に選出いただいたこと、たいへんありがとうございます。リーダーとしての役割と責任を果たして参りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたしますね」

盛大な拍手で迎えられて、クラリスさん（赤面）はちよつと恥ずかしそうに席に座った。次はマキノさんの番だ。

「推薦、ありがとう。クラリスさんに足りないものを補うことができ、ということ選ばれたという信頼に応えられるよう努力するわ。この合宿中のみんなのマネジメント、任せてもらうわね」

次いで、盛大な拍手に対して涼しい顔で受け止めるマキノさん。やっぱりこうして見ると好対照だ。

優しく、しかし時に厳しく導いてくれるクラリスさん（女神）。冷静に、冷徹に……けれど確実に状況と情報を鑑みて行動できるマキノさん。二人とも年長者だけあって、非常に頼もしく思える。

続いて、さて、とプロデューサーが立ち上がった。

「今回のフェスに対しては、みんなの意気込みとしても並々ならぬものがあると思う。今回の合宿は、そのフェスに向けた大事な合宿だ。この合宿を通して、みんなのライブが一段と素晴らしいものになるよう、祈って——いいや、確信してる」

強い信頼の込められた言葉だ。否応にでも心が奮い立つ。

どうやら、ボクは思ったよりこういう激励に対して心が奮えるタチらしい。

前世だと、人に認められるとかいうことが無かったからつてのもあるだろうけど……今更それはナシだな。単にこれは、双方向の信頼の証だ。多分。

「ノウハウの蓄積ならある。分からないことや疑問に思うことができたら、遠慮せずに俺に聞いてくれ。もしも俺に分からないことだとしても、ツテを辿ってでも絶対に応える！俺もみんなを信頼しているから、みんなも俺を信じてくれ！」

「あつたりまえやん！」

「ふっ、今更だな」

それなりに長いことプロデューサーと一緒に仕事しているおかげで、ボクらだつてプロデューサーが信じられる相手だつてことは知っている。時々頼りないけど。

けれども、アイドルと——その笑顔に対する情熱が確かだというのは、誰もが認めるところだ。

だからこそ、みんな口々にその言葉に肯定の意を示した。

「ありがとう。昨日はライブと収録でそれどころじゃなかったから——改めて、今日が合宿の初日だ。残り数日、ライブに向けて全力で取り組んでいこう！」

「「おーっ!!」」

——ちなみに、水を差すようではあるが、プロデューサーはトレーナー以上にレッスンできるわけじゃないので、実質応援だけである。

この合宿所、都内からそれほど離れていないので、レッスンの折々にトレーナーさんがやってきて教えてくれる形式だ。もつとも、そうじゃない日はみんなで自主練習だけだ。

……みんなの前に立って演説してこのオチは、ちよつと締まらないかもな、と思わないでもない。

34：サマーギフト

当初想定していたよりも、レッスンはやや難航している。

……まあ、あくまでボクの想定よりも、という話だけど。実際のところ、かなり堅調に進んでいる方だとは思う。

そう、堅調には進んでいるんだ。ただ、ちよつとボクの見積もりが甘いというか、もつと上手くいくかな、なんて希望的観測があつたらなんだけど。

「二度、中断いたしましたよう」

クラリスさん（実は碧眼）の出した号令に応じ、みんなが動きを止める。

まだ止めなくつてもいいじゃないか、と言外に主張する人もいないではないが、無言の圧力によつて二の句を告げなくなっていた。

「まだ息が合っていないですね」

「流石にコンマ数秒まで問う気は無いけれどね……みんな、まだ自分の振り付けと歌詞で手一杯な部分はあると思うわ。ただ——こずえちゃん、それと志希さん」

「んにゃ？」

「にゃー……」

「……そうですね。お二人はやや、皆さんから先行しすぎているきらいがあります」

うん——そう、問題はそこだ。

二人は卓越した技量を備えているけど、惜しむらくは他の人よりも遙かに技量が先行しすぎているということ。

ソロライブか、あるいはもつと少人数のライブであればそれも問題は無かつただろう。が、今回はプロジェクトメンバー全員でのライ

ブ。重要なのは、目立つことよりも全体の雰囲気や調和させることだ。一人だけ目立ちすぎれば、それは全体の雰囲気の悪化に繋がり、完成度の低下にも繋がる。それではマズい。

しかし、理解しているのかいないのか……こずえちゃんは小首を傾げていてよく分かってない様子だが、志希さんはいつも通りの表情のままだ。

あるいは、それも含めて計算してやっているのか……ちょっと予測しきれないのが怖いところではあるけど、ボクとしてはほんの少しだけ理解できるような気はする。可能性程度だけど。

「一旦休憩を入れましょう。再開は十分後にします」

「はい」

クラリスさん（実は寝ぐせが強烈）の号令で各自が休憩を取りに向かう。それに合わせて、ボクはボクで志希さんの方に駆け寄っていた。

物陰の方——他の人からは見えづらい位置だ。これなら込み入った話もできるだろう。

「大丈夫？」

「何が？」

「ん……いや、ちょっとね。志希さん、ちょっと気を張りすぎてないかなって」

「きおう？ ……にやははは！ ナイナイ！ この志希ちゃんがそんなことあるわけないって♪」

「ホントに？」

じつと目を見つめると、爛々と輝くコバルトブルーの瞳が見つめ返してきた。

いつもの、ともすると狂氣的な色すら窺える輝きはそのまま。知性もまた同じく。しかし、その奥に僅かな迷い——あるいは、恐れ、の

ようなものを感じた。

的外れならそれでいい。けれど——その違和感が、ボクにはどうにも見過ごせなかった。

「何か、怖がつてない？」

そう問いかけると、ほんの僅かに志希さんの肩が揺れた。

表情は変わらない。けれど、その目は雄弁に動揺を表している。多分——凶星だったのだろう。

そも、「怖い」って感情は……正直、志希さんらしくはないけれど。それでも問いかける。脳裏に浮かんだ推論と照らし合わせるために。

「何に怖がつてるように見えるー？」

「ボクラ」

正直なことを言えば、的外れなこと言ってるねー、なんて笑ってほしかった。けれど、そうはならなかった。

志希さんは、ほんの僅かに目を剥いてボクの言葉に応えた。

「……ちよーつと、違うかなー」

否定する割に、その表情は優れない。その様子が、余計に確信めいたものをボクに与えていた。

「でも、前『何も言うつもりない』って言ってたっけ？」

「そうだね。でも今回は仕事に影響が出てるようだし、あの時とはまた状況が変わったし」

「心情とかー？」

「心情とかー」

「にやはは、あんなトコ行っちゃったもんねー」

「そうだね。おかげでボクもちよつと吹っ切れた」

あちらの世界に行ったことは、少なからずボクの心にも影響を与えている。

正直、一度口にしたことを覆すのもあまりはずけと人の心に踏み込むのも好ましくないけど——でも、きつと志希さんの場合、踏み込まなきゃ何も話してくれない。

ボクも、最低限距離を取ろうとしていたのは確かだ。けど、志希さんは多分それ以上に距離を取ろうとしていた。それをもう少し改善しようと思えば、ボクの方から首を突っ込まないといけない。じゃないと、この距離感は永遠に埋まらない。

「氷菓ちゃんって、猫みたいだよねー♪」

「志希さんもでしょ。でも何で？」

「近づいてったら離れてってー、離れてこうとしたら近づいてきて？」

「志希さんもでしょ」

「にやはは♪」

肯定も否定もしないあたりがなんとも——だ。いつものことと言えはいつものことなんだけど。

でも、猫か。否定できないと言えはできないかも。……いやでも、どっちかって言うとなボクもつと小動物というか痩せこけたハムスターとかそういう方向性の何かだろうけど。

……どうだろう？

「にゃあ」

「……!？」

「あ、流石に驚くんのだ」

身体をエルーンに錬成してネコミミを生やしてみたが、どうもよく分からない。志希さんの反応を見る限り、別に似合っていないとかそういう風ではないようだけど。

ネコミミエルーンのセンさんを参考にしたりしてみたんだけど、どうなんだろう。とりあえず、他の人には見えないようにはしてあるけど……。

「かわっ」

「皮？」

「かわゆい！」

「えっ、わにやつ!？」

「よおーしよしよしよしよしよおおし！ にやははは、もふもふでかわいー！」

「ギャフベロハギャベバブジヨハバ」

わっしわっしがっしがっしもふもふにふになでなでもふもふついでにもふもふ。延々と撫でられモフられハスハスされる。

やっちまった、と思った時にはもう遅い。ひたすら両手で拘束され撫でられ続ける。

コワイ！ 何が怖いって、文字通りちよつと体イジって体組織も含めてエルーンにしてるから、撫でられるとすごい心地いいのが怖い！ こ、これ、あつ、これ志希さんの技術が卓越してるから余計にマズい！ いや気分そのものは悪くないんだけどこのまま耽溺してる

とそれはそれで休憩時間終わっちゃうし！
くっ、力が強い！ いやボクが弱いだけでも。抜け出せない！
からかってみようと思つての自業自得だけど！ ぬわあああああ

ああ！

「お……オ・ノーレえええええ！」

「もふもふー」

にゃーん。

それから休憩が終わるまでの十分間ずっとモフられていた。

我ながら、尻尾まで生やしてみたのは失敗だった。

……その後、結局志希さんはモフったおかげで極めて絶好調で他を置いてけぼり。

憔悴しきったボクは絶不調ながら、今までの倍以上の疲労を感じつつもなんとかレッスンを果たした。次の休憩になる頃には半死半生という状態だったけれど。

で、次の休憩になって。

「——話を続けたいんだけど!!」

「にやははー♪ うん、いいよー♪」

ちくしょうボクがやらかしたことはいえ上機嫌だな!!

「じゃあまずその手をわきわきさせるのをやめてくれないかな」

「だーめ☆」

今度は志希さんの体組成変えるぞ。そう言おうとも一瞬は思ったが、多分それも嬉々として受け容れるだろうなあと思つて結局やめた。

割とどころじゃなく志希さん自体かなりの無敵属性だから……ボクなんか歯牙にもかけないレベルだ。言うなればハイパームテキだ。つよい。勝てない。

「じゃあこのまま話させてもらうけど」

「折角だしおひぎにカモン♪」

「ノーサンキューで」

流石にこの九割九分そのままハスハスされる流れに乗る気はない。下手するとそのままの流れでお山——いや、ボクの場合は平原か丘と言ったところだが——にイタズラでもされかねない。さっきに引き続きこれはマズい。またしても話がお流れになるパターンだ。もしかするとそれ狙いかもしれないけど。

「で——ボクの推論を語ってもいいかな」

「どーぞ?。」

「志希さんは、みんなといることで自分が『普通』になることを、怖がっているんじゃない?　ほんの少しだけど」

「どうしてそう思うのかな?。」

「ボクがそうだから」

……だからこれはあくまで「推論」だ。同じ立場にあるからこそ、僅かにその瞳の中に共感できる感情を見いだせた——と、思いたい。

だから、一応言葉としては、ボクは「そう」だけど、もしかしたら違うかも……というニュアンスを混ぜている。

「違うなら違うでいいよ。ボク、心の話については専門外だし。だからあくまで推論」

「にやはは。それで核心に近づくあたり、マジなのかな」

僅かに、志希さんの声音に真剣さが帯びられた。

「ちよーつとだけ、長い話になっちゃうけどいいかな?。」

「……うん」

「だいたい30分くらい?。」

「長すぎやしない!?!」

……でも、だからって聞かないって選択肢も無い。まずはクラリスさん（視力2.0）にしばらく離れることだけ伝えておくでしょう。ボクらのレッスンに関しては何れほど心配は要らないというのは分かっているだろうし、許可もすんなり出る……と思う。

聞いてみると、実際許可は出た。このレッスンのために、一度志希さんと話してみる……と言ったのが効いたのだとは思うけども。

さて、ともあれ話はここからだ。

誰もいないのを確かめつつ、砂浜まで一旦出る。流石に他の人に聞かせるのは躊躇いがある。

「あたしね、ちよつと前まで留学してたんだよねー」

「帰国子女だったよね。アメリカ？」

「そつちの方だったと思うよー」

これ覚えてないな。いや、覚えててももう意識の外だな。

そこまで興味無かったのか、もしかして。

「でもあんまり歯ごたえなくってきー？ 普及、普遍化、単純化、量産化、簡単にして単純にして均質化してー。そういうの、飽きちやつたんだよねー」

「まあ飽きるだろうね、志希さんなら。それに——」

「——自分もそんな風に均質化されて普遍化される気がするんだよね」

……だろうね。

科学、化学、ばけがくあるいは薬学、そういった専門的な学問は、最終的に一般人に「分かるように」するためのものとも言える。

勿論、専門的な分野を専門的なまま突き進み、第一人者として研究の道に携わるということもできる。けれど最終的には、やはり普及化に動かなければならないことになるだろう。

例えばテレビだとか、あるいはパソコンだとか——そういったものを広く一般に普及させたのは、世の中の科学者、化学者たちの功績が大きい。

それがつまらないことだと言うのなら……志希さんからしたらそうかもしれない。いかに効率化させるかなんてことを追求するわけだし、徹底的に単純作業になっていくだろうし。

「周りに理解されるようじゃあ、ただの凡人でしょ？」

「ボクにはちよつぱり理解されかけてるかもしれないけど」

「ひよーかちゃん是比较的あたしに近いからねー。さもありなん？」

「そこまで近いかな」

「んー、考え方とかじゃなくって境遇とか、能力とかね？ まあ、結果考え方も似ちやったかもしれないけど。にやはは♪」

「境遇……？」

「んー……ま、そこはチョコツとだけ」

……前から少し思ってたこと——志希さんは、ライブの度に誰かを捜してる。

例えば、それが家族を探しているのだとしたら？

ライブ会場に、家族の誰かが来ているのではないかと思っているのだとしたら？

ボク自身、そうしているフシはある。もしかすると、実の母親が見に来たりしていないだろうか。実の父親が何か勘づいたりしていないだろうか——とか。

まあボクの場合、そもそも見つけ出そうとするのが、前世の母親と同じように「ざまあ」するためというやや後ろ向きな理由ではあるんだけど。我ながら陰湿だ。

「ひよーかちゃんも同じでしょ？」

「……そうだね。そう考えることはあるよ。もし錬金術を使えなくなったら——って」

ボクの力は、言うなればあちらの世界から持ち込んだものだ。こちらの世界にいて唐突に消えて無くなってしまうという保証はどこにも無い。こちらの世界で過ごす中で——何の力も持たないごく普通の人たちと接する中で、もしかすると錬金術が使えなくなるかもしれないという危惧を抱いたことはある。

……まあ、十数年と過ごす中、大して能力の減衰が無いことで、別にそんなことは無かったと気付きもしたけれど。

正直に言えば今でもたまに思う。アイドル活動に際して、ボクの錬金術——というか、正確にはそこに付随する構造解析と模倣——は大いに役に立っているけれど、それが無くなればボクはただのか弱い生き物だ。そうなってしまったら、みんなに見捨てられてしまうんじゃないかとか……そういうことを考えることが、まあ、割とある。

錬金術ができなきゃ、ボクはただの小娘だ。残るのは精々見た目くらい。それだって、錬金術が無けりやもうちよつとみすばらしい。こしばらくの筋トレや走り込みで得た体力や筋力はあるけど、それだって一般人の平均を下回る程度。歌ならできる……かも、くらいかな？

普通の人と一緒にいることで、「今までできたことができなくなってしまうのではないか」という不安を感じる。

その一点に関しては、多分、ボクと志希さんは同じ、なのかもしれない。あくまで推論だけど。

「だよねー」

「ボクができることの殆どは錬金術由来だしね。それができなくなったらもう殆ど何もできないもの」

「でも、あんまり怖がってないよねー？」

「今はね。だって、怖がってもしょうがないじゃないか。そもそも、ボクが暮らしてたのってその『普通の人』ばっかりの孤児院だよ。もしその仮説が事実ならボクは今頃ただの人だって」

そうじゃないってことは、つまりそういうことだ。

人の才覚は、他人との付き合いそのものには影響されない。

「あたしの知ってるやり方はねー？」

「うん」

「冷たく、冷たく……冷たくした脳味噌に、アドレナリンをトッピング♪ だから、あつたかいは邪魔なんだよねー。あつたかいと、なーんにも考えらんなくなっちゃう」

「……本当に邪魔？」

「どうだろうねー？」

「——本当に、邪魔なの？」
「んにやっ」

「ギフトッドは、『一般的には』孤独で、だからこそ天才性が保たれると思われてるけど、志希さんはその一般論にのっかる人じゃないよね？ それこそ、『周りに合わせて自分のレベルを落とす』ことに繋がるんじゃないのかな」

その言葉が出た瞬間、ボクは意を決して志希さんに抱き着く。僅かに沈んだその表情に光が差したのが感じられた。

——本当にそれが邪魔だと思ってるのなら、志希さんはすぐにボクを振り払いにかかる、はず。けれど、そうはしない。

しばらく、そのまま頭を撫でられ続けた。

優しく——さつきよりも、ずっと優しく。

「暖かい？」

「うん。あつたかいねー」

「……頭は、まだ冷たい？」

「……うん。不思議だねー♪」

「他の人もきつと同じだよ。ボクだけが特別なんじゃない。晶葉だってそうだし、クラリスさんもイヴさんも七海ちゃんもみちるさんも、みんな、みんな——同じだよ。誰といたって、志希さんの頭は冷えたまま」

「うん——そうだね♪」

さつきも言ったけど、志希さんは、大概規格外だ。

一般の尺度に当てはめて捉えられるほど、小さい人じゃない。それは一般に言われるギフトッドとしての尺度も同様。

孤立していて、孤独で、だからこそその天才性が維持される——そんな風に矮小化されるべきじゃない。

だからこそ、問題が表面化した今、それを口にしなければいけない
と思った。

……思っただけだ。

思っただし、実際それが成功したようなんだけど。

「……あの、志希さん？」

「なーにー？」

「……暖かい通り越して……暑いんだけど……」

「にやはははは♪」

いやにやはははじゃなくって。

ボク、上から抱き締められた格好になってるから志希さんの体温＋
日光＋砂浜＋海からの照り返しですごいことになってるんだけど。
汗とか。意識とか。

休憩前からそのまま話に入ったから水分補給もしてないし、ちよつ
とどころじゃなくマズいような……？

「いやその、もうちよつとだいたい暑いというか、汗すごくって……そろ
そろ放して……」

「だーめ♪」

「いや、ちよつ……」

「にやはは、だーめー♪」

「骨まであつたためられるウ!!」

うおおおおおおおあつちいいいいいいいい!!

水! 誰か水……いや水じゃなくてもいいからせめて冷風を!

もうこの際海水を遠隔で錬成してなんとかするから! せめてもつ
と涼しくして! お願い!!

@ ——— @

「おい何で氷菓が死んでるんだ」

「色々あつて？」

「色々つて何だ」

色々である。

志希さんにナデナデされて暑さに死にかけ、気分転換に食事を作ると申し出たら、「氷菓ちゃんが作ると食べ過ぎて太るので」と言われて許可が出ず、ついでに足を攣った。

志希さんの件に関しては成功したと言つてもいいかもしれないけれど、それ以外は色々と空回り気味だ。そろそろボクは一回死ぬかもわからんね。毎度のことだけど。

ともあれ、夕方。今日のレッスンは終了だ。

志希さん以外にこずえちゃんもちょっと足並みが揃っていないかったが、そもそもあれは、あの子が加減するということを知らなかったがために起きたことだ。実際、手加減さえ覚えれば徐々に徐々に息も合つていった。

元々、プロジェクト内の人間関係は円滑な方だったというのもあるし、プロジェクトそのものの方針として、後の活動のためにユニットの枠組みにとらわれないレッスンを元々していた——というのもある。志希さんところこずえちゃんの先行さえなんとかなれば、特に問題無くレッスンはこなせるのだ。

それはそれとしてボクは死んだが。

「まあいつものことだから構わんが。おい氷菓、そろそろ夕食だぞー」

「ボク作ってない……」

「いや作ってないのは関係なく食べる」

なんか色々やる気なくなつた……。

最近どうも料理が趣味になつてきている感があるから、その機会が失われると狼狽える悪癖がついたのかもしれない。本当にボクは精神

薄弱だな。

「はあー……」

「おーいあんまり気落ちするな私が志希のターゲットにされる」

「いーじゃんいーじゃん♪ たまにはいーじゃん？」

「いーじゃん……」

「疲れと気疲れでいつも以上にダウンーになっているな……」

「いや実際疲れるよ……」

是非とも晶葉もボクと同じことやられてみてほしい。ボクと同じようにはならないかもしれないけど死にそうにはなるから。

「なあ志希、何をしたんだ？」

「ナーイシヨ♪」

「質問を変えよう。氷菓、何をされたんだ？」

「もう志希さんが何かしたのは前提なんだね」

「二人でいなくなつてすぐじゃないか。そう考えるのが自然だろう」

毎度毎度思うが、エリクシアの中でも晶葉は割と苦勞人氣質である。だいたいボクとローテーションする形でだけだ。

ダブルボケに対して一人がツツコミの比率だ。別にボクたちは芸人じゃないんだけどもうそういう感じでバランス取れてるしいいや……。

「で、何があつたんだ？」

「説得したら」

「モフモフ」

「ちゃんとわからせようとしたら」

「なでなで？」

「うん、全然わからんぞ!!」

そりやそうだ。ボクも何が起きたかなんて説明し辛い。

状況と状況が絡み合って結果何か妙な化学反応起こしたような感じ、としか言いようも無いし……。

「ひよーかちゃんかネコミミ生やしてねー」

「ちよつと今ここでやってみろ」

「晶葉にやるけどいい?」

「無理は言うまい。はははは」

ちくせう。

「あ、そうだ。ドラフトかハーヴェインにはなれないの?」

「ハーヴェインは骨格から変えないといけないし。ドラフトは……足りないでしょ色々」

「まったくだ。どこから肉を持つてくるかという話になってしまう」

「んー残念。でも見てみたかったなー♪」

「やらないからね」

エルーンはまだ尻尾生やしたり耳生やしたりくらいで大丈夫だったからいいけど、他は前準備をしないと難しい。

前準備をしてもする気はないけども。だって絶対イジられるし。どこをととは言わないが。

「あ、そうだ。その内あつちとの通話ができるようになってみみるから」

「なに?」

「ホントに?」

「うん、ちよつと時間はかかるけど、試作品なんとかして作ってみようとしてるところ。あつちで仲良くなった人たちもいるだろうし、今度愛梨さんたちに渡そうと思って」

「……そこまでできたのかキミは?」

「できるのだボクは」

何せあの開祖様に認められたのだから。仮にでもできないなんて言えはしない。

実際それができるからこそこの役が任されたとも言える。あちらとこちらの異世界間通信を可能にするというのは、ボクにとって新たな責務と言える。

「まだ実験段階だから、端末は一つだけだけど。繋ぎたいなら適当に誰かと繋いでみるよ?」

「本当か? では私はハレゼナと話したいところだったんだ」

「あたしはしばらくいいかなー」

「そう?」

「その代わりにひょーかちゃんモフモフしたいかなー♪」

「早急に誰かと話すか決めて欲しいな!!」

……志希さんへの説得は概ね成功したと言えると思いたいのだけど、ボクに対するこのモフモフ欲求を覚醒させてしまったのは失敗だっただろうか。

少なくとも成功とは言い辛いだろうけど……まあ、他の成功で帳消しになると思えば、それでいいか。

ボクじゃなくて本物のネコとか奈緒さんとか他のモフリやすい人を選んでほしいところだけど。

35：夜食部隊

「こちらAlchemy。現場の潜入に成功した。オーバー」

深夜を回り、合宿所に暗闇が満ちるころ。ライトも点けずにボクはある場所へと訪れていた。

月から差す薄明かりが部屋を照らすとはいえ、その程度の明かりでは普通に動くにはやや心許ない。しかし、構造を解析することで周囲の様子は手に取るように分かる。暗いとか明るいとかボクには関係ないのだ。

『こちらBroadcast、誰か来る気配はありません……！ オーバー！』

『声が少し大きいですよ』

『あ、ごめんなさい……！』

この作業のキモは、バレないことだ。大きな声を出してしまったことは少々マズいが、未だ誰も起きてこないという点に関しては安堵した。これで安心して作業が進められる。

『こちらCroaker、戸は開きません。大丈夫っぽいれすよー』

『Alchemy了解。こつちも急ぐよ』

『こちらDominion……あの、このコールサインは必要なのですか？』

「いや、ぶつちやけただのノリ」

『ノリなのですか……そういえば焼き海苔も食べたいなと思ったのですが』

「はいよー」

既に下準備の殆どを終えている今、コトは巧遅よりも拙速を貴ぶ。しかし、コンロか何かで炙れば出来上がる焼き海苔程度なら、別に

作っていったって問題は無いだろう。個人的にも欲しい。

『それにしても楽しみれすね、ツケ茶漬け』

「Cr^ッoak^ロer^カ、情報の漏洩に注意されたし」

『すみませーん』

——さて、なんというか、ちよくちよく小芝居も入れてはみたが、別にボクらは違法行為をしているわけじゃない。ただ、ちよつとこつそりと夜食を作っているだけだ。

ことの発端は数時間ほど前のこと。「みんなの体形維持のためにも、大量に食べることは勿論、食べる姿もできるだけ見せない方がいい」として夕食を終えたボクらなのだが、クラリスさん（㊦天㊦）とみちるさんは普段の食事量よりも遥かに少ないそれに若干の不満を覚え、七海ちゃんは魚の量に不満を抱き、ボクは料理を作れないことに不満を抱き……と、そんな四人の利害が合致したことで構築されたのが、この深夜飯用特殊部隊である。

食後、「疲れたから」という理由で早めに眠り、示し合わせた時間になんとか起床。みんなを起こしてしまわないよう細心の注意を払い、こうしてキツチンにやってきたのだ。

なお、献立はある程度サラツといけるように、白身魚をタレに漬けて込んだものを使ったツケ茶漬け、それと甘めの卵焼き。少なめと言えば少なめだけど、夜食であまり食べすぎるのも、明日の朝食を思うとよろしくない。みちるさんやクラリスさん（胃がオーバーザエボリューション）の場合はそれでも関係なく普通に食べるかもしれないけど、七海ちゃんはちよつと厳しいところだ。健康にも良くないし。

ちなみに今回はボクも食べる。流石に数時間も空くとなると少しお腹がすいてきた。胃の容積は小さいかもしれないけど、その分すぐに空になるとも言えるわけだし。

「……………ん？」

不意に、ぽてぽてという音と共に何らかの気配が近づいてくる。まさかあの三人の監視の目を縫って……!? と一瞬は思ったが、それもありえない。まさか、と思いつつ振り返ると――。

「うわっ!?!」

「もっ」

——そこには、巨大な毛玉が存在していた。

いや、毛玉じゃない。ブリッツェンだ。この暑さのせいだろう。心なしかしなびている。

「……ど、どうしたの?」

「もっ……」

「変な時間に目が覚めて、お腹すいて喉が渴いた? イヴさん起こすのも忍びないから自分だけで来た……って」

そうか、思えば今日は、みんなに付き合ったおかげでブリッツェンも食事量も少なめだ。元からかなりふくよかな体形をしていることあつて、今のしなびた感じはちよつと不憫な感も覚える。

「……おたべ」

水分補給ついでに、と、キュウリとヘタを取ったトマトを差し出すと、表情はいつものふもつとしたものとは変わらず……けれども、嬉しそうに瞳を輝かせた。

特に疑ったり躊躇ったりというような様子は無い。ボクの手から受け取ってもつしやもつしやと食べ終えると、その毛の艶がちよつとばかり戻ってきたようにも感じられた。

「もっ」

「ああ、うん。どういたしまして」

会釈するようにして頭を下げ、去っていくブリッツェン。その後ろ姿はさつきよりも満足げだ。

さて、ブリッツェンが満足したならそれはそれでよしとして、次はボクのことだ。

ダシを入れて温めたヤカんと、大皿にのせた卵焼き、ツケを入れたタッパーと薬味、焼き海苔、それからおひつ。

ごはんはこれでちよつと消費してしまふ計算になるけれど、残った分は冷凍して、明日の朝に向けて新しく炊き直したから量については問題無し。洗い物も済んだ。

「よし……」

「誰だ！」

「……!？」

あとは全部台車に乗せて運び込むだけだ。そう思った瞬間、食堂の扉が開くと共に明かりが灯る。同時に、ボクは物陰に身を隠した。

——バレた!？」

声から察するにプロデューサー……間違いなくバレてはいる。しかし、誰がいるかはまだ分かっていないらしい。

じゃあ、このまま逃げる……いや、安易なことじゃ逃げられなさそうだ。とすると、ここはどうするべきか……。

「おい、大人しく出てこい！ 返事をしろ！」

！
できるわけないだろ！ こっちはバレたなくなつて必死なんだよ

というか怖いよ！ 普段は優しいから今一瞬、本当に本人か分かんなくつて血の気が引きかけたよ！

でも、まあ、不審者がいるかとも思つたらこうもなるのかな。そう思うとこれも理解できるか……。

「怖いカクソツタレ！ 当たり前だぜ、アイドルプロデューサーの俺に勝てるものか！」

プロデューサーはプロデューサーという職業を何だと思ってるんだ？

それともそういう風に言っただけで自分自身を奮い立たせてるとか……考えてみたらありそうかも。

だとしても厄介なことには変わりない。さて、こうなるとどうした方がいいか……。ボクであるかどうかは別にしても、「誰かいる」ってことはもう既にバレてるわけだし。

……この際この流れに乗って矛先を変えてみるか。声色使って、ん、ん、と……。

「試してみるか？ 私だって特殊部隊だ」

「なにッ!？」

ここから離れた端の方を錬成、小さな音を立てて「誰かが動いた」ことを察知させる。その瞬間、プロデューサーが何かを察知したように動き出し——いや何であの人あつちの世界の人みたいなのがでてるんだよ。どうなってるんだ。意味わからん。

「大事なアイドルを危険に晒したくなければ黙って元の部屋に戻るとだ。OK?」

「OK! ——と見せかけてこうだ!」
「!？」

——しかし、プロデューサーは持ち前の身体能力でそのままこちらに向かつてきた!

確かに、さつきは別の場所から音を出したはずだと言うのに、ひよいと机やらを乗り越えてまっすぐにボクの方に向かつてくる。視線

が合ったその瞬間、プロデューサーの動きが止まった。

「え。し、白河さん？ 特殊部隊がいたはずじゃ……」

「……残念だったね。嘘トリックだよ」

「もしかしてあの声白河さん……？」

「……うん」

「……何してんの？」

「……これ」

動きの止まったプロデューサーに台車に乗せた食料を見せると、それで察したのか、軽く顔を手で覆った。

「……詳しく説明してくれないか？」

「ダメだ」

「ダメ!？」

「ゴメン嘘。ホントは夜食作るつもりだった」

「……だろうね」

まあ、これを見ればそういう風にしか思えないだろう。実際見ての通りだし。

しかし、何でプロデューサーはこんな時間に起きてきたんだか……。

「大石さんから変な音がする、って内線がかかってきたと思ったらこれだよ……何で急にこんなこと？」

「みちるさんと」

「だいたい分かった」

理解の早いプロデューサーを持ってボクも鼻が高いよ。

まあみちるさんの名前を出した時点で分かるだろうけど。この晩はずっとパン断ちしてるようなものだったし。

「そういうわけだから、見逃してくれない？ ダメ？」

「うぐっ……う、上目遣いされても、そこは、屈しないぞ俺は」

それはもうちよつと抵抗らしい抵抗の姿を見せてから言つて欲しい。

……まあ、頼んだつて難しいのは分かつてるんだけどね。示しがつかないつてのはそうだろうし。となると理詰めで行くか。

「みちるさんもクラリスさんも、いつもあんな程度で満足できるお腹じゃないよね。いつもとあんまりにも勝手が違う状況なんだし、明日、お腹がすいて力が出ないつてことになったら問題だよ。他のみんなには悪いかもだけどさ、あくまで名目は『体形維持』なんだし……モチベーションを維持するには、許容しておいた方が良いと思うんだけど」

「でも、そこで例外を作るとなあ……他の子たちに不公平感を植え付けたくないんだよ」

「だから、そこを黙つてもらえれば誰も気づかなくて不公平も感じづらいでしょ？ みんなは体重維持できる、こっちはフラストレーションが解消できる。誰も損はしない。プロデューサーが黙つてくれるだけでいいんだよ。ね？」

『ね？』つて」

「ね？」

他に言いようも無いし。もうこうなつたらごりごりにゴリ押しするよボクは。

「……取引しよう。今黙つててくれればこの鯛茶漬も付ける」

「ううっ!？」

「オマケに今ならウインナーも焼こう。タコさんの形のヤツ」

「ぐうっ……!」

「なんならおにぎり作ったっていいんだよ……？」
「……オーケー。分かった。俺は何も言わない」

陥落^{オチ}たな（確信）。

おにぎりとお焼きたとウインナー。深夜に急に起こされて、すきつ腹などところにこの組み合わせを提示されて動じない人がいるとは思えない。というかボクの知ってる人に関してほだいたいそんなんだ。先生とか、おじじいとかの乗組員とか。ふふふ、人間は胃袋を掴んだ者勝ちよ。

「くくく、プロデューサーも話が分かるようでありがたいよ」

「悪そうな顔してるなあ」

「一応悪いことしてるようなもんだしね」

まあ正確には（体に）悪いことだけど。

体に悪い食材があるんじゃないやなくて体に悪い食生活があるんだ、という話があるが、はつきり言って今回のこれは紛れもなくそれだろう。炭水化物！ タンパク質！ 健康的な生活は死ぬ。……ボクの体形にはむしろこのくらいしないとダメな気がするのだけれども。

「ちなみにおにぎりの中身何が好きなの？」

「たらこ」

「明太子じゃないんだ……」

「辛子明太子そんなに好きじゃないんだ」

「ふうん……まあ、ボクも辛いのはちよつと苦手かもだけど」

気持ちは分からなくもないけれど。ボクも正直辛いのもってそんなに好きじゃないし。

でも別に食べられないわけじゃないんだよね。ちよつと苦手なだけで。カレーくらいのほどよいものならいいんだけど、度が過ぎると痛みにしか感じないし。

「あれ？　そういえば前に好き嫌いは無いみたいな話を……」
「あー、うん。食べられる範疇のものだと、しいて言えば辛いものがちよつと苦手ってだけ」

食べられないわけじゃないし、料理として提供されれば実際食べる。ただちよつとボクには合わないかな、とはなるけれど。

逆に、甘いものはかなりの高頻度で食べている。主にアイスだけ。比較的辛いものが苦手というのは、だからこそなのかもしれない。

「それにしても、白河さんがあんな凛々しい声出せたなんてな。思わず騙されたよ」

「そうっ？」

「普段、その口調なのにウイスマーボーイスって感じで……なのに、あの何かの少佐だか大佐だかみたいなの声聞かされちゃ流石に別人だ！　って思うさ」

「……まあ、そのために声色変えたわけだし」

騙された、と言うならむしろ計画通りだ。どうやら思ったよりも上手く行ったらしい。映画を観て学んだ甲斐があったようだ。

「さて——それじゃ、夜食にしよう、プロデューサー」

「そうだね……何で今ちよつとカツコいい風に言っただい？」

「……演技力強化？」

——ひとえに、ただのノリである。

まあその辺はそもそも、特殊部隊的なノリでこの作戦を執行しちゃってる時点で、という話でもあるが。

この日の夜食は、ちよつぴりにぎやかだった。

「遅かったじゃないか……」

「うわああああああああっ!!」

「おいうるさいぞ近所迷惑だ」

そして、夜食を終えて戻ってきたその時、ボクは自室の椅子に悠然とした様子で腰かけている晶葉と鉢合わせるのだった。

ナンデ!? 晶葉ナンデ!? 確かに寝てたはずでは!?

何なのだこれは!?! どうすればよいのだ!?!

「くくく迂闊な……いけないじゃあないか氷菓! 寝ていたやつが起きてきちやあ!」

「こっちの台詞だよ」

なんかいつもより三割増しでノリがひどくない?

深夜テンション?

「い、いつの間起きて……」

「キミが出ていってすぐに——」

くつ、そんなところからバレてたというのか!?

「志希から電話があつてたたき起こされた」

「起きてはなかったんだ……」

「当たり前だろう、こんな時間だぞ?」

「クラリスさんが起きたせい?」

「うむ、そう言っていたな」

クラリスさん（寝起きに弱い）はさあ……もうちよつと周りに気を配ってから出てきてくれないかなあ……。

……いや、もう今更言ってもしょうがないってことは分かっているんだけどね。

「で、何をしていたんだ？ ん？」

「食べても太らない系の人たちとお夜食」

「ふらやましいことを」

「って言われてもな」

たとえばここで誘ったとして、果たして晶葉はちゃんと食べられるのか。

そもそも体重を増やさずにいられるのか、甚だ疑問である。

「ま、こうなると私が何を言いたいか分かるな……黙っていてほしければ……」

「エロ同人みたいに……」

「するわけないだろう。だが——フッフ、キミにはこれを手伝ってもらうぞー！」

と、啖呵を切って机の上に放り出したのは、ほんの15cmほどの人形——いや。

「……プラモかよ」

「然り、さつき作ったツダだ」

「欠陥機じゃん」

「けっ……!?! いや待て！ ツダは欠陥機などではない！ そもそも当時ザクよりも高い性能を出せていたし後のドムなどの傑作機の叩き台にもなったのだぞ、ツダは決してゴーストファイターなどではなく——」

「全力出したら分解するのは欠陥機だよ、晶葉」

「の、後に出た技術で補強すれば」

「ツダである必要性ある？」

「ぐむ」

どこぞの少佐が乗り移ってない？ 大丈夫？
興奮のせいか顔が赤くなってる上に早口でちよつと怖い。

「でもカッコいいだろう？」

「そこは否定しないけど」

「そうだろう!？」

「ボク、普通にガンダムとかの方が……」

「にわかめ!!」

「いやにわかだよ」

暇な時に晶葉に見せられたり奈緒さんに見せられたりしたテレビシリーズ見ただけじゃそのくらいしか言いようが無いよ。いや、真面目な話。

「で、どうしたいのさ」

「これを専用カラーにしてだな、ここをこう……この凶面通りに改造して」

「ふうん……」

ミサイルやらを増やしてスラスターを増設、ごりっごりのドッグファイト専用機に改造、ねえ。

晶葉だけじゃできない……ってわけでもないんだろうけど、まあ、ボクがやった方が楽しだし正確か。

色合いは、衣装で使ってるみたいなおレンジと赤、等々……いや、これ、兵器の色……?」

……まあいいか、どこかの彗星は赤いし。主役だって、あんなトリコロールカラーの兵器なんてあるわけないし。そんなもんだと思えばいい。

「はい、できた」

「おおっ!? ……おお、塗装がハゲない」

「いや一目散に剥ごうとするのはどうなの?」

「いやな、普通に塗装すると、こう、ブンドドする時に腕や何やを動かすと塗装が剥げるのだ。その点これは凄いな……剥げるどころか成形色から変わっているようだ。だというのに艶消しまで含めて完璧……」

「……もう寝ていい?」

「まあ待て。夜食を食べてすぐ寝ると消化に悪いぞ。もう少し付き合うといい」

「それ晶葉が語りたいただけじゃなくて?」

「それはその通りだがそれはそれとして」

今度はやけに珍妙な説得にかかるようになってきたな……。

まあ、思えばこれも晶葉にとっては好きなこと、好きなものではないのだろうから、こうやって熱くなるのは理解できないではないんだけど……それにしたっていつも以上に熱が入ってるのは、やっぱり深夜テンションだからだろう。

「氷菓! I G L O O はいいぞ!」

「ごめん、ボクGガン派なんだ」

「……そ、そうか……」

園の子たちとアニメを見る時、専門チャンネルで特集組まれてた時に見てそれつきりだったかな。けど、その分強く頭に焼き付いてる。しかしこの話になるたびにみんな若干言葉に詰まるのはやめて欲しいところだ。

ちなみに奈緒さんはO Oが好きだという。菜々さんがXで比奈さんがビルドファイターズだっけ。たまに三人と話したりアニメ見たり見せられたりするけど、こういう話もしてた。

「ちなみに好きなのは……？」

「……シユピーゲル」

「……そ、そうか……」

だから言葉に詰まるのやめてくれないかな!!

好き好きってことでいいじゃん！ ボクだって色々言ったんだからそこは正直に言ってもいいんだぞ!!

「まあいい、だがこれでかねてよりの計画も……ふふふ」

「計画？」

「うむ。この中身に様々な機構を搭載して自律機動や遠隔操作ができるようにしたいと思ってるんだ」

「……それは他のロボットとは違うの？」

「そうだな、あれは私が動かし方などを分かっていたらいいと思ってるが、こちらに関しては『誰でも使える』ところを——つまるところ、夢のプラモバトルの実現を目指していく方向だな！」

「そ、そう……頑張って」

内部に機械部品を使うってことは相当な値段になるよね、それ……。

その上バトルってことは壊れる可能性が高いってこともあるし、採算取れるんだろうか？ そもそも普及できるのか？ 今でいうロボコンとかと同程度の知名度に留まるんじゃない……。

いや、よそう。ボクの勝手な予想で晶葉を混乱させたくない。

「というわけでだな、今から朝まで作ろうじゃないかと！」

「いや、寝ようよ」

「以前から作りたかったものが出来上がってるのを見ると興奮で眠れん」

「こんなにもボクと晶葉で意識の差があるとは思わなかった……！」

ボクの方はやること終わったしそろそろ眠たいんだけど！

とうかそれ明日じゃダメなのか!?

……いや、多分晶葉は晶葉で眠いのを我慢しすぎてハイになってしまってるだけだ。実際のところ、眠いのは間違いないはず。エアコンが効いてるから気温はそれなり程度だし……少し押せば多分大丈夫……うん、行けるはず。

「あんまり言うとな布団に引きずり込むよ」

「ほう、できるならやってみるといい」

「じゃあお言葉に甘えて」

「むっ!？」

錬金術の応用で、晶葉をこちらに引き寄せて布団で包み込む。肌ざわりなんかもいい具合に調整して眠るのに最適なものに変えておいた。

「こ、この程度のこと……ま、負け……負け……」

「寝よう？」

「負け……け……スヤア」

勝った！ 深夜編・完ツ!!

「ふわ……」

……とかやって遊んでたら、ボクも眠くなってきた。

お手製のよく眠くなる毛布を使って引きずり込んだというのも原因だろうか。ああ、何にしても、お腹が満たされた上に毛布に包まれていたら、もうダメだ。睡魔に抵抗できそうにない。

「おやすみ……」

そのままボクは意識を手放した。

翌朝、ボクと晶葉が同じ布団の中から発見され、プロデューサーは志希さんの実験台となって静かに息を吹き返した。

@ ——— @

さて、そろそろ夏合宿も大詰めを迎えつつあるが、みんなのレッスンもまた同じように佳境に入りつつある。

当然、モチベーションはみんな変わらず高いまま。今回のサマーフェスのみならず、今後の活動に関してもまた、強いやる気を覗かせていた。

……が。

「……おかしいね」

「ねー」

問題、と言えるのかどうかは分からないけれど、ボクと志希さんには他のメンバーと比べてちよつとした差異が発生していた。

例えば、今後の活動計画。七海ちゃんと泉さん、マキノさんの三人が事前にレッスンを行っていたように、予めプロデューサーの中で「この組み合わせで行こう」と考えているようなメンバー同士は、既に色々と合同レッスンを始めている。他を言えば、例えば……さくらさんとみちるさん、こずえちゃんとの三人とか。亜子さんと芳乃さんとしゅがはさんとか。他にも色々あるのだけれど——ボクたちに関しては、実のところそういう話があまり入ってきていないのだ。

ソロ活動を重点的に、という可能性はある。しかしそれだと元からの方針とまた食い違う……何か、ボクたちの与り知らないところで思惑があるのは間違いないと思うのだけれど。

「よく……分からない……ね……」

「うん……」

ボクたちに、今後のユニットの組み合わせについて聞きに来た聖ちゃんもこれには困惑顔だ。

何せ、多分その内何かあるだろうと思って何も聞かずにいたのに、他の人にはちゃんと報せていたわけだ。何かある——もしくは、何かあった、というのは間違いない。

「プロデューサーに……聞いてみる……？」

「まあ、いずれね。今日はいいよ」

「そだねー。でも、その内どーにかしてくれないと現状に飽きちゃうかも♪」

「それならそれでエリクシアの方で新しいことやる計画でも立てる？」

「にやは。それいいかも♪」

まあ、なんとかなるとは思うけどね。多分。

プロデューサーだってお飾りってわけじゃない。むしろ自分から率先して動いてバリバリ仕事をこなす社畜の鑑だ。たまには休めと思うけど。

ともあれ、そんなわけだしこうしている裏で、死なない程度に何かは考えているはずはある。そう信じたいという側面もあるけれど。

「まあ、とにかく今日もなんとかやってこう。今日こそミス0回、とかできるといいけど」

「逆にフォローして完成度高める方向はどうかにやー？」

「……も、もうちょっと、一般的な話をしてほしいな……って思うんだけど……」

「あたしたちには難しいねっ♪」

「一般的が……難しいって……何……？」

そんなものなのだ。特にボクらに関しては。

「聖ちゃんもこっちにおいで」

「おいでおいでー」

「む……むうーりいー……」

「乃々さんの持ちネタ取ってあげないでよ」

「大丈夫大丈夫やればできる聖ちゃんはできる子だから♪」

「うう……」

ほめちぎられて恥ずかしいのか、赤い顔をこちらに向けてくる聖ちゃん。しかし、ボクも志希さんと同じように笑顔を返すことしかなかった。余計に顔が赤くなる。

それにしても、この夏合宿で志希さんもボクと晶葉以外に対してもかなり打ち解けられたな、と思う。

前も打ち解けてなかったわけじゃないんだけど、他の人と接しても決して天才性が損なわれるわけじゃないと主張したことで、更には、というか。

ボク以外にも、プロデューサーや晶葉も諦めずに一緒にいたという件も大きいだろう。だからこそ、他のメンバーともすんなりと距離を詰められるようになったのだと思う。

それに加えて、志希さんの元々の眼力の鋭さも良かった。みんなの良い部分を見て「この子はこういう長所があるんだな、才能があるんだな」と認識できるようになったことで、打ち解けるための下地を自ら作り上げることができるようになった。これができるだけでだいぶ違う。自ら離れていく頻度が少なくなるのだから。

それでも飽き性には変わりないので状況に変化を作らないといけないのは変わらないんだけど。

「と……ころ……で……♪ ひよーかちゃんは何か言うこと無いかなあ〜？」

「……次は誘うよ」

「オッケー♪」

それはそれとして。

例の件について事前に志希さんには何の説明もしていなかったのは確かかわけで、バレてしまった以上はこの夏合宿の間志希さんも例の計画に加える必要が出てきたわけだ。

昨晚のうちにプロデューサーと晶葉と志希さんにバレてしまったことを鑑みるに、今後もバレない保証はないというか……いつそ志希さんが自ら明かしに行く可能性すら浮上してきたのが現状である。

しかしそう簡単に他の人もこの話を知られるわけにはいかない。まだプロデューサーは男性だし志希さんは少々食べても別に問題無い（主に自家製お菓で）し、晶葉はもつと別のところに興味が向いているからいいとして、他のメンバーは夜食なんてことになったら普通に体形が変わってしまう危険性があるのだから。

何としてもこのまま隠し通しておかないと……!!

レッスンの合間の休憩時間、志希さんと話しながらボクは改めてそう決意した。

36：どうありたいか

合宿最終日。今日はいつになく、みんなの間に緊張感が生じていた。

数日の共同生活と濃密なレッスンを経て、ボクたちは今回の全体曲に対する理解を深め、完成度を高めていった。

——のだけれど、やつぱり、17人という大人数のせいか、ここに至るまで通し練習の中で一切ミス無し、というようなことは一度も無かった。合宿でみっちり取り組んだだけはあつて、完成度……見栄え、という意味では既に完成形に近いのだけれど、ただ、本番では環境も変わるので、どうしてもその完成度からはやや落ちる。

ステージ衣装を着て通し練習をするような機会も少ないだろうし、フェスの規模もこれまで経験したことが無いくらいに盛大だ。どうしたってパフォーマンスの質に影響する部分は出てくるだろう。それはもう仕方ない。

だからこそ、ここで一度完璧に仕上げておくのが大事になる。一度でも完璧にライブの流れを通してやれた、という事実はそのま自信に繋がるし、ライブの時の緊張感も少しは緩和してくれる。

今日は、実質そのためのラストチャンス。緊張感の一つも漂って当然と言えば当然なわけだ。

そして、そんなラストチャンスの中でも、曲のラストサビ終わり、みんなのパフォーマンスが終わって実質的なセンターの五人がキメる、その瞬間。

他のみんなは自分のダンスに集中し、しかし、意識が五人の方に向いている、そんな中。ニューウェーブとホーリーウィッシュの五人は、しつかりと、はつきりと——ミス無く、完璧にこの演目を演り遂げたのだった。

「やつ……」

「たあああああつ!!」

思わず、みんなの口から歓声が飛び出した。
何度も何度も、それこそ何度もやってきて初めての完璧な成功だ。
喜びもひとしおだろう。

一方のボクは練習場の床で静かに息を引き取った。

「また氷菓が死んでいるわ」

「いつものことだな。転がしておけばいい」

なんだか以前にもましてボクの扱いがぞんざいになってきたような気もする。

でもいいんだ。事実、いつものことで騒がれてもそれはそれで困るし、ある意味これもみんなと今まで以上に打ち解けられた証なのだと思う。思えば何ともない。

でも急に構われなくなるとそれはそれでなんだか寂しい気もする。
さて。ああ、しかし、それにしても――。

「あ、づい、い」

夏の日中、お昼も近づく午前11時。いくら合宿所にクーラーがあるとは言っても、運動した直後はやはり暑い。この酷暑とすら言える気候の中では尚更だ。

潰れ（たカエルのように倒れ）る！（汗が）溢れる！（水分が）流れ出る！ 今日ボクは限界だ。

「おみずー……」

「ありがと、こずえちゃん……」

持って来てくれた水をゆっくりと飲み下す。気温よりやや低い程度のぬるめの水だが、疲れ切った体にはちょうどいい。

冷たすぎるのも人間の身体には悪いとも聞く。だからこのくらい

でいいのだ、たぶん。

でもアイスが恋しい。燃料が足りない。

「みんな、お疲れ！ 差し入れにアイス買ってきうおおおおおっ
!?!」

「氷菓ちゃんが体操選手みたいな動きを!?!」

イヴさんとブリッツエンと芳乃さんがどこからともなく取り出した「10」の札を挙げた。

どこから持って来たのだろう。いや今はそんなことはどうでもいいんだ。重要なことじゃない。

「そいつをこっちに渡せ……!!」

「白河さんはこっちね」

「やっグワーツ!?!」

ひよい、と、まるでビーチバレーのボールでも渡すかのように気軽にプロデューサーが渡してきたのは——大玉のスイカだった。

か……勝てないッ！ じゅ……重力に負けてしまうッ！ MUU
URYYYYYYYYY!!

「平気でしてー?」

「す……スイカは守り切つ……ガッ」

果たしてボクは今日一日で何度息絶えることになるのだろう。流石にもうプロデューサーからの扱いもややぞんざいになりつつある中、ボクはそんなことを思った。

まあそれはともかく
閑話休題。

こんな大玉のスイカ、勿論だけどボク一人で食べきれものじゃない。みんなにスイカバーやメロンバーが手渡されていくのを恨めしく思いながら、全員に行き渡るようにスイカを切っていく。心持ち

ボクの方は大きめで。

「……できたよー」

「わーい」

ややテンション下がりが気味なボクと対照的に、みんなのテンションは上がり気味。釈然としない思いを抱えながらも、とりあえずみんなの分を配膳し終えた。

「じゃあ、いただきます」

「いただきますー!」

「……なあ白河さん、俺の分小さくない?」

「気のせいだよ」

「気のせいかあ。ところで端っこだから可食部少くない?」

「気のせいだよ」

「気のせいかあ」

真っ赤な嘘である。

ボクからアイスを奪った罪は……重い。

まあスイカ30gとかそんなもんだけど。

制限してくれ、と言った手前渡せないことは理解できなくもないし道理だとも思う。だけどそれはそれとして折角の機会なのだから欲しかったというのが正直なところ。

帰ったら浴びるほど食べてやる。

「ほら、氷菓ちゃん、笑顔! 笑顔だよお!」

「笑顔ね……」

ニヤア……。

「怖いよお!!」

「不機嫌になるといつでもこんな感じだな。まあ前の時よりマシだが」

「あの時は酷かったもんね〜」

生理の時の話か。確かにあの時は、我ながら結構ヒドい態度だったとは思う。

「まあ、氷菓がマジギレしたらどうなるかわからんというのが正直なところだが」

「そうかな?」

「いやそうだろう」

まあ、確かに本気で怒ったってこともあんまり無い気はするけど……。

「あー、なんだか本人が気にしてるとこにスパツと切り込んで思いつきり傷つけたりしそ☆」

「それよりは、感情のまま泣いて暴れてそうね……前例としては」

「いや……私はもつとこう、冷たくなるというか容赦なくなるというか……そんな気がするが」

口々にボクが本気でキレた時のことをあーでもないこーでもない、と妄想するみんな。

いやホントやめて。特にマキノさん。前回の時のアレを引き合いに出されると色々弱い。自分でも割と錯乱してたと思ってるのにこれは無い。うぎゆう。

「そもそも何をしたらそんなにキレるのさ、ボクは」

「目の前でアイスをボツシュート?」

「お、恩人を馬鹿にしちゃったりとか……」

「私が汚きたねえ花火になる」

「テロリストが孤児院を占拠とか、いかがでしょうか……」

いやそりやどれも怒るけど。

後半は何だか明らかに世界観というか世界線というかその辺超越してきてない？ 大丈夫？

「でもさあ。怒ってるのが想像できないって言うならこずえちゃんとか志希さんとか、芳乃さんとかもそうじゃないかな」

「せやなー……あ、クラリスさんはええの？」

「クラリスさん？」

……クラリスさん（烈）？

「ぷるぷる。ぼくわるいあいどるじゃないよ」

「氷菓ちゃんが壊れた！」

「……お、怒ってたとところを見たことがあるんでしょうか……」

一年とちよつと前の話だ。その頃から東京に来ていたクラリスさん（18）は、ボランティアということで時折あおぞら園に訪れるようになっていた。

一方その頃、小学校を卒業したボクは、卒業祝いということでおじじのところに行って食事ついでに無断外泊をしたりなんかしていた。先生たちは黙認していたが、目に余るといふことで叱りにきたのがクラリスさん（JK）である。それはもうこっぴどく叱られた。当たり前と言えど当たり前である。女子小学生が勝手に無断外泊なんて、心配されるどころの話じゃない。当時新人だったバカ姉などパニツクに陥るほどだったのだ。むしろ叱らない理由の方が無い。

そんなわけで今でもボクはクラリスさん（母性）に頭が上がらないのだった。

「でもやっぱりあの三人が怒るとこ想像できないよお」

しやくしやくとスイカを齧るさくらさんの言葉に、この場のみんなが同意を示した。

実際、そんなシーンがあるのかどうか。いや、多分この場合どう考えても無い方がいいんだけど……。

……うん、実際見たくないな、そういうシーン。たぶん、辛くなる。

「それにしても」

「何？」

「スイカバー食べたかったなあ」

「そこは『スイカ美味しいなあ』とかとちやうんかい」

それはそれ。

これはこれ。

@ —— @

さて。

そんなこんなで、決して少くない収穫を胸に合宿を終えて帰ってきたその翌日。ボクは暗闇に包まれた更衣室で目を覚ました。

「……にゅ……う？」

妙に体中がだるいし筋肉痛もひどい。こうなる前後の記憶もいまいち曖昧で、自分が何をしていたかを思い出せない。寝ボケてるだけ、なんだけど……。

スマホを確認すると、時間は午後九時過ぎ。どう考えても寝すぎである。

「んぬ……」

寝ぼけ眼を擦りながら、フラフラの足で電気を点けに向かう。途中、自分の荷物に躓いてコケた。泣きそう。

なんだようなんだようと愚痴をこぼしながらもなんとか電気を点けると、さつきまで眠っていた長椅子の上に何やらメモが残されていることに気付く。

——先に帰るね☆ さくら・泉・亜子

……あー、そうだ。思い出してきた。今日、いつものレッスンが終わったあと、ニューウェーブの三人に自主レッスンに付き合ってくれって言われたんだ。

時間もあつたし、別に断る理由も無かったからボクをトレーナー役として自主レッスンしていたのだけど、それが終わったら体力の限界でそのままぐっすり、つてところか……。

最近、色々とノンストップだったからちよつと疲れが溜まっていたのかもしれない。

とりあえず、電話をかける。

『はいはい、もしもーし。お疲れ氷菓ちゃん』

『お疲れ亜子さん。何で起こしてくれなかったの』

『……え？ 今まで寝てたん!?!』

『寝てたん……』

『ホンマか工藤』

『ホンマや工藤』

流石にこれは寝すぎだろう。自分でもびっくりだ。

『いやー、ごめんね。あんまりにも気持ちよさそうっていうかぐっすりだったから』

『うん』

『つい写真撮ってT w i t t e rに上げたった』

『何してくれてんねん』

『いやPちゃんに許可は取ってるんよ?』

「そういう問題じゃないねん」

思わずため息が出てしまう。が、もうやってしまったものはしょうがない。

今は悪い反応リプライがついてないことを祈るだけだ。

『今度何かおごるから、それで許して！ ね？』

「ダツツ」

『うぐう……が、ガリガリ君とかにまからんかな……』

「いいけど」

『ホント!?!』

「明日から亜子さんの食事から何の前触れも無くおかずに一品消失します」

『あはは何それ……いや冗談やろ?』

「そう思うならそうなんだろうね。亜子さんの中ではね」

『よっしゃオゴるでー!!』

「わーい」

後になって考えてみると、このときの「わーい」はいまだかつてないレベルで感情が込められていない「わーい」だったと思う。

むべなるかな。

『もう遅いし気を付けてなー。それじゃ』

「うん、おやすみ」

通話を終え、Twitterを開く。と、亜子さんのアカウントにアクセスするまでもなく、タイムライン上に亜子さんのツイートとボクの写真が上がっていた。

……う、うおお。ものすごい勢いでツイートされている……。前もこんなことあったぞ、そういえば……。確かにボクは自分の写真上げるってこと稀、というかほぼ無いに等しいけど、何でこんなに拡散

されるんだ。オフショットってそんなに貴重なのか……？

いいねなんてその倍されてるみたいだ。ああ、もう見なかったことにしよう。精神が削られる。

どうせ拡散されるとしても今日中が限度だろう。明日か……遅くとも明後日にはみんな忘れてるはずだ。多分。

変に反応するとそれはそれでまた更に燃料を注ぎ込む結果になるし、何も言わず何もせず、というのが一番だろう。

……わすれる!!

「はあー……」

何にしても、時間も時間だしそろそろお腹もすいた。

寮の食堂はもう無理だし、近所のコンビニでも行つて何か買って帰るしかないかな……。

荷物を持って更衣室を出ると、廊下も既にだいぶ暗い。こんな時間だ。よっぽど残業しないといけないという人以外はもう帰つてるだろうし、消灯くらいするだろう。

しかし、こう……いつも明るい場所が暗いと、逆になんだかちよつとわくわくしてくる。

非常灯に照らされた、雰囲気のある薄暗い廊下。幽霊の一つも出てきておかしくないようにも思える。小梅さんなら大喜び。さくらさん他うちのメンバーの大多数は怖がってしまうところだろう。

幽霊。幽霊——ううん、実際の幽霊も見たしなあ。フェリさんとか。怖い怖くないの以前に、もし出会ったら「あ、どうも」くらいで終わっちゃいそうな感じすらある。

そんなことを思いながら事務所を出る——と。

「……む？」

「あ、どうも」

幽霊——ではない。美城専務だ。

服装は、いつも通りのスーツ……なのだけど、上着は脱いでオフイス用のブラウスだけだ。最近は何でも随分と暑い。額には多少汗がにじんでいた。

「ひよーかおねーさん、お疲れさまでござえますー！」

「あれ。仁奈ちゃんも。お疲れ様」

隣には、やや薄着の仁奈ちゃんが一緒にいた。

仁奈ちゃんのご家庭はどうもやや複雑——というか、お仕事が非常に忙しいらしく、なかなか仁奈ちゃんと一緒にいられないのだという。

そんなわけで、時折専務室にいらるといのは、前に知った通り。今日は専務の帰宅に合わせて仁奈ちゃんも、という向きのようだ。

「君は……今から帰りか？ 感心しないな、こんな時間に徒歩で帰ろうとするのは」

「すみません。寝過ぎしてしまいました……」

「おねぼーさんでござえますー？」

「事務所の中でかね」

「フェスに向けて忙しくて。レッスン後にうたた寝をしていたら、この時間に……」

流石に専務だけあって状況はよく分かっているのか、「そうか」とやや難しい顔をした後は専務さんも何も追求しなかった。

こちらとしても、好きでやってる……まあ、好きでやってる、わけだし、そこを咎められるのはちよつと違うと思うけれど。

専務さんはそのまま自身の腕時計に視線をやった。

「白河。これから時間はあるか？」

「え、はい。今から帰るだけだったので……」

「そうか。では少し食事に付き合いたまえ。これから市原と行くところ

ろだったのだが……少し話したいこともある」
「どうでござえますか？」

無邪気に問いかけてくる仁奈ちゃんに微笑みを返す。そういうことなら渡りに船だ。

「それじゃあ、お伴ともさせていただきます」

「そうか。では、少し待ちたまえ。タクシーを呼んである」

「はい」

そんなこんなで、数分ほどしてタクシーがやってきた。

本当にちよどいいタイミングだったらしい。専務さんの行くお店というのだから、期待してもいい……はずだ。そう思うと、俄然楽しみになってきた。

その後、ボクたちが入ったのは、タクシーで少し走った場所……奥まった路地の先にある小料理屋だった。

ごく小さな店舗だ。どうも予約専門店らしく、人の姿もまばらだった。

「何でも頼みなさい。代金はこちらで持つ」

「あ、はい。それじゃあ……ええと」

「仁奈は卵焼きでござえますよ！」

「じゃあ、ボクも同じもので……」

「……もう少し良いものを頼みなさい」

と言われても、良いものというのがいまいち分からない。

この場合の「良いもの」とは、やっぱり値段が高いものになるのだろうか？ ボク個人としては、卵焼きや出汁巻き卵は好きな方だし、それ自体は決して他の何かに劣るものじゃないと思うのだけど……。

「じゃ、じゃあ……この、おでんを……」

「……私が注文しよう」

「……すみません」

ダメだ。ボクには贅沢が分からない。

例えば……なんだろう。サーティワンのキングサイズなんかを山ほど食べるとか……あ、家電を揃えるのもいいかも。あとは……ええと……ソールシャルゲームのガチャを山ほど回す？

けど、食事で贅沢かあ……ウナギとか……のどぐろ、クエ、シロアマダイ、アワビ、イセエビ……う、ううん。魚介類ばかり出てくる。七海ちゃんの影響だなこれは……。

「ひよーかおねーさんも仁奈と同じものでもいいんじゃないですか？」

「いや……私は君にも言っているのだが……」

確かに、メニューを見れば卵焼きは値段的には下から数えた方が良い部類ではあるけれど。

それに、仁奈ちゃんはまだ9歳。ボクよりもっといいものを食べるべきではある。食べなければ食べないほどボクみたいに胃が小さくなっていくからね！

いや、まだボクの年齢からでも遅くないはずではあるんだけども。

しばらくして店員さんが持って来たのは、これまでに見たことも無いような豪華な——しかし華美というほどではない、見た目からしてなんとも上品な料理の数々だった。

これがまた、非常に美味しい。天ぷらの衣はサクサク。一口噛めばふわっと、溶けるように旨味が口の中に広がっていく。生湯葉を使った出汁巻きは、食感の違いを楽しむだけでなく、出汁そのものの優しい旨味を堪能させてもらった。海鮮——主に鯛を石焼きにしたものは、素材本来の味を楽しめるからこそその下処理に手間をかけたというのが伝わってくる出来だ。調味料は最低限。しかし臭みは感じら

れず、淡白なはずの白身を主役としてきちんと引き立てている。有体に言つて、美味しい。

「白河」

そんな風に、仁奈ちゃんと一緒に料理に舌鼓を打っていると、不意に専務さんがこちらに語り掛けてきた。

「はい？」

「少し、今後の話をさせてもらいたい」

「あ、はい。箸を——」

「止めなくとも構わない。それよりも……君に頼みたい仕事がある」「な、何でしょう」

思わず、姿勢を正す。

専務さんに言われるなんてよっぽどだ。こういう話、ボクからすると初めてだし。

いや、普通他の人もそうそうないだろうけど……楓さんとか、クローネの人たちなんかはもしかするとあったりするんだらうか？
何にしても、心構えをちゃんとしておくに越したことはないな、うん。

「白河水菓、君をプロジェクトクローネに迎えたい」

「はあ。分かりました」

……間を置かずにそう返答すると、専務は目を丸くした。

「……あ、あの。専務さん……？」

「い……いや。すまない。こう、簡単に話が進むと思わず……」

「……そう、ですか？」

「君は、この話に対して何も思わないのか？」

「いえ……あ、でもスターライトプロジェクトでの仕事は継続させて
いただいても構いませんか？」

「無論だ。それを踏まえて言っている。このサマーフェスが終われ
ば、スターライトプロジェクトは次の段階へと移るだろう」

「はい、ユニットの組み換えやソロ活動の本格化が予定されてると
……」

「そういうことだ。君は——いや、正確には君ともう一人、一ノ瀬志希
の二人が、他のメンバーに先駆けて外部のプロジェクトに関わって
いくこととなっている」

「あ……もしかして、今後の予定が白紙だったのって」
「そういうことだ」

もつとも、断られるなら対案もあつたが、と専務さんは一つこぼし
た。

しかし、なるほど。ボクと志希さんの予定が無かったのって、そう
いうことだったのか。杞憂に終わって良かった……。

今この段階で使いにくいとか他の子に絡ませづらいとか思われた
ら、それはそれで問題だし。個人的にもだいたいぶシヨックだっただろ
う。そうじゃなくなつて良かった。本当に良かった。

「あ、そうだ。スターライトプロジェクト内でのユニットの組み換え
については、どうなりますか？」

「問題無い。今のところこちらの話を優先しているだけでいずれは必
ずやる、と根津から聞いている」

「分かりました。問題ありません」

「大きく負担が増えることが予想されるが」

「今後、もし……その、もうちよつとランクが上がったら、もつと忙し
くなると思いますので……その予行と思えば、そこまで負担ではな
い、と思います」

それに、ボクも志希さんも物覚えは良い方だ。問題が無いわけでは

ないが、それでもかかる負担は最小限に抑えられるだろう。

現段階でそれができる人材として選出してもらったのは光栄だが、その評価に恥じないようなパフォーマンスを魅せる必要はあるから……少しだけ、プレッシャーはプレッシャーかも。

「ひよーかおねーさん、困ったら仁奈に言うでござーますよ?」

「うん、その時はよろしくね」

「まかせやがれでござーますよ!」

けれど、心強い小さな先輩もいることだし、そこまでプレッシャーに思うことも無いかもしれない。

仁奈ちゃんは頼もしいなあ。

「……シンデレラプロジェクトが前身ということもあって、もう少し波乱でもあるかと思っただがな」

「それを防ぐために、ああいう組織体制にしたのでは?」

「その通りだ。が……多少の反発はあると思っただが」

今までの仕事ができなくなるわけじゃない。これまで通りやりた
いことはやれるだろうし、クローネとスターライトプロジェクト
じゃ、担当のプロデューサーが違う以上、仕事の方向性も違う。大規
模なパイの奪い合いになるってわけでもないなら、そこで反発しても
仕方ない。自分で言うのもなんだけど、一応、(体力を除き)それがで
きるだけの能力は持っているつもりだし……。

「この話は後日、正式に発表するつもりだ。ユニットとしては……橘
や、アナスタシアとのものを考えている。ソロでの活動も視野に入れ
ているが」

「志希さんは、どうなりますか?」

「そちらについては宮本とのユニット、そして……五人ユニットを考
えている。後者については一ノ瀬以外にもう一人、都合が付けばとい

う話になるがね……」

「……志希さん、捕まりますか?」

「いや。君から伝えておいてはくれないか?」

「分かりました」

……まあ、志希さんを捕まえるって容易なことじゃないし、捕まえられずに通達できてないってことでも仕方ないといえば仕方ない。きわめて気まぐれな猫のようなものだ。追えば遠ざかり、距離を取れば近づいてくる。同じく猫評価を受けたボクは少し分かる。行動パターンも多少は分かる。多分、専務さんが捜すよりかは効率は良いだろう。

「……ともかくそういう話だ。前向きに考えておいてくれたまえ」
「はい。楽しみにしています」

なんだか専務さんがやや複雑な表情をしているのは、ボクは物わかりの良いことを言っているからだろうか。

まあ、他の人なら多少渋ったりしてもおかしくはないけれども……元から計画されてたことだし、ボク個人は別段問題らしい問題を感じない。

多分、「前身がシンデレラプロジェクトである」ということを誰よりも強く意識しているのは、専務さんなんだろう。どうも、去年は随分と波乱万丈だったようだし……仕方ないとは思うんだけどね。

「——頑張りますね」

「……う、む。頑張る、か」

「?」

「いや……その言葉を口にして、後に引けなくなり、やがて己の道を見失ってしまった灰かぶりを一人、知っている」

「……?」

「最後には、魔法使いに頼ることなく自らガラスの靴を勝ち取って前

に進んだけれど——フツ、拘っているのは私の方か」

よく分からないけど、要するに「あまり気負わないように」って話かな。そういうことなら大丈夫、のはずだ。多分。

「せんむさんはよくわからないことをたまにいいやがるですよ……」
「すまないな。将来、何になりたいかを明確にしていけないといけないぞ、という意味だ」

……しかし専務さんは仁奈ちゃんに甘いな。

これがかつてアイドル事業部の活動計画を全て白紙に追いやり、独裁政治を進めようとした鋼鉄の女と同一人物なのだろうか。こうして見る分には、剛柔併せ持つ敏腕経営者のようにしか見えないんだけど……人は成長する、ってことなのかなあ。

それとも単に仁奈ちゃんみたいな境遇の子に対してはこうってだけで、普段はもつと前と変わらないのだろうか。ちよつぱり気になるところだ

「白河、君もそうだ」

「将来どうなりたいか、ですか？」

「目先のことだけではない。夢を掲げるだけでは不足だ。叶えたその先を見据えなければ、やがて張り詰めたものが切れた時に動けなくなってしまうだろう」

「そういうことなら、多分、ボクは大丈夫だと思います」

「そうだろうか？」

鋭い視線を向けつつも、やや心配そうな様子の専務さん。ボクがこのプロダクションに所属することになった経緯が経緯だけに、そういう心配を抱くのもやむを得ないことだろう。

けれども、今のボクには一つ、夢——というか、目標がある。楓さんみたいなアイドルになりたいな、という漠然としたもの以外にも

う一つ、「自由である姿を見せる」ことだ。

世の中には、ボクみたいに自由を失っている人たちがいるはずだ。流石にボクと全く同じ境遇の人はいないだろうけど。そんな人たちに「自由でいいんだよ」と示し続けること。それが今のボクの目標だ。今のボクの、ちよつと自由さの足りない考え方や思考じゃあそれは難しいけれど、いつかはそうなれるといいなと思っている。そうなれたとしたら、次はそれを「示し続ける」ことだ。一人や二人だけじゃない。十人や百人でも足りない。もつともつと……示し続けていく。それが自由を求める人たちの標になるまで。

「……いや、そう信じることにしよう」

「ありがとうございます」

微笑みを返すと、専務さんは安心したように箸の動きを早めた。

……今日のこの小料理屋での話は、思ったよりもずっと有意義なものになったように思う。

それにあの料理だ。フッフ——やっぱり、高級店というのは技術が違う！ 技法が違う！ そうなるに至った経緯も何もかもが違う！

解析にはかけ終わった。あとはいかにしてこれを模倣するか、できるかという話だ。

いいや、できるかどうかじゃなく、ボクならやれる。これで料理のレパートリーは更に増えた。

……そういう意味でも、この小料理屋に連れてきてもらったことは、いい収穫になったと感じた。

——余談だが、魚を食べて帰ったせいとか、即座に七海ちゃんに良い店に行ってきたことを看破された。

……おい、したんだろうか。

……マジで？

37：一番星の下で

望むと望まざるに関わらず、時間は過ぎていく。

一日、一日とレッスンは積み重ねられ、パフォーマンスの完成度も高まり……しかし、言い知れぬ不安を孕みながらも、夏フェスの日は着実に近づいていた。

これじゃ足りない気がする。まだやらなきゃいけない気がする……そんな不安感のもと、いつものレッスンのみならず、積極的な自主レッスンも頻繁に行って、数日。

——ようやく迎えた夏の「GOGO!! 346pro SUMMER FESTIVAL!」のその日、ボクは過呼吸で死にかけていた。

「誰かビニール袋持ってこーい」

「はーい……」

「うむありがとうござえ……これどこにあった?」

「?」

「ぜひゅ、かひゅ……」

「コレ結構マジなやつ? あ、あきはちゃん。ビニール袋使うの間違ってるらしいよ〜」

「何!? 昔はこれでいいと聞いたのだがな……」

「なんで突然こんなことになったのでしょ……」

理由は簡単だ。

今はライブ開始数時間前。じゃあちよつと外の様子見てこようかな、と思つて見に行くと、まだかなり時間があるというのに相当な……それこそ、ボクたちのライブではまだ見たこともないような人数が既に会場の外に見えたことが一つ。こちらは、前の臨時ライブの時に経験していたからまだなんとか踏みとどまった。

問題は次だ。外の様子を見ていたボクだけど、そんなボクに一つ声

がかかったのだ。「ファンの皆さんの様子を見ているの？ 関心が強くて、感心ね」と。

——その瞬間に意識が一瞬オチかかった。ボクの背後にいたのは誰であろう高垣楓さん、その人だったのだから。

褒められている。感心されている。関心を持たれている。その瞬間に意識はやや舞い上がりつつも、なんとか平静を装って接して見せた。

帰ってきたら緊張の糸が切れてご覧の有様である。

「過呼吸……って今までであった？」

「んにゃー。だいぶレアケースかな？」

「緊張やるか？」

「ふむ……私が推察するに、そういった理由も無くはないが……確か今日は高垣楓が来ていたはずだ。外を見に行つた時にちょうど高垣楓と出会って興奮して過呼吸。これだな」

なぜ晶葉はそこまで正確に状況を推測できるのか。これが分からない。

ボクは今一言も発していないし状況も一切説明していないはずなのだが。

「楓さんが出るのは知ってるけど……何かあったかなあ？」

「いや。単に氷菓が高垣楓の大ファンなだけだ」

「大ファンなんだ……」

「大ファンれすね。お部屋に行くときよくCDかけてたりしてるんれすよ」

そう、そこは否定しないし、お給料が出てからはCDも買いあさっている。

ところで楓さんの代表曲と言えば勿論「こいかぜ」だけど、ボク個人としては瑞樹さんと歌う「Nocturne」も好きだ。シンデレ

ラプロジェクトとの合同で歌った「Nation Blue」もいい。ちなみに「Nocturne」はデュオ版とユニット版とでパターンが二つあるがボクはどちらかと言うとデュオの方が――。

「……………!」

「おいまた呼吸が乱れたぞどうした!」

「ごめんなんでもない……………」

「とりあえず、落ち着いて呼吸をしましょう。はい、ゆっくり吐いて、ゆっくり吸って……………」

クラリスさん（リーダー）の指示に従って息を吸ったり吐いたり。催眠…………いや、そういう意図は無いだろうけれども。ともかく、落ち着く声と共にこんな風に呼びかけられると、どうしたって気持ちも徐々に鎮まってくる。しばらくそうしていれば、割とすぐに過呼吸は収まった。

「後々同じようなことが起きてしまえば、また同じようになってしまいますゆえー。どうぞ心を強く保っていただければー」

「うーうん、ごめんなさい。心配かけちゃって」

「言うても十分くらいで治ってるしこのくらいなら問題無いやろー。さくらも初めてのライブの時は――」

「わ、わあ、わあっ! やめてよお亜子ちゃあん!」

「にひひ」

「だよねー。初日に吐いたこと考えると、全然ってカンジ♪」
「比較対象が底の底じゃないの……………」

そもそもあの時のことを今になって蒸し返すのもどうかと思うなボクは。

今横から口出すことすらできないけど。

ともあれ、ようやくボクの様子が落ち着いてきたことを確認したマキノさんは、みんなの前に出て軽く手を叩いた。

「氷菓も落ち着いてきたことだし、そろそろリハーサルでの気付きを確認しましょう。誰か意見は？」

「今回、前奏の……ええと……たらたらたららん、という後の、歌の出かかりで入場することになっていきますけど、少し早めないと冗長に見えそうです」

「……だよ。後々全体曲に指定されるから、本来五人でやるのが適正なはずだけど……十七人だとやっぱり長いかも」

「上手二人下手二人で一気に四人ずつ出るのはどうでしょう？」

「それだと逆にわちゃわちゃしそうですね……」

ここにきて軌道修正というのも、それはそれでライブごとのアドリブっぽくてちよつと楽しいと思いはする。

しかし、いざこうして見ると、ステージの幅や舞台袖の出入り口など、想定していたものと少し違う場所が割とある。これに関して言えば、見積もりがやや甘かったと見るべきか。

この夏の酷暑の影響もあり、ステージの構成もやや変わった部分が見受けられる。必然的に、予算の割り振りも変化しているだろう。その影響で舞台そのものの形や構成が当初の——振付師さんが振り付けを考える前に予定していたものから多少変化しても、仕方ないと言えるかもしれない。

しかし、そうなるとはどうしたものか。そう思っていた時のことだった。

「お疲れ様ですー！」

「おっつかれー！」

「みんな、お疲れ様」

不意に、控室の扉が開いた。そこから姿を見せるのは……ニュージエネレーションの三人だ。

わ、と周りから声上がる。凜さんとは時折撮影を一緒にするとは

いえ、卯月さんと未央さんとはなかなか会う機会が無い。ボクとしても驚きだったが、予想外の珍客の登場にみんなも驚いた様子だった。

「御足労いただき申し訳ありません。本来ならこちらから出向くのが礼儀だったのですが……」

「あはは、いいよいいよ！ それよりみんな、調子はどんな感じかな？」

「問題ないでえす！」

「うん、絶好調……！」

「うふふ、それなら良かったです。今は……出ハケの確認ですか？」

「……なんか、思い出すね。去年、私たちもさ」

「そうだねー。美嘉姉が様子見に来てくれてね。あれ？ そういえばその時も私ら出ハケの確認してたような……」

シンデレラプロジェクト系列の夏フェスは、出ハケ確認の時に先輩アイドルが訪ねてくるという慣例でもあるのだろうか。

いや無いだろうけど。何か微妙に偶然と言いつれられないものを感じなくもない。

これで来年も同じようになってたら星晶獣の介在でも疑わないといけないだろうか……。

「まあ、いつか！ それよりクラリスさん、確かプロジェクトのリーダーだったよね？」

「ええ、はい。そのように拜命しております。副リーダーとしてマキノさんを付けていただいておりますので、負担はそれほど……」

「そっかそっか、ならいいんだ」

「実は去年、プレッシャーとストレスで美波ちゃんが倒れちゃったことがあったんです。それでちょっと心配になっちゃって」

「ご配慮、痛み入ります」

そっか、間近でそれを見たから余計に心配になったのか。

ボクらとしてもクラリスさん（背負い込み癖有り）のことは心配だし、プロデューサーからも言われてそれぞれできる範囲で負担を減らせるようサポートもしてるけど……本人が自分の疲労やストレスに気付いてないこともあるし。やっぱりもしものことを思うと、こうやって外から指摘してくれるのは大事なことはずだ。言ってくれなきゃ何も分からないじゃないかという至言もあると晶葉から聞いたし。

「今回、ニュージエネの皆さんは別ユニットで行くんですよ〜？」

「うんうん、ポジパとトラプリとピンクチェックでね！」

「ある意味、そっちで言うともんなと同じかも、ですね」

「いや〜……しぶりんは先に一発お披露目しちゃってるし私らだけじゃないかなしまむ〜？」

トライアドプリムスの活動開始はかなり前、それこそ去年の夏フェスが終わって少し経ってからになる。ピンクチェックスクールとポジティブパッションは今年に入ってから——それも、「シンデレラの舞踏会」の後からだから、ここまで大きな舞台でのお披露目となると初めてなのだろうか。春のフェスだと全員で「シンデレラガールズ」としての登場になってたし。

「まあまあ、そんなワケだし！ みんなもあんまり緊張しないで、ライブ、楽しんでいこーね！」

「二はい!!」

「はい！ 頑張りま ……あ、いつもの癖で」

「卯月……」

えへへ、と恥ずかしそうにはにかむ卯月さん。未央さん、一応こっちに向かって呼びかけてたはずんだけど……。

まあ、これに関しては卯月さんの人柄というのかな。呼びかけられたら自分のことと思っちゃって、つい返事しちゃう、みたいな。

分からないでもない。勢いでやっちゃうこともあるだろう。ボクも時々、自分に向かって何か言われてたわけじゃないのに、思わず返事して変な空気にしてしまう、みたいなことはやる。

「じゃあ卯月を見習って、みんな、頑張っていこう……！」

「はい！」

「凜ちやーん！」

こうして見ると、ああいうお互いがお互いに遠慮なし、みたいな関係、やっぱりいいなあ、と思う。

シンデレラプロジェクトそのものとしても、ニュージエネレーションとしても色々と紆余曲折もあつたと聞くし……そういう経験があつたからこそ、気兼ねなく接することができるのだろう。

……それはそれとして、からかわれて顔真っ赤になってるの微笑ましいなあとも思う。

ともかく、そんな心温まる激励をくれて、三人は自分たちの準備のために控室から出て行つた。

「……開演まで……あと何分……？」

「……五時間」

「長いね……」

「……うん」

さて。それはそれとして……待ち時間、長い。

会場到着が八時半。リハが終わったのがさつき。開演が午後三時で……うん、あと五時間。更に言うならボクらの出番まではまた更に時間がある。聖ちやんがちよつと不安そうにしているのも分かる。その間ずっと緊張を切らさないようにしておくというのも難しいだろうし。かと言って……。

「……ところで氷菓ちや」

「今日はちよつと見逃してほしいなって……」

「うむ、やめておいた方がいい。死ぬぞ。氷菓が」

「むく……」

……練習をするにも、多少問題が無いではない。

そうしたいのはやまやまだけど、本番までの練習、ボクが全部付き合ってたら多分死ぬ。

普段なら、まあ、うん、喜んで付き合う。最近は体力もそれなりについてきたし。けれどこういうタイミングでは割とマズい。

リハーサルの時点で割と消耗してるのに、これで更にエリクシアの練習＋全体練習＋個人練習のコーチ役となると……ダメだ、床で倒れる自分の姿しか想像できない。

「では、少し休憩してから全体練習をしましょうか。申し訳ないですが氷菓ちゃん、トレーナー役を」

「ん」

ともあれ、先にやることはやっておかないと。

後で体力が残ってたら……まあ、その時はその時で考えよう。今はどうしようもなく体力が足りない。

@ — @

それから数時間ほどして。

練習を終えたボクたちは、プロデューサーに呼ばれて全体挨拶のために舞台袖に集まっていた。

右を見れば先輩方。左を見ても先輩方。そして視線の先には楓さん。どうしよう。緊張感が半端じゃない。

当然とはいえ、楓さんを含めオーブニングを飾ることになる人たちは、既に揃いのシンデレラをモチーフにしたものと思われる衣装を着用している。卯月さんや凜さん、未央さんたちも準備は完了。今のと

ころ、後半からの出番となつてゐるボクたちスターライトプロジェクトのメンバーに関しては、Tシャツ姿……と、ちよつと締まらないかな、と思わなくもない。

「みんな、揃つてますかー？」

「「「はいー」」」」

愛梨さんの問いかけにみんなが一斉に応えた。隣に立っていた茜さんの声で耳が痛い。

「それじゃあ今回も、円陣を組んで行きましようか。楓さん、掛け声をお願いしますっ！」

「はい。皆さん、心の準備はよろしいですね？」

「「「はいー」」」」

楓さんに言われると、なおのこと精神的な準備が整つてくるような気がしてくる。

実際のところ、ここまで来てしまえばあとは野となれ山となれ、だろう。何としてでも成功に導こう——そういう決意があるならば、既に心の準備は万全だ。

「それでは、今回のライブもだーいぶ^らい^ぶ厳しい暑さですが、負けずに頑張つていきましょう」

「「「はい……っ？」」」

「はい!!」

「「……!？」」

……? 何か間違つたかな? みんなの視線がこっちに集中してゐる。

今日も暑いし熱中症の危険もあるし、そう思うところの挨拶も間違つてるものじゃ……。

「今の……駄洒落、よね？」

「え、ええ。そうですよ？」

「……え。駄洒落だったんですか……？」

「氷菓ちゃんも、もしかして天然……？」

……成程、駄洒落だったのか。

流石楓さんだ。ボクなんかには及びもつかないほど巧妙な駄洒落だ。そうか、ライブとだいぶをかけたのか。成程。ふふつ。

「で、では改めて、皆さん、346プロサマーアイドルフェス、今回も盛り上げていきましよう！」

「「「おーっ!!」」」

円陣の中央に、ぱつとみんなの手で形作られた花が開く。

さて——先輩の皆さんの活躍に花を添えられるよう、ボクらも頑張っていかないと。

それから数分ほどして、控室に戻るとモニタに会場の様子が映し出されていた。オープニングの「お願い！シンデレラ」を、楓さんや愛梨さん、瑞樹さんと言った面々が歌い上げている。

見れば見るほど、そのステージパフォーマンスに引き込まれそうになるけれど……今はそうしているわけにいかない。部屋の扉がノックされた後、プロデューサーが大量のペットボトルを手に部屋に入ってくる。

「みんな、喉の渇きを感じる前に水分補給するようにな。自分では気づかなくつても熱中症になつてる可能性があるから」

「「「はい」」」

「これ、一ノ瀬さんが作ってくれたらしい水分補給用のドリンクなんだが——」

「ごめんプロデューサー！ ちょっと今お腹痛くつて！」

「実は持病の癩が」

「ひ、人から貰った飲み物は手を付けないようおじいちゃんから言われてたりそうではなかったり……」

「ひどくなーい?」

「普段の行いのせいだと思うよ……」

毎度毎度プロデューサーで人体実験してることを考えると、そりゃプロデューサーが持ってきた飲み物となると警戒くらいするよ。

実際に怪しいものを飲ませた実績もあるし。

「ボクは貰うよ」

「……だ、大丈夫……なの……?」

「このタイミングじゃあ志希さんは流石にやらないよ」

大丈夫大丈夫、と先にみんなにドリンクを飲んでいる姿を見せると、安心したようにみんなもプロデューサーから受け取り始めた。

味は……何故ここまでかわるのかというくらいには良い味をしている。美味しい部類のスポーツドリンクのような感じだ。ベースになったと思われる経口補水液をより飲みやすいように改良したというような感じだろうか。単にそれだけだとつまらないからと言って何か他に改良加えてるかもしれないけれど。

「志希、これってどういうものなの?」

「んー? 経口補水液とスポーツドリンクのいいところ取りした感じ?」

「……どういうこと?」

「経口補水液って、塩分とか糖分が多く入ってるから普段からこまめに飲んだりしてしまうと生活習慣病になっちゃうとか言うでしょ?」

それを防ぐ処理をしてるんじゃないかな」

「ひよーかちゃん正解ー♪」

「へえ……」

気軽に言ってくれてるけど、簡単にオーバーテクノロジーでもって飲み物を作るのは正直いかなものかと思う。

……まあいいか、志希さんだし。いつものことだろう。

「……なあ、一ノ瀬さん。これでもうちよつと増やしたり……は、難しいかな」

「んー？ できないことはないよ？」

「流石にこの暑さだ。今ステージに出てるアイドルのみんなも、もしかしたら熱中症でダウンする可能性がある。お願いできないかな？」

「オツケー♪ じゃ、ひよーかちゃんと晶葉ちゃん借りるねー」

「む、私たちか？」

「いいけど……」

ボクたちがいる必要あるかな？ そうは思うけど、直々の指名だ。行かないわけにもいかないか。他のみんなのためでもあるし。

そう思いながら志希さんに連れられて給湯室に行くと——誰もいないことを確認するや、ボクに向き直ってこう告げた。

「錬金術、見ーせて♪」

「えー……もしかしてそういう魂胆？」

「隠しておこうという話だろう？」

「だってあたしだけ見たこと無いの仲間外れみたいでつまんにやーい」

いや、別に仲間外れにしているつもりは無いし、そもそも可能な限り錬金術については表に出す気はないから仲間外れも何も……つて感じではあるんだけど。

でも、そういう理屈で断っても納得しはしないか……別に悪用するわけじゃないんだし、今回くらいはいいとしておこう。

「仕方ないなあ」

「ありがとー♪ 組成とか教えた方がいい？」

「いいよ。さつき見て解わかったから」

適当に蛇口をひねり、コップに水を注ぐ。直後、僅かな燐光が瞬いたと思えば、その組成が完全に変容していた。

志希さんに手渡すと、興味深そうに上から下からその様子を観察している。組成その他は全く同じだと思っただけ。

「へー、これだけで？」

「これだけで。何ならもうちょっとそれらしい動作つけた方がいい？」

「そこは私も少し思うな。拍子抜けというか、もっとこう……指パッチンしたり手を叩いてみたりとか……」

「その無駄なワンアクション要る？」

そういう漫画があるのは分かってるよ。指パッチンしたり、陣を使ったり、あと手を重ねることで陣の代用にしたり。

……ボクの場合そういうのやる必要が無いから、どうしても絵面は地味になるけど、現実だもの。そんなものだ。

開祖様は戦闘の折に指パッチンしたりしてるそうだけど、あれはあれで別枠。そもそも平時と戦闘中とで色々とまた違うしね。

「じゃあ晶葉ちゃんは、これ、ウォーターサーバーみたくできる？」

「ほう、成程。全員が好きほど飲めるようにしようという腹積もりか。ふふふ、いいだろう。では……」

「では？」

「材料が無いから氷菓、頼む」

「仕方ないなあ」

直接ボクが作ればいいだけじゃ……と思ったけど、考えてみるとボ

クが知ってるのって精々アロマオゾンとかそんな感じだ。それよりは晶葉独自の技術で、材料だけ渡して最適なものを造ってもらった方がいいだろう。勿論、あんまり時間もかけてられないし、サポートくらいはするけど。

そうして適当にその場で材料を作り出すと、晶葉は手早くその組み立てにかかった。

「……しかし、あれだな。君たちは例の問題、どうなったんだ？ あの、ユニットの」

「ああ、あれ」

不意に、思い出したよう晶葉がそんな問いかけを投げてきた。

アレってこの前の……あの、専務さんの件だよ。まあ、言ったところで特に問題は無いけど……。

「ボクと志希さん、クローネに勧誘されてるみたい」

「そうなのか？」

「うん、専務さんから直接聞いた」

「クローネか……む、こちらのプロジェクトはどうなる？」

「別に辞める必要無いし並行でやるみたいだよ。少しの間はクローネの方で組むユニットの方に注力したいって話だったけど」

「えー？ つまんないとヤダにやー」

「大丈夫だよ多分。あっちも結構面白い人いるし……」

奏さんとかかなり面白い人柄をしてると思う。塩見周子しおみしゅうこさんも割と楽しいこと好きのようだし。

一番予想ができないのは……宮本フレデリカみやもとさん、だろうか。良くも悪くも何をするか想像ができない。だからこそ、退屈するってことは無い、はず。

「……少し寂しくなるな」

「別に今生の別れってわけでもあるまいし」

「春に会ってからずっとユニットで一緒だったんだ。別のプロジェクトとの並行となればこれまで通りにはいなくなる。それに、私一人だけ置いて行かれたようで、その、何だ……少し、辛くなる」

顔を俯けたまま、晶葉はそう呟いた。

……確かにそうか。晶葉の言う通り、これまで通りそのままやる、つてことはできなくなるだろう。エリクシアとしての活動の頻度はちよつと減るだろうし……。

と、そんな不安を顔に出した晶葉を見かねてか、あるいは単にいつものノリか。志希さんはボクと晶葉が並んで座っているその背後に立つと——がばりと、後ろからボクらの身体に抱き着いた。

「ぬわあ!?! な、何をする!?!」

「晶葉ちゃんは心配性だにやー♪ このこの♪」

「え、ええい、頬をつつくな!」

「でも心配性だよね確かに。えいえい」

「氷菓までやるにゆあ!」

「あたしもひよーかちゃんも、このくらいこなして前と同じくらいに三人でお仕事できるだけのキャパはあるからねー。晶葉ちゃんが心配するほど三人でいられる時間は減らないよーん♪」

「い、いや、三人でいられるとかそうは言っていないだろう!?!」

「ほぼ同じニュアンスだったじゃん」

「やーめーろーほつぺた引つ張るなー!」

えいえい。

……しかし触り心地良いな。前にボクも似たようなことやられたけど、ずっと突っついたり引っ張ったりし続けてた理由が分かるような気がする。

でも実を言うと、ボクもその辺はちよつと不安ではあったりするんだよね。

どうしてもしばらくはクローネの方に顔を出しておかないといけないから、スターライトプロジェクトの方の新しいユニットの候補からは漏れることになるし。他のみんなとの組み合わせもいずれやりたいし。しばらく離れるとそれはそれで外様感が出たりしちやわな
いかなー、とか……。

でも、大丈夫か。晶葉はどうも、それでも受け容れてくれるみたいだし。

「にへへー」

「やーめーろー」

……ところで志希さんはいつまでアレやるつもりだろう？

@ —— @

そんなこんなと色々とおったけど、ようやくボクらの出番がやってきた。

スターライトプロジェクトの出番は後半一杯。目いっぱい時間を
使う予定にはなっているのだが、今回の目玉は何よりも、「全ユニツ
トの曲が新曲であること」だろう。

一発目——ニューウェーブの三人。まだスターライトプロジェクト所属のアイドルのランクは他の先輩方に比べてやや落ちる。客席の盛り上がりはやや落ち着き気味ではあったのだけれど、新曲を投入したことで一気に盛り上がりが増したのを感じた。

手ごたえがあることを確信しながら、続いてミラ・ケーティの出番だ。しゅがはさん、元々の気質のこともあるけど、普段はそれどうなの？
と思うような言動をしてしまうことはあるけれど、同時にかなりの盛り上げ上手でもある。肇さんがしつかりと手綱を取ることでのその才能を十分に活かすことで、この出番で更なる盛り上がりが見られた。

三組目、PurelyTaile。その外見とは裏腹に、力強く……

それでいて極めて質の高いパフォーマンスに、会場が揺れた。

未恐ろしい、とはああいうのを言うのだろうか。それは勿論こずえちゃんに限った話じゃない。聖ちゃんの歌、芳乃さんのダンス。ほんの三か月前に結成したばかりという事実を思わせないような貫禄に、思わず唖つてしまうお客さんもいるようだった。

——そして最高潮の中、ボクたちの出番が訪れる。

コンディションは良好。会場の温まり方も最高。直前に楓さん含む先輩方に「頑張つて」と声をかけてもらったことでむしろ緊張と興奮で吐きそうになったが、そこはそれ。ボクだつて一応仮にもアイドルの端くれだ。気合で抑え切つてステージに出てしまえば——いつもと変わらない。そこは、ボクたちのためのステージだ。

頭は冴え渡り、冷や汗は引き、脳は必要な情報だけを抜き出して処理していく。何故あれほどまでに緊張していたのか分からないくらいだ。

どれほど緊張していようと、本番になれば即座に精神状態を平静に持つていく。今日までの経験のおかげで慣れることができた、ということだろうか。

何にしても、ボクたちの出番を成功に導くことができたのは喜ばしいことだ。

……ところで、何故観客の皆さんは初披露の曲だというのに当然のようにコールを合わせてこられるのだろうか。

それからバトンタッチして、五組目。頼子さんとマキノさんの「ナイトシーカーズ」の演目に入った。

ここまでの激しいテンションの急上昇から打つて変わつての落ちていたパフォーマンス。日が傾いて来たことと併せ、ややノスタルジックな雰囲気満ちる。

急なテンションの上下に観客もやや驚いた表情を見せるが……これもセットリストの予定通り。マキノさんの口元に興奮気味に笑みが浮かぶ。

そして、六組目。スターライトプロジェクトのユニットとしては最後の出番となったのはホーリーウィッシュの二人。

ここから再び、やや観客を盛り上げていく。これも同じく、セットリストの予定通り。本当の意味での本番は——この後の、全員での出番。

……しかしクラリスさん（持ち歌・聖歌）、ポップなアイドルソングはちよつと苦手と言っていた割に、ちやんとノリノリで歌い上げてたな。そつちはイヴさんの方が得意だから、むしろリードされてたおかげという解釈できるか。

そのことがダメとは言わないし可愛いからむしろもつとやれと思うけど、ちよつとあざとすぎない？　と思わなくもない。

さて——何はともあれ、本番の本番。

ボクたち全員での、パフォーマンスの時間がやってきた。

「——さて、ようやくこの時がやって参りましたね」

クラリスさんとイヴさんが次の衣装に着替えて戻ってきた舞台袖。ボクたちは全員、揃いの衣装で二人が戻ってくるのを待ち受けていた。

玉のような汗が浮き、興奮にやや上気した肌で、皆の顔を見回してクラリスさんが告げる。いや、まあ——興奮しているという意味では、みんな変わりないか。

この舞台で、今日までのレッスンの成果を全部出し切る。その気概だけは誰一人として変わらないのだから。

「勿論、待ちかねたとも」

「一番の晴れ舞台だものね。ふふ——でも、これからもきつとまた、これ以上のものがあるでしょうけれど」

「ですが、初めての経験というものは何事も一期一会でしてー」

うん。ボクたち十七人全員での、初めての晴れ舞台というのは、今回だけだ。

だからこそ――。

「だからこそ、今持てる力を全部出していかないと、ね」

「観客の皆さんに最高のライブっていうプレゼントを届けないと、ですぬ〜♪」

「うん……歌でも……ダンスでも……」

「笑顔で魅せていかないと、ですぬ」

笑顔で、楽しく。それはこのプロジェクトの根幹にあるものだ。

「プロデューサーも言ってたしね☆」

「ええ……このライブも、そうです。今までもずっとそうでした」

「観客も巻き込んで、最っ高に楽しむ！ やろ？」

「まほうみたいにーきらきらー……ねー……？」

「勿論だよお！ みんなが楽しんでライブしてる姿を見せれば……」

「観客のみなさんも楽しい、れすよね！」

最初のライブ、それこそボクたちはみんな、楽しむことを一番に優先していた。

そのスタンスは今だって変わらない。あの頃は、どうすれば楽しいのかも、どうするのが楽しいということかも――自分の中で納得のいく答えは一つも出せてなかったけど。

でも、今は違う。

長い人生から見ればほんの短い間だったけれど、その中でボクたちは自分たちにできることを積み重ねていった。お互いの仲も深め、ライブパフォーマンスも少しずつ進化させていった。自分だけじゃなく、お客さんも一体になって楽しむよう努力を重ねた。

ボク自身もまた、自分の人生における一つの目標を打ち立てて、何より渴望していたものを見出すことができた。

今ここで、何を不安に思うことがあるだろう。自分も、お客さんも、みんなで楽しむ。楽しませることができ。今は、その自信がある。

「うん。自由に——」

「好きなことをして、ね♪」

「パンみたいに見てる人を幸せに！」

「それはよく分かんらん」

「ガーンですね……出鼻をくじかれました……」

みちるさんそれ前もやってたけど気に入ったの？

「ふふ……皆さん、心の準備は、もうよろしいようですね」

「」「」「もちろん!!」「」「」

気を取り直して、円陣を組んだその中央に、クラリスさんが足を一歩踏み出す。それに合わせて、みんなも一緒に右足を踏み出した。

「それでは僭越ながら、リーダーとして音頭を取らせていただきます。スターライトプロジェクト、ファイターっ！」

「」「おーっ!!」「」

その号令に合わせて、上手と下手に別れて出番を待つ。その中で、ふと見上げた空に星が浮かんでいるのが見えて、思わずくすりと笑みがこぼれた。

そういえばもうそんな時間なのか。演目に夢中だったし、何よりも夏だから流石に見えないかなーと思ってたけど、六時過ぎだとかそんな時間でも見えるらしい。

一番星だろうか。でも確か一番星って宵の明星——つまり金星が反射で星に、つまり恒星に見えるもの、らしいんだけど……まあ、余計なことはいいか。

綺麗なものは綺麗だし、盛り上がるものは盛り上がる。歌っている中で、きつとあの一番星だけじゃない、もつと多くの星がここから見えるようになるはずだ。

これもある意味、星の光スターライトプロジェクトにとっては相応しい光景だろう。

……なーんて、何でこんな変なタイミングで、らしくもないちよつとロマンチックなこと考えてるんだらうね、ボクは。

「——行こう」

前奏が流れ出すその中で、小さく呟いた言葉が歓声の中に消えていく。普段のライブなら、果たしてこんなことがあっただらうか？

これも、これだけの大舞台だからこそのものだらう。その感覚をなんとなくむず痒く、同時に嬉しく思いながら、ボクたちはステージに向かつて一步を踏み出した。

番外：ろく☆ちゃんねる抜粋（1）

《346プロダクションの新プロジェクト（仮）について語ろう》

1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
今年も何かやるらしいな

ソース↓https://346pro*****.

html

2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
マジか
マジだ

3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
17人デビューとか無理やる半年以内に何人か消えるな

4 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
つかシンデレラプロジェクトの後追い感出しすぎ
一回成功したからって調子乗ってるな

5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
来週にはHP消えて無かったことにするに100ペソ

6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
346プロ終わったな

シンデレラプロジェクトの頃から危機感丸出しだったじゃん
やっぱり765プロがナンバーワン！

7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
申し訳ないが片方をsageすることで片方をageるのはNG

8 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
そもそも今の時点で絶対王者の765と比較するのが間違ってる

9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
俺は期待したいけどねー何だかんだ今まで成功はしてるんだし

10 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

つかこの17人って何か意味あんの？

これだけ多くアイドル出しますよって自慢？

11 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:***

*

HPに書いてるぞ

タロットの17番目が「星」だからだと

12 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:***

*

星の白金（スタープラチナ）ッ！

13 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:***

*

その内誰か時を止めはじめめるのか……

14 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:***

*

つまり来年のプロジェクトは22人でプロジェクト・ザ・ワールド
ドつてことだな

15 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:***

*

アホくさ

16 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:***

*

お前らプロジェクトの内容について語れよw

17 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:***

*

何も情報出てないのに語るもなにも無いと思うんですけど（名推
理）

（数日分ほど中略）

153 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:***

**

あ

情報来てる

154 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

ほんとだプロフィールと写真載ってる

155 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

おーええやん

まだビジュアルしか見れないけど見た目はなかなかいいんでない

?

156 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

外人多くない?

157 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

むっ!

このハーフの子アーニヤちゃん路線っぽくていいねエ……俺のイチオシです

158 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

また個性派多すぎひん?

159 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

>>157

趣味：錬金術って何なんだよ!?

160 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

>>159

転売ヤーやろ(適当)

161 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

** 眼鏡の子多いな
 162 会員番号774番 20XX/XX/X
 ID:*
 ** でもまあ346プロだし……(諦め)
 163 会員番号774番 20XX/XX/X
 ID:*
 ** 見た目だけ良くてもなー判断できん
 164 会員番号774番 20XX/XX/X
 ID:*
 ** でもどの子も可愛いな
 346プロのこういう子発掘する実力はマジだわ
 165 会員番号774番 20XX/XX/X
 ID:*
 ** スカウトの腕がいいんやろなあ
 166 会員番号774番 20XX/XX/X
 ID:*
 ** 961「くーださい!」
 167 会員番号774番 20XX/XX/X
 ID:*
 ** おじいちゃん移籍は前世でしたでしょ
 168 会員番号774番 20XX/XX/X
 ID:*
 ** ところでお前ら何故佐藤から目を逸らす
 169 会員番号774番 20XX/XX/X
 ID:*
 ** うわキ……
 170 会員番号774番 20XX/XX/X
 ID:*
 ** 佐藤「26歳、新人です」
 171 会員番号774番 20XX/XX/X
 ID:*

**

あつ、ふーん（察し）

172 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

くっ

173 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

すぐく……いたたまれないです……

174 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

そんなことより眼鏡の話しようぜ!!（唐突な上条）

175 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

眼鏡いらないんじゃねえかな……

176 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

>>174—175

草

177 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

>>175

上条「訴訟も辞さない」

178 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

>>175

上条「最悪の場合殺すこともあるし仕事だと思ってるから」

179 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

お前らの春菜ちゃんへのイメージなんなんだよ……

180 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

でも仕事の時とか眼鏡外すんじゃない？

ダンスとかするのに邪魔でしょ

181 会員番号774番 20XX/XX/X
ID:*

**

比奈ちゃんとかその類やしな

182 会員番号774番 20XX/XX/X
ID:*

**

佐藤から逃げるな

183 会員番号774番 20XX/XX/X
ID:*

**

ヒエツ

184 会員番号774番 20XX/XX/X
ID:*

**

実際どうよ佐藤

185 会員番号774番 20XX/XX/X
ID:*

**

かわいいと思うよ見た目

186 会員番号774番 20XX/XX/X
ID:*

**

おっぱいデカくね？

187 会員番号774番 20XX/XX/X
ID:*

**

B:ぼんつ

W:きゅつ

H:ぼんつ

だぞ

公称だぞ

どうなってるの

188 会員番号774番 20XX/XX/X
ID:*

**

わからないわ

189 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

既視感あると思ったらあれだ、キャピキャピアイドルラブリーミズキを見た時のそれに近いものを感じる

190 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

でもこんな美人がいたら口説くやろ？

191 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

いえ、私は遠慮しておきます

192 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

私たちもつとお互いのことを知るための時間が必要だと思うの

193 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>192

ド正論である

194 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

まだビジュアルしか出てないしな

まあこれからやろ

《スターライトプロジェクトのライブ見てきたけど質問ある?》

1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

適当に答えるよ

2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

誰のライブよ
3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
どこであつたん?

4 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
新人なのに行つたんだ

年季の入つたファンなのか>>1?
5 1 20XX/XX/XX ID:***

>>2
ピュアリーテイルってユニットとエリクシアってユニット

メンバーはHPの方見たら分かる

>>3
例のモールドよ

前にニュージエネとラブライカがファーストライブしてたところ
>>4

去年ニュージエネとラブライカのライブ見てからのにわか
家が近所だからあそこでやってると毎回見に行つてただけなんだ

6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
東京ばかりズルいわー

7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
地方でもあるといいんだけどなこういうの

8 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
なんかシンデレラプロジェクトと似てるって話だけどそこんどこ

どう?
9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
人どのくらい入つてたん?

10 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
先に感想とか全部書きゃえよ>>1

11 1 20XX/XX/XX ID:***
だよね……先に全部書くわ

質問にもそれで答えるからちよつと待っててくれ

1 2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

期待

1 3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

わっふるわっふる

(中略)

1 9 1 20XX/XX/XX ID:***

よし書けた

ライブがあつたのは今日の午後二時過ぎ

去年シンデレラプロジェクトがやったのと同じ会場だったからか、

一時間前くらいでも妙に人が多かった

基本的に周辺住民ばっかだったけど何でかテレビでたまに見る教

授さん?みたいな人がいてびっくりしたよ

ああいう人もアイドルとか好きなんだなーって

二時から開演で最初はピュアリーテイルから

正直文章で伝えるのが難しいけどとにかくすごかった

歌もダンスも新人にしてはすごい上手いんだけど、それ以上になん

かもうこう、神々しいんだよ

何言ってるんだおめえって思うかもしれないけど本当にこうとにか

くそうとしか言いようがない

とにかく見てくれ

ピュアリーテイルはいいぞ

2 0 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

ハーブでもやっておられる?

2 1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

なんかすごいのは伝わったけどお薬置いときますねー

22 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

お前の言っていることは分からん!

23 1 20XX/XX/XX ID:***

分かれ!分かってくれ!!

動画が上がってるかもしれない

お前らもきつと見れば分かるはずだから!!

24 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

お、おう……

25 1 20XX/XX/XX ID:***

続き←

次にエリクシアの子たち

最初に出てきた時はなんか初々しいなーって思ってたんだけど、曲が始まると一気に変わった。君ら本当に今日が初ライブなの?ってくらい

ダンスのキレはスゲエし歌も滅茶苦茶上手いし素人目に見ても一流のアイドルがやってんじやねえのかこれって思うくらいのパフォーマンスだったよ

もうこのあたりで俺の頭大混乱しっぱなし。途中なんかもうあの衣装へそ出したなーとか思ってたらもう完全に氷菓ちゃんのおなかに視線が釘付け

あの子もう細いっていうかむしろ薄いつて感じでガリツガリなの
それであれだけのパフォーマンス見せたってなるともう本当ありえん

後でプロフィール見たら140cm30kgとかだつて

ありえん

26 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

https://346prospp***.html

わ この子が可愛いなどか思いながら見てたら本当に30kgだった

軽すぎだろ……

* 27 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

ねえこの子もしかしてネグレクト……

* 28 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

やめるルオ!!

* 29 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

こんな子がへそ出し衣装でキレッキレのダンスを……うっ見たい

30 1 20XX/XX/XX ID:***

見ろ!見てくれ!!

そして俺のこの気持ちを分かってくれ!!!111!!1!

* 31 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

あいつアイドルのことになると早口になるの気持ち悪いよな……

* 32 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

やめなよ

俺らもなるだろ

* 33 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

新人がそんな上手いとかあんの?教えてエロい人

* 34 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

ほたるちゃんみたたく他の事務所で塩漬けにされてたのを引っ張ってきたとかならありうる

じゃなきや純粹に才能だろうな

もしくは日高舞

35 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

唐突なオーガはNG

36 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

765の千早ちゃんの歌とか真くんのダンスとか最初からできてる方だったと思うしそんな感じなのかねー

37 1 20XX/XX/XX ID:***

続き←

一時間後くらいに握手会

こつちも思ってたより人は多かった

一ノ瀬志希ちゃんの列が一番多かったけどあの子ナチュラルにエロいから仕方ないねって

で、この前に見た教授さん？みたいな人たち、その志希ちゃんと晶葉ちゃんって子の列に並んでたよ

どうもこの二人目当てだったっぽい……んだけどなんか氷菓ちゃんが仲間外れみたいでちよつとかわいそうになつたかな……

38 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

いや、その二人そもそもそつちの業界の人間だよ

Shiki Ichinoseでググレ論文が山ほど出るから

39 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

マジかよ

マジだったすげえ何コレ

40 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

ちなみに池袋ちゃんもすごいぞ

まだ中学生なのにロボット工学の権威に感心されるレベルのロボット作ってる

41 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
……氷菓ちゃんは？

4 2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
特に見当たらん

頭は良いのかもしれないがよく分からん組み合わせだなー

4 3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
ちなみに>>1は誰と握手したん？

4 4 1 20XX/XX/XX ID:***

全員だよ

出費はちよつと痛かったけどすげえもん見せてくれたお礼としては安い方だったよ。歌もいいし

これ証拠な↓http://img****.html

4 5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
いいなー将来プレ値つきそう

4 6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
ニュージエネの本当に最初のファーストシングルのサイン入りつてアレ今いくらだっけ？

4 7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
万超えるってき

4 8 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
ヘースゲー

4 9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
>>1は誰推し？

5 0 1 20XX/XX/XX ID:***

続き←

ピュアリーテイルはどっちかって言うと普通の人が多かったかな
こずえちゃんはおちちやくてかわいいからって男女満遍なく握手
しにいった。マジ妖精

聖ちゃんはなんかあの子と同年代の男子が多かったなあ。女性も
いたけど

芳乃ちゃんは何か爺様婆様が総出で拜んでた

5 1 1 2 0 X X / X X / X X ID : * * * *

>>>49

俺は氷菓ちゃん推しかな

なんかすげえ幸薄そうで守らなきゃって思いにさせてくる

5 2 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X ID : * * *

*

ちよつと待つて何拝むつて

5 3 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X ID : * * *

*

わけがわからないわ

5 4 1 2 0 X X / X X / X X ID : * * *

俺もそう説明するしかないんだよ……

実際見る限りじゃなんていうんだろ、茄子さん系っていつのかな

なんていうかすごいご利益を感じる

5 5 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X ID : * * *

*

>>>1あなた疲れてるのよ

5 6 1 2 0 X X / X X / X X ID : * * *

疲れてるよ

癒してほしいよ

5 7 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X ID : * * *

*

こいつマジで疲れてやがる

《【新番組】FROST その1【346プロ】》

1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
 トライアドプリムス主演ドラマ
 番組HP↓https://*****

2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
 い つ も の

3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
 また346プロがバカ映画を作っておられるぞ!

4 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
 >>3
 連続ドラマじゃねーか!!

5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
 確かにシン撰組ガールズは面白かったけどさあ

ありや瞬間的な面白さであって週1のドラマとかでやっても色々
 と違うんじゃないかな……

6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
 PVとかHPとか見る限りじゃシリアス路線っぽいぞ

7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
 ええ…… (困惑)

8 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
 クソ映画を作っていた頃のお前はもつと輝いていたぞ!!

9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
 346「やめろ」

10 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
 *

クローネメインっぽいからギャグ排除してんじゃない?

* 11 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

シンデレラプロジェクトがイロモノとでも言いたいのかテーマ！

* 12 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

り、凜ちゃんも出てるし……

* 13 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

つかこのメインビジュアルの子誰？

髪伸ばしたアーニヤちゃんとかしゅーこちゃん？

* 14 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

キヤスト欄見ろよ

白河水菓ちゃんって子らしいぞ

スターライトプロジェクトだな

* 15 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

誰だよ

* 16 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

新人

346プロって推すとなったら徹底的に推すからねじ込んだんだ

ろ

* 17 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

でも雰囲気出てるな

* 18 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

見た目だけはすげーな

衣装だけ見るとコスプレなのにこの子が着てるとコスプレ感が全然ない

* 19 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

でも演技とか大丈夫なの？

HP見たけど演技経験とか無さそうだったよ

* 20 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

不安すぎる

* 21 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

ま、まあ演技初経験！とか無いわけじゃないし…… (震え声)

* 22 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

スツ (デビルマソを掲げながら)

* 23 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

>>22

やめやめろ!!

(1話放送終了後)

* 173 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ごめんなさいナメてました

演技初経験しゅごい……

* 174 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

オープニングのナレーションもこの子だっけ？

* 175 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

凜ちゃんも加蓮ちゃんも良かったよね

奈緒ちゃんはいつも通りすぎひん？

176 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

妖精と座敷童と天使が妖精と座敷童と天使すぎる……

どうやってあんな本物連れてきたんだ

177 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

科学部の二人あれ笑うわあんなん

あの二人のシーンだけ絶対いつものバカなノリで作ったろスタッ

フ！

178 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

それにしても雰囲気の不穏だ

誰か死んだりしないよね？

179 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

死ぬよ

シン撰組ガールズのみくにやんとかりーなちゃんのノリで

180 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

まあギャグ的な扱いで死ぬことくらいはあるかもね

181 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

どうでもいいけどEDの「FROST」の入り方がシテイハン

ターっぽい

182 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ピアノのフェードインの入り方がそんな感じなのかもな

183 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ストーリー的には1話だしまだ分からないけど期待できそうな始

まり方だったね

184 会員番号774番 20XX/X X / X X ID : *

**

言っても後半からアレになることも多いししばらく撮り溜めして
一気見かなー

(7話放送後)

《FROST その5》

301 会員番号774番 20XX/X X / X X ID : *

**

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあ

ゝあゝあゝあゝあゝ

302 会員番号774番 20XX/X X / X X ID : *

**

ありすちやんがああああああああああああああああああああ

303 会員番号774番 20XX/X X / X X ID : *

**

こんなのつてないよ

あんまりだよ!!

304 会員番号774番 20XX/X X / X X ID : *

**

誰だよハートフルとか言ってたの!! 1!!! 1!! 1!! 1!! 1!! 1!! 1!! 1!!

305 会員番号774番 20XX/X X / X X / X X ID : *

**

落ち着け次回予告をしろまだ死んでない

306 会員番号774番 20XX/X X / X X / X X ID : *

**

マジかマジだ良かった

妹が死んで絶望するリンちゃんはいなかったんですね!

307 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

雪女絶対許せねえ!!

308 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

ま、まだ雪女ちゃんがやったとは限らないし……

309 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

状況も演出もどう考えても雪女ちゃんがやったとしか思えんやろ

310 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

やる動機無くね？

311 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

これ次はだれか死んでもおかしくないで

312 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

つか雪女ちゃんの演技怖すぎ

313 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

雪女ちゃんが重レズで同族増やすために殺したんだとしたら動機はあるだろ

314 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

キテる……??

315 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

何もキテねえよブチ殺すぞ……

316 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

ありすちゃんファンが荒れてるな

3 1 7 会員番号7 7 4番 2 0 X X / X X / X X I D : *

** そりゃ推しが死んだら荒れる

3 1 8 会員番号7 7 4番 2 0 X X / X X / X X I D : *

** だから

ありすちゃんは

死んで

ねーよ!!

3 1 9 会員番号7 7 4番 2 0 X X / X X / X X I D : *

** だつて

ありすちゃんは

死んじやったもん

ね……

3 2 0 会員番号7 7 4番 2 0 X X / X X / X X I D : *

** オフショット見る限り氷菓ちゃんとありすちゃん仲良さそうなの
にな

3 2 1 会員番号7 7 4番 2 0 X X / X X / X X I D : *

** 演者みんなでイチゴパフェ食べてる写真とかあったりして和む

3 2 2 会員番号7 7 4番 2 0 X X / X X / X X I D : *

** 監督「こいつら仲ええな……せや!片方の手でもう片方殺そ!」

3 2 3 会員番号7 7 4番 2 0 X X / X X / X X I D : *

** ファツキユーカントック

3 2 4 会員番号7 7 4番 2 0 X X / X X / X X I D : *

** 脚本かもしれんぞ

3 2 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

*
靖子フォローか何か

3 2 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

*
靖子ならもつとエグいだろ

3 2 7 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

*
だから死んでねーって!!

(11話放映後)

《FROST その14》

7 7 1 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

*
おつらあい……

7 7 2 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

*
悪人を……悪人を用意してくれ……

いつそ明確な悪人がいてくれた方が心が休まるよ……

7 7 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

*
どうしてこんなことになってしまったんだ(AA略)

7 7 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

*
特定の誰かが悪いわけじゃないしむしろみんな善意で行動してる

からこそ全員が追い詰められていく

とてもつらい

7 7 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

*
*

生きてることが罪なんやな……

776 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

コオリちゃん自身は善良でごく普通の感性を持った子なのが更に辛い

やっぱありすちゃん昏睡させたの故意じゃねーじゃん事故じゃん……何でこんな子に全て凍らせるとかいう力持たせた

777 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ありすちゃんを助けようとしたら昏睡状態に陥らせてそのせいで姉に命を狙われて

でも人間が好きだから反撃なんてできるわけがなくて逃げるしかなくて

心が……心が痛い……

778 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

氷菓ちゃんの演技が上手いのがまたキツイ

泣きながら逃げてたシーン見て思わず声出ちゃったよ

779 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

どうしてみんな幸せになれないのさあ!?

780 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

まだだ……まだ最終回での大団円が……

781 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

希望は無いんですか!?

782 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

希望の華はあるかもしれないね

783 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

そんなものは無い (A A略)

784 会員番号774番 20XX/X/X/X

ID:**

**

>>782

何やってんだよ团长!!

785 会員番号774番 20XX/X/X/X

ID:**

**

加蓮「止まるんじゃねえぞ……」

786 会員番号774番 20XX/X/X/X

ID:**

**

加蓮ちゃん……病状が悪化して……

787 会員番号774番 20XX/X/X/X

ID:**

**

お前ら番組の話しろよ

788 会員番号774番 20XX/X/X/X

ID:**

**

番組の話すると辛くなるんだよ分かれよ

789 会員番号774番 20XX/X/X/X

ID:**

**

き、きつとラストはハッピーエンドだし……

790 会員番号774番 20XX/X/X/X

ID:**

**

ハッピーエンドだといいいね……

(最終話放映後)

《FROST その17》

60 会員番号774番 20XX/X/X/X

ID:**

*

>>64

コオリちゃんはそもそもこの関係性の中にいなかったから物語開始前と比べると得たものしかないように見えるんだよね

* 67 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

失って人は成長するんやなって

* 68 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

救いは無いんですか!?

* 69 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

無いよ(無じh

えっ

* 70 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

2期!?

* 71 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

ファッ!?うせやろ!?

* 72 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

ここまで綺麗に終わらせといて2期!?

* 73 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

うわあなんだろうこの嬉しいけどなにか釈然としない感じ

* 74 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

おいキービジュアルにコオリちゃんいるぞ!?

* 75 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

えっ生き返るん

76 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*
そこは綺麗に終えといた方がいいんじゃないかな……

77 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*
必然性があつて脚本がちゃんと調理してくれるならいくらでもいい話にはできそうだけどねえ……

絶対難しいでしょこれ大丈夫なの？

78 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*
期待しよう

1期だつて地雷確定みたいな下馬評覆したんだから2期でもやつてくれるはず

79 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*
一応期間は空け……ないわこれ来年冬つつつてるけど1月開始つて

脚本書いてスタッフ集める時間あるのかよ……

80 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*
なんかドラマ見ても分かるけど氷菓ちゃんちよつとずつ体形が普通になつてつてるからね

もしかしたら間を置くと身長伸びたり体形変わったりしてやり辛くなるからつていうことじゃないかな

俺としてはもうちよつと充電期間置いてほしいけど

番外：ろく☆ちゃんねる抜粋（2）

《エリクシア総合スレ その3》

1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
346プロのスターライトプロジェクト所属ユニット「エリクシア」について語りましょう

公式：t t p s : / / 3 4 6 p r o * * * * * * * * *

前スレ：t t p : / / * * * * * * * * *

新ドラマ「FROST」にて準レギュラー決定！

2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
立て乙

3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
乙

4 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
乙

5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
おつ

ドラマ準レギュラーとか早すぎない？

6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
乙乙

よく見るBSだ
7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
乙ー

BSでも結構なもんだよ
8 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

早い分にはいくらでも早くていいよその分楽しめる
9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

これだけ早期に次々やると息切れしないか心配だなあ
10 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

346だからその辺のプロデュースは抜かりないと思いたいけど
ね

*

11 会員番号774番 20XX/X/X/X
ID:***
そういえば氷菓ちゃん眼鏡変わった？

*

12 会員番号774番 20XX/X/X/X
ID:***
>>11
晶葉ちゃんのと似たデザインになってるな
キテる？

*

13 会員番号774番 20XX/X/X/X
ID:***
キテる……

*

14 会員番号774番 20XX/X/X/X
ID:***
あの二人の間に入りたいよね

*

15 会員番号774番 20XX/X/X/X
ID:***
>>14
は？

*

16 会員番号774番 20XX/X/X/X
ID:***
>>14
……すぞ

*

17 会員番号774番 20XX/X/X/X
ID:***
なんかT w i t t e r 始まつてる

*

18 会員番号774番 20XX/X/X/X
ID:***
ほんとだ

エリクシアだけじゃないなスターライトプロジェクト全体でやつてんのか

* 19 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

JCJSもいるし変なことつぶやいて炎上したりしないかちよつと心配になる

* 20 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

炎上商法したいわけでもないだろうしプロダクションが監督するだろ

* 21 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

まあ今までt w i t t e rで別に炎上らしい炎上は起こしてないしね

* 22 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

おっそうだな(楓さんの泥酔事件を思い出しながら)

* 23 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

セヤナー(セクシーギルティを思い出しながら)

* 24 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

普段の素行でアレコレ言われるのとはベクトルが違うと思うんですけど(名推理)

* 25 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

S | H y o k a はじめまして。本日よりT w i t t e rを始めました、新人アイドルの白河水菓です。よろしくお願いします。

初々しい挨拶いいよね……スレてない感じがして

* 26 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

>>25

いい……

歌も踊りも一流クラスだから忘れがちだけどこういうのを見ると新人なんだなってよく分かる

* 27 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

Akiha | 1K296 アイドル池袋晶葉としてT w i t t e
rを始めたぞ！ヨロシク！

晶葉ちゃんの方もらしいなあ

ニカツと笑いながら言ってるんだろなああって思う

* 28 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

でもなんかこなれてる感じもあるよね
別垢あったりするのかな

* 29 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

どうだろ

もう特定班動いてたりするかもね

* 30 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

Shiki | Ichinose よろしくー

またこの子は軽いな！

* 31 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

だがそれがいい

* 32 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

そういうフリーダムさが逆にエロい

* 33 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

カワイイの方だろ間違えるな

- * 34 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***
- * いやエロいよ 35 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***
- ♪ Shiki | Ichinose 氷菓ちゃんと晶葉ちゃんです
写真上がってるな 36 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***
- * 三人とも一緒なのかな 37 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***
かわ……ううn!?
- * え、何このクソダサTシャツは……(困惑) 38 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***
- * ダッサ コミュ抜けて入り直すわ 39 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***
- * 小学生男子かくたびれたオタクみたいなファッションセンスして
んな…… 40 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***
- * それで画になるんだからすごいけどさあ 41 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***
- * 顔が良いって得よね 42 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

G A I J I N っ て 割 と 何 着 て も 似 合 う か ら ね

4 3 会 員 番 号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : * *

*
美 人 さ ん よ ね

こ れ で 大 人 に な っ た ら も っ と え げ つ な い く ら い の 美 人 に な っ た り
す る の か し ら ん

4 4 会 員 番 号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : * *

*
大 き く な る ん で す か ね え ……

4 5 会 員 番 号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : * *

*
ヒ ン ト : 大 多 数 の 女 子 は 中 学 で 成 長 が 止 ま る

4 6 会 員 番 号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : * *

*
と い う か 成 長 し な い で ほ し い

4 7 会 員 番 号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : * *

*
そ の ま ま の 可 愛 ら し い 君 で い て ほ し い

4 8 会 員 番 号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : * *

*
母 に な っ て ほ し い

4 9 会 員 番 号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : * *

*
ロ リ コ ン は 出 荷 よ

5 0 会 員 番 号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : * *

*
そ ん な

5 1 会 員 番 号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : * *

*
(. . .) そ ん な

5 2 会 員 番 号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : * *

*

そんない

53 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

*

そんない

54 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

*

そんない

(中略)

**

147 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

(. . . .) そんない

**

148 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

そんないの一言で100レス近く消費すんなや!?

**

149 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

だからひと月もたないんだよこのスレ!

ろ!?

150 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

用意されたもので満足する豚でありたくない

雄々しく餓え猛る猪でありたい

**

151 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

ダメだ

**

152 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

殺せ!! (農家)

153 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

豚だろうが猪だろうが出荷よー

154 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

(´・ω・｀) そんなー

155 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ところで告知あったけどエリクシアのライブチケット予約できなかったヤツおりゆ?

俺だ

156 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

俺もだ

157 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

地方だから行けねえ

158 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

取れたよ!

楽しんでくるよ!

159 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>158

おめでとう!

楽しんでこいよ

160 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>158

そいつをこっちにWA☆TA☆SE!!

161 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

キヤパ500人とか少ないんだよなあ
隠れファン多いのに

162 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ほんそれ

もつと増やしてもいいのよ

163 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ちよつと予想外の売れ方したって感じなのかもね

164 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

でもドラマのレギュラー取って来てる時点でちよつと予想はして

ほしいもんだよ

165 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

まあでも仕方ねえ次取れるよう祈ろう

《白河氷菓ちゃんを見守るスレ》

387 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

朝食上がってる

今日はパンか

388 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>パン

毎日じゃねえか

389 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

みちるちゃんの影響だよねそれ

390 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

それにしても量少ないなあ

ちゃんと体力ついてるのかな

391 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

S | H y o k a おなかいっぱい

あの量でお腹いっぱいとかかわい

かわいいけどもつと食べるお米食べる

392 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:B

UN

お前らまだこんなアイドル追っかけとんのか

体売ってるようなのをよく応援できるな

ソース t t p : / s y u k a n * * * * * * * *

393 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

(- - -) フーン

394 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

それはそれで興奮します

395 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

とにかく拷問だ、>>394を拷問にかけろ!

396 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

作業員の季節でつね

397 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

な
ソ
ゲ

398 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

オマケに記者ヒルカワ

飛ばし乙

399 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:BU

N

写真あるのに飛ばし乙とか

バイアスかかりすぎだろ

400 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

安定の喋る机

401 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

削除依頼かけてくるね

402 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

そんなことよりおながすいたよ。

403 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

氷菓ちゃんの食べてたパンドどこで売ってる？

差し入れしてあげたい

404 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

346の寮食堂のパンだから市販じゃないと思われ

あと食品関係を贈るのはやめときな

衛生上の問題もあるし基本捨てられるから

405 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

>>404

そっか残念

406 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

というか基本的にプレゼントはやめた方がいいらしいね
かさばるし>>404の通り衛生上の問題とかもあるし隠しカメ
ラとか入れるやつもいるから

407 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

だよなー

ところで>>392の件お外は大丈夫なのかな？

408 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ソースがアレで騒ぐのは騒ぎたいだけの荒らしかよっぽどピユア
な子くらいよ

409 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

うそをうそと見抜けない人は(ry

410 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

やっぱ961の作業員かねー

411 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

921プロかもよ

新人潰しだとあそこが有名だし

412 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

まあモロにシンデレラプロジェクトの後継だもんな
関係各所はどこもてんやわんやよ

413 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

おいちよつと待て誰だ凸つたの!?

4 1 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

?

4 1 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

おい氷菓ちゃんにクソリプ飛ばした馬鹿を連れてこいおれがでて
いってやつつけてやる

4 1 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

ちよつと待てよ何してんだよあれ知ってますかじゃねえよ本人に
しらせる馬鹿がいるかよおい

4 1 7 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

おいバカ凸つたバカに更に凸るんじゃないよ!!

4 1 8 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

鍵かけちゃったじゃんツ!!

4 1 9 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

鍵かける前にちよつと見たけどクソリプ用に作った垢っぽい

一応魚拓↓ https://****

4 2 0 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

屋上へ行こうぜ……

久しぶりにキレちまったよ…… (AA略)

4 2 1 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

地獄か何か

4 2 2 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

アイドル業界は常に地獄よ

4 2 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X

ID : *

**

そして俺たちは多々買いに身を投じる修羅よ

4 2 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X

ID : *

**

俺たちは悪鬼だ

アイドルを守護る悪鬼なのだ

(翌日)

5 4 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X

ID : *

**

> 本日発売の「週間●●」において当社アイドルの白河水菓についての記事が掲載されましたが

> 記事に書かれているような過去は白河にはございませんことを、この場をもって表明させていただきます

> 該当の記事につきまして、当社から出版社に対して抗議文を送付させていただきました

> なお、類似の記事が続くようであれば法的措置も検討する所存です

3 4 6、キレた!!

5 4 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X

ID : *

**

いやキレるわ普通

5 4 7 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X

ID : *

**

法的措置ってできるの？

5 4 8 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X

ID : *

**

いや分からん

その辺を防ぐために曖昧な「くか？」みたいなのを小さく載せとい
て曖昧にしてる

名誉棄損で取れるかなどうかなくらいの塩梅かも

549 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

だから調子に乗るんだよなあこういうの

550 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

いやでも346の最強法務部が動いたらもしかするかもしれん

551 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

今の専務アメリカでならしたらしいしその辺は徹底的にやるって
聞いたぞ

552 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

徹底的にやってほしいねえ

553 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

とかじやアレ誰なの？って話でもあるが

554 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

家族だってさ

本人のT w i t t e rでも言ってる

555 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

そらそうよ

556 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

仲のいい家族がいて俺も安心したよ……

557 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

じゃあなんなんだあの低体重？

558 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

わからん

ぜんぜんわからん

559 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

そういう体質なのかもしれない

560 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

これ外壁とか映ってるし特定できないかな

561 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

そうやって調べようとした馬鹿が不法侵入で警察のお世話になつてた

562 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

まあやめとく方が無難よね

何が飛び出すかもわからないし

563 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

でも正直似てないよねこのお父さん？

564 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

もしかして拾われっ子とかなんじゃ

565 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

義両親との仲は良くても義兄弟との折り合いが悪くて食事抜かれたりしたとか

566 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

親が見かねて寮に送り出したとか

567 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

そこではじめてぬくもりを知ったんだよね……

568 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

でも今までの経験で自信を持ってないのかなんだ……

569 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

だから番組ディレクターに脅されたりして友達を守るために身を
差し出したりするんだ……

570 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

やめやめろ!!

571 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

自分で打ち込んで鬱になってきた

572 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

>>>571

じゃあ書くなや!?

573 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

こんな妄想が現実にならないためにも守護らねば……

574 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

CD買ってくる

575 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

布教してくる

576 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

>>574 | 575

何で……？

577 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

>>576

お前このスレ初めてか？力抜けよ

578 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

このスレの一日

朝：新情報を確認する

昼：T w i t t e rを確認する

夕：新情報を見て悪い妄想が浮かぶ

夜：悪い妄想が本当にならないように買い支える

579 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

ええ…… (困惑)

580 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

新興スレだから半ROMとは言わないけど1から見てくるとい
ぞ

581 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

ところでそろそろソロ曲とか出してほしいよね

582 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

>>581

わかる

新曲じゃなくてもいいからやってみてほしい

583 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

おねシンとか聞きたい

《白河氷菓ちゃんを見守護るスレ その2》

* 87 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

【速報】氷菓ちゃんの体重28kg

* 88 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

* ファツ!?

* 89 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

* オオオ

イイイ 90 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

* 待て待て待て流石にそれはありえぬだろ

91 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

* どういうことだっ!!!

詳しく説明しろっ!!! (画像略)

* 92 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

* HPを

見ろ 93 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

* 本当だプロフィールの体重整正されとる

* 94 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* 身長140cmに対して28kgってどうなの……

* 95 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* 乙倉君を超えて346プロBMI最軽量

* 96 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* ヒエツ

* 97 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

>>95

* お、待てい(江戸っ子)

* ローレル指数ならやせぎみでまだギリギリ安全圏だぞ

* 98 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* それで大勢に影響はありますか將軍様

* 99 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* あ?

ねえよんなもん

* 100 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* 痩せすぎという事実にはなんら影響はない

相対的に見たらどうかじゃなくて絶対的にヤバイ

* 101 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* 気付くのが遅すぎやしないか貴様ら

見れば分かることだろう

* 102 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

?

103 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

なにいつてだこいつ

104 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

いやだから外見から筋肉量と贅肉の量見ればおおよその体重くらい推測はできるだろ

ただでさえ身長低いんだから計算も楽だ

少なくとも今回のライブの時には既に29キロは割っていた

105 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

……は?

106 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

えっちよつと待って理解が追いつかない

107 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

: (; ° , ° ,) :

108 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

こえーよなんだお前!?

109 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

Fanaticすぎる……

110 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

誰!?!誰なの!?!怖いよお!!

111 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

もしやニンジャなのでは?

112 会員番号774番 20XX/XX/XX
ID:*

つまり>>104はアヤマッサン……?*

113 会員番号774番 20XX/XX/XX
ID:*

コワイ!!*

114 会員番号774番 20XX/XX/XX
ID:*

お前ら今回のライブの話しようぜ!!*

115 会員番号774番 20XX/XX/XX
ID:*

せやな!俺行けなかったけど*

116 会員番号774番 20XX/XX/XX
ID:*

俺もだ

かなc
117 会員番号774番 20XX/XX/XX
ID:*

軌道修正が下手すぎる上に悲しすぎる……*

118 会員番号774番 20XX/XX/XX
ID:*

ツインテールの風良かったぞ*

氷菓ちゃんも一緒にツインテにしてた

119 会員番号774番 20XX/XX/XX
ID:*

パフォーマンスは素晴らしかった

相変わらず体形は薄かった

120 会員番号774番 20XX/XX/XX
ID:*

おれはしらなかった

ひょうかちゃんじぶんのことぼくっていうんや

かわいい

しぬ

1 2 1 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

ID : *

* *

>>> 1 2 0

有名な話だろ!?

1 2 2 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

ID : *

* *

ファーストライブの時はトークとか無かったから握手した人しか知らない話じゃなかったつけそれ?

1 2 3 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

ID : *

* *

朝のニュースバラエティとかで特集組まれてる時に言ってたのが初出だっけ

いいよね……

1 2 4 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

ID : *

* *

いい……

1 2 5 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

ID : *

* *

ちっちゃいことが自分のことボクって言うのいいよね

1 2 6 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

ID : *

* *

もしや幸子のポジションを脅かせるのでは?

1 2 7 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

ID : *

* *

低身長で一人称ボク以外共通点がないじゃねえか!

1 2 8 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

ID : *

* *

カワイイ!があるだろ!

1 2 9 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

ID : *

**

カワイイ!!

130 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

カワイイ!!!

131 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

照れるぜ

132 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

>>131はかわいくない

133 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

悲しいぜ

134 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

ところで話戻るけど

例えばリプで料理のレシピ送るとかってアリ?

135 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

うーん

はつきりダメと言い辛い微妙なところ

ここはこのスレらしく売り上げに貢献して美味しいものを食べて
もらうのがいんじゃないだろうか

136 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

サンクス

まあいきなりレシピ渡されて作ってくださいとか迷惑だわな

137 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

最近T w i t t e rの方も食事の写真増えだしたし良い傾向だと

は思うんだよね

1 3 8 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

確蟹

もつとちゃんと健康的な姿がその内見れるかもしれないね

1 3 9 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

ぼくはか弱いほうが好きです (小声)

1 4 0 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

貧弱でもいい

たくましく育ってほしい

1 4 1 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

>>140

どっちだよ

1 4 2 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

貧弱かつたくましい

つまり悲惨な境遇に負けないように精神的に強くあってほしいと

いうことだろう

1 4 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

だから勝手に悲惨な境遇認定するのやめろって!!

1 4 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

でもいつ悲惨な境遇に落とされるかわからんし……

1 4 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

あの飛ばしが真実になったら目も当てられんし……

1 4 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

ウツ辛い

CD買ってくる

147 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

お前ら心強いのか弱いのかどっちなんだ…

番外：ろく☆ちゃんねる抜粋（3）

《筋肉でドン！Muscle Castle!!実況スレ》

1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

本日の出演者

エリクシア（一ノ瀬志希、池袋晶葉、白河水菓）

ニューウエーブ（村松さくら、大石泉、土屋亜子）

2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

同じプロジェクト同士じゃねーか!?

3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

どうしてこんなことになってしまったんだ（AA略）

4 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

やべえよ……やべえよ……

5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

ニューウエーブのファンもエリクシアのファンもお通夜みたいな

雰囲気になつとる

6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

そりやこうなると面白くなる要素がなあ……

流星にプロジェクト担当のPの面子潰すことになるから引き分け

にするんじゃないの？

7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

案外どつちか負かすかもしれんぞ

8 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

いや流星に八百するでしょ……

どつちかが嫌いってんならともかく一般ファン的には角が立って

欲しくないし仲良くしてほしいよ

9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

こわい

10 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

でもこれでもし変に八百長っぽかったらそれで叩かれるよね

* 1 1 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

また

* 1 2 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

始まった

* 1 3 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

ととみず

* 1 7 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

最初はエリクシアの子たちか

* 1 9 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

初回ってどこからのカウントだよ

* 2 2 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

マッスルキャツスルからでしょ

つまりキャンディーアイランド

* 3 7 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

NWきた

* 3 9 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

普段と変わりないな

* 4 4 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

気にしてないんやろか

* 4 8 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:***

フレッシュって当たり前だろとときん w w w w
55 会員番号774番 20XX/X/X/X/X ID:***

* エリクシアは全力かあ
まあ口ではそうだが
61 会員番号774番 20XX/X/X/X/X ID:***

* ジト目ダブルピース!!
69 会員番号774番 20XX/X/X/X/X ID:***

* ジト目ダブルピース!
71 会員番号774番 20XX/X/X/X/X ID:***

* コラはよ!!
79 会員番号774番 20XX/X/X/X/X ID:***

* この子こういうことやる子だったのか……
83 会員番号774番 20XX/X/X/X/X ID:***

* 真顔で変なことやるとは言われてる
89 会員番号774番 20XX/X/X/X/X ID:***

* Tシャツも変だしな
97 会員番号774番 20XX/X/X/X/X ID:***

* しかもモヤシって
いやモヤシだわ
99 会員番号774番 20XX/X/X/X/X ID:***

>手加減してたら負ける
言われてみればそうである

1 1 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D ∴ *

** 体力勝負だからねー

倒れたりしないといいけど 1 1 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D ∴ *

** >氷菓ちゃんには勝てる

NWの共通認識ひどすぎる…… 1 2 1 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D ∴ *

** でも多分俺でも勝てる (勝たない)

1 2 7 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D ∴ *

** まあ勝てるよね多分……

1 3 0 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D ∴ *

** ダンスやってるからなが通用しないからな

全員ダンスやってるんだから 1 3 1 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D ∴ *

** 一回戦また 1 3 2 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D ∴ *

** ボルダリングか 泉ちゃんと氷菓ちゃん

1 4 1 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D ∴ *

** 大丈夫かこれ死ぬんじやね?

1 4 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D ∴ *

** ま、マット引いてあるし……

161 会員番号774番 20XX/XX/XX

**

やっぱり落ちたー!?

167 会員番号774番 20XX/XX/XX

**

いくらなんでも瞬殺すぎるwww

172 会員番号774番 20XX/XX/XX

**

かよわいいきものすぎるだろ……

なんだこれきゅんと来る

189 会員番号774番 20XX/XX/XX

**

>握力13kg

弱っ!?

201 会員番号774番 20XX/XX/XX

**

握力13キロは9歳女兒平均

211 会員番号774番 20XX/XX/XX

**

なんとということだ

氷菓ちゃんは9歳やったんや

218 会員番号774番 20XX/XX/XX

**

あ泉ちゃん落ちた

226 会員番号774番 20XX/XX/XX

**

落ちてまだ爆笑してる

いやそりや笑うけど

233 会員番号774番 20XX/XX/XX

**

あの子あんなひ弱で私生活大丈夫なん……?*

	2 3 9	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**				
	さくらちゃん	と晶葉ちゃん	始まった	
2 4 6	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *	
**				
	晶葉ちゃん	も途中で	落ちてる	
2 6 1	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *	
**				
	おー	さくらちゃん	登り切った	
2 6 9	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *	
**				
	さくらちゃん	n 意外と	強いのか	
2 8 0	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *	
**				
	まあ	氷菓ちゃん	と比べれば……その……	
2 8 6	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *	
**				
	晶葉ちゃん	も笑っちゃ	つてつい	みたいな
2 9 4	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *	
**				
	いや	あんなの	生で見たら	笑うよ……
3 2 6	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *	
**				
	亜子ちゃん	と志希ちゃん		
3 4 8	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *	
**				
	う n 順当			
3 5 1	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *	
**				
	二人とも	登り切った	な	
3 6 4	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *	

**

途中からどつちが早いかになってた

すげえ見ごたえある

366 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

身体能力で一気に行く亜子ちゃんと天性の頭脳で最適ルートで行

く志希ちゃん

いいもん見たわ

373 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

一回戦はエリクシア負けか

385 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

いつもの

388 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

うわ出たよ健康茶

396 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

マズそう……

あれ？マズそうじゃない……？

418 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

何で氷菓ちゃん平然としてるん……？

423 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

もしかしてあれ苦くないんじや……

444 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

>>423

視聴者プレゼントで番組で使ってる罰ゲームの飲料もらえるぞ

オラツ飲めツ

489 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

二回戦エアホツケー

村松・大石vs一ノ瀬・白河

501 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

オイ何か今すげえ軌道だったぞ!?

534 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>射角と回転を調整して打って普通の曲がり方をしないようにし

た

>ね?簡単でしょ?

ちよつと何言ってるのかわかりませんね

543 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>ね?簡単でしょ?

こつちは言ってるねえよ!?

548 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

俺エリクシアが結成された基準わかった!!

556 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

志希ちゃんと晶葉ちゃんが経歴的に目立ってたが

まさか氷菓ちゃんまでもはこの海のリハクの目をもってしても

580 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>>556

今回はリハク許すよ……

誰だっけ想像できるかあんなスペック!

582 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* *

私はねアイドルを見たいと言ったんだ

ありや漫画の強キャラじゃないかね

597 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* *

何か問題でも？（マンガの強キャラそのものな他二人を見ながら）

609 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* *

>>597

何も問題無いな！

677 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* *

あれなんか氷菓ちゃんばててきてない？

691 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* *

倒れたー!?

726 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* *

スタアアアーツフ!!

729 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* *

すげえ

あいつ一人でダブルスしてる

753 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* *

すごかったね

氷菓ちゃんがぶつ倒れた瞬間に予測してたみたいにラケット受け

取って瞬時に一人ダブルスに入るの

768 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* *

テニヌか何か？

7 8 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

あそこまで正確な予測って

もしかして普段から氷菓ちゃんあんな風になつとるのでは

7 8 9 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

なってるかな……

なってるかも……

8 0 1 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

氷菓ちゃんの体力不足はファンにとってはあまりにも有名な話

8 0 9 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

ライブの時一人だけ汗だくらしいな

8 1 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

今も汗だくじゃねーか

8 2 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

汗 p r r (^ ω ^)

8 3 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

流石の志希ちゃんも1対2はダメかー

8 4 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

今度もニューウェーブ勝ったな

8 4 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

よっしゃニューウェーブ勝てるで!!

8 7 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

うわあ出たノニ

879 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD…*

**

765の春香ちゃんと千早ちゃんが飲んですげえ顔になってたやつだな

880 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD…*

**

どんな味するんだろう

897 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD…*

**

何今の悲鳴

悲鳴？

ていうか声？

899 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD…*

**

アイドルがしている顔じゃねえぞ!!

911 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD…*

**

…:ねえ氷菓ちゃん何で表情変わらないの？

913 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD…*

**

甘いドブwww

947 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD…*

**

ごく当たり前のように批評しとる…:

951 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD…*

**

何で平気なんだよ!?

961 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD…*

**

そんなこと俺が知るか!

9 7 3 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

もう点差90点も開いてる……

《筋肉でドン! Muscle Castle!! 実況スレ2》

5 8 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

流石に終わったな

6 4 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

出たマシユマロキヤツチ対決

6 6 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

前も塩試合だったしなあ今回はどうだろ

7 8 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

あーやっぱだめか

7 9 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

つか普通無理なんだよあんなふわふわしたの

1 3 4 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

ファツ!?

1 4 7 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

今一步も動かなかったぞ!?

1 8 6 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

俺が見ているのは現実の光景なのか……?

2 3 1 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

とときんが素直に褒めてるのは分かる
川島さんがドン引きしてるのも分かる

248 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

おかしいおれはアイドルのがんばるすがたをみにきただけのはず
なぜこんなビックリにんげんをみることになってるのだ

333 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

パーフェクトとか初めて見た

374 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

常識的に考えれば不可能だよ!!

379 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

どうしてこんなことになってしまったんだ(AA略)

387 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

俺やっと気づいた
エリクシアで一番ヤバいの氷菓ちゃんなんや……

499 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

ファッションショー始まった

532 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

すごい
清涼剤

538 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

いずみん清楚でいいよね
志希にゃんエロくていいよね

541 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* *

かわいい

かわいい

5 4 8 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

* *

あつなんかすごいアイドルの番組見てるなーって感じ……

5 5 2 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

* *

みんな忘れがちだがこれはアイドルの番組だ

5 6 1 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

* *

嘘だろ承太郎!?

5 6 3 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

* *

嘘じゃないぜ

ほんとのことだぜ

6 1 2 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

* *

次はクイズか……

……あれっ

6 2 1 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

* *

ねえクイズってどう考えてもエリクシアの得意分野では

6 4 4 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

* *

オオオ

イイイ

《マッスルキャッスル感想スレ》

4 8 4 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

* *

いい八百長だった

487 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID : *

* *

なんか氷菓ちゃんが妙に目立つ一時間だったな……

499 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID : *

* *

八百長としか言いようがないが、いい勝負を見た気がする

八百長だったからこそ、いい勝負と言うべきか

何言ってるか分からねえが、そうとしか言いようがねえから困る

どうすりゃいいんだ

501 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID : *

* *

対戦形式を考えると引き分けを狙うことは難しくないと思うけど

?

503 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID : *

* *

じゃあお前ちゃんと対戦として形にした上で見ごたえのある対決

して視聴者とお客を楽しませてかつどこにも角が立たないようにし

てくれ

俺には無理だ

504 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID : *

* *

ごめん俺にも無理だ

531 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID : *

* *

ところで氷菓ちゃんのあの発言さあ

532 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID : *

* *

やめろ

きつと(友達と)行ったこと無いってことだ

そのはずなんだ

534 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

きょうび遊園地にすら行ったことのない子なんておらへんやろ

538 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

もしかして複雑なご家庭だったりするn?

540 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

>>538

その辺は個人スレ行けばいい

一つ聞いたら考察という名の怪文書が100レスくらい投げつけ

られてくるぞ

543 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

個人スレこわ……

544 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

あいつら普段何してるんだよ……

547 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

覗いてきた

またCD買いに行ってた

548 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

あいつら普段(仕事)何してるんだよ

551 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ちよつと鬱になったら即買いに行くあいつらの経済力どうなって

るんだろう……

552 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

金払うことがストレス解消に繋がってるんだろ

561 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID**

**

続きは来週かあ

楽しみなような怖いような

(翌週)

888 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID**

**

>ジェットコースター↓ちよつと怖いけど楽しい

わかる

>お化け屋敷↓怖がる素振りすら無い

わからないわ

893 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID**

**

同じ立場なら同じことするかもしれないよね

だから別に怖がる必要も無いよね!

こわE

899 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID**

**

作り物だから怖がる必要も無いっていうのは分かるが

分かるがしかし

901 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID**

**

……みんな怖がつてるのかわいかったよな!!

902 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID**

**

おっ、そうだな! (現実逃避)

911 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID**

**

晶葉ちゃんとか非科学的なこととかあんまり信じないし興味ないタイプと思つてたけどこれは意外

913 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
いずみもそんな感じだったはずんだけどね……

あれ見るともうあーかわいいかわいい

916 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
さくらちゃんずっと叫んでたな
いやあれが普通の反応なのか？

917 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
普通って言うのとどっちかって言うのと亜子ちゃんっぽくない？

919 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
楽しむべきところは楽しんでるって感じだよな
ジェットコースターはなんだかんだ笑顔もあったし

922 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
あのお化け屋敷マジで怖いからな
だからこそ氷菓ちゃんのあの自然体が怖い

926 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
話が戻ってるぞ

927 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
いや避けられんだろこの話題だと

929 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
時間よりも一瞬のインパクトって感じでみんなの心に残りすぎて

いる……

9 3 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

い、一応ジエツトコースターは楽しかったみたいだし……

9 3 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

>>9 3 3

この時あんなことが起ころうとは誰も（マジ）

9 4 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

個人スレでも言われてるけどやっぱ親くないんじゃないの？

じゃないといくらなんでも説明できないことが多い

9 4 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

握手会がどうのっていう話題もあったよな

適当書いてるだけと思ってたけど案外マジなのかあれ

9 4 7 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

マジかもしれないがいちファン的にはそこに触れるのはナシな

本人が言ってるわけじゃないしプロフィールにも載ってないし触

れてほしくないことかもしれないし

9 4 8 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

アイドルでそういう境遇の子とか見ないしなあ

裕福じゃないとできないってわけじゃないとはいえどうしても金

のかかる業界ではあるんだし

色眼鏡で見られたくないと思ってるってこともじゆうぶんあり得

る

9 4 9 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

しかしワシは見たい

氷菓ちゃんみたいな子が借金苦に身を売る姿を

951 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

>>949

判決

952 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

死刑

953 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

極刑

954 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

市中引き回し

955 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

とに拷

956 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

牛裂きしようぜ!!

957 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

>>949には鋸引きすら生ぬるい

959 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

おい個人スレの悪鬼共が漏れ出してきたぞ

960 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

んゝあのね

女の子があまりにも不幸すぎる話じゃ絵面とか関係なく抜けない

のよね

9 6 2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

というか個人スレの連中もこのくらいの妄想しとるじゃろ!?

9 6 3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

あいつらその分そうならないように買い支えてるから

9 6 5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

よくよく考えると意味不明だなその構造……

《幽体離脱フルボッコちゃん第三期(仮)について語るスレ》

6 6 6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

メインビジュアル出たな

また今期もキャラが増える増える

6 6 7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

事前告知の通りエリクシアの子たちも出るみたいだな

また氷菓ちゃんメイン級か

6 6 8 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

あの子図抜けて演技上手いからな

しかしシスター役か……同じプロジェクトにシスターさんいたよ

ね?

6 6 9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>>668

その人はその年齢g

ああつ窓に!窓に!

6 7 1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

二十歳そこらが年増扱いとかひどいと思います

672 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

>クラリス「二十歳そこらが年増扱いとかひどいと思います」

673 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

いやまあ実際ひでえけどな!?

674 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

そもそもお前ら二十歳どうか言えるほど若くねーじやろ

676 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

まだ若いし。

677 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

いけねーよ歳考えろ

680 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

アイドルのファンの年齢は大抵

681 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

>>>680

それ以上いけない

684 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

3期のタイトル決まっちゃったつけ?

685 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

Buster!だよ

Buster!だよ

Assault!が二期だから多分今後アルファベットで続けていく気満々だろうな

四期はCharge!（突撃）とかか?五期はDestroy!みたいな

686 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

というか成長しないわけがないんだがそこんところは

687 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

なのはさんとかと同じ方式とか

688 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

大人になつてもあの衣装着るのか...:ウツ見たい

689 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

アニメにでも移行するんじゃないの牙狼みたいに

690 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

流石に成長しまくるのにシリーズものとして特撮でずっと続けるの無理あるしな

CGとかの質はいいんだけど

691 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

別の子に替わったりとかもあるかも

692 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

いやあれイナサマ以外のフルボッコちゃんとかありえんわ

694 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

そういう意味だと今回の新キャラどうなの?

695 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ありすちやんと氷菓ちやんだっけ？

光ちやんの陣営もキャラ増えるといいんだけどなあ

696 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

池袋博士がその枠じゃないの？

戦闘できるメインキャラ増えてほしいっていうならうん

697 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

でも南条君には孤高のヒーローであってほしいと思うのが俺だ

698 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

わかるよ……いや分かるんだけどその路線ちよつと悲しいルート

やん

700 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

しかしこんな戦闘バリバリある特撮に出て大丈夫なのか二人とも

？

体力あるふうに見えないけど

701 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

魔法バンバン撃って戦う系だろ多分

実際ありすちやんの方はそんな感じだ

702 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

氷菓ちゃんもシスターみたいだしまあ魔法職だろ

703 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

じゃあこのメインビジュアルのガントレットは一体……？

704 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ほらよくあるじゃんドデカイガントレットと超デカイ得物持って魔法バンバン使うとか

705 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

というか当然だけどみんな似合ってるよな

なんかありすちゃんだけ若干コスプレ感あるけど

706 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

名前の割に日本人まんまな外見だからね和服とか似合いそう

707 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

夏祭りで和 Gos 着て歌ってた時可愛かったよ

普段の洋ロリ系路線もいいけどあれもいいものだ

708 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

他の子と比べてまだ着慣れてないからっていうのもあるんじゃないかな

あのそのまんま魔女っぽい格好自体見慣れないし

709 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

そんな可愛い子にライダーネタを叩き付ける掲示板があるらしいな

710 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

マジかよ Twitter 絶対許せねえ

712 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

おれじゃない

なんじようがやった

しらない

すんだこと

713 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

まあ確かに発端は南条君だったが

716 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

他にネタにできそうな子っていたっけ

717 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

北条加蓮ウ!!

718 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

木場さんとか……?

719 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

ちなつたんと春菜ちゃんがまんまありすちゃんの仲間な気がする

720 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

となるとつかさ社長がスゲイとかヤベーイことになってしま
うのか

724 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

お前ら話が逸れまくってるぞ

725 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

南条君が出てるとなるとこうなってしまうんや……
しーない

726 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

オマケにこっちもあっちも特撮だ

727 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

今年はどんなネタが飛び出すかな……

728 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

千佳ちゃんの魔法が暴発したせいでケツだけ浮いて川を流れてた
レイナサマに勝るネタが今後出てくるのだろうか

729 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

高笑いしながらフェードインしてそのままの勢いでフェードアウトして声だけ残してすつ飛んでいったレイナサマもあるぞ

730 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

レイナサマが気付いてない裏でどんどん戦闘が進んで巨大ロボまで持ち出したのに気づかなかったのもあるぞ

731 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

レイナサマばっかじゃねーか!!

38：沼は怖い

心地よい疲労感が体を包んでいる。

夜のとばりの降りた薄暗いライブ会場。ボクたちは、その片隅でスタッフさんの邪魔にならない程度に寄り集まって、ライブの余韻に浸っていた。

「おわっちゃった……ねー……」

そんな中、まず口火を切ったのは、この中で特に疲労の色の見られないうちのひとりである、こずえちゃんだった。

そう——終わったのだ。フェスの全日程が。

スタッフさんや346プロの各部署、あるいはプロデューサーたちの連携の甲斐もあり、大きなトラブルや怪我人も出ることなく、無事に完遂。この上ない充実感と満足感を覚えている。

……なのだけど。そのはずなのだけど——多分誰もが、本心ではこずえちゃんの言葉に同意していた。

つまり、終わっ「ちやった」と。

なんとなく、心の奥底にまだやれる、まだ歌いたい、という渴望が残っている。だけでももうフェスは終わってしまったし、どうしたって今はもう、無理だ。

「でも、また次回がありますよ」

「ミニライブもいつでもやれそうだし」

「そうですねっ。冬もありますし——」

「来年の春もあるわね」

「その時は今よりもっともーっとお客さん来てくれるはずだぞっ☆」

それにその時は、今よりももっと充実したライブができるはずだ。

歌も、踊りも、あるいは心も。プロジェクトの性質上今と同じ構成

でというのは難しいだろうけれど、ボクたちのアイドル活動のルーツは、今のこのユニットにあると言える。それを正しく認めることさえできていれば、この先もきつと満足のいくライブができるはずだ。

芝生に寝転んで星空を見上げながら、ボクはそんなことを考えた。なお余談だが、ボクが空を見上げているのは単に空を見上げることが趣味であること以上に、体力がなくなっただけでぶっ倒れたからである。気力はともかく体力が足りない。

「よし、みんなお疲れ！」

「二お疲れ（様（です））！！二」

そんな折、ふとした拍子にプロデューサーが何やら重そうな荷物を抱えてこちらにやってくるのが見えた。箱に、紙、だろうか。

見たところ、アンケート用紙と手紙……かな？

「プロデューサー、それは？」

「みんな宛てのアンケート用紙とファンレター。ちよつと……というか、かなり多くなっちゃったけどね。とりあえず、セトリ順で渡すから受け取りにきてくれ。まずニューウエーブから」

「はいはい」

次々渡されていくファンレターの山に、自然とみんなの顔がほころぶ。

ボクたち——というかボクが起き上がれないから晶葉と志希さんの二人だけ——も、プロデューサーから受け取ると、適度に離れた場所に座って各々に宛てられた用紙を広げていく。なお、ボクは晶葉から流されてきたものをそのまま受け取るかたちになるのだが……。

「おぼい」

「くっ、今回はどうやら氷菓の方が多いようだな……悔しいが仕方ない、次は負けんぞー！」

「ちよつ……こら、紙の山に埋めようとす……うぐぐぐ！」

これ晶葉ちよつと気にしてるよね？

爽やかなこと言ってるけど絶対気にしてるよね!?

「……こつちも……こずえちゃんが……多いかも……」

と、ボクを引つ張り出しながらそんなことを告げる聖ちゃん。ふとこずえちゃんの方を見れば、普段通りでありながらもほんの少し……それこそここ四か月近く一緒に過ごしてきたからこそ分かる程度に、ほんのり頬を赤くしていた。

ボクの方を見てきたのは……うん、成程。そういう意図ね。

「ひれふせー」

「ふはは、ひれ伏せー」

「その有様で言えることではないな」

分かってる。それにボクぶつちやけこれノリで言ったんで。

本気でそう思ってるわけじゃない。

「まー氷菓ちゃん一人だけメイン級やってるもんねーズルいもんねー」
♪

「そうだねちよつとズルいもんね。次は多分二人の方が増えるよ」

それこそ今はちよつと仕事量のおかげで目立ってるだけでボク自身の素質というのは大したことは無い。バラエティ向きの発言とかできないし、体調管理も雑だし。その点二人の方がよっぽどテレビ向きで、何より創造力がある。模倣と複製ばかりが得意なボクには足りない才能だ。だから、その内追い抜かされて二人の方が人気になる日もそう遠くないだろう。

言われながら、ちよつとニヤニヤしている晶葉を置いて手紙を眺め

る——と。

——体調に気を付けて頑張ってください。

——むしろ体重に気を付けて頑張ってください。

——死んでない？ 大丈夫？

——今日も儂くていつ消滅してしまうか不安でした。

——まも守護らねばならぬ。

……エトセトラエトセトラ。

「何でボクは命の心配ばかりされなきゃならないんだよ!？」

「この酷暑だ。心配しても仕方あるまい」

「あたしたちもちよいちよい気を配ってたもんねー」

「え、そうなの？ ごめん」

「いいぞー！」

それは申し訳ないことをしてしまった。反省。

今後同じことが起きないようにもつと鍛えN*ight*。

……いやしかし、見る文章見る文章全部これっていうのも……いや、まさか。そう感じて晶葉の方に向かって解析をかける。と……。

「……晶葉。これ以外のファンレター……どこにやった？」

「……勘のいいアイドルは嫌いだよ」

なんて嘯きつつ、晶葉は背後からまた別の紙の山をこちらに寄越した。

「あるんじゃない……」

「そりゃああるに決まっているだろう。今渡さない方が面白いと思っただけだ」

「予想通りの反応ありがとー♪」

「とういか氷菓に限っては言われても仕方ないんだぞ。どうせ今日も汗のかきすぎで体重が減ってたりするんだろう」

「……減ってないよ？」

「差し引きトントンでね？」

くっ、やはり志希さんにはバレているか……！

「おいイ？」

「夏が暑いのが悪い」

ボクは悪くねえ。

悪いとしたら北欧系で暑さに弱い血筋が悪い。

ボクは悪くねえ。

……まあ悪いことがあるとしたらこの前の合宿の後、憂さ晴らしでアイス食べ過ぎてお腹壊しかけたのはまあちよつとマズったかなーとは思っただけ。

「ところで氷菓昨日はアイスいくつ食べたんだ？」

「……五つかな？」

「確保」

「な、なにをするきさまらーっ！」

その号令と共に、芳乃さんとこずえちゃんがボクを取り押さえにかかった。

くっ、初動が遅れた！……とか言う以前に既にもう動けない状態だからどうしようもないんだけど。

「流石に見過ごすわけにはいかないのですてー」

「こずえもたべるー……よんでー……よべー……」

それ以前に約一名ちよつと別の理由でボクを取り押さえてません？

大丈夫？

まあ、その、いや……ちよつと食べすぎかなーという思いもあつたりなかつたりあつたりするけれども。

実際分かるよ？ 客観的に見て、ボクみたいなのが何個も何個もアイス食べてたらそりゃ心配になる。けどボク自身の体調はボクが一番よく分かつてる。その上で、これなら体調に影響はないんじゃないかというギリギリのところを見極めて——時には踏み外しもするが——食べているのだ。何も問題ない。無い。無い。無かったら無い。

……仕事に影響が無いようにはしてあるんだから大丈夫!!

「……そ、それもこれもあの夏合宿でボクにスイカバーをくれなかつたプロデューサーが悪い」

「俺エ!?!」

「助手最低だな」

「さいてー♪」

「さいてー……」

「え、えつと、さ、さいてー……」

「ゴハツ!!」

「プロデューサー!?!」

プロデューサーが血を吐くような勢いで倒れた!!

……いやノリで言ってみただけとはいえ、聖ちゃんからこんなこと言われれば倒れもするか。きつとボクだつてそうなる。よりにもよつて聖ちゃんに言われたらそうなる。うん。

でも恥ずかしさに顔を赤らめた聖ちゃんはかわいかつた。発言が発言ではあるけど。

「でも……よく、そんなに……好きだね……アイス……」

「ん……まあ、うん」

「自分の名前だから?」

「まあ、そんなとこ」

髪を見て直感的に、なんて先生は言っていたしボクも安直だなとは思うが、だからって嫌いになるほどのものじゃない。

そもそもを言えば、園にはボク以外にも名前を付けられないままやってくる子はそれなりにいる。その辺のことを考えると、見た目からすぐに名前を連想しやすいというのは実はそれなりに大事なことだったりもする。児童養護施設というのは、当然だけど子供が多い。そこに在籍する以上、職員は子供たちの名前を覚えていかなきゃいけない。のだけど、子供というのは繊細だ。名前を憶えられない＝無関心であると認識してしまうこともあるし、それが原因で職員の人とうまくいかないということだってある。特徴的な子だったらいいかもしれないけど、そうでもなく奥に引っ込んでしまいがちな子だったりすると、どうしても名前を覚えられないということもあるわけだ。

そんなわけで、園では分かりやすい——時にはボクみたいにややキラキラ気味のものもあるが——名前を付けられる。

というわけでボクとしてはこの辺は許容範囲。先生曰く、「氷の華」と書く字面がちよつと厳めしいからやめた、とのこと。加えて、「氷菓^{アイス}のようにみんなに愛される存在でいてほしい」という思いもあったのだと聞く。そこからの繋がりでボク自身もアイスが好きになった……というのが実際のところ。

まあ言わないけど。変に気を遣われても困るし。

「己を知り、愛することは良きかな、良きかなー」

「ありがと」

……ところで芳乃さん、もしかしてボクのこと何か知ってたりするの？

己を知り——って、それ、ちよつとニュアンス的にあっちの世界でのことも入ってない？ これ大丈夫なやつ？

「ああ、そうだ。みんな、それ読み終わったら控室に戻ってくれ。予定

通り今日打ち上げがあるから、その話をしないと。あ、参加できそうにない子がいたら先に言ってくれ」

「「はい」」

とは言うが、結局特に不参加者は出なかった。

ボク個人も、そのことが少し嬉しかった。

——なお、打ち上げ会場は一時間ほどでお酒好きアイドルによつて地獄と化したのだがそれはまた別のお話。

@ —— @

フェスの興奮が冷めやらないなかでも、次の仕事は訪れる。

まあ、その程度のことは、慣れた。ライブの後にすぐ仕事だとか、そういうことは割としょっちゅうだし。

ただ、今日のものはいつものとは一味違う。何せ——今日からソロ活動の解禁だ。いや厳密には今回ソロではないが。組み合わせ替えの解禁というのが正確か。

今日、ボクが一人で仕事に向かっているのはその関係だ。より正しくは、プロデューサーの送迎で向かってる、だけ。

……しかし。

「まさかソシヤゲの声優とはね」

「不満かい？」

「まさか。ゲームは好きだし楽しみだよ。けど——こういうのって普通、声優さんがやるべきじゃないかって思ってる」

「うちの事務所でも安部さ——ウサミンも魔法少女モノやってるじゃないか」

「何で今言い直した？」

「気のせいじゃないか？」

気のせいかな。

気のせいということにしておこう。

「ボク、いわゆる客寄せのために起用される系の芸能人枠って苦手なんだよね。キャラや作品に合ってる人ばかりじゃないし」

中にはその点完璧な人もいるけどさ。上手いかどうかじゃなくてキャラに合ってるという意味で完璧。勿論上手い人も大勢いるけど。それはそれとして、合っていない人というのは往々にして悪目立ちしがちだ。警戒するという人は多いだろう。ボクもする。勿論、ボクもそうなってはしまわないよう細心の注意は払うつもりだが……。

「はあとさんのことかい？」

「いや、自分のこと」

「……そ、そっちは大丈夫じゃないか……？」

「どれだけ頑張ってももしものことはあるよ。それにプロデューサーがしゅがはさんに合う役をなんとかしてくれたんじゃ？」

「そうなんだけどな……」

——それと、今回の仕事に関しては嬉しい誤算もある。態度を軟化してくれたしゅがはさんが、仕事が「欲しい」じゃなくて「一緒にやろう」と言ってくれたのだ。

その件もあって、本気を出したプロデューサーは相手方と交渉してしゅがはさん向けの役を勝ち取ることに成功。見事二人での仕事ができるようになったのだった。もつとも、今日は先に用事とかで現地集合だけだ。

プロデューサー曰く、じっくりと討論してしゅがはさんも納得のいくであろうキャラを作ってもらったとのこと。しゅがはさん自身も人気を落とすたくはないだろうから、相手方の演技指導にもちゃんと耳を傾けるだろうし……うん。そこに関しては大丈夫、だと思う。不安要素は数限りなくあるが。

「そもそも何でボクだったんだろ」

「PSY gameサイゲームsスの人がFROSTを見て『この子だ!』って思ったんだってさ。で、それとはまた違う役柄を見たくなったとかで」
「嬉しいけどやっぱ不安」

と、そんな話をしているうちにスタジオが見えてきた。

プロデューサーはこれから戻って他の子たちの送迎をしたりレッスンを見に行ったりすることのこと。毎度毎度忙しいプロデューサーだ。いやマジで。

お礼を言ってから社用車から降りてスタジオ入口まで向かうと、中からスタツフと思しき人が出てくるのが見えた。

「おはようございます。白河さんですか?」

「はい、おはようございます。白河氷菓です。すみません、お待たせしてしまいましたでしょうか」

「いえ、こちらが勝手に来て待つておりましたので問題ありません。PSY gameサイゲームsスプロデューサーの原田はらだと申します。以後お見知りおきを」

「改めまして、スターライトプロジェクトの白河氷菓です。本日はオファーいただき、ありがとうございます」

一礼し、軽く挨拶を終えたところでスタジオに通される。アフレコの設備は前にFROSTやフルボッコちゃんの時に見ているとはいえ、あれは346プロの設備だったからこうして外で見るとまた新鮮だ。

「おつ。おいーつす☆」

「あれ。早いね」

そんなこんなで待合室にたどり着くと、既にしゅがはさんが待機していた。どうやらボクよりも先に来ていたようだ。

軽く手を挙げて挨拶して隣に座ると、にこにこしながらしゅがはさんはこちらにむかって語り掛けてくる。

「折角のお仕事なんだしそりや早く来るともんよ☆ 年上より遅く来ちゃった気分はどーお？ うりうり☆」

「しゅがはさんがはやしゅぎりゆんらよ」

「何言ってるかわかんねー☆」

理不尽な。

ほっぺたをこねくり回されているので超喋りにくい。まあ、しゅがはさんも本気で言ってるわけじゃないだろうしいいんだけど。

さて、と気を取り直して原田さんに向き直る。

「改めて、本日はよろしく申し上げます」

「よろしく申し上げます☆」

「本日はお忙しい中ありがとうございます。こちらこそよろしくお願ひします」

相手の礼儀正しい一礼にほっと胸をなでおろす。普段は内々での仕事の主だからちよつとなあなあになつちやつてる部分はあるけれど、こういう風に挨拶を返してくれると仕事の方もちゃんとしてくれるかも——と少し安心できる。

まあ、あくまで第一印象なんだけど。

「先に根津プロデューサー経由で作品とキャラクターについての概要は送っておりますが、その件に関して何か質問などありますか？」

「では、あの、一つ質問が」

「はい、何でしょう？」

「……このキャラクター設定は、原田さんが？」

「いえ、全体会議で設定の骨組みを組み、最終的にシナリオライターさんに監修をお願いするというかたちで作っております」

「分かりました。ありがとうございます」
「？」

しゅがはさんは首をかしげているが、ボクにとってはこれ、割と重要なことだ。

”グランドレッドインフアントリー”、それが今回ボクらが出演することになったソーシャルゲームだ。某B社の「グランドレッド」を原案としたコラボ系……とは言いつつも、ソーシャルゲームにする関係もあつて基本的に原型はほぼ無い。ファンに殺されるかもしれないとは原田さんの談。そこはボクらにはあまり関われる場所じゃないから一旦置いておく。

歩インフアントリー 兵の名を冠するだけあつて機械化歩兵、つまりロボットを前面に推しつつ、原案通り巨大戦艦もまた重要なファクターとして語られることとなる。要はスーパードロイドな大戦だ。ゲーム形式もそれに近い。

ボクの役柄は、かつての戦役において多大な戦果をあげた最高SレアSリティRの艦長で、英雄とすら称される——しかし、その類稀なカリスマ性と能力から政府に危険視され、本来の肉体を奪われて冷凍睡眠に課せられた人物。その類稀な眼力と変幻自在な戦術により「錬アルケミー金術師」とすら呼ばれた傑物だという。

本来は男性だったが、その知名度とカリスマ性を削ぐためにそちらの肉体は既に消失。新たにクローニングされた女性の肉体を与えられている……というのが設定となる。

なんだか色々と符合が一致してしまっているが、誰か開祖様のことでも知っているのだろうか。いち関係者であるところのボクとしてはそこが気になって気になって仕方なかった。

ちなみにしゅがはさんはノリと勢いで全てをぶつちぎっていく系天才パイロットである。

「質問は以上ということでしょうか。では、これから収録の方に移りたいと思います。佐と……はあとさんの方から、よろしい

でしょうか?」

「オツケーです☆ じゃ、あいすちゃんお先ー☆」

「うん、頑張つて」

「モニタリングをしておりますので、白河さんの方はそちらで待機いただいても構いませんか?」

「あ、はい。大丈夫です」

不意に、去り際にしゅがはさんにうりうりと頭を撫でられた。

最初のころと比べると、随分と態度が軟化してきて打ち解けてくれたものだ。色々なことを一緒に経験して、相手の側に踏み込んでいたり逆に踏み込まれたり。なんとはなしに、そういった日々の積み重ねは大事なのだなあと実感できる。

さて、それはともかく収録だ。演技に関してはボクの方に一日の長がある。何かアドバイスができることがあればいいんだけど……。

……で、モニタリングをするための部屋にやってきた。

ここではどうやらリアルタイムにえーと……Live2D、だっけ? アレを合わせることで、その場で台詞とキャラの動き(カットイン)がちゃんと合っているかを見ることができると聞いていた。

その場でこういうことができるなんてすごいなあ、なんて思っていると、しゅがはさんの収録が始まった。

—— スイッチ・オン☆ ぎゅいんぎゅいーん!

—— オラオラオラッ、そののけー☆

—— きゅつぴーん☆ 殺気!

—— うゝわゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!

率直に言つて完璧である。

ボクがアドバイスすることがあったものか、どうか。

プロデューサーの言うことは決して伊達ではなかった。しゅがはさんが自分自身を出しつつも無理なく演じきれられる程度の、しかしちゃんと魅力あるキャラとして出来上がっている。特に最後の濁音混じ

りのような悲鳴なんて完璧も完璧だ。しゅがはさんが演じるキャラ、どうも基本的にイジリやすい系のキャラ付けがされているのであいう明確なツッコミどころがあるとプレイヤーとしても親しみやすそうだし。

というかよくあんな叫びが出たな。素か？ 素なのか……？

「あーしんど」

「お疲れ様、しゅがはさん。はい、これ」

「んーありがとーこの心遣いとってもスウィーティー☆ でもスポドリよりレモネードとかの方がポイント高かったゾ☆」

「また作るよ」

というかこの場にあつたのがスポドリだけだったってだけで、先にリクエストされればそれなりのものは用意していたと思う。

「それじゃ、次ボクだから行ってくるね」

「いつてらー☆」

さて、しゅがはさんがひと段落着いたから今度はボクの番だ。

キャラクター的には……どうかな、軍人で、カリスマ的存在で、元男……亜季さんと時子さん、それからカリスマだから……美嘉さんかな？ それと開祖様のエッセンスを加えて模倣、抽出して……と。

『それではお願いしまーす』

「はーい」

ヘッドフォンから流れてくる声に応じて、マイクの前に立つ。

さて、と息を吸って、吐いてー……。

「総員、第一種戦闘配備ッ!!」

『「!」』』

——その瞬間、ヘッドフォンの向こうでザンツ、と何やらその場で整列したような音が聞こえてきた。

振り向けば、ガラスの向こう側のブースにいる皆さんがその場に起立して一糸乱れぬ動きで整列している。

……何で……？

「……あの？」

『すみません。続けてください。どうぞ』

「は、はあ……では」

ちよつと意味が分からない。会社の社長さんとか、うちの専務さんとかでも来たのだろうか……？

ともかくそういうことなら次の台詞だ。ちよつと威厳ある感じで……。

「元地球連合軍グレイブヤード艦隊司令、ファウストだ。貴様らの命、この私に預けろ」

『！！！！』

「……!?!」

ビシイ、という音が聞こえたと思って再び振り向くと、皆さんが一齐にこちらに向かって敬礼をしている。

……何だこの状況!?! まるで意味が分からんぞ!?!

「……あの、説明をしていただけじゃないでしょうか……？」

『申し訳ありません。これはですね……我々の作ったキャラクターに命を吹き込まれていることの感動でこうなつたと申しますか』

「はあ」

『キャラクターをL2Dで動かして台詞をアテているのを見ると、当初想定していた以上のカリスマを感じてしましまして、結果、皆自然

とこのように……』

褒められてる……褒められてる？ ……つてことでもいい……のか
……？

いや、演技を褒めてくれるからこそああいう語り口なはずだ。
うん。ちゃんと褒められているものとして受け取っておこう。

……皆さん、仕事に夢中なんだよ。きつと。

「あ、ありがとうございます？」

『ありがとうございますこちらから言わせてくださいありがとうございますこの
期に演じていただきたいキャラクターがもう一つあるのですがよ
ろしいでしょうか』

「え？ え？ あ、え？」

『この期に演じていただきたいキャラクターがもう一つあるのですが
よろしいでしょうか』

「え、ええと、け、契約内容は、まだ一キャラクターだけです、そ
の件に関してましては当方のプロデューサーと確認を取ってからに
していただければ……」

『了承しましたすぐに確認を取って参ります』

——その後、ほんの数分も経たずに原田Pは根津Pからの承諾
を勝ち取り、ボクに二つ目のキャラクターを演じさせることに成功し
たのだった。

ちなみに、次いでボクが演じたのは同性の先輩士官に強烈な憧れを
抱くヤンデレ、なんていうこれまたどこかで見たことのあるキャラク
ターであった。

なんでも、やんだ演技や狂笑、そういつた負の側面を持つキャラク
ターを演じてみてほしいのだとか、なんとか。ちなみにこちらも好評
だった。

……ヴィーラさん知ってる人、いるのかな。いや流石に無いと思
いたい。うん。きつと無い。今度は際どいところじゃあなくてど真ん

中ストレートみたいなものだけど、このくらいならよくある……うん、創作上ならよくあるキャラだ。大丈夫！

……なお、配信は二か月後のことになる。

サンプルボイスを聞いて爆笑していた晶葉と志希さんだが、配信後はと言うと……十数時間もかけてリセマラしてみたり、即コンビニに行ってカードを買って来たりするような様子を見る限り、どうも晶葉はハマってしまったらしい。志希さんはしばらくしたら飽きるだろうけど。

これは、ボクが沼にハマらせてしまったと言えるのだろうか？

……いや、沼にハマるのは自己責任だね。うん。

たぶん。

39：ラビット&アイス

「今日も一日頑張ったゾーイ」

フルボッコちゃんの収録と雑誌取材を終えたその日の夜。ボクは倒れ込むようにして自室の床に体を投げ出していた。

時刻は午後八時過ぎ。ボクは強制HPコンジャクション1でも受けてしまったかのような疲労の中にいる。

今日の撮影はアクションが多めで大変だった。ボクの体力を思えば普段から既に大変といえば大変ではあるのだけど、それを超えて大変というか……うん、なんというのだろう。今回は今期の佳境。フルボッコちゃんに対してブランが宣戦布告を行い敵に回る——というある意味最大の山場を迎えた今日、ボクの負担はマックスに到達していると言ってもいい。

迫る脅威！ 最悪の状況での裏切り！ そして最強の味方が最強の敵に！ それを演出しなくちゃいけないんだからそりやもうボクは今大変なことになっている。表情撮り、動き撮り、アクション撮り、ついでに裏で死ぬ。いつも通りと言われればその通りではあるが、それでも今日はちよつと濃厚だった。

幸いなことに、この時間ならまだ寮の食堂は営業している。とはいえ残り十数分程度。急がなきゃいけないことは確かだった。

「お風呂は……」

……いいか。この時間なら人は少ないだろうし、汗は適当に分解すればいい。荷物だけ置いて早めに向かおう。

大事なものもあるし、玄関に置いておくのも良くないし……と思いつつ、這いずるようにして内ドアを開いて部屋に入る。と。

「きゅ」

「……きゅ?」

妙な声が、部屋の中から聞こえてきた。

声。いや、鳴き声?

何だ今の?

慌てて電気を点けて部屋の中を確かめ、ついでに解析もかけてその正体を確かめる。

それは――。

「……う、やぎゅ?」

ウサギ。ウサギ目ウサギ科の、あのウサギ。

白くて、ふわふわで、なんだかやたらと首元の毛と耳が長いウサギがそこにいた。

……ウサギ? いや、うん、ウサギ……の、はず、だけど……。

「ウサギ……」

うさぎ。ウサギ。ウサミン。ミミミン。いや違うそっちじゃない。

ウサギ。ラビット。白い。長毛。耳長い。アンゴラウサギなんかの長毛種ともまた違う見た目。見たこと。無い。いやある。いや無い。ある? どっちだ?

……あつ!?

と、その事実気付いた瞬間、机の上に置いていた「あちら」と「こちら」を繋ぐ端末が鳴動した。なんともちよいどいいタイミングである。ボクは混乱しながらも後ろ手で扉を閉め、端末を手にとって応答した。

「氷菓です!」

『オレ様だ! そっちに何か行ってないか!?』

そして、混乱の最中にあるボクの言葉に応じたのは開祖様だった。何かあったのかなあとも思うし、このウサギの存在もそれに関わることかなあとも思うけど……こっちの世界にいて何が起きたというのだろうか？

「う、ウサギがいました。氷菓です！」

『いやお前がヒョーカなのは分かっているからちよつと落ち着け。死んだりしてないんだな？ ひき肉になったりしてないんだな!?』
「してないですよ!？」

何故そんなにスプラッタなことになる理由が!？」

……なんて思っていると、開祖様は少しだけ安心したように軽く息をついた。

驚いた。開祖様がここまで焦るなんて。明日は雪でも降るのだろうか。

『そりや結構。貴重なホワイトラビットが無意味に死なねえで良かったぜ』

「あ……やっぱりホワイトラビットだったんですか」

——ホワイトラビット。空の世界では幸運の象徴として語られる希少な生物だ。

棲息区域も生息数も限定されており、そのために気質も非常に臆病だ。当然ながら普通に暮らしていて姿を見ることはまずできない。だから、その姿を見ることができた人はその一日幸運になれる——のだとか。

実際警戒心は強いらしい。ボクの目の前にいるこの子も、さつきからずつとこちらに向かって威嚇し続けている。可愛い。

「何があったんですか？」

『うちの騎空団でホワイトラビットの保護の依頼請けてんだよ。で、

保護地になつてゐる島に移送してゐる最中に脱走してな。オレ様の研究室に突っ込んでドーン！　だ。現場にこの通信機があつたんでまさかと思つたんだが……』

「うわあ」

何がどういふ風に作用してこんなピタゴラススイッチが完成してしまつたのだろう。

いや、それ以上に――。

「……開祖様、これ、偶然ですけど物質転送と生体転送が実現してるんじゃない」

『マジか。マジだ。……オイオイオイマジか!?　マジじゃねーか!』

大変だ。まつたくの偶然と事故によつてとんでもない現象が起きてしまつた。

これが運命的な大偉業つてやつか。違つか。いや何でもいい、この現象が起きたこと自体が問題なんだ。とんでもないことですよこれは。自分の意思で、ある程度自由に世界と世界を行き来できるなんて……。

『薬品の配分配合、それに衝撃の度合いやタイミング、温度湿度その他諸々……うおおお全部すぐに洗い出して精査しねえと……!　あ

あもう何で解析が得意なお前がそつちにいるんだよ!』

「う、うめんなさい!」

理不尽である。

そもそも今のボクはこつちの住人なわけで。

確かに開祖様が言うならあつちにホイホイ戻つてつてさつさと術理を解き明かすのもやぶさかでないが、現状その手段が無いのだからどうもこうもしょうがない。

『オレ様の助手ができるヤツなんてそうはいねえんだぞ……あの馬鹿弟子はその点に關しちや論外だしグランのやつは死ぬほど忙しいしよオ……! ああでもやるしかねえ! ククク、楽しくなつてきやがった……!』

「あ、あの、開祖様?」

『今は後にしろ! すぐに作業にとりかからねえと残留物質を調べられねえ!』

「あ、はい……すみません……」

——そのまま、通話は途切れてしまった。

いや分かるよ。すぐ分かる。錬金術師にとって未知を探求しようとすることは本能に近い衝動だ。原理不明の謎の現象が起きれば、混乱する以上に興奮する。現状のボクは疲労と混乱でそれどころじゃないけど、万全の状態の開祖様がこんな現象を見て発奮しないわけがない。今頃原理と状況とその他諸々を分解^{バラ}して解体^{バラ}して解析^{バラ}してしまいたいと思つて実際に行動している頃だろう。ボクも同じ状況ならそうする。クラリスさん（崩）はしない。

ただ、ボク個人としてはその前にこのホワイトラビットをどうすればいいのかという指示をしてほしかったところだ。

まあ、依頼内容から考えるとこつちで保護しとくのが妥当なところだろうけど。

「……どうしよつか?」

軽く呼びかけるも、特に返事は無い。当たり前だけど、ずっと威嚇してきてるだけだ。

危険度は極めて低いとはいえこれでも一応魔物の一種ではあるし、事情を知らない他人に任せるわけにはいかない。そもそもこちらに存在しない生物でもあるわけだし——そりやもう色々と問題がある。可愛いけど。

さて、どうしたらいいんだろう。

……寮ってペット可だっけ？

@ ——— @

後日、ボクはある人の家の前にやってきていた。

築十年から二十年ほどの近代的な外観の一軒家だ。ごくありふれた造りの門には、「城ヶ崎」と表札が掲げられている。

思えば、志希さんのマンションや晶葉の家、プロジェクトメンバーの人の家に行ったことはあってもこうして他の……特に、アイドルの先輩の家に行くのは初めてだ。

そんなことを思いながらチャイムを鳴らすと、やがて中からぱたぱたと足音を立てて美嘉さんがやってきた。

「はいはい、お待ちせー！ やっほ、氷菓ちゃん★」

「こんにちは。お忙しいところ、本当にありがとうございます」

頭を下げると、美嘉さんは「いいっていいって★」なんて言っ軽く許してくれた。

受験の年度だというのにこの対応、本当にありがたい話だ。

今回の件の発端は、今朝までさかのぼる。

同じ寮生でかつあちらの世界に行ったことのある小梅さんに軽く相談してみたところ、「じゃあ美嘉ちゃんに相談してみるといいかも……」とのこと。その後、電話で取り次いでもらったらなんともあっさりと許可を貰えた。で、こうして訪問したという次第である。

「立ち話もなんだし、上がっちゃってよ★」

「すみません、ありがとうございます。こちらお手土産持って来たんですけど、お口に合えば……」

「え？ そんな、気にしなくてよかったのに」

「礼儀ですし」

先輩だし、カリスマだし。

ちなみに中身は高級アイスである。手土産用にと思ってた。ネットで調べて伊勢反だかに行ってみたのだけど、それはそれはべらぼうに高級であった。今度自分用にも買ってみよう。

部屋に通されると、パステルカラーで彩られた内装がまず目についた。

ボクの部屋と正反対である。そもそもボクの部屋がモノトーンな上に、晶葉曰く「男の部屋」ということもあって、比べるのもおこがましいと言えなくもないのだけど……。

いやでも、最近はそれなりに気を遣ってるというか……蒼とかそんな感じの色のものも増えているし……クレーンゲームで取ったぬいぐるみなんかも置いてるし。問題ないし。無いよね？

「片付いてなくってごめんね★」

「そんなことないですよ。ボクの部屋なんてこんな華やかじゃないですし……」

「そう？　なーんか意外……でもないのかな……」

事実である。

そして意外に思われなかったこともまた別に驚くべきことじゃない。外から見ればボクを見ればそういう印象を受けてもしょうがないし。

「で、どんな話？」

「……美嘉さん、ちよつと、この子を見てほしいんですけど」

「んー？　あ、カワイー★　ウサギ？」

「はい、ウサギです。ちよつと今ボクの部屋にいまして……」

「えっ。何でそんなことに？」

「……あの、『あちら側』からですね、その……来ちゃいました」

「お空？」

「お空です」

これでだいたい理解してくれたらしい。美嘉さんは懊悩するように額に手を当てた。

こちらの世界の人間があつちに行つたことがあると言っても、あつちからこつちに来たという例はまだない。まあ、ボクみたいな特異な例はあるけど……それにしたつて一度死んだ生まれ変わりという例外だ。開祖様の言葉を借りれば、生と死を司る神であるバハムートが、こんな風に他の世界に死者を転生させるというのは決して珍しいことではないはず。もしかすると、本人は気付いていないだけで他にもそういう人はいるかもしれない。記憶を引き継いだのは賢者の石の錬成のための実験体という経緯ありきのものだし、境遇自体は無いわけじゃないはずだ。

その点、そのままの肉体でそのままこつちに来た、というものはま
ずない。今回のこれが初めての例になるだろう。

「そりゃー困るかあ」

「寮もペット可だか分かりませんし、他の方に頼むにしても事情を知っている方じゃないとですし……」

「そうだよー。マンションとかアパートとかに住んでる子だと、それも難しいだろうし。ペットを飼い始めるとなると、ちよつと負担もあるし、ね」

「はい……ボクがお世話できるならベストなんですけど」

「アタシの家でも……うーん、ちよつとどうかな、お父さんとお母さんに聞いてみないと難しいかも」

「ですよー……」

ペットを飼う、と一口に言うのは簡単だけど……命を預かるというのは相当に覚悟の必要な行為だ。

食事、住処、トイレに運動。一つでも欠かすことはできないし欠かしてはいけない。自分が難しいからつて他の誰かにそれを押し付けるのはひどく不誠実だし、個人的にも後ろめたい気持ちは残るのだけど……それでも現状他にやれることが無い。資金面でのバックアツ

プを全てボクがするという形なら、まだマシ……だろうか。

「あとは未央ちゃんとか卯月ちゃんとかにも聞いてみるといいかも
★」

「未央さんに卯月さんですね」

「うーん、他……んー……ん？ あ、えーつと、ちよつと待ってね。氷菓ちゃん、寮ってペット不可だっけ？」

「寮ですから……」

「……ブリッツェンは？」

「……ん？」

——ブリッツェン？

「……ブリッツェン？」

「うん。ブリッツェン。トナカイでしょ？ ……動物でしょ？」

「ほあっ!？」

「……えっ!？ 気付いてなかった!？」

……マジだ!! そうだ、普段まるで気付いてなかったけどブリッツェン一応トナカイだし動物だ! 寮に動物がいるってことになる!

ペット……いや、ペット、と言うにはちよつと、いや、かなり無理があるし、おかげで最近ずつと忘れてた……。

何せ普段から二足歩行してる上に当然のように意思疎通できるんだ。人間が中に入ってるんじゃないかって疑いかけるくらいとんでもない。構造解析にかけてもトナカイとしか言えないからもうトナカイであってそういう生物なんだと思って普通に受け入れちゃってたし……動物がいる、っていう認識が完璧に抜けてた。

「あ、あ、でも、許可貰えるかは——ちよ、ちよつと電話! してきます」

「ど、どうぞー」

直後、ボクは部屋の外に出て専務へ電話をかけた。
即許可が出た。

イヴさんという前例があるので別にいいのだとか。

事務所にも時々猫がいるし、将来的に寮に入る子にもペットがいたりする可能性があるわけで、後で寮長さんに言えば大丈夫だとか。

……もう解決してしまった。

「……か、解決しました」

「お、おつかれー……★」

「な、なんだかすみません……本当に……」

「あ、アタシなんだったんだろ……」

「で、でもボクや寮生のみんなじゃ多分気付けなかったでしょうし、美嘉さんみたく外部の人の見地があって初めて解決したことだと思いますー！」

「そ、そう？　ありがとう★」

……うん、実際指摘されなきや気付かなかったと思う。

指摘されてなお一瞬戸惑ったくらいなんだから、これで何も言われなきや多分気付く気付かないどころか普通に引き取り手を探し続けてただろう。

ボクも自分が大概ダメだと理解はしているが、これは本当にダメダメだ。それだけブリッツェンのことを「動物」じゃなくて「家族」と認知していたという意味でもあるわけだが。

「……話終わっちゃった」

「ん、でも解決して良かったよ★　これからクローネの方でもお世話になるし、良い関係作ってきたいもんね★」

「え、あれ？　クローネの方で？」

「うん。今度そっちでできる新しいユニットに入るんだ★　志希ちゃ

んと、奏ちゃん、周子ちゃん、フレデリカちゃんたちがいるって
言ってたっけ？」

「あつ」

あつ。

……あつ。

「……頑張ってくださいね、美嘉さん」

「え、何が？」

「良い胃薬、見繕いますから」

「だから何が!？」

「何か困ったことがあれば言ってください。志希さんの件に限り」

「限り!？」

「他の方は……無理です……」

「無理なの!？」

奏さんは……まだギリでなんとかなるかもしれない。けど周子さんとフレデリカさんは無理だろう。うん。下手に手を出せばこっちが火傷することになる。いや、火傷で済めばどれだけ良いことか。死ぬな、うん。確信を持って言える。死ぬ。

「……あ、勉強なら見れますよ」

「み、見れるの？ 入試問題だよ？」

「MITやCITでもないなら少々大丈夫ですよ。日本の入試問題だし。現国と古文以外ならなんとか」

「お、おお……え、本当に？ 中学生だよね？」

「晶葉と志希さんと一緒にいるくらいなので、そのくらいはできないと」

志希さんは元は飛び級でアメリカの名門大学にいたはずだ。多分、そのくらいまでならイケるはず。

というわけでここからは美嘉さんの受験勉強のお手伝いのターンだ。貴重な時間を貰って、重要なアドバイスを貰えたのだからこのくらいお礼はしないと。

実はボク、晶葉にはちよいちよい教えるのに向いてると言われてるんだよね。錬金術の基本原理に「理解」というものがあるが、そのためにはまず物事の流れ、根幹を理解しておかないといけなくなる。そのおかげで学習のための道筋を最適化できる……というのがあると思う。

この後、美嘉さんのみならず現在受験生の人に勉強を教えることになるのだが、それはまた別の話である。

@ ————— @

「というわけでウサギを飼うことになりました」

「ウサギか……いいな。カワイいなッ！」

「ふわふわれす〜♪」

その日の晩、ボクはお隣さん二人を呼んでホワイトトラビットのお披露目をするようになった。

許可は取れたし、必要な道具も買って来たし準備も万端……と言いたいところだけど、やっぱり動物を飼うとなれば、周囲の人たちの理解を得られていた方が良くに決まっている。

一応、寮長さんにも言っているし、万一の時にはあおぞら園かおじじいのところに残る手はずにもなっている。だから滅多なことじゃお願いはしないと思うけど……もしものこともあるしね。

なお、ホワイトトラビットは頬ずりされるのが嫌なのか、七海ちゃんのお腕の中から逃げ出そうとしている。

昨日のうちに餌付けしておいたのが功を奏したか、ボクに対してはほんのちよつとだけ慣れた。やはりニンジンの力は偉大だ。なお本日から通常のペレット——を、ボクが手ずから加工したものになる。

「名前は？」

「……あ、決めてない」

「それじゃダメれすよー。ちゃんとお名前つけてあげないと」

名前、名前……名前か。

確かに七海ちゃんの言う通り、これから一緒に暮らすというなら名前は必要になるか。どんなのがいいだろう？

「美玲さん、どんなのがいいかな？」

「いや、ヒョーカが決めなきゃだろ……」

「うーん……でもボク、別にネーミングセンス無いし……」

「ちなみに候補とかあるんれすか？」

「シロとかソラとか」

「それでいいじゃん」

いいのか。

それでいいのか。

……いいのかな、分かりやすいし。

「じゃあシロで」

「一番安直なのいったなツ。いやいいけど」

「ごはんとかどうするんれすか？」

「時間もキリがいいし、そろそろあげるよ。皿取って来てくれる？」

「はいれす」

言うと、七海ちゃんはそのままシロと一緒に抱えていたぬいぐるみを手渡した。

「サバじゃねえ!!」

「サバオリくーん!？」

「どういう間違え方だよツ!？」

勢いで投げ飛ばされたサバオrikunは、そのままベッドへ着地した。

狙って投げたとはいえ、また見事な着地である。

「お皿って……もう専用のもの揃えたのか？」

「うん。帰るまでずっとそれに費やしてたよ……」

「だから部屋のもが増えてたんれすねえ」

「……と、トイレとかはどうするんだッ？」

「どうも賢い子みたいで、場所を教えたらもう覚えちゃって」

「ふーん……良い子だなッ」

美玲さんに撫でられるままに撫でられるシロ。抱きかかえられることは苦手なようだが、あの程度の接触なら特に何とも思わないらしい。

餌付けされはしたが、根が臆病な性格だ……ということだろうか。まあ、その辺は徐々に慣らしていけばいいだろう。

「エサは何食べるんだ？」

「ペレットに独自配合で色々、みたいな」

「おさかな入れましょう」

「ウサギは草食だよ七海ちゃん……」

「じゃあワカメやこんぶを……」

「それ、食べてくれるのかッ……？」

「混ぜれば食べるんじゃないかな……食べさせる意味があるか疑問だけど」

「残念れす」

隙あらばねじ込んでくるよね七海ちゃんは。

いや、それが持ち味なんだからそれだからって遠慮したり自重したりする必要無いんだけどね。

……しかしだいたいぶ気に入ったのか、七海ちゃんはずっとシロを撫で回してるな……。普段からサバオリくんだったりあんきもさんだったりといったぬいぐるみをよく抱えてるし、ああいうふわふわしたのが好きなのかもしれない。

「それにしてもペットはいいれすね〜……七海もアクアリウムとか始めてみましょうか」

「ウチは逆にしてなかったのかそれって状態なんだが」

「残念なことにしてないんれす……。プロジェクトルームに置いたりしてもいいんれすけどね〜」

それは……。来年度以降がちよつと大変にならないだろうか。主にボクらが移動することになった後。

今後ずっとプロジェクトがああの部屋のままってことは無いだろうし……。それこそ七海ちゃんの部屋に置くか、事務所の特定の場所に世話をできるようにして置いとくか、とかの方が良いような気もする。

「美玲さん何かペットとか考えたことないの？」

「ウチか？ んー……。そうだな……。熊とかかッ！」

「むりです」

「えー。ほ、ほらッ、こう、檻の中にッ！」

「やめてくださいいしんでしまいます」

せめてレッサーパンダとかにしてください。

……。まあ、ブリッツエン並みに頭が良くて大人しい熊とかなら受け入れてもいいかもしれないけどさ。そんなのが果たしてこの世にいるのかどうか。

いるかもしれないと思ってしまうのはブリッツエンに常識を毒されてしまっている影響だろうか。

ボクは訝しんだ。

40：愛なら仕方ない

夜の蒼が広がりゆく空の下、ボクは事務所の屋上でその色彩の移り変わりを楽しんでいた。

時刻は午後七時前。夏休み故にレッスンも早めに終えてしまった時間帯である。

近年、「蒼」と言うと空の色、つまり水色に近い色をイメージする人が多いみたいだが、本来はどちらかと言うと暗めの青色に近いと聞く。例えば、夕焼けが沈み切った後の空の色……のようだと言えば、それが近いのだろうか。

ただ、個人的には言葉の響きと字面、それから……創作分野なんかでの使われ方もあって蒼＝空の色という風に思われても仕方ないと思う。

まあどちらにしても、ボク個人はどちらを示す言葉としても「蒼」という色は好きな方だ。空色が一番好きだけど。

しかし元々の意味を思えば蒼という色は草木の色という話もあるわけで、実際「蒼色」と調べてみると青緑色に近いんだよね……何でアレを空の色として表現するようになったのだろう。深い青色って意味もあるから？——なんて、空を見上げていると、そんなとりとめのない思考が浮かぶ。

さて、それはともかくとして、ボクのレッスンは今のところ順調だ。

……順調、というか、正確なことを言えば単に今クローネに編入するのどののという手続きやら準備のために、ちよつと宙ぶらりんになってレッスンしようにも何をするか、ってなってるだけだけど。そんなわけで、最近は体力増強のためのトレーニングを慶さんと一緒にやるが多くなっていった。

そのうち何か、とプロデューサーは言うけれど、さて、それもいつになるのかな……。――。

「おーい白河ちゃん」

早えよプロデューサー。

ボク今「きて、それもいつになるのかな——」なんつってたそれがれてたじゃん。もつとこう……あるだろう、タイミングとかが！

「……はいはい」

「うおっ!？」

……と言いたいところではあったけど、だからって呼ばれているのに姿を見せないのもよろしくない。

ボクはさっきまで寝転んでいた階段室の天井部分から飛び降り……はず、普通に降りてプロデューサーの前に姿を見せた。

「な、なんでこんな場所へ登って……」

「ボーツとしてた」

「ボーツと……?」

「空見てた」

「……怪我とか、しないようにな……」

おいなんだプロデューサーその可哀想な子を見るような眼は。

いや確かに客観的に見るとこの辺の発言はおかしいからちよつと可哀想な子認定されてもおかしくないけど、そういう目でボクを見るんじゃない! やめろ!

あと怪我くらいしても二秒で治るよ!

内心でそう憤慨するボクへ、プロデューサーは幾枚かの紙を手渡してきた。

「……これは?」

「前に言っただろう? 『その内何か』って。新しい仕事……じゃなくって新曲だけどさ。どうだい?」

「ペース早いね。ちよつと前にお披露目したばかりでしょ?」

「それでも前の曲の印象に負けることなく歌い上げてくれるって見込

んでるからこそだよ。それに、なんと驚け！ ソロ曲だぞ！」

「そうなんだ。ありがとう」

「軽ウい」

「ボクが無邪気に喜んで見せてもそれ、キャラが違うでしょ」

そう言っただけ——悪戯っぽく微笑んでみると、プロデューサーは何を思ったのか、思いつめたような表情でボクの手を取ってきた。

……え、何で……？

「……何やってんの……？」

「あ、ご、ごめん！ なんだかあんまりにも『お前、消えるのか……？』みたいな笑顔だったもんでつい……」

「セクハラ」

「違うんだ!!」

言い分は完全にやらかしてしまった人のそれだった。

まあ、仕事に支障も出るしそういうつもりはつゆほども無いんだろうから気にしやしないけど。そもそもプロデューサーは仕事にそういう気持ちを持ち込むようなタチでもないだろう。

「ま、期待に応えられるようには頑張るよ。ところで志希さんの分は？」

「もう渡したよ」

ボクにソロ曲を渡すのなら、ほぼ同じ状態に立たされている志希さんも同じようにソロ曲を……と思ったけど、どうやら抜かりは無かったようだ。ほっと胸をなでおろすと同時に、こういう状況だとそもそも志希さんって失踪してるよな……と思い出す。

よくよく思えばその状態の志希さんを、構造解析も何もできないはずの状態で見つけ出して割と驚異的な出来事なわけで。相変わらずプロデューサーは地味にどこかしらおかしい。

「サンプルって今聞いてもいい?」

「ああ、勿論。良ければ曲に対する感想とか聞かせてくれるとありがたい」

イヤホンを受け取って曲を聞くと、綺麗なピアノの音を伴う爽やかな曲調が耳を打った。次いで、やや切なげな旋律。さて、どういった曲かなと思いい資料を開いて歌詞を見れば——ごりごりのラブソングであった。

思わず、頭を抱えかける。

「ど、どうしたんだ!」

「ラブソングって……」

「? 今まで歌った曲でも恋愛要素が入ってる曲はいくらでもあったろう?」

「そりやそうかもしれないけど」

アイドルソングの多くはやっぱり恋とか愛とかを歌うものが多い。共感を生むためだったり憧れを生むためだったり……そこはまあ、色々商業的・芸術的な理由がある。

けれどもボクの場合重要なのは、そういう恋や愛に対する理解が欠けているというところだ。中身的な意味で。

男としても女としても恋とか愛とかしたこと無いし、家族的な目線で見れば……まあともかくだけでも。

ともかく、未だ恋愛に対して関心を向けられないボクにはちよつと難しい……というか気恥ずかしい——という点はまあ間違いない。

思わぬところで思わぬ弱点が露呈してしまった……いや元々その辺は分かってたけどさ。

「難しいってことかい?」

「ボクには少しね……曲名って決まってるの?」

『Dearest Sky』って感じで予定してるけど」

曲名だけで全てを許してしまいそうだ。

Dearest Sky
最愛の空って。いやそういう問題じゃないんだがしかし。何でボクはこう変な方向でチョロいんだ。

「……まあ、何にしても、しつかり歌い切れるように努力はするよ。解釈次第でどうとでもできそうだしね」

「そうかい？　じゃあ……無理はせずに頼むよ」

「大丈夫。試行錯誤とか、好きだから」

考えようによつては、これはそもそもそういう——試行錯誤して臨むべきもの、ということも言える。

水泳と同じことだ。普段他のことはすんなりできてしまうからこそ、こういうった苦手だからこそ試行錯誤するという作業が好き、というか。今回のこれは、言ってみればボクにとっては特別に苦手な分野だ。だからこそ挑み甲斐がある……なんて。

できなかつたことができるようになるのは、楽しい。だから今回もそのスタンスで臨んでいこうと思う。

「ちゃんと歌い上げて見せるよ。ラブソング」

……この件でまた晶葉にからかわれたり告白やラブレターが増えたりするんだろうなあと思うとちよつと憂鬱だけど、それはそれ、これはこれだ。今回も楽しんで仕事に取り掛かるとしよう。できるだけ。

@ —— @

場所を移して、寮の娯楽室。とりあえず、まずは恋愛を主題にした映画やドラマを鑑賞することから始めた。

何やかやと色々考えてはみたがそこはそれ、オタ文化大国の日本である。アニメやドラマ、ゲームや小説。恋とか愛とかを題材にした創作は、ちよつと探せばそれこそ腐るほどに見つかる。別の意味で腐る人もいるがそこはそれとして置いておく。

さて。ともあれボクはそもそもそういった経験は無い。前回の声の収録でそういう演技をしはしたが、それに関しては演技指導が優れていたおかげで、後で聞いてみればちゃんとデレているようにはなっていた。が、今回のこれはまた話が変わる。歌と演技は違うんだ。あの程度絵と音響効果で誤魔化せる声優のお仕事とは異なり、生歌を披露しないといけないときは本気で感情を乗せる必要がある。ラブソングだというなら尚更だ。お客さんに魅せるためには、やっぱり中途半端はいけない。

そんなわけで、自室じゃなくて娯楽室である。ここでなら他の人の意見を聞くこともできるだろうという算段だ。

……なんだけど。

「……キッツ」

——困った。これ、思った十倍はキツイ。

ちよつと理解できないというか、感情移入ができないというか。

そこは、うん。多分、ボク個人の問題だろう。感情を理解できない——と言うとなんだか人の心が無いみたいだな。ちよつと違う。感情と行動にどういった相関性があるってどういう理屈で何故そうしているのか……そういうところが分からない。

描き方が悪いのか、ボクの感受性があまり発達していないのか。いずれにしても、女性というのは難しい存在だと思う。

何でこの主人公は特に何もしていないのにモテるんだろう。そして何故ほぼ付き合いかけの相手を放って、突然湧いて出た極めて失礼な尊大な態度の男になびきかけているんだろう。

何故急に病気に？ えっ事故った？ ……えっ何でこれで急にヨリを戻すことに？ 何で急に子ども……あつえっ？ ん？ んん？

んんんんんん？

「……キッツ……」

つい先ほどと同じ言葉が口を衝いて飛び出す。
どうやら、ボクにはこういうタイプの恋愛物語というのは合わないらしい。

場面は移り変わって夏の砂浜。またしても別の男と遊んでいる姿が見える。

きやつきや。うふふ。つかまえてごらーん。あはは。うふふ。

ナメとんのかこやつら。

「このカップルそろそろ死ぬわね」

「うわっ!？」

そろそろ苛立ちが生じてきたという、そんな折。不意を打つようにして背後から声かけられた。この声は——奏さんだ。

「い、いきなりなんですか……」

「映画のパターンに当てはめて考えてみただけよ。砂浜で無意味に仲良く歩いている男女。海に入ったら死ぬわ」

「……サメ、ですか？」

「サメよ」

まあ冗談よウフフ、なんて言って奏さんはにこやかな笑みを作った。

果たしてこれが本当に冗談なのかどうかは正直ボクには分からない。多分冗談だと思うけど。

「で、何で恋愛映画なんて見てたのかしら？　あまりこういうのに興味があるようには見えなかったけど」

「勉強です。今度ソロ曲貰えるようになったんですけど、それがラブソングみたいで……」

「ああ、そういうことね」

しかし全く参考にはならなかった。

これはボクの出自が関係しているのか、それとも単に観る映画が悪かっただけか……どっちにしてもこのままじゃ問題だよなあ、と思う。

と、ふと気付いた。そういえば奏さんの代表曲の「Hotel Moonside」、あれもラブソング……に近いものではあつたはずだ。

ロマンティックでアダルティック。ともすると神秘的というよりも蠱惑的な感を覚えるあの曲。奏さんならきつとこういつたことは造詣が深いはず。

……ところで奏さん、そこに置いてあるジュースはボクの……いやもういいや。後でもう一杯注げばいいし……。

「奏さん、恋愛経験豊富そうですね」

「ぼふっ」

「奏さん!？」

「けほっ! けほっ……ご、ごめんなさい。突然のことで驚いて」

「あ、すみません」

確かに突然すぎた。そりや驚くか。多分他の人に聞いても驚くだろう。

例えばこれが奈緒さんに聞くと顔真っ赤にして大騒ぎするだろうし、菜々さんなら吹くどころじゃなく逆に呑み込んでむせる。その後大騒ぎする。早苗さんなら……どうだろう。そりや大人だからねーなんて言ってケラケラ笑って適度に煙に巻くかもしれない。その辺早苗さんは大人だ。その辺を思うと奏さんのはまだ静かな方のリアクションと言える。他の人のリアクションが激しいとも言う。

「ボク、そういうの経験無くて。奏さんみたいに綺麗な人なら、もしかするとそういう感情の込め方とか分かるかなあ、と……」

「あら。ふふ、氷菓も綺麗でしょう?」

「ありがとうございます。けど、ボクはちよつと……苦手で、その。そういうの」

「そう?」

「苦手、というかできない、というか。」

もつと将来、自分の性的境遇に対して割り切ることができればまだ分からないけど……今はどうにもこうにも無理だ。考えられない。

それに加えて、まあ、うん。アレもある。

「特に恋愛ができそうになくて。何か良い手段があれば、教えていただければと思うんですけど……」

「あまり人の事情には口出しできないけど——そうね。『Love』^愛って言葉にも、色々な意味があるわ」

「? はい、そうですね。恋愛、好きな……趣味とか食べ物とか、恋人……」

「他には?」

「挨拶とか。『よろしく』って言葉にも使いますよね」

「そうね。もしかして、わざと?」

「?」

……他に何か特殊な意味があったっけ……? やっぱり奏さんには分かってるんだろうか。

『I Love you.』って言葉は、情愛、性愛の意味だけを持つわけじゃないわ。外国じゃあ、家族や友達に親愛を伝えるために、気軽に『I Love you.』を使うの。フフ……日本人には、少しわかりづらい感覚かもしれないけど」

「あー……」

「だから、そうね。確かにラブソングだけれど、その『Love』の解釈を変えても、成立していると思うの。家族を想ってもいいし、友達を想ってもいい。それだって紛れもなく『愛』よ」

「愛……なるほど」

愛。それも、愛。

成程、家族を想うことも、友達を想うことも、愛。

まあちよつと拡大解釈してるとは思うし、奏さん自身もなんかちよつとこれは違うなと言いたげな表情をしているけど。それでもボクの求める答えに一番近いのはそれだ。

というかよくよく思い返してみると、それも含めてのトラウマなんだろうと思う。他人との性愛というものをいまいち信用できないというか。

一回目の人生では母が父を使い潰してボロ雑巾。二回目の人生では父が母を捨てて生活苦。いずれもボクは死ぬほどの目に遭ったわけだし……まあ、うん。愛や恋を歌うと言っても白々しさが出てしまうと思う。

それを思えば、家族愛や友愛を歌うことの方がよりそれらしい、かな。奏さんの言う通り、どちらも同じく「愛」だ。同列に語ることはできないけれど、その質が似通ってさえいれば伝わるものもあるはず……だと思う。

「なんとなく……分かった気がします。ありがとうございます、奏さん」

「役に立てたのなら、光栄ね」

「役に立ったどころじゃないですよ。本当にありがとうございます！」

少なくとも、何も無いよりははるかに良い。足がかりができさえすれば、トレーナーさんの指示を受けて逐次修正していつ、いずれ納

得いくような歌が歌えるようになるだろう。

「——じゃあ、お礼代わりに今から付き合っしてほしいのだけど？」

「え、何に……？」

「映画」

「……あっ」

奏さんは不敵な笑みを浮かべ、ボクにいくつかのDVD……と、B
Dを見せてきた。

「面白いわよ。多分」

「多分って何ですか……!?!」

「私も人におすすめされただけでまだ見てないから」

「見てないものなのですか……」

「見てないものだからこそ、よ」

——結果、またしてもボクは奏さんと映画の鑑賞マラソンになだれ
込むことになるのだった。

なお、題名や題材は少タイロモノ臭がするものの、内容自体は面白
かったことを付記しておく。

@ —— @

「ただいまー」

「おかっ……何を持って来たんだい、氷菓……？」

「ジンギスカン」

翌日、ボクはちよつとした食料を買い込んで施設の方に戻ってい
た。

結局のところ、ボクにとって「愛情」を感じられた一番最初の経験
というのは、あおぞら園でのことになる。

改めて愛というものを見つめ直すには、ここがうってつけだと思っただけだ。

……で、まあそこからの流れで、園のみんなに何か美味しいものを……というところで、ジンギスカンを買って来たわけだ。

においはややキツめだけど、下処理その他をしつかりすればちゃんと美味しくたべられる……はずだ。

……ちなみに、園のみんなの分をまかなうには当然だけど何キロも必要になるわけで。

基本的にボク一人じゃ持ってこられないので、おじじのところの従業員を一人借りてこっちまで来ている。

なお仕事は終わったので当人は帰った。御馳走すると言ったんだけど、「ボスへの裏切りになる」とかで断られた。おじじそこまで狭量じゃないと思うんだけど、やっぱり怖いのは怖いらしい。とりあえず夏フェス発表の新譜は贈っておいた。

「またそんな高価なものを……」

「ボクのお金をボクがどう使っても勝手にしょ」

「自分のために使ってほしいんだがなあ」

「自分のためだよ。今回はホントに」

「それは普段は違うということかな？」

「ソナナコトナイヨ」

いつだって自分のためだよ。

結果的にみんなに良いもの食べさせようとしてるだけでボクはボクのために動いてるだけだよ。

「まあ、みんな喜んでくれるだろうけどねえ」

「それが見たいんだよ、ボクは」

みんなが喜んでると、こう……何て言うんだろう。心の中がくしゃつとして嬉しくなるっていうか。

「もつと独り占めとかしないのかね」

「そんなことしても食べきれないし」

「私は今『押し切つてでも昔もつと食べさせておけば良かった』と少し後悔しているよ」

「それは、ちよつと、ごめん」

別にボクだって先生に心配かけようと思つて食べなかつたわけじゃないんだし、そこは許してほしい。

ダメか。ダメだな。これずつと言われるパターンのやつだな。知ってる。大人にとつては幼少期の出来事はどうしても強く胸に残るものつてやつだこれ。

「私は何かした方がいいのか?」

「んー……お姉ちゃんたちとホットプレートとか出しといってもらえるかな。ボク持つていけなさそうだし」

「うむ、分かった」

「ありがと。ところで先生、ちよつと聞きたいんだけど」

「何だね?」

「うん。下の子たち、何かスカウト受けたとかそんな話、あつた?」

「いいや、氷菓以外は聞いておらんぞ?」

「そっか、ならいいんだけど」

「どうしたんだい、突然」

「ちよつとね。心配事」

こう言つてはなんだけど、今のボクはそれなりにアイドルとしても活躍できるようになつてきていると思つてる。

……自信過剰かもしれないけど。でも、やっぱり人気は、デビューから半年も経つてないにしてはかなりのものだ。

で、流石にそろそろボクの出自についても知ろうという意向が各局から出始めるころでもある。

……それが知れてしまうと、今後は他のプロダクションや心ないスカウトが、二匹目の泥鰌どじょうを狙ってうちの子たちをスカウトしに来たりということがあり得る。それは、正直避けたい。

ボクは偶然346プロで良くしてもらってるけど、他のプロダクションが皆そうだというわけじゃない。信頼できそうなのは……876とか765とか315とか……あとは新興事務所の283プロもアイドルに対して非常に親身で評判も良いけど、それ以外に関しては……どうだろう。よく分からない。

姉曰くボク以外にああいう強引な手を使うことは無いと言うし、普段の振る舞いはともかくとしても要所要所では信頼できる——肝心なところでしか役に立たない——から、大丈夫だと信じたいところだけれども。

「せめて346プロとかならまだいいけど……もしそういう人が来たらまずボクの方に言って」

「うむ、そうだなあ……本人が望むならとは思うが」

「そういう純粋な子を食い物にしようとする人は必ずいるってこと」

「そうだな。うん、その時は連絡しよう」

「お願い」

……とりあえず、これで予防線としては充分かな。

できれば防犯カメラとか警報装置とかそういうのも置きたいところだけど、児童福祉施設っていう場所が場所だけに、内部事情について不透明だと色々と問題があるしなあ……。

やっぱり、個人個人で警戒する以外に無い、か。

「……いや、ああ、ダメだ」

「……ん？ 何か問題が？」

「あ、ううん。ごめん。ボク個人の話」

……「愛」について模索しに来たのに、猜疑心をより深めてどうす

るんだ。まったく。

あ、でもそうか。考えたら先生たちの方がよっぽど詳しいな、こういうこと……。

「そういえば先生、ボク今度ラブソング歌うことになったんだけど」

「らぶツ!」

「へ?」

「いや何でもない。続けなさい」

「……え、ええと。恋愛とか、そういうことについて、ちよつと詳しく聞ければなって……」

「……………」

「先生?」

……硬直している。何だろう。何かショックだったのだろうか。

と思っていると、先生はボクに「ちよつと待っていなさい」とだけ告げ、携帯片手に足早に廊下を駆けて行った。ちらと見えたナンバーは、どうもおじじいのもものようだけど……。

「——私だ。古宮、氷菓がラブソングを歌うという話を……」

……何だ、報告か。先生もおじじいと仲良いから、その関係かな。

そう思いつつ、ボクは今晚の食事のために野菜を切り始めた。

「……そうだ、氷菓が、恋愛……悪い虫がいたら……悔やんでも悔やみきれん……」

『……うちのモンを監視に……』

「……13歳じゃ早すぎる……」

『……まったく……』

……しかし先生たち、一体何を話してるんだろう。

ボクがそういう曲歌うの、やっぱり変なのかな。

変なのかもしれない。まあ、自分でもそれは分かっているから模索してる最中なんだけど。

あー、でも、そうだ。また晶葉に笑われそうだ。くそっ。今度晶葉も同じようにラブソングとか貰ったらこっちから笑ってやる。いや笑わないかもしれないけど。

そんなとりとめのないことを思いつつ、ボクはみんなの喜ぶ姿を想像しながら、夕食の準備を整えていった。

番外：ろく☆ちゃんねる抜粋（4・フルボッコちゃん編）

《幽体離脱フルボッコちゃん Buster!感想スレ》

（1話放送後）

688 会員番号774番 20XX/XX/XX ID：*

**

このスタッフは一話目をネタ塗れにしないと気が済まない性癖でもあんのかよ!!

689 会員番号774番 20XX/XX/XX ID：*

**

ありそう

693 会員番号774番 20XX/XX/XX ID：*

**

ありすちゃん一話目なのに犬神家してかわいそう……笑ったけど

……

695 会員番号774番 20XX/XX/XX ID：*

**

やっぱり鉄壁スカートだったな

696 会員番号774番 20XX/XX/XX ID：*

**

その辺スタッフは分かっている
ただそろそろチラでもいいので見せてください

697 会員番号774番 20XX/XX/XX ID：*

**

黙れロリコン!

699 会員番号774番 20XX/XX/XX ID：*

**

ありすちゃんとは結局空回りする系のキャラで行くのかよ
一気にギャグに振ることになるけど大丈夫なのか？クローネ的に

700 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

今までの積み重ねがあるから大丈夫だろ

むしろ千佳ちゃんがキャラ的に食われないか心配

702 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

(性的に) 食われる？

704 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

フルボッコちゃんは健全な特撮であり猥褻は一切無い
いいね？

705 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

OPにいるのに結局エリクシア組出てこなかったな

706 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

バレによると4話から登場らしいが

707 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

バレの話すんなよ

708 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ところでまたフルボッコちゃんが地面と水平に吹っ飛んでっただけ
どあれ物理的にどのくらいの力がかかってるんだ？

709 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

分かんが普通の人間がああなっただらまず死ぬと思われ

710 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

dsyn |

713 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

※この冥王星人は特殊な訓練を受けています

716 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

今期どうなの？

面白い？

717 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

聞く前に見ろよ

718 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

つか一話目で聞くことじゃねえ

719 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

作風が作風だから每期安定してるだろ

二期まで見てて面白かったと思ったらごちやごちや言わずに見て

ろとしか言えない

725 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

推しが出るなら見るつてのもアリだな

俺はそうしたがまだ出演が無い

726 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

>>725

お前もしや修羅勢か

728 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : *

**

>>726

いや志希ちゃん推しだ

正直言えばエロを期待してるところもある

729 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

正直でよろしい

730 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

フルボッコちゃんデエロなあ

薄い本見たけど正直ナモノ系を見てるようであんまりその

731 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ナモノ以外の何なんだよ!?

732 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ごめんよく考えたらナモノだったね……

733 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

しかし相変わらず千佳ちゃんは保護されているな

735 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

元を辿ればギャグ描写の原因だいたい千佳ちゃんだけどまあ保護されてると言っても良い方かな

736 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

とうとう南条君も空を飛んだしな……

737 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

まさかあんなに垂直に吹き飛ぶとは

738 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

竜巻は風速100mくらい出るけどこれは僕が飛ぶくらいの強さ

739 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

この番組ほんと吹き飛び芸好きだな

740 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

まさか初見向けキャラ紹介と同時に吹っ飛ばすという荒業をかますとは

741 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

今期のパワーバランスってどうなってるんだっけ

742 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

変わらんよ

相変わらずフルボッコちゃん〜ヒカル〜チカくらいの塩梅

描写は真逆だけど

743 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

工夫して戦ってるのが千佳ちゃん

真っ向から殴りに行けるのが南条君

面倒なので闇討ちするのがレイナサマ

744 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

いやあ前期の「災害」は強敵でしたね……

745 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

今期は「大罪」だっけ

どんなゆかいなてきになるか楽しみだ

748 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

本当に愉快的敵キャラになるだろうか

749 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

今更シリーズにしてもねえ

750 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

バトルはするけど結局そんなに……ってくらいが落としどころだ
ろう

751 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

エロい幹部キャラがいれば俺はそれでいい

752 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

それよりフルボッコちゃん側の方の描写も強化してほしいよね

(2話放送後)

*

44 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

ねえなんか思ったより空気がシリアスなんですけど……

45 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

*

思ったよりというか完全にガチじゃないこれ？

46 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

*

あの
死人出ちやっただんですけど

あの

47 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

*

ちよつと今回の敵勢力ガチすぎんよー

* 48 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

レイナサマ以外をダダ曇りにする案件じゃないか

* 49 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

元々一人だけ人間の悪意に対して真っ向から立ち向かってただけ
あつてフルボッコちゃんの安定感が半端じゃない

* 51 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

言つちやなんだけどチカとヒカルはまだ上部組織が指示した明確
な悪人としか戦つてないからね

ああいう一般人の欲望を煽つて人間というものの悪意を見せつけ
るようなのはキツイだろうな

* 52 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

……この番組子供見てるの？

* 53 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

見てるんじゃないかな
多分きつとメイビー

* 55 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

子供「何事も暴力で解決するのが一番だ」

* 56 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

教育に悪ウイ

* 57 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

というか大罪って言うから七人いるかと思つたのに欠員いるのな

58 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* 暴食色欲激情堕落傲慢嫉妬の六人だっけ？

あと何だろカトリックの表現じゃない方だよね

59 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* よく漫画とかで言われてる七つの大罪の変形版だな
比較的分かりやすいやつ

60 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* じゃあ強欲とかなんだらうか

61 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* だろうな

何でいないかはわからんけど

そこも含めてこれからやるんじゃね？

62 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* しかしシリアスに傾きすぎないか不安だ

63 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* ギャグが持ち味だもんなー

それだけってわけでもないがやっぱ無いと寂しい

64 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* 次回予告もまだちよつと鬱い感じだったもんなあ

65 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* やっぱ切る人もいたりするのかなえ

66 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

そこは心配だよねシリーズものだし

基本こういうのって視聴切る人はいても始める人は少ないんだし

69 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

フルボッコちゃん敷居は低い方なんだけどね……

70 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

も、問題は次回以降だし(震え声)

(4話放送後)

189 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

何で氷菓ちゃんのあの体形でステゴロさせるの？

スタッフは馬鹿なの？ 190 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

鉄拳聖裁すぎる……

191 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

まさかあのガントレットが本当に普通にガントレットでガン殴り

系聖女とは夢にも

192 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ブランちゃん殺意満点すぎませんか？

いや笑顔だけど

笑顔なんだけど

193 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ブラン「悪魔に情けをかける必要がどこに……？」

194 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

*
マジで言っただけで困る

195 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

*
演者が演者だから仕方ないけどあの格好であのガリガリさ加減は
ちよつと……

196 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

*
エロいよりもいたたまれなくなるよね
何か理由あるのかな

197 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

*
あれであの強さってちよつとどうなってんの？

198 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

*
奇襲してきた敵幹部六人を纏めてボコして帰っていく系聖女
ちよつと性能盛りすぎでは……

199 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

*
もしや2話前のあの絶望感はこのための前フリだったのでは

200 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

*
ありえそうで困る

201 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

*
つまり来週から大罪のギャグキャラ落ちが

202 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

*
これが負けたらギャグ要員ってやつか

203 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

次回から大真面目に対策会議とかして毎回ボコられる流れに

204 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

割と見たい流れだ…:

205 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

今までの組織と比べてもガチそのものみたいなのやつらがそれやり始めたらちよつと腹筋が耐えられる気がしない

206 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

視聴者の腹筋はもうガバガバ

207 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

ところで色欲の能力って

208 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

このばんぐみはけんぜんです

(6話放送後)

917 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

何故ブランちゃん一人だけあんなにも空気が違うのか

918 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

一人だけあからさまに雰囲気が違う…:

919 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

*
*

何でもみんながギャグしてる中一人だけあんなにシリアスしてるんだらう

*
*

920 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*
何だろうこの…:別作品のキャラが紛れ込んできた感
いや悪くはないんだけどなんかこう…:

*
*

921 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*
一人だけステゴロだしな
922 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*

強い…:うん強いんだけど
なんかこう危ういつていうかなんか死にそう感

*
*

923 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*
コオリちゃん引きずりすぎなだけでは
924 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*

FROSTだと死んじやったからな
こつちでも死ぬかもと思ってても仕方ないかもしれない製作同じだし

*
*

929 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*
ところでお前ら晶葉ちゃんと志希ちゃんどうだったよ
930 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*

数十年連れ添った熟年夫婦のような安心感
931 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*

一期からいたんじゃないかすら思える驚異的な馴染みっぷりだつ

たわ

9 3 2 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

つーか何事も無かったかのようにしれっと出てきすぎて前の話見逃したかと

9 3 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

フルボッコちゃんの謎アイテムどこから出てきたかっていう補足みたいなもんだけど良かったよな

ヒカルのスーツの修理とかアップデートも誰がやってたかっていうのがよく分かるし

9 3 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

その点なんかブランちゃん異質感がすごい

演出なんだろうけど

9 3 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

出てきた時のコーラス付きのBGMが壮大すぎてワロタ

9 3 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

キャラには合ってるんだけどね

(10話放送後)

5 4 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

こういう設定やめろよオラアアアン!!! 1!!! 1 1 1 1 1!!

5 4 7 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

まさかブランの過去があんなだったとは……
そりや空気も勝手にシリアスになる

548 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

元孤児で食べるにも困ってる上に教会から食事内容すら制限されてガリガリなのに最前線に行かなきゃいけないくて子供たちを守るために内心必死って

そりや空気も違うよ……

549 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

自分が戦わないと他の子が戦うことになるからね……
死にたくないから悪魔は殺すね……

でも殺す感覚超辛い怖い気持ち悪い……

見てて超辛いですけどwwwwww

辛いですけど……

550 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

「血に塗れたこの手で、本当の意味で救える人間がいらっしゃいますか？」
って台詞マジ辛かった

泣きたいのに必死に我慢して笑顔で強がつてる感じがもう

551 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

これフルボッコちゃんだよな……？

552 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

今期はそういう空気で行くのかな……

いや面白いんだけど……面白いんだけど超キツイ

553 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

フルボッコちゃんすら比較的シリアス保ってるのがすごい

554 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

* *

なお博士二人とありすちやん

555 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:*

* *

あの二人はもうギャグ時空の住人だから

ありすちやんは最早ただのかわいいいきものに

556 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:*

* *

事態にまるでついていけない……

557 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:*

* *

頼むスタッフ

もうちよつと明るい話を

明るい……明るい話を……

558 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:*

* *

次回日常回だぞ

559 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:*

* *

明るい話になるといいですね……

560 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:*

* *

そんなホイホイ鬱展開にはしないだろ

多分……

(11話放送後)

721 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:*

* *

尊い……

7 2 2 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

チカ×ブラキテる……

7 2 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

天真爛漫なチカだからこそ教会で保護してる子と重ねちゃってる
ブランちゃんが正直に接することができるのいいよね

まっすぐなヒカルだからこそその二人を引っ張っていけるのいい
よね

7 2 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

演者が氷菓ちゃんだからか分からんがああ「遊園地なんて初めて」って台詞がいやに迫真に

7 2 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

実際氷菓ちゃんはちよつと前まで行ったこと無かったらしいな

7 2 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

え、何それは……（困惑）

7 2 7 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

裏でフルボッコちゃんが悪態つきながらこっさり悪人ボコってる
のも良かった

そうそうこういうのでいいんだよこういうので

7 2 8 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

ああ〜

7 2 9 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

正義に裁けない悪を極悪が裁く

コンセプトそのものすぎてそーいやこんな感じだったなって

730 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

最近がシリアスと鬱に寄りすぎただけとも言おう

731 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

氷菓ちゃんの体形が健康的になってくのに合わせてブランちゃんも健康的になってくのがストーリーと合っていてこれは……ベストマッチ……

732 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

このままやさしいせかいが続くんだよな

そうだと行ってくれ

735 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

優しい世界とかつまらん

どんだんぶつ壊してぶつ殺していいよ

736 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

>>>735

思っても書くなよ

737 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

そろそろ冬ですね

738 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

香ばしいな……中学生かな？

739 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

最近の評判だけ見て来た新参だろう

触らないのがベスト

740 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

*
*

そーいやなんか裏がやけに不穩だが

741 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID…*

*
*

いやあの程度なら聖女パンチで終わるでしょ

流石に格落ち感はないし

742 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID…*

*
*

来週も楽しみだな

みんなで食事会とかだっけ？

743 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID…*

*
*

食事会…フルボッコちゃん…料理…ウツ頭が

744 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID…*

*
*

今回は鋼の味がしないといいね…

745 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID…*

*
*

>今回はイチゴの味がしないといいね…

(12話放送後)

*
*

555 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID…*

ほんわかした料理回で和む…と思ったらこれだよ!!

556 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID…*

*
*

この世界は一部の人間に対して厳しすぎる

557 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID…*

*
*

ごめん二度とあんなこと言わない……

569 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

**

ごめんED入ったところでトイレ行って見逃したんだけど何が
あつたか産業で頼む

570 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

**

今日も

可愛かった

なあ(白目)

571 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

**

ブランちゃん

だけ

地獄

572 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

**

教会の教義そのままやってたら孤児院が経営難
なので教義に反して犯罪すれすれの仕事でもしないといけない
ブランちゃんがそのシーンを目撃

573 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

**

育ての親が(教義的に)重罪人

ブランちゃんそのシーン発見

ゲロ吐く

574 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

**

やさしい

世界

と思っていたのか?

575 会員番号774番 20XX/XX/XX ID…*

お辛いい**

(14話放送後)

819 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ありすちゃん強キャラじゃんツ!!

820 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

誰もそれに気付かなかつたのが描写の妙だな

見返してみたら序盤から伏線は常にあっただけど ID:**

821 会員番号774番 20XX/XX/XX

**

他のキャラ↓1↘2属性併用

アリス↓全属性同時発動可能

なんやこのド級チート……

822 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

呼び出しのせいでブランが出てきてないからこそ活躍できたとも言いが

何度も「呼び出し」で出演させないのも不自然だし果たして今後活躍する機会があるのか

823 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

別の理由こじつけて戦場から一旦離すんじゃない?

824 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ありそう

活躍はさせないとだしねえ

825 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

ヒカルもチカもナイスフォローすぎてね

戦闘も爽やかだし今回すげー良かった

826 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

またフルボッコちゃんが余波に巻き込まれて潰れたカエルみたいな格好でぶっ倒れてる……

827 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

ブランちゃん出てきて以来フルボッコちゃんあんまりいいところねーな

11話は良かったんだけど

828 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

しかしまた次回予告が不穏やな

829 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

もう不穏なのも慣れて逆に何してくれるのか気になってきた

830 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

辛くて暗いだけで面白いのは面白いからな

831 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

またブランちゃんが曇らされるんですね分かります

832 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

地味だけど池袋博士のこんなこともあろうかとシリーズを有効活

用しまくってるのが好きだ

あれ真面目に考えるとどうやって使うのかわかんねえよ

833 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

どこぞの遊戯王みたく完全に特定の1キャラにメタ張ってるだけのはずなのに何であんなに他のキャラの行動に対しても使えるんだろうな……

834 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>833

その辺は演者の池袋博士(本人)とかドクターイチノセ(本人)が使い道考えて提案してるってインタビューに書いてあった

836 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>834

マジかよすげえなあの子ら天才かよ天才だったわ

(17話放送後)

197 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

丁寧は丁寧は丁寧はクソ組織描写を重ねた結果
誰もが納得する悪堕ちに仕上がりました
ほめて

198 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

誰がここまでやれと言った

200 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

教会「おあしす」

201 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

育ての親を査問会で断罪

庇ってくれたヴァルキリーを糾弾

子供を利用して（子供が）半殺し

搾取・腐敗・既得権益・資本集中のクソコンボ

どう見ても数え役満です本当にありがとうございます

202 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

おちおちおちおちおちけつまだあわあわあわあわあわはわわ

203 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

なにがはわわだ!!

204 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

ハワーツ

205 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

死人が出てないのが奇跡と言っている

いや画面外だと死にまくってるけど

206 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

ところであの衣装だけど

207 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

エロいよな

いやあの体形でエロいってちよつと不思議なんだけど

悪堕ちコスだからエロくて当然なのか……？

208 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

氷菓ちゃん自身もだいたい体形改善されてるような
その辺もあるんじゃない？

209 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

あーそれはあるかも

今公式何キロだっけ

210 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

35キロくらいじゃなかったっけ？

デビューから7キロだから5キロだか増えてるよね

211 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

身長もちよい伸びたよね142センチで

健康的になってきたなーって思うとほっこりするわ

213 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

そんな中の人事情に合わせて徐々に清貧という名の欠食から抜け
出していくのを演出していくのは素直に上手いなーって思うわ

問題はそれを巧みに利用してこっちの心を抉りにきてることだが

214 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

健康的になったなあって思ってたならこの展開だからな

絶対狙ってただろスタッフ……

215 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

もう悪堕ちして教会ぶっ壊してもいいと思うんだ

216 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

ヒキがこれだから来週が気になる気になる

(20話放送後)

681 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

やっぱり聖女じゃないか!!

682 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

抑圧されまくってたのが解放されたとか言ってるごめん……

強欲ってそっちなあ

683 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

「全てを救いたい」ってそりゃ強欲だし傲慢だわ

684 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

傲慢が何やら満足して死んだけどそりゃ自分の後継者が見つから

ば満足もする

その点間違いなく完璧なもの

685 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

問題は性根が正義の味方だという点だ

686 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

完全に大罪内部崩壊させる気だよねこれ

あるいは童帝ルート

687 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

どの童帝だ

688 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ルル山だろう

でも強欲と傲慢と因子集めてるのを見るとそんな感じはする

689 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
* また死ぬのか(絶望)

690 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
* 氷菓ちゃんが演じたら死ぬという深刻な風評被害

691 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
* 風評……? (実際に死んだキャラを見ながら)

692 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
* ほえろの方で殉職したのは死んだのに数えていいのか……?

693 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
* いや数えるでしょ

694 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
* まあ確かに華々しく散ったわけじゃないけど……

695 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
* フルボッコちゃん早く来てくれー!!

696 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
* 覚醒アリスを瞬殺できるのにフルボッコちゃん勝てるのかよ

697 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
* 手段を選ばなきやワンチャンあるんじゃないやね?

698 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
*
* 見た感じ他の子の成長度がパないみたいだからそこが隙かなあ

699 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ヒカルは打ち合えてたしね

というか魔法系の戦力を優先して片づけてたから偶然実力発揮できなかつたつてのが正しいんじゃないかなありすちゃん

699 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ぶっちゃけ教会の連中はヤっちゃっていいと思うんだけどやっぱダメなんだろうか

700 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

あれで治安維持と魔法少女の管理はちゃんとしてるからね
本気でやるなら対案は絶対に必要だと思う

(25話放送後)

435 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

良かった

すごく良かった

436 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

和解からの覚醒からの全員協力とか最高か

437 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

そうそうこういうのでいいんだよこういうので
最後の最後に巨大ボスがドーン!

438 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ご都合主義っぽいかなんだかなだ全部の問題解決する筋道立った

しな

勝ったわ(確信)

4 3 9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

来週で終わりだっけ?

4 4 0 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

来週が後日談

4 4 1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

しかしシリーズも意外に行けたな

最初思ってたよりだいたい面白い感じ

今後の方針転換のための叩き台でもあったのかね

4 4 2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

方針転換ってほどでもないだろう今後シリーズもできるようになるってだけで

それだけでもだいたい物語の幅が広がるぞ

4 4 3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

俺は嫌いじゃないけどシリーズってだけで拒否るやついるしなあ

4 4 4 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

まあ次期はギャグだろう……そうであってけると個人的にありがたい

4 4 5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

まあ最終回の次回予告見る限りどうもやっぱりフルボッコちゃん
は吹っ飛ばみたいだからあんまり不安はないんだが

4 4 6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

なんかビルの壁に突っ込んでるシーンもあったな
頭から

447 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

しかしよく考えてみるとどうしても他に目がいつちやうけどちやんとフルボッコちゃんも今期主人公やってたよな

実質3期はブランちゃんが主人公みたいなものだったとはいえ

448 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

正義だから救えないものを悪になっても救うってあたりメインテーマに通じるところあるよな

見ててすげえ引き込まれて俺すっかり氷菓ちゃんファンだ

449 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

フルボッコちゃんは特撮ファンやら魔法少女ファンもアイドルのファンに取り込める程度には間口が広いからいいよね

問題は金がすっ飛ぶことだ

レイナサマの限定CDどこに売ってんだ

450 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

俺なんて出演者全員チェックするようになったぜ
金が溶けていく誰かたすけて

451 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>450

と言いなながら笑顔なんですわわかります

452 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

沼の住人はみんな笑顔で沈んでいくからな……

453 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

唯一幸いなのはフルボッコちゃんシリーズはベルトとかの小道具があんまりないことだな

まあ漫画とかノベライズとかブロマイドとかその他諸々でダウンダウン財布の中身が消えるわけだが

454 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

南条君のベルトシリーズがあるけど貴様は買った？

455 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

貴様!?

456 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

池袋博士のファンのにもマストバイだ

これがあるだけでなんとなく池袋博士に選ばれた戦士感が味わえるぞ

457 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

フルボッコちゃんのステッキ（鉄パイプ）発売しないかな……

ドクターイチノセに目を付けられた巻き込まれ系一般人枠みたいな……

458 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>457

ホームセンターにでも行けばいいんじゃないかな

460 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>458

それだ！ありがとう！

461 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>460

おいばかやめろ

462 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

落ち着いてハタから見たら自分が危険人物化してることに気付け

463 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

フルボッコちゃんコスしてる人もいるけどあれも不審者みたいなもんじゃない？

464 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

そりやおめえ会場に行くまで特にコスしてないのに鉄パイプ携帯してるんだから不審者以外の何物でもあるめえ

465 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

冷静に考えるとそうである

466 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

世知辛い世の中じゃ

コス勢には辛いのもう

467 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

野郎の魔法少女コスとか見たくないです……

468 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

コスすること自体は自由だろ!!

469 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

誰やる予定なのか参考までに

470 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ぼくはブランちゃん!

ちな男

471 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

*
フルボッコちゃん予定

ちな男

472 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

*
このやろうどもいかしちやおけねえ

473 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

*
木剣を……

474 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

*
もっと喜べよお前らの好きな男の娘だぞ

475 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

*
(三次は好きじゃ) ないです

476 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

*
女の子がやるなら百歩譲って許さんでもないが俺が見たいのはアイドルであって素人のコスプレじゃないんだ

477 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

*
おいお前ら最終回後のイベントの抽選予約はしたのか
みんな衣装で来るぞ

478 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

*
コスしてる場合じゃねえ!!! 11!!! 11!!

479 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

*
今から予約してんの!?

480 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

またヒーローヴァーサスのコントが見れるのか(歓喜)

481 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

今回はそこにエリクシアもコントしに来るぞ

482 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

大丈夫?氷菓ちゃんの発言に南条君曇らされない?

483 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

そんな半年もあつたんやから撮影中に慣れただろ……

慣れててくれ(懇願)

484 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ありすちゃんも慣れてる方じゃないの?

いや新情報が出たらまた曇らされるか?

485 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

千佳ちゃんが無事でさえてくれればいいんだが

486 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

一年以上一緒にいる志希にやんと池袋博士すらノックアウトする

んだぞ

レイナサマすらどうなるかわからん

487 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

レイナサマあれでかなり常識人寄りだぞ

488 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

番組じゃ埋められたり墜落して潰れたカエルみたいなポーズでク

レーター作ったり

女の子のそれじゃない悲鳴上げたりゲス笑いの最中に南条君にボコられて笑うどころじゃなく死にかけたり色々あるが常識人だぞ

489 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

何で本人推しのイタズラよりもネタ描写の方が多く出てくるんですかねえ……

41：アイアンシエフ

「時々思うのだが、君はもしかしてそういう体質なのか？」
「……………もしかしたら……………そうかも……………です……………」

夏休みの終わりを目前に控えた八月下旬。ボクはトレニングルームの床に潰れたカエルのように倒れ込んでいた。

芋ジャージに、「激シブ」と荒々しい筆文字で描かれたごくシンプルな黒いTシャツ。晶葉に見られたらまあ怒られるのは間違いないけど、今日は動きやすい格好でということだったので仕方ない。

ソロ曲の決定から少しして、ボクはなんだかんだあつて最上級^{マスター}トレーナー資格保持者こと青木麗^{あおきれい}さんのもとに預けられていた。

なんでも、既に技術面ではあまり言うことが無い^{ため}、「その先」を教えることのできる麗さんの指導を受けるのが一番効果が高い……………と思われるのだとか。

で、麗さんにレッスンをしてもらって、そのついで……………と言ってもなんだけど、今後訪れるであろうソロライブに耐えられるだけの体力をつけるため、トレニングを受けていたのだった。

そしてご覧の有様である。

とはいえそこはボクも四か月以上慶さんと一緒に鍛えてきてる。呼吸法を併用することで、少し経てばなんとか喋れる程度までは回復できた。

起き上がれはしない。

「やっぱり生後数日でコインロッカーに詰め込まれたせいで心肺機能が低下してるんじゃないか？」

「やめてくれないか、急に重苦しい話を振ってくるのは!」

「すみません」

不適切な話であった。反省。

「……だが一考には値するか。白河、学校の……体育の授業の方はどうなっている?」

「基本、見学が多かったです。4月からはできるだけ出るようにはしてますけど」

あと錬金術の応用で実質サボリのようなことをしていたし……今はそうでもないとはいえ、そういうツケが回ってきたと考えることもできるだろう。

喘息だっつたりの病名が付くような状態じゃないとは思っただけど、虚弱体質くらいは言われてもしようがないかもしれない。

さもありません。実際、スポーツテストの結果は惨憺たる有様だった。ボクは多分錬金術が無ければその辺のサワガニにすら勝てそうにない。

「幼少期の不養生と運動不足の積み重ねか。難儀だな……」

「生まれはともかく、サボりはボクのツケですし、そこは、はい。頑張ります」

「あ、ああ。無理はしないように」「はい」

と言ってもこの体力で無理もできないというか。

どうも体質上筋肉もつきづらいためだし、オマケに色素も薄くて陽射しに弱い。弱い×弱い×弱いで最弱の称号を得る日もそう遠くはないだろう。既に得ていると言われると一切否定できない。多分陽射しの下ではその辺のセミにすら生命力で劣る。

でも、これでも体重……というか、体形は徐々に改善できているんだ。今の体重も33kg。先月より1kg増えている。

……まあ、今の状態で体重計に乗れば表示されるのは無慈悲な32kgという体重だろうけど。ちよっと汗をかきすぎた。所詮は食事直後に体重計に乗った時の表示。有体に言えば幻想である。

「白河。君ははつきり言つて歌に関しては申し分ない。極めて稀な……いや、君たちのプロジェクトにはあと二人はいるが……ともかくそういう素質がある。あとは収録の際に作詞家の方と直接話すなりなんなりして感情の解釈について講釈をいただければすぐにでも完成にこぎつけるだろう」

「ありがとうございます」

「これで体力とトークスキルと美的センスがあれば完璧なのだが……いや贅沢は言えまい」

要求項目多くない？

というか難易度高くない？

「しばらくは体力トレーニングに重点を置く。慶の勉強も兼ねているが……厳しくいくのは変わらん。覚悟するように！」

「はい……！」

……と、意気込んで返事をしてはみたけど、果たしてボクは明日から生きていられるだろうか。

僅かな懸念を胸にしまい込みながら、再び床に頭を落とした。

床冷たい。

@ ——— @

さて、そんな感じでソロ活動に向かうための道筋がどんどん組み立てられていく今日この頃だけど、別にエリクシアは解散していいし仕事も普通に入ってきている。

今みんながレッスンに集中できているのは、仕事の優先順位とか……どのようにして仕事をこなしていったらいいかをプロデューサーが必死にスケジューリングしてくれているからこそ、慌ただしくあちらこちらに飛び回ることもなくレッスンできているのである。

もつとも、そのおかげでプロデューサーは毎日寝不足のようだ。今度労つておこう。頑張れプロデューサー。他のみんなのユニットおよびソロ活動分も全部捌かないといけないけど。プロデューサーの体力なら数日休み時間ができれば大丈夫だろうけど、万一死んだらその時はなんとかしよう。なんとかなるかな。開祖様に聞けば大丈夫か。あと、その前にまずエリクシールなり何なり渡した方がよさそう
だ。

さて、何はともあれエリクシアでの仕事である。

バラエティへのゲスト出演だ。番組名は「フリルのエプロン」。フリルドスクエアの四人が司会を務める料理番組だ。

元々は柚さんが司会をしていた単発の特番が原型だったのだけど、人気を受けてレギュラー化。それに際してフリルドスクエアのメンバーも呼んで一緒にやるようになったとのこと。

この番組の持ち味と言えば……毎回差し込まれるやや奇抜な料理だろう。

初回、柚さんを恐怖のズンドコに陥れた橘流イタリアンに始まり、自分流のイタズラ料理を叩き込んでいくレイナさん、隙あらばウケを狙いに行く難波笑美さんや上田鈴帆さん等（地元料理だと真剣になる）。あと制限時間に追われたせいでテンパってやらかしてしまった美嘉さんなんかもいたはず。

ともかく、そういった料理に対するフリルドスクエアの四人の反応もまた見どころだ。勿論、料理上手な人も大勢出るけど。葵さんとか、響子さんとか。

そんなこんなで、そういう番組のゲストなんだしボクらに求められているのもそういう役割なのかなー、なんて思っていたのが少し前。

いつも通り失踪している志希さんと、別の仕事で遅れている晶葉は仕方ないとして、まず先に挨拶に行つておこう。そう思ったボクの前に姿を現したのは、半泣きの柚さんだった。

「たすけて」

その瞬間、だいたい全てを察してそつと扉を閉じた。

そういえば、今日の出演者の中にはアリスさんの名前もあった。他には……巴さん、榊原里美さんさかきばらさとみとマッドサイエンティストポ。確かに出演者ではあるけれども、ボクに一体何ができるのだろうか。今はただ、祈ること以外にできはしない――。

「ちよ、ちよつとストロップ！ 待ってよ助けてよ氷菓チャン！」

「と申されましても……」

「まあまあまあ、まあまあまああー！」

と、勢いよく開いた扉の中から飛び出してきた柚さんに引つ張られ、ボクはフリルドスクエアの楽屋に引きずり込まれることになったのだった。

哀しいかな、抵抗するには腕力が圧倒的に足りなかった。

楽屋の中には、案の定というか……沈痛な面持ちをした穂乃香さんと忍さんとあずきさんがいた。まるで死刑台に向かう死刑囚のようだ。

気付けば出入り口はちようど反対側。こんな状態ではもはや逃れることはできないだろう。ボクは諦めて力を抜くことにした。

「それで……どういうことなんですか？」

「はい……ところで氷菓ちゃん、これを」

「いや今はびにやこら太はいいから穂乃香ちゃん」

忍さんの横槍に、思わず不満そうな表情を浮かべる会長穂乃香さん。

まあ実際、今はそっちの話をしている場合じゃない。それはそれとしてこの新色の黒いびにやパーカーは貰うけど。

「ボク、ただのゲストなんですけど」

「そのことだけど……氷菓ちゃん、今回臨時でアシスタントやってくれないかな？」

「アシスタントですか？」

「そう！ 名付けて軌道修正大作戦！」

「軌道修正大作戦」

誰の？

……いや聞くまでもないか。

しかしながら、一般的な料理番組と違ってこの番組は基本的に料理「バラエティ」。必ずしも円滑に料理が進まなくても問題無いし、もうこの際失敗してもむしろ番組的にはオイシイ。不味くてもオイシイというのはバラエティにありがちなことではあるが。

そういう事情もあって、基本的にアシスタントを置くようなことはまず無い。普通の料理番組なら、手際や味を重視しなきゃいけないからアシスタントは必要になるけど。

「二人当たり五分くらいの配分でアシスタントに助けを求められるっていう制度を作ってもらったんだよねー。でもじゃあ誰がやるの？ っつてところまで手が回らなかったみたいで」

「どういう突貫作業なんですか」

相変わらずちよこちよこガバガバだな346プロダクション関係各所。

まあ内部ならそれで通じてる分には問題ない……のかな。ないといいけど。

「というわけで、氷菓ちゃんに手助けしてもらえないかなって！」

「はあ、なるほど……」

そういう意味では、ボクがあの中では一番安全ということなのだろうか。

安全かもしれない。晶葉はともかく志希さんは言わずもがな。巴さんと里美さんは未知数だけど、アリスさんは……前例がある以上、

うん……。

「けどこの制度、使わない人もいるんじゃない？」

「そうだね……それもそうかも……」

例えば、料理の上手い人はそもそもアシスタントを使う必要が無い人もいるだろう。あとは志希さんだ。自分の好きなようにやりたいからこそ、他人の手を借りることを良しとしないかもしれない。というか絶対人の手は借りない。アリスさんもそうか。冷静なようであるが熱くなるし、人の手は借りないと意固地になりそうだ。巴さんもそうかな。「自分の手でやり遂げてこそ価値があるんじゃない」という信念を披露しそう。

「サポートの五分間を使い切らないといけない、という制度を作ってもらおうかと思っています」

「ん。先にスタッフさんに伝えておくね」

「お願いします、忍ちゃん」

「というわけでよろしく、氷菓ちゃん！　ちよつと負担は増えちゃうけど——」

「そこは大丈夫です」

制限時間は45分くらいだっただろうか。ボク以外の出演者は五人。五人×五分と思うと出演時間はやや短くなるかもしれないけど、アシスタントを使う時間は多分放送されるだろうし……実質的な露出時間はトントントンってところだろうか。

技術面で言っても、まあ問題無い方だと思う。それも錬金術の応用である。どやあ。

……ともかく、断る理由もないし……フリルドスクエアの四人の舌を守るためにも、お手伝いすることはやぶさかでない。頑張ろう。

「あつ。アシスタントも審査員になってもらうのってどうかな!?　兼

任大作戦！」

「えっ」

「なるほど、それもいいかもしれないですね」

「ふあっ」

——かくしてボクはあずきさんの鶴の一声により、審査の席に加わることになったのだった。

ボクの飲む控室のコーヒーは、苦い。

@ —— @

「今夜も始まりましたフリルのエプロン！ 司会はおなじみ、フリルドスクエアの四人でお送りします」

「それじゃあ早速、今日の出演者の紹介にいつてみよー！」

それからしばらくして、収録本番。ボクは審査員席の横に立つような形での出演となった。

どこかの某長寿バラエティ番組の赤い服着てる座布団運びの方のような立ち位置である。アシスタントだから仕方ないね。

さて、ともあれ収録本番。こうして見ているうちにも、出演者のみんなが入場してくる。

「まず一人目は再・再々登場！」 橘流 ”ことシエフ橘ありすチャン！”

「毎回毎回その紹介は何でなんですか!？」

激しいツツコミを入れるアリスさんだが、柚さんはどこ吹く風だ。最も被害を受けてた人だから仕方ない。

ところでボクはこの数時間のうちに何度仕方ないと思ったのだろうか。

「二人目は初登場！ レッドベリイズとしての登場になります。村上巴ちゃんです！」

「おう、任しとけや！ 味覚の華ア咲かせるけえのお！」

勢いよく拳を振り上げる巴さん。しかし、正直に言っつてその料理の腕に関しては未知数な部分が多い。

同じ学校とはいえ、家庭科の授業の話なんかが入ってくるようなこととは無いわけで。心配というか不安というか怖いというかなんとうか。正直に言っつて、今から戦々恐々としている。

「三人目は再登場、榊原里美さん！ 果たして明日のアタシたちの体重は無事でいられるのか……！」

「？ 何か問題がありましたか？」

「いや、そうじゃなくて……！」

こればかりは正直なんとも言えない。

決してダメとは言えないのだ。あとボク個人としては太ることに何か問題でも……？ と思えてしまう。ここは個々人の問題だけど。

しかし、ライブラリでボクは確かに見た。里美さんが尋常ではない量のハチミツを料理にかけているその瞬間を。

忍さんが危惧するのも無理はないと思う。

「四人目は新進気鋭の頭脳派ユニット・エリクシアからの刺客！ ケミカルアイドル一ノ瀬志希さん！」

「いっえーい♪ 今日じゃんじゃん実験しちゃうよー！」

「実験はしないでくださいーい」

あずきさん、それは言っつてもダメだ。

言いたくなる気持ちも分かるけど言っつて聞くようならボクがブレーキ役になっていない。

流星に自重はする……いやしないかな……してくれるといいんだ

けどな……無理だな……。

——うん、大きな被害が誰にも出ないことだけ祈ろう。今のボクは力不足が過ぎる。

「そして五人目はこちらもエリクシアから！ 機械工学の鬼才、天才ロボ少女こと池袋晶葉ちゃんです！」

「鬼才という表現はあまり可愛くないからやめてもらおう。だが天才は否定しない！」

「すごい自信をありがとうございます。そしてもう一人、今回から特別アシスタントという制度を設けました。これは料理時間の中で五分間、料理上手なアイドルがサポートしてくれるという制度です。今回の特別アシスタントはこの人！ エリクシア第三の刺客、白河氷菓ちゃんです！」

「よろしくお願いします」

「特別アシスタントに就任となった氷菓ちゃんには、審査員も兼任していただきます」

軽く頭を下げた挨拶をすると、客席の方からは何だか納得したような声が上がった。

これは……アシスタントにボクが就任すること、というよりかは、アシスタントという制度が新しく生まれたことについての納得だろう。

特に今回は色々……その、うん……何か起きてからじゃ遅いし……。

「それでは早速今回のメイン食材の発表行ってみよう！ 今回はコレ！ じゃーん、高級クルマエビーっ！」

「どんな風に料理してくれるのか、今から心ば……楽しみですね！」
今忍さん心配って言いかけなかった？

「みんな、用意は良いよね？ それじゃあ——スタートっ！」

「はいアシスタントお願いしまーす♪」

「おおっと!? 志希ちゃんいきなりアシスタントタイムっ!」

「……あー」

につっこにこしながらこちらに手を振る志希さん。だけど……内心は、うん。もう理解できた。

審査員席を降り、怪訝な顔をするみんなの横を抜けて志希さんのもとに向かう。

「そういうこと?」

「そーゆーこと♪」

つまり、あれだ。

今この状況においてスタートダッシュを切るため……ではなく、最初にアシスタントの時間を使い切ること、中・後半からの横槍を防止しようという目論見だ。

残念だがこうなってしまうとボクに止める手立ては無い。フリルドスクエアの皆さんごめんなさい。アフターケアだけは何とかなるように頑張るので許してください。

「で、何作るの?」

「ピッツア?」

流石帰国子女。妙に発音が良い。

ボクも外国人の血は入ってるけど語学はてんでダメだ。特に文法がめんどくさい。記憶力で強引に突破するけど実用は無理だと分かる。

「シーフードピザってことだね。ボク何したらいい?」

「エビの下処理おねがい♪」

「はいさー」

まあ、志希さんが作るごはんがマズいということはまず無いだろう。副作用はどうなるか分からないけど。

……後でなんとかしよう。こつそり錬金術を使っても中和しよう。そこだけはマジになろう。人前で三倍速になったりマツチヨになつたり急にケモミミが生えてきたりしたら流石に目も当てられない。いや一番最後はちよつとかわいいかもしれないけど、それはそれとして放送事故みたいなもんだ。流石にマズい。

ということ、それはそれとしてエビの下処理だ。

大振りなエビである。捨てるのはほとんどないと言つてもいくらいだけど、今回は仕方ない。持って帰って何か調理して七海ちゃんやみちるさんたちと一緒に食べたいところだけど心を押し殺して作業を始める。

既に仮死状態のようだし、まずは手で頭を切り離す。これで背ワタも同時に取れ、エグみが消えるはず。

次に、殻を取り除く。同じように素手で軽く剥いてしまえば、あとは残るのは脚のみ。こちらも適度に釜れば剥き身の完成だ。

ついでに、ピザに使うものなので尻尾も取り除く。こちらは本来、もうちよつと下処理をしないといけないけど……殻は使わないから、まあいいだろう。

エビミソはソースに使えるから、これは取っておいて……。

「何尾いるっ？」

「五くらくらっ！」

「ん」

指示された通りにひよいと取っては処理、取っては処理……としても、特に問題無い。時間はもう余ってしまったくらいだ。

志希さんは……ピザ生地を作っているようだ。時間もかかるものだし、あれについては手を出さない方が……ん？

「ここで魔法のスパイスを少々♪」

「スタアアーツプ!!」

「んにゃ?」

「今何入れようとしてるの!?!」

「魔法のスパイス」

……蛍光色に光っているそれを見るに、どこからどう見てもヤバいものだ。

不味いとかそういうのじゃなくもうヤバい。解析するに……どうも発酵を促すものようだけど、本当にそれだけか? 生物に何か影響ない?

「ちよつと視力が良くなるだけだよ」

「どのくらい?」

「あっちの果ての果てくらいまで見えるくらい?」

「アウト」

「ぷー」

没収。流石にそんな宇宙の深淵が見えそうな粉はダメです。正気失つたりしちやまずいからね。そこは厳格に行きたい。願望どまりになりそうな予感がビンビンしてるけど。

「ではここで志希ちゃんのアシスタントタイムは終了です」

「あ、はい」

「お疲れ様♪」

「うん、頑張っ……ッ!?!」

「にゃはは☆」

二本目。

二本目である。

衣装の胸元に仕込んでいたらしい、細いピン。

——流石にそこまでは見抜けなかった。いや見抜くわけには
いかなかった。ハラスメント的に。

くそつ、志希さんめ！　ボクがそこまでしないことを見抜いてそこ
までやってたのか!?　時間的にこれじゃ止めきれない！　中和剤を
用意するしかないか……！

「おっと、ここで二人目！　ありすチャンがアシスタントたーいむー！」
「えっ、早っ……！」

驚愕の最中にあると言っても、要望があればすぐに次に移らなきゃ
ならないのは明白。ボクは駆け足でアリスさんのもとへと向かった。

……が、どうもアリスさんはあまり用意をしていないというか、料
理に手を付けられていないようだ。

イチゴ……は、切ってあるようだけど。

「アリスさん？」

「お疲れ様です氷菓さん。その……私は、知恵を、お借りしたいんです
けど」

「知恵……って、何を？」

「イチゴとエビを合わせられる料理、です」

あつ、これアカンやつや。

「……アリスさん。基本的には、エビはあまりイチゴと合わないと思
うよ……」

「そんなはずはありません。きっと美味しいものが作れます」

「ええ……」

……いや、まあ、できないわけじゃないと思う。

けれどもそういうのはなんとというか、料理が得意でよっほど食材に
対して造詣の深い人じゃないと色々と危険だ。創作料理はそれこそ

死人が出る。発想段階から失敗していると言ってもいい。

イチゴ。エビ。イチゴ。エビ。考えよう。これを組み合わせても問題が無い料理。何だそれは。何なのだそれは。何なのだこれは！ どうすればよいのだ!!

「……と、とりあえずエビ剥いた方がいいと思う……焼くにしても茹でるにしても……ん、茹でる……?」

「どうしましたか?」

「残り時間四分……アリスさん、ちよつと今からすぐレシピ書くから、この通りに作れる?」

「え? あ、はい。レシピがあるなら……」

「うん。じゃあ、すぐ書くから……あ、エビの下処理の仕方は分かる?」

「ち、知識程度なら」

「知識があるなら大丈夫。それじゃあちよつと……」

四分……とりあえず、メモ帳のページを千切って置いていくことにしよう。

問題は、アリスさんがちゃんとレシピ通りに作ってくれるかどうか……そこはもう賭けだ。それに、指針があるだけでも随分と違う。

右手でひたすらメモを取りつつ、左手ではエビの下処理を手伝う。我ながらなんとも器用というか奇怪なことをしてかしているが、今はできることをとにかく積み重ねていく方がいい。

そうこうしているうちに五分が経過したことを告げられる。

今日は五分が早すぎる……! !

「それじゃあアリスさん、それを参考に!」

「は、はい! ありがとうございます!」

アシスタント、思ったより忙しいな!

自分の料理を作らなくていいけど、その分他の人に振り回される危

険がある……いや、ここまでの二人が特別気を遣う必要があるだけかもしれないけど、それを考えるよりも手を動かして目を動かさなきゃいけないから神経を使う。

いけるのか？ このまま行つて大丈夫なのか？ ボクはともかく他の人の舌は大丈夫なのか——？

そうも思うがこのタイミングではどうもこうもしようがない。祈ろう。それしかない。

それから十数分。最初の十分は何だったのかというくらいにのんびりとした時間となった。

志希さんは引き続きピザを作り、アリスさんは指示通りに料理を作る。

巴さんはどうやらエビチリを作っているようで……おや。里美さんもエビチリだ。被るなんて珍しいな。

晶葉は……エビフライ……いや、晶葉自身は作ってないなこれ？

ロボットたちが作ってる。晶葉、これ番組の趣旨分かってる？ 大丈夫？

「おっと、続いて里美さんがアシスタントタイム！」

「はい」

残り時間25分ほどの時点で、里美さんの方へ向かう。

思ったよりも見事な手際だ。元々裕福な家の生まれと聞いたけれど、もしかして花嫁修業なんかの一環としてこういった料理なんかもやっていたのだろうか。

「あつ、氷菓ちゃん。よろしくお願いします」

「はい、こちらこそ」

軽く挨拶をして状況を把握。何でも、おおよそは完成しつつあるのでソースの味見をして修正を……とのこと。

なるほど、見れば確かに里美さんの目の前にはまだソースのかかつ

ていないエビチリと、ソースがある。これを味見してくれ、という話だろう。

「少し、私以外の意見が聞きたいんですう」

「分かりました。それじゃあ、忌憚ない意見を……」

その時、偶然にもそれが見えてしまったのは、幸か不幸か。

大量のハチミツ——を、既に使ったのであろう、大きなポット。ちよつと待ってほしい。一体何にこれを？ あ、スイートチリソースってやつ？ いやでも待ってほしい。冷静になろう。スイートチリソースって本来あんなに大量にハチミツを使うものだったっけ？

あれ？

……そう思いながらソースを口に運ぶと、次の瞬間、ボクの味覚を甘味の洪水が襲った。

スイート。ただひたすらスイート。いやスウィーティー。チリはどこへ行ってしまったのか。僅かに残るこの舌の痺れがそうなのだろうか。

「ちよつと薄めた方がいいかな？ 甘すぎると、苦手な人もいるみたいですよ」

「美味しいから大丈夫ですよ♪」

「そっか。そうかもね。でもチリソースならちよつと唐辛子とお塩とかは足した方がいいかもしれません」

「あ、なるほどお。一味足りないのはそれだったんですね」

「そうですね」

確かに、不味いとは言えない味ではあった。調理行程そのものに問題は無いし、見た目もちゃんと整っている。ただひたすらに甘いだけで。

美味しいから大丈夫。なるほど、至言だ。大丈夫じゃないという点を除けば。

対策——できるのか？　ここから？　……ボクは一体何をすれば？

「それじゃあ、少し調整のお手伝いしますね」

「はい♪」

必死に考えを巡らせつつ、残る三、四分間をフルに使って修正を図る。

しかし……時間が足りない。ソースを薄めようにも里美さんが持っていては手の出しようが無いし、それで不興を買うのもボクとしては本意じゃない。

結局、今回も何もできずに終わってしまった。

ボクは無力だ。

「ひよ、氷菓チャン、大丈夫なの!？」

「これはもうだめかもわかりませんね」

「もうだめだあ……」

い、いや、待て。まだだ！　晶葉はきつと普通の料理を作ってくれるはず！　ロボットで。

作り方がどうあれ結果が伴っていれば問題無いんだ。親友が信じないで誰が信じる！

それに、巴さんだつて裕福な家庭に生まれ育ったのだからいいものを食べてきて味覚も優れている……はず……。

……そう思った時、四回目のアシスタントタイムが訪れた。今度はその巴さんだ。

急いで駆け寄っていくと——そこにあつたのは、ただ、赤い……赤いソースだった。

「これは？」

「チリソースじゃ」

「チリ……?」

デスソースでは? ボクは訝しんだ。

ボクの無駄に弱い肌が警告を発している。アレはヤバいと。遠くから見ていただけでも警告を発している。

何故? 何故巴さんがあんなものを? 何かがおかしい。待つて欲しい。ボクに何をしてくれと?

「まあちつとこのソースの味見してくれや。それで、よくあの、あるじやろ? なんか野菜が敷いてあったり。見栄えもあるし、そういうのをやってほしいんじゃない」

「や、野菜に……見栄えね。はい。じゃあ、先に味見を……」

ボクは辛さが比較的苦手だ。それも比較的という程度だが、これはなんだか非常に危険な予感が……いや、悪寒がする。

恐る恐る口に運ぶ——と、まず感じるのはチリソース特有の酸味。と、次の瞬間、遅れて辛さがぶわっと襲い掛かってきた。

痛い! ……もう辛さを超え痛い!! 鮮烈な、痛烈な辛さだ。あ、これヤバい。目がちかちかする!

「あっ」

「!? どうした氷菓!」

思わずその場で膝を折った。が、次の瞬間、なんとか精神力で持ち直す。

ここで折れるなボク! この程度なら耐えられるだろ!! もつと頑張れよもつとまだまだ頑張れるやれるぞまだやれる頑張れ頑張れウオオオオオオオオ!

「辛みが強いですね。ボクは大丈夫だったけど、他の人はちよつと苦手って人も多いと思いますし、鶏からスープのもとを使った水溶き片

栗粉なり何なりで薄めた方が食べやすいかもしれません。あと、溶き卵を入れて少し加熱すると辛さが軽減されるしコクも出ていいと思いますよ」

「ん、お、おう？　そうか、成程のう。助かったわ」

「いえいえ。ところで何故こんなに辛いものを？」

「ただの旨いもんは食べ飽きたからのう」

続けて、巴さんに指示された通りに野菜を切る。見栄えの良いように盛りつければ、あとはこの上にエビチリを置くだけだ。

全ての工程が終わった後で、審査員席に戻る。既にボクの額には玉のような汗が浮かんでいた。

あとからあとから湧き出して来るそれを止める術がない。くそっ。表情だけ笑顔を作ってもダメか。顔が青ざめてくる……！

「氷菓ちゃん……!?!」

「だいじょうぶれふ」

「本当に大丈夫なんですか……!?!」

大丈夫。やや無理やり自分にそう言い聞かせてる感はあるがそれでも大丈夫と言わねばならない。

ボクの味覚の許容量ならいけると思ったんだが、流石にダメだったようだ。痛みにまで到達してしまうと流石に手に負えない。

残るは晶葉か……でも、晶葉は何をするんだろう？

見たところ、ずっと機械の調整をしてるみたいだけど……。

「おっと、ここで晶葉ちゃんのアシスタントタイム！　一体どうしたー!?!」

ほいほい、ととりあえず晶葉の方に向かってみる——と、ロボットの前で右往左往していた。一体何があったのだろう。

「どうしたの?」

「うむ……まずこれを見て欲しい。私の作ったクッキングウサちゃん
ロボ ver. 7γなのだが」

「ver. 1から6までとαβはどこに……?」

「うむそれは……いや、今は置いておいてくれ。どうも故障したよう
でな。修理を手伝ってほしい」

「なんでや」

「ここで料理番組にあるまじきアシスタントの使用方法だあーっ!!」

まったくである。

ちよつと晶葉はもうちよつとこの番組の趣旨を理解してほし……
いや、むしろ最大限理解していると言ってもいいくらいか。

この番組はあくまで「アイドルの料理シーンを楽しむ」ことを主題
として掲げられている。晶葉の料理シーンとなると……そりやあも
う、こうなるだろう。

ボクと錬金術が切っても切り離せないものだというのが同じよう
に、晶葉とロボットは切っても切り離せないものだ。

「何作ろうとしたの?」

「エビチャーハンかな」

「それなら自分で作った方が早いんじゃないや……いやもういいや。えーっ
と……」

内部プログラムを見ながら解析をかける。これを見る限り、どうも
単に故障したというよりは、規定外の動作を要求してしまった結果バ
グって壊れた……という感じのようだ。

さてはチャーハンを作るためのプログラムを組んだはいいものの、
そこにエビを加えた場合のことを想定していなかったな……。

一応、ボクも晶葉にプレゼントしたプログラミングの入門書は丸暗
記してるし、泉さんに借りてある程度のこととは理解している。まずは
ガワを修理して、プログラムの方も少し弄って……と。これでいいは

ずだ。

「できたよ」

「うむ、流石早いな！……しかしエビチャーハンだと簡単すぎて面白みが無いしもつと美味しそうなものが作れたらと思うんだが」

「時間無いって分かってる……？」

もうこの時間からやるとしたら、それこそチャーハンだったり塩焼きだったりお造りだったりくらいしか無いと思うんだけど。

あ、エビフライって手もあるか。いや、それもきつと面白みが無いって言うな。じゃあチャーハンくらいがいいか……。

「とりあえずバグは除いたしエビ加えた場合のパターンも登録したから大丈夫だと思う」

「うむ、もう少しプログラムを学ぶ必要があるか……やはり泉だな……」

「ま、まあ、そこは頑張つて……自分で手料理を作る気は？」

「？」

「ごめん、やっぱいいや」

晶葉もだいぶ恋愛観が清纯な方だし、好きな人相手にはロボットの手は借りずに作る……くらいは言うんだろうけど、少なくともこの状況ではそうでもないか……そもそも今プライベートじゃないし、ロボットに重点を置くのも間違つてはいない。

修理とバグ除きだけで五分を使い切ってしまったけど、まあ、これはこれでいいか……他と比べて精神的疲労が少ない。

いや、他の人たちの場合の精神的疲労がスゴいだけとも言っただけだ。

だが間違っちゃいけない。ここまでは準備時間。ここからが本当の地獄だ……!!

「料理しゅーりょーっ!!」

柚さんの号令によって、一斉に出演者のみんなが手を止める。その手元には、それぞれちゃんと完成したらしき料理の姿があった。

晶葉はチャーハン、志希さんはシーフードピザ、里美さんと巴さんはエビチリで、アリスさんは——サラダ。

これがボクの入れ知恵だ。エビとイチゴを同時に使ってあまり違和感のない取り合わせ、となると、即興ではこのくらいしか思い浮かばなかったというのもあるけど。

「み、みんな見栄えはいいねー!」

「見栄えは、うん」

ただし中身は考慮しないものとする。

ともあれ、と穂乃香さんがマイクを握った。

「それでは一番手、晶葉ちゃんお願いします」

「うむ、私の作ったのはこれだ。題して——『ロボットで作ったエビチャーハン』!」

「見た目は……普通ですね?」

「うむ、だってロボットは作っただけだからな」
「ですよね」

実に普通に美味しそうなエビチャーハンであった。

締まった身のエビが、くるりとカールした状態でチャーハンのおてっぺんに配置されている。チャーハン本体に目を向けると、ごろごろとした身がそれぞれ多めに入れられていることが分かった。見栄えも良い。流石、晶葉の作ったロボ。こういう時にトラブルが無ければだいたいそれなり以上の成果は発揮してくれる。

「美味しそうだねー……それじゃあ実食大作戦、行ってみましょー!」

あずきさんにうながされ、それぞれレンゲによそって口に運ぶ。
うん、それなりに美味しいチャーハンだ。お店で出しても不思議
はないくらい。

レシピの入力も調理法の入力もちゃんとしてるんだろう。米はパ
ラパラ、塩加減も最適。惜しむらくはこれが手料理じゃないことか。
一発目としては上々だ。

「それじゃあジャツジを……」

この番組の評価形式はやや特殊で、審査員の合議により最終的な評
価を下されることになる。

大きなパネルがスタジオ脇にあるが、最終的にはあれに出演者の名
札を張り付けることでランク付けしていくことになるのだけ……
上から順に金、銀、銅。枠外というのものもあるし、場合によってはスタ
ジオの外にまで持つて行かれることもある。

現在の最高位は当然と言うべきか、葵さん。続くようにして
木場真奈美きばまなみさん、響子さん、まゆさん……となっていく。流石にここ
に食い込むのはできないとしても、ある程度は、その、頑張つてほし
い。

ともあれ、柚さんの手により晶葉の名札がパネルに貼り付けられ
た。

「今回の晶葉ちゃんは……銀のエプロンです！」

「むう、惜しかったな……原因は？」

「手料理じゃないこと」

「私にとっては手料理だぞ！」

よくある100円寿司で機械が作ってるアレと同じようなものだ
と思うんだけど晶葉は気付いているんだろうか。

気付いてないだろうな。自分が造ったロボットだからって鼻根目

になつてそうだ。

でもそれでも銀は頑張つたと思う。うん。

「さて続いては……里美さん！」

「はあ〜い。どうぞ、召し上がれ♪」

二番手、里美さんのエビチリがこちらに運ばれてきたが……今この瞬間にも、途方もなく甘いにおいが漂ってきている。

恐る恐る口に運ぶ、と——驚くべきことに、さつきより多少甘みが緩和されている。

さつきのはソース単体だったせいか、それともちゃんとアドバイスを聞いてくれたか……甘さの中にピリツとした刺激も感じる。間違いない。さつきよりは確実に良くなつてゐる。

しかしながら、ボク以外の四人にとってこの甘さは未知数である。穂乃果さんは苦笑し、忍さんは甘さに瞠目し、あずきさんは水を多めに飲んで柚さんはどこか遠い場所を見つめている。

この先起こることを予感しているのだろう。何かを察してしまつたような面持ちであつた。

「さ、さて。里美さんは……銅のエプロンです！」

「うくん……ちよつと下がっちゃいましたねえ。でも、また頑張りますう♪」

たゆん。

会場が湧いた。

さて、それはそれとして続いては巴さんの料理だ。

「どうじゃー！」

「赤っ!？」

赤い。

いや、^{あか}紅い。いつそ言うなれば^{あか}赫い。

それはまさしく真紅の塊だった。

……いや、そうでもないか。所々に黄色いものが見える。これは、卵黄か。つまりアドバイスを受け取ってくれてはいたようだ。ボク感動。

「か、辛そう……ええい、いただきますっ!」

「はむっ……辛あああつ!!」

「ん? そんなに辛かったか……?」

「うわあ辛っ、辛いつ! あ、でも案外イケ……でも辛いつ! ああ、

白^ご飯ほしい!」

「うん……なるほど」

核心はそこだ。辛いのはまあ間違いない。しかし、食べられないほども飲み込めないほどもないというのがミソだ。

言ってみれば、はふはふ言いながら食べる四川風のマーボー豆腐などのそれに近い。決して食べられないほどではない。しかし辛い。こうなるとちよつとご飯があれば食が進みそうだ。

この場に辛党な人がいればその評価はグンと上昇していただろうけど、今回はそうはいかなかった。残念ながら、巴さんに告げられたのは銀のエプロンという結果だった。

「さて、続いては……あ、ありすチャン!」

「橘です。何で言い淀んだんですか柚さん」

「自分の胸に聞いてほしいなッ!」

——そして、真打登場である。

初回、いちごパスタといちごピザ、そして牛肉のいちご煮というメニューにより見事「スタジオ外」という結果となったアリスさんである。

理由など既に言うに及ばず。状況を考えれば、柚さんが気を張るの

も当然のことだった。

「今回のお料理は何かかな？」

「はい、今回はエビのサラダです」

「サラダ!? ……サラダ!?!」

「何で今二回言ったんですか?」

「ゴメンちよつとびっくりで。サラダ!?!」

そう。ボクが発案したのは、エビを使ったシーフードサラダ、だ。葉野菜を多めに使って、エビなどの魚介類は少なめに。そして、ドレッシングはイチゴを使ったソースになっている。

元々イチゴは酸味に富む果物だ。甘味が強い分酸っぱさはレモンなどには及ばないが、それでも酸味があることには変わりない。

一応、イチゴドレッシングというものは市販されている。時々、洋食だとかフランス料理だとかにもイチゴのソースは使用されているし、野菜との相性自体も悪くないはずだ。

残るはエビとの相性だが、ここは少し苦心した。それでも工夫である程度は美味しくなるはずなので、そこはアリスさんがちゃんとレシピ通りにやってくれたかどうか……と言ったところだろう。

「……い、いただきますっ! あれ?」

「あれ……思ったより、普通に……」

「うん、いける……」

「ふふん、どうですか皆さん。いつまでも私が前に進まないと思ったら大間違いです」

胸を張って得意満面のアリスさん。ボクも皆さんが食べるのに合わせて口に運ぶと、やや強めの酸味が舌を打ち、その後に野菜がそれを緩和する。

エビは思ったよりも食べる邪魔にならなかった。むしろ、シーフードサラダのそれとして思ったより相応しい。

「うん、美味しいかも。ありすチャンやるう！」

「さて、今回のありすちゃんのジャツジですが……こちら！」

「銀のエプロンです！」

「くっ……少しだけ足りませんでしたか……！」

と、言葉そのものは悔しそうではあるものの、声音も表情もどこか嬉しそうだ。

今までずっとランク外というか、そもそもパネルの中にさえ入れられていないかったんだ。大躍進と言わずして何という。

かくしてアリスさんの名札はスタジオの外からパネルの中部に移されてきたのだった。

「ちなみに、減点理由は何ですか？」

「人のレシピを使ったことと、ちよつとイチゴが甘すぎたことかなあ？」

「なるほど……くっ、次は金を取ります……！」

——さて。

アリスさんが真打だとするなら、志希さんは……ラスボスだろうか。

志希さんの持って来たピザは、それはもう見た目には美味しそうで、しかし何故だかボクの本能は必死になって警鐘を鳴らしていた。

この短時間である生地のおくらみよう。明らかに普通じゃない。絶対あの予備の何らかのパウダーのせいだ。イースト菌なわけはなし、何かある。絶対ある。

「どうぞ〜♪」

「それじゃあ、いただきます！」

「わあっ、チーズはとろとろだし生地はもっちりぱりぱり、それに具もぷりっぷりで……」

「すごい、こんなにできるんだ！」

美味しいかどうかで言うなら、まあ、間違いなく美味しい。志希さんの天才性はここまで発揮されたか、と唸るほどだ。

同時にボクは、ピザを解析した。やはり何かある。それを確信したところで、手を机の下に隠し、指先で机の裏に触れてそのまま自分を含めて五つの水を錬成した。

ピザの熱さに負けて一人、また一人と水を口に含む。それによって例の薬の効果は消失。ただのおいしいピザになってしまった。

軽く、息を吐く。その瞬間、何故だかほくそ笑む志希さんの姿を見た。

……まさか志希さん、この衆人環視の中でも錬金術を使ったりしてバレないのかどうか、みたいな実験も兼ねてやったな？ ボク個人としては心中穏やかにしていられないところだけど、もうやってしまったことは仕方がない。

手を振ってにこやかに微笑む志希さんの姿に、ボクは内心で嘆息した。

なお、結果は金のエプロンだった。

美味しいのは間違いないから、何も知らなければ……うん。そうなるよね。

42：王冠の日

フリルのエプロンには、「今日のまかないゴハン」というコーナーがある。その日の出演者の中で一人、メイン食材を使ってみんなに食事を提供するという内容のコーナーだ。

このコーナーにおいては基本的に評定は行わない。あくまで出演者のダベりを主題にしたコーナーであり、このコーナーだけ料理番組と言うよりはトーク番組という風でもある。

レシピなどを公開することはあるものの、やっぱりアイドルを主眼に置いたつくりをしているからこそそのコーナーと言えるだろうか。

毎回出演者は異なり、場合によってはフリルドスクエアの四人が誰もいないということもある。その回で印象的だった人物が主に出演することになっていて、ユルい雰囲気はまだ特徴的だ。

「お待たせしました。えび天蕎麦です」

「おー、来た来た♪」

「おいしそう……」

今回の出演者は、色んな意味で功労者という扱いとなったボクと、被害担当であるフリルドスクエアの四人だ。

五品も食べたその日のうちにまだ食べられるのか……という疑問はあるだろうけど、基本的にこのコーナーはメインのそれから時間を置いての撮影となるのでそれほど問題は無かったりする。そもそも、五品と言っても一人前を五人で分けたものを五品だ。特に問題は無いと言えは無い。ボクは除く。

さて、何はともあれ収録だ。

「今回は食べやすいように尻尾は取っています。それから、こっちはエビの殻と頭のから揚げです。カリカリにしてありますけど、尖って

るところもあるので気を付けてくださいね」

「はいはい。いやあいいねえ氷菓チャン。家庭的い」

「どこでこういうの習ったのかな？」

「どこでってわけじゃないですけど、家で作ってるうちに覚えて、今はなんとなく趣味みたいにやっています」

「へえー……」

今趣味として料理していることに関して、穂乃果さんたちは寮生だから知ってるんだけど、まあ、この辺はテレビ向けの解説だ。

柚さんは関東圏だから寮には入ってないけど、何かと泊りに来たりしてるから知っているとさえ言えば知ってる。言ってみれば今回の出演はその辺の縁もあると言えるだろうか。そう考えると、日々の出来事も無駄にはならないんだなあと思う。

「こうして見ると、全部無駄なく使えるんですね……」

「そうですね。殻はこうして揚げる以外にもダシ取りに使ったりもできますし、使おうと思えばほぼ全部使えると思います」

勿論、下処理は必要だけど。

例えば背ワタは取らないと臭みが残るし、尻尾も下処理しないと、中にあまり綺麗じゃない水が残って、体にも味にもよろしくない。そういうところに気を配るんだぞという風におじじにも教わっている。ちよつとニュアンスが違ったような気もするけど、まあ、美味しく食べるための秘訣だろう。多分。

「それにしても今日は大変だったね……」

「ええ……」

柚さんがそう話を切り出してボクが答えたその瞬間、スタッフさんから笑い声が漏れた。よくバラエティであるあれと同じような笑い声だ。

いや笑いごつちやないぞ。そもそもあれだけのバッティングさせたのスタッフさんたちじゃないか。苦労した理由の半分はキャスティングしたスタッフさんたちだよ！

……まあ、言いはしないけど。乗り切ることはできたし。

「いつもこんな感じなんですか？」

「ううん、流石に今回ほど大変なことは滅多に無いよ」

「アシスタントつけたらどうなるかっていう実験大作戦みたいなのころはあったから。そういう意味じゃ今回大成功って感じ！」

「いえ、そこはどうでしょう……」

「？ 何で？」

「つてことはこれ、次からハードル上がるってことじゃ……」

あつ、と皆が一斉に表情を暗くした。

スタッフさんは爆笑した。

「ほ——本当だ！ しかも次から氷菓チャンいないじゃん！」

「あ、フリッ普出た。『次回のゲストは宮本フレデリカさんと鷺沢文香さんとピュアリーテイルの三名です』だって」

「……あ、安心……？」

「こずえちゃんは分かりません」

「でもこずえちゃんをフォローできれば大丈夫ってことだよね！ うん！」

「フレデリカさんは何をするか分かりません」

「助けて葵ちゃん!!」

まあ、こずえちゃんの場合教えたらすぐにできると思うけど。

五分間である程度まで教えたらすぐにやってくれる……かもしれないし腕力的に難しい部分もある、かもしれない。

芳乃さんと聖ちゃんは問題無いだろう。文香さんは……どうだろう。レシピ通りに見ればできるかもしれないけど、この場でメイン食

材を発表して、45分という時間制限があつて……となると、パニツクになつてちよつと失敗しちゃうかもしれない。

フレデリカさんは……分からない。分からないんだ……。

上手いという話も聞くしそうじゃないとも聞く。適当にやるとも聞くし実はかなり計算してるとも聞く。なんかどうか一言で言い表せないのだ。流石にわざと不味くするような真似はしないと思うけど、何か一波乱起こすのは間違いない。

「それで、次回のアシスタントは誰になるんです？」

『次回は安部菜々さんです』

「菜々さん……つてお料理得意なの？」

「そういう話はあまり聞いたことはありませんけど」

多分上手いと思う。でも、それはそれとして被害担当だろうな……。

そんな共通認識がボクらの中に生まれた。

菜々さんは苦労人なのだ。

「……まあ、今回ほど苦労することは無いと思いますので……」

「そうですね。今回が特別アシスタントの負担が大きかったかもしれない」

「晶葉と志希さんはダメですよ……」

「ロボットだもんねえ」

「流石にあれは他の人には任せられませんし」

「ていうか分かんないよ!？」

ですよね。

……いや、泉さんなら大丈夫な気がする。プログラミングに関しては晶葉よりも随分先に行ってるし。料理も、必要程度だけど割合でできる方。今後晶葉が出演するならボク以外では泉さんか真奈美さんがいい……のかな。というかそれ以外思い浮かばないのもあるけど。

「ところでボク今後ゲストで出る機会あるんですか？」

「……………」

「眼を逸らさないでください」

「あの対応力見てたらねえ……………」

「評価が欲しいんですけど……………」

「じゃあこの辺で！」

と、突如立ち上がった柚さんがボクの名札をスタジオ脇のパネルに貼り付けた。喜ばしいことに金である。位置的には中ごろだけど、それにしても高い順列ではあった。穂乃香さんやあずきさんも頷いているようだ。

……………いや、しかし……………いや、そういうことでいいのか？ いやいいか。仕方ない。

「番組外でこういうことしちゃっていいんでしょうか……………」

「番組のコーナーですから」

「それに、アシスタントやってくれた子はこっちのコーナーで料理披露する形式にしようと思ってるから大丈夫だと思うよっ」

「こっちとしても勿体ないとは思っし」

なるほど、そういうことなら文句は……………無いではないけど、納得。

「……………あ、そうだ。関係ない話ですけど、今度ソロのシングル出します」

「今それ言う!? でもおめでとー！」

個人的にもふっと思いついたから、あ、やらなきゃと思っただけなのでアレだけど、正直タイミング的にもアレだなと思わなくはない。

この辺もトークスキルの部分ではあるよなあ……………。

いやでも、こっちのコーナーはユルいトークが軸だからこれはこれ

でいいのだろうか。スタッフさんたちも笑って見ててカットする様子も無いし。

「おめでとうございます。曲名は？」

『Dear est Sky』って言って、近日中に発売です」

「目標は何枚？」

「特に目標は……買っていただけで嬉しいです」

これはまあ、正直なところ。日高舞さんひだかまいじゃないんだから、ミリオンは流石に高望みにもほどがあるし。

まあ、規模だけ考えると、新人なのだしいいところ初動一万行けばいい方……かなあ。その辺よく分からないし、プロデューサーに一任しておけばいいか。またプロデューサーが過労になるのは正直申し訳ないけど諦めてほしい。自己マネジメントができるほど才能は無いんだ。

ともあれ今回のコーナーはこんな感じで緩やかに和やかに進んでいった。

こっちのコーナー、実に平和でいいなあ……。

@ ——— @

さて。

残暑も厳しい九月の初め頃、ボクと志希さんは二人でクローネのプロジェクトルームに訪れていた。

清潔感のあるシックな内装だ。既にみんなの私物が溢れる——いちばん多いの晶葉のだけど——スターライトプロジェクトのプロジェクトルームと異なり、生活感に欠けるような印象を受ける。

……が、部屋の端を見ると、どうやらアニメや映画のDVDがあるようだし、予備と思しきタブレット端末やハードカバーの書籍なども見える。メンバーの皆さんの私物だろう。

机の上にはファッション誌が。あれは……特定は難しいな。フレ

デリカさんかもしれないし美嘉さんかもしれない。

隣を見る……と、どうも部屋の様相を見てうずうずしているようだ。

「志希さんステイ」

「えく？」

「ステイ」

「ぷー」

どうやら綺麗すぎるのが気になるらしい。志希さんの部屋もうちのプロジェクトルームも割と小物が溢れてるから、綺麗すぎると落ち着かないのだろう。

だからと言って実験がてらちよつと散らかしてみたら面白いかなとか、流石に思ってもやらせない。ボクもちよつぱり思ったりしないでもないけど。

「すまない、待たせたな」

「あ、お疲れ様です」

と、そんなやり取りをしている間に、他の人を集めてきたのだろう。部屋の扉が開くと共に専務さんがこちらに呼びかけた。

と言っても、仕事の関係上ここにいるのは数人。奏さん、フレデリカさん、周子さん、美嘉さん……こうして見ると錚々たる顔ぶれだ。いずれも、押しも押されぬ346プロの一流アイドルの皆さん。ここに志希さんが加わるのだと思うと、自分のことじゃないっていうのになんだか嬉しくなってくる。

それからもう二人、一人はもう既に顔なじみになったアリスさん。もう一人は、クローネとラブライカの二足のわらじで活動をしている才媛、アーニャさんである。

「紹介しよう。本日よりプロジェクトクローネに参加する一ノ瀬と白

河だ」

「よろしく〜♪」

「よろしくお願ひします」

「Спасибо……あ、よろしく、お願ひします」

「よろしくお願ひね」

専務さんの紹介に応じて頭を下げると、皆さんも同じように礼を返してくれた。

相変わらず、こういう当たり前の挨拶をしてくれるとちよつと嬉しくなる……というのは、ちよつと変な考え方だろうか。

「諸君らには今後ユニットとして活動してもらう機会が増えるだろう。一ノ瀬は速水、宮本、塩見、城ヶ崎の四名と。白河は橘、もしくはアナスタシアと状況に応じてユニットを組み換える形で活動してもらおう」

「分かりました」

「りょーかいで〜す♪」

なるほど、今回呼んで来た人の基準はそういうことか。

よく考えればアーニヤさんはだいぶ多忙な身。普通の時間にこうして会うのもなかなか難しいところだろう。その辺のスケジュール管理は大変だったんじゃないかなって思うけど……専務さん、普通に涼しい顔してるあたり、それを人におわせないのは経験の違いというものなのかな。

「さて、私はこれから仕事に戻る。今日は紹介までだ。諸君は各自の判断で交流するように」

「はい、お疲れ様でした」

「お疲れ様です」

「お疲れ様でーす★」

……いやでもやっぱ忙しいの見てて丸わかりだわ専務さん。

普通、交流つて言ったらこの後もうちよつと時間取つて自分も、つてなるはずなのにとんぼ返りつて。考えれば考えるほど相当なことではなからうか。うちのプロデューサーもそれに並ぶレベルとはいえだけど。いやそもそもプロデューサーは17人プロデュースする時点で確実にどこかおかしいが。

「大変そうですね、専務さん」

「そうかしら？ クローネの発足当初はもつと忙しそうだったわ」

「そりやそうだろうけどね……」

涼やかに言う奏さんに対し、美嘉さんはやや苦い表情をしている。何か前にあつたのだろうか……と思うけど、そういえばライブラリで見える限り、美嘉さん、一時期変に路線を変えてた時期があつたな。シンデレラの舞踏会からその路線の仕事もあまり見なくなった。その頃に何かひと悶着あつたらしいことは明白だ。

そもそもを言えば、プロデューサーにしろ専務さんの話を出すとはんの僅かに弱つたような表情を見せる。普段の困つた時のそれとは異なり、どうも専務さんに対して上司という以上の苦手意識を抱えているように見えた。

仮にシンデレラの舞踏会以前のことを話しているのだとすると……ボクはその時期アイドルに興味が無かつた時期だし、知らないのも仕方ない部分はある……のかもしれないけど、それにかまけて知らないままではいるのは問題か。今度調べておこう。

それにしても、今の厳しくも優しい専務さんのことを知っているのと、前はあまり良い上司じゃなかったと言われてもちよつと現実に欠けるな……。

「ん、まーでも今はいいんじゃない？ 気にしたって仕方ないよ」

「そだねー。あ、お菓子食べる？ フレちゃんが作ったんだよ」

「え、本当ですか？」

「んーん、嘘だけど♪」

……何で今フレデリカさん別になかなくていい嘘を……？

と、そんな風に訝しんでいると、不意に志希さんとフレデリカさんの視線が交わった。

一瞬の交錯。そうして次の瞬間、志希さんは何故かボクの背後に回って珍妙なポーズを取り、フレデリカさんはボクの目の前で蛇拳の如きポーズをキメた。

全く意味が分からない。二人は一体何を考えてどうしているのだろう。しかしボクが不思議に思っている一方で何か通じるものがあったのか、二人は瞬時に目を輝かせて手に手を取り合った。ボクを挟んで。

「何でさ」

「楽しいかなくて」

「氷菓ちゃんが楽しいとフレちゃんも楽しいんだよ♪」

「ボクは楽しくないです」

「でもフレちゃんは楽しいし」

「あたしも楽しいし？」

「強引すぎやしませんか」

「？」

「？」

「やっぱいいです」

次は何故かダンスを始めた。ボクを挟んで。既にアリスさんは状況の変移に付いていけず、奏さんは意味深に笑うばかり。美嘉さんはオロオロしていた。カリスマはどこへ行ったのか。じゃあ助けて周子さん……と視線を向けると、無言でスマホを向けて写真を撮っていた。くそう。

「自助努力！」

「あつ、逃げられた」

「惜しかったにやーん」

何が惜しかったのかはまるで分からないが、とにかく一瞬のほころびを見つけてとつとと抜け出した。

これも実験の一環だったのかもしれない。いや、あるいはただの遊びだったのかもしれないけど。

そんな風になんとか抜け出せたタイミングを見計らってか、スツと割り込むようなかたちで奏さんが前に出てきた。

「そろそろいい頃だし、お互いの紹介も兼ねてそれぞれ分かれて話しましよ」

「Я понимаю……あ、分かりました」

「はい」

ともかく、ボクはアリスさんとアーニヤさんと一緒に部屋の片隅に移った。

少しすると美嘉さんの悲鳴や美嘉さんのツツコミや美嘉さんの悲鳴が聞こえてきたが、まあ、あの四人相手じゃあなるだろう。ボクには手が出せない。頑張ってください美嘉さん。ご飯くらいは作ります。

さて。

「……って言っても、あんまり新鮮な感じも無いんですけどね」

「そうですね。氷菓さん、ずっとドラマの撮影で一緒ですし」

「Da。私も……寮で一緒なので……」

「ですよね」

元々、アリスさんとはドラマでしょっちゅう一緒になってる。

アーニヤさんは多忙とはいえ未成年のための就業規定もあって夜間は寮に戻ってくるので交流の機会は少くない。あつちに行つた

ことがあるという境遇も境遇だし、話す必要もあつたりするのでそれなりに会話もする。

ということ、どっちも知らない相手じゃないのだ。なんともやりやすい話である。

ただ、うーん……改めて話すとなると、ちよつと緊張もするなあ。

「……」趣味は？」

「Астрономически наблюдать……」

アー、天体観測、を、少々」

「お見合いですか」

「ご趣味は」

「ゲームと読書を少々。いえそうじゃなくって」

実に和やかな空間である。

実を言えば二人とも趣味という意味では少し似通つた部分があつたりする。ボクは空の観察が趣味だけど、アーニヤさんは天体観測が趣味。アリスさんもボクもゲームが趣味……と。なのでちよくちよく話の合う部分があつたりする。

もつとも、ボクがコンシューマの据え置き型ゲームを好むのに対してアリスさんは携帯ゲームが主体。その点で少しばかり話がかみ合わない部分もあつたりはする。でもスイッチはどっちにもなれるのでこの話ならいくらでもできる。素敵。

「アー、ヒョーカは、何がスキですか？」

「空の観察と、ゲームです」

「よくお話しますよね」

「うん」

もつとも、話せる内容というのがやや限られているので、基本は例のイカゲーだったり配管工兄弟だったりメインになるか。あとはポケモンとか。アリスさんは比較的ライトなゲームがメインなんだ

よね。ややコアなゲームは紗南さんの方が詳しい。

「Heбo……空、ですか……」

「うん、空」

「今度、一緒に、天体観察……しますか？」

「いいですね。行ってみましょう」

「Xopoшo!」

「あ、今のは分かります。ハラシヨーってよく聞きますよね」

「いいですよ、って意味……ですね」

「結構万能な返事っていうのも聞くけど」

「Да。だいたいなんでもハラシヨー、です」

「ごく簡単な返答として使う、という話は聞いたことがある。了解、とか、分かった、とか。」

もつともボク、基本的にロシア語は分かんないんだけどね。近くならともかくあんまり行ったこと無いし。もしかしたら日常会話程度でも怪しいかもしれない。いやそれはほかの言語でもいつものことか……。

「折角です、し……寮で、みんなでホームパーティーをしながら、というのは……どうでしょう?」

「あ、それもいいですね。ボク、そういうの初めてかも」

「あの、それパーティが初めてってわけじゃないですよね?」

「あはは、流星にそれは無いよ。うちでも誕生日パーティーくらいはするし」

あくまでこれは寮でのパーティが初めてじゃないかな、という話だ。

プロフィールを見る限りどうもアーニヤさんはホームパーティが好きだということが書いてあったし、今後もこういったことができるといいなあとも思う。

「あ……そうだ。アーニヤさん、ゲームとかって、やりますか？」

「Игра……ゲームは、たまに、少しだけ……です」

「それじゃあ、私のおすすめを紹介したいんですけど、これがですね……」

「アリスさん、趣旨変わってきてる」

「……あつ。すみません」

気持ちには分からないでもない。自分の好きなことを布教していき
たいという人は多いだろうし。

それにアリスさんのやってるゲームは割かしライトめなのが多い
し、パーティゲームなんかもそこそこあるからみんな楽しんで適
している。

……もつとも、パーティ系のゲームって人を熱中させやすいだけ
に、同時に喧嘩になりやすくもあるから、一長一短な部分はあるのだ
けど。園の子たちがやってる時なんか、そりやあもう……うつ、頭が。

「じゃあ、今日の夜は歓迎会もあるみたいだから、そっちでお話しま
す」

「あ、歓迎会ってあるんだ」

「Да。ナオが張り切っていました」

「かんじ、でしたっけ。やってくれるみたいですよ」

「奈緒さんが幹事……」

奈緒さんが幹事かあ……。

健全な歓迎会になることは間違いないけど、何なんだろうこの微妙
な不安感。安定してるといえば安定してる……というか、少なくとも
変なことはしないはずなんだけど、何か、こう、変に振り回されたり
予想外のことだったりしそうだ。これが凜さんや奏さんだったり
したら、想定外も含めて歓迎会に混ぜ込みそんな安心感があるんだけ
ど。

見れば、二人も少し苦笑していた。

「どうなるんだろうね……」

「ですね……」

「ネ……」

ともあれ、交流の本番は夜だ。

ボクたちはそれからしばらく今後の方針や活動内容の予想について話し合った。

43：お客様のの中にファッションに詳しい方は

九月某日、夜。その日、事前ミーティングを終えたボクたちは、当初の予定の通りに歓迎会の会場へと向かっていた。

奈緒さんを幹事に据えた歓迎会。楽しみに思う気持ちと共にほんの僅かな不安を抱きつつ、案内されるままに辿り着いたその場所は――カラオケボックスであった。

カラオケボックス。

うん。よくあるタイプの、あれ。

流石のボクだって一度や二度くらいは行ったことがある。スターライトプロジェクトのメンバーで、だけど。

前に行ったのは確か、晶葉と聖ちゃん、七海ちゃんの中学生組でだったかな。

さて、それはともかく。

「奈緒は普通すぎるよねー」

「何でだよおー!?!」

加蓮さんのボヤきに、思わず奈緒さんから抗議の声が上がった。

……まあ、その、うん。言わんとすることは分からんでもない。カラオケ、嫌いじゃないし歌うこと自体むしろ好きなんだけど、歓迎会としてはありきたりだなあ、と。

でも学生の歓迎会として考えればこういう場所が当たり前なのだし、問題というような問題は無いと思う。メンバーは極めて豪華、というか豪華すぎるくらいだけど。

ところでそこまで関係ないけど今の「何でだよおー!?!」って聞いてちよつとベアトリクスさん思い出してしまった。

ぼそつと軽く声に出して呟いてみると、アーニヤさんと凜さんが思わず吹き出した。

「でもゆいカラオケ好きだよー☆ 好きな曲歌えてたのしいもんねっ」

「そうですね。私も、普段歌えない歌が歌えるのは楽しいです」

と、大槻唯おおつきゆいさんの言葉に応じるアリスさん。

アリスさん、元々ヴォーカリスト志望だからそういうところはあるんだろう。元々の自分の売り出し方と違うものを歌ってみたいな、とか。ボクもそういう部分はあるし、周りを見ても頷いている人は割といるようだった。

「特にひよーかちゃんとは初めてだし、色々聞いてみたいな〜♪」

「え、ボクですか」

「いや……普通に考えたらそうだよ」

「わ、分かりました」

凛さんにツッコまれてしまったけど……ちよつと弱ったな、他の人、特に先輩たちと行って歌を披露するとなると少し気後れする。

でもよく考えれば輝子さんや美玲さんも交えて寮のメンバーで行ったこともあるし、これもこれで一つの経験と思えば……。

唯さん、今年から大学生だからあまり接点を持ってないし……実質今回が初めての交流となってしまうたわけだし、こう言ってくれてるからには頑張りたいところだ。

「大丈夫だよ、緊張しないで行こっ★」

「そうですね……」

……なんか美嘉さん、さつきよりだいぶ元気になってない？

ボクの気のせいかもしれないと思うけど……いや、やっぱり元気にはなってる。安心したっていうか、肩の荷が下りたというか……ともかくそんな表情だ。

もしかしてもう既に何か苦勞することになってしまっているのだろうか。なってるんだろうな。頑張ってください。

後ろを見ると、志希さんはフレデリカさんと周子さんと何やら話しているようだった。何を話しているか非常に気になるが、気にしてはいけない。後できつと何か妙な目に遭うはずだ。

「私は……少し、ああいった場合は苦手ですね……」

「ン……でも、少し歌っていると、だんだん、楽しくなってきました」

「それは、はい。少し、分かります……」

そっか、文香さんは文香さんでステージ以外であれやこれやと積極的に行動していくタイプでも無いし、ちよつと苦手意識があるのか。ある意味、印象通りではあるが。

「……それに、その。私は、持ち歌……というものが、少ない、ので……」

歩いていく中でどんどん意気消沈していく。なんだか徐々に小さくなっていくようにも見えるのは、委縮しすぎて雰囲気そのものまで小さくなってしまっているんだろうか。

しかし持ち歌……持ち歌かあ。流石に自分の歌をカラオケでも歌うっていうのはナシだろう。でも、じゃあ何を歌うべきなんだろう。趣味全振りでいいのかな？ 奈緒さんもいるし。

……いや、分かんない人もいるし程々にしとこう。

道すがら、ふと思いついてバッグの中に入れていた小瓶の中身を飲み下す。

「んにゃ？ 珍しーね。保湿？」

「ん」

と、そんな様子を不思議に思ったのか、志希さんがこちらに問いか

けを寄越した。

今飲み込んだのは油……オリーブオイルだ。喉の保護のためにいい、という話を聞く。あくまで民間療法に近いものだけど、ケアをしないよりはいいだろう。何より、今日は人前なのだ。錬金術を使ってケアというわけにはいかない。

「お、見えてきたぞー」

「ん、あれだね——」

「うわ普通」

「普通言うなっ！」

そんなこんなあつて見えてきたカラオケボックス。奈緒さんに案内されてたどり着いたのは、やっぱりごく普通お店だった。

ほんのちよつと、こう、もうちよつとランク高いところ無いかなと思わなくもないけれど、そこを言うのはやめておいた。ボクも同じ立場ならあまり良い店を選べる自信は無い。

「ぼ、ボクは普通なの好きですよ」

「氷菓、それフォローのようでフォローになってないからな？」

「えっ」

どうやらダメだったらしい。

反省。

何はともあれ受付を済ませてからしばらく。ボクたちはカラオケボックスの広い一室に通されることとなった。

大人数用の、よくあるタイプの部屋だった。とはいえボク自身あまり縁のない場所でもあるから、まだ新鮮味は薄れていない。

……それでもやっぱりこの人数だから、ちよつと手狭感は拭えないな。

「じゃあまず飲み物頼むかつ。みんな、何がいい？」

「水」

「歓迎会なんだからもつと良いもの飲めよお!？」

「じゃ、じゃあ、ボクはココアで……」

「喉、痛めちゃうわよ。レツスンもあるのだから、糖分やカフェインのあるものはやめておいた方が無難じゃないかしら」

「イチゴジュースはありますか?」

「……ありませんね……」

「残念です……」

「あ、から揚げでも頼もうよ。お腹すいたーん」

「脂もあるしねー♪」

好き勝手に言い合うみんなだけど、奈緒さんはそれらを慌ただしい様子でメモにまとめていく。

ただ、奈緒さんだし……少し注文と違うとか、そういうこともありうるかもしれない、なんて思うのはちよつと失礼だろうか。

ともかくまずは一曲目からだ。まず最初に、ということでボクにマイクが手渡される。

「それじゃあ始めの一発どーんといっちゃおう★」

「あ、はい。それじゃあ……」

「あ、そうだ! みんなの持ち歌歌い合うのどーかな☆ なんか楽しそうだし」

「お、いいねー。それじゃあひよーかちゃん、どうする?」

『薄荷 ―ハッカー―』で」

「H e t!!」

「ダメだ氷菓死ぬぞ!!」

「ねえアタシの曲なんでこんな言われようなの?」

「加蓮じゃなくて氷菓だからじゃないかな」

「納得」

ボク死ぬん？

いや確かに儂げな曲だなあとと思うけど、ここまで強硬に止めに来ることは無いんじゃないの？

個人的にはかなり歌いやすいなあと思ってるんだけど、これを止められるとなると……。

「じゃあ……『2nd SIDE』で」

「お、おうっ!? あたしの曲か!？」

「ふふっ。頑張ってるね」

凜さんからの激励も受けたところで歌い始める。

元々、激しいダンスが特徴の曲だけど、ここはカラオケボックス。残念ながらダンスを披露できるほどのスペースは無い。

とはいえそこはそれ、いかに歌そのものを魅せるか、である。そこ……というか、歌に関してはボクの得意分野だ。錬金術が無ければ歌一点特化だったとも言おう。

ともかく、そんな調子で歌い終わると、皆さんからは拍手を、奈緒さんからは赤い顔を向けられた。

「自分の歌って歌われると恥ずかしい……」

「前、裕子が歌ってたよね？」

「それとこれとは別だろ!」

「後輩に歌われるとってことかしら?」

「そう! そんな感じ! なんかむずむずしてさ!」

「いやあ、ちよつとそれは分からないかな……」

「え!？」

すみません、それボクもちよつと分かりません。

「ひよーかちゃんこつち座ってみ。ちよいちよい」

「え、ええ……?」

……と、歌い終わった直後、ふと何の前触れも無く周子さんが自分の膝を指差した。

何を思っただろうと思うたのだろうか。十中八九愉快犯的な行動だろうけど、まあ、別に大したことでもないしいいか。そう思っただよこりと周子さんの膝に乗ると、なるほどと周子さんは頷いた。

「んージャストフィット。ちっこくて体温低くってきもちー」

「はあ。そうですか？」

まあ、確かに身長差20cmならそうかもしれない。体重も低いし乗っても大して負担は無いのだろう、多分。

「どうか何で氷菓さんは拒否しないんですか」

「大変な問題があるわけでもないですし……」

中身的にある意味問題だけど、そこはもう今更である。

男性に対して興奮するわけじゃない一方で女性に対して性的興奮を催すでも無いし。

……あれ。これ更に別の意味で問題では。

いや、もういいや考えるのめんどくさいし。

「……ちよつとこつちも」

「加蓮は果てるから駄目だ」

「そんなに弱くないってー！」

おつとなんだかすごく加蓮さんに共感を覚えてきたぞう。

もつともボクと違って加蓮さんは肉体的に殆ど問題無いって違いはあるけど。いやボクも問題無いけどね。問題……いや無い。無いし。無いって。無いったら。

その後、奏さんやフレデリカさん、果ては文香さんに至るまで膝に

乗ることになってしまった。

途中からアリスさんもそこに加わることになってしまったのだけど、巻き込まれたと思って諦めてほしい。ボクは諦めた。

さて、ボクが終わったので、次も同じく今日の主賓。二人目は志希さん、三人目は美嘉さんだ。

志希さんはフレデリカさんの「き・ま・ぐ・れ☆Cafe au lait!」を。美嘉さんは唯さんの「Radio Happy」をそれぞれ歌い上げた。流石に先輩の貫禄と言うべきか、特に美嘉さんの歌う番になると、ボクらの時以上の盛り上がりが見られた。こうして改めて美嘉さんの手法を見ることが、今後のライブパフォーマンスなんかには活かせる……かも、しれない。

そこから後はクローネメンバーの皆さんが歌う番だ。どうも前にカラオケに行った際に似たようなことはしたことがあるらしく、その時の歌は封印……という運びにはなったけど、それぞれ歌えるであろうものを見つけて歌を披露していた。

奏さんがアリスさんの「in fact」。周子さんが加蓮さんの薄荷……ではなく「Frozen Tears」。唯さんが凜さんの「Anemonestar」。文香さんは周子さんの「青の一番星」。凜さんは文香さんの「Bright Blue」を歌っていて、加蓮さんはアーニヤさんの「たくさん!」、奈緒さんは奏さんの「Hotel Moonside」を歌うことになった。奈緒……もとい、なお、奈緒さんが歌う時はそのギャップ故かそこかしこから笑いが起きていた。

アーニヤさんとアリスさんは、今後ユニットで組む関係からかデユオでエリクシアの曲を歌ってくれた。一人足りないからということとそこにフレデリカさんも混じっていたけど、これは何かの暗喩だろうか。

「はー、歌った歌った」

「じゃあ、次は……」

何はともあれ皆さんの曲を堪能したボクらだけど、こうしてぐるりと一周回った以上次はボクの番だ。さて、じゃあ何を歌おうかと思っていると、奈緒さんがふと上から機械を覗き込んでいた。

「どうしたんです?」

「な、なあ氷菓……フルボッコちゃんの曲歌ってくれないか?」

「はい?」

「エンディング」

……フルボッコちゃんのエンディング?

あの、その回到登場したキャラが歌うあれ?

「あー。奈緒はファンだからね」

「なるほど」

「氷菓、ブランちゃんが出るだろ? ありすとデュオとか聞きたいんだけど……!」

「え、あ、はい……?」

近い近い。

こういうのは割とあることなのか、他の人はみんなどうも呆れてるような微笑ましいような表情をしている。なおありすさんはうんざりした様子だった。フルボッコちゃんへの出演が確定した時も似たような感じだったのだろう。

しかし、まだ今だとまだ一話だか二話くらいの放送直後だったはずなんだけど……前情報とか見てるんだろうなあ。

前期と比べてまた更に変更があったあの作品、果たして奈緒さんは耐えきれぬのだろうか。色んな意味で。まあ、律儀な人だし、流石にボクらにネタバレしてくれとは言いに来ないだろう。多分。

「なっ、頼むよありす! 氷菓!」

「橘です。どうですか氷菓さん」

「うーん……こんなに頼んできたんだから無碍にはできないけど……」

ちよつと探してはみるけど、ボクらの収録した歌が無い。

どうやら三期になるにあたってエンディングの変更があつたようだ。まあそうだよねと思いつつ、二期のエンディングを選択して入力した。

アリスさんだつて出演するにあたつて前期や前々期の復習くらいはしてるだろうし、歌の方も恐らく知ってるはずだ。

「じゃあ、本当ならこっちは歌わないんですけど」

「よっしゃー！」

「奈緒テンション上げすぎ」

まあ、喜んでくれるならいいや。

ちよつと歌ってる時の興奮度が奈緒さんだけ尋常じゃなかったけど……うん、まあ、好きなものを前にした時なんだし、こういうものだろう。きつと。

しかし、さて。

後日、奈緒さんがフルボッコちゃん三期にドハマリしてボクのことを時々ブランちゃんと言いかけたり、ありすさんとの組み合わせに興奮し始めたり、ある話を境にボクが突然死するんじゃないかと危惧し始めたりという事件に関しては、特筆すべきなのかどうか。

……まあ、それはいいか。うん。別段大したことでもなさそうだし……。

「ところで、今日はもしかしてカラオケだけ？」

「え？ 普通そうじゃないのか？」

「……そう言うと思って二次会の場所は予約しておいたわ」

「えっ、あ、ごめん奏！」

……どつちかって言うと、奈緒さんのちよつとしたうっかりの方を語るべきか。

あるいは、そもそもこのカラオケだけで満足できなかったことについてを語るべきか。

@ —— @

さて。

歓迎会も終わり、クローネとしての活動を始めることになるわけだけど、実を言えば歓迎会直後の今日この日からもう仕事を始めることとなったのだった。

内容は、アリスさんと一緒にファッション誌の撮影……だ。

ファッション誌だ。

ファッション誌。

……ファッション。

そう、ボクにとつての鬼門である。まあ、より正確に言えば、ファッション誌が鬼門なのじゃなくてファッションが鬼門なのだけだ。

「無理だ……!!」

「いきなり諦めるんですか」

撮影スタジオの控室。その片隅でボクは項垂れていた。

想定外……いやアイドル活動続けていく上で想定外つてことは無いけれど、それでもボクにとつてはファッションはこれまで非常に縁遠いものだったのだ。いきなり改善できるかと言われるとそれも非常に難しい。

実際、今日ここに来るまでに着て来た服はいつものそれだ。黒のぴにゃパーカーに筆文字で「マッチョ」と書かれたTシャツ。あとシヨートパンツ。下はごく普通のスニーカーと靴下だ。

しかし、これがただの撮影なら良かった。撮影側が用意している服を着て指定されたポーズで撮ってもらえば済むことだからだ。

今回問題なのは、その後。どうも撮影が終わったらインタビュー記事も載せるようで、それについて「私服で」お願いしますと頼まれたのだった。

私服で。

「フアーツ!!」

「クツシヨンに頭を打ち付けるのはやめてください氷菓さん!!」

「それと知っていけば他の服くらい持って来たのに……!」

「付け焼刃ですよね?」

「うぐう」

でもいいのだ付け焼刃で。こういう公の場で取り繕うことに意味があるのだから。

プロデューサーも結構な頻度でイメージ戦略が大事と言っている。ボクもそう思う。だからこそ、完全にプライベートというわけじゃなければそれ用の服を持つてくると言うのに……!」

なお晶葉からは「でもそれって根本的な解決になっていないだろう?」と言われた模様。

いいんだよボクはその場をごまかせるなら!

「でも、どうするんですか? 衣装のまま出るわけにもいかないでしょう」

「うん……まあ……」

そして残念なことに、今回の撮影はゴスロリ系のブランドのモデルである。代わりの服なぞここには無かった。

このままでは晶葉曰くどこぞのくたびれたオタクのような格好を世間に晒すことになってしまう……それは(プロジェクト的に)マズい……!」

「どど、どうしようアリスさん……」

「つて言われても……何で氷菓さん、そんな格好が好きなんですか？」
「好きというかこれで問題を感じないっていうか」

「ええ……？」

「元々興味も無かったしそれでその」

「それでそのあまりにもアレな感じに……」

「アレって」

……うん、最近は何んというか、こう考えると相当に問題があることがよく分かってきたので多少は改善しないと、ということはよく分かった。

せめてぴにやと文字Tは部屋着に留めないと……いや、それでも多少はアドバイスを基に改善してるつもりなんだけど、今日は本当に油断しすぎてた。実は着替えすら今は持ってない。ヤバい。これどうしよう。

間に合わせに錬成……はアリスさんボクの秘密についてはまるで知らないからここじゃできないし……こういう時は……他力本願！

「……プロデューサーに連絡してみよう……」

「まあ、そうなりますよね。とどこでどこからどんな服を？」

「先に少し立て替えてもらって、ユニセックス系のを一点買ってきてもらえればそれで大丈夫と思うんだけど……」

「男性一人に買って来てもらうのも難しいんじゃない？」

「うわそうだった」

……詰んだ!?

い、いやまだだ！ まだちひろさんという手は……あの人も超忙しい身だから駄目だ!!

やべえよ……やべえよ……こ、これどうしよう……。

「い、インタビュー開始まであとどのくらいかな……」

「30分くらいあるんじゃないですか？」

「その間に寮まで戻っいやダメだ往復しなきゃいけないしええとええと……」

「なんだか氷菓さんがそこまでてんばってるの見るの、久しぶりな気がしますね……」

「久しぶり？ あ、あの時ね」

久しぶり、というとFROST収録の一番最初、眼鏡が壊れた時のことだろう。確かにあの時は未だかつてないほど取り乱していた。

しかし今回はその時に比べると、まあ、多少はという感じだ。あの時が何だかんだ一番ひどかっただけとも言おう。

「……よし、ちよつと買つてこよう」

「か、買つてくるんですか!? 氷菓さんのセンスで!」

「アリスさんは時々素で酷いこと言うよね」

「ごめんなさい。でも大丈夫なんですか!」

「そこは、まあ……多少なりとも学んだ……はず……だと思う」

自信は無い。しかしやるしかない。

フットワークは軽くしないといけないから荷物は最低限で。この時期だと……ギリギリ秋モノか? いやまだ夏の延長線上つてことにしておけばある程度安いものが買えるはず……。

幸いこの周辺にも多少なりとも服屋はあるだろうし、30分あれば行つて帰つてくることくらいはできる……はず!

「私も、一応行つた方が……?」

「いや、大丈夫! アリスさんと一緒だといつ長話しちゃうかもしれないしまず一人で行つて来るから!」

「え、あ、はい。が、頑張つてきてください……」

不安さを滲ませた表情を向けてくるが、大丈夫、なはずだ。

それよりも今はスピード重視。急がないと……!」

急いできました。

というわけで二十分後、ボクは息も絶え絶えに控室まで戻って来ていた。

「も、戻った……」

「お、お疲れ様です。タオル要りますか？」

「くださーい……」

その場に倒れ込むようにしながら袋の中身をその場にぶちまける。割とどこにでもあるような店舗で買ったので、当然ながら服そのものは没个性的だ。七分丈のレギンスに白のTシャツ、それから、灰色のカーデイガン。生地は薄め……と、だいたいそんな感じでひよいとセレクトしてきた。

店員さんからも（もっと良いもの買えばいいのに……）みたいな目で見られたけどボクはこういうのでいいしこういうのがいい。シンブルっていいじゃん？ というのが正直なところである。

「すっごい普通ですね」

「普通でいいの」

「でも氷菓さん、見た目が派手めなのでもう少し派手めな方が合っていると違いますよ？ 服の方が負けちゃってます」

「そう？ そんな風に思ったこと無かったんだけど……」

「絶対そうですよ」

自信ありげに言ってくるアリスさん。そこまで言うってことはそうなんだろうか。あんまり実感無いな……。

クラリスさん（ラスボスの風格）も金髪白人の美人さんだけど、清楚な服を着ててそれが似合ってるし……割と派手めな外見って言うならイヴさんと聖ちゃんもそうだけど、かなり落ち着いた格好をしていることが多い気がする。

「例えば美嘉さんがそういう格好をしてたらどう思いますか？」

「ギャップで素敵」

「ごめんなさい例えるべき人を間違えました。」

前に美嘉さんの家を訪ねた時もそうだったけど、服装自体は……パステルカラーや明るい色のものが多いとはいえ、それなりに落ち着いてるようだったのだけだ。

「そうです！ 例えばのあさんがそういう格好をしていたら！」

「……あ、ちよつと違和感あるかも」

うん、まあ、着ないことは無いだろうけど、間違いなくクール系の人だし、私服もクール系のもので揃えてると聞いたことがある。

「氷菓さんはそっちの系統なんです！」

「……えっ。ボクそっちの系統？」

「どう見ても」

「はあ、なるほど……」

そうだったのか……。

そうだったのか……。

そう……だったのか……。

「……つまり楓さんのファッションを参考にすればいいってことか
!!」

「えっ。いや間違つて……いや間違つてな……ううん、間違つて……あれ？」

「何か問題が……？」

「いえ、間違つてないと思うんですが、楓さんの話題今一度でも出して
ませんよね？」

「？」

のあさんに近い系統ってことは楓さんにも近い系統ってことだよ
ね？

愛海さんにも将来の保障はされてるし自分でも確かめたいそうい
うことならそういうことで大いに参考にできる人がいるってこと
になる。素晴らしいことではなからうか。うん。

「……あ、晶葉さんの言ってたことってこれだったんだ……」

「何か？」

「いえ……氷菓さんがよっぽどの楓さんファンだと……」

何故こんな当たり前のことを確認して遠い目をしているのだろう
か。不思議なアリスさんだ。

ともかく、これでなんとか窮地を脱したボクは、その後、なんと
きつちりとインタビューに答えることができたのだった。

……まあ、その、色んな意味で内容はともかくとして。

どうもまだインタビューに慣れてないボクである。

なお後日発売された雑誌では、インタビュー記事云々よりもボクが
ゴスロリ着てるという事実に対して大きな反響が寄せられること
になった。

……インタビューも頑張ったのだし、そっちもちよっと注目して
くれないかなあという思いが、まあ、無いでもない。

44：空の日

朝、目覚めると、普段枕元にいるはずのシロの姿が無いことに気付いた。

「…………ふあ？」

シロがいない。その事実には驚き、瞬時に意識が覚醒する——が、よくよく確かめると、どうやら枕元のスペースじゃなくてベッドの中、完全に布団を被っているようだった。

ほっとしたのもつかの間、なんだかやけにスマホが振動していることにも気付く。あれ、おかしいな——なんて思っただけならいいけど、10秒、20秒どころか一分経っても振動が終わらない。これは流石に何かがおかしいぞ、と思っただけでなく、手に取って確認すれば、どういふ訳か五桁にも届こうかというSNSの通知が届いていた。

「お、おう…………」

困った。状況がいまいち理解できない。

しかしこれでシロがわざわざベッドの中に潜り込んでいたかが分かった。スマホの振動音に耐えかねたのだろう。

そもそも何でボクが気付かないかという話だけど…………まあ、そこはあれ。仕事で疲れて泥のように眠っていたからというか。やつぱりプロジェクト二つ並行はちよっぴりキツイものがあるようだ。

ともあれ、それはそれとして。

じゃあ何でこんなに突然？　と思っただけで確認すれば、数件のメールが見える。おじじと、先生と、晶葉と、志希さんと、プロデューサーと…………そのいずれにも共通してある一言が書いてあった。「誕生日おめでとう」——と。

「……あ、今日誕生日じゃん」

9月20日。

今日、ボクは14歳の誕生日を迎えることになった。
完璧に忘れてたけど。

各種の通知を一旦切って、数分ほど経った午前六時過ぎ。コーヒーにだばだばとシロップと牛乳を注いでいく。

横ではシロが特殊配合のペレットを食べ進めていた。動物と一緒にご飯を食べるのは、動物に対して上下関係を教える上で良くないという話は聞いたことがあるけど……まあ、別にいいだろう。頭の良い子だし、かなり懐いてはくれているようだし。
さて。

「14歳か」

14歳である。

こっちの世界に生まれ変わって14年。捨てられて14年。あるいは拾われて14年。いずれにしてもそれだけの時間が経ったのだなあとなんとも感慨深くもある。

ただ、正直に言ってしまうと、ボクは誕生日というイベントが苦手だ。

他の人を祝うのはいい。けど、ボク自身の誕生日となるとまた話が違ってくる。

どうしても、捨てられたことを思い出してしまう。

割り切ってるつもりではあるんだけど、それはそれとして決して気分は良くない。思い出したままだと一日の間あまり調子も芳しくないし、機嫌も悪くなってしまう。こういう状態で人と接するのも勿論良くない。どこかで気持ちを切り替えないと。

……と言いつつ、なかなか割り切れないんだよなあという風にも思う。

ボクのことだ。表面的には気にしてない風に見せることができている、実はどこかでトラウマ化してて後々何かの拍子にぶり返るのがオチだろう。一度あつちの世界に戻ってみてよく分かった。

誕生日と聞いてまず喜びを抱けなかったのがその辺の証拠だろう。それに加えて、どうにも自分のためにお金を使わせてしまうというのが申し訳ないというのがある。そこに関しては施設育ちのサガというものだろうか。ボクに使うよりみんなに使え、というか。だいたい昔から段階的に、質素なものでいい↓ケーキだけでいい↓気持ちだけでいい、と変遷があつたものだけでも。

しかし、まともに人生送ってみると、こう、相手が折角用意してくれたものを断ることの方がよっぽど失礼だということもまた、分かってくる。

その辺の兼ね合いも含めてどうしたらいいのか分からなくなってくるのもまた、誕生日なのだった。

「どうしたらいいんだろうね」

問いかけてみるも、当然だけどシロは何も答えてくれない。何言っただんだおめえとでも言いたげにきゆうと鳴くだけ……いや答えてるじゃないかなんだお前。本当にウサギか？

いや魔物だったわ。少なくとも普通の生物じゃないわ。何的外れなこと考えてんだボクは。賢いなあシロは。

「……今日も頑張ろう」

とりあえず——仕事のことを考えて、他のことを頭から追い出そう。

下手の考え休むに似たり。14年間ずっと解決しない以上、ボクの頭でそれをどうにかしようと思うこと自体が間違ってるんだろう。時間をかけて修正していくしかないか。

「ふう……」

コーヒー……というか、甘いカフェオレを飲み下す。脳に糖分が行き渡る……ような感覚にようやく目が冴えてきた。

ついでにとばかりに冷凍庫からバナラアイスを取り出し、コーヒーの中に突っ込んだ。

自分の部屋だからこそできる荒業だ。他の人に見られてたり、外出してる時じゃ絶対にできないしやっちゃいけない。だからこそ、こういうものは妙に魅力があるものなのだ。

まあ、コーヒーフロート頼めと言われるとそれも否定できないわけだが。

でもいいんだ。重要なことじゃない。ボクはアイスを温かいコーヒーに突っ込んでぬるく甘くしたいだけなんだ。最初からアイスが乗ってるアイスコーヒーが飲みたいわけじゃないんだ。

さて。

ともあれボクもちゃんと朝ご飯を食べに行かないといけない。部屋を出て食堂へ向かう、と、その道中で背後から呼びかける声があった。

「あ、氷菓ちゃん」

「ん……おはよう、肇さん、しゅがはさん」

「おつはーあいすちゃん☆ あとー、おたおめー！☆」

「おた？」

「お誕生日おめでとうございます、の意味です」

……あ、なるほど。あけおめと同じ略し方ね。おたおめ。

一発で分からないのは流行に疎いからか、それとも文脈を読み取る能力に劣るからか……でも、流石にしゅがはさんともユニットとして付き合いの長い肇さんはその辺のことは承知しているようだ。

「私からも、改めてお誕生日おめでとうございます。プレゼントは……今は、お荷物になってしまいますし。後で渡しますね」

「ありがとうございます、肇さん、しゅがはさん」

「いいってえことよ☆ で、プレゼント、何がーい？」

「えっ？ ……は、はあとさん、まだ決めてないんですか？」

「だってあいすちゃん普段何が欲しいとか全然言わないし？ じゃあ

本人に聞いちまえ☆ って」

「アイス」

「以外で」

「ええ……」

と言われてもなあ……別に何があるってわけでもなし。

その気になれば何でも作れるからこそ、物欲も減退してる感が、正直あると言えはある。

それとこれとは別にセンスが無いので作れないという問題もある。色んな意味で難しいところだ。

「……服？」

「服？」

「服か☆」

「だ、大丈夫ですか氷菓ちゃん？ 安易にお返事しようとしてませんか？」

「はじはじひどくね？」

「はじはじ……」

「それは置いておいて」

いやしかし、他に頼めるものもそこまで無いし。

ボクの欲しいものと言えば、あとは……調理用品とか、料理用の小道具とか、そんな感じだ。

「ボクのセンスで選ぶとどうも対外的に問題があるみたいなので

……」

「……ええと、はい」

「肯定したね肇さん？」

「……事実を、曲げることはできませんから」

いや別に構わないのだけど。事実だし。

晶葉に曰くボクのセンスがおかしいということなのだから、肇さんの反応の方が普通なはずだ。ボクとしてもそういうところが確認できただけありがたい。

「おっけおっけ☆ それじゃ選んでくるからちよい待っててね☆ 学校終わるまで」

「だよね。でもありがとう、しゅがはさん」

流石に自分のものを即ボクに渡す——というのは無いだろう。今から買いに行くとして、まあ、そんなところか。そもそも今日平日だし。

こちらとしては買ってくれるだけありがたい。ボクのセンスじゃあまた人に微妙な顔をさせてしまうところだった。

……いやまあ、今のこの服装が既にということもあるけど。でも今のこれは仮にも部屋着だし、柄も奇抜なほどじゃないし別にいいよね。射手座の柄なだけだし。その上からいつものを着てるのはまあ、いつものことだ。

その後も適度に今日のことを話し合いながら食堂に向かう。

どうやら今日は夜に誕生日パーティを催すとのこと。珠美さんも一緒に誕生日だから、二人同時に……らしい。

まあ、人気の度合いもあるしボク自身も新参者だし、添え物のようにおとなしくしていよう。

「あっ」

「あ」

と、樽をすれば影。当の珠美さんも食事をしに来たらしく、ボクらと同じように食堂へ向かっている姿を見かけられた。

「おはようございます、珠美さん。それと、お誕生日、おめでとうござい
います」

「おはようございます、肇殿、はあと殿、氷菓殿。氷菓殿もお誕生日、
おめでとうございませすっ！」

「おはおはー☆」

「おはようございます」

いつも通りの気持ちの良い挨拶だ。いや、いつも通りと言うよりも
うちよつと弾んだ声音だろうか。折角の誕生日なのだし、そうもなる
うというものなのかもしれない。

しかしまあ、こうして改めて見ると、ボクとあんまり背丈的には変
わらないんだなあというのがよく分かる。

もしかしてボクの方が伸び率が良いのだろうか。

そのことに気付いたのか、珠美さんがぐぬぬとでも言いたげに僅か
に表情を曇らせた。

「め、目線の高さが先月よりも少し変わっています……！」

「そんなことないですよ」

「い、いい嘘ですっ！ 珠美には分かります。というか知っていま
す。ちようど先月辺り関節が痛そうにしていたことを……！ あれ
こそまさに成長痛……！」

何でそこまで見て知ってるんですかあなたは。

「氷菓ちゃん、今の身長は？」

「やつと141cm超えました」

「むむ……し、しかし珠美もちゃんと努力が実を結んで1cmは大き

くなっています。まだまだ、追いつかれはしませんぞー!!」

「なんかすごいすぐ追いつか……」

「心さん」

いや、まあ、実際どうだろう。

愛海さんの見立てだと大学に入る頃には170cm手前はあつて実際にボク自身もそれを確かめてるし……。

……このままいけば、もって二年、かな……。

その後も今日の話題は基本的にボクらの誕生日のことに終始することとなった。

どうしても話題の中心になってしまうのは、ちよつとばかり気恥ずかしさが無いではないけれども、それ以上に嬉しい気持ちも、やっぱり感じるようにはなっていたのだった。

これも成長と言うのなら、それはそれで——やっぱり、それも嬉しい話だ。

@——@

「おはよう、氷菓ちゃん！ これはアタシからの誕生日プレゼントだ！」

「女の子の誕生日プレゼントとして学校にライドウォッチ持ってくる人初めて見ました」

「いいだろう？ グリスだ！」

「いやまあいいものですけどね？」

公式通販限定品。これが悪いものであろうはずもない。

ないのだがそれはそれとして、学校に持ってきていいものではないし下手すると先生に取り上げられかねないのだが、光さんはそれに気付いているのだろうか。

登校後の学校、シヨートホームルームが始まるその前の時間。唐突に現れた光さんは、まず誕生日プレゼントとして最新のライダーグッ

ズを届けに現れたのだった。

折角持ってきてくれたものだ。ボクとしても決して無碍には出来ないし、個人的にも好きなものではあった。

それはそれとして、場所が場所だけに流石に咎めざるを得ないというのが悲しいところでもある。

「ありがとうございます……なんですけど、先生に見つかったらマズいですよ」

「ん……それもそうだが……別にアタシたちは悪いことをしてるわけじゃない。ただ誕生日プレゼントを持って来ただけなんだ。学校で遊ぼうっていうつもりでもないし、問題無いんじゃないか？」

「まあ、それはそうですが」

光さんの言うことも実にもっともだ。もっとも、なのだが——人間はこう、節度を持って、ということができない生物でもある。手元に遊べるものがあると遊んでしまうのだ。こう、半ば本能的に。

例えば晶葉なんかがいい例だ。必要も無いのについつい手持無沙汰になって機械いじり。時と場合によつては授業中でもやらかしてしまうというのだからこれがまた。

これを精神の弱いボクなんかやってしまうとどうなるか。それはもう、言わずもがなな結末だろう。

「あ、氷菓ちゃん、これ誕生日プレゼント！」

「紗南さんはさあ……」

と、そんなところで通りかかった紗南さんが何の気も無しにごく普通に何かを手渡してくる。

これは……再来月発売のポケモンでは……。

「予約のダウンロードカードだから遊具じゃないもんねっ！」

「詭弁では」

「いいのいいの、また対戦しようねー！」

……まあいつか、詭弁でも。

とりあえず、受け取った後はしまい込んで誰の手も届かないようにしてしまえばいいだけのこと。ボク自身もだ。なんとかするよう動けばなんとかなるのだ。そうしなければならぬとも言う。

よもや、人のものを盗る人がいるとは思いたくはないが……まさかまさかということもある。特に14歳という年齢。衝動的に行動してしまう人がいないとは言えないだろう。そういうわけなのでよく気を付けて、それこそしもが起きないよう嚴重に——と。

ちなみに紗南さんとの対戦成績は比較的負けが込んでいるものの、それなりにこちら勝つてはいる。

どうやらこここのところの人付き合いとアイドル活動のおかげで、ある程度人の心の動きを脳内でエミュレートできるようになったらしい。脳内での高次予測……つまるどころの未来予知も、今までより高い精度でできるようになってきた。もともと、前までのものがガバガバすぎただけと言えなくもないのだけど。それでもこれなら対戦ゲームが得意になってくる日もそう遠くはない……はず。

そして。

「おう氷菓、待たせたのうー！」

「(待っては) ないです」

「あん？ いや心配せんでもええ。うちだつてわかちよる。普通のモンを持ってきたわ」

「普通の」

「おう。これじゃ」

と、次いでやってきた巴さんが差し出したのは——本当にごく普通の腕時計だった。

どういふものというほどでもない、シックな見た目の、割とどこにでもあるタイプのそれ。女物にしてはややゴツいけども、実用性重視

という感じで実に頑丈そうだ。

何よりそれなりに貴重なごく普通の贈り物でもある。今日のプレゼントの中では普通であって逆に異質な印象すら受ける。

「うちのモンに聞いてみたら小物がええって聞いてのう。ま、気に入るやら分からんが、使ってくれや」

「あ、ありがとうございます」

「一年に一回の特別な日じゃ。古宮のオジキも懇意にさせてもらってのう。事情は聞いとるし、ええ目を見んとダメじゃろ、氷菓は」

「あ、あはは……そう言われるとなんだかちよつと恐縮というか」

「うちの仲じゃ。恐縮なんてせんでいい」

そう言つて去つていく巴さんの姿は、実に俠気に溢れ、また、極めてクールであった。あまりのクールさに思わずときめいてしまいかねないくらいに。

しかしちよつと裏で何かアイドル活動とは別の動きが行われてる気がするのは気のせいだろうか。気のせいだろうか。気のせいであつてくれ。おじじ陸わかに上がってから何してるんだマジで。

ちなみに七海ちゃんからのプレゼントは高級鯉節、法子さんからはドーナツ生地、レイナさんからはなんとごく普通に手品の小道具をプレゼントしてもらつた。

後で光さんが「あのレイナが普通にプレゼントするなんて！」と感激し、当のレイナさんは顔を真っ赤にして否定された。

……レイナさんのキャラと売り方もあるし、否定するのも仕方ないのかな、とも思わないでもない。

@ —— @

「誕生日おめでどう氷菓！ プレゼントの山をくらえ！」

「ぐえー！」

「氷菓ちゃん！」

その後、スターライトプロジェクトのプロジェクトルームに訪れたボクを待ち受けていたのは、晶葉の集めてきたファッション誌による雪崩攻撃であった。

「どうやらボクの要望、というかここ最近必要としていたファッションセンスを磨くための道具、というところで集めてくれていたようだ。実に話の分かる友達である。」

「しかしながらまあね、いくらなんでも雪崩を起こすほど集めるのはどうかと思うんだ。埋まったし。」

「……あ、ありがとうなんだけど、この量はいつたい……？」

「氷菓はどうも一般的なセンスに欠けるからな……そういうわけなので取り揃えてきた」

「サラツとティスるのやめてくれない？」

「事実だろう」

「まあ」

悲しいことに、晶葉にも肇さんにもアリスさんにも言われているので一切否定できない。

「もうちよつと否定できるようなんとか頑張らないといけないんだけど、頑張るにはこういう雑誌を読み込む必要が出てくる。」

……頑張ろう。

「まったくもう……氷菓も、あんまり気にしちゃだめだよ。はい、これ。プレゼント」

「アタシからも！」

「あ、ありがとう」

次いで泉さんからはPC用の小物を、亜子さんからはお財布に入れるためのお守りを受け取った。

それぞれ、なんとというか個々人の個性が良く出たプレゼントだ。さ

くらさんは——と思って顔を向ける、と、不意にさくらさんがボクの髪に触れた。

「わたしからはあ、えへへっ。桜の柄の髪飾りっ！ どう？ 似合ってるよねえ？」

「ふむ、いいんじゃないか？ なかなかマッチしている」

「それに、さくらの名前とかかかってるしね」

「そ、そういうつもりじゃなかったんだけどお」

「ん……でも、そう思うと、少し心強い、かも」

「そう？ 良かったあ！」

さくらさんも、センスが飛び抜けてる……ってほどではないにしても、それにしたって服飾に関してはプロジェクトの中でも秀でていの方だ。中でもピンク色の小物に関しては他の追随を許さないほどでもある。そのさくらさんが選んだものなら信頼できると言ってもいいだろう。

何よりボクは今、ファッションのセンスを磨こうとしている最中であって……なんというか、小物に目を向ける機会を逸している感がある。ちようどいい……という表現をしても間違っではないはずだ。

「さて、それじゃあ俺からもいいかな」

「あ、プロデューサーいたんだ」

「最初からいたア！」

「まあ冗談だけど。どうしたの？」

部屋の隅にいたプロデューサーだけど、近くにおいてあった段ボール箱から取り出したのは……ええと。本と……何だろあれ。

「女性の場合……まあ、男でもそうなんだが、髪型で印象がだいぶ変わるだろ？ ってことでこれ。ヘアカタログとヘアアイロン。それと、ヘアワックスだ」

「はえー……こんなのあるんだ」

「存在をそもそも知らなかったのかキミは」

「話には聞いたことがある」

「話だけって……」

知らないものは仕方ない。でも今後はできるだけ学んでいこうと思ってるから許してほしい。許してくれるだろうか。許してくれるね。ありがとうグッドファッション。

いずれにしてもプロデューサーのこれもやっぱり嬉しいプレゼントだ。ちよつと……いやだいぶ……かなり……まだ志希さんの誕生日の時に発揮された重さというかつい高価なもの贈っちゃうところは治ってないけれども、これはこれでありがたい。やっぱりプロデューサーだけあってこつちのことをよく見ている、と言ったところだろうか。

「でもありがとう、プロデューサー。大事にする」

「ちや、ちやんと使ってくれるとありがたいんだけどな……なんて」「分かってるよ。ちやんと使う」

ちよつと勿体ないけど、無くなったら補充すればいいだけでもある。その時は、プロデューサーに買った店を聞いて訪問するのもいいだろう。

改めて、なんとというか——こうして考えると、人からプレゼントを貰うことでボク自身が色々考えて、成長のための機会にもできるんだなあと思う。

今回の誕生日が346プロに所属して初めての誕生日だからというのは勿論あるし、何より個人的に心境の変化があったからこそ、だろうか。

……何にしても、ここまで嬉しい気持ちを保っているんだ。

夜の歓迎会も、もつとずつと嬉しい気持ちになれるといいな——なんて、漠然とボクはそう考えた。

……ちよつと子供っぽいけどね。

45：クチナシの花

さて。

その後も続々とプレゼント攻勢は続く。

イヴさんからは手作りスノードーム、クラリスさん（ほぼ姉）からはメツセージカードとアイスクリームのケーキを。

頼子さんは今度行こうということで美術展のチケット、マキノさんからはウイルス対策ソフト。

芳乃さんからは厄除けのお守り、聖ちゃんは体にいいということでもヌカハニーというハチミツ。こずえちゃんの外に出て花輪を作ってくれた。ところであの辺花が咲くような環境だったかちよつと覚えてないんだけど大丈夫なんだろうか。

みちるさんからはホームベーカリー……なんだけど、やっぱあれだけ高いものだ。流石にマズいのでは？ と聞きはしたが、本人曰く「先行投資」だとか。これ、ボクに作ってもらおう気満々だと気付いたのは数秒後だった。

みんなの誕生日の時も色々贈ったり人が贈るのを見ていたものだけど……改めて自分が貰うとなると、やっぱりほんのちよつと気後れする部分が無いでもない。

それでも最初にそう考えていた通り、折角みんなが贈ってくれたものだ。ありがたく受け取ることにした。

そもそも、こんなに色んなプレゼント、嬉しくないわけがない。今までにあまり無い経験だから戸惑っているのは間違いないけど、そこはちゃんとボク自身の正直な気持ちでもある。

それからしばらくして、夕方。

「ボクちよつと7時からカラテのレッスンが」

「ダメだ」

「ダメえ!？」

「どうやらクローネのプロジェクトルームからは逃げ切れならしい。い。」

「どうも美嘉さんの生霊が手招きしている感すらある。」

「コワイ！」

「何をそんな嫌がっているんだ。仲間だろう?」

「嫌がつてるんじゃないんだ晶葉。単に嫌な予感がするだけなんだ」

「どこがどう違うんだそれは」

「ボクの気の持ちようが」

「早いところ行つてこい」

「晶葉様!! 困ります! あーっ!! 困ります!! 困ります!! 困り

様!! 晶葉ます!!」

「まったく何故氷菓はこういう時に行動力が欠けるのか……」

「いや分かっているんだけど、そこを進めないのがある意味ボクというか。そこで安易に前に進んでしまうのはボクではないのでは? という思いすらある。」

「……ごめんちよつと嘘ついた。普通にあのフリーダムさに巻き込まれるとどこかしらで被害を受けるので、という思いはある。」

「正直言うと、ボクじゃフレデリカさんと周子さんに対応できないんだもの。奏さんはこつちから押せば少し動じる部分はあるのだけど、多少押しても柳のようにするりと抜けていく周子さんはボク程度の反撃じゃ一切通用しないし、フレデリカさんはまず何を言えば動じるのかすら分からない。傾向は志希さんに似てるのだけど、実際は全く違う二人だし。」

「しかし、あの二人も大概自由……うん、まあ、自由かと言われると、間違いなく自由なのだけど、何だろう。こう、ボクが求めるそれとはまた別系統な気もする。何だろうこの絶妙な違和感。間違いなく自由ではあるんだけど。」

そんなこんなあったものの、結局しばらくしてクローネのプロジェクトルームにたどり着いたボクであった。

美嘉さんは憔悴しきっていた。

志希さんは何やら実験器具を弄っていて、フレデリカさんと共にその様子を眺めている。

と、そんな様子を見ているボクに最初に気付いたのは、扉から一番近いところにいる周子さんだった、

「おーお疲れ。誕生日おめでと」

「ん、ありがとうございます周子さん」

「はいこっち」

「座りませんよ」

「けちー」

まいいけどね、と軽く笑って、周子さんはこちらに小袋を寄越した。

「んじや、プレゼント。実家の八つ橋」

「あ。ありがとうございます。そういうえば八つ橋とか食べたこと無かったな……」

「うちのは美味しいよ？ ま、それが基準になっちゃうかもだけど」
♪

けらけらと笑いつつ改めて膝を指差す周子さん。流石に二度目は負けた。

数分ほど気の向くままナデられたりされた後にようやく解放される。ボクも一応小さい子の多い施設の出身だし、そういう楽しさというか和む気持ちは分からなくもないが、自分がこうもやられるとそれはそれで微妙な気持ちになってくる。

子供扱いされてるのが少し違和感があるのかもしれない。一応、施設じゃ曲がりなりに年長者という立場ではあったのだし。それに、あっちの世界とこっちの世界とで生きて来た時間を累計すればそろ

そろ30年前後。まあその間にどれだけ成長できたかと言われると、前世を思えばロクに、としか言いようがないのだけど……。

……そう考えるとボクって精神年齢はそこまででもないのだろうか。人生経験なんて無いも同然だったし。でも知識だけあるあたりはちよつと流行りの転生チートっぽいぞ！　ところでチートで無双まだつつか。無いっすか。無いっすね。どうも最近の転生チートは努力も必要なようだ。もう半年以上トレーニングしてるんだけどなあ。

「あつ！　ひよーかちゃんちいーっす！　はぴばー☆」

「ちーっす唯さん。ありがとうございます」

「ちーっす唯ちゃん。氷菓ちゃん貸すよー」

「じゃあもうー☆」

「勝手にボクでやり取りしないでくださいーい」

ぐいっつとそのまま唯さんがボクの身体を引き寄せ、先程の周子さんと同じように膝に乗せてきた。

……しかしこうも毎度毎度膝に乗せにくると、こう、色んな人の体格が実感として分かってしまう……というのは、ちよつといかがだろうかと少し思う。胸当たってるし。いや、そりゃ気にするわけないだろうけども。気にしてたらそれはそれでまた別方面の心配が出てくるし。

「ってわけでー、はいこれ。アメちゃん☆」

「おお」

次に、唯さんはどこから取り出したのか、やたらと大量の飴を差し出してきた。普通ののど飴と、レモン、ミルクなどの甘めの飴。それと……ハツカ飴が混じってるのはネタ……なのだろうか……。

「ゆいの好きなの詰め合わせっ☆　食べたらこんど感想聞かせて

ねー」

「あ、はい。ありがとうございます」

アメか。普段あんまり食べないんだよね。アイスばかりだし。でもこうして貰ったからには新しい味覚を開拓するのも一興だろう。甘いものは好きだし。

「甘いもの多いねえ。あたしもだけど」

「甘いものはみーんな好きだしね☆」

うんうん、と思わず頷きを返す。実際ボクにとっては好物だ。

大人になつたらまた違うかもしれないけど……いや、逆に大人になつたからこそと言いつつ大っぴらに食べるようになるだろうか？ そんな考え事をしていると、部屋の奥からフレデリカさんと志希さんが揃って出て来た。

「へーいはびばひよーかちゃん！ てなわけで今ここで作ってきたよ
〜♪」

「シキちゃんプロデューサーであーんどフレちゃんセレクトの coron だよー♪」

「え。あ、え？」

その言葉に、ちよつぷり驚く。この二人、大概一緒にいるな……なんて思ってたけど、プレゼントを共同で選んでくれるなんて、もうそこまで仲良くなつてたのか。

仲良くなるのは、勿論喜ばしいことだ。よつぽど気が合ったのだろう。その様子はともするとちよつと羨ましいとすら思えるほどである。

……が、ものがものだけに僅かに疑念を覚える部分が無いではない。果たして二人は一体何を作ったのか？ なぜ外にいた時は感じたはずの美嘉さんの気配が無いのか？ なぜどうも部屋の奥で倒れ

てる人影が見えるのか？ その答えはただ一つ……！ とかならな
いでほしい。好奇心旺盛な錬金術師と言えど、ことう、怖い。

「どんなにおいがいいかなーって思ってー、カフェオレと猫とめんつ
ゆと悩んだんだけどー」

「……!？」

ボクの耳が悪くなったのかそれとも頭が悪くなってしまったのか
分からないが、ともかくちよつと待つてほしい。何だつて？

カフェオレは……いやその時点でちよつと分からないけどまあ分
かる。猫？ めんつゆ？ 今何て？ 何で？

「結局ベリー系に落ち着いちやつたつて感じかな？」

どこをどうしてそういう風に着地したのかは定かじやないけど、最
終的な着地点がそこで良かった。本当に良かった。もういつその
際経緯について議論するのはやめよう。いいじゃないかベリー系。
イチゴとかブルーベリーとかボクも好きだし。最高じゃないかベ
リー系。他の選択肢になることを考えるとそうなつてくれて本当に
良かった……!!

「つてわけではいこれプレゼント♪ 早速つけてみたら？」

「え。う、うん……ありがとう」

と、志希さんに促されるままコロンをつけてみようと考え……その
前に匂いをまず嗅いでみることにした。

手で軽く仰ぐようにして鼻に向かって風を送る。と――。

「エンツツツ」

「ん？ 間違えたかにやー？」

強烈な出汁と醤油、そして蕎麦粉のにおいが鼻を襲った。

ちよつと待つて?! これそばつゆじゃないか?! というかそばつゆだこれ!!

あまりに想定外の事態のせいで脳が混乱している。これはこれである意味すごいものではあるが、だとしても香水として人間が使うようなものに思えない。じゃあ何に使えるのか? という話だけど……何だろう。新装開店でも年季の入った蕎麦屋に見せかけることができる……かな……?」

「ごめんねホントはこっちー♪」

「ちや、ちゃんと確認してよ志希さん……」

「にやはは♪」

本当にうっかりしてたのかわざとなのか分かんねえなこれ。

……まあいいか。どっちでも何か特異な問題があるわけじゃないし。志希さんならわざとでもやる。いつものことだ。

「ところであの……奥にいるのは……」

「美嘉ちゃんだよ?」

「なんかおねむな感じだったからそつとしいたんだよねー」

「あ、はい」

やはり、奥にいたのは美嘉さんだった。

そして、どうやらこの様子だと美嘉さんは犠牲になってしまったようだ。ボクの誕生日プレゼントの試作……その犠牲にな……。

……割とシヤレになりそうにないし後で謝っておこう。

「みんな、お疲れ様」

「お疲れ様です」

と、そんな決意を胸に抱いたそんな頃アリスさんと文香さん、それ

から奈緒さんの三人がプロジェクトルームに戻ってきた。どうやら何かしら仕事を終えてきたらしい。

他の人は……まあ、仕事だろう。トライアドプリムスの三人のうち奈緒さんだけがいるというのも不思議だけど……凜さんはニュージエネで、加蓮さんはMasque:Raydか？ 今度、「Love ∞ Destiny」をどこかで歌うみたいなこと言ってたし。

しかし、それにしても志希さんを含む他の四人はいるのに何で肝心のリーダーである奏さんはいないんだろう。そんなことを思いながら訝しんでいる、と。

「ごっちよ」

「!？」

唐突に、ソファの下から奏さんが顔を出してきた。

……ソファの下!? 何で突然そんな突飛な行動を!? 流石のボクも想定外すぎてビビるんですけど!？」

「アントマン、観たかしら?」

「え? い、いえ……」

「そう? 面白いのに」

「そう言っただけは二作目の呪いに……」

「そんなことないわよ。具体的なことは言えなかったけれど面白かったわ。そういうわけだから、これ。プレゼントよ。今度一緒に行ってみましょう?」

「あ、はい。ありがとうございます」

そう言うと、奏さんはごく自然な風にソファから体を出して適当な椅子に腰かけた。

あんまりにも唐突、かつ想像の及ばない状況だけに、理解が追いつかない。いったいなぜ奏さんはこの行動をチョイスしたのだろうか。分からん。全く分からん……!」

見れば、何故か奈緒さんは噴き出しかけているようだし、アリスさんもちよつと笑いを堪えているようにも見える。何ともないのは文香さんだけだ。いや、単に文香さんも状況を把握しきれてないだけなんだろうけど。

……でも奈緒さんがああいう反応してるだけでウケ狙いだということが分かるのは、いいかもしれない。

「……奏さんは、時々あんな風に人を驚かします、から……」

「……そ、そうなんですネ」

「あ……すみません。それと、こちら。どうぞ……お誕生日ということなので、ブックカバーと、葉を……」

「すみません、ありがとうございます……あ、結構いい生地」

「質の良い読書には、使うものも重要だと思いますので……」

横からすつと現れて注釈を入れ、そのままプレゼントを渡しに来る文香さん。流れるようなその動作は、思わず感心してしまうほどだ。いや感心するようなことじゃないが。あんなにするつと会話を終わらせられてしまうと、それはそれでボクに関心が薄いのだろうかと不安を感じてしまう。勿論そんなことは無くて単に口下手なだけなのだろうけれども。ちよつと寂しい。

「じゃ、あたしからはこないだ出たフルボッコちゃんのグッズを……」

「奈緒さん、半ばボクのこと役で見てくださいん？」

「そ、そんなこと無いぞっ！」

「ほんとお？」

やや疑問である。奈緒さんは割とサブカルにのめり込みやすい上によく影響され、よく夢中になってしまうタチだ。言葉だけは、まあ、立派なのだけでも。

「では私からはこちらを」

「ありがとう、アリスさ……えっ」

「こ、これは——!?!」

「Googleプレイカードです」

引き続いて、アリスさんから手渡されたのは——電子マネー
(3000円分)、である。

未だかつてないレベルで無機質な印象を受けるそのプレゼントに、
僅かな悲しみを覚える。そうかボク思った以上にこうやってプレゼント
ント貰うの期待してたんだなあ……なんて俯きかけてる一方、アリス
さんはほれぼれするほどのドヤ顔を見せている。

「誕生日プレゼントは大事なことですし、自分で選べるのが一番です。
なので電子マネーが一番使い勝手がいいと思ってプレゼントさせて
いただきました」

「そ、そっか……」

「合理的ですよね!」

——思わず、奈緒さんと顔を見合わせた。

なるほど、そうか。そういうことだったか。これはアリスさんに
とって最大の善意ということだ。

電子マネーそれ自体はやや使いどころを選ぶものの、多少のことは
できるだろうし。惜しむらくは、現金を渡すのとそう変わらないとい
う事実だろうか。このドヤ顔を見る限りそういう意図は全くないの
だろうけど、他の人の誕生日で同じようにやられてもそれはそれで困
る。ここは……うん、それとなくアドバイスを入れておくのが最善、
かな。

まあ……ボクの方を慮ってくれているのが分かるのは、本当に嬉し
いのだけれど。

@ —— @

さて。そんなこんなあったものの、取り立てて大きな騒動があったわけでもなく、その日の夜。ボクたちは寮に戻って誕生日パーティーに出席するための準備をしていた。

まあ、準備だのと言っても精々着替えるくらいだけでも。とは言つても流石に部屋着というわけにはいかない。それこそ折角みんなに選んでもらった服や自分で買ったりもした服があるのだから、着ていかないと勿体ないというものだろう。

で、寮に戻ってきたのでこれでしゅがはさんと肇さんからのプレゼントも受け取ることになった。しゅがはさんからは、しゅがはさん自身の印象とはまた違うタイプの明るめの色の服。ちよつと恥ずかしいが、似合うと保証をくれた。

肇さんからは、陶器の丼を。いずれこのくらい食べられるようになったら、という思いのもと作ってくれたらしい。

……で、そうやって受け取った後の会場。

「なツ……どうしたんだヒョーカ!? 悪いものでも食べたのかツ!？」

——普通の服を着てきて逆に心配されるのは普段の行いが悪いのだろうか。ボクは僅かに普段の服装を後悔した。

「美玲さんは時々酷いことを言うよね」

「いや、だって普段そんな服着ない……」

「ひよ、氷菓ちゃんだって……そういう気分の時もある、さ。……うん」

「そうれすよお。さつきまでずーっとお洋服迷ってたんれすし、努力してるってことれす!」

「そうだよな……うん、そうだなツ。ヒョーカ、もつと頑張ろうなツ!」

「褒められてるのか褒められてるのか分かんねえや」

「褒めてる……はず……多分……」

言葉だけを見れば完全に「もう少し頑張りましたよ」である。流石に付き合ひも長いし、美玲さんの言わんとすることをすぐに汲み取れる輝子さんもいるので、その解釈を間違えることは無い。それはそれとして一瞬泣きそうになった。今までの行動のツケか……。

「あつ、氷菓殿ー！ こつちですぞこつちー！」

「珠美さ……」

そう思つて項垂れていたところで、会場の主賓席……らしき位置取りになっている席に座っている珠美さんがこちらに手招きした。

しかし、なんだ。その……ボクも大概だと思つてたけど、珠美さん、服の趣味がやや子供っぽい……ような、気が……。

いや、よそう。自分のスタイルすらロクに確立できてないのに人に何か言うもんじゃない。それに似合ってるじゃないか。や、似合つてると言うのもそれはそれでまた別に問題だろうか？

いずれにしても詰んでるわこれ。

「さん」

「何故今言い淀んだのですか!?!」

「ちよつと心の中で葛藤が」

「何の葛藤なのですか!?!」

「大丈夫です。ボクはしようきにもどりました」

「正気に見えませんが」

何気に酷いことを。

しかし、でも、この言い方じゃまるで珠美さんに敬意を抱いていないような語り口だな。勿論そういうわけじゃない。

「ちよつと、服のことで……」

「む……氷菓殿は何でも似合いそうですが」

「そんなことないですよ。和服とか似合いそうにないですし」

「そうでしょうか？」

まあ晶葉あたりは「極薄ボディで起伏が少ないから浴衣は似合うかもしれない！」くらいは言ってくるかもしれない。凹凸が少ないのは晶葉もだけど。

ただ、根本的に外国の血が入ってるわけだし……違和感は拭えなさそうだ。

「でも珠美からすると大人っぽい服装が似合いそうというだけで嫉^{そね}んでしまいそうです……」

「それは、その、ありがとう……？　なんですけど……ええと、前に言われたことがあって。ファッションは選び方次第だって」

「ええ、まあ、そうでしょう」

「自分だけで決めるんじゃないかって、他の人の意見も取り入れると、今までの印象を抜け出せるようになる……かも、しれないです」

現に今、ボクがそうしようとしているわけだし。

まあ、実際やれてるかと言われると……かなり微妙なところだけど。根本的なファッションセンスが壊滅的らしいし。

それでもやろうとすること自体には、意味があると思いたい。

ちよつと曖昧な感のあるボクの回答だが、それでも珠美さんはなるほど、と軽く頷いてくれた。根が実直な人だからだろう。適当なことを言ってしまったのではないかとちよつと罪悪感も覚えるが。

「それにしても」

その罪悪感から抜け出そうと、あえて少しばかりわざとらしく話題を変えた。

周囲を見回すと、もう随分と準備も進んでいる。いつもボクらが朝と夕の食事を摂る食堂は誕生日パーティーのように飾り付けがなされていて、見た目にも賑やかなものを感じられる。

「こんなに盛大に祝ってもらえるなんて、初めてかもしれないです」

「ウツ」

「珠美さん!？」

と、いうようなことを言ってみると——唐突に、珠美さんが胸を押さえてこちらから視線を外した。

い、一体何故……!? ボクは何も変なことは言っていないはず……!

「あッ! ヒョーカなんてこと言ってるんだッ!」

「いや、誕生日こんなに盛大に祝ってもらえるなんて……っつて」

「普段から付き合いの深いウチらならともかくタマミが聞いて勘違いしないわけないだろッ!」

「何を!？」

「……ええと、な。『こんなに盛大に』って文字が抜けて、『祝ってもらえるなんて初めて』って言葉だけ、認識してみたみたいな……感じ、だ」

「聞き違いも甚だしすぎるでしょ」

「でもな……氷菓ちゃん、そういうところあるぞ……」

「……いや、そんな馬鹿な。流石にボクだつてそれなりに考えてから

発言するよ。……する、はずだ。大抵は。それをまるで四六時中反応し辛いことを言っているように言われるのもそれはそれで心外だ。

「まあ意図しないうちに言っっちゃうことくらいはあるだろうけど……別にボク自身は気にしてないことなんだからそこは気にしないでくれると……」

「そういうとこれすよ」

「えっ」

どういとうとこ!?

ともかく、パーティの間はもうちよつとボクは自分の発言に気を付ける、ということでは決着はついた。

しかし、何でこう……一応、今回のパーティで言うならボクも主賓のはずなんだけど、何でこう扱いがちよくちよくぞんざいな時があるんだろう。

いや、まあ。それもそれでいつものことか。

「はい、それじゃあみんな、そろそろ席つこつか☆」

しばらくして、寮の所属歴が最短でありながら最年長——気付けば寮長に近いような立場になっていたしゆがはさんがみんなに向けて号令を発する。そろそろ開会らしい。

「さてさて☆ 今日はいすちゃんとかまちゃんの誕生日ってことでえ、みんなこんな風にいっぱい集まってくれてお姉さん嬉しいゾ☆」

「当然、寮の仲間だからな！」

光さんの返答に合わせて、みんなが頷きを返した。そうやってまっすぐに言われるのもそれはそれでちよつと気恥ずかしい。

けど、まあ、そうやって恥ずかしがってるばかりも、言ってくれた光さんに悪い。堂々と前を見て笑みを返すくらいが礼儀としても一番いいだろう。

……多分顔赤くなってるだろうけど。

「で、今日の主役二人は何か言いたいことある？ あるだろ☆」

「はい！ では珠美から！」

「どうぞ、こちらマイクです」

「あ、すみませんあやめ殿。では、僭越ながら！ 珠美は17歳の今年、剣道二段を目指します！」

「「おおー」」

周囲にどよめきが走った。前に聞いた話だと、珠美さんは確か初段を取れていないという話だったと思っただけだ……こう宣言するってことは、段位を取得できたのか。

まあ、時間も無いだろうしこれは仕方ないだろう。仕事もあるし。

「なるほど、受験にも負けず武道にも打ち込むということですね。感服です」

「……あつ！ 受験!？」

「って忘れてたんかい!」

……どうやら、今年も目標通りに行けるかは分からないようだ。

スツットこつちに視線を持って来たこの感じだと……まあ、受験勉強を見るのをお願いします、というところだろう。

いや、構わないけれども。

「まっ、無理なくやるように、だゾ☆ じゃああいすちゃん!」

「今年こそ日本中の店売りのアイスを制覇します」

「全部把握しとるんかい!？」

「氷菓ちゃんならやりかねないです……」

ツツコミ、というかむしろ驚愕の表情を見せる笑美さんだが、ボクは本気だ。

……まあ、これはこれでウケ狙いというかネタのようなものではあるのだけれど。

本当を言えば、もつと友達が増えたらいいな……とか、アイドルとしてもっと成功していききたい、とかはある。

けれど、それは——なんというか、口にするまでもないことだと思う。それに、寮生のみんなを含む346プロのアイドルのみんなという、仲間、同僚で、友達とも言うべき人たちを差し置いてもつと友

達が欲しい、なんて……なんというか、贅沢すぎる気もする。

それに、アイドルとしての成功というのは、ボク一人が掲げてたつてしようがないものだ。

それこそ——みんなで、だろう。だからこそ、口にはしない。場を和ませるようなことで適当に嘯いて、素知らぬ顔してこの場を楽しむ。それが多分、今一番ボクがしなきゃいけないことだ。

「まああいすちゃんならやるだろ☆」

「やるれすね」

「というわけで二人の意気込みでした☆　じゃあそろそろ乾杯、行っちゃおう?」

と、告げるが早いか、みんながグラスをその場で掲げた。慌ててボクも手元のジュースを手取る。

「じゃあ、あいすちゃんとたまちゃん、二人とも誕生日、おめでとー☆」

「二おめでとー!!」

「ありがとうございますー!」

「ありがとうございます」

からん、とグラスとグラスをぶつけ合う音が幾重にも食堂に響いた。

パーティーは、夜遅くまで続く。

こうして、みんなが祝ってくれる。その事実が改めて嬉しくて。

ボクは、自然と笑顔でパーティーを楽しむことができたのだった。

番外：ろく☆ちゃんねる抜粋（5）

《星空にはえろ！について語るスレ》

5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

またクソドラマか（建前）

こういうのだいしゅきい……（本音）

6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

このセクギル活かすためだけの雑な布陣！

7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

これもしかして星空についてタイトルにするためだけにスターライ
トプロジェクト巻き込んだんじゃ……

8 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

>>>7

それ以上いけない

9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

でもこの時代に太○にはえろのリメイクかあ……ノリが古くなら
ない？

10 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* そこはまあセクギルのノリが完全に80年代だし

11 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 下手すると70年代くらいまで行くと思う

12 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 平均年齢ハタチなのにな……

13 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

>>12

お、待てい（江戸っ子）

それ去年のデータだぞ。今年は平均21だ

14 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

*

>>13

すまんありがとう

まああんま変わらないんだけどな！

15 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

*

それにしても流石セクギルだぜ

婦警コスが最早暴力的

16 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

*

ボタンが弾け飛ばないか心配

17 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

*

既に弾け飛んで誰か被害に遭ってるのでは

18 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

*

この企画実は蓮実ちゃんが裏で糸引いてるとか無い？

19 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

*

しかし誰か殉職するんだよな……

20 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

*

誰殉職させても角が立ちそうだけど

21 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

*

でもあれのリメイクならそこ容赦してちやいかんのでは？

22 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:***

*
にんともかんとも難しい話じや

《エリクシア総合スレ その21》

776 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

姫ーッ!

777 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

姫!?

778 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

(姫!?)

779 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

(姫…!?)

780 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

やめてくれないか!急にわけのわからないことを言いだすのは!

781 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

氷菓ちゃんのことだろうけど何でだ?

782 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

お前らライブ行つとらんのか

783 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

** あの募集期間と人数で行けたのかよお前
 784 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

** なんか会場の端を黒服が占拠して氷菓ちゃんにずっと姫コールしてた
 785 会員番号774番 20XX/X X/X/X X ID:*

** なにそれこわい
 786 会員番号774番 20XX/X X/X/X X ID:*

** どういう状況だよ!?
 787 会員番号774番 20XX/X X/X/X X ID:*

** 多分会場にいる全員が分かってないと思う……
 788 会員番号774番 20XX/X X/X/X X ID:*

** なんかすげえマフィアみたいだったよな
 もしや氷菓ちゃんマフィアの娘なのでは?
 789 会員番号774番 20XX/X X/X/X X ID:*

** つまり姫って……
 あっ (察し)
 790 会員番号774番 20XX/X X/X/X X ID:*

** あっ (察し)
 791 会員番号774番 20XX/X X/X/X X ID:*

** お嬢と仲良さげにしてる写真があったのは伏線だったのか
 792 会員番号774番 20XX/X X/X/X X ID:*

ひどい伏線だ

793 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

でも恥ずかしさで顔を真っ赤にしている氷菓ちゃんは可愛かった
です

794 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

ネコミミな志希にやんも可愛かったです

795 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

パッション全開な晶葉ちゃんも最高だったぜ

796 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

何でチケット外れたんだクソア!!!11!!!1!!

797 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

運……ですかね……

798 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

チケット取れなかったやつおりゆ? w w w w w w w w w w w w w w w w

俺w w w w w w w w w w w w w w w w

またしてもw w w w w w w w w w w w w w w w

またしてもオ……!!

799 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

い
ロ

800 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

**

その内良いことあるさ

801 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

なかなか競争率激しいからな
きつとそのうち大舞台でライブしてくれるはずだしその日を首を
長くして待っている

《弟の体育祭を見に行ったらアイドルがいたんだが》

- 1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- やべえよ……
- 2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- 何があつたん？
- 3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- ナニでもあつたのか
- 4 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- あちやーお山見ちやつたかー
- 5 1 20XX/XX/XX ID:***
- いや違う
- 凸はマズいだろうから名前は隠すけど普通の区立中
弟が通ってる中学なんだが
- 応援合戦でアイドルがチアガールの服着てチアダンス始めたんだ
- 6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- ファッ!?
- 7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- え、何で……？
- 8 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- JCアイドル？

9 1 20XX/XX/XX ID:***

>>8

うん

巴お嬢とレイナサマと氷菓ちゃん

* 10 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

あーあの区立か結構有名なとこだ

確か寮が近いとかでよく346のアイドルの子が通ってる

* 11 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

体育祭も文化祭も身分証明いるとか聞いたな

つてことはマジなやつなのか

12 1 20XX/XX/XX ID:***

そういうえば免許見せたな……

* 13 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

つてことはマジか

良かったな>>1そんなの滅多に見られんぞ

* 14 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

ぺたん ペたん ぺらん か

そこまで興奮するって感じでh(タアン)

* 15 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

私は貧相な方がかわいそうでかわいくて好きでs(タアン)

* 16 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

無茶しやがって……

* 17 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

ところで最近白河家の方も怪しいと聞いたが

- 18 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- * 実家がマフィアじゃないかとかそういう噂だっけ？
- 19 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- * なにそれこわい
- 20 1 20XX/XX/XX ID:***
- ああそういえば確かになんかめっちゃスーツ着こんで応援してる人らいたわ
- もしかしてあれそうだったのか……
- * 21 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- えっ
- * 22 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- マジで
- マジか
- * 23 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- アイエエエ……
- * 24 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- つまりこの(タアン)してる人たちはもしかして
- * 25 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- それ以上いけない
- * 26 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- でもじゃああの欠食児童っぷりは何なんだ？
- * 27 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

やっぱり拾われっ子なのは

28 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 最近になって初めて欠食から抜け出したみたいなパターンか

29 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* ウツ

30 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* またCD買いに行きやがった……

31 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* いつものことだ気にするな

それよりお嬢たちがエロかったかだけ教えてくれ

32 1 20XX/XX/XX ID:***

言ったら死にそうだから言えない

33 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* それもそうだな

すまない

34 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* この共通認識もひどくね？

35 1 20XX/XX/XX ID:***

まあでもスレ立てた以上説明だけはしとくけど

へそ出しのセパレートタイプでスカートはかなりミニ

お嬢と氷菓ちゃんはスパッツ履いててレイナサマはオーバーパン
ツ

流石ダンスやってるだけあるなって思うくらいにはキレツキレ
だったよ

画像は無い

36 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
>>>1無能

37 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
むしろ自分の命をリスク管理できる有能なのは？

38 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
メツ

滅されるからな……

39 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
個人情報保護のあれとか大丈夫のかな
最近の学校って撮影禁止なのも多いんでしょ？

40 1 20XX/XX/XX ID:***

どうも撮影自体はいいみたい
スーツの人たちめっちゃ写真撮ってたよ

41 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
(あつこれ下手に写真上げたら死ぬやつだ)

42 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
あんまり物騒なことを言うなよ
怖く見えるぞ

43 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*
実際怖い

44 1 20XX/XX/XX ID:***
彼女たちは可憐なアイドルであって裏は無い
いいね？

45 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

アツハイ

46 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : * *

*

そりや彼女たち自身に裏は無いけども

47 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : * *

*

いいね？

48 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : * *

*

アツハイ

49 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : * *

*

アツハイ

50 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : * *

*

コワイ！

《白河水菓ちゃんを見守るスレ その79》

774 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : * *

**

【朗報】氷菓ちゃんの体重増加

775 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : * *

**

来たのか!?

776 会員番号774番

20XX / XX / XX

ID : * *

** 遅えんだよ!
 777 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**
 ** 待ちかねたぞ!アイドル!
 778 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**
 ** 連携に草
 779 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**
 ** 桂ア!
 今何キロ!?
 780 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**
 ** 32kg!!
 781 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**
 ** やったー増えたー!
 782 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**
 ** あんまり増えてない気もする……
 783 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**
 ** 痩せてる人が増やすのにどれだけ苦労するかって話よ
 オマケに低身長となれば更にキツイぞ
 784 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**
 ** スポーツ選手とかでも太らす方向での体重維持辛いとかよく聞く
 もんな
 785 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**
 **

よ
28キロ(推定)から4キロ増やすのがどれだけ苦勞するかって話

786 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
ワイ高身長ガリ

体重増加速度を羨む

787 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
食べ

788 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
これはもしや志希にゃん製おくすりのおかげでは？

789 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
そのおくすりをください

割とマジで

790 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
ガリガリは大変だな…

791 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
体調も崩しやすいそうだしな

本当に改善されてきて良かった

792 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
でも氷菓ちゃんあんまり体調崩したとか無いよね

793 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
346だし体調管理については本人含めてみんな気を遣ってるんだろう

良い環境だよ

794 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

** その割には山ほどアイス食ってるようだが

795 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

** アイスは別腹(別腹ではない)

796 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

** 毎日一回はアイス紹介してるよね

どうなってんのあれ?

797 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

** どうなってんのかなと言われても

798 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

** 思えば他のアイドルの写真に写り込んでる時もアイス食ってる割
合高いような

799 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

** よつぽど好きなんだろうけどね
お腹壊したりしてないか心配だわ

800 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

** まずいことに壊したりしてるらしいんすよ……

801 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

** いかんでしょ

802 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

** いかんけどそれで普通にレッスンとか行ってるらしいし……

803 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

どういことだキバヤシ!!

804 会員番号774番

20XX/X X/X X

ID**

**

まさかメルトしたりしてないよね……? (震え声)

805 会員番号774番

20XX/X X/X X

ID**

**

するほどなら行かんじやろ!?

仮にしてたとしてもわざわざ外に漏らしはせんだろ

メルトだけに

806 会員番号774番

20XX/X X/X X

ID**

**

アイドルのスレでこんな汚い話いいのか

807 会員番号774番

20XX/X X/X X

ID**

**

別に実際やらかした話してるわけじゃないし

そつちの趣味の輩は一人くらい混じってるかもしれないが

808 会員番号774番

20XX/X X/X X

ID**

**

話変えよう!

今度の夏フェスのチケット取ったか!?

809 会員番号774番

20XX/X X/X X

ID**

**

取れない

つらい

810 会員番号774番

20XX/X X/X X

ID**

**

取れた!!!!!!
11!

やった!!!
!!!!!!

811 会員番号774番

20XX/X X/X X

ID**

**

>>810

もしや煽るふりして絶望してたニキか？

812 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

>>811

YES

ようやくだよ……取れなかったみんなもまだ二次抽選とかあるから諦めずに頑張ってくれ

813 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

浄化されすぎでワロタ

814 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

だが気持ちは分かる

815 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

デカイフェスだからまだチャンスはあるしな

816 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

ある……はず

817 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

無かったら暴動が起きるだろ

818 会員番号774番 20XX/X X/X X

ID:*

**

まだ日はあるし気長に待とう

《近所のサマーライブでアイドルが大勢来たんだが》

1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

261プロ倒産のせいで中止の触れ込み

← と思つたら当日急遽開演のお知らせ

←

何故か346プロの子たちが大勢出演で大盛況

何があつたの……

2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

こつちの台詞なんですけど

3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

もうちよい詳しく説明してくれんか

4 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

261プロ倒産してたの？

5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

今日あつたサマーライブってこれか

https://www.***summer+++

+++html

確かに出られそうもない子らもいるなこれ

6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

その代わりに346の子ってどういうことよ？

7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

分からん……

8 1 20XX/XX/XX ID:***

出たのはとどきら学園の出演者だったんだけどそれプラス

ターライトプロジェクトの子って感じかな

理由は分からんけどこの辺で収録でもしてたんじゃない？

実際見たけどめっちゃすごかったよ

9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
マジかよそんな俺だつて見たいわ

10 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* セトリどうだった？

11 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* そういえばあの辺346プロの合宿所があるとか聞いたことあるな

スターライトプロジェクトの子らがいるのはその関係じゃね？

ときら学園の子がいるのは収録に都合が良かったつてのもあるだろう多分

12 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* はえーすつごい……

13 1 20XX/XX/XX ID:***

セトリねえ

他は変更無いからとりあえず346プロの子らだけ

LMBGでハイファイ

きらりん莉嘉ちゃん亜子ちゃんイヴちゃんしゅがはでオレンジサファイア

マキノちゃん泉ちゃんさかなちゃんて夏恋

とときんこずえちゃん氷菓ちゃんて銀のイルカ

こんな感じ

14 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* しゅごい豪華……

15 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* ディスク化してくだち！

16 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* スターライトプロジェクトの子たちってちゃんとついていていけるのか？

まだ新人だしなんか悪目立ちしそうで心配だけど

17 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 地方のフェスと違ってあんまり映像化しないからなあ
関東圏でもしないことが多いが

18 1 20XX/XX/XX ID:***

なんかクオリティ差心配してる人いるけど全然問題無かったぞ
オレンジサファイアもアレンジとしてちゃんと出来上がったし
とときんと組んだ子たちはむしろ完璧って言ってもいいくらい
大型フェス未経験の新人のライブじゃないよあれ

19 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* もし今日ゲリラ的にいきなりやることになったってことなら経験
長めのとときんと組ませても問題無い二人を選んだってことだろう
な

こずえちゃんと氷菓ちゃんって実際とんでもないとかじゃなかった
たっけか？

20 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 一回見たら何でも真似できるって聞くね
天才なの？

21 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* むしろサヴァンとかでは

22 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* サーヴァント？（難聴）

23 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* クラス何だよ

24 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

* キャスター……？

25 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

* (流行の) ライダー

26 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

* あのプロジェクト天才多すぎねーか

27 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

* アイドルやれる人は少なからず天才性はあるよ

28 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

* 天才 (志希にゃん)

天才 (池袋博士)

天才 (氷菓ちゃん)

29 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

* そっちは何か違う気がする！

30 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

* アイドル系じゃなくて技術系じゃねーか！

31 1 20XX/XX/XX ID:***

そういうえば博士たちが機材トラブル解決したって聞いたな

32 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

* 何してんの!?

33 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

*

やっぱ技術系じゃねーか!!

34 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

*

なにかがおかしい気がするが割といつものことだし何もおかしくはないな

35 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

*

いつものことなの!?

36 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

*

お前知らんのか

池袋博士のツイッターほぼ技術職のそれだぞ

ユニットの二人もその話にめっちゃついていけてるぞ

37 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

*

何それこわい

38 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

*

でもアイドル活動に生きてるのすごくない?

39 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

*

そこはマジですごいと思う

他の天才二人(三人)に比べてこずえちゃん11歳だぞ

40 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

*

すげーな……

41 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:***

*

ていうかいつもの組み合わせと違うよねスターライトプロジェクトだけの組も

4 2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

なんか変な感じだな

何でクールな二人にさかなちゃん？

4 3 1 20XX/XX/XX ID:***

それがな

見た目青いからクールと言ひ張るつもりか！とか言おうと思ったんだがその見た目が思った以上に合ってるんだ

普段ちよつとイロモノ感出てるけどライブの時はちゃんとクール系できてるし

ちよつとファンになった感ある

4 4 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

そうなの!?

4 5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

かなり意外だわ

4 6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

今後はそういう方向で見せていくのかねえ

4 7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

組み換えていたら偶然そういう見せ方になっただけじゃ？

というか俺がいつもの七海ちゃんの魚トークが好きただけだが

4 8 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

いいよね専門家に負けないレベルのトークしてるの

4 9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

さかなクンさんとタメ張れると聞いたぞ

5 0 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 話めっちゃ逸れちゃってる……

51 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* いつものことすぎる

52 1 20XX/XX/XX ID:***

ところでライブの終わりに花火が上がってだな

なんかどうも予定にない上に夜に上がるような感じのがぽーんとあれ何だったんじやろ

53 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 夜に上がるような感じのってどういう？

54 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* いわゆる普通の花火だろう

昼花火って色ついた煙みたいなのが多いからその辺の区別でね？

55 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 昼にやるとあんまり綺麗じゃないような気もするが

56 1 20XX/XX/XX ID:***

それがすっげえ綺麗なのよ

当然っちゃ当然だけど盛り上がる盛り上がる

57 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* それ池袋博士と志希にゃんのツイッターに自分らの仕業って書いてあつたぞ

謝罪文も

58 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 何やってんの!?

59 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

*

一般の技術の追いついてないことをホイホイやるなよ!?

60 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

でもあの子ならやるよね

絶対やる

61 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

やる(確信)

62 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

やる機会があるならすぐにやるのがマッドサイエンティストだ

そして二人はマッドサイエンティストだ

63 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

そんな二人に挟まれてて比較的真面目そうな氷菓ちゃんは大丈夫

なんだろうか

64 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

多分今回はライブの方に出なきゃいけないかっただけで何も無けれ

ば一緒にやってるんじゃない

65 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

同じくらいマッドな部分はあると思うんですがそれは

66 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

でなきゃあのユニットであんなに仲良くできない気がする……

67 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

*

仲が良いこと自体は間違いなく良いことなんだけどね

仲が良いからこそ察する部分はあるよね

46：自信のほど

当然と言えば当然なんだけど、ユニットの人数によつてはレッスンの難易度が劇的に上がることもある。

例えばフェスの時の十七人編成。あれは極端な例だけど、人数が増えたことでみんなの息を合わせるのが難しくなつたし、まあ、一例として数えてもいいと思う。

で、今までボクはずつと三人ユニットとしてのレッスンを重ねてきた。けど、それ以上となると……先に挙げた十七人編成と、将来的に多くなるだろうということでも五人編成を想定したレッスンをたまにやっている程度だ。

だから、というか。実を言えばボクは二人でのユニット活動というのは初めてだったりする。

呼吸の合わせ方、タイミング、立ち位置とダンスの連動……様々な部分で異なるものが多いこともあり、レッスンは難航していた。

……と、当初は想定していたのだが、別にそんなことは全然なく普通に順調であつた。

「白河のレッスンは張り合いが無いな……」

「真顔で何てこと言ってるんですか麗さん」

十月の上旬、アーニヤさんとのユニットの件でレッスンに励んでいる最中、ふと呟くようにして発せられた麗さんの一言がボクの心を大きく傷つけていた。

いくらなんでもあんまりにもあんまりではなからうか。

「アー……превосходство……優秀、では？」

「うむ、優秀だしっそ天才と言つてもいい。しかし、教えたことが一度でできるようになられるとそれはそれで複雑な気持ちだよ」

「できる分には問題無いのでは……」

「鏡を見て楽しいと言えるか？」

ひでえ。

いやまあ、確かにその、一度手本さえ見れば寸分狂わず模倣してみせるけれども。

「体力・筋力を除いてほぼ全てが高いレベルでまとまっているが、その分癖も棘も無い。模範的と言えば聞こえは良いが、性根がやや凡俗で自己主張に欠ける……芸能人が持っているべき『毒』……周りを自分の側に引きずり込んで染めていくような、劇物じみたものを感じないわけだ」

「泣いていいです？」

これでも至極真面目にレッスンにもライブにも収録にも取り組み組んでるんだけど……。

いや、真面目に取り組みすぎるから良くないのか？　そういうわけじゃないか。

麗さんの言う毒が無い、棘が無いっていうのは……何だろう。平常時は美点になりうるマイルドな部分が、芸能活動をする上で良いこととは言い切れない……ということだろうか。

毒なら前世で散々飲んだんだけどねH A H A H Aなんて思いはするが、肉体を持ちこして居るわけじゃない。いつそこちでも飲んでみるか、毒。どうせ死なないし。身体から毒が染み出すくらいやってみるか……なんて一瞬思ったけれども、そもそもそういう話でもないだろう。概念的なものだろうし。

「ヒョーカ、良くない……ですか？」

「違う。惜しいんだ。地位と名誉に対して貪欲で、自己主張できるだけの強さと美的センスとあと体力があれば、この一年で白河は確実にトップアイドルへの道を邁進していたことだろう」

「言外に今年じゃあ無理と言いましたね？」

「当たり前だ。要求項目が多すぎる」

それはそれで実を言えば地味にショックだったりするけど、それでショックを受けるのもやや傲慢な話か。

いずれにしても今この状態じゃ無理、という評価が下されているのだから、改善するべく努力していくのが筋だろう。

まあ、そもそもを言えばボク自身はトップアイドルという肩書自体にはそこまで興味はな———こういう思考がダメなのか、もしかして!?

「x o p o Ⅲ o。でも、一種の……天才、ですか？」

「こつち見て言わないでアーニヤさん恥ずかしい」

それにボクはずるつこな天才である。前世という、本来ならありえない場所から知識と経験を持ちだしてきている状態だ。本物の、言ってみれば天然ものと言える志希さんやこずえちゃんとは比べればどうしても程度は低いものになる。彼女たちの尊い輝きと比べてしまえば、ボクなんてイミテーションシモンもいいところだ。

「それが何故あも自己評価が低いのか分からんな……」

「ひょうかだけに自己ひょうかが低くてもひょうかがない……ふふっ」

「子供のころ、何かあったらしい……ですけど」

「今トップアイドルが割り込んでこなかったか」

「？」

「？」

何故今楓さんの話をする必要が？

「いや、いい。ともかくちよつとした課題だな。白河は少し自信を身に着けるように」

「……はーん」

自信。自信かあ。

確かに過去のことは吹っ切ったつもりだけど、その辺のことを考える余裕は無かったな、とふと思い出す。

とはいえ、自信……無い、わけじゃあない。一応自分にできることはできるとはつきり言える。ただ誇れることというのも非常に少ない。ボク自身、自己評価が低いことは理解しているが……しかし、だからと言ってすぐすぐ改善できることも思えない。どう考えてもひけらかしたらマズいタイプのそれだし。

順調だと思っただ途端にこの前途多難さである。

そもそもボクのせいだと言われればそれまででもある。

悲しい。

@ ——— @

「そういうわけで自信を付ける方法は無いかと思つて」

「フフーン！ そういうことなら確かにボクが最適ですね！ なんでも聞いてみてください！」

レッスンからしばらくして。

イシユミールさんと通話がしたいということと一旦アーニヤさんに例の通信機を預け、さあ少し手持無沙汰になったぞというタイミンで、ふと晶葉から連絡があった。曰く、先輩から勉強を教えてくださいなとかお願いされたのだとか。

勿論晶葉だけでも教えられるのだが、そこは効率化のために……ということとボクも一応講師役として呼び出されたという話だ。

今回勉強を教えることになったのは、幸子さんと小梅さん。どちらも受験を間近に控えた中学三年生である。こちらとしても、多少なりとも気合を入れなければならぬところだ。ボクらとしても中間テストが近いので、勉強の確認という意味もある。悪くない。

というわけで、事務所の一室を借りて勉強の手伝いをしていたのだが、何かお礼ができないかと言う幸子さんに言ってみたのが――先のレッスンでの課題、である。

「いや、どうかな……」

「む、晶葉さん、もしかして疑ってますか？　ですが安心してください！　小梅さん、輝子さん、乃々さん、その他にも色んな人に勇気と自信を持たせられたボクですから！」

「う、うん。幸子ちゃんは、結構、すごい……よっ……」

「幸子はそうだろうとも。だが氷菓はどうかかな？」

「氷菓ちゃん……？」

「え、ボク？」

そりやまあ、自信がなかなか持てないんです、ってことで相談を持ち掛けたんだから、それがなかなか難しいことだとも理解している。

けれどもそれを頭ごなしに否定されるとそれはそれでちよつとむつとする。ボクだって別にそこまでじゃ……ない、はず、うん。

「氷菓は『ボク冷静沈着ですよ』というような顔しておいて実は自己分析ができないからな。クールなようで結構アレだぞ」

「アレ」

「言い草がひどくない？」

新属性「アレ」の誕生の瞬間である。

「問題はそうなってしまった原因を説明するには『あちら』のことも含めて語らなければならぬことだが」

「その話重くなります？」

「お、お手洗い……行ってくる、ね……」

「逃がさんぞ」

「あっ!? 扉が勝手に!?!」

余談だが、晶葉は既にこの半年で事務所のほぼ全域を改造させてみせている。

バレた時はそりやもうちひろさんに大目玉を食らったわけだが、実を言えばその後のことは聞いていない。ちひろさんが接収した説もあるが、少なくとも元に戻したということは無いだろう。下手をするとい前のゴッドギガンテスの如く偶像合神ミシロナイザーとかやりかねない。正直なことを言えばちよつと見てみたい気もするが、流石に専務さんがキレル気もする。

それにしても逃げられるとそれはそれでちよつとシヨックなんだけども。

「まあ聞くといい。というか聞いてくれ。最近はいいい加減氷菓の過去とかいうド級の劇薬をじつと抱えていることに辛さと重みを感じてきたのだ」

「それ複数人で抱えてても重さは特に変わらないやつですよね!?!」

「みんなで不幸になろう!」

「最低なやつじゃないですかやだー!!」

「ひどくない?」

「氷菓ちゃん……さつきからそればっかり言ってる……ね……」

晶葉も幸子さんもボクの過去を何だと思ってるんだ。

これでも幸せな過去の二つや三つはあらず。こっちに生まれ変わってからなら。

「幸子も小梅も例の話は知っているとと思うんだが」

「ええ、はい。そうですね」

「う、うん……聞いた、よ。フェリちゃんと、お話できるっていう時に……」

この部屋にいる四人の共通点に一つ。「あちら」の世界に行ったことがあるという点が挙げられる。

例の通信機が出来上がった後、他に使いたい人もいるだろうからというところで、一度でもあちらの世界に行つたことがあるという人にはある程度の説明をしている。ボクの秘密……というか、まあ、あつちの世界で生まれて死んで転生した、という程度の概略だけ、だけど。本当の意味で詳しく知っているのは晶葉と志希さんくらいだろうか。勿論、錬金術が使えることは秘密。流石に晶葉もその辺は弁えた上で話してくれると思うけど……。

「実は氷菓はあちらの世界で道具のように使い潰されて死んでな」

弁えたけど空気は死んだ。

……いや、間違つてない。間違つてないし端的に伝えるにはむしろ正しい表現だ。代わりに幸子さんも小梅さんも表情が死んでいる。小梅さん、ホラーが好きだから多少は……と思つたけど、今生きてる相手の話はちよつとダメなんだろうか。いやダメだろうけど、普通。

「こちらでも生後直後に捨てられてな」

「へヴィすぎませんか!？」

「ここまでが前提だ。耐えろ」

「……っ、辛い……」

いやでももう過ぎたことだし……というわけにはいかないだろうか。いかないだろうな。流石にボクも学んでる。

だからこそ最近は何とこういふこと言わずにおいてるんだけど、晶葉は何故こうも正直に話してしまったのだろう。不安に思つて隣を見ても、特に返事は無い。

「というわけでだな。氷菓は立て続けに『必要無い』という判定を受けているわけだ。それも実の親からな。それが氷菓の人格形成に何ら

かの影響を及ぼしたと私は考えている。例えばこんな風に自信が持てないというようない」

「納得しました」

「いや、それはそこまで関係ないと思うんだけど……」

そりゃあ、まあ、多少鬱屈した部分が形作られてしまったり……みたいなのところはあると思う。そもそも、ボクが自由の何のと言いついたのだからそこがルーツだろうし。

けどそれで自信が持てなくなるってことは別に……。

「甘い。悪いが私は氷菓の自己分析は話半分程度にしか聞いてないぞ」

「えつなにそれ初耳なんだけど」

「とうかな、氷菓のことについては氷菓自身よりも私含めプロジェクトメンバーの方が正しく認識していると思うぞ」

「うん……私も……そう、思うよ……」

「小梅さんまで……」

え、これもしかしてボクの方が間違ってる……？

「氷菓さんは、何でそんなに自信が無いんですか？」

「え、な、何で？」

……何でと言われても、それは、まあ……ええと。

晶葉に言われたのをそのまま言うのは流石にダメだろう。自覚が無い部分だし。じゃあ、自覚のある部分はどうと……。――。

「……周りの人がみんなすぐくて、ボクなんかじゃ敵わないな、って思ってる」

「「いやいやいや」」

即座に否定されてしまった。

いや、でもそう否定する前にこっちの言い分も聞いてもらいたい。

「いや、でも、ボクにできることは大抵他の人もできるんだよ」

「ダンスも歌も演技もあるだろう」

「こずえちゃんができるし……」

「お、お料理はどうですか!？」

「葵さんが」

「あ、頭も、良いよね……?」

「志希さんが」

「本当に面倒くさいなキミはツ!!」

「怒鳴らないでよ!?!」

そりやまあ個人的にも色々やりたいこともやれることもあるけど、どれ一つを取っても同僚アイドルの皆さんのうちの誰かに上位互換と呼べるような人がいて、自慢なんかできたためしがない。

晶葉が「じゃあ錬金術はどうなんだ」という視線を送ってくるが、それなんてもう自慢できない筆頭と言ってもいいほどだ。だって開祖様がいるんだもの。

「ぜ、全部ができる人は、いないんじゃないかな……?」

「真奈美さん……」

「あ……」

「こうなるとある意味環境のせいか……」

他にも、例えば志希さんはボクにできることは大抵できるだろう。逆に、志希さんにできることでボクにできないことは多い。運動とか。

「事務所に来た初日は、まあ、まだちよつと自信がある部分はちよつとあったんだけど、吐いた一件でぽつきり折れちゃって……」

「あれか……確かに初日はキミも割と刺々しかったな」

「そうなんですか？」

「ちよつと……意外、かも……」

「今が氷菓だとすると当時はただの氷アイスというくらいにはなかなかだったぞ」

今当時のことを思い出すと少し恥ずかしい。しかし、考えてみるとこれはこれで成長……というか、変化というか……。

何にしてもあの頃ちよつと尖ってたのは事実だ。プロデューサーに対しても塩対応してたし、プロジェクトメンバーのみんなの行動一つ一つにちよいちよいドン引きしてたし。

じゃあ今は退化してるのかと言われると、それもまた違うと思う。けどこれを何と表現するべきかと言うと、思い浮かばないのも事実だ。

「氷菓……過度な謙遜は嫌味に勝るぞ」

「謙遜じゃなくて事実だし」

「そうじゃないと思うよ……」

「ふーむ……そういうことなら確かにこのボクの出番ですね！」

「む、やってくれるか自称・カウンセラー」

「自称してませんよ!？」

でも似たようなことは言ってると思います。

ともあれ。こほん、と気を取り直して幸子さんはこちらに向き直った。

「色々言いたいことはあると思いますが、まずはそれを全部飲み込んで『ボクはカワイイ』と言ってみましょう！」

「カワ……え？」

「カワイイ! です!」

「ぼ……ボク、カワイイ……」

「恥ずかしがらずに！」

「ボクは、カワイイ」

「もつと！」

「ぼ、ボクは、カワイイ！」

「まあボクの方がカワイイんですが!!」

「全身に正座直後のような痺れが走るスイッチ」

「フギャー!!」

どこにそれを隠し持っていたのか、晶葉の袖口から飛び出したスイッチのせいで、猫のような悲鳴を上げながら幸子さんが倒れ込んだ。

……それ、随分前にプロデューサーに対して使ったやつの改良品ではなからうか。……まあ当時のそれと似たようなものだとして何か問題があるでもないが。

「で……でも、ああいうの、大事……だよ。自分で、自分を、褒めるの」「そうなのか？」

「うん……輝子ちゃんや、私も……すこし、やったよ」

「アレをか」

「ちよ、ちよつと違う……けど……」

違うのか。

いや違うのなら正直ちよつとやめてほしい。恥ずかしすぎて顔から火が出そうだ。もう既に真っ赤だとは思うけどこれ以上続けられると顔色の七変化が起きてしまう。その内白くって青くなるぞ。髪と合わせて真っ青だぞ。いやどうでもいいか。

「それで何なんだ今のコントは」

「こ、コントじゃないですよ……うぐぐ。氷菓さんに大事なはずばり、自分を受け入れることです！」

「う、受け容れてないわけじゃないけど……」

「いやキミだいたい自分のこと嫌いだろう」

「……自覚、無さそう……」

「そ、そんなことな……なくもなくもなくも……」
「どっちだ」

自分のことが嫌い……って、流石にそこまでじゃ、とは思う。

思うが心当たりが若干あることも思い出す。褒められるとまず否定から入るところとか。いや、自分じゃ実際のところよく分からないから晶葉がこうして改めて指摘してるんだろうけどさ……。

「キミ見た目褒められると逆にちよつと不機嫌になるだろう」

「そうだったんですか!?!」

「いや分かってて言ってたんじゃないのか」

「……そういえば、頭が良いって言っても……あんまり、嬉しそうじゃない、ね」

「……まあ、内心、そう、かも?」

「何でそんなことになるんですか?」

「外には出してないが、実親が大嫌いだからだろうと私は推測している」

それは———そうかもしれない。

というか、これに関してはそう考えるとあまりにも納得のいく部分が多いということでもあるのだけれど。

なお、やつぱり自覚は無い。だって好むも嫌うもそもそも接した記憶がほぼ無いし。

『でも実の親と接した記憶なんて無いしなー』と思ってそうだが「うへ」

なんで分かったんだ。

「捨てられれば嫌いになって当然だと私は思うぞ」

「……そ、そうなる……よね？」

「思えば出会った頃からなかなか怒ったりしないし感情もちよつと希薄だなあなんて思ってたものでな」

「そんなにですか？」

「生理の時に初めて怒ったくらいじゃないか？」

「身内にはちよつと怒ってたけど」

一応、今は和解済みだ。一応。

しかしそれでは不満だとしても言いたげに、晶葉はかぶりを振った。

「もつと本気で怒ったと言えばあれが最初だろう」

「まあ……」

「それっていつくらいでしたっけ？」

「氷菓が体を売ってるという噂が流れた時期だから……五月のはじめくらいか？」

その覚え方なんとかならない？

「そういえば、その頃から晶葉さんとの微妙な喧嘩が見られるようになったんでしたっけ」

「微妙って言うな」

「どうでもいいとも……言う……かな……」

「どうでもいい言うな」

あー……いや、うん、でも割とどうでもいいと思うよ、あれ。

ビーム兵器が水冷式か電氣的に冷却すべきかなんて普通の人からすれば知ったこっちゃ無いし、ウサちゃんロボの機関動力が左巻きだったか右巻きだったかなんて客観的に考えると至極どうでもいい。しゅがはさんのスウィーティーと全然スウィーティーじゃないところの境界線を探り始めたり……うん、改めて考えるとどれもこれもど

うでもいいな。

ともあれ、その時の口論……口論？ のせいで実は不仲説が立ち上がってしまったり、プロデューサーに変に心配されてしまったりしたこともある。結局ものすごくどうでもいいことだったので呆れられてしまったが。

「ともかくだー！」

ぺちん、と片手で机を叩いて話を換えにかかる晶葉。それはそれとして痛かったのか、叩いた後で掌を擦り合わせるのには実に格好がつかないと思う。

「前々から『まあいいか』『まあいいか』と言つて済ませてきたが、これはある意味で精神を守るための防壁なのではないかと思うわけだ」「怒ると精神的に消耗するからですか」

「そ、それに……怒り方、分かなさそう……」

「人生経験に乏しいワケだからな」

「好き勝手言つて……」

否定は、できないけどさ。

最近になって改めて考えると——ということ、だいぶ増えてきた。それは人生経験を積んだことで、これまで持っていなかった感受性……というようなものが芽生えた証拠と言える。

でも同時にそれは、これまでボクがそういうものを持っていなかった……晶葉に言わせてみれば、感情が希薄なように見えたということでもあるわけだ。

結果、それが今、こうして自信を持たせることを阻害している……と。

「でもさ、そうなるとボク、どうするべきなんだろう」

「——そうですね、氷菓さんは、親から貰ったものが気に入らない、と。

そういうことでいいんですよね?」

「たぶん」

言いつつ、幸子さんの表情がやや苦しげだったのは……幸子さんが暖かい家庭に生まれた証明と言えるだろうか。

まあ……そうもなると思う。ボク自身、こう、幸子さんに指摘されたことを聞くとまあなんと親不孝なことを、と思っただくらいだ。その親がロクでもなかったのだが。

「じゃあ、親から貰ったものじゃないものを好きになりましたよ!」

「……貰ったものじゃないもの?」

何それ、と言いたくなるが……果たして、ボクにそんなものがあつただろうか。

……眼鏡とか? そんなことを思っただと眼鏡を外したボクの様子に呆れたのか、小梅さんが小さく溜息をついた。

違うのか。そうじゃないのか。

「キミの人格は誰に貰ったものでもないだろう。キミ自身が作り上げたものだ」

「人格……」

なるほど、人格。

……性格とかその他諸々ひつくるめた自我、あるいは個我。

「なんかナルシストっぽくない……?」

「人間誰しも大なり小なり自己愛的な部分はあるものだぞ」

「さ、幸子ちゃんとか……」

「フーン! そうです……あれ? 今ボク褒められてませんよね?」

いや、褒めてることは褒めてると思う。それなりに。ただちよつとそれが行き過ぎると問題だよ、つてだけで。幸子さんのそれは幸子さんにとっての「適度」だろう。たぶん。

「で、ですけど！　これだけはちゃんと言えますよ。氷菓さん。自分を好きになれない人が、人に好きになつてもらえますか——つて！」
「……………」

思わず絶句した。

そうだ。確かにその通りだ。そんなことも分からず、今までボクはアイドルしてたのか…………？

それ以上に。

「幸子さん、こんなに真面目なことを…………」

「熱は…………無いな…………」

「二人ともボクを何だと思つてるんです!？」

「…………芸人さん…………じゃない、かな…………？」

「ヒドくないですか!？」

そのリアクションスキルは芸人さんのそれに比肩する域に達して
ると思うんだけどどうだろう。

いや、それが悪いことつてわけじゃなくてね？　仕事をやる上では

むしろ役立つことの方が多と思う、うん。

「でも…………自分を好きになること、か」

「と、いうことでさっきの話です！　もう少し、自分のことを認めてあげましょうー！」

「あれは…………恥ずかしいんだけど…………」

「やれ」

「えっ」

「いいからやれ。今のキミに必要なことだぞ」

「そ、その前に勉強を……」

「その前にやりましょう」

「あう」

か……：躲しきれないし防ぎきれない。これが先輩アイドルの重圧か……！

いや違うか。単にボクが押しに弱いだけだ。そしてそもそも幸子さんは元から割と勉強はできる方である。一時間くらい抜かしても特に問題無いくらい。趣味がノートの清書というのは伊達ではなかった。

その後、一時間に渡って自分のことを好きになれるようにレッスンが続けられるのだった。

終わる頃には、ボクの顔は真っ赤を通し越して紫色にすらなっていた。

@ —— @

「おはよう白河、アナスタシア。すまないな、昨日は迷わせるようなことを——」

「煩おほわしい太陽ようごぎですいますね」

「どうした白河!? 言葉遣いを変だぞ!？」

「そんなことないですよにゃ」

「Да ты что!？」

「ちよ、ちよつと待て！ 何が起きた!？」

翌日。レッスンに訪れたボクにかけられたのは、信じられないものを見るような、そんな言葉であった。

「もう少し自信を付けるべき……：麗さんはそう言いました……」

「あ、ああ、そうだな」

「その話を踏まえて……：自信のある人をエミュってみれば多少は分か

るんじゃないか、と思ひまして」
「いやそのりくつはおかしい」

その言葉を聞いた麗さんは非常にゲンナリとした表情をしていて、アーニヤさんは何か微笑ましいものでも見るように苦笑していた。

いや、まあ、確かにボク自身昨日の延長そのままに突っ走って来て結果暴走してるようなものだとは気付いているんだけども。

——それはそれとして、あの時の幸子さんの言葉が、ボクにとってそれなりに自信を与える結果になったのは、事実だと思う。

改めて開祖様にも相談したところ、「得意分野が違うだろうが。持ち味を活かせ」だそうぞ。

とはいえ得られた自信というのも、あくまで「それなり」だ。多分、麗さんが求める程度の水準には達していないだろう。けれども一度足掛かりを見つけさえすれば、少しずつでも前に進むことができるはずだ。

たぶん。きつと。めいびー。

47：紅葉の下で

京都、天龍寺。

嵯峨嵐山に建つ歴史ある寺院であり、世界遺産の一つとしても数えられている。

毎年秋には、綺麗な紅葉を目当てに数多くの観光客が訪れる名所である。

……そんな場所の目前に、ボクは楓さんと一緒に訪れていた。和服で。

何故今日、ボクはわざわざ京都まで来たのか！ 何故その上楓さんもいるのか！ 何故ボクまで一緒に和服に着替えてるのかわア！

その答えはただ一つ……プロデューサーが楓さんとの仕事を持つて来たからだあーっははははははははははははあーっ!!

「アーツハハハハハハ!!」(ターニツオン)

「どうしたんだ白河さん!? さつきから何かおかしいぞ!？」

「緊張で超吐きそう。ふざけてないと精神的にヤバイ」

「あ、ああ、ふざけてたのか……というか何だ、その、ヤバイ人みたいだったけど」

「精神的にはだいたいヤバイよ」

「そうか。俺は周りからの視線が痛いんだが」

「ごめん」

パニックになってたからって言っても何をトチ狂ったこと考えてんだボクは。いくらなんでもちよつと混乱しすぎだろう。

スタッフさんもボクの変調に……というか突然笑い出したせいで色々びっくりしてるようだ。ボクも自分で何してんだろうと色々びっくりしてる。どうもここ最近ちよつと情緒不安定になっている

ようだ。

原因は……まあ、こないだのアレだろう。自信を付けようと色々試してみているが、あんまりうまく具合に成果が出てないというか。

そこにこの仕事である。プロデューサーは果たして空気を読んでいるのかいないのか……いや、まあ、嬉しいよ？ 嬉しいし、気合も入るんだけど……それはそれとして、もうちょっと安定した精神状態の時にこの仕事回してほしかったな、というのが本音である。

さて。見ての通り——と言うか、今回の仕事はいわゆる旅番組だ。

京都の秋の行楽地を軽く観光。旅館に一泊して食レポと温泉ロケ。翌朝、東京の方に帰る……というスケジュールだ。楓さんも超人気アイドル。二日間——というか実質一日と少し程度だけど、これだけ時間捻出してくれたのは非常にありがたい話である。何でも、楓さんが強く希望したとかなんとか。プロデューサー曰く「温泉とお酒に惹かれたんだろうな……」だとか。きつと毎日の仕事で疲れているのだろう。トップアイドルとして大変な立場のはずだし。

ともかく、そんな事情でやってきた京都・天龍寺。綺麗な紅葉を前にして、ボクはやや遅れてやってきた楓さんの着付けが終わるのを待っていた。

「……………」

「貧乏ゆすりすごいな。そんなに高垣さんの仕事、緊張するのかい？」

「そりゃあ、まあ」

「もしかして俺マズった？」

「毎度毎度とんでもないタイミングでとんでもない仕事を持って来やがってとは内心想ってるけどマズってはないよ」

「マズったな」

ははは。

まあ、とは言っても別に怒ってるわけじゃない。確かに内心ちよっ

と複雑な気持ちはあるが、プロデューサーは悪くない。イジるとちよつと面白いから少しそういうフリはするけれど。

それはそれとしてこれはボクの問題だ。できる限り仕事に影響は出ないようにするのも大事なことだろう。

何よりも……楓さんの前で無様を晒すわけにはいかない……！

「何だか最近不調だね。幸い、プライベートだけで仕事にはあまり影響は出てないようだけど」

「まあ……多少はね。麗さんに言われたこと、ずっと気になって。言ったよね、確か」

「ああ。けどなあ。俺としてはちよつと性急な気がするんだよな」

「性急って……何が？」

「ん……ああ……何て言うんだろうな。俺個人はね、すぐにトップアイドルの仲間入り、なんてしなくてもいいと思うんだよ」

「会社的にはそうでもないんじゃないの？」

「いやあ……どうだろうな？」

普通、会社というものは利益を出すために運営されているものだ。当然だけど、経営のためには短期的に利益を出す必要に迫られるということもままある。それを考えれば、できるだけ早く所属アイドルが売れるようになってくれればそれが一番なんじゃないか……とも思えるんだけども。

「346プロも大きい会社だからね。一定の利益が見込めるなら短期的な利益よりも長期的な利益を考えてプロデュースするのがいいだろう、って話をしたんだよ。専務と」

「短期的利益より長期的利益ねえ」

「それに拘り過ぎるとアイドルの寿命を縮める結果になりかねないからね。みんなができるだけ長く活躍できるようにしたい……って感じかな」

「……なるほど」

「まあ、マストレさんたちは成果を出すのが仕事だからね。どうしても早めに成長してほしいっていう思いはあるんじゃないかな」

「プロデューサーは？」

「俺は演^{プロデューサー}出が仕事だから。今の実力を加味した上で長い目で見ていかないかね」

おどけた風にそう言うと、プロデューサーはスケジュール帳を手にとって軽くこちらに向けて振った。

何だろう。こう、変なところでプロデューサー真面目にアドバイスしたりちゃんと大人っぽいこと言うんだよな。いつもの様子が様子だけにちよつと調子狂う。普段からこの調子でいてくれれば……とも一瞬思ったけど、それはそれで息が詰まるな。やっぱこういう真面目なのはたまにでいいや。うん。めんどくさいし。

「高垣さん入りまーす！」

そんなこんなしていると、スタッフさんから声がかかる。どうやら楓さんの着付けも終わったようだ。そちらの方に目を向けると、あさぎ色の着物に身を包む、いつもよりもお淑やかな雰囲気強調された楓さんがこちらに向かっていた。

あつダメだ美しい尊い死ぬ。

「おはようございます。今日はよろしくお願いしますね——氷菓ちゃん？」

「はい!! よろしく願います!!」

「耳がー!」

「あ、ごめん」

どうやら気合を入れすぎてしまったらしい。プロデューサーが思わず耳を押さえていた。

コラテラルダメージというやつだ。それはそれとして申し訳ない。

「ふふ。着物、似合ってるわ」

「そん——」

そんなことないですよ——と言葉を発しかけて、思い出す。そうだ。そういえば幸子さんに「人から褒められたことは素直に受け取るべきですよー」と言われたんだった。相手にも失礼だからって。そうなる……。

「ありがとうございます。楓さんもすごく綺麗ですー！」

「あら、ありがとう。嫌いきらいになられたらどうしようって思ってたの。ふふ」

「そんなこと絶対ないですよ!!」

「そ、そう」

そう返事すると、楓さんはどこか寂しそうな笑みを浮かべた。

……あれ？ ボク何かコミュニケーション間違えた？ あ、あれ？

プロデューサーもなんだか苦笑い浮かべてるし……あれっ？

「気付いてないのか素であれなのか……」

「素、でしようね……」

……プロデューサーと楓さんの間で何の共通認識がなされてるんだ？

ボクか？ 気付いてないって何のことだろう……？

でも楓さんが悲しそうにしているのは看過できないぞ。でもこれボクのせいだろうか。あれ？ どうしようこれ？

「泣きそうになってないか白河さん」

「なってる」

「大丈夫なんですか、根津さん……？」

「……最近情緒不安定で……」

失礼な。情緒不安定って言うならだいたい前から常日頃情緒は不安定だったわ。そもそも情緒というものが存在してない的な意味で。

欠片も自慢にならない！

「ええと……俺から言うのもなんなんですけど、白河さん、かなり高垣さんのことを尊敬しているようなので……良ければ、様子を見ていただけると助かります」

「あら……そうなんですな。ふふ。それじゃあ氷菓ちゃん、お手本を見せるためにもお電話テレフォンの番号を教えとおきましょうか？」

「お願いします！」

拗ねられた。

何がいけなかったのだろう。

@ ——— @

京都と言えば、紗枝さんや周子さんの故郷である。

当然だけどこれまで何度も故郷として特集はされていて、紗枝さん自身による地元紹介や観光地の紹介もちよくちよくしているのだけど、出身地の違うボクらが観光地紹介をするというのもなかなか珍しいことではあると思う。

まあ、ボクはそもそも故郷もなにも東京から出たことは滅多に無いし、あつちの世界が故郷と言うのが一番正確な気もするんだけど。

楓さんは和歌山県出身だから、何度か奈良や京都には訪れてるそうだけど……まあ、それは一旦置いておこう。

今回、ボクは初めての旅番組への出演となる。

こういった番組は、大きな括りとしてはバラエティ番組の一種と言える。つまりボクにとっての鬼門だ。大まかな流れはだいたい理解してはいるけれど、トークはあまり得意じゃないし、どれだけやれる

のかは分からない。

ただ、事前にある程度話し合いをした限り、普段、ボクが楓さんに接するような接し方は良くないとのこと。憧れること自体は悪くないが、憧れ「すぎる」姿を見せるのは自分を低く見せることに繋がりがねない、らしい。まあ、その辺の理屈は分からないでもない。いくら楓さんがアイドルとして優れていると言っても、あまりに「自分の方が下です」と示しすぎると、実力を疑われかねないからだ。

正直、楓さんよりも下に見られるのは順当だろうしそれでいいとも思うんだけど、プロデューサー曰く「勝っている部分まで下に思われかねない」ということで、そこは領いておいた。いったいどこが勝っているのかは分からないが。

「綺麗ですね……」

「ええ、本当に……」

さて、ともかく天龍寺ロケ。ボクたちは曹源池の青と木々の紅葉のコントラストに思わず息を漏らしていた。

遠くに見える嵐山の紅と黄色もまた、この光景のコントラストに更なる色を添えている。

「知っているかしら、氷菓ちゃん。この庭園、実はカエデが有名なの」「楓さん？」

「ふふ、樹の方ね」

「あつ」

変な間違え方をしてしまった。恥ずかしい。

「うふふ。氷菓ちゃんの顔の方が赤くなってる」

「すみません……」

「また謝ってる」

「……ひえっ」

う、うおお……自分のこととはいえ、何度も何度も謝りすぎて謝り慣れてきたというか、とにかく楓さんに対しては失礼なことをしてしまったと思って即謝罪に移ってしまおう。なんだボクは。さつきもちよつとへりくだらずに行くって決めたばかりじゃないか。

せめてもうちよつとちゃんと会話を成立できるようにしないと……。

「謝罪をしすぎる人はお金が出て行っちゃうわよ。散財しゃんざいって、ね？」

「大丈夫です。ボク、あんまりお金は使わない方なので」

「……そうなの？」

「そうなんです」

……あれ？ また会話が止まってしまったぞ。

ボク、散財はしない方だし……仮に使うとしてもアイス買うとかゲーム買うとかその程度だし、別に返答としちゃ間違つてないはずだよな？

プロデューサーもなんだか頭抱えてるし。よく見れば楓さんもやってしまった、というような表情をしている。

んん？

しばらく静かな間が流れる。編集点を作っているのだろう。多分。そうして数秒ほどの間を置いて、楓さんが口を開いた。

「氷菓ちゃんは、こういうところに来たのは初めて？」

「そうですね……こういう庭園は初めてです。楓さんは……何回かありそうですね……」

「そうね。けど、何度来ても飽きないし、感動するわ」

「そうですね……」

そんな風に話を続けると、しばらくして施設の方が案内に来てくれた。

そこから後は、施設を案内されながら、由来だったり成り立ちだったり教わり……という方向性にシフトした。まあ、二人のトークだけで間をもたせるのは難しいよね。普通。料理を食べながらとか、遊んだりしながらというわけでもないんだし……景色は綺麗だし感動はするけど、じゃあ言葉を出せるかと言われるとまた違うというか。まあ、そこで何とか言うのも才能なんだろうけど……難しいものだ。

あと何がいけないってボクも楓さんも口数が多いほうじゃないし。下手すると紅葉が散る中で二人してお茶飲んでのんびりしているだけの映像が出来上がってしまうのでこれでいいのだろう。

さて、それが終わると京都の街の散策だ。

旅番組だし、当然だけど順序というものはある。けども、特定のお店の紹介もして、有名観光地の紹介もして……とう合間合間、それなりに空き時間があるのも確かだった。そこで見つけたお店に入って、そのお店の食べ物などをいただくわけだけれど――。

「あ、楓さん！ アイスあります、アイス！」

「あ、いいですね」

「なんで敬語を？」

「何でかしらウフフ」

普段、担当Pさんと話す時の癖が出てしまったんだろうか。それでもさつきよりはまだ自然な感じで……ちよつと吹っ切れた？ ようにも見えるし、何か折り合いがついたんだろうか。

それともボクが普段見せないちよつと子供っぽい反応をしてしまったから面白かったんだろうか。

「色々あるわね。氷菓ちゃんは何を食べるの？」

「全部です」

「えっ」

「全部ください」

万札をサツと取り出して店員さんに差し出すと、苦笑いを浮かべながら注文したアイスを詰めてくれた。

詰めた箱についてはプロデューサーにそのまま渡してクーラーボックスに入れてもらう。「最近担当外の薫ちゃんとか舞ちゃんにクーラーボックスのプロデューサーさんって認識されてるんだが……」なんてボヤいていたが、ボクと行動を共にしているということはそのうちとだと諦めてもらおう。こればかりはボクのライフワークそのものだ。折角こういう機会なんだから買わなきゃ損だろう。

それはともかく、ボクは購入したなかでも代表して柿というやや珍しいジェラートを。楓さんは京都ということで抹茶を選んで食レポをすることにした。

「味わい深い抹茶ソフトですね。苦味と甘味がちょうどいい感じ。普通、抹茶っていうと甘味が勝っちゃうことが多いですけど、バランスが取れてて……甘いものが苦手な人でも好きな味かと」

「ん、ちゃんと甘い……それにこれ、なんだか柿みたいな食べ心地です。食感も再現してるんですね。でもちゃんとジェラートで……柿特有の渋みが無いぶん、こっちの方が食べやすいかもかもしれません」

「氷菓ちゃん、それ、ちよつといただいてもいいかしら？」

「はい、どうぞ」

「それじゃあ、私のものも……ん、美味しい。思わずかきこみたくなる味ですね」

「ふあ、抹茶……風味がすごいですね。すっごい美味しい……」

十分ほどアイスを堪能——していると、その内に少しずつ野次馬も大勢集まってくる。流石にそろそろ身動きができなくなるかな、どうかな……という絶妙なところで、スタッフさんがそろそろ次の場所へ向かうよう催促を向けた。流石、楓さんがいるとなるとこうもなるか。

その後は、やはり京都ということで神社や寺、パワースポットなどを巡り、それぞれで詳しい説明を受けながら観光と相成った。

いずれに關しても、そこそこ程度にはこなせたと思うけど……さて、どうだろう。

ともかく、あとは旅館に行つて温泉、食レポ、宿泊のみ……と。

個人的にはお風呂に入るなら食事の後が望ましいのだけど、こればかりは仕方がない。スタッフさんが入場できる時間も限られているからだ。一般のお客さんに迷惑をかけるわけにはいかないというのは道理だろう。

とはいえ。

「……う、薄いわね」

「これでも改善はしてるんです」

この鶏がらぼでーを楓さんに晒すことになつたのはある意味で一番の失策である。

当然と言えば当然だが、なんだかものすごい表情で見られてしまった。しかしだ。一応これでもつい先日33kgまで到達したのだ。確かに楓さんに心配されるのはちよつと嬉しいけれども、流石にこう、直接的に薄いと言われるとちよつとショックでもある。

でも楓さんもそこまで体重は重くない、というかむしろ軽い方だ。171cmに対して49kgつて、ボクと比べると重いつてだけで割と相当ではないだろうか。というかBMIで言えばどっこいどっこいのような……。いや、まあいいや。

ともかく、スタッフさんからの同情の視線やら、ボクと楓さんの身長差を見て親子を見るような生暖かい視線やらを潜り抜けつつ、なんとかお風呂レポを終えてしばらく。

京野菜がふんだんに使用された秋のお食事に舌鼓を打ち、きつちりと今日の仕事を終えることのできたボクは、楓さんと一緒に宛がわれた部屋でくつろいでいた。

さっきの食事で少し日本酒を呑んだためか、楓さんの頬にはどこと

なく朱が差しているように見える。肌が白いせいかな浮き彫りになってしまふのだろう。多分、将来飲酒するようなことがあれば、ボクも同じようになってしまうだろうことは想像に難くない。

後でもう一度お風呂に入る予定ではあるけど……とりあえず、今は晩酌にお付き合いしながら適度にアイス食べたりデザートを食べたり。昼間の忙しさが嘘のようにのんびりとしている。

そんな中、楓さんが外を眺めながら、ふとした拍子に口を開いた。

「カエデがよく見えるわね」

「え？ ええ、そうですね」

つられて外を見れば、カエデ——樹木の方——がライトアップされ、夜景の中に強い紅が映る。

旅館から見ても、それはやっぱりため息が出てしまうほどに鮮烈で、美しい。

昼間と同じように感慨に耽りながら、アイスを口に運ぶ。果たして、ボクはこの美麗さの中で負けてしまわない程度には、立ち回れたのだろうか……？

「氷菓ちゃん。紅葉は散る前の一時期だけ見られるものだって、知ってる？」

「ええ、それは、そうですね」

と、唐突にそんなことを聞いてくる楓さん。ボクは軽く頷いて答えるが、その意図するところはよくわからない。

「私も楓^{カエデ}、だけど。今、赤く熟している時を超えたら——いずれ、散つて落ちる時が来るのかもしれないわ」

「……え、と。え……？」

それは、まあ、そう、だろう——けど。

でも、楓さんはなんだかんだで歌手・女優としてもこの先活躍できる道はある、はずだ。

けれども。

その時、ボクは恐らく初めて「楓さんが芸能活動から脱落する」という可能性について、思いを巡らせた。

そうして気付く。楓さんはボクにとって憧れで、目標で、尊敬する人なんだけど……その実力が衰えるとか、誰か他の人に抜かれてしまふとか、そういう可能性を一分たりとも考えたことがなかったということに。

偶像……とは違うが、偶像化。あるいは神格化だ。半年をかけて、あるいはあの日、緊張しすぎてたボクを気にかけてくれたその瞬間に、ボクは楓さんを「不変のもの」として捉えていたフシがある。

変わらない。衰えない。揺るがない。いつまでも君臨し続ける。そんな思いをもっていたのは、多分、間違いない。

そのことに気付いて僅かなショックを受けるボクの表情に気付いたのか、楓さんは軽く笑みを作って、続ける。

「氷菓ちゃん。私も、普通の人間なの」

普通の人間。

それは間違いなくその通りであり、同時に——ボクが視界から遠ざけ続けてきた事実だ。

「時々失敗もしちゃうし、ファンの人に嫌われたりしないかなって不安になるし、嫉妬だつてするし、ダジャレだつて言いたくなる」

「……はい」

「尊敬してくれるのは、すごく嬉しいの。けれど、それに拘りすぎちゃあダメよ?」

理解している。理解して、くれている。

仕事の中で付き合いを持ったのは、前のライブの時が初めてで——

あの時はあの時で、ちゃんと話す時間なんて無かった。

実質的には今日が初めて、つてことになる。ほんの十二時間程度、けれどもその十二時間程度のこと、楓さんはボクの性根の歪みを見抜いていてくれたのか。

じんわりと胸の中に暖かいものが湧き出すのが分かる。その感覚にほんの少しの戸惑いを覚えていると、楓さんは自身の荷物の中から何か、CDを一枚取り出した。

「この前出た氷菓ちゃんのソロシングル、買ったわ」

「えっ。あ、ありがとうございます！」

「聞いてて分かるけれど、氷菓ちゃん、技術だけならもう私に引けを取らないものがあるのよ。これから先もアイドルを続けていけば、私も超えていけちゃうかもしれない」

「そんなことは……」

「ない、なんて言っちゃダメよ。それは、上限を『高垣楓』に定めるだけで、自分の才能に蓋をすることに繋がっちゃうから」

「え——」

そう言うと、楓さんはボクの手を取って自身の方へと引き寄せて来た。

お酒を飲んだ後の特有の香りと、高い体温を感じる。

それは、紛れもなく人間にしかありえないものだ。

ほんのちよつと緊張しているのか、心音がやや早い。

「こんなに小さな体でダンスも歌も計算も、何でもとても上手でしよう？ きつと将来もつと活躍できる。もうちよつと自分を信じてみて。ね？」

その言葉は——尊敬している人だからこそ、か。それとも、ボクの身勝手に神格化していた人だからこそ、か……いつもよりもずっとすんなりと、心の奥に染み渡った。

やんわりと抱き留められた体が暖かい。目元にも、ほんの少し熱さを感じる。

「……ありがとうございます」

「ふふっ……これからは、自己評価をもう少し強化ひようかしてね？」

「……それ、ダジャレですか？」

「！ ふふふ、そう！」

残念なことに、と言うべきか。楓さんの今日一番の笑顔は、ボクが楓さんのダジャレを見抜いたその瞬間だった。

それ以外も色々とやってたし、気も遣ってたつもりんだけど……ダジャレを見抜いた瞬間にも劣るのか、それらは。

……でも、いつか。楓さんのとびきりの笑顔が見られたんだし、それで。

——翌日朝の収録は、前日よりも遥かに良い調子で臨むことができた。

@ —— @

「ただいまー」

「おお、おかえりー……その荷物、どうしたんだい？」

「お土産」

京都への旅行兼収録を終えたその翌日の夜、ボクはあおぞら園に戻ってきていた。お土産を配るためだ。

元々、過去何度も海外に渡航した経験はあるが、それに関しては……まあ、当時の年齢的にも金銭事情的にも色々ノーカーンとして。ともかく長距離の旅行から戻って来て初めてのお土産である。当然、色々気合を入れて買ってきた。

「お土産!?! 氷菓ちゃん、どこに行ってきたの!?! というかお姉ちゃんに報告は!?!」

「いや収録だし。別に言うことじゃないでしょ。京都だよ」

「京都かあ……ってことはやっぱり?」

「うん、まあ。生八つ橋」

「おおーいいね!」

とりあえずみんなで食べてよ、と数箱をお姉ちゃんに渡して、園の子供たちに持って行ってもらおう。その間にボクは先生の方にお土産だ。

「で、こつちが先生用にお酒。飲んでたよね、お酒?」

「ん? おお、純米か! いいものを買ってきたなあ……ありがとう
氷菓。古宮やみんなと一杯やらせてもらおうよ」

「ん。あ、でもおじじの分別に買ってるけど」

「構わんさ。何を買ったか知らんがワシがこつちを貰ったのを自慢してやろうフッフ」

先生もおじじも、お互い気兼ねない仲なせいか基本的にコミュニケーションが殴り合いが殴り合いじみてるんだよね。いや、まあ、仲が良い分には何でもいいと思うけど……。

最終的には自慢合戦になっちゃうかもしれないけど、まあ、煽りすぎて殴り合いになったりしない内に止めておこう。

「で、どうだった? 楽しかったかい?」

「ん……って言っても仕事だったけど。うん。楽しかった。それに、色々……うん。色々あった」

「そうか。それは良かった」

ボクの表情と声音で何があったのかをある程度察したのか、先生は穏やかな笑みを浮かべて頷いた。

まったく、こういう時言わなくてもだいたい分かるっていうのは何とも困りものだ。

いいんだけどさ。これも、家族の繋がりがりっぽくてそれはそれで嬉しいし。

それはそれとして看破されるのは恥ずかしい。

「で、いつ放送？」

「再来週くらいじゃないかな。秋の行楽地特集で行ってるから近いうちには言ってたし……」

「再来週か。番組名は？」

「えーつと……」

先生がレコーダーの電源を入れると共に、テレビの電源も連動して入れられた。

それと同時にニュース番組が映し出される。どうやら最近よくあるタイプのバラエティ系のニュースらしく、芸能人の特集を組んで放送しているようだった。

その内容は――。

「……は？」

48：覆水盆に返さず

専務は激怒した。必ずやかの厚顔無恥なマスメディアを除かねばならぬと決意した。

専務は政治が分かる。専務は、大企業346プロダクションの専務である。経営の舵を取り、(最近は)アイドルを想って暮らしていた。それ故人一倍メディアの流れに敏感であった。

……ということがあったかどうかは定かではないが、ボクは専務室の応接用の椅子に座って専務さんの様子を見ていた。

「——ですから先程から申し上げております通り、この番組内容で当社の白河を出演させるわけにはいかないのです。こちらとしても経営と売り出しの戦略がございまして……」

言葉そのものは丁寧だが、強い怒気を感じるその声音。ボクに向けられているものじゃないと知ってはいても、怖い怖い。

電話先は、外部の制作会社。丁寧な言葉遣いになるのも、怒りを向けるのもある意味では当然だ。

数分ほどで、電話は終了した。専務の口から深く深くため息が漏れる。

「すまないな、呼びつけておいて醜態を見せた」

「い、いえ、ボクの代わりに対応して下さっているのですし……」

さて。

何故急にこんなにも専務さんが怒っているのか、それは昨夜のことに遡る。

近年、ニュースがバラエティ化していることが多々ある。

堅苦しいだけのニュース番組じゃなく、もっとグルメ情報や最近の関心事なども取り扱うことで視聴者層の拡大を狙ったのだろう。実際、それで視聴者は楽しめているようだし、需要もある。テレビ局や

広告屋としても、特集を組むことである程度流行を操作できるわけだし、こういう傾向は願ったり叶ったりだろうと思う。

そうした一方で某公共放送などは、普通に硬いニュース番組などもやってるわけだけど……そこはまあ、需要の違いと思つて置いていい。

ともあれ、そういうニュース番組での話である。

昨晚のこと。先生が録画予約のためにテレビの電源を点けたところ、そういつたニュース番組が映つたのだ。

内容は——「今注目の新人アイドル、白河水菓の過去に迫る」だ。一応言つておくとこれ、ボクは特に出演していない。

まず最初に放送されたのは、サマーフェスの映像。これに関しては既にディスク化しているので放送されても、まあ、仕方ない部分はある。何らかの形で346プロ側が出した許可を拡大解釈して使用したものだとか、別件で出した許可を流用したものだとか、色々と裏はあるようだけど。

あおぞら園の外観が放送されたのも……まあ、一応は公的な施設でもある。腹立たしくはあるが仕方ない。

けれどもその先が問題だった。あおぞら園の住所から元通つていた学校を割り出され、中学一年の頃のクラスメイトへのインタビューを敢行。根掘り葉掘りボクのことを聞いて回つたようで、その時点でボクがどういう境遇だったかを知られてしまった。

その後は、あおぞら園をバックに劇団員と思しき……少なくともボクにとっては面識のない「近隣住人」だとか「職員」だとかの表示のもと、ボクの過去のことを好き勝手に語られてしまった。

……で、この専務のキレっぷりである。

この件でボクが孤児……というか、まあ、捨て子だということは完全にバレてしまったわけで。

もしかすると、以前危惧してた「二匹目のドジョウを狙つてあおぞら園の子を強引にスカウトする」ということが現実になりかねないということでもあるわけ。

既にネットには色々と情報が出回っている。最悪だ。

けれども専務さんがこうして対応してくれてるのだし……正直、今回はそこまで怒りは強くない。

「何でいきなりこんなことになったんでしよう……」

「局側に狙いがあると見た。まったく……これだからあちらに主導権を渡したくないと言うのに……」

「どういうことですか?」

「そうだな……我々346プロの経営陣とは違う目的で、テレビ局がアイドルを……『プロデュース』したいという狙いだな」

と、不愉快げに深く椅子に座り直し、専務は続ける。

「現代社会において流行を作り出しているのはテレビ番組と言っても過言ではない。それは分かるだろうが……芸能人の人気に関しても似たようなことが言える。『こういう子だ』と紹介することで、視聴者にその人物の印象を強く残すことができるからだ」

「例えば、みくさんを『猫キャラです』とか……ですか?」

「そうだな。前川がそういうキャラであると紹介すれば視聴者も『そんなのか』と納得するだろう。それと同じことを今回はされてしまった。白河に『可哀想な孤児』というキャラクターを与えてしまった」

全く腹立たしい、と専務は眉間に皺を寄せた。心なしか腹痛に耐えているような表情にも見える。やはり昨日からずっとストレスを抱え続けているのだろうか。

個人的にも、そういうキャラクター性は御免被りたいが……そういう個人的な思い以上に、専務さんも経営者として何か思うところは確実にあるはずだ。

「あれも短期的に見れば確かに有効だ。薄幸の美少女という存在にはファンが付きやすく、同情票も得やすい。自社のドラマの適切な役柄

などに起用すれば、視聴率アップも狙えるだろう。だが長期的に見れば不利になる」

「あくまで『同情』だから、ですね」

「ああ……そうするに値しない、そうする必要が無いと思われれば、ここで同情票は消える。それでも根っからのファンというものは残るだろうが……言ってしまうえばドーピングのようなものだ。一時的にファンは増えるが、何かの拍子にがくりと人気が落ち込みかねない……」

それ以外にも……演者としての役柄の幅が減るし、作詞・作曲に関しても表現の幅が狭まりかねない。長期的視野で見て、成長と共にアイドルとして円熟させていく過程を見せていく……というプロデューサー方針を上げていたプロデューサーや専務さんとしては、痛恨の極みと言っているだろう。もともと、それを承知で売り込んでいくという手もあるんだけど……とにかく広い視野を持って、幅広い分野で活躍していく、というスターライトプロジェクトの趣旨とは反するだろう。

なんというか今後の売り出し方針やら諸々の関係各所にクリティカルクルセイド。専務もマジギレである。

「星は空で輝くからこそ迷い人を導くことができる……それを地に落とし、消耗品に貶めるなど愚の骨頂だ……!」

「詩的な言い回しですね」

「キミの周囲で何か変わったことは無かったか？」

「親戚が三桁増えましたね。自称ですけど」

「……そうだろうな……」

そもそも言えば、血縁上ボクの名前は別に「白河」じゃない。あくまで戸籍上の名前をそういう風に登録しただけだ。名付け親も先生だし。

そんなボクに「白河」という親戚は勿論存在しないし、そもそも認

める気も無い。あと何人が引き取り先として手を挙げた人がいるよ
うだが、そんなこと知ったこっちゃない。今更出てきて親と認める人
なんているわけないだろう。もう14だぞぼかあ。

「先生……えと。園長先生には、可能な限りノーコメントを貫くよう
には言っております。園の子たちにも、できるだけ報道関係者には近
寄らないように……と、口止めも」

「すまない。先に私が伝えておくべきだったな」

「いえ、ボクの方が近くにいましたので……」

「今後の対応についてはしばらく協議する。なにぶん真実であるだけ
にタチが悪い。関係各所にはこれ以上の報道・特集を行わないよう差
し止めを行っているが……ゴシップ誌がどう来るかがまだ読めない。
できるだけ外出は控えるように。学校も……可能なら休んでほしい」

「はい。まあ、成績は大丈夫ですので、問題無いです」

「そこに関しては心配する必要すら無いだろう」

一日か二日か、もうちよつとか……何にしろ大して問題が無いのは
その通りだ。その気になれば別に今から大学受験しても特に問題無
く合格くらいはできる。

でもまあ、世間体もあるしそう長くは休むわけにもいかない。なに
より、あまり長く長く休養を取っているとそれはそれでマスコミから突き
上げを食らいかねないことだろう。

ともあれ、今週中が勝負ってところかな。

「それじゃあ、失礼します」

「うむ。気をつけなさい」

専務さんの心配を耳にしながら、ボクは専務室から出た。

続いて、今度はスターライトプロジェクトのプロジェクトルームに
向かう。こっちではプロデューサーとの話し合いだ。気は重いが、や
らなければならぬことには変わらない。

プロジェクトルームの扉を開いてそつと中を覗き込む。
晶葉が（、？、）↑こんな顔してキレていた。

「あのテレビ局爆破してやろうか」

「爆破しちゃダメだよ!」

「は？ 個人の勝手だろう……」

「法律ウ!!」

大変だ。こういう時普段冷静なはずの晶葉が一番キレてる。

聖ちゃんのみちるさんもいるようだけど抑えきれてない。いや、そもそも混乱でそれどころじゃないのか。

「ええい止めてくれるな氷菓！ それにちよつと爆破した程度で人が死ぬものか!」

「死ぬわ!」

もしかして一度「あつち」行つたせいでちよつと人の可能性に大きな期待でもしちやつたのだろうか。

実際団長さんやそれ以外の団員の皆さんなら少々の爆発で死ぬことは無いだろうけど、こつちの世界の人間はあつちの世界ほど強くない。よつぽどじゃないと死ぬよ、普通。

「大丈夫……?」

「ん、うん。ボクは別に大したこと無くって……」

「けど……秘密にしたの、バレちゃって……」

「うん、まあ、それはね」

一緒に部屋に待機していたのだろう聖ちゃんに不安げな視線を向けられたが、今は一応大丈夫ということにしておく。

実際のところはと言うと、まあ、不安は不安だ。けどそれを口にしたって状況が変わるわけじゃないし、頼りになる大人の人たちも動い

てくれている。ボクが下手に動けば邪魔になりかねないというのが実情だ。

「でも、氷菓ちゃん冷静ですね？」

「多少はね。周りがこれだけ怒ってる人ばかりだと逆に冷静になってくるよ……」

晶葉もそうだし専務さんもそう。プロデューサーも実はそうだ。というか、下手すると一番キレてるのプロデューサーかもしれない。元々、そこそこ感情的な人だ。衝動的にやってしまったのだろう。思わずとといった様子で壁を蹴っていた。直後に足首を痛めたらしくうずくまってもいたが。何やってんだあの人は。

「というか、自分のことだろうに何故冷静でいられるんだ？」

「ホントのことだからかなあ。嘘言って貶けなそうって言うんならボクだって怒るし東京湾に沈ちんするけど」

「今何て？」

「少なくとも今回の件、ボクに身寄りがないことと施設出身ってことは事実なんだよね。確かに後々のデメリットは大きくなるけど、知名度は上がるわけだし……商業的な意図があるにしても、怒るだけってというのは違うかなって」

「しかしデメリットがあるのは確かなのだろう。それもかなり大きな」

「うん。それを解消できる手段があるならそれが一番なんだけど」

でもそう簡単に見つからないというのが実情で、どうにもこうにもフラストレーションが溜まる。

まったく厄介な話だ。最悪、このまま行っても問題無いと言えば無いんだけど——それはそれで損ばっかりだしなあ。やられてばかりなのも癪だ。

爆破じゃないけど、何かしらやり返したいのも事実。さて、何があ

るだろうか。相手も相手で大きなテレビ局だから、関係各所にも迷惑がかかる。経済的打撃を与えるのはマズい。かと言って物理的なそれは論外。精神的ダメージを与えるのは……間接的かつ婉曲すぎる。オマケに大して意味があるとも思えない。却下。

できるだけ物理的・経済的にお互いがダメージを受けず、かつデメリットを可能な限り解消してメリットを享受できる状況に持ち込むのがいいか。だとしてその方法は……という話でもあるんだが。

「だーめだ。何にも思いつかない」

「ダメなんだ……」

「……なんとかする方法はこつちでも考えてみよう。氷菓は……しばらく学校にも出られんのだったか」

「とりあえずパンを食べましょう！ 糖分を摂ると違うかもしれないよっ！」

「自分が食べたいだけじゃないのか」

「まあ、でも一理あるよ。それならボクコーヒー淹れてくるから……みんな、砂糖とミルクどうする？」

「マシマシで」

「ちよつとずつ……かな……」

「あたしはカフェオレで！」

その後は、みちるさんの持つて来ていたメロンパンやクリームパンをみんなで一緒に食べた。

糖分はそこそこ補給されたけど、そこまで良い考えは浮かばなかった。

@ ——— @

結局特に何も思い浮かばないまま一日が過ぎた。

模倣と解析ばかりでできる割に創造性に欠けるから、こういうアイデア考えるの本当に苦手なんだ。きっかけさえあればなんとかと

は思うけど、そのきつかけがなかなか無い。刺激が無いんだからしようがないとも言える。試しにちよつと開祖様経由で団長さんたちにも相談してみたんだけど、あつちの人たちはそもそも親がいないとか友達が死んだとかそういうことが普通のことすぎてあんまりピンと来てないみたいだった。そりやそうだろうな。

で、専務さんに言われた通り部屋で待機してるんだけど……どうしよう。久しぶりに一日やるのが無いせいか、ひどく暇だ。ゲームのタイムアタックもだんだんドウエドウエ言い始めて記録更新以外することも無くなつたし、本は一回読めばもう頭に入ってしまう。宿題は特に無いし、勉強は……何するかって問題もあるし。

となると必然的に何かしらやって気を紛らわすことになるのだけど、ゲーム、料理、漫画、映画……と、まあ、やるにしても限度はあるというものだ。

さて。学校を休んでしまったボクだけど、実を言えば今は一人じゃない。というのも、寮生でありながら学生じゃないという人が、寮に二人もいるからだ。

しゅがはさんとイヴさん（+ブリッツェン）である。

「がつつり濃ゆめの二人が残ったな……」

「誉め言葉として受け取つとくゾ☆」

「あ、氷菓ちゃんおかわりいただけますか？」

「イヴさんもイヴさんでだいぶマイペースだよね」

いやいいけどさ。

隣を見れば、ブリッツェンも一緒になってこっちにラーメン丼を差し出してきている。大盛りね。はいはい。

「あいすちゃん、ぶりっちゃんさあ……塩辛いもの食べて大丈夫なん？」

「……何か問題あったっけ？」

「……せやな☆」

「ブリッツェンは大丈夫ですよ〜?」

「大丈夫だつて」

「何で……?」

何でと言われても……………何でだろうね。

でもいちいち気にしててもしょうがないし、特に問題無いならいいかなつて。ブリッツェンもイヴさんのバックダンサーやったりCMに出たりして、ちゃんと仕事の手伝いもするし、仲間と言って間違いない存在なんだし……言いすぎるのも野暮つてもんだよ。多分。

ちよつとワケわかんないことについては否定しようがない。

「何かいいアイディア無いかなあ」

「要は不幸に思われたくないんっしょ? だったら今までよりもどつぱーん☆ とハデな役柄演じたりするのもいいと思う☆」

「回ってくると思う?」

「無さそうですねえ」

そもそもそういう役のオファーが無い。加えて今ライブなどでそういう風に見せかけようとしても痛々しく見えるだけだ。

見た目エ……。

「いっそ豪遊してやろうか」

「何をするんですか〜?」

「……………お、お肉食べるし」

「あいすちゃん贅沢の基準低すぎっぞ☆」

「ま、松坂牛とか、食べるし」

「お腹くだしませんか〜?」

「くだすかも」

「弱すぎる」

弱いって言うな。

でも実際今は弱いので受け入れる他無い。悲しい話だ。

しかしこの「実際弱い」を脱却してしまうと、今回の件で得られる……というか、得て「しまう」ファン層の理想からは外れてしまう。勿論ファンが増えるのは喜ばしいことだけど、それがまた厄介なのが今回の問題である。イメージ通りの人じゃないので失望しましたファン辞めますというやつだ。

なので、初期段階でイメージを修正していきたい。しかしその手段が……って、堂々巡りだな。

「イヴさ……しゅがはさんの贅沢の基準って何なのさ」

「何で私スルーされたんですかあ〜!」

「いーちゃんの贅沢も似たり寄ったりだろ☆」

「そんなことないですう〜! 私ももつと……こう……スキヤキとか、ケーキとか、食べますよお」

「大差ないよ……」

「え〜」

「はあとはお洋服買ってすういーつ買ってエステも行ってー、それから嫁入り道具とか買っちゃう☆ キャツ言っちゃった☆」

「(予定はどこに?)」

「ないです」

でしようね。

あつてもらつても反応に困るし、誰とだよという点も追及せざるを得ない。

そもそもそんな暇があつたのだろうか。あつたかもしれない。アイドルになる前の数年間とか。いやでも、しゅがはさんのストイックさを考えるとありえないか……。

さて、と気を取り直してイヴさんが口を開く。

「氷菓ちゃんは、あんまり不幸だつて思われたくないですよね〜?」
「まあそういうことになるかな」

「って言ってもねー。やっぱ孤児って聞くと不幸な生い立ちっていうのが結び付いちやうと思うゾ☆」
「だよねー」

いや分かってるんだ。だからできるだけ品行方正……とまではい
かなくとも、最低限問題は起こさないように努力しているし、言動も
丁寧になるようにはしている。というのはやっぱり、施設出身者が色
眼鏡で見られやすいからこそその対策ではあるのだけど……。

……まあ、どうしてたつて大前提が大前提だけに、そういう目で見
られるのは避けられないのだが。

「プレゼントを渡せば幸せに……っていう話でもないですからねえく
……」

「いやまあ幸せは幸せだけどね」

「そういう問題じゃないだろ☆」

「やっぱ親がいないってのがネックか……」

親代わり、家族代わりというならまあ、いる。先生や施設の下の子
たちがそうだ。

でも世の中の人はそれじゃ納得しない。本物じゃないからだ。

「本当の家族がいなきや納得しないって言うなら、結婚でもしなきや
無理じゃないかなコレ」

「相手はー？」

「いてたまりますかって」

「んでも、家族作る方法なら他にあるじゃん？」

「……んんん？」

@ ————— @

それから、数日。

専務の手により色々規制が敷かれ、関係各所でも色々妄想じみた憶測が語られるようになったような頃、ボクはとある報道番組に出演することとなった。

各所に手を回して余計なことを言わず、聞かず……ということを「せず」、真正面から受けて立つ形である。

ボクがトークが苦手ということは織り込み済みだ。だから、事前にある程度の質問は想定した上で、だけど。

——春にデビューした新人アイドルの中では、大きな注目株と言われているですね。何でもドラマの主演のオファーが入っているとか。

「ありがとうございます。主演の話は今聞いたので後ほどプロデューサーの方に確認を取らせていただきますが……それだけ期待されると思うと、ちよつとプレッシャーですね」

始めは、ジャブのような軽い受け答え。メインの質問に行きつくまでは、当たり障りのない質問でお茶を濁す。

それも含め、まずは適切な回答で受け流す。あちらとしても、これが捨て質問であることくらいは分かっている。期待された程度の答えを、必要十分程度に。それで視聴者は満足するはずだ。

——今後、どういうアイドルになりたいですか？

「同じプロダクションの、高垣楓さんを目標に……楓さんを超えられるようなアイドルになれば、と思います」

これは本心。あちらも少し驚いているように見えるが……楓さんは押しも押されぬトップアイドルだ。テレビ局的には、ボクみたいな線の細い人間が対抗心マシマシで話していることに違和感がある、というところか。

けど、これはちゃんと楓さんと話した上でこの結論を出している。できると言ってくれた以上は、やってみせる。

大きく出ましたね、というインタビュアーへ軽く返して次の質問を

待つ。

続いての質問もまた、当たり前障りが無い。互いの腹を探り合うような奇妙な緊張感が漂う。

そんなやり取りがしばらく続いた後、意を決したようにインタビュアーがこちらに問いかけた。

——先日、児童養護施設に保護された児童だったと報道がありました。ご両親が恋しくなったりはしませんか？

「特にはありません」

はつきりと否定する。インタビュアーの驚く顔を他所に、続けて告げる。

「育ての親がいるんです。昔から外国の美術館や史跡に連れて行ってもらったりしていたので、あまり寂しさは感じませんでした。今はその人の養子に入ってるんですけど、今ではすっかり本当のお父さんという感じで……」

照れりてれり。

……という風を装う。実際ちよつと気恥ずかしいところはあるが。ここしばらく、ボクは比較的暇があるしゆがはさんやイヴさんと一緒に、養子縁組について調べていた。

親がいないことが不幸に思われることの始まりと言うのなら、親がいればいいじゃない——ということだ。力技にもほどがあるけれども、「親がいなくて不幸だと思われたいようにする」「元のイメージを損なわないようにする」「テレビ局側の思惑を外しつつ利益だけ受け取る」という三つの課題を同時に解決するには、このくらいの力技の方が手っ取り早い。

かと言って、勿論適当な相手と養子縁組するわけにはいかない。なので、親交が深く、かつボクの事情について詳しい上に元から打診はしていたおじじに頼み、養親になってもらったのだった。

別に嘘は言っていない。(贋作の製造のために)美術館に連れてつてもらったし、(錬金術の完成のために)各地の史跡を巡ったし、事実上育ての親みたいなものである。

実際に養子縁組をしたのはほんの二、三日前くらいの話なんだけど、いつ手続したかとか家裁から許可が出たかなんてのは口にしないでいい話だ。それで視聴者が何年も前に養子になってたと勘違いしても、それは仕方のないことだ。うん。

で、オマケに、と言っちゃなんだけど……そういう勘違いをさせることで、施設にいる間にアイドルとしてスカウトを受けたという事実も隠蔽できる。あおぞら園に限らず、施設周辺でのアイドルのスカウトの頻度も減らすことができるだろう。

……当然だけど、この件についてはプロジェクトのみんなやプロデューサー、専務さんなどの346プロ関係者にはだいたい伝えて許可も出ている。流星にこんな重要なことを誰にも伝えることなく行動するわけにはいかない。

ところで専務さんにこの件を提案したら「私がやろうか」と提案してきたが、流星に冗談だと思いたい。

とまあそんなわけで、今のボクは白河水菓改め古宮氷菓である。芸名はそのままだけど。

おじじたちが陸おかに上がってカタギ商売始めてくれてて本当に助かった。

「これからもっと活躍して、お父さんを安心させられればな、って思います」

……この発言の後、おじじのどこの従業員どもが泣き崩れたのは秘密だ。

さて、ともあれそんな感じでインタビューも終わったのがちよつと前。

描いていたであろう青写真から微妙に外れたことを言って、テレビ局側に微妙な表情をさせることに成功して事務所に帰ってきたボクは、プロジェクトルームに戻って一息ついていた。

「疲れた」

「お疲れ様です」

机にぐでーっと倒れて溶けていると、クラリスさん（聖）が上からボクの方を覗き込んだ。

軽くひらりと手を振って応えると、くすりと小さな笑い声が落ちてくる。

「ふふふ。園の先生方も『やつとか』と安心していらつしやいましたよ」

「やつとも何も、こんなことが起きなきやそうする気は無かったんだけど……」

「そうですか？ 以前から親子のようでしたが」

「そう言ってくれるのはちよつと嬉しいけどさ」

なお、おじじは大喜びだった。

とはいえ、前の——ちよつと後ろ暗い海運業をしていた頃のことを思い返して、ちよつと躊躇してる風ではあったんだけども。けどそこは押し切った。ボク個人も、まあ、「親」として考えるならおじじかなって。

先生も紛れもなく親だけど、あつちは何て言うんだろう。施設の子たちみんなの先生だから色々違うというか。

「クラリスさんも手伝ってくれてありがとう」

「いいえ。為すべきことをなただけですわ」

「でもありがと。多分ボクら……っていかしゆがはさんとイヴさんだけだったらちよつと空回ってたかもだから」

「ですので、為すべきことをなしただけ、と」

なるほど。二人のフォローに入るのも「為すべきこと」か。さりげなくてカッコいいことを言ってくれる。

まあ、しゆがはさんはあ見えてかなり真面目で誠実な人だから、問題は特に無かったんだけども。どちらかと言うと、こういうことになるとちよつと空回るイヴさんのフォローをしてくれたのが大きいかな。そもそも日本の法律とか制度上のことを知ってるかちよつと怪しいし……。

「これでやつと明日からいつも通りに戻るよ……」

「お仕事の方も溜まってるとお聞きしましたが」

「オマケにボクに言ってる映画だかドラマだかの企画が進行してるっぽい」

「良かった……と言ってるいいんですか？」

「まず先に伝えてくれないと」

激務なのは分かるし、この件が失敗して一旦局側の思惑に乗るハメになった場合に、頓挫するという可能性もあっただろうから……：確実じゃないことはまだ伝えないって意味はあつたかもだけど。

もしこれで疲れてて伝えられなかったってことになってたら、プロデューサーはホントどこか体おかしくするんじゃないかとすら思うよぼかあ。

「でも、まあ、とりあえず一安心ではあるかな」

それでも、この先の展望が開け始めたのは喜ばしいことだ。

直近のイベントとしては……：ハロウィンがあるか。346プロの性質上イベントのタイミグで何もしないってことはまず無いだろうし……：そろそろライブもやってくれるはず。

とりあえずは、この先の仕事も楽しんでやっっていこう。

……ところで、あっちの方に用意されてる、ハロウィンで使うの
だろうコスプレ衣装の中に紛れ込んでどっかで見た改造シスター服
やら軍服は……。

いや、よそう。ボクの勝手な想像で今後を語るのはいくはない。いく
ら何でもそんな簡単にボクの予想が当たるわけないさ。はははは。

番外：ろく☆ちゃんねる抜粋（6）

《ととぎら学園 臨海学校SP 実況スレ》

- 1 会員番号774番 20XX/XX/XX
本日のゲスト ID:***
 - うめ組のおともだち（スターライトプロジェクト）
 - 3 会員番号774番 20XX/XX/XX
とうとう来たか ID:***
 - 7 会員番号774番 20XX/XX/XX
何でうめ組？ ID:***
 - 9 会員番号774番 20XX/XX/XX
>>>7 ID:***
 - うめぼし（星）じゃねーのスターライトだけに
 - 12 会員番号774番 20XX/XX/XX
命名楓さん説 ID:***
 - 17 会員番号774番 20XX/XX/XX
楽しみだ ID:***
 - 20 会員番号774番 20XX/XX/XX
* ID:***
 - 海！水着！アイドル！
夏は最高だな!!
 - 24 会員番号774番 20XX/XX/XX
* ID:***
 - 最高（気温更新）だな
 - 27 会員番号774番 20XX/XX/XX
* ID:***
- 熱中症にならないといいね…

* 28 会員番号774番 20XX/XX/XX

* 小さい子多いから心配だよね
仁奈ちゃんとか薫ちゃんとか……
30 会員番号774番 20XX/XX/XX

* こずえちゃんとかよしのんとか……
35 会員番号774番 20XX/XX/XX

* ナチュラルに16歳を混ぜるんじゃない
38 会員番号774番 20XX/XX/XX

* でも14歳のひよーかちゃんは多分ヤバイよ？
39 会員番号774番 20XX/XX/XX

* 16歳の加蓮ちゃんは多分ヤバイよ？
43 会員番号774番 20XX/XX/XX

* 例外を持ち出すのはやめルルオ
56 会員番号774番 20XX/XX/XX

* また
57 会員番号774番 20XX/XX/XX

* 始まった
59 会員番号774番 20XX/XX/XX

* キグルミ……
66 会員番号774番 20XX/XX/XX

* この猛暑で着ぐるみて
ID:***

* 68 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 水着じゃないの!?

* 71 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* オイ水着はどうした!?!着ぐるみってどういうことだ!?

* 74 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 幼女(ジュニアアイドル)に何を期待してるんですかねえ……

* 75 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* おまわりさんこいつらです

* 78 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 着ぐるみ可愛いやろ!

* 79 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* ああそうだな

* 肌の露出部分がエロいよな

* 83 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* そうだよね g f f …

* 90 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 早苗さん「呼ばれた気がした」

* 92 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* ヒッ

* 93 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***

* 逃げるんだあ……勝てるわけがないYO

* 9 6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* お前ら早苗さんを何だと思ってんだ!

* 9 9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* 処刑人

* 1 0 1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* 世紀末救世主

* 1 0 5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* 無敵のスタープラチナ

* 1 1 1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* 正しいような気もするんだがなんだこの人外扱い

* 1 2 3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* ああ〜ロリコンになるんじゃないやあ〜

* 1 2 6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* この番組見てる時点でロリコンに片足突っ込んでると思うんです
* がそれは

* 1 3 1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* お前らこの番組教育番組の一種だぞ弁えろ

* 1 3 5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* えっ!?!性的な目で見るの禁止!?

* 1 3 6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* できらあ!!

139 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

とときんを水着で出してる時点でそっちの狙いがあるのは確定的に明らかはずだろ!!

148 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

さかなチャンきた

152 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

さんを付けろよデコ助野郎!

158 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

しょっちゅう魚ネタで話してるけど全然尽きないよね
どんだけストックあるんだろう

163 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

さかなクンさんと世間話ができるレベルと聞いた

166 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

: (; , ° ,) :

170 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

放送だと圧縮されてるけど実はこの10倍は喋ってるらしいな

174 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

編集技術パネエ

181 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

よく見たら最初より千枝ちゃんたちの疲労がすごい

185 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

何分喋ってたんだろうな……

190 会員番号774番 20XX/XX/X
ID…*

**

汗だくprpr ID…*

192 会員番号774番 20XX/XX/X
ID…*

**

着ぐるみをフィルターにして紅茶飲みたい ID…*

193 会員番号774番 20XX/XX/X
ID…*

**

桃華ちやまのレモンティー(意味深)直飲みしたい ID…*

196 会員番号774番 20XX/XX/X
ID…*

**

早苗さんこっちはです ID…*

198 会員番号774番 20XX/XX/X
ID…*

**

ヤメローシニタクナイ!! ID…*

199 会員番号774番 20XX/XX/X
ID…*

**

テーレツテー ID…*

238 会員番号774番 20XX/XX/X
ID…*

**

次は料理コーン ID…*

ファツ!? ID…*

243 会員番号774番 20XX/XX/X
ID…*

**

水着エプロン……!? ID…*

244 会員番号774番 20XX/XX/X
ID…*

**

水……水着エプロン!? ID…*

248 会員番号774番 20XX/XX/X
ID…*

**

おい斜め45度くらいの角度から見てみる裸エプロンに見えるぞ

!!

* 249 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* どの斜めだ早く説明しろ急げ!!!! 1!!!! 1!!!! ID:*

* 252 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* 着てる子を見てもまだそんなことが言えるか?

* 254 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* みちるちゃん可愛いしさりげなくえろいよね

* 257 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* 俺の目にはみちるちゃんしか見えない

* 259 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* 現実から目を逸らすのはやめないか!

* 260 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* あまりにも……虚しい……

* 262 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* 虚無を感じる

* 263 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* ウツ

* 282 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

* ウツ

* 296 会員番号774番 20XX/X X/X X ID:*

うんぬ

341 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

*
*

ウツ…ふう…:

357 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

*
*

ふう

360 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

*
*

また守護スレ住人が死んでる…:

362 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

*
*

あいつらグッズ買ってきたら勝手に残機増えるから気にするな

366 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

*
*

というか明らかに自家発電してるヤツが

369 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

*
*

気にするな!

382 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

*
*

みちるちゃんめっちゃパン食ってるのによくあの体形維持してる

な

384 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

*
*

アイドルだからね

389 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

*
*

きつと裏で努力してるんだろう

389 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

二の腕とか触ったらふにふにそうでいいよね…:

391 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

**
 いい……
 ** 396 会員番号774番 20XX/XX/XX
 ** 氷菓ちゃんめっちゃ肌白い上に細いよね
 ** 399 会員番号774番 20XX/XX/XX
 ** よくあの体形維持してるな……
 ** 400 会員番号774番 20XX/XX/XX
 ** きつと裏で努力してるはずなんだが
 ** 405 会員番号774番 20XX/XX/XX
 ** 二の腕とか触ったら壊れそうで心配になるよね……
 ** 406 会員番号774番 20XX/XX/XX
 ** この酷暑で倒れないか心配になる……
 ** 408 会員番号774番 20XX/XX/XX
 ** まあ大丈夫だったから放送したんだろうけど……ウツ
 ** 412 会員番号774番 20XX/XX/XX
 ** つーかこの子が料理する姿が想像できんのだけど
 ** 417 会員番号774番 20XX/XX/XX
 ** ところでこの赤いリボンって
 ** 419 会員番号774番 20XX/XX/XX
 ** 一般視聴者の赤いリボンさんがどうしたんだ
 ** 420 会員番号774番 20XX/XX/XX
 ** ID…*

よく投稿してる人だよな

4 2 3 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

そうか

そうだな

一般視聴者だな

4 3 0 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

食材マグロか

4 3 4 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

マグロ (意味深) か……

4 3 5 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

チャキツ (手錠を用意する音)

4 3 6 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

(\sim) \sim 4 3 4 の怯える声)

4 3 7 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

(首が折れる音)

4 3 8 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

(せき)

4 5 6 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

食材追加

あーやばいこの組み合わせだけで旨そう

4 5 8 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

手際良いな……すげえ意外だ

	464	会員番号774番	20XX/XX/X	ID:*
**		包丁捌きすげえ		
**	467	会員番号774番	20XX/XX/X	ID:*
**		葵ちゃんと同じくらい扱えるんじゃないかもしかして		
478	会員番号774番	20XX/XX/X	ID:*	
**		家庭的な女の子いいよね……		
**	486	会員番号774番	20XX/XX/X	ID:*
**		いい……		
491	会員番号774番	20XX/XX/X	ID:*	
**		メシテロオオオ!		
**	496	会員番号774番	20XX/XX/X	ID:*
**		刺身とアボカド買ってくる		
498	会員番号774番	20XX/XX/X	ID:*	
**		けっこうお手軽でいいな		
**	511	会員番号774番	20XX/XX/X	ID:*
**		みりあちゃんに身長のこと言われとるww		
515	会員番号774番	20XX/XX/X	ID:*	
**		杏chang「おっそうだな」		
518	会員番号774番	20XX/XX/X	ID:*	
**		申し訳ないが規格外のぼでーはNG		
532	会員番号774番	20XX/XX/X	ID:*	

569 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

>>566

どっちが？

573 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

>>569

どっちも！

577 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

「.e.e.」おいしいでフゴ!!」

584 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

>>577

これだけでみちるちゃんと理解できてワロス

589 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

いっぱい食べるみちるちゃんが好き

596 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

カワイイよね

イヌミミとか付けてほしい

597 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

俺は既にイヌミミが見える

600 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

カワイイよね

601 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:*

**

.....ン

.....ーン

* * 602 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD:*

.....フ.....ーン

* * 603 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD:*

.....フ.....ーン

* * 605 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD:*

* * おめえじゃねえすわってろ

* * 628 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD:*

* * この試食した人誰だ?

* * 631 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD:*

* * Pじゃね?

裏山

* * 634 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD:*

* * まあでも自己主張しすぎないのはやや好感持てなくもないよ

ペツ

* * 635 会員番号774番 20XX/XX/XX ⅠD:*

* * うらやまギルティ

(以下番組内容の実況が続く――)

《白河氷菓ちゃんを見守るスレ その144》

2 2 8 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* * *
サンキューアッコ
フォーエバーアッコ
2 2 9 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* * *
何だどうした
2 3 0 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* * *
*****.jpg
2 3 1 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* * *
亜子ちゃんのツイッターに載ってた
2 3 2 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* * *
ふおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお
2 3 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* * *
寝顔
寝顔
寝顔
2 3 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* * *
オフショット滅多に無いから貴重だな
サンキューアッコ
2 3 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* * *
というか本人がツイッターに上げてくれないからね
だいたい晶葉ちゃんとか周囲の子が上げてくる
2 3 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* * *
合宿の写真良かったよね
氷菓ちゃん本人が上げてきてくれないけど

* * *
氷菓ちゃん本人が上げてきてくれないけど

2 3 6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* だいたい食事写真だよねいやそれでも和むんだけど

2 3 7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* 合宿の時のついた写真まとめたよ

欲しい人はもってつてくれ

*****.zip

2 3 8 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* t h x

これ誰が上げてんの？

2 3 9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* ひよかちゃん以外みんな

2 4 0 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* 何で本人は頑なに上げてくれないの……

2 4 1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* やっぱり私生活で何かあったんじや

2 4 2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* それ質問してみたやつがいるんだが「ツイッター慣れてないです」

だって

2 4 3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* 始めてしばらく経つのにまだ慣れてないのか……

2 4 4 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

* 始めて数年経つ俺らですら慣れていると言えるのか？

	2 4 5	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**	ごめん			
	2 4 6	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**	いいんだ			
	2 4 7	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**	ところで何で時々ツダと一緒に写り込んでるんだ？			
	2 4 8	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**	晶葉ちゃんの趣味らしいが			
	2 4 9	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**	納得した			
	2 5 0	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**	そもそも氷菓ちゃんの趣味って何なんだ？			
	錬金術っていうヨタじゃなくて			
	2 5 1	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**	それマジだぞ			
	2 5 2	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**	えっ			
	2 5 3	会員番号 7 7 4 番	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**	志希にやんの趣味が化学実験とかだけけどその先祖である錬金術の研究と実証が趣味って話だな			
	昔は錬金術という学問がどういう立ち位置でどういう結果を生んだのかを調べたり史跡を巡るのが好きってさ			

本人曰く考古学に近い分野だとか
ソースは5月のインタビュー記事

254 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
あとゲーム好きって聞いたぞ

255 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
ゲームか

なんかこう四苦八苦してるのを後ろから見てたい……

256 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
対人戦は苦手だけどソロゲーならクソ上手いみたいだが
紗南ちゃんが時々ツイッターでぽろっと呟いてる

257 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
もしや新作ゲーの熱帯に潜ってたらず知らずに氷菓ちゃんと対戦し
てる可能性が微レ存……？

258 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
COOPゲーで知らない内に組んでたって方がありえるかも

259 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
夢のある話だ

260 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
@34437 | sanasana 人力TASとか初めて生で見
た……

という証言と共に写真があるんじゃないか

261 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
ヒエツ

262 会員番号774番 20XX/XX/XX

**

あの志希にやんと晶葉ちゃんの親友だぞ

できても特におかしくない(確信)

263 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

言われてみればそうである

264 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

じゃあ何で対戦苦手なんだ……?

265 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ヒント：天才は人の心が分からない

266 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ヒント：元ぼっち

267 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ヒント：想定されうる家庭環境

268 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

ウツ

274 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

グッズ買ってくる

296 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

(尼でポチる音)

299 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

はあ対戦ゲー苦手な氷菓ちゃんを半泣きになるまで追い詰めたい

300 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>299

人間の屑がこの野郎・・・

301 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>300

いやマジ泣きになるまでとは言っていないぞ

ギリギリのところで勝って大喜びする氷菓changが見たくな

いのか？

302 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ウツ見たい

303 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

じゃけん先に十分に曇らせましょうね

304 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

判決!!

305 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

フェアリスの牡牛

306 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

アイアンメイデン!

307 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

苦悩の梨

308 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ブラギガス

309 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>308

ちよつと待てよ!?

310 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

うわらば

311 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

てことはカードゲームとかはしないんだろうな対戦系だし
決闘者的には残念だ

312 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

むしろ得意らしいが

313 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ナンデ!?

314 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

何千種類カードがあろうが使われるのはその中の特定の種類だけ
だからパターン化が簡単
ってラジオで言った

315 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

自分のデツキならどれだけシャツフルされても順番分かるとも
言ってたな

316 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

何なの晶葉博士の作った人造人間だったりするの

317 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

実はTAS先生の中の人とかそういう……

318 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

もしかして未来から来たロボットとかなのでは

319 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

I'll be back…

320 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

〈b〉

《スターライトプロジェクトについて語るスレ 310》

* 40 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

* 51 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

* 66 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

* 79 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

* 87 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

100 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
耳が幸せで死んだ
物販で俺の懐も死んだ

明日から生活費どうしよう……

101 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
>>100

おバカ!!

102 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
よく見ておけ

これが節度を持てなかったオタの末路じゃ

103 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
この末路だいぶ幸せそうなんじゃが

104 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
で、戦利品は?

105 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
会場限定品ばっかだよ

パンフと特別ジャケットのCD全種類とTシャツとあとエコバツ
グくらい

他にも欲しいもんあったけど手取り少ない地方民じゃこれが限界
だ

106 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
(預金か) 限界オタクか……

107 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

346 所属アイドルのファンはなんとというかそういうやつが多い気がする

108 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
多々買わなければ生き残れないからな

109 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
生き残る必要があるんですか？（真顔）

110 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
ファンならアイドルと心中して見せろ

111 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
過激派こわ……近寄らんとこ

112 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
クラリスさんとか聖ちゃんとかよしのんとかは悲しんでくれそうだからやめとけ！

113 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
でもKAKUGOキメたら私のために死んでくださいますかくらい言ってくれそうな感じがあるし

114 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
言うかな……言うかも……

115 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
お別れです！とか言いそうだよクラリスさん

116 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

*
>ほろべーとか言いそうだよこずえちゃん

117 会員番号774番 20XX/X X/X ID:*

**

>こんなこともあろうかと!とか言いそうだよ晶葉ちゃん

118 会員番号774番 20XX/X X/X ID:*

**

>データではこんなことありえない……とか言いそうだよマキノ

119 会員番号774番 20XX/X X/X ID:*

**

>なんやて工藤!とか言いそうだよ亜子ちゃん

120 会員番号774番 20XX/X X/X ID:*

**

おっと大喜利はそこまでだ

121 会員番号774番 20XX/X X/X ID:*

**

ところでやたらめったらバリエーション豊かな人たちがいたんだ
がお前らの中に知り合いとかいないか?

122 会員番号774番 20XX/X X/X ID:*

**

どんなのだよ

123 会員番号774番 20XX/X X/X ID:*

**

白衣やらシスターやら牧師さんやらサンタさんやら黒スーツ集団
やら巫女さんやらゾーマやら

124 会員番号774番 20XX/X X/X ID:*

**

ゾーマ……??

125 会員番号774番 20XX/X X/X ID:*

**

ゾーマ!?

126 会員番号774番 20XX/X X/X ID:*

**

(何で……?)

127 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

ゾーマって何!?

128 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

あ、それ俺だw

こずえちゃんのライブにコスして行った時フリートークでイジつ
てくれて以来やってんのw

129 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

あああのコスニキか

130 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

346のライブだと一応許可されてるからってよくやるよなお前

……

131 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

で、他の人は何なんだ?

132 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

白衣↓志希にゃん・晶葉ちゃん

シスターさんと牧師さん↓クラリスさん

巫女さん↓よしのん

黒服↓氷菓ちゃん

じゃないの?

133 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

なんか妙に気合入ってる人いるよね

134 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID:**

**

だいたい関係者っぽいけどな

135 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

**

明らかにおかしな類の人らがいるんですけどサンタさんとか…

136 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

**

サンタさんは存在するだろ何言ってるんだお前

137 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

**

はーサンタさん信じてねーのかよお前ーっ!

138 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

**

じゃああの黒服は一体…

139 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

**

…:MIB的な?

140 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

**

>>139

氷菓ちゃんは宇宙人だった…?!

141 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

**

私生活謎すぎてちよつとありえそうなやつやめろや!!

142 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

**

正体感づかれたら「ピカツ」するの…

143 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

**

でも個人的にそれ系はこずえちゃんなイメージ

144 会員番号774番 20XX/X X/X X ID…*

**

じゃあやつぱファイアか何かなのでは……

145 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

正体感づかれたら「ぐさあー!」(長ドス)するの……

146 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

父親に命を狙われてスタンド能力に目覚めるって? (五部並の感想)

147 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

まあ万一マジならこの掲示板諸共俺らが焼き払われてもおかしくないわけだが……

148 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

許してくださいなんでもしますから!!

149 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

おれじゃない

あいつらがいいだした

しらない

すんだこと

150 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

おれも確かに言いました

あそこまで言うつもりじゃあなかった

しつれないなことを言った

すみません

151 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:**

**

一斉に命乞い始めてワロタ

番外：ろく☆ちゃんねる抜粋（7）

《グランドレッドインフアントリー 48機目》

765 ID番号774番目 20XX/X X/X

配信の時間だオラア!!

766 ID番号774番目 20XX/X X/X

スパロボじゃねえか!?

767 ID番号774番目 20XX/X X/X

グランドレッド要素どこ……?ここ……??

768 ID番号774番目 20XX/X X/X

スパロボ+Gジエネを2で割って単純化したような感じだな

これよっぽどストーリーかキャラが良くないとつま……

769 ID番号774番目 20XX/X X/X

キャラもな……本職じゃなくてアイドルってどうなのよ?

770 ID番号774番目 20XX/X X/X

演技力に定評のある子っぽいんだけど今までのと方向性違いすぎるキャラみたいだからわからん

期待しない方がいいんじゃない?

771 ID番号774番目 20XX/X X/X

合ってなかったら徹底的に叩くはwww

772 ID番号774番目 20XX/X X/X

配信開始記念とはいえSSR確定無料ガチャは嬉しいな

ID :

アイドルとか興味ねえし強SSR当たればそれでいいや

ID :

774 ID番号774番目

20XX/X X/X X

むしろそれ以外狙いまである

ID :

775 ID番号774番目

20XX/X X/X X

ガチャ解禁っていつだっけ?

ID :

776 ID番号774番目

20XX/X X/X X

チュートリアル終わってから

ID :

777 ID番号774番目

20XX/X X/X X

めんどくせ……

ID :

778 ID番号774番目

20XX/X X/X X

声優に芸能人起用する時点で切るの安定だろ

ID :

779 ID番号774番目

20XX/X X/X X

お前らまだこんなゲームやっとするのか

ID :

(※ 三時間経過)

911 ID番号774番目

20XX/X X/X X

ID :

アイドルナメてましたごめんなさい

ID :

912 ID番号774番目

20XX/X X/X X

佐藤いい……

913 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

さつきからファウストのボイス4をループしてるんだが別に普通のことだよな

中毒じゃねーし

914 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

仮面ライダーの敵組織みたいな名前してるくせにいちいちあざといところ見せやがるなこの元おっさん……

915 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

今はもう女なんだぞって思い知らせたいよね

916 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

アイドルいけるやん!!

917 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

性能ってどう?

918 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

何に乗せてもいい

適当に乗せろ

919 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

適当すぎイ!!

920 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

いやマジで適当でいいから

ステ見る限りSSRの中でもトップレアっぽいし実際能力合計

トップだぞ

9 2 1 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

まだ機械化歩兵と戦艦の種類も少ないからあれだけ増えたら多分最適なやつが出てくるパターンだな

9 2 2 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

台詞パターンめっちゃあって適当にませ換えしてるだけでも楽しいなこれ

9 2 3 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

佐藤が撃墜されまくるのたのちい

へんなこえ好き

9 2 4 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

佐藤のこと佐藤っていうのやめろよ!

9 2 5 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

あまりにも佐藤がしゅがはすぎるのが悪い

9 2 6 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ハマリ役というか

ほぼ完全に本人だよねコレ

9 2 7 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ファウストの戦闘ボイス3がドスキすぎて怖い

殺意すら感じるんだけど何アレ

9 2 8 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

マジの戦場経験してんじやねえかってくらい迫力あるよね

興味持って白河氷菓って調べたけどあんな子がこんな声出せるの

かってビビったよ

9 2 9 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

AKH

クソツまだリセマラだ!

何でファウストが出んのだ!

9 3 0 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

(天井まで回せ(定型))

9 3 1 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ARK

いやー(9万円は)キツイッス……

9 3 2 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

佐藤も強いだろ妥協しろよ

9 3 3 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

AKH

そつちも欲しくないわけじゃないがどうせなら二人揃えたいのだ

9 3 4 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

あーまあ分からんこともないが

でもSSRそこそこいるのに特定二人だけ狙うってキツくね?

9 3 5 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

理論上不可能じゃあない……はず

9 3 6 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

まあ適当なところで諦メロン

9 3 7 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>929のところに行きたくないんだろう

9 3 8 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

嫌われてるんじゃないのw

939 ID番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

A K H

何故だ

!!!!!!?!?!?!?!?

940 ID番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

発狂しすぎでワロタ

《グランドレッドインフアントリー 99機目》

881 ID番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

リリース一か月記念フェスパレード開催!

今回の目玉は新パイロット、ユリアーナ(CV. 白河氷菓)です!
だつてさ

882 ID番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

A K H

ぐわああああああああああああああああああ

883 ID番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

兼役!?兼役ナンデ!?

884 ID番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

スキルが強いことしか書いてねえ!!?

885 ID番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

声を聞いた瞬間に「あ、こいつサイコだ」って分かるのすごいと思
う

886 ID番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

氷菓changがサイコだつて言いたいのかテーマ！

887 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

そんだけ演技がすごいってだけだろ!?

まあ闇はにじみ出てるようじゃが

888 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

「親の愛に恵まれず愛というものを理解していないため、他人に捧げる愛というものの程度を理解していないフシがある」

ねえこれ

889 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

演じてる人が人なのにそこそこ重い設定叩き込むのやめてくれませんかねえ……

890 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

描写だけなら完全にただのサイコなのにな

891 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

俺やつぱヤンデレにそこそこ重苦しい過去突っ込むのやめた方がいいと思うんだ

理由は無いけどとりあえずヤンでるくらいでいいよ……

892 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

お前らいくらちよつと前に氷菓ちゃんの境遇聞いたからって重ねすぎだろう

893 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

収録も設定作るのも公表前なのは間違いないだろうから偶然なのは偶然なはずなんだけどな

894 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

まあでも氷菓ちゃん自身はそこそこ幸せなご家庭にいるみたいだしな

重ねすぎるもんでもあるまい

895 ID番号774番目 20XX/X X/X X ID:

それよりリリース時実装のファウスト+今回のユリアーナで氷菓ちゃんファンの財布はもうボロボロなのでは……

896 ID番号774番目 20XX/X X/X X ID:

A K H

まさしくボドボドだよ!!

897 ID番号774番目 20XX/X X/X X ID:

A R K

さすがにちよつと排出絞りすぎだと思っス

忌憚の無い意見つてやつツス

898 ID番号774番目 20XX/X X/X X ID:

それにしても病み方が真に迫りすぎてて怖E

899 ID番号774番目 20XX/X X/X X ID:

思わず声出しちゃったよ

もしや本人にも素質が

900 ID番号774番目 20XX/X X/X X ID:

ないとは言い切れなさそうなのが怖い

901 ID番号774番目 20XX/X X/X X ID:

依存されてえなあ……

902 ID番号774番目 20XX/X X/X X ID:

でもこんなによれるならメインキャラとかもつとやってもいいと

思います！

903 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

わかりみ

904 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

わかりあじ

905 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

わかりウエイ

906 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ARK

なんか氷菓ちゃんの個人スレの支部みたくなっちゃってるツスけど……

907 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

実装直後だからしゃーなし

イベ告知あったしそのうち戻るだろ

908 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ほんとお？

909 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

いつものSATUBATUすぎるスレはちよつと……

910 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

仮にメインキャラやったらどんだけギャラ必要なんだ？

911 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

まだ新人だからそこそこ程度で済むだろ

将来的にエライことになりそうだけど

前ガチャで強ロボのハイパーボリアで徹底的に絞り取つてこのオチつて

こんなの絶対おかしいよ!!

517 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ハイパーボリアさえいなければ私の計画は完璧だった……

ハイパーボリアさえいなければああああああああああ!!

518 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

A K H

私の九万円があああああああああああああ

519 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>518

落ち着け

戦艦+キャラだから更に×2だ

520 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

A K H

521 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>520が死んだ!

522 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

運営の人でなし!!

523 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

エライことなる前にオフアーしてメインキャラやつとけと言つ

た

言ったがこのタイミングで実装するとか運営には血も涙もないの

か

524 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

待てまだ分からないぞ

おは90で当たる可能性は無きにしも非ずだ

525 ID番号774番目 20XX/X X/X

ID:

担当声優(アイドル)が即単発で当ててるんですがこれは

526 ID番号774番目 20XX/X X/X

ID:

運営の手先め……!!

527 ID番号774番目 20XX/X X/X

ID:

まあ担当だしいんじやないか

528 ID番号774番目 20XX/X X/X

ID:

本人が自分を使ってるようなもんだしな……

529 ID番号774番目 20XX/X X/X

ID:

ところでツイッター見たら親友の晶葉ちゃんのもとに来てくれないようなのじゃが

530 ID番号774番目 20XX/X X/X

ID:

本人とキャラクターは違うし

531 ID番号774番目 20XX/X X/X

ID:

A K H

>>528

>>530

どっちがどっちなのかはつきりしてくれないか!!

《フリルのエプロン実況スレ》

1 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:****

本日のゲスト

橘ありす (レッドベリーズ)

村上巴 (レッドベリーズ)

池袋晶葉 (エリクシア)

一ノ瀬志希 (エリクシア)

榊原里美

特別アシスタント

白河水菓 (エリクシア)

2 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:****

>橘ありす

3 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:****

>橘ありす

死んだわ柚チャン

4 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:****

立て乙

やべえよ……やべえよ……

5 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:****

戦が始まる (画像略)

6 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:****

ちよつと待ってアシスタントって？

7 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:****

>>6

ああ！

9 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:****

新ルールらしい

あんまりにもアレな料理作る子が多くて流石に何か手を打った方

がいいんじゃないかってさ

16 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:****

- * 「アレな料理（ド直球）」
17 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- * 誰もありすちゃんの料理がアレだなんて言っていないだろ!!
20 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- * >>17
そもそもマジで誰も言っていないしお前のレスが最初だよ!?
24 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- * 他の子の料理の腕ってどうなの?
26 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- * さとみんは甘い
糖分的な意味でマジ甘い
お嬢は料理番組出でないと思うからよく分からん
30 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- * 氷菓ちゃんはととくら学園でかなり手際よかつたしできるはず
池袋博士はそこそこって氷菓ちゃんのツイッターに書いてる
志希にゃんはよく分からんけど多分できるだろう
33 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- * ……ありすちゃんは?
34 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- * 今更言うことか
35 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:***
- * うんごめん

イイイ

死んだわ氷菓ちゃん

141 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

まだ死ぬとは限らないだろ！

146 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

(食材と) 戦わなければ生き残れない!!

148 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

あれいきなりアシスタント使うの？

157 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

志希にやん早くね？何で？

159 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

面倒な作業短縮したいんじゃないの

エビ剥くのとか

163 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

なんか氷菓ちゃんは察してるくさいぞ

172 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

まさか志希にやんこの番組で実験を始めるつもりなのでは

179 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

開始二秒で勝利の法則が決まったのか

188 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

それを察する方も察する方で一体何なんだよ!?

195 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

やはり天才か……

232 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

何だあの蛍光色のブツ!?

236 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

セーフ!!

248 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

よくやった氷菓ちゃん!

255 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

でかした!

269 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

危ねえええええええ

ええええええええええええええええええええええええ!

272 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

二本目……だと……!?

281 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

目立つもので目を逸らせて没収させて安心させる

その影で本来の目的を完璧に遂行するとか

285 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

やはり……天才か……!!

290 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID**

**

これヤバいのでは?

291 会員番号774番 20XX/X/X/X

**

死んだわフリスク

332 会員番号774番 20XX/X/X/X

**

あれ次は即ありすちゃんか

335 会員番号774番 20XX/X/X/X

**

まさか志希にやんを真似ただけでは

337 会員番号774番 20XX/X/X/X

**

そんな間抜けなことするわけが……

わけが……

340 会員番号774番 20XX/X/X/X

**

あるかも

343 会員番号774番 20XX/X/X/X

**

橘流だからな……

361 会員番号774番 20XX/X/X/X

**

相談してる？

368 会員番号774番 20XX/X/X/X

**

なん……だと……

386 会員番号774番 20XX/X/X/X

**

あのありすちゃんが人を頼る……!?

390 会員番号774番 20XX/X/X/X

**

でもやっぱり橘流は橘流だぞ！

391 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

イチゴだけは何が何でも使わせてもらおうという鋼鉄のような遺志を感じる

396 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>遺志

勝手に殺すなよ!?

399 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

誰が死んだんだよ!?

418 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>339

柚ちゃんでは

423 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>柚チャン

勝手に殺すなよ!?

446 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

うわメモ取りながらエビ剥くとかすげえ器用なことしてる

450 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

もしかして両利きだったりするの?

452 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

そもそも利き手の話自体出たこと無い気がする

522 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

そっういえば晶葉ちゃん明らかにおかしなことしてない?

525 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
* ロボットがいるだけだろ

527 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
* ロボットか……

531 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
* 何もおかしくないな

539 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
* いつものことだな

562 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
* あれ？俺がおかしいのか……？

《フリルのエプロン実況スレ2》

110 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
* 進み方は割と普通だな

116 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
* 普通だな（さとみんの蜂蜜使用量を見ながら）

117 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
* 普通だな（お嬢の香辛料使用量を見ながら）

124 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
* 作ってるモノは普通だろ!!

128 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:t

G 1

何でお嬢はあんなことになっちまってるんです？

1 2 9 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : T

g 2

美味しいもの食いすぎて飽きちまってるとか聞いてんですが……

* 1 3 8 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

確かになんかそういう人奇抜なもの好きなイメージあるな

* 1 4 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

さとみんアスタイム入った

* 1 5 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

氷菓ちゃん一瞬固まってなかった？

* 1 6 1 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

あの激マズのノニやら健康茶飲んで顔色一つ変えなかったのに一

瞬フリーズ……？

1 7 2 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

すげえ冷静に欠点指摘してる

* 1 7 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

考えを纏める空白だったってことか……？

* 1 7 8 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

きつとそうだろう

* 1 9 1 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

揺れた!!

2 1 2 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

比較対象がいるから揺れがよく分かるな……

2 1 4 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

うん!! (右をみて)

うん (左を見て) 2 2 2 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

ひでえ

2 2 9 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

この比較を考えてるんだとしたらスタッフは鬼か悪魔だよ

2 3 4 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

スタッフ「氷菓ちゃん気にしてないしいいかなって」

2 3 6 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

>>>234

悪魔か

2 6 6 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

今度はお嬢か

2 6 8 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

もう終わり近いから立て続けになるよなそりゃ

2 7 8 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

!?

2 8 1 会員番号774番 2 0 X X / X X / X X I D : *

* *

ファッ!?

辛そう

392 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**

**

辛(つら)そう

398 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**

**

辛いです……甘味の方が好きだから……

452 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**

**

ラストアシタイム入った

455 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**

**

……料理?

461 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**

**

何のアシスタントを……?

470 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**

**

故障て

473 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**

**

何かがおかしい気がするが何もおかしくないような気もする

498 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**

**

あれタブレットで操作してんの?

というかできんの?

502 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:**

**

>>498

できる人とできない人がいるとしか言いようがない

電子端末だからできないこたあないだろう

507	会員番号774番	20XX	X	X	X	ID	*
**							
	※普通の人はやれません						
511	会員番号774番	20XX	X	X	X	ID	*
**							
	とかやっぱり機械知識もあるんだな						
512	会員番号774番	20XX	X	X	X	ID	*
**							
	本当に錬金術師か何かかよ						
526	会員番号774番	20XX	X	X	X	ID	*
**							
	実は手をパンするだけでできるとか						
529	会員番号774番	20XX	X	X	X	ID	*
**							
	漫画の読みすぎだ						
535	会員番号774番	20XX	X	X	X	ID	*
**							
	五分でバグ修正しきりおった……						
539	会員番号774番	20XX	X	X	X	ID	*
**							
	パパ僕このSE欲しい!! (真顔)						
555	会員番号774番	20XX	X	X	X	ID	*
**							
	技術屋扱いされる系アイドル						
561	会員番号774番	20XX	X	X	X	ID	*
**							
	でもそつちの技術ってイズミンちゃんの方がって話じゃ?						
567	会員番号774番	20XX	X	X	X	ID	*
**							
	こまけえこたあ (ry)						
611	会員番号774番	20XX	X	X	X	ID	*

**

終了!

6 1 3 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

終わった……

6 1 9 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

終わったか……

6 2 8 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

無事に終わることを願うばかりだ

6 2 9 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

見た目は普通だな

6 3 4 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

ありすちゃんか奇抜なもの作ってないぞ

6 3 7 会員番号 7 7 4 番

!!X?!!??!?!?/?

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

マジかマジだ

6 4 7 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

一品目エビチャーハン

6 5 1 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

普通かー

6 5 3 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

**

普通なのか

6 5 4 会員番号 7 7 4 番

2 0 X X / X X / X X

I D : *

719 会員番号774番 20XX/X/X/X I D : *

**

そりゃ辛かろうよ!

723 会員番号774番 20XX/X/X/X I D : *

**

あれでも意外といけてる

728 会員番号774番 20XX/X/X/X I D : *

**

へーなるほどご飯が欲しくなる系ね

730 会員番号774番 20XX/X/X/X I D : t

gg3

お嬢いけるじゃないですか!!

742 会員番号774番 20XX/X/X/X I D : *

**

これ氷菓ちゃんの軌道修正能力の賜物では?

745 会員番号774番 20XX/X/X/X I D : *

**

>>742

それでもあるがああああああああああ

747 会員番号774番 20XX/X/X/X I D : *

**

何言ってるんだ月島さんのおかげだろ

753 会員番号774番 20XX/X/X/X I D : *

**

ああとうとうありすちやんの番に

756 会員番号774番 20XX/X/X/X I D : *

**

来たか……

758 会員番号774番 20XX/X/X/X I D : *

**

……あれ?普通?

** 767 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:**

普通だ……!?

** 769 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:**

ナンデ!?普通ナンデ!?

** 774 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:**

どういうことだ!?

** 779 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:**

幻術なのか……?

** 781 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:**

いや待て!

イチゴソースはかかてるぞ!

** 787 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:**

良かったありすちゃんはあるすちゃんだった

** 790 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:**

>>787

お前もお前でひでえな!!

** 795 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:**

超マトモなサラダだ……

** 798 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:**

審査員が誰も悶絶してない……!?

** 808 会員番号774番 20XX/X/X/X ID:**

馬鹿なこんなことが

809 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

成長つてあるんやなあ……

816 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

感慨深く思えばいいのか今後のネタ枠の消失を嘆けばいいのか

824 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

いや今回はリカバリ能力が高すぎただけだろ

829 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

というか全員なんとかするのがイカれてる

841 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

ロボットの故障含めて全員のフォローをしてくれ!!

843 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>841

無茶言うなよ!?

846 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

>>843

できた!

849 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

何でできるんだよ……

856 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**

でも導入初回でこれってことは次もこの水準が求められるってコトだよな

860 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
誰ができるんだよ!?

862 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
幸子なら……それでも幸子なら無茶ぶりを消化しようとしてくれる……(できるとは言っていない)

866 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
銀!!?

867 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
銀……だと……

872 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
大躍進すぎんか

881 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
ラスト志希にゃん

883 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
普通に美味そうだ

889 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
絶対普通じゃないけどな!!

891 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
いやその割にみんな反応が普通だぞ

898 会員番号774番 20XX/XX/XX ID:*

**
つてことは普通のものなのか?

899 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

ピザ生地あんな短時間で発酵するっけ？

その辺の反応調整する葉なんじゃないの

903 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

ほーん

ってことは氷菓ちゃんの取りこし苦労だったわけね

905 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

でも普段の素行見てたらまあああいう反応にはなる気がする

907 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

金！

912 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

やっぱり金かー

916 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

だよね

実際めっちゃ美味そうだし

922 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

準飯テロ

《フリルのエプロン実況スレ3》

193 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

いつもの雑談

195 会員番号774番 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

個人スレ覗いて来たけどあいつら即死してたぞ

373 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

ほっとけ

376 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

謙虚なアイドルは格が違う

380 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

そこはドーンと言ってええんやで!

384 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

どうせ修羅共が次々買つてくからロングラン確定だしな……

386 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

まあ初週伸びるかどうかわね?

398 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

言っても新人だしなあ

買うけど

《白河氷菓ちゃんを見守るスレ その191》

61 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

*

289 会員番号774番 20XX/XX/XX

ID:**

**

4 2 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

4 2 8 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

何か前もあつたぞこんなの!!

4 2 9 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

ただ今より試聴配信を開始する!

4 3 0 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

まさか死ぬとはな……

4 3 1 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

奴らもラブソングに殺されたのなら本望だろう

4 3 2 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

計算以下の精神許容量だったんやな

4 3 3 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

悲劇なんやな

4 3 4 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

しかもクローネに編入だっけ?

4 3 5 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

編入っていうか合流っていうか

4 3 6 会員番号 7 7 4 番 2 0 X X / X X / X X I D : *

**

どっちもやるってだけでしよ凜ちゃんみたいに

**

あの体力で……？

437 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

あの体力で……

438 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

マジで死んでしまうのでは？

439 会員番号774番

20XX/XX/XX

ID…*

**

>>>438

やめろ俺らの中で死人が出るようなことを言うんじゃない！

49：トリック・オア……

「氷菓さんは日本のハロウィンが世界的に見て異質だということはご存じですか？」

十月下旬、ハロウィン当日を間近に控えたある日、ボクはアリスさんと一緒にクローネのプロジェクトルームに向かっていた。

今日の予定は、とどきら学園のハロウィン特番の撮影だ。346プロで制作している番組のコラボ企画のようなものであるらしく、フルボッコちゃん出演者であるボクらにもかなり早い段階から声がかかっていた。

で、その道中のこと。アリスさんはなんとも不機嫌というか不満げな顔をして呟いた。

「ハロウィンが海外発祥だということはご存じだと思わんですが、ハロウィンの本来の形は悪霊を追い出すための行事で、お化けや魔女に扮することなんだそうです。で、この行事はあくまで子供たちのための行事なんだとか」

「そうだね。大人の家に行っていたトリック・オア・トリートずらかおかしか……つていうのは、有名だよね」

知つての通り、ハロウィンとは本来子供のためのお祭りだ。子供の健やかな成長を願って見守るような……なまはげみたいな……いや、違うか。

まあ何にしても、元々日本の風習じゃないし、大袈裟に祝うようなものでもない。アリスさんの言う通り、扮するのはあくまで「オバケ」か「魔女」。その辺については知っているから、アリスさんの言いたいこともなんとなくは推測できた。

「……コスプレ大会と化している今の日本のハロウィンはおかしくな

いのですか!？」

「気持ちがよく分かるけど言い出すのが十年遅いかな」

つまり不満げだったのはそういうことらしい。撮影外で同じ格好をするのに少し抵抗があるのだろうか。

しかし魔法少女の格好で日本のハロウインに警鐘を鳴らすというものなかなかロックな話である。

「こればかりはもうどうしようもないんじゃないかな。クリスマスもバレンタインも魔改造してきた日本人だよ」

「でも街中で大騒ぎするのは違うと思います」

「それはボクも感じてる」

ハロウィンといえばと聞くと、返ってくる答えは「かぼちゃ」か「コスプレ」か、あるいは「渋谷の騒動」だろうか。

346プロも都心に近い場所に建っているだけに、外の騒ぎもすぐに聞こえてきてしまう。警察もしょっちゅう出勤しているみたいだし……アリスさんも去年から所属しているから、何度かそういう光景は見ているはずだ。

「誰かが取り締まってくれればいいんだけどね」

「経済効果とかで難しいとも聞きました」

「そうだね。人が動けばそれだけお金も動くしね……」

アイドルのコンサート……に例えるのはちよつと荒々しすぎるしあんまりにも秩序が存在しないし違うな。

けども、下手すると万単位の人が動いて、熱狂によって理性の「たが」が外れるというプロセスには共通するものがある。それによって周辺のお店なんかにお金を落としてもらいやすくなるし、経済的には……まあ、決して悪いことじゃないと言えなくもないと思う。それ以外の面ではかなりどうかと思うけど。

パーティと言えは聞こえは良いけど、実際はなんというか暴動めいているからケガ人も出るし、モノを壊す人もいるし、大量のゴミが出たりもする。割れ窓理論——軽犯罪を見過ごしていると重犯罪が起きる可能性が増加する——から考えれば、この状態が続くようなら治安にも悪影響だ。

あとちよつと生々しい話になるけど、一夜を共にする男女が増えるので、ここ2、3年ほど7、8月生まれの新生児が園に預けられることが増えた。ボクが言えるこつちやないけど、あからさますぎて嫌になる。

「……で、本題は？」

「本場から見れば氷菓さんの格好は色んな意味でありえないと思います」

「知ってるよ」

さて、今のボクが着ているものとはといえば——某第三帝国風の軍服だ。ちよつとミニスカートだったりロングコート風になってるのは、フィクション作品だからというところでひとつ。

今ボクが出演しているソシヤゲ、グラレフ（グランドレッドインフロントリーの略）の担当キャラクター、ファウストの衣装そのままのコスでもある。ゲームのキャラで、かつこの軍服。ハロウインの本場的にも大激怒だろう。色んな意味で。

でもボク自体一回死んだからオバケみたいなもんだし、そつち方面のオバケもいるだろうし、ダメかな？　ダメか。

「というかブランの格好じゃないんですか？」

「……あれシスター服じゃないとお腹冷えるから。さつきまでこつちの収録もあったし、始まるまでこつちでいようかなって」

「……ああ、まあ、涼しくなってきましたしね」

「あれだとアイス食べたらお腹冷える速度が尋常じゃないんだよ……」

「……まあ、そつちだとタイト履いてますし露出度も高くないですしね。ミニスカートですけど」

「ミニスカートだけどね……」

でもいいんだ。そこそこ暖かいから。

そんなことを考えていると、アリスさんが少し恨めしげな視線を向けていることに気付いた。

「……どうかした？」

「同じ身長なのに、カッコいい系も普通に着こなせるのズルいと思います」

「え、ええ……？」

「私は可愛い系が多いのに氷菓さんはカッコいい系も満遍なくやれる。これはちよつとした臆病なのではないでしょうか？」

「単なる営業方針の違いだと思うよ……」

「じゃあ何で私の方が少なめなんでしょう」

「いや、ほら……生存本能ヴァルキュリアの時の衣装とかカッコいいし、クールタチバナカツコよかったし……？」

「それほどでもないです」

謙遜してテレテレしてるその姿、だいたいクール抜け落ちちゃってるんだけど自分で気付いているのだろうか。

しかし、自称クール・タチバナは後々黒歴史と化してしまいそうともつぱらの評判なわけだけど……まあ、わざわざ言うことでもないな。

「でも、考えてみたら演技力があつた方が氷菓さんみたく色んな役が来るんですよ」

「うん。そうだね」

「……なんだか遠くを見つめてませんか？」

「そんなことないよ」

「何かあったんですね」

「……要求されればやるべきことはやるけど、追加注文を当然のように三つも四つも五つも投げつけてこられると困る」

「投げつけられたんですか」

ダメとまでは言わない。できると信じてくれたと思えばそれはそれでいいことだ。追加報酬もあったから仕事と思えば特に何とも思わない。

しかしソシヤゲで「2、3年後に使うかもしれない季節行事用のデレ台詞」を読むのは、流石に色んな意味で首を傾げざるを得ないだろう。もうボク個人の感情はこの際置いといても、未来を見据えすぎて足元の石ころに躓かないか心配になる。人気出なくてサービス終了とかなったらどうするんだ。

「……でも、あるに越したことがないのは確かかな」

「どうやったら鍛えられるでしょうか……」

「えーっと……」

どうだろう。ボクの実験からということでも話してもいいのかな。

でもボクの場合色んなところで他の人と違うし……いや、そう思う前に一度言ってみるのが重要か。何が影響して良い方向に向かうかなんてわからないんだから。

「ボクは、とにかく人を模倣まねすることから始めたかな」

「人まねですか？ でも、それはちよつと恥ずかしいような……一応、プロですよ？」

「プロである以前に人生経験の足りない子供だよ」
「むう」

「自分の中に無いものはどうしたって演じられない。でも一朝一夕じゃ築き上げることはできない。だから、他から持ってくる」

「それも、少し不誠実な気がします……」

『『学ぶ』って言葉の語源は『真似^{まね}ぶ』って言葉……人真似から来てるって説もあるんだよ。あくまで説だけどね』
「なるほど」

「だから、人を真似して足りないものが何か、どんなものが必要かを学び取る。ボクはそうしてる……かな」

問題はボクを基準にするとこずえちゃん以外に同じことができる人がほとんどいないということだろうか。

いやでも、ボクやこずえちゃんみたいな特異な例に関してだけじゃない。人真似から学ぶというのは他の人だってやってることだ。ちゃんとアリスさんにも通ずる話……のはず。時間はちよつとかかるけど。

「……事例として、ちよつとやってみただけませんか？」

「えっ。ここで……？」

「お願いします」

……こう要求してくるとなると、アリスさん的には「普段のボクからは感じられないこと」を求めているはずだ。

例えばカリスマ。これならボクには存在しない。悲しいことに。けれどもどうにもこうにもならないというわけじゃない。さつき言ったように、それが無いというのなら、他から持ってくればいいんだ。

今のこの格好もちよつとおあつらえ向きだろう。ちよつと雰囲気出すためにも、バサツとコート^{コート}の裾を軽く翻す。

「既に退路など存在しないと知るがいい。全門解放。撃^てエツ!!」

「!?」

「!?」

アリスさんがビクツとしたのに合わせて、周囲の部屋でざわざわと

人が動くような気配が感じられた。ちらりと部屋の中に視線を向けてみると、なんだかやけにスマホの画面を気にしてる人がいる。もしかして、自分のスマホから声が出たと勘違いさせてしまったのだろうか。だとしたらちよつと申し訳ない。軽いテロだ。

「……氷菓さん二重人格だったりしますか？」

「いやしないよ」

「どこでそんなの学んだんですか？」

「アニメ見たり資料見たり？」

「それだけでできるわけないですよね!？」

「あとは時子さんを参考にしたり……」

「だいたい分かりました」

みんなご存じ時子さん。その威圧感は無手なならず者を凌駕している。

本当のことを言うと今回参考にしたのはパーシヴァルさんやイルザさんのような「あちら」側の人たちなのだけど、あえてそこに言及する必要は無いだろう。アリスさんはあっちのこと知らないし。

さて、そんなこんなはあつたけど、ともかくプロジェクトルームに到着だ。途中、立ち止まったり休憩室に向かったりはしたけど、まあ時間内だから問題無い。

「おはようございます」

一言告げて中を覗き込むと、当然のように美嘉さんと奈緒さんが死んでいた。

ボクはそつと扉を閉じた。

「にやははははそうはい神谷奈緒ちゃん！」

「残像だよ」

「!？」

「ありや失敗しちゃった」

直後に扉が開いたが、そこは体術でなんとかした。

十天衆が知り合いにいて助かったというかなんというか。別の意味で目を付けられたような気もするが、その内別の方に目が向くだろう。多分。

しかしなんというかまあ、古典的なトラップだ。ヒモくっつけておくだけなんて。見た途端にボクが逃げ出すことは、想定されていてもおかしくはないと思っただけ……ここから何されたとしても、ちよつとしたことなら何とでもなるだろう。

というかやっぱりこうしたのは志希さんとフレデリカさんか。今からどうするんだろう、これ。

「何で私今日一日で氷菓さんのおかしな一面を次々見ないといけないんでしょう」

「あんまり動じてないアリスさんもアリスさんじゃない？」

「晶葉ちゃんもあたしもそうだったしもうそこそこ慣れる頃だよね」

慣れていいものなのだろうか。

まあいいか。スターライトプロジェクトのみんなの方はもう完全に慣れ切っちゃってるし。クローネでも慣れてもらおう。

「お疲れ様。収録？」

「あ、はい。凜さんは、今日は特に何も？」

「うん。奈緒と来たんだけどね。ちよつと面白いことになっちゃった」

「面白いこと」

「志希の薬とかがね」

「とか」

となると、志希さんの薬だけじゃなくてフレデリカさんが更に引つ掻き回していったつていうところか。

で、それに巻き込まれる形で美嘉さんが大変な目に遭ったのだろう。毎度毎度のことである。これでいったい何回目だろうか。

「その服は……？」

「収録してそのまま来ちゃって。文香さんは……」

「ネコ、ですか？」

「そう、です……にや。なんて……ふふ」

隣でアリスさんがそわそわしているのが分かる。本来、アリスさんのユニットは文香さんと一緒だ。仲の良いお姉さんがお茶目な様子を見せているとなると、こうもなるだろうか。

文香さんが着ているのは、青を基調にした色合いの、猫を連想させる衣装だ。

元々のスタイルも良いので、よく似合っているのは確かだけど……こう、何だろう。どこかでみくさんが拗ねているような予感がする。元々ハロウインの時期の定番コスプレとも言える「猫」だけに、346プロでもやる人は多くなってしまうだろう。

……志希さんと合わせてもう一人くらい呼んで、ふみにゃん志希にゃん誰かにゃんで新生にゃん・にゃん・にゃん……いやダメか。うん。それこそみくさんに怒られる。

「凛さんは……魔女かな？」

「ん。変かな？」

「全然。ただ、その——」

「あ、うん……」

本物の魔女を知っているだけに、どうしてもその人を連想してしまうというか。

なんとなく似た衣装だけに、ちよつと比較してしまう自分がある。

ドラフのそれに勝るとも劣らないとんでもないスタイルの美女だったものだから、強烈に印象に焼き付いてしまっている。

「氷菓は収録って言ってたけど」

「あ、はい。ネット配信の特番で、ソシヤゲの宣伝と紹介を」

「ふーん……その衣装ってことね」

「奈緒さんはあれ、一体……」

「犬だよ。加蓮はミイラの仮装しに行ってる」

「……それいいんですか？」

「……本人がいいって言うてるからいいんじゃない？」

「……それもそうですね」

加蓮さん、昔は虚弱体質で病気をしがちだったという話だったな。命が脅かされてた……とまでは聞いてないけど、元気になった今、その当時のことをネタにして笑いに変えようとするのは……ちよつと気持ちは分かるかもしれない。ボクも死んだこと時々ネタにするし。なお志希さんにも微妙な顔をされる模様。

「フレちゃんは小悪魔だよー♪」

「あたしも見ての通り魔女だねー♪」

「でミカちゃんはサキュバス」

「こーあーくーまー!!」

「あ、復活した」

小悪魔。

小悪魔？

……うん、まあ、間違っつては無いと思うけど、美嘉さんの見た目で小悪魔はちよつと無理があるような気がしなくてもないんだけど……。

「何でフレちゃんさつきからアタシのことサキュバスとかずーつと言

うわけ!？」

「んーでもミニデビルとかプチデビルとかそんなカンジじゃないしー。デーモン?」

「デーモン美嘉?」

「そんな十万歳みたいな名前は勘弁して……」

なるほど、こんな感じでしたとイジられていたから精神が限界を迎えてしまったということか。

多分奈緒さんも同じだな。二人とも真面目だからまともに受け止めちゃったのだろう。ボクが言ってもあれだけど、受け流すことを覚えなないと。

「まあ、でも相対的に見れば小悪魔って感じだし、そこまで変に思うことも無いんじゃないかな」

「そうそう★ 氷菓ちゃんの言う通り!」

「それちっちゃい子が来たらそうでもないってことだよね?」

「まあうん」

「そこは否定してよお!」

「お姉ちゃーん! アタシも小悪魔ー!」

「(相対的に見て) サキュバスです……」

「莉嘉ああああああ!!」

「えっアタシ何かした!」

しいて言えばここに来たことが不運と言うか。

しかし相対評価とは残酷なものだ。

圧倒的小悪魔感を備えたコスを着用した莉嘉ちゃんの登場により、結果、やはり美嘉さんのコスはサキュバスということになってしまった。

いや、小悪魔なんだけどき。放送倫理的に。

「それじゃあ本番行きまーす。3、2……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

それから数十分ほどして、ボクはレイナさん、光さん、千佳ちゃん、アリスさんとの五人で社内スタジオでの撮影に臨んでいた。

全員、衣装はフルボッコちゃんでの普段着だ。魔法少女衣装はもう少し後の撮影で使うことになる。

さて、今回の撮影はほんの一分程度の映像を作るためのものになる。これをCM前のアイキャッチとして利用するつもりらしい。

監督曰く、コンセプトは「フルボッコちゃん第三期レギュラーメンバーの休日」。そんなわけで、今ボクたちはグリーンバックの前でテーブルに向かって、それぞれお茶を嗜んでいる。無言で。

無言なのは、ハロウィンまでの放送時点で、まだ全メンバーがちやんと打ち解け合いきれてないからだ。特にブラン^ホ。

「……どうぞ」

「あ、ああ、ありがとう」

無言で延々とお茶を飲み、時々一言を差し込んでいくというシユールなスタイルだ。

そもそも何でこの五人が集合してるのかすらよく分からないという念の入れよう。まあこれ、来週の10話の放送でブランの過去が明らかになった直後、という設定のもと放送されているので、今の時点で何でこんなことになってるのが分からないのは当然なのだけど。今はあくまで純粋にシユールギャグな映像として楽しんでもらい、10話放送後に改めて「あの時の映像はああいうことだったのか!」と

気付いてもらおうつくりなのだそうだ。

果たしてどれだけの視聴者が気付くかは分からない。

「はい、OKですー!」

しばらくそうして一言二言を挟み込んで、数十分ほどで撮影は終わった。

続いて同じように魔法少女服での撮影を行い、こちらも同じような調子で数本分を撮り終えた。

「……な、なんだか静かな撮影だったな……」

「こ、これはこれで、しようがないんじゃないでしょうか……」

「ハッ、しようがない? どうせだからもつとオモシロくしてあげることまでできるけどッ!」

「それはやめといた方がいいと思う」

「そうだよー。また専務さんに叱られちゃうよ?」

「……今回は見逃しといてあげるわ! アーツハッハッハ!!」

「レイナ、響いて他の撮影の迷惑になるぞ」

「うぐ」

「やっぱり専務さんには弱いんだ……」

意外な——いや、意外でもないか。専務さん怒ったら怖いし、そもそも厳格な人だから勝手なイタズラとか許してくれるようなタチでもないし。

ボクや仁奈ちゃん、あとは小さい子や裏表があまり無い素直な人なんかに対しては優しいけども、それはそれとして過去の言動から未だ苦手意識を持つ人も少なくないし。

「んー、楽しかったけど、ハロウィンなんだからもつとハロウィンらしいお洋服着たかったなあ」

そうボヤク千佳ちゃん言葉に、内心少し同意する。

ハロウィン本番はまだもうちよつとだけ先のことだとはいえ、着慣れている特撮の衣装だけというのもなんだか味気ない。それにアリスさんの言葉じゃないけど、ハロウィンらしい仮装じゃないというのもなんだか少し気になる。

のだけれども、

「この後、みんなでちゃんとしたハロウィンの仮装してからエンディング撮るらしいよ」

「えっ、ほんと!？」

「そうだったのか？」

「うん。監督さんからみんなに伝えてって。衣装室にあるものなら何着てもいいとか」

「それならそうと先に言いなさいよッ!」

忙しいだろうから、とフオローは入れておくけど……まあ、うん。そうだよ。通達大事だよ。うちのプロデューサーも時々いきなり寝耳に水なこととしてくるから分かるけど。うん。

ともあれ、ボヤクレイナさんをなだめながら、みんなで衣装室の方へ向かう。

他のみんなが使ってるからそこそこ減ってはいるけれど、それでも結構な量の衣装がボクらを圧倒した。

「それじゃあ、あたしは魔女!」

『子』じゃないんだね」

「えへへ、ハロウィンだからね。今日はラブリーチカもオトナモードなの!」

そしてハロウィンが過ぎたらまた魔女っ子と。一晚限りで変身願望を満たすことができると思うと、それもまたハロウィンの醍醐味みたいなものだろう。何度も言うようだが、実質的にはもう数日先にな

るんだけど。

千佳ちゃんに続くように、ボクを含めた四人もそれぞれ衣装を探しに向かう。

さて、ハロウィンとなると何がいいか……魔女はやる人が多いから一旦候補から除外するとして、あとは……猫、は氷菓にやんとか言われて志希さんたちに尊厳ブレイクされそうだから除外。同じくやる人が多くてみくさんに怒られそうでもある。ミイラ……は、事情を知ってる人たちからブラックジョーク扱いされそうだな。除外。

となると、ハロウィンらしい……創作上の仮装じゃない……と。

「みんな、きがえたー？」

少しして、千佳ちゃん呼びかけに対してみんなそれぞれに返事を返す。ボクは準備のためにももう少し待ってもらうことにするが、他のみんなはどうやら既に着替えが終わっているらしく、おもてに出て行っているのが見えた。

「じゃーん、どうだー！」

まず出てきたのは光さん。どうやら吸血鬼の衣装のようだ。紳士服のような黒い服にマント。赤と金の意匠が見え隠れしているのは、某吸血鬼ライダーリスペクトだろうか。

次に出てきたのはレイナさん。イタズラ好き繋がりか、天狗っぽい衣装を選んでいるようだ。

アリスさんは童話の「アリス」に出てくる時計ウサギ——創作物のコスプレは邪道って自分で言ってたつけ——だ。よく似合っているがそれはそれとしてちよつと釈然としない。

で、千佳ちゃんは元々の予定通り魔女。大人っぽいと自ら豪語する通り、確かに大人っぽい衣装のようだ……衣装だけ。やっぱりまだちよつとあどけないところはあるので、そこはあくまで大人っぽさを「目指した」というところだろう。

さて、ボクも出ないと。そう思ってみんなの方に出て行く——と。

「うわあああああああああ!？」

「ひゃあああああああああ!？」

「ギャアアアアアアアアア!!」

「きゃあああああああ!？」

四人揃って盛大な悲鳴を上げられた。

何故だ。ハロウインの趣旨から外れた格好じゃないと思うんだが……このスクリームの仮面と黒衣＋鎌。

「アタシらをびつくりさせてどうするのよ!？」

「あだっ! いや、あの、ハロウインだしオバケっぽい方がいいかなって思っ」

「オバケっぽすぎます!!」

「こっち付けてなさい!」

と、レイナさんの手により仮面をはぎ取られ、代わりにジャック・オー・ランタンが被せられる。

まあこっちでもオーソドックスでいいか。あちら側の風習としても迷子のジャックという民間伝承があるみたいだし、どちらの世界にも共通したものに仮装できると考えれば、それも一興だろう。

それはそれとしてあんまりにもビビらせてしまったせいで後でみっちり怒られた。

ただちよつとレイナさんがイタズラする時の楽しい気持ちはちよつと分かった気がする。

で、その日の晩。

「開祖様、もしハロウインするならエルーンとドラフとハーヴィンとどの肉体になってたら一番驚きますか!？」

『何言ってるんだお前』

——ちよつと人を驚かすことにハマってしまったボクだった。

50:ぴいぴいレトロ

突然だけど、346プロには「ひなななお」という番組がある。その名の通り、比奈さんと菜々さんと奈緒さんの三人、「虹色ドリーマー」が出演する、三人の冠番組だ。

放送内容は、言ってみればサブカルチャー総合。三人の現在のマイブームや流行に応じて色々と変わるけど、アニメ、ゲーム、マンガ、ラノベ……などについて、ダベったり、遊んだりという……まあ、そこそこある類の番組である。

三人ともいわゆる「にわか」というわけではなく、知識の幅も広いため、アイドル好きにとってもアニメ・ゲーム好きにとっても楽しめる。まあ、その辺ちよつと絶妙なバランスの上に成り立ってるとも言えるけど。

製作費も安価で、そこまで大掛かりな準備を必要としないのでスタッフにも優しい。そのおかげでBD/DVDもそこそこ安価で売れるのでファンにも優しい。色んな意味でwin-winな番組でもある。

さて、実はと言うとボクは今日、紗南さんと一緒にこの番組へ出演することに決まっていた。

今回の題材は「あのレトロゲームを遊ぶ」だ。

「レトロゲームって言っても色々あるけどね……」

「どのくらい前のかなあ?」

「ゲームウォッチってことは無いと思うけど」

ボクらは今、番組の収録場所の付近にやってきている。もう数分程度で撮影が開始……するのだが、実はそれにあたってまだやるゲームの内容は知らされてなかったりする。

レトロゲー、というのは実のところかなり大雑把なくくりだ。どこからどこまでが「レトロ」なのかは人の尺度次第だし。

「紗南さんは何がいい？」

「んー、ドラクエとかどうかな？ 氷菓ちゃんは？」

「ボクは……マリオブラザーズとか？」

「あー、いいね。ミスしたら交代する形式かな」

「そしたらボクから後に回らなくなっちゃうし」

「だったら氷菓ちゃんは順番の外かも」

「仲間外れやめてよ」

くすくすと笑い合いながらも、合図を待つ。

元々、同じ寮生でゲームが趣味ということもあって、ボクは紗南さんとそこそこ仲が良い。今回のオフアーはそれが原因か……と言うのは流石にちよつと違うか。

実際のところ、紗南さんにオフアーを出したら偶然ボクもくつついてきた、という感じだろうか。千佳ちゃんの時みたく、出演にあたって紗南さんの方から口添えの一つや二つ、あった可能性はあるけども。

「じゃあそろそろ準備お願いしまーす」

「はい」

「分かりましたー」

スタッフさんの呼びかけに応え、軽く下に視線を落とす。服は……撮影だし、流石に外行き用。デニムとパンプスに、白い上着。その下にはグレーのインナーを着用している……程度のごくカジュアルなもの。紗南さんは比較的派手めな刺繍の施されたデニムシャツ。前を開けているおかげで、白いシャツと深緑色のパンツが見えている。割とよく見る紗南さんの普段着だ。

軽く埃を払い、立ち位置を確認して……これでオーケー。ちよつと紗南さんの立ち位置の方も微調整して……こんなもんなかな。

「それでは本番入りまーす！ 5秒前！ 4、3、2……」

秒読みを終えた後、部屋の中から声が聞こえる。まずはタイトルコールとトークから。それが終われば、ようやくゲストの出番となる。

スタッフさんから合図を受けて、ボクらはインターフォンを押した。

「はい」

「どうぞー」

「お邪魔します」

「失礼しまーす！」

部屋の中からの応答を受け、ドアを開けてリビングへ向かうと、三人がコタツに入って待ち受けていた。

どうやら既にセットは冬仕様になっているらしい。カーペットもふわふわなものを使っているようだ。放送の時はもう十二月に入っている頃だろうし、こうなるか。

テレビを見る面を開けないといけない関係上、コタツは幅の広いものを使っているようだ。ゲストを含めて放送する場合は毎回四人以上はいることになるわけだし、妥当なところだろう。正直、ちよつと欲しい。

「というわけで今回のゲスト、三好紗南ちゃんと白河水菓ちゃんツス」

「よろしくなー」

「よろしくお願ひします」

「よろしくね！」

「それじゃあ、お二人も来ましたしお茶淹れてきますねー」

「あ、いつもありがとツス」

「ありがとお母さん！」

「お母さん!?!」

「ありがとお母さん」

「ちよつとシヤレんなんないやつやめてくれます!?!」

ちよつとジョークで言ってみただけだというのに、何故か気の毒なものを見るような視線が注がれた。

しかしね、ボクはもう家族のいる身だよ？　そこまで言うこたあ無いんじゃないのかな。確かに母親はいないけど。菜々さんみたいなよく気がつく人が母親だったら、もっと健全に成長できたかもなあとは思う。まあ、過ぎたこと言ってもしょうがないんだけど。

「そういうとこツスよ氷菓ちゃん……」

「え、何が……?」

そんなどうしようもないようなものを見るような眼で見てくるのはやめてくれないだろうか。

ボクだって傷つかないわけじゃないんですよ。

「ま、ともかく！　今日のテーマは『あのレトロゲームを遊ぶ』だ」

「二人ともゲームが趣味って聞いたツスけど」

「紗南ちゃんはもうみんなが知ってるってくらいですけどね」

「氷菓は?」

「あんまりコレってものは無いです。あ、面白そうだなーって思ったら何でもやるタチなので」

「よく一緒にゲームはするけど完璧主義の凝り性って感じで、何だか気付いたらトロフィーコンプとかやってたりするんだよ。忙しいはずなのにね」

「紗南さんだって似たようなことはやってるのに」

「あたしは楽しんでやってたらそうなるだけー」

「それってどう違うんですか?」

「氷菓ちゃんは最短距離を最効率で駆け抜ける系で、あたしは道草楽しんでみながら偶然コンプする系?」

「ボクだって楽しみながらやってるよ」

というかゲームは普通、楽しみながらやるものだ。ボクだって楽しみながらやってたら、つい最初に最短距離でやってしまうというだけだ。トロフィーコンプは結果でしかない。

その後はそれこそ更なるやり込みをするし、協力プレイや対戦を楽しみもする。そりゃあ、まあ、こう、多少はね？ 多少はこう、早解きしすぎたかなあとは思ったりするけども。だからこそ、その分攻略Wikiとか更新できたりするのはひそかな自慢だったりする。だから時々思いつきりゲームの進捗具合読み間違えて、ネタバレかましたりしたことについては許してほしい。ダメか。

「で、改めて『あのレトロゲーム』な。今回は……」

「なんででしょうね。ファミコンか、スーパーファミか、それともメガド」

「ニンテンドー64だ」

「!?」

「もう20年以上前の機種ツスからねー」

「!!」

「ボクが生まれて一、二年くらいでWiiだからもう随分だよねえ」

「?!?!」

「どしたの菜々さん？」

「い、いえー……いやちょっと……ちょっと、はい……」

ちなみにこの話、先生にした場合は一瞬で真顔になる。本人曰く、「そんなに経ってないはず」だとか。本人の中ではまだ今は2000年代らしい。

ボクとしてはちよつと分からない感覚だが、あと十年、二十年経つうちに似たような思いを抱くようになるのだろうか。

ちなみにPS1の発売が1994年なので更に品としてはレトロである。そろそろPS2もこの括りに入ってきそうだ。

「最初は何かな？」

「最初はこれだな。マリオ64」

「うん、鉄板だね」

「鉄板すぎるくらいだよね」

スーパーマリオ64。DSで一度リメイクが行われ、更にバーチャルコンソールでの配信も行われた名作中の名作。

現在でも動画配信サイトなどで実況動画やTAS動画などを撮影・配信する人は絶えず、未だ知名度は高い。

アクションは単純。ストーリーは明快。3Dゲームのノウハウが蓄積されていなかったあの時代にあの内容は、なんとというか色々おかしいと思う。良い意味で。

「それじゃあ、最初は誰から……」

「はいはいはい！」

「紗南かー……やらせて大丈夫なのか？」

「それなら大丈夫ツス。ミス交代じゃなくってステージごとに交代って形式にしたらいいで」

「むしろ氷菓ちゃんに回しちゃダメだよ。スター0枚からでもクリアするから」

「どういふことなんでしょうか!？」

「鍵もいらナイよ」

「ちよつと待てよ!？」

「流石に普通にやる分には自重するって」

まあ確かに、紗南さんとゲームする時のこと改めて考えるとちよつとやりすぎちゃった部分が、無いではないかなあとも思うけれども。

正直、できることをやってるだけなんだから——という思いも無くはない。いや、流石に今はやらないけどね。

「それじゃあまずはおたしからねっ！」

と、宣言してスタート。まずは恒例のピーチ姫のお手紙。TAS動
画ではgdgdパート、なんて呼ばれているものの、やっぱりこれが
無いと始まらないのは変わらない。一種の様式美と言えるか。ボク
個人はこれが無いとちよつと締まらない気分になる。

「gdgdとか言っちゃダメだよー」

「誰も言っていないぞ!？」

「誰かが言うから先に釘さしとかない」と

「誰かつて誰ツスか……」

「誰だろうね」

多分ネットユーザーとかそういう人たちだろう。あとボクとか。
しばらくマリオを走らせると、今度は例のカメラマンが現れて説明
を始める。これは――。

「gdgdパート2とか言っちゃダメだよー」

「だから誰も言ってませんよ!」

やっぱり釘を刺されてしまった。

……いや、でも、やっぱこれいらな……やっぱいいです。

「それじゃアースステージ行ってみよう!」

「紗南ちゃんはこれやったことあるんツスか?」

「バーチャルコンソールでやったことあるよ。まあ、ゲーマーなら基
礎教養みたいなものかな」

「基礎教養は言い過ぎだと思うけど……ボクも一応」

菜々さんもプレイした経験自体はありそうだけど……気にするの
も野暮か。

「あのお……ナナなんだかあんまりよろしくないこと考えられてるよ

うな予感って言うか悪寒？　がするんですけど」

「菜々さんがお母さんっぽいからそんな気がするだけだよ。オカンドけにー！」

「氷菓、ドヤ顔するのやめろ」

「氷菓ちゃん最近楓さんに似てきてない？」

「そう？　えへへ」

「ちよつとかわいいけど多分そこ照れるとこじゃないツスよ」

そんなバカな。

いや、楓さんよりもっとすごいアイドルに、なんて言った手前、似てるって言われて喜ぶのも違う……え、それも違う？

じゃあなんなんだ一体。

と悩んでいる間にも、紗南さんは見事な動きで最初のステージをすいすいと攻略し、スターを手に入れていった。

恐ろしく素早い手さばき。ボクでなきや見逃しちゃうね……なんつって。

「おー、お見事ツス」

「へへん。よそ見してたらどんどん進んじゃうんだからねっ」

「いやホントホント」

「氷菓ちゃんの場合はだいぶ違うと思うよ？」

「最終的な着地点がある以上そこに何の違いもありやしないよ」

「違うんだよ！」

そこまで言うほどではない……ような……そうでもない……ような気がしなくもなくもないんだけど……。

いや、まあ、うん……色んな意味でゲームそのものが致命的なことになるのは、まあ、違う……かなあ……。

「じゃあ次奈緒さんね！」

「お、おうっ。それじゃあ次は……どこ行こうかな……」

次にプレイするのは奈緒さんか。で——安易にすぐ次のステージには行かず、同じステージでしばらくスターを集めるつもりか。なるほど、堅実な作戦だ。

「奈緒さん」

「ん？ 何だ？」

「加蓮さんが『奈緒は普段はあんまり面白み無いよねー』って言った理由が分かったよ」

「お前ホント最近遠慮なくなったなあ!？」

「ま、まあまあ！ 打ち解けられたってことですよ！ 多分……」

「菜々さんもそこは断言してくれよお」

実際のところ、ボク個人は相当打ち解けられてると思ってるんだけど、どうだろう。

まあ、ちよつと加蓮さんっぽいところが多少あるかもなーというところについては否めないような感じも……あるっちゃあるのだけでも。クローネで団体行動してるとどうしてもそういう部分が出てきってしまうというかなんというか。なんだかんだ加蓮さんの立ち回り方が相当上手いので、参考にしてると、こう、奈緒さんをついイジつてしまうというか……今後は自重しとこう。

さて、その後も危なげなく奈緒さん、比奈さんと続き……菜々さんも、なんとか実に慣れた手つきでコントローラーを動かしてスターを入手。そんなこんなでボクの手番と相成った。

「氷菓ちゃん、コントローラー壊しちゃダメだからね！」

「壊さないよ!？」

ボクは一体何だと思われてるんだ。

そんなことしたら勿体ないし、何より筋力が無い。壊したって何も良いことは無い、と言わざるを得ないところだね。

「こうして近くで見るとよく分かるんですけど、氷菓ちゃんって時々ちよつとズレたこと考えてませんか？」

「時々どころかしよつちゆうだよ菜々さん」

「みたいですね」

「見た目はほぼ完璧って言ってもいいくらいクールなんツスけどね……」

「ご存じだか知らないですけどボクだって多少は怒るんですよ？」

そりやまあ人より多少閾値は高い方ですけども。

ともかく、そういうわけでボクもゲーム開始。事前に釘を刺された通り、どうにも人間にできるか怪しいようなことはせず、適度に……まあ、そこそこの範囲でできることだけをこなすことにした。

ルートを調整。最短距離を算出して、最適な動作でもってルート取りをして……あと、そこそこ見栄えがするように魅せプレイも差し込む……と、まあそこそこ程度ではあるけど、上手くいったんじゃないだろうか。

しかし、比奈さんは裏で一体何をしているんだろう？ 用意してるのは……もう一本のソフト？

「それじゃあ、ちよつとセーブして……ここでちよつと新しいソフトの方に交換しましょう」

「えっ？」

「何で？」

「いやあ……実はツスね。ネットユーザーから氷菓ちゃんにリクエストがあつて」

「はあ」

「紗南ちゃんがツイッターで『氷菓ちゃんが人力TASができる』みたいなこと呟いたらしいじゃないツスカ。そこで、ちよつとここで……つてことツス」

「な、なるほど……？」

そりやまあ、できるかと言われればできるけれども。それを今ここで……って言われると、ちよつとこう、いいの？ さつき紗南さんに釘さされたんだけど。

「ええと、じゃあ、まあ……」

紗南さんも促してくるし……言われた通り、電源を点ける。まあ、何とでもなるだろう。とりあえず、解析解析。これなら……こうして、ああして……よし。

「計測お願いします」
「了解」

紗南さんがストップウォッチを構える。指で押し込むのに合わせてゲームを開始した。

まずは恒例のゲーム開始直後の操作不能画面。ここで一分ほどが費やされていく。

そしてゲーム開始直後、目まぐるしい速度でマリオが動く動く。

「……何やってんだ？」

「乱数調整の舞じゃない？」

「できていいものなんですか!？」

「実際いま現実にできてるし……?」

実際、乱数は見えている。あとはここをこうしてドット単位の調整をして、位置取りを変えてやれば……と。

——ヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤツフウウ!!
マリオが飛んだ。

ケツで飛んだ。

物理法則に反して空を飛び、データとデータの隙間を縫って駆けて

いく。判定をズラし、誤魔化し、それこそ隙間を利用して別の画面へと抜けていく。そして十数秒も経つ頃には、およそ全ての行程を飛ばしてラスボスクッパのいるステージへ。五秒で終えてクッパのもとへ。そして爆殺。

「ジャンプト2分だ」

「……?!?!」

「ちよわ!と待てよ!?!」

「こんなの絶対おかしいよ!! ツス!」

「今の最高記録が何でしたっけ?」

「4分強?」

「だいたいこんな感じですよ」

「どうやって手動でやってるんだよ……?!?!」

「計算して?」

「計算ツスか」

「多分志希さんでもできると思います」

「できるんだ……」

「確かにできてもおかしくなさそうですけど」

でもまあ、やる必要は無いんだけどね……こういうの。

文字通りゲームそのものの寿命を縮めかねない(コントローラーも筐体もソフトも莫大な負担がかかる的な意味で)し、演算処理が死ぬほど手間だ。遊ぶなら普通に遊ぶのが一番だ。

「良い子は真似をしないように!」

「できてたまるか!」

なお後日、今回のルートがシラカワルートとして更に洗練され、記録を少しずつ更新されていくことになったが……余談だろう。

さて、記録の更新と引き換えに、本体に甚大……とまではいかずとも、やや後を引く程度のダメージを与えてしまったマリオだったが、

一通り終えたところで比奈さんが次のソフトを持って来た。

「じゃ、次行きましょう。『ゴールデンアイ 007』ツス」

「これはあたしも知ってるな。確かゲツ」

「FPSだね！ Wiiでリメイクもされてるはずだよ」

「スルーやめてくれ」

「対戦が中毒性がすごくて友達を呼んで一日中对戦を……………つて聞いたことありますよー！」

「リメイク版の方はかなり操作性なんかが違うらしいけどね」

「そツスね。今回は四人対戦をするつもりツス」

「おっ、対戦かぁ、いいね！」

対戦かぁ。今となつてはそこそこ人の心も勘定に入れられるようになって、未来予測もそれなりに精度が上がってきたけど……そもそもそれでだって、さつき言われたようにボク自身かなりズレてるころがあるから、どこまで通じるかって話になっちゃうんだよね。

まあ、だからこそ良い、というのもあるんだけどさ。対戦ゲームは人の心が介在してるからこそ、深読みして外したり、運に助けられたり、運が敵に回ったり。そういうままならない部分があるからこそ楽しいんだろう。

「紗南と氷菓有利じゃないか？」

「いやぁ、そこはほら、四人もいるから。集中的に狙われたりしたら分かんないよ？」

「あとボク対戦そこまで得意じゃないですし」

「さつきあれだけのことやつといてそれは説得力に欠けるツスけど」

「ボクは人の心が分からない」

「その言い方も言い方でどうかと思うツス……」

「どっかのセイバーか」

でも事実だからしょうがない。人の心とは常に機械や計算では計

り切れないものなのだ……みたいな、多分そんな感じ。

むしろ正確に最善手が見えているからこそ、そこから外れると未来予測が上手くいかなくなる。紗南さんとゲームする時はいつもそれでやられてるんだから困りものだ。

「順番はどうします?」

「最初はゲスト二人とあたしら二人で勝ち抜けかな?」

「負け抜けじゃなくてです?」

「多分この二人永遠に抜けないぞ」

「そこまでじゃないよ?」

「そうそう。二割程度は勝てるし」

八割勝てないとも言おう。

そこに関しては、まあ、しょうがないというか……紗南さんの読みとゲームに対する適応力がおかしいとも言おう。ボクに想定できないことを当然にスイーツとやりにくるから、本当に手に負えない。

「でも、FPSなら勝率はギリ四割まで持つていけると思う」

「だから氷菓ちゃんは怖いんだよねー」

「結局二人有利じゃないか!」

「そんなことなくてもなくもなくもなくも」

「とりあえず始めましょーよ……」

そんな比奈さんのボヤきに応じて、菜々さんと奈緒さんがジャンケンして順番を決める。どうやら今回は比奈さんが待機ということになったらしい。

さて、ゲーム開始だ。

まず最初はみんな特定の拳銃しか持ってないが、まずボクの最初の狙いは——スナイパーライフルだ。

「くっ、やっぱり狙撃狙ってる!」

「え、何？ そんなにヤバいのか？」
「なんかマズそうってのは確かですねえ」

紗南さんはそれを理解しているからか、最初からボクを狙いにきている。

フフフ……追われるってのは気分がいい。自分が比較的優位に立っている実感させてくれる……！

ここでのミスはあくまで「比較的」だ。実質的にはまだ薄氷の上であることを忘れてはならない。

「よし、見つけた」

「早っ！ うう、くっそお。こういう時どうするのが一番だっけ……」

「おっ、いたな紗南！ くらえっ！」

「あっ、ちよっ」

と、今度はボクへの対処を優先しすぎたせいかわ、奈緒さんの接近に気付けなかった紗南さんが一回死亡。これで残るライフはひとつだけ。

そして、ついでに——と。

「あっ!？」

「ビューティフォー……」

「今どうやって……」

「あっ、もしかしてこの豆粒みたいなのがそうか!？」

「奈緒さん正解」

「うわあ……これホントに氷菓ちゃんの独壇場になっちゃうんじや」

「大丈夫だよ。今倒した」

「!」

「何なんツスカこのもうプロやな——って感じの攻防戦」

「プロなんでしょう」

色んな意味で。

まあ、実際紗南さんは割とゲーマーとして熟達している。ボクは様々な問題を強引に解決していつてるんだが、その辺を踏まえると明らかに紗南さんの方がゲーマーとしては上だろう。

これで弱冠十五歳というのだから色々と卑怯だ。まあ、ゲームは触れ始めた年齢や反射神経、思考能力が重要になるから、年齢は関係ないと言えばそれもその通り。

その後は黄金銃を手に入れた紗南さんが無双を始めたり、そんな紗南さんをヘッドショットしてみたり、時に横槍を入れられて全滅したり……と、全体的にわちゃわちゃと、騒ぎ回るようにみんなで対戦を楽しんだ。

しかし、うん。やっぱりボクはどっちかって言うとFPSとかの方が好きだと分かった。

対戦ゲーム……例えば格闘ゲームになると、どうしても常に行動を選択することを迫られるし、対戦要素のあるRPGとなると、読めないか読みやすいかの両極端になってしまう。こういう、複数人の思惑が交錯してやり取りし合ったり、時に逃げたり、あるいはあえて立ち向かって見たり……と、最善手というものが存在しない方が楽しいというか。決まりきった手ばかりだと、マンネリ化してどん詰まりになる。自由な選択肢が取れる方が、ボクとしてはやっぱり楽しいと思える。

「あー、結構やったなあ……」

「どっちも名作だけあって随分楽しめましたね！」

「ちよつとハッスルしすぎた気もするツスけど、楽しかった……ツスよね？」

「はい、勿論」

「うん！ やっぱいいよねレトロゲー。ね、氷菓ちゃん！」

「そだね。今度交換機を買ってみるのもアリかなあ」

「その時はやらせてね……」

「へっへっへ、よく分かっていますぞ旦那」

「そこ、小芝居始めない」

「すみませーん」

へっへっへ……でも奈緒さんもちよつとやりたそうにしてるの見えたし、ボクの部屋に来たならその時はみんなのできるように調整しとかないと。

コントローラー、あるかなあ。お金は……施設の分以外はだいたい貯金してるかアイス買ってるかでそんなに使ってないし、買う分には問題無いか。

「しかし今回は紗南ちゃんのスーパープレイも、氷菓ちゃんの意外な一面も見ることができましたねえ」

「意外なっていうか……」

「寮だともっとダラツとしてるし、今日よりもうちよつとヒドいよ?」

「そうなんツスか?」

「プライベートですから。それを言うなら紗南さんだつて」

「へへーん、ゲームする時は真剣だもんねっ」

「宿題を忘れるほど熱中」

「うゝっ」

「うゝっ」

「うゝうゝっ」

「何で今奈緒ちゃんと菜々さんがダメージ受けたんツスか!？」

……ええと、きつと何かあるんだろう。菜々さんに関しては。

奈緒さんはあれだ。自分もよくラノベ読んだり深夜アニメ見てたりで宿題忘れてたりするんだ。実際この前受験勉強勉強教えに行った時に見た。

「じゃ、今回はここまでツスカねー。それじゃあ皆さんお疲れ様でしたー」

「「「お疲れ様でしたー」」」

始まった時と同じく、ややダラツとした空気の中で撮影を終える。そもそもこの番組の気風というやつだ。ドラマなんかの撮影だともっとビシツとしていることが多いんだけど、こういう撮影もこういう撮影でいいものだなあ……。

「で、次の撮影なんツスけど」

「あつ」

「あ、そうだった」

——と、しみじみとしているところに声がかかる。そうだそうだ、忘れてた。この番組、一回の収録で二回分撮るんだ。笑点みたく。次に比奈さんが取り出したのは……今度は、最近のソフトとゲーム機。

「次は、PS4のFPS、『タイタンフォール2』とリマスター版『DアーARK SソUウルLス』の二作をやってもらいます」

「おおっ」

「へへっ。つてことは、また……」

「……対戦……だな……」

そこはもしかするとC協OカOカPカかもしれない。

まあ、でも、改めて撮影を始めるまで分からない。そういう和やかでふんわりした雰囲気も、いいところじゃないだろうか。

……そんなこんなで、今日の趣味全振りの番組収録は夜まで楽しんで撮影ができたのであった。

だいたいゲームしてるだけだったけど。

オムニバス：その①

◆ ソシヤゲの沼 ◆

「とういわけでコレなんだけど」

「ソシヤゲ？ ロボットものか、これ？」

ある昼下がり、ボクはクローネのプロジェクトルームで奈緒さんとアリスさんを前にしてスマホの画面を見せていた。

内容は知つての通り、ソーシャルゲーム「グランドレッドインフアントリー」。二人はやや怪訝な顔でその画面を見ていた。

「この前言つてたソーシャルゲームですよ？ 私、こういうの、あんまり好きじゃありません」

「ありすは前から言ってるしなあ」

「はつきり言つて単なる集金システムですよ。ゲーム自体もそんなに面白いものじゃないはずですよ」

「はずって」

「まあ確かに何年か前までは一本調子で面白くないヤツも多かったけど、最近は本格的なRPGとか戦略SLGだったりシナリオに力入れているやつも増えてきて、あたしとしては最近は特にFG——」

「これ、はつきり言えばスパロボとかと同じようなゲーム性だから、そこまで心配するほどつまんなくはないと思うよ」

「そうですか？」

「遮られた！」

奈緒さんはちよつと話が長くなりすぎる傾向にあるので、適当なところで遮つて、先にこっちの用件を告げておくのが一番いい——というのが加蓮さんの対応法である。

「で、何でコレを？」

「ボクこれに出演してるので、知り合いにちよつと広めてみてほしいって運営の人からお願ひされちゃって」

「本物の運営の回し者初めて見た」

「回し者ですよね」

「まあ回し者だけど」

そこに関しては否定できる要素が無い。だってボク完璧に関係者だもの。

ただ、そういう身内補正とか抜きに、スタッフさんの熱意はすさまじいものがあると思う。

声優さんの選定に苦慮するとはいえ、全キャラにL2D完備というイカれっぷりにレビューサイトも困惑であった。

「まあ、やらない分には仕方ないけど」

「誰もやらないとは言ってないぞ！ なあありす」

「は、はい。それはまあ」

良かった。流石にこの段階で断られてたらちよつとショックだった。

ソシヤゲに対してお金を使いたくないっていう気持ち自体は、まあ分かるけど。使う人は本当に際限なく使っちゃうだろうし。

「氷菓がやってる役って確か、えーつと……あつた、これだ」

「このキャラクターですか。随分その……」

「ニツチなところ突いてきてるな……」

「まあ、うん……」

軍人で、強キャラで、傲岸不遜なように見えて無駄に面倒見が良い。オマケに性転換キャラ。マニアックと言われても仕方ない部分はあ

ると思う。

それはそれとしてサービス開始当初からの人気キャラでもあるのだけど。理由はボクに聞かれても困る。

「二種のキャラゲーだから、あんまり本気になりすぎずに気に入ったキャラを適度に育てるくらいの感覚でいいと思うよ」

「そうだよなー。でもあたしも結構アニメとか見てきてるし、ハードル上がっちゃうぞ」

「フリですか？」

「違うよ！」

「でも奈緒さん一期ごとに嫁とか婿とか増えてそうな感じだし」

「そ、そそそそんなことないぞお！」

凶星なようだ。

でもそういうの奈緒さんだけじゃないから別に気にしなくてもいいのに。

——その後、本人曰く「独り言が多くなるから」という理由で奈緒さんは一時離脱して帰宅。アリスさんは寮のボクの部屋でやる、という運びになった。

シロがいるせいかななのか、その場で即座に最高レアを引いていたのは……晶葉には言わないでおこう。

その後、何のかんのあつて奈緒さんは大爆死し、アリスさんはそこそこの程度に引くだけに留めることで無駄なお金を使うことを回避した。

晶葉は相変わらずの爆死っぷりであった。

「ふむ、これはなんとも」

「ほうほう……」

現在、ボクはある意味で途轍もない危機に陥っていた。

いや、危機というかなんというか……あえて表現するなら危機としか言いようがないというか。

人気番組、トンデモ鑑定団。その鑑定品の一つに——その昔、ボクが描いた贋作のうちの一つが紛れ込んでいたのだった。

——さて、まず最初の問題としては、そもそも何でボクがこんな番組に出ているか……だけど、これに関しては簡単だ。おじじが出演するのに付き合わされているから、である。

実はおじじだけど、この前の家族騒動以前から陸おかに上がっている。これまでに世界中を巡ってきた経験を活かして、映画用の小物や装飾品などを仕入れて貸し出す会社を興したのだ。346プロとも提携しており、業績としてはすつかり順風満帆だ。

で、お金もできたし、以前から何となく欲しかった美術品を手に入れたので鑑定団に応募したら、これが見事に当選。スタジオ収録に呼ばれることになってしまった。

そもそもボク自身は出演するつもりは無かった。……のだけど、おじじが偶然鑑定団のスタジオ出演に呼ばれた件について話したら専務さんに知られ、じゃあこの際だし家族であることをアピールするためにもついでに出てもらおう……という話運びで、観覧席に座ることになってしまったのだった。

しかし、そんな折にお出しされたのが、どうもボクが過去に描いたらしき贋作。ボクとおじじは二人揃って内心アタフタだった。

「……あれどこに売ったやつ?」

「……どこの好事家だったと思うが、顧客リストでも見んことには分からん」

販路に関しては完全におじじたちに任せていたのが不幸だったか、ボクにもその辺は分からない。

ただ、贋作商というのは、相手に贋作であることを理解してもらってから売るものだ。まあ、贋作と言うよりはあくまで「複製」と呼ぶのが正しいのだろうけど……売り先は主に学校での教材用だったり、複製画の展覧会用にだったりというのが主だ。こんな風に、個人の手に「本物」として渡ることはまず無いと言っている。

となると、流れてきた大元は……個人的に複製画を自宅に置いておきたいという好事家が、飽きて古物商に手放して、そこから本物と勘違いして……というあたりだろうか。本来なら刻んであるはずの「H・S」のサインも消えているようだ。今はH・Kだが。変態仮面ではない。

「……………」

「……………」

ナビゲーターのマキノさんと頼子さんも、こちらの様子を見て事情を察したらしい。

片や苦笑いで、片や呆れたように額に軽く手を当てていた。

「……………」

「……………」

た、す、け、て、と軽く口を動かして頼子さんに懇願を向ける。こんな時に一番頼りになるのは頼子さんだけだ。文字通りの意味で。

しばらく、食い入るように画を見つめる頼子さんとマキノさん。記憶と照合して違いを探しているのだろう。マキノさんは思い出せなかったのか、少しすると諦めたように目頭を軽く揉んでいた。

「…………あの、先生。少しお話が」

そんな中で頼子さんはどうかその相違点について気付いたのか、こつそりと鑑定士の先生に耳打ちをした。

先生方の中でも意見が色々に分かれていたらしく、後で聞くところによると、頼子さんのこの一言がきっかけで贋作と判別できたのだとか。以前、見分け方について少し助力した甲斐があつたものだと思う。

……で、結局鑑定額は五万円。絵の出来が良いからということ値段に色はついたが、偽物は偽物である——とのこと。

この一件があつた結果、頼子さんが美術品の目利きができる17歳ということだ話題になったのだけど、それはまた別のお話。

◆ シンデレラな前世占い ◆

「……ですか？」

「そう！ どう？ ロックじゃない？」

「ロックじゃあないかにやあ……」

とある日、ボクはシンデレラプロジェクトの地下ルームの方にお邪魔していた。

今日この日にいたのは、打ち合わせ(?) 中のアスタリスクのお二人と、トライアドプリムスのお仕事で凜さんが抜けている状態のニュージエネのお二人、更にキャンディアイランドの御三方だったり、「Happy Happy Twin」で「あんきら!?! 狂騒曲」の打ち合わせのためにいるきらりさんだったり……と、かなり豪華な面々である。

ちよつとアーニヤさんと組みますよということでお話を伺いに来ただけだというのに、なんともはや圧倒されて仕方ない状況でもあつ

た。

「前世ねー。氷菓だから実はどっかの妖精さんだったりしても驚かないよ杏は」

「杏ちゃんがそれ言うー?」

「あ、あははは……」

「? 卯月ちゃん、どうしたの……?」

「んん、まあ色々あるんだよ。うんっ……」

卯月さんと未央さん、ボクの経歴については知ってるから前世占いの何のと言われるとちよっと言葉にしづらいところがあるんだろうか。杏さんはその点なんというか巧いな。下手に気にしてる風じゃなくて、適当にからかっている感がよく出てる。というか仮に知らなくても言いそう。

「まあみくはネコちゃんだよね! 間違いなく!!」

「ネコ科ではありそうだけど豹とかそっちっぽそう」

「関西出身だし……」

「何でそっちピツクアツプするんだにやあ!?!」

「氷菓ちゃんはー……お花みたいな感じもすゆっ☆」

「ええっと、雪の花の妖精さん……とか、ですか?」

「ちえりん混ざってる混ざってる」

そんな可愛らしいモンじゃないんだよなあ、というのはい部含めた関係者は分かっている話だが、そこところは語れない。

でもそもそもいかつい外見じゃなかったのは確かだし、むしろ今に通じる程度には当てもモヤシだったし……モヤシの妖精かな?

「あつ、出たよ。このサイトで前世が調べられます、だって」

「おつ、かな子ナイス! じゃ、ちよつとやってみよーよ!」

「誰からやる?」

「そりゃーまあ話題に出てる氷菓ちゃん……は一旦置いて」
「置いてくんですか」

「私美味しいものは最後に取っとく派なんだよね」

いや、それもそれで……どうだろう。

まあ、別にこんな程度のそれでバレルようなことはまず無いだろうし、遊びにはいいか……。

「それじゃあ、最初はその氷菓ちゃんに指名してもらおうのはどうかな？」

「いいねっ！　じゃあひよかちゃんお願い！」

「え。えー……それじゃあまずは卯月さんからで」

「あつ、はい！　頑張ります！」

「しまむー、これ頑張る要素どこ？」

回答を、だろうか。

何にしてもそんなに気を張るようなことじゃないけど。

で、みくさんがキリンと診断されて死んだ目を晒してみたり、かな子さんがそもそも生物でならないバームクーヘンなどと言われてしまったり、李衣菜さんなんかはロックミュージシャンと言われて大喜びしてみたり——と、なんというか一言で語り切れないような内容の占いを終えてボクの番。ほんのちよつと緊張しながらも必要事項を入力してみる。

「幸福の王子様。献身的で人のために尽くして命を散らした悲劇の人

……ねえ」

「おうふ」

「ひよ、氷菓ちゃん、それはちよつと……」

「色んな意味でキツイんだけど大丈夫かな……」

「そんなに言うほど……？」

い、一応遊びのつもりだよね？ そんな意図を込めて杏さんに視線を送ってみる。返ってきた視線には「諦めろ」との意がしつかりと込められていた。ちくせう。

事情をしつかり理解してる人は勿論のこと、そうじゃない人もなんとなく変な部分で察してしまうのだから。

……うん、こういう結果を出すサイトが悪い。そういう風に強引に結論付けることにして、ボクはその場を締めくくった。

◆ ショッピングエリクシア ◆

ボクの錬金術が色々万能なのは知ってるの通りだけど、それはそれとして別に買いたい物が必要ないわけじゃない。

何せ当のボク自身に創造性が無いわけで、例えば服なんかを作ろうと思うと大抵無地の白Tシャツとかになってしまったりする。

もつとも、そこを含めて何とかしようと努力するのも、錬金術師としての修行なのだろうけども……そんなわけだし、必需品だったり、その場で思いつかなくて現地に行つてやっと気付くようなものだったり——というものもあるので、外で買いたい物をする機会というのは決して少なくはない。

「そろそろボクも何か仕掛けてみる頃だろうか」

「いきなり何を言い出すんだ」

「いやね、いつもはボクストッパー役というか何もせずに見てる方じゃん。けどそろそろ何か実験でもしてみるべき頃合いかと思って」

「いいね！ 何やるの？」

「それが問題なんだよね。別にやりたいことがあるでもないし、実験なら他人で試す必要無いし」

「ひよーかちゃんはローコストだもんねー」

薬なら志希さんの専門分野だし、ロボットなら晶葉の専門分野。大概において実験と言ってもボクがしようかなとふと思ったものはどちらかが先にやっているし、仮に実験をしようと思っても、錬金術Ⅱ「あちら」の技術を人前に晒すことになりかねないため、安易にやるわけにはいかなかったりもする。

「やっぱボクは人のサポートに回ってこそなのかもね」

「そういう部分はあるしそうだ。ちよつとそのパーツの検査頼めるか?」

「ん。手前から四番目右から二番目が一番いいよ」

「ついでにこつちもおねがーい」

「調合用ならむしろ幅が出る方が良さと思うから志希さんの直感で選ぶくらいでいいんじゃない? 純度高いのが要るなら買ってからボクの方に貸してよ」

「あいあーい♪」

その分、二人の実験や何やには色々と付き合うことにはしている。今日やってきたのは、総合的な化学薬品だったり機械用品だったりを取り扱っている店だ。ややアングラな趣もあるが、その分マニアックな素材を売っていることも多いため、色々と重宝している。

「そういえば前に言っていた、エリクシールの調合などはできないのか?」

「できたらちよーだい♪」

「作り方教えたなら志希さんでもできるんじゃない?」

「んーでもあたしがやるよりひよーかちゃんがやる方がイイって感じがするからいつかな?」

「何それ」

「サイエンティストの勘ってヤツ♪」

「把握」

「把握しちやったか」

そういう勘は馬鹿にできないからね。それこそ志希さんクラスの化学者に関しては。

晶葉だつて似たような経験はあるんじゃないだろうか。配線だつたりAIだつたり。理論上成立していない状況でも、勘に従つてみてやったらできたみたい。だからツツコミきれてないとも言えるのだが。

「今度こそスタエナとの調合を確立させたいんだけどなあ」

「それマジでヤバイやつじゃないのか？」

「でもヤバイからこそ手を出したくなるよね？」

「それもその通りだ」

「んでんで、成功の基準は？」

「プロデューサーの疲労がすっかり消えて菜々さんの肌年齢が17歳そのものになるくらい」

「道は遠いな……」

「そうだね」

言いつつボクはボクで市販のエナドリなどを買い物かごに放り込んでいく。

確かに道は多少遠いかもしれないけれど、そもそもその道を創り出してショートカットしてこそその錬金術師。頭の中で理論を適度に構築しながら、この後も晶葉の目当てのジャンクパーツの選別を手伝ったり、志希さんのお薬の材料に目星を付けたりなどして過ごすことにした。

後日、プロデューサーの疲労が消え去つたり消えてなかったり、あるいは断続的に謎の筋肉痛が現れたり、菜々さんの腰痛が改善されたり逆に腹痛が増えたり何だりしたのはまた別のお話。

◆ I F：もしも錬金術を隠さなかったら ◆

人は過ちを繰り返す。

かつての時代、かつての日。あるアイドルの言葉によって、世界は一変した。

——錬金術という遺失技術が存在します。

科学にとつて代わられるだけだった「それ」を、彼女は拾い上げ、己がものとして身に着けた。

錬金術を活用した彼女のステージは変幻自在。彼女自身が創り上げ、あるいは作り変えるそれは、現実にはあり得ざる煌びやかさで見る者を圧倒し、圧倒的とも言えるパフォーマンスによつて観客を魅了した。文字通り、観客は黄金のような時を過ごし、珠玉の体験をしたと言う。

あまりに非現実的な体験故に、疑惑の目が向けられた。その結果として放たれた答えが、これだ。

文字通りの非現実性。凡百に再現できないその能力により、その少女は一躍トップスターとなった。

しかし、その栄華は長く続かなかつた。

規格外とも言えるその能力に目を付けた者がいた。

煌びやかなステージを作り出す？

見る者を魅了する？

否。そんなことよりも、もつと活用すべきものがある——と。

あらゆる国、あらゆる組織が彼女へ接触した。その全てにおいて拒絶を示したが、こういった「客」が絶えることは無い。

やがて、半年と経たずに彼女は消息を絶った。自身の存在が無用な争いを呼ぶことを危惧したものとされている。

しかし——その事実に対して、黙っている者はいない。
あの技術は何だ。錬金術とは何だ。あれほどの力は何なんだ。
欲しい。

その力があれば、より世界は発展する。その力があれば、より高次の軍事力を得られる。その力があれば……。

人々は求めた。そして、古い錬金術ふるの資料や、あるいは彼女が残したと思しき資料——彼女の元居宅などに押し入って強奪したという見方が有力——により、再び世界は錬金術という禁断の果実を手に入れたのだ。

そんな中、ある国が錬金術を用いた兵器、物質分解弾頭、通称「ジャガーノート」の開発に成功。各国もこれに追従し、独自の兵器と兵力を得た。

張り詰めた糸のような緊張状態は長く続かない。やがて、世界は第三次大戦の時を迎えることとなる。

分解兵器の応酬、応酬、応酬……山は削れ、海は枯れ、草木は死に大地は砕けた。20XX年のことである。

文明は崩壊。何一つとして、遺されるものは無かった。

しかし、人間は死滅してはいなかった。死した大地に再び立ち上がり、歩き出したのだ。

しかし——人は、過ちを繰り返す。

「ヒャーハハハハア！ 逃げろ逃げろ〜！」

「男は殺せ〜！ 女も殺せ〜！」

「死んだヤツだけ可愛がつてやるぜえ〜！ ギャーハツハツハ！」
「くっ……」

文明崩壊後の廃墟の街を行く者がいた。

一つは、街から街へ行く隊商。もう一つは、下品に声を上げ、暴虐の限りを尽くす悪漢モヒカンである。

文明が崩壊したその後、既存の秩序もまた崩壊した。旧来の法は一切の意味を失い、力こそが正義という世に変わってしまった。

理性を失った者たちは暴力により己の欲を満たし、弱者は淘汰される——その光景はもはや、地獄と言つても過言ではない。

「に、逃げなさい！」

隊商の中から、一人の男が飛び出した。不健康的に痩せた男だ。悲壮な決意に瞳を染めて、巨大な鉄馬バイクを駆る悪漢モヒカンの前へと躍り出て、その身を盾にする。

「ヒーハー！ とんでもねえバカだぜえ〜！」

「わざわざ死にに來たんじゃねえ〜かあ〜!？」

「けなげな〜！」

巨大なバイクが悪路を粉碎しながら進む。その暴威に抗える者など、存在するはずはない。

「ヒヤツ？」

そのはずだった。

その瞬間に、蒼い風が駆け抜ける。「それ」が吹き抜けた直後、悪漢モヒカンの持つ武器は程度の低い玩具と化し、バイクもまた、もの言わぬ木馬と化した。

何が起きたのだ、と隊商は困惑の声を上げる。やがて、その声に応じるようにして小さな足音が廢墟の街に響いた。

「無粋だ」

その先にあるのは、蒼い色彩。

吸い込まれそうなほどの美を携えた——魔性。

「偶像アイドルのステージに暴力は必要ない」

その声はあらゆる存在を屈服させるほどの覇気に満ちていた。その言葉は魔法めいて周囲の人間の脳に浸透し、魂を揺らす。

やがて、「それ」が近づくにつれて廃墟の様相が移り変わっていくことに気付く。灰色の武骨なコンクリートが、美しい白亜の壁に。ネオンライトで彩られたその空間は、まるで旧時代の「アイドル」のステージを思い起こさせるものだった。

「——ここは私の戦場だ。ステージ 確しかと清聴しろ」

@ ——— @

「ナニコレ」

「もしものシミュレーション?」

「ははーんもしかして馬鹿だったんだなキミ?」

「失礼な」

◆ 日常ふだんの錬金術（もしも錬金術を隠さなかったら：続き） ◆

「そもそも誰だこれは」

ある曇天の昼のこと。

ロボットや機械を作るのに湿気が良くないということ、ボクの部屋に訪れた晶葉だが……モニタを見るなり、ボクに対してそんなことを問いかけた。

画面には、ボクと同じく青い髪を持った女性が凛々しく舞い、歌う姿を映している。まあ、一見しただけじゃ誰か分かんないのも無理はないが。

ちなみに話はズレるけど、トンテンカンと機械を弄っている音が気に入らないせいか、シロはベッドの下に隠れている。

「ボクだよ」

「は？」

「や、だからボクだって」

「いやそもそもキミはここにいるだろう」

「だからまあ正確に言うとなボクじゃないんだけど」

「まるで意味が分からんぞ」

「まあ色々やっててさ。コピーみたいなものだよ」

「……いや、もうちよつと詳しく」

何がそんなに晶葉の琴線に触れたのだろうか。ここまで食いついて来るのもなかなか無いけど……。

「疑似的に並行世界を作り出して」

「その時点で意味が分からないんだが!」

「えー……」

「そんな『何で分からないの?』的な目で見ると私は天才だけど凡才でもあるんだぞ」

「一文で矛盾してる」

いや分かるけど。

晶葉はロボット分野の天才には違いない。けれども、他の分野についてもそうだというわけじゃない。実は理数系以外の科目はあんまり得意じゃないし、アイドル活動ではミスしたりもする。その分、二度と同じミスをしないように、あるいは本番では絶対にそんなミスをしてしまうように、血の滲むような努力を繰り返しているのだけ。言ってしまうえば、ロボット工学の天才でもあり努力の天才でもある、というところだ。毎回付き合っているボクは割とボロボロである。

「マクロコスモスとマイクロコスモスって言って分かる?」

「……遊戯王?」

「じゃなくて。大きな宇宙……いわゆるボクらの生きてるこの宇宙

……には、対になるように小さい宇宙……この場合は人間だね。そういうものが存在するんだっていうこと」

「よくわからん」

「まあ詳しくはwiki○ediaでも見てよ」

「なんて雑な」

「ともかくそういう、錬金術にも通じる理論があるんだよ。で、ホムンクルスって言うって分かる？」

「そっちは分かるぞ。人造人間とかそういうやつだったな？」

「うん。で、まずそれを作って」

「サラツと恐ろしいことを言ったな」

あつちの錬金術師にとつては割合普通のことである。

「そのホムンクルスを量子分解して」

「一気に残酷になったぞ!」

「別に生命体じゃないから」

「そういう問題じゃないんだが!」

「まあそういうわけで、このフラスコを外界と切り離すことで、ホムンクルスという『小宇宙』を『大宇宙』に見立てることで小さな宇宙をフラスコの中に創り出したんだけど」

「よく分からないのは変わらない上にスルーをするな!」

「スルーをするーな?」

「ホントに楓に似てきたな……」

って言ってもツツコミにノリ続けてたら永遠に説明ができないじゃないか。

というわけで、いちいちノらずに説明だけしておく。

「疑似的な大宇宙が完成すればあとは対応する形として小宇宙、人間ミクروسモスが生じる。あとは環境をこっちの世界と同じように整えて、脳波をトレースした上である程度同じ人物を配置して……ボクの分身を配置

して……ってやって」

「軽々話してるが私たちより遥かにヤバいことやってないかキミ」

「多少はいいじゃん」

「悪いとは言っていない」

「そつか。で、このフラスコの中並行世界だと、ボクは錬金術のことを公表しちゃつて」

「うむ」

「その因果が巡り巡ってポストアポカリプス」

「Falloutか何かか」

「どっちかって言うとマッドマックス……?」

「メタルな方かもしれんな」

マッドマックスはいいぞ。そんなことを眩きながら、ボクは手元にグラスを錬成してボトルのジュースを注いだ。

「そんなに便利だからな」

「まーね」

「ついでにコンデンサ作ってくれ」

「はいよー」

言われて、晶葉の手元にコンデンサを作り出す。

ぱちんと軽く指を弾けば、そこですぐに晶葉の手の中にコンデンサが錬成された。現在進行形で晶葉が何を作ってるのかは分からないが、多分ロクでもないものだろう。結果は見たいので止める気も無いが。

「で、あの究極体氷菓は?」

「どっちかって言うとスカルグレイモンの方面だけど、ポストアポカリプス世界に対応しなきゃいけないから、百年がかりで作り上げた究極体って感じ」

「百……?」

「だいたい一日で一年経つように時間調整してるから」

「ああ、そういうやつか」

ゲームや何やでよくあるそういうやつである。

「こつちではそうしないのか？」

「しばらくは自然の成長に任せるから」

まあ、適当な年齢になったらそこで固定すると思うけど。

開祖様みたいなもんだ。開祖様は開祖様であるの姿が自分にとって最適、かつ最優だと思ったからこそあの姿なわけで。錬金術師として、ボクだって同じようにしちやいけないうって縛りはそもそも無い。まあ、混乱を呼ばないためにも一回老衰してみたり……っていうプロセスは必要になると思うけど。

「で、私はどうなってるんだ？」

「全身機械化してエデン大統領みたいになってボクのバックアップしてたよ」

「私エ……」

なあに百年以上生きて開祖様みたく追われる立場になりながら、戦場に乱入して武器を分解して文字通り偶像アイドルやってるボクよりマシだ。

何なんだアレ。本当に何なんだアレ。多分錬金術の存在広めちゃって責任感じてあんなんなっちゃったんだろうけど、それにしてもつと良い方法あっただろうに。ほぼボク自身のことだから、また何か努力の方向性間違っただろうなあとには思うけど。もうちよつとなんとかならんかったのかアレは。

「人間って難しいね」

「キミが言うの意味深に聞こえるからやめるんだ」

オムニバス：その②

◆ お勉強会 ◆

受験、とひとくくりに言ってみても、その種類は様々だ。

中学受験、高校受験、大学受験。場合によっては資格試験も。そもそも試「験」を「受」けるといふ意味から考えると、中間・期末テストもこの範疇に含まれるだろうか。

しかしながら、ボクは基本勉強をしない。というのは、試験範囲程度ならだいたい丸暗記しているからだ。

後天的な映像記憶能力というか……だいたい万能の錬金術のせいというか。真理ってすごい。ボクは色んな意味でそう思った。あんまり融通きかないけど。おかげで理数系は満点である。文系？ 知らんな。記述問題は死ぬほどムラがあるとは、前の学校で評されはしたが。

さて、ともかく。

十一月。時期的には、高校・大学受験を控えた人たちがラストスパートに入る頃だ。

そして同時に、そろそろ期末試験を視野に入れられないといけない時期でもある。

「そんなわけで、今日はカラオケにやってきたわけだけど」
「なして!?!」

そんな日に、ボクと葵さん、なるみやゆめ成宮由愛さんとうじいえ氏家むつみさんの四人はとあるカラオケボックスに、勉強道具持参でやってきていた。

もう店内には入っちゃったのに、葵さんはノリがいいなあ。

「勉強って言ったたら、普通は……もつと、落ち着いた場所でやるものだ
と思っただんですけど……」

「それも正解。勉強に正攻法はあっても正解は人それぞれだから、今回はとにかく記憶を焼き付ける方法を紹介だけしようと思って」

「なるほど?」

「つまり一種の冒険というやつで」

「なるほど!」

「むつみちゃんはそれでええん!」

「良くはないけど多分考えはあるんだろうなって」

その辺むつみさんはちよつとクレバーな部分もあつたりする。

危険を冒すと書いて冒険と読むが、前準備をしない冒険家はいないし、時には実利を取ることもあるのである。実際ボクもそれはやった。

「やり方が合わなければ別の方法も考えるし、今回はあくまで一例だから」

「そういうんなら気にはせんけども……」

「それで、どういう方法なんですか?」

「うん。記憶を焼き付けて、自由に引き出せるようにするには、ある程度強烈な印象があつた方がいい……っていうのは分かる?」

「たまに、自分で自分の頬をつねったら覚える……という方法は、聞きますよね」

「そんな感じ。強烈な記憶に対応させて焼き付けることで、より効率的に思い出せるようにするような感じだね」

言いつつ、機械を使って曲を入力する。曲はいつも通りの「お願い!シンデレラ」。芸がないと笑わば笑え。多分これが一番分かりやすいからいいんだ。

「それで、カラオケってというのは?」

「歌と、記憶したい事柄を結びつけるためにいいかなと思って。普段、勉強してる時に音楽聞いているかは分からないけど……」

「あたしは聞いとーよ」

「私は……ちよつと」

「私は聞いている時もあるしそうじゃない時もある、かな」

「ん。でさ、これは紗南さんに聞いた話なんだけど、無音でゲームしてる時にBGMである曲を聞いているらしいんだけど、他の場面でその曲が聞こえてきたら、何故かそのゲームのこと思い出しちゃうんだって。で、今回はその応用。聞いただけじゃなくて実際に歌うことで更に印象を強めて、テスト中に歌を思い出すことで、連動して公式なんかも思い出せるようにしよう、ってこと」

「え、勉強は？」

「歌ってる最中にもしてもらおうよ」

「わぁお……」

確かにちよつと……いや結構……だいぶ……うん、間抜けな絵面になりそうだけど、それはもちよつと気にしない方向で行ってもらいたい。

「勉強に対して抵抗感を覚える人もいるでしょ？」

「まあ、それは……避けて通れない部分っていうか、ね」

「カラオケに来たのはその対策も含めてなんだよ。軽い息抜きも含め、遊び気分で勉強してもらおうってことで」

『楽しく自然にやる』っていうのが大事、ってことだね」

「そだね。それが一番大事かも」

「氷菓ちゃんはそうやってるんよね？」

「いや、ボクは一回見たらだいたい丸覚えしちゃうから」

「うわぁ」

「ドン引きするのやめて」

別に嘘言ってるわけじゃないし。勉強法含め。

なにぶん施設の子たちも勉強が嫌い嫌いでしょうがない子が多いんだ。そこで、なんとかして覚えてもらおうと思って調べたし、ボ

ク自身も学んだわけだ。

「普段の勉強会……あの、高校生対象のものも、こんな風にやってるんですか？」

「いや、そっちはちよつと違うかな……」

「何で？」

「センター試験の出題範囲に対してどの辺が苦手かを把握しておかないといけないから。最初に何回か模試形式でテストして、その後から弱点を補強する形で、その人に合わせた勉強会……みたいなことをすることになるんだよ」

「……水菓ちゃん、本当に14歳？」

「多分ボクと同じ年くらいの頃の志希さんも同じことできるから大丈夫」

やらないだろうけど。

ともかく、そんな感じで本日の勉強会inカラオケもつつがなく進行していった。

◆ おつとらあめん発見伝 ◆

「ええいだめだだめだこんなんじゃ！」

その日、ボクは混迷の最中にいた。

三日後に控えるときら学園料理部の収録——それ自体は問題無くとも、それに付随するものに特大の問題があったからだ。

765プロ所属Sランクアイドル、四条貴音さん。

恐るべきことに、どうも「346の料理上手い子がラーメン作るら

「いいよ」と伝わったらその時点で「ではわたくしも出ます」と即決したのだとか。

問題——と表現したが、超有名アイドルが来るということで作成側としてはWin、好きなラーメンを食べることができるということで貴音さんもWinという理想的なビジネスが成立してはいた。そのラーメンを作らなきゃいけないボクへの負担が恐ろしいことになっているだけで。

そもそも、ラーメンを作るにあたってすら問題があるのだ。

貴音さんは無類のラーメン好き……いや、らめん好きとして名を馳せている人だ。特にとんこつラーメンが好きだという話もあるけど……今は一旦置いておこうか。特に好き、というだけで他のラーメンを受け付けられないわけじゃなく、全体的にまんべんなく食べるらしいとも聞くし。

じゃあ、作るべきラーメンは何か？ という話になってくるわけだけど、そこが大きな問題だ。

貴音さんがとんこつが好きだからと言って即座にとんこつに走ろうとするのは、なんだかとてもあざとい気がする。

じゃあ——ということでは他のラーメンを考えると、例えばラーメン選手権で日本一になったようなものが思い浮かぶが……単純な模倣では、多分見透かされる。しかし、アレンジを加えようにも、そういつたものは基本的に既に完成されていて、手の加えようがあまりない。

——結果、既に数日間も苦悩を重ねてしまっている。それでいて何も思い浮かばないのだから、もうどうしようもない。ちくしょう。

「……どうしたらいいかな、七海ちゃん」

「難しいれすね〜」

というわけで七海ちゃんのもとに相談しに来たのだが、どうにもこうにも。

ラーメンのスープでは魚介類が多く使われている。昆布に鰹節、場合によってはサバ節や鮎節なども。とはいえそればかりじゃなく、野

菜出汁や鶏、豚などを使用することも多いのだけど……ともかく、現状で最も頼れる相手に頼らない理由がないわけで。

「七海は鰹と昆布のお出汁の塩ラーメンが好きですが、やっぱり味は似通っちゃうんれすよね〜……」

「シンプルってそういうことだからね……」

「氷菓ちゃんはどーしたいんれすか？」

「う、うーん……どうしたい……どうしたいか……」

そもそもボクはそこまでラーメン食べない。一杯でお腹いっぱいというかもう張り裂けそうになるし。

でもしいて言うなら、やっぱり好みは醤油……だろうか。次点で塩。逆にとんこつはちよつと厳しい。味噌は太麺じゃなければなんとか。

「醤油かなあ」

「なら、いりこれす！」

「いりこ。煮干し？」

「れすねー。東京探しても色々名店があるはずれす」

「なるほど……」

「それに海さんの地元にもあるはずれすし、話を聞くといいかも……？」

「海さん？」

杉坂海さんすぎさかうみ——確か山口県の出身だっけ。

海に面した……いや、三方を海に囲まれてるから正確にどこかっていうのは分からないけど——町の出身っていう話だし、趣味もワインドサーフィンで海に関係してるから、七海ちゃんと気が合ったのかもしれない。

そういうことなら、ということ連絡をつけてもらう。どうやら運よく仕事の時間ではなかったようで、普通に通話はできるようだっ

た。

「もしもし、氷菓です」

『もしもし〜？ どうしたの急に？』

「あ、はい。ちよつと突然のことで申し訳ないというか、話題がちよつとアレなんですけど……地元ラーメンのお話を聞きたくて」

『ウチの？』

「ええ、まあ」

『頼りにされるのは嬉しいけど、あんまりパツとはしないと思うよ。大丈夫？』

「はい、今はとにかくお話を聞きたいので」

『ん、そっか。じゃ力になろつかなく！ で、何聞きたい？』

「そうですね——」

ということと海さんに聞いたわけだけど、思った以上に有益な話を聞くことができた。

これなら大丈夫……だろうか。具体的には、やっぱり当日の話になってみないと分からないが……いや、いちいち考えるのはよそう。とにかく、今はできることをして過ごすしかない。

@ —— @

あつと言う間に三日が過ぎた。今日は収録の当日。スタジオは全体的に和やかなムードだが、ボクの方は未だ緊張の最中にあつた。

「本日は、よろしくお願ひいたします」

「はい、こちらこそよろしくお願ひします」

——あの四条貴音さんが、目の前にいる。

346プロの中では確実にトップアイドルと言える楓さんを間近で見ている、やはり別のプロダクションの人ともなると、やっぱり

緊張はする。それでもなんとか胸の中に押し留め、今回の主題となるラーメンを提供する。

「こちら、牛骨ラーメンになります」

「これは——面妖な。いえ、珍しいものを……」

「はい。近年は東京にも進出していますが、数年ほど前までは鳥取県や山口県一部地域で主に食べられていたご当地ラーメンです。今回は洋食の、いわゆるフォン・ド・ヴォーの技法を応用し、和風だし及び醤油と合わせています。どうぞご賞味ください」

牛骨ラーメン。先の説明通り、近年では東京でも食べられるようになったけど、少し前までは一部地域でしか食べられなかったそうなの。

海さんと話したのはその件だ。本来は七海ちゃんの言う通りいりこラーメンの件で連絡したのだけど、ちやうどよくその話題が出たのでちよつと教えてもらったわけだ。

実際にお店に行ってみたりもしたし、構造解析もしてしつかりどういう製法かも確かめた。時には食べ過ぎで吐きそうになりながらもなんとか習得したこのラーメン、気に入ってもらえなければその時は……いやその時の話はするまい。

「では」

ずるずるずるり。

ごく静かに、かつ、すすつていっているというのになぜか優美さを感じさせる挙措きよそでラーメンを口に運んでいく貴音さん。

途中で「なるほど」と一言つぶやいたのみで、言葉は無い。はらはらしながらその様子を見守っている——と、十秒ほどして、貴音さんが箸を置いた。

えつちよつと待ってあれで食べきったの？ マジで？

「おかわりはありませんか？」

「えっ。あ、た、ただ今！」

唾然としていると声がかげられた。急いで二杯目を作り上げると、これもまた二十秒ほどで丼が空になる。

な、何が起きているんだ……!? あ、あれか!? フードファイターのレツドラックさんめいた胃の容量……と……?

……そんな風に見えない……!

そんなこんなあつて四杯ほど空けてから、ようやく貴音さんはこちらに向き直った。

「牛骨らあめん、堪能致しました」

「……お見事な食べっぷりでした」

「牛骨の臭み・エグみを取り除いた丁寧な仕事は御見事です。しかし、あまりに丁寧すぎるのも考え物」

「——む」

「特有のにおいやアクといった成分もまた、旨味のもと。水清ければ魚棲うおまず——しかしあなたならばその境界線を見出せるでしょう。努々精進を怠らぬよう」

「ありがとうございます。今後ともご満足いただけるものを作れるよう努力してまいります」

「よしなに。それとおかわりをもう一杯」

「かしこまりました」

——なんだか若干ノリがおかしなことになってしまった感があるが、まあそれはそれとして、そこそこ良い評価をいただけただけで幸いだ。

後でこの様子を見ていた年少組の子たちに「召使いの人みたいだったねー」なんて言われていぶかしまれてしまったが、なんというか仕方ないと思う。あっちの世界で王族の方と接する機会があったけど、貴音さん、それに引けを取らないもの……いや本当に。

……収録が終わったらもうちよつとぽやーつとしてたけど。

あと、その時にちよつと携帯番号を交換したのは……秘密だ。一応。

◆ オトナの時間 ◆

……色んな意味で、失敗したなあと思う。

コトの発端は十数分前。どうにも暇を持って余してしようがないような時間帯。なんとなくボクの部屋でぐでーつとしながらアニメを見てたりしたら、ふとした拍子に晶葉が一言を呟いた。

「氷菓の将来はロリババアだな」

「は？」

ロリババア。その名の通り「ロリ」で「ババア」なフシギ生物である。

大多数はそもそも人間じゃなかったりするが、場合によっては人間が薬物とか修行とかで限界突破して寿命の壁を突破することもある。しかし何故ボクがそうだと言うのか。ありえぬだろう。

「いやボクは成長するよ。もうそろそろ142cmが見えてきてる」

「一年でたった2cmか……」

「伸びてすらない人に言われたくないんですけどー」

「なっ……し、失礼な！ バストサイズは増えてるぞ！」

「それ横に伸びただけじゃないの？」

「表に出ろ」

「断固拒否」

そして実際バストだけじゃなくてウエストも増えていることをボクは知っている。

「そもそもボクは成長を確約されてるようなもんだし」

「ほーん。誰にだ？」

「愛海さん」

「愛海なら仕方ないな……」

「自分でもシミュレートはしたし」

「……そういえばあの究極体氷菓再現とかできるんじゃないのかキミ？」

「まあできるけど、しないよ別に」

「いやそこをなんとか」

「しないって」

「したまえ」

「しない」

「しろ」

「やだ」

——という流れである。

まあぶつちやけてしまえばボクのうつかりした失言が、晶葉の心の琴線に触れてしまったのが一番悪いのだが……そもそも何でこんなにも食いついたのかと言うと。

「いつもいつも私が次女風の立場なのだからたまには末っ子風の立場に甘えてもいいだろう!!」

「なんだよそれ」

極めて微妙かつどうでもいい、立ち位置の問題であった。

フリーダム過ぎる長女志希さんと、独特な感性のある末っ子のボク。その間に挟まれてる自分——というのを考えてるのは分かるが、晶葉自身も割とわがまま言い放題なことは自覚してほしい。

「どうしても言うなら」

「何さ」

「ギャンギャン泣くぞ」

「めちやめちや情けないこと言ってる自覚はある？」

「キミの常套手段な自覚はあるか？」

売り言葉に買い言葉である。

……が、まあそれは置いておいて。こうまで散々に言われてしまうと、何もしないのもちよつと気が引ける。二、三十分ほどの言い争いの後、結局ボクが折れることになってこの場を終えた。

で、更に一時間ほどして。

「……どうしてこうなったんだか」

「はっはっは、いいじゃないか。なかなかだぞ」

頭一つ分くらい高くなった身長で、ボクは晶葉と一緒に街を歩いていた。

髪はいつものそれと違って黒。流石にボクだとバレるわけにはいかないのです、ウィツグで偽装している。

服装は……楓さんとのあさんを参考に、ある程度地味になるように控えめな色味のをチョイスしている。いつもと比べて頭髮の色を地味に抑えている分、これで多少は目立たない……はずだ。

「楽しい？」

「新鮮でなかなか楽しいぞ。視点が違う分色々なものが見える。キミこそ背が高くなったことについては何も思わないのか？」

「思わないことも無いけど、それ以上に緊張感がヤバい」

何せバレたらジ・エンドだ。そうなるとは限らないが、ポストアポカリプスルートへの道筋が開きかねない。

まあ、こんなに急激に大きくなるわけがないという常識がある以上、ある程度、都合よく解釈はしてくるだろうけど……それをあてにしすぎるのもマズい。こうなると脳細胞を錬成して記憶操作という手も視野に入れておくべきだろう。成功率は八割五分つてところだが……流石にそれだと心許ない。何よりもまずバレないことが一番だろう。

「フツ。人間、そこまで他人に対して注目などしないさ。自意識過剰というものだぞ」

「だったらさつきからちよくちよく飛んでくるこの視線について詳しく」

「……美人と美少女はつい目で追いたくなるだろう！」

欺瞞！

「そもそも晶葉と一緒に歩いてるっただけでバレそうじゃないか。交友関係狭いのにな」

「は？ はー!? 広いが!? そこそこあるがー!? というかその言葉そっくりそのまま返させてもらうがー!?」

「残念でした。寮生だからそこそ顔は広いしこれでも頼りにされてますウー」

「具体的には？」

「受験生組に頼まれて勉強会開いたりするし、ペット飼ってる人たちと話合うようになってきたし？」

「ほぼ同僚じゃないか」

「あと前の学校でも友達は……いた……けどこっちがそう思ってるだけであつちはどう思ってるか分かんないな……」

「おいやめろ哀しいことを言うな」

「そういう晶葉は？」

「ライラに千鶴にウサミンに梨沙に……」

「……人のこと言える？」

「正直すまなかつた」

「ボクの方こそ」

『私』

「おっと」

自分で言うのもなんだけど、ボクの変身は完璧だ。全体的な見た目はやはり元々のボクの延長線上にあるわけだけど、それでも今のボクと普段のボクとを結びつけるのは難しい……はず。

そもそも「ボク」という一人称を使う女性は非常に少ないんだ。そのところを考慮して、この姿でいる間は一人称を「私」として使い分けることに決めていた。とはいえ元からの癖だ。意図せず本来の一人称が出てしまうことはあるだろう。

色々と言ひ合ひはするが、それでも気付いてくれるあたりはありがたい。

それに今日は万が一のことも考えて知り合いの来そうにない巢鴨にやってきてもいる。

いずれにしてもこれでバレてしまうようなら、もうボクの運は下限値突き抜けてるな。はっはっは。

「あら〜？」

「!？」

そう思っていると、不意に背後から声がかげられた。ボクに——というよりは晶葉に。

振り返ってみると……どうやら知り合いのようだ。芳乃さんと鷹富士茄子さん、道明寺歌鈴さんの三人。珍し……くはないようにも思えるし、実際一緒に行動している姿を見たこともあるが、まさかこんなところで出会うとは……!」

「あつ。晶葉さん、こんにちはっ！ それで……そちらの方は？」
「奇遇でしてー」

「うつ、うむ!? ど、どうしたんだ三人して!？」

「芳乃さんのお買い物ですよー。おせんべいが欲しいというお話で」

……あああああつ!? そうだ、しまった! 半年以上前にぽつと話の流れで出ただけだからすつかり頭から外れてたけど、芳乃さんって結構頻繁に巣鴨に行ってたんだ! お煎餅買いに!

晶葉はもう想定外の状況にテンパってて「何かあった」って訴えるようなもんだし、この状況、本当にマズいぞ……!!

「こちらの方は……どなたですか?」

「え!? え、ええ、ええと、あー……彼女はだな、うん……ひ……ええと」

「氷川^{ひかわ}真白と申します。晶葉ちゃんの親戚で……先日東京に来たばかりで、案内をしてもらってるんです」

「ご親族でしょ?」

「そう! そうだ、そうなんだよ! 親戚! そういうわけでな、ちよつとこの辺りを観光していたのだ!」

「ほー」

察しているのか疑っているのか、それとも何とも思っていないのか、あまりにいつも通りな芳乃さんの返答に、晶葉の頬がひくついた。

「アイドルの依田さんと、鷹富士さんと、道明寺さんですよ。いつも晶葉ちゃんがお世話になってるようですよ……」

「もも、もういいだろう! 行くぞ! じゃあ三人とも、達者でな!」

——よし、ここまで問題無い。ここしばらくの活動で培われた演技力と、普段全然発揮できないアドリブ力! テンパってどもった晶葉の対応すら、「親戚が失礼なことをしていないかハラハラしている」という風に演出することで自然を装うこの対応! これで誰も気になどするまい……!

……などと、一瞬油断していたことが問題だったのだろうか。あるいは慣れない体と服装のせいかな、ボクは自分のハンカチを落としてしまったことに気付かなかったようだ。

「あつ。あのー！」

「はい？」

ハンカチを拾い上げた歌鈴さんが、駆け足気味にこちらにやってくる。

その瞬間にボクは思い出した。歌鈴さんは、いつそ芸術的なまでに——因果律すら超越しているのではないかとすら思えるような、ドジっ子だということ。

「あつ!？」

「あつ」

あ、と思つたら、もう遅かった。

歌鈴さんの足元にビラが滑り込み、小走りでこちらに向かってくる勢いでそのまま足がツルツと滑る。いつものように後ろ向きにコケると、衆人環視の中で下着を晒してしまうような状態になりかねないと思つたのか、ちよつと無理をして前に向かって滑っていくような体勢になったようだが……それがいけなかった。

歌鈴さんはボクのハンカチを持っていて、それをこちらに渡そうと駆け寄って来ていたわけで。

「ひゃああああああつ!？」

「ちよつ」

ボクの方に転がり込んできた歌鈴さんの手が、ボクのスカートの裾に引っ掛かって——そのまま、スカートがずり落ちた。

一瞬フリーズした脳を無理やりにも動かし、冷静を装ってスカート

トを上げる。

青い顔をしている歌鈴さんを助け起こし、「足元には気をつけてくださいいね」と一言。声が震えて顔が赤くなってしまうのは、仕方ないことと割り切ることにする。

ともあれボクは晶葉を連れてその場から離れることに成功はしたのだった。

それ以外は大惨事としか言えないが。

さて、そうこうして十数分。とりあえず、元の姿に戻るためにも人目に付かない場所を……と思つてトイレを探したのはいいが、やっぱり誰もいないトイレというのもそうそう見つからない。

そうなると、一般人の中で唯一事情を知っているおじじに頼んで、更衣室でも貸してもらおうかな……と思いはじめたところ、思いがけず誰かとぶつかってしまった。

「あ、すみません」

「いえ、こちらこそ——」

頭を下げて立ち去ろうとしたその時、ぶつかってしまった男性が、突然雷にでも打たれたかのように動きを止めた。

はて、どうしたのだろう。そう思つて見上げてみれば、武内統括Pであった。

あつ、そつかあ。そもそも今身長伸びてるから、いつもの感覚で人を見ても誰だか分からんということもあるのかあ。あはは……。

あははじゃねーよ。

「どうし——」

と、歩幅が急激に伸びたせいで、思わず先に先に行つてしまった。ボクだけど、ようやく晶葉も追いついてきたようだ。

しかしどうも、ボクの顔と武内Pの顔を見比べて、何か呆れたよう

に額に軽く手を当てている。

……い、いや、まあ、流星に武内統括Pでも今のボクが白河水菓とは分らないだろう。このまま立ち去れば特に問題は……。

「あの」

「はい？」

「……アイドルに、興味はありませんか」

とんでもねえ別の問題があったわ。

……数日後、武内Pが逸材を発見したけど逃げられた、というような噂が346プロ内部で流れることになるのだが、ボクはこの件に関しては一切何も知らないということにしてしまいたい。
実情はともかくとして。

@ ————— @

で、更に一時間ほどして、ボクはおじじの会社の更衣室を借りて、元の姿に戻ることにした。

最初からこの手を使っていれば、駅で武内Pと出くわしたりしなくてより良かったかもしれない。というかそもそも大人の姿にならなければこんな気苦労なんてしなくて済んだわけだが。

「本つつつ当に疲れた」

「う、うむ」

……まあ、戻る時は戻る時で一瞬なんだけど。

変身ヒロイン的な変身シーンなんてものは無い。無駄だし。変に光でも漏れて感づかれたらどうするんだという話でもある。

「む、電話だぞ」

「え？ 誰から？」

「芳乃のようだが」

それもかかってきたのは、どうやらボクの携帯。二人して微妙な表情を浮かべた。

あんなことがあった直後だ。どうにもこうにも警戒が拭えない。芳乃さん、凄まじく勘が良いからなあ……どうなるか分かったものじゃない。

とりあえず晶葉には黙っているようにジェスチャーで指示して、元の姿に戻ったことをちゃんと確認してから応答する。

「はい、もしもし」

『わたくし依田は芳乃でしてー。氷菓ですかー？』

「うん。どうしたの？」

『やはり先程の女性は氷菓でしてー？』

即座に核心を突かれた。

この人どうなつとんだ。

「誰のこと？」

それでも可能な限り、冷静さを保って返答する。

……ボク、今日なんだかものすごく冷静じゃないのに冷静さを装ってる気がする。不思議！

『？ あの気配は紛れもなく氷菓のものだったのですがー』

「え」

『それに、あの垢抜けない下着を着るような女性は、氷菓以外に知らないの？』

「酷い偏見だよ」

いや事実だったわけだが。

「まああんな三枚1000円みたいな下着で出歩く女はいないな……」

『ああ、やはり』

「……………」

おい晶葉。

おい晶葉。

めつちや聞こえちやつてるんだけどおい晶葉。

というかなんでハンズフリーじゃないのに聞こえてるんだよ芳乃さん。

「晶葉。後で説教な」

「うぐ」

こんなの想定しろって方が無理があるとはいえ、そもそもを言えば晶葉があんなことを言いださなければこうはなつてなかったわけで。

……極論言えば、ボクが大人の姿になれることについて言及しなかつたら良かったとも言えるわけだけど……。

ともあれ、この後は志希さんの薬のせいで大きくなったということにして言い訳を行い、芳乃さんには（本当に一応）納得してもらうことになった。

で、更にその後は話を合わせてもらうために、志希さんにも説明することになったわけだけど、「何その面白そうな話何であたしも混ぜてくれなかったのずーるーいー」と言われてしまい、後々埋め合わせをしなければならぬことになってしまった。

こつちだつて好きで仲間外れにしたわけじゃなくて、LiPPSの活動でいないときに偶然そういう話が出ただけなので、どうか許してほしい。

だめっほいけど。

※ ◆ 元クラスメイトの独白 ◆ ※

——あの日、俺は妖精と出会ったんだと思ったんだ。

一年前、春先にしては珍しく雪の降った日のことだった。

四月の上旬、ちょうど入学式の頃だったっけか。いくらクラス全体の顔ぶれがそう変わらないって言っても、折角の入学式だ。どうせならもっと「らしい」快晴で送り出してくれよ、なんて考えてたのを覚えてる。

花曇りって言うんだっけか——ともかくそんな感じ。確かに、桜の木を見上げたら、薄暗い空に淡いピンクが映える。けど実際のところ、寒いし濡れるしでめんどくせえ。散々な天気だ、クソツタレ。そうボヤいたのが聞こえた……かどうかは知らん。

けどそんなとき、鮮烈な蒼色が目に入った。小さな女の子だ。曇り空と桜とを見上げているのは俺と同じだ。けど、彼女は別の思いを抱いたらしく——淡雪のような儂い笑顔を浮かべていた。

なんとなく、妖精みたいだと思った。

だってそうだろう？ 日本人離れた肌の白さに髪の色。無駄にちっちゃやくせに、それがまた似合ってる。正直言って最初、制服着てるの見るまでずっと——マジで妖精なんじゃないかって思ったくらいなんだ。雪の妖精とか——そういうの。

「くちっ」

……随分、寒さに弱そうな妖精だったけどさ。

白河水菓。その妖精は、鈴を転がしたみたいな声でそう自己紹介し

た。

……あの見た目で日本国籍かよ、というのが正直なトコだ。けどテニス選手とかでもそういう人はいるし、そういうモンと思つてムリヤリ納得した。どうもあつちの小学校じゃそこそこ有名だったらしい。納得。

でも、有名つてのは別にそれだけじゃない。どうも白河のやつ、孤児院から学校に来てるらしい、つてことも同時に分かつたんだ。

孤児院つて言つた方が分かりやすいんだけど、フツ―は児童養護施設？ だか言うんだつけ？ いや、それはいいや。

男の立場からするとそのヘンよく分からねえんだけど、どうも女子つてのはスクールカースト……つてやつを気にしてるらしい。どうしても、自分を上に置きたがるんだと。

白河は、見た目はメチャクチャ綺麗だ。一目惚れしたつっ―話もたまに聞く。まあだいたい身長見て「あ、これはねーわ」つっつて無かつたことにするんだが。オマケにめっちゃめっちゃ痩せてる。二十……何キロだつけ？ 死ぬだろコイツと思つたことは覚えてる。

ともかくそんなヤツだ。そりやーもう、目を付けられた。女子はどうもメンツを気にするモンらしい。なんかもう見るからにひ弱で、虫も殺せなさそうな美人つていうだけで、入学からそんなにしないうちにいじめが始まつた。

三日で終わった。

何しても知つたこつちやねーつてくらい平然としてるし、教科書やうわぐつや給食袋を隠しても気付いたらどつかから持つてくるし、悪口を言えば十倍にして返してくるんだとか。ぶん殴ろうとしたらソツコーで逃げる上に追いつけねえとも言つていた。マンガとかドラマでよくある、トイレに入つてる時に水をぶちまける……とかは、やつたはずなのに白河のやつ、ぜんっぜん濡れてなかつたらしい。

俺はあいつが妖精なんじゃないかという疑惑をより深めた。

じゃないならなんか、こう……あれだ。特務機関のエージェントとか、アンドロイドとか、そういうやつ。

いつの間にか俺の視線は白河に釘付けだった。何をしでかすんだ

か分かったもんじやないからだ。

——が、そんな俺に変な疑いを向けるヤツがいた。

「一目ぼれしたのね……」

「してねーよ」

白河のストーカーで有名な赤城だ。

どうもこいつも前はいじめられてたらしい。が、そこを白河に助けてもらったんだと。そりゃあんな風にいじめに真つ向から立ち向かってフツーに勝つてくるようなヤツが、他のヤツを助けられないワケがねえ。つたつて、フツーなら「できる」から「やる」とはなんねーんだけどさ……そんな白河にお礼を言った、んだが、アイツは何でもないことみたいなのに、気にしないように言ったんだとさ。

「だから見守ることにしたのよ……」

「いやその理屈が分かんねえよ」

そんな白河だけど、見た目はちんちくりんのチビだ。オマケにガリツガリだし、給食もしよっちゅう残すくらいに少食。不安になつて仕方ない——だから見守るんだと。

その気持ちはよく分かんので引き合わせてみたらキレられた。接触したら見守ることにならないでしょうがとか何とか。いや、それって仲良くなりたいうてことじゃねーの……と言ったらまたキレられた。女子の気持ちは分からん……！

しばらくしたらなんだかんだで仲良くなつてた。

こいついつペン痛い目あわねえかな。

二度目の春。白河が転校した。

結果的にめっちゃ痛い目にあつた。ざまあ。

言ったら殴られた。今回の俺が全面的に悪いな。すまない。

けど、流石に意味が分からない。孤児院育ちつてことは、そこから

離れるわけないだろ？　もしかして親が見つかったのか？　そう思ってたけど、どうやらそういうわけじゃないと知ったのは四月の下旬。

——白河が、アイドルデビューした。

もうビツクリってレベルじゃなかった。アイツ何してんだよ!?

まさか数少ない友達になった赤城にさえ言ってたなかったのは正直予想外だったけど、なんつったつけ？　こん……コンピレーション？　コンプリート？　……ああ、コンプライアンスだ。それがどうこうとかで、あんまり人に言えなかつたらしい。

で、そんな風に謝られて、チケツトを貰った。

当日は、勿論二人で白河の晴れ舞台を見に行った。

ホントのこと言うと、俺はアイドルのことよく分かんねえけど……あの三人がすげえってことだけは、よく分かる。

「もうマジ無理。ダメ。尊い……」

一部わけのわからんことになっている女はいたが。

でも、俺も似たようなモンか。普段は全然そんなことしない……いや、だからこそか？　白河のステージ、メチャクチャ真剣に見てたわけだし。

けどそんな俺の様子にもまた疑惑を向ける女がいたりもする。

「やはり惚れてるのでは……」

「ちげーよお前に言われたくねーよ」

「氷菓ちゃんに惚れないとかぶっ殺すぞ」

「お前ホントめんどくせえな!？」

「じゃあ、何故食い入るように見つめる……」

「あー……何だ。ああいうの、憧れないか？」

「フリフリの服着て歌って踊るのが……?？」

「ちげーよ」

そつちじゃねえ。

「マジになってるのがだよ。真剣に取り組んで、楽しそうにしてんの……なんか、見えてスゲー憧れる」

「ふーん」

「お前が聞いたんだろ多少は興味持て」

「ニアどうでもいい」

「コイツ……!!」

……まあ、アイツ、普段何するにしても涼しげで、なんていうかつまんなそうだったからな。何でもできるって感じで。

真剣に、本気になって取り組めることができたのは……なんつーか、素直に憧れる。

そんな俺をまるで気にしてない赤城のヤツは、ステージを見る一方で、スゲー勢いで携帯スマホの操作を始めた。

「……何してんだよ?」

「スレを立ててる……」

これ、と見せられた掲示板のスレッドのタイトルは、ごく単純かつコイツらしいと言えらばらしいもの。

——「白河水菓ちゃんを見守るスレ」、だ。

51：お祭りは準備が一番楽しい

ボクたちの通う中学校も、他の学校と同じように文化祭という行事がちやんと存在している。

……とはいえ、中学校の文化祭だ。実際のところ、規模や内容がどうか、なんていうのはたかが知れているものだろう。親御さんと呼んで、体育館で合唱コンクールをして、演劇や自由参加で音楽を披露する……実際、前の学校がそうだったし、同じく公立校である今の中学校もその例に漏れないのでは、と思う。

アニメや漫画で培われてしまった「文化祭」のイメージは、去年経験した文化祭により崩壊してしまっていた。

日本人ならそこそこ抱く幻想だろう。模擬店があつて、ライブがあつて、ミスコンなんかもあつたりして、芸能人が来たりもするんだ。で、人も自由に行きかう。

……実際にそういうことができるのはどうやら大学……か、学校によつては高校くらいからのようで、ちよつと拍子抜けした。まあでも、あと一年強待てばそういう文化祭——というか学園祭？ もできるようになるだろうし、別にいいだろう。少し待つだけだ。

「うちの学校模擬店あるよ？」

「えっ」

——と、思っていたのだが。

どうやら、前の学校とは違って、こっちの学校だと模擬店があるらしいという衝撃の事実が、法子さんの口から語られた。

中学校で許可されているというのも、割ととんでもない話ではある。衛生観念の問題もあるし、火を扱ったらマズいという事情もある。万が一の時に教師が監督責任に問われる可能性が高いし、あんまりこういうことはやりたがらないと思っただけど……。

「そうなんれすか？」

「なんか、何年かずっと生徒会で先生たちと交渉してたんだって」

「わざわざこのために何年もって……」

「でもロマンれすよね。海や川のヌシを釣るような感じれすよきつと」

「多分それは色々違うよ」

そりゃあ文化祭という、ある意味大物を生徒の手で獲得しようとしていたのは間違いじゃないけど。

それは違うよ。多分。

「それで二、三年生は許可が出たんだって」

「あれ。一年は？」

「小学校から上がったばかりだからダメって聞いたよ」

「半年は経ってるのに『ばっかり』っていうのもおかしいれすね」

「だよね」

まあ、それは理解できないでもないけども。

半年って言ったたら、別の小学校の生徒が合流して、そろそろ新しい友人や授業にも慣れてきた時期だ。どうしても油断は出てくるだろうし、調子に乗る生徒も増える。その辺を戒めつつ、ある程度常識を弁えさせつつ……となると、やっぱり時間は必要だろう。改めて考えるに、妥当な判断か。

「まあ、どう転ぶやら分からないけどね……」

「そうなんだよねー。あーあ、ドーナツ作りたいなあ」

「それは言ったら可決されるから大丈夫だよ……」

何せ法子さんのドーナツだ。売り上げが見込めないわけがない。

揚げ物にしていいかどうかという疑問もあるけど、そこは焼きドーナツ

ナツにすればいいから結局問題無いか。ボクが同じクラスだったら有無を言わさず可決してるだろう。

で、だ。

問題はここから。文化祭だけあって、模擬店だけじゃなく合唱コンクールや演劇などもやらなければならぬ。

ボクらのクラスの合唱曲は「時の旅人」。合唱曲としてはよく歌われる類のものだ。練習の計画も着々と練られているから、こちらは問題無い。

いわゆる「男子ーちゃんと歌ってー」的な通過儀礼……は、無かった。同じクラスの女子に聞くところによると、特に歌の場合、「変にカッコつけるよりマジメにやった方が女子へのアピールになる」ということを主張して教え込んだのだとか。アイドルの多い学校だけに、どうにか自分に振り向いてもらえないかと努力している、ということだろうか。結果が伴っているかは別にして。

さて、問題があるとすると……演劇の方が。

「えー今回の候補は、アーサー王物語、アルスター物語、ギルガメツシュ叙事詩……もうちよつと真面目に考えてもらえませんかー」
「真面目でーす」

大真面目に考えてこれなら、もうちよつと自分がゲームやアニメやマンガの影響を強く受けていることを自覚した方がいいと思う。

「桃太郎とか赤ずきんとかこの歳でやりたくねーし!」

「他に何かあんの?」

「オリジナルとかあるでしょ!」

「脚本とか考えられんし」

「女子こそできんのかよ脚本」

「できないし」

「無理だし」

「……………」

……しかし、なんというかこの、何だろう。前の学校でも似たようなことはあったけど、こういう……クラス全体で何かやらないという時、責任を押し付けあうというか、人任せにしがちというか……それでいて出た意見に対して文句をつけがちというか……。人間の習性のようなものだろうか。

ボク自身も意見は出していないが、何をやるにしても特に文句は無いから置いておく。前例から考えれば出演者は基本的に立候補制だ。営利的な目的は無いとはいえ、万が一のことがあってもいけないので基本的には裏方を志望しておくのが筋だろう。多分。

「激論ってやつれすね〜」

「多少はするだろうね」

それに、なんというか……中学校という風土だからか、こうして見るところ、男女仲はあんまり良くない。

今時の子供は進んでいるという話も聞くけど、それとは別……と言っているのだろうか。付き合ってる子もいるようなのだけでも。

こういうのは、人類にとつて永遠に付きまとう問題とかそういうアレなのかもしれない。めっちゃめっちゃスケール小さいけど。

「氷菓ちゃんは何か無いんれすか？」

『『マクベス』とか、『オペラ座の怪人』とか……って言ったって、そこまで大掛かりなものが準備できるわけじゃないしね。難しいだろうし……特別何かっていうのは無いよ。七海ちゃんは？』

『『人魚姫』とかれすかね〜……？』

それも題材としては悪くない。けど有名な劇団がやってる分、どうしても意識してしまうだろう。みんな中学生だから、その辺はなんとも敏感だ。

そしてその結果、題材かぶりを過剰に恐れて、やたらとオリジナリティあふれる脚本にしてしまうのだ。

「ンだよ！」

「何よ！」

「何なのよ！」

「……そっちこそ何よ！」

「何ふざけてるのよ！」

「なんだっていうのよ！」

「キィー！ 踏んずけてやるわ！」

「お〇ぎです!!」

「ピー〇です!!」

「ぶっ殺すぞ!!!」

ゴメンさっきの男女間の云々訂正するわ。仲いいな君ら。

「他、誰か意見ありませんかー」

「新撰組！」

「階段落ちとか殺陣とか誰ができるのよ却下！」

よく階段落ち知ってるな。

いや、むしろシン撰組ガールズ見たから知ってるのか。

あと多分ボクはできる。

「じゃあ果てしなく仁義なき戦い！」

「ダメ却下！」

というか明らかに中学生のやっていい題材じゃない。
当時中学生の諸先輩方がやってたけど。

「しら……古宮さん、何かいい案ありませんか？」

「えっボク?」

司会進行役を務めていた女子生徒に名指しされて、思わず自分を指差してしまう。

どうにもこうにもなんともならない、という表情を前面に押し出され、オマケに拜まれるようにして頼まれたともなると、流石に断るのは心苦しい。

「お願い! 何かあったらでいいんだけど……」

「ちよ、ちよつと七海ちゃんと相談させてください」

「えっ」

「ありがとう!」

「氷菓ちゃん……」

「ごめん」

ちよつと巻き込んでしまうのは申し訳ないが、これもクラスメイトの義務ということで諦めてほしい。

ともあれ、である。

「プランがあるんれすか?……?」

「う、ウチでやった公演をアレンジする形式とかが……って思ったんだけど……」

「れすか……んー、例えば?」

「加奈さんたちのやってたシング・ア・ソングとか……幻想公演とか、刑事モノとかもありかなと思ってるんだけど」

「ファンタジーはやめといた方が無難ですよ。でも、それなら沙紀さんたちのやってたアラジンもいいかもれす」

「アラジンかあ……」

いずれにしても、男女比を調整すれば悪くないんじゃないかなと思える。

アラジンと魔法のランプなんかは元々が有名な話でもある。映画になった方は元の話のアレンジしてあるし、その点でも差別化はできるだろう。

……まあ、元の話だったって、そもそも千夜一夜物語の中にアラジンと魔法のランプは存在しないらしいけど。

「アラジンとか、前に346でやったシング・ア・ソングとか……」
「良かった！ やつとマトモな意見が出てきた！ ありがとう、しら……古宮さん！」

「七海ちゃんが『白子』を連想して物欲しそうな目でこっち見てくるし言いにくかったら白河でいいから」

「ごめんなさい」

あの場ではああするしか無かったとはいえ、流石にこうも言い間違えられると、名字が変わったことについてちよつと悪いような気もしてくる。

いや、別に何が悪いって言うんでもなく、あれはあの時っていう状況が悪かったとしか言いようがないんだけど。

「他に意見ある人いないわねいないでしょうねいないねよし採決入りますー！」

「「待てや!!」」

「やかましい！ どうせアニメとかゲームとかのネタでしょうが！」

「チクシヨウあのアマよく分かってやがる！」

「クソツタレええ！」

変な方向でノリがいいねキミら？

「シング・ア・ソングがいい人！ ……次、アラジン！ ……よし、アラジン決定で！」

「オーボーだー」

「俺たちの意思も尊重しろー」

そんな男子諸君の文句に対し、文化祭実行委員の子は首にあてた指をクイツと横にずらした。「知るか死ね」というあまりにはつきりした意志が見て取れた。

それでいいのか実行委員。

「じゃ、脚本書ける人かそういう人に心当たりある人……オツケー、じゃあ佐野さんお願いします」

「役者はー?」

「立候補でお願いします。ただぶっちゃけ白河さん出てほしいんですけど」

「えっ」

その瞬間、クラスのみんなの視線がこちらに向いた。

いやちよつと待って。そこでボクか!? できるだけ出ないよう出ないようにしてたっていうのにここでこつちに目を向けられちゃあ困る!

「い、いや、事務所の契約関係とか、あるかもだし……」

「三年の南条さんとかよく出てるよ?」

光さーん!!

……いや、こう……あれだ。そう言われちゃあ、断ったりするのも良くはないか。別にボクだって、こういうことでクラスに貢献するのが嫌だってワケじゃない。ただ、まあ、あれだ。一応いち組織に所属している以上、そのコンプライアンスに抵触しないかっつのは気になるし……ね? そういう、ね?

いやまあやらないとは言ってないけど。

「でもボクは一体何をすれば?」

「ヒロインとか？」

「いや、それは、ちよつと……」

できないとは言わないけど、多少でも周りどと軋轢を生みかねないのは勘弁してほしい。

一つのお話のヒロインともなると、やりたい人は多いはずだ。目立つのが恥ずかしいと思う人も同数いるだろうけど……アイドルだからってことで鼻肩されてヒロインに据えられる、となつては流石にマズい。何であいつが、なんて思われたら非常に面倒だ。となると、推薦した側の顔を立てるためにも、そこそこ目立つ、けど……という程度役どころは……。

「……個人的には、ランプの精霊がいいかな」

「ランプの精霊？」

「うん。実はこういう役柄、結構好きで」

そこに関しては嘘じゃない。サブキャラクターとしてはそこそこ以上に目立つ役柄だし——本家本元のランプの精霊って、アニメ映画のそれと違つて、物語上そこまで重要な役割じゃないんだよね。

いや、重要は重要んだけどね。精霊の人格にはあまりフォーカスを当てられないし、叶えられる願いは三つじゃないし、最終的に自由にもならない。あくまで舞台装置って感じた。それをどのように演じるか、という点が、個人的には重要だと思つている。その演じ方一つでどう印象に残るかが決まるんだ。責任は重大だけど、やりがいもある。

「じゃあ、それで行くのかな。じゃ立候補者を……」

と、まあ一度決まればあとはそこそこ早い。アラジン役への立候補者がやたら多いのは主役として当たり前だけど、悪役の魔法使いまでもがそうだとは思つていなかった。案外みんなそういう役もやつて

みたかったりするんだろうか？　ボクも時々やるから、気持ちは分かるけど。

で、何はともあれ演劇の方の必要事項は、あとは後日ということ。今日は解散となった。

……の、だけれども。

「バンドを組むわよ」

「えっ」

バンドを組むぜ。バンド名は346バスターズだ。

……いや何アホなこと考えてるんだボクは。いきなりレイナさんからこんなことを言われたからって、混乱しすぎだろう。

「え、何で……？」

「アイツが出るのにアタシが出ないワケ無いでしょ！」

「把握」

極めて分かりやすい事情がそこにあった。

つまり、光さんが文化祭の自由参加枠でバンドを組んで出場するから、それに対抗して自分も出る、と。

分かりやすい。うん。間違いなくそこは分かりやすいのだけど……。

「でもそれ、勝ち負けはつかないと思うよ……」

「ハア？　そんなわけないじゃない」

「いやつかないよ。だってこれ見てるの、みんな中学生だよ」

「それが？」

「レイナさんと光さんでそれぞれ違うバンド組むんでしょ。ってことは色々方向性が違うよね。音楽のジャンル自体違うかも。ってことは、見る人からすると『どっちも良かった』で終わりやすいってことでもあって……」

「……………ああ!？」

基本的に——だけど、こういう芸術分野のお話となると、人間は明確な優劣を付けられないことが多い。特に一定以上のレベルに達すると、素人にとつては「良いことは分かるけれども、自分たちでは優劣は分からない」ということになりがちだ。どっちも良いものだから。ボク個人としてもその辺りを問うのは好ましくない。順列を付けてしまったら、どんなに良いものでも陳腐化してしまう。

「だから個人的には、明確に数字の出る……競技とか、テストとか以外は……………あんまりオススメできないかな……………」

「くっ……………う、迂闊だったわ……………」

「お願いされた以上、断る気は無いけど……………」

「……………いや、よく考えたら光に敗北感を味わわせればいいだけだから氷菓一人いれば十分ね」

「いいいや、ボク一人で人に敗北感を味わわせるような演奏はできないよ……………」

「ハン、こういうのはね、こういう時に頼りになるヤツを誘ったけど来なかった、って事実があればいいのよッ」

そして、自分の敵に——いや敵ってほど剣呑な関係じゃないけど——一回ってるのを見て、悔しがらせると。

ちよつと面白そうだと思つたことは否めない。

「他の人のアテはあるの？ ボク一人じゃ精々ギター弾きながらハ—モニカ吹くくらいしかできないよ」

「それができるだけでもキモいくらいなんだけど」

「いくら慣れてるとはいえキモいはちよつと傷つく」

「悪かったわ」

レイナさんは正直に言えばそこそこ謝ってくれる。

そこそこ程度だけど。

「で、誰がアテあんの？」

「他には、特に……かなあ……」

巴さんは演歌専門……いや専門じゃないけど、多分和楽器はできるだろうけど、趣旨が変わっちゃう。

七海ちゃんはあれでピアノとかできる……とか言ったらそれはそれでグツと来るんだけど、そういう話は特に聞かない。

法子さんは……ううむ。ドーナツ型のオカリナとか渡したら意地でも吹けるようにはするだろうけど。

「晶葉がこっちの学校だったらロボ使って適当に解決してくれるんだけどなあ……」

「頼めないわけ？」

「あつちもあつちで忙しいだろうし、ねえ……」

一台でも引っ張って複製すればイケるだろうけど、あんまりにも非現実的すぎてどうやったのか疑われそう。

それにあれはあれで仕事道具みたいなもんだし、晶葉自身も日常生活でロボばかり、ということとは少なくなつたと自己申告している。それはそれとしてアイドルの仕事に僅かでも関係あれば即ロボ作ったりするけど。そこは趣味だしライフワークだしで別に止めるところじゃない。

「打ち込みで何かやってみるかな。電子ドラムとキーボードくらいなら再現できるだろうし、ベースとギターとがあれば……」

「結局それ一人でもできるって言ってるようなモンじゃない？」

「どこまで行っても生演奏には敵わない部分があるから……」

微細な空気の揺らぎとか、場合によってはちよつとした失敗とか

……言ってみれば、それもある種の味なわけだ。
ライブに行くとは演奏や歌そのものにアレンジを加えるということも少なくない。全く同じじやCD聞いてりやいいってことにもなるからね。

「ま、こっちも募ってみることにするわ。当日は頼むからねッ」
「あいあいさー」

……と、言った流れでバンドについての話はその日はここまでとなった。

しかしなんとというか、それにしても……文化祭、準備でここまで大変とは思わなかった。

いや、今はまだ準備の準備って段階か。それでコレなんだから、本当の意味での準備となるとどうなることか――。

——と思っていたのがいけなかったのか、その後の準備ははつきり言って惨事と言って過言じゃないくらいの惨状だった。

「模擬店って言ったらやつぱメイド喫茶でしょ!!」

具体的にはこの一言のせいだ。

メイド喫茶、となると――自然、女子が表に立って接客をする必要が出てくる。で、男子は後ろで料理番。

これに対して女子から盛大な文句が噴出した。女子ばかり負担が大きいんですけど、と。

しかし料理もこれはこれで重労働ではある。加えて問題としては……このクラスで一番接客に出て欲しいらしいボクが、恐らく一番料理ができるという点だ。どうにもこうにも、あちらを立てればこちらが立たずという状況の典型例みたいになってしまっていた。

とはいえ、料理というのはレシピ通りに作りさえすれば、ある程度は美味しく作れるものだ。レシピを守る人でさえあれば、それなり

のものを作って提供することはできるだろう。

さて、じゃあそれが解決したら、あとはボクが接客に出れば残りは全部オツケー……というわけでもなく、文化祭実行委員の子曰く「仕事もあるのに負担が増えすぎるでしょ！」とのこと。

お氣遣いが大変嬉しいが、じゃあその分誰がどう接客の方に出る？

という話になるとまたみんなの顔が難しくなる。

しかしながら、そこに一石を投じる生徒がいた。

「性別逆転喫茶はどう？」

「性別」

「逆転」

「つまり男子がメイド服を、女子が執事服を着るわけ」

「地獄かよ」

でも個人的には悪くないとも思う。ネタ的な意味でも、人目を引くための意味でも。

新しい試みはどうしたって人の目につくし、そこで完璧な対応ができさえすれば人気になるのは間違いない。あと個人的に執事服みたいな男装をちよつとしてみたいのがある。なので、そこまではそこそこ納得いくし、個人的にも賛成できる意見ではあったが。

「……………このままだと予算足んないし四組と合体しない？」

コレである。

いや分かることは分かるよ。衣装にもお金かかるし、喫茶なら単にお茶やコーヒーを出すだけじゃなく、他にも色々要るだろうし。

しかし四組——法子さんたちのクラス——を巻き込んで、実質お金をタカリに行くようになっちゃってるのはどうなのだろうか。

オマケに説得に成功してるし。

ほとんどその場のノリで行動してるのに、なんだかんだでなんとか

なってるのは何なのだろう。勝負はノリの良い方が勝つとかそういうアレだろうか。

……まあ、最終的に二つのクラスで協議した結果「性別逆転は流石にニツチすぎるしやめておこう」ということにもなったけど。

ともあれそんなわけで、今回のボクらの模擬店は「メイドドーナツ喫茶」執事もあるヨ！」ということになったのだった。

もう何がなんやらワケがわからんことになってしまったんだけど大丈夫だろうか。

「あたしはドーナツ作れるからいいかなあ」

「れしようね」

「いいんだ……」

「ちなみに佐賀の方にはおさかなドーナツというものがあるのれす」

「……再現してと？」

「うん！」

「くらすい」

……そして、更についでのように、喫茶店のメニューに一品ほど追加されることになった。

今更だけどここの文化祭の準備、ちよつと行き当たりばったり過ぎないかなと思う。

52：作り上げること

忙殺、という言葉が、ふと頭をよぎった。

十月中旬。クローネの仕事も軌道に乗り始めた頃、同時に文化祭の準備も本格化してくる。

模擬店のための飾り作り、料理を提供するために必要な衛生管理の講習、劇の練習にバンドの練習……更にここにいつものレッスンや仕事も加わる。充実している……と言うとそれもそうだけど、ちよつと尋常じゃないくらい忙しいのも、また事実。

それにしても、色々と事情はある。

「演技経験者は？」

と聞くと、手を挙げたのはほんの少人数。それも一年生の時、クラスでの演劇で……という人がほとんどだ。

……まあ、そもそもボクらみたいな人の方が珍しいんだし、それだけでもやったことがある人がいるだけ良いということにしておこう。

七海ちゃんも、以前の怪奇公演で演技経験……どころか主役経験がある。人に教えることが……できるかはともかく、少なくとも基本はちゃんとできている。他の人と比べれば、上達は早いだろう。

さて、それはともかく。

「……流石にコレは無理だよ……」

「そう？」

演技指導、ボク。

料理監修、ボク。

合唱指導、ボク。

衣装監修、ボク。

模擬店フロアチーフ、ボク。

体がもう二つ三つは足りなかった。

「んじゃあ、お仕事との兼ね合いでどの辺までできそう?」

「う、うーん……演技指導と料理の監修くらいしか、できない……かも」

「オツケーじゃあそれで!」

「えっ」

「えっ?」

……あれ? とんでもない無茶ぶりしてきたのに思ったよりあっさり引き下がったな。

「え、やってって……これ、あれ?」

「いやあ、どれもやってほしいけど流石に無理だったのは分かるし、じゃあやれるものだけ言ってもらってやってもらおうかって!」

「そ、そう……」

曰く。先に要求を思いつき吊り上げておくことで、本命の要求を通しやすくする交渉術があるという。特にこの実行委員の子が意識した風は無かったけれど、もしかしてごく自然にその技術を使っているのではなからうか。未恐ろしさを感じる。

……ま、まあ、実質これがベストだろう。

クラス全員が協力して、息と調子を合わせなければいけない合唱練習は、全員の息をぴったり合わせるのにはどうしても時間が必要になる。仕事などで学校にいない時間のあるボクが合唱の指導役になっても、満足に練習もできないだろう。

演劇も、確かに協調性や息を合わせることが重要になるけど……それ以前に、まず台詞を覚えなないことにはどうしようもない。それについてでは一人でもできるし、わざわざ覚える方法まで指導する必要も無い。読み合わせが必要なら、他の演者の手を借りれば事足りる。

また、料理に関して言っても、レシピを渡してその通りに作ってく

れさえすれば問題無い。きっちりレシピ通りに作ればだいたい同じ味になる。

さて。

ともあれ、現状はそんな感じ。このまま順調にいけば何も問題は無い……はずなのだったけども。

「最初はグーツ!!」

と言いつつ、彼らの差し出した手はチョコキとパー。実に清々しいほど卑怯な一手だった。

「無効ッ!」

「「そんなん」」

じゃんけんぽん、ではなくて「最初はグー」の方が手を出す合図となってしまうって数十秒、監督の手によりルール無用の戦争は終わりを告げた。

……何でこうなったのか……という原因は、今のボクにはちよつと分からないが、発端なら分かる。七海ちゃんが劇に出演することになったからだ。

役柄は「指輪の魔人」。アラジンと魔法のランプを原案としたアニメには出ていないため、若干マイナーな感のあるキャラクターだけど、これでも非常に重要なキャラクターだ。ボクと同じように、できるだけクラスの子との軋轢を生まないために、七海ちゃんはメインヒロインである王女役を辞退してそちらの役を選んだのだった。

で、その後。何故かご覧の有様である。

悪役である魔術師を志望していた人も、場合によっては女子ですらもアラジン役を希望するに至ったほどだ。

とにかく、そんな事情もあって、今は配役が非常に難航しているというのは確かだ。誰も譲ろうとしない。

「どうしてこんなことになったのだろう……」

「そりゃーあーた……現役アイドル二人に『ご主人様』とか言われる機会なんて今後一生かかっても無いかもしれないから必死よ……」
「……なるほど」

クラスの人にそこまで言われれば流石のボクも理解する。

……しかし、どうにもこうにもボクは人の心の機微が分かんないな。15年ほどは男性だったとはいえ、事実上男性機能無かったからどうにもその辺のことは曖昧だ。感覚はその頃からの地続きだから、女性としての感覚も微妙だし。半端っていうかなんていうか。

まあ、毎度のことだ。今は仕方ないこととしておく。

「いいですなーああいいう風に思ってくれるのも」

「そうかな。あんまり思わないけど」

「”もて”る者はもてざる者の気持ちに分からぬか……」

「はっ。」

「ううんこつちの話」

持てる者……あ、モテる者、とのダブルミーニングか。でも個人的なことを言わせてもらおうと、正直なところモテるっていうのは、怖い。晶葉も奈緒さんも他の人もよく言ってるけど、ボクは人の心がよく分からない。

人生経験は、まあ、あるんだ。前世では知識を詰め込む……というか、そうさせられただけだったのだけど、それでもだいたい15年間、実質「何もしなかった」という経験だけは残っている。それにこちらの世界での14年間。それは多分前世のそれよりも遥かに濃い経験だ。その二つの人生の中で、ボクは色んな人を見て来た。

悪い人がいた。善い人がいた。強い人がいた。弱い人もいた。俗っぽい人がいた。浮世離れた人がいた。矛盾を抱えて生きている人がいた。考え無しに生きている人がいた。人を殺した人がいた。人を救った人がいた——……。

……と。

つらつらと挙げてはみたけれど、実際のところ、これあくまでボク見
てきた「だけ」なんだよね。あんまり接してきてはいない。対人経験
が少ない、とも言い換えられる。あっても、施設の人間だとかおじじ
とその従業員とか、ごく一部の同級生とか、あと団長さんとその周辺
とか……その程度。

今になって思うと、そういうのはどうにも良くない。14歳にして
は膨大な経験と、14歳にしてももうちよつとこう……あるだろう!?
となるような些少な対人経験。まるつきりちぐはぐだ。この二つ
が組み合わせられることにより、人の心が分からない系錬金術師兼ア
イドルなどというキワモノが爆誕してしまうのである。別名をコ
ミュ障という。小学校の通知表に「もうちよつと人を信じるようにし
ましょう」などと書かれてしまうのは伊達じゃない。いや信じてるん
だよ? 少なくとも身近な人は……。

「そもそもボク、人からどう見られてるのが分からないんだよね」
「えー勿体ない。なんなら男子くらい手玉に……あごめん今のナシ」
「うん。ありがとう」

こういう悪女? みたいな話が出た時、過去の経験もあつてボクは
どうしても不機嫌になってしまう。そうなる前の段階で気付いて、即
座に話を修正してくれるクラスの人は、正直かなりありがたい。

「つまり自分の何が人気なのかもわからないと?」

「うん、まあ」

「なんて勿体ない!!」

「うおっ」

いや、でもそこについては正直プロデューサーに一任してる部分だ
し、ボク個人はそこまで……その……まあ、はい。うん。改めて考え
てもよく分かんないです……。

……そんな感じのことを言ってみると、クラスの人には「はー!!」と盛大なため息を——いや、はつきり言葉にしてない?——ついてこつちに向き直った。

「いい? 白河さんはちっちゃくて細っこくって儂くて触ったら壊れそうで、めっちゃめっちゃ守ってあげたくなる系なんだよ!」

「ふ、ふむふむ……?」

「その上ミステリアスで歌もダンスもめっちゃ上手いってというのがギャップあってイイの! なのに口を開いたら所帯じみたこととか常識的なこと言うから、なんとなく身近な人にも感じられてなおグツド。雲の上の人じゃないっていうのが最強なの分かる!? こやつめ! 好き!!」

「え、あ、え、あ、あえ、あ、ありがとう……」

——クラスの人、どうやら極めて珍しい女性ファンだったらしい。

真正面からこうも褒められると、どうにもこうにも気恥ずかしい気持ちで湧いてくるけども……否定するのも相手に失礼だから、ちゃんと受け取っておく。燃えるように顔が熱いけど、我慢だ。我慢。

……とまあ、気を取り直そうとして顔を洗いに行つたところ、またしてもアラジン役の争奪戦が始まり大騒ぎ。どつたんばつたん、チンパンジーと化していく級友フレンズを監督が「うろたえるな小僧ども!!」と一蹴。厳正な審査の末、アラジン役、魔法使い役、王女役とその他モブが決定したのだった。

教室が死屍累々だったのは気にしないことにしておく。

そんなこんなあつて、劇についての話し合いは終わったので、次は喫茶店だ。

結局メイド喫茶ということは覆らなかったが、仕事でそういう衣装なら何度か着ている。同じくこれも仕事だと思えばなんてことはない。

が、ここでボクに向かつてある提案をしてくる人がいた。

「執事服着てくれないかな?」

「いいよー」

即決した。

別に拒むようなことでもなし、むしろ女性用のフリフリの服よりは個人的には着やすい感がある。

というわけで、裏で着用。流石にいつも着てる衣装と比べるとアレだけど、着心地自体は悪くない。特に動きが阻害される感じも無いし、うん。大丈夫。

執事といえばセワスチアンさんかな。あの人を参考にして……でも、あの人みたくオールバックにするには貫禄が足りないし、いわゆる王冠編みみたいな髪型にしておくのが無難かな。元がそれなりに長いから、短めに見せることで印象を変えられるはずだ。

「お待ちせ致しました」

「おおー」

その格好で出て行くと、感心したような声が発せられた。どうやら女子にはそこそこ好評らしい。

逆に男子の反応はあまり芳しくないけど、男装という性質上仕方ないだろう。一部は悶えてるけど。なにゆえ。

「むっ！ ショタっぽくていいねエ……」

「どこがショタだよ節穴かよ女子」

「はーこのいじらしさが分からんとかそっちこそ節穴もいいところだわ……」

「誰がどう見ても男装執事のロリ版じゃねえかぶちころがすぞ」

「どう見たってナイスデザインでしょうが」

「そこに異論は全くねえよよくやった」

「サンキュー」

ピシガシグググッ。

何やってんだこの人たち。

「でもよお、やっぱりメイドも捨てがたいぜ?」

「白河さん、午前と午後で衣装入れ替えるとかOK?」

「いいよ」

「だそうだぞ野郎ども!」

「やったぜ」

「この私を伏して崇めよ」

やだこの人たち本当に拝むように伏して感謝してる。

「そもそも感謝するべきは氷菓ちゃんに対しては?」

「そっちは常に感謝を捧げてるから大丈夫さ」

「わけがわからないよ」

そもそも彼らはボクの何に感謝を捧げているのか——だし、いくらなんでも大仰すぎる。

何だよいつもお世話になってますつて。普段もつとぞんざいな扱いしてくるだろキミら。それとも気になるあの子に意地悪をしてみよう小学生マインドが再燃でもしてしまっていたのだろうか。まさかな。自分で言うのもなんだけどぼかあ見た目からしてアレだぞ。まあ最近はようやく142cmまで伸びただけど……。

「そうなるよ、あたしたちも執事? みたいな格好した方がいいのかな?」

「普段ガーリッシュなもの着てる方が多いし、ギャップが出ていいかもだけど……別にやらないんならそれはそれで構わないと思うよ?」

「そうなの?」

「うん、まあ……」

言いつつ、クラスの男子に目を向ける。

法子さんと七海ちゃんは、結構こう……ボクと比べたら遥かに育つてゐるから、そういう部分で、メイド姿を期待されてゐる面はあると思う。

例えば、午前中にメイド役をやった場合、午後からはずっと執事役をすることになる。まあ必ずしもそればかりってワケでもないだろうけども——いずれにしても、法子さんのメイド姿を見られる時間は減ることになるだろう。男子諸兄としては、その辺を認めるわけにはいかないはずだ。

「でもやる分にも構わないし、そこところは自己判断で、自由にということで……」

「七海は着てみたいし着てみるすよ」

「じゃああたしもやってみよっかな！」

ほんのちよつと男子の雰囲気盛り下がった。

でも本人が望んでやることがだし許してほしい。普段二人ともこういう男装とかする機会あんまりないし、やりたいという気持ちもあるはずだ。たぶん。ボクがやるから自分たちもやろっかなーという気持ちもあつたりしたのかもしれないけど、そこところはまあ許してほしい。アレだよ。新しい性癖の開拓とかそんなん。男装女子っていうか。

で、結局、喫茶店はボクだけじゃなくて、七海ちゃんと法子さんの二人も一緒にメイド兼執事をやることになった。

……まあ、なんだ。どうせプロデューサーとかも来るだろうし、今後の売り出し方針のために参考にとかさ。そんな感じにもなるから、大丈夫だよ。たぶん。

@ ————— @

で、そんなこんなで色々とかなして一か月と少し。

時は11月中旬、ボクらはようやく文化祭の本番の日を迎えていた。

日々の過重労働に耐えかねたボクは漏れなく死亡しているわけだがまあそこはいい。少し眠れば大丈夫。いやホントに。寝過ごしたりはしないって。うん。大丈夫。

……いやまあ前振りとかじゃなくて、実際普通ちゃんとしてるんだだけ。

さて、進行上、うちの学校の文化祭は二日間にわたって催される。一日目に合唱コンクールや演劇、二日目にバンド演奏や模擬店……という配分だ。

現在は一日目。合唱コンクールを終えて、演劇を行おうというところだ。

ちなみに、時代柄と言うか……アラジンと魔法のランプの原典を見ると、ややセクシャルかつバイオレンスな描写が見られたため、この辺については多少改変が行われた。

さて、アラジンと魔法のランプという物語の性質上、ボクの出番は少し経ってからとなる。

ストーリーの導入は、まず、悪役である魔法使いがアラジンを訪ね、ある洞窟に魔法のランプを取りに行くよう依頼するところからだ。

アラジンは、魔法使いから「災いを遠ざける」という魔法の指輪を預かり、洞窟へと向かった。様々な仕掛けを解き明かし、アラジンは見事にランプを手に入れる。

しかしアラジンはランプを手に入れる際、欲張ってその場にあった金銀財宝などを大量に懐に収めてしまった。そのせいで体は重く、階段が登れずに洞窟から出られなくなり——やがてアラジンからランプを手に入れられないと見た魔法使いは、洞窟の出入り口をふさいでアラジンを閉じ込めてしまう。

アラジンは途方に暮れ、手を合わせて神に祈りを捧げた。するとその時、指輪がこすれて中から指輪の魔人が現れる。

「僕を外に出してほしい」

指輪の魔人にそう頼み込むと洞窟の扉が開き、アラジンが願った通

りに外に出ることができるようになったのだった。

その後、家に帰り着いたアラジン。この時にランプも一緒に持ち帰ってはいたものの、そのみすぼらしい外見のおかげでランプを価値あるものとは思えず、放置してしまっていた。

そんなある日、アラジンの母親はこの小汚いランプも、磨き上げて綺麗になりさえすれば売れるのではないかと思いつく。アラジンがいない時にその考えを実行に移したのだが——なんと、アラジンが持って帰ったのは魔法のランプなのだった……。

「お呼びでしょうか、ご主人様」

酷薄な印象を受ける声が響いた。

思わず顔をしかめる母親。それを尻目に、ランプからは得体のしれないヒトの形をした「何か」が飛び出した。

「あ、あなたは!?!」

「私はランプの精霊。『魔法のランプ』の持ち主の召使いにございませす。さあ、願い事があるならなんなりとお申し付けください。またたく間に叶えてご覧にいれましょう——」

と。

あまりに現実味の無い光景ゆえにか、あるいは驚きのためにか——母親は、その場で即座に卒倒した。

やがてアラジンが外から帰ってくる。母親が卒倒していることに驚くアラジンだが、先に指輪の魔人を見ていたために混乱は最小限である。

先程と変わらない説明を魔人から受けるアラジン。やがて落ち着いていた彼が望んだのは——。

「僕は、豪華な食事が欲しいな」

「仰せの通りに」

パチン、と響く指の音。その直後、アラジンの目の前に王宮の食事もかくや、というような豪華な料理が姿を現した。

あまりの事態に困惑しつつも、目を覚ました母親と一緒に食事をたいらげる。その皿は黄金でできていたため、アラジンはこれを売って生計を立てるようになった。

やがてしばらく経つと、アラジンは街を通りかかった王女に一目ぼれ。どうしても彼女を忘れられないことから、アラジンは再びランプの魔人を呼び出すことにした。

「——悩まれることはありません。あなたの望みは王女と結婚することでしょう。であるならば、アラジン。あなたも王族に並ぶほどの立場を得なければなりません。ですが心配はありません。ランプを持つている限りは私はあなたの味方。その欲望を、叶えましょう」

——果たして。

アラジンはランプの魔人の力により、膨大な財産を手にする事となる。この財産を王に献上することで、アラジンは王女への御目通りが叶うこととなった。

三か月の交際の末、王に認められてアラジンは王女と結婚。魔人に命じて豪華な宮殿と莫大な資産を用意させ、王族の一員として宮殿に住まうことになった。

が、これに業を煮やしたのが魔法使いである。

かねてより狙っていた魔法のランプをアラジンに横からかつさわれ、オマケにその力で王族にまで成り上がったのだ。本来は自分がそれを得ていたはずだというのに。

水晶玉でその様子を観察していた魔法使いは、知略を駆使してアラジンの宮殿からランプを掠めとる。

「——お呼びでしようか、主人様」

ランプの魔人はランプの所有者にのみ従う。

魔法使いはこれを利用して、宮殿を王女ごと自分の土地へと移動させたのだった。

突如として消えた宮殿。当然、どこに消えたのかもわからないので、途方に暮れるアラジン。

そんな時、ふとした拍子に指輪のことを思い出したアラジンは、指輪の魔人に命じて「魔法のランプのある場所」へと移動させてもらう。

タイミング良く、魔法使いは外出中。なんとかランプと王女を取り戻したアラジンだが、自分の意に沿わないことをしでかした魔人を軽く咎める。

「お前は僕に従うのではなかったのか？」

「私はあくまで『ランプの持ち主』に従うだけですよ、アラジン。あなたの意に沿わないことをしていたことは認めましょう。しかし、それもすべて『ランプの持ち主』の企てにございます」

ランプの魔人とは、言うなればあくまで一個の「道具」である。そこに善悪は存在しない。重要なのは、使う者の心ただ一つだ。

言葉によってそう示すと、「あなたはどうする？」と問いかけるように、魔人は薄く微笑んだ。

——そうして。

アラジンは魔人の力を借りて宮殿を元に戻し……魔法使いを「懲らしめ」た。

国に戻ってからは政治を学び、庶民の出であるからこそできる政治に取り組み、長く善政を敷いたという。

ランプの魔人がそこに介在していたかは、定かではない。

……で、幕が下りてしばらく。客席は色んな意味で困惑に彩られていた。

まあそうなるよなあとは思う。中学生の感性でアラジンと魔法のランプをある程度再構築するという関係上、ちよつとこう……色々混

ぜ込んじやうというか。

例えばそもそも魔法使いを殺したのかそうじゃないのか、明確にしない辺りでスッキリしないし。アラジンが魔法のランプをこれ以降使ったのか、それとも封印してしまったのかというところも定かじゃないから色々想像が掻き立てられるし。

小説やマンガ、アニメとして見せるなら、確かにこういう手法も有効だと思う。でも改めて考えてほしいんだけど、これはあくまで、中学生が文化祭で演じる、三十分程度の劇だ。あんまりスッキリしないものを残して、観客に行間や結末の先を想像してもらおうというのは……ちよつと不親切かなあと思わないでもない。

「なぜあまりウケが良くないんだ……？」

「いやアレは色々やべーだろ」

監督にツッコミを入れる男子。だよね、とボクは見えないように小さく頷いた。

あとそれぞれのキャラが、アニメ映画のそれとだいぶ違うのも観客的に受け入れづらい要因だろう。

特に魔人。本人に悪意というものは一切無い一方、自分の能力とそれによって引き起こされる可能性のある事柄について自覚しており、その上で他人に自分をどう使うかを選ばせる——なんて。ボク自身はあんまり演じたことのないタイプだから楽しかったけど、ちよつと邪悪さが見えるあたり、受け入れがたい人はいると思う。

「もしや氷菓ちゃん、ちよつと問題があるって分かってたんれすか？」
「ん……薄々？　でも確信とかは無いから、どうかなってくらい」

とはいえボクができるのは演じることだけ。「創る」ことは徹底的に不向きだ。錬金術は「作り変える」技術だろって？　完成形が見えてないと最終的に余計にいびつになつちやうから手を出さない方がいい。はずだ。たぶん。

「そういう時は言ったほうがいいですよ……って、受け売りですが」
「そっか……そうだよな。うん、分かった」

それもそう、なんだよね。

確かに今回、ボクは監督と脚本を信じて——盲目的に——配役を演じた。ある意味では信頼しているということでもあるけど、ある意味では何の責任も負わないということでもある。

これまでボクが演じたのは数件。しかし、そのいずれも商業的に成功したし、一般の客層からの人気も得られた。

けどこれから先、数多く仕事をこなしていく上で……言ってみれば「駄作」と呼ばれるような脚本と出会うこともあるだろう。書いた本人は、多分気付けない。そんな時に演者として声を上げて修正することができれば、場合によってはそれが駄作になることを回避することができるかもしれない。

同じ演じるなら、作品の出来が良いに越したことはない。会社的にもそれは同じはず。今まで演技そのものを良くしていくことばかりで気付かなかったけど、作品に責任を持つ、作品をより良くする——と言うのなら、やっぱりそういうことを考えないわけにはいかないだろう。

少し——勉強してみようかな、と。そう思った。

@ —— @

さて。

あれやこれやとあったものの、どうにか一日目を終えて一休み。人気がない体育館の裏で志希さんと合流し、石段に座って適度に体を休めていた。

「おっつかれー。ドリンク飲む?」

「ありがとー飲まなーい」

「ちえー♪」

文化祭一日目。今日やってきたのはおじじとその部下数名、先生、お姉。それとプロデューサーと志希さん……といったところ。一日目は平日にやっているおかげで、晶葉を含め学校に通っているような人はあんまり来ていない。志希さんは时期的にもう自習期間らしく、サボってそのまま来てるけど。

「ところでランプの精霊^{ジン}ってニヤルラトホテプか何かだっけ？」

「文化圏的には似たようなものあるんじゃない？ でもあそこまで悪辣じゃないし」

「いやあでも結構邪悪だったよ？ プロデューサーが『あんな演技もできるのか！』って興奮してたし♪」

「やってみても言われたこと無いからね。想定できる範囲のものならだいたいなんでもできるんだけど」

「だよね。飛鳥ちゃん！」

『衆目を集めるのは好きじゃない……そう自分を騙していただけないさ。きつとね……』

「にやははそれっぽい」

知り合いは特に模倣しやすい。必ずしもできるわけじゃないけど。

「ま、言っても『想定できる範囲』だけだもんね♪」

「ん、まあ」

……人間というのは基本、不合理で不条理なものだ。良くも悪くも衝動のままに行動する人が多く、時によつてはバグつてんのかと断言しにくくなるような行動を起こす人もいる。模倣したくても、理不尽すぎてできない……みたいな人は、実は少なくなかったりするわけだ。

「はーあ。あたしも文化祭やってひよーかちちゃんたちに来てほしかつ

たのになー」

「三年生はダメなんだっけ」

「そーそー。受験に向けてっつてね！ そーゆー既成の概念にとらわれ
て締め付けるとヒトの思考を停滞させるっつて分かんないかにやー？

やっば偏差値だけ高くてもダメだね！」

「普通の人には受験は死活問題だから」

「その程度で死んじゃうなんてひよーかちゃんみたいだねー♪」

「どういう意味だ」

いや分かるけど。死にやすいな、っつて言いたいんだろう。

志希さんは色んな意味で強いから、その辺はやや理解が難しい部分
かもしれない。

でも構造的な問題とか、法整備の問題とか諸々あるしな……いや、
その辺まで語ると極めて面倒だ。やめとこ。

「それより来年からのこと考えた方が建設的かもよ。大学だと文化祭
……っつていうか学園祭も大規模になるしもつと楽しいっつて聞くし。
志希さんとこならボク行くよ」

「どんどん来てきて〜。プロデューサーも一緒に〜」

「あっ」

「にやはは」

これ模擬店か何かの料理で即プロデューサーを実験台にする気
満々ですわ。

頑張れプロデューサー。結果が見たいから死なないように整える
だけは整えるよ。

でもそうなると、今年は志希さんの文化祭は見られないのか。晶葉
のそこは平日に合唱コンクールしか無かったっつて話だから行けな
かったし……二人とも文化祭の様子を見られないとなると、ちよつと
寂しいな。

……あ、そうだ。

「あのさ志希さん、ちよつと提案があるんだけど」
「なーにー?」

そのまま耳元に近づいて一言。

ごくごく簡単なことだけど、志希さんの機嫌を上向かせるには、それだけで充分だった。

53：小さな一歩

文化祭の一日目が終わってから一時間ほどして、ボクは明日の学内ライブの打ち合わせのためにとある貸しスタジオにやってきていた。今日、ここにいるのはボクとレイナさん、それからこのひと月ほどベースの練習をしてもらった巴さん——そして、もう二人ほど、別の人物もここに加わっている。

馬と鹿だ。

「何よコイツら!?!」

「馬だよ」

「鹿デス……ピーガー」

「ロボじゃコレ!?!」

「助っ人だよ……一応」

……まあ、うん。一応……だね。うん。

「本当に大丈夫なんじゃろうな。並べたら馬鹿じゃぞ」

「いや、それ本人が買ってきたやつだしボクに言われても困るんだけど……」

「アンタの見立てだったらマジどうしようかと思っただわ」

センスが無い無い言われるボクも、流石にコレはちよつとヤバいっていうのは分かる。

いやしかし、これはこれでむしろハイセンスなのか？ これもある種のロックでは？ ボクの記憶が確かなら、あるロックバンドが動物マスクをしていたはず。つまりこれはロックなのでは？ バンドとして正しいことなのでは？

「……………」

「いや何でアンタまでマスクつけてんの!？」

「……バンドって、もしかしてこういうのが正しいのかなあ、って」「んなわけないじゃろ。というかどこから出したんじゃそのペンギンマスク」

そりやまあちよちよいと。

いやそれはいいんだよ。気にしちやいけない類のものだから、これ。

「錯乱してるわねこれ」

「錯乱しとるな」

ボクは既に少し錯乱している！

じゃなくて。

「で、誰じゃこいつら」

「あたしだよ♪」

「うわっ、志希だ!？」

「その反応なかなかヒドくない?」

「こいつアタシのイタズラ一瞬で見抜いて倍にして返してくんのよ」「知ってる」

何せフルボッコちゃんの収録現場では日常的な光景である。

ちなみにボクは構造解析で回避しているので、基本的に被害は受けない。ただ、それでもあんまりレイナさんから避けられていないのは、やり返したりしてないから……だろうか。

「じゃあこっちは?」

「ロボだよ?」

「……本当にロボじゃと!？」

「晶葉の差し金か……」

「『何でそんな面白そうな話に混ぜないんだ！ ん？ 負担？ 知ったことかそんなもの！』って言いながら一晩で作ってきたよ」

「今めっちゃ似てたわ」

「でも一晩で作った突貫作業だからバグ取りと微調整はボクの方でやることになったんだよね」

「アイドル？」

「アイドル」

まあ別にいいんだけどね。しょっちゅうやってることだし。修正分はもう既に反映されてるし、特に問題無く使えるはずだ。

「……まあ、そういうわけだから、確か助っ人自体は外部の人連れてきていいんだよね？」

「ヒト？」

「ヒトじゃないの交じっとるぞ」

「一ノ瀬志希は改造人間である!! ってどう？」

「いや改造されとつても人間じゃろ」

「サイボーグってホモ・サピエンスの定義に入るのかな？」

「生体パーツがあれば大丈夫じゃない？」

「アンタら何の話してるのよ」

つと、いけない。主題からだいぶ逸れてた。

まあロボットは道具と思えば問題無いだろう。時々あるキーボードの自動演奏みたいなものだ。ちよつと生演奏に対応してるだけで、特別なことは無い。はず。

ともかく、そういうわけである。

文化祭に出られなかった志希さんに、多少でも文化祭気分を味わわせてあげられたらなと思って声をかけてみたわけだ。ボクも気ごころ知れた志希さんがいると楽しいし、一応、打ち込みよりもその場その場のアレンジができる生演奏の方が臨場感がある——とか、そういった実利的な理由もあるはあるけども。

ボクらみんな中学生だし、バンド演奏をしてみるというのは、普通に考えれば大きなハードルだ。本来はそれを軽減するために、ということで外部の人をバンドメンバーとして招き入れて、機材を用意したり楽器を用意したり……というのを学校側が容認しているのだけど、今回はそれをちよつぴり悪用したかたちになる。

でもいいよね、誰か傷つけるためにやってるわけじゃないんだし。より良い演奏が聞けて観客もWin。ボクらも志希さんも楽しめてWin。そういうことで許してほしい。

「で、志希とそのロボットは何するのよ？」

「あたしはドラムかな〜♪」

「こつちのロボはキーボード」

「ちようどバンドに必要な人数揃ったわけじゃない」

「でも志希、アンタできるの？ もう明日すぐやるんだけど」

「そこは心配しないでいいでしょ。志希さんだよ？」

「あたしだよ？」

「何この自信……いや分からないわけじゃないけど」

ボクにできることは志希さんもできる。流星にぶつつけ本番で即座にやれるとまでは言わないけど。そこに関しては適性の都合上、ボクの方ができる。むふん。

とはいえ確かに一回二回は合わせる時間は必要だけど、それさえこなしでしまえばすぐにセッションできるだろう。志希さん天才だから。

「とりあえず一回合わせてみようよ。なんなら出るかどうかはそれで決めたらいいし」

「……ま、そういうことにしとくわ。全員位置について」

「ピピピッ」

「真後ろで機械の音がしとってやり辛いぞ氷菓」

「後で静音しとくから今はちよつと我慢してくれと助かるよ」

「後でもできるんか……」

できるよそりゃあ。晶葉の作ったロボットだもの。

逆に言えばボクが手の施しようがないと判断した場合は、本当にどうしようもないということである。まず無いけど。それこそ例えばロボそのものが消滅するとか。

……いやでも仮にそうなくても、錬成すればその辺のアスファルトとかからでも、再度削り出せるし。ぶっちゃけると今すぐにもそんなとかなるんだけどねコレ。そうすると物理的に不自然だからしないだけで。

「じゃ、行くよ。1、2、3、4！」

ドラムを叩いて全体をリードする志希さんから、全体に向けて合図が発せられる。それに合わせてギターを鳴らしていく——けれども。

……正直なところ、あんまり整ってない。まあ、でも最初だからこんなものだろう。志希さんも慌てたような様子は無いし、あくまで慣らしのための一回ってところか。

実際、二回目を始めるとさつきよりも遥かに良い演奏ができたのが感じられた。レイナさんと巴さんはたったの二回でできたことにちよつと驚いているが、志希さんにしてみれば特別に驚くべきことでもない。その表情はかなりあっさりしていた。

「じゃあ、もう一回」

というわけでもう一回。次の志希さんはもっとうまくやってくれるでしょう。

……で、実際上手くいった。

一回でも合わせられればそれでタイミングと調子は掴めるということだろう。ボクの方は、元から何度も練習に参加してたからその辺の調子を合わせる必要も無かったわけだけど。

「はー……アンタらほんとズルいわなんていうか……」
「ズルい？ んふふふそこは天才って言ってほしいかにやー」
「よっ天才」
「そう褒めるでない褒めるでない」
「氷菓と志希が褒め合つとると白々しさをを感じるんじゃないが」
「白河だけに」
「アンタ今白河じゃないでしょーが」
「そうでもあるが」

本名が白河でなければならぬと誰が決めた。何より芸名は白河のままだから全く問題無いのだ。
まあ褒められてるわけじゃないだろうから威張れることでもないが。

「まあアレだよ。ボクも志希さんも褒められて伸びる人だから」
「伸びるよー超伸びるよ」
「背がか」
「んにゃ胸が」
「キモツ」
「にゃっはっは」
「……まあ嘘よね？」
「あっはっは」
「嘘よね!？」
「にゃっはっは」
「嘘って言うてよ!？」

まあ嘘だよ。

でも一般的な大きな人のそれと遜色なくらいにはなるよ志希さん。何で知ってるのかって、以前に性的興奮がどうのこうのって時の実験で、まあその。うん。

あといつものおくすりのどれか使えば、軟体人間になるなんてわけもないことだろうし……一概に嘘だとは言いきれない部分はあるかもしれない。

しかしレイナさんの反応を見るとなるほど、志希さんが人をからかうのが楽しいのが分かってきた気がする。なんだろう、この……打てば響く感じ。本来イタズラする側なのに、される側に回ってもそれはそれで輝いてるんだよな……。

もしかするとあれはあれでアイドルの一つの方向性なのではなからうか？ ……芸人？ いやいやそんなことはない。それだけじゃない。アイドルだって今はイジられるしイジるものなの。バラエティ番組にだって出演するしそれが求められることもあるのだから。ともあれそんな感じで、この日は満足がいく程度に練習をこなして……志希さんには申し訳ないんだけど、寮生三人は揃って寮に、志希さんはロボットに乗って自宅へと帰って行った。いつもならああやってロボットに乗ってくの、だいたい晶葉の役目なんだけど……まあいいか。いつもと違うことできたからか、なんかやで楽しそうだし。

@ ————— @

「何で志希私のハイパーキーボード君1号勝手に持っていく……？」
「無断かよ」

翌日、衝撃の事実が明らかになった。
特に理由は無いがあの後とりあえず持って行ってたらしい。
ちよつと待てよ。

「せめて一言断ろう？」
「そこはほら、あたしたちの仲だし〜？」
「親しき仲にも……礼儀はあるんだーっ!!」
「悪魔にだって友情はあるんだ的な言い方やめなよ」

「自分で言っただけなんだがこの手のネタ私たちの世代で誰が分かるんだ」

「奈緒さんあたりは分かるんじゃない？　ところでさ」

まあそれはいいんだ。

問題はそつちじゃない。

「何で二人とも開場前に来てるのさ」

「……何の問題が？」

「何か問題でも？」

「こつちも準備があるんだけど」

半ば準備の整った会場。飾り付けも終わり、学校の教室にしてはそこそこ華やかな内装に整えられた部屋――の横、カーテンなどの遮蔽物で内側を見られないように整えた、控室兼調理場にて、ボクは志希さんたちへの対応に追われていた。

志希さんは分かる。バンドメンバーの一人でもあるからだ。でも晶葉は……いや、まあ、分からないではないんだよ。ロボットのメンテナンスとかいろいろ理由はつけられるし。けど完全にお客さんモードで来てるのは流石にどうだ。

加えて言うなら、この場にはエリクシア3人が勢ぞろいしているということでもある。そりゃあもう目立つ目立つ。あんまり注目を集めるのも良くないし、とりあえずボクは二人を部屋の片隅に連れて行くことにした。

「キミのことだから二秒もあればパパッと終わるだろう」

「できてたまるか」

正確なことを言うと「やってたまるか」だけだ。

できるはできるんだよ、錬金術使えば。使うわけにはいかないけど。

こんな時開祖様なら……と一瞬考えたけど、多分開祖様は「何まどろっこしいことしてるんだよとつと終わらせろ」つて言いながらやっつのける感じで、要領の良さを見せつけてくると思う。ボクはバレルのが怖いのでちよつとできない。

「で、何で執事なんだ？ 私はメイド姿を見にきたんだが？」

「午後においでくださいませお嬢様。というか昨日志希さんに伝えてもらうよう言ったけど」

「あつゴメーン忘れてた」

「そいつ」

「んぐつ——からーいっ!!」

「唐辛子を人の口に向けてダーツする人間初めて見たぞ」

「ボクも初めてやったよ」

とはいえここは346プロの関係先じゃあない。その辺をなあなあにすると、他の一般の方々も入退場時間を曖昧にしてしまうことがありうる。その結果、ボクらだけじゃなくて他の生徒が迷惑を被ることにもなりかねないわけだ。

確かにボクは普段「まあいつか」で済ますけど、志希さん言って聞かせて理解しても意図的に無視することあるから……辛いとは言ってもあくまで食品だし、ボクなら百発百中で口の中にダイブさせられるので、食品は無駄にならない（強制）からどうか許してほしい。

「次同じことやったらどうなるんだ？」

「そりゃあ……もつと強烈なやつか、苦味とか酸味とかで」

「味覚の暴力はんたいー!」

「それフリルのエプロンで味覚の暴力に晒されたボクに言える?」
「ごめん」

かなりマジトーンの「ごめん」であった。

志希さんの目から見ても、あれが相当だったのかと気付いた瞬間

だった。

「ねー、まだお話終わらない?」

「あ、ごめん」

と、そんな折に、見かねた法子さんがこちらに話しかけてきた。法子さんの服装も、ボクと同じく執事服だ。

しかし、やっぱり法子さんが着ると、どうしても印象はかわいいの方が勝るな……悪いことじゃないんだけど。

「……しかしあんまりそういうのは似合わんな法子は」

「ええー!」

「んーなんていうか普段の物腰とミスマッチ? でもこれもアンバランスでかーわいいと思うよー♪」

「そっかー。でも似合ってるって言われたかったなあ」

「似合ってはいると思うぞ。しかし近くにいる比較対象というか氷菓がな」

「ボク?」

「見た目もそれっぽく整えているし物腰も完璧だろう。身長を抜きに考えると割と男装執事としては完璧に近いぞ。家事炊事もできるし」

「一家に一人欲しいねー」

それほどでもない。

「テレテレするとちゃんとオンナノコだよねー」

「まあ一旦それは置いて。準備しなきゃいけないから二人とも出た出た。後で接客するから」

「ぷー」

「ちゃんと執事っぽく言ってみろー」

「これより店舗の準備を行いますので一時ご退出を願います、お嬢様方。こちらです」

「本気でやるのか……」

「自分で言つといてドン引きするのやめてくれない？」

「あたしそれ先にちよつとドキツとしたかも」

「報告しなくていいよ」

前世が前世だけにすごく反応に困る。

嬉しくないとは言わないけど、色んな意味でなんとも絶妙な気分だ。

ともかく二人を一旦外に出して準備を終えて、それからこんどはバンドの準備だ。急いで体育館に向かうと、既にレイナさんと巴さんは準備を終えているようだった。

「ごめん、お待たせ——お待たせいたしましたお嬢様」

「何突然!?! いきなりすぎて気持ち悪いんだけど!?!」

「ひどくない?」

「普段の氷菓を見とつたら妥当じゃろ」

「まあ分からなくてもいいけど」

「で、もしかして今日はそれでずっと行くつもり?」

「ううん、あくまで宣伝だから。ライブ中はこの格好だけど、別に喋り方まで変えるつもりはあんまり無いよ」

「ならいいわ」

で、と思つて周囲を見回す。レイナさんはライブでやる格好に近いもの、巴さんは普段見られないややパンクな服装——本人曰く、普段やらないものをあえて選んだ——だ。その背後には馬と鹿がいた。またか。

主演はみんななんだから、なんて本人は言っていたが、これは明らかに面白がつてる時のそれだ。何をしでかしてくるか分からないぞ。ははは。怖い。

「ま、でもこれで光には確実に一泡吹かせられるってスンポーね!

アーツハツハツハツハツハ！

「そうかな……」

「うちはもう色々察しとる」

「志希さんはどう思う？」

「ブルルヒヒヒヒヒヒインｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「ブフツ」

「なんつ……何でいきなり迫真の鳴き声……!」

ちくしょう、今まで話に割り込んでこないと思ったら……!!

「でもあたし光ちゃん想像外なことしてくると思うな」

「いきなり普通に戻るんじゃないわよ!!」

「ブルルヒヒヒヒヒヒインｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「誰がもう一回やれつつったのよ!」

「レイナさん流石に理不尽だよ」

気持ちは分かるけど。

ともかく、既に機材は搬入してもらってるし、あとは演奏するだけだ。

レイナさんと光さんがお互いに対抗してバンド対決——多分勝負はつかないけど——をすることもある。既に会場は超満員だ。元々の体育館のキャパが小さめなこともある。外から覗き込むように見てるような人もいる。こうなると俄然やる気も出てくるね。

「……なんか締まらないけど、とにかく行くわよ!」

「応よ」

「承知致しました」

「合点!」

——というわけで、学内ライブが始まる。

今回レイナさんが歌うのは二曲ほど。流石に346プロのものを

使うと権利関係とか契約関係とか金銭関係とかややこしいことになるのでやめておいて、コピーバンド程度に留めておく。

先に出場したのはまずボクらの方だ。会場はまず馬マスクと鹿マスクの存在に戸惑った。当たり前である。それはそれとして、見た目のインパクトは充分だ。ここをとつかかりとして、演奏そのものに注目してもらうのが最初になる。

当然だけど、ボクらの演奏はプロ並みのそれだ。志希さんとボクは言うに及ばず、巴さんもしばらくみっちり練習していたこともあって、そんなボクらにこともなげについて来るほどには上達している。ちよつと驚いたのが、ボクに浴びせられる黄色い声援だろうか。服装ひとつ、物腰ひとつでこうまで変わるのか——と驚きを隠せなかった。

しかし、一番の盛り上がりは一曲目と二曲目の合間。志希さんがマスクを取り払った瞬間だ。本当ならありえないはずの人がいるわけで。しかもそれがスタイル抜群、クローネにも抜擢された人気アイドルとあつてはそりやあもう会場は騒然。同僚なんだから、ここにも理解できないはないようだったけど……それでもやつぱり意外は意外らしい。裏で待機していた光さんたちも、そりやあもう口をあんぐり。

まあ、はつきり言えば志希さんを引つ張り出してきたこと自体裏技みたいなものだ。ちよつと卑怯かなーと思わなくもないけど、ルールで禁止されてるわけじゃないので許してほしい。許してくれるねありがとうグッドライブ。

というわけで、観客も光さんたちも揃って驚かせたこのライブ。樂しかつたし、個人的にはもうこのサプライズができただけでも、さっきの収穫と相まって大成功と言つていい部類なんだけど——当然、それだけで済むはずもなく。恐るべきことに、光さんは他のメンバーをこの学校に通うアイドルで固めてきたのだった。

ボーカル、光さん。ギター、七海ちゃん。ドラム、くるみさん。ベース、法子さん。キーボード、紗南さん……雰囲気はどちらかと言うとカッコーイ系キョウイよりカワイイ系キョウイだけど、それがまたほどよくベストマツ

チ。こつそり練習を積んでもきたのだらう。プロ並みとまではいかずとも、少なくとも中学生のレベルは遥かに超えたパフォーマンスを魅せてくれることとなった。

ルールを利用して、志希さんを引き込みロボットを利用するといふ、ちよつぴりずるい手を使った……とはいえ、中学生どころかプロでもそうは見られないパフォーマンスを魅せたこちら側。学内の人間だけを集めて、ある意味王道かつ正統派なやり方で、ある意味「らしい」パフォーマンスとひたむきさ、まっすぐさを魅せてくれた光さしたち。で……当然と言うべきか、事前に予測していた通り、やつぱり勝敗はつかなかつた。

やつぱり、観客のみんなの意見は「どつちも良かった」、だ。でも、ボク個人はそれでいいと思う。観客のみんなは笑顔になれたし、ボクらも色々やれて楽しかった。その事実はなんにも変わらないんだから。

なおプロデューサーはボクの男装姿を見てインスピレーションが湧いたらしく、バンド演奏が終わった後も次の仕事について何やらブツブツ呟いていた。

人通りの多いところでアレやるとちよつと不気味なので控えて欲しい。

@ ——— @

メイドと言えば。

……いくらボクでも、ドロシーさんとクラウディアさんが一般的なメイドのそれからはちよつと外れていることは分かっている。あの人たちも戦闘となるとカツコいいんだけど、「ふひひ……」などと呟くクラウディアさんに迫られたり、ことあるごとに燃やそうとするドロシーさんを見ると……うん……。

とはいえ、その立ち居振る舞いや給仕の手際は大変参考になっているので、何も言わないでおきたい。

バンド演奏が終わり、午後。模擬店もよりいつそう忙しくなつてく

る。

学校の外からのお客さんは元より、チケットを渡した寮のアイドルだったり、あるいは元同級生だったり、先生だったりおじじだったり……それはもう対応に追われて大忙しだ。席数がそこまで多くないことが幸いして、その辺で倒れてしまうほどではないんだけど。

「ご注文はいかがなさいますか？」

「えー……つと。えー……ちよつと待つて」

「はい、ごゆつくりどうぞ、ご主人様」

「ホウツフ」

ただ、回転率が悪いのはどうにかならないかなとは思う。

人の心が分からないと言われて幾星霜。流石にアイドルがいる場所なんだからもうちよつとこの場所にいたい、という気持ちは分かる。る。

けれども、後ろで待つてる人も同じように考えてるんじゃないかな……という風にも思うのがまた人情だ。気持ちは分かるけど、内心もうちよつと早めにお願ひします、とは思う。

「やあ、もう、大変れす」

「うん。午前中よりもお客さん増えたからね……」

ちよつと手が空いたところで、メイド服姿の七海ちゃんと言葉を交わす。

人が増えだしたのは、それこそメイド服に着替えてからか。執事服姿も、言ってみれば変わり種としては良いものだったのかもしれないし、ある程度新規ファン層を開拓するのに成功はした。けれども元々のファン層が求めているのはそっち——というところか。

「氷菓ちゃん、ちよつと慣れてるみたいれすが」

「ああ、うん。配膳とか注文取ったりは慣れてるよ」

施設のごはんの時間でね——とは言わない。分かっているだろうし、下手に口にするともた表情が曇る。でもあれだっという思い出なんだよ。なんとたつて年長者ぶれる。

「白河さん、お客さーん」

「あ、はーい。ごめん、ちよつと行ってくる」

「行ってらっしゃーい」

七海ちゃんに見送られて再び客席の方に戻ると、そこには見慣れたイケメン——というかプロデューサーがいた。

晶葉とか志希さんとか、他にも色々来てるから驚きはしないけど……プロデューサーにしては遅い来店だ。

「いらつしやいませ」ご主人様。ご注文をどうぞ」

「あつちよつごめんそれ無しで。担当アイドルにこんな真似したって知られたら俺社会的に死んじゃう」

「ご注文をどうぞ」ご主人様♥」

「やめないか！」

「ヴッ!!!」

「!?!」

「あの子大丈夫か……?」

からかい気味にプロデューサーに言葉を放った瞬間、何故か延長線上にいた見覚えのありすぎる女生徒が胸を押さえて苦しんでいるのが見えた。思わず素に戻りかけたがなんとかもちなおす。ここから見る限り、命に別状はないらしい。更にその隣に座る男子生徒が周りの人に何でもないことを必死にアピールしている。

「……で、何かあった?」

「ホント即座に素に戻るな白河さんは……いや、今度の仕事の話だよ」

「ん」

「12月にクリスマススイベントがあるから、それに聖ちゃんといヴさん、クラリスさんとこずえちゃんの5人ユニットで出てもらおうと思ってる……これは言ったかな？」

「うん。そっちはオツケー。ライブイベントは全部スケジュールに入ってるから問題無いよ」

「そっか。じゃあ別の話だね。コミケ分かるかい？」

「そりやまあ」

「ソシャゲの宣伝も兼ねて一日目に出演してくれないかって打診を受けてるんだ。どうかな？」

「問題無いよ。お正月周りも何かあるの？」

「なるべく家族と時間を取れるように調整はするつもりだけどね」

「分かった。ありがと」

この話を聞く限り、どうも今年のクリスマス周りはだいぶ忙しくなるようだ。

それ自体は人気のバロメータのようなもの……と言っているのかな。ちよつと嬉しい気持ちはある。

「ドラマの方がガンガン入ってきそうだね。そっちは覚悟しといてほしいんだけど、大丈夫かい？」

「ん、やれる。FROSTの2期と……公演もあつたよね」

「あと可能ならアニメもオファー入ってるよ」

「そっちはどうかな……あ、いや。いけるけど」

「どうかしたかい？」

「ううん、こつちの話。昨日、劇見たよね？」

「ああ」

「あれやって、ちよつとね。劇やってて悔いが残ったんだ」

「悔い?」

「ん」

例えば脚本。横から口出しして必ずしも良くなるものじゃあないけど、もしかすると何か改善の糸口になったんじゃないだろうか。例えば配役。一喝してまとめ上げられる胆力があれば、もうちょっとスムーズに進んだんじゃないだろうか。

必ずしも良い方向に向かうとは限らないけど、何もせずにいたこと自体が、何か心の中にしこりを残してる。

ボクは模倣と複製を得意とする錬金術師だ。真理に到達したし、それによって開祖様にも認められた。それは、とても嬉しい。

けれども開祖様には届かない。ボクには創造性が無いからだ。単なる模倣と複製だけでこの領域にたどり着けたことは褒めてやる――開祖様にはそう評された。褒められたのは確かだ。けれどもそれはある種、ボクの未熟を指摘する言葉でもある。

最近になって気付いた。創造性を高めることで、模倣と複製もより高い次元に到達できるんだと。きつと開祖様はそれを伝えたいから、ああいう言い方をしたんだろう。直接的に指摘され、言われるままに訓練してもそれは創造性を得たことにならない。結局は模倣と複製の域を出ない。自ら気付いてこそ、想像力を養い、創造力を得ることが可能となる。

ボクの訓練は、ここからだ。

「もつと何かできたなって。だから同じようにならないかってちよつと躊躇っただけ」

「でも、やってみなきや何も始まらない。俺はそう思うよ」

「そうだよ。けど、ちよつと思うところが無いではないんだよね。経験を積むためにやる……って言い方すると、踏み台にしてるみたいで」

「白河さんの場合基本はできてるし、要求された最大限はこなすだろうっ」

「……うん」

「でも『それ以上』ができるかもしれない」

「できないかもしれない」

「失敗するかもしれないのが怖いかい？」

「……うん」

「白河さんや一ノ瀬さんはスタートラインが高かった、っていうか高すぎたかもね」

と、プロデューサーは優しい声音で語り掛ける。

「今まで失敗らしい失敗も無かったから、ちよつと失敗に対する免疫がついてなかったかもしれないな。けど、誰だつてホントは……最初は未熟なんだ。いいじゃないか、失敗しても。白河さんはまだ一年目の新人アイドルなんだ。そりゃあ、仕事に対してはパーフェクトだったかもしれないけど、じゃあ今後一回も失敗しちやいけないってワケじゃない。仮にそんなこと言うヤツがいたら俺がなんとかする」

「なんとかて」

「専務でもなきや、なんともなるよ」

「そつか。じゃあ——やってみるよ。脚本とか、台詞とか、気になるものがあつたら……言ってみようと思う」

「……お、おう」

「今『そんな小さいことで……？』って思っただろ」

「……そ、そんなことないぞ」

「思っただろ」

「……多少は」

……まあ、あれだけ言っておいてオチがこれじゃあ、肩透かし食らったようなものか。

でも、多少小さくてもボクにとっては大きなことだ。これをやるとやらない……できるとできないじゃ、たぶんきつと大きく違う。

……いつもこんな風に後押しをしてくれるのは、ホント、ありがたいなと思う。

「で、注文は？」

「つと、そ、そうだ。えーつと……何だこのおさかなドーナツつて……？」

「おさかなドーナツね」

「え!? いや注文する気は……」

「七海ちゃんオススメの一品だよ」

「じゃあいいか。それとエスプレッソを……」

思うけど、口には出さないことにした。

多分、今のボクにとって、簡単にお礼を言うのはらしくない。言っても後でからかわれるだけだろう。

でも、まあ——今は、それでいいや。

番外：ろく☆ちゃんねる抜粋（8）

《白河水菓ちゃんを見守護るスレ その193》

*
* 16 会員番号774番目 20XX/XX/X
ID：*

誕生日おめでとう氷菓ちゃん!!

*
* 17 会員番号774番目 20XX/XX/X
ID：*

おめでとう!

*
* 18 会員番号774番目 20XX/XX/X
ID：*

生まれてきてくれてありがとう!

*
* 19 会員番号774番目 20XX/XX/X
ID：*

おめでとうおおおおお

*
* 20 会員番号774番目 20XX/XX/X
ID：*

愛してくれて……ありがとう!!

*
* 21 会員番号774番目 20XX/XX/X
ID：*

14歳おめ!

*
* 22 会員番号774番目 20XX/XX/X
ID：*

おい今敗北者混じったぞ

*
* 23 会員番号774番目 20XX/XX/X
ID：*

おた

おめ
24 会員番号774番目 20XX/XX/X
ID：*

33 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

良くも悪くも14らしくないのはそうだと思う

34 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

氷菓ちゃん氷菓ちゃん敗北者!

35 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

何に負けてるんだよ!?

36 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

わからない

俺たちは雰囲気で敗北者認定している

37 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

クローネ参入にドラマのプチヒットにフルボッコちゃん出演決定
と明らかに勝ち馬に乗ってるはずなんだが……

38 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

氷菓ちゃんは……ロボなんだろ!!?

39 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

ロボかな……

ロボかも……

40 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

比較動画

ttp://www.*****

41 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

何で寸分狂わずダンスできるの!?

4 2 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

そうはならんやろ

4 3 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

>>42

なつとるやろがい!!

4 4 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

下手するとのあさんに負けず劣らずだと思います

4 5 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

なんなのなの

4 6 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

プロトタイプと制式型とかそういう関係なの

流石に歌まで完全一致とかないよな?

無いと言ってくれ

4 7 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

そこは流石にアレンジかかってたはず

4 8 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

二か月前の動画で議論する情弱乙

最新版上がってるからそっち見ろ

http://www.*****

4 9 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

見逃してたわすまん

はえー前よりめっちゃアレンジかかっている

5 0 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

初期だから練習通りやることにこだわってたのかね

51 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:**

**

こだわりハチマキかな？

52 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:**

**

>>51

物理型じゃないスカーフだろ

53 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:**

**

トレーナーは出荷よー

54 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:**

**

氷菓ちゃんだってポケモンやってるからストレッチじゃないだろ！

55 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:**

**

すごいよね

趣味パとしか言いようのないなにかでツリー4ヶタ連勝

56 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:**

**

バイバニラとギギギアルとフレフワンでエリクシアパとかだっけ

わけがわからないよ

57 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:**

**

これで何で勝ち抜けるの……

58 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:**

**

S | H y o k a 所詮はCPUか

なんかラスボスみたいなこと言ってるんですけど

59 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:**

*
*

感情無い冷たい目で言ってる

60 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
*

アツなんかゾクゾクしてきた

61 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
*

ひよかちゃんSっ気ある子だっけ？

62 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
*

素質は多少あるのではなからうか

63 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
*

誰でも持つてる程度のもんだと思う……

64 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
*

でも俺一度でいいからさげすまれてみたいよ

65 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
*

変態だー!!!!!! (AA略)

66 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
*

んかすげえ女の子らしい服着てる

67 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
*

ほんとだかわいい

68 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

*
*

佐藤チヨイスらしいな

69 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

* *

俺佐藤崇めるわ

70 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

* *

ヒラヒラしすぎてないのがいいよね

でもらしさがちゃんと出ててすごい

71 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

* *

佐藤マジ自分以外の見立ては完璧なのは

72 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

* *

自分のも完璧だろ！

キャラに合ってるって意味では

73 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

* *

スレが佐藤に浸食されつつあるぞ

74 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

* *

仲良いからね

仕方ないね

75 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

* *

なんか画像上がってきたけどプレゼント多すぎない……？

76 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

* *

それだけ愛されてるんだよ

たぶんきつとめいびー

77 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

* *

それだけ同僚先輩から可愛がってもらってるってことだからな

いいことだと思う

《ぶらり旅気分 実況スレ》

1 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:***

*
ぶらり旅気分

本日の行先

京都

出演者

高垣楓&白河水菓

3 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:***

*
楓さんと氷菓ちゃんか

似たタイプの二人だけに楽しみだ

4 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:***

*
似たタイプ(ダジャレのおねいさんと薄幸系ロリ)

6 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:***

*
お前外見だけで言ってるんじゃないかな

7 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:***

*
プライベートはだらしのないのにアイドル活動はパーフェクトって
共通点があるし……(震え声)

8 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:***

*
あの氷菓ちゃんに対してだらしないうって言うていいのか……?*

10 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:***

**

ごめん……

1 1 会員番号774番目 20XX/XX/XX

**

だらしないっていうか歪なだけだよね

センス含めて……

1 3 会員番号774番目 20XX/XX/XX

**

闇が見える

2 8 会員番号774番目 20XX/XX/XX

**

はじまた

3 2 会員番号774番目 20XX/XX/XX

**

また

3 6 会員番号774番目 20XX/XX/XX

**

アツ浄化される

4 0 会員番号774番目 20XX/XX/XX

**

何この

この……すげえこの……語彙が消え去る……

4 2 会員番号774番目 20XX/XX/XX

**

下手すると人間味薄いくらい綺麗だよね二人とも

4 3 会員番号774番目 20XX/XX/XX

**

カエデは有名だよね

有名だよね

5 8 会員番号774番目 20XX/XX/XX

**

勘違いして恥ずかしがるのきやわわ

	64	会員番号774番目	20XX	/	XX	/	XX	/	XX	ID:
**		ちよつとずれてるよね氷菓ちゃん								
**	79	会員番号774番目	20XX	/	XX	/	XX	/	XX	ID:
**		しやんざい								
**	82	会員番号774番目	20XX	/	XX	/	XX	/	XX	ID:
**		燦然!								
**	83	会員番号774番目	20XX	/	XX	/	XX	/	XX	ID:
**		しやんぜりおん? (難聴)								
**	85	会員番号774番目	20XX	/	XX	/	XX	/	XX	ID:
**		しやざいしてください!								
**	88	会員番号774番目	20XX	/	XX	/	XX	/	XX	ID:
**		謝れよ……:月島さんに謝れ!								
**	89	会員番号774番目	20XX	/	XX	/	XX	/	XX	ID:
**		シヤンバイザー!								
**	96	会員番号774番目	20XX	/	XX	/	XX	/	XX	ID:
**		ええ…… (困惑)								
**	99	会員番号774番目	20XX	/	XX	/	XX	/	XX	ID:
**		まさかのスルーである								
**	111	会員番号774番目	20XX	/	XX	/	XX	/	XX	ID:
**		あれもしかして氷菓ちゃん気付いてない?								
**	114	会員番号774番目	20XX	/	XX	/	XX	/	XX	ID:

楓さんそういうところですよ

1 1 6 会員番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I D :

緊張してるんじゃないかなろうか

ツイッターの方でも氷菓ちゃん狂喜乱舞しとつたろ

1 2 3 会員番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I D :

ファンらしいね

1 4 6 会員番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I D :

あつ(察し)

1 5 0 会員番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I D :

ずれたセンスに境遇に空回るダジャレ

これは闇では?

1 6 8 会員番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I D :

ウツ

1 8 3 会員番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I D :

死ぬ

死んだ

2 2 2 会員番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I D :

突然垣間見えた闇が油断した頭にスーツと効いて……

これは……クソキツイ……

2 3 1 会員番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I D :

例の件あってから346の声明無いよね?

2 3 4 会員番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I D :

本人出てなかったから事実確認してんじやない

239 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

良い番組のはずなのに渦中に放送されてるから素直に楽しめない
このつらみ

243 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

つらあじ

244 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

つらウエイ

249 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

脇に置いておいて楽しむことができないなんてみ派はばかだな

257 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

けしききれい

261 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

マジ綺麗だよね

265 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

二人とも美人だから映えるよね

270 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ばえるってやつか

272 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

バエル? (難聴)

273 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

インスタバエルのもとに集え!!

275 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

アグニカポイント付けちゃうんだ……

278 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

うーん100点

362 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

なんか氷菓ちゃんの街ぶらって初めてでは

365 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

言われてみればそうである

ユニット組んでる子らと比べてもバラエティの露出少なめだから

なあ

369 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

楓さんはこういう企画出まくってるけどな

372 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

お酒飲みたいし……

377 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

今日もきつと飲むんだろうなって

380 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

氷菓ちゃん大丈夫?

タチの悪い酔っ払いの相手させられない?

381 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

お前らの楓さんへの認識に草バエル

399 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

あ〜いいつすね〜

400 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

アイスにはしゃぐのKawaii

422 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

全部!?

425 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

全部だ

全部よこせ

426 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

ちよつと待てよ!?

431 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

一気にサイコ感マシマシにしてきたな……

432 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

※ 後日配送されました

439 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

楓さんがドン引きするとか相当では

444 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

でも普通に食べるのも買うのね

柿と抹茶か

447 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

おいしそう

458 会員番号774番目

20XX/X/X/X

ID:

これ間接キスでは？

461 会員番号774番目

20XX/X/X/X

ID:

キテる……

469 会員番号774番目

20XX/X/X/X

ID:

氷菓ちゃん楓さんのファンって言ってたっけ

めちやめちや懐いてるよね

474 会員番号774番目

20XX/X/X/X

ID:

仔犬感ある

555 会員番号774番目

20XX/X/X/X

ID:

神社で大吉出した時に楓さん楓さんってはしゃぐのかわいいよね

558 会員番号774番目

20XX/X/X/X

ID:

楓さんもはしゃいでたけどな

ただの「吉」はきちーですねって

561 会員番号774番目

20XX/X/X/X

ID:

……

564 会員番号774番目

20XX/X/X/X

ID:

アツハイ

648 会員番号774番目

20XX/X/X/X

ID:

温泉口ケ！

おんせん
会?!!?!?!?!?!?

6 5 1 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

!!!

いいのか!?

入浴シーンなんて見せていいのか!!!?

6 5 4 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

よく許可下りたな

6 9 2 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

ひよおおおおおおおおおおおお

6 9 4 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

わああああああああああああああああああああ

6 9 9 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

ごめん

見ててすごい気の毒

7 0 2 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

こうして見ると親子みある(体形から目を逸らしながら)

7 0 9 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

眼に毒じゃなくて気の毒なのか……

7 1 2 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

誰うま

7 1 5 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

あまりにも

あまりにも……

7 2 2 会員番号774番目 20XX/X X/X

温泉はダメだったんじゃねえかなあ……

7 2 3 会員番号774番目 20XX/X X/X

346プロは俺の精神を殺そうとしている!!!!1!!11!!

7 2 6 会員番号774番目 20XX/X X/X

哀れなほど薄っぺらな……

7 3 6 会員番号774番目 20XX/X X/X

楓さんのバランスの取れた体形と氷菓ちゃんのあまりにも薄すぎる体形を見比べた俺は廃人と化した

7 4 5 会員番号774番目 20XX/X X/X

綺麗なんだしサービスシーンなのは分かるけどこの対比は草も生えん

7 4 7 会員番号774番目 20XX/X X/X

ネグレク

7 5 3 会員番号774番目 20XX/X X/X

>>>747

やめろオ!!

7 5 4 会員番号774番目 20XX/X X/X

なんでもかんでもネグレクトと言うのはやめろ
そも捨て子だからもつとひど……ヴッ

7 5 9 会員番号774番目 20XX/X X/X

少し泣く

811 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

誰だこのタイミングで放送しようとしたクソバカは!!!!

821 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>811

どっちのと言ってんだ

826 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

こつちは元々予定が組まれてた上に録画だろ?
じゃあ問題なのニュースの方でないの?

899 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

765プロに電話しても当社は関係ありませんの一点張りだぞ

906 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>899

本当に関係ないじゃねーかwww

917 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

346に電話したけどだいぶ慌ただしかったぞ

何かあったのは間違いないと思う

919 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>917

というデマじゃないだろうな

926 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

何が真実かも嘘かもわからない地獄のような状況すぎてなあ……

《ぶらり旅気分 実況スレその2》

59 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

おかしい

飯テロなのに心が安らぐ

66 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

おいしそうに食べてるよね

なんか逆に安心するよね

78 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

楓さんお酒入ってない？

89 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:*

**

ホントだ完全に飲んでるわ

110 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

**

未成年がいるのに飲酒って……

112 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

**

やだなあウサミンの前で飲んでたじゃないか

115 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

**

ソウデスネ

126 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

**

なんかお酌してるのを見るとすごい複雑な気分なんだが

129 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

お酌してもらいたいよね

けど未成年な上にこんな子にお酌させるのどうかと思うよね
けど楓さんだし仕方ないかとも思うよね

3 1 5 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

朝チユン

3 1 9 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

朝チユン!

3 2 6 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

やったのか!高垣!

3 3 3 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

J Cとやったのか!?高垣!!

3 3 6 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

高垣!!!!

3 4 2! 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

お前ら落ち着け

3 4 8 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

そもそも攻めは氷菓ちゃんだったかもしれない

3 5 0 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

>>>348

無理だろ……

3 5 3 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

想像できないというより肉体的に不可能だろ

354 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

そもそも寝てただけだろ!?

357 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

名無しどもは人が二人いるのを見るとキてるキてる言うだけの猿になるからな……

362 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>357

男だったらどうなるんだよ

363 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>362

大西になる

367 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>363

地獄かよ

378 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

なんか氷菓ちゃん前日より楓さんと打ち解けてない?

382 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

やっぱり夜のお付き合い(意味深)を……

390 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

いやでもいい意味で雑になってるぞ

411 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

前の日より扱い雑になったよね

いやむしろ楓さんのに当然の扱いなんだけど

469 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

ダジャレに反応してる！

487 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

なんかあしらい方がしぶりんっぽいパーフェクトコミュニケー

ション

501 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

楓さんもなんかイキイキし始めたな

512 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

なんかいい雰囲気だ

518 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

対応も会話も自然だしいいよね

526 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

いい……

《白河氷菓ちゃんを見守るスレ その234》

564 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

681 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

777 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

820 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

《白河氷菓ちゃんを見守るスレ その235》

38 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

*

はああああああああああああああああああ
ほわああああああああああああああああ

39 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

*

妄想の約半分が事実になっているのがわら
笑えない……

40 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

*

俺明日から氷菓ちゃんどう見たらいいんだろう

41 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

*

孤児……

孤児か……

42 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

*

俺氷菓ちゃん引き取る!

43 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

*

>>42

……すぞ

	4 4	会員番号7 7 4 番目	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**		お金送れないかな……		
**	4 5	会員番号7 7 4 番目	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**		やめとけ		
		俺らがやるべきことは売り上げに貢献することだけだ		
**	4 6	会員番号7 7 4 番目	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**		あの体形の謎がよく分かったような気がする		
**	4 7	会員番号7 7 4 番目	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**		募金してくる		
**	4 8	会員番号7 7 4 番目	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**		いやまて		
		あの番組氷菓ちゃん出てなかったろ！		
		本人が言わない限り分かんぞ		
**	4 9	会員番号7 7 4 番目	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**		こないだ敗北者とか言った連中はとりあえず謝ろうかマジで		
**	5 0	会員番号7 7 4 番目	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**		安心しろ既に喉を搔つ切った		
**	5 1	会員番号7 7 4 番目	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**		自爆して謝罪する！		
**	5 2	会員番号7 7 4 番目	2 0 X X / X X / X X	I D : *
**		気軽に現世に戻ってくるんじゃない		

※ 追加放送後

《白河水菓ちゃんを見守護るスレ その254》

822 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

嘘だったジャンツツツツ!!!!!!

823 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

親いたんじゃねーか!!

824 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

そりや今普通に暮らしてるっていうんなら養子に入ったりくらいはしてるよね!

825 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

アイドルやるくらいなんだしな……

826 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

照れてるのかわいかったよね

827 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ちくしょう養親が羨ましい

828 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

色々疑問が分かったんだけどさ

じゃあ何であんなに痩せてるんだ……?!

829 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

本人が食が細いし孤児院時代から他の子に分けてたからって言うっ

てたろ

それにしたって細すぎだけど

830 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

分けすぎでは

831 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

おかげで発育不良ですよフッフなんて自分で言っただけど笑えな

いよ

832 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

老人がそのうち死ぬからなハハハみたいなこと言ってるのと同じ

臭いを感じる

833 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

でも養子になってからは普通に食えてるはずだよな？

海外にも行ってるみたいだしおかしくね？

834 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

だから食が細いって表現したんだろ

835 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

もしかしたら養子になったのつい最近とかかもしれないぞ

836 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>835

それはない

インタビューで「今ではすっかり」なんて言うくらいに付き合いが

深いだろ

837 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

氷菓ちゃんが養子になったのは最近だぞ
学校にも施設から通ってたからな
ソースは無い

838 会員番号774番目 20XX/X X/X
ID :

>>837

無いのかよ!!

839 会員番号774番目 20XX/X X/X
ID :

>>838

そもそも同じ学校に通ってたりでもしないと知らないだろそんな
こと

840 会員番号774番目 20XX/X X/X
ID :

仮に同じ学校に通ってたらどうするんだ

841 会員番号774番目 20XX/X X/X
ID :

中学生がこんな場末の掲示板にいるんじゃないやねえって説教するかな
……

842 会員番号774番目 20XX/X X/X
ID :

>>841

正論である

843 会員番号774番目 20XX/X X/X
ID :

情報のまとめってどっかある?

844 会員番号774番目 20XX/X X/X
ID :

ウィキペディアに載ってるけど要出典が多すぎてな
ちよっとしたまとめはどっかにあったはず

845 会員番号774番目 20XX/X X/X
ID :

これだな

- ・乳児期に親に捨てられる
- ・施設で過ごしてある時期で今の親に引き取られる
- ・子供のころから他の子供に食事を譲る聖女ムーヴ
- ・→のせいで食が細くなって体形も細くなる
- ・小さい頃からやたら天才的だった
- ・今の親とは施設にいた頃の付き合い

・体力は無い

・天然気味

・若干浮世離れしている

・美術品に対する知識が深い

・海外渡航経験はある

・クソマズなものを食べても平然としている

・何故かコインロッカーに造詣が深い

・何故か毒物に造詣が深い

・何故か物質の致死量について（ry

846 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:

深い闇を感じる

847 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:

闇の中に一筋光が差してるから問題無い

848 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:

その光が闇を更に深めてませんかねえ

849 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:

光と闇が合わさって最強に見える

850 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:

その光白く見えるだけの闇では

851 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

究極の闇とかそういうのにならない？

852 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

これ総合するとコインロッカーベイビーというやつなのでは……

853 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

じゃあ何で毒物に詳しいんだよ!?

854 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

志希にやんの影響だろ(マジレス)

855 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

海外のそういう文化に触れた可能性もある

ローテンプルクとか

856 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

明■大学博物館とか……

857 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>856

海外じゃねえじゃねえか!

858 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

すごいよね日本のそれも大学にギロチンとかアイアンメイデン普通
通に展示してあるの

859 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

おれの○ロチンを!

氷菓ちゃんのアイアンメイデンに!!

860 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

逮捕

861 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

死刑

862 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

爆☆殺

863 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

悪は去った

864 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

本当に去りましたか……？

865 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

どう見ても第二第三の変態が現れるフラグすぎる

866 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

コレ今度はM野郎が増えるのでは

867 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

増えるのではと言うより現在進行形で増えてるといふか

868 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

その類は増えていいのだろうか

869 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

長くファンしてくれるならいい……のか……？

870 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

その手のファンはいた方がいいのか悪いのか絶妙なところだな

871 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

曇り隊とDMと守護り隊で構成されてるファン層

872 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

随分とキワモノが増えたな……

873 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

今までもキワモノばつかだと思っうんですがそれは

《《グランドレッドインフアントリー 91機目》》

245 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

何アレ現実の人間？

246 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ファンタジー軍人役のコスプレがあんなに似合う人間いるんだ

……

247 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

あの平伏したくなる感じすごいよね

248 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

画面入って来て一発目何て言ってたっけ

ゲームでもあったよね？

249 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

「私の指揮に従うがいい。勝利を約束してやろう」だったけど
アニメすぎるけど何故か似合ってるよね

250 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

氷菓ちゃん自体の存在がアニメすぎるからな

251 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

あれそのままゲームに出してもいいくらいでないの

252 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

今のキャラどうすんねん

253 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

残したまんま増やそう(無茶ぶり)

254 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

生放送見てないんだけど結局どういう内容だったん？

255 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

・現役JCアイドルがコスプレして登場

・月末にSSR確率二倍のイベント

・氷菓ちゃん担当の恒常新キャラ投入

・大型イベント登場キャラのデザイン&声優発表

・上限解放素材緩和

・エンドコンテンツ準備中(完成度70%)

・連合対抗イベント企画中

・今後参加するメカデザ発表

・UI強化します

・無料10連

256 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>・現役JCアイドルがコスプレして登場

>・現役JCアイドルがコスプレして登場

257 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

詳細!!

258 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

やかましい

タイムシフトを見る

259 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

つべでも漁れ

260 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

なあ聞いてくれ

今回のピックアップで佐藤狙いたいんだが月末まで待った方がいい

いのか?

261 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>260

SSR二倍だから月末まで待つて引いた方がいい

ちゃんとすりぬけて来てくれるかは知らんが他のSSRが落ちや

すい分精神的に楽

263 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

SSRの種類が増えたら特定のキャラ狙うとかほぼ不可能になる

しな

264 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

まあそもそもこのゲームキャラだけじゃなくてロボとか戦艦も揃える必要あるんやがな

265 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

イベで手に入るだろ

キャラ優先でおk

266 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

理論値求めると明らかにガチャ産以外産廃だつて知らない人?

267 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

また計算機バトラーかよ勘弁してくれ

268 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

(石油王でもないし揃わないです)

269 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

普通に楽しむ分にはイベ産で充分だ

270 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

まあガチャ産のキャラは欲しいんだが

271 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

まあガチャ産の機体も欲しいんだが

272 ID番号774番目 20XX/XX/XX ID:

無料10連もつと長くなるかキャラガチャロボガチャ両方になら
ない?

なつて

なれ

273 ID番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

無料期間中単発増えるんだろうな……

274 ID番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

安心しろ当の担当アイドルが単発IDみたいな引きしてるから

275 ID番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

マジかよファンやめ
ません

276 ID番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

やめないのか……

277 ID番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

元々ファンだし……

278 ID番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

あ、はい

54：プレゼントforU

「助けてほしいッス……」

12月はじめのこと。クリスマス向けの特番のためにあつちこつちのスタジオや収録現場を飛び回ったりするような時期の、小さな合間の時間だ。

346プロの社内カフェでくつろいでいた時にやってきた比奈さんが、そんなことを言いながらボクに泣きついてきた。

……いや、まあ。そりゃあ、他ならぬ、先輩である比奈さんの頼みだ。頼まれればいくらでも助けるんだけども。

「……え、な、何をですか……?」

「ど、同人を……」

「まだ書いてたんで……いやまだ書いてなかったんですか比奈さん……」

比奈さんの口ぶりからすると、どうやら同人の入稿×切が近いらしい。前にアイドル活動の方が本格化するにしたがって同人活動からは離れたみたいな話を聞いたことがあったのだけど……まあ、人の趣味にとやかく言うことも無いか。

あとT w i t t e rとか見る限り、一般的に×切って五日前くらいだつて聞いたことあるんだけど、はて。そうなると、書くにしてもまだもうちよつと余裕はあるような気がするんだけど……?」

「ど……どうしても書きたいのがあつてッスね……まあ今回くらいはいつかなつて……ほら、一目目ッスから!」

「いや、まあ、比奈さんがいいならボクから言えることも無いんですけど……まだ日数的にはもうちよつと余裕がありますよね?」

「ここからスケジュールツメツメなんツス……海外ロケとかもあるんで、数日中にやっとかないとタイムリミットが……」

……どうやらタイムリミットがあるらしい。

一応、ボクもそういうのは好きだし、コミケがどういうものなのかもある程度までは知ってるけど……具体的にどこからどこまでとか、いつからいつまで……っていうのは、よく考えたら知らないな。×切とかもそうだし。

「ん、じゃあ……比奈さん、スケジュール教えてくれる？」

「あ、はい。これツス」

「んー……と。冬休みに入ったらダメか。9日は手伝える。14日までは仕事か学校が終わってからなら……」

「ってことはこの日が一番都合が合いそうツスね」

「だと思う。人が要るならちよつと声かけられるけど……」

言えば晶葉は来るだろう。他に……確か、飛鳥さんと蘭子さんは絵を描くのが好きだったり漫画を描くのが趣味だったりしたけど……忙しいだろうから一旦置いといて。

他に呼べそうな人は、と思ったところでふと、数か月前のことを思い出した。

「ところで、ボクが手伝ったりするのって前に由里子さんに咎められてなかった？」

「あれはあの頃そこまで親しくなかったからっていうのが大きいツス」

「はあ」

「それなのにお金出すから手伝ってっていうのも流石にねえ……今でも別の意味で問題ありそうツスけど」

援助なんたらとかそういうアレか。

でもまあ、真実を知らなければ特に問題は無いだろう。今は家は裕福な方です、と表向きには言ってるし。

そもそも女性と女性でそんなことを考え始めるような人はいないだろう、常識的に考えて。

「で、何の同人なんですか？」

「グラフィックのファウストツス」

「担当声優本人に同人作らせるとかどうかしてんじやないですか」

「しようがないじゃないツスカ！ 氷菓ちゃん絵描くの上手いんだから!!」

確かに世の中には、ソシヤゲのキャラのイラストを担当した絵師が、そのキャラに愛を注ぎすぎて同人まで書き下ろしたという例もある。

しかし担当声優——いや本業アイドルだけ——に同人を書かせるというのもまた更に奇特というか奇抜な例だ。発想がカツ飛びすぎている。

「R18じゃないですよね？」

「流石にそれ描いてたらアイドルとしてどうかと思うツス」

「ですよ。じゃあいいですよ」

「ありがとツス。じゃあ、また後で」

「はい。お疲れ様です」

と、安心したようにスタジオの方に駆けていく比奈さん。

見た感じもそうだけど、どうやら時期的にボクらの比じやなく忙しいらしい。

まあ、年末だし……クリスマスに限った話じゃなく、たとえば大晦日やお正月の番組を今から収録しておくということもある。ボクはまだ若干暇があるけど、来年はもっと仕事が増えると……うん、まあ、嬉しいけど。体力が無くならない程度に増えてくれると一番嬉しい

かな……。

@ ——— @

それから数日後、ボクは数人のメンバーを連れて比奈さんのマンションにやってきていた。

漫画——同人誌だけ——を書くためのメンバーだ。あまり多すぎても無秩序になって取っ散らかるだけだけど、少なすぎても作業のために必要な水準を満たせないかもしれない。そのことを念頭に入れた上で連れてきたのがこの三人。

「イカれたメンバーを紹介するよ」

「ネタが古いツスね」

「ロボット工学のみならず人体分野やその他必要な知識をかき集めて、ものついでにマッドな発明品を作り上げる手先の器用な晶葉」

「まあ氷菓ちゃんの紹介ツスからいて当然ツスね」

「比奈さんと番組で一緒にやってる縁で時々アシするおかげで、漫画の技術についてちよつとかじってる奈緒さん」

「たまに手伝ってもらってるんで妥当ツスね」

「のあさん」

「帰してあげなさい」

「問題は無いわ」

のあさんである。

ちよつと前のとある収録で、のあさんに似てる人ということでの名前が挙げられた時に少し共演して以来、一緒に行動することが増えた。

のあさん曰く、「似ている部分があることは確か。しかし相違点も存在する」とのこと。ボクと行動しているのはそれを探すためだとか。

割とすぐ分かることばっかりだけどそれはいいんだろうか。いい

か。分かったからって一緒に行動しちやいけないわけじゃないし。

「いや無理しないでくださいッス……」

「正確な作業は得意よ」

「自己PRがすごい」

「私自ら望んで来たから気にしないで」

「マジッスか氷菓ちゃん」

「マジです」

話を聞けば、のあさんも割とチャレンジ精神は旺盛な方だった。言葉遣いが少し難解なせいで分かりづらい部分もあるけど、実はかなり情熱的だ。食の好みコミで。前に中華料理屋に行った時は、激辛の麻婆豆腐を勧められてちよつとひどい目に遭った。いや食べることはできるんだけど、舌は痛むし油の多さでお腹も痛めるしで実はちよつとつらいものがあった。

ともかく、のあさんは意外と何事に関しても乗り気だったりするわけだ。元々の印象もあって俗的なものごとに誘われることが少ないから、ちよつどいい機会なのだから。

「ま、まあ……あたしらも面食らったけど、本人がいろいろってんならいいんじゃないか？」

「いや、そうなんツスけどね……とりあえず上がって上がって」

比奈さんに促されて部屋に入ると……なんとも想像通りというか、あんまり想像しなくなかったというか……どうにも、その。修羅場というような様相の部屋がボクの視界に広がった。

時期的に仕方ない面はあるのだろう。まず家に帰る時間があるか、という問題もあるし。比奈さん成人過ぎてるから、ボくらみたいに収録の終わる時間が決まってるわけでもないし。

「……本当にながってもいいのか？」

「や、メ切逃すことと比べたら多少ズボラなところ見せるくらいもういいッス」

「うわ、比奈さんガチだ」

「ガチにもなるッス。匂を逃したら描けなくなるかもしれないッスから」

「ボクちよつと複雑な気分なんだけど」

……さてと。

「じゃ、ボク掃除するから」

「何でッスか!？」

「悪いが比奈、この部屋で長時間作業する気にはなれんぞ」

「清掃を推奨するわ」

「あたしはあんまり気にしないけどな……」

比奈さんはあんまり問題無いのかもかもしれないけど、残念ながらボクがちよつと気になるのだ。

部屋に散乱してる、特に用途は無いけどなんとなく置いてるらしいコンビニ袋。いつ洗おうかなーと思って置いてたらそのまま放置されてしまったたっぴい缶とペットボトル。お菓子の空き袋や、そもそもまだ開けてすらないお菓子も床に放置してあったりしている。

ボクも気にしない方ではあるんだけど、流石に五人もいる部屋ではちよつと問題があるだろう。それでも施設にいた頃は小さい子たちの部屋や、共用の遊び部屋を片づけたりもする立場だったんだ。錬金術を交える……かはともかく、部屋の掃除くらいはちよつとした時間で終わらせられるだろう。

「比奈さん、コンビニ袋って何かに使う？」

「えー……や、特には。でも何かに使うかも……?」

「多分それ何にも使わないやつだよね」

「うぐ」

「十袋くらい置いてあとはこっちで処分するよ」
「……よろしくツス」

ゴミ箱に備え付けて、後でまとめてゴミ出し……みたいなこともするだろうし、そのための大きめの袋は置いといて。あとは……施設に持って行こう。あっちだと何かと必要になるし。

「このお菓子は……いるツスよね……?」

「このお菓子はいりません」

「いない」

言いながら、ボクはお菓子を「いないもの」と書いた箱に放り込んだ。

「でも作業に……」

「消費期限が……切れてますから……」

「ああ……はい……」

……とまあそんな感じで一時間ほどかけて掃除を終わらせた後、ボクは更に一時間ほどかけて自分に割り振られた仕事を全部終えた。
比奈さんが卒倒しそうになっていた。

「比奈さん!? 大丈夫か比奈さん!?!」

「早いわね」

「背景だけだし、レイヤ分けてるおかげで多少は先行できるから」

「なんツスかこの美術品のような写真まんまなような背景……!?!」

「気にすると負けだぞ比奈」

元々、ボクは複製画を描く作業に携わっていたわけだけど、その際の技法が活きたようだ。

まあ、筆が早いのはそういう問題じゃなくて、だいたいいつものア

レだけど。

「じゃあ、コーヒー淹れたりしてこようか？」

「お願いするッスー……」

「みんなは砂糖とかミルクとかどうする？」

「マシマシだ」

「ブラックでよろしくッスー」

「あたしはちよつとずつで」

「角砂糖二つとミルク多めで」

「え」

指定されたものを持ってこようと思ってキッチンへ向かおうとすると、部屋の方から疑問の声が上がった。

ああ、そうか。のあさんがブラックコーヒーを頼まなかったのが違和感ってことか。まあ、気持ちは分かるけど。

「人を見た目だけでは判断しない方がいいわ。何事も、常に定石どおりに行くとは限らない」

「まあ、そうだな」

言いつつ晶葉がこちらをじつと見た。確かにボクもだいぶ見た目通りじゃないけど、言いたいことがあるなら聞くぞ。

……いや、晶葉が言いたいのはボクのパーカーの下のTシャツのどこか？ ちよつと比奈さんどこに出かけるだけなんだから、貴音さんに貰った「拉麺」って書いてあるだけのTシャツ着てくることくらい問題無いんじゃないだろうか。いや問題無いはずだ。パーカーの下で隠れてるし。問題無い。無いっただけ無い。

「あー……作業がめっちゃめっちゃ早くて家事もできるアシとか何ッスかこの漫画家をダメにする子は……晶葉ちゃんこの子くーださい☆」
「あげない☆」

「つらみ」

「そもそも人間は物的にやり取りするものじゃあないわ」

マジレスはしなくていいんですよのあさん。それはそういう定型文なんです。

さて。そんなわけで、コーヒーも出してお菓子も出して……これで特にやるべきことも無くなって若干暇ができたわけだ。

勿論……例えば晶葉やのあさんに技法を教えるとか、そういったことはできるけれども。ともあれある程度の暇ができたという事実には変わりない。

ということだ。

「比奈さん、ちよつといい？」

「なんツスか？」

「ボクも漫画作ってみたいんだけど」

「……ファツ!？」

「は!？」

「なん……だと……!？」

突然の申し出だったせいとか、晶葉と比奈さんと奈緒さんが、一斉にこちらを向いた。その表情は明らかなくらい驚愕に染まっている。いや、まあ、そりゃね？　いつものボクらしからぬことを言ってることは分かってるよ。のあさんは全然気にしてないみたいだけど。

「どんなものが作りたいか、その骨子が明確でない限りは作る意味が薄いわ」

「うん。一応、それは決めてあるよ。って言ってもだいたい、くらいだけど……」

「う、うむ……？　本当に大丈夫か？　無理してないか？」

「ほかあ一体何だと思われてるんだ」

だがしかしちよつと待つて欲しい。今回、ここで創作活動に携わることで、もうちよつとまともな人間の思考に補整することができるとはなからうか？ 元々、創作に携わるといふことがどういふことか、ということも学んでおきたいし、それ自体は決して間違つた考え方じゃない……と思いたい。

「これでも色々考えてるんだよ。ドラマ出るのに、脚本で気になる部分があつたらどんな風に修正案を出してみようか、とか……」

「なんか一足飛びにハイレベルなこと考えてるツスね」

「まあ、そういうところにまで気を回せるようになっただけ成長じゃないか」

「……そういうわけだから、この機会に……」

「けどなあ、あたし比奈さんの見てきたから分かるけど、漫画描くのも簡単じゃないぞ？」

「そうね。ただ描けばいいだけじゃない……『物語』があつてはじめて成り立つもの。ただ指示されて描くよりも、難易度は圧倒的に高い」

「……え、えらく饒舌だな、のあは……」

「嫌いなことではないから」

……のあさんが饒舌なこと、そんなに意外だろうか？

いや、意外つちや意外か。確かにボクも付き合ひが増えるより前はもうちよつと寡黙な人かと思つてたし。

実際のところ、のあさんは割とこんな感じだ。ちよつと言葉が難解だけど、その辺を理解しさえすれば会話も楽しくなる。

「最初はパク……オマージユとかでもいいんツスよ。あの漫画の神様でもやってるんで」

「そんなのあるんだ？」

「あたしも聞いたことあるなそれ。たしか神話のオマージユだっけ？」

「極端なこと言つちやうと、世の中の創作物つて大なり小なりパクリ

な部分あるから、面白さだけ重視してあとは気にしない方がいいッス」

なるほど、そういう風な考え方もできるか。

まず面白さ重視で、多少のパクりは気にしない方がいい、と。となると、基になる物語があった方がいいか――。

「あ、そうだ」

「何か思いついたのか？」

「うん、ちよつと考えてる話があつて……」

そう言う、「おいまさか」とでも言いたげに晶葉の表情が強張つた。

別に変な話するわけでもないのに、問題無いのでは？

「いわゆるボーイミーツガールものなんだけど、空からヒロインが落ちてくるようなやつ」

「おー、王道ツスね」

「舞台は空の上に浮かぶ」

「戦艦」

おい今ちよつとノイズが混ざつたぞ。

「そこで出会う謎の試作機と美少女型A I……」

「!？」

またノイズが増えた!!

「やがて少年は無二の相棒となった試作機と共にエースパイロットと呼ばれるように……」

「!!？」

「うーん、それだけだとちよつとパンチが足りなくないツスか?」
「!?!?」

「ここはちよつと悲惨な過去を付けて試作機に凶悪な暴走機能でも付けたらどうツスか?」

ちよつと口を挟めなくなった瞬間ノイズだらけじゃねえか……どうするんだこれ……。

……その後、ボクを除いた四人で一気に話し合いが進んだ。

そうして決定されたあらすじ曰く。

——世界が海に沈んだ後の世界、人類は巨大な戦艦を新たな定住の地としていた。

そんな戦艦で暮らしている少年（両親は他界）は、ある日突然、他の戦艦から不時着した試作機のロボット、バハムートと出会う。ひよんな事故から少年を搭乗者として登録してしまったバハムートのAI。そして試作機を狙う悪意ある人間たち……やがて発動する「プロトバハムートモード。海をも蒸発させる威力を持つ主砲、「レギンレイヴ」……果たして世界はどうなってしまうのか!? 少年はこの力を手に、何を為すべきなのか!?

……そんなお話に仕上がった。

とりあえず急造で表紙含めて24Pほど書いて、比奈さんに委託をお願いしてみても……まあ、あとは当日を待つだけだ。即日できてしまったのは、まあ今更言うことでもあるまい。

名前を出さないし、ボクは当日別のステージで忙しいだろうし……そもそも売れない可能性の方が高いだろうし、そういう部分は気にしない方がいいだろう。

あと、そもそもボクの創作技能を上げるのが目的だったはずなんだけど、こんなに割り込まれて果たしてちゃんとスキルアップはできているんだろうか。

……まあいいや、楽しいことは楽しいし。

そんなこんなでもう少し経って、十二月二十四日、クリスマスイヴ。今日はボクを含めたイヴさん、クラリスさん、聖ちゃん、こずえちゃんの五人で、346プロが設置した特設ライブ会場に訪れていた。「Snow Wings」を中心に据えて数曲を歌った特別ライブも終わり、次はクリスマスの特別抽選会。ボクたちは司会進行役を受け持つことになった。

突発的な開催だというのに、会場に集まったファンの数は相当なものだ。相変わらず、ボク自身はまだプレッシャーにはそんなに強くない。思わず圧倒されそうになるのを堪えながら、マイクをしつかり握って言葉を発した。

「それじゃあ今日の目玉イベント！ 総額百万円以上もの豪華景品が当たる大抽選会の開幕です！」

「みなさんへの私たちからのクリスマスプレゼントのお届けですよ♪」

「特賞は、なんと……二泊三日、ハワイ旅行です……！」

「特賞以外にも様々な景品がございます。皆さま、どうぞ奮ってご参加ください」

「さんかしよーも……あるよー……」

わ、と観客席から声が上がった。しかし、どうもハワイ旅行よりも二等、三等にあるサイン入りバッグとかの方が反応が良い。みんなそんなに興味ないんだろうか、ハワイ旅行。ボクもあんまり興味ないけど。

……あの手のものって金券に換えることもできるんじゃないかな。たっけ。そういう意味だと欲しいかもしれないけど、行きたいかと言われるとそうでもないな……。

「氷菓ちゃんはどんなのが欲しいですかー？」

「どんなの？ ……炊飯器とか？」

「何で、氷菓ちゃんは……いつも無駄に所帯じみたことを言うの……？」

「そんなこと言われても」

実際今すぐ欲しいものっていうのもそんなに無いし……予約炊飯できて美味しく炊ける最新式の炊飯器とかさ、ほら。いいと思うんだけど。土鍋炊飯とかも美味しく炊けるから好きんだけど、やっぱり炊飯器だといちいち火の様子を見る必要も無いから、手間があんまりかからなくていいかなって……最新型だと、料亭の土鍋炊飯にも負けない、とかがウリになってたりするし。そこまで言うなら食べ比べてみたいなあという気持ちもある。

……と思っていると、客席の方から生暖かい視線を注がれていることに気付いた。

いや、違うんです。本当にただの趣味なんです。

「そんな炊飯器も今回は景品として用意させていただいておりますので、どうぞ皆様お楽しみください」

「それではまず六等の抽選から行ってみましょう♪ はい、じゃかじゃか……」

「じゃーん……じゃーん……」

こずえちゃん、そのジングルはちよつと違う。

……ともかく、あくまで抽選だということもあって、景品を獲得できる人というのは結構限られてる。参加賞は用意してるとはいえ、それだってハンカチだとかキーチェーンだとか、そういった小物くらいだ。数字が読み上げられるたびに一喜一憂、悲喜こもごも。でも、それでもクリスマスらしい賑やかな雰囲気で、抽選会も終わりを迎えた。

なお、やっぱり特賞のハワイ旅行よりもサイン入りの景品の方が喜ばれた。

その辺は抽選に当たった方が誰のファンかを聞いて、その場でサイ

ンして手渡しする形式だったから……というのが大きいのだろうけど。

ハワイ旅行もいいものだよ、たぶん。うん。

さて。

抽選会も終わってボクもそろそろ帰ろうかという頃になったのだけど、控室でぐでーっとしていると、唐突にプロデューサーがぼつりと言をこぼした。

「……同僚のアイツはデートか……」

ずっとクラリスさんの視線がプロデューサーに向かった。その視線の意味はよく分からない……というか、果たして戒めようとしてのものなのか、それとも「私がいるではありませんか」的なそれなのか分からない。クラリスさんも年齢的にはプロデューサーと近いし、そういう感覚になつてもおかしいことは無いんだけども。

……いやそれはそれで考えづらいね。クリスマスだからって考えが飛躍しすぎか。

いずれにしてもアイドルに囲まれてるこの状況でボヤくことかなそれ。聞かれたら大勢の男を敵に回すことになるんじゃないだろうか、プロデューサー。

「クリスマスというものはそもそも家族と過ごす日ですわ、根津様」

「ヴェツ!? 聞こえた!?!」

「いや聞こえるでしょ……」

見るからに狼狽している。最近、ロケ現場なんかを送ったら一人でいる機会が多いからか、独り言の声が大きくなってしまっているのだろうか。

……シロがいるとはいえ、ものを喋らないペットと一緒にいう環境下だし、ボクももしかしたら独り言が増えたりしてるかもしれない。

気をつけよう。

「国それぞれのクリスマスがあつていいと思いますよ〜♪」

「オーストラリアだと、夏のクリスマス……だからね」

「あついののは……やー……」

「で、プロデューサー。説明は？」

「ごめんごめん、仕事が充実してるのはいいんだけど、プライベートが充実してるヤツも羨ましくなつてね」

まあそれもそうだろう。

うちのプロデューサー、人より数倍は多忙なんだ。仕事関係で美少女と接する機会は多いだろうけど、そういつた人と連絡を取つて遊んだりするようなプライベートの時間があるわけじゃないし。そもそも担当アイドルと付き合うプロデューサーっていうのも世間的に問題だ。

「あ、じゃあそんな根津さんにサンタさんからプレゼントです〜♪」

「え？ ああ、ありがとう、イヴさ……ちよつと待つてこれ何？」

「？ スタドリですよ。ちひろさんに聞いてみたら、根津さんは今これが一番欲しいって」

「あれ、イヴさんもスタドリなんだ」

「氷菓ちゃんもですか〜!？」

「……あ、私も……」

どうやら事前に用意していたもののうち、五人中三人のプレゼントが被つてしまったらしい。

ボクが用意していたのは希釈した上でエリクシール成分を混ぜて作ったヤツ……だけでも、効能自体はちよつと強いくらいで普通のそれとそこまで変わらない。それが1ダースほど。

イヴさんも聖ちゃんも同じく1ダース単位ほどで用意していたらしく、プロデューサーの前には合計数十本ものスタドリが積まれるこ

とになってしまった。
苦笑いが痛々しい。

「……ま、まあ、あれだよ。仕事頑張れ、じゃなくて、無理しないようにねってことで」

「気遣いが逆に痛い」

「こずえはねー……これー」

「枕かい？ はは、ありがとうこずえちゃん。よく眠れそうだ」

「では私はこちらを」

「高級アイマスクですか……あ、いや、勿論ありがたいんだけど、なんだ、こう……全般的に仕事に関係ありすぎて俺は仕事に没頭することを望まれてるのかと……」

「そういうわけではないのですが……」

「というかプロデューサーは仕事以外に何してるのかが分からなさすぎなんだよ」

「それもそうか……」

もしかすると、プライベートに限ってはボクの周りで一番不明な点の多い人かもしれない。

……まあ流石にヘレンさんほど分からないわけじゃないけど。

来年はもうちょっと考えて渡すことにしよう。

その後もプレゼント交換をしてみたのだけど……やっぱり、事前に話し合いとかしてなかったからか、ちよつとだけプレゼントの被りがあったりなんかしたのはご愛嬌ということだ。

だいたい全員分のプレゼントは交換し終わったのだけど、イヴさんからボクへのプレゼントは、同じ寮生だということ一旦保留。今晚を楽しみにしててくださいね、とのことだった。

そうだよ。イヴさんサンタさんだもんね。そりゃあ夜の方が本番だ。

……時々思うんだけど、サンタさんを信じるとか信じないとかそういう問題じゃなくて、「いる」って断言できる環境ってそれはそれでス

ゴいよね。

でも、あつちの世界でも確かサンタさんはいたはずだし……もしかして、世間に広く知られてないだけで、サンタさんという存在はそれぞれの世界に必ずいて然るべきものだったりするんだろうか。そんなことが、ちよつぴり気になった。

——で、翌朝。

「……………」

「ぎゅ」

目が覚めると、枕元に座るシロの隣に、小さなプレゼントの箱が置いてあった。

おかしい。鍵は閉めたはずだし、夜中に音はしなかった。気配の一つでもあれば、空間把握の応用でその時点で即座に起きてしまうようにもなってるはず。

能力を失ったとか減退したとかそういうわけじゃ……ない、な、うん。

……理屈はよく分からないけど、多分そういうサンタさん特有の能力とかそういうアレなんだろう。気にしても仕方ない系のアレだ。星晶獣とかによくいるじゃん。ボク知ってる。

一人の人間がそれと同等のことができてる時点でおかしい？ ボクも開祖様もできるし問題無いんじゃないかな……。

「えーつと……中身は……」

箱を開くと、そこから出てきたのは小さなヘアアクセサリーだった。ブリッツエンっぽい意匠のと、雪の結晶をイメージしたと思しきもので、合計二点。

そういえばボク、服装なんかは気にしてたけど、小物はあんまり気

にしたことなかったな……と、そこでようやく気が付いた。

「結構いいもの貰っちゃったな……」

見た感じ質も良い。後でお礼言いに行こう、そう思ったところでふと思ひ出す。

そうだ。よく考えたら、あれだ。

「……そっか、サンタさんのプレゼントって初めてだ」

昔、先生やおじじにクリスマスプレゼントを貰うことはあったけど、いわゆる「サンタさん」っていうのは施設にはいなかったんだよね。

全員分、それぞれが欲しいものを用意するっていうのは難しい。経済的な問題というより人数的な問題があるだろうから、当時はもう完全に諦めていたんだった。

けど、改めて今日こうして貰ってみると、なんだか「嬉しい」という以上に「楽しい」と思えてくる。そっか、クリスマスプレゼントを貰うときって、こんな感じなんだ。

「ふふっ」

思わず笑いが漏れた。

おっと、と緩み切った顔を引き締めて、眼鏡をかけて周りを見る――と。

「ふふ……ふおっ!？」

――そこには、部屋中を埋め尽くすプレゼントの山が!!

いやちよつと待ってほしい。確かに以前、クリスマスプレゼントとは縁遠い生活を送ってきた、なんてことはイヴさんに話したし、イヴ

さん当人もだいぶ気にしてるようだった。だからと言ってこれはどうだ。八歳と九歳と十歳のときと、十二歳と十三歳のとき……だけじゃない、それ以前のものも全部ある。

……全部あるんだ。いや、そのこと自体はすごく嬉しい。嬉しいし、実際埋め合わせを用意してくれるその心意気も素晴らしいものがあると思うんだけど。

「加減してよイヴさん……」

どうしよう、この量。

開封して包みを片付けるのは、まあ片付けきれると思うんだけど……それはそれとして、今巨大ぬいぐるみを貰ってもちよつと困るっていうか……。

……まあ、いいか。折角のプレゼントだ。十数年分、しっかりと楽しんでいくとしよう。

55：空気（からけ）

某日某局。

ボクは楽屋に入った瞬間に、隠しカメラがあることを察知して引き抜いた。

「こんなものがあつたんだけど」

「ドッキリ用のカメラですよ!!」

「He x o p o Ⅲ o……」

もしや誰か悪意のある局員がここに仕掛けて、アイドルの生着替え……なんて言って売り出そうとしてるんじゃないかと思つてたんだけど、どうやらアリスさんの言うところによると違うらしい。

そうか。ドッキリ。ドッキリときたか。ドッキリ……そんなものを仕掛けられるような立場になったのかボくら。なんか感慨深いな。まあご破算にしてしまったんだが……。

「そつちのポットの中、カエルの卵に似せて作ったタピオカとか入つてるよね?」

「アー……わかりました……?」

「うん」

構造解析……というか、そこに至る以前の段階、観察による推測の時点でだいたい分かる。

つまり、アレをコップに注いで「きゃー!」と言わせたところを撮ろうとしていたのか。ふむふむ、なるほどね。

「ごめん、気付かない方が良かったよね?」

「なんとなく氷菓さんですし気付くような気はしてましたけど」

「プロデューサーに言ってきます……ね」

コレもしかして企画倒れになるパターンかなあ……やだなあそういうの。普段クローネの活動だどどつちか一人としか組まないから、二人と一緒に組んで歌番組って結構楽しみにしてたのに。

いやそもそも企画自体が嘘だったのかな。それもそれで嫌だな……。

アーニヤさんが外に出るのに合わせて、アリスさんもついでにお手洗いで出て行った。楽屋にはボク一人。こうなるとやること無くなっちゃうな……。

「……む」

そう思いながらよく見ると、周りに色んな仕込みがされていることに気付いた。

置いてあるペットボトルは底が抜けてるし、ソファの下にはブルークッションが隠されてる。こっちの「白河様」って書いてある箱には……と。

「よいせ」

あえて開けてみると、中から数匹から数十匹ほどのトカゲというかヤモリというか……爬虫類が飛び出した。

東京でよくこんなに集めてきたなと思うが、流石にこの数はちよつとどうかと思う。それにしても彼らも災難なことだ。こんな場所に連れて来られてしまうなんて。

今は年末。真冬もいいところだ。流石にこの状況で外に放り出すのはボク個人としても心苦しい。たしかヤモリも冬眠はするけど、あんまり過酷な環境だと死んじゃう……って話だったはず。

一匹ずつ誘導して箱の中に入れてやる。人間ほど複雑な思考を持った相手に対しては解析からの未来予測もできないけど、このくら

いの相手なら簡単だ。

記憶が確かなら、水分が無いと困るって話だったし……その場にあったティッシュを濡らして、底面の一部に敷いてと。あとは適当なタイミングで自然に帰せばいいだろう。

「おっと」

続いて、天井から落ちてきたヘビのオモチャを受け取る。ゴム製のドッキリ用のやつ。そこそこリアルではある。

特に驚くべきものでもないのですが、とぐろを巻かせて適当な場所に放置することにした。

それにしても二人とも遅いな。トラブルでもあったのかな。

「いや何をしてるんですか」

「あ、おかえり。何かあったの?」

「何も無かったん……です」

「?」

「今回の企画は氷菓さんへのドッキリなんです! でも何も動じませんし挙句に爬虫類と戯れ始めますし……アイドル的にどうなんですか!?!」

「ボクはこういうキャラだと思うよ」

「ЭТО ВЕРНО……そうですね……」

変に動転したり取り乱したりしても、それはそれでボクとしてはおかしいと思うんだよね。

つまりこの企画は最初から詰んでいたのではないだろうか。詰ませた張本人がこんなこと考えるのもなんだけど。

結局この日は撮影のついでにドッキリ企画を進行しようというはこびだったらしく、その後は普通に三人で歌って局を後にしたが、なんとも釈然としない気持ちが残ってしまった。

そしてまた更に後日。

巨大風船のある部屋に閉じ込められたので、とりあえず膨らみきる前に風船に穴を開けたらプロデューサーに怒られたり。

寝ているところにレイナさんがバズーカを持って入ってきたので、とりあえず察知して起きてみたらレイナさんに怒られたり。

ゲームセンターでのロケでクレーンゲームをやっていると、中のぬいぐるみが急に動き出した……のに無反応だったら怒られたりした。それで何かを察したのか、ドツキリの方向性自体が物理的なものへと変化していった。

病院で身体検査と健診をするというので行ってみると、途中でやや強引に女性から腕を取られかけたため、親指を取って関節技の要領で動けなくさせてみたり。

カフェで打ち合わせしていると店員さんがコケたふりをして水をかけようとしてきたので、メニュー表を利用して防いだり。

あちこちに設置された落とし穴を全部回避していったら、みくさんが巻き込まれて落ちて行ったり。なお直後に「氷菓チャンはプロ意識が足りないにや!!」と叱られた。

色々あったはあったものの、最終的にだいたいのドツキリを回避したボクは、事務所に戻ってこっぴどく叱られていた。

「……あれー?」

「あれーじゃないよ!!」

「……あー……と。またボク何かやっちゃいました?」

「どっかのなろう系主人公みたいなことを言わないでくれ」

「まああんまり変わらんが……」

よく事情が分かってる一人である晶葉がため息をついた。

異世界から来たのは事実だし、一般的な常識に触れる機会が少なかったのも確か。確かにそういうものじゃないかと言われるとそうかもしれない。

「ただプロデューサー、一っだけ言わせてくれないかな」

「何かな」

「ごめん、正直言うと途中からちよつとムキになってた」

「今だいぶイラツと来たんだが我慢した俺を誰か褒めてくれないか」

「えらいえらい」

志希さんのその対応も、それはそれで男性のプライドとしてはどうなのだろう。

まあいいか、プロデューサー自身はなにやら満足してるみたいだし。

ん？ あ、いや、そうでもないや。何だか「何か違うな……」みたいな顔してる。

「まあこれはこれで編集すればバラエティとしては使えるし、先方も爆笑してたからそこまで目くじら立てるようなことじゃないんだが……」

「あ、そうなんだ」

「でもドツキリは一応引つ掛かるものだったという業界の鉄則もあるしな。あんまり回避されると、こっう、困る」

「でもさプロデューサー。ボク何されてもだいたい分かるから……番組としてあんまり面白くなりそうにないと思うよ」

「何で分かってしまうんだ」

「ひょーかちゃんだかんねー」

「氷菓だからな」

プロデューサーも早いところ慣れればいいのに。

……なんか事務所に来た当初と立場が逆転してる気もするけども、まあそれはいいだろう。

「ところで、なんだかものすごい動きしてるけど大丈夫なのか？」

「体力と筋力に問題があるだけだし、動くだけなら平気」

「そうか……」

「何か問題あった？」

「いや、運動ができないって噂ばかりが先行したおかげで運動神経悪いアイドルってことでオフアールがちよつとな……」

そういうことか。でもさつき言った通り、あくまで体力と筋力が足りないだけだ。水泳もできないけど、沈むだけで前に進むことはできる。

運動神経が悪いというか、やろうと思えばできるんだからちよつと違うんじゃないかな……。

「ちよつどいい機会だし、この際ちよつとスポーツテストでもやってみようか？」

「そういうのって番組とかでやる方がいいんじゃないの？」

「いや、事前にやってある程度自分の体力の限界とか知つとかないと、変に気合入れたせいで無理して体壊す人とかいてな……誰とは言わないけど」

「誰だろうな」

「誰だろうーねー」

菜々さんとかしゆがはさんとかか。

いや、まあ……ほら、あの辺りの人の場合もうちよつと違うんじゃないかな、理由が……勿論プロデューサーの言う理由も含むんだろうけども。

「それじゃあ、ちよつと三人でやってみよう♪」

「えっ。今から？」

「わ、私は別日でもいいと思うぞ！」

「まあ、思い立ったら吉日とは言うしな。今からでも場所が取れるなら連れて行くよ」

「オッケー♪」

……というわけでやや強引に、晶葉とボクと志希さんの三人で、近辺の運動ができる場所へ向かうことになった。

まあ、スポーツテストなのだから、やること自体はそう難しくない。志希さんの独壇場になってしまうのは、まあそうだろうなあとも思ったりはする。

けどまあ、これでも対抗心というものが全く無いわけじゃない。筋力はどうにもこうにもならないから仕方ないとしても、それ以外の部分で負けないように頑張ろう。

「それにしてもこのスポーツテストって……なんかバラエティとかでやるみたいな内容だね」

「そりゃあね。アイドル事務所のスポーツテストなんだから、テレビでやるようなものを見据えてやってるんだよ」

「なるほどねー。そいつ」

バスケットボールを寸分狂わずゴールにシュートする志希さん。なんとなくその格好が様になってるのは、一時期アメリカの方にいたからだろうか。いや、別にアメリカに行ったからってストリートバスケットかashionきやいけないってわけでもないだろうけど……。

「まあ、予め撮っておいたりしたらテレビ局に資料映像として送るのも簡単だろうしね」

言いながら、ボクも——ちよつとへ口へ口な軌道だけど——ちゃんとゴールに入れていく。落ちてきたボールは、一度バウンドさせたのちに走ってキャッチ。正確な軌道で晶葉の手の中にパスした。

……のだが、晶葉の様子がおかしい。ボールをじつと見つめたまま動かない。

「晶葉、どしたのー？ 次だよ？」

「う、うむ……いい、行くぞーっ！」

普段は感じ取れないような気合を発し、勢いよくボールを投げる晶葉。そのボールは一直線にボクの顔面に叩き込まれることとなった。

「ぶへえ!?!」

「白河さーん!?!」

「う、うわあ!?! 氷葉、すまーん!?!」

「にやはは思ってたよりやらかしちやつてる」

……それが物理法則に基づいたことであれば、高次予測が可能なボクだけでも。何度も言うようだけど、そこに人の感情とかが絡むとどうしても予測が外れてしまう。それが例えば、本人の意図しないミスなどであれば尚更に。

わざと水をこぼす、とかのミスだったら、動きからも「こういうことをしようとしてるんだろうな」って分かるからいいんだよ。けどこれは無理だった。何で上に向かって投げたはずのボールがそのまままっすぐボクの方に飛んでくるのか、これが分からない。

眼鏡を外して状態を確かめる。うん、歪み………くらいは出てるかもしれないけど、これなら外からは分からない程度か。後でこっさり錬成して修理しよう。

「うぎゅ……う、あ、鼻血出てきた」

「大丈夫か!?! ああ、まずティッシュで押さえて……」

「ん、分かってる。ありがとプロデューサー」

「あわわわわ……まさかこんなことになるとは」

「アキハちゃんもしかしてバスケ未経験とか?」

「う、うーむ……体育の授業でやるくらいだな……そもそもパス貰わないが」

まあ、だろうね。どう見ても晶葉のそれはやったことない人のシュートフォームだ。

いつも遊ぶときってだいたい室内でゲームかロボ作るかのどつちかだったし……ダンスはできるようになってるけど、この分だと他の球技も同じような感じなんじゃないかな、もしかして。

「プロリユーザー。他に何予定してらの？」

「お、おう。えーつと、リフティング、テニスのラリー、バレーのレシーブとかハードル走とか……かな」

「ひよかちゃんの鼻血止まる前にできそうなところやってみる？」

「それもそうだな。大丈夫かい、池袋さん」

「う、うむ、やってみよう！」

——と、意気込んでみたものの。

リフティングは一回どころか時には狙いを外してゼロ回という記録を叩き出し、レシーブをすると勢いを殺すどころか増したうえで自分の顔面に直撃。ハードル走に至っては（安全に配慮して柔らかい素材だけ）ハードル全部なぎ倒して走っていく始末。

それならと始めたテニスのラリー。初心者にありがちな、とにかく勢いと威力ばかりを重視した一撃によってボクが再びノックアウト。復帰に十分を要した。

……オーケー。よく分かった。

「……少なくとも今この時点において晶葉は間違いなくボクより運動音痴だよな」

「ぐうううううううううううううううううううううう!!」

「そ、そこまでシヨックなのか……」

「よりもよって氷菓に言われたあああ……!!」

「いくらボクでもキレルぞ」

確かにそう言われてもしょうがない負の実績がボクにはあるけども。それはそれとして、ボクの顔面にぶつけたボールの数を数えてほしい。途中から予測の精度が上がってクリティカルヒットは避けた

けれども、それはそれとして結構痛いんだからねアレ。

「……ところで池袋さん、この運動神経悪いアイドルの企画出てみる気無い？」

「屈辱的だが氷菓が抜けた穴は私が埋めなければなるまい……」

「ねえなんかボクが悪いみたくなってない？」

「空気は読めてないよね？」

「そこは否定できないけど」

そもそも、ボクが運動神経悪いっていうのも……なんていうか、思い込みの面が強いわけだし。確かに、ある意味では「そうあってほしい」っていう期待だとも、「そういう人だよ」と思われている空気が蔓延してるとも言い換えられるけど……そういう類の期待って応えるべきものなんだろうか。そういう空気は読むべきなんだろうか。

ボク自身の今後の身体的な成長もあるし、あんまり病弱要素を推されていっても、それはそれで困るといのが正直なところではあるんだけど。

まあ、全く隙を見せないっていうキャラ付けも流石になんだし、その辺はちよつと改善していくべきかもしれない。

……今度は、ドツキりくらいはひっかかろう。できるだけ自然に。

@ ————— @

年末。ボクたちアイドルの仕事は爆発的に忙しくなってくる。

冬フェスもあるし、年始の番組に向けての収録もあるし、カウントダウンライブも迫ってる。一度年が明ければ、もうちよつと忙しきは緩和されるんじゃないかなと思いたいけど……さて、どうだろう。年末始の番組がウケたらそれ次第で出番は多くなるだろうし。

……まあ、ともあれだ。

ボクはコミケの控室で死んでいた。

「何故……冬なのに……こんなにも暑い……」

「暖房効いてるからね」

十二月下旬、冬真っ盛りの時期だというのに、ボクは熱気に悶えて死にかけていた。

コミケ。初めて来たけど、なんて恐ろしい場所だ。何でみんなあんなに平然としているんだろう。いや平然とはしてないか。みんな汗ダラダラだ。

なんというか、寒暖差が激しすぎるといふ部分はあると思う。本当にもうこのホントもう……何でみんなアレでダウンしないんだろう。ボクが弱すぎるだけと言われるともう何も言えなくなってしまうのでやめてほしいが。

しかしそんな中で平然としているプロデューサーはやっぱりどこかおかしいんじゃないだろうか。鍛えると人間みんなあんなになれるんだろうか。

「寒暖差で逆に体壊しそうだよ」

「それはみんな思ってる」

そう思いながら結局みんな来るのか。

地獄かなんかかよコミケは。

「で、ステージには立てそうかい？」

「それは大丈夫。一ステージくらいはもたせられるよ」

「……何であれだけやってあんまり体力がついてないんだろうな？」

「肺機能の問題」

「マジな回答はやめてくれ」

でもそれしか思い浮かばない、と起き上がりながら言葉をこぼす。

実際軽く検査受けてみたら他の人と比べて弱いことが判明したわけだし。これで名実ともに病弱の看板を掲げられるよ！ 全然喜ば

しくねえや！

「ま、長い時間がかかる問題って言われたし、徐々にでも治していくよ」

「その頃にはトップアイドルかもな」

「大学卒業までにはイケるかもね」

「どうかな。俺の予測じゃ高校在学中だ」

予想以上に高く買ってくれてる……と思うけど、わざわざスカウトした相手を安く見積もる人もいないか。

そんな風に期待をかけてくれる以上は、それに応えなきゃね。

……もうちよつとしたら、だけど。今すぐはちよつと無理。暑い。キツイ。

「そういうえば白河さんは何か欲しいものは無いのか？ 折角のコミケだけど」

「そういうのはあんまり無いかな」

「珍しいな。ゲームとか好きなのに」

「基本的にゲームとかしたらそれだけでだいたい満足しちゃうタチだから」

「そこから先にはあんまり踏み込まないってことか」

「前に由里子さんから『半端な気持ちで入ってくるべきじゃないじえ

……沼の世界にはよおー』なんて言われたし」

「言い分がそこそこまっとうで逆に反応に困るな」

そもそも由里子さんも自分の立ち位置分かっててアレやコレや言ってるフシはあるし。

そういうことを言う、ってみんなに認知されてるからこそ言うってうか。本当に言っちゃマズいような相手には絶対言わないように心がけてる感もある。住み分けをはっきりさせてるんだろう。きつと。

「そう言うプロデューサーは何か買いに行ったりしないわけ？ お金はあるんでしょ」

「金があっても消費するための時間が無いんだ」

「…………ご、ごめん…………」

「マジになって言わないでくれ。自分の現状を再認識してちよつと傷つく」

そうか…………やっぱプロデューサー帰ったら寝るだけみたいな生活してるのか…………。

これ、下手したらボクが普段色んなところで「そういうところだぞ」なんて言われてるような話よりも深刻なのは？ 過去形じゃなく現在進行形だぞ。確かにプロデューサーは表に出る立場じゃないけど、だからこそ身内はもうちよつとこつちに目を向けようよ。

…………まあ武内プロデューサーも似たり寄ったりなプライベートルボいから、ホントに笑い話にすらできないわけなんだが…………。

「やっぱり体感時間を長くする薬が必要なんじゃ」

「いやそつちの方向性で解決しようとしなくてくれるかな？」

「大丈夫だよ。効果は確実に副作用も少ないし」

「効果が確実にだからなお悪いんだが」

…………効果が確実にならそれでいいんじゃないの？

プロデューサーは休日を含めて長めに謳歌できる。志希さんは実験の検証結果が得られる。Win-Winのはずだ。

そりゃあ確かにちよつとした副作用とかはあるだろうけど、そのくらいはねえ。

「別に死ぬわけじゃないんだし」

「死ぬよりひどい目に遭いそうで怖いんだよ！」

「死ぬより悪いことってあるの？」

「えっ。いや、そりゃあ……心を壊されたりとか……拷問されたりとか……か……か……？」

「被験者を使い潰すなんて研究者としては三流だよ。志希さんがそんなことすると思う？」

「まず実験することから否定してほしかったな」

「……？」

「もうちよつと倫理観を持とう！ な!？」

……？

必要な実験のためなら投げ捨てるべきものでは？

何度も言うけど死ぬわけじゃないんだし、痛いわけでもないし終わつたらいつでもフラットな状態に戻るし、最終的に完璧な状態でフィードバックされるんだからこれが最良では？ ボクは訝しんだ。

「一ノ瀬さんと池袋さんがいるときはそこそこ常識的なのはずなのに、何で一人になると二人の穴を埋めるように常識を投げ捨てるんだ白河さんは……」

「働キアリの法則って知ってる？」

「それとこれとは話が違うんじゃないかな!？」

うーん……まあ、あれだよ。確かにプロデューサーと比較すると倫理観はちよつと狂ってるかもしれないけど、直接的な行動を起こすわけじゃないし、大して問題無いって。

「白河さん、そろそろ準備お願いしまーす」

「あ、はい！」

「もう時間か。行ってらっしゃい」

「あいよ……じゃなくって」

今衣装だしそれっぽいこと言った方がいいかな。

えーと……そうだな、こういう時は上着をバサツとやって……。

「安心しろ。全て完璧に成し遂げてやろう」

「……なんか最近それもう代表キャラみたくなくなってるけど、今日のキャラはもう一人の方だろ？」

「……うんちよつと忘れてた」

開けていた上着の前部分を留め直す。

そういえばそうだったわ。今日はユリアーナさんだったわ。ごめんプロデューサー。だいぶ気が緩んでた。

ともかく、今から今日のメインステージだ。気を取り直してちゃんと役割を果たしてこよう。

……というわけで、会場でのお仕事だ。

今日はまた別のキャラ、対人コミュニケーションが欠如しているせいで友愛を情愛と勘違いしたりしてる……という一方、パイロットとしての能力や将官としての能力は呆れるほど高いという設定の、ユリアーナ女史のコスプレだ。

ファウストと違ってそこそこカッチリした軍人なせいか、軍服はきっちり到着込むことになっている。スカート丈については……いちいち気にしないことにしよう。ソシヤゲのキャラというのはそういうものだ。あとは見えないように立ち回ればいい。

今回の仕事内容としては、ボクから新情報を発表することが主になる。

それ自体はあっさり終わったが、本番はここから。手渡しでの物販だ。

「———それでは、今回発表する情報は以上となります。それでは現在より物販に移りますので、皆様整理券の番号の通り、係員の誘導に並んでくださいね」

そう言ってみると、まず我先にと走り出す……ような人を、最前列

にいた人が引つ掴んで整理券の順番に並ばせていた。

何でこの人たちが妙に練度が高いんだろう。今一瞬手の動きを見失いかけたぞ。

民度が高い……というか、彼らには彼らなりの秩序があるってことだろう。横入り厳禁とか、転売は許さないとか……注意してた人たちの眼光の鋭さを見れば分かるけど、やらかしちやった人の身の安全は保障できなさそうだな。

「あ……こ、こんちわ……デス」

「こんにちは」

さて、そんな中で最初に並んでくれたのは、珍しいことに女性だった。髪は後ろで二つ結び……いわゆるツインテール。

マスクつけてるから声が聞き取りにくいけど……この声どこかで聞いたような。

「……あ、こないだCカオスオブダーティoDしてた時にいた人」

「へ!？」

「ボイチャしてましたよね、Akiraって名前です。声が同じ」

「え、え……う、うっそ……」

「ボクいたんですよ、Iceって名前です。あのクソキャラです」

「うげ……聞こえてたデスか……」

「紗南さんもあの時やってて、同じチームだったからあえて凸砂とかしたりして……まあ言われてもしようがないかなって思ってたんですけど」

「うわ自分アイドルとゲーム配信してる……こわ……」

……? あ、プロデューサー後ろから目え光らせてる。

話長かったかな。まあ、でも話を聞いている人がいたら「ゲームしてたら偶然会う可能性がある」って思ってくれるかもしれないし……ちよつとくらいは許してくれないかな。ダメかな。

「はい。こちら、特典付きの公式ビジュアル本と、トートバッグです。今後ともよろしく願いますね」

「あ、はい。頑張ってくださいデス」

そう言つて手渡すと、その人はそそくさとその場から立ち去つて行つた。

配信かあ……よくある実況者とかそういうやつかな？

トークの勉強とかになるかもしれないし、今度あの人を見てみようかな。アカウント名探せば見つかるだろうし。

と、まあそんな具合で、その後も並んでくれた人に声をかけたり逆に声をかけられたり、時にはちよつとだけ話が弾んだりなんかしながら物販を終えた。

午前中にはだいたいの品物もはけたので、ボクもお役御免。プロデューサーに言つて、ボクだとバレないように変装したうえで比奈さんのブースに行つたりしてみただけ……売り子は他の人に頼んでみるみたいで、本人はいないようだった。ちよつと残念。

なお、その後で戻ってみると、プロデューサーは何故だかいつも以上に張り切っている様子だった。何か同人とか、こう……元気になるようなものでも見つけたのかな。いや、何でもいいし無駄に詮索もしないけどさ……。

オムニバス：その③

◆ おじじと出会った頃は ◆

「そういえば氷菓、あのお父様とはどんな風に出会ったの？」

「何さ、藪から棒に」

「ただの知的好奇心よ」

「確かになー。あんまりイメージできへん気がする」

「亜子さんまで……」

ある日のレッススルーム。眼鏡三人で集まって各々の練習をしているようなときに、それはふとした疑問として投げ掛けられた。

おじじとの出会いの話。まあ、客観的に見れば確かにその辺は謎が多いか。一般の人と違って、みんなは特に加工されてない生の情報を得ている。ただ、おじじのことについてはそこまで詳しく話してないし、気になってもしょうがないなーという思いはあるけれども……。

「そんな面白い話でもないよ。施設の……園長先生の古くからの友達だったんだけど」

「その辺の話は確かしたよね」

「うん。だからこの辺は省略して……で、まあその当時、ボク外国に行きたくってさ」

「唐突ね。何でそんなことを？」

「その頃施設の経営状態が悪くってさ、日本じゃダメなら外国で何か解決方法無いかかって。だからおじじに頼み込んで……っていうか、半分くらい強引に乗り込んで、外国行ってさ」

「当時は無茶してたんだ」

「まあブレーキきいてなかったかな」

この場に晶葉がいたら「今でもブレーキそこまできいてないだろ

う」とツツコまれるところだろう。

でも今の方がもうちよつと自制心があるというのは本当だ。当時
はもつと無鉄砲で無軌道で無秩序だった。何せあっちの世界の倫理
観のまま動いてたわけだし。

「で……外国だと美術館巡りだとか史跡巡りをしてたって話だったか
しら」

「うん。それで精巧な複製画を描いて売るって方法思いついたんだ
よ」

「……うわ、ネット見たけど複製画ってこんな高いん……」
「相当だよね」

精巧なものになると平気でウン十万円とかになる。

でもボクの場合元手がほぼゼロのところからそのレベルの絵を描
けるので、輸送費を除いた額がそのまま利益になってくるわけだ。

オマケに、純粹に描くにしても一時間から数時間、錬金術を使えば
数秒で量産できる。美術系の専門学校だったり、ギャラリーだった
り、ないしは奇特的な資産家だったり……と、需要もそこそこ。大口注
文が入ることもあるし、利益としては良好な方……のはず。

「……氷菓ちゃんさあ」

「ダメだよ。描かないかんね」

「何で読まれるんや」

「分かりやすいからじゃないかしら」

そりゃあ、今ボクの名前出したうえで売り出せばそれなりの値には
なるけど、やつぱりその辺はプロダクションを通さないとダメだ。お
金のことだから色々と問題が起きる。

まあ……友達のためだし、そういう煩雑な手続きの上で販売するの
もやぶさかでもないけれども。流石に用途が分からないのにお金を
渡すわけにもいかないよ。

「ほんでその当時、何してたの？」

「何してたって……やけに食いつくね」

「友達が今まで何をしてきたのか、気になっただけじゃない」

「マキノさんに言われるとちよつと……」

「あらつれない」

……興味本位っていうのも立派な理由だけれどもね。

まあ、これだけ聞かれて答えないのもちよつと悪いかな。答えられそうな部分もちよつと少なめではあるけれども。

「じゃあ、まあ、言えそうな部分だけ」

脚色も誇張も大いにあるけれども、錬金術とかその他色んな語っちゃいけないことがあるわけで。その辺を語らないことについては許してね、と内心で頭を下げながら、過去の記憶に思いを巡らせる。

あれは、小学校に入るよりも前のことだったかな。

……今でも、あの頃のことはずぐに思い出せる。

@ ——— @

おじじのところ初めて行ったのは、確か梅雨のじめじめした時期だった。

今にも雨が降りそうな怪しい雲。ただ「外国を飛び回ってる」という先生の言ってた情報に一縷の望みを賭けて、ボクはおじじのところを訪れたんだ……はず。

当時は生まれ変わって四、五年といったところだったか。今改めて思い出しても、まだあちらの世界の倫理観や価値観が強く残っている時期だったと思う。

そんなボクのおじじへの第一声は、これだったかな。

「ぼくは莫大な財産を築き上げる方法を知っています。どうか船に乗せてください」

今考えても当時五歳程度の幼児の言う台詞じゃあない。

まず自分を売り込み、相手の興味を引き付ける内容を叩き込み、用件を告げる。効果的っっちゃ効果的だ。それが本来、親の庇護下にあるべき幼女の吐く台詞でさえなければ。

勿論おじじは驚いていた。というかドン引きしていた。当たり前だ。十歳にもなっていないような子供が敬語を使つて、「金稼ぐ方法あるYO！」なんて言いながら商売に一枚噛ませろと言っている。オマケに自分の古くからの友人が世話をしている子供である。

おじじはキレた。

ただちよつとだけ弁明させてもらうと、当時のボクはだいたいぶその、倫理観とか死生観とかグズグズで、世界が違うからどう常識が変わるかなんてことも考える余裕も知恵も無かったりして……まあ、怒られてもしようがないし叱られるのも当然なんだけどさ。

で、まあそんな不気味な子供なんだけど、これが見ず知らずの子供なら「お前のことなんぞ知らん、あっちへ行け」で済んだ話だっただろう。けど、当のボクはおじじの友人である先生が面倒を見ている子だ。無下にはできないし、何より「親がない」ってことははっきりしている。しつげが行き届いていない、ってことでもあるし……大人として見過ごすわけにはいかなかったんだろう。一時的におじじがボクを預かる形で同行することになった。

……のだけど、やっぱり問題はあると言えばある。

「ガキがそんな言葉づかいをするな」

「……どうしてですか？ 目上の方には、敬語で話すべきです」

「黙れ。そんな気を遣うなんざ十年早い。子供ってのはな、くだらんことは考えないでいいんだ」

まず、この時のボクの言葉遣い。元々あちらの世界では敬語で話す

ようしつけられていたこともあって、こちらの世界に来てからもずっとボクは敬語のままだった。

おじじとしてはそこが気に入らなかつたらしい。勿論、自分の部下たちには敬語を正しく使うよう指導しているけど、この頃のボクはまだ4、5歳程度。そんな年齢で大人に気を遣えるような子供がいるわけないだろ、気味が悪い……とさえ言われてしまった。

今、改めてその頃のことを思い直すと、事実その通りだと思う。で、ある日。

「お前……ずっとブーツとしてるが、暇じゃねえのか」

「何かしてもいいんですか」

「やっちゃあアズいことがあるなら言う」

「何をすればいいんですか」

「あ?」

「何かしていいと言われても、何をしたらいいのか分かりません」

「……………」

絶句である。

普通の子供ならここで「じゃあ船の探検行ってくる!」とか、仮に内向的な子でも「本を読んでくる」とか言うところだろう。が、この頃のボクはそもそも娯楽というものを知らなかったので「やりたいこと」というのが無かつたわけだ。

ただ……まあ、施設を守りたい一心はあつたわけだし……言ってみればこの時のことが、人間としての最初の一步だったと言えるのかもしれない。

その後、船員の一人が確か……某狩りゲーの2Gを持っていたんだつたかな?

当時から相当なオタだつたらしいその船員にゲームを借りてやってみただけど……実は最初からドハマリしたわけじゃない。

難しいよと言われてやってはみたけど、それほど難しさは感じないし。パターン化すれば攻略できないものも存在しない。無感動に「何

が楽しいんですか」なんて呟いてた当時のボクは、はつきり言ってるな子供だっただろう。

転機が訪れたのは、それから少ししてから。その船員から見せてもらった動画では、あまりにセオリーを完全に無視した動きが披露されていた。

無駄にスタイリッシュだったり、無駄に笑いを誘うものだったり、あるいは魅せプレイと呼ばれるものだったり……創意工夫次第ではこんなこともできるのかと感心した。同時にゲームの楽しさというものをお教えられて……多分これがゲームを好きになった理由だと思う。

同時にこの時ネットスラングを教えられ、何の気なしに使ったせいでその人がおじじに滅茶苦茶に叱られてたのが印象的だった。

この頃から徐々におじじや船員たちとも打ち解けてきて、言葉遣いもだいたい今と同じようになっていった。

またある日は。

「お前、有戸と栗林間違えたってな。これで何回目だ」

「……みんな顔だいたい同じだし」

「同じなわけがあるわけねえだろ。お前ちゃんと眼え見えてんのか？」

「見えてる。見分けはつかないけど」

「……これ指何本だ」

「一本」

「馬鹿垂れ。二本だ」

この時に初めて目が悪いことが判明した。

この後、旅の途中で眼鏡をプレゼントされたのだけど……その初代眼鏡の顛末は知ってるの通り。今は大事に保管している。

この時はまだボクも錬金術師としての腕は中途半端だった。できるのは構造解析くらいのもので、正しく「真理」というものを捉える知識の無かったボクは、大規模小規模に関わらず錬成ができなかつ

た。だから視力も低下したままで錬成して再構築できなかった。

で、これを完璧にするために、エメラルド・タレットというものを探しに行ったのがこの旅の目的になる。

各国を巡りそれらしい情報を得て、構造解析を利用して遺跡を探す。既に見つかっている遺跡にしても、もしかすると隠し部屋なんかがあるかもしれないのでそれも探す。そんなこんなで数か月だったか一年だったか……そのくらい経った頃、ようやくそれらしい情報を手に入れることができた。

これは、と思つて現地に向かうと……まあ、情報が流れるくらいだ。遺跡のまだ見ぬ財宝などを狙った盗掘団なんかもいる。

ボクらの目的はただエメラルド・タレットを見ることだけだ。金銀財宝に興味は無い——どうせ後で作れるし。

と、説明してみたところで、盗掘団なんて荒くれ者に説明が通じるわけがない。まずは遺跡に入った途端に襲撃された。この辺はなんというか色んな意味でジャンルが変わってくるので端折るけど……色々あった。うん。ナイフを持った男をおじじが殴り倒したり、銃で脅してきた男を、ボクが後ろからこっさり銃を弾き飛ばして反撃したり。

あとは……この時はまだ構造解析もそこまで万能じゃなかったから、その盗掘団の連中と一緒に閉じ込められた先で遺跡の罠に引っかけたり。みんなで協力して罠を解除したおかげで、それまでのしがらみを越えて仲良くなったり。かと思ったら遺跡の最奥部で裏切り者が出て来て、「この財宝は全部俺のモンだ！」なんて言つて、おじじの腹を撃つた上に周りに爆弾仕掛けてみんなを置き去りにしたり。まあ結局その人はトラップに引っかけられて帰らぬ人となったんだが……。

話を戻そう。それから必死になって遺跡の奥を探していると、なんとずっと探していたエメラルド・タレットを発見。ボクの錬金術が完全なものとなったことで、おじじを治療した上で爆弾を解除。みんなを脱出させることに成功した。

この時のことがきっかけで、現地の盗掘団だった人たちは改心。今

は真面目におじじのこの会社で働いている。また、ボクは一種の奇跡とも呼ぶべき現象を起こした……なんて事情もあり、その人たちから「姫」なんて呼ばれるようになった。それが広まって黒服連中に姫と呼ばれるようになってるんだっただけはさ。

「氷菓のことは絶対に外に漏らすんじゃないぞ。万が一このことをバラしたヤツがいたら……俺はそいつを地の果てまで追い詰めてバラバラにしてサメの餌にしてやる」

事件が終わった後、おじじはみんなにそんなことを言ってもいた。危険性を考えると仕方のないことなんだろうけど……もうちょつと言いたい方なかなかならなかつたんだろうか。

や、でも仕方ないか。脅しつてそういうものだし。

……まあ、それはともかく。

@ —— @

「そういうわけで、現地で出会った人たちと一緒に仕事をするようになって、正式に会社を興して、お金を稼いで、今に至る……つて感じかな」

その辺のことはだいたい隠したうえで、ボクは当たり障りない内容に改変した上で二人に伝えていた。

亜子さんもマキノさんも、なんだか納得したように「ほー」だとか「へー」だとか相槌を返してきてくれる。

やだ何か創作能力上がってる気がする……だいたい気のせいだけだ……。

「……つまり氷菓は社長令嬢ということになるわね？」

「ホンマや!?!」

「それ今更言う?」

確かに社長令嬢というくくりにはなるんだろうけど、それを意識したことのある人は、多分ボク含め誰もいないんじゃないかな。

「けれど、何でそこまで焦ってたのかしら。おじ様の言う通り……大人に任せていても決してダメだったわけじゃないでしょう？」

「子供特有の全能感があったんだと思ってよ」

「結果出しとるあたりニュアンス的にはちよつと違う気がする……」

今思い返すと、そういう部分があったような事実は否めない。

生まれ変わった事実、他の人よりも知識があるという事実、特異な能力があるという事実……そういった事実から、「ボクがやらなきや」という使命感を抱いていたとも言える。

ほんと、あの頃のボクは色んな意味で迂闊だった。

「でも、一番の理由があるとしたら……」

「ん？」

「……ごめん何言おうとしたか忘れちゃった」

「えー何それ」

嘘だ。本当は分かっている。

あの頃からボクは、自分の居場所を守りたかった。

……いやちよつと違うな。何か、自分にできることをして……あおぞら園を、自分の居場所と思えるようにしたかったんだ。

今は、そんなに焦るような必要は無いんだけどさ。

◆ ライラさんと ◆

「プロデューサー、ちよつとこの日からこの日まで仕事入れないでほしいんだけど」

「え？ あ、ああ。分かったけど……」

ある日のこと。ボクは自分のスケジュールについてプロデューサーに一つだけリクエストをしていた。

珍しいこともあるもんだ、と言いながらもちゃんとスケジュールを空けてくれるのはありがたい。後輩であるボクとしては先輩のスケジュールに合わせないといけないし。

「二日間か。一泊二日とかでどこか旅行にでも行くのか？」

「うん。ライラさんと山口県に」

「また辺鄙などところに行くんだな。それにライラさん？」

「ちよつとね」

こないだちよつと話した時に話題になった場所だ。

行こうと思えば日帰りでも大丈夫かもだけど……余裕は持っておいた方がいいだろうしね。

ライラさんとは特にいつ知り合ったということもない。なんとなくいつの間にか知り合つて、いつの間にやら連絡先を交換してたりしてるような間柄だ。

奇妙なことだとは思うけど、本当にいつの間にかだし、気も合うのでボクとしては何も言うことは無い。

「保護者はいるのかい？」

「ライラさんとこのメイドさん」

「……じゃあまあ大丈夫か。気をつけて行つといで」
「ん」

そんなわけで、小旅行が決定した。

しばらく前から計画してた一件だ。よし、全力で楽しもう。

@ — @

「お腹を壊しましたですよ」

「やりすぎちゃったね……」

「何してんだ君らは」

それからしばらく、旅行を終えて事務所に帰ってきたボクとライラさんの顔は蒼白になっていた。

二人とも志希さん製のお薬を飲んでなんとか体調は保っているが、それでも万全とは言い難い。

「山口だっけ？ ……そんなに体調を崩すような場所があったか？」

「錦帯橋って知ってる？」

「あ、ああ。一応知識としては」

「そこでソフトクリーム、たくさん売ってるですよ……」

「前テレビでやっててさ……何か百種類以上のソフトクリームが売ってあるとかで」

「……ああ！ なんかに聞いたことある……な……」

「全種類食べてさ」

「おバカ!!」

頭にチョップを食らった。

くっ。いつになくプロデューサーが厳しい……! !

「アイス好きとしては外せなかつたんだよ! !」

「ライラさんたちも忙しーですし、行くチャンスも少ないですし」

「あ! ! だから一泊したのか! !」

「向こう岸にあるライバル店も制覇したかったし……」

プロデューサーが頭を抱えた。

……まあ確かにちよつと性急かなあとは思いうけれど、何度も言うけどアイスの食べ歩きと制覇はボクのライフワークだよ？ 制限されるものなら今後のボクのモチベーションがどうなるか……分かってるね？

「白河さん一週間アイス禁止」

「そんな!?!?」

「いまだがつてないほど焦ってるですねー」

「ライラさんは担当さんに言ってくる」

「ライラさんもうございますか」

「流石に見て見ぬふりはできないよ……それ以前によくそれだけの量入ったな……」

「何時間いたつけ？」

「朝から晩まででありますねー」

あ。プロデューサーの額に青筋立ってる。

珍しいし写真撮つとこ。

「白河さんは時々恐ろしい煽り方をしてくるよな……!!」

「あはは。成長と思つてよ」

「確かに成長つちや成長だがこういう風な成長は期待してなかったかな……」

むう。だとしたらどんな成長の方面なんだろうか。

やつぱり楓さん？ ……でも楓さんだつてこういうことくらいするよね。お酒に関しては。前も居酒屋はしごして担当さん潰してたつて聞いたけど。

だとするとのおあさん……いや、のおあさんもそこそここういうことすると思うんだけど。

「何が悪いのか分からない……」

「体調管理ができてないことだよ」

「ごもつともな話であった。」

※ ◆ ○年後のこと／橘ありす ◆ ※

年が明けてすぐに、氷菓さんは大学に休学を申し出て渡米しました。

前から決めていたことのように、お仕事も殆どをキャンセルして。

あまりに突然の出来事に、事務所の誰もが驚いて……同時に、「ああ、そうだろうな」という思いを抱いています。

そういうことをする人かしない人かで言えば、確実にそういうことはする人です。浮世離れしていますし、現実離れもしています。

何をしても……いいえ、何をしでかしてもおかしくない。そういう人なんです。

はつきり言って、ちゃらんぽらんです。アイドル全盛……まだ二十代だったころの楓さんにも劣りません。それどころか、三十代になつた今は比肩しているほどです。大人としてあれはいかなんでしょうか。非論理的です……。

氷菓さんが渡米して四か月ほど。スターライトプロジェクトやクローネに限らず多岐に渡る活動をしている彼女が抜けた穴は、小さくありません。

ですが頑張らないと。もしかすると、今頃ハリウッドで映画でも撮影しているのでしょうか。それとも歌でトップを狙っているのでしょうか……日本にいる私たちには分かりません。ですが、いつ彼女が日本に戻ってくるとも分からないのです。あの自由人の友人に恥じないよう、そして仲間として隣に立つことができるよう、毎日の研鑽を怠るわけにはいきません。

今日もお仕事までの間、試験に向けた勉強をしてひとまず時間を潰すことにしましょう。

「ただーまー！ー 元氣してたー？」

「……は!?」

そう思つて机に向かった瞬間、聞き慣れた友人の声飛び込んできました。

四か月前にアメリカに飛んだはずの氷菓さんです。

何故この人がここに……!?

「ありすちゃんただーまー。あれ？ 何フリーズして。おい。ボクだぞ」

「……ひよ、氷菓さん……? いえ、何でここに……?」

「用事終わったから帰ってきた。明日から復帰するしプロデューサーんどこ来たんだけど」

「は、はあ……」

ど、どういうことでしょう……私たち、そんなことは何も聞いていません。

それとも連絡の行き違いがあったのでしょうか。それにしても氷菓さんも自然のことに会話していますが……。

……この何年かで、氷菓さんも随分と成長しました。外見も……勿論ですが、その内面も含めて。

170cm手前まで伸びた身長に、絹糸のような綺麗な髪……貧相だった当時の面影はもうありません。クールビューティという言葉が似合う美人です。

ですが、中身は外見通りじゃありません。子供の頃が懐かしく、そして遠い日のことだったように思えるほどの自由人です。志希さんや楓さんたちの影響が随所に見られます。せめてのあさんや千秋さんの影響を受けてほしかったのですが……無理だったようです。残

念なことに……。

いえ、それよりも、です。

「いつ日本に……?」

「さつき。晶葉にメール入れてたけど気付かなかった?」

「晶葉さんは大学のロボット競技のためにしばらく来られないって知ってま……アイス食べ始めないでください!!」

「あっちケミカル臭すごくてさー。やっぱ日本のがいいよね」

「話を戻してください」

「知らなくてもそれはそれでサプライズになるからまあいつかって思っ」

あたかも自分の家のように悠然とソファに腰掛ける氷菓さんの姿からは、遠慮というものが感じられません。

「用事……というのは?」

「医師免許取ってきた」

「何ですか!？」

「持ってたら合法的に医療行為ができるってことじゃん?」

そ、そのためだけにわざわざ渡米してまで……?」

つまり、アメリカの大学に入学して、飛び級で一気に卒業して、医師としての資格を取得するための条件をストレートで満たしてきた、と……?」

この人は頭のネジがどこか飛んでいるんでしょうか……。

「まあ、みんながケガしたらボクが診れるから安心してねってことだよ」

「はあ……」

「それでも人体には詳しいんだよ? ま、詳しくつても体形を調整するのに苦労するんだけどね!」

「昔の話で……ちよつと待ってください。少し体形が変わりましたか？」

「あー。アメリカの食事妙に脂肪とカロリー高いからちよい胸膨らんだかな？」

「ツアーツ!!」

「おつと危ない危ない。あつはつは」

「……………この元健康不良児……………」

昔は人の動きなんて先読みできなかった板切れのはずなのに……！

「まあまあ、食べればいいんだよ」

「普通お腹の方に肉が付きますよね」

「胸の方に付くもんじゃないの？」

「戻って来て早々に喧嘩売ってるんですか」

「これ以上胸の話をする^{ムネン}と無念の死を迎えそうだからやめとくよ。くくっ」

「買いますよその喧嘩」

わたし……私だつてですね……………！ 努力はしているんです！

まだ今は努力の成果が出ていないだけ……………だというのにそれを尻目にこの……………！

比較対象がいる状況下では、スレンダーという言葉は慰めの言葉にならないんですよ!!

「……………相変わらず美的センスが磨かれていないような人と争つても無駄かもしれません」

「そ、そんなことないしー？ ほらこのドイツ語Tシャツ、悪くはないじゃん？」

「まだクソTシャツ収集趣味あつたんですか。で……………Zweckentendenz」

「意味は特に無いけど語感がいいなって思ってた」

「どうせそんなところだろうと思いました」

「酷え」

そう言いながらも、堪えたようには思えません。

当時、美的センスがイマイチだったのは確かですが……既にコレはそういう趣味に定着してしまったということなのでしょう。

当時からそういう兆候はありましたが、それにしたつてもう少しマシな趣味もあつたものだと思います。

「あ、そうだ。お土産買って来たんだ」

「唐突ですね……」

「まあいいじゃんいいじゃん。で、これこれ」

氷菓さんが取り出したのは、「I♥NY」と書かれたTシャツ。
受け取った私は即座にその場に叩き付けました。

@ —— @

「という夢を見たんです」

「流石にそうはならんやろ」

「いえ分かりませんよ。むしろあり得るような気がします」

「……断定はできないけどさ……」

……アリスさんからのボクの印象、いったいどうなってるんだろう
なあ……。

56：年々歳々花相似

「それじゃあ……せいっ！」

大晦日。お寺に集まっていたボクたちは、みんなで除夜の鐘を撞いていた。

夜、十一時過ぎ。掛け声と共にごーん……と荘厳な音が響く。周りの参拝客の皆さんは、ボクらを見て色めき立っているようだけど、それ以上にボクを含む数名は実は気もそぞろだったりしていた。

今回集まっているのは、寮生の中でも15歳に満たない中学生＋α。年齢層が若いだけにちよつと不安な部分はあるけれども、今日はおじじが引率を引き受けてくれたので、色んな意味で問題無い。何せ怖がって誰も近寄ってこない。仮に近寄ってきても気付いたらいなくなっている。

深く気にしないことにしよう。

さて、こうしてやってきた理由は除夜の鐘——ではなく。ジョヤの鐘だ。

除夜じゃなくてジョヤ。この微妙なニュアンスの違いを理解してくれる人はどれだけいることだろうか。いやいってもらっても困るんだけど。せめて分かるのはボクらの周辺の人間だけにしてほしい。

さて、ともかく。

……今、実は世界はちよつとした危機を迎えている。

……ちよつと大仰に言ってみたけど、実際のところはそこまで大したことでもない。このまま鐘を撞き続けていればなんとでもなることだ。

具体的などころはというと……昨日に遡る。

@ ——— @

「アーニヤさん、あれ何……？」

大晦日を目前にした夜。アーニヤさんと一緒に寮の屋上で天体観測をしていると、ボクはふとした拍子にあるものを見つけた。

宇宙に浮いているロボットだ。

どこことなく鐘のような意匠が随所に見られるが、間違いない——ロボットだ。

宇宙に、ロボットが、浮いている。

……いや、流星にもしかすると自分の頭がトチ狂って妙な幻覚でも見せているのかもしれない。そういう可能性も踏まえてもう一度見してみるが……ロボットは相変わらずそこにいる。

まるで晶葉が何かの戯れに造り出して放置したかのような造形をしているが、あれは一体何なのだろう。困惑に囚われたまま、ボクはアーニヤさんに望遠鏡を見るよう促した。

「何……？　ですか？」

「ちよ、ちよつと見てみてくれないかな。ボクの目がおかしくなったのかな……」

「それはない……と、思いま………x………x o p o Ⅲ o………」

「……何が見えた？」

「p o b o t……アー……ロボット……が……」

「……だ、よね……？」

……困った。どうやらボクの目がおかしくなったわけじゃないらしい。確かにロボットが宇宙に浮いている。

ロボット……ロボットかあ。ロボットとなると、まあだいたい晶葉だけど……。

「アーニヤさん、ちよつと志希さんに……まあダメ元でいいから連絡取ってみてくれる？　ボク晶葉に電話してみる」

「Da。分かりました……」

時間は……いいや、どうせ起きてるだろうし。

寝てたとしても多分寝オチしてるパターンだろうから、その場合はちゃんとベッドで寝るよう言っておけばいい。そう思って発信してみると、やっぱりあっさりと電話は通じた。

「もしもし晶葉?」

『もしもし天才だが。何だ?』

「晶葉さ、ロボットを大気圏突破させて放置してみたりしたことある?」

『え……? いや知らん……何だそれ怖……』

あ、マジのトーンだ。どうやらこれ本当に知らないっぽいぞ。

「そっか。いや、うん。今ちよつと天体観測してたらそういうのが見えてさ」

『仮にそういうものの打ち上げが成功してたら私も知ってるはずだが……』

「分かった。ごめん遅くに」

『いや……それよりもうちよつと詳しく聞きたいんだがそのロボットの見た目とか性の』

話が長くなる前に通話を打ち切った。

いや……決してこういう話が嫌いってわけじゃないんだよ? ただちよつと、ほら。今切羽詰まって……は無いけど、この意味不明な状況の中でいつまでも議論してるわけにもいかないし。

何はともあれ晶葉ごめん。内心で謝りながらアーニヤさんに視線を送ると、軽く首を横に振って返してくれた。どうやら志希さんの方も知らないようだ。

一応、他の人……特に、こういう超常現象に詳しくそうな人に連絡を頼み、ボクは別の方向性で考えを巡らせる。

「と、なると……」

まさかね、なんて思いながら、例の通信機を取り出して開祖様に連絡を入れる。

ロボットの特徴その他を伝えると、数秒ほど間を置いてこんな返事が返ってきた。

『ジヨヤじゃねーか!!』

「じよや……?」

『なんて言ったらいいんだろうなあ……ある依代に人間の煩惱を集めた存在でな、こいつをなんとかしないと』

「しないと?」

『世界中に煩惱が撒き散らされてなんだかんだあつて人類が減びる』

「えー……何ですかその……何なんですか……」

『オレ様に聞くな。十二神将に聞け』

それ本当に十二神将様方もちゃんと理解してることなんだろうか。

いやメカニズムは分かっていると思うんだけど、こう、そうじゃない諸々の部分とかさ……あるじゃん?

多分、何かしらイレギュラーとか起きると思うんだよね。煩惱……に限らず、人間の欲望とか感情とか、絶対にコントロールできないものの典型だし……。確信は無いけど、なんだかそんな予感はある。

「そもそも、そのジヨヤ自体がそちらの世界のシステムの産物ですよね? 何故こちらに?」

『それが分からないから悩んでんだよ。ゾーイが討ち漏らしたか』

『漏らしていないぞ』

『……だそうだから何か別の要因があるんだろうが』

「仮にですけど、こちらの世界で煩惱が何かに集まってジヨヤ化したってことは……」

『んなことがあつたらとうの昔に人類滅びてんだろ』

「そうですか……」

相変わらず、星晶獣の類は気軽に世界とか人類とか滅ぼしにかかるよね。そういうものだから仕方ないと言えば仕方ないんだけどさ……。

まあ、開祖様の言う通り、仮にこっちの世界でジョヤなる星晶獣が気軽に生まれるようなら、もっと世界は荒廃してるだろう。

そもそも星晶の力はこっちには無いし……どれだけ煩惱が溜まっても星晶獣にはならないだろうというのがあるけど。

「だとすると、すぐ対処しなきゃですね」

『それなんだがちよつと待て』

「は？」

『そもそもジョヤは十二神将の「お役目様」ってヤツじゃあないと煩惱を祓えねえ』

「……こっちの世界終わったじゃないですか!？」

「それって ЧТО どういう ЭТО 意味です ЗНАЧИТ!!?」

そのままの意味です。

『いや、そうとは限らねえ。一般人でも依り代を撞けば煩惱が多少は霧散する』

「……機械的に叩き続けるというのは」

『ダメだ。やっぱり「人」の力は必要になる』

えー……と。煩惱は人の意思から生まれたものだから、人の意思を込めた行為じゃないと意味が無い、つてところかな。

何て言うんだろ。あっちの世界のそういう……なんとなく機能的じゃないとこ、やっぱりちよつと苦手だ。ボク。

「ですけど、それじゃあ根本的解決にならない……ですよね?」

『ジヨヤがそつちにいるってことは「こつち」と「そつち」が根本的な部分で繋がってることの証明だ。それは分かるな?』

「えー……と……ジヨヤを撞いた時に発生するエネルギーの行き先や、位相の変移を観察することで、『こちら』と『そちら』を行き来できる方法が見つかるかもしれない……という?」

『オレ様そこまでは言っていないのに当然のように1から10まで言い当てやがってお前……』

「な、なんだかすみません」

『いやいい。優秀な生徒は嫌いじゃあねえ。とりあえず一旦誰かが撞いてやれば、煩惱も散って数か月はもつだろ』

「はあ」

『その間にオレ様たちが双方向の行き来ができるようになるんとかして、十二神将かゾーイに根本的な対処をしよう。これだな。つーか現状そのプランしかねえ』

現状、ボクはジヨヤのことについては何も知らないのです、開祖様の案に乗る以外に手は無い。

そもそもそれが開祖様の発案であればボクが乗らない理由は無いです。

そのために、まずは探査機を作って、データを送る環境を整えて……ジヨヤの鐘を撞いて、一時的に煩惱を祓うと。

「分かりました。実行のタイミングは?」

『大晦日の深夜だ。ぬかるなよ』

「勿論です」

@ ————— @

……というわけで、今回のコレは除夜の鐘撞きであり、ジヨヤの鐘撞きでもあるわけだ。

開祖様の指導のもと、ジヨヤの発したエネルギーを観測する装置を作成。軌道エレベーターの要領で鐘とジヨヤとを連結、除夜の鐘を撞

くことで、同時にジョヤを撞くようなシステムを作り上げた。晶葉の手も借りて、突貫作業で——とはいえ、なんとか一晩でやり遂げたボクらを褒めてほしい。

色々は無茶はしたけど、まあそこはそれ。それよりもジョヤ対策の方が優先だ。ほつといたら人類が減じる。

でも、まあそうならないための策は講じたわけだし、これで一安心かな。あとは開祖様たちにお任せだ。いや、フリじゃなくてホントに。

できることがあるならやるけど、その辺は十二神将様やゾーイさんがやらないとダメみたいだし……あ、でも大気圏突破するくらいは何かしらなら作れるだろうし、そういう技術的な方向で力になろう。

「ふう……」

……改めて考えると、とんでもなく濃い一年だった。

年の始めはまだ穏やかだった。いや、穏やかというより……単に何も無かったってだけか。あの頃はボク自身も目標や指針というものを見つけられていなくて、自由というものについての自分なりの解釈も存在しなかった。

プロデューサーにスカウトされてからがある意味で「今年」の本番か。

アイドルになって、ステージの楽しさを知り、あっちの世界に一旦戻り、自分なりの自由の解釈を得た。海に行って遊んだり、アイス禁止されたり、サマーライブしたり、誕生日を祝ってもらったり、アイス食べすぎてアイス禁止されたり、様々な仕事を経験したり……今改めて思い返すとなんかアイスばっか食べてるなボク。それだけ行動範囲が広がったってことでもあるんだけど。

……ともかく、そういう流れもあったので、一年という時間の中でボクもそれなりに成長できたんじゃないかと……ちよつとは思う。

この先も成長していけるといいなあとも思うし、きつと、この先もアイドルとして活動する中で成長していかなきゃいけない。

時間的に、もうそろそろ年明けだ。

素晴らしかった今年を、人としての歩みを始めた今年を惜しみ、けれども、訪れる翌年がより良いものとなるように——折角お寺にいるんだし、祈っておこう。

「ひよ、ひよーかちやあん……お鐘ちゆかないのお?」

『お』はいらないよくるみさん……」

その前に、今年の煩惱を落とすところからかな。

ボクの煩惱っていうと……えーと……あー……と……アイス……?

控えめに撞こうかな……いやでも変に遠慮するとマズいことになりそうだし……ええ、と、ああ、と……うん……。

……五分ほどして、ヤケクソのように鐘を撞いてはみたが……鳴り響いた音はごくごく普通だった。

来年はもつと筋力鍛えよう……。

@ ——— @

年が明けて一月一日、ボクは諸々の用事を早めに終えて、クラリスさんと一緒にあおぞら園の方にやってきていた。

親しき中にも礼儀ありと言う。住居を移したり、おじじの養子になつたりはしたけど、そこはしっかりやっておかないといけない。

「あけましておめでとう」

「あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い致します」

今日は極めて珍しく、ボクもクラリスさんも着物でやってきている。

やっぱりお正月という時期もあるし、アイドルなんだし、それなり

の服装で行くべきでは——という発案をしたのがクラリスさん。納得して応じはしてみたけど、こうして似たような格好をしてみるとな人もお互いの差がよく分かる。分かるけどおいこらその男子二人、見比べてため息をつくな。「あーあ」とでも言いたげに額に手を当てるな。新年早々なんだ貴様ら。

「あけましておめでとうございます。クラリスさんは、昨年も氷菓や園のことで大変お世話になって……」

「微力ではありますが、助けになったなら幸いですわ」

「謙遜なさらず。ああ、ともかく上がってください。氷菓も」

「あ、うん」

招かれるまま、玄関から室内に上がる。「ただいま」と呟いた声に、先生が小さく「おかえり」と返してくれた。

……それにしてもクラリスさん、玄関から室内に上がる時の何気ない仕草にも全く隙が無い。マナー的な意味でも動き的な意味でも。一応団長さんたちの動きを見て知ってるボクから見えてそれって相当じゃないかな……。

「あけましておめでとう氷菓ちゃん！ はいこれお姉ちゃんからお年玉ー」

「おめでと。お年玉って……ありがたいけど、一応ボクもお仕事してお金貰ってるんだから、いいのに」

「そういうこと言わないの、まだ14歳は子供なのよ？ もっとお姉ちゃんに甘えていいのー」

「おーいみんなーお年玉持って来たぞー」

「わーい!!」

「先生、クラリスさん、氷菓ちゃんが冷たいです。私マジメなこと言っただのにー！」

「成海くん、キミはもうちよつと余計な一言を抑える努力をしようか」

あの姉はね……なんて言うんだろう、もうちよつとこう……先生も言っただけど余計な一言さえ無ければもうちよつと扱いを改善してもいいんだが……。

まあそこはいいか。前のこともあるし。そんなことよりお年玉だ。

「あら……お年玉を貰ったばかりで、自分も渡すのですか？」

「うん、結構貰えるようになったし」

「不躰な話ですが、一体いくらを？」

「五万」

二分後、ボクはクラリスさんによってその場に正座させられることとなった。

何故だ。

「ボク何も悪いことしてないと思うんだけど……」

「加減ができていないと言っているのです。五万円ですよ？ 小学生や中学生やそれよりも更に年下の子にはあまりにも多すぎます」

「え、いや、多い……かな……？ みんなくらの子って欲しいものいっぱいあるでしょ？ そう考えるとき、ほら！」

「氷菓さんはもう少し一般的な金銭感覚を身に付けるべきですね……」

「えっ」

い、いや。ボクだってお金の大事さは分かっているし、だからこそ多めにあげたいなと思ったんだけど……。

金銭感覚も、そこまで人並み外れてるってほどでもないでしょ？

……たぶん。

「子供にとってももう少し適切な金額というものがあるでしょう。必ずしも清貧を貴ぶべしとは申しませんが、過度なお金を持つと心に悪影響を及ぼす可能性があります」

「でも……年に一回くらいは贅沢させてあげたいし……」

「それにしても多すぎます。一万円程度が普通ですよ」

「え、そうなの？」

「はい？」

「ボクおじじに貰うお年玉だいたいこのくらいなんだけど……」

言っただけからおじじから貰ったお年玉袋を取り出してクラリスさんにだけ見せると、あまりの衝撃からか一瞬開眼しそうになっていた。

「そっか……お年玉袋が立つほど膨らむのって、一般的じゃないのか……。」

「ワシちよつと古宮のアホに電話してくる」

「お願いします園長先生。さて氷菓さん、これはちよつと過剰な古宮様の愛情の表れであって、普通はここまで貰いません」

「そっか……薄々そんな気はしてたけどそうだったのか……」

「おかしいような気はしてたのですか」

「じゃなきや五万に抑えないよ」

「あれで抑えているつもりだったのですか……」

本当なら倍は入れようかと思ってたし、入れても問題無い程度には口座にあったから大丈夫かなーと思ってて……。

……でもちよつとはおかしいかなとは思ってたんだよ？ ボクだって普段買物しないわけじゃないんだから、このくらいあればこれだけ買えるなー、というくらいは分かっている。ただ、やっぱり……ほら。みんなきつと欲しいものとかあるし。大っぴらにお金を渡せる機会があるなら、多めに渡しておきたいなあ、と……。

うわクラリスさんめっちゃ困惑してる。

「あまり多く包みすぎると、氷菓さんに『お金を貰える、何でも買ってもらえる』ような人という印象がついてしまいます。それがあまり良くないことだというのは分かりますね？」

「うん……まあ……」

「同じ施設で暮らす家族とはいえ、甘く接しすぎると増長して心根が歪む可能性もあります。何事も節度を持って、適切にですよ」

そつか……そうだよ。人間、正しく成長するばかりじゃないもんね。お金が絡むと特に。

ずっとみんなのを見てるわけにはいかないし、将来、もしかすると誰かが悪い大人になったり……悪い大人に感化されて良くないことに手を染めるかもしれない。大金は人の目を曇らせる。「あの時、お金を持つていた自分を忘れられない」ってことで、安易に悪事に手を染めることもあるかもしれないし……欲しいからって渡すだけじゃ、相手のためにもならないよね。

「ごめんねクラリスさん。ちょっと減らすよ」

「分かっていただけたのなら良いのです」

「三……いや、二万くらいに……」

「……そのくらいであれば、まあ、たまの贅沢という程度で大丈夫でしようか……」

みんな、あんまりお小遣いを貰う機会はない。お年玉をくれるのも先生たちくらいで、普通の子供のように親戚回りをしてお年玉をもらって……というようなこともできない。

だから多めにと思ったんだけど、そつか、過剰か……。過ぎたるは及ばざるがごとし、ってことかな、これも。

やっぱり、こういう時にクラリスさんは本当に頼りになるというか……大人だなあと思い知らされる。

いや、ボクが子供の域を出てないっていうのが大きいんだろうけど……。

「まったくしょうがねえーな姉ちゃんは！」

「頭いいのにバカだからね」

「カッコいいしきれいだけどおぼか」

「内面がダメダメのダメ助」

「ボクがいつまでも煽られて黙ったままと思うなよ貴様ら」

ええい晶葉に言われたようなことをそのまま言いおつて！

だいたい頭が良いのにバカつて何だ！ 一文の中ですごい矛盾が起きちゃってるぞ！

「……言われたくないのなら、言われぬような言動を心掛けねばなりませんよ」

「そんなにヒドいことはしてないと思うけど」

「夏にアイスを食べすぎてお腹を壊した件については、言い逃れがでないほどかと思いますが」

「……うぐう」

ホント、クラリスさんはボクの時となるとズバズバ言うなあ……。

それだけボクに欠点があるってことなんだし、指摘してくれるってこと自体はありがたいし……叱られるっていうのも、あんまり無い経験なだけに嫌いじゃない。

やっぱりクラリスさんみたいなお母さんが欲しかったなあ、ボクも……って、絶対言いはしないけど。渋い顔されるし。

でもクラリスさんみたいな人をお母さんに持つと、きっと真面目に育つんだろなあとも思う。真面目な子供に真面目な親。なんだかいいよね、そういうの。

@ ——— @

それからもうちょっと経ったある日のこと。

ボクは写真の撮影中に杵を持ち上げた時の衝撃で腰をいわして控室で休んでいた。

「よわよわすぎる……」

「お、思ったより重たかったんだからしようがないじゃ……あだだだだ」

「貧弱すぎるな……」

「それがひよーかちやんクオリティだよね」

晶葉に呆れたような目線を向けられるが、他に言いようが無い。

解析してある程度の重さは分かっていたんだけど、志希さんは軽々扱って見せるし、晶葉もくるんくるん回してみたりして「あれ？」

これそんなに重くないのかな？」とか思っちゃって、ちよつと先入観があった。お餅つきが初めての経験だということもあるし、気合を入れて振りかぶってみたら……ご覧の有様である。

ちよつと仰向けにすっ転んでちよつと捻っただけだけど、大事を取って……ということにはなっている。

痛みが引くまでとは言うけど、プロデューサーが今この場でボクの様子見てるから錬金術で適当に治療して……ってワケにはいかないし、なかなかままならないものだなあ。

「だいたい晶葉は何であんな軽々振り回せてたのさ」

「機械部品をどれだけ扱ってると思ってるんだ。重いものくらいは持ち上げられないとどうにもならんのだぞ」

思ったよりパワー系だった。

でも論理的に考えるとまあそうなるよね。体積に対して比重がとんでもないものとかもあるわけだし。

日々の趣味のおかげで効率的に鍛えられた……と言えるんだろうか。ちよつと羨ましい。

「ボクだって日々のトレーニングでそこそこには筋力がついたと思っただけだなあ……」

「あれは白河さんの持ち上げ方が良くなかったな。いくら漫画やイラ

ストでよくある体勢だからって、片足を上げた状態で杵を扱っちゃいけないよ」

「あれはー……まいつか。にやはは」

「……う、うーん……うん……まあいいか……」

……正確に言うのアレ、やろうと思つてやったんじゃないかって、気付いたらそうなってたつていうか……振りかぶった瞬間に重量に負けたつていうか……。

もういいや、そうしてしまったことは事実なんだし。変に取り繕つてもしょうがない。

「撮影自体はできたの？」

「まあ一応ね。カメラさんの腕が良くて助かったよ」

「ボクも体を痛めた甲斐があったよ」

「そういうことはもっと別の場面で言つて欲しかったんだけどな……」

それは……まあ……ちよつとどうしようもないかな。

理想を言つと、他の人が怪我しそうなところにサツと割つて入つて「体を痛めた甲斐があったよ」なんてクールに言つてみたいけど、今はこれが限界だ。仮に妄想通り割つて入つたらまずボクが潰れて死ぬ。そして仮に能力全開にしていいならそもそも体を痛めることが無い。

しかし、なんだかんだ言つてこんな風に怪我したのは初めてのこともかもしれない。

……捻つた程度が怪我かどうかつていうのもちよつと疑問なことだけど、半年以上もやつてて初めてつていうのもなかなか珍しい。いや、そもそもアイドル始めた当初は怪我する前に体力が尽きてたから結果的に怪我しなかつたつてだけかもしれないけど。

「ああ、でも体力はついてきてるみたいだな。マストレさんも今度は筋トレを重点的にやつていくつて言つてたぞ」

「ホント？ やった」

「ほう、氷菓に体力が。どのくらいだ？」

「5キロから10キロくらいのマラソンくらいはできるようになったと思うよ」

「なかなかすごいじゃないか!？」

「最下位ビリッけっっばいけどねー」

「これから改善してくから」

これで学校の体育の時間に白河氷菓の押し付け合いが起きずに済むぞー！

……うん……自分で言っていて悲しくなるけど、これが本当にひどい。唯一卓球の時だけはペア組もうつていう申し出が殺到したけど、それ以外の時は本当に押し付け合いが起きる。アイドルだからって色眼鏡で見ない、鼻屑をしないっていう意味では良いクラスメイトなんだろうけど。一番やってほしいのが審判役ってどういうことだ。

「……なあ、ところで……なんだが」

「ん？」

「どうした？」

「あのケミカルな色をしたお餅は……」

「たべりゆ？」

「いらんいらん！」

「またまたそんなこと言っちゃってー」

「これはただのヨモギじゃー」

「一ノ瀬嘘をつけッ!!」

「ヨモギだよ？ 少なくともガワは♪」

「ガワは」

机の上には、さっきの撮影の時についたお餅。ごく少量だけど、持ち帰らせてもらえることになっていた。

ボクと晶葉のついたものはそれぞれ白と赤。よくある紅白餅だ。

志希さんのはなんだかレインボーなことになっている。見る角度によつて見え方が違つていた。下手をするとメタリックなように見えなくもない。

食べた時に何が起きるかはボクも知らない。というわけで知りた
い。

「さあさここはグイッとー」

「餅はグイツと行けるようなものじゃないと思うな！」

「じゃあお雑煮とかお汁粉にしようよ。そしたら食べやすいんじゃないか？」

「いいねいいね、それ採用♪」

「おつとこんなところに電気コンロが」

「おつとこんなところに鍋と食材が」

「わあ最初から食わすつもりで用意してたな君ら」

「あつたり前じゃん！」

「威張つて言うんじゃないよ！」

餅つきで撮影という言葉が出た瞬間、三人の中でプランは組み上がつていた。

志希さんは十中八九こうするだろうな。となると晶葉はこう動く。つまりボクがこう動けば面白いことになるな、と。

実際レインボーな色合いのお餅は、志希さんの嗜好を表現するにはうつつけだし、ビジュアル面でも面白い。写真撮影にも適している。かと言つて食べられないもので着色してしまうと、食べ物を粗末にするハメになる。そういうわけで、一応食べられるものには仕上げた。まあ多少何らかの効能が出てくるだろうけど、そこはいつものことだし我慢してほしい。

というわけだ。

「さあ、ぐいっとー！」

「ちくしょう手作りで無駄に美味そうに作るなんて卑怯な！」

「アイドルの手作りお雑煮だぞ」

「でも色合いがすごくダメだぞこれは」

「まあまあ食べたら同じだよ」

「そりゃ不味くは作らないだろうけどな？」

「じゃあいいじゃんほーい☆」

「ゴボボーッ！」

「強引にすると詰まらすんじゃないか？」

「んー？ ダイジョーブダイジョーブあたし製だよ？」

「それもそうだな」

——さて。

この後アキバのジャンク品の福袋を買いに行ったりするのにちよつと急ぐからって晶葉がお餅（紅）を喉に詰まらせかけたり、あるいはボクがごく普通にお餅（白）を詰まらせたり。プロデューサーが全身を高速で震わせて物理的に高熱を発してみたり、プロデューサーの目が発光してみたり、プロデューサーの体重が数倍に増えたりしたのだけど、それは余談としておこう。

……何はともあれ、お餅を食べる時は気をつけよう。ボクはそう胸に刻み込んだ。

番外：ろく☆ちゃんねる抜粋（9）

《文化祭速報スレ》

1 学生証番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

本年度文化祭についての速報・雑談スレです
ルールとマナーを守って楽しく書き込みましょう

注意事項

- ・学校内でこの掲示板のことは話さないこと
- ・煽り、荒らし、暴言、個人の特定はNGです
- ・迷惑がかかるので346プロのアイドルに掲示板のことは教えてはいけません
- ・教師にも伝えないこと

560 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

二年三組四組合同でメイド喫茶決定!!

561 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>560

それどこ情報よ？

562 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>561

2-3か2-4に聞きにいけばいいだろ

563 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>560

メイド喫茶じゃなくてメイド・執事喫茶だぞ

564 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

女子がメイドやって男子が執事やんの？

565 学生証番号774番目 20XX/X X/X

D:***

女子が執事やって男子がメイドやるって聞いたが？

566 学生証番号774番目 20XX/X X/X

D:***

>>565

お前ふざけんなよマジやめろよ気持ち悪い

567 学生証番号774番目 20XX/X X/X

D:***

>>566

決めたの俺じゃねーよ!!

568 学生証番号774番目 20XX/X X/X

D:***

落ち着けよ

実際には2-3と2-4のアイドルが執事役とメイド役両方やる

からこういう書き方なんだよ

男子は執事で女子はメイドだぞ

569 学生証番号774番目 20XX/X X/X

D:***

>>568

お前最高だな

570 学生証番号774番目 20XX/X X/X

D:***

盛り上がってきたな

571 学生証番号774番目 20XX/X X/X

D:***

(股間が)盛り上がってきたな……

572 学生証番号774番目 20XX/X X/X

D:***

>>571

そうかキサマはシベリア送りだ

573 学生証番号774番目 20XX/XX/XX

D:***

何で執事なんてやりたがるんだろ

メイドだけでいいじゃん

574 学生証番号774番目 20XX/XX/XX

D:***

女子って男装したがるやつ多いだろ

575 学生証番号774番目 20XX/XX/XX

D:***

男子しか来ないわけじゃないの分かってる？

576 学生証番号774番目 20XX/XX/XX

D:***

それより演劇の方どうなってるんだよ

577 学生証番号774番目 20XX/XX/XX

D:***

アイドルのいるクラス全部アイドル出して来るらしいぜ

578 学生証番号774番目 20XX/XX/XX

D:***

>>577

やったぜ

579 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

演劇やるよ

1-1 ロミオとジュリエット

1-4 いじめテーマのオリジナル演劇

2-2 シティハンター

2-3 アラジン

2-4 銀河鉄道の夜

3-1 新約赤ずきん

3 | 2 超高速参勤交代

3 | 3 コブラ

5 8 0 学生証番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I

D : * * *

毎年何かしら変なのあるよな

5 8 1 学生証番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I

D : * * *

コブラって何？

5 8 2 学生証番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I

D : * * *

>> 5 8 1

ググレ

5 8 3 学生証番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I

D : * * *

>> 5 8 1

マジレスすると80年代ジャンプ作品な

何で俺らの年齢でコレ選んだかは知らん

5 8 4 学生証番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I

D : * * *

>> 5 8 3

ありがとう

ワンピのアラバスタのおっさんかと思った

5 8 5 学生証番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I

D : * * *

>> 5 8 4

分かりづらすぎるわ！

@ 文化祭2日目 @

1 1 2 学生証番号774番目

2 0 X X / X X / X X

I

D : * * *

馬鹿馬鹿!!!

1 3 学生証番号774番目 20XX/X/X/X I

D:***

ファツ!?

1 4 学生証番号774番目 20XX/X/X/X I

D:***

何あの馬超上手ええええええええ!!!?!

1 5 学生証番号774番目 20XX/X/X/X I

D:***

馬と白河が上手すぎてキモい(誉め言葉)

1 6 学生証番号774番目 20XX/X/X/X I

D:***

レイナちゃんの話が全く出てこない……

1 7 学生証番号774番目 20XX/X/X/X I

D:***

しょうがねえだろありや無理だ

1 8 学生証番号774番目 20XX/X/X/X I

D:***

うわああああああああ一ノ瀬志希だああああああああ

ああ!!!

1 9 学生証番号774番目 20XX/X/X/X I

D:***

うつそだろお前

1 20 学生証番号774番目 20XX/X/X/X I

D:***

今白河がニヤツとしたぞ

1 21 学生証番号774番目 20XX/X/X/X I

D:***

草生えるわ

草食われるわ

D:***
1 2 2 学生証番号774番目 2 0 X X / X X / X X
I

うちの学校の外から人呼んでくるのありかよお!?

D:***
1 2 3 学生証番号774番目 2 0 X X / X X / X X
I

ルールにはちゃんとのつつてる

D:***
1 2 4 学生証番号774番目 2 0 X X / X X / X X
I

馬マスクゲットしたぞ

D:***
1 2 5 学生証番号774番目 2 0 X X / X X / X X
I

!!!!!!!

>>>124

そいつをこつちにWA☆TA☆SE!!

D:***
1 2 6 学生証番号774番目 2 0 X X / X X / X X
I

ナンデ!?志希ちゃんナンデ!?!?

D:***
1 2 7 学生証番号774番目 2 0 X X / X X / X X
I

何あのロボ!?

D:***
1 2 8 学生証番号774番目 2 0 X X / X X / X X
I

ロボってことは白河?

D:***
1 2 9 学生証番号774番目 2 0 X X / X X / X X
I

ロボ!?

D:***
1 3 0 学生証番号774番目 2 0 X X / X X / X X
I

ロボだコレー!!

D:***
1 3 1 学生証番号774番目 2 0 X X / X X / X X
I

何でロボ!?

D:***
132 学生証番号774番目 20XX/X X/X X
I

>>131
カッコイイだろう!!

D:***
133 学生証番号774番目 20XX/X X/X X
I

マジ上手いなしかし

D:***
134 学生証番号774番目 20XX/X X/X X
I

上手いけど麗奈ちゃんの印象全部あつちに持っていかれちゃった

135 学生証番号774番目 20XX/X X/X X
I

D:***
うわ南条バンド全員アイドルじゃん

136 学生証番号774番目 20XX/X X/X X
I

D:***
あつちと別方向ですげえ

137 学生証番号774番目 20XX/X X/X X
I

D:***
やっぱ上手いし盛り上がるなー

138 学生証番号774番目 20XX/X X/X X
I

D:***
行ったこと無かったけどライブすげー

139 学生証番号774番目 20XX/X X/X X
I

D:***
うちの学校のアイドルほぼ全員呼んできたとかすげえ
どんだけ練習したんだろうな

140 学生証番号774番目 20XX/X X/X X
I

D:***
先生までノリノリじゃん

141 学生証番号774番目 20XX/X X/X X
I

D:***

やっぱ生ライブは違うな！

142 学生証番号774番目 20XX/X X/X X I

D:***

ところであっちにめっちゃ怖い人らいるんだけどあの人らのこと知ってる人いる？

143 学生証番号774番目 20XX/X X/X X I

D:***

あれ##この書き込みは削除されました##

144 学生証番号774番目 20XX/X X/X X I

D:***

##この書き込みは削除されました##

145 学生証番号774番目 20XX/X X/X X I

D:***

え、何これは・・・

146 学生証番号774番目 20XX/X X/X X I

D:***

触れてはならないところに触れてしまったようだ

おまえらも気をつけろよ

147 学生証番号774番目 20XX/X X/X X I

D:***

何でうちの掲示板こんなことがしょっちゅう起きるん？

148 学生証番号774番目 20XX/X X/X X I

D:***

関係者が関係者だからとしか言いようが無い

149 学生証番号774番目 20XX/X X/X X I

D:***

芸能関係だからね

仕方ないね

150 学生証番号774番目 20XX/X X/X X I

D:***

しかし生ライブすごかったわ

ファンになったかもしれん

151 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

お前まだファンじゃなかったのか

152 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

甘いな

本当のライブだともつとすごいぞ

263 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

この二年生のメイド喫茶いつまでやってますか？

264 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

あ、ごめんなさい：それ今日までなんですよ

265 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

もう執事からメイドになつてる（；▽；）

もつとみんなの執事見たかつたなあ

266 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

ついでにレイナサマとかお嬢とか南条とかくるみちゃんとかやつてくれたらよかつたのに

267 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>>266

モグリめ

南条のメイド+和メイド企画があつたことを知らんとは

268 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>267

それくるみちゃんと一緒にやってたやつじゃね？

269 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>268

お嬢もどつかでやってるから今んとこやってないのレイナサマくらいだ

誰か引っ張っててくれねーかな

270 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

見た目だけじゃなくて料理もうまいとかこれ最高なやつじゃん？

271 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

俺らも中学生とはいえ中学生のやることじゃねーよ

272 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

ドーナツ美味しい

太る

やばい

273 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

誰あのイケメン！

誰あのイケメン!?

274 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>273

詳細

275 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>274

二年喫茶に入ったこのイケメン誰!?

【写真】

276 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>275

346のプロデューサーじゃん

自分とこのアイドルのお世話だろ

277 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>275

今行っても無駄だぞ

仕事の話するみたいで白河と裏に逃げたから

278 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>277

残念

売り込みに行こうと思ったのに

279 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

どっちの意味で凸しようとしてるのか分かんねーな…

280 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

逆ナンしに行くのが三割興味本位が三割

アイドル志望が三割その他とホモ一割ってどこだな間違いない

281 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

>>280

間違いないな

282 学生証番号774番目 20XX/XX/XX I

D:***

か ナチュラルに同じ学校にホモがいることにするのやめてくれない

283 学生証番号774番目 20XX/XX/XX
D:*** I

逆にレズもいるかもしれんぞ

284 学生証番号774番目 20XX/XX/XX
I

D:***

アイドルの百合:?

ウツ見たい

285 学生証番号774番目 20XX/XX/XX
I

D:***

ユリユリが見たい? (難聴)

286 学生証番号774番目 20XX/XX/XX
I

D:***

ユリユリの腐敗コレクションが見たい? (難聴)

287 学生証番号774番目 20XX/XX/XX
I

D:***

やめろオ!

《ひななお実況スレ》

1 会員番号774番目 20XX/XX/XX
ID:***

*

今回のゲスト

三好紗南

白河水菓

テーマは「あのレトロゲームを遊ぶ」

2 会員番号774番目 20XX/XX/XX
ID:***

*

立て乙

* 3 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:**

乙

346の狂ゲーマーの参戦か

* 4 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:**

* 紗南ちゃんはそれ売りにしてるけど氷菓ちゃんってそこまでゲーマーだっけ？

* 5 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:**

ツイッターに上げてるけどクソ上手いぞ

紗南ちゃんとも一緒にやってるっぽい

* 6 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:**

* テレビで流れるのは初じゃね？

* 7 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:**

つつてもあれどれだけ本当か分からんからな

実機プレイはヘナチョコな可能性もあるぞ

* 8 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:**

* 参考動画上げとくぞ

ttp://twitch*****1

ttp://twitch*****2

ttp://twitch*****3

* 9 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:**

* 流石にこれは無理だろ

** 10 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:**

ただのTASじゃん

11 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

どっかで拾ってきたTAS動画そのまま載せるとか……

12 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

ちよつと待って俺TAS動画しよつちゅう見るけどこれ見たこと
ないんだけど

13 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

編集だろバカバカしい

まあそんだけ動画スキルはあるんだろうけどな

14 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

絶対ガバるゾ

16 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

始まった

19 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

実家のような安心感

23 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

gdgdすぎる

28 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

ウサミン毎回OPトークトチってんな

33 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

たまにはミスせずにやってみろよオラアン!

35 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

でもミスしなかったらウサミンじゃない気がする

39 会員番号774番目 20XX/X X/X X

ID:*

**

>>35

わかるマン

49 会員番号774番目 20XX/X X/X X

ID:*

**

ウサミンⅡ凡ミスって印象やめろよ

全員満遍なくしよっちゆう凡ミスするだろ

55 会員番号774番目 20XX/X X/X X

ID:*

**

>>49

やめてさしあげろ

60 会員番号774番目 20XX/X X/X X

ID:*

**

そうだね

下手したらスタッフもミスするもんね

63 会員番号774番目 20XX/X X/X X

ID:*

**

この番組gdgdすぎませんかねえ……

77 会員番号774番目 20XX/X X/X X

ID:*

**

この有様で何故か一年もってる不思議

81 会員番号774番目 20XX/X X/X X

ID:*

**

KAWAIIは正義だからな

84 会員番号774番目 20XX/X X/X X

ID:*

**

このだらだら感がいいんじゃないか

89 会員番号774番目 20XX/X X/X X

ID:*

**

疲れてるところにこのぐうたら感がスーッと効いて……

96 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

現代社会は疲れてる人多すぎるんやな

103 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

変なこと言うけどこの番組にはあんまり力入れてほしくない

今の低予算感すごいこの感じが癒しでな

110 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

>>103

分かるよ

118 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

部屋に置いてあるものはグレードアップしてるからその辺に予算使ってると思われ

123 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

三人が快適なら何よりです

127 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

ゲスト来た

140 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

いいねえ

若いねえ

141 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

皆若いだろ!?

148 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

お前それウサミン相手でも同じこと言えるの？

154 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ウサミンが17歳だって言ってるだろいい加減にしろ！(○日ぶり

○回目)

159 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ウサミン ハ17歳デス

167 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ウサミンは17歳だろ？(曇りなき眼)

169 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

洗脳されている……

186 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ウサミンママ!?

189 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

お母さん!?

195 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ママーツ!

197 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

バブみを感じる

211 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ウサミンは私の母になってくれたかもしれない女性だ!!

212 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

お母さん……？ウサミンが？

うわっ！

216 会員番号774番目

20XX/X X/X

ID :

でもウサミンが授乳してくれるなら俺は喜ぶよ

223 会員番号774番目

20XX/X X/X

ID :

いい母親になるとは思う

所帯じみてて

228 会員番号774番目

20XX/X X/X

ID :

多分お前らの考えてるのは違うんですがそれは

232 会員番号774番目

20XX/X X/X

ID :

どちらかと言うとウサミンとは結婚したい

246 会員番号774番目

20XX/X X/X

ID :

そもそも氷菓ちゃんがこの発言することのヤバさについて

247 会員番号774番目

20XX/X X/X

ID :

何も問題は無い

いいね？

249 会員番号774番目

20XX/X X/X

ID :

アツハイ

250 会員番号774番目

20XX/X X/X

ID :

>>247

ということにしたいだけだろ

分かってる俺もだ

	267	会員番号774番目	20	XX	/	XX	/	XX	/	IX	I	:
	**											
		レトロゲーといえば!										
	270	会員番号774番目	20	XX	/	XX	/	XX	/	XX	I	:
	**											
	**	ゲームギア!										
	272	会員番号774番目	20	XX	/	XX	/	XX	/	XX	I	:
	**											
	**	やっぱFCだろ										
	276	会員番号774番目	20	XX	/	XX	/	XX	/	XX	I	:
	**											
	**	世代的にSFCじゃね?										
	281	会員番号774番目	20	XX	/	XX	/	XX	/	XX	I	:
	**											
	**	氷菓ちゃんトロコン勢の上効率厨って……										
	285	会員番号774番目	20	XX	/	XX	/	XX	/	XX	I	:
	**											
	**	あくまでガチ勢ってだけだろう										
		厨まで行っていない										
	289	会員番号774番目	20	XX	/	XX	/	XX	/	XX	I	:
	**											
	**	やっぱ紗南ちゃんエンジョイ勢か										
	295	会員番号774番目	20	XX	/	XX	/	XX	/	XX	I	:
	**											
	**	エンジョイ勢(トロコン)										
	298	会員番号774番目	20	XX	/	XX	/	XX	/	XX	I	:
	**											
	**	一種のエンジョイよねそれも										
	316	会員番号774番目	20	XX	/	XX	/	XX	/	XX	I	:
	**											
	**	えっ										

3 1 9 会員番号774番目 20XX/X X/X

64……? ?

3 2 3 会員番号774番目 20XX/X X/X

64がレトロ!?

3 2 7 会員番号774番目 20XX/X X/X

ウツ

3 3 3 会員番号774番目 20XX/X X/X

20年前!!?

3 3 8 会員番号774番目 20XX/X X/X

俺はこの二十年一体何を

3 4 2 会員番号774番目 20XX/X X/X

それよりWiiがもう十数年前の機種ってことが驚きなんだが

3 5 1 会員番号774番目 20XX/X X/X

>>>342

五、六年前だろ……? (震え声)

3 6 3 会員番号774番目 20XX/X X/X

目を覚ませ

PS3もガンダム00もギアスもあとVやねんも334も10年

以上前だ

3 6 9 会員番号774番目 20XX/X X/X

>>>363

やめやめろ!

3 7 4 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

>>> 3 6 3

嘘やん……

3 7 8 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

>>> 3 6 3

最後関係ないやろ！いい加減にしろ!!!

4 0 1 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

マリオか

4 0 5 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

まあ鉄板よね

4 2 2 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

????

4 2 6 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

スターはともかく鍵がいらない……？

4 3 3 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

鍵って絶対必要になるんじゃないかなかったつけ？

4 3 7 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

鍵必須だよ

流石にフカシだよ

T A S 動画見て来た俺には分かる

4 5 1 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

親の顔より見たピーチ姫

4 5 6 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

>> 4 5 1

もつと親を見ろ定期

4 6 6 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

氷菓ちゃん「(実)親の顔より見た」

4 6 9 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

>> 4 6 6

やめろオ!!

4 7 2 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

>> 4 6 6

シヤレなんねえだろ!

4 8 1 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

g d g d パート

4 8 2 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

やっぱりママじゃないか! (憤慨)

4 8 7 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

やっぱりママじゃないか! (歓喜)

4 9 6 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

世代がね……

4 9 8 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

ウサミンは17歳って何度言わせんだオラァン!

511 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

去年も17歳でしたね

521 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

楓さんとの共演以降氷菓ちゃんも駄洒落使うようになったんですけど……

524 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

でもあのえへ顔可愛いからいいじゃん(いいじゃん)

548 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

やっぱり紗南ちゃん超上手いなあ

551 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

参考になるよね

普通に上手いを突き詰めた感じ

555 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

それでいて操作ミスがあんま無いからすごい

618 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

奈緒はあんまり面白くないよね

619 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

奈緒は普段あんまり面白くないよね

627 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

加蓮ちゃん言いそうだわ

633 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

でもこれ堅実ではあるけど言われてもしようがない気がする

722 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

荒木先生!

……荒木先生!?

728 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

即落ちて草

731 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

流石に凡ミスか

改めてやったらサクサクじゃないか

740 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

DSくらいが世代だろうしなあ

743 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

ヒント:64DSの発売時荒木先生は6〜7歳

755 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

>>743

嘘だろ承太郎!!?

758 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

今時の子ならそのくらいの年齢でもやるし……(震え声)

811 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

ウサミンは安定してるなあ(生暖かい目)

814 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

そうだよね

世代だもんね

816 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

(VCでやった) 世代だもんね

820 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

(64) 世代だもんね

911 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

氷菓ちゃんも楽々だなあ

923 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

紗南ちゃんレベルで上手いつてすげえな

948 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

で、コントローラー壊すって何です？

949 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

JCジョークか何かじゃね？

956 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

まあ箸が転がるだけで面白い年頃だろうしな……

967 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

見た目だけクール認定とか明らかに楓さんを継ぐ者に

987 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

うん？

989 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

何でもう一台？

998 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

まあ人力TASできるとかスレの頭にあっただけどあれマジなん？

《ひななお実況スレ2》

13 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

BUZAMA晒さないか心配

17 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

目つきが変わった

53 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

計測始めます

59 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

何だよお前のプレイガバガバじゃねえかよお前え！（先置き）

66 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

倍速入るかな……

73 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

……何してんの？

89 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

早速ガバ？

100 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ファツ!!?

108 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

え、何これは

117 会員番号774番目

20XX / XX / XX

ID :

ちよつと待てよ!?!?!?!?!?

132 会員番号774番目

20XX / XX / XX

ID :

ケツワープで

え?

167 会員番号774番目

20XX / XX / XX

ID :

何したのコレ……?

171 会員番号774番目

20XX / XX / XX

ID :

もしかして新ルート?

174 会員番号774番目

20XX / XX / XX

ID :

草生やしてる場合じゃねえ

189 会員番号774番目

20XX / XX / XX

ID :

確かSFCのマリオワールドが直接メモリをハックしてエアホツ
ケーとかスネークゲームとかができるようにする動画があったはず

それと同じ要領で手動プレイで物理ハックして外からコード書き
換えて直にクツパにとかそういう……?!

191 会員番号774番目

20XX / XX / XX

ID :

>>189

人間技じゃねえ……

199 会員番号774番目

20XX / XX / XX

ID :

氷菓ちゃんはTASさんだった……?!

201 会員番号774番目 20XX/X X/X

むしろTASさんとは氷菓ちゃんだった……？(錯乱)

222 会員番号774番目 20XX/X X/X

志希にやんもできるのかよ!!?

223 会員番号774番目 20XX/X X/X

できそう

229 会員番号774番目 20XX/X X/X

何この子たち怖い……

237 会員番号774番目 20XX/X X/X

真似できてたまるか馬鹿!!

240 会員番号774番目 20XX/X X/X

できねーよ!!

311 会員番号774番目 20XX/X X/X

次はゴールデンアイか

315 会員番号774番目 20XX/X X/X

五人プレイ……一人余り……見学……ウツ頭が

317 会員番号774番目 20XX/X X/X

アイドルは人の心が分からない

331 会員番号774番目 20XX/X X/X

人の心が分からな……ウッ

3 4 1 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

ヴオツ

3 6 8 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

今日は何人のファンが死んだかな

3 7 1 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

まあ一番の山は越えたからあれ以上は増えんだろ

3 7 7 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

1スレ丸々何も書かれてなかった時に荒らしか何かと間違われて
て流石に草生えた

4 0 0 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

氷菓ちゃんファンクラブ発進!

氷菓ちゃんファンクラブ全滅!!

4 4 0 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

砂かあ……

4 5 1 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

あれだけできるんじやそりや狙うわな

4 5 3 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

!?

4 6 3 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

いきなり二人死んだ!?

4 7 1 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

あれで狙撃できるとかどうなってんだよ!?

482 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

眼が良いとかそういう次元じゃない……

487 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

そもそも目の問題か?

これ完全に相手の動き把握してない? ID:

499 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

相手の画面見てるとか……

502 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

>>499

仮にそれでも地形全部覚えてないと不可能じゃね

そもそもこれこの位置からじゃ点にしか見えてないっていう……

509 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

ええ…… (戦慄)

517 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

頭おかC

562 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

来た!黄金銃来たよ!

563 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

無双タイムはじまた

567 会員番号774番目 20XX/XX/XX/XX ID:

奇跡のカーニバル開幕だ (AAA略)

572 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

勝ったな (確信)

573 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

勝ったなガハハ

風呂入ってくるわ

581 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

おい即死したぞ

583 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

黄金銃のスポーン地点張ってたってことか!?

やべえぞこの子

590 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

紗南ちゃんが一抜けした!?!?

591 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

アシンかよ

594 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

誰だよ見た目だけクールとか言ったやつ!

598 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

見た目はクール (思考がクールじゃないとは言っていない)

611 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

サイコか何かか

623 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

狙撃地点どんどん移動して感知されないようにして一か所ごとに
ワンキル取ってるって何気にすごくね

割と理想的な砂

6 2 7 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

戦術が殺し屋のそれなんですけど・・・

6 3 2 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

絶対に殺すという漆黒の意思を感じる

6 3 8 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

人間というよりは機械のそれに近いよね

コワイ!
6 4 0 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

白河氷菓ターミネーター説

6 4 5 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

まさか高峯のあターミネーター説に続ける人間が出るとは...

6 4 6 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

>>645

続いているのかそれ!?

6 4 8 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:

まさかロボット疑惑が二人に増えるとはこの海のりハクの目をも
もってしても

@ 一週間後 @

《ひななお感想スレ334》

213 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

今回のゲスト

三好紗南

白河氷菓

テーマは「最新ゲームを遊ぶ」

222 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

結論から言うと氷菓ちゃんはターミネーターということですか？

223 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>222

FA

224 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

あんな残虐プレイを平然とするとは露ほども

露ほども 225 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

パリイ

グシヤア

パリイ

グシヤア

パリイ

グシヤア

226 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

紗南ちゃんと一緒になってネタ装備×2で走り回ってるのにガン

ガン敵が溶けていくのがしゅごい

2 2 7 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

今夜は俺とお前でダブル竜体して無双し始めた時はちょっと何のゲーム見てるのかと思ったよ

2 2 8 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

TFの感想が完全に食われてる……

2 2 9 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

だってゴールデンアイで見たのと似たような展開だったよ
主にどっかのゴルゴのせいで

2 3 0 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

熱帯であんなのに出会いたくねえ……

2 3 1 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

本体狙い↓タアン

CPU狙い↓タアン

TFスタンバイ↓TFスタンバイ返し

どうしろってんだあんな糞砂(誉め言葉)

2 3 2 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

味方だと極めて頼もしいが敵に回すと死ぬ

ちよつと強キャラすぎませんか

2 3 3 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

紗南ちゃんが対抗できてるからいいんだ

2 3 4 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

二人がコンビ組んだ時がね

235 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

でも現実の方は弱キャラなんだよね……

236 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

これがネット弁慶ってやつか

237 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

でもネットでくだまいてるダメ人間と比べると働いてて年収あつてかわいいネット弁慶ぜ？

その事実を理解した俺は死んだけどお前らはどうなの？

238 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>>237

やめろ

やめてください

239 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>>237

気軽に死後の世界から戻ってくるんじゃない

240 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>>237

流石にニートを公言するやつはネタやろ

まあ俺は年収でも負けてるんだがな……

241 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>>240

やめろや!!!!
!!!!1!!!!

57：雪の中で春を待つ

年が明けてから放送された「FROST」第二期は、賛否両論と困惑と祝福をもって迎えられることになった。

否と困惑の理由は、主にコオリ関係。何で生きてるのか、という理由が説明されないままに一話が終わってしまったからだ。

オマケにコオリは第一期で起きたことを全て忘れている上に、最後に挿入されたのは意味深な悪事っぽいシーン。胃を痛める視聴者が続出した。

賛と祝福の理由としては、作風全体に関わることだ。

第一期のメンバーを主軸に据えることは変わらず、安易に新キャラを加えずに「第一期の続き」として製作されたことは、前作からのファンを大いに喜ばせた。

あくまでトライアドプリムス三人（人間役）＋ピュアリーテイル三人（人外役）という構成は変わらず、身近に起きた超常現象を調べる……と、下手にスケールを大きくしなかったことも、視聴者からは良い印象を持って受け入れられたようだ。

……で。今日はその「FROST」の撮影の日。

外は生憎の——というか、ある意味これはこれで幸運なのか——雪模様。都合がいいということでもコオリの登場シーンを先に撮ることになった。

「♪」

童謡を口ずさみながら、無人の道を歩いていく。

目線はどこにも向けることなく、虚無的な印象を与えるように。一見するとスキップしながら——あるいは踊りながら進んでいるように見せて、その実何も感じていないように。

再びこの世に現れたコオリというキャラクターは、過去の経験が全て無かったことになっている。アリスと出会って遊んだことも、リン

に憎しみを向けられたことも、人を慈しんでいたことも、全てだ。

脚本さん曰く、あくまでコオリⅡ雪女とはその季節ごとに現れる「現象」なのだから。

人間ではないからこそ蘇ることができた。けれども、外的要因によつて一度消滅してしまったため、経験が引き継がれないままになつてしまった……のだとか。

なんだか少年漫画の設定のようだと感じたけど、まあ伝奇モノつて多かれ少なかれそういう要素は含むものだし、特に気にすることじゃない。

問題があるとすると、その先だ。

カットがかかった後、まずは脚本さんのところへ行つてみた。

一発OKについて褒められる……けど、いつものことで褒められても白々しく思うくらいだ。それよりも、と本題を切り出す。

「二期の終わり方、どうなるんですか？」

「やっぱりそれ聞かない」

「二貫性のある演技をしたいので」

——そう。このFROST二期、現在の時点で終わり方が決まつてない。

今撮っているのは六話。1クルの放送予定だから、残りは六〜七話。流石に着地地点が見えてこないといけない頃合いだ。演出のため、出演者にあえて本番ギリギリまで伝えないということもあるだろうけど……。

「今上層部の方でも意見が割れててね、安易にこうとは言えないんだよ」

「あれ。そうなんですか？」

「ウケが良かっただけにね、二期だけじゃなく三期もどうかと言う話が出ているんだよ。しかし、じゃあ『はいそうですね』というのはよろしくない」

「っていうのは?」

「長期化すればするほど良いものが出来上がるわけじゃない。むしろ、適度なところで切り上げた方が物語として収まりが良いこともあるわけだ」

「売れるかどうかも問題だ、と続けて、脚本家さんは文字通り眉間に皺を寄せた。

「実に悩ましげだ。なるほど、確かにそういう話はある。人気漫画が会社の都合で終わらせてもらえないだとか、人気のドラマがやけに引き延ばしが多いだとか。それで実際売れるのは間違いないらしいんだけど、ボクらが撮ってるFROSTの人气がそれに並ぶほどかと言うと……流石にちよつと首を傾げてしまう。」

「ならスパッと終わらせた方が、ボクは良いと思いますけど」

「だよなあ……」

「ちなみに、今どういうラストを?」

「記憶を取り戻してハッピーエンドか、新しい思い出を作ってビターにベターなエンドか、それとも、『これまで分かり合っていたとしても、分かり合えないものもある』というテーマを示すために決裂させて終わるか」

「……上の指示によってそのどれかになると」

「分かっているじゃあないか」

脚本家さんはにやりと笑った。多分に自嘲の色を含んでいるように見えたことは、気のせいではないだろう。

「脚本担当としては、どれがいいんですか?」

「安易すぎるハッピーエンドはねえ。あんまりにもご都合主義が過ぎちゃあいけない。あくまで別個体として、人間と理解しあうようなエンディングが良いと思ってるよ」

「けど、そうできるとは限らないと」

「そうそう。どれだけ自由にやりたくとも、社会のしがらみがそれを許してくれんこともあるんだよねえ」

……なるほど。自由と言うからには、そういうものもあるか。

今のボクはプロデューサーのおかげである程度自由に色々やれるけど、ちよつとボタンを掛け違えばそういうことも十分あり得る。それどころか、これからプロデューサーが替わったり、事務所の方針が変わったり……そういった要因で、色々なしがらみが生まれるということは十二分に考えられるか。

今の仕事については、当然、全力で取り組む。それはそれとして、万一の時の備えはしておいた方が良さだろう。

……まあ、346プロダクション自体が大企業だから、活動の心配はしなくていいだろうけど。それでも専務もいつまでも専務のままじゃないだろうし、プロデューサーたちだって昇進くらいはする。ボクらが芸能活動をしている間に、どれだけ現場の人間が入れ替わるかもわからないし……うん。

「独立……」

ボソツと呟いた一言に、現場の人たちがビクビクビクツ！ と震えあがり立ち上がり、こちらを二度見三度見しては驚愕の表情を浮かべていた。

……いや違うんです。違うんです、そういうんじゃないんです。確かに最終的にそういう方向もありうるのかなと考えていますし、つい呟いちゃったけど今すぐそうする気は一切無いんです。問い詰めに来た人にそういう説明を試してみてもなかなか受け入れてもらえなかつたり疑われたりはしたけど、なんとか納得してもらって收拾がついた。

人間の意思疎通って、難しいね……。

@ — @

一月にしては暖かな陽気のある日のこと。春フェスも近いため、ボクは一人、レッススルームで自主レッスンに励んでいた。

重りを身に付けて長時間ダンスして歌う、ライブ用のトレーニング。ごく簡単なことに見えるけど、これが意外なくらい効果がある。何がそんなに効果があるって……その、要は基礎体力つけるためのトレーニングだから、元々の体力がゴミのようなボクにとっては、これも大きな躍進と言える（当社比）。

そして何よりこのウェイトトレーニング、何に一番効果があるかって言う……。

（これが……これが40kgの世界……！）

ボクのモチベーション維持にもんのすごい効果があったりする。既に汗はだつくたく、息切れも激しいのだけど、それでもこう、ちよつと楽しい。これから頑張ればこのくらいの体重にくらいはなれるかもしれないわけだし、その感覚が分かるだけでもなんといいか嬉しい楽しい。

「ふふっ……くくくっ……おぶえっ」

——なお、体力がもつというわけではない模様。

吐いたわけじゃないけれど、体力が底をつくのも久しぶりだな……なんて思いつつ、ボクは床に突っ伏した。

「おはようござー……死んでる……」

「生きてまーす」

出入り口から聞こえてきたけだるげな声に振り向くと、杏さんが面倒臭そうな表情で立っていた。

確かにボクがぶつ倒れてるのを他の人が見たら、まあちよつと面倒

臭く思われるのは分かってるけど、そうも露骨に表情に出さないでく
れると嬉しいかな。

「何してんのさ……」

「自主レススンしてたら体力が尽きて……」

「氷菓ってダメな方向にマジメだよね」

「あう」

事実とはいえ、その表現はちよつぱり傷つく。

そっかー……ダメな方向かあ。まあ言われ慣れてるしいいや。

全身の重りを取り外してその場にごとりと置くと、杏さんは何やら
異質なものを見たような表情をしてみせた。そこまでか。

「杏さんも自主レススン？」

「ん……や、別に」

と言いつつ、動きやすい格好で来てるように見えるんだけど……
ま、いいか。いちいち追求するのも野暮だろう。

「そだ、氷菓、錬金術でちよちよいと杏のクッションとか出してよ」

「しばらく足押さえてってくれるならいいけど……」

「えー……何すんのさ？」

「腹筋。筋トレしなきゃいけないから」

「おおう……まだするんだ。体力尽きたのに？」

「喋ってる間にちよつとは回復したから」

膝を立てて寝転がり、足元にビーズクッションを錬成する。仕方な
いなあと言いたげに杏さんはビーズクッションを枕にして寝転がり、
そのまま自分の足でボクの足を固定してくれた。杏さんもなんだか
んだですごく面倒見良いよね。

「氷菓はあんまり要領よくないよねー」

「そう、かな？ ……っ、ふんっ、そう、かも……？」

「喋るかどつちかにしなよ」

「んっ、ぐっ。ごめんなさい……でも、そんなにかなあ？」

「杏が氷菓だったら絶対ひよいひよい肉体改造してるね」

「あー……ボクも考えたこと無いワケじゃないけど」

「けど？」

「結果だけ求めて失敗した人を見たから、こういう過程を無駄にしちやいけないって思っつて」

「あっ……ふーん……」

杏さんもあちらの世界に行つたことのある一人だ。当然、ボクの事情についてはある程度話してるけど、それで色々察したんだろう。杏さんは苦笑いを浮かべていた。

いや、でもほんと、過程って大事だと思うんだよね。

「それにしても氷菓のそれ便利だよなー。杏も使えたりしない？」

「超短期コースで一年あれば」

「勉強時間は？」

「一日九十六時間？」

「限界突破してるんだけど」

「タキオン粒子を充填した特殊な部屋を作っつてね？」

「やめとくよ」

「それがいいよ」

開祖様は、あの天賦の才を錬金術に全振りして、体を乗り換えた……後、更に研鑽を積んであの実力に至つたという。杏さんも才能は飛び抜けてるわけだし、一年……いや、半年あれば、体を乗り換えることくらいはできるようになるかもしれない。

なおボクの例は流石に倫理的にヤバすぎるので置いておく。

「あ、氷菓が養ってくれればいいんじゃない」

「ホントに必要が出てきたらね」

「ケチー。あ、なんかすごい今の扶養者っぽい」

「扶養者て」

「具体的に言おうとママ」

「ママて」

「ママ味を感じる」

「ママ味」

「あじ」

「み」

「み派め……」

しかしよりもよって一番ボクから遠いところにある存在をチヨイスして来たな。

「そんなものがどこに……」

「そこそこ面倒見良いところかあるじゃん。人当たり良いし、施設の子供の面倒とかも見てたんっしょ?」

「まあ」

「そういうところ」

「そんなもんかな……ふっ、よし、終わり!」

「お疲れー……んあ、思い出した。そうだ、氷菓。あのあれ、GE3のさあ」

「うん。うん?」

腹筋を終え、軽く伸びをしながら杏さんの会話に応じようとする
と、ふと外から何かが駆けてくる音が聞こえた。

無意識的に構造解析してるからなんとか感じ取ったけど……これ、
誰だろ? えーつと、志希さんかな? 何で?

「ひよーかつちやあああああああーん!!」

「ぐえええええーっ!!」

「氷菓ーっ!!」

と、思っていたところで、だった。

勢いよく扉を開いて現れた志希さんが、その勢いのまま思いっきりボクを目がけてダイビング。お腹あたりをハスハスしながら勢い任せにそのまま押し倒してきたのだった。

あ、流石にこれはヤバいと気づき、杏さんと志希さんしかいないことを確認すると同時に、押し倒されるその地点に柔らかいクッションを錬成。頭を打ち付けることだけは免れた。お腹あたりからスライドして今度は胸元に顔をうずめられたが、もう志希さんだからということ諦めた方がいいだろう。

「お、おおう……何だいきなり志希ちゃんそんないきなり……キマシ？」

「絶対違うと思う……ヴオエツ」

アカン。体力尽きたのと合わせて軽く死ぬる。うぐぐ……。

「あたしに才能を分けてくれえ……」

「うちの事務所の天才筆頭が何かほざいてますわよ氷菓さん」

「おほほほそういうこともあるんでござあばあああああああ
！」

「ウェイツ！ ウェイツ志希ちゃん！ 氷菓死ぬ！」

「真面目に聞ーいーてーよー！」

真面目に聞きたいのはやまやまなんだけど、本当に真面目な態度で聞くべきかどうか迷うところだ。なーんかこう……結果、特に意味無く話が終わった……とかありそうなんだよ。だって志希さんだし。

「聞いている聞いている。あーあ……本気で焦って疲れたよ……」

「うちの志希さんがごめん杏さん」

「いいけどさー……何なん急に？ 志希ちゃんこういうキャラじゃないよね？」

「ん……それがさー？」

話を聞くと、どうやら極めて珍しいことに、志希さんはスランプに陥っているようだった。

志希さんが、スランプだ。この時点でもう目を見開かんばかりだけど、話を聞くうちになんとか状況を整理することができてきた。

なんでも、今度全体曲の「つぼみ」を歌う選抜メンバーに志希さんが選ばれたらしく、今日はその打ち合わせと練習に向かったのだという。

他のメンバーは、楓さん、みくさん、周子さん、相場夕美さん……で、合計五人。いつも通りやっていつも通りに成果を出していつも通りに終わるといふ光景を想像していたはずが、まさかの志希さん大苦戦。

曰く。

「リリカルすぎてノリだけじゃ歌えないよ……」

とのこと。

志希さん苦手なものあったんだ……という思いと同時に、まあそうだろうなという思いも同時に湧いてくるという不思議な感覚を味わった。

ある意味流石だ。

実際にサンプルを聞いてみると、更にその理由が分かる。なるほど、志希さんが苦手って言うわけだ……。

「このテのって氷菓得意なんじゃないの？」

「得意か得意じゃないかで言えば得意だけど」

「だけど？」

「果たしてそれが志希さんに合うかは分からない」
「あー……」

ある程度考え方に似てる部分があるとは言っても、それでもやっぱ感性だったり捉え方だったりと違う部分はある。ボクの教え方を気に入ってくれるかも問題だし。

……まあ、うだうだと言う前にやってみるのが一番いいか。案ずるがより産むが易しってやつだ。

「とりあえずやってみようよ。それで色々問題点とか洗い出せるかもしれないし」

「ん〜」

「なんか不満そうだけど」

「あんまりカッコ悪いのひよーかちゃんに見せたくない」

「子供か」

「ボクも散々カッコ悪いところ見せてるんだからいいでしょ」

というわけで、やや強引に志希さんの自主レッスンに付き合うことにした。

杏さんは付き合わされるのをちよつと嫌がってたようだけど、飽き出し出すとしようがないにやあなんて言いながらそのまま手伝いの準備を始めてくれた。同じく「つぼみ」の練習をしに通りかかったみくさんは、専売特許を奪われショックを受けていた。ただだいたい思ってる意味と違うと思う。

「とりあえず、みくちゃん杏ちゃんひよーかちゃんの意見が聞きたいんだけど〜」

「何でナチュラルにみくも混ぜられてるんにや」

「まあまあ、みくさんの練習にもなるし、ユニットだし」

「そーゆーワケだからヨロシク!」

「志希チャンはもうちよつとちゃんとお願いする態度になろうにや

!？」

イジれる人が増えたせいかな、志希さんもだいぶ機嫌が良くなっている。

問題はこの機嫌がどれだけ維持できるかという話だ。みくさんをイジって、機嫌を維持するんだ。

くふっ……。

「氷菓ー今何考えた？」

「大したことじゃないよ」

「どこまで信用していいんだろうね杏は」

全面的に信用してくれていいよ。本当に大したことじゃないから。

「それで、実際志希チャンは何ができなくて悩んでるのかにや？」

「できないわけじゃないんだけど……なーんか納得いかない」

「根が凝り性だからね」

「あー、周りから見ても大丈夫じゃんって思ってもか」

「そそ。ボクもそういうところあるし」

ある意味で完璧主義って言うのかな。自分に妥協を許さないというか。普段があだからあんまりそれらしく見えないかもしれないけど……実験も調剤も、1ナノグラム単位での精密な作業を必要とする。そういう部分で影響はあると思うんだよね。

「じゃあ、まずはちよつと志希さん歌ってみてくれるかな」

「ん〜」

音楽が流れるのに合わせて、志希さんが歌いだす。

相変わらず上手いことは上手い。ノリと勢いだけで技法がほとんど完璧に近いというのも恐るべき話だけど、志希さんはそれができる

人だし、今までもそうしてきたのだから、言うことは無い。

けれど、歌声を聞いてみると、確かにいつもと違って少し辛く感じる部分が多くある。必要無いところで勢いにノせようとしてしまったり、ついつい力を入れすぎてしまったり……なるほど、志希さんにしては、この感じはちよつとおかしい。

上手いことは上手いんだ。けれども、いつもの精彩を欠いてる。そんな感じ。CDや何やを買って「いつも」の志希さんを知ってるよな人なら、絶対にこの違和感には気付くことだろう。

「どうだった?」

「んー……やっぱりなんかいつもの志希チャンと違う感じかにや。上手いとは思うけど……」

「右に同じく」

「技術ばつかりに終始してるのはあるよね。普段の調子が出せないからって言っても、もう少し表現できるものはあると思うよ」

「辛辣」

「教えてって言われてるんだから、多少はね」

ただ、問題はその表現できるものとは何かというところだろう。

歌詞から解釈できることは色々ある。例えば旅立ち。例えば感謝、夢、未来へ歩むこと……変な言い方すると、卒業ソングにも近い。

あとボク的には歌詞で時々「空」がフューチャーされてるっぽいのが気になるしそういうの大好きなんだけど、とりあえず今は置いとこう。

「志希ちゃんは頭良いから小難しく考えるよねー。もつとそのままあのまままで考えりゃいいのに」

「どゆことにや?」

「杏みたいにもうちよつと楽になつてみよ、つて話だよー」

「余計分からんにや……」

「んにやでもだいたい分かるよ?」

「分かるのにや!？」

「うん。要は小手先の技術にばかり拘ってないで、感じたままを歌うのがいいって話」

なお小手先の技術が必要ではないというわけではない。

「無意識的にも意識的にも、志希さんは多分歌詞やメロディーを見たら、だいたいどういう曲かっていうのはぼんやりとでも見えてるはずなんだ」

「氷菓ちゃんは志希ちゃんのこと信頼してるんだにやあ……」

「友達だから」

「氷菓の『友達』発言の無駄な重さについて」

「わかる」

変なところで理解を深めるのをやめなさい。

確かにボク自身ちよつとそういう傾向があるのは理解してるけど今は置いときなさい。

「杏思ったんだけど、それでも何か出せないってんなら、何か心理的なものでもあるんじゃない?」

「心理的な……って何にや?」

「ボクで言えば実親みたいな」

「ドギツイ例え出すのやめるにや!」

「あくでも何か分かる気がする……そういうのが必要な時ひよーかちゃんは どうしてしてるわけ?」

「別のもので埋めていくよ。先生とか、おじじとか」

家族愛を歌う歌も時にはあるわけだし、そういう時は施設のみんなのことを考えるようにしている。

親への感謝を伝える歌の時は先生とおじじを。そういう風に、欠落したものを埋めてくれる存在は必ずいる。

前から志希さんとは時々シンパシーを感じていた。本人もほめかすような発言しかしてないから確実ではないけれど、志希さん自身も、親と上手く行ってなかったというのは……多分、間違いない。

志希さんの名前の一文字。「つぼみ」という歌が表現しようとしている、未来への「希望」。何か関連性がある……かもしれない。

いずれにしても、どうしても過去を思い出してしまつて躊躇いが顔を覗かすのなら、その時は……今、志希さんが持っている「希望」というものを思い浮かべてほしい。

それが、ボクたち346プロダクションに所属しているアイドルの仲間や、プロデューサー、友達……だったりすると嬉しいな、というのは……ちよつとしたエゴかもしれないけど。

「にやーるほどねー」

「ちよつとでも何か手がかりになればいいけど……」

「んーん充分充分。希望を見せてくれた人は、いっぱいいるもんね♪」

そういう意図を読んでか、それとも単に吹っ切れただけか。志希さんはいつも通りの笑顔を覗かせながら、朗らかにそう言った。

ほんのちよつぴりだけ張り詰めていた空気が、緩んでいくのを感じる。

これでやつといつも通りだな……と思う一方、問題が何か解決したかと言われると、そうでもないわけで。

その後は、みくさんのダンスレッスンも交えて四人で適度に自主レッスンをこなしていくことになった。

志希さんは何か吹っ切れたらしく、一時間も練習を重ねれば、それだけでおおむね理想形の歌声に近づいていった。

なお、みくさんがダンスをちゃんと習得するまでにはその数倍の時間を要した。

……いや、それが本来普通なんだけどさ……。

58：黒くて甘くてほろ苦い

今年の一月、確信を持って言えるのは、一番のハイライトがしゅがはさんと菜々さんがかくし芸大会で「スリル」を歌ったことだろうということだ。

346プロダクション新春かくし芸大会。定期的に行われているらしいそのイベントに出場したボクらは、そこそこのかくし芸を披露できていた。

例えばボクはダイススタッキング。カップの中でサイコロをどんどん積み上げていくという技術だけど、これを応用して、積み上がったダイスを回転させて披露してみたら、これがまあそこそこウケた。

晶葉がネコミミを装着して、円盤型の巨大お掃除ロボットに乗って出てきたと思ったらそのままハケてみたり、ヘリウムガスを吸った志希さんがそのまま一曲歌い上げてみたり、美玲さんが両目に眼帯つけたり、輝子さんが想定外の可愛い歌を歌ったり……。

色んな盛り上がり要素はあったものの、やはり最高に盛り上がったのは菜々さんたちだった。

詳細は省くが、全面的にボクらの敗北だ。

きつとボクらにあのインパクトを超えることはできないだろう。

さて、ともかく……もう二月だ。

春フェスまではあともうふた月。今月もイベントは目白押しだが、直近の出来事はどうと、節分……ではなく、バレンタインだ。

世間の関心、というかアイドルの仕事としては、どうしてもそっちの方が比重として大きくなる。節分も勿論大事な行事なんだけど、やっぱりお仕事としてはね……節分の方は、むしろ歌舞伎役者の方だったり相撲関係の方だったりと、伝統芸能に携わっている方々の専売特許みたいな印象があるのも大きいし。

まあ、ともかくバレンタインだ。

二月はじめ、学校にやってきたボクらはだいぶ辟易していた。

「やっぱり学校はチョコくれの大合唱か」
「れすね〜」

まだあと十日以上はあるというのにこの有様。もう少し彼らは堪え性というものを持った方がいい。

施設のお兄ちゃんが言ってたことではあるけど、「男は見栄を張るもの」だという。ボクもそれは理解できるし実際その通りだとも思うんだけど、学校で欲しい欲しいと言ってくる男子はそういう部分の遠慮とかは無いのだろうか。もうちよつとこう……あるじゃん、当日になっても言わないとか、気付かないフリするとか。

「もうちよつと……個人的には催促されない方が、ボクとしては『じゃあ作ってこようか』って気持ちになるんだけど」
「そうれすか？ 七海は作ってーって言われた方が作りやすいれすけろ〜」

「ガツつかれると怖いし」
「あ〜」

素のボク自身は相当か弱い。

迫られたら押し返そうにも手の方が先に壊れそうだし、押し倒されたらそのまま色気のあるムードになる前に押しつぶされて死ぬだろう。筋トレはしてるけど、それじゃあ全く足りない。だからこそ、こうやって前に前に出て迫ってくるような人たちはちよつと怖い。身近にいる人たちが比較的紳士というのものもあるし、ちよつと免疫が無いのかなあ。

そんなことを思いながら廊下を歩いていくと、くるみさんの後姿を見かけた。

「あ。おーい」

「あ、おはよお〜……」

「いつもよりぷるぷるれすね」

「ぶるぶるう!?!」

「お山^{そっち}じゃなくて体全体が」

……理由はだいたい想像できるんだけど。ボクと同じようにチョコくれ攻撃に遭遇してしまったんだろう。臆病な性格のくるみさんだから、だいぶ委縮してしまったようだ。気持ちはすごく分かるけど。

「くるみちゃんはクラスのみんなにはチョコ渡すんれすか?」

「あんまり渡すたいへんってぷろでゅーしゃーに言われてるから……どうかなあ?」

「際限なくなっちゃうからね」

特定の男友達だけに渡すと、当然不満が出る。それを防ごうと思つたらクラス全員に渡すことになるんだけど、そうするのは流石に手間なんてもんじやない。市販のものを買うにしても、相当な出費が予想される。

……錬成すればそれで済むことではあるんだけど、そこはそれ。いざやってみたら「それどこで買ったの?」とか「いつの間にそれだけ作ったの?」という疑問をぶつけられてしまうだろうことは、想像に難くない。というか前に似たようなこととして聞かれた。誤魔化すの難しいんだよね、あれ。

周りを見ると、どうにもギラギラした視線を向けられている気がする。いや、ほぼ確実に向けられてる……。

そこまで欲しいか、なんて思ったけど、ボク自身の状況に置き換えて考えてみればいい。楓さんからチョコが貰えるとなったらどうするだろうか。そんなもん大ハッスルに決まってるだろう。

「……ボクはちよつと頑張ってみようかなあとは思うけど」

「珍しいれすね?」

「まあ、思うところがあつて」

「誰にあげるのお?」

「とりあえずクラス全員……?」

「頭れすね」

「色々端折ってまず頭の調子が悪いことを結論づけるのはやめようか」

七海ちゃんは時々ものすごい切れ味の暴言を投げ掛けてくる気がする。

いや分かっているよ、それだけアホなことを言っていると。とりあえずでクラス全員分作ってくるなんて、正気の沙汰じゃない。

でもなあ……実際このくらいしとかないと後でしこりが残りそうだしなあ……。

「でも氷菓ちゃんがやった以上、七海たちもやらないと不公平らと思われること考えてますか?」

「……あつ」

「氷菓ちゃん……」

ごめん七海ちゃん。ボク本格的に頭ダメだったかもしれない。

そうだよ。そりやそうだよ。同じアイドルだからできるでしょ? やってくれるよね? とか言われてもおかしくないよね。

となると、もういつそ親しい友達に友チョコ渡す程度で終わらせた方がいいんだろうか。いいんだろうな……。

「まあそれはそれとして、作ることは作るわけだけど」

「プロデューサーたちれすね」

「あと下の子たちと……先生とおじじと……」

「けっこういるねえ……」

「そこは、うん。しようがないよ」

クラスメイトの中にも応援してくれてる女子生徒なんかもあるし、

その人と……前の学校の友達にも渡さなきや。

……あ、でもその友達の中に一人男子いるけどいいかな……良くはないか。みりあちゃんじゃない方の赤城さんをお願いして、ついでに持って行ってもらおうようお願いするか。

「別に作るのが嫌ってわけじゃないしね」

「七海にもくらすい」

「いいよ。交換しようよ」

「くるみも……」

「うん、三人で交換しよ」

「あ、ううん、じゃなくって、お、お料理教えてほしいなあ、ってえ……」

「あ、うん」

そつちか。いや、どつちにしたって問題無いけど。全員寮生だし。

そんなこんなで、今度また三人でチョコの材料を買ってこよう、という話をした後、それぞれの教室へ戻っていった。

ボクらは二年三組の教室へ。くるみさんは——三年の教室へ。

……時々忘れかけるけど、くるみさんって今年生なんだよね。誕生日が三月三十日で早生まれだから。

ともかく、友チョコを作ることとは決定。あとは渡す相手だけ……まあ、思いつく限りでいいか。普段そこまで親しい間柄でなくても、これを機に親しくできる可能性はあるし。

とりあえず……七海ちゃんは、魚型チョコ……いや、それじゃダメだ。そこまで納得しない。じゃあ魚をそのまま使うかと言われると、それもまた違う気がする。バレンタインなんだ。チョコは使うべきだ。

パッケージがそのまましやもなチョコが売ってたけど……あれは、多分他の人が買ってくる。そうになると、ボクが渡すべきは……。

「うーん……」

「何か悩んれますね」

「愛媛に行くのがいいかな、それともこつちにあるかな……」

「氷菓ちゃんがこんならから七海の思考も飛躍してくんれすよ」

「ごめん。愛媛のチョコブリ買ってこようかなと思って」

「ああ……」

チョコブリ、とは言うが、別にブリの身にチョコをかけたたりしたもののじゃない。出荷前の一定期間、餌としてチョコレートを与えられた養殖ブリのことを言う。

このブリは鮮度が長く保てるらしく、基本的には海外向けに輸出されている……という話を聞いたことがあるが、実際のところはよく知らない。あくまで小耳に挟んだだけだ。

なのでちよつと調べてみようと思つた……んだけど、魚関係なら下手に調べるより七海ちゃんが一番よく知つてる。贈る本人に聞くのもどうかと思うけれど、そこはより良いものを贈るために受け流してくれるはずだ。

「お寿司屋さんに行かないとダメれすかね……あとは四国の本場に行けばあるとか……」

「そつか……うん、分かつた。ありがとう」

「無理しちやらめれすよ？」

「分かつてるよ」

流石にボクがそのまま四国に行ったりはしない。ツテを辿るだけだ。

具体的に言うとおじじ経由で村か……いや、頭の中でも計画を練ってしまふと、崩れた時が怖いな。後でおじじと話してからにしよう。

……それにしても、友チョコかあ。

今までそういうことに対してあんまり縁が無かつたけど、こうして貰えるとなると、やっぱり楽しみに思えてくるよね。

去年……も、まあ、貰つたけども。お返しもしたけども。今ならも

うちよつといいものでお返しができるかな、とも思う。
うん、楽しみだ。

何せボクのキャラ自体そうだし、前々からラジオや何やに出演した時には必ず「チョコならアイスが欲しい」って宣言してるしね！

きつとみんなチョコアイス選んでくれるはずだしね！ ふふーん！

@ ————— @

「白河さん友チョコでチョコアイス貰うの禁止ね」

「カ。ッ!？」

「しつかりしてください氷菓ちゃん！」

後日。プロデューサーに呼び出されたボクは想定外の一言を浴びせられることになった。

馬鹿な……き……禁止だと……!？

ありえていいのか、こんな横暴が……!？ こんな……こ、こんな……!!

「おのれええええええええ……」

「一応聞くけどね、白河さん。昨日食べたアイスは何個かな？」

「……………むいっつ」

「言つとくが三つでも六つでもこの時期なら大差ないからね？」

「じゃあ六つでもいいんじゃない！」

「どっちも大差なく悪影響だからやめろって言ってるんだが」

むう。プロデューサーも言うようになってしまった……。

まったく、そういうことなら仕方ない。けどね、プロデューサー。

「…………でも、貰わなかったら勿体ないじゃない？」

「安心してくれ。みんなにも白河さんにアイス渡すの禁止って伝えて

ある」

「ぐわあああああああーっ!!」

「氷菓ちゃん!」

尋常ではない精神ダメージに膝が折れる。

く、くく……ボクの思考パターンをよく読んで……。流石プロデューサーだと褒めてやりたいところだあ……。

肇さんがボクの手を取って起こしてくれるけど、ダメージは深刻だ。まさかまたしてもアイスを禁止されるなんて……!

「一応言っておくけどコレ、白河さんの普段の素行の問題だからね?

アイス限定で」

「アイス限定の素行というお話も、少しおかしい気がしますけど……」
「分かってる。分かってるけどこう表現する以外に無いんだ……」

……そりやあまあ、普段はアイドルとして問題無いような行いを心掛けてるし。

日々の言動は元より、ネットでの発言もできるだけ。服装も必要程度には整えるようにはなった。外から見る限りでの問題行動と言え
ば、まあ、アイスの食べすぎ……だろうか。

しかし食後、食間くらいならいいんじゃないだろうか。アソートに入ってる小さめのやつだぞ? 夏の頃、朝起きた後、十時、昼食後、三時、六時、夕食後、風呂前、風呂後……あと適宜、というかたちで一日十本食べてた時と比べれば相当少ないはず。うん。

「ただそのアイスに関してだけ、飛び抜けて頭が悪くなる場所は本当にどうしようもないからな……」

「こう言ってることですし、氷菓ちゃん、もう少し抑えましょう……?」

「……努力はします」

玉虫色の回答でお茶を濁した。

良くないかもしれないということは何少でも理解している。が、すぐに改善できるようなことならボクは今こうして説教なんて受けていない。あんまり直す気が無いというのもあるけど、やっぱりね、こうね、好物つてね……あるじゃん。ほら、身近なところで言うとな子さんみたいなの。

ボクからアイスを遠ざけようというのは、法子さんにドーナツ断ちさせるようなものだ。

何はともあれ、と、プロデューサーは改めて手元の資料に視線を落とした。

「さて……今日二人を呼んだのは、別にお説教のためじゃない。仕事についてだ」

「どういった内容でしょう?」

「藤原さん、というか藤原さんたち、ミラ・ケーティの方だね。今度衛星放送の方で冠番組をやってみないかって打診が入ってる」

「本当ですか!」

「内容としてはグルメ番組。スタジオ収録じゃなくて外でやることになる」

「外でつて、アウトドアつてこと?」

「とはちよつと違うかな。色々なことを体験しながら、料理も味わつていく……みたいなの」

「農作業や、釣りを……ということでしょうか」

「そういうことだね」

なるほど。だいたいわかつた。たまにあるよね、そういうパターンの番組。

問題は、方向性として農ドルと言われるようになりかねないところだけ……まあ、そこはプロデューサーがコントロールしていつてくれるだろう。たぶん。きつと。めいびー。

「で、白河さん」

「うん」

「まず一つ、映画の主演のオフアアがありました」

「嘘お!？」

「わあ……やりましたね、氷菓ちゃん!」

「う、うん。やった……けど、なんだろ。実感無いや」

嬉しい……ような、こそばゆい……ような。オーディションに出たりしてないのに仕事に来てるから、ちよつと複雑な感じ。

一応、ボクもオーディションには出るようにしている……のだけど、基本的には本当に最低限程度にしか出られない。

346プロという、自社で仕事を回せるという特殊な環境だからと言うのもあるし、ミニライブやイベントに注力したいという方針もあるし……何より、プロデューサー曰く「あつちからオフアアをくれることが多い」のだとか。おかげでチョイ役やサブヒロイン役のオフアアは、実写とアニメ問わずちよくちよくやつてくる。

メインヒロインよりもサブの方が映えるというのが、FROSTの脚本の方の談。演技であまり自己主張しないのが良いのだとか。……だからこそ、主演というのがちよつと気にかかるわけで。

「それって、どんな映画?」

「高校のプラスバンド部が舞台の青春映画らしいよ」

「それボクが主演で大丈夫なやつ?」

髪を軽く弄りながら問いかける。

知っての通り、ボクの髪はおよそ日本人らしくない。だからこそ、役としてコオリやブランが上手くハマるようなことがあったわけだけど、それなりに現実に即している……いわゆる学園ものとか、青春映画とは食い合わせが悪いことだろう。

「……あ、髪染めりやいいのか」

「その髪を染めるなんて勿体ない!!」
「うお」

「プロデューサー、声が大きいです」

「あ、ああ、すまない……いやけど、それも含めて白河さんの持ち味だ
と思うんだ。安易に染めても色を落としても痛むだろうしな……」

「そっか……うん。分かった。けど、だったらあんまり学園ものと合
わないと思うよ、ボク」

「ウィッグはどうだい？ でも、色味が自然じゃないか？」

「ウィッグ……あ、そっか、その手があるか」

「そうだ、ウィッグだ。あれなら、ボク自身が錬成すれば自然な色味
というのも再現できる。」

モノがモノだけにオーダーメイドしたと言えば、ある程度出所は誤
魔化せるだろうし……お父さんが美術会社を経営してまして、という
話に持っていけばその辺の信憑性も高まるはずだ。

「ちょっとおじじに相談してみる。注文とかもできるかも」

「分かった。藤原さんもそうだけど、まだオファー段階だからそこま
で具体的な準備はしないようにね。もしかしたら話が流れることも
ありうるから」

「分かったよ」

「はい」

「で、話の続き。白河さんだけど……海外ロケとか、行けるかい？」

「海外?!」

「唐突ですね。どこになるんですか?」

『『FROST』第二期放送記念、『氷の妖精と行く北欧ツアー』……つ
ていうお題目で、ノルウェー観光の旅に」

「企画した人はアホなの?」

「そこは否定できない」

わざわざそのためだけにノルウェーって……。

いや、ノルウエー自体はいい国なんじゃないかって思うよ？ それ
はそれとして何故ノルウエー。一応日本の妖怪なんだから東北とか
北海道がいいんじゃないだろうか……。

「参加者は？」

「調整中。多分輿水さんは来ると思うけど」

「幸子さんか……」

「幸子ちゃんですか……」

この番組ネタ枠だ。

知ってるぞ。あれだろ。KBYDさんほとかの企画の一部とかそ
ういうアレだろ。もしくははとときら学園の企画の一部。どっちにし
る幸子さんが何かしらの被害に遭うやつ。

……まあ番組として面白くなりそうならそれでもいいけども。

「何泊？」

「ライブとかもあるから、そこまで長くはならないと思う」

「だよね」

「長くてもせいぜい三泊程度かな？」

「ん、分かった」

でも、どっちにしろ楽しめと言えれば楽しみだ。海外も久しぶりだ
し。

北欧かあ……思えば今まで行った場所って、エジプトやらインドや
ら、暑いとかかむしろ熱いような場所の方が多かったんだよね。

まあ、暑いにしろ寒いにしろ、どっちにしろボクは基本弱いわけだ
けど……ここまでよわよわだと、逆に吹っ切れるからいいね。むしろ
対策を万全にして行けるから。

……まあそんなわけで、次のお仕事が決定的。

いきなりのアイス禁止発言にはだいたい驚かされた、というか絶望を
味わわされたわけだけど、仕事が貰えて結果的にはプラス……いやで

もマイナス……プラ………プラマイゼロってところだな、うん！

@ ——— @

その日の夜、ボクは自分の部屋で机に向かっていた。

机の上には改造中の交信端末。あちらの世界とこちらの世界を繋ぐ鍵だ。

これまでは、スマホに形を似せただけの板切れ同然のものだった。しかし、いつまでもそのままでもいいわけがない。最終的な目標は、今年度内に世界と世界を行き来できるようにすることだからだ。

端末の一部を分解し、側面に端子を錬成。それを小型モニタに繋いだ上で、特殊な結晶をはめ込んで……と。

「よし、どうかな……」

計画通りなら、既にあちらでも同じようなことを実行に移しているはず。そう考えて呼び出しをかけると、すぐに応答があり——数秒ほどして、「あちら」の情景がモニタに映し出された。

「こんばんは、氷菓です。実験成功ですね」

『そうだな。こいつでようやく第二段階だ』

そう言つて、開祖様は端正な顔を歪めた。

計画の第二段階、映像の送受信。ジョヤの出現などのおかげで検証材料が揃っていたこともあり、成功することは目に見えてはいたけど……こうして実験が成功したことは、やっぱり嬉しく思う。

『次は物質転送だが……さあて、どうしたもんか』

「一足飛びに生物検証でもいいのでは？ 意思の無い小型ホムンクルス程度なら作れますし」

『いや、人の意思が介在することで実験結果が変わることもありう

る。仮にやるとしてもオレ様たち自身が実験台になった方が確実だ』
「なるほど、仰る通りですね。ボクの方から行った方がいいですか？」
『どうだろうな。そっちとこっちじゃ条件が違いすぎる。まずこっちからそっちに行った人間が減多にいねえ』
「こつちに帰ってきた人はそこそこいますけど……そうですね、また条件が変わってきます」
『その辺りのデータを採るためにも順序を飛ばすわけにはいかないな。ま、気長にやればいいさ』

開祖様の時間感覚からすると「気長に」という表現は、それこそ年単位はかかりそうな気もするけど……今回はそういうつもりは無いだろう。ジョヤの件もあつて、今年中には……という話はしてるし。

『で、話は変わるがな、リルルは知ってるな?』

「? ええ、アイドル志望のハーヴィンの子ですよ。あの子が一体……?」

『何でも、お前ら本場のアイドル……? ってのに歌ってほしい曲があるとかでな、ま、今度何かのついでに聞いてくれ』
「分かりました。それで、その曲っていうのは?」

リルルちゃん……凜さんたちが持ち込んだ「アイドル」という概念に強く影響を受けたハーヴィンの子だ。

元々、空の世界にはアイドルという存在は無かった。いや、正確にはアイドルに酷似している、シヨロトル島の「巫女」……という仕事があるそうんだけど、それとは違って本当に「アイドル」という存在に憧れて、団長さんたちの騎空団に加入した子。

なんでも、ルリアさんやヴィーラさんたちが歌っていた歌に衝撃を受けて、アイドルを志したという話だけど……どうも、ルリアさんたちはそういったことをした覚えは無いという。

じゃあ、彼女は一体何を見たのか? ということが団内では噂されてるみたいだけど……。

『それはアイツに聞け。オレ様はそこまで面倒見切れねえよ』
「あはは、すみません」

……まあ、その話は今は置いておこう。後で本人に聞けばいいだろうし。

さて、連絡事項はだいたい伝え終わったし……と思いつつながら、視線を横にずらしていく。

そこには、随分と何かを悩んでいる様子のクラリスさん（鍊）がいた。

「……で、クラリスさんはまた団長さんに?」

『またね! 今度ね! そのうちねっ☆』だと』

「オトす気あるんです?」

『ば、バレンタインで攻勢かけるし……!』

どうでもいいことだけど、空の世界にもバレンタインというイベントは存在する。

こつちの世界と違って、聖ウアレンティヌスの記念日だとかそういうものじゃないようだから、単にどこかのハーヴィンのお姉さんが考えた行事と考えられるけど……あっちでも、親愛の情を示すためにチョコを贈るといふ文化は変わらない。

さて。そんなバレンタインを目前に、ある意味親戚とも言えるクラリスさんは臆しているようだった。

原因は、多分……。

「何年前でしたっけ? 『マメな男はモテるよ☆』って言ったの!」
『去年だったか……いや、二年前だったか……まあ、何にせよありやダメだ。最悪の選択肢だったな』

『うううう!! だ、だって雑誌に「ちよつと素っ気ないフリをして相手に追いかけてもらおう!」って書いてあつてええ〜!』

「それって気のある人に限る話だよな？」

『それな。そもそも距離感そこまで近くない時期にやるこつちやねえ』

『ししよーたちがいちめるうう〜!!』

嘆く前に自分の手落ちをまずは反省してはいかがだろうか。

いや、反省してるからこそ嘆いてるんだらうけど。

『お前はとりあえず真正面からアタックしろ』

「あと逃げちやダメだよ。何かしたかって勘違いされちゃう」

『う、うん……』

「とりあえず開祖様、何とかして退路を塞ぐ方向がいいと思うんですけど」

『オレ様も毎年陰から見ててうんざりしてるからな……そろそろ強硬手段に』

『も、もうちよつとイージーにさあ！　うちの心に優しく！　お願いします！』

これだからクラリスさんは……。

同じ名前だつていうのに、こつちのクラリスさん（聖）とは胆の据わり方がまるで違う。

そこは人生経験の差とも言えるけど、もうちよつとこう……クラリスさん（破）も苦労してはきたんだからさあ……。

「とりあえず、見た目を変えてみるところからどうかな」

『そりやアリだな。普段と違う服装や髪型にオトコのコはドキツとしたりしちやうからねっ☆』

『え、そうなの？』

「ボクはファッションセンスは無いらしいけど、ファッション誌なら……あ、あったあった。これなんてどう？」

『ほー……へー……そつちのファッションってこんな感じなんだ

……』

『ほう……普段よりも若干露出度は抑えめに……髪は二つ結びか。しかしちよつと頭のてっぺんが寂しいな』

「普段はリボンで結んでもますからね。なら、こんな感じでリボンをカチューシャ型にして……」

お互いに意見を出し合い、それとなくアドバイスを贈る。あちらでできること、チョコの味、時にはこちらの知識も使った上で。

個人的にも、血縁……は、今はちよつと途絶えちやつたけど……親戚みたいなものであるところのクラリスさんには、頑張ってもらいたい気持ちがある。そもそも彼女、団長争奪戦のスタート地点にすら立ててないような感があるし……。

『うう……緊張するう。恥ずかしい……』

「頑張つてよクラリスさん。ボクなんかそんなチャンスすら無かったんだからね！」

『あつははははははは！ ふぐつ、そ、そりやそうだ……くくつ』

『重いよお!?!』

「あれ。ウケない」

『ウケるわけないじゃん！ 不謹慎すぎるよ!?!』

「ボク自身の生き死にのことなのに……うーん……ボクは面白いと思つてたんですけど。開祖様はどう思います?」

『最高。何でお前らこれが分からないんだ?』

『うわダメだこの人たち死生観ズレてる』

うーん……この辺のズレが、いつものドン引きに繋がってるんだろ
うか。

ボク自身、スペアボディくらいすぐ作れるし、殺してもそうそう死なないし……倫理観というか死生観は開祖様に近い部分がある。

「でもあんな死に方するってそう二度も三度もあることじゃないんだ

し、『まだ言ってるよ(笑)』くらいに思っただけに昇華してくれた方が、個人的には嬉しいよ?」

『難易度高すぎるよ……』

「あ、でも親に捨てられたのは実質二回目か。あつはっは」

『ぶはっ』

『勘弁してよお……』

クラリスさんがギャグに対してドン引きし通しなので、今日はもう言わないことにした。

晶葉や、場合によっては志希さんにも度々ドン引きされるんだけど……うーん……控えた方がいいのかなあ。面白いと思っただけだなあ、コレ……。

ともかく、その後もクラリスさんへのアドバイスをしながら退路を断つ方向で背中を押し続け、気付いたら深夜遅く。

「うち頑張るよー」という言葉に(だからそろそろ解放して……)というニュアンスが混じるようになったころ、ようやくこの交信も終了した。

あれだけ恋焦がれる人がいるっていうのもいいなあ、と思う。ボク自身がそうなるかは別だけど。

ともあれ。

恋する女の子のバレンタインの結果は——神のみぞ知る、ということ。

59：ノルウエー奇行録

——拝啓、お義父さん。ボクは今北極圏にいます。

北極圏は、今日も雪です。

寒風吹きすさぶ銀世界は、見た目の美しさと違って極めて厳しい環境です。比喻表現抜きに、バナナやタオルで釘が打てます。

日本はそろそろ雪解けも近い頃でしょうか。今年の日本は記録的な暖冬ですが、もうちょっと寒くなったりした方がいいんじゃないでしょうか。この寒さをおすそ分けしてもいいんじゃないでしょうか。ダメか。ダメだな。

何はともあれ、何やかやで海外ロケはなんとかうまく行ってると思います。思いたいです。多分上手く行ってます。

ただ一つだけ聞きたいことというか、聞かなければならないことがあるのですが。

友人が、野生のヘラジカにダイレクトにかじりついているのを見た時、ボクはいったいどうすればいいのでしょうか？

「もう考えるのやめたら？」

「人間は理性の生き物だよレイナさん。考えることをやめた時、人はどんどん退化していくんだ」

「屁理屈言つて誤魔化そうとしないで現実見なさいよ」
「見たくないよお……」

二月の半ば。ボクらは予定通りノルウエーの方にやってきていた。

メンバーは、幸子さんとレイナさん、肇さんとみちるさんで、ボクを含め合計五人。スターライトプロジェクトメンバーが三人いるため、うちのプロデューサーも一緒だ。

ノルウエー某所、犬ぞりの体験場。広場で順番に犬ぞりの体験をしていたそんなとき、近くの森の中から現れたのは体長3メートルはあ

ろうかという巨大なヘラジカであった。

事前にガイドさんから説明を受けていたのだけど、ヘラジカは実はかなり凶暴だ。オマケにあの巨体。ごりごりの筋肉に覆われたその肉体は、車に激突されても逆に車を破壊してしまうほど。

しかし、いくら同乗していた幸子さんがピンチだからって、そんな途轍もないヘラジカに当然のように噛み付きにいくのはいかなものか。

いざという時のための錬金術の用意はしてあるし、既にプロデューサーが飛び出して超人的な身体能力でなんとかしに向かっている。が、あのヘラジカ、あれだけの巨体だからこそ外敵がなかないなかつたのだろう。恐れも知らず噛み付きにきたみちるさんに恐怖しているようだ。

「何で人間が猛獣に勝ってるのかな……」

「みちるちゃん、ですからね……」

「みちるさんだからかあ……」

時々晶葉たちに「氷菓だからな」とか言われるボクだけど、そうか。みんなはこんな気持ちだったのか……。

でも、そうか……みちるさんだからか……。言われてみればそれも、まあ……そうだね……。

「ヘラジカって美味しいのかしら」

「カナダやスウェーデンの方で食べられてるらしいよ」

「生は……ダメでしょうけれど」

「ダメだろうね」

「誰か止めてくださいよおおおおお——！」

「幸子はどうするのよ」

「……自然に止まるまで待つしかないだろうね」

毛皮の上からなんてもう論外。なんだけどちゃんと歯が立ってる

ように見えるのは、何でだろうね。

痛みに耐えきれないせいか、そろそろヘラジカも逃げていこうとしている。それでも犬たちは狂乱状態のまま、幸子さんをひたすらに振り回し続けていた。

……止めてあげたいのはやまやまんだけど、じゃあ止められるか？　って言うともそれも無理。あの大型犬の群れが駆け抜けていく様は、雪崩や津波と同じようなもの。下手に触れれば巻き込まれて死ぬことだろう。

もしこれが幸子さんだけだったら、ボクも錬金術なり何なり使って止めてただろうけど、流石に何も知らない人の割合の多い今のこの状況じゃどうもこうもできない。

「私たち、どうしていきましょうか？」

「落ち着いたら戻ってくるだろうし、それまでコーヒーでも淹れようかなって思うけど」

「そうですね。お手伝いしましょう」

「ありがとうございます？」

「はあ？　そんなの……タバスコ入れてやるわッ！　くくくっ！」

幸子さんならいざ知らず、みちるさんならたとえタバスコ入ったとしても普通に飲んじゃう気がするんだよな……。

……言わぬが華か。

@ ——— @

さて。

なんだかんだ、アイドルとしては初めての海外ロケである。

北欧、ノルウェー。北極圏にほど近い国で——ボクにとっては、ルーツの一つにあたるかもしれない国でもある。

まあそこは置いとこう。母親と違ってこっちは本当に顔すら知らないし。

ともかくノルウェー。実を言うと、割と楽しみつつや楽しみみではあったのだ。

理由の一つに、ノルウェー人がアイスクリーム好きであるという話を聞いたからというのが。ソフトアイス、サフトアイス、クローネアイス、ラクリスイース……様々な種類のアイスが、季節を問わず、国内各所にあるアイスクリームスタンドで売られているという。

これが行かずにいられるだろうか。いや、無理だ。我慢ならん。

……もしかすると、そんなアイス好きな国民性が遺伝した結果、ボクもこんななつちやつてるのかもかもしれないが、仮にそうだとしたらこれはもう仕方ないことなんじゃないかな。そう、仕方ないのだ。衝動を抑えつけて何になろう。それが血に由来するものであるのなら、抗うことは何より難しいし、ストレスだろう。

「だからこれは仕方ないことだと思っただよ」

「だからってちよつと目を離れた隙に三つも買わないでくださいよ!!」

「もう二つ食べたから五つだよ」

「狂ってるんですか!?!」

狂ってるとはいくら幸子さんでも失敬な。ボクは正気だ。

ノルウェー北部の都市、トロムソ。北極圏に存在するこの都市は、当然ながらひどく寒い。

……のだけど、この街にもアイスクリームスタンドは山ほど存在している。流水を眺めながら、雪景色の中でアイスクリームを食する。こんな贅沢が他にあるだろうか。いや、無い（反語）

確かに、決してこの環境はアイスを食べるに適したものではない。しかし、それもまたスパイスだ。この厳しい寒さの中で食えることで、痺れるような冷たさと甘さを共に感じられるのだ。体温が下がることもまた一興……と言うと、プロデューサーからはまた叱られそうだが。

肇さんとレイナさんは、今は工芸品店に取材の許可を貰いに行つて

いる。今はちようどそちらに行く……ちよつと前の段階だ。

ノルウェーの街のメインストリートは、やっぱりというかなんとうか、相当に風情がある。日本とはまるで違うこの光景は……何と言えばいいのだろう。どこことなく、「あちら」を思い起こさせる。

さて、それはそれとして。

「美味しいから大丈夫だよ」

「そうですよ！ もぐもぐ」

「みちるさんはともかく氷菓さんは全然大丈夫な人じゃないじゃないですか！」

「大丈夫なんだよ」

大丈夫じゃなくても大丈夫にするから大丈夫なんだ。

……うん？ 何かちよつと意味が分からなくなってきたな。いや、とにかく大丈夫だ。

「何故ならこの志希さん印の胃薬があるから！」

「大丈夫じゃないやつじゃないですか!!」

「これは飲んでも大丈夫なやつだから」

「よく飲んでますよねー氷菓ちゃん」

「頻繁に飲むほど胃が荒れてるってことじゃあないですか!？」

「……………そんなことないよ」

「三日に一回くらいは飲んでますよ！」

「根津さーん!!」

「チイツ！ へぶつ!!」

「大丈夫ですか氷菓ちゃん？」

「滑った……超転んだ……オマケにプロデューサー呼ばれた……もう無理……泣きたい……」

……きつと説教されるだろうと見越して逃げ出そうとしたのだが、そうした瞬間に足元の雪のせいですつ転んでしまった。

これはしばらくアイス禁止される流れだし……ああ、くそう。泣きたい。

「泣きたいのはこっちなんだが!!」

「くっ! もう来たか!」

「逃げようとするんじゃない! 大原さん押さえて!」

「はいっ!」

「ぐわああああああああ!」

「仮にもアイドルの出す悲鳴じゃありませんよ……」

二分後、確保されたボクはノルウェーの街の片隅で、ベンチに座ってプロデューサーから説教を受けるハメになっていた。

アイスは既にみちるさんのお腹の中に消えている。くそう。くそう……。

「折角ノルウェーまで来たっていうのに……こんな殺生な……」

「もつと注目するところがあるだろう……フィヨルドとか、街並みとかオーロラとか……」

「良い光景だよ。感動的だ。だけどボクはアイスが食べたい」

「どうしてこんな子になってしまったんだ」

「ボクは最初からこうだよ」

「最初はもつと落ち着いてましたよね?」

「みんなから影響を受けたんだよ」

「ものは言いようだな……」

でも理屈は分かってくれると思う。

まあ、確かに、こう……一年前のボクが今のボクを見たら、困惑してドン引きしそうっちゃしそうだが……それにしたって当時でも兆候はあったんじゃないかな。多分。

「つまりボク自身はそこまで悪くないのではないだろうか?」

「今凄まじい世迷言が聞こえたぞ」

「その表現は流石に失礼だと思うよプロデューサー」

「世迷言以外の何物でもありませんよ……」

ちえつ。 やっぱりそういう扱いか。

ま、普通そうかもだけどき……もうちよつとフォローとかしてほしかったな。

「氷菓さんは本当にギャップが酷いですよね。番宣の時はあんなに清楚で神秘的に見せておいて、今はこうですから」

「そうだな……そうなんだよなあ……せめてもう少し日頃から大人しくしてられないか？」

「見ての通りの大人しい虚弱っ子ですがー？」

「虚弱は事実だからなんとも腹が立つ……!」

「というかこのギャップを生み出した一因はプロデューサーだからね」

「また適当なことを言うつもりじゃないだろうね」

「何で根津さんなんです？」

「仕事を始めた頃、プロデューサーからミステリアス路線で行くように指示があつたから、今もしつかり守り続けてるんだ、っていうお話」

「根津さんじゃないですか」

「このエキセントリックさがあの時にもあれば……!」

自分から提案しておきながら失礼なプロデューサーだな。ボクは忠実にやり遂げてるぞ。

プライベートのボクとだいぶ乖離してきてるけど、それもボクだし。人間何事も一面だけの存在じゃないともよく言うし……そういうことで何とかならないかな。

「あと最初のライブの前に仕事を楽しむことを教えたのもプロデューサーじゃあなかつたかな？ おやおやあ？ 今！ 現在進行形で！

全力で楽しんでるボクのごときは考慮しなくてもいいと!？」

「すごいですよ幸子ちゃん！ お説教されてるのに氷菓ちゃん全力で煽ってますー！」

「氷菓さん……その説得方法はちよつと悪質だと思えますよ……」

「説得じゃないよ。戦争だよ」

「尚更タチ悪いんだが」

そう、言うなればこれは労働^{アイ}の対価^{イス}を求めるための労働争議……！

長時間のフライトに耐えてノルウェーまでやってきておいて、やることは仕事・移動・仕事・移動の連続。その上に我慢我慢の連続だなんてスジが通らない……！ ボクは断固として報酬^{アイ}を諦めない！

346プロアイス同好会（総員二名）のライラさん！ 平和と胃袋を守る正義の味方スイーツファイブ！ ボクに弁論能力を分けてくれーっ！

「古宮さんに言い付けるぞ」

「ごめんなさい」

「弱すぎませんか!？」

「いやほんとおじじだけはダメだつて……」

「そこまで心配かけたくないなら日々の不摂生なんとかしよう！ な!？」

「ンッギイッイッイイイ」

「この世のものとは思えない声が！」

「何でこんなくだらないことで今にも血の涙を流しそうなほど苦しんでるんですか……」

くだらないとは失礼な！ ボクにとっては死活問題とすら言えるんだぞ！

まあ客観的に見て多少執着しすぎている部分があることは否めないけど、このくらいは346プロ的には割とあることだし……ということにはさせてくれないだろうか。無理か。

アイスはらくらく……何だったっけ？」

「ラクリスアイスですね」

「ラクリスアイス!! アタシたち日本人の味覚にはあまりに合わない地獄のお菓子よ!」

「ままま、まっじゅううううう!! お、お水くださいお水!」

「はい」

「あ、ありがとうございます……」

海外では水道水を飲んじやいけない——ということを用意していたペットボトルの水を手渡すと、ふと、幸子さんの手にまだラクリスアイス——リコリスアイスがあることに気が付いた。

もしかしてこれ、放っておいたら捨てられてしまいかねないのでは？

ありうる。リコリス菓子は基本、合う人と合わない人が大きく分かれる。見ての通り幸子さんはダメ。レイナさんも多分無理だろう。みちるさんは多分大丈夫だろうけど、この短時間でアイス四つ目は冷たさもあって微妙なところのはず。肇さんは完全に未知数。プロデューサーはまあ無理な方。

……よし!

「……どうせ食べられなさそうだし、ボクが貰っても」

「ダメですよ」

「あう」

……申し出てはみたが、横から現れた肇さんに窘められてしまった。たしな

困った。プロデューサー相手ならまだちよつとムチャクチャしても許される感じがあるけど、これがお姉さんの立場の肇さんになると逆らう気が無くなってくる。

そうして肇さんは、受け取ったアイスをそのまま自分の口に運んだ。

特に堪えた様子は無い。肇さんは比較的大丈夫な方だったらしい。

「ボクは悲しい……」

「あーはいはい、分かったから最終日まで我慢してくれ。収録全部終わったら少し休みが取れるし、多少食べても大丈夫だろうから」

「言質取ったからな!!」

「瞬時に元気になりましたね!?!」

そりゃあ元気になるとも。下げて上げられたそのギャップでつい喜んでしまっただけなんだけど、それでもただ本気で禁止されるよりはよっぽどマシ。最終日は！　アイス！　食べていい！

「何個食べようかなー♥　どこで食べようかなー♥」

「何故だ……可愛らしいことを可愛らしく言っているはずなのに底冷えするような寒気を感じる」

「……普段、あそこまでテンションを上げてあんなことを口走りませんからね」

「眼に狂気が宿ってますし……」

胃の容量もあるし、どうしても食べられる限界はある。

折角のノルウェーなのだから、できるだけ良いもの、普段食べられないものを食べたいんだ。先にリサーチして、それからそれから、えーつと……何がいいかなー。楽しみだなー。

@ — @

「お昼のボクのごとは忘れてほしい」

「お、おう……？　何で？」

「時差ボケで深夜テンションだったんだよ……」

夜半。

ようやく時差ボケが解消してきた頃、ボクらはオーロラの観測のため、外に出ている。

しかし今思い返してみると、お昼の頃のボクはちよつと、いや、かなり……こう、時差のせいでボケていた。我ながら恐ろしくこう、ハイテンションになっていた。日本でも果たしてあれほどテンションが上がって見たことがあつただろうか。いやあるか。晶葉の家に泊まって徹夜した時、お互いハイになりすぎて最早自分たちが何を作っているのかすら分からないという醜態を晒していたことがあつた。あの時作つたブツがどうなつたかは、まあ今は置いとくとして。

「一応、お昼に眠れたおかげでちよつと落ち着いたけど……」

「本当に落ち着いてますか？」

「う……いや、大丈夫。休憩中に寝たし」

「他の皆さんは、今眠ってしまいましたけど」

「まあ、その、ほら。疲れただろうし。体力の分ボクが早くダウンしちゃつたみたいで申し訳ないけど……」

オーロラの観測地を目指して走るこの車の中、今起きてるのはボクと肇さんとプロデューサーだけだ。

ボクは、昼間に体力を使い果たして一度眠っちゃつたのが良くなかつたのか、みんなとタイミングが合わずにそのまま起きてしまつて今こんな感じ。

肇さんは、幸子さんたちと比べても一つだけとはいえ年上なこともあつてか、眠くて仕方がないというほどではないようだ。

「お昼の氷菓ちゃんは……その、ちよつと浮かれていましたね？」

「今思うと恥ずかしいけど、まあ……」

とはいえ、あれだけ暴走はしていても……いや、というかむしろ暴走していたせいか、心にもないような、突拍子の無いことを言つたわけじゃない。本心といえは本心、というか。

アイス食べたくてしようがないのも本心だし、禁止されて悔しくて泣きそうになったのも本心。普段はあそこまで行く前に、心のどこかでブレーキがかかってしまうことだろうけど……深夜テンションって怖いね……。

「まあ、そういうことが無いよう、ゆっくり休むようにね……」

「はい……」

「それにしても、白河さんはあれ、あの……リコリスアイス？　は食べられるのかい？」

「サルミアツキ食べて大丈夫だったし、別に何とも……」

「アレ食べて平気だったのか……!？」

「別に……なんていうか、むしろしっくりきたかも。血かな」

サルミアツキは北欧方面でよく食べられているお菓子だ。一般的なリコリス菓子も相当人を選ぶが、サルミアツキはそれ以上に北欧の人しか食べない・受け付けないとも言われている。肇さんも、他のリコリス菓子はともかくそっちはあまり好きではないようだった。

「えーと……」

なんだか奥歯に何か挟まったような、釈然としないような表情でプロデューサーが何やら言いかける。ちらりと向けられた視線は、どこなくこちらを案じているようにも見受けられた。

血……つまり、実の親の話になったことで、話を変えた方がいい、とも思っただのだろうか。

「プロデューサー、言つとくけどボク何とも思っていないよ」

「いや、俺たちが気にするんだが」

「それでもだよ。そもそも、会ったこと……どころか、顔すら知らない人のこと気にして振り回されるなんて、その方が滑稽じゃないか」

確かに、母親は嫌いだよ。顔も知ってるし、語り掛けられたから声も覚えてる。けど、それに対して、父親なんてのは顔も声も何一つ知らないんだ。多分北欧系の人、くらいの知識しかない。無責任だなあとは思うけど、それ以外に何か感情を動かしようがないんだよね。なんかそういう人、ってだけ。ボクにとつての父親はおじじと先生だけだから。

……あ、でも、容姿が整ってるおかげでアイドルやれてることは感謝してもいいかも。そのくらいか。

「ボクはただ、アイス好きだったりサルミアッキ食べたりできるのってこっちの国の血が混じってるおかげかな、って言おうと思ったただだよ」

「そうかもしれないですね。でも少しくらい、怒ったりしてもいいんですよ?」

「え、いや……知らない人に知らないまま怒っても、虚しくなるだけだし……」

「本当に無関心なんだな……」

「いや、本当に知らない人だもん」

『もん』て」

それでも話題に出したら出したで変な雰囲気にはなるのか。これ以上は控えておくのが無難かな?

しかしな、個人的にちよつと気になることはあるんだよね……。

「……で、話戻すけどさ」

「なんだい?」

「もしかしてオーロラ見ても感動とかできなかつたらどうしようって……」

「ははは、何だそれ」

「ふふ……日本人でも、神社や仏閣などを見て感動できますし、そういうのは関係ないと思いますよ」

「あ、そか……」

恥ずかし。言われるまでそういうの全然気づかなかった……。

「俺は別に、どう思ってもいいと思うんだけどね」

「そう?」

「感性の問題だからね。景色に感動しない人もいるだろうし……あんまり良い例じゃないかもしれないけど、俺なんかは、卒業式で泣けなかつたりしたよ」

「プロデューサーはなんだかそういう時、号泣してそうなイメージがあつたんですが」

「何て言うんだろうな。大した思い出も無いし、友達にもいつでも会えると思つてなあ」

その辺はちよつと分かる気はする。思い出は思い出なんだし、死ぬわけじゃないんだから別にそこまで泣くことかな? というか。

海外に行つちやつて、滅多に会えなくなる……とか、年単位で会える予定が無い……とか、そういうことなら分かるけど。そこも死生観狂つてる結果なのかなあ……?」

「でも、贅沢言うなら、みんなにはできれば卒業式で泣けるような人に育つてほしくはあるね」

と。うんうんと首をひねっているところで、プロデューサーはそんな言葉をボクらに投げ掛けた。

「自分は泣いてないのに……」

「だからこそだよ。そういう場面で泣ける人っていうのはき、それだけ良い思い出を作つて……些細なことで泣いたり笑つたりできる人なんだと、俺は思うんだ」

「なるほど」

「最初から冷めたフリして面倒くさがったら、大人になってから絶対後悔するよ」

大人になったら自由に泣いたり笑ったりできないからね——なんて、おどけて言ってみせると、プロデューサーは話を締めくくった。ボクらは知る由も無いけれど、プロデューサーも昔、何かがあったんだろうか。荒れてたとか、友達がいなかったとか。割と超人的な身体能力してるけど、例えばインターハイ目指してたけど、怪我とかで挫折したとか……。

聞いたとしても、多分答えてはくれないだろう。けど多分それでいいんだ。こつちだって明かしてない秘密は山ほどあるし。

人は何事に関しても、常に明け透けにしてればいいってワケじゃない。

「プロデューサーはたまに良いこと言うよね」

『「たまに」は余計じゃないかな?』

「普段は余計なこと言ってるし……」

「少なくとも今は良いことを言ったと褒められていると思えば……」
「納得いかねえ……」

安易に褒めるとプロデューサー時々調子に乗るからな……ちよつとキツめにしておこう。

良いこと言う前に、激務で疲労漬けな自分の身体の方をいたわった方がいいと思う。

「お……そろそろかな」

プロデューサーが呟いたのに合わせて外を見ると——視界の端に、キラキラと光る帯が見えた。

そろそろ、今回の旅の目的地……オーロラの見える湖畔だ。

車を降りると、ひどく冷たい雪交じりの風が、体を刺すように吹き

抜けた。

ほんの一瞬のことだというのに、ずっと車のなかで温まっていたせいか、一気に体温を奪われていくんじゃないかってくらいには厳しさを感じてしまう。けれども、その感覚がほんの少し心地よくも感じられて——やっぱり、ボクの血筋はこっちの方が強いんだなあとも気が付かされた。

「さむ……」

「へくちっ！ うー……寒いですね！」

「起き抜けなのにみちるさんは元気だね……」

「そこが取りえですからねっ」

今回の旅のメンバーの中で、一番元気なのはみちるさんだろう。旅全体を通して見ても、今この場で見ても同じように元気だというのだから、結構なものだと思う。

同時に、どこかで緊張の糸がぷつぷつ切れて、風邪ひいて倒れたりしないかなあ……という心配も、あつたり無かったり。まあ、その辺ボクよりははるかに大丈夫だろうけれど。

まだ、撮影本番まではもう少し時間がある。幸子さんとレイナさんはまだちよつと寝ぼけ気味だけど、その内元の調子に戻るかどうか。う。

それまではしばらく空と……オーロラを見てみよう。こんな光景、なかなか見られるものじゃないだろうから。

「氷菓ちゃん、お茶はいかがですか？」

「いただきます。ありがとうございます」

「どういたしまして」

みちるさんに続くように、肇さんが隣にやってきた。お茶を手渡ししてくれた後の視線は、ボクらと同じように空に向けられている。

「綺麗ですね……」

「綺麗ですねえ……」

「うん」

冷たく澄んだ空気の中で、夜空に浮かぶ星とオーロラが幻想的な光景を創り出している。いつも見るそれとは明らかに違う色合いを魅せる空を見て、ボクの心はじんわりと脈打つように熱を放っていた。

未知の光景に、興奮しているんだと思う。さっきまでのボクの危機は一体なんだったんだというくらい、ボクはこの光景に感動しているようだった。

「また、ここに……今度は、できれば——みんなで、来てみたいね」

「きつと来られますよ」

「そうかな？ ……そうだね。きつと来よう」

「氷菓ちゃん！ なんか死んじやいそうな笑顔とセリフですよ！」

「台無しだよみちるさん」

ボク今ちよつと良いこと言ったよね？ この素晴らしい光景をみんなで楽しみたい、って言ったはずだよね？ 何でボクが死ぬことになってるの？

……というかこんな感じの話前もしたぞ！ 具体的に言うとな夕焼けの下で、プロデューサーあたりと話してる時！

ええい、何でみんなしてそういう風景の時にボクが死ぬみたいな話になってるんだ！ 死なんぞ！ 一応言っとくけど！

「……そういうシチュエーション風にして写真撮って上げてみるのも面白いかな。肇さん撮ってくれない？」

「ふふ。ええ、いいですよ」

「あ。あたしもやりますっ！ 脇の方でわーっと泣いてたら面白いですか？」

「じゃあボクはこっちで振り返るポーズするから……」

しかし、何とこのだろうか。こういう時に締まらないのも、なんとかボクらしいっちゃらしいのかもしれない。

変に堅くて真面目で、なんて……できないわけじゃないけど、結局周りがツラくなるだけだし。

その後も、時間が来るまで、幸子さんやレイナさんを含めた五人で、オーロラを写真に収めたり、変な写真をSNSにアップしたりして楽しむことにした。

……最終的に一番反響が大きかったのは、安らかな顔で永眠^{ねむ}るボクを送り出す四人という写真だったりした。

60：一年目と二年目の境界

ノルウェーから帰ってきて少ししたある日のこと、ボクは若干の燃え尽き症候群と時差ボケを併発しながらも、どうにかこうにか日々の仕事をこなしていた。

海外渡航は初めてのことじゃないとはいえ、翌日すぐに仕事というものもなかなか無いことだ。改めて思ったのだけど、これを何事も無いかのようにこなしている幸子さんは本当にすごい。そんなことを思いながら、ボクは楽屋でコーヒーをがぶ飲みしていた。

アイスばかり食べてるのにコーヒーまで飲んだら胃が荒れる。それもまあ妥当な指摘だろう。ボクもそう思う。けど、こればかりは何ともならない。今もまだ眠いんだから相当だ。

「そういえばなんだがな」

「ふあえ？」

そんなボクに横から晶葉の声がかかる。あんまりにも気の抜けた声を出してしまったけど、晶葉は気にせずそのまま続けた。

「前にカリオストロと話したのだが、『あちら』で大事件があったらしいじゃないか」

「らしいね。詳しくは知らないけど」

「その時に敵が……何だったか。『境界』だかを破壊すれば世界が滅びるとか何とか」

「らしいね」

「で、キミたちのやってるそれは、境界を弄つてお互いの世界を行き来しようという技術なんじゃないかと思ってだな」

「ああ、なるほど」

ボクも具体的なことは知らない。とはいえ大まかには聞いている。

なんても、変態紳士……？ いや、変態墮天紳士……駄天司……ええと。

……まあいいや。ちよつと前に、とあるオープンスケベが世界を滅ぼそうとしたんだとか。その時に世界の「境界」というものに穴を穿つことで、触れたものを消滅させる物質を、空の世界にだばだば注ぎ込もうとしたのだという。

晶葉が危惧しているのは、ボクらがお互いの世界を行き来しようとすることで、それと同じ現象が起きるのでは……ということだろう。

「あたしもちよつと気になるな。仮説とか対策とかあるの？」

「んー……何て言うのかな。こつちとあつちは根源的に繋がってて、壊そうとしたのは更に外側の壁で……」

さて、どう言ったらうまく説明できるだろうか……と思いつつ、周囲を解析。隠しカメラや監視カメラが無く、まだ誰か近づいて来る気配が無いことを確認して、ボクは小さな空き箱を手元に錬成した。更に仕切りを設け、中の空間を分割する。

「この箱の中、左側がこつちの世界だと仮定するよ。で、右側があつちの世界」

「うん。それで？」

「ボクらがどうこうしようとしてるのは、この箱の中の仕切り。で、あつちの世界を滅ぼそうとしてた人たちがどうこうしようとしてたのは、こつちの箱そのもの」

箱の中央の仕切りを外しても、箱そのものに影響は無い。中身がちよつと混ざるだけだ。

しかし、箱を壊してしまうと、中身が外に出してしまう。あるいは、外のもものが中身に干渉できるようになってしまう。

簡略化してみたけど、こんな感じだろうか？

「箱自体を壊したら世界が減じる……よね」

「だいたい分かった。それで、そうだったらこっちに悪影響はあると思うのだが？」

「仕切りがあるからそこまで影響は出ないと思うよ」

「言っても『そこまで』なんだよね」

「何せ前例を確認したことが無いからね。どうなっても分からないってのが正直なところ」

箱そのものがバラバラになる可能性もあるかもしれないし、そうでないかもしれない。結局何も分からないのが正直なところだ。

少なくとも世界一つ滅びることは確実なので、阻止すべき案件なのは間違いないけど。

「んでもやっぱここの仕切り外しちゃったら、変な話、混ぜっちゃうと思うんだけどー？」

「外さないよ。仕切りにドア作るだけだから」

「にやーる」

それも小さな小さな、人間が一人二人入れる程度のものだ。

基本的には、ボクが開祖様しか使えないように調整中。これが成功したら、様々な面で利益が生まれることを期待できるはずだ。

じゃなくても、親しくなった人たちと交流ができ、あっちに行ってしまう人を割合簡単にこちらに戻せるので、作らない理由も無い。

「んでんで、何でこっちからあっちに行っちゃう人たちが出てきたの？」

「それな。私も気になっていた」

「えー……それ聞く？」

「なんだ、まだ理論が確立できていないのか？」

「この仕切りが薄かったりして穴空いたところに落っこちた」

「めちやくちやあつさりしている……」

「まーそのくらいしか言えないよねー」

「だから今後も起こり得るかもね、としか言いようが無いかな……つと」

誰か来た、と言葉にせず示しつつ、手元の箱を分解する。

ほどなくして、ノックの後に姿を見せたのは、ボクらがこれから出演する番組のスタッフさんだった。

「リハ準備できましたので、そろそろお願いします！」

「はい。じゃ、行こっか」

「うむ」

「ほーい♪」

……さて。番組撮影……なんだけど、実を言えば、ボクら三人の衣装はそれぞれ違っている。エリクシアで出るなら、統一感のある服装になるのだけど……その辺は、今日の番組がバラエティ系に近い歌番組だという理由が大きい。

コーナーのお題は、「アイドル大カラオケ大会」。自分の持ち歌ではなく、カラオケで歌う……他のアイドルの歌を披露する、というコーナーだ。

厳正な協議の結果、ボクの出番はなんと大トリ……の一つ手前。元々若手や新人の多い番組ではあるけど……そろそろ二年目に突入するとはいえ、一年目のアイドルに対してこの扱いは破格と言っている。

当然、ボクも最高に気合が入っている。歌うのは勿論、ボク自身が一番モチベーションの上がる——「こいかぜ」だ。

刻むぜ爪跡。

今回の番組、杏さんが「毒茸伝説」させられたり、芳乃さんが「おんなの道は星の道」してみたりインパクトも抜群。まゆさんが「恋のHamburg♪」を歌ったり、智絵里さんが「エヴリデイドリーム」

を歌ったり……と、後日、色々な意味で話題になった人も多い。みんな上手いし……あれだけのインパクトを残したのだから、話題になっても当然というものだろう。

……しかし、ネット上のボクへの印象がおおむね「ラスボス」になっていたのはどういいうわけだろう。

@ ————— @

「あつ！ 愛を知って悲しい別れで物語を締めくくる系のラスボスだ！」

「どういいうキャラだよ」

後日、ちよつと話があるとのことで事務所に向かう最中の道で、晶葉にそんな謂れない言葉いわをかけられた。

まことに遺憾である。何でみんなしてラスボスラスボスといじつてくるのだろうか。確かに「こいかぜ」はラスボスめいた演出が特徴だが、ボクだぞ。あそこまでの威風堂々とした感じは無いだろ……つて、収録後から言ってるはずなんだけどなあ……。

「昨今ラスボスも多様化が進んでいるからな。それだけ雰囲気があつたということじゃないか」

「まあそれはそれで別にいいんだけど……」

「それにしても何か微妙な顔をしてるな」

「そっちは別の問題なんだけど」

「じゃあなんなんだ？」

「先生もおじじも、とっくに三月三日は終わったのに、いつまで雛人形飾ってるんだらうって」

「言われるまで飾り続けるんじゃないかあの御仁ごじんたちは」

「何でさ」

「雛人形を飾り続けていると嫁ぎ遅れるというジンクスがあるだらう」

「それか……」

やっと納得いった。いや、去年もおとしもその前もずっとそんな感じだったからそこまで気にしてなかったけど、どうも釈然としないところはあったんだよね。流石にこどもの日になるまでずっと置いてるのはおかしいと思っただ。

いや、それにしたってそもそも、親が子供が嫁に行かないでほしい、と思うのはいかがなものだろうか？

……よくあることか。ドラマとかでもそういう親よく見るし。

あ、でも親が親がって思うと嬉しいかも。

「その締まりのない笑顔は『親がいるっていいなあ』的なことを思ってるやつだな」

「なぜ分かったし」

「分からないでか。天才だからな！」

「ちなみに晶葉の家って雛人形どうしてるの？」

「一般家庭は飾らないだろう。まあ私の家は飾ったしすぐに片付けたが」

何せ雛人形もロボだから勝手に片付けてくれるんだはっはっは、と朗らかに笑う晶葉。そりや楽だろうけど、何かが違う気もする。

ちよつとスマホで由来について調べてみると、どうもこの雛人形を片付けないから——というのは、あくまで「時期に応じて雛人形を片付けないくらいズボラな女には嫁の貰い手が無い」という話らしいということが分かった。

……こうなると、晶葉の場合どっちに当てはまるのかいまいち分からないな……。

「あ、二人とも、おはよう」

「ん、おはよう亜子さん」

「おはよう亜子。亜子の家はどうなってる？」

「え、何が……？」

「雛人形どうしてるのかなって話してたんだよ」

「あく……アタシんところは別にそういうことは無いなあ」

「だとさ」

「だよね」

さつきも晶葉が言った通り、やっぱり一般家庭じゃ雛人形は飾らないか。

そもそも、うち……というかあおぞら園の方は、言ってみれば公共施設みたいなものだし、そういうものが置かれていても不自然は無い。おじじは美術会社を経営しているので、その辺の兼ね合いもあって会社に雛人形を置いている……が、やっぱりそれも例外。そもそも一般家庭とも言い辛い。晶葉はなんというかロボを作る過程で雛人形ロボなんていくらでも作ってるだろうし……この中じゃ普通となると亜子さんちくらいか。

「亜子さんも呼び出し？」

「せやな。今空いてる子だけって言ってたから、他は……いるんやらか？」

「いないだろう。ホワイトボードを見る限り、他のメンバーはだいたい何かしら予定があったぞ」

「覚えてるんか……」

「？」

「??」

「普通全部は覚えられんよ？」

そんなことないよ。人間の可能性は無限大だよ。

きつと誰でもちゃんと覚えられるよ。たぶん。

それから、合流した三人でプロジェクトルームへと向かう。途中、なんとも表現し辛いギラギラとした視線を感じたが、あれは何だったのだろうか。何かこう……光り輝く……何かを感じたような気がしたのだけだ。

「おはようございませう」

挨拶してプロジェクトルームに入ると、そこにはプロデューサーと……見慣れない人が三人、それと、顔見知りが一人いた。

知らない人のうちの一人は痩せ型で、眼鏡をかけたスーツ姿の男性……こっちは346プロの職員だろうか。もう一人は、素朴な印象を受ける、長髪で制服姿の女の子。

最後の一人は……ショッキングピンクと言うのだろうか。水色のグラデーションがかかったボブヘアの、やや特徴的な女性。なんとも言い辛いけど、あえて一言で言うならしゅがはさんっぽい印象も受ける。

知っている一人は——以前、コミケの企業ブースで出会ったAkiraさん。彼女を見ると、どこかほっとした様子でこちらを見返した。

「やあ、三人とも。ごめんね、休みに」

「や、ええでー。それで、あの人は？」

「うん、これから紹介するよ。まず、こちら。プロデューサーの戸羽君」

「戸羽です。よろしくお願いたします」

「よろしくお願いたします」

「よろしく頼む」

「よろしくー」

まず一人目、プロデューサーの戸羽さんが礼儀正しく……とか、やや正しすぎるくらいに勢いよく、九十度ほど体を折った。

全体的に堅い雰囲気で、うちのプロデューサーよりもどちらかというと武内Pに近いだろうか。お堅いというか、それよりももうちょっと突き抜けて硬質って感じ。印象としてはロボットに近い。見れば、晶葉がわくわくしている時の目をしていた。違う、その人口ボじゃな

い。

「で、こっちの三人なんだけど……彼女たちは、この春から立ち上げる新規プロジェクトのメンバーとしてスカウトした三人だ。君たちから見たら、直接の後輩になるね」

「つてことはプロデューサー、あの後スカウトしに行ったのか……」
「行った」

いやに素直に白状したな。いやいいけど。事実なんだろうし。それが上手くいって、お互いに納得すくなら文句はないよぼかあ。

「戸羽君にはそのプロジェクトの担当になつてもらおう予定なんだ」

「ちなみにそれって何人いるん？」

「7人だよ」

「17人の間違いじゃなくてか？」

「担当してる俺が言うのもなんだけど、流石にそれは無理が出るからね」

実際、根津Pの目元には薄く隈ができている。仮にもアイドルプロデューサーらしく、メイクや何やには造詣が深いこともあつて、上手く隠してはいるんだけど……まあ、無理があるよね……常識的に考えて。

話を聞いて、うちのプロデューサーが17人を担当しているということも察したのか、三人はややヒいたようだ。そりやそうだ。ボクらだってヒく。もつと休め。

「じゃあ、それぞれ自己紹介してもらおうかな。白河さんから」

「ボクかよ……こほん。白河水菓です。一応は一年ほど先輩になりますが……まだボクも未熟ですので、どうかあまり気にせず話しかけてくれると嬉しいです。それじゃあ次晶葉」

「うむ。天才・池袋晶葉だ。趣味はロボット作り、特技もロボット作り

！ 肉体改造したくなったら私を呼ぶといい！ なんとかしてやろう、物理的にな!!」

「晶葉ステイ」

三人が呆気にとられている。と同時に、ボクも一年前のことを思い出して少し苦笑した。そういえばあの頃も、こんな自己紹介されて戸惑ってたな……。

「静岡出身の土屋亜子やでー。よろしくね!」

「……関西弁?」

「おっ、いいとこツツコんでくれるなあ。親が関西出身でね、アタシにもうつったわけよ!」

「はあ、なるほど……」

「じゃあ、次は新人さんの方をお願いしようかな。戸羽君」

「はい。砂塚さん、お願いします」

「あ……はい。砂塚あきらデス。配信とか……SNSとか、よくやつてます。どうぞよろしく……デス」

Akiraさん……もとい、砂塚あきらさん。よし、覚えた。

前に会った時にも思ってたけど、配信しているって割に大人しい雰囲気だよね。そこがまた独特というか、いい味出てると思うんだけど。

前回と違ってマスクは外してるけど、喋る時にちよいちよい口元を隠してるようだ。見たところ、歯が尖ってるのを気にしてるのかな？

輝子さんもそういうところあるし、特に気にすること無いと思うんだけど。

「はいっ！ 辻野あかり！ あかりんごって呼ばれますんご！ 皆さん、よろしくお願いしますんご!!」

……。

ちよつと待ってもらおう。一年前に感じたものを再びボクは味

わっている気がする。

んご？　ンゴ？　つまりアレか？　ろくちやんのアレか？　いやいやそんなことは……？

「晶葉」

「女子高生の間でLINEなんかで付けるのが流行ってるらしいと聞いたことはある。二年前くらいに」

「把握」

「二年ご!？」

思わず混ざっちゃってるけどもしかして使い慣れちゃったのかあかりさん。

「だからそれはちよつとって言ったのに……」

「友達から都会で流行ってるって聞いたのに……おかしいんご……」

誰だよ吹き込んだ友達は。可愛いから許されてる部分はあるけど色んな意味でこう……人によっては取り返しがつかないぞ。

……さて、問題は最後の一人、なんだが……。

「ヤバい……ううわ何コレマジのアイドルがいる……あああ……輝きに打ちひしがれる……やむ……」

「夢見さん」

「外見だけはくっそ健康に見えるかもだけど心はガラスのギリ10代！　学校辞めたい人生詰んでる！　そんなぼくがりあむちやんだよ！　よろしくパイセン!!　新人だから優しく優しくしてねッ!!」

「助手、佐藤を呼んでこい」

「残念ながら京都口ケだよ」

「菜々さんを」

「残念ながら京都口ケだよ」

そうか……しゆがしゆが☆みくんで京都ロケか……。
そうか……。

「ま、まあそういうことでだ。俺たちは今後の打ち合わせをしてくる。少ししたら戻ってくるから、その間みんなで交流しててくれるかな？」

「そういうことなら任せよう」

「ボクお茶淹れてくるよ」

「あ、手伝いますんごー！」

「いいよいいよ。みんなは座ってて」

こういう時のお茶汲みはボクの仕事だ。何せどんなお茶であろうとコーヒー豆であろうと、最適かつ最良の淹れ方ができるのだから。折角先輩になるんだしね。やっぱり良いところ見せたいし、カッコよく見せたい。いつかは仕事を奪い合うライバルって立場になるのかもしれないけど、だからって仲良くしちゃいけないことはない。これから同僚になるんだから、仲は良いほうがいいに決まってるだろう。

プロジェクトルームに置いてあるものはだいたい分かっている。給湯室の端の紅茶を手に取り、最適の淹れ方を確認。お湯を沸騰させることまではそう時間はかからないけど、ポットに注いだ後の「蒸らし」に数分ほど時間がかかる……けどいいや。どうせ誰も見てないしショートカット 錬成しちやえ。

そして最適な状態になったことを確認したら、お茶菓子を持ってみんなのところに戻る。こんな風にもボクがお茶を淹れたりするのはいつものことだと知っている二人はいつも通りにしてたけど、あきらさんたちはちよつと意外そうな面持ちだった。

「どうかしましたか？」

「なんとなく意外」

「番組とかではたまにやってるの見るけど、本当にやってるんだあつ

て思っちゃう……というかテレビの有名人と話してるんご……」
「ふふ。これでも料理くらいはできますよ」

カップにお茶を注ぐと、アールグレイの柑橘系のおいがぱつと部屋に広がった。

今回の御茶請けはフルーツ系のタルト。イチゴが満遍なく散らされているけど、これはアリスさんのためにボクが作ったものの名残だ。1/4ほどを渡した残りをお茶請け用にと置いておいたのだけど、ちゃんと振る舞える場面があつて良かった。

……と思っていると、晶葉が苦虫を噛み潰したような顔でこっちを見ていた。何なんだろう。

「何？」

「いつもの喋り方と違いすぎて据わりが悪い……」

「外部の人と話すときいつもこうだよ……」

例えば番組ゲストで出演してる時とかラジオの時とか……確かに事務所にいる時にわざわざ余所行きの喋り方にはしないけど、聞き慣れないってほどじゃあるまいし。

「いつもの喋り方？」

「うむ。まあ、普段はもっと碎けてるといっただけだ」

「碎けすぎやけどね」

「え、うそ……氷菓ちゃんってキャラ作ってたの……？ やむ……」

「そこまで作ってるわけじゃないんですけど……」

そもそも、本当の意味での……何て言うんだろ。こう……プライベートな部分って、それこそ察なんかで見せるようなものじゃないと思うんだけど。

あきらさんとは一応会ったことはあるけど、それでも殆ど面識はないに等しい。丁寧に應對する必要もあるし、別にボクは間違ったこと

してないんじゃないだろうか。

「アイドルって、やっぱり夢を売るお仕事ですから」

「すごいプロ感んご……」

「これが普段アベレージ一日アイス五本食べてる女の発言とは思えない亜子」

「せやな」

「#アイス狂発見」

「ちよつとちよつとちよつとお、もしかしてこの事務所そんなに甘やかしてくれるの!? 褒めて伸ばしてくれるタイプ!」

「……………晶葉」

余計なことは言わなくていい、と視線で訴えると、「まあ待て」とそのまま視線で語り掛けてきた。

……事実とはいえ、これがまかり通ってしまうとそれはそれでマズいと思うんだけど、何を考えてるんだろう？

「氷菓は特例みたいなものだぞ。そうしても構わないだけの経歴と実績があるからこそ許されているんだ」

「経歴とか実績って、どんなデスか？」

「仕事にだけは絶対に影響を出したことが無いんだ」

「あと、体形も体形だからむしろ食べられるもの食べたほうがええって言われとってねー。そのおかげで体重増えてるところもあるもんね、氷菓ちゃん」

「ん、まあ……そうだね」

「太る必要あるかな……?」

「お医者さんに『あんた十年後には骨粗鬆症と糖尿病でぽっくり死ぬわよ』って言われたら流石に気になって……」

「#突然の死亡宣告」

プロダクションに所属した当初の健診で言われたことである。だ

からあれだけ基礎体力と筋力をつけて、体重を増やそうとしている理由でもあるんだけど。

なので、プロデューサーはあまり例外は作りたがらないらしいんだけど、これはこれで仕方ないということで一応黙認はしてくれている。時々禁止されてるのはアレだ。月に2〜3回は訪れる突発的な衝動で、つい食べ過ぎてしまうせいだ。特に他県にロケに行ったりなんかで、滅多に食べられないであろうアイスを見つけた時にこの病気は発症する。ノルウエーで他のみんなが気付かないうちにアイスを五本買って来た時のアレだ。あの時は、時差ボケのせいとはいえ我ながらいつにもまして酷かった。我慢した後の反動も酷かった。

「あとな……昔のことがことだけに、あまり周りからも強く言えなくてな……」

「あー……」

「んぐ……」

「ぼくだって毎日つらくて死にそうだから特例に当てはまるよね？」

「話聞いてたのかキサマ」

大変だ、晶葉がまた（'？'）↑あんな顔になっている。

数か月ぶりに見たけどこの状態はマズい。とりあえず、ボクは気にしてないと主張して落ち着かせる。

実際、個人的にはそこまで気にしてない。多分晶葉はボクの前世のことまで含めて知ってるから、どうしても感情移入しちゃう部分があるんだろう。そういう視点で見えてくれるのは嬉しいんだけど、客観的に見ればそういうこと言われても仕方ない部分はあるんだ。

人の幸・不幸というものは、結局のところ各々の価値観でしか計れない。クラリスさんみたく心に余裕を持って、常に奉仕の心で、色々な人に分け隔てなく接することができるような人は、不幸に対して人一倍敏感になるだろう。それが理想的だと思うし、ボク個人も将来的にはそういう人間になりたいと思う。けど、そうじゃない人にまでそれを求めるのはお門違いだ。人は自分のことで精いっぱいな人が殆

どなんだから。

「とりあえずこの話はここで一旦終わりや！ はい、三人ともなんか質問とか疑問とかある？」

「あ、じゃあはい」

「はいあきらちゃん！」

「レッスンとかどうなってるんデスか？ まだ来たばかりで、分かってないんだけど」

「専門のトレーナーさんたちがおつて、その人らに教えてもらうのが基本かな。ボーカル、ダンス、ビジュアル……演技力とか表現力とかね？ あと、トークなんかのレッスンもあるよ。レッスン入れる日はトレーナーさんたちと相談して決めるかたちかな。アタシは基本は週四」

「私は基本週五だ」

「氷菓ちゃんはもうなんですか？ んご？」

「仕事次第になるけど、週三かな？ 基本的に、体力トレーニングですけど……」

あと、あかりさんは無理して「んご」を付けない方がいいのではないだろうか。

確かに強烈なキャラにはなるけど、同時にその印象ばかりが先行してしまうし……。

「#レッスン #把握」

「でも、アイドルのレッスンかあ……楽しみだなあ。あは♪」

「……あかりさん、レッスンはナメてかからない方がいいよ」

「え？ やっぱりきついんご……？」

「吐きました」

「えっ」

「初日に吐きました」

「ああ、あつたなあ……今となつては懐かしい」

「あんどきは本当にどうしようかと思っただよね」
「ほんとほんと。ボクもあんなに体力が無かったとは思わなかったよ」

あははあはは……と、そもそも談笑するような内容じゃあないけれども。

あかりさんは元よりあきらさんの顔もちよつと青くなってるのが分かる。りあむさんは相変わらず「やむ……」と呟いて俯くばかり。気にしてないのだろうか。

「当時の氷菓の体力がミジンコにも劣るレベルだったせいだから気にするな。普通の人間ならそこまではならないさ」

「無駄に辛辣」

「事実やからね……」

「事実んご!?!」

「過去形ですけど」

「そんな氷菓ちゃんがここまでなれるってことはつまりクソザコのぼくもトップアイドルになれるんじゃない?!」

「すごい調子に乗ってるぞこの女大丈夫か!?!」

「明らかにだいたいダメなやつデスよ」

「おまえらぼくに優しくしろよ! クソザコメンタルなんだから優しく優しくすこれ! よー!」

「うっぜ!!」

何なのだろう、りあむさんのこの……未だかつてない感覚と間合いは。あの晶葉が押されている。

そして晶葉は晶葉で、話の腰を折られ続けて見るからにやさぐれつつある。そろそろ（'?'）↑あの顔で固定されそうだ。

亜子さんは……若干引いてる程度か。それはそれで強いな。

気を取り直す……というか、もういつそあからさまなくらいに話題を変えるべく、あかりさんが手を挙げた。

「ど、どのくらいでデビューとか！ できますか？」

「レッスンの進み具合にもよるけど、目安としては四月末から五月末にかけて。夏フェスが最初の大舞台になると思います」

「夏か……熱中症とか大丈夫かな……」

「自己管理の範疇だが、基本的にうちの事務所はそのあたりの対策はしているようだ。安心するといい」

「暑いことは暑いけどな。あはは」

「暑いくらいなら木々のお世話で慣れてるんごー！」

なんと、あかりさんは農業経験者なのか。家のお手伝いとかだろうか。

言われて見てみれば、体幹にブレが無い。これならダンスはすぐに習得できるかもしれない。

アイドルになる前までの経験も、大事な財産なんだよね………ボクは殆ど積み立てが無かったがな！

「進み具合次第ってことは、やっぱり難航する人もいるってことデスよね」

「人によるからね。アタシも歌うのは得意なんやけど、なんか見せ方が良くなって……とかあったよ」

「……#不安の種」

「でもでも、他のユニットメンバーから遅れててもデビューはさせてもらえるかもだよね!？」

「何でそう思ったんですか？」

「だってエリクシアのデビューの時晶葉ちゃん他の二人に比べてあんまり上手くなかつ」

「取り消してくれるかな……今の言葉……」

「落ち着け氷菓！ 表情が完全に抜け落ちてるぞー！」

「落ち着いてるよ。ボクは冷静だ」

「クールっていうかコールドな方になってるから落ち着いて、な!？」

あいつ晶葉を馬鹿にしやがった……！

初対面だぞ。付き合いの長いボクらがネタにするならまだしも——オマケに曲がりなりにもアイドルになろうかって人間が、観客目線で勝手に評論しやがった！

そこに愛があるかと言われれば絶対にノウだ。晶葉の努力をずっと間近で見してきたボクが、天才を謳うからには、つてずっと理想と現実のギャップを埋めようと努力してきた晶葉の頑張りをコケにする発言を許しておけるか！

「大丈夫だ……ボクは冷静だ。ボクは、冷静だ。メルクリウス閥属性ダメージ（特大）／味方全体に吸収効果一発で済ませる」

「新奥義出すくらいキレてるぞ!」

「奥義って何や!？」

「たすけてPサマ！ 後輩いびりされてるよお！」

「#炎上芸 #自業自得」

「こ……こわいんご……」

落ち着け。ボクは冷静だ。冷静になれ。エリクシアの良心と言われる自分を思い出すんだ。

自分を落ち着けようと、震える手先で眼鏡を取る。あまりの怒りに目頭が熱くなってくるが堪えよう。堪え……堪え……チクシヨウめええ——っ!!

数分ほどをかけて、晶葉の説得のもとどうにか落ち着いた。

ボクもボクで、もう少し沸点を上げるべきかもしれない。大概沸点は高い方だと思ってただけど、身内、特に志希さんとか晶葉とか、ないしは家族のことを引き合いに出されると、どうしても一瞬で沸騰してしまうらしい。

「そもそも、ライブパフォーマンスに関しては志希たちがおかしいだけだ。私は一般天才だからな」

「一文で矛盾を引き起こしとるで」

「やかましい。私はAクラスの天才、志希たちはSクラスの天才と覚えておけばいい。そもそも直観像記憶とか反則だろう」

「そのくらいできないとやってけないデスか……」

「そんなことできないアタシとかがいるから大丈夫やって」

「できない人の方が圧倒的に多いんご……」

「そういうわけだから四月末は例外とってくれ。通常は五月初めから終わりにかけてくらいが目安だな」

……ボくら例外だったのか。

いや……改めて考えると例外つちや例外だけどき……こずえちやんとか、芳乃さんとか、志希さんとか……。

聖ちゃんも何事もなくついていけてたし、晶葉はあれに食らいついてたし、そうか……よく考えると例外って言われてもしようがないか……。

その後、小打ち合わせを終えてプロデューサーたちが戻ってきたことに内心感謝しつつ、りあむさんの炎上芸というか煽り芸というか……そういう部分をもうちよつとなんとかするように戸羽Pに頼んで、今日のところは解散になった。

なった。のだけれど。

「そうか、二人は寮なんですね」

「そうですねー！ 山形から出てきたので……」

「自分は新潟デスから……氷菓サンはどこから？」

「施設」

寮への帰り道の車の中、ふとした瞬間に放った一言によって空気が死んだ。

夕焼けに染まる、どこか寂寥感を覚えるような色合いの空が、今のみんなの心境を表しているようだ。

……しまったなあと思いつつも、しかし、同僚になるんなら言つて

おかないとなあ、とも感じはする。

「あれ、あの……あれ。ニユースとかで言ってたのって……」

「半分嘘。本当はあの直前に養子に入ったんです。だから本名は白河じゃなくて古宮氷菓」

「き、聞いてよいっけの……？」

「346プロに入ってアイドルになるならいずれは知る話だろうし、ボク自身は気にしませんから」

むしろここで知っておかないと、変に歪んだ情報を仕入れてしまう可能性もある。

ボク自身のことなら何とも思わなくても、例えば先生に対して何か誤解されてしまうのは避けたいし……多少は仕方ない。

さて、言うべきことは言ったし、ちよつと話は変えよう。

「それで……転入は新学期から？」

「はい。なんか後輩で同級生っていうのも、変な感じだけど。よろしくお願いしますです」

「私も私も。よろしくお願いします！」

「うん、改めて、よろしくお願いします」

色々とおったけれども、まあ、初めてのことだ。距離感が分からなかったり、接し方が分からなかったりするのも致し方ないこと。

これから色々学んで、色々と経験する中でそういつたことを理解していく……はず、だと信じたい。

ボクらもそろそろ新人と呼ばれる時期は終わる。日々、学ぶことは尽きないけれども、それでも一つの区切りだ。学んだことを活かして、後を歩く人たちに伝える立場になっていく。そのことに不安を感じないわけじゃない。でも同時に、高揚感もあった。今までずっと後ろから先輩たちについていく立場だったからこそ、だろう。

——この日、ボクは初めての後輩を持った。

番外：ろく☆ちゃんねる抜粋（10）

《スターライトプロジェクト総合スレ その112》

168 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

（スウー…）

169 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

はい…名無し成仏します…

170 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

どうしてこんな大虐殺が

171 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

虐殺じゃないぞ

成仏だぞ
172 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

何が起きたというんだ

173 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

← 都内でクリスマス特別ライブ

← メンバーがクラリスさん・聖ちゃん・イヴさん・こずえちゃん・氷

菓ちゃんの五人

← 心に闇を抱えた観客は死んだ

174 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

346は何なの俺らを皆殺しにする気なの

175 会員番号774番目 20XX/X X/X

>>174

お前ゾンビだったのか:

176 会員番号774番目 20XX/X X/X

生死とか関係なく成仏させられるやつでは

177 会員番号774番目 20XX/X X/X

ニフラムか何か

178 会員番号774番目 20XX/X X/X

ニフラム!ニフラム!

179 会員番号774番目 20XX/X X/X

(スウー...)

180 会員番号774番目 20XX/X X/X

このメンツ相手にどれだけの間が耐えられるというのか

181 会員番号774番目 20XX/X X/X

耐える必要ある?(消滅しながら)

182 会員番号774番目 20XX/X X/X

Q. 神はいると思う?

A. ステージで見た

183 会員番号774番目 20XX/X X/X

>>182

神っていかどっちかっていうと天使じゃ

184 会員番号774番目 20XX/XX/XX

>>183

神ではない

光だ

185 会員番号774番目 20XX/XX/XX

クラリスエ!!

お前は俺にとっての新たな光だ!

186 会員番号774番目 20XX/XX/XX

>>185

(行儀よくサイリウム振りながら)

187 会員番号774番目 20XX/XX/XX

>>186

シニールすぎて草

188 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ビンゴ大会当たったやつおりゅ?

189 会員番号774番目 20XX/XX/XX

サイン色紙貰ったぜ

190 会員番号774番目 20XX/XX/XX

全員分のサイン入りバッグ貰ったよ

うれしいけどちくしょう勿体なくて使えねえ

191 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ワイハー行きのワイ疎外感を覚える

192 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID :

>>191

おめでとう

良かったじゃないかハワイだぞハワイ

193 会員番号774番目 20XX/X X/X

ID:

良い場所だぞ去年行ったから知ってる

194 会員番号774番目 20XX/X X/X

ID:

そこにアイドルはいないがな!!

195 会員番号774番目 20XX/X X/X

ID:

>>194

ひでえ

196 会員番号774番目 20XX/X X/X

ID:

ティツシユ当たった

g f f今日はこれで

197 会員番号774番目 20XX/X X/X

ID:

>>196

禁固よー

198 会員番号774番目 20XX/X X/X

ID:

当人に何もしてないのに即逮捕とは酷すぎやしないか

199 会員番号774番目 20XX/X X/X

ID:

あの五人は穢してはならないのだ

200 会員番号774番目 20XX/X X/X

ID:

でも清らかなものを汚したいヴァンダリズムみない?

201 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

無いよ

202 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ちよつとわかる

203 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

○さなきや

204 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

おのれデイケイド!このスレも性癖の対立で破壊されてしまった

!

205 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

というわりに荒れないよね

206 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>205

最初から性癖の坩堝みたいなプロジェクトだし:

207 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

どんな人があのメンツ揃えたかは知らないけどきつとド変態だと思

208 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

熱い風評被害

209 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

でもアイドルプロデューサーって変態しかなれんやろ(偏見)

210 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

偏見と愚弄がすごい

211 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

おまえらよく考えろよそのPがいなけりゃ俺らはアイドル見られないんだぞ

212 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

俺たち愛でイジってるから

213 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

その愛だいぶ歪んでない？大丈夫？

214 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

そら（本当は俺らもアイドルとお近づきになりたいんだし）そうよ

215 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

くそっ正気なのは俺だけか！

216 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

この掲示板にいる時点で正気など存在しないことに気付

217 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

お前も「スレ民」だ（腹パン）

218 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

RAM

きれいどころ集まりすぎで尊み……

219 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

綺麗すぎて懺悔したくなる

220 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

綺麗すぎてそういう欲を抱くこと自体気が引けるよね

221 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:
RAM

RAM

ひよかちゃん久しぶりに推し変せずに応援してるけどお前ら誰から推し変したの？

222 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

だから推しは増えてくもんだつつつてんだろオラアン!!

223 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ちよつと何言ってるかわからないですね

224 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

楓さんから始まりラブライカとエリクシアと応援してますが何か

?

225 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>スターライトプロジェクト全員応援してますが何か？

226 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:
RAM

RAM

いやいや冗談だろ？

アイドルの推し変しないやつとかいねーから！

227 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>>226

お前の周りだけだろ

228 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

応援する分には誰が何応援してもいいが〇〇切ったわwww的な

こと言い出すの好きじゃない

2 2 9 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

四六時中金注ぐようなもんじゃないしな

金注いでたわ

2 3 0 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

確かに氷菓ちゃんファンやってると金は消し飛ぶがそれとこれとは別だよ俺ずっとNG追ってるし

2 3 1 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

だいぶ昔からずっとアイドル追ってるけど考えたことなかったなー

そもそもアイドルって金が無いから応援しないとかそういうのじゃないし

2 3 2 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

***RAM

##このレスは削除されました##

2 3 3 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

管理人乙

2 3 4 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

管理乙

ところでお前ら金どうしてるの?手取り少なすぎて辛いんだけど

2 3 5 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

副業を少々:

2 3 6 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

必要に応じて預金が削れていく

237 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ごめん実はそこまで頻繁には買えてない

238 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

株かな:

239 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

FXで有り金前部溶かした

240 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

会社経営楽しいぞ

241 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

俺は預金ポイントを全て捨てて346プロの株主総会を発動する

ZE!!

これがフアンの最終進化系だ

242 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

やべーやつらが来た!

243 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

このスレたまに異次元の存在が来るから怖い

244 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

別に怖くないよ大丈夫大丈夫

というか株持ってれば誰でも総会は参加できるからなそんな金は

かからん

245 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

そもそも一株単位で売ってるわけじゃねーから普通に買おうと

思ったら数万円から数十万はかかるんですがそれは

246 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ちなみに今の346っておいくらで…?

247 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

どれだけ少なく見積もっても六ケタはあった気がする

248 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ヒエツ

249 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

何でスタラ関連スレしよっちゅう石油王じみた人が現れるんだろ

うね…

《白河氷菓ちゃんを見守るスレ その315》

621 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

AKR

すみません

この前のコミケで氷菓ちゃんのいる企業ブースに行ってきたので
レポよろしいでしょうか?

622 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

おk

623 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

待ってた!

624 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

コミケ行けなかったからはよ!

625 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

AKR

最初はグラレフのユリアーナさんの格好で登場。ヤンデレ感がすごかったです(こなみ)

新情報の発表もありましたが、そちらはソシャゲのスレの方でお願いします。

今回はライブなどは無くて、すぐに物販でした。幸い私は最初の方に並ぶことができましたので、比較的待ち時間は短かったと思います
戦利品がこちらです

ttp://****

626 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

トートバッグとビジュアルブックか:前から気になってたけどソシャゲは結局手が出なかつたんだよねー

氷菓ちゃん出てるならやってみようかな?

627 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

今なら二種類の氷菓ちゃんが楽しめるぞ

628 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

AKR

兄もハマってるのでオススメです

続き

←

この時は氷菓ちゃんから直接受け取りましたが、手も身長も思った以上に小さくて驚きました

で、驚くべきことに、私はどうやらCODやってる時に氷菓ちゃんと偶然遭遇してたようなんです

ボーイチャの声が同じだったとかなんとか:これって判別がつくも

のなんででしょうか？

「ゲームをやったら偶然氷菓ちゃんと遭遇する可能性がある」ということが現実になったということですが、正直未だに何がなんやらという心境です

とりあえず報告としては以上になります

6 2 9 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

マジかよ C O D してきます I D :

6 3 0 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

マジかよ モンハン してきます I D :

6 3 1 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

マジかよ キンハー してきます I D :

6 3 2 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

>> 6 3 1

ソロ用じゃねえか!!

6 3 3 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

現実的にそんなことあり得るの？

6 3 4 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

一緒に遊べる確率は 0 パーセントと表示されるが、現実では小数点以下を切り捨てているため、小数点以下の確率で遊べる

6 3 5 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

>> 6 3 4

やめやめろ!

6 3 6 会員番号 7 7 4 番目 2 0 X X / X X / X X I D :

流行りのゲームとかやってたら遭遇するってこともありそうだよ
ね

前にななで見たけどやっぱ上手いんだろうな

637 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

AKR

遭遇したら即死を覚悟しなきゃいけないキャラでした:

638 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

遭遇II死て

639 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ゴルゴか何かか

640 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ゴルゴだつて遭遇しただけじゃ撃ち殺されないだろ!

641 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

より恐ろしい何かだよね

642 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ええい電子の世界で氷菓ちゃんに勝つ方法は無いのか!

643 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

こんな時は紗南ちゃんに倣うんだ

絶対に回避できないタイミングで回避できない物量を用意すれば

...

644 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>643

それができたら世話ねえよ

645 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

そもそも勝つ必要あるんですか？（真顔）

646 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

そんなもん氷菓ちゃんより楽しむために決まってるだろ何言つてんだお前

647 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

上級者同士の対戦は楽しいからな…

648 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

楽しむ（そのままの意味）

649 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

対戦（そのままの意味）

650 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

意味深でもなんでもないのか…（困惑）

651 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

相手はアイドルだからな

ふしだらなことができるわけないだろ

652 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

妄想ネタで勝手に曇ってた頃のお前らはもつと輝いていたぞ！

653 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

今も妄想は止まってないんだよなあ…単に今そういう流れじゃないだけで

654 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

今でもすぐにできるぞ

そもそも今回のコミケに来たのってソシャゲの情報公開だけだろ？

それだけなら生放送なり何なりした方がいいわけだ。けどあんな場所に来たってことはつまりそういう

6 5 5 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID :

分かったからやめろ
6 5 6 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID :

俺が悪かった
6 5 7 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID :

ところで話変わるし結構スレチになるけど荒木先生の本買った人っている？

グラフィのファウストらしいんだけど
6 5 8 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID :

荒木比奈先生は出てないだろ
あらかわふな先生は出てるけどな

6 5 9 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID :

いやそれペンネーム……
6 6 0 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID :

あらかわふな先生だ。いいね？
6 6 1 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID :

アツハイ
6 6 2 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID :

アツハイ

いい本だったよ

司令×ファウストいいよね

663 会員番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

お互いが特別だからね

664 会員番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

でもこれホモじゃ

665 会員番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

司令は男時代知らないからホモじゃない

ファウストはホモ

666 会員番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

俺ホモでもいいや

667 会員番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

ところであらかわ先生のスペースに委託してたロボ同人誰が描い

たん?

名前で検索しても全然出てこないんだけど

668 会員番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

分からん：いや本当に分からん

タッチがあらかわ先生に似てないこともないから別名義って説が

今のところ有力

669 会員番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

ふな先生そんなに描く暇あるの……??

670 会員番号774番目

20XX/XX/XX

ID:

今回のも結構突貫工事だったけど友達に手伝ってもらったつてあ
とがきに

671 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

友達つて誰だ

いややっぱいい特定したくない

672 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

実はそれも氷菓ちゃんだったのだ

とかだと夢があるよね

673 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

流星にないわマンガ書いたこと無いでしょ

674 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

一朝一夕でこのロボ描写ができるわけがないと思う

ttp://*****

675 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

何コレしゅごい:

676 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

夢はあるけど流星にこりや無理だわ

どこにいたのか分からない凄腕の無名作者の委託だな

677 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ふな先生が修羅場入ったあたりで氷菓ちゃんがフォローしてたん
だけど

これは関係ないよね...?

678 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

それ言うなら晶葉ちゃんとのあさんもだ
つまりこれ描いたののあさんでは？

679 会員番号774番目 20XX/X X/X
*** ID :

ありうる…

680 会員番号774番目 20XX/X X/X
*** ID :

晶葉ちゃん製のロボという可能性

681 会員番号774番目 20XX/X X/X
*** ID :

氷菓ちゃん（池袋博士のロボ）
のあさん（池袋博士のロボ）
なるほど

682 会員番号774番目 20XX/X X/X
*** ID :

だからロボじゃねえって！

683 会員番号774番目 20XX/X X/X
*** ID :

ところでお前らお正月グラビア見た？（唐突な話題転換）

684 会員番号774番目 20XX/X X/X
*** ID :

楽しそうに餅つきしてるなあって

振袖似合うよね

685 会員番号774番目 20XX/X X/X
*** ID :

（体の起伏が少ないから）振袖も似合うよね!!

686 会員番号774番目 20XX/X X/X
*** ID :

>>685

おいばかやめろ

687 会員番号774番目 20XX/X X/X
ID :

エリクシアでついたおもち食べたい

688 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:

エリクシアのおもち(意味深)たべたい

689 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:

氷菓ちゃんのおもち...

無い...

690 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:

>>689

何でお前そんな残酷なことが言えるんだよ!!

ほんのりあるやろ!!!

691 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:

>>690

お前もだいぶ残酷だぞ

692 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:

ま:前に比べたら育ってきてるし:

《ドッキリチャンピオン感想スレ その37》

33 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:*

どうして全部回避してしまうんですか:

34 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID:*

そんなに美術の作りが荒かったんだろうか

35 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

実はNTか何かとか？

36 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

スタジオで見てたクローネとかスタラの面々が「氷菓ちゃんならやる」って断言してたのがまた腹筋に悪い

37 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

直後に流される幸子プレイバック(ダイジェスト)

38 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

ぬれさちこはカワイイと思いました(こなみ)

39 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

でもこの季節に水濡れはやべーと思うの

40 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

幸子オ！暖かくして寝ろよ！

41 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

幸子!!風邪だけは引くなよ…

42 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

おまえら幸子の扱いがこう絶妙だよね

43 会員番号774番目 20XX/X X/X X ID:*

**

好きだからついついじめたくなっちゃうだけだからな
行き過ぎるとただのいじめになるからね

そのライン見極めなきやダメよ

44 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

ドツキリってそんなにかかりたくないものなんやろか

45 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

氷菓ちゃんの場合ひっかかりたいひっかかりたくないというよりは単なる天然と思われる

46 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

悪意に敏感なんじゃないか

まあドツキリなんだから誰も悪意で驚かそうとしてるわけじゃないんだけど:

47 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

それだけ悪意を目にする機会があつたことでヴァツ

48 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

トカゲ見ても特に嫌がらなかったのになぜか興奮した

49 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

まあ天然よね:

お約束を理解してないわけじゃないんだろうけど

50 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

ライブのパフォーマンスがダメってわけじゃないからな

51 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

奏ちゃんの借りたDVD完璧にZ級映画だったのに普通に楽しんで見てた話する?

52 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

ドッキリになってなかったよなあれ

53 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

とか346プロドッキリがドッキリにならない人多すぎる

54 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

ドッキリの意味が無いドッキリとは

55 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

視聴者が楽しんでるんだからいいんだ

法律相談なんてほとんどしない法律番組だつてある

56 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

>>55

それ以上いけない

57 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

おまえらみくにやんのことにも触れてやれ

58 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

みくにやんが変な目に遭うのはいつものことだし:

59 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

笑ってあげるのがみくにやんへの供養やと思います

60 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

何でみくにやん死んでまうん?

61 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

殺すな殺すな

62 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

しかしアイドルが落とし穴に簡単に引っ掛かるのもそれはそれで偶像としてのプロ意識が欠如しているという見方も

**

63 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

ヨゴレもできないと最近生き残れないからな

**

64 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

ヨゴレじゃない方がいいのは間違いないと思うんですがそれは

《346プロ新春かくし芸大会感想スレ》

92 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

何で毎年毎年進化し続けてるんだよこのバカ企画!!

93 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

まさかのアさんが急に演歌を歌い始めるとはな…

94 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

晶葉ちゃんのおれってやっぱリアルだよな

猫がルンバの上に乗って移動してるやつ

95 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

あーあれってそういうことか!

いきなりネコミミで何事かと

96 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

気付いてやれよ:

ところで氷菓ちゃんのあのダンス積み上げるのって物理的に可能な技術なん?

97 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

可能か不可能かと言えば可能
回転させながらは意味が分からん
何アレ

98 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

かくし芸のはずなのに普段隠してすらいない人たちがいる気がするんですがそれは

99 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

南条君とか

さかなちゃんとか

100 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

しゅがはとうサミン

強かった

101 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

>>100

一言では言い表せないけど何なんだろうアレは:

強いとしか言い表せない

102 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

ダンスはキレッキレでギターもそこそこ上手いという...どこにその能力隠してたんだ

103 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

隠していたのではない

見せる必要が無かったただけだ

104 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

そういえばミラケのガールズバンド風PVってあれ本当に演奏してたんだったか

105 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>104

はえーすっごい…

106 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

相変わらずのユツコ

やってる演目と関係なく多発する超常現象

これは最早サイキックでは？（錯乱）

107 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ノットサイキック

自分が意図して起こしたことじゃないと意味が無いのだ

108 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

何でナチュラルに超常現象が受け入れられてるの…

109 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

お嬢が親指取れる手品やってたのは笑っていいトコ？

110 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

春菜ちゃんは相変わらずだな

本当に前の年から変わってねえ

111 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

即興で会場のお客さんに似合う眼鏡を選んだのが去年

即興で会場のお客さん全員に似合う眼鏡を選んだのが今年だ間違えるな

112 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

頼子ちゃんが吉岡君と組んでグラフィティ始めた時はおどれた

113 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

あの子あんなハジけたこともするんだな:

114 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

茄子さんと歌鈴ちゃんと芳乃ちゃんの三人だけならともかく聖ちゃんとかラリスさんまで混じって歌い始めた時はいろんな意味で死ぬかと

115 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

ここのところ光に焼かれて死にかけるゾンビファンが多いな

116 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

法子ちゃんと響子ちゃんが髪型と小物入れ替えた時誰か分かった?

117 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>116

自信はあったんだが

118 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>116

あの二人実は姉妹とか無いよな

119 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>> 116
俺は分かるぞ!!
声で

61：ボクのミチシルベ

「アメリカ留学ですか？」

「そうだ」

妙に分厚い雲が空を覆っていた日のこと。連絡を受けて専務さんの部屋に向かったボクに、一つ、提案がもちかけられた。

曰く——半年間の芸能留学。

思いがけないところから発せられた思いがけない提案だけに、ボクの受けた衝撃は大きい。留学って……そういうのは普通、もつと経験を積んだ人が行くものなんじゃ？

いや、それだけじゃなくて。こう……言語化がちよつと難しいけど……うん、釈然としない。何でいきなり専務さんは、ボクにこんなことを……？

「不満か？」

「不満、というか……分からないんです。ボクはまだ、二年目に差し掛かる、かもしれないってくらいのキャリアの新人ですよ。何で留学を……？」

「君の実力に期待しているから、ではダメかな？」

そう言われると……まあ、嬉しくないわけがないんだけど。

「確かに君は新人だ。キャリアも浅く、業界にコネがあるわけでもない。だが実力は本物だ。この一年の活動は上々……おかげでプロジェクトも成功と言っていいだろう。だからこそ、更なるパフォーマンスの向上と……海外にコネクションを持つためにも、しばらく経験を積んできて欲しいと考えている」

「コネですか……」

『人脈』と言い換えてもいい。ハリウッド、ブロードウェイ……そういった場所に顔を通しておくことは決して悪い経験にはならないはずだ」

「……なる、ほど」

「日本と比べると、アメリカの聴衆はより『完成されたアイドル』……完璧で、手の届かない……星の輝きのような存在を求める傾向にある。私のイメージと合致する君ならあるいは、アメリカの芸能界にも食い込めると考えているのだけだ」

す……凄まじい評価を受けている気がする。氷菓だけに……。

いや違う、くだらない駄洒落を言ってる場合じゃない。大事なのは、専務さんがこんなことを持ちかけてきているという事実だ。

元々アメリカにいたらしい専務さんにとって、あの国は特別なものだろう。経営方針だったり価値観だったり、多くを学んで来た土地だ。同時に、アメリカにおけるアイドルの在り方も、専務さんは良く知っているはず。

その上でボクなら通用する、と言ってくれているのはとても嬉しいことだ。その、はずなんだけど……。

「あまり納得できていないようだな」

「え、いや、その………はい、少し」

「理由を聞かせてもらっても？」

「大きな理由は無いんです。なんだか胸の奥で何かつつかえてるみたいで……」

ひどく曖昧なボクの言葉を聞いても、専務さんは表情を変えることなく、しっかりとボクの目を見つめて話の続きを促した。

「嫌だというわけじゃないんです。ただ、なにぶん突然のことなので……今すぐにお返事ができそうにありません。ごめんなさい……」

「構わないわ。こちらでも結論を急ぎすぎた。特にあなたくらいの年頃

の子供には、考える時間も必要でしょう。ゆっくり考えて、それから結論をくれればそれでいい」

「はい。それで、時期は？」

「予定では9月からになるけれど、どうかしら」

「……検討してみます」

「ええ、よく考えるように」

「すみません。それでは……失礼します」

一步下がって一礼し、部屋を出る。それから少しの間、ボクの頭の中はぐっちゃぐちゃだった。

あんまりにも突然なアメリカ留学の提案、やたらと褒めてくる専務さん。何の知識も無しに状況だけを見れば何の罨だと思うかもしれないけど、ボクは専務さんが伊達や酔狂や冗談であんなことを言う人じゃないことは知っている。本気でそれがボクや会社の利益になると考えてくれているし、実際その通りになるのだろう。

それでもなぜか、何かが引つ掛かる。

専務さんに対してじゃない。多分、ボク自身の問題として、何かが。多分、一年前だったら、こんな風に気にすることもなく、じゃあそれで——ってことで、すぐに話も終わってしまったと思う。あの頃はそれで困ることも無かったし。

じゃあ、今は？

……全く思い当たらないってワケじゃない。

ボクだって、これでもそれなりには成長してるつもりだ。その過程で、無くしたくないものや離れがたい人ができた。執着心が生まれた、とも、心が俗世に染まった、とも言えるけれど……どっちにしても、ボクにとってそれらは受け入れるべき変化。成長の一種だ。多少変な方向に進んでることは気にしない。

何にせよ、そこにあるのは「あまり行きたくない」という気持ちには違いない。

じゃあ行かなければいいんじゃないかと言うと、それも違う。行きたい気持ちはあるんだ。専務さんから直接言われたことだし、海外に

興味が無いわけじゃない。期待をかけられているのは間違いないよ
うだし、期待されているからには応えたい気持ちはある。

日本には無い表現技法を学ぶ機会も増えるだろうし、それによって
今後、ドラマや映画を撮る時の助けにもなる。コネって部分で言え
ば、今後の活動の幅を広げたり、おじじの会社を発展させるのに役立
つだろう。

だから、「行きたい」という思いがあるのも、間違いない。

「矛盾してるよ……」

自嘲するように、吐息が漏れる。

人間の心はそういうものだ、っていう感覚はあるけれど、やっぱり、
頭の中を整理しきれないと苦しい。

思えばボクは、ずっとそういう痛みからも逃げてきたんだよな……
いや逃げてきたっていうか、単にただ知らなかったただだけけど。それ
が良いか悪いかで言えば……いや、良いとも悪いとも言えなくて、あ
えて表現するなら「マズい」っていうか。善悪の二元論で語り切れる
ものではない気がする。

……参ったな。

今までならもうちよつと、結論だけは早めに出せてたはずなんだ。
道筋をどうするか、つてところを迷ってはいたけれど。

けど、現状はちよつと勝手が違う。道筋を立ててくれてるけど、そ
こを歩いていこうという決心が湧かない。今までとは真逆だ。ボク
はいったい、どうしたらいいんだろう？

染み一つ無い綺麗な天井を眺めながら、レッスルームへ向かう。
春フェスも近いし、練習もしなきゃいけない。念願のエリクシアで
の新曲だ。絶対に成功させたいし、成功させなきゃならない。だとい
うのに……。

「あ——……」

この日は、結局その後も悩み続けて、ちよくちよくゾンビのようなうめき声をあげるハメになってしまった。

レッスンは完璧に終えた。

@ ——— @

後日、ボクは自分の部屋の机に突っ伏していた。

口からは声とも何ともつかない謎の音が漏れている。昨日はいつもなら八本は入るはずのアイスも五本しか食べられなかった。

鬱だ。いや違うか。何にしろ、いまだかつてないレベルで悩んでいる。

……とはいえ、いつまでも悩み続けてるわけにもいかない。なので、今日はある人たちを部屋に呼んでいた。クラリスさんとしゅがはさんだ。

「いつまでもその調子では事態は動きませんよ」

「分かってるよお……」

当然つちや当然なんだけど、クラリスさん、いつもと比べてちよつと厳しい。

ここまで情けない姿を見せたのは初めてだ。失望されるかもと思っただけ、正直、こういうときに頼れる相手と考えるとパツと思いつくのはクラリスさんとかしゅがはさんくらいだ。

勿論、晶葉も志希さんも大事な友達で、頼りがいのある相手だし、能力も持ち合わせてるんだけど……二人と話していると結局話が脱線するだろうし、今のボクじゃまともに言語化もできないだろうから、先に大人に話を聞いてもらいたかったというのがある。

「はあとならとつと行くけどなっ☆」

「そうなの?」

「こそ。だってアメリカだよ? ハリウッド! ブロードウェイ!

コネ作るのにうってつけでしょ☆ そりゃあ行くでしょっていうか代わる?」

「いけませんよはあとさん」

「うーっす」

「……そうだよね……そういうチャンス、だもんね……」

うん。それは分かっている。話を受けた時に、それはすぐに思った。そういう部分では間違いなくチャンスだって。

でもなあ……でもなあ……。

「なーにが嫌なわけ? ほら、あいすちゃんに期待してるってことじゃん☆」

「何が……うーん……うん、そこがちよっと、言葉にしづらくなって……」

「では、少し順序立てて話して参りましょうか。今回のお話で、良いと思ったところはどいうった部分ですか?」

「歌とか、ダンスとか、演技とか……そういうレベルの高い技術を直接目で見て学べること。将来の仕事のためにもなるし、コネが作れる。おじじとか、専務さんとか、色んな人のためにもなる……」

「では、留学しないことで、どいうった良いことがあるでしょうか?」
「みんなと一緒にいられて……仕事も途切れない。後輩になるみんなとも交流ができる……」

「でもそれ半年くらいなら誤差じゃん?」

「うー……」

……誤差、かもしれないし、そうじゃないかもしれない。

中学生の……思春期における「半年」っていうのは、そこそこ大きなものだ。それだけの時期離れてたら、みんなから忘れられてしまうんじゃないかって不安だし、これが原因で嫌われたらそれもどうしようって不安だし、でもみんなならそんなことないんじゃないかって思いもあるし……。

考えがまとまらない。机の上で頭がごろごろ動き回っていく。話を聞く中で何やら考えをまとめているらしいクラリスさんとは対照的に、しゅがはさんはシロをモフっていた。

「客観的に見て、一時的なものなら留学の方に利がありますね」

「……そうかなあ」

「ええ、そうです。結局のところ、氷菓さんは『みんな』から離れたくないだけのようですから」

「え」

「あー、そんな感じするよね。あいすちゃん友達大好きすぎるし☆」

「え」

「違うん……?」

え。

あ、いや、その、そういう気持ちが無いって言ったたら嘘になるし、否定……するわけにもいかないんだけど。ボクそこまで友達大好き！な人間じゃ……じゃ……。

……いや。違うだろ。そうじゃない。そこを否定するのはダメだ。分かってる。自分自身のことだ。どうかこうとか言う以前に――

——こんなただの照れ隠しでしかないって。

そうだ、ただの照れ隠しなんだよ。その程度のことです直になれなくて、心がきしんで、焦って、どうしたらいいか分からない。

だからこんなに悩んでるんだ。こんなにも分かりやすいことで、こんなにもどうしようもなく……。

「すっ……きら、いじゃない……し……」

「もつとはつきりと」

「……大好きです。今度は嘘じゃないっす」

「茶化さずに」

「うー……好きだよ！ 大好きです！ みんなのことが好きだから離れたくないんです！ ……何のお山あ!!?」

顔が真っ赤になっているのが分かるくらい熱い——のを感じるのと共に、見れば、すぐ目の前にしゅがはさんの胸。わ、と声を上げる間も無く、そのまま抱き締められてしまった。

「あ——っもういじらしいこと言っちゃってー！　くのくのーっ☆」

「むむーきゅっ!?　むーっ!?」

「心さん。氷菓さんの息が」

「あっべっ」

「げほっ!!」

あ……危なかった。幸せそうな死に方をするとところだった……蘇生するけど……。

いやこれ蘇生してもまたすぐ死ぬな。物理的な問題で。息吸えないし。いや吸えるけどそれしたら人間として死ぬな。

……変なところで変な弱点が判明してしまった。いや、肺に直接空気を錬成すれば死にはしないんだけど。

「あーんもう連れて帰ってよっちゃんと一緒に妹にしたーい☆　お姉ちゃんって何度でも呼んで☆　呼べ☆」

「助けてクラリスさん！　姉を名乗る不審者が！」
「半分は自分のせいだと言っておきましょう」

確かにこの状況、言ってみれば、ボクが普段からあまり自分の想いを表に出さないせいで起きてしまったことだとも言える。

けど、だからって助けてくれないのはいかかなもんだろうか。そりゃ抜け出そうと思えば抜け出せるけど……。

「……偉そうに言いはしてみました、あくまでそれは氷菓さんの一側面に過ぎません。あなた自身のごことはあなたしか分かりませんし、必ずしもその気持ちの通りにするべきとは限りません」

「え？ ……あれ？ ……じゃあ今言わせた意味は？」

「それを自覚した上で、決めてほしかったのです。氷菓さんは自分のことになると途端に疎くなりますから」

「……そうだね。さんざん言われたから知ってる」

……知ってるからって何か自分で対策が打てるわけじゃないけど。だからこれも、ある意味では強がりと言える。

それをよく分かっているせいか、クラリスさんの笑顔はどこことなく生暖かい。自分でどうにかなると思っただろう。実際どうもこうもならないからどうしようもない。その上でアドバイスしてくれてるのだから、感謝に堪えないのだけだ。

「どのような選択でも、いずれ後悔はするでしょう。勿論後悔しないことが最善ですが……人間とはそういうものです。あの時ああしていたら、と。たとえそれが後から見つめ直さなければ気付けないことであろうとも、後悔する。人間は完璧な存在ではありませんから」

居住まいを正して、クラリスさんの言葉を静かに聞く。クラリスさんもまだ二十歳という若い年齢ではあるのだけれど、その言葉には不思議と経験から来る重みを感じられた。

むしろ、そう感じているのはボクの人生経験の軽さのせいだろうか。前世と今生で合計三十年弱。まともに人間として暮らしたのはこつちに来てからだ。それだって、あちらでの出来事を引きずってたせいで、大した感慨も抱いてなかったと思う。

でも、思い返してみれば、アイドルになってからは色んな経験をして——そう、今思い返すと、後悔は多い。

ドラマだって、最初から脚本や演技をより良くするための方法を提案できたかもしれない。ラジオでも口下手だっただろう。バラエティは未だに苦手だし、歌番組でもトークは他のメンバーが主にやってて、ボクはあまり喋らなかつた。

表面的には完璧だったかもしれない。けれど、一皮むけば改善点な

なんていくらでも出てくる。

「ですからどうか、自分で決めて、色々な経験をしてください。一度海外へ短期留学するのも良いと思います。日本に残って、もっと仕事をするといいのも良いと思います。そして、後悔も、反省もして……楽しんでください。今の氷菓さんなら、それができるはずですよ」

「うん……なんか、恥ずかしいね。こういうこと言われると」

「まっすぐだからねー。はあとも感激☆ あとちよつと耳に痛い☆」

「何か心当たりでもあるの？」

「後悔はしてたけど反省はしてたっけなあって、さ……」

よし、この話にはこれ以上踏み込むまい。しゅがはさんの経歴から考えると推測もできてしまいそうだけど、ちよつとこう……人生の重みがかかってきて押しつぶされそうだから、ボクが突っ込んだじゃいけないやつだ。知ってる。

「……うん。ボク、ちよつと明日色んな人に相談してみる。それから、結論を出すよ」

「そうしてください。一人で悩んでいても、きつと納得のいく結果は出ませんから」

さしあたっては、まずおじじと先生。それから姉。スターライトプロジェクトのみんななど、先輩たちと……。

……うん、できるだけ話を聞いていこう。それから判断しても、何も遅くない。専務さんも、それを見越して時間をくれている……はずだと思う。

@ ——— @

なんだかんだあって、また後日、ボクはあちこち走り回って、色んな人に色んな意見を求めた。

ニュージエネの三人には……卯月さんが特にそうだったらしいのだけど、過去、三人でい続けること——ニュージエネであることに拘り続けた結果、悪循環のスパイラルに陥ってしまったらしい。そういう経験も踏まえ、環境を変えることも一つの道だというアドバイスを貰った。

あるいはクローネ。奏さんは「二年目でもまだ地盤を安定させる時期だと思っけれど」という、至極まっとうな助言をくれた。ボクの背景事情を知る美嘉さんたちは、そこから更に一步踏み込んで、もうちよつと精神的に安定してから、ということも言っていた。

どれもこれも正しいことだと思う。どれも尊重すべき大切な意見だ……けれど、それに拘って自縄自縛に陥ることだけはしてはいけない。それでは昔の、自由すら知らない時のボクと同じだ。

聞いたことをよく吟味して、これから先必要なことを考える。多角的に考えて、最終的に納得のいく結論を出す。

……そのために、最後に話を聞こうと思っていたのは、いつもの二人。晶葉と、志希さんだ。

いつものことのように、先の、専務さんに留学を打診された件を語り出す。二人はまるきりいつものようにだらつとリラックスティな雰囲気聞いて——やがて、こう答えた。

「留学ってそれ意味ある?」

「えっ」

意味。

意味と来た。意味。

……いやちよつと待てよ!?

「意味ならあるでしょ!」

「アメリカだよね?」で、その技術とか学んでくるんでしょ?

ひょーかちゃん別にいらなくなーい?」

「見れば覚えるだろキミは。表現技法だの何だのを一々学びに行かな

くても、その映像なり何なりを見ればすぐコピーできるじゃないか」
「……あつ」

……盲点だったわ。

そう、そもそもボクは構造解析や映像記憶能力で、一度見たものは忘れずに即座に再現できる。たとえそれがどれほど難しくとも。人体の構造を無視してるとかでもなければ。

今までずっとそうしてきたし、それで何の問題も無かった。模倣を基により良い表現を模索もしているし、時にはそれぞれのコピーを組み合わせるなりなんなりして更に良いものを創り上げようとしている。

で。そうになると、海外の特殊な技術だろうが、魅せ方だろうが、VTRなりDVDなりを見れば即模倣できるということだ。脚本のノウハウやメイクの方法なんかもそう違いは無いだろうし、実質的に「学びに行く」という目的は無くても問題無いような……。

仮にあつちでしか学べないことがあるとしても、半年も必要無い。それこそ目の前で見せてさえもらえれば五分ででもできる。

ここにきてのこれである。構造解析は日常にてマジ万能。

「うわあ……自分のことながら何で忘れるんだよボク……」

「それに、別にアメリカの学校も楽しいものじゃないしね？ こっちはいた方がいいよ〜♪」

「そうだぞ。それにまだ作ってない発明品もあるじゃないか！」

「別に今すぐ行くわけじゃないんだからそっちは問題無いでしょ……」

「う、うるさい。ド忘れしてただけだ！」

晶葉がそう言うならそうなんだろう。晶葉ン中ではな。

しかしなー……これ、どうしよう？ 別に何もかもダメってワケ

じゃないんだ。例えばコネ作りだって趣旨の一つなんだから。

……なんだけど、うーん……。

「……やっぱり問題は、期間がちよつと長すぎるってところなんだよね。九月から半年だから、中学卒業しちゃうし」

「うむ。下手すると文化祭も卒業式も出られんな」

「それがちよつとキツイ。割り切る分には割り切れるんだけど」

「大事な大事な思い出だもんね〜」

「かと言って行かないってのもね……さて」

「じゃあ期間を短くするよう直談判してみたらどうだ？」

「それいいね。で、どうやって？」

「おくすり嗅いでもらってー、ぼんやりしてるところにどーん！ っ
てカンジ？」

「悪の組織か何かのやり方か」

それは流石にマズい。というか下手したら何も覚えてないってこともありうる。契約関係が絡む以上、前後不覚にして……っていうのは悪手だよ。

そもそもこの時の話覚えてなかったら、先方に連絡するってこともできないし。

「ちよつとその辺も含めて、できるだけ短い期間にならないかって交渉してみるよ。あと、行事ごとに戻って来られないかも確認する」

「そうだな、それがいい……が、氷菓にできるかあ？」

「口ベタだもんね〜♪」

「失敬な。ボクだつてやればできるさ」

過去にやったことがあるとは言っていない。

……でもまあ、やりようは分かる。その辺の実践と思えばなんてことではないさ。

「というわけで、留学の期間一週間くらいにしてほしいんですー」

「キミは少し頭の調子が悪いのかな？」

「失礼な」

決断したら即行動。というわけで専務さんにアポ取って適当な時間に要求を伝えてみると、一発で突っぱねられた。

とうかまず頭の調子を心配してくるなんて、専務さんもだいぶボクの扱いについて学んできたな。自分で言ってるだけだ。

「留学の件なんですけど」

「一週間では流石に短期留学というよりただの旅行だ。それだけの時間で全て学んでこられるわけがないでしょう？」

「映像記憶できるので大丈夫です！」

「……まあそれはそれとして。その短期間ではそれ以外のことができなくなる」

「関係各社への面通しとコネクションの構築とかですか」

「そういうことになる」

うん、だいたい想定通りの回答だ。

けど、それだつて半年かけなきゃどうしようもないことというわけではない……はず。勿論親密な付き合いをするに越したことは無いけど、仕事をお願いする程度であれば、多分そう。

「しばらく考えたんですけど、ボクはやっぱり……一緒にアイドルやってるみんなや、会社の人たち、プロデューサーに専務さんも、みんなが好きだから、アイドルをできてるんだって、思ったんです。できれば長く離れたくない……っていう思いは、汲んでほしいんですけど……」

そう言うと、専務さんは何やら考えるように口元を手で覆った。

そうして数秒ほどの沈黙の末、返答を告げる。

「……五か月はどうだ？」

「一か月……」

「四か月」

「一か月半で」

「……三か月」

「あ、じゃあそれで」

「……粘っていたのにあっさりと受け入れたな!？」

「ボクとしても、色々相談した結果そこが妥協点かなと思ってましたので」

それこそさっきの話の続きだ。仕事をお願いしたりする程度のコネクションであれば、三か月もあれば十分じゃないか、とおじじは言っていた。そして、社員……この場合、アイドルか。そういう、あくまで被雇用者の立場にある人間が他社とコネクションを持てたとしても、それを活かすことは難しい。繋がりをより強固なものにしていくのは、あくまで会社の上層部であっていち社員ではない、とも。

「九月から数えて三か月なら、二学期丸々……程度で済みますし、入試や卒業式にも行けますから、ちようどいいかなあと」

「そうか……本気で言っているのかと思って肝を冷やしたよ」

……まあ、できればもうちよつと短くなんないかなあと思わないでもないけど、それは口にしらないことにした。さつきも言ったけど、ここが妥協点だ。

ボクも、専務さんも、ギリギリで納得できる場所。これより長期だと長すぎるし、これ未満だと短すぎる。

「ちなみにですけど、もし断っていたらどうしていたんですか？」

「より意欲の高い者に行ってもらおうと思っていたよ」

「なるほど。ちなみにどなたを？」

「ヘレンだ」

納得の人選だった。

そうか……ヘレンさんか……。何でだろう。途轍もなくしつくりくるし、妥当だと思えてしまう。

アメリカの風土がそうさせるのだろうか。だとしても何故あの人はこんなにも違和感を喪失させてしまうのか。ヘーイ、と、アメリカンな呼び声が頭の中でこだまする。

……え、ええと。ともかく、いざ行くからには、行けなかった人の分まで頑張つてこよう……。

終：From blue sky, Dear to
idol.

——アイドルって、何だろう。

人によれば、それは憧れ。

きらきらきらきら輝いて、見るものを魅了する星の輝き。

人によれば、それは希望。

その姿は見る者の心を突き動し、心に暖かいものをもたらす日向の
ようなぬくもり。

——アイドルって、何だろう。

その疑問の答えを、持ち合わせていない人はいない。

きつと、良くも悪くも、その人なりの答えは持っている。

けれども、ずっと前のボクにそれは無かった。捉えていたのは言葉
だけ。一切の感慨も持たず、ただ——そう。以前のボクにとって、言
うなればそれは「アイドル」という文字以上には捉えられなかった。

テレビの画面の中にいる人で、なんだか人気——らしい。注目され
ている——らしい。

好奇も、嫌悪も、忌避も、感心も無い。一切の虚無。人づてになん
となく聞いて、ただ漠然とこの世にそういう職業がある、というだけ
の認識だった。

じゃあ、今は。

——今のボクにとって、アイドルって、何だろう。

@ —— @

「絶対に許さんぞこのクソメンタル!! じわじわとなぶり殺しにして

くれる!!」

「いい、いい、いいやあ、あああ、助けてPサマーツ!!」

「がなりたてるなあ! 喉じゃなくしてお腹から声を出すんだよ!!ただ大声を出すんじゃないやなくてクリアな声を出せえ!!」

「ああ、ああああ、あああああ、あゝ!!」

「アイドルは人気商売だ! ナメるなよーっ!!」

「宇宙の帝王か王子かどっちデスカ」

「今日はいつもの倍くらい怒ってるけど、どうしたんだろう?」

「一ノ瀬サンのサボり癖のこと言ってみたり、さと……はあとサンのこと引き合いに出して、早く仕事くれって……」

「んげ……」

四月初旬のレッススルーム。新人三人の自主レッススに付き合っていたボクは、かれこれ一時間弱激怒し続けていた。

志希さんがサボってるのは事実だから、まあそこは言われるのもしょうがないと思つてボクも我慢した。

しかしそこからコンボを繋げてくるとは思いもしなかったよ……「一ノ瀬さんもレッススあんまりしてないんだし、はあとさんみたいにガツガツ仕事に行けば人気出るでしょ? それに場数踏むことも大事だと思っただよね」? 志希さんは天才だからこそレッススに多少出なくても問題無いんだよ! 家族との確執や自分の天才性そのものに翻弄された結果、日常の出来事を見て、そうは思いたくないのにふと「つまらない」と一度思ってしまうと興味を失う——ただ失踪してるんじゃない、あれは複雑な内心が常に揺れているからこそ、心の安定を求めて失踪してるんだ!

そしてしゅがはさんみたいにと言つたがそれもただだけない! しゅがはさんがガツガツしてるのは、本人も言ってる通り「だいぶもう後が無い」からだ! 年齢もあり、タイミングもあり、そして何より、アイドルになるより前から努力を欠かさずしてきて、アイドルになつてからも自分を貫き通して、信念を持って自分のキャラを表現しようとしているからこそ、仕事を求めてガツガツしてしまっているん

だ。しゅがはさんみたいにやりたいなら努力は最大前提なんだよ!!
りあむさんは自分のことをクソザコメンタルなんて言ってるが、ど
こがザコだ。そう自称してるだけで絶対に折れないクソメンタル
じゃないか!!

オマケにこのクソメンタル、わざとなのかそうじゃないのか分から
ないけど、ネットで聞きかじったような知識でめちやくちや煽ってく
る! 本人に煽ってるつもりは無いのかもしれないけどさあ……。

「でもなんだかんだ言っ手を出してないのは褒めていいところかも」
「じゃなくてほら、手を出しても負けそうんご……」
「……………」

「生暖かい目で見ないでくれないかな」

事実そうなんだが。

あの胸! あの途方もない胸ウエイトのせいで、ボクは実力行使に出たらど
うしても押し負ける。

本気になればなんとでもなる。が、当然だがボクは本気になつては
いけない。相手はメンタルはともかく一般人だ。怒っちゃいけない。
フウ……そう、どこかの蜘蛛の人も言ってるじゃないか。大いな
る力には大いなる責任が伴うとかなんとか。多少……こう……私欲
のために使うようなことがあっても、私怨のために使っちゃいけな
い。容易に人が死ぬような力なんだから。

発声を終えたりりあむさんは息も絶え絶えだが……まあ、その辺に転
がしておけばそのうち復活するだろう。

「今更だけど、アイドルがレッスンもできるって結構おかしいデスよ
ね」

「まあおかしいよ。他の人に頼んだりしないようにね」

「頼まんデスよ」

「おかしな自覚はあったんだ……」

その辺は流石に分かる。ボクの感性は一般的ではないけれど、トレーナーさんたちが人にものを教える時に相当苦勞しているのは、見ているだけでも伝わってくるから。

ボクのラブソングの時もそうだったし、あと……アイドルになったばっかりの頃、体力づくりで相当苦勞をかけてしまったし。

で、何でボクができるのかだ。

教え方というものを理解した……のではない。人に教えるというのは、伝達……つまり、コミュニケーションの一環だ。多少口下手なところのあるボクには向いていない部分もある。

それでも人に教えられるというのは、言ってみれば解析能力の賜物だ。見るだけで1から10まで理解できるからこそ、それがどういう成り立ちで、どういった理論のもと行うべきなのか、というのが分かる。それをそのまま人に伝えれば、結果として、1から10まで伝わることになるので、トレーナーさんたちと似たようなことができる。あとは理解力の問題だ。

……そんな感じのことを(錬金術に関わることを除いて)伝えると、あきらさんはなんとも絶妙な顔でこう言った。

「言いたいことはわかるけど、何言ってるのか分からんデスよ」

えー。

「そんなことができるのにアイドルやってるのも不思議だよね」

「そこ言うっ？」

「いやホントに。エリクシアのみんなって何でアイドルになったんデスか？ 他の道でも多分成功してたと思うんだけど」

「最初は別にコレって理由があったわけじゃないんだけど」

「ええ……」

いや本当に。

今思うと、最初は本当にイヤイヤだったな。あの時のボクの態度も

あんまり良くはなかった。

「ボクら三人スカウト組だからね。全員、何かしら強い意欲があったかって言われるとそうでもないし……」

……うん。こう言うとかかなりアイドルとしては不良だな。

実際、当時のことを思い返すと、「できるのだから、やれと言われたらやる」くらいの気持ちしか無かったように思う。問題はあまり起きなかつたけど、積極性があるわけでもなかつた……なんて、もう深く考えなくても分かるくらい意識低いな！

「……なんとかうまく噛み合ってくれたおかげで機能してたけど、もしもうちよつと歯車がズレてたらどうなつてたんだろうね。志希さんはやる気があんまり出なかつたかもしれないし、ボクは今ほど積極的になれなかつただろうね。晶葉は……いや、晶葉は大丈夫か」

「晶葉サン『は』?」

「ボクらの中で、一番精神的に強いのが晶葉なんだよ。仮にエリクシア組んでなかつたとしても、晶葉は多分、今とそれほど変わらないんじゃないかな」

「志希サンが一番強いんじゃない?」

「志希さん、実は繊細な方だから」

そういう風に見えるかって言ったら微妙なところだけど、そこは本人の普段の素行のせいと言っておこう。

普通のものごとに対してはあんまり頓着しないし、興味も持つてないから何が起きても気にしないから、一見するとまるで何事にも動じないように見えるのは間違いない。けど、志希さん自身の内面に触れると、そうも言えなくなる。それを理解できる人は少ないけど。

「で……えーつと……アイドルになった理由だっけ。つていうか、それなのにアイドルを続けてる理由って言った方がいいのかな」

「どっちでもいいデスけど」

「んー……と……」

言っちゃダメ……ってことはないけど、恥ずかしいな。そこまで高尚なものじゃないし……。

でもクラリスさんに言わせてみれば、こういう時に誤魔化すのがダメって話だっけ？ それとこれとは違うか？

ただ、うーん……こういうのはひけらかすようなものでもないしなあ。

「逆に聞いてもいい？」

「質問文に質問文で返すのは0点デスよ」

「ボクは国語が苦手なんだ（当社比）」

「なら仕方ないデスね」

そういうことになった。

「あきらさんは何でそんなことを聞いたの？」

「自分もスカウト組なんで。やっぱり、やる意義とか、意味とか。飽きるまでやるつもりだけど、そういうの、他の人はどう思ってるんだろうって」

「ははあ」

なるほど、そういうことか。ある意味、前のボクと似たような状態ってわけだな。

いや、あきらさんの方が精神状態が健全なのだし、比べたところで……って部分はどうしてもあるけど。

「じゃあ秘密」

「えっ」

「ごごまで言ってそれは無いよー！」

「ごめんね」

でも、これもそれなりに理由はある。

「でも、ボクが下手なこと言っちゃったからそれが指針になっちゃうでしょ。それって、やっぱり自分だけの目標とか目的を見つける邪魔になっちゃうと思うんだ」

「そんなもんデスか？」

「勿論、人による部分はあると思う。けど……やっぱり、みんなには自分なりの答えを見つけてほしい……なんて、ちよつとクサイかな」

「クサッ」

「テレビの中の『氷菓ちゃん』じゃないから違和感があるんぐ……」

「やだこういう反応逆に新鮮」

普段の行動範囲が事務所と学校と寮、あとは仕事の現場くらいだし……仲のいい相手からは、テレビと同じような態度をしていると違和感がある、とか言われるだけに、こういう反応はなんとも珍しい。

でも、これは本心だ。ボクの理由なんて正直言っただけ参考になるもんじゃない。参考にするようなものでもない。これはあくまで、空っぽだったボクだからこそその理由だ。

あきらさんも、あかりさんも……今はアイドルになる理由なんて無くて、ボクよりも遥かに人間としてちゃんと生きて、ちゃんとした人生経験を積んでいる。だったら、いずれは自分だけの何かを見つけられるはずだ。おぼろげにでもそれが見えてくるまで、ボクの話すべきじゃない。

りあむさんは知らん。あの人はもう既に歪んでてもそれなりの芯があるっばいし別にいいだろう。チャホヤさりたい、目立ちたいってのもそれはそれで理由だ。それこそが自我を確立させる手段だと言うならそれでもいいんじゃないかな。ただ、それに見合った努力はしてほしいけど。

「まあボクに対する印象も、アイドルをやる理由も、これから徐々にごうにかしていけばいいよ」

「はあ。まあそういうことなら」

「それじゃあ、自主レッスンを再開しよっか。もう時間無いし」

「はい」

……さて。

単に自主レッスンすると言うのなら、別にボクが面倒を見る必要は無い。適してるのは確かかもしれないけど……だからってそれこそ、本当なら「必要」は無いんだ。

けれども、こうしてみんなのレッスンの講師役になっているのは——今度の春フェス、三人にボクらの新曲のバックダンサーになってほしいと頼んだからだ。

随分前に美嘉さんの家に行った時に聞いたのだけど、二年前の春フェス……だったと思うけど、美嘉さんが「T O K I M E K I エスカレート」を歌う時に、ニュージエネの三人がバックダンサーを務めたらしい。その後、ニュージエネ……というか未央さんと武内Pとの間でちよつとひと悶着あったらしいのだけど、それを踏まえた上で、予防策は講じているとのこと。

それに倣う、というわけじゃないけど……まあ、ボクらも二年目で実質的にはまだまだ新人なのだから、空気を味わうだけでも、ということでは今回は三人にバックダンサーを頼んだわけだ。この自主レッスンはそのためのものになる。

三人とも、筋は悪くない……と思う。約一名手を焼いてる人がいるが。

春フェスまで、あと数日。

歌うのは、リルルさん友達に貰った、ボクらの新曲だ。

@ ——— @

春フェスの参加が決まった時、正直に言おうとボクはあまりこう、夏

ほどの興奮は覚えなかった。

というのも、去年の春フェスにはボクラからスターライトプロジェクトの面々は参加していなくて、どういったものになるかがいまいち想像できなかったからだ。

でもまあ、夏……よりは若干人の集まりは落ちるようだけど、それでも相当の規模になることには間違いない。その点を言えば、何も感じなかったとは言えないのだけれど。

四月初旬。春フェスの始まりを目前にして、ボクラは自分たちの楽屋で軽く話し合いの席を設けていた。

議題は、今回歌うことになっている一曲。また、それを提供してくれたある友人についてのことだ。

「そもそもおかしくはないか？ リルルが『コレ』のことを知ったからアイドルを志したのであって、本当なら歌の方が先に無ければいけないはずだ」

「とは限らないんじゃないかなあ」

リルルさん。空の世界に暮らす、「アイドル」を目指しているハーヴィンの女の子。

彼女はある曲——今回ボクラが歌うことになっている曲を聞き、「アイドル」のパフォーマンスを目にすることでアイドルを志すことになった。

しかしおかしいことに、その歌っていた当人……ヴィーラさんやマリーさんと言った人たちは、そんな曲を歌ったり踊ったりしたようなことは無いという。

あちらの世界でアイドルの概念が生まれたのは、凜さんたちが「あちら」に行つてからのこと。それも局所的なものだ。

全空にアイドルの概念は浸透しきつてないし、リルルさんのいるような田舎ならばなおのこと。そもそも彼女がアイドルという存在を知覚していること自体がおかしいのだが——これはそのお話だ。

「にやんでー?」

「歌っていうのは神様に奉じるものであって、歌手は巫女の一種と捉えることもできるでしょ。あっちの世界の巫女さんって基本、超能力を持つてるものだよな」

「まあそうだな……そうかな?」

「そうなんだよ」

少なからずそういう部分はある。

例えばディアンサさんとか、ペトラさん、サラちゃん。そういう人たちは強い魔法の力を持っていて、時によっては本人の意図しないところで超常現象が起きたり、あるいは何らかの力の作用で、起きる超常現象に指向性を持たせたりもできる。力の大元になるのが星晶獣のものなら、彼らと心を交わすことでそれを成し得ているということもあるだろう。

何にせよ、巫女というものは大なり小なりふしぎなことを起こせるものだ。

「例えばさ、そういうフシギ能力を無意識的に使って予知夢を見たとしたらどうだろ。ボクらが歌ったものが流行って、あっちの世界から開祖様たちが来られるようになったりしてさ。で、グランサイファーでアイドルってものが流行ったりして、更にその後……みたいな」

「んーまあ筋は通ってるけど、ちよっとパンチが足りなくなーい?」

「これでも既に荒唐無稽すぎて割かしパンチききすぎでない?」

「いやまだ何か突っ込める余地はあるだろう。そうだな……幻の最後のメンバーは氷菓とか」

「ンなアホな」

「分からんぞ。そういう荒唐無稽なことがあり得る世界だ」

「それならボクら三人全員とかいっそあっち行ったことある人全員とかにしようよ」

「それもいいねー」

まあ常識的に考えれば新団員とかなんだろうけど。

あの騎空団だいたい規模大きいし、そういう目的で入団する人がいてもおかしくないんじゃないかな。

「だが、幻聴や幻覚だと断じるにはあまりにも状況が整いすぎているな」

「でしょ？ 元々ハーヴィンの人たちって魔法力強い人が多いらしくてさ……予言ができたり予見ができたり、じゃあそういうのも、ありえなくはないかと思って」

「夢があるねー♪」

「そだね」

確実なこと何も無いけどね。

何事も言うだけならタダだ。というか、今この時点で「あちら」に渡る方法が無い以上、状況証拠から推測する以上の何事もできない。推測の精度自体は高いと思うけど。

交信はできるのだから、この予測は既に伝えてある。あちらとしても他に判断材料が無いとのことなので、まだそれ以上の話には発展してないけど。そもそもそれ以外のことでも死ぬほど忙しいらしいし。

具体的な原因究明も、最低限あつちとこつちの行き来ができるようになってからじゃないかな。

「じゃ、ちよつと話変えるけど……何であのコたちバックダンサーにスカウトしたの？」

「何か理由要るかな？」

「要るだろ」

「……毎年毎年、どころか去年もおとしも年二、三回はあつちに行つちやう人いるじゃん。今年の最有力候補はあの三人を含めたプロジェクトのメンバーだと思っただよ。何かしらであつちに行くようなことがあつたら、気にかけてあげられるかなあつて……」

「あー……」

「……思うだけじゃダメだし、位置を探知できるように探査素子くっつけて」

「キミはホント変なところで用意が良いな……」
「奇跡は何度も続かないんだよ」

今までに死傷者が出てないこと自体が奇跡に近い。なので、次にあちらに行く人が出てきた時のためにも、本人に気付かれないうよう、魔力的な探査素子をくっつけてたりもしている。

これで空の世界に行っても、開祖様たちがすぐに気づいてくれる……はず。そうじゃなくても、こちらの世界にいないことにボクがすぐに気付ける。リスクは減らしておかないとね。

「でもそれだけじゃないだろキミは」

「後輩にいいカツコしたいんだよね〜？」
「うぐ」

「やっぱりか」

「でもいいと思うよー♪ 前ならそんなこと全然考えなかったでしょ。にやはは♪」

「見栄を張ることも考えられるようになったということだな。いいことじゃないか」

「見栄っ張りになるのは良いことかなあ……？」

「それも遊び心というものだ。余計なことを考えないよりよっぽど人間らしい」

そういうもんかなあ。

人間らしさの定義ってものはいまいち分からないし、そういう風に思ってくれるならそれはそれでいいけど。

「そんなことより、今日ボクらの衣装合わせだけじゃないんだから。あきらさんたちのも見に行かないと」

「ん？ ああ、そういうえばそうか。仕方ない、志希、行くぞ」

「えーまだ眠たーい……」

「今ペラッペラ喋ってたじゃん」

渋る志希さんを引つ張って、三人で衣装室へ向かうと、部屋の外で待機している戸羽Pを見かけた。どうやら室内で衣装合わせをしているようだ。

軽く挨拶をして部屋の中に入る——と、水色と青、白という、空の色を思わせるような衣装に身を包んだ三人の姿が見えた。

「お疲れ様。衣装合わせは終わったみたいだね」

「あ、うん。これでいいデスか？」

と、服の裾をつまんだり、肩越しに自分の背中の方を見ようと、あきらさんが身じろぎする。

見たところ、数か所、ちよつと見栄えの良くない部分が散見される。装飾が曲がつていたり、スカートのすそがちよつと折れていたり……ええと、いちいち指摘するのも面倒だな。

「()と()と()と()と、ちよつと直した方がいいかな。待ってて」

「あ、いや、自分で……」

「自分じゃ意外に見えないもんだよ。ちよつと待って」

ちよつとだけ強引かな？　と思いつつも、目についた個所をそれとなく正していく。裾に襟……ダンスの最中激しく動くことになるのだから、少々大丈夫、見えない「だろう」……というのは通用しない。ちよつとのことでも人はつい目に留めてしまうものだ。場合によっては、それで全体の印象が悪くなることもありうる。

アイドル……に限った話じゃないけれど、アイドルになってからは「見栄を大事に」とはしよつちゆう言われることだ。ボクがだらしなくしてると、ユニットを組んでる相手もだらしなく見られかねない。時によっては、そんな体たらくでも許される346プロ全体が……と

もなりかねない。

……いや、まあ、その。できてるかって言われたらちよつとあれだけど。

ともかく、衣装はこれでよし。

「うん、できた。いい感じ」

「……ありがとうございますデス」

「にゅっふふふーおーおー世話を焼く焼くー」

「何さ」

「こうやって見ると氷菓も実は姉キャラなのだなあという話だ」

「レアでしょ」

「いや……レアかって言われるとそこまで大したものでは……」

ちくせう。

「いいかあきら。今の氷菓は割と先輩風吹かそうとして躍起になっているだけだからな。多分ひと月もたないぞあれは」

「そうなんデスカ」

「晶葉はすぐ水を差すよね！」

「水を差されるような隙だらけのキミが悪い」

「すごい勝手な理屈んご……」

「でもその通りだ……」

「認めるんデスカ」

ボクらの中ではそういうことになっている。実際、破綻の無い理論を示すのが一番いいんだよ。

アイドルは、常に自分の発言に注意しておくべきだ。そういう意図が無いのだとしても、どんな恣意的な編集をされるとも分からない……それは去年、ボクの家環境について放送された時に嫌と言うほど思い知っている。

勝手な話だし、怖い話だ。でもこの道を選んだ以上は徹底するべき

だと思う。そうすることが自分の、ひいては自分の周囲の人を守ることにともつながらるのだから。

「ぼくのイメージとちがう……やむ……氷菓ちゃんって究極の妹キャラみたいなどこあるじゃん……」

「だーいぶ勝手なイメージ押し付けられてるけどいーのかにやーん？」

「いいよ別に。そのうち補正されるでしょ」

「そもそも妹キャラであることも事実だからな」

「それな」

忘れてもらっちゃ困るが、旧ボクんち……というかあおぞら園は児童養護施設である。入所している人間の入れ替わりはそれなりに多く、ボクより年上の「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」は数多くいた。なので、姉でも妹でも間違ってるというのが実際のところだ。

まあ、その話は今はいいや。三人が集まってる今だからこそしなきゃいけない話もあるし。

軽く咳払いして、晶葉たちに合図を送る。

「無駄話はこのくらいにしよつか。三人は今日初めてステージに立つわけだけど、一つ忘れないでほしいことがあるんだ」

「それは……？」

「チャホヤされる秘訣……!?!」

「りあむサンちよつと鬱陶しいんで黙ってください」

「えっひどい」

「まあ、そうだとも言うがな」

「言うんご!?!」

「結果的にはそうなるよね」

志希さんがそう言うと、あきらさんたちは互いに顔を見合わせた。こういう話がボクらの口から出ることが意外だったのだろうか。

「何度も言ってるけど、アイドルは人気商売だから。最終的には、りあむさんの言う『ちやほや』されなきゃいけない面もある。それは確かなことだよ」

「だがそれは結果だ。それ以前に、ライブを成功させなければ結果もついてこない。それだけは分かってほしい」

多少ならず、三人の間に緊張が走った。相変わらずやむやむ言ってる人がいるがあれはそういうルーティーンだということにしてほつとこう。

けど、とボクらの言葉を引き継ぐように、志希さんが続けた。

「それよりも更にそれ以前にね、ライブを楽しんでほしいんだよね。それが、あたしたちがプロデューサーから教わった最初のこと♪」

「楽しむ……」

「へ、へーい!？」

「単にそう言うのとはちよつと違うかな……」

それで楽しくなるんだつたらそれでもいいけど。いや、それも、仲のいい相手とだったら、楽しいか。

「アイドルのみんなが楽しんでライブをしてたら、お客さんも楽しくなつてくるんだよ。みんな一体になつて熱ホルテージを上げて上げて、化学反応を起こして大爆発! それがあたしたちのライブ♪」

「みんなにはみんなのやり方はあるだろうけど、こういうやり方もあるんだよっていうことだけでも、今日は覚えていってけると嬉しいな」

「もつとも、私たちも存在そのものが346プロ最大の誤算くらいに言われているのだ。ライブパフォーマンスも含めて記憶に残るようにはしてみせるとも」

「ごめん晶葉その前評判完全に初耳なんだけど」

「言われててもおかしくないと思わないか？」

「……かも」

それはまあちよつぱり思う。

でも、それによつて思いがけぬ結果が得られたという意味では、化学反応と言ひ換えられもする。何事に関しても、世の中、そういう「誤算」に溢れているものだ。

ボクらのことはある程度プロデューサーたちの勘定に入つてるとしても……例えばミラ・ケーティ。あれも色んな意味で化学反応が起きた組み合わせだと言える。今この場で言つても、あきらさん、あかりさん、りあむさんのユニットと言うと、流石にちよつと冗談か何かを疑うくらいだ。

けれどそのくらいの方が、それこそ志希さんの言う「爆発的な化学反応」が起きる可能性だつてある。

勿論、そうなつてほしいし、そうなるのが一番いい。このライブの経験がその起爆剤になつたら最高だ。

「ま、いつか。それじゃ、リハ行こうか！」

「投げたな」

「投げたね」

「うっさい」

……そんなこんなありつつ、六人で揃つて会場の方に行くと、既にある程度の準備が整つていた。

今回の曲は、床下から飛び出すポップアップなどの大掛かりな仕掛けは使わない。純粹に、磨き上げた歌と踊りだけを披露することになる。

これはただ、自分のためだけに歌う曲じゃない。友達のために歌う曲でもある。気合の入り方も、いつも以上だ。けれど頭脳は冷静に。最高のパフォーマンスには、最適な動きがあるのだから。

「テスト入りまーす！」

「わ、すごい」

スタッフさんの掛け声に合わせて、スクリーンに次々と映像が浮かぶ。船、空、手紙、それから星空。曲のテーマになぞらえた映像は、流石に晶葉も調整に一役買っただけあって寸分の狂いも無い。

それを見て、あきらさんたちは自分たちが「そういう」会場にいて、自分たちがライブを作り上げる側になったのだと、今改めて自覚したようだった。普段は少しだけぼんやりとしている表情が堅く見える。

「緊張してる？」

「まあ……しないことは、ないデスよ」

「だよね。ボクも最初そうだった」

「そういう時、どうしてるんデスカ？」

「そうだな……」

初ライブから一年。まだ今でも緊張はする。けれどもあの頃と比べると、むしろ緊張するからこそ、それを、心を奮い立たせるための材料にできるようにもなった。

あきらさんに言われて改めて考えると、あの頃から、ボクが緊張を和らげる方法はあまり変わってない。

「笑顔かな」

「笑顔」

「自然にライブを楽しんで、笑顔になる。ボクにとっては、これが一番大事なことかな」

不器用なあの頃と違って、今は自然な笑顔を作ることができる。いや——自然に、笑顔になることができる。

それでも今は笑いがいまいち分らないだろうあきらさんに向けて、あえて指で軽く頬を持ち上げて笑顔を「作って」見せた。

同じように、不器用に作った笑顔が返される。その瞬間、見上げたスクリーンに新曲の題名が踊った。

——「キミとボクのミライ」、と。

「さ、行こう！」

@ —— @

——今のボクにとって、アイドルって、何だろう。

それは、「自由」を表現するための手段。

かつて、ボクが持ち得ていなかった「自由」の概念を伝えるためのもの。歌で、踊りで、表情で。あらゆる表現で示すことができるもの。それは、憧れに近づくための手段。

かつて空虚だったボクが、こうありたいと想った人に追いついて、追い抜いて、こんなにも成長できたんだと示すためのもの。

傲慢かもしれない。自信過剰なのかもしれない。けれど、そう在りたいと願ったからには——そういう風に、生きていきたい。

それは、ボクにとっての、一番の絆。

友達に出会った。親友ができた。通り過ぎたものを振り返った。暖かく見守ってくれた。導いてくれた。生きていく意味をくれた。

アイドルになったから、沢山の人と出会えた。中には良い出会いじゃなかったこともある。けれどもそれも、過ぎて見れば、今のボクを構成する一要素の一つだ。

大好きな友達ができた。大好きな人たちのことを、もう一度見詰め

直すことができた。生きていくことが、好きになった。

それこそが、今のボクにとっての「アイドル」だと、胸を張って言える。

それこそが、一年という時間の中で、ボクが得たものだって。

@ ————— @

陽の光が差す部屋の中、携帯端末が音も無く一枚の便箋を吐き出した。

きらきらと、輝きを纏って現れるその紙は、どこか幻想的な雰囲気纏っていて、現実味に欠ける。

その光景を見た者がいれば、自分の目を疑うことだろう。

部屋の主がそれを見たとしても、しばらくは自らの見たものが真実かどうか、疑うはずだ。

けれども確かな研究の成果として、それは成った。

一枚の便箋。星の輝きを纏って現れた、青空のような色味の^{レター}手紙。

その書き出しには、こうあった。

From blue sky, Dear to Idoli
空の世界より、アイドルへ—————。

後：デートi s何

デート、というのはアイドルにとってはある意味で遠く、ある意味では近くもある言葉だ。

アイドルとは夢を見せる仕事だ。根本的なところでそこには純潔性というものが求められ、男女問題とか、そういう性的なものを匂わせるニュースは忌避される。

けれど、同時に夢を見せるということは、想像の余地を残さなければいけないということでもある。もしこの人と付き合えたら。そういうことを考える人は、決して少なくないはずだ。

そのどちらにも応えなきやいけないのが、アイドルの務めであり、難しいところでもあるのだけだ。

「にゅ〜……」

ボクはバランスボールに乗りながら、クローネのプロジェクトルームでうめいていた。

今回の雑誌の取材……というか、質問。「あなたのおすすめデートプランは？」に対する答えが、なかなか出てこない。

考え始めてかれこれ30分だ。考えがまとまりきらず、とうとうヘリコプターのローターのようぐるぐる回るん回転を始める。あゝ……遠心力気持ちいー……。

「何ですかその動き」

「頭ぐらんぐらんして何も考える気力無くなるよ。アリスさんやる？」

「できませんしまず考える気力を取り戻してください」

残念。

でも……なんて言うのかな。プロジェクトのそもそもの傾向の違

いか、普段クローネの方の活動してても、あんまりこの手の質問って出てこないんだよね。

エリクシアの方だったら割としょっちゅう来るんだけど……そっちはそっちで「今はアイドルで忙しいので考えたことがありません♥」で切り抜かれるのが多い。「付き合ったらどこに行きたい?」とかだから。けど……これ「おすすめデートプラン」って。逃げ場が無い上に適当に答えるのも後に尾を引くやつだよ。

あー投げ出したい。投げ出してアリスさんとアーニヤさんがやってるヨツシーに参加しにいきたい。けどお仕事だからそういうわけにもいかない。フアツション誌もそうだけど、やっぱりこの手の質問って苦手だ、ボク。

「やりたいこと……答えればいいと、思います」

「アーニヤさんの言うことももっともなんだけどね……」

例えばアーニヤさんは天体観測とか、プラネタリウムに行きたいと答えた。アリスさんはいちご狩りをして、いちごづくしの料理を作る、とか。

どっちが? と聞くのは野暮だ。でもどっちにしても、お相手はきつと大変な思いをするだろう。是非とも頑張つてほしい。

……さて。ではボクは?

「何にもない……ボクには何にも……」

「悲壮感も深刻さも感じられないんですけど」

「あ、分かる? まあそうなんだけど」

別に今日すぐやんなきゃならないものでもなし、別の仕事に影響するようなことでもない。けど、なんかこう……何もしてない時間があると気になる。気が散る。そんな感じ。

ぷえーとバランスボールに顔を埋めてもう一度考えていると、プロジェクトルームの扉が開いて誰かが入ってきた。

「あ、こつちにいた。ひーちゃん」

「あれ、はーちゃんだ」

「Привет……ナギは一緒じゃない、ですか？」

「残像だ。嘘です。後ろにいます」

と、姿を現したのは、なーちゃん 久川凧、はーちゃん 久川颯姉妹だ。

シンデレラプロジェクト・スターライトプロジェクトの直系の後輩である新プロジェクトの一員でもあり、寮生かつ一つ年下……という境遇も相まって、同じ学年・学校のおきらさん、あかりさんに次いで付き合いの深い二人だ。

見た目、二人ともよく似ているけれど、性質はどちらかと言えば逆。なーちゃんはダウンナー系だけど、はーちゃんは自信家で活動的。けれどそれが悪い方向に作用することは無く、姉妹仲は良好だ。

最初に仲良くなったのは、はーちゃんの方。レッスンの中で分からないことがあるというので教えていたら、そのまま付き合いが増えて仲良くなつていったというところ。元々、アイドルに対してすごく熱心な子だから、向上心もすごく強くてボクも教え甲斐がある。なーちゃんはいつの間にかそこに交ざってたんだけど、なんだか妙に気が合った。振るネタのことごとくを理解してくれたというのも大きいかも。

「ひーちゃん……？ はーちゃん……？ いつの間にそんなにあだ名で呼ぶほど仲良く……？」

「餌付けされました。きつとフォアグラのように太り殺されてしまいます。はーちゃんが。凧は付け合わせのササミ」

「ちよつと何言ってるか分からないんですが」「自主レッスンの時どうしても遅くなる時あるっしょ？ んで、遅くなるたびに作ってもらっちゃってさー」

「餌付けじゃないですか」

「言い方」

そういう表現するとなんだかボクが下心があつて近づいた、同僚の同性狙いのやべーやつみたいじゃないか。

そりや多少は仲良くなりたいてって目的もあるけど、それだって普通の考えだと思ふんだよ。たぶん……。

「それで、どうしたの?」

「なんかひーちゃんのが気になるから後でいいよ」

「気にしなくてもいいよ、雑誌のQ&Aだから」

「取材つてやつですか。アイドルっぽいですね。アイドルだった」

「ずっと悩んでるみたい、です」

「どうなの?」

「こういうの」

二人に見せると、なんとも怪訝な顔をされた。

まあ……ボクにとつては難問でも、他の人にとつてはそうじゃないっていうのはあるよね、やっぱり。

その辺はボクの場合より顕著だけれど。

「ひーちゃんこういうのソツなくこなすうなのにな」

「ううん、全然ダメ。苦手分野」

そもそも恋愛というものをなかなか考えられないんだから、ちよつとどうしようもない。

今なお、好みのタイプはと聞かれてもキャプテン・アメリカか団長さんというところだ。それだって「人間として好ましい」くらいだけだ。

「デートis何ってレベル」

「シキやアキハと……遊びに行くようなこと、書くのは、どうですか?」

「それは……ちよつと」

言うまでも無いことだけど、ボクらが行くような場所っていうとそれはもう特殊なものを売ってる場所が多い。

薬品だったり機械部品だったり……時と場合によつては服を買いに行くこともあるけど、そつちは必要に応じてだから一旦除外。

……ともかく、ボクが欲しいものって言うとなんかそれはたいていゲームかマンガかというくらいだから、どうしても世間的なイメージからは外れるんだよね。

他に欲しいもの……は、あんまり無いし、海外に行ったり他の県に行ったりっていうのは、「デート」って趣旨からは外れる。

「まあ、いいよこれは。急ぐことじゃないし。それより、レッスンの方の話にしよう」

「逃げましたね」

「Бежали……」

「心の隅に片付けておくだけだよ」

「クールに言つて騙されるのは蘭子さんか飛鳥さんだけですよ」

「その言い方も言い方で二人に失礼だよ」

でも実際この逃げ方で逃げたことはある。

「ダンスの動きなんだけどね？ なー、手伝つてー」

「いいでしょう。阿波踊りだな」

「違うよお!!？」

「任せろ」

「だから違うよひーちゃん！」

「イエー」

「いえー」

なーちゃんとハイタッチ。このままズツタンズツタンズツタン！ つ

て感じのダンスに移行する手もあったけどそっちはやめておく。

別に阿波踊りすることも目的じゃないし、ふざけるのはこのくらいにしよう。

「サビ前の部分で、こうっ、で、こう！ なるでしょ？ でもそこでどうしてもステップ失敗しちゃうんだよねー。どうすればいいの？」

「体重移動の問題かな。大きめにスタンス取ってみて。人間の骨格上どうしても特定の動作から特定の動作には移れないってことがあるから、足の位置も注意してね」

「はーい。あ、なんかできそう！」

「早い……ですね？」

「へへー、基礎ができてるからね、基礎が！」

自慢げに言ってみるはーちゃんだけど、それもこれも彼女の普段の努力のたまものだ。そもそも、はーちゃんなーちゃんに料理を作ってる……っていうのも、寮の食事時間が潰れてもまだやつてるってほど、レッスンを重ねてるっていう意味でもある。基礎とかそういう部分以前の問題として、まず体力作りを優先してたボクとしてはちよつと羨ましい。

なお、はーちゃんと比べるとなーちゃんはちよつとサボり気味である。

「でもこういうの、みんな平然とこなしててすごいよねー。はーもなーもだけど、やつぱすっごい疲れるもん」

「ぬふはは、それほどでも！」

「氷菓さんのこの時期って確か」

「それ以上はいけない」

「ひーちゃんのこととは言っていないと思いますよ。自分を知れ」

「なんてひどいやつだ」

去年から今年にかけてのボクの成長度合いを見てみるがいい。

きつと成長力B（スゴイ）くらいはあるぞ。体力に関してのみ言えば。それ以外の部分は……まあ置いとこう。触れない方が賢明だ。常識力とかついたよ。きつとついでる。うん。たぶん。

「じゃ、次ひーちゃんね」

「えっ」

「はーちゃんの相談だけで済む……そんなオイシイ話があると思っただか」

「済ませて♥」

「だめです♥」

「ΠΠOXO♥」

「颯さんドア塞いでください」

「オツケー」

くそっ、逃げ道を塞がれた！

何でみんなこういう時に限って抜群の連携を見せるんだ！ ボクがことあるごとに逃げてるからか！ ごめんなさい！

「風饅頭です。味は保証できない」

「ウボアー」

そしてなーちゃんまでバランスボールに乗ってるボクの上に乗ってきた。気分は三段鏡餅の二段目。ひょうかもちと言ったところか。雪見大福か何かか。

その後は必死になってなんとかみんなで相談しながら捻り出したけど……これで良かったかと言われるとちよつと微妙なところ。

だって日頃から食べに行つてて、この辺のアイスクリーム屋さん全部制覇してるのに、何で改めてデートで行かなきゃいけないんだろう？

普段と違うことするからデートなんじゃないの？ 違うの？

……わからん。

《白河水菓ちゃんを見守るスレ その□□□》

814 会員番号774番目 20XX/X/X/X ID:

俺アイスに詳しくなってくるぞ俺

815 会員番号774番目 20XX/X/X/X ID:

いきなりどうした

816 会員番号774番目 20XX/X/X/X ID:

氷菓ちゃんのデートプラン

・映画観る

・アイス食べに行く

・一緒に本を見に行く

女性誌だから知らない人も多いだろうけど

817 会員番号774番目 20XX/X/X/X ID:

映画リサーチしてくるわ

818 会員番号774番目 20XX/X/X/X ID:

落ち着けお前ら常識的に考えて付き合えるわけないだろ

アイス屋張ってきます

819 会員番号774番目 20XX/X/X/X ID:

映画無限ループしてくるお

とりあえず名探偵Pカチュウから

820 会員番号774番目 20XX/X/X/X ID:

本って何だ・・・?

やべえスレ民なのに何も知らんぞ俺

821 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>820

マンガでいいと思うぞドリフとか読んでたみたいだし

822 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>820

漫画小説ラノベ何でも読む雑食って言ってたぞ

823 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

書店員の俺氏即ポップ制作に取り掛かる模様

824 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

アイス美味しい店どこ!?

氷菓ちゃん知らない店ある!?

825 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

出会いを求めて駆け回るスレ民に草ア!

826 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

そういう無駄な足掻きをするよりもっと接点を持てるような職に

就いた方がいいと思うぞ

827 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>826

やめろカカシ

その術は俺に効く

828 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

>>826

今年就活の俺氏346プロへの就職を希望する

829 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID :

必死過ぎワリロンヌ

830 会員番号774番目 20XX/XX/XX

ID :

ファンってそういうものよ

後：ボク自身が——になることだ

空の世界には、ヴァンパイア一族という種族がいる。

こつちで言う「吸血鬼」と……日光のもとでも普通に行動できたり血が絶対に必要ってわけじゃなかったりと、細かな違いはあるけど、だいたい同じような種族と思えばそれで合ってる。

ボクの知る中では、ヴァンパイアさんとヴァイトさんという姉弟がこのヴァンパイア一族にあたり、団長さんの騎空団に所属している。さて。

何で突然こんなことを考えてるかと言えば、それは——自称「吸血鬼の末裔」という黒埼ちとせさんとその僕だという白雪千夜さんが、今日の仕事に同行してきているからだ。

今回のお仕事は「幽体離脱フルボッコちゃん」第四期、「Calamity!!」のメインビジュアルの撮影だ。とは言っても合成の都合で一人ひとり別時間に撮影することになるのだけど。

でもスタッフさんってすごいよね。てんでバラバラな写真なのに、いざ合成したら合成したらしい痕跡やそれらしい継ぎ目なんかも残さず自然に仕上げてくれるんだから、プロだよね。

閑話休題。

「撮られるだけですか」

と、やや冷たいような印象を受ける声音でこちらに問いかけてくる千夜さん。

千夜さんにとってこれがデフォなんだろう。ボクも冷たそう（精神的に）とか冷たそう（物理的に）とか冷酷そうとか脈無さそうとか人の心が無いとか言われるからなんとなく分かる。断定形にしたの許さんからな晶葉。

「だけっていうのもちよっと……どうだろ。ボクは、色々考えながら

やっってるけど」

「そうなんだ。例えばどんなこと？」

「一番は……撮る人が求める自分を演じ抜くことかな」

「もっと自己主張して、自分を見せつけていくものだと思うんだけど」

「そういう人もいるし知ってるけど……まだ新人のうちからそれやっちゃうと、相手の人にあんまり良い印象を与えないと思うんだ。ある程度一般に向けたイメージが確立してからにした方がいいと思うよ」
「あらそう。じゃあ、そうしようかな」

そこは是非そうしてほしい、とは思うんだけど……ちとせさん、ちよつと周子さんに似てる部分があるからなあ。その場のノリに任せるところとか線が細いところとか。いきなりノリに身を任せるということも無いとは言い切れない……。

うーん……気にはなるけど、そこは担当の戸羽Pが考えるべきところか。先輩としてうちのプロデューサーも気にかけるだろうし、それとなく言つとこう。

さて、本題はここからだ。

ヴァンパイア、と呼ばれてる種族は、普通の人と比べるとやや体組成が異なる。これだけ近づけば、確実に構造解析できるのだけど……。

(……まあ、それはそうだよね……けど)

当然ながら、ちとせさんにそれらしい痕跡は見られなかった。

いや、そんなのあつたらすぐ分かるはずなんだけど。魔力とか、そういうので。

でも、あの容姿だ。クォーターと言うにしては、あまりにも外国の血がよく表れてて——って、度々外国人に見られるボクが言えることじゃないんだけど——あれだけ綺麗な金髪と赤い瞳っていうのは滅多なことじゃありえない。

やっぱりマジでヴァンパイア一族の血を引いてるんじゃないだろうか。偶然、「こちら」から「あちら」へ行くことになってしまった人は少なくない。逆に「あちら」から「こちら」に来た人がいたとして、その人が偶然ヴァンパイア一族で、帰ることはできなかつたけどこちらの世界で家庭を持って……ってことはありうるんじゃないだろうか。

で、それよりもボクが気になったのは……。

(これ、やっぱりおかしい)

こうして改めて解析したことで分かった、ちとせさんの健康状態だ。

医術は専門じゃないから詳しくは言おうに言えないけど、免疫疾患……かな？

ボクも気管支と肺をやっちゃってるけど、そういう特別な異常があればすぐに浮き彫りになって見える。

「お嬢様に何か」

「あ、いえ」

——と、じっと見すぎてしまった。千夜さん、怒ってるだろうか。いや、これはただの確認だな。ボクのごときは危険因子とも脅威とも一切捉えてない感じ。そもそも同僚だし、女性同士だし、何よりボクの貧弱さを思えば何されたとしても何とでもできるといふ判断だろう。これはボクがあんしんあんぜんであることの何よりの証明じゃないだろうか。ハレゼナさんもニコニコだ。なお侮られているという可能性は考慮しないものとする。

「質問とかあるかなあって思って」

「ありません」

「千夜ちゃん、あんまり素っ気なくしないの」

「ですが……」

「実際無いなら大丈夫だよ」

これは本当に何も質問が無いやつだ。

この素っ気なさ、分かるぞ。あまり会う機会の無い相手との距離感を測りかねてるやつだ。去年のボクもそうだったからよく分かる。

なんだか懐かしいなあ。ボクも大概千夜さんにとってのちとせさんみたく晶葉に世話焼かれてたな……。

「じゃあ私から聞いてもいいーい？ 個人的な質問だけど」

「どうぞ」

「氷菓ちゃんってプロフィールの趣味欄に錬金術って書いてあるけど、あれ何？ 不老不死とかに興味があるの？」

「(もうできるから) 無いよ」

引退後はこつちの世界でみんなの子孫を見守ったりあつちの世界でクラリスさんの子孫を見守りながら過ごすのもいいかなーって思ってる。

「ボクの言ってるのは、医学・薬学・科学・化学ぼけがくの総体の歴史を調べることって意味……かな」

「そうなんだ。なーんだ、思ったより普通なんだね？」

「(表面的には) 普通だよ」

なお取材用の答えなのでこれ以上の追及はあんまり受け付けけない。受け付けないったら受け付けけない。アドリブ苦手だから変なところでもボロ出ちやうかもしれないし。

「ちとせさんはそういうのに興味か？」

「さあ？ voudarouうね？」

はぐらかすなあ。まあこのくらいは志希さんも周子さんも奏さんもマキノさんもロゼツタさんもゾーイさんも果ては開祖様もよくやるからいいや。

改めて思うと何かとはぐらかす人多すぎじゃない？ ……ん？

下手したらボクも似たようなことしてるか？ いや、まあいいやそれはそれで。溜めて溜めてドーン！ なんでしょう？ 演出の講座で習った。でもそれって別に日常生活で必要なものじゃあないよねとは思う。

……こういうのは問いかけてきた内容に核心があるものだ。

重要なことだからこそ、さもなんでもない風に問いかける。その方が相手の関心を惹きづらく、だからこそ重要なことをポロツと話してくれるかもしれないから。

つまりちとせさんは、そういう不老不死という分野に小さくない興味があるということじゃないだろうか。

それはやつぱり、体の異常に関係があって……。

「……詮索は感心しませんよ」

「うん、分かっています」

再三の忠告に、ボクは両手を挙げて応じた。

しかし、何で千夜さんはボクがちとせさんを見てるってことに、こんなに注意を向けてるんだろう？

「それで、僕^{しもへ}ちゃんは氷菓^{しもへ}ちゃんの何がそんなに気に入らないのかな？？」

「……気に入らないというわけでは」

視線を追う。当然ながら、その先にはボクがいる。

けれども見ているのはどうやらボクの顔じゃなくて、どっちかって言うと服だ。

フルボツコちゃん4期仕様のブランの改造修道服。そんなに変な

ところあるかな？

「しかし……お嬢様に危害を加えられないかと」

「する理由が無いんですけど」

「お嬢様は吸血鬼の末裔ですが」

「する理由が無いんですけど！」

だから何なの!?

シスターなのは見た目だけだよ!?

いやそもそもシスターさんはそういうのがお仕事じゃないよ!?

クラリスさんに謝って！

「千夜ちゃん、あなたこないだ見た資料用のフルボッコちゃんの演技を真に受けているの……?」

「あまりに真に迫った演技だったもので……」

「フィクションです」

多少おかしなモノと戦ったことはあるかもしれないけど。
超巨大びんやこら太

「千夜ちゃん、ちよつと娯楽に触れなさすぎたかしらね」

「影響受けちゃったかー……」

分かる。すぐく分かる。娯楽が無かったところから急に娯楽に触れたらドハマりするよね。ボクもそうだった。

千夜さんの場合は年齢が年齢だから、ボクよりもハマり方が深刻な方向に行くかもしれない。

……しかも三期は一時的に厨二バトル方向に舵を切ってるから、ハマり方によればこう……うん……。

「……そのうち、演技ビジュアルレッスンも付き合うよ」

「その時は千夜ちゃんのこと、よろしくね?」

「できる限りは……」

……案外千夜さん役に入り込むタイプの人だったりしないかな。ちとせさんは割り切った上で楽しみそうなところがあるけど。

@ —— @

——そして後日、ちとせさんは清良さんに連行されていった。

「いやいやいやいやいや」

「何か問題でも?」

「何でその話の流れでそういうことになる」

「そりゃあ……会社の方で持病の有無を理解しておかないと、何かクリティカルなことしたら問題になるでしょ?」

そんなこんなあつて寮の自室。二人で並んでゲームしてる最中なのだけど、今日も晶葉の追及が濃い。

でも免疫系だと問題だよ。病気を併発したらそれだけで命に関わっちゃう。冬場のロケとかも厳しいかもしれないし、人の多い場所だとしても飛沫感染や空気感染を気にしなきゃいけない。

「本人も寿命を気にしてる口ぶりだったし、絶対何かあるじゃないか。まあちよつぴりこうキュツと弄って死にはしないようにはしてるけど」

「本人の了承くらい取れ」

「今からちとせさんの体組織弄つてもうちよつと病気に強くしますよーとか言える?」

「志希なら言える」

「ボクは言えない」

はい、この話は(1)まで。

そもそもボクは志希さんみたくお薬作って……みたいに行動できるわけじゃないから。

「キミも表立って行動できる何かがあればできることも増えるだろうに」

「そうなんだよねえ……」

「いつそ医師免許でも取ったらどうだ。スーパードクターH。なんてな、はっはっは」

「それだ」

「……うん?」

《《白河水菓ちゃんを見守護るスレ その□□□□》》

16 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

白河水菓「医師免許の取得を目指しています」

9月より一部活動を休止しアメリカ留学を発表していた白河水菓(14)さんが本日、アメリカにて医師免許を取得する意向を発表した。

白河さんは「自分にできることを探していました。知り合いが難病に罹っているのを知って踏ん切りがついた。早期に取得できるように私自身が『elixir(※)』になれるよう頑張ります」とのコメントを残している。

(※) 飲めば不老不死になれる、万病を治療できると言われる万能薬。

26 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

お前は何を言っているんだ(AA略)

32 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

言っている意味が分からない:イカれているのか?この状況で:

4 4 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

おつ平常運転やな(白目)

6 0 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

これでエリクシア三人が資格面でも並び立つわけか

6 6 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

志希にやんとタメ張ってるなら行けそうな気がする

9 1 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:*

**

これ帰ってくるまでの日伸びたりしない?

1 1 3 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

>>91

分からん:

1 3 7 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

でも友達思いじゃない?

それって尊くない?

2 2 5 会員番号774番目 20XX/XX/XX ID:

**

やることこのスケールがおかしすぎるんですけどお

後：禁断の果実（春）

桜の花弁の淡い桃色が、輝くように舞う遊歩道。

紛れもなく現代のそれに即していながらも、幻想的で美しい光景の中、それでもなお美しく映える空の色をそのまま写したような蒼い髪の少女が、振り向いて口を開く。

「——ぎげんよう」

たおやかなその態度と淡く儂い雰囲気と相違ない優し気な声音。

飾り気も無いはずの制服姿であるにも関わらず、輝かんにばかりに彼女はその五体をもって接する者を魅了し

「色々言いたいことはあるがまずその無駄に洗練された無駄の無い無駄な演技をやめろ」

周囲に漂っていた蠱惑的で幻想的な空気は、池袋晶葉しんゆうの手によって瞬時に霧散した。

本場ハリウッドで技術と知識と栄養カロリーを存分に吸収して来た白河水菓アイドールは、そつとマスクを再装着した。

有体に言つて、高校入学を控えた彼女は浮かれポンチだった。

@ ——— @

四月！

春真つ盛り！

短期留学の最中も国際通話でみんなと連絡を取り合い、みんなを選んで高校へ進学する時が来た。

中学生の頃は様々な事情が重なってちやんと全部のイベントをみんなで堪能できなかったのだけど、これからは違う。先に高校に入っ

た先輩やこれから入ってくる後輩たち、それに外部からも校内のイベントに参加できるはずだ。なんて楽しみなことか！

勉強は……まあ、置いとこう。別にこっちはどうとでもなるし。そんなことより！

高校と言えばイベントの宝庫。漫画やアニメみたいなことは（ボク自身がアレなことは脇に置いて）そうそう無いけど、芸能人の多い学校だからきつとそれなりに便宜もはかってくれるはず。文字通り、我が世の春が来たあつ！

「入学式コロナの影響懸念して中止っぽいで」

ボクは死んだ。

——そして現在に至る。

「頭が春になったのか？」

「そうだよ……脳味噌があつまってないとこんなことするワケ無いだろ……何だよ高校入学式に向かう道で出会った同級生ごっこって……そもそも今時どんな高校でも『ぶきげんよう』なんて挨拶するわけないじゃん……」

「演技力と演出力でゴリ押ししてただけだからな……」

「ちくしよおおおお……！」

ボクは他の人の姿のまるで見えない道端で、倒れ込むように呪詛を吐いた。

「エイプリルフール……文字通りのエイプリルフール四月馬鹿だよフヘハハハ……ふええええええ……」

「嘘を吐くならもうちよつとついて楽しい嘘をつこう、な!？」

泣きたい。

泣いた。

もう秩序とかいいから特效薬とか作ってその辺でバラまいてしまいたくなる。いや駄目だ。絶対どつかで変な風に広まって、偽物が出回って、闇で高額取引とかされるようになって……って未来まで見える。助けて十天衆。

いや駄目だよあつちの人たちも病気にそこまで強いわけじゃない。病に完全勝利した開祖様という例外もいるけど。こういうタイプの病気が「あつち」に行つて、何か変なところで突然変異なんか起こしたら目も当てられない。だからここ最近はできるだけ行き来を避けてるのだけど……。

「開祖様に会いたーい……ルリアちゃんたちに会いたーい……」

会いたーい……会いたーい……。

……なんかどこかのJ—POPみたいだな。これ系の歌詞を書いてる時つてどんな気持ちなんだろうって思ったけど、こういう気持ちなのかな。今なら何となく分かる気がする。

「はいはい、いいから帰るぞ。キミの近くにいさえすれば感染は無いとはいえ、見られたら何を言われるか分からん」

「やだー！ 入学式ー！ みんなで入学式出るーっ！」

「感染リスク高めるだけだろ！ やめろ、そんなことツー！」

「い、いやだーッ！ これからはこのボクの黄金時代がくるーッ！」

「そもそも入学式はあるとしてももつと後だろう!? いいからとつとと帰つてぶつ森やるぞー！」

「今週みんな島のカブ価が暴落して死んでるのに？ 意味無いよ」

「キミは結論を急ぎすぎる！」

世界はどうしてこんなにも無情なのだろう。

あと、何でみんなは最効率に整備しつくしたボクの島にあんまり来たがらないんだろう。

解せない。

「それ」は常に甘やかで芳しいが、同時に大きな代償を伴う代物である。

——二宮飛鳥

深夜1時前。ここまであんまり起きているようだと明日に差し支えるような時間帯だけど、ボクらも時々はこんな時間まで起きてる人はいる。

それは例えば宿題を終わらせるためだったり、あるいはついゲームをやりすぎてしまったり、番組の打ち合わせが長引いたり……まあ、色々。

ボクも時には紗南さんに付き合ってそのくらいの時間に眠ることもあるし、あるいは早寝しちゃってついこんな時間に起きちゃったりすることもある。そんな時に確実に言えるのは、たいていお腹がすいているということだ。

「……たまにはいいよね」

そんな時、ボクは食堂に赴いておやつを少し食べてから眠ることにしている。

深夜の食事は太る。それは知ってるけど、むしろ個人的には望むべきところ。だからふと目が覚めてしまった今日も、なんとなくしに寝間着のまま食堂へ向かうのだ。

「あ」

「あれ」

「どうも」

食堂に向かうと、そこにいたのはあきらさんだった。どうやら深夜までお兄さんとFPSでもしていたらしい。

右手には何やらスーパーパーなどで売っているような大学芋。半額のシールが貼ってあるだけあって、どうにも中身は湿気てて、コーティングのためにかけられている蜜も溶けてフニャフニャになってしまっている。

「こんな時間に夜食？」

「いいじゃないデスか……そう言う氷菓サンも、夜食か何か？」

「うん。今ちよつと目が覚めたんだけど、お腹空いちやって。それは？」

「見ての通りデスけど」

「なるほど？」

微妙な表情も相まって、あんまり美味しそうには思えない。

いや、実際ああいうのボクは好きじゃない。施設にいた頃も時々食べたけど、評判はそれほど良くはなかった。

うーん……。

「ねえあきらさん、それちよつとボクに預けてみない？」

「何でデス？」

「もうちよつと美味しくできるかも。ちよつとくれたらやってみるけど」

「それじゃお願いします」

「ん」

寮の食堂は頻繁に利用しているだけあって、基本的な使い方は知っ

てる。調理器具に関しても同じくだ。

まずは小さなフライパンを取り出して、薄くバターを引く。そこへ大学芋をとろけてしまった蜜ごと投入。全体にうすく絡ませるように軽く炙っていく。

簡単に火が通つたら、あとはこれをお皿に……取る前に。冷凍庫の中からあるものを引っ張り出す。

「よいしょ」

「何デスそれ!？」

「自家製甘味控えめ豆乳アイスクリーム」

「どう見ても数リットルはある感じだけどどうとう自作するところまで行つたんデスか……」

「これを盛りつけて」

「あの……そのアイス掬うやつ……何で何種類もあるんデスか……?」

「……この備品デスよね……?」

「アイスクリームデイツシャーね。パターンに応じて使い分けるためだよ? 勿論自前だけ」

……そんなドン引きすることないじゃん。

さて、ともかく深夜なんだから……というのを差し引いても、この本数から考えると……サイズは小さめな方がいいかな。

あとは上から軽くきなこをまぶして……。

「できたよ。和風豆乳アイスクリーム大学芋添え」

「メインが変わってる……」

「そこは気にしない」

「あ、でも美味しいデス」

「でっしょー?」

だってボクが作ったアイスだからね!

アイス
氷菓が作ったアイスだからね!!

勿論こだわって作ったよ！　こんな風に人にふるまうことも想定してるからね！

「へへへー」

「クールな見た目なのになんとまあ締まりのない……」

「寝起きだからねえ」

多少締まりが無くっても仕方ないってものだよ。

緊張する必要も無いしね。やっぱり、自分で作ったものを美味しくって言ってもらえたら嬉しいよ。

@ —— @

「君がちよくちよく深夜に食事をふるまうから太ると苦情が来ているのだが」

「それはボクが悪いのでしょうか」

「節制できていない方もいかがかと思うが、人間は必ずしも節制できる生き物でもない」

「そですか……」

あれから何度か同じようなことやったら専務さんに注意された。解せぬ。